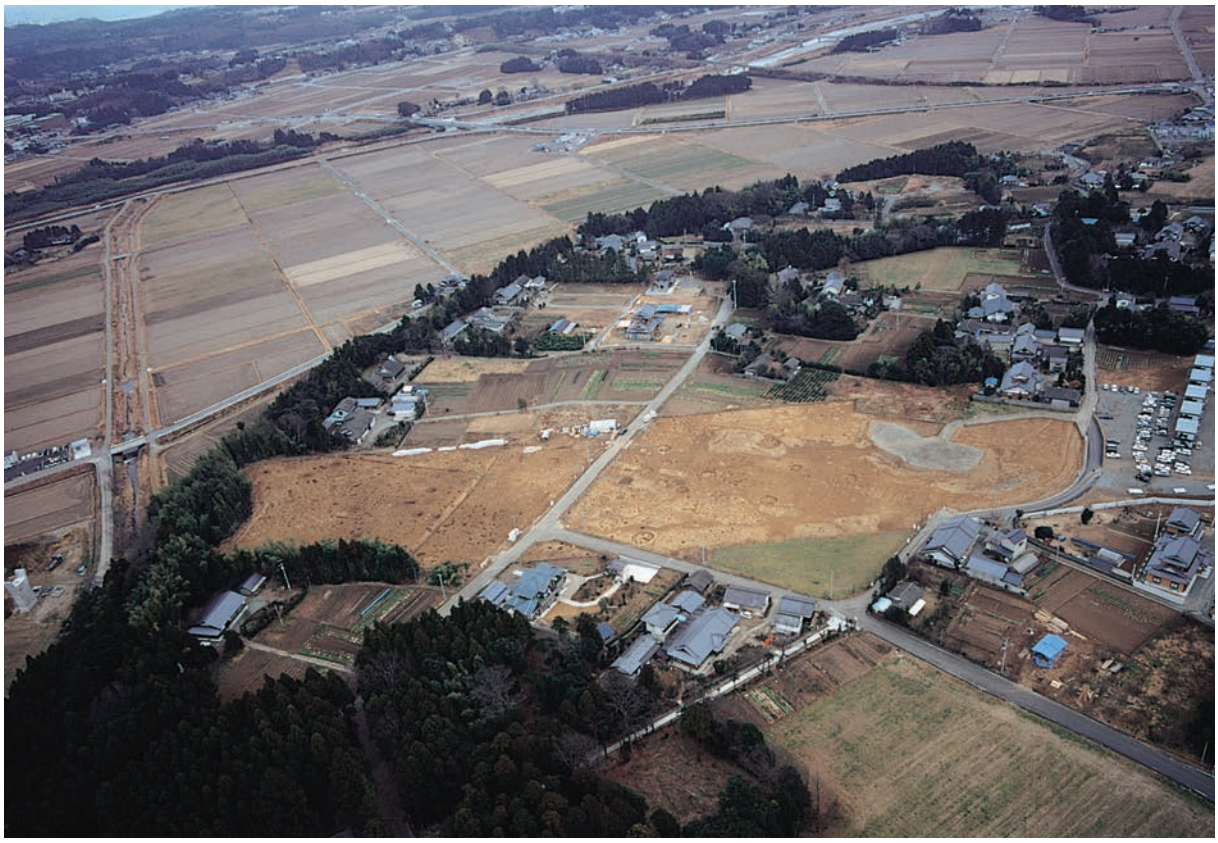
常磐自動車道遺跡調査報告29

馬場前（ばばまえ）遺跡（２次調査）

口絵 1　馬場前遺跡遠景（北から）　（2000年撮影）

口絵 2　馬場前遺跡近景（１）（北から）



口絵 3　馬場前遺跡近景（２）（西から）

口絵 4　馬場前遺跡北区全景（東から）

口絵 5　馬場前遺跡南区全景（南から）

序　　文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は，昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間が，平成11年にはいわき中央～いわき四倉間が開通し，現在は富岡までの区間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には，先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており，周知の埋蔵文化財包蔵地に加え，数多くの遺跡等を確認しました。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史・文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎を成すものです。

福島県教育委員会では，常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について開発関係機関と協議を重ね，平成５年度以降埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い，その結果をもとに，平成６年度から現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成12年度に行った楢葉町に所在する馬場前遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。

今後，この報告書が県民の皆様の文化財に対する御理解と，文化財保護活動の普及や地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらに生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査から報告書の作成にあたり御協力いただいた日本道路公団，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成14年 2 月

福島県教育委員会

教育長　　髙　城　俊　春

あ　い　さ　つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模開発に先立ち，対象地域内にある埋蔵文化財の調査を実施しております。常磐自動車道建設にかかる遺跡の調査については，平成６年度から平成８年度までに，いわき中央からいわき四倉間のうち，いわき市四倉町に所在する10遺跡の調査を実施いたしました。さらに，平成９年度からはいわき四倉から富岡間にかかる遺跡の発掘調査を実施しており，平成12年度までにいわき市四倉町・広野町・楢葉町・富岡町の30遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本報告書は，平成12年度に実施した発掘調査のうち，楢葉町に所在する馬場前遺跡の第２次調査の成果をまとめたものです。

２次調査では縄文時代から中・近世にかけての遺構群が確認されました。中でも縄文時代中期末の複式炉を持つ竪穴住居跡と貯蔵穴からなる大規模な集落跡，古代では奈良・平安時代の集落跡，中世以降では大溝で方形に区画された建物跡群が検出され，鍛冶屋遺跡周辺の建物跡などと総合すると，集落を復元する上で大変貴重な調査例となりました。

今後，この報告書を，郷土の歴史研究の基礎資料として，広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに，この調査にご協力いただきました日本道路公団東北支社いわき工事事務所，福島県担当部局，楢葉町ならびに地元の方々に深く感謝の意を表します。

なお，埋蔵文化財の保護につきまして，今後ともより一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年 2 月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　佐　藤　栄　佐　久

緒　　言

1．本書は，平成12年度に実施した常磐自動車道（いわき市四倉～富岡町）遺跡発掘調査報告書である。

2．本書には福島県双葉郡楢葉町に所在する馬場前遺跡南半部の調査成果を収録した。そのため北半分に位置する遺構については収録していないため，遺構番号は地区が異なるので一部欠番となっている。

馬場前遺跡　　双葉郡楢葉町上小塙字馬場前

3．本発掘調査事業は，福島県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施し，調査にかかる費用は日本道路公団が負担した。

4．福島県教育委員会では，発掘調査を財団法人福島県文化センター（平成13年度財団法人福島県文化振興事業団に名称変更）に委託して実施した。

5．財団法人福島県文化センターでは，事業第二部遺跡調査課（平成13年度遺跡調査部遺跡調査課に名称変更）の次の職員を配置して調査にあたった。

専門文化財主査	山内　幹夫	文化財主査	福島　雅儀
文化財主査	高橋　三男	文化財主査	冨田　　修
文化財主査	佐藤　美穂	文化財主査	高田　昌幸
文化財主査	佐々木　透	文化財主査	高橋　幸司
文化財主査	吉田　昌彦	文化財副主査	菊田　順幸
文化財副主査	関　　博人	文化財副主査	鈴木　広子
文化財副主査	千葉　秀樹	文化財副主査	能登谷宣康
文化財副主査	井　　憲治	文化財副主査	吉野　滋夫
文化財副主査	国井　秀紀	文化財主事	堀川　雄二
文化財主事	小野　忠大	文化財主事	阿部　知己
文化財主事	山元　　出	文化財主事	伊藤　典子
文化財主事	丹治　篤嘉	文化財主事	門脇　秀典
文化財主事	坂田由紀子	文化財主事	轡田　克史
文化財主事	三浦　武司	嘱　　託	新海　和広

6．本書の執筆は山内幹夫・高橋幸司・吉田・井・吉野・小野・阿部・伊藤・門脇・坂田が分担して行い，各文末に文責を記した。

7．第1章第2節地理的環境と第1章第3節歴史的環境は『常磐自動車道遺跡発掘調査報告25 馬場前遺跡（1次調査)』のものを再録した。

8．本書に使用した地図は，国土交通省国土地理院の承認を得て，同院発行の5万分の1地形図を複製したものである（承認番号　平13東複第369号)。

9．本書掲載の遺構図・空中写真などは，次の諸機関に委託した。

空中写真測量　株式会社オリス

航空写真　　日本特殊撮影株式会社

10．本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

11．発掘調査および報告書作成にあたって，次の諸氏からご指導・ご助言・ご協力をいただいた。（順不同・敬称略）

真鍋健一（福島大学教育学部）

宇佐見雅夫（楢葉町教育委員会）

小野正敏（国立歴史民俗博物館）

12．本文中の敬称は省略させていただいた。

用　　例

1．本書における遺構図の用例は，以下のとおりである。

（1）方　　位　　遺構図・地形図の方位は真北をさす。方位の無いものは，全て図の真上を真北とする。

（2）ケ　　バ　　原則として遺構内の傾斜面は┬ケバで表現したが，相対的に緩斜面の部分には〒のケバを使用した。

（3）土　　層　　遺構外に堆積していた基本土層の番号はアルファベット大文字のＬとローマ数字を組み合わせ，遺構内堆積土の番号は小文字のℓと算用数字を組み合わせて表記した。

（例）基本土層－ＬⅠ・Ⅱ…，遺構内堆積土－ℓ１・２…

なお，土色の註記は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を使用し，本文中の記号は本書に基づく。

（4）標　　高　　東京湾からの海抜標高を示す。

（5）縮　　尺　　遺構図は原則として，竪穴住居跡１/40・１/60，掘立柱建物跡１/40，土坑１/40とした。その他の遺構は大きさに縮小した。

（6）ピットの深さ　　平面図のピット番号下にある（　）内の数値，単位㎝。

（7）焼土面の表記は下図に示した。下図に示さない網点についてはそのつど図中に示した。

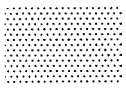
焼　土　面

（8）遺構平面図では，実線で上端・下端・調査区境，短い破線で「---」で推定線・抉り込み線，長い破線「―　―」で掘形，一点鎖線「―・―」で貼床範囲，二点鎖線「―・・―」で踏み締まり範囲を表している。

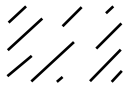
2．本書における遺物実測図の用例は，以下のとおりである。

（1）土器断面　　縄文土器・土師器・陶器は断面を白ヌキで表示した。須恵器は断面を隙間なく黒く表示した。粘土紐の積み上げ痕は器面では実線で，断面では一点鎖線で表記した。

（2）遺物実測図で使用した具体的な用例を下図で示した。



黒色処理



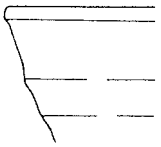
自然節理面

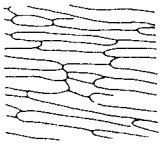
磨り面

（3）遺物番号　遺物は図ごとに通し番号を付した。遺物番号の次の（　）内は遺物の出土位置・層位を示した。遺構図中の土器番号は遺物図中の土器番号と一致する。また，写真図版中の番号は，挿図番号と枝番号の組み合わせで示した。

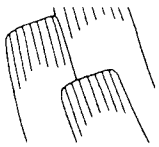
（4）遺物計測値　遺物の計測値は図中に示した。推定値は（　），遺存値は〔　〕内の数値で示した。なお，石器には石質も示した。

（5）遺物表示　土師器の製作痕跡は次の表現を用いた。


ロクロナデ


ヘラミガキ

ヘラケズリ


ナデ

3．本書における写真図版中の番号は，挿図番号と対照できるように，遺物写真図版中に「図」を略して記した。　（例）図1－1→1－1

4．本書で使用した略号は，次のとおりである。

楢葉町……ＮＨ	馬場前遺跡…ＢＢＭ	基本土層……Ｌ	遺構内堆積土…ℓ
竪穴住居跡…ＳＩ	掘立柱建物跡…ＳＢ	柱列跡……ＳＡ	土　坑……ＳＫ
井戸跡……ＳＥ	埋　甕……ＳＭ	溝　跡……ＳＤ	性格不明遺構…ＳＸ
ピット……Ｐ			

目　　次

第１章　遺跡の環境と調査経過…… 1

第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　遺跡の位置と自然環境…… 3
第３節　周辺の遺跡と歴史的環境…… 4
第４節　調査経過 ……11
第５節　調査の方法 ……12

第２章　遺構と遺物 ……15

第１節　調査区の概要と基本土層……15
第２節　竪穴住居跡 ……20

28号住居跡 （20）　31号住居跡 （23）　32号住居跡 （28）
33号住居跡 （30）　34ａ号住居跡 （35）　34ｂ号住居跡 （38）
35号住居跡 （43）　36号住居跡 （47）　37号住居跡 （47）
38号住居跡 （56）　39号住居跡 （60）　40号住居跡 （63）
41号住居跡 （68）　42号住居跡 （75）　43号住居跡 （80）
44号住居跡 （87）　45号住居跡 （95）　46号住居跡（100）
47号住居跡（106）　48号住居跡（109）　49号住居跡（113）
50号住居跡（116）　51号住居跡（119）　54ａ号住居跡（121）
54ｂ号住居跡（128）　55号住居跡（131）　56ａ号住居跡（132）
56ｂ号住居跡（136）　57号住居跡（141）　58号住居跡（146）
59号住居跡（151）　60号住居跡（154）　61号住居跡（157）
62号住居跡（160）　63号住居跡（163）　64号住居跡（166）
65号住居跡（170）　67号住居跡（176）　68号住居跡（179）
69号住居跡（182）　70号住居跡（185）　71号住居跡（187）
73号住居跡（190）　74ａ号住居跡（192）　74ｂ号住居跡（196）
75号住居跡（199）　77号住居跡（201）　78号住居跡（204）
95号住居跡（206）　96号住居跡（212）　97号住居跡（221）
98号住居跡（226）　99号住居跡（228）　100号住居跡（233）

101号住居跡（238）　102号住居跡（240）　103号住居跡（246）
110号住居跡（249）　131号住居跡（253）　141号住居跡（255）

第3節　掘立柱建物跡……256
2号建物跡（256）　40号建物跡（257）　87号建物跡（258）
88号建物跡（259）　89号建物跡（261）　90号建物跡（263）

第4節　柱　列　跡……263
31号柱列跡（263）　42号柱列跡（264）　43号柱列跡（264）
46号柱列跡（264）　47号柱列跡（266）　48号柱列跡（267）
49号柱列跡（267）

第5節　土　　坑……268

第6節　埋　　甕……362
3号埋甕（362）　4号埋甕（363）　5号埋甕（363）　8号埋甕（364）

第7節　井　戸　跡……367
4号井戸跡（367）　5号井戸跡（368）　6号井戸跡（368）
7号井戸跡（368）　8号井戸跡（371）

第8節　溝　　跡……371
4号溝跡（371）　5号溝跡（372）　6号溝跡（372）　7号溝跡（375）
17号溝跡（375）

第9節　その他の遺構と遺物……376
2号性格不明遺構（376）
ピット群（377）
遺構外出土遺物（395）

第3章　ま　と　め……398

挿図・表目次

［挿　図］

図１　常磐自道車道位置図……１
図２　馬場前遺跡周辺の遺跡……５
図３　馬場前遺跡周辺の地形……８
図４　馬場前遺跡調査区位置図……10
図５　グリッド配置図……13
図６　遺構配置図（１）……16
図７　遺構配置図（２）……17
図８　遺構配置図（３）……18
図９　遺構配置図（４）……19
図10　28号住居跡……21
図11　28号住居跡出土遺物……22
図12　31号住居跡（１）……24
図13　31号住居跡（２）……25
図14　31号住居跡出土遺物（１）……26
図15　31号住居跡出土遺物（２）……27
図16　32号住居跡（１）……29
図17　32号住居跡（２）……30
図18　32号住居跡出土遺物……31
図19　33号住居跡（１）……32
図20　33号住居跡（２）……33
図21　33号住居跡出土遺物……34
図22　34ａ号住居跡……36
図23　34ａ号住居跡出土遺物……37
図24　34ｂ号住居跡（１）……39
図25　34ｂ号住居跡（２）……40
図26　34ｂ号住居跡出土遺物……42
図27　35号住居跡（１）……44
図28　35号住居跡（２）……45
図29　35号住居跡出土遺物……46
図30　36号住居跡（１）……48
図31　36号住居跡（２）・出土遺物……49
図32　37号住居跡（１）……50
図33　37号住居跡（２）……51
図34　37号住居跡出土遺物（１）……54
図35　37号住居跡出土遺物（２）……55
図36　38号住居跡（１）……57
図37　38号住居跡（２）……58
図38　38号住居跡出土遺物……59
図39　39号住居跡（１）……61
図40　39号住居跡（２）……62
図41　39号住居跡出土遺物……63
図42　40号住居跡（１）……64
図43　40号住居跡（２）……65
図44　40号住居跡出土遺物……67
図45　41号住居跡（１）……69
図46　41号住居跡（２）……70
図47　41号住居跡出土遺物……73
図48　42号住居跡（１）……76
図49　42号住居跡（２）……77
図50　42号住居跡出土遺物……79
図51　43号住居跡（１）……81
図52　43号住居跡（２）……83
図53　43号住居跡出土遺物……86
図54　44号住居跡（１）……89
図55　44号住居跡（２）……90
図56　44号住居跡出土遺物（１）……92
図57　44号住居跡出土遺物（２）……93
図58　45号住居跡（１）……96
図59　45号住居跡（２）……97
図60　45号住居跡出土遺物……99
図61　46号住居跡（１）……102
図62　46号住居跡（２）……103
図63　46号住居跡出土遺物……105
図64　47号住居跡・出土遺物……107
図65　48号住居跡（１）……110
図66　48号住居跡（２）・出土遺物……112
図67　49号住居跡……114
図68　49号住居跡出土遺物……115
図69　50号住居跡……117
図70　50号住居跡出土遺物……118
図71　51号住居跡……120
図72　51号住居跡出土遺物……121
図73　54ａ号住居跡（１）……122
図74　54ａ号住居跡（２）……124
図75　54ａ号住居跡出土遺物（１）……126
図76　54ａ号住居跡出土遺物（２）……127
図77　54ａ号住居跡出土遺物（３）……128
図78　54ｂ号住居跡……129
図79　54ｂ号住居跡出土遺物……130
図80　55号住居跡……131

図81 56ａ号住居跡……133
図82 56ａ号住居跡出土遺物……135
図83 56ｂ号住居跡（１）……137
図84 56ｂ号住居跡（２）……138
図85 56ｂ号住居跡出土遺物……141
図86 57号住居跡（１）……142
図87 57号住居跡（２）……143
図88 57号住居跡出土遺物……145
図89 58号住居跡（１）……147
図90 58号住居跡（２）……148
図91 58号住居跡（３）……149
図92 58号住居跡出土遺物……150
図93 59号住居跡（１）……152
図94 59号住居跡（２）……153
図95 59号住居跡出土遺物……154
図96 60号住居跡……155
図97 61号住居跡（１）……158
図98 61号住居跡（２）……159
図99 61号住居跡出土遺物……160
図100 62号住居跡……161
図101 62号住居跡出土遺物……162
図102 63号住居跡……164
図103 63号住居跡出土遺物……165
図104 64号住居跡（１）……167
図105 64号住居跡（２）・出土遺物……168
図106 65号住居跡（１）……171
図107 65号住居跡（２）……172
図108 65号住居跡出土遺物……174
図109 67号住居跡……177
図110 67号住居跡出土遺物……178
図111 68号住居跡・出土遺物……180
図112 69号住居跡（１）……182
図113 69号住居跡（２）・出土遺物……183
図114 70号住居跡・出土遺物……186
図115 71号住居跡（１）……188
図116 71号住居跡（２）……189
図117 71号住居跡出土遺物……189
図118 73号住居跡（１）……190
図119 73号住居跡（２）……191
図120 74ａ号住居跡（１）……193
図121 74ａ号住居跡（２）・出土遺物……194
図122 74ｂ号住居跡（１）……197
図123 74ｂ号住居跡（２）……198
図124 74ｂ号住居跡出土遺物……198
図125 75号住居跡……199
図126 77号住居跡（１）……202
図127 77号住居跡（２）・出土遺物……203
図128 78号住居跡（１）……205
図129 78号住居跡（２）……206
図130 78号住居跡出土遺物……206
図131 95号住居跡（１）……207
図132 95号住居跡（２）……208
図133 95号住居跡（３）……209
図134 95号住居跡出土遺物……211
図135 96号住居跡（１）……213
図136 96号住居跡（２）……214
図137 96号住居跡（３）……215
図138 96号住居跡（４）……216
図139 96号住居跡出土遺物（１）……218
図140 96号住居跡出土遺物（２）……219
図141 97号住居跡（１）……222
図142 97号住居跡（２）……223
図143 97号住居跡出土遺物（１）……224
図144 97号住居跡出土遺物（２）……225
図145 98号住居跡（１）……226
図146 98号住居跡（２）・出土遺物……227
図147 99号住居跡（１）……229
図148 99号住居跡（２）……230
図149 99号住居跡（３）……231
図150 99号住居跡出土遺物……232
図151 100号住居跡（１）……234
図152 100号住居跡（２）……235
図153 100号住居跡出土遺物……237
図154 101号住居跡……239
図155 102号住居跡（１）……241
図156 102号住居跡（２）……242
図157 102号住居跡（３）……243
図158 102号住居跡（４）……244
図159 102号住居跡出土遺物……245
図160 103号住居跡（１）……247
図161 103号住居跡（２）……248
図162 103号住居跡出土遺物……249
図163 110号住居跡（１）……250
図164 110号住居跡（２）……251
図165 110号住居跡出土遺物……252
図166 131号住居跡……254
図167 141号住居跡……255
図168 ２号建物跡……256
図169 40号建物跡……258
図170 87・88号建物跡……260

図171　89・90号建物跡，48・49号柱列跡……262
図172　柱列跡（１）……265
図173　柱列跡（２）……266
図174　土　坑（１）……272
図175　土　坑（２）……273
図176　土　坑（３）……274
図177　土　坑（４）……275
図178　土　坑（５）……276
図179　土　坑（６）……277
図180　土　坑（７）……278
図181　土　坑（８）……279
図182　土　坑（９）……280
図183　土　坑（10）……281
図184　土　坑（11）……282
図185　土　坑（12）……283
図186　土　坑（13）……284
図187　土　坑（14）……285
図188　土　坑（15）……286
図189　土　坑（16）……287
図190　土　坑（17）……288
図191　土　坑（18）……289
図192　土　坑（19）……290
図193　土　坑（20）……291
図194　土　坑（21）……292
図195　土　坑（22）……293
図196　土　坑（23）……294
図197　土　坑（24）……295
図198　土　坑（25）……296
図199　土　坑（26）……297
図200　土　坑（27）……298
図201　土　坑（28）……299
図202　土　坑（29）……300
図203　土　坑（30）……301
図204　土　坑（31）……302
図205　土　坑（32）……303
図206　土　坑（33）……304
図207　土　坑（34）……305
図208　土　坑（35）……306
図209　土　坑（36）……307
図210　土　坑（37）……308
図211　土　坑（38）……309
図212　土　坑（39）……310
図213　土　坑（40）……311
図214　土　坑（41）……312
図215　土　坑（42）……313
図216　土　坑（43）……314
図217　土　坑（44）……315
図218　土　坑（45）……316
図219　土　坑（46）……317
図220　土　坑（47）……318
図221　土　坑（48）……319
図222　土　坑（49）……320
図223　土　坑（50）……321
図224　土　坑（51）……322
図225　土　坑（52）……323
図226　土　坑（53）……324
図227　土　坑（54）……325
図228　土　坑（55）……326
図229　土　坑（56）……327
図230　土　坑（57）……328
図231　土　坑（58）……329
図232　土　坑（59）……330
図233　土　坑（60）……331
図234　土　坑（61）……332
図235　土　坑（62）……333
図236　土　坑（63）……334
図237　土　坑（64）……335
図238　土　坑（65）……336
図239　土　坑（66）……337
図240　土　坑（67）……338
図241　土坑出土遺物（１）……340
図242　土坑出土遺物（２）……341
図243　土坑出土遺物（３）……342
図244　土坑出土遺物（４）……343
図245　土坑出土遺物（５）……344
図246　土坑出土遺物（６）……345
図247　土坑出土遺物（７）……346
図248　土坑出土遺物（８）……347
図249　土坑出土遺物（９）……348
図250　土坑出土遺物（10）……349
図251　土坑出土遺物（11）……350
図252　土坑出土遺物（12）……351
図253　３～５・８号埋甕……365
図254　３～５・８号埋甕出土遺物……366
図255　井戸跡（１）……369
図256　井戸跡（２）……370
図257　溝　跡（１）……373
図258　溝　跡（２）……374
図259　２号性格不明遺構……376
図260　２号性格不明遺構出土遺物……377

図261　遺構外出土遺物（１）……395
図262　遺構外出土遺物（２）……396
図263　遺構外出土遺物（３）……397

［表］

表１　発掘調査遺跡一覧…… 2
表２　馬場前遺跡周辺の遺跡一覧　…… 6
表３　土坑一覧表（１）～（10）　……352
表４　ピット一覧表（１）～（17）　……378
表５　住居跡一覧表（１）・（２）　……401

［付図］

付図１　馬場前遺跡（２次調査）遺構配置図１
付図２　馬場前遺跡（２次調査）遺構配置図２

［口絵］

口絵１　馬場前遺跡遠景（北から）
口絵２　馬場前遺跡近景（１）（北から）
口絵３　馬場前遺跡近景（２）（西から）
口絵４　馬場前遺跡北区全景（東から）
口絵５　馬場前遺跡南区全景（南から）

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経過

平成12年度常磐自動車道関連の遺跡発掘調査は，34名の体制で開始した。調査対象地は，第12次区間の双葉郡広野町から富岡町までである。

発掘調査に先立ち，４月上旬から富岡町内で新たに発掘調査が予定されている遺跡の条件整備状況の確認を行うとともに，連絡所・駐車場等用地借り上げ，連絡所設置などの準備作業を進めた。また，現町道下を対象とする上田郷Ⅵ遺跡では，町道の迂回工事が行われた。

調査は，４月17日から広野町上田郷Ⅵ遺跡，楢葉町馬場前遺跡・大谷上ノ原遺跡，富岡町本町西Ａ遺跡・上本町Ｆ遺跡，１日遅れて４月18日に楢葉町小塙城跡の６遺跡の発掘調査を開始した。このうち上田郷Ⅵ遺跡・小塙城跡は３次調査，馬場前・大谷上ノ原各遺跡はそれぞれ２次調査でと，継続調査が多いこともあり，順調に展開した。５月19日には狭長な上田郷Ⅵ遺跡の調査を終了した。

５月に入り，新たに楢葉町小山Ｂ遺跡と富岡町上本町Ｇ遺跡の発掘調査を開始した。小山Ｂ遺跡は水田に挟まれた場所にあり，水路に留意しながらの調査となった。また上本町Ｇ遺跡では一般道路から入り込んだ不便な場所にあるため，調査に先行し，路線内に作業員通勤用通路を確保ののち，連絡所設置・駐車場造成などの準備作業を行った。また同遺跡は，深い沢に挟まれており，沢に泥水が流れないようにする沈砂・土留め処置にも留意した。小山Ｂ遺跡からは木戸川自然堤防上に立地する平安時代の集落跡，上本町Ｇ遺跡からは縄文時代前期の集落跡が検出された。

６月からは，楢葉町鍛冶屋遺跡３次と，富岡町上郡Ｂ遺跡の発掘調査を開始した。上郡Ｂ遺跡は

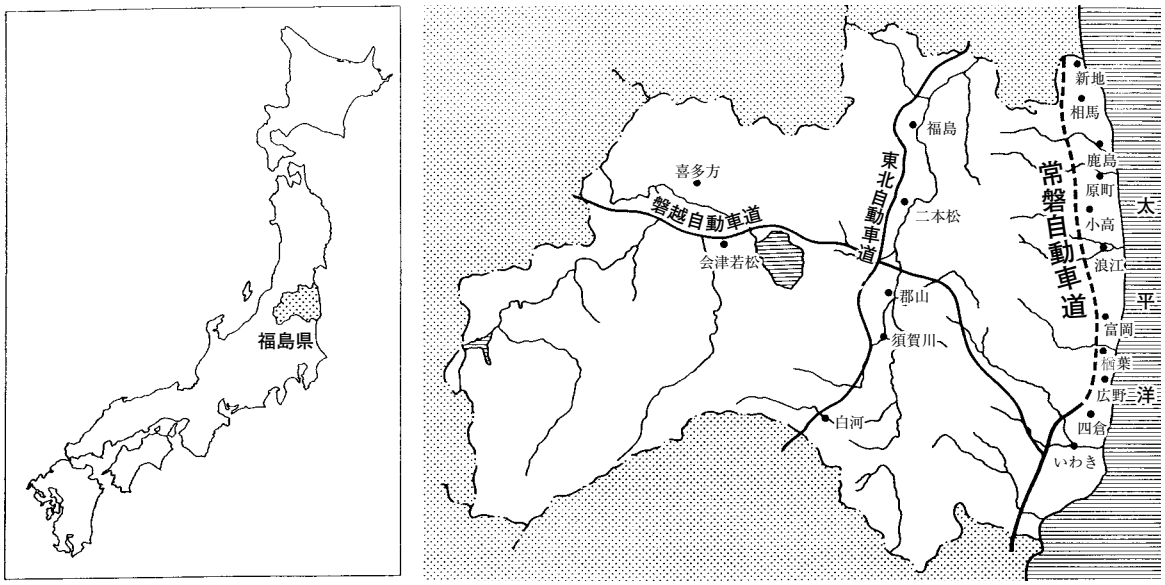


図１　常磐自道車道位置図

遺跡内に比高差の大きな段丘崖を挟んで発掘調査区が２分されるため，当初上位面の発掘調査を先行させた。上郡Ｂ遺跡上位面からは古墳時代前期の住居跡が検出された。また，４月に調査を開始した楢葉町大谷上ノ原遺跡について，６月14日に，発掘調査の終了した北側部分を引き渡すとともに，新たに工区変更に伴う，南東側1,600㎡の追加発掘調査を行うこととなった。大谷上ノ原遺跡は，１次発掘調査に引き続き，旧石器時代の石器群が検出された。

７月には，楢葉町鍛冶屋遺跡と小山Ｂ遺跡の部分的な拡張範囲について，関係機関協議の結果追加発掘調査を実施することとなった。鍛冶屋遺跡からは，平安時代・中世の集落跡に加えて，南斜面から縄文時代後期の集落跡が検出された。

８月11日には富岡町本町西Ａ遺跡の発掘調査が終了し，現地引き渡しを行った。本町西Ａ遺跡からは縄文時代前期の集落跡の他，中世の建物跡も検出された。また，富岡町上郡Ｂ遺跡は段丘崖より下位面の発掘調査に入った。

９月には，楢葉町小塙城跡・大谷上ノ原遺跡，富岡町上郡Ｂ遺跡・上本町Ｇ遺跡・上本町Ｆ遺跡の発掘調査が相次いで終了し，現地引き渡しを行った。引き続き，楢葉町二枚橋遺跡・上繁岡山根遺跡の発掘調査を開始した。この頃になると，楢葉町馬場前遺跡では，大規模な縄文時代集落跡は知られるところであったが，その上面に平安時代集落跡，さらにその上面に中世村落の遺構がおびただしく検出された。この調査を進めるため総力を挙げて対応した。その結果，町道中島－高田線

表１　発掘調査遺跡一覧　（面積総計　93,840㎡）

番号	遺　跡　名	所　在　地	発掘調査面積（㎡）	時　代	調 査 期 間
①	上田郷Ⅵ遺跡	広野町上北迫字上田郷	700	縄文	4 /17～ 5 /19
②	小塙城跡	楢葉町上小塙字正明寺他	5,500	縄文・平安 室町・戦国・江戸	4 /18～ 9 /29
③	鍛冶屋遺跡	楢葉町上小塙字根子原他	6,200	縄文・平安・中世	6 /15～10/31
④	馬場前遺跡	楢葉町上小塙字馬場前他	18,740	縄文・奈良・平安 鎌倉・室町	4 /17～12/20
⑤	小山Ｂ遺跡	楢葉町上小塙字小山	4,560	平安・中世	5 /29～10/13
⑥	大谷山根遺跡	楢葉町大谷字山根	600	奈良・平安	10/ 4 ～11/21
⑦	大谷上ノ原遺跡	楢葉町大谷字上ノ原	10,600	旧石器・縄文・平安	4 /17～ 9 /14
⑧	二枚橋遺跡	楢葉町上繁岡字二枚橋	3,200	縄文・平安	9 /14～10/13
⑨	上繁岡山根遺跡	楢葉町上繁岡字山根	5,100	縄文・平安・中世 近世	9 /19～11/14
⑩	上郡Ｂ遺跡	富岡町上郡山字上郡	3,140	古墳・平安	6 /13～ 9 /20
⑪	本町西Ａ遺跡	富岡町本岡字本町西	6,800	旧石器・縄文・中世	4 /17～ 8 /11
⑫	上本町Ｇ遺跡	富岡町本岡字上本町	14,100	縄文・平安	5 /26～ 9 /26
⑬	上本町Ｆ遺跡	富岡町本岡字上本町	7,000	縄文・平安・中世	4 /17～ 9 /14
⑭	日南郷遺跡 （確認調査）	富岡町上手岡字日南郷他	7,600 （※2,840含）	縄文	10/ 3 ～12/ 8 11/29～12/ 9

の南側と，北側の中世村落跡については，調査を終了することができた。

10月には楢葉町鍛冶屋遺跡・小山Ｂ遺跡・二枚橋遺跡の発掘調査が終了し，現地引き渡しを行った。二枚橋遺跡は戦後の農地構造改善事業により大きく削平を受けて，遺構の遺存状態が良くなかったため，発掘調査が予定より早く進行した。また同月初旬に楢葉町大谷山根遺跡と富岡町日南郷遺跡の発掘調査を開始した。

11月には楢葉町大谷山根遺跡・上繁岡山根遺跡の発掘調査が終了し，現地引き渡しを行った。また，富岡町日南郷遺跡は，次年度に予定されていた発掘調査範囲について確認調査を実施した。

12月の初旬には富岡町日南郷遺跡の発掘調査・範囲確認調査が終了，12月20日には楢葉町馬場前遺跡の発掘調査も終了した。馬場前遺跡は，町道中島－高田線より北側の4,500㎡文化層２枚分（平安と縄文の文化層）が次年度調査となったため，シートによる養生を行った。

調査員は当初34名体制をとったが，１名欠員となったため最終的には33名の体制となった。

第２節　遺跡の位置と自然環境

楢葉町は浜通り地方の南部に位置し，北は富岡町，南は広野町と接している。西に町の面積の７割を占める阿武隈高地を背負い，そこから東に向かって５～６段の平坦な段丘を経て太平洋に臨んでいる。段丘は凹凸のある基盤の上に砂礫層が堆積しており，その底面は，かつての河床または海食台である。最高峰は萩塚山（733.3m）で，川内村との境をなしている。西側は東流する木戸川と井出川により深く開折され，Ｖ字谷となっている。

気候は，夏は太平洋上を渡る小笠原高気圧の南風を受けて涼しく，冬は北西の季節風が脊梁山脈，阿武隈高地を渡る間に空っ風となって吹き下ろす。特に，２月から３月にかけての西風は激しく，細かな砂を巻き上げ周囲の民家に吹き付ける。

地質は，台地面では泥岩層の基盤を段丘礫と沖積層が不整合に覆い，丘陵部では古第三紀漸新世に位置付けられる石炭層・粘土層を含む白水層群を，火山活動を示唆する流紋岩やデ－サイト質凝灰岩を含む湯長谷層群が不整合に覆う地層からなっている。地質構造では，国道６号線の西に双葉逆断層と立石逆断層があり，阿武隈高地の東縁に沿って岩沼方面まで延びている。

楢葉町の植生は，温帯林である落葉広葉樹林帯と暖帯の常緑広葉樹林帯の移行地帯として，植物学上興味ある種が多数分布する。山地の大部分は人工林か伐採された後に成立する二次林になっている。未舗装の農道などには，カゼクサ・オオバコの群落が見られ，広い道路の路肩にはセイヨウタンポポ・オオバコの群落が見られる。

馬場前遺跡は楢葉町南部の大字上小塙に所在する。ここは阿武隈高地東裾を形成する低丘陵の先端部に当たっている。海岸線までの直線距離は1.8㎞で，その北側には，木戸川流域に発達した平野が広がり，水田地帯となっている。このように本遺跡は河川と低丘陵が複雑に入り組んだ浜通り地方特有の景観の中に所在する。本遺跡の東側約100mには，古くから周辺住民の信仰を集めている木

戸八幡神社がある。交通機関との位置関係では，ＪＲ常磐線と国道６号線が本遺跡の東脇を南北に貫いており，ＪＲ常磐線の木戸駅が南東1.8㎞，竜田駅が北東２㎞に位置している。

本遺跡は，木戸川や支流によって開析された標高48m前後の丘陵地に位置する。この丘陵の基盤層は，花崗岩を主体とする深成岩および変成岩であり，その上を固結堆積物（高倉山層群・双葉層群）や半固結堆積物（多賀層群），未固結堆積物からなる洪積層と沖積層が被覆している。本遺跡が立地する上小塙地区は，双葉断層東側の第３段丘面上にあたる。（荒　川）

第３節　周辺の遺跡と歴史的環境

楢葉町は昭和30年に旧木戸村と旧竜田村が合併して誕生した町である。その過去を辿ると，旧両村の境となる木戸川以南と以北とで，それぞれ独自の歴史が残されている。

最も古くは旧石器時代に遡る。波倉の北向遺跡，上繁岡の塩貝遺跡，下繁岡の原林遺跡，北田の天神原遺跡，上小塙の中女平遺跡などから，ナイフ形石器や掻器・彫器・尖頭器・石刃などの後期旧石器時代の石器が出土している。これらの遺跡は，通称「双葉段丘」と呼ばれる，新生代第三紀鮮新世の多賀層群を基盤とする段丘面上に立地している。立地面はいずれも第３段丘面上である。天神原遺跡は，昭和20年代にいわき市在住の永山亘氏が彫器を表採し，『福島県史』第６巻に当該石器が掲載され，福島県内でも最も早い段階に発見された旧石器時代の遺跡として知られている。ちなみに，旧石器時代以降，古代に至るまでの楢葉町の遺跡は，「双葉断層」と呼ばれる「岩沼－久ノ浜構造線」の東に広がる多賀層群を基盤とする段丘面（主に第３段丘面），並びにその段丘面が木戸川や井出川により浸食されて形成された下位の河岸段丘面，さらに沖積平野部の自然堤防上に立地する遺跡と，双葉断層より西側の渓谷域に立地する遺跡とに分かれる。

縄文時代の遺跡は，町内に数多く分布している。分布は大きく木戸川水系と井出川水系に分かれる。井出川水系は，河口南側の第３段丘面上に代遺跡，下流域の低～中位河岸段丘面上に向ノ内や八石・北門上遺跡，中流域の第３段丘面やその直下の河岸段丘面上に所布・塩貝・立石遺跡など，縄文時代前期～晩期の遺跡が分布しており，双葉断層西側の渓谷域には，横山や山所布などの狭い開析地形が形成された面に，横山・山所布・柿ノ木平遺跡などの縄文時代早期～晩期の遺跡が分布している。発掘調査された遺跡としては，井出の向ノ内遺跡や山所布Ｂ遺跡が挙げられる。井出川沿いに分布する遺跡で，後～晩期の土器埋設遺構や多数の遺物が出土している。

木戸川水系では，山田浜から上小塙にかけての第３段丘面上に，代東遺跡や鍛冶屋遺跡・馬場前遺跡などの縄文時代前期～後期の規模の大きな遺跡が分布しており，双葉断層より西側の渓谷域になると，女平や乙次郎などの，支流により狭い開析地形が形成された面に，女平遺跡群や乙次郎・仁平蔵遺跡などの，縄文時代早期～晩期の遺跡が分布している。発掘調査された遺跡としては，常磐自動車道関連で調査された上小塙の鍛冶屋遺跡・馬場前遺跡が挙げられ，鍛冶屋遺跡では縄文時代早期から晩期の遺物が出土した他，縄文時代後期前葉の竪穴住居跡が発見されている。馬場前遺

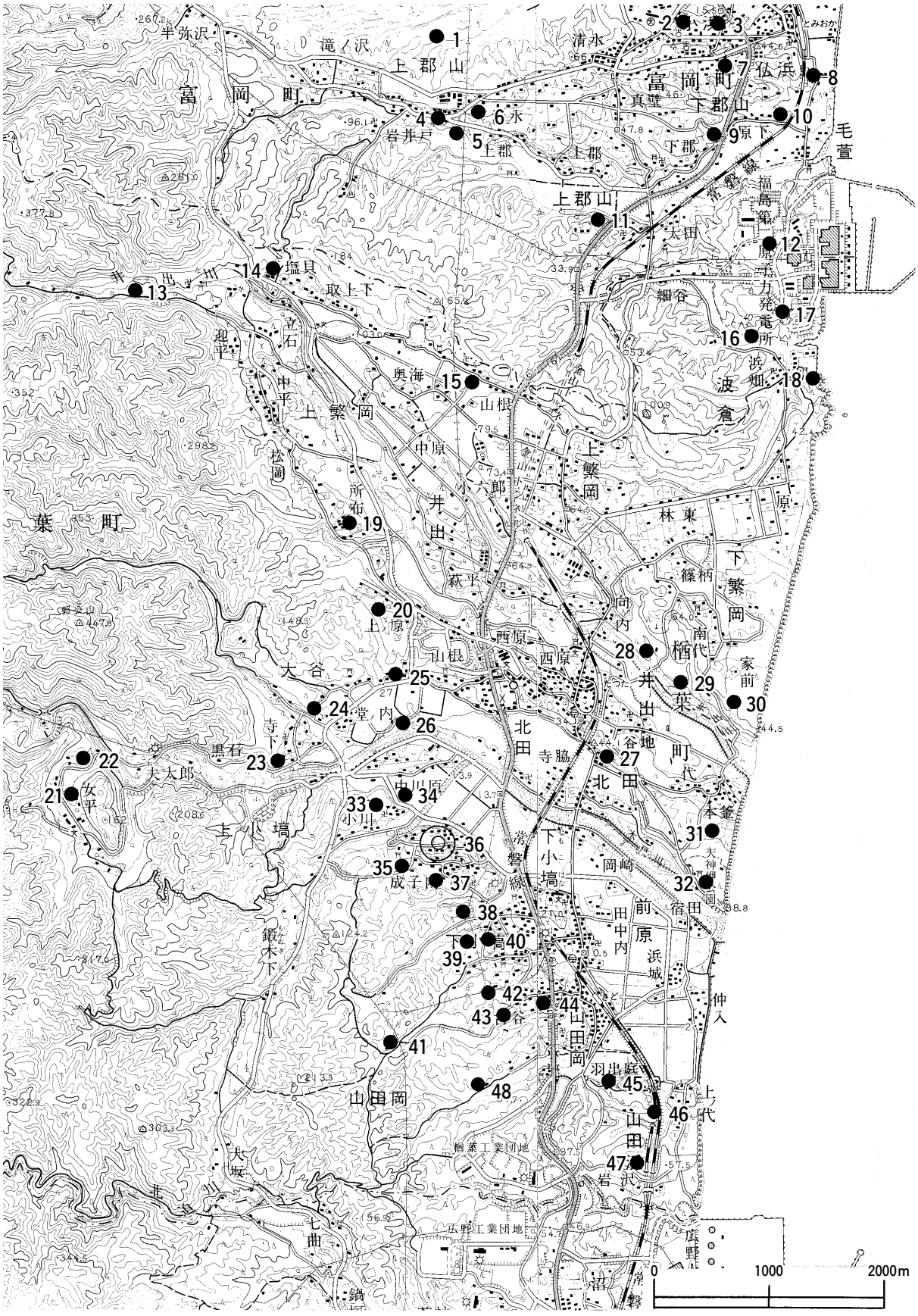


図２　馬場前遺跡周辺の遺跡

（国土地理院１／５万地形図　承認番号　平13東複第369号）

表２　馬場前遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺　跡　名	所　在　地	遺　跡　の　概　要
1	本町西Ｅ遺跡	富岡町本岡字本町西	縄文・奈良・平安時代の散布地
2	上の町Ａ・Ｂ遺跡	小浜字中央	縄文時代の散布地
3	大作横穴墓群	小浜字中央	古墳
4	岩井戸東遺跡	上郡山字岩井戸	奈良・平安時代，近世の散布地
5	上郡Ａ・Ｂ遺跡	上郡山字上郡・清水	縄文・古墳・奈良・平安時代の散布地
6	清水遺跡	上郡山字清水	奈良・平安時代の散布地
7	西原Ａ・Ｂ遺跡	仏浜字西原	縄文・古墳時代の散布地
8	清水尻横穴墓群	仏浜字釜田	古墳
9	真壁城跡Ａ～Ｄ地区	下郡山字真壁	古墳・中世の城館跡
10	原下遺跡	下郡山字原下	古墳時代の散布地
11	上郡山館跡	上郡山字太田	中世の城館跡
12	毛萱遺跡	毛萱字前川原	縄文～古墳時代の散布地
13	羽山遺跡	楢葉町井出字羽山	縄文時代の散布地
14	塩貝遺跡	上繁岡字塩貝	縄文・古墳・平安時代の散布地
15	上繁岡山根遺跡	上繁岡字山根	縄文・奈良・平安時代，近世の散布地
16	北向横穴墓群	波倉字北向	古墳
17	北向遺跡	波倉字北向	旧石器・弥生・古墳・平安時代の散布地
18	箕輪城跡	波倉字原	中世の城館跡
19	所布遺跡	井出字所布	縄文時代の散布地
20	大谷上ノ原遺跡	大谷字上ノ原・山根	旧石器・縄文・奈良・平安時代の散布地
21	中倉遺跡	上小塙字中倉	縄文時代の散布地
22	北女平遺跡	上小塙字女平	縄文時代の散布地
23	大谷館跡	大谷字西代	中世の城館跡
24	名合沢館跡	大谷字名合沢	中世の城館跡
25	大谷山根遺跡	大谷字山根・堤下	平安時代・近世の散布地
26	仲田遺跡	大谷字仲田・宮前	奈良・平安時代と近世の散布地
27	下山根横穴墓群	北田字下山根・合張	古墳
28	井出城跡	井出字館ノ沢	中世の城館跡
29	赤粉遺跡	下繁岡字赤粉・井出字館ノ沢	縄文・奈良・平安時代の集落跡
30	植松遺跡	下繁岡字植松	弥生・奈良・平安時代の散布地
31	上ノ代遺跡	北田字上ノ代	縄文時代の散布地
32	天神原遺跡	北田字天神原	旧石器・弥生時代の散布地・墳墓
33	小山城跡	上小塙字小山	中世の城館跡
34	小山Ａ・Ｂ遺跡	上小塙字小山・高田・地蔵堂	奈良・平安時代，中世・近世散布地
35	木戸八幡神社遺跡	上小塙字宮前・宮平	縄文・奈良・平安時代の散布地
36	馬場前遺跡	上小塙字馬場前・懐内・宮前	縄文・奈良・平安時代の集落跡
37	鍛冶屋遺跡	上小塙字鍛冶屋・根ッ子原他	縄文・平安時代・近世の集落跡・製鉄炉
38	小塙城跡	下小塙字正明寺	中世の城館跡
39	上ノ原城跡	下小塙字上ノ原	中世の城館跡
40	下小塙上ノ原遺跡	下小塙字上ノ原	弥生・奈良・平安時代の集落跡
41	上ノ原横穴墓群	下小塙字上ノ原	古墳
42	常平廃寺跡	山田岡字後沢	中世の社寺跡
43	名古谷横穴墓群	山田岡字名古谷	中墳
44	宮下遺跡	山田岡字宮下	弥生・奈良・平安時代の散布地
45	楢葉城跡	山田岡字館・小館・羽出庭	中世の城館跡
46	陣場横穴墓群	山田浜字羽出庭	古墳
47	美シ森Ａ・Ｂ遺跡	山田岡字美シ森	弥生・奈良・平安時代の散布地
48	新堤入遺跡	山田岡字新堤入	弥生・奈良時代の集落跡

跡からは縄文時代中期末葉の複式炉を持つ竪穴住居跡が多く発見されている。

また，井出川と木戸川に挟まれた，山麓部から東に長く延びる丘陵面にも，大谷の上ノ原や北田の天神原，井出の上ノ代各地区に縄文時代早期～後期の遺跡が分布している。この他，広野町との境に近い，北迫川上流域に縄文時代早期・晩期の大坂遺跡が存在する。

縄文時代に属する遺跡のあり方の特徴としては，双葉断層より西側の渓谷域に早・前期や後・晩期の遺跡が数多く分布していることが挙げられる。また，下流域の第３段丘面上には前期～後期の広い面積の遺跡が，それより下位の段丘面上には後～晩期の遺跡が分布している点も特徴として挙げられよう。

弥生時代の遺跡は，土器棺墓や土坑墓が多数検出され，県指定史跡でもある北田の天神原遺跡が学史的に著名であるが，他にも遺跡が確認されている。波倉の北向・波鏡院遺跡，下繁岡の原林・浄光西遺跡，井出の山所布・八石・向ノ内・上ノ台遺跡，上小塙の馬場前遺跡，下小塙の上ノ原・大倉平遺跡，山田岡の館・美シ森Ｂ・宮下遺跡，山田浜の代東遺跡などが挙げられる。山所布を除いて，第３段丘面上に立地している例が多い。時期的に順を追って遺跡を列挙すると，最も古い段階の資料として，美シ森Ｂ遺跡から，磨消縄文を伴う変形工字文土器の時期の住居跡や土坑が複数検出されている。また，同じ段階の資料が山所布遺跡や向ノ内遺跡などから出土しているが，点数は僅かである。それ以降になると，天神原式期の遺跡が比較的多い。天神原遺跡がその標式遺跡であり，美シ森Ｂ遺跡からも複数の竪穴住居跡や土器棺墓が検出されている。また，下小塙上ノ原遺跡からも土器棺墓が複数検出されている。上記したように，この時期の遺跡は，眺望の良い上部平坦な第３段丘面上に立地している点が特徴であるが，美シ森Ｂ遺跡の他にも集落跡が存在する可能性は高い。たとえば，天神原遺跡の発掘調査された範囲の西側にも，弥生土器が散布しており，かつて石庖丁や大型蛤刃磨製石斧が表採されたこともあり，発掘調査区が墓域とすれば，その西側に集落跡が存在することは十分考えられる。時期が下ると，天王山式土器やアメリカ式石鏃・土製紡錘車などが表採されている波倉の波鏡院遺跡が確認されているのみである。

古墳時代になると，後期の横穴墓群が各所に残されている。これは双葉郡内に共通した特徴でもある。第３段丘面の段丘崖面に露われた凝灰岩を掘削して横穴を形成しているため，遺存状態は比較的良好である。墳丘墓が２箇所しか残されておらず，横穴墓群が多数認められることは，木戸川氾濫原に面した段丘崖や樹枝状の開析谷の崖面が随所に見られる等，横穴が形成されやすい環境にあったことも要因に挙げられよう。発掘調査された例としては，波倉の北向横穴群，北田の合張横穴群，山田岡の名古谷横穴群，同じく山田岡の松ノ口横穴群などがある。いずれも７世紀代の横穴墓と推定されている。比較的新しい横穴墓としては羽出庭横穴墓群があるが，これは常磐線部分複線化工事の際に壊され，出土した８世紀代の骨蔵器のみが残されていた。墳丘墓は舟場古墳と稲荷古墳が知られている。舟場古墳は現在残されていないが，北田字新田東に在住の人から聞いた話では，かつて組合式石棺が掘り出されたこともあったという。稲荷古墳は円墳で，常磐線木戸駅の東側に，現在も残されている。

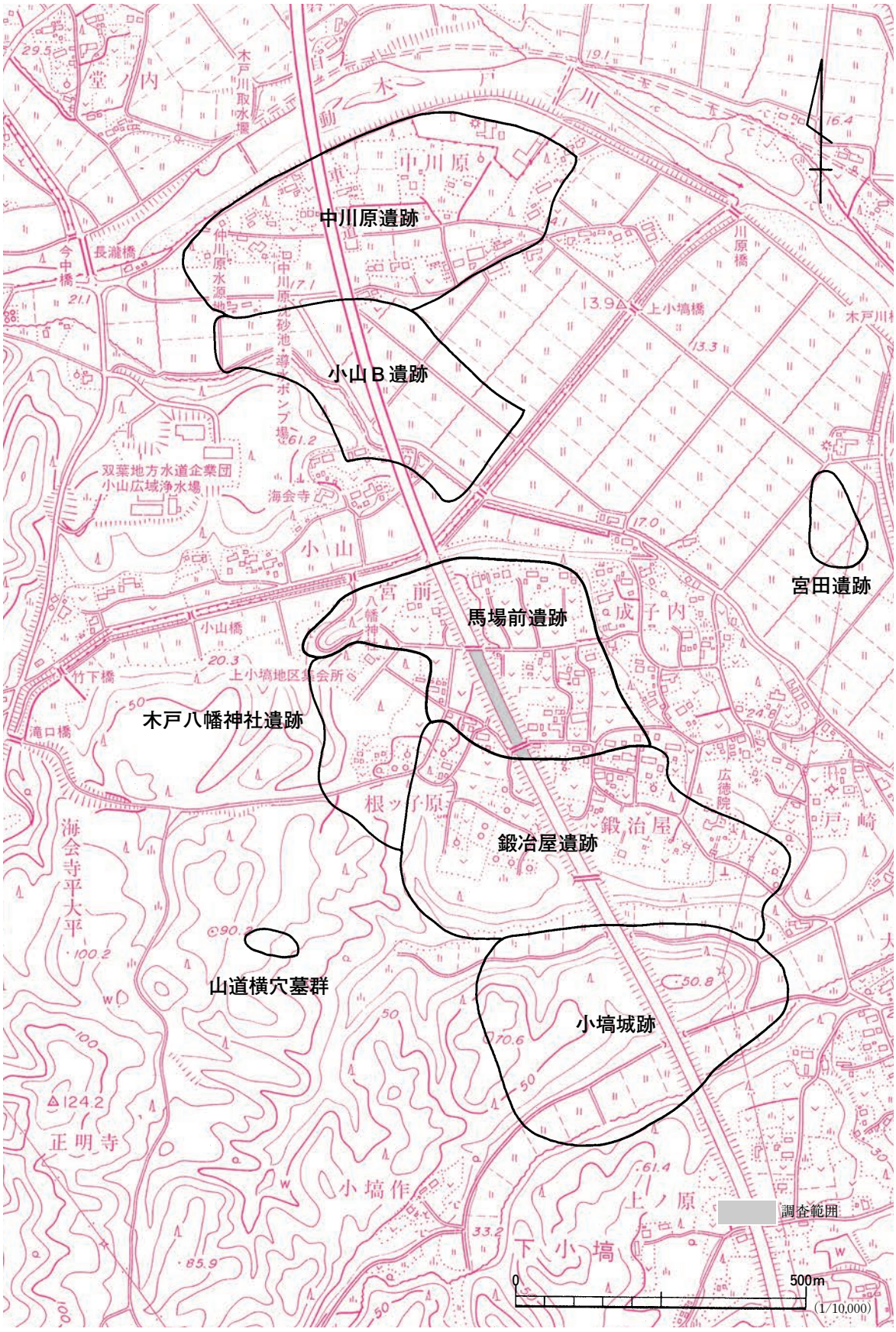


図３　馬場前遺跡周辺の地形

古墳時代の集落跡については，未だ発掘調査されていないが，土師器の散布地は町内にも数多く分布しており，存在する可能性は高い。昭和52年に上小塙地区の圃場整備事業が実施された際に，木戸川右岸に延びる自然堤防の部分を横断する圃場排水溝法面から，７世紀代の土師器が多く出土した。これは，宮田遺跡の範囲に含まれるものと推定されるが，このことは，古墳時代後期の集落跡が，木戸川氾濫原における自然堤防上にも分布していることを示すものであろう。

「国造本紀」によると，古代の楢葉周辺は道尻岐閉国と呼ばれていたということになる。木戸川の「木戸」は「柵戸」と関連すると言われているが，このことについては『楢葉町史　第一巻』の「第三編　古代の楢葉」に詳しく述べられている。

奈良・平安時代の楢葉は，石城郡に属していたと推定されている。この時代の遺跡は，数多く存在し，土師器・須恵器の散布地として遺跡範囲が推定されている遺跡の多くには，奈良・平安時代の集落跡が残されているものと推定される。ほとんどが双葉断層東側の第３段丘面上に立地している。町内の遺跡分布調査や，常磐自動車道の建設に伴う遺跡分布調査でも，土師器・須恵器の散布地は数多く確認され，相当広い面積を有している。大まかにその分布を見ると，井出川左岸では，下繁岡の広い台地面，井出川と木戸川との間では，北田の上ノ原から天神原・井出上ノ代にかけての面，木戸川右岸では，山田岡から下小塙を経て上小塙に至るまで並ぶ開析谷に挟まれた台地面に連綿と遺跡が続いている。発掘調査された例としては，波倉の北向遺跡や下繁岡の赤粉遺跡，そして，常磐自動車道関連で下小塙上ノ原遺跡や上小塙の鍛冶屋遺跡が挙げられる。この内，赤粉遺跡と鍛冶屋遺跡では竪穴住居跡と掘立柱建物跡が多く発見され，それぞれ９世紀代に中心を持つ集落跡であることが判明している。

『続日本紀』によると，養老３年に石城国で初めて駅家を10箇所設置した旨の記述が見えるが，これは，常陸国府と多賀城を結ぶ官道（東海道）が設置されたことを意味しており，楢葉町内にも駅家の存在が推定され，上記『楢葉町史　第一巻』にて鈴木啓は山田岡の古駅（ふるじゅく）をもって楢葉駅家の擬定地としている。また，山田浜には，昭和50年頃まで条里型遺構が残されていることが，航空写真により確認されている。

中世になると，千葉氏・岩城氏・相馬氏・楢葉氏・猪狩氏等に関する系図や文書資料により，文治年間の源頼朝による平泉征伐から慶長５年の関ヶ原合戦直後の岩城氏改易にいたるまでの歴史がある程度知られている。このことについては，『楢葉町史　第一巻』や『同　第二巻』に資料や記述が掲載されている。

遺跡としては，城館跡が各所に認められる。最も規模の大きな城館跡は，木戸の山田岡に所在する楢葉城である。楢葉城という名称は近年楢葉町が付けたもので，中世期には，山田城または木戸山田城という名称で呼ばれていた可能性が指摘されている。楢葉城は岩城氏系列の楢葉氏の居城とされているが，戦国期には岩城氏の支配下になり，家臣猪狩氏が勤めたものと推定されている。木戸には楢葉城跡の他，小塙城跡・上ノ原城跡・小山城跡が残されている。小塙城跡は比較的遺存状態が良く，「楢葉左衛門尉居れり」という記述が『岩城明細記』に記されている。常磐自動車道建

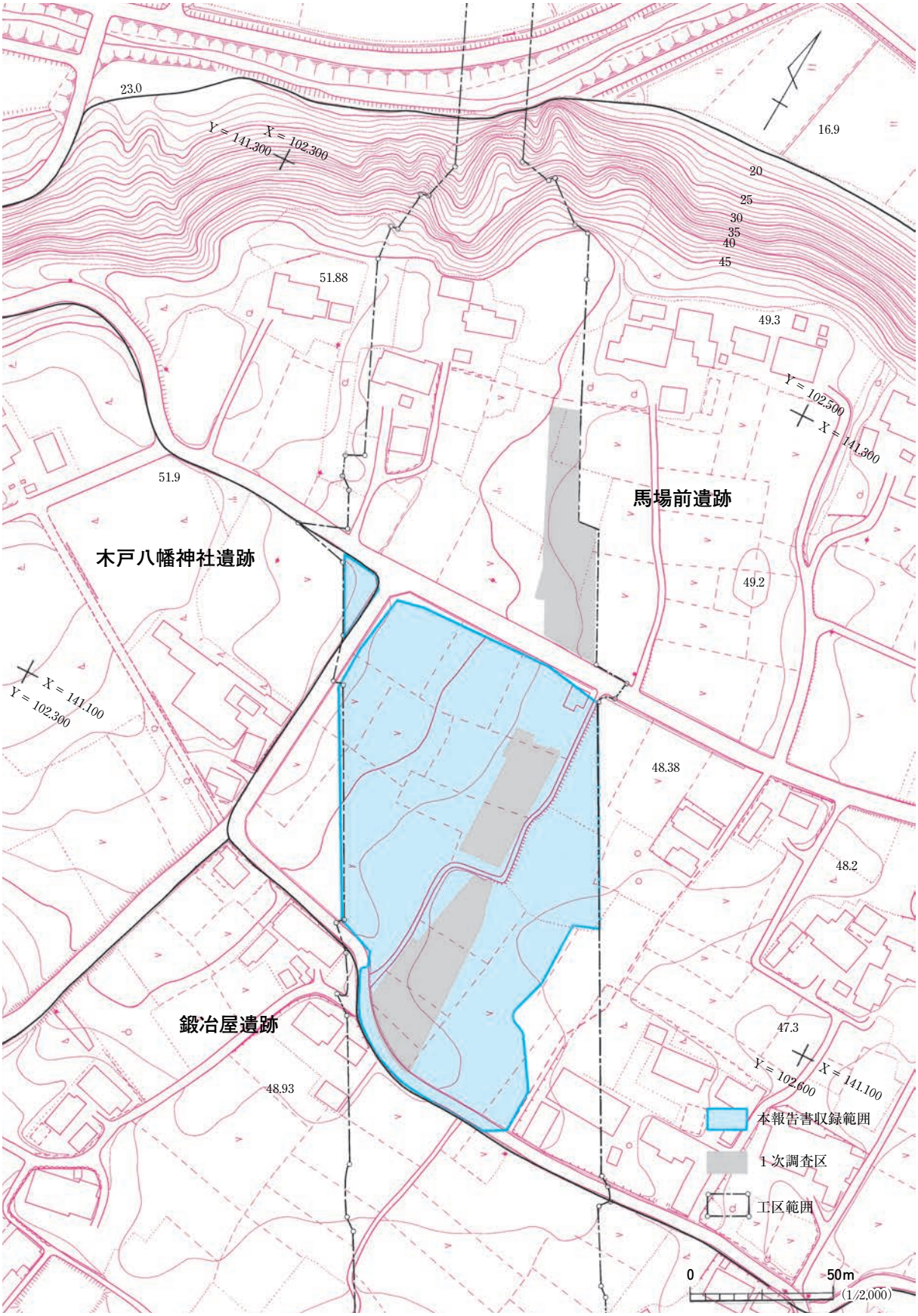


図４　馬場前遺跡調査区分図

設に伴い西側部分が発掘調査の予定となっている。上ノ原城跡は，小塙城跡と谷を挟んで対峙した位置にある。小山城跡は上小塙の西北部にあり，居城的な造りの縄張りが認められる。竜田には大谷館跡・名合沢館跡・天神山城跡・井出城跡・蓑輪城跡が残されている。天神山城跡は部分的に試掘調査が行われた。土塁と空堀により郭が連なる形式で，遺存状態は非常に良好である。井出城跡は井出川左岸にあり，井出玄蕃頭にまつわる伝説が竜田神社の由緒書に残されている。細長い半島状の台地を深い空堀で区画されており，小塙城跡に似て，遺存状態は良好である。蓑輪城跡は波倉にあり，ほとんど海岸浸食で失われているが，南北朝時代の「八里原の合戦で朝賀城が攻めとられた」という飯野文書等の記述に見る「朝賀城」に擬定される可能性もある。以上の城館跡については，楢葉町史編纂事業に併せて，縄張り測量調査が行われている。

近世の幕藩体制時代になると，楢葉町は磐城平藩の支配を受けることになるが，延享4年以降は幕領となり代官支配を受けることとなる。その後，一時仙台藩預かりとなったり，上小塙・前原・井出など一部の村は，新発田藩・棚倉藩・多古藩とめまぐるしく支配者が変わっている。現在の大字が当時の村であり，それぞれの村に関する文書資料が豊富になり，『楢葉町史　第二巻』に紹介されている。この時代の遺構としては，陸前浜街道の一里塚が井出に残されており，木戸の宿場には脇本陣の一部が保存されている。

近世初期の文書に鍛冶年貢の記録が認められる通り，町内には20箇所製鉄遺跡が残されている。遺跡は鉄滓堆積として確認されており，双葉断層より西側の山間部に多いことが特徴的である。製鉄遺跡はほとんど発掘調査されていないが，近世に属するものが多いと推定される。調査いかんによっては，古代まで遡るものもあるかもしれない。製鉄の他に，山田浜や井出浜，波倉浜では，製塩が行われており，幕末期には上小塙小山では大堀焼系統の窯業が営まれていたことも確認されている。

幕藩体制崩壊後，各村は竜田村と木戸村に統合され，近代の歴史を歩むことになる。昭和時代前半期には常磐炭坑の坑口が竜田村の清太郎沢に存在したが，石炭産業の斜陽化により，昭和20年代末には閉坑となった。昭和31年に行われた町村合併により，楢葉町が誕生，その後は東京電力福島第二原子力発電所やサッカー・ナショナルトレーニングセンター，ゴルフ場と，近代的な施設が次々建設され，現在は常磐自動車道の開通が待たれている。　（山　内）

第4節　調　査　経　過

馬場前遺跡は平成6年度に実施した表面調査で，遺跡範囲は115,000㎡と推定された。

平成7年度には試掘調査を実施し，工事区にかかる要保存範囲は26,000㎡とされた。そのうち，隣接する木戸八幡神社遺跡の100㎡も含まれている。

平成11年度には，7月21日～12月3日にかけて1次調査が2,860㎡を対象として実施された。

平成12年度は2次調査が24,140㎡を対象とし，4月17日から調査員5名体制で開始した。20日か

らは作業員を雇用し，安全衛生講習をおこない，24日から現場作業を開始した。同日から表土剝ぎも開始した。まず，町道南半部（南区）の調査を先行させた。現状の調査員数で調査を終了することが困難であるため，調査員の増員と，水道管の埋設位置と止水が可能となった時点で，町道北半部（北区）の調査に着手することとした。調査は順調に進み，４月下旬には遺構の調査が本格化した。

７月上旬には北区の調査に着手し，竹林の伐採をおこない，７月中旬には北区の表土剝ぎをおこなった。８月上旬には，北区に設置していた調査事務所と休憩所を鍛冶屋遺跡の昨年度調査区に移転し，北区の表土剝ぎの全面展開に備えた。お盆休み明けには，調査員４名を加えた９名体制となる。９月20日には表土剝ぎが終了した。

９月23日には現地説明会を開催し，県内外から約200名の見学者が参加され盛況であった。９月下旬には調査員４名を加えた，13名体制となった。

10月11日には方形に区画する堀と多数のピットについて，小野正敏国立歴史民俗博物館助教授に調査指導をいただいた。10月からは順次，調査員が増員し19名となり作業員は160名となる。10月下旬には遺構数が住居跡104軒，掘立柱建物跡71棟，土坑823基となる。北区には土坑と中世の柱穴が高密度で分布し，調査の進捗状況から予定調査範囲の調査を終了させることが不可能となってきた。

11月上旬には遺跡南端部の町道と南東部の表土剝ぎをおこない調査に着手した。11月上旬にも増員がなされ，調査員は25名・作業員は180名となった。

11月22日には日本道路公団東北支社いわき工事事務所（ＪＨ）・福島県教育委員会・福島県文化センターの３者で常磐自動車道遺跡調査連絡調整会議が開催された。そこでは，北区の中世・平安・縄文各時代の遺構が著しく重複し，調査が困難を極めている状況を説明した。中世の遺構と南区の調査を平成12年度で終了し，4,500㎡を平成13年度に調査することにＪＨ側も工事工程上支障にならないとのことで合意を得た。

12月14日には平成12年度の調査をすべて終了し，20日にラジコンヘリで空中写真撮影をおこなった。21日にはＪＨに南区の引き渡しを，22日には遺構養生と器材収納を終えた。　（吉　野）

第５節　調査の方法

馬場前遺跡における座標の設定は，すでに鍛冶屋遺跡１次調査で設定されていた国土座標Ⅸ系のＸ；141,400・Ｙ；102,300地点をＮＳ000・ＥW000の測量原点とした。その際，Ｘを北（Ｎ），Ｙを東（Ｅ）と読み替えて，国土座標の下３桁を用いて，調査区内の座標を表示することにした。例えば，Ｎ250・Ｅ120の地点は，原点より北に250m・東に120mの地点を表している。座標杭の設定にあたっては，日本道路公団が設置した予定路線の中心杭を利用して，計算により真北を求め，それから南北方向と東西方向にそれぞれ５ｍごとに杭を設定している。

グリッドの設定にあたっては，座標の設定によりできた南北10m・東西10mのマスを一単位として，南北にアラビア数字で１・２・３・・・，東西にアルファベットでＡ～Ｚ・ＡＡ・ＡＢ・・という記号を与え，この組み合わせでグリッドを表示することにした。このほか，便宜的な区割として町道の南側を南区，北側を北区とした。なお，本報告は南区の調査成果を収録している。

遺跡の掘り下げに際しては表土及び耕作土を重機で除去し，以下の土層はすべて人力で掘り下げた。遺構内堆積土はℓとアラビア数字の組み合わせ，遺構外堆積土はＬとローマ数字の組み合わせで表示した。

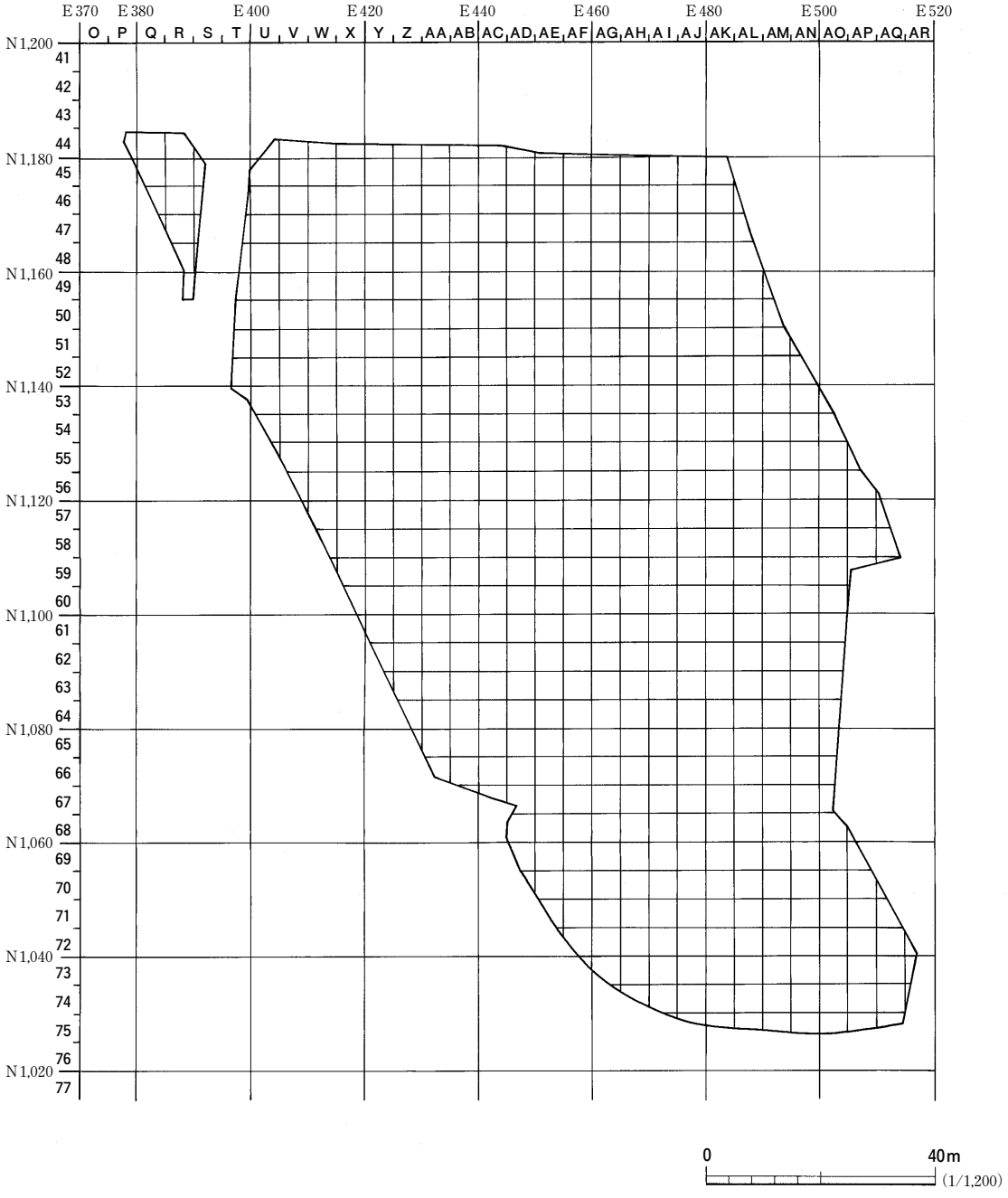


図５　グリッド配置図

遺構の調査記録は，大半の遺構について空中写真測量を依頼した。１/20の縮尺で作図し，遺物出土状況・住居跡の炉などについては１/10の縮尺で作図した。また，調査区の全体図も空中写真測量で１/200の縮尺で作図を依頼した。

写真は６×4.5㎝のモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムのほか，35㎜のモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを併用した。さらにセスナ機とラジコンヘリによる空中写真撮影も行い，遺跡周辺の地形や遺跡全体の状況や遺構の集中状況を記録するように努めた。

（吉　野）

現地説明会の様子

第２章　遺構と遺物

第１節　調査区の概要と基本土層

調査区から検出した遺構は竪穴住居跡60軒，掘立柱建物跡６棟，柱列跡７列，土坑352基，埋甕４基，溝跡５条，井戸跡５基，性格不明遺構１基，ピット2,150基である。

出土遺物は縄文土器18,304点，土師器2,495点，須恵器80点，陶磁器40点，土製品６点，石器374点，剥片263点，石613点，鉄器６点，鉄滓82点である。

馬場前遺跡は河岸段丘上の縁辺に位置する。同じ段丘上には鍛冶屋遺跡・小塙城跡・木戸八幡神社遺跡などがあり，町内でも大規模な遺跡が集中している場所として著名である。これらの遺跡は，名称が別となっているが，図３を参照すると各々の遺跡は互いに接しているので，遺跡群とも称すべきものであろう。

調査区は馬場前遺跡として登録された範囲からみると，町道中島・高田線によって南北に分断された南側にあたりごく一部を調査したに過ぎない。

遺構の分布（図６～９，付図１・２）

住居跡の年代は，縄文時代と奈良～平安時代のものとに分かれる。そのなかでも，縄文中期後葉から末葉にかけてのものが大半を占め，一部後期初頭のものも確認している。縄文時代の住居跡は調査区の北半分にのみ立地し，南半分には造られてはいない。一方，奈良～平安時代の住居跡は，縄文時代の住居跡よりも南側に造られているものもあるが，縄文時代の住居跡の分布と重なっている。

土坑は調査区内にくまなく分布していた。その状況は，住居跡と重複するもの・住居跡の近辺にあるもの・住居跡がないところにあるものなどである。そのうち，住居跡の近辺にあるもの・住居跡がないところにあるものなどは住居跡との有機的な関係が窺えるものもある。

掘立柱建物跡と柱列跡は，伴出遺物がなく明確な時期を特定ができてはいないが中世から近世にかけての所産と考えている。調査区内からは多数のピットを確認しているが，これらを建物跡として組み立てる作業は必ずしも成功はしてはいない。そのために，建物跡と柱列跡との有機的な関係と建物跡相互の関係は不詳とせざるをえない。

基本土層

調査区における基本土層は，ＬⅠ黒褐色土とした耕作土が深くまで及んでいたために，ＬⅡ黒褐色土やＬⅢ褐色土などが欠落している。そのため，ＬⅠ以下がＬⅣ黄褐色土とした遺構検出面となっている。ＬⅣからは縄文・奈良～平安時代の遺構や中近世の遺構を検出している。

ＬⅣ以下となるＬⅤにぶい黄褐色砂層・ＬⅥ黄褐色土などがあるが，深い土坑や井戸跡などはこれらを掘り抜いている。　（吉　野）

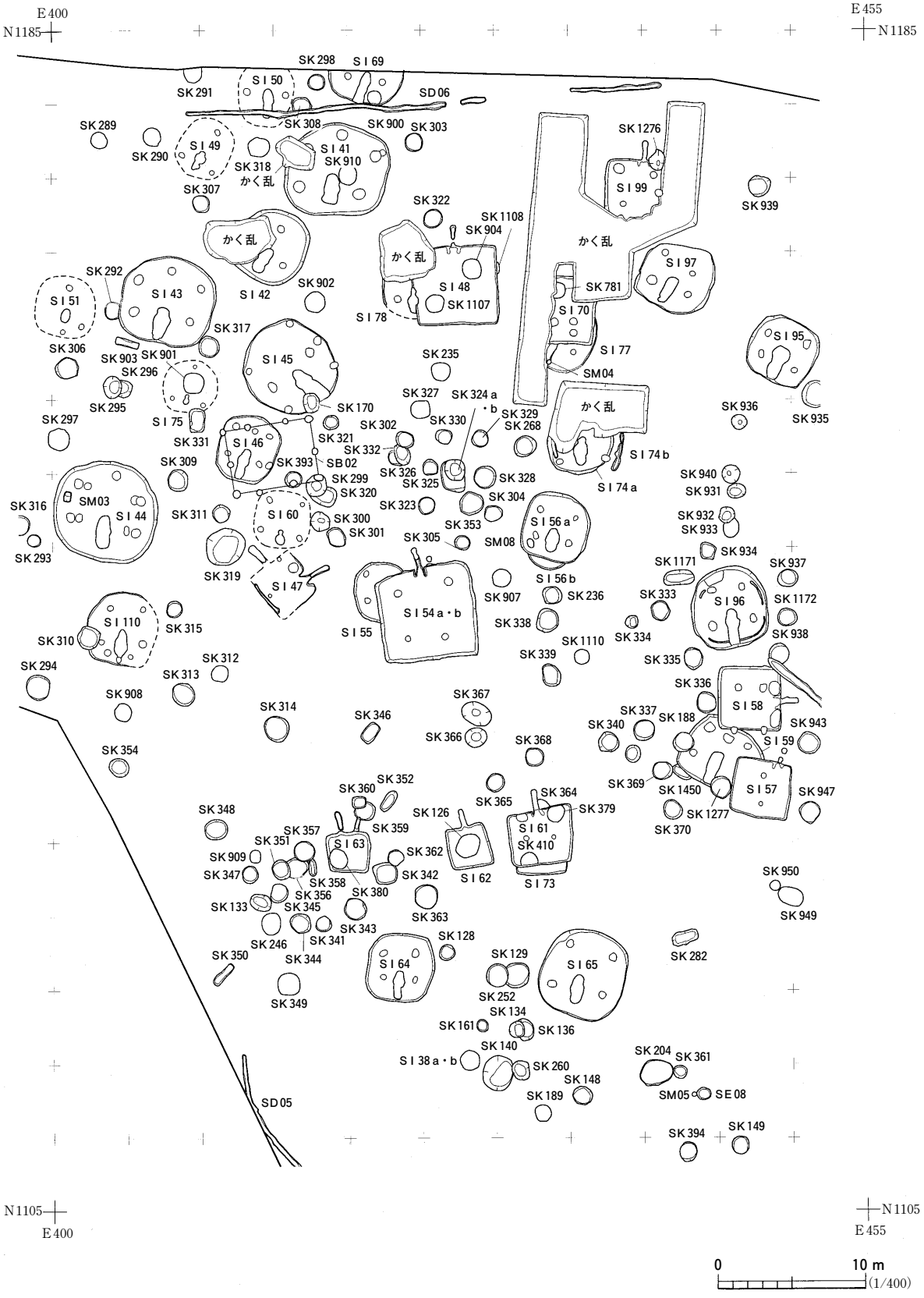

E400
N1185
E455
N1185
SK298
SI69
SI50
SK291
SD06
SK289
SK308
SK900
SK303
SK1276
SI49
SK290
SI41
SK318
SK910
かく乱
SK307
SI99
SK939
SK322
SK1108
SK904
かく乱
かく乱
かく乱
SI97
SK292
SI43
SI42
SK902
SI48
SK781
SI51
SK1107
SI70
SI78
SK317
SI95
SK306
SK903
SK901
SI45
SK235
SI77
SK296
SM04
SK327
SK324a・b
かく乱
SK295
SK170
SK329
SK936
SK297
SI75
SK302
SK330
SK268
SK935
SK331
SI46
SK321
SK332
SI74b
SK309
SK393
SB02
SK326
SK328
SK940
SK299
SK325
SI74a
SK931
SK320
SK304
SK316
SM03
SI44
SK311
SI60
SK323
SK300
SK353
SI56a
SK932
SK301
SK305
SM08
SK933
SK293
SK934
SK1171
SK937
SK319
SI47
SI56b
SK907
SK236
SK333
SI96
SK1172
SI110
SK315
SI54a・b
SK338
SK310
SI55
SK1110
SK334
SK938
SK312
SK339
SK335
SK294
SK313
SK336
SK908
SK367
SK314
SK346
SK337
SK188
SI58
SK340
SK943
SK366
SK368
SI59
SK354
SK352
SK369
SK360
SK364
SK1450
SI57
SK947
SK365
SK348
SK126
SK379
SK1277
SK357
SK359
SI61
SK370
SK351
SI63
SK410
SK909
SK362
SK347
SK342
SI62
SK358
SI73
SK950
SK356
SK380
SK133
SK345
SK363
SK949
SK343
SK341
SK128
SK246
SK282
SK350
SK344
SI64
SK129
SI65
SK252
SK349
SK134
SK161
SK136
SK140
SK204
SK361
SI38a・b
SK260
SK148
SK189
SM05
SE08
SD05
SK394
SK149
N1105
E400
N1105
E455
0
10 m
(1/400)

図６　遺構配置図（１）

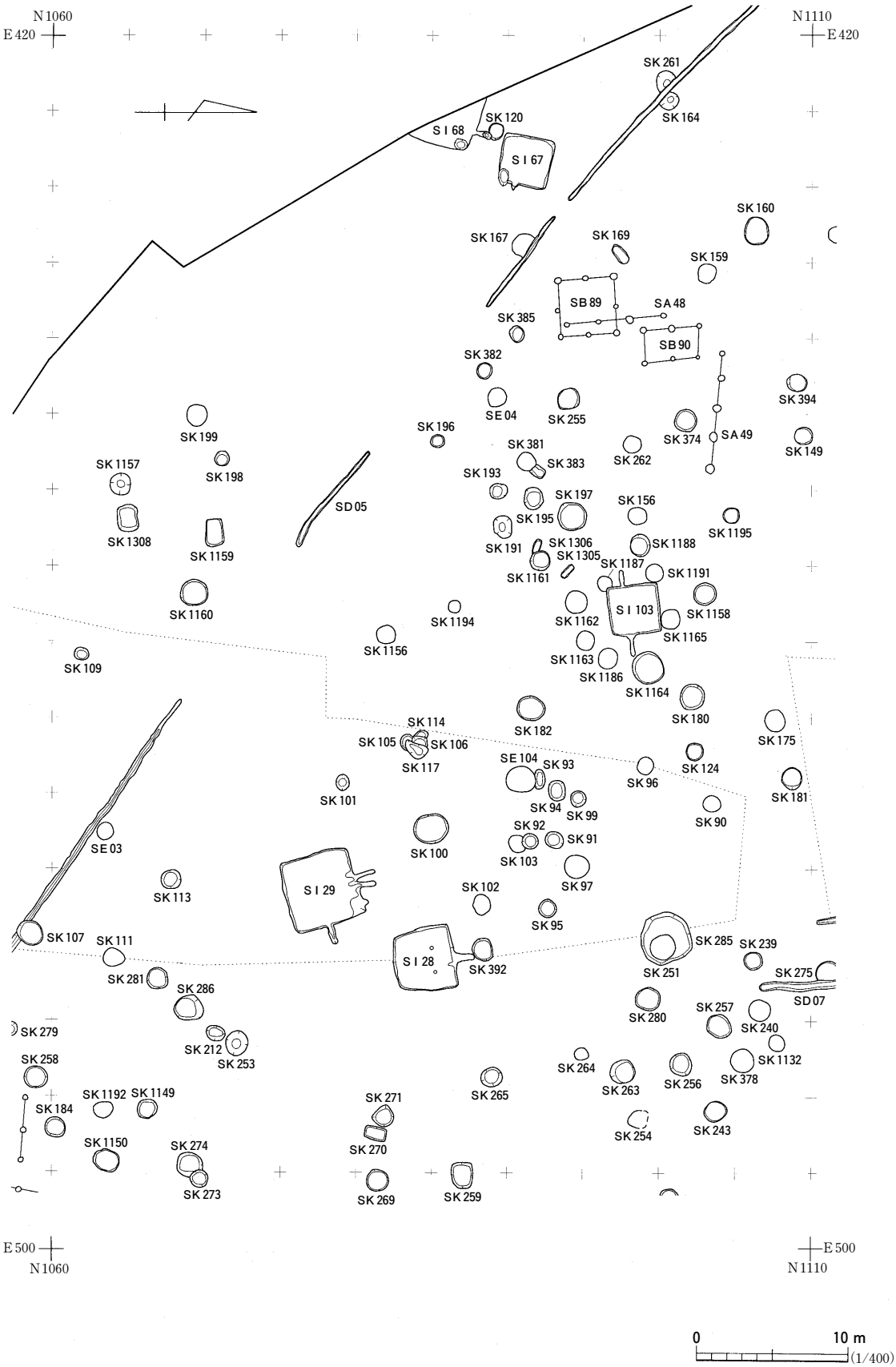

N1060
E420
N1110
E420
SK261
SK164
SK120
SI68
SI67
SK160
SK167
SK169
SK159
SB89
SA48
SK385
SB90
SK382
SK394
SE04
SK255
SK374
SA49
SK149
SK196
SK199
SK381
SK383
SK262
SK1157
SK198
SK193
SK197
SK156
SD05
SK195
SK1195
SK1308
SK1159
SK191
SK1306
SK1188
SK1305
SK1187
SK1161
SK1191
SK1160
SK1194
SK1162
SI103
SK1158
SK1156
SK1165
SK109
SK1163
SK1186
SK1164
SK180
SK114
SK182
SK175
SK105
SK106
SK117
SE104
SK93
SK124
SK96
SK101
SK181
SK94
SK99
SK90
SK92
SK91
SE03
SK100
SK103
SK97
SK113
SI29
SK102
SK95
SK107
SK111
SK285
SK239
SK281
SI28
SK392
SK251
SK275
SK286
SD07
SK280
SK257
SK279
SK240
SK212
SK253
SK1132
SK258
SK264
SK378
SK265
SK263
SK256
SK1192
SK1149
SK271
SK184
SK254
SK243
SK1150
SK274
SK270
SK273
SK269
SK259
E500
N1060
E500
N1110
0
10 m
(1/400)

図７　遺構配置図（２）

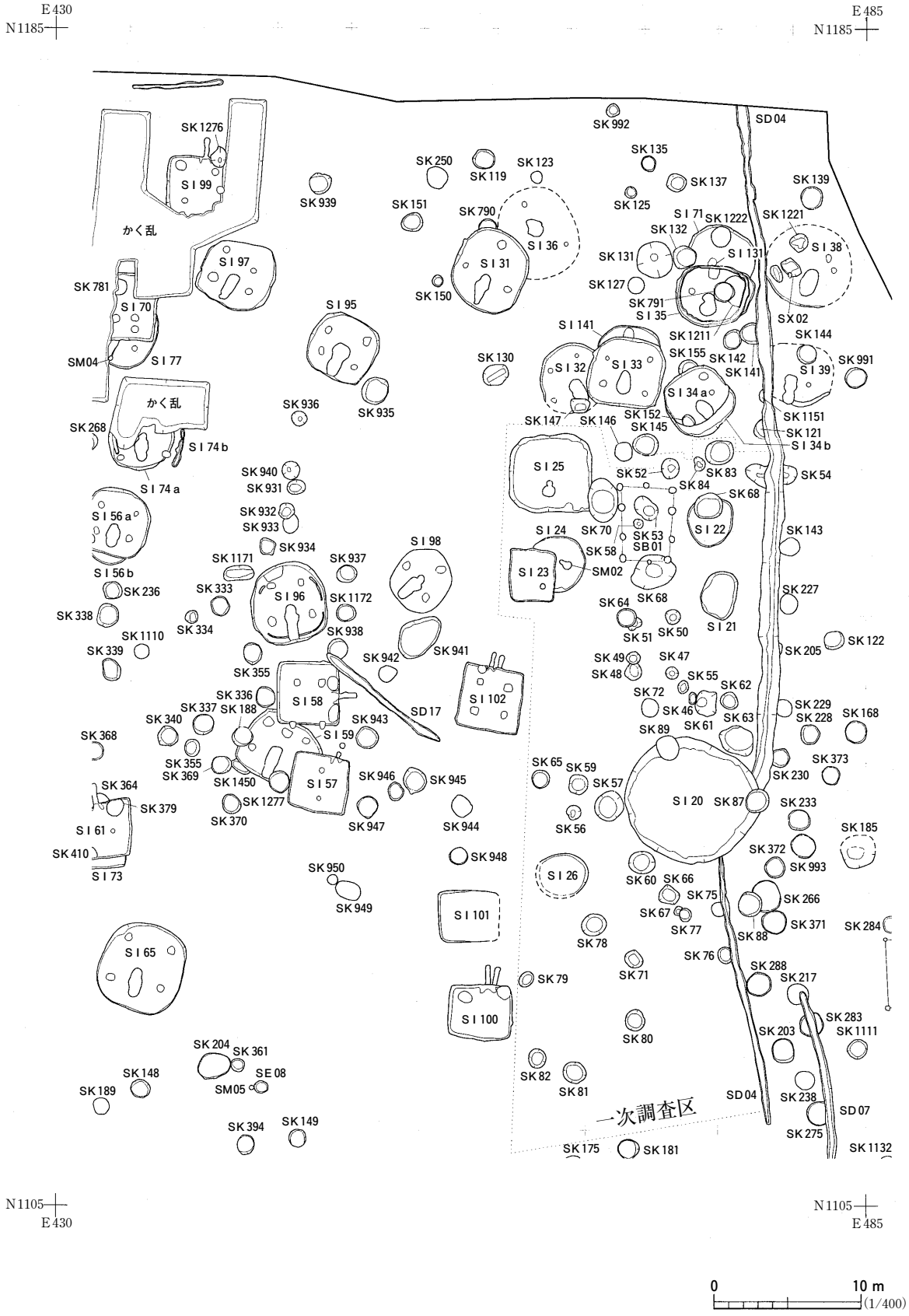

E430
N1185
E485
N1185
SK1276
SI99
かく乱
SK939
SK250
SK119
SK123
SK992
SK135
SK137
SK125
SK139
SK151
SK790
SI36
SI31
SI71
SK1222
SK132
SK1221
SI38
SI131
SK131
SK127
SK791
SI35
SX02
SK781
SI97
SI70
SI95
SK150
SI141
SK1211
SK144
SM04
SI77
SK130
SI32
SI33
SK155
SK142
SK141
SI39
SK991
かく乱
SK936
SK935
SI34a
SK1151
SK268
SK147
SK146
SK152
SK145
SK121
SI34b
SI74b
SI25
SK52
SK83
SK54
SI74a
SK940
SK931
SK84
SK68
SI56a
SK932
SK933
SI24
SK70
SK53
SB01
SI22
SK143
SK934
SI98
SK58
SI23
SM02
SK1171
SK937
SI56b
SK236
SK333
SI96
SK1172
SK64
SK68
SK227
SK338
SK334
SK51
SK50
SI21
SK1110
SK938
SK205
SK122
SK339
SK942
SK941
SK49
SK47
SK48
SK355
SK55
SK62
SK336
SI58
SI102
SK72
SK337
SK188
SK46
SK229
SK228
SK168
SK340
SK943
SD17
SK63
SK89
SK61
SK368
SI59
SK355
SK369
SK1450
SI57
SK946
SK945
SK65
SK59
SK57
SK373
SK230
SK364
SK379
SK1277
SK370
SK947
SK944
SI20
SK87
SK233
SI61
SK56
SK185
SK410
SK372
SK993
SI73
SK948
SK950
SI26
SK60
SK66
SK75
SK266
SK949
SI101
SK67
SK77
SK371
SK284
SK78
SK88
SI65
SK76
SK288
SK79
SK71
SK217
SI100
SK283
SK80
SK203
SK1111
SK204
SK361
SK148
SE08
SK82
SK81
SK189
SM05
SD04
SK238
SD07
一次調査区
SK394
SK149
SK275
SK175
SK181
SK1132
N1105
E430
N1105
E485
0
10 m
(1/400)

図８　遺構配置図（３）

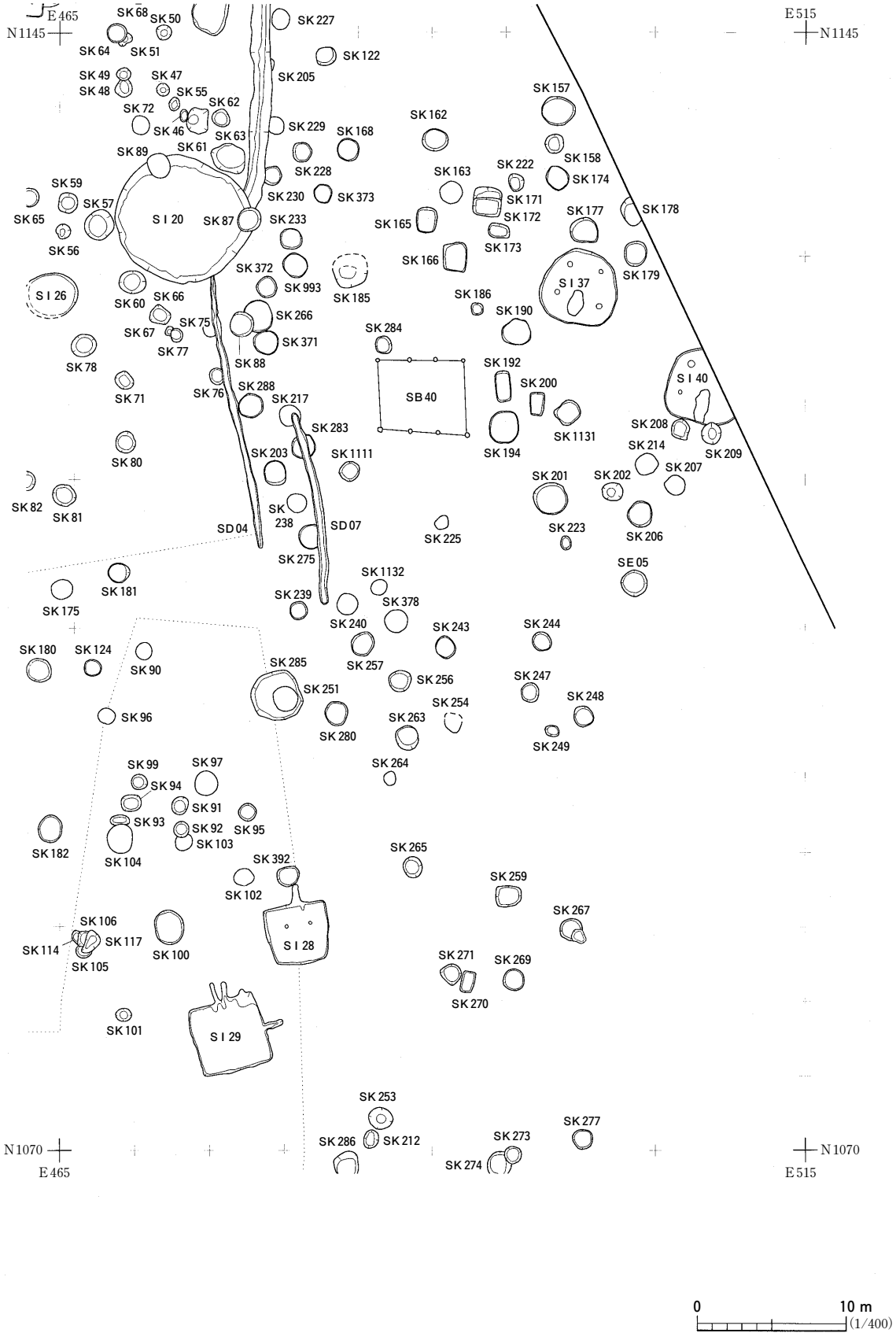

E465
N1145
E515
N1145
N1070
E465
N1070
E515
SK 68
SK 50
SK 64
SK 51
SK 227
SK 122
SK 205
SK 49
SK 48
SK 47
SK 55
SK 62
SK 72
SK 46
SK 63
SK 229
SK 168
SK 89
SK 61
SK 228
SK 59
SK 57
SK 65
SK 56
SI 20
SK 87
SK 230
SK 373
SK 233
SK 372
SK 993
SK 185
SI 26
SK 60
SK 66
SK 75
SK 67
SK 77
SK 266
SK 371
SK 88
SK 78
SK 71
SK 76
SK 288
SK 217
SK 283
SK 203
SK 1111
SK 80
SK 82
SK 81
SK
238
SD 04
SD 07
SK 275
SK 181
SK 175
SK 239
SK 1132
SK 378
SK 240
SK 180
SK 124
SK 90
SK 285
SK 251
SK 257
SK 256
SK 243
SK 96
SK 280
SK 263
SK 254
SK 264
SK 99
SK 97
SK 94
SK 91
SK 93
SK 92
SK 95
SK 103
SK 182
SK 104
SK 392
SK 102
SK 265
SK 106
SK 114
SK 117
SK 105
SK 100
SI 28
SK 259
SK 267
SK 271
SK 269
SK 270
SK 101
SI 29
SK 253
SK 286
SK 212
SK 273
SK 274
SK 277
SK 157
SK 162
SK 158
SK 163
SK 222
SK 174
SK 171
SK 172
SK 165
SK 177
SK 178
SK 173
SK 166
SK 179
SI 37
SK 186
SK 190
SK 284
SB 40
SK 192
SK 200
SK 194
SK 1131
SI 40
SK 208
SK 209
SK 214
SK 207
SK 201
SK 202
SK 223
SK 206
SK 225
SE 05
SK 244
SK 247
SK 248
SK 249
0
10 m
(1/400)

図９　遺構配置図（４）

第２節　竪穴住居跡

調査区から検出した竪穴住居跡は60軒である。このうち34・54・56・74号住居跡からは，建て替えを確認している。住居跡の総数は建て替え前と後をそれぞれ１軒と数えている。住居跡の年代は，縄文時代中期後葉から後期初頭にかけてのものが45軒である。その他の15軒は奈良～平安時代のものである。

住居跡の分布は調整区の北半分に限られていた。縄文時代の住居跡は環状に連なっているようである。

28号住居跡　ＳＩ28

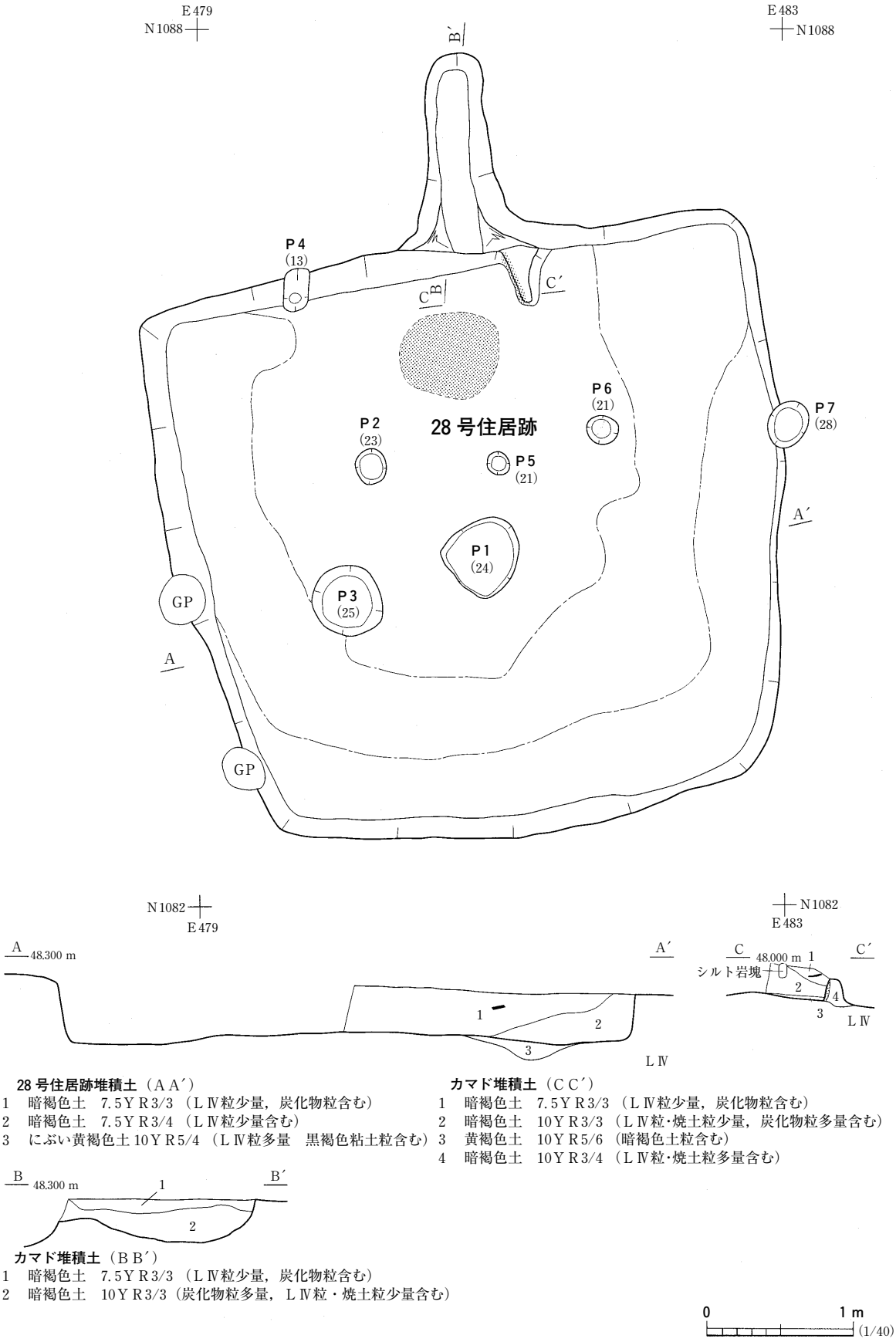
遺　　構（図10，写真13・14）

本遺構は南区南側中央部の平坦面に存在し，ＡＪ63～64・ＡＫ63～64グリッドに位置する。本遺構の南東に主軸方位をほぼ同じくする29号住居跡が近接する。黄褐色土（ＬⅣ）上面で方形の落ち込みを検出した。西側半分は昨年度に調査を行っており，合わせて報告する。遺構内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は暗褐色土，ℓ２はℓ１より暗い色調の暗褐色土で，共に黄褐色土粒を少量含む。ℓ１は遺構の中央部に厚く堆積し，ℓ２は壁沿いに流れ込むように堆積している。ℓ１・２は堆積状況より自然に流入した土と推測される。ℓ３は黄褐色土粒と黒褐色土粒を含むにぶい黄褐色土で，貼床土である。

平面形は一辺3.9～4.2ｍ程の隅丸方形で，東西壁方向を主軸方位とすると，真北から西側に３°傾く。壁高は22～41㎝で，周壁は70°程の角度で直線的に立ち上がる。床面は黄褐色土をほぼ平坦に掘り込んで造り出している。さらに東・南・西壁に沿って「コ」の字の帯状に貼床が認められる。床面に踏み締まりは認められないが，周壁付近を除いて黄褐色土に暗褐色土粒が混入しており，この範囲内を頻繁に使用したと考えられる。

住居内施設として，カマド２基，ピット７基が検出された。カマドは北壁中央よりやや東側に設けられている。また，北壁から30㎝程離れた所に，このカマドより古いカマドの掘形と考えられるピットが検出されている。Ｐ１は床面中央部，Ｐ３はＰ１の約１ｍ西に位置する。Ｐ２・５・６はカマドを囲むように80㎝程の間隔で並び，Ｐ４は北壁西部，Ｐ７は東壁中央部に位置する。

Ｐ４は長径14㎝，短径16㎝の円形で，深さは13㎝，Ｐ７は長径32㎝，短径26㎝の楕円形で，深さ28㎝を測る。Ｐ４・７はその位置から壁柱穴の可能性が考えられるが，対応する周壁際からピットは検出されなかった。Ｐ７内には黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ２・５・６の平面形は直径15～24㎝の円形で，深さ21～23㎝とほぼ同規模である。カマドを囲むように等間隔で並んでいるのでカマドに関係するピットとも考えられるが，機能は不明である。Ｐ２内堆積土は２層に分けられ，ℓ１は褐色土，ℓ２は黄褐色土粒を含む明るい色調の褐色土が堆積している。Ｐ５・６



28号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土10ＹＲ5/4（ＬⅣ粒多量　黒褐色粘土粒含む）

カマド堆積土（ＣＣ′）
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒･焼土粒少量，炭化物粒多量含む）
3　黄褐色土　10ＹＲ5/6（暗褐色土粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒･焼土粒多量含む）

カマド堆積土（ＢＢ′）
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒多量，ＬⅣ粒・焼土粒少量含む）

0　1 m
(1/40)

図10　28号住居跡

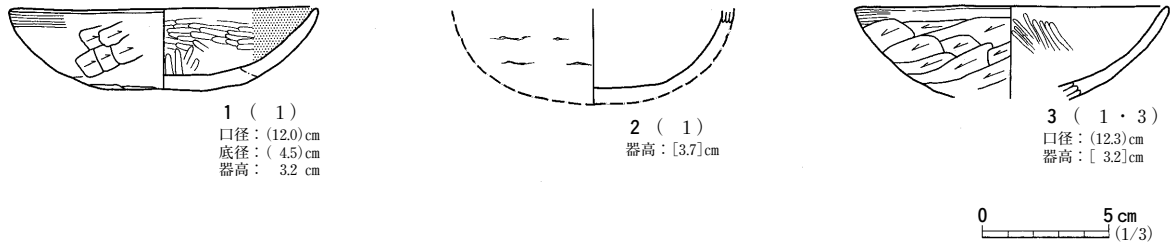


図11　28号住居跡出土遺物

内には黄褐色土粒を含む黒褐色土が堆積している。Ｐ１の平面形は直径50cm程の不整円形で，深さは24cmを測る。Ｐ１内堆積土は２層に分けられ，ℓ１は褐色土，ℓ２は黄褐色土粒を含む明るい色調の褐色土である。Ｐ３の平面形は直径47cmの円形で，深さは25cmを測る。Ｐ１・３の機能は不明である。

新しい方のカマドには袖と煙道が遺存し，煙道の長軸方位と住居跡の主軸方位は一致する。西側の袖のみ遺存し，長さは38cmを測る。断面の観察から，袖は床面を形成した後，黄褐色土粒と焼土粒を含む暗褐色土を積上げて構築したことがわかる。煙道の長さは156cm，幅は37cm，検出面からの深さは最大28cmを測り，底面は南から北に向かって傾斜する。

カマド内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は遺構内堆積土ℓ１に相当する暗褐色土，ℓ２は黄褐色土粒，焼土粒，炭化物粒を含む暗褐色土である。燃焼部のℓ２からは，被熱により赤く変色した円筒状のシルト岩塊が出土しており，カマドの支脚と考えられる。堆積状況より，ℓ１・２は自然流入土と推測される。

古いカマドは掘形のみ遺存する。長径66cm，短径56cmの楕円形で，深さは42cmを測る。カマド掘形内堆積土は２層に分けられ，ℓ１は黄褐色土粒と焼土粒土を含む暗赤褐色土，ℓ２は黄褐色土粒を含む褐色土である。

遺　　物（図11，写真215）

遺物は縄文土器22点，土師器片150点，須恵器片１点，剝片１点が出土した。ほとんどがℓ１より出土したが，小破片のため図上復元できるものは少ない。出土した土師器はロクロを用いずに整形されていて，器種には杯，甕，椀が見られる。

図11－１・２はℓ１から出土した丸底の土師器杯である。１は内面に黒色処理とヘラミガキが施される。外面にはヨコナデ後，体部にヘラケズリを施している。２は器面は内外面共に被熱で荒れ調整は不明である。

３はℓ２・３から出土した土師器杯で，外面にはナデ後，体部にヘラケズリ，内面にはヘラミガキが施される。

ま　と　め

本遺構は，一辺４ｍ程の隅丸方形の竪穴住居跡である。カマドは造り替えられており，新しいカマドは北壁のほぼ中央に設けられている。主柱穴と考えられるピットは認められない。時期は出土土器より国分寺下層式期，奈良時代と考えられる。　（坂　田）

31号住居跡　ＳＩ31

遺　　構（図12・13，写真５・15・16）

住居跡は南区の北東部ＡＦ46・47，ＡＧ46・47グリッドに位置し，検出層位はＬⅣである。周囲には32～35・38・39・71・141号住居跡など，８軒の住居跡が近接または重複して造られていた。重複する遺構は36号住居跡と790号土坑である。住居跡の検出段階では気が付かなかったが，36号住居跡の柱穴を組み合わせているところで，住居跡の床面から柱穴を見つけた。新旧関係は明確ではないが，36号住居跡の炉の形状からみて本住居跡が新しいと考えている。790号土坑は住居跡の床面から検出したので，住居跡よりも土坑の方が古い。

住居跡の平面形は隅丸方形をなし，規模は南北で5.5m，東西が4.96mである。周壁の残りは概ね良く，壁高は西壁が最も高く60cmほどであった。周壁の立ち上がりは西壁が直立気味で，東壁は緩やかとなっている。

堆積土は10層に区分した。壁際にはℓ９・10が堆積したのち，ℓ６～８が断続的に床面を覆っている。ℓ４・５には，後期初頭の土器が多数含まれていた。

床面は概ね平坦であるが，東壁中央部の壁溝に接して長軸70cm，短軸60cm，11cmほどの高まりがみられた。住居施設は炉，主柱穴が３基，ピットが８基，壁溝などがある。

壁溝は断続的に途切れている。壁溝の規模は幅が18～40cm，深さが５～25cmである。なお，壁溝のなかで，炉の前庭部に接する部分から剝片がまとまって出土した。

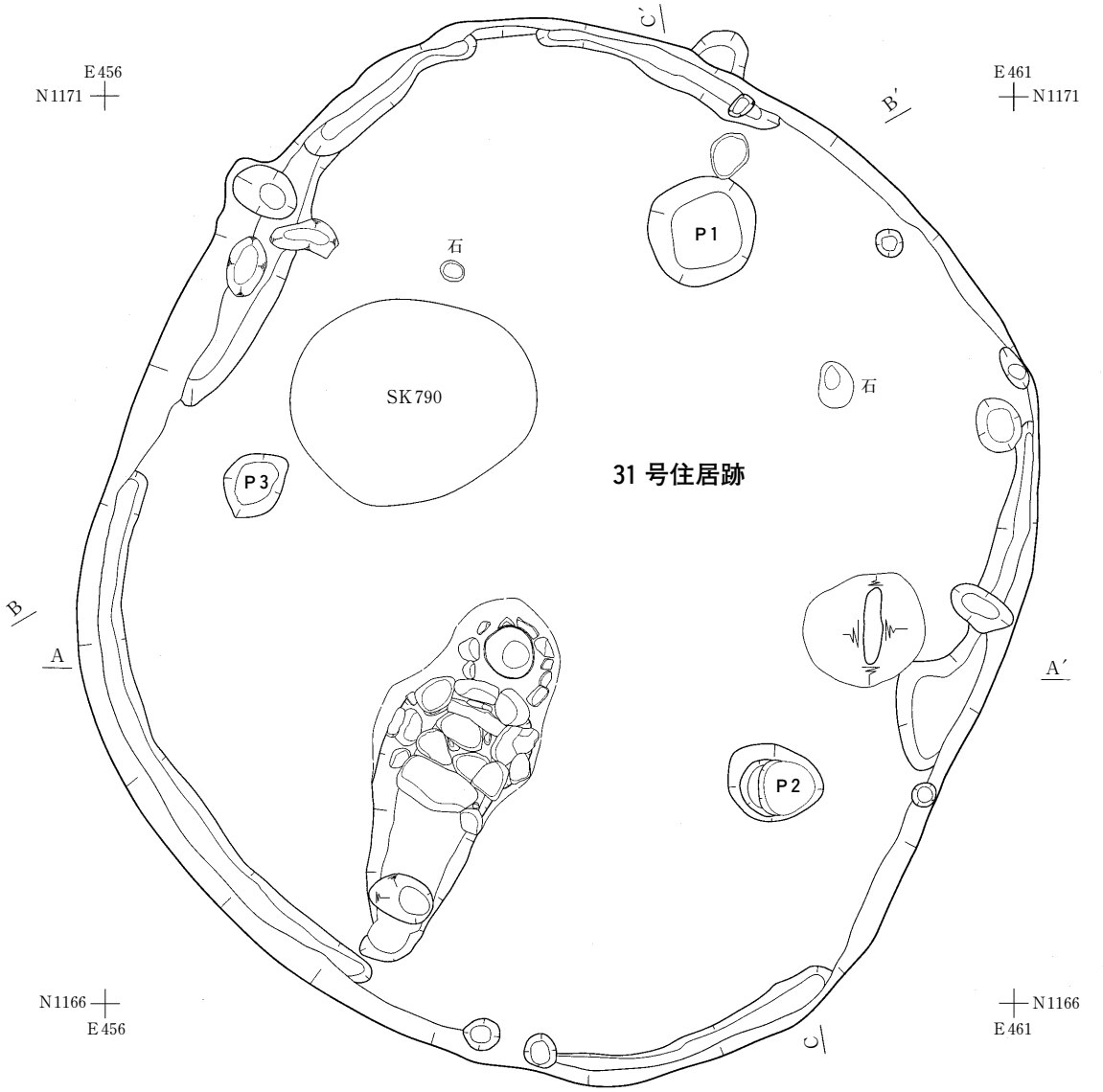
主柱穴のＰ１～３からは，柱痕を確認することができなかった。Ｐ２とＰ３の中点とＰ１を結ぶ線が住居跡の主軸であり，真北に対して東側に傾いている。主柱穴の平面形は隅丸方形あるいは不整形で，長軸は40～60cm，深さが45～60cmである。主柱穴のうちＰ２は柱穴が重複し，Ｐ１の規模がＰ３と比べてかなり大きいので，Ｐ２・３については柱を据え替えたことを考えている。ピットは壁溝と重複し，散在している。

炉は住居跡の南半部から検出した複式炉である。長軸は北東を向き，全長が2.2cm，幅は92cmであった。前庭部の末端は南壁の近くにある。土器埋設部には１個の深鉢が埋設され，その周りには「Ｕ」字状に縁石が配されていた。縁石は板状礫と円礫を立てて据えていた。縁石の上端と埋設土器の上端についてはあまり差がないので，縁石と埋設土器は高さをあわせて造られていたようである。

石組部は奥壁には幅の広い板状礫を１個配し，緩やかに立ち上がる。側壁は板状礫と円礫を積上げ，急角度で立ち上がる。底面には３個の幅の広い板状礫が３個敷かれ，隙間に小円礫を詰めていた。前庭部は溝状をなし，末端に向かって幅を減じている。床面の掘り込みは７cmほどと浅い。土器埋設部を断ち割ったところ，埋設土器内の炭化物層は５～10cmであった。

遺　　物（図14・15，写真215・227・229）

住居跡からは縄文土器が1,404点出土した。そのうち，堆積土上部には後期初頭の土器が含まれていた。おそらく住居跡が廃絶後に捨て場として利用されていたのだろう。



31号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
2　褐色粘質土　10ＹＲ6/6
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ3/2
5　黒褐色土　10ＹＲ3/2
6　褐色土　10ＹＲ6/6（ＬⅣ粒含む）
7　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
8　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
9　黄褐色土　10ＹＲ5/8（ＬⅣ粒・暗褐色土粒含む）
10　灰黄褐色土　10ＹＲ5/2

図12　31号住居跡（１）

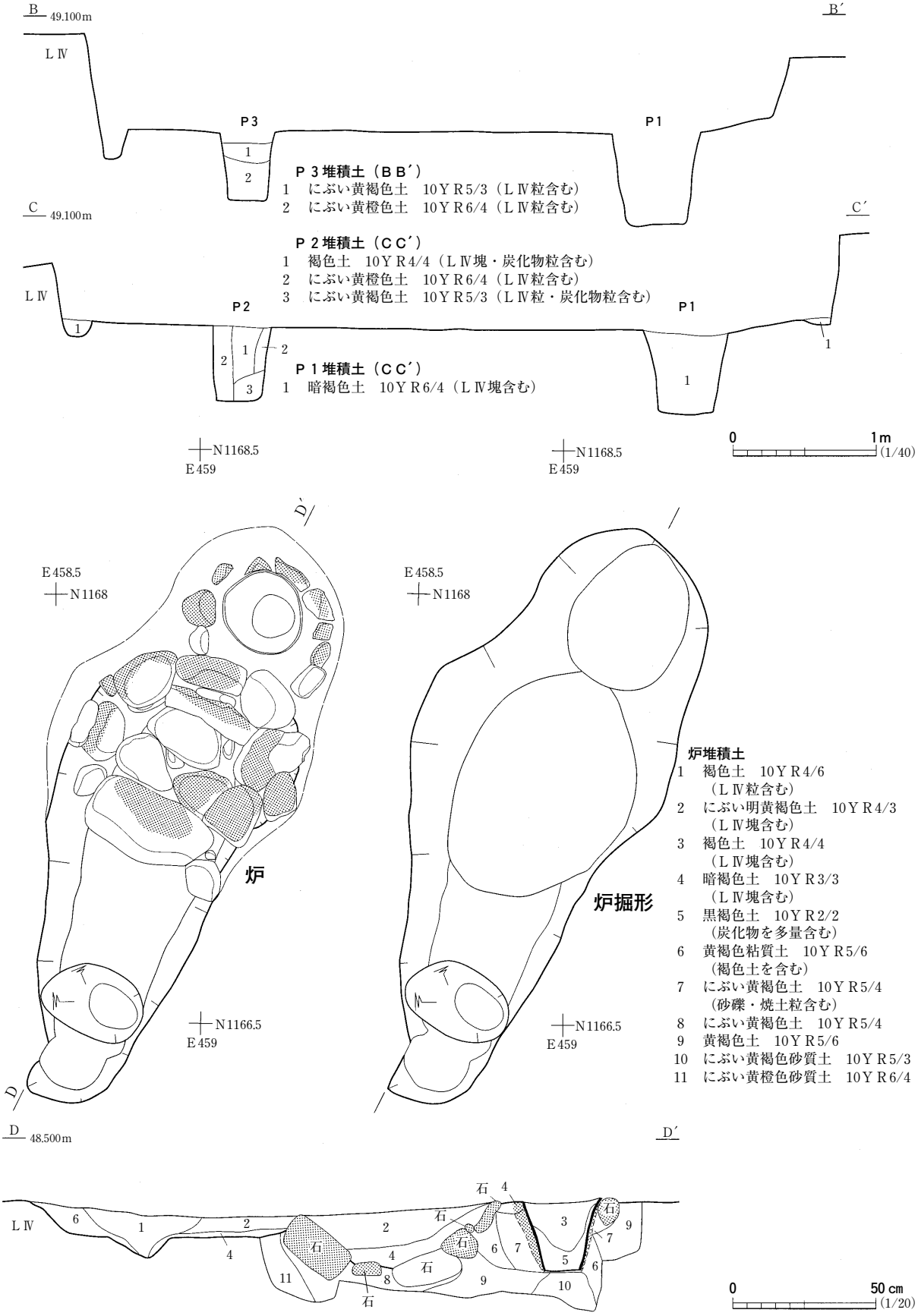

B 49.100m
B′
LⅣ
P3
P1
P３堆積土（ＢＢ′）
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3（ＬⅣ粒含む）
2　にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/4（ＬⅣ粒含む）
C 49.100m
C′
P２堆積土（ＣＣ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊・炭化物粒含む）
2　にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/4（ＬⅣ粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
P2
P1
P１堆積土（ＣＣ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ6/4（ＬⅣ塊含む）
N1168.5
E459
0　1m
(1/40)
D′
E458.5
N1168
炉
N1166.5
E459
D
炉掘形
炉堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
2　にぶい明黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ塊含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ塊含む）
5　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物を多量含む）
6　黄褐色粘質土　10ＹＲ5/6（褐色土を含む）
7　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（砂礫・焼土粒含む）
8　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4
9　黄褐色土　10ＹＲ5/6
10　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ5/3
11　にぶい黄橙色砂質土　10ＹＲ6/4
D 48.500m
D′
石
0　50cm
(1/20)

図13　31号住居跡（２）

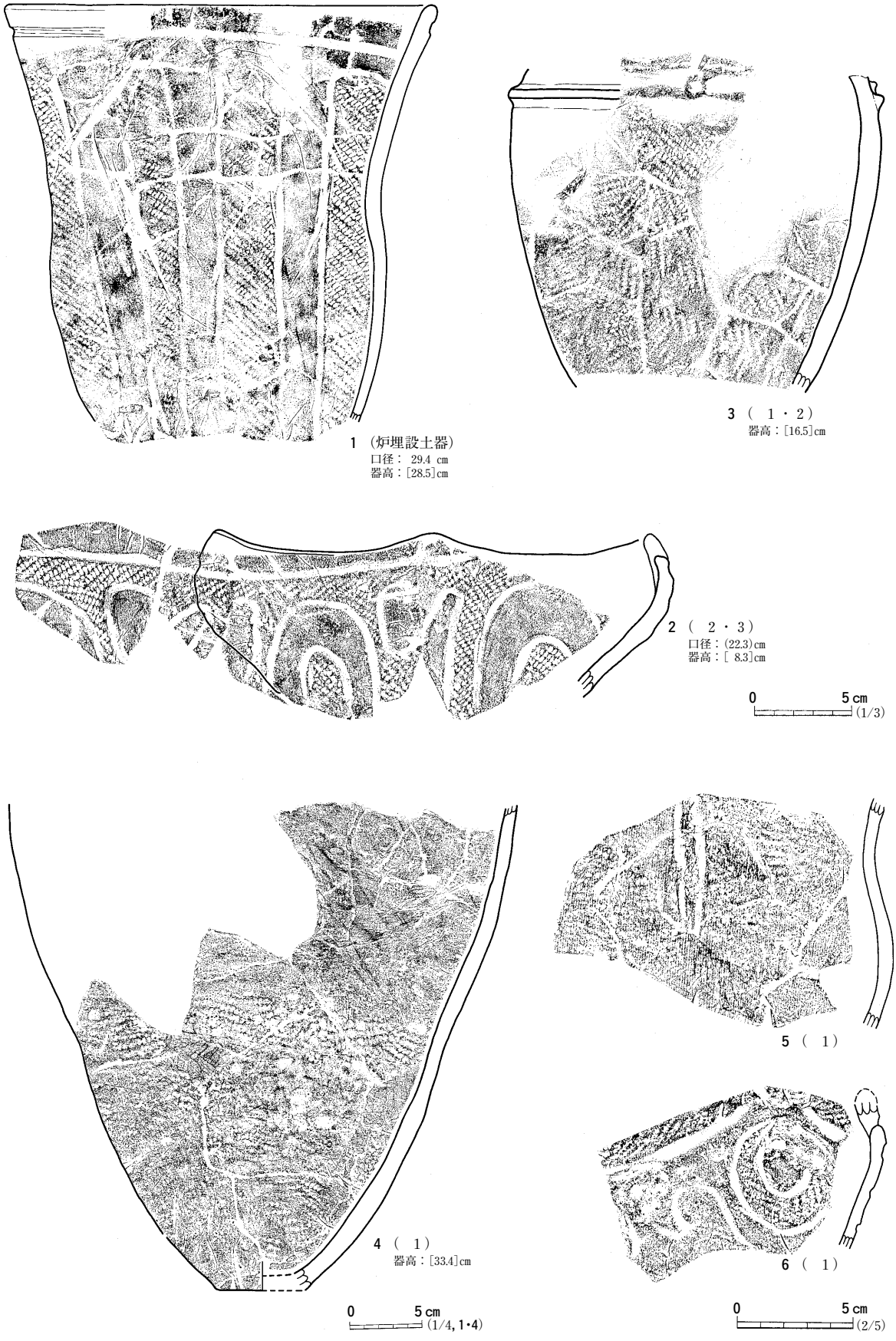


図14　31号住居跡出土遺物（１）

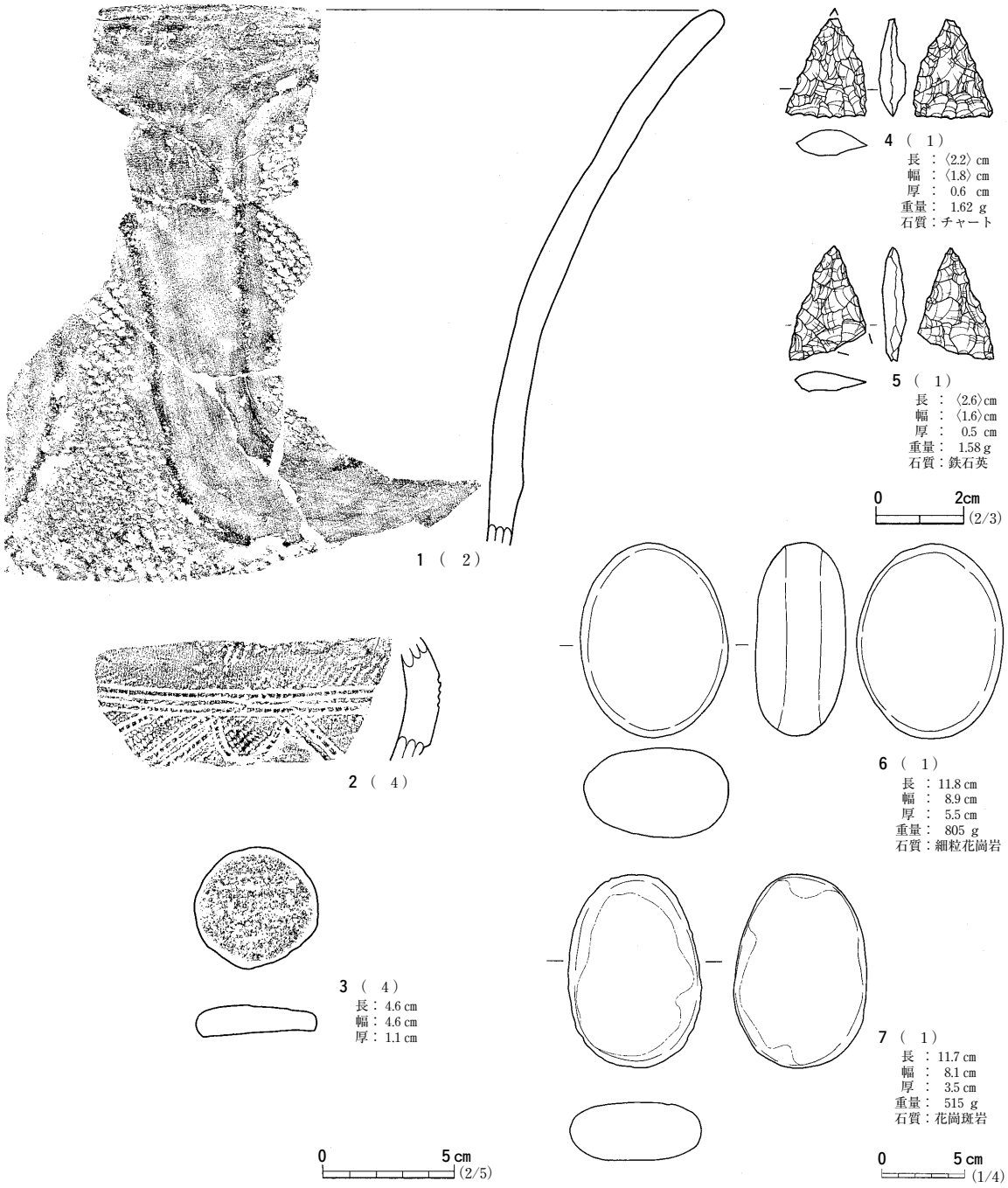


図15　31号住居跡出土遺物（２）

図14－１は炉埋設土器である。口縁部の一部と底部を欠損する。沈線を境として縄文を充填している。また，口縁部付近には沈線を巡らしている。文様の特徴から大木９式を考えている。

図14－２はℓ２・３から出土した深鉢で，口縁部付近のものが遺存する。口縁部は波状をなし，口縁部から胴部までの形状はいわゆるキャリパー状をなしている。文様は逆「U」字状をなし，沈線に区画された部分に縄文を充填するものと，縄文がなされないものとに分かれる。また，口縁部には一条の沈線が巡っている。胎土には砂粒が比較的多く含まれていた。

図14－３はℓ１から出土した深鉢の胴部破片である。縄文は斜め方向に施され，上部から中程に

かけて隆帯が巡り，ボタン状の浮文がなされる。後期前葉のものであろう。

図15－７の器形は口縁部が外反する。文様構成は１と同じであるが７の方が，無文帯の幅が広いようである。

図15－２には押引文がなされている。大木６式に属するもので，前期末葉にあたる。図15－３は土製円盤である。図15－４・５は無茎式の石鏃で，４の基部の一部が欠損している。図15－６・７は磨石である。

ま　と　め

住居跡は複式炉を有するもので，時期は大木９式に属し縄文時代中期後葉にあたる。主柱穴は３本で構成され，一部には柱の据え替えがなされている。（吉　野）

32号住居跡　ＳＩ32

遺　　構（図16・17，写真５・17・18）

住居跡は南区の北東部ＡＧ48・49，ＡＨ48・49グリッドに位置し，検出層位はＬⅣである。周囲には31・33～35・38・39・71・141号住居跡など，８軒の住居跡が近接または重複して造られていた。重複する遺構は33号住居跡と147号土坑である。住居跡の検出段階から重複する遺構の平面形が把握できたので，住居跡が古いと判断して調査を進めた。検出面を僅かに掘り下げたところで，床面を検出した。

住居跡の平面形は33号住居跡によって南東部が掘り込まれ遺存が悪いが，遺存している部分からみると，隅丸方形をなしていたのだろう。規模は現状で南北が４ｍで，壁高は８㎝ほどであった。

堆積土は２層に区分した。

床面は概ね平坦であった。住居施設は炉，主柱穴が３基，ピットが９基などである。主柱穴は本来４本あったと考えているが，33号住居跡が掘り込まれたことにより，主柱穴の１本が欠損してしまったのだろう。Ｐ１～３からは，柱痕を確認することができなかった。Ｐ１とＰ２の中点と炉の主軸が一致するようである。主柱穴の平面形は不整形で，長軸が30～45㎝，深さが40～55㎝である。ピットのなかでＰ４は，Ｐ１とＰ３を結んだ線上にあり，炉の土器埋設部と並行する位置にあるので，補助的な柱穴と考えている。

炉は住居跡の南半部にあり，土器埋設部・石囲部で構成されている複式炉である。炉の末端は147号土坑によって掘り込まれていたので，前庭部があったかどうかは不明である。長軸は北東を向き，全長は土器埋設部から石囲部が遺存しているところまでが65㎝，幅は石囲部の内壁で25㎝である。土器埋設部には１個の深鉢が埋設されていたが，その周りにはかく乱があり「Ｕ」字状に縁石が配されていたがあまり残りが良くはない。縁石は板状礫と円礫を立てて据えていた。縁石の上端と埋設土器の上端は５㎝程度の差があり，縁石よりも埋設土器は低く造られていたようである。

石組部は奥壁に幅の広い板状礫を１個配し，緩やかに立ち上がっている。側壁は板状礫と円礫を積上げ，急角度で立ち上がる。底面には比較的小振りの板状礫が敷かれ，隙間に小円礫を詰めてい

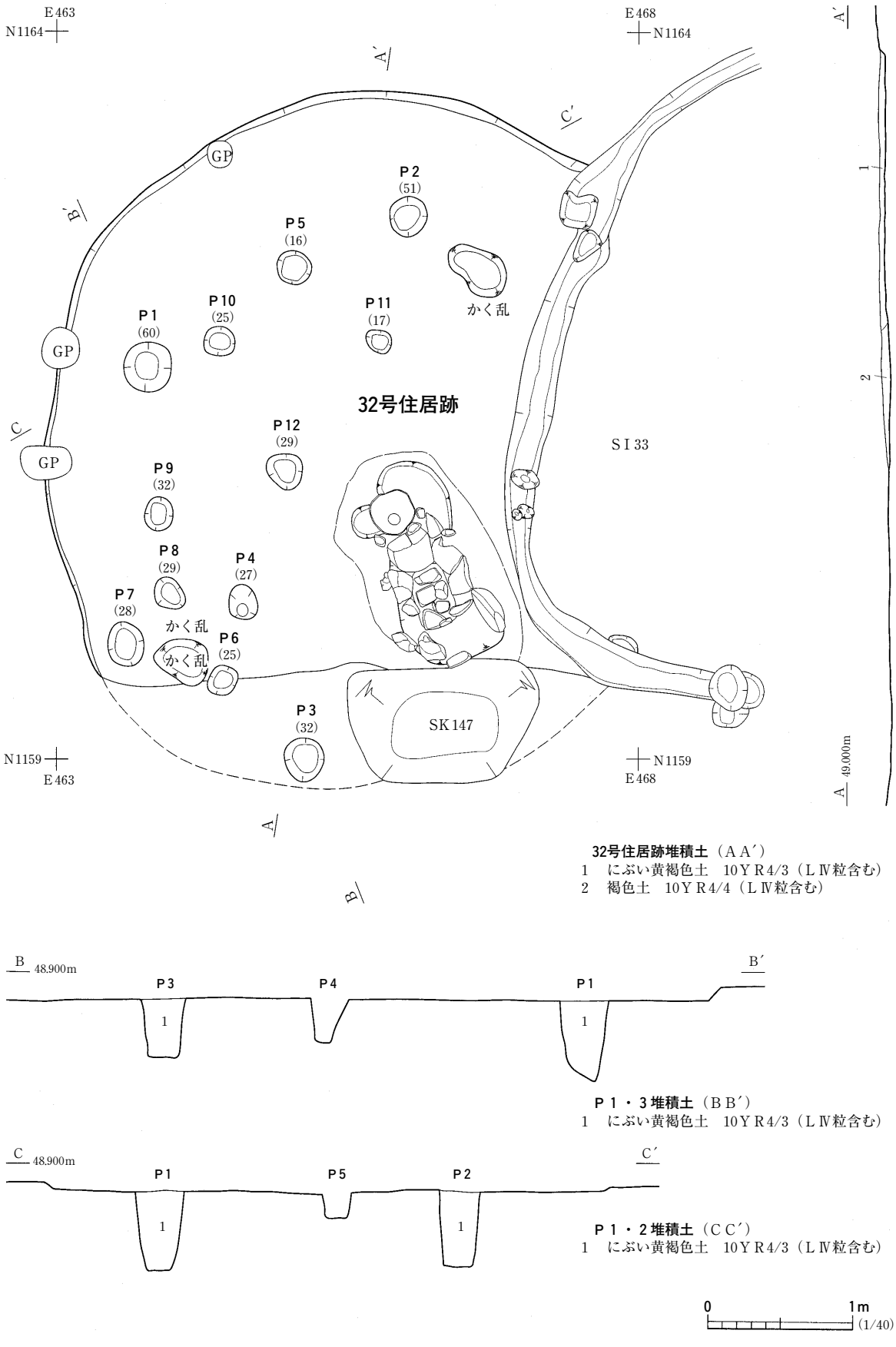

E463
N1164
E468
N1164
A
A′
B
B′
C
C′
GP
P1
(60)
P2
(51)
P3
(32)
P4
(27)
P5
(16)
P6
(25)
P7
(28)
P8
(29)
P9
(32)
P10
(25)
P11
(17)
P12
(29)
かく乱
かく乱
かく乱
32号住居跡
SI 33
SK147
N1159
E463
N1159
E468
49.000m
1
2
32号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）
48.900m
P1・３堆積土（ＢＢ′）
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
48.900m
P1・２堆積土（ＣＣ′）
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
0
1m
(1/40)

図16　32号住居跡（１）

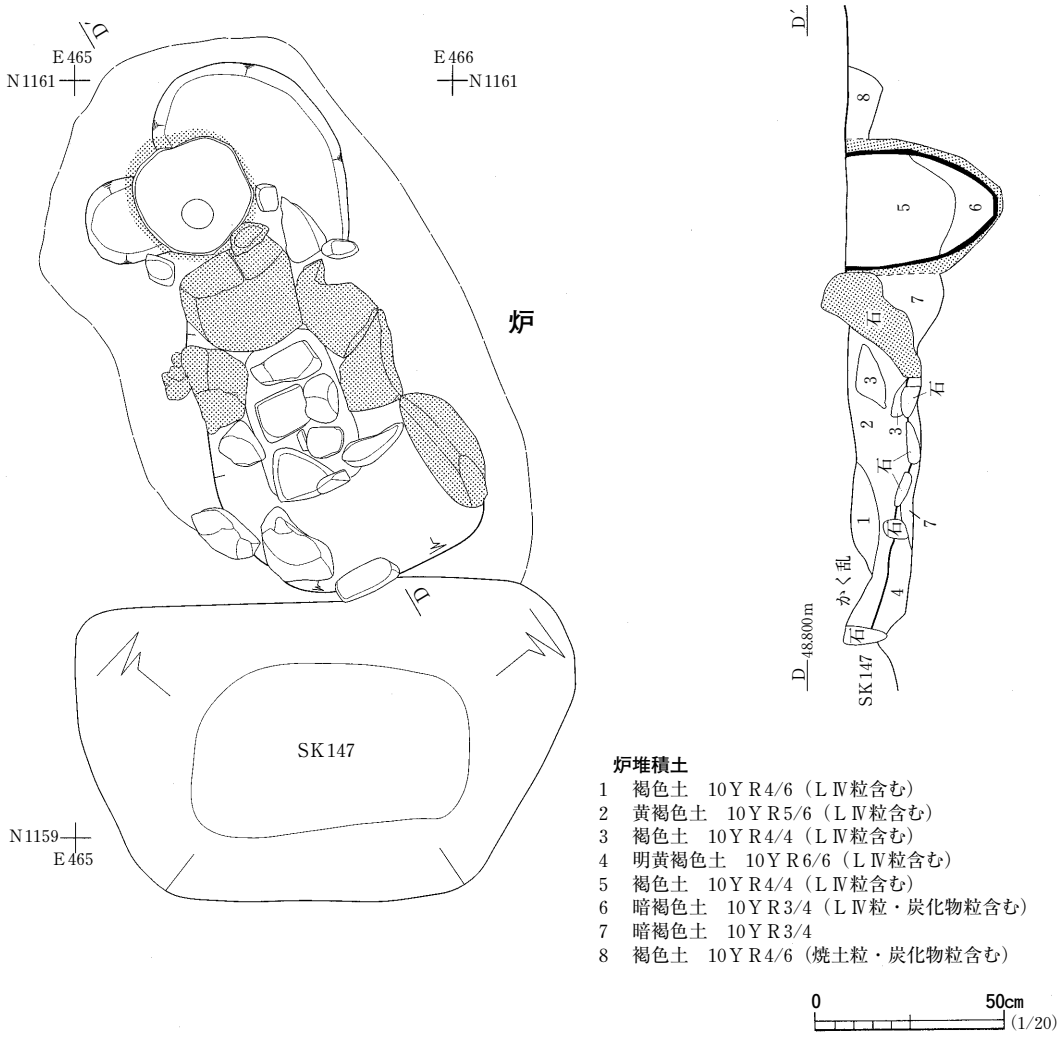


図17　32号住居跡（２）

た。土器埋設部を断ち割ったところ，埋設土器は底部までが遺存し，炭化物層は５㎝程度の厚さであった。

遺　　物（図18，写真215）

図18－１は炉埋設土器で，粗製の深鉢である。口縁部が欠損し，85%の遺存である。施文は縄文のみである。器形は胴部中程から底部に向かうにつれてつぼまる。胎土には小石・砂粒が多く含まれている。図18－２は床面から出土した凹石である。

ま　と　め

住居跡は複式炉を有するもので，時期は明確ではないが33号住居跡の時期から，大木９式に属し縄文時代中期後葉にあたる。　（吉　野）

33号住居跡　ＳＩ33

遺　　構（図19・20，写真５・19・20）

住居跡は南区の北東部ＡＨ48・49，ＡＩ48・49グリッドに位置し，検出層位はＬⅣである。周囲

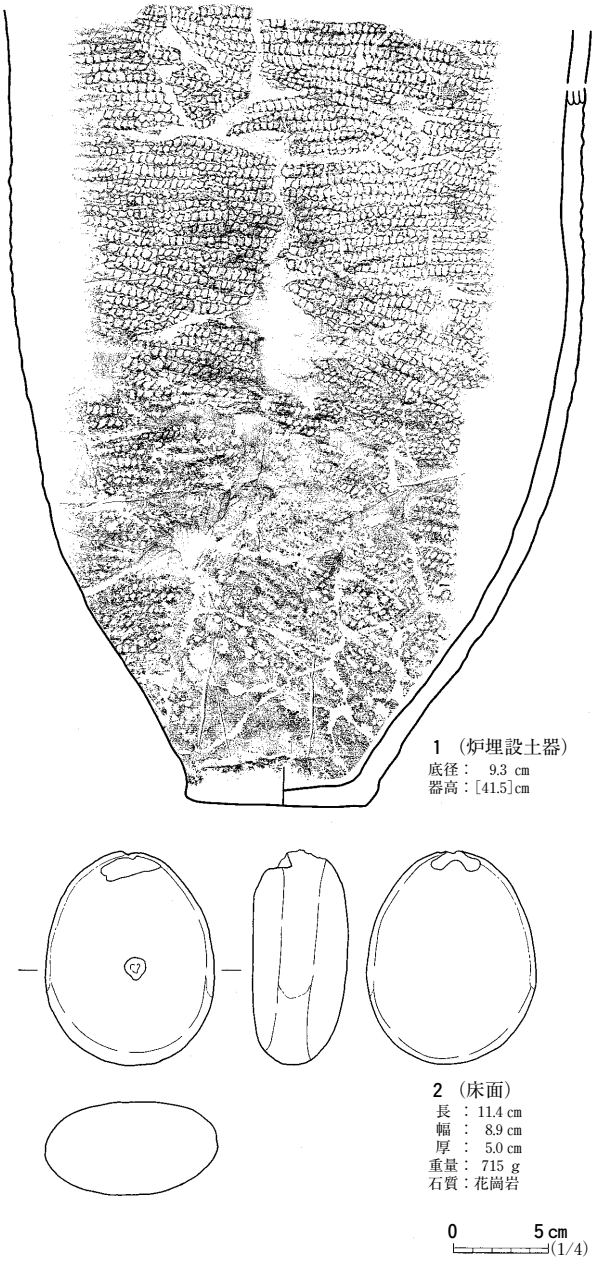


図18　32号住居跡出土遺物

には31・32・34・35・38・39・71・141号住居跡など，８軒の住居跡が近接または重複して造られていた。重複する遺構は32号住居跡である。本住居跡の検出段階で，平面形を明瞭に把握できたので，本住居跡よりも32号住居跡の方が古いと判断して調査を進めた。

住居跡の平面形は隅丸方形をなし，規模は南北で4.7m，東西が5.1mである。壁高は北壁が最も高く25cmほどで，周壁の立ち上がりは概ね直立気味である。

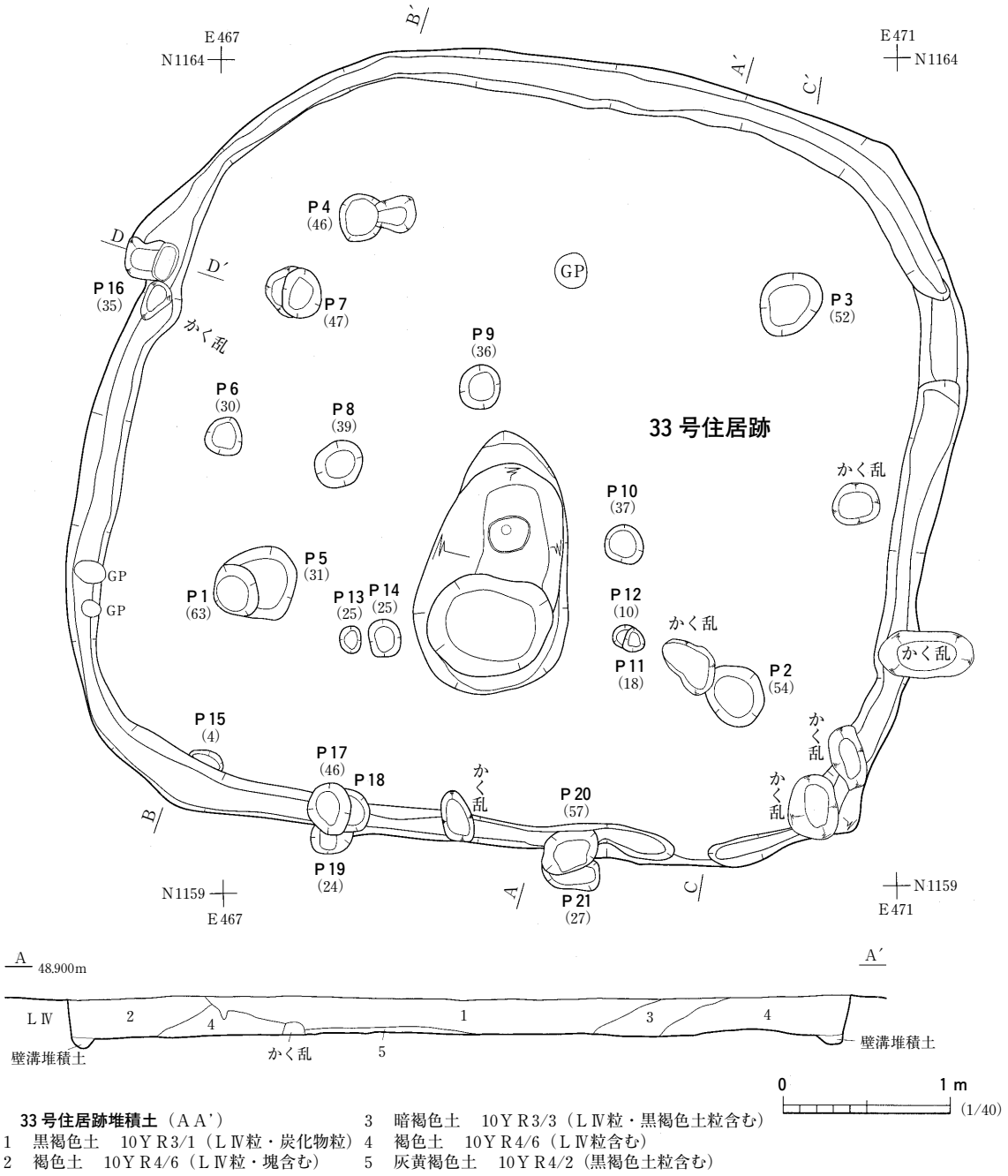
堆積土は５層に区分した。まずℓ５が堆積したのち，ℓ１～４が堆積している。床面は概ね平坦であった。

住居施設は炉，主柱穴が４基，ピットが16基，壁溝などである。壁溝は南壁の一部で途切れているものの，他は壁際を巡っている。壁溝の規模は幅が18～40cm，深さが５～25cmである。

主柱穴のＰ１～４からは，柱痕を確認することができなかった。Ｐ１・２とＰ３・４の中点を結んだ線が住居跡の主軸であり，真北に対して東側に傾いている。主柱穴の平面形は不整形で，長軸は28～40cm，深さが25～46cmである。主柱穴のうちＰ１とＰ５が重複し，Ｐ５の規模がＰ１と比べてかなり大きいので，Ｐ１・５については柱を据え替えたと考えている。

ピットは壁溝と重複するものや，床面に散在している。ピットのなかでは，Ｐ16は壁溝と重複し円礫が立て置かれていた。Ｐ17とＰ20は相対する位置にあり，一対になっていたと考えている。ともに平面形は不整形をなしていた。Ｐ17はＰ18・19と，Ｐ20はＰ21と重複しているので，柱の据え替えがなされていたのだろう。Ｐ８とＰ10は炉を挟んで相対する位置にある。さらに，Ｐ８はＰ17～19とＰ10とＰ20・21に対応するようである。

炉は住居跡の南半部から検出した。Ｐ１・２とＰ３・４を結んだ中点と炉の主軸がほぼ一致する。炉の全長は157cm，幅が91cmである。土器埋設部には１個の深鉢が埋設されているものの，石囲部に相当する部分には礫が全くなかった。掘形があることから，本来は礫が配されていたものが住居



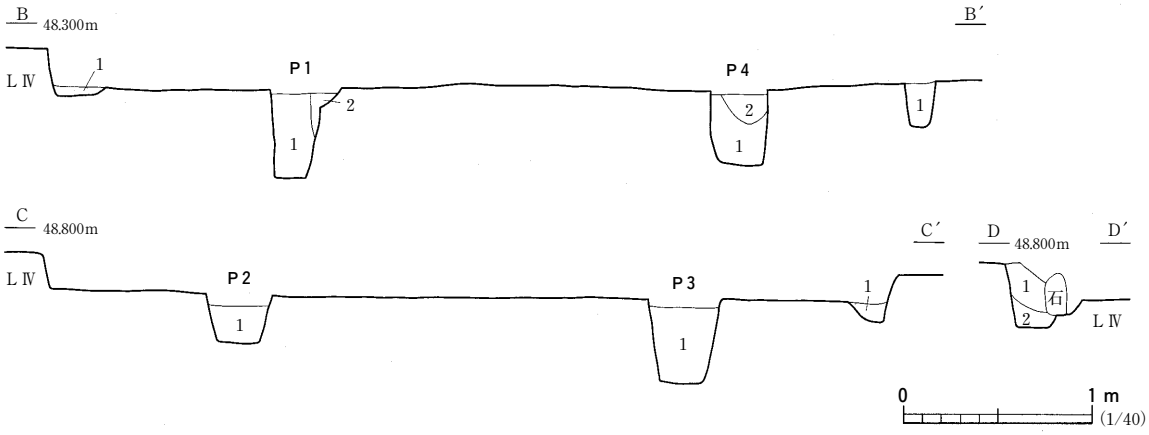
33 号住居跡堆積土（ＡＡ’）
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1（ＬⅣ粒・炭化物粒）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒・塊含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・黒褐色土粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
5　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（黒褐色土粒含む）

図19　33号住居跡（１）

の廃絶に際して礫を取り去ったものと考えている。土器埋設部を断ち割ったところ，埋設土器内の炭化物層は７cmほどであった。

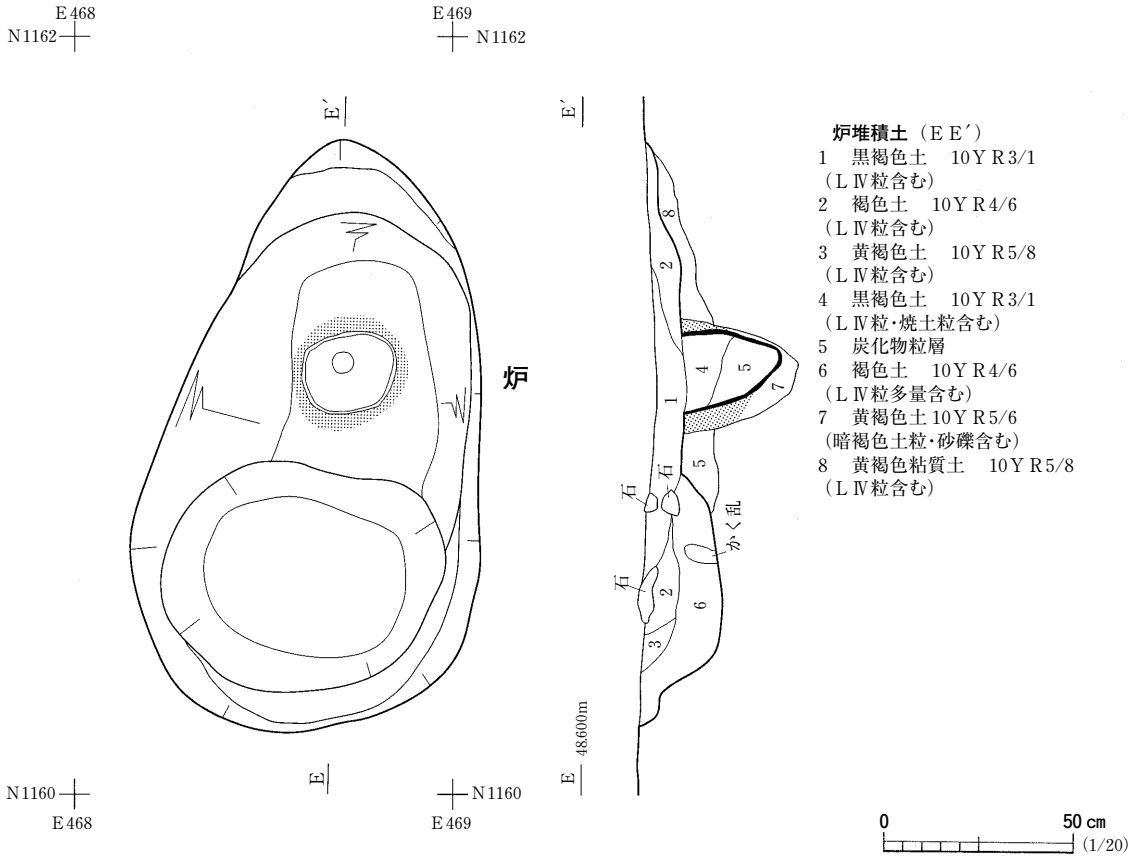
遺　　物（図21，写真215）

図21－１は炉埋設土器で，深鉢である。口縁部が欠損し，約70%の遺存である。この土器は底部が平坦ではなく，地中に埋め込まないと置けない。文様は沈線による区画を設け，沈線で区画されたなかに縄文を充填している。沈線で挟まれた文様は「H」字状をなしている。器形は口縁部に向かうにつれて外反する。胎土には小石・砂粒が多く含まれている。



壁溝堆積土（ＢＢ′）
1　にぶい黄褐色土 10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
Ｐ1 堆積土（ＢＢ′）
1　にぶい黄褐色土 10ＹＲ4/3（ＬⅣ塊含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊含む）

Ｐ4 堆積土（ＢＢ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅣ粒・褐色土粒含む）
Ｐ2・3 堆積土（ＣＣ′）
1　にぶい黄褐色土 10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒多量含む）
壁溝堆積土（ＤＤ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
2　にぶい黄褐色土 10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）



炉堆積土（ＥＥ′）
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1
（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6
（ＬⅣ粒含む）
3　黄褐色土　10ＹＲ5/8
（ＬⅣ粒含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ3/1
（ＬⅣ粒・焼土粒含む）
5　炭化物粒層
6　褐色土　10ＹＲ4/6
（ＬⅣ粒多量含む）
7　黄褐色土 10ＹＲ5/6
（暗褐色土粒・砂礫含む）
8　黄褐色粘質土　10ＹＲ5/8
（ＬⅣ粒含む）

図20　33号住居跡（２）

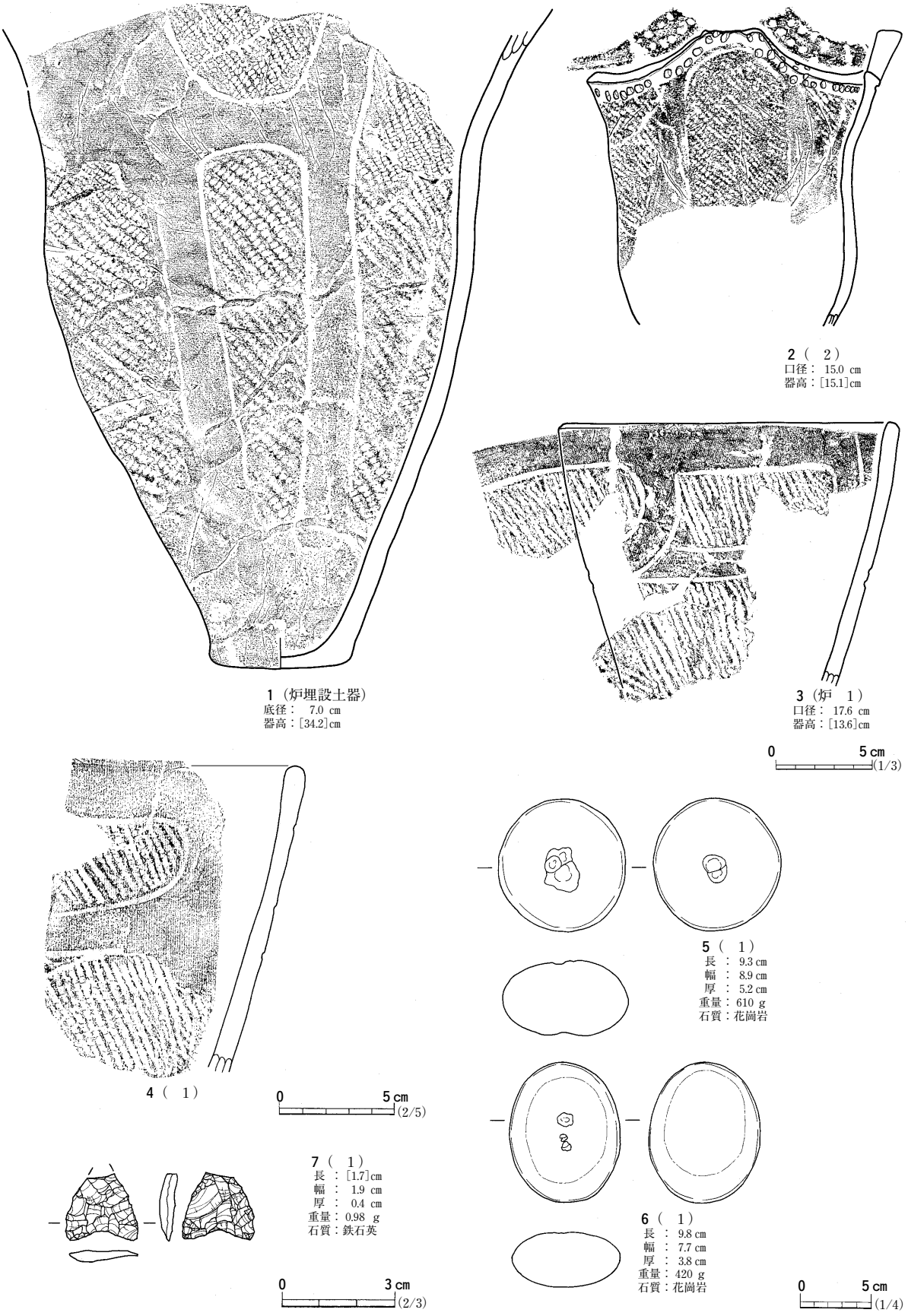


図21　33号住居跡出土遺物

図21－２はℓ２から出土した，小型の深鉢である。底部が欠損し，約80%の遺存である。口縁部は波状をなし，外面には刺突文が１列もしくは２列にわたってなされている。文様は沈線を区画して縄文を充填する部分と，縄文がなされていないところがある。胎土には砂粒を多く含んでいた。

図21－３は炉の堆積土ℓ１から出土した深鉢である。文様は沈線を区画して縄文を充填する部分と，縄文がなされていないところがある。縄文がなされていないところでは，横方向に「Ｃ」字状を展開する。縄文は原体を縦にし文様は沈線を区画して縄文を充填する部分と，縄文がなされていないところがあり，横に回転させて施されている。内面にはコゲ状の付着物が認められた。図21－４は深鉢で３の文様構成が類似している。

図21－５・６は凹石で，図21－７は無茎式の石鏃で先端部が欠損している。

ま　と　め

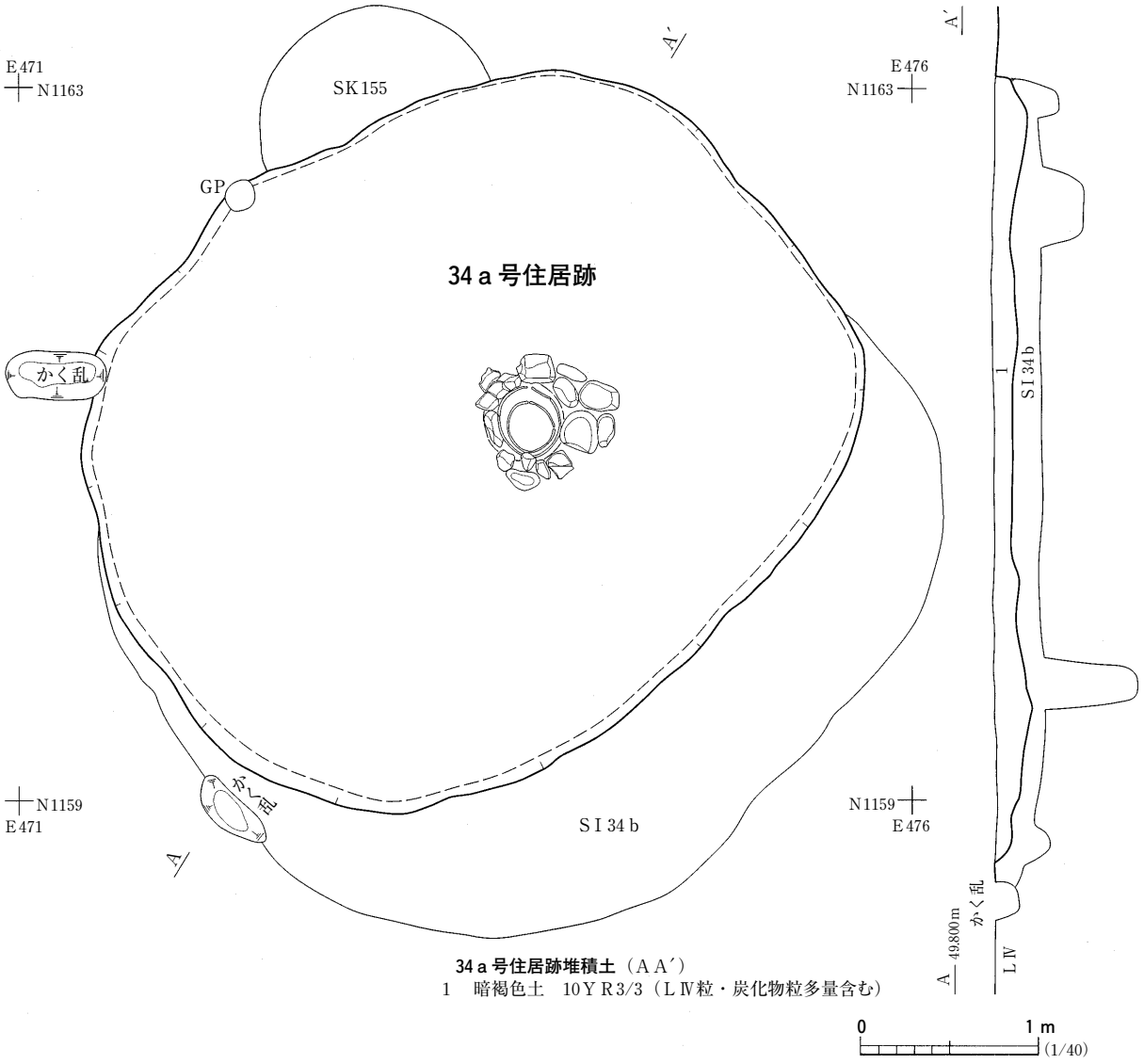
住居跡は複式炉を有するものである。時期は埋設土器が大木９式に属することから，縄文時代中期後葉にあたる。主柱穴は４本で構成され，一部には柱の据え替えがなされていた。炉は礫がすべて取り去られていた。　（吉　野）

34ａ号住居跡　ＳＩ34ａ

遺　　構（図22，写真５・21～24）

本遺構は南区北東側の平坦地に存在し，ＡＩ48～49・ＡＪ48～49グリッドに位置する。周囲には33・35・39号住居跡が近接する。黄褐色土（ＬⅣ）上面で暗褐色の楕円形の落ち込みを検出し，その落ち込みに合わせて南北方向に土層観察用のベルトを設けた。ベルトを観察すると北部の暗褐色土は底面が波打ち，住居跡壁の立ち上がりに切られるように堆積しているため，浅いかく乱と考えた。そのため遺構の平面形は検出段階より一回り小さい隅丸長方形になることが判明し，ベルトの位置も遺構の長軸方向からずれた位置になってしまった。検出の目安となった暗褐色土を18～26㎝程掘り下げた時点で黄褐色土に達し本住居跡の床面と考えたが，その面より６㎝程高い位置に炉が検出された。そこで床面の異なる２軒の住居跡が重複するとわかり，この炉を伴う新しい方の住居跡を34ａ号住居跡，黄褐色土を床面とする古い方の住居跡を34ｂ号住居跡とした。残っていたベルトで確認すると，含有物とその含有量に若干の違いが認められ，当初単層と捉えていた暗褐色土が２層に細分できた。２層の内，上の層は黄褐色土粒と炭化物粒を多量含む暗褐色土で，下の層は黄褐色土粒を少量含む暗褐色土であった。34ａ号住居跡は床面と遺構内堆積土が近似する暗褐色土であり，そのため両者の判別が困難で床面を掘り下げすぎてしまった。遺構内堆積土は暗褐色土１層で，厚さは９～20㎝を測る。

遺構の平面形は北西辺，南東辺が長い隅丸長方形で，規模は長辺4.5ｍ，短辺3.6ｍを測る。長辺の北西壁，南東壁を主軸とすると，主軸方位は真北から東側に50°傾く。周壁はベルトで確認したのみであるが，南西部では50°程，北東部は80°程で立ち上がる。調査の不手際で床面を掘り下げすぎたため，確認できた住居内施設は炉１基のみである。炉は土器埋設石囲炉で，床面中央よりやや


E471
N1163
SK155
A′
E476
N1163
A′
GP
34 a 号住居跡
かく乱
1
SI 34 b
N1159
E471
かく乱
SI 34 b
N1159
E476
A
A
49.800m
かく乱
LⅣ
34 a 号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒多量含む）
0
1 m
(1/40)

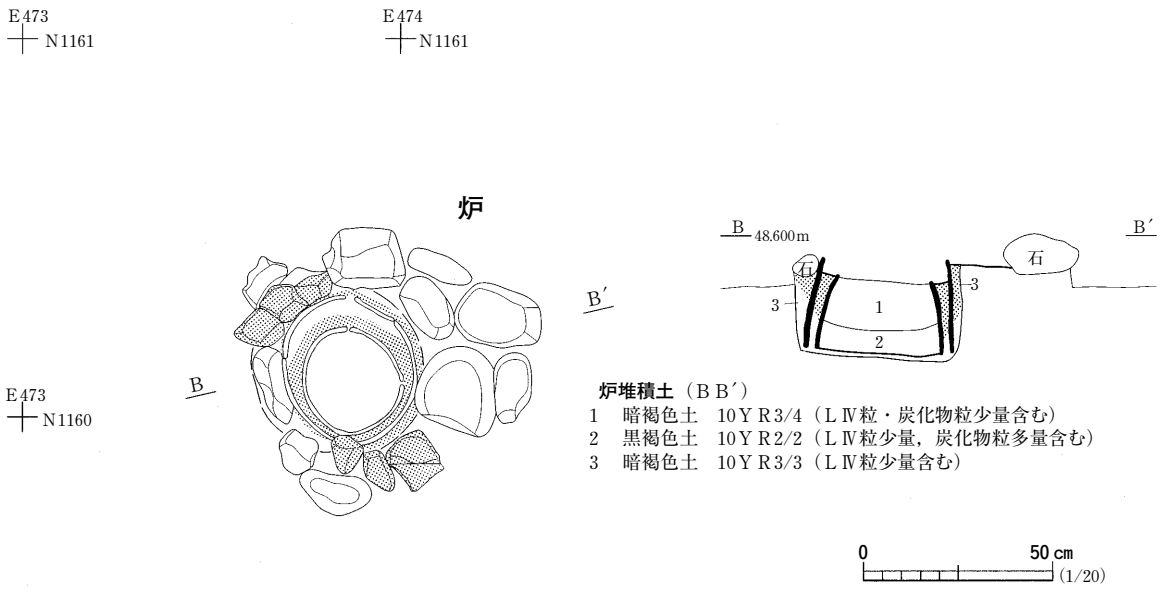

E473
N1161
E474
N1161
炉
B
B′
B
48.600m
B′
石
石
3
3
1
2
E473
N1160
炉堆積土（ＢＢ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/2（ＬⅣ粒少量，炭化物粒多量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量含む）
0
50 cm
(1/20)

図22　34 a 号住居跡

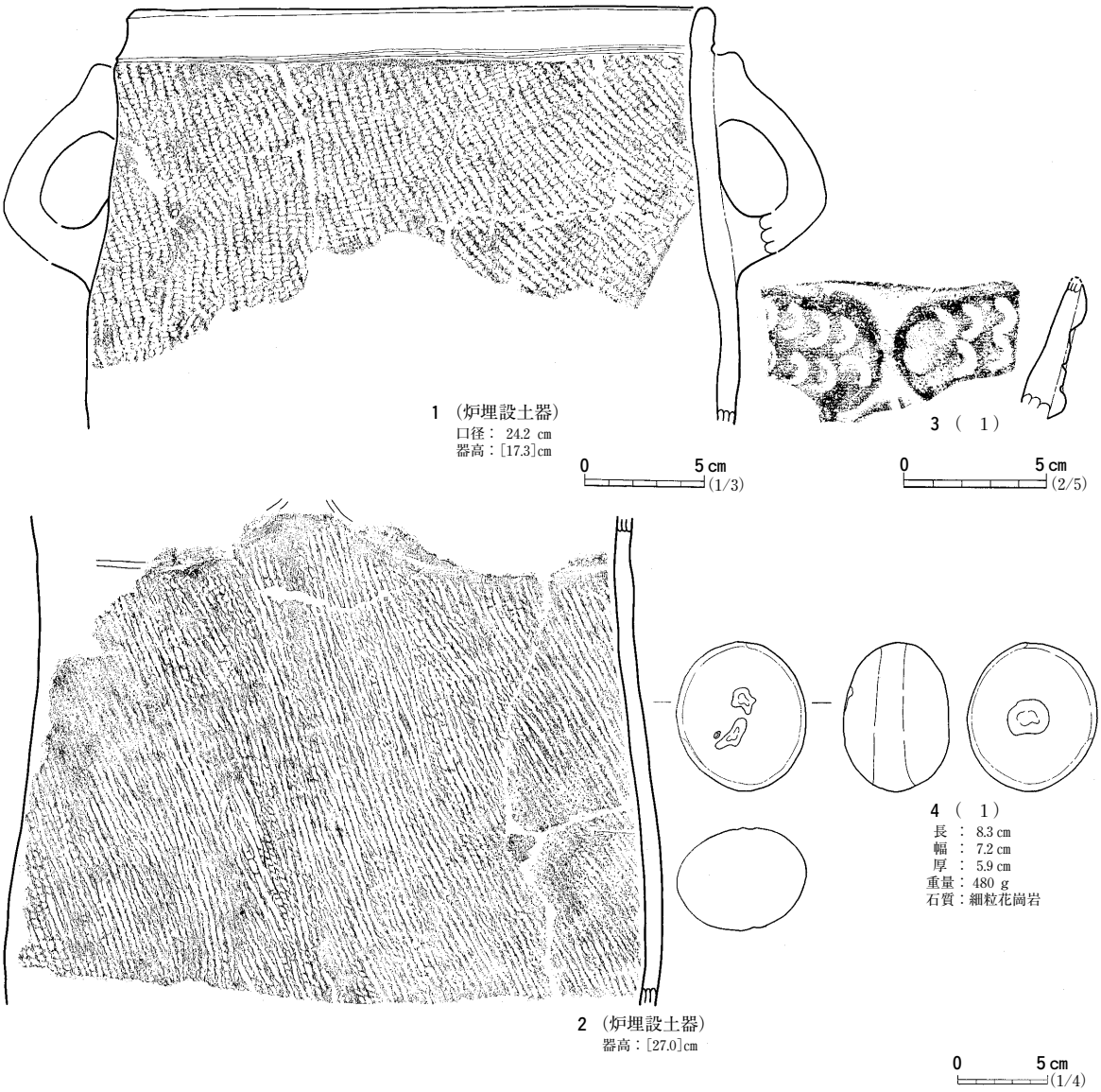


図23　34ａ号住居跡出土遺物

東側に位置する。炉を断ち割って堆積土を確認したところ，埋設土器と縁石の掘形を掘った後，埋設土器を据えて礫を固定したことがわかる。土器埋設部の掘形は直径44cmの円形で，床面からの深さは26cmを測る。この掘形に深鉢を２個体分，入れ子状に据えていた。内側の土器は倒位，外側の土器は正位に据えられている。深鉢はいずれも下半部を切り取られていた。内側の深鉢（１号埋設土器）は最大径27cm，器高17.3cm，外側の深鉢（２号埋設土器）の最大径35.8cm，器高27cmを測る。埋設土器２個体の間の堆積土と，掘形内堆積土が類似することから，同時期に据えられていたと考えられる。埋設土器の北西には拳大の礫を一重に巡らせ，さらに北西隅と南西隅に礫を１個据えて，炉の南西辺と南東辺，南西辺と北西辺とがそれぞれ直行するよう配置している。炉の南東側には，人頭大の礫が東に張り出す台形状に配置されている。北辺を炉の主軸方位とすると，真北から東側に70°程傾く。炉の礫は多くが火熱を受け赤く変色したり，脆くなっている。埋設土器周辺の土は焼土化していて，内側の埋設土器周辺には土器の上端から幅最大３cm，深さ最大11cmに，外側の埋設

土器周辺には土器の上端から幅最大１㎝，深さ最大４㎝に焼土化範囲が認められた。炉内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒と炭化物粒を含む暗褐色土で，遺構内堆積土ℓ１に相当すると考えられる。ℓ２は炭化物を多く含む黒褐色土で，埋設土器周囲の土が焼土化する部分まで堆積していた。そのため，炉の機能時にはℓ２が堆積していたと推測される。ℓ３は黄褐色土粒を含む暗褐色土で，炉掘形埋土である。

遺　　物（図23，写真216）

遺物は縄文土器片73点，石器類２点が出土した。図23－１は１号埋設土器で，下半部を切り取って使用した深鉢である。体部上位でややくびれ，口縁部はほぼ直立する。口縁部に沿って沈線が施され，口縁部の無文帯と体部の縄文を区画している。体部にはＬＲ縄文を横位と斜位に回転施文している。体部上位には，橋状把手が２単位付けられている。把手は橋脚部のほとんどを欠失し，遺存するのは付け根付近だけである。橋脚をつけた後，橋脚部の中と外に縄文を施文している。口縁部外面にはヨコミガキ，内面にはミガキを施している。

２は２号埋設土器で，口縁部と下半部を取り除いて使用した深鉢である。体部は緩やかに内湾し，上位でややくびれる。体部に縄文を縦位に回転させた後，体部上位に口縁部に向かって延びる波状の沈線を施している。

３はℓ１から出土した深鉢で，粘土帯を波状口縁の口縁部に「Ｘ」状に貼付し，半裁竹管の先端で２段に刺突列を施している。以上の土器の内，１・２は縄文時代中期末葉から後期初頭の土器と考えられる。

４はℓ１から出土した細粒花崗岩製の磨石・凹石である。側縁が磨耗し，両面に窪みが認められる。

ま　と　め

本遺構は，4.5×3.6ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡である。調査の不手際で床面を下げすぎたため，確認できた付属施設は石囲炉のみである。時期は出土土器より，縄文時代中期末葉から後期初頭と考えられる。（坂　田）

34ｂ号住居跡　ＳＩ34ｂ

遺　　構（図24・25，写真５・25～28）

本遺構は南区北東部の平坦面に存在し，ＡＩ48～49・ＡＪ48～49グリッドに位置する。ＳＫ152・155と重複し，本遺構の方が新しい。黄褐色土（ＬⅣ）上面で隅丸方形の落ち込みを検出したが，掘り込みの段階で床面の異なる２軒の住居跡が重複すると判明した。さらに遺構検出の目安となった暗褐色土の下に堆積しているにぶい黄褐色土が東側にさらに分布し，当初検出した規模より東側に一回り大きくなった。遺構内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を少量含む暗褐色土で，ℓ２は黄褐色土粒と炭化物粒を含むにぶい黄褐色土である。ℓ１は北～西～南壁沿いに，ℓ２は東壁から南壁沿いに流れ込むように堆積している。ℓ３は黄褐色土粒を多く含む暗褐色土で，壁溝内に堆積している。ℓ１・２に人為堆積の痕跡は認められなかったため，共に自然堆積土と考え

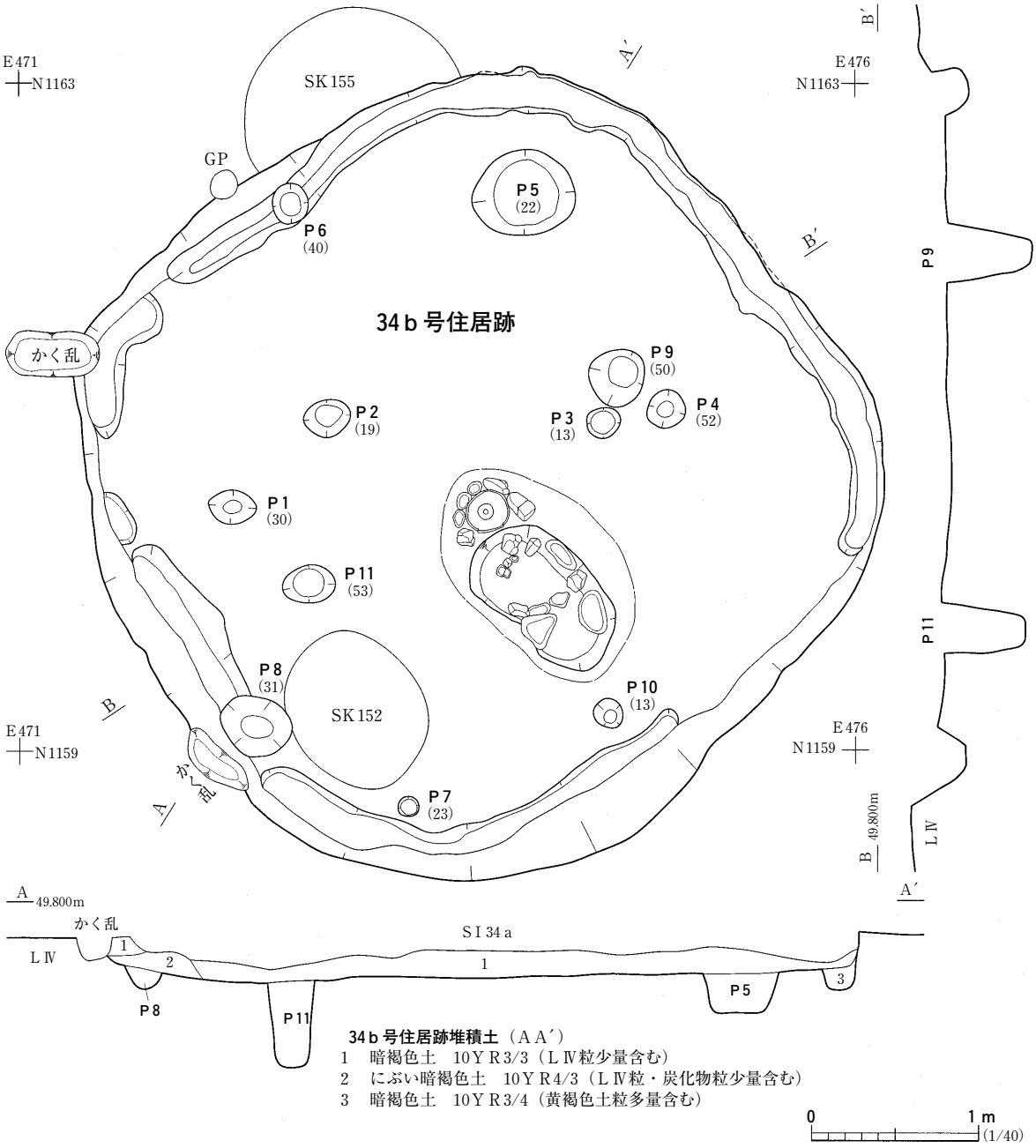


図24　34ｂ号住居跡（１）

られる。

平面形は一辺4.4～4.5m程の隅丸方形で，北東壁・南西壁方向を主軸方位とすると真北から40°程西側に傾く。確認面からの深さは16～26cmを測り，周壁は80°程の角度でほぼ直線的に立ち上がる。床面は黄褐色土を掘り込んでほぼ平坦に造り出されている。床面に踏み締まりは確認できなかったが，周壁際付近を除いた床面全域に暗褐色土塊が混入しており，この範囲内が頻繁に使用されたと推測される。

住居内施設は炉跡１基，壁溝，ピット11基（その内主柱穴３基）が検出された。炉の構造は複式炉で，土器埋設部，石組部より成る。床面の南東部に位置し，炉と住居跡の主軸方位は一致する。

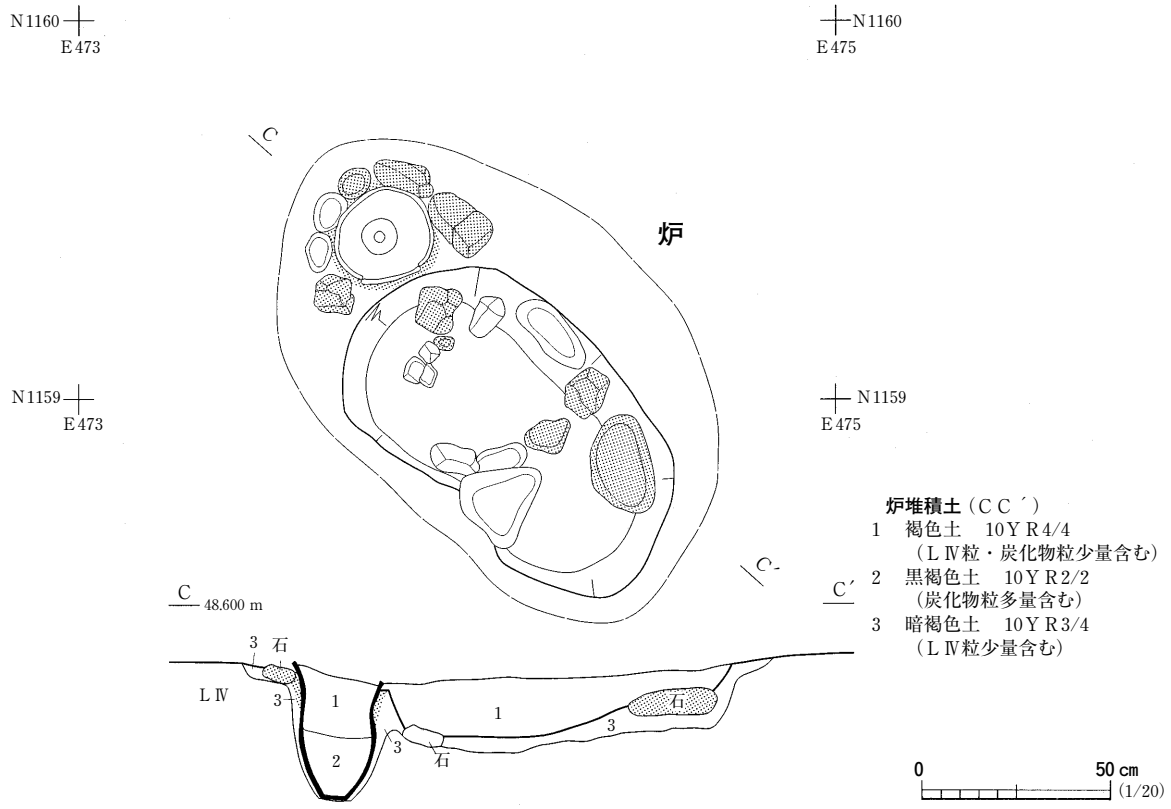


図25　34ｂ号住居跡（２）

壁溝は南東部を除いて周壁際をほぼ全周する。ピットは黄褐色土まで掘り下げた段階で検出した。これらのピットには，重複する34ａ号住居跡の調査の不手際で，床面を掘り下げ過ぎて検出できなかった34ａ号住居跡に伴うピットが含まれる可能性がある。そこで34ａ号住居跡の範囲下より検出したＰ１～６・９・11について，位置関係や規模から34ａ，34ｂ号のどちらの住居跡に伴うピットかを検討した。これらのピットの内，本住居跡に確実に伴うと考えられるのはＰ６・９・11である。Ｐ９とＰ11を結ぶ線は，炉の主軸線と炉北東端から約５cm離れた位置で直交し，その交点からの距離は共に1.1ｍを測る。また長径30～34cmの楕円形で，深さ50～53cmと規模もほぼ同様であるため本住居跡に伴う柱穴と考えた。Ｐ４はＰ９に近接し，規模も同様であるため柱の据え替えが行われた可能性も考えられるが，反対側の対応する位置に柱穴が検出されず，その可能性は低い。Ｐ６は北東部の壁溝内に検出され，平面形は直径24cmの円形で，床面からの深さは40cmを測る。炉の主軸線上に位置するので本住居跡に伴う柱穴と考えられる。Ｐ１～５については位置関係や規模からは判別がつかなかった。Ｐ１・２は床面北西部にあり，平面形は長径38cmの楕円形で，深さは19～30cmを測る。Ｐ３はＰ９の南東側に近接し，平面形は長径20cmの楕円形で，深さは13cmを測る。Ｐ５は床面北部に位置し，平面形は直径64cmの円形で，深さ22cmを測る。Ｐ１～３・６・９・11内には黄褐色土を含む暗褐色土，Ｐ４内には明るい色調の暗褐色土，Ｐ５内には黄褐色土粒を含むにぶい黄褐色土が堆積している。Ｐ７・８・10は床面南部に位置し，黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ７・10は長径12～18cmの楕円形で，深さ13～23cmを測る。Ｐ８は直径43cmの円形で，深さ

は31cmを測る。

検出されたピットの内，本住居跡の主柱穴と考えられるのはＰ９・11である。またＰ６も炉の主軸線上にあり，Ｐ９・11と規模が同程度であることから，本住居跡の主柱穴と推測される。Ｐ６・９・11に柱痕は認められないので，柱穴掘形と考えられる。

南西側の壁溝は，幅26～54cm，床面からの深さ２～13cmと広く浅く，長さも0.36～2.7ｍと断続的である。北東側の壁溝は長さ6.2m，幅18～24cm，床面からの深さ13～21cmを測る。壁溝の途切れる南東部は出入口の可能性も考えられるが，出入口の上屋を支えたと考えられる柱穴や踏み締まりが確認できなかったため不明である。壁溝内には黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積しており，廃棄時には埋められた状態であったと考えられる。

炉の平面形は，長径132cm，短径55cmの楕円形である。床面を検出した段階で，前庭部があると考えられる石組部南東部には黄褐色土を検出している。そのため前庭部は当初から設けられなかったのであろう。炉の掘形は，実際の炉より一回り大きい長径145cm，短径90cmの楕円形で，深さは約８cmである。さらに土器埋設部を直径27cm，床面からの深さ70cmの円形に，石組部を長径99cm，短径55cm，床面からの深さ最大26cmの楕円形に深く掘り下げている。埋設土器には口径26.8cm，底径9.6cm，器高40.9cmのほぼ完形の深鉢が用いられる。深鉢の底部には焼成後穿孔が認められた。円形の掘形に土器を正位に据え，褐色土を充填して固定している。埋設土器の周囲には，口縁部を保護するように拳大から掌大の礫を一重に巡らし据えている。石組部には拳大から人頭大の礫が敷かれている。石組部の遺存状態は悪く，礫の殆どは住居跡の廃棄時に抜き取られたと推測される。また土器埋設部と石組部のほとんどの礫は熱を受けて赤く変色したり，脆くなっている。炉内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を含む褐色土で，遺構内堆積土ℓ２に相当すると思われる。ℓ２は炭化物を多く含む黒褐色土で，埋設土器内に堆積している。ℓ３は暗褐色土で，炉の掘形埋土である。埋設土器周囲の土は焼土化していて，口縁部から幅最大３cm，深さ最大11cmに焼土化範囲が認められる。そのため，炉の機能時には焼土化範囲の認められる埋設土器の口縁部から深さ最大11cmの位置まで堆積物があったと推測される。ℓ２は口縁部から約26cmまで堆積しているので，焼土化範囲の認められるまでの15cm間には灰のような腐りやすいものが堆積していて，後に腐食し消失したと考えられる。

遺　　物（図26，写真216・229・232）

遺物は縄文土器151点，石器類25点が出土した。図26－１は炉埋設土器の深鉢で，胎土に長石・石英・金雲母を含む。体部下半から外傾しながら立ち上がり，体部中位で最大径を持つ。体部上位でややくびれた後，口縁部が緩やかに外反する。口縁部は緩やかな波状口縁である。器面外面にＬＲ縄文を縦位と斜位に回転した後，口縁部から体部上半にかけて稜線で区画して文様を施し，中を磨り消している。その結果，稜線区画の縄文帯で楕円形や「Ｊ」字状の文様が描き出されている。器面は内外面共にナデが施されている。無文帯には，中に刺突を施した楕円形のモチーフが充填されている。底部は焼成後に内面から3.5×3.0cm程の楕円形に穿孔を行っている。２はℓ１から出土

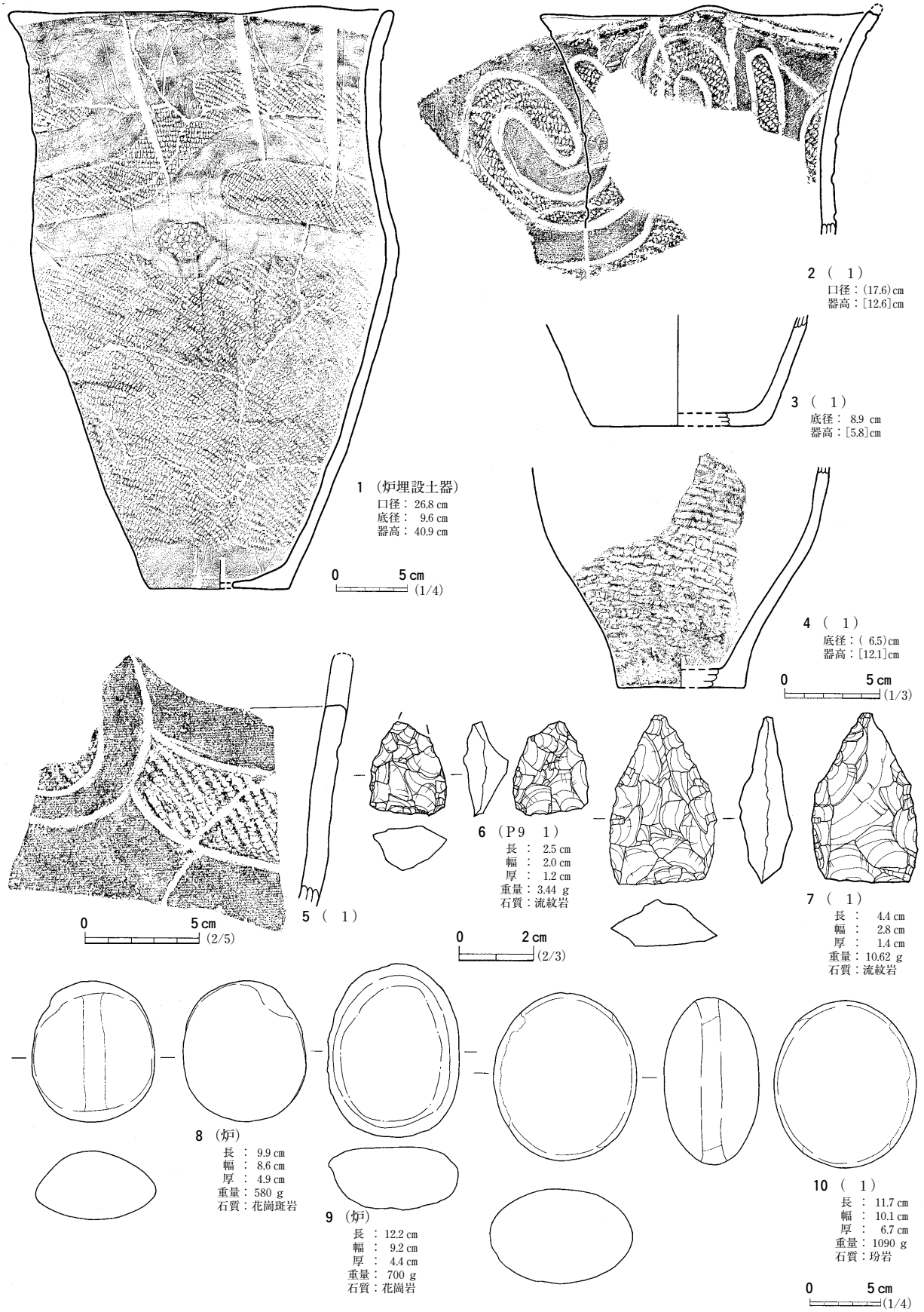


図26　34ｂ号住居跡出土遺物

した波状口縁の深鉢で，胎土に長石・石英・金雲母を含む。体部上位でくびれ，口縁部が外反する器形である。口縁部から体部にかけて，沈線で区画した「Ｃ」字状の曲線文を施してＬＲ縄文を充填している。口縁部内面にはすすが厚く付着し，器面外面にも薄く付着しているのが認められる。３・４はℓ１から出土した深鉢の底部から体部下半の資料である。３は胎土に長石・石英・金雲母・酸化鉄粒を含む。体部下半外面は無文で，内外面にナデが施される。体部の内外面に熱によるはじけが認められ，内面にはすすが厚く付着している。４は胎土に長石・石英・金雲母を含む。体部にＬ縄文を斜位に回転し，内面にはナデを施している。器面の内外面にすすが付着し，底部付近の体部下半にはタール状の付着物が認められる。５はℓ１から出土した深鉢の破片資料で，胎土に長石・石英・金雲母・酸化鉄粒を含む。口縁部が外反する波状口縁の深鉢で，口縁部に沿って沈線区画の縄文帯で弧状の文様を施している。遺存率が悪いので充填縄文か磨消縄文なのかは不明であるが，ＬＲ縄文を縦位に回転している。器面は内外面共にナデが施され，内面は一部磨かれている。口縁部内面にはすすが付着している。以上の土器の内，１・２は縄文時代中期末葉の大木10式土器，５は大木９～10式土器と考えられる。

６・７は流紋岩製の石鏃で，６はＰ９のℓ１，７は遺構内堆積土ℓ１から出土している。６は未製品と考えられ，７は縦長剝片を素材とした無茎石鏃である。８～10は磨石である。８・９は炉の土器埋設部の縁石で，10はℓ１から出土した。８・９は細粒花崗岩製，10は玢岩製である。８は両面，９は片面，10は側縁が磨耗している。

ま　と　め

本遺構は一辺4.4～4.5ｍの隅丸方形の竪穴住居跡である。３本主柱の住居跡と推測され，複式炉に前庭部は無い。時期は出土土器から縄文時代中期末葉と考えられる。　（坂　田）

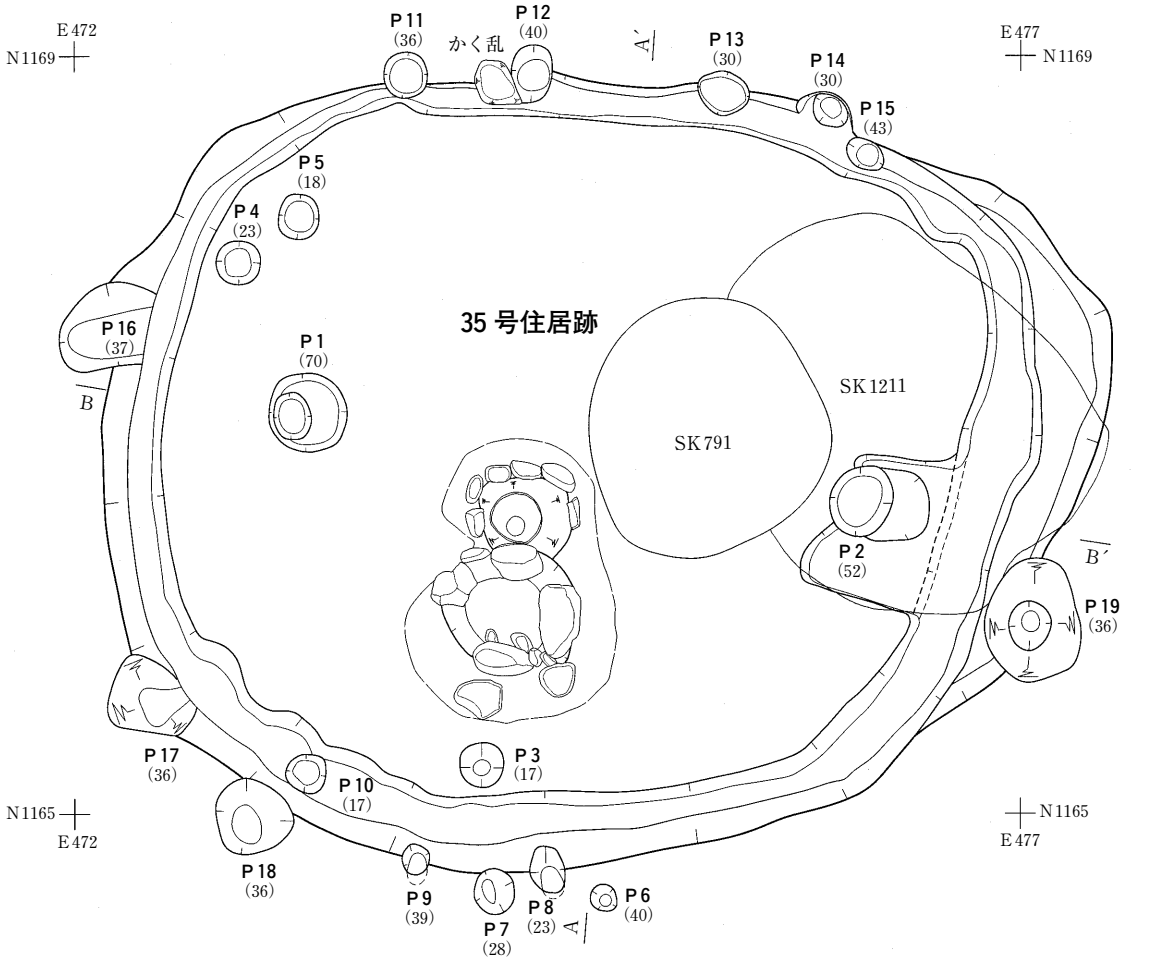
35号住居跡　ＳＩ35

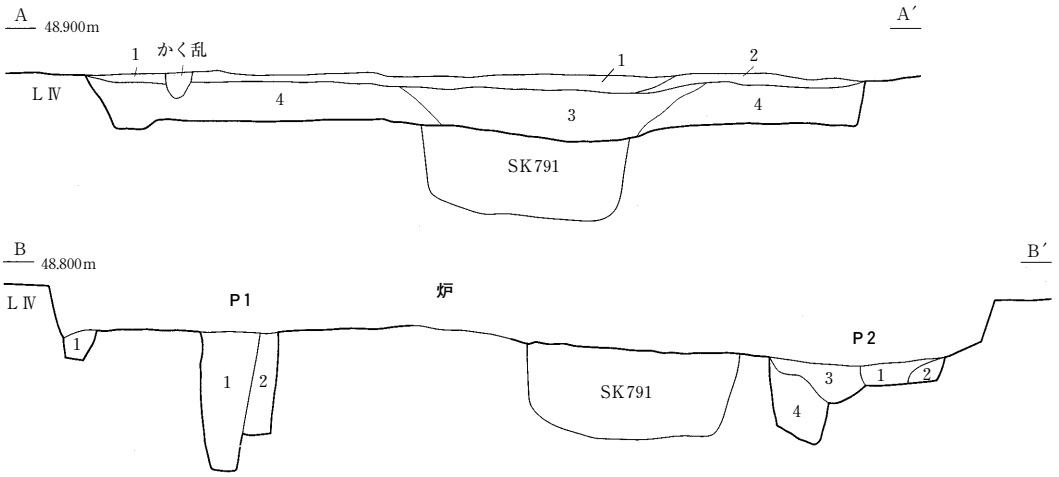
遺　　構（図27・28，写真５・29～32）

本遺構は南区の北東部ＡＩ・ＡＪ47グリッドに位置する竪穴住居跡で，検出層位はＬⅣである。周囲には31～34・38・39・71・130・141号住居跡など，９軒の住居跡が近接または重複して造られていた。重複する遺構は，71・130号住居跡と132・791・1211号土坑である。

本住居跡と71号住居跡は，各々の平面形を把握することは同一な土質なために困難であった。そこで，各々の平面形を５㎝ほど掘り下げたところ，35・71号住居跡の平面形がようやく把握できた。本住居跡が71号住居跡を掘り込んで造られていること，130号住居跡は床面を精査中に炉の石組部が確認できたことから，71・130号住居跡が古いと判断して調査を進めた。また，132・791・1211号土坑のうち，132・1211号土坑を掘り込んで住居が造られていたこと，791号土坑は住居跡の床面から検出したことから，いずれも住居跡よりも古いと判断した。

住居跡を検出した際に，すでに円礫が露出していた。これを炉の石囲部の一部と予想していたが，堆積土を除去すると円礫は散乱状態であり，炉として配置されていたとは考えられない状況であっ





35号住居跡堆積土（ＡＡ´）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
4　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅣ粒含む）

壁溝堆積土（ＢＢ´）
1　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ粒含む）

Ｐ１堆積土（ＢＢ´）
1　灰黄褐色土　10ＹＲ5/2（ＬⅣ粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅣ塊含む）

Ｐ２堆積土（ＢＢ´）
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅣ粒含む）

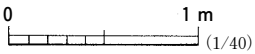


図27　35号住居跡（１）

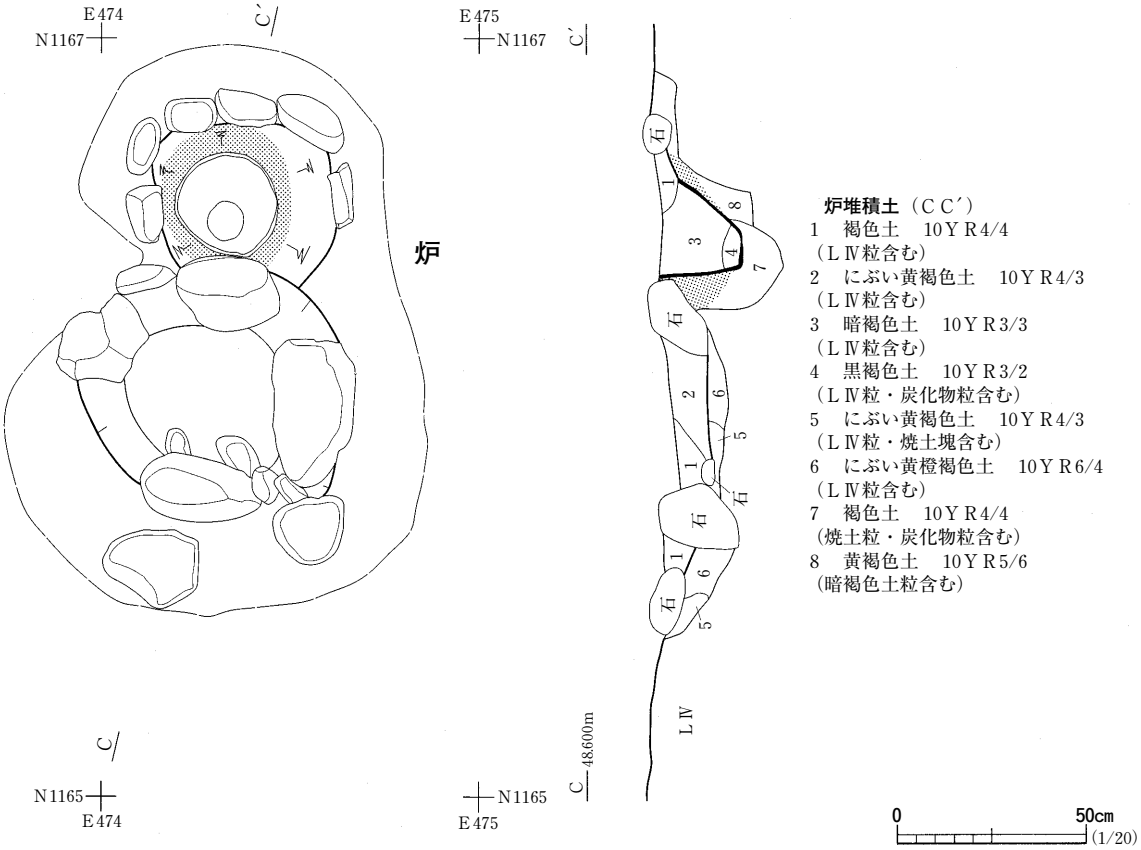


図28　35号住居跡（２）

た。そのことから，住居跡が埋没する過程で廃棄されたものと判断した。

住居跡の平面形は隅丸方形をなし，規模は南北で4.2m，東西が5.2mである。壁高は東壁が最も高く30cmほどである。周壁の立ち上がりは，東壁が二段構築になっているほかは概ね直立気味である。

堆積土は４層に区分した。ℓ１・２を除去したℓ３・４の上面は，ほぼ平坦となっていた。一旦，住居の床面として利用されていたのかもしれない。しかし，ℓ３・４の上面からは住居跡と判断する材料が見出せなかったので，建て替えはなかったと考えている。

住居施設は炉，主柱穴は現状で確認した２基，ピットが14基，壁溝などである。壁溝は南壁の一部で途切れているものの，他は壁際を巡っている。壁溝の規模は幅が12～47cm，深さが５～18cmである。

主柱穴のＰ１・２には柱痕はみられなかった。主柱穴の平面形は円形で，長軸はほぼ40cm，深さが40～72cmである。Ｐ２は1211号土坑と重複していた。ピットは壁溝と重複するものが多い。そのなかでも，北壁のピットは壁溝と重複するが検出した状況ではピットの方が壁溝よりも新しい。ピットの堆積土は，褐色土や暗褐色土であった。

炉は住居跡の南半部から検出した。炉は土器埋設部と石囲部から構成されるが，前庭部は確認できなかった。さらに，石囲部は遺存状態が悪く礫が欠落していた。炉の全長は135cm，幅は現状で80

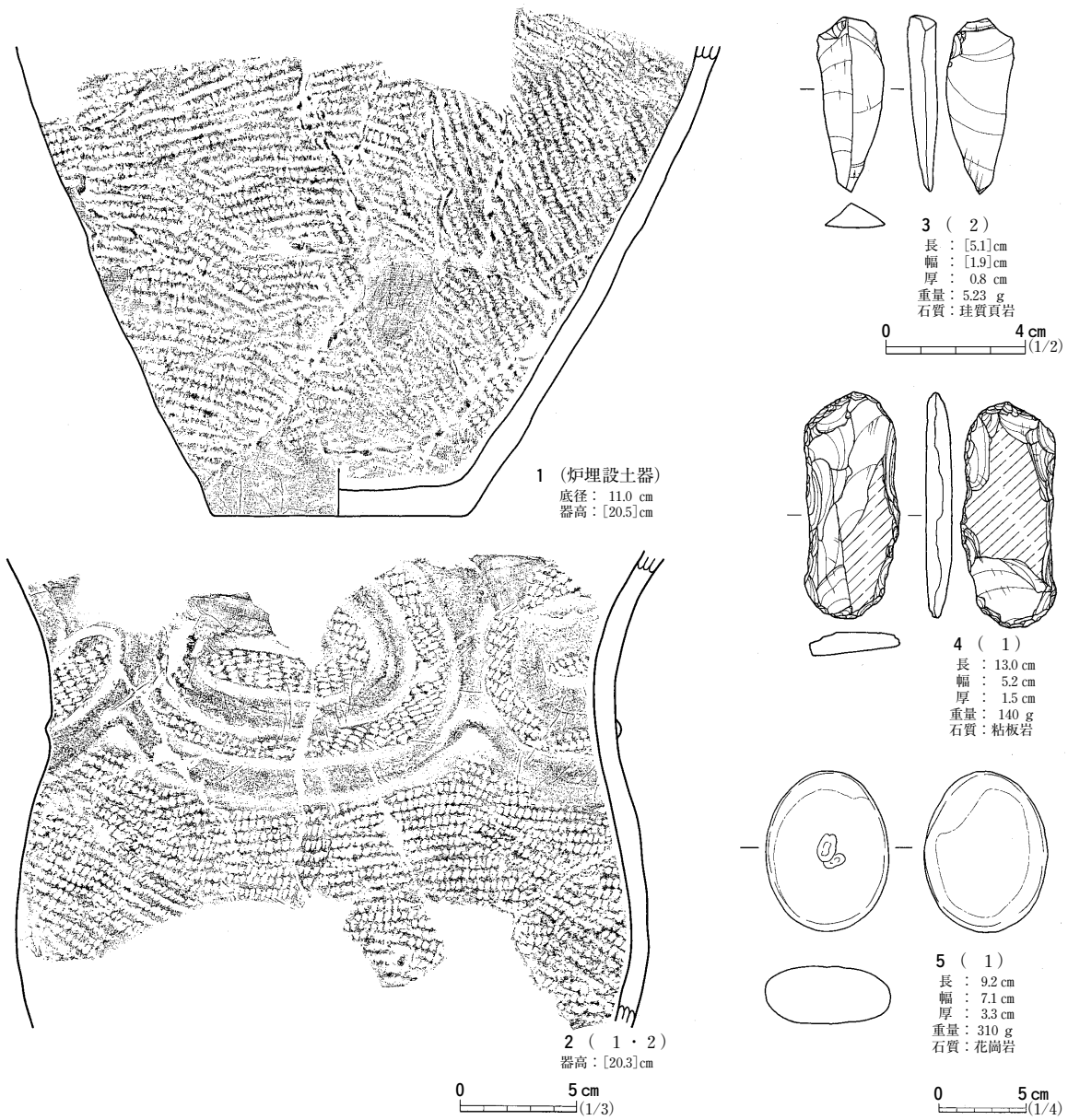


図29　35号住居跡出土遺物

cmである。土器埋設部には深鉢が１個埋設されていた。炉の掘形は土器埋設部を断ち割ったところ，埋設土器内の炭化物層は６cmほどであった。

遺　　物（図29，写真216・234）

図29－１は炉埋設土器で粗製の深鉢である。胴部上半が欠損し，胴部下半が約50%遺存する。器面の文様は縄文のみである。器形は底部から胴部中程にかけて開く。胎土には砂粒が多く含まれている。

図29－２は深鉢で，胴部が括れた器形をなしている。胴部上半は充填縄文による施文がなされ，胴部下半は単節縄文による施文がなされていた。

図29－３は剥片，図29－４は打製石斧，図29－５は凹石である。

ま　と　め

住居跡は複式炉を有する。時期は埋設土器からは判断できないが，大木10式に含まれ縄文時代中期末葉にあたる。主柱穴は２本を確認したのみで，明確にはすべてを把握はできなかった。（吉　野）

36号住居跡　ＳＩ36

遺　　構（図30・31，写真33・34）

本遺構は南区の北東部ＡＧ46グリッドに位置する竪穴住居跡であるが，確認できたのは炉と主柱穴のみである。検出層位はＬⅣである。周囲には31～34・38・39・71・130・141号住居跡など，９軒の住居跡が近接または重複して造られていた。

重複する遺構は31号住居跡である。本住居跡は31号住居跡を完掘した後に検出したため，平面形での重複関係を把握していない。そのために，新旧関係はよくわからない。

住居施設は炉と主柱穴しか確認していない。主柱穴は３基を確認したが，炉との位置関係から主柱穴と判断したもので主柱穴の平面形は円形で，長軸は25～40cm，深さが25～55cmほどでいずれも柱痕はみられなかった。

炉の構造は石囲炉である。板状の礫で囲まれた内部には，土器の破片が内面を上にして敷かれていた。炉の規模は現状で全長が27cm，幅は20cmである。

遺　　物（図31）

図31－１・２は炉に敷かれていたものである。１は波状口縁をなすもので，胴部下半が欠損している。文様は楕円の区画文をさらに別の区画文が巡っている。２の文様は沈線によって区画されたなかに縄文が充填されているが，やや沈線の幅が広いものである。

ま　と　め

本住居跡は炉と主柱穴を３本確認したのみで，住居跡の平面形を把握はできなかった。炉の構造は石囲炉である。時期は炉のなかに敷かれていた土器から判断すると，大木９式に含まれるもので縄文時代中期後葉にあたる。本遺跡の大木９式に含まれる住居跡の炉には複式炉がみられるが，本住居跡の炉は石囲炉である。

なお，31号住居跡との新旧関係であるが，34号住居跡は２軒の住居跡が重複していたが，新しい住居跡の炉は石囲炉であり，古い住居跡の炉は複式炉であった。本住居跡の炉は石囲炉で31号住居跡の炉は複式炉であることから，本住居跡が古いとも考えられる。（吉　野）

37号住居跡　ＳＩ37

遺　　構（図32・33，写真６・35～38）

本遺構は南区北東部の平坦地に存在し，ＡＭ～ＡＯ54・55グリッドに位置する。本遺構の南東に40号住居跡が近接する。黄褐色土（ＬⅣ）上面で隅丸台形の落ち込みと，その中に一回り小さい黒褐色と暗褐色の楕円形の落ち込みを検出し，２軒の住居跡が重複すると考えた。その広がりにあわ

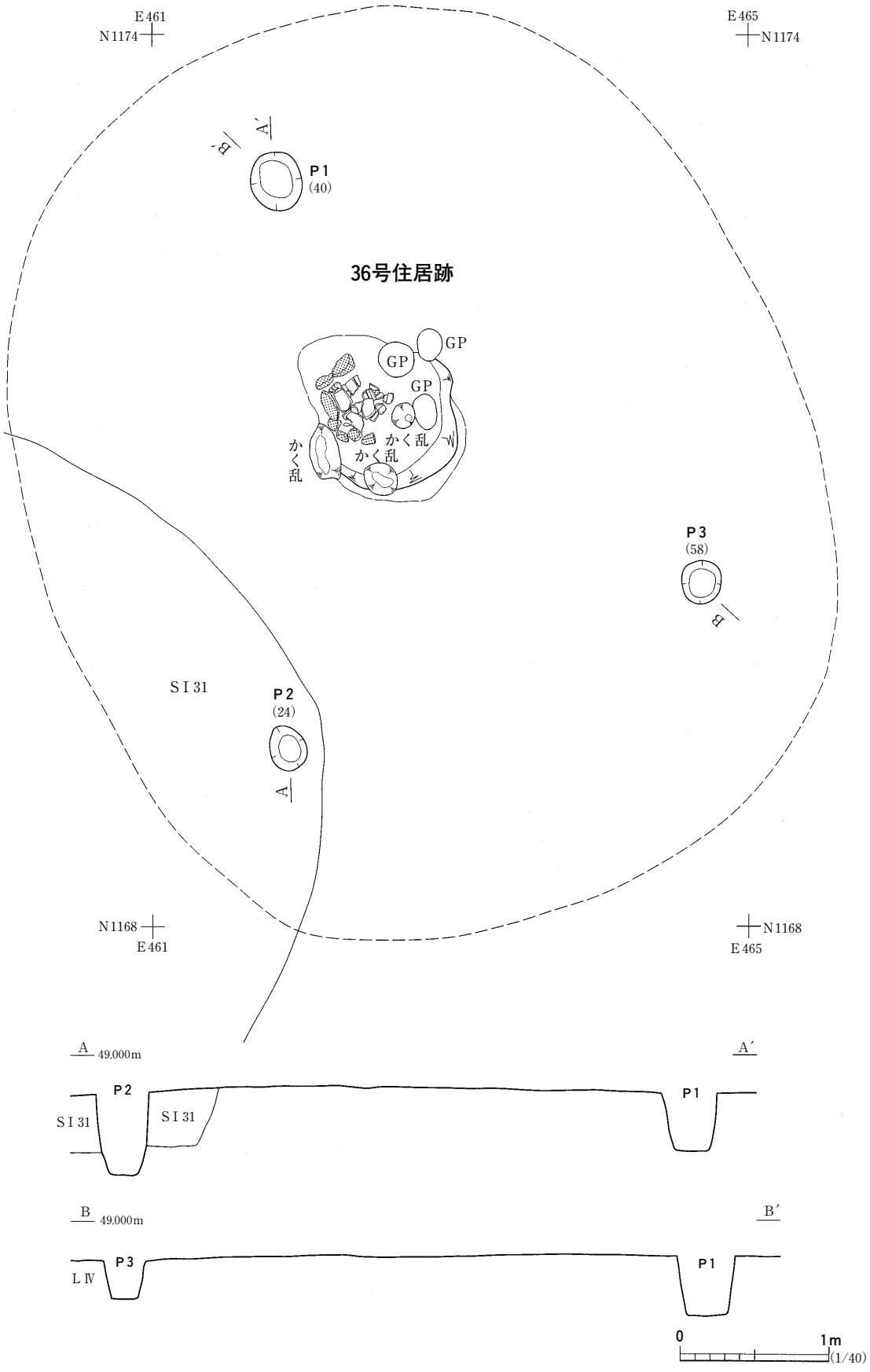

E461
N1174
E465
N1174
B
A´
P1
(40)
36号住居跡
GP
GP
GP
かく乱
かく乱
かく乱
P3
(58)
B
SI31
P2
(24)
A
N1168
E461
N1168
E465
A
49.000m
A´
P2
P1
SI31
SI31
B
49.000m
B´
P3
P1
LⅣ
0
1m
(1/40)

図30　36号住居跡（１）

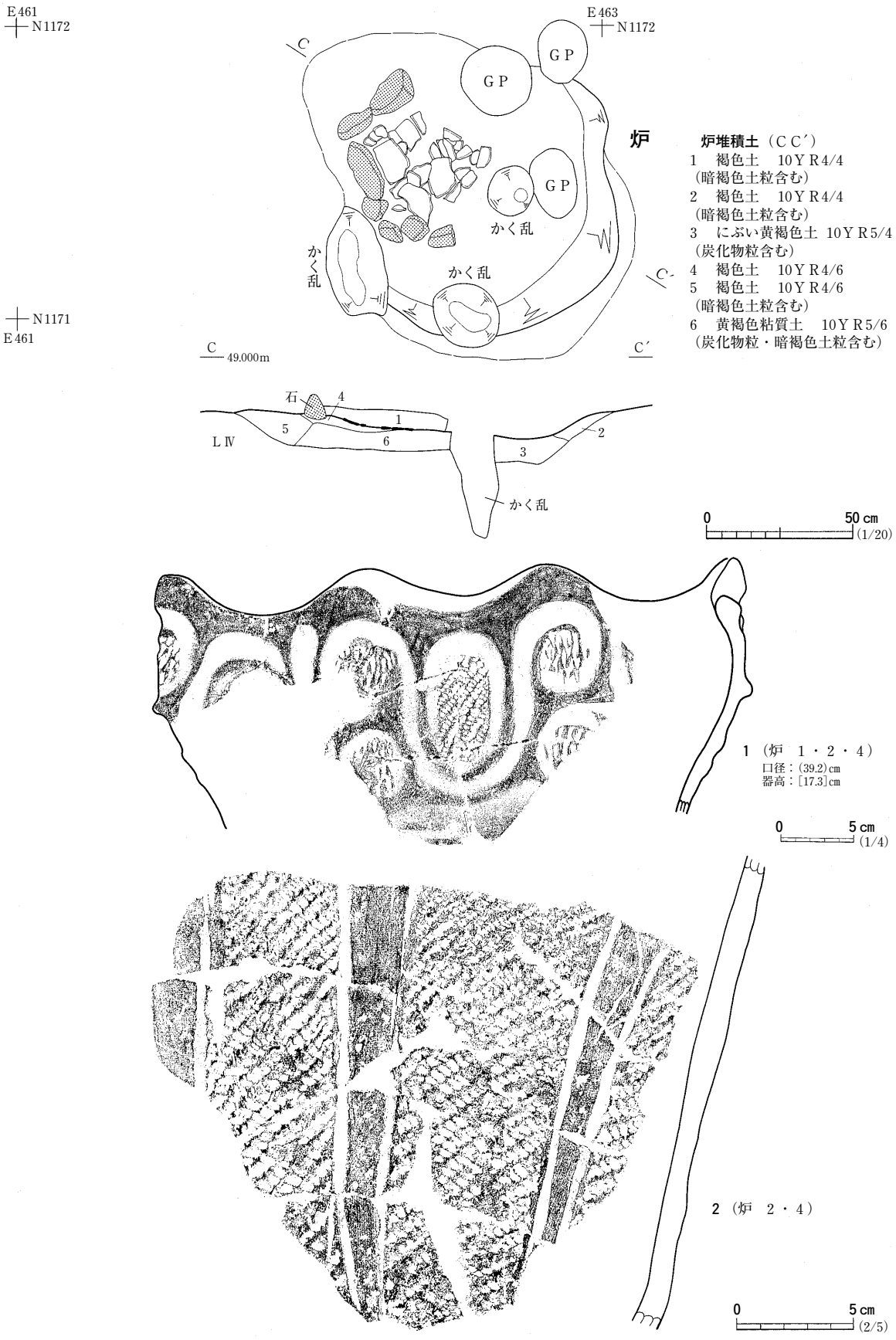
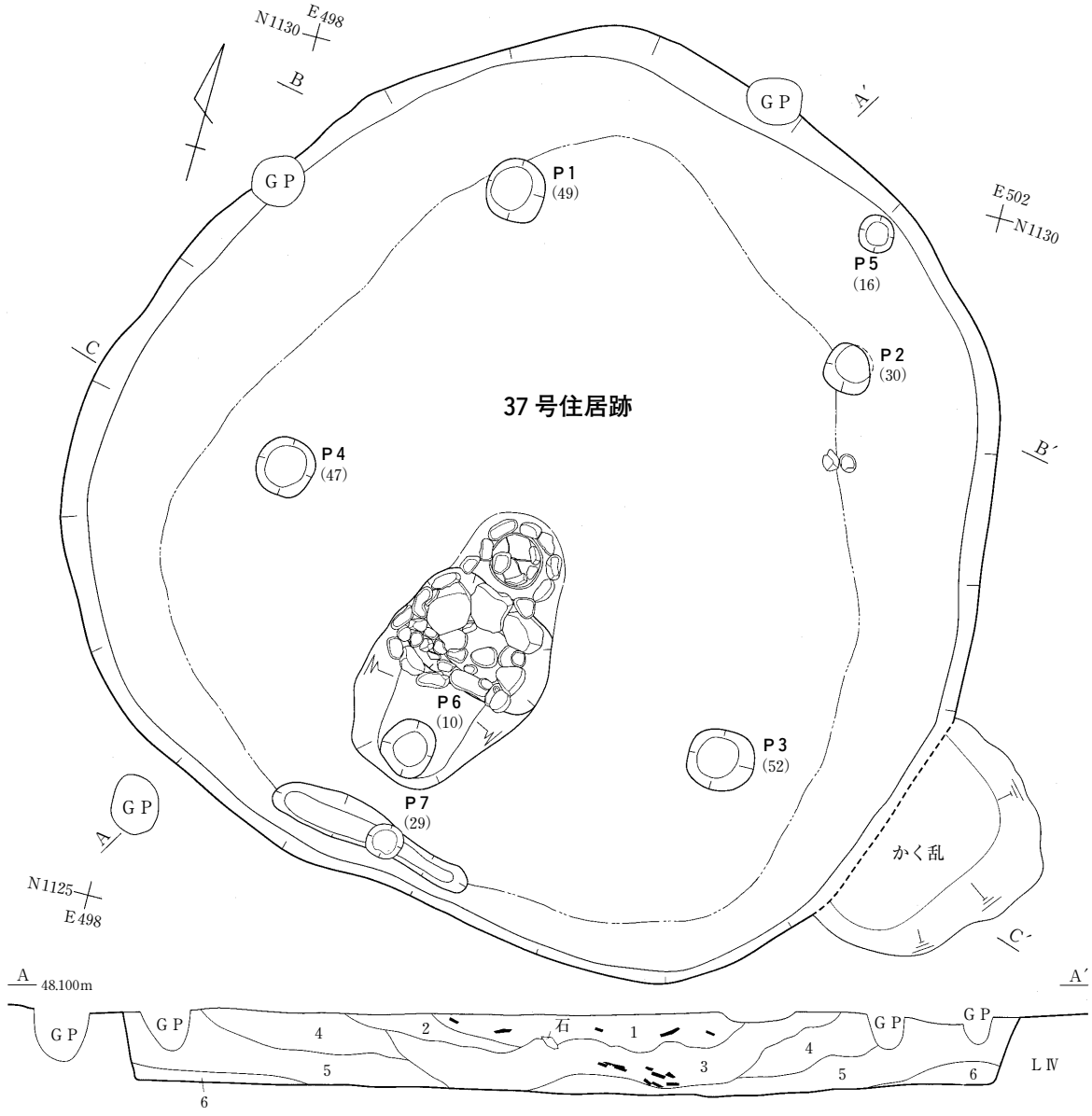


図31　36号住居跡（２）・出土遺物



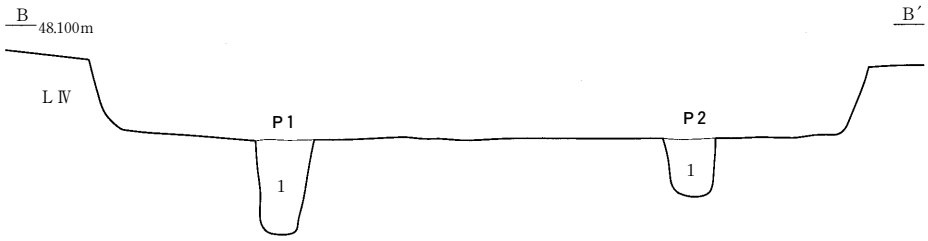
37号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒・暗褐色土粒含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊少量含む）
6　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）

0　1 m
(1/40)

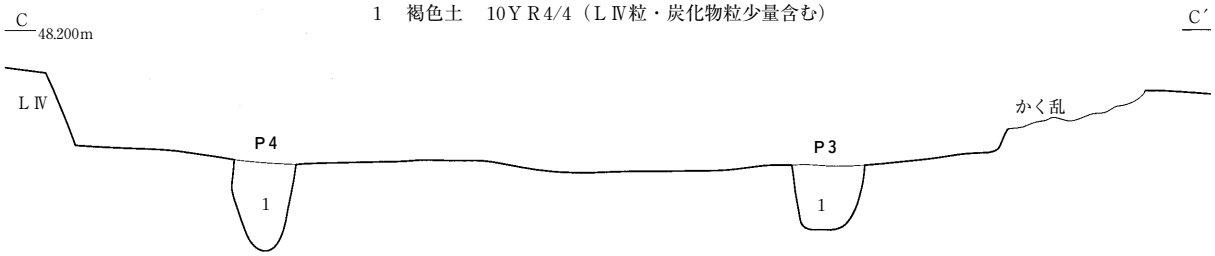
図32　37号住居跡（１）

せて土層観察用のベルトを南北方向に設置し，新しい住居跡と考えられる黒褐色土と暗褐色土の落ち込みを掘り下げたが炉や柱穴などは確認できず，底面も著しく波打っていたため，２軒の住居跡が重複するのではなく，隅丸台形の住居跡の壁沿いに褐色土が流入して半分程埋没した後，中央部に黒褐色土と暗褐色土が堆積したと考えた。

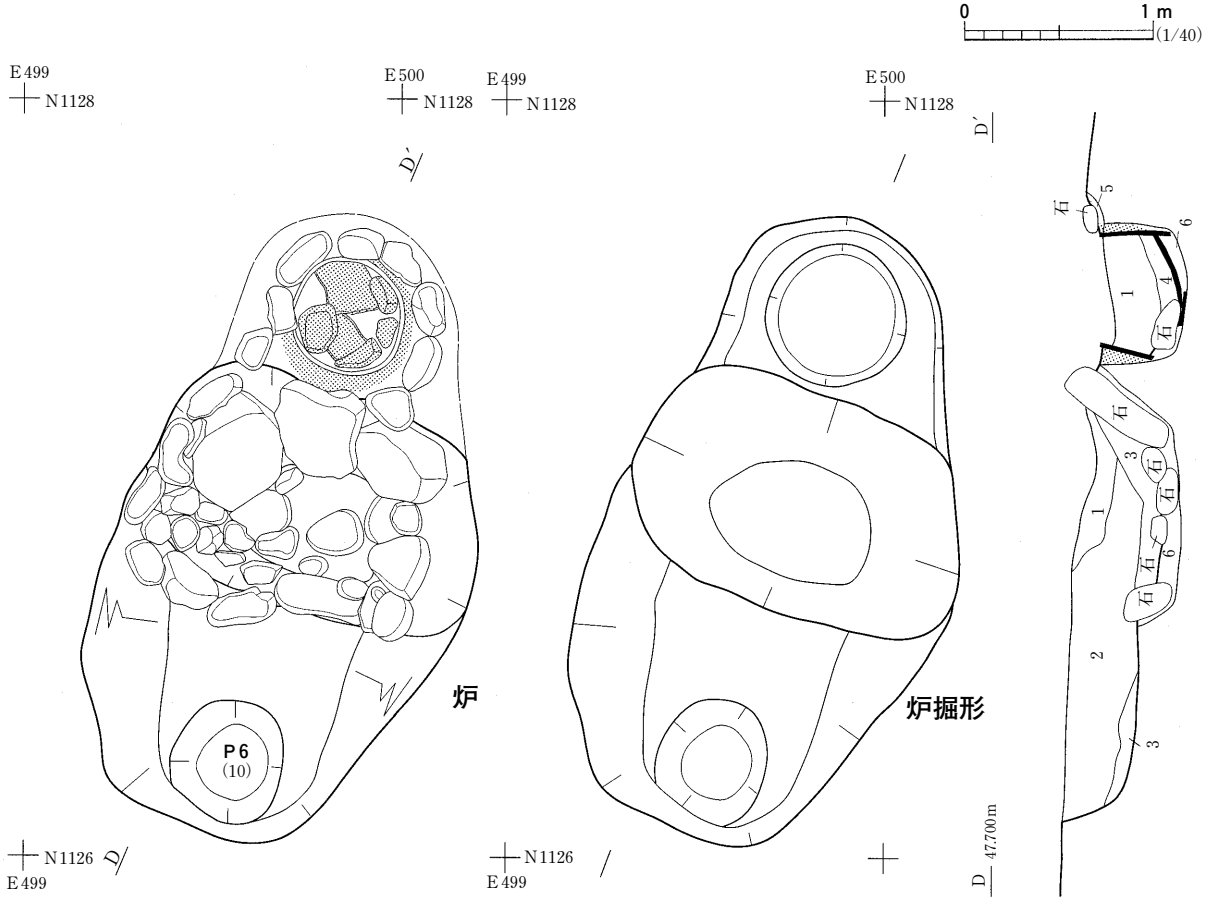
遺構内堆積土は６層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒と炭化物粒を含む黒褐色土で，遺構の中央部に長径約1.2mの楕円形に分布する。ℓ２は黄褐色土粒と炭化物粒を含む暗褐色土で，中央部に南側から流れ込むように堆積している。ℓ３はℓ２より明るい暗褐色土で，黄褐色土粒と炭化物粒



Ｐ１・２堆積土（ＢＢ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）



Ｐ３・４堆積土（ＣＣ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）



炉堆積土（ＤＤ′）
1　暗褐色土　10YR 3/3（ＬⅣ粒少量含む）
2　褐色土　10YR 4/4（ＬⅣ粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物多量，ＬⅣ粒少量含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
6　褐色土　10ＹＲ4/6（掘形埋土）

0　50 cm　(1/20)

図33　37号住居跡（２）

を含み，遺構の中央部に断面が波打つように堆積している。ℓ４は暗褐色土塊，黄褐色土粒，炭化物を含む褐色土，ℓ５は黄褐色土塊を含む褐色土，ℓ６は黄褐色土粒を含むにぶい黄褐色土で，ℓ４～６は壁沿いに流れ込むように堆積している。ℓ１～３は土器片が非常に多く出土するため，ℓ４～６が堆積した後，土器の廃棄場として使われたと考えられる。また，ℓ３は断面でℓ４・５を切って堆積しているようにも見られるので，ℓ４～６が自然堆積した後，廃棄場として利用するために一部掘り込んだ可能性も考えられる。

本遺構の南東側はかく乱により一部失われているが，床面から約10cm程は遺存しており，全体の形状を判別できる。遺構の平面形は南西壁が長く北東壁が短い隅丸台形で，長辺5.1m，短辺3.6mを測る。北東南西壁方向を主軸方位とすると，真北から東側に20°傾く。壁高は34～44cmと遺存状態は良く，周壁は70～80°の角度で直線的に立ち上がる。床面は黄褐色土を掘り込んで，ほぼ平坦に造り出されている。床面には周壁付近を除いて踏み締まりが認められた。

住居内施設として炉跡１基，壁溝，主柱穴４基，ピット３基が検出された。炉は不整楕円形の複式炉で，土器埋設部，石組部，前庭部より成る。床面南部に位置し，炉と住居跡の主軸方位は一致する。壁溝は，南西壁際から６～10cm離れた位置に検出された。Ｐ１～４は住居跡の４隅に位置し，Ｐ１～４を結んだ平面形は住居跡の平面形に対応する台形である。Ｐ１とＰ２を結ぶ線と炉の主軸線は，炉の北端から1.6mの位置で直交する。またＰ３とＰ４を結ぶ線と炉の主軸線は炉北端部から48cm南側の位置で直交する。各交点からの距離はＰ１が1.1m，Ｐ２が１m，Ｐ３が1.6m，Ｐ４が1.4mを測る。さらに北東壁際からＰ５，壁溝内からＰ７，炉前庭部南端の底面からＰ６が検出された。検出されたピットの内，主柱穴と考えられるのはＰ１～４である。Ｐ１・４は直径32～37cmのほぼ円形で，深さは47～49cmを測る。Ｐ２・３は長径30～38cmの楕円形で，深さは30～35cmを測る。Ｐ１～４内には黄褐色土粒を含む褐色土が堆積している。柱痕が認められないため，Ｐ１～４は柱穴掘形と考えられる。Ｐ６は直径32cmの円形で，前庭部底面からの深さは10cmを測る。炉の主軸線上にあり，Ｐ６も上屋を支える柱穴と推測される。Ｐ６内には黄褐色土粒を含むにぶい黄褐色土が堆積している。Ｐ５・７は南北壁際のほぼ対応する位置にあるので，壁柱穴の可能性が考えられる。Ｐ５・７は直径20～22cmの円形で，深さ18～29cmを測る。Ｐ５・７内には黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積している。

壁溝は長さ121cm，幅14～25cm，深さ７～15cmを測り，底面は西側に向かって傾斜している。壁溝内にＰ７が検出されている。壁溝内には黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積しており，遺構廃棄時には壁溝は埋まっていたと考えられる。壁溝はその位置から考えて，炉を保護するため造られた可能性も考えられる。

炉の平面形は長径164cm，短径79cmの楕円形である。土器埋設部の掘形は長辺約70cm，短辺約50cmの不整楕円形で，床面からの深さは最大10cmを測る。さらにこの掘形の中央部を床面からの深さが28cmを測る直径38cmの円形に掘り込み，正位に土器を据えている。埋設土器には，口縁部と下半部を切り取った深鉢体部が用いられ，最大径は33.4cm，器高は22.3cmを測る。底面には別個体の深鉢体

部破片と礫を敷いている。埋設土器の周囲には土器の上端を保護するように，周辺に掌大の横長の礫を石組部側が開く「U」字状に，一重に巡らせている。石組部は長径88cm，短径58cm，床面からの深さ最大28cmの楕円形の掘形を掘り，長辺77cm，短辺67cmの隅丸台形に礫を敷いている。土器埋設部側には大型で扁平な礫を立て掛け，底面や側縁部，前庭部側には拳大から掌大の丸礫や細長い礫を用いている。前庭部は幅最大92cm，床面からの深さが16～18cmを測る。前庭部底面は南に向かって緩やかに傾斜する。前庭部底面に踏み締まりは認められなかった。炉内堆積土は６層に分けられる。ℓ１は遺構内堆積土ℓ３に相当する暗褐色土で，石組部に堆積する。ℓ２・３は前庭部南側から流れ込むように堆積している。ℓ２は遺構内堆積土ℓ５に相当する褐色土，ℓ３は黄褐色土粒を含むにぶい黄褐色土である。ℓ４は炭化物を多く含む黒褐色土で埋設土器の上端から11～15cmの深さまで堆積している。ℓ５はにぶい黄褐色土，ℓ６は褐色土で共に炉掘形埋土である。埋設土器周囲の土は焼土化し，その範囲は埋設土器の上端から幅最大３cm，深さ最大10.5cmに及ぶ。そのため炉使用時には深さ10.5cmの位置まで何らかの堆積物があったものと考えられる。ℓ４は埋設土器上端から11～15cmの位置まで堆積していたので，焼土化の始まるまでの最大4.5cm間には腐食しやすい灰等が堆積していたと推測される。したがって，炉の機能時に既に堆積していたと考えられるのはℓ４～６で，ℓ１～３は炉の廃棄後に流入した土と考えられる。

遺　　物（図34・35，写真216・229・233）

縄文土器片492点，土師器片８点，石器類32点が出土した。遺物はℓ１～３から特に多く出土している。図34－１は炉埋設土器で，口縁部と体部下半部を切り取って使用された深鉢である。胎土に長石・石英・雲母・金雲母を含み，体部上位に最大径を持つ。体部にＬＲ縄文を縦位と斜位に回転させ，内面にはナデを施している。器面外面は体部上端から６cm程まで赤く変色し，内面は上端から６cm程まで火熱を受けて器面が荒れている。２はℓ６から出土した深鉢で，胎土に長石・雲母・金雲母を含む。体部中位に最大径を持ち，体部上半は緩やかに内傾しながら立ち上がり，口縁部でかるく外反する。平坦口縁で，体部にＬＲ縄文を縦位に回転した後，口縁部に沿って２条の凹線を施している。口縁部外面と内面にはナデを施している。３はℓ３から出土した深鉢で，胎土に長石・石英・金雲母・海綿骨針を含む。体部のほぼ中位に最大径を持ち，直径31.6cmを測る。体部上半は緩やかに窄まりながら立ち上がり，口縁部がわずかに外反する。体部にＲＬ縄文を横位と斜位に回転させた後，口縁部に沿って沈線を施し，口縁部をヨコナデしている。沈線下には突起が５単位貼付され，内面はナデが施される。４はℓ３・５から出土した深鉢の体部破片で，胎土に長石・石英・雲母を含む。体部にＲＬ縄文を斜位と縦位に回転させ，内面にはナデを施している。器面内面は被熱により荒れている。５は炉埋設土器の底部に敷かれていた波状口縁の深鉢で，胎土に長石・雲母・金雲母を含む。口縁部から体部にかけてＬＲ縄文を斜位・横位・縦位に回転させ，口縁部に沿って波状の沈線を施している。器面内面にはナデが施され，指頭圧痕も認められる。６はℓ６から出土した深鉢の底部破片で，胎土に長石・石英・雲母を含む。体部にＬＲ縄文を縦位に回転させ，内面にはナデが施されている。図35－１はℓ６から出土した注口形土器で，胎土に長石・石英

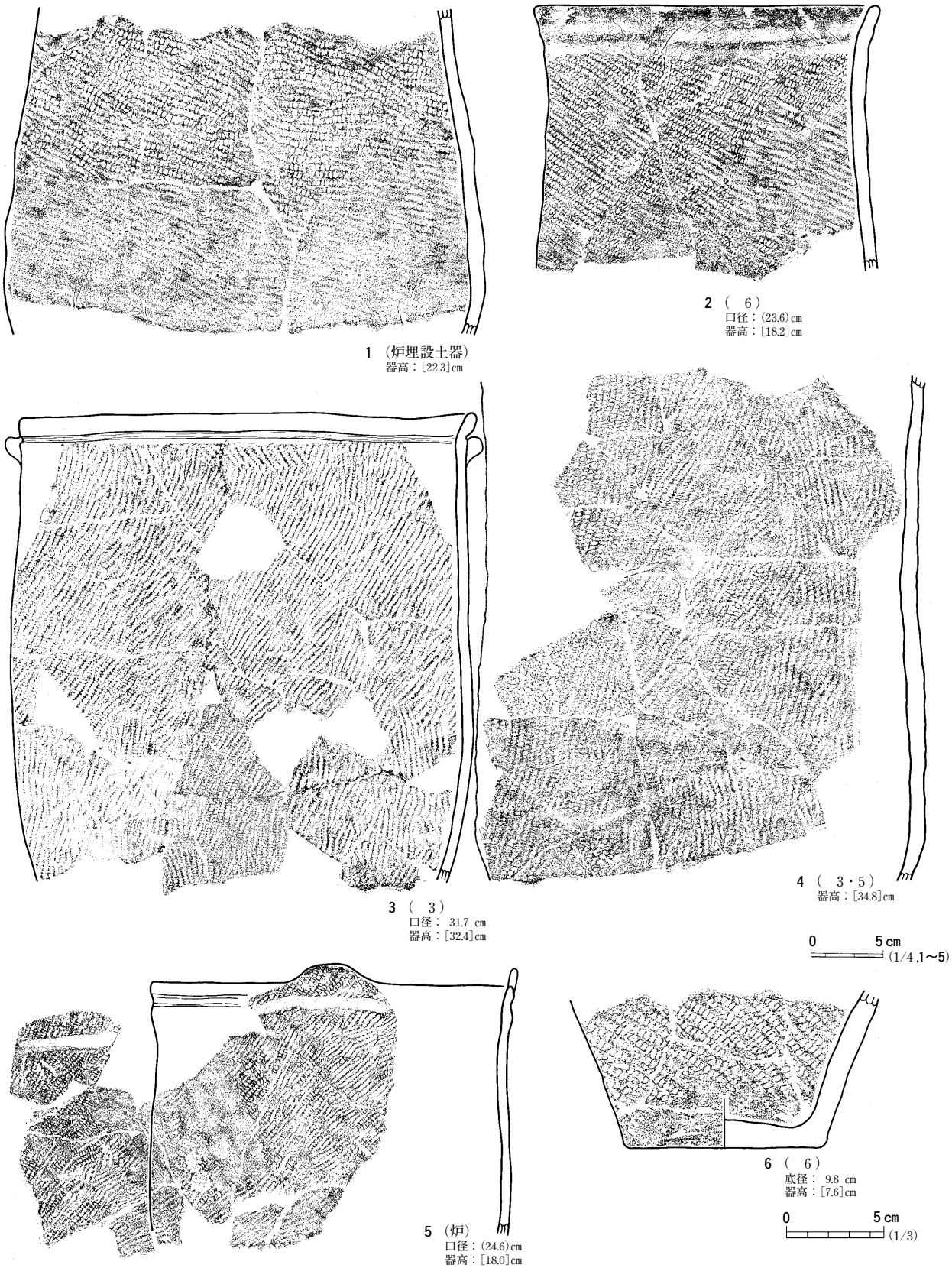


図34　37号住居跡出土遺物（１）

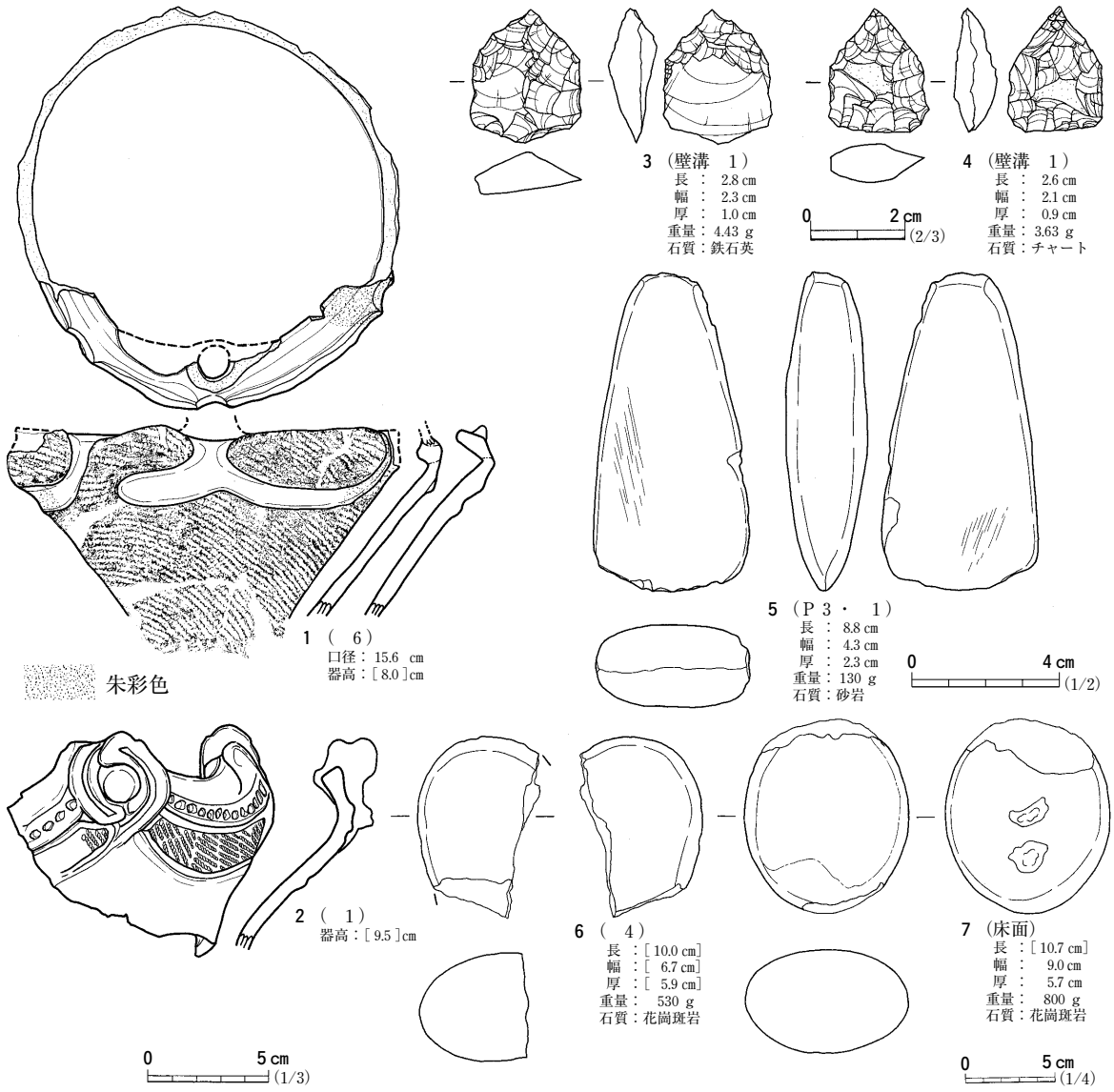


図35　37号住居跡出土遺物（２）

・酸化鉄粒を含む。体部は外傾しながら立ち上がり，体部上位に最大径を持つ。口縁部が強く内傾し，口唇部に注口が認められる。注口下部のみ残存し，上部はおそらく上に伸びると推測される。器面外面にＬＲ縄文を縦位と斜位に回転させた後，口縁部から体部上位に稜線区画の無文帯で「人」の字状の文様を横位に３単位施している。無文帯と内面にはナデが施される。口唇部と無文帯は朱彩され，口縁部外面にはタール状の付着物が認められる。図35－２はℓ１から出土したキャリパー形の深鉢で，胎土に長石・雲母・金雲母を含む。波状口縁で，波頂部には中に沈線を施した帯状の隆帯を円形に貼り付けている。竹管状工具で刺突列を施した隆線を口縁部に沿って波状に貼付し，口縁部と体部の文様帯を区画している。口縁部は無文帯でミガキが施され，体部にはＲＬ縄文を充填した帯状の沈線区画文を口縁部に沿って施している。内面はヨコミガキされている。口縁部内外面にすすが厚く付着し，体部上位外面にタール状の付着物が認められる。以上の土器は縄文時代中期末葉から後期前葉の土器と思われる。

図35－３・４は壁溝のℓ１から出土した石鏃である。４はチャート製の凸基無茎鏃の未製品と考えられ，縦長剝片を素材としている。３は鉄石英製の無茎石鏃で，両面に自然面が残る。５はＰ３のℓ１から出土した砂岩製の磨製石斧で，刃部を欠損する。６はℓ４から出土した花崗斑岩製磨石の破損品である。本来は楕円形の礫と推測され，両面共に磨耗している。７は床面から出土した花崗斑岩製の磨石・凹石である。両面は磨耗し，片面に窪みが認められる。

ま　と　め

本遺構は，長辺5.1m，短辺3.6mの隅丸台形の竪穴住居跡である。４本主柱で複式炉を持つ。時期は炉埋設土器からは判断できなかったが，出土土器から概ね縄文時代中期末葉と考えられる。

（坂　田）

38号住居跡　ＳＩ38

遺　　構（図36・37，写真５・39・40）

本遺構は調査区北東部のＡＪ・ＡＫ47グリッドに位置する竪穴住居跡で，検出層位はＬⅣである。周囲には31～34・39・71・130・141号住居跡など，８軒の住居跡が近接または重複して造られていた。重複する遺構は２号性格不明遺構である。本住居跡との新旧関係は，２号性格不明遺構を床面から検出したことから本住居跡よりも古いと判断した。

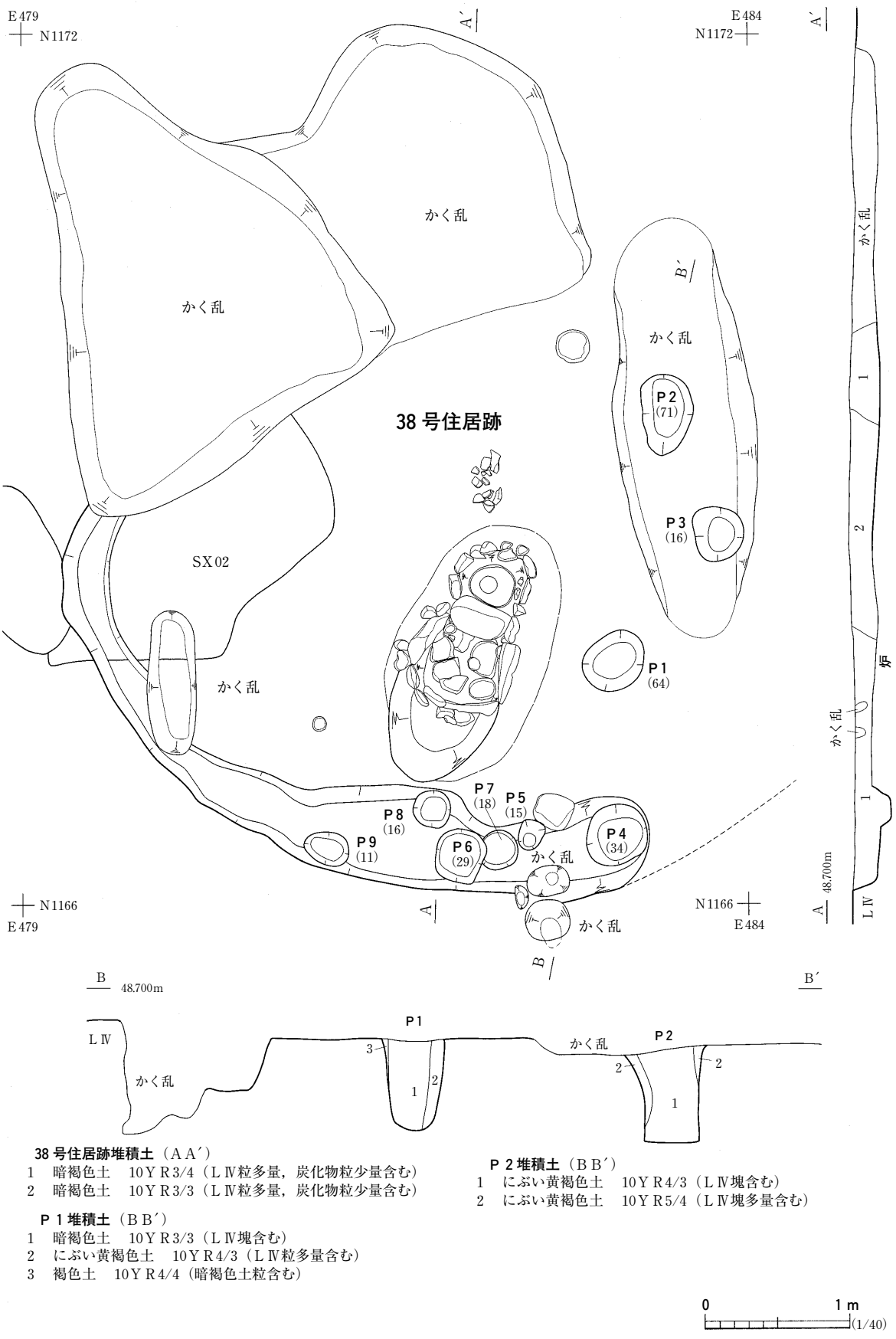
本住居跡は重複する遺構とかく乱によって周壁が壊され，平面形については明確ではない。規模は現状で南北が4.5m，東西は4.2mである。壁高は西壁で18cmほどである。周壁は南壁から西壁の一部を確認したのみであるが，立ち上がりは概ね緩やかである。

堆積土は２層に区分した。いずれも，炭化物粒や住居跡が掘り込んでいるＬⅣと同じ土色の黄褐色粘土が多く含まれていることから，埋め戻されたことを考えている。床面はほぼ平坦であるが，特に踏みしまっているような状況ではなかった。

住居施設は炉，主柱穴は現状で確認した２基，主柱穴を除いたピットが７基，壁溝などである。壁溝は周壁の壁際を巡っている。壁溝の規模は幅が12～47cm，深さが27～39cmで，南側に向かうほど幅が広く深くなってゆく。

主柱穴は明確に把握できなかったがＰ１・２と考えている。柱痕はみられなかった。主柱穴の平面形はやや歪な楕円形で，長軸はほぼ46～54cm，深さが62～67cmである。

ピットは壁溝と重複するものが多い。炉は住居跡の南半部から検出したもので，土器埋設部・石組部・前庭部から構成される複式炉である。炉の全長は176cm，幅は現状で76cmである。炉の掘形の形状は長楕円形で，長軸が182cm，短軸は103cmである。土器埋設部には深鉢が１個埋設され，深鉢の口縁部は欠損していた。埋設土器は，径38cmほどの円形の掘形内に土器をまっすぐに立てて，その周囲に褐色土を埋めて据えていた。土器上端の周囲には板状の礫を立てたものが取り囲み，板状の礫上端は土器上端よりも高い位置となっていた。石組部は炉掘形の中央部に，にぶい黄褐色土と褐色土を埋めて板状の礫が据えられていた。特に，石組部の側面と土器埋設部及び前庭部の境には



38 号住居跡堆積土（ＡＡ´）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）

Ｐ１堆積土（ＢＢ´）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ塊含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒多量含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（暗褐色土粒含む）

Ｐ２堆積土（ＢＢ´）
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ塊含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅣ塊多量含む）

0　1ｍ
(1/40)

図36　38号住居跡（１）

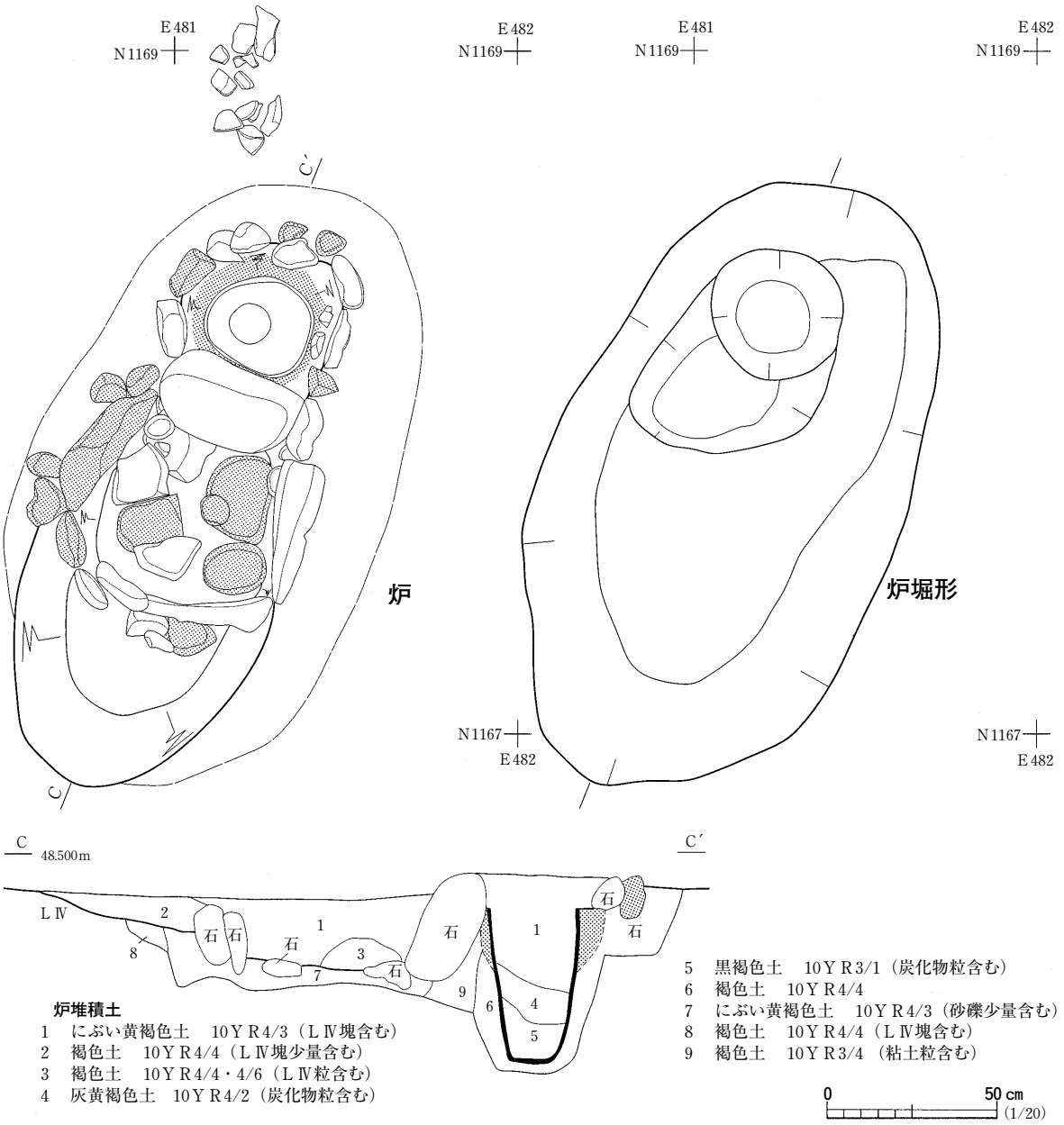


図37　38号住居跡（２）

大きな板状の礫となっていた。前庭部は一部を除き，石組部と同様ににぶい黄褐色土と褐色土を埋めて側壁・底面としていた。前庭部の末端は南壁の壁溝に接し，特に土を埋めることなく掘形をそのまま利用していた。

炉の堆積土は石組部から前庭部と土器埋設部に分けることができる。ℓ１・２は比較的短期間に堆積したものであろう。ℓ４・５は炉が使用された時に堆積したもので，炭化物粒を多量に含む土層である。

遺　　物（図38，写真217・233）

図38－１は炉埋設土器で粗製の深鉢である。口縁部が欠損し，約80%の遺存度である。器面の文様は縄文の地文のみである。器形は器高に対して小振りの底部から胴部中程にかけて逆「ハ」の字状に開き，胴部上半で内傾する。内面をみると，胴部上半は所々に器面が剝落し，胴部下半の全面

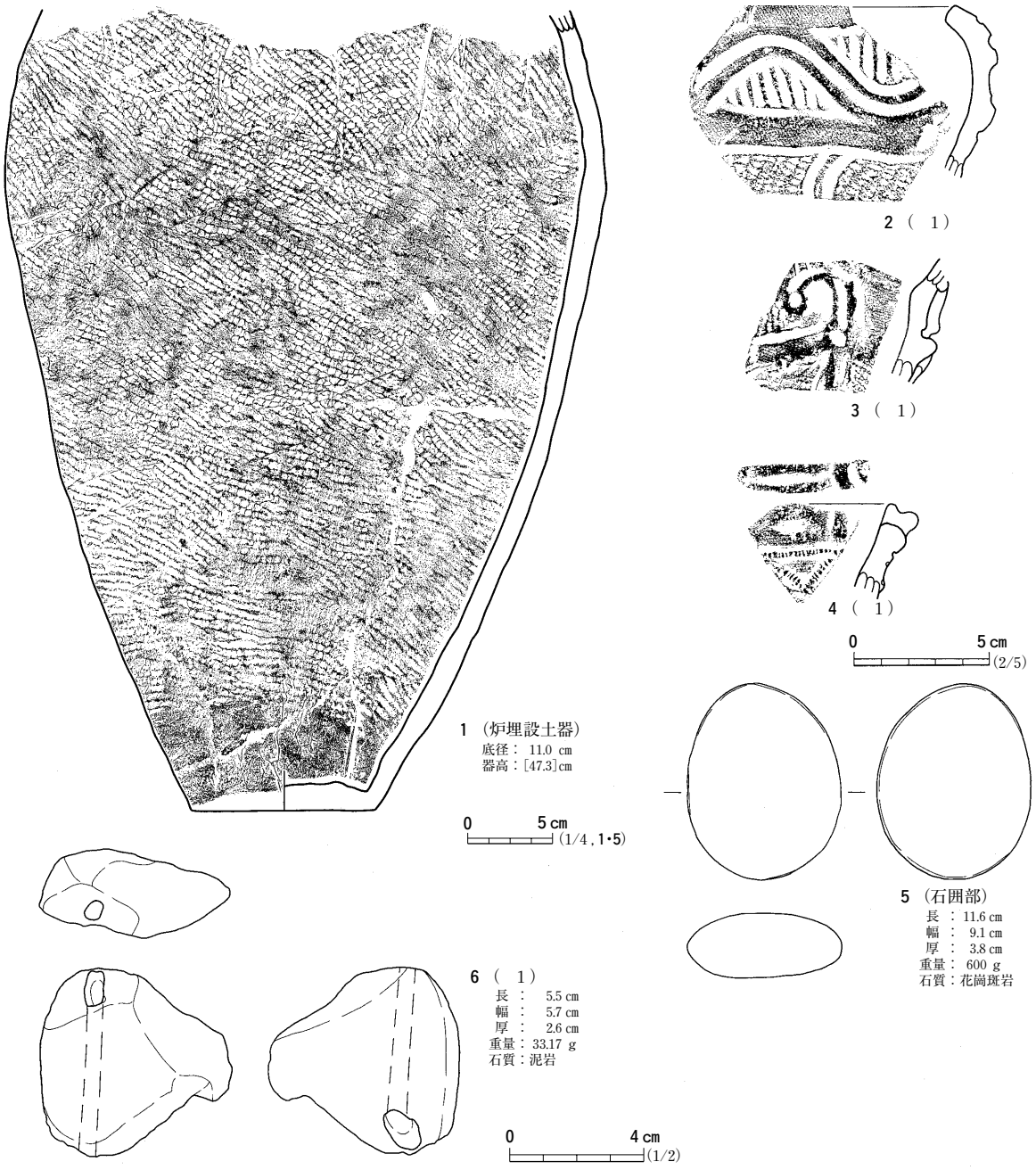


図38　38号住居跡出土遺物

にはススが付着していた。このことは埋設土器の掘形が熱を受けていることと，土器内に炭化物が堆積していたことと一致する。胎土には砂粒が多く含まれていた。

図38－２～４はいずれも深鉢の口縁部の破片である。２は中期中葉の大木８ｂ式で，３は後期初頭の綱取Ⅰ式で，４は中期初頭の大木７ａ式であろう。５は炉の石組部から出土した磨石である。６は石錘で，一方の側面が張り出し，不整形である。錘としては，あまり重さを感じさせない。

ま　と　め

住居跡の時期は埋設土器からは判断できないが，概ね中期後半から末葉にかけてのものであろう。主柱穴は２本を確認したのみで，明確にはすべての主柱穴の把握ができなかった。　　（吉　野）

39号住居跡　ＳＩ39

遺　　構（図39・40，写真５・41・42）

本遺構は調査区北東部にあたるＡＪ47・48，ＡＫ47・48グリッドに位置する竪穴住居跡で，検出層位はＬⅣである。周囲には31～34・38・71・130・141号住居跡など，８軒の住居跡が近接または重複して造られていた。重複する遺構は144号土坑と４号溝跡である。本住居跡との新旧関係は，144号土坑と４号溝跡はともに本住居跡の堆積土を掘り込んでいるため新しいと判断した。

本住居跡の検出状況は，すでに炉の上端が露出している状態であったため削平が及んでいることが予想できた。

本住居跡の平面形は，周壁が残っていなかったため明確ではない。規模は，南北で確認した壁溝の間で4.2m，東西は南側壁溝の東端からＰ３までの間で4.4mであった。

堆積土は３層に区分したが，わずかしか残っていなかった。床面はほぼ平坦である。

住居施設は炉，主柱穴は現状で確認した２基，主柱穴を除いたピットが１基，壁溝などである。壁溝は南北の規模は幅が15～35cm，深さはほぼ15cmを測った。

主柱穴は明確に把握できなかったが，Ｐ１・２がその一部と考えている。柱痕はみられなかった。主柱穴の平面形はＰ１が円形であるのに対して，Ｐ２は歪んだ長楕円形である。長軸はほぼ30～57cm，深さが62～67cmである。主柱穴の数は２基のみではなく，本来いくつあったのかは明確ではないが，かく乱により欠損したものと考えている。

炉は住居跡の南半部にあったと考えている。土器埋設部・石組部・前庭部から構成される複式炉である。炉の全長は177cm，幅は現状で72cmである。炉掘形の規模は長軸が195cm，短軸は77cmである。土器埋設部には深鉢が１個埋設され，深鉢の口縁部は欠損していた。埋設土器の中には礫が詰め込められた状態で出土していた。これらは本来，埋設土器上端の周囲を巡っていたものが，住居を廃絶する際に礫を抜いて詰め込んだものと考えている。埋設土器は掘形内に土器をまっすぐに立て，その周囲に黄褐色粘土を埋めて据えていた。土器上端の周囲には，西側に板状礫が１個立てたものがあっただけである。石組部は炉掘形の中央部に，褐色土を埋めて板状の礫が据えられていた。特に，石組部と土器埋設部及び前庭部の境には大きな板状の礫が配置されていた。前庭部には，にぶい黄褐色土と黄褐色土を埋めて底面としていた。前庭部の末端は南側の壁溝と接する。

炉の堆積土は石組部から前庭部と土器埋設部に分けることができる。ℓ１～３は短期間に堆積したものであろう。ℓ４・５は炉が使用された時に堆積したもので，ℓ５は炭化物粒を多量に含む土層である。

遺　　物（図41，写真217・232）

図41－１は炉埋設土器で粗製の深鉢である。口縁部と胴部下端が欠損し，約70%の遺存度である。器面の文様は縄文の地文のみであった。器形は胴部中程が膨らみ，胴部上半では直線気味に立ち上がる。底部の中央部には穿孔がなされていた。穿孔された箇所には割口が明瞭であったので，穿孔

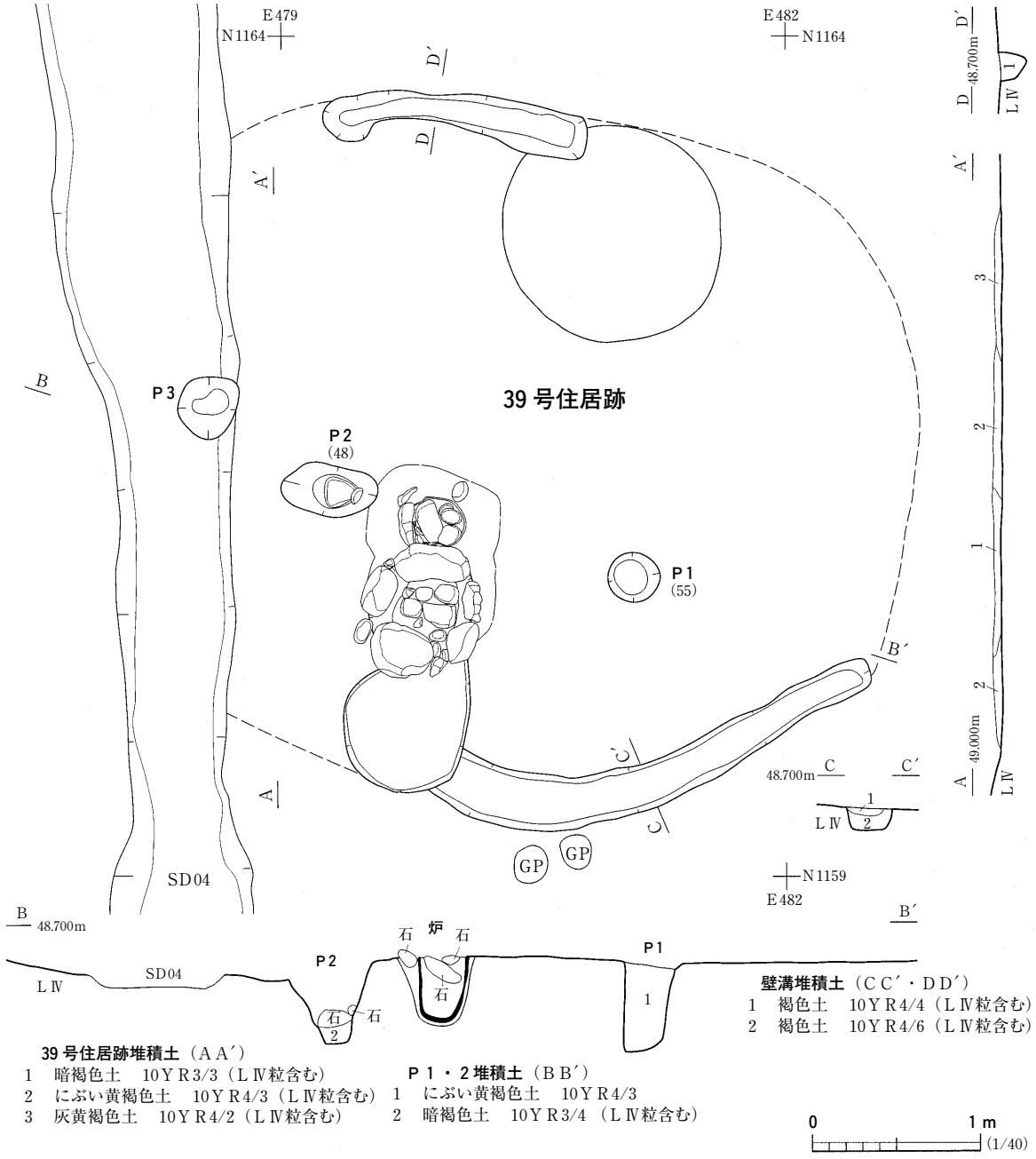


図39　39号住居跡（１）

は焼成後になされたのだろう。１の上端部の割口をみると，風化の度合いが著しいことから，埋設するときに口縁部を意識的に欠いたことを考えている。このことから，埋設土器として日常的な土器から非日常的な土器として転換を図られていたことが分かる。内面には特に器面が剝離している状況はみられなかったので，あまり火を受けていなかったのだろう。胎土には砂粒が多く含まれる。

図41－２は深鉢の口縁部である。文様は沈線による区画文が横方向に展開し，その間に瘤状の隆起が認められる。

図41－３・４は凹石で両面に凹がみられる。

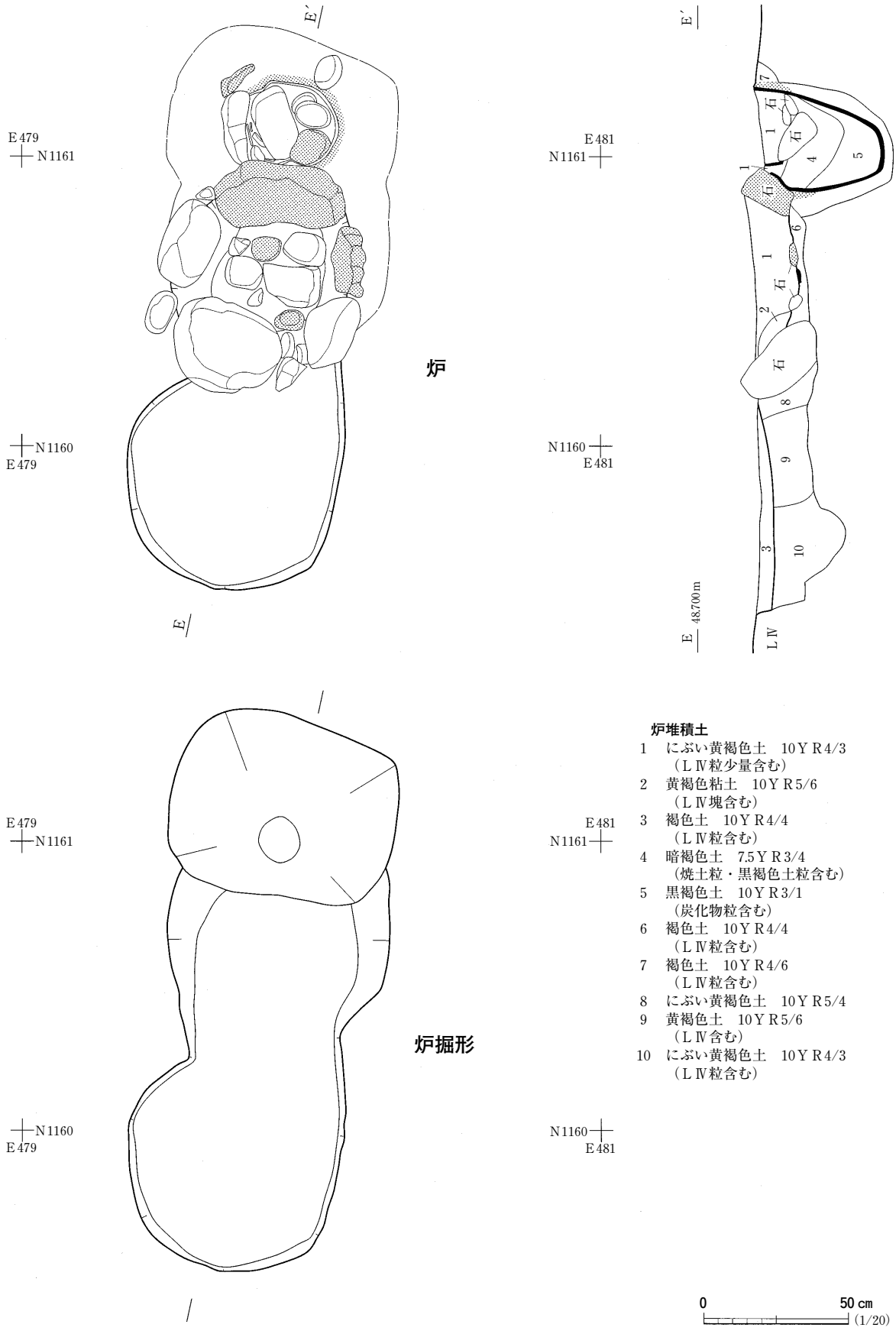

E479
N1161
N1160
E479
E
E´
炉
E481
N1161
N1160
E481
E´
E
48.700m
L Ⅳ
炉堀形
E479
N1161
N1160
E479
E481
N1161
N1160
E481
炉堆積土
1　にぶい黄褐色土　10Y R4/3
（L Ⅳ粒少量含む）
2　黄褐色粘土　10Y R5/6
（L Ⅳ塊含む）
3　褐色土　10Y R4/4
（L Ⅳ粒含む）
4　暗褐色土　7.5Y R3/4
（焼土粒・黒褐色土粒含む）
5　黒褐色土　10Y R3/1
（炭化物粒含む）
6　褐色土　10Y R4/4
（L Ⅳ粒含む）
7　褐色土　10Y R4/6
（L Ⅳ粒含む）
8　にぶい黄褐色土　10Y R5/4
9　黄褐色土　10Y R5/6
（L Ⅳ含む）
10　にぶい黄褐色土　10Y R4/3
（L Ⅳ粒含む）
0
50 cm
(1/20)

図40　39号住居跡（２）

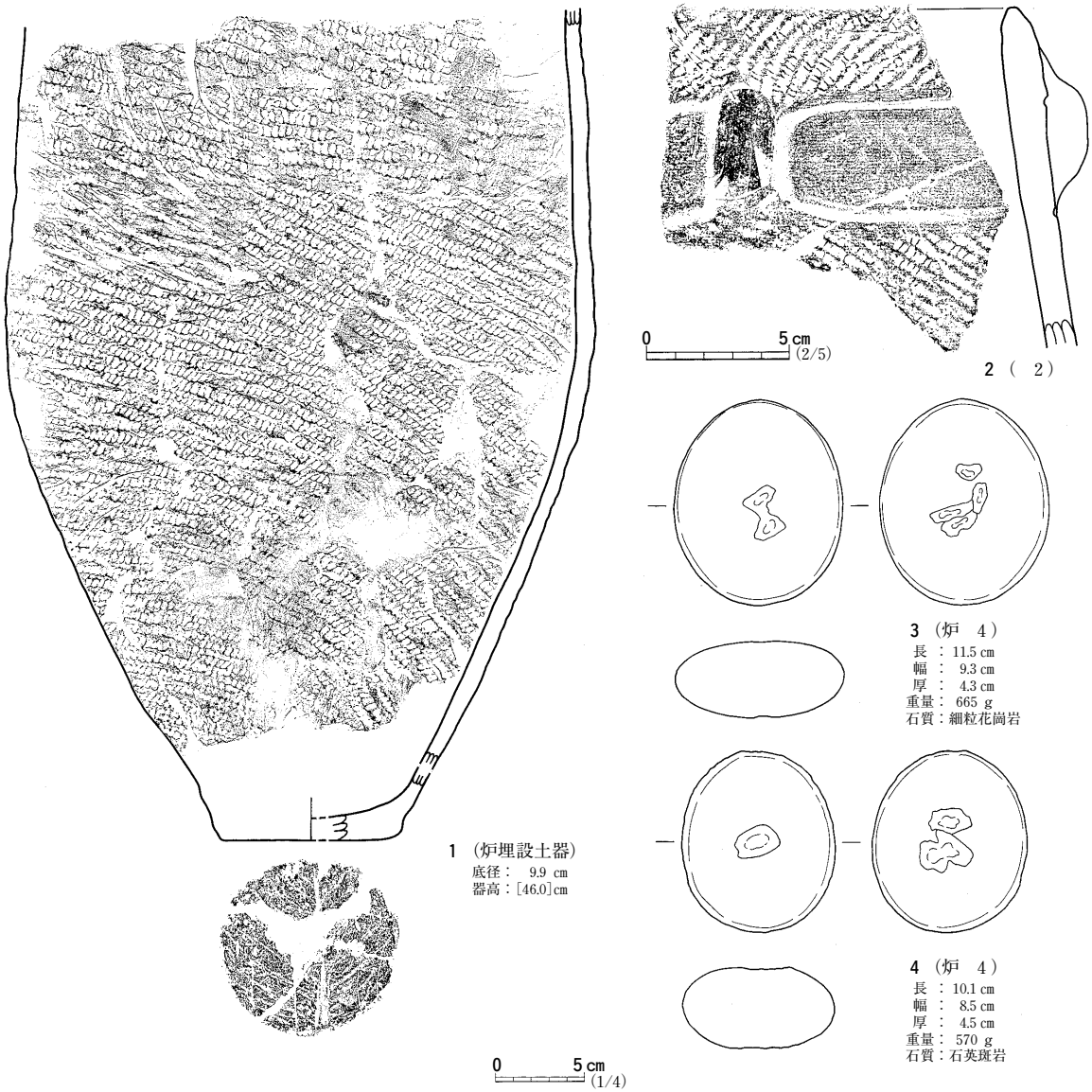


図41　39号住居跡出土遺物

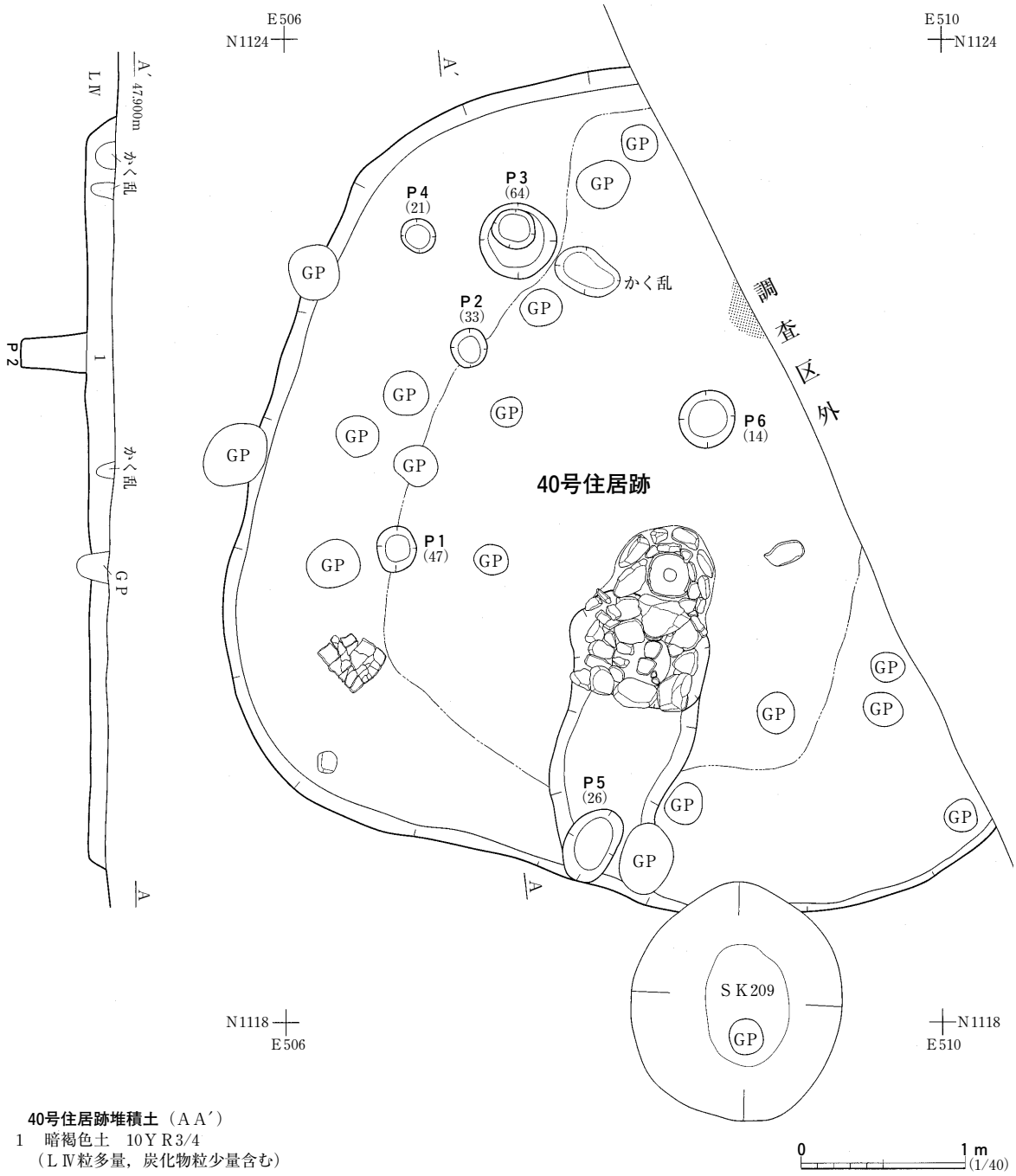
ま と め

住居跡は複式炉を有するものである。時期は埋設土器からは判断できないが，概ね縄文時代中期末葉のものであろう。本住居跡の炉埋設土器は，38号住居跡の炉埋設土器のものと類似している。主柱穴は２本を確認したのみで，明確にはすべての主柱穴を把握できなかった。　（吉　野）

40号住居跡　ＳＩ40

遺　　構（図42・43，写真６・43～46）

本遺構は南区北東部の平坦地に存在し，ＡＰ～ＡＱ56・57グリッドに位置する。本住居跡の北西に37号住居跡が隣接する。ＳＫ209と重複し，本遺構の方が古い。黄褐色土（ＬⅣ）上面で隅丸台形の落ち込みを検出し，これに合わせて南北方向に土層観察用のベルトを設置した。遺構内堆積土は黄褐色土粒と炭化物粒を含む暗褐色土の１層で，自然堆積と考えられる。



40号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）

図42　40号住居跡（１）

平面形は北東部が調査区外未確認であるが，長辺4.7m，短辺約4.2m程の隅丸方形と推測される。南西壁方向を主軸方位とすると，真東から75°程北側に傾く。壁高は10～17㎝で，南東壁は４㎝程と特に遺存状態が悪い。周壁は60°程度の角度で直線的に立ち上がる。床面は黄褐色土を掘り込んでほぼ平坦に造り出している。床面には周壁付近を除いて踏み締まりが認められた。

住居内施設として，炉跡２基，主柱穴３基，ピット３基が検出された。炉は複式炉と地床炉で，前者は床面南部に，後者は北部に位置する。複式炉は土器埋設部，石組部，前庭部より成り，炉の主軸線と住居跡の南西壁ラインは一致する。主柱穴と考えられるのはＰ１・３で，Ｐ１とＰ３を結

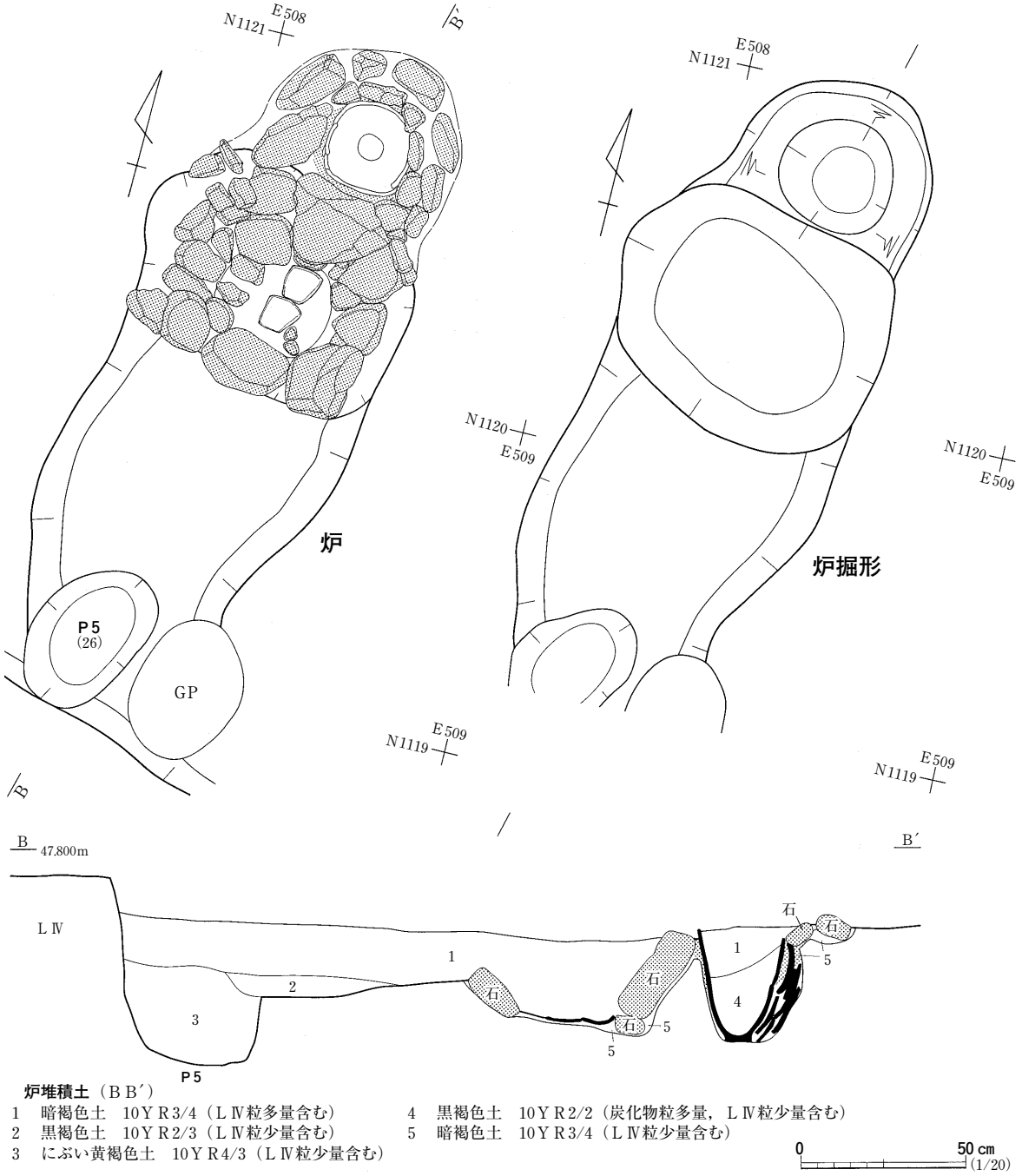


図43　40号住居跡（２）

ぶ線は北西壁とほぼ平行し，北西壁からの距離は約１ｍである。Ｐ１・３間の距離は2.1ｍである。Ｐ１は直径28㎝の円形で，深さは47㎝，Ｐ３は直径45㎝の円形で，深さ64㎝を測る。炉の主軸線からの距離はＰ１が西へ1.6ｍ，Ｐ３が西へ1.4ｍを測る。また，炉の主軸線を挟んでＰ１・３と対峙する位置にも主柱穴があると推定され，４本主柱あるいは炉の主軸線上の北側にもう１基柱穴がある５本主柱と考えられる。Ｐ１・３内には黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ５は炉の主軸線上に位置し，本住居跡の柱穴と考えられる。平面形は直径46㎝の円形で，前庭部底面からの深さは26㎝を測る。Ｐ５内には黄褐色土粒を含むにぶい黄褐色土が堆積している。Ｐ６は炉の主軸

線上に位置し，炉北端部から北側に50cm離れた位置にある。平面形は直径34cmの円形で，深さは14cmを測る。Ｐ２・４は各々Ｐ３の北西と東に位置する。平面形は直径20～24cmの円形で，深さは21～33cmを測る。Ｐ２・４・６内には黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積している。

複式炉は長径226cm，短径78cmの楕円形である。土器埋設部は長径60cm，深さ５cmの掘形中央を，さらに直径35cmの円形に約30cm深く掘り下げている。埋設土器はほぼ完形の深鉢が用いられ，上端部径28.1cm，底径7.7cm，器高37cmを測る。断面の観察より，掘形に土器を正位に据えた後，周囲に礫を固定していることがわかる。土器埋設部の掘形内には，埋設土器とは別個体の土器片が埋設土器の北半部を囲むように２個体分埋められていた。おそらく埋設土器の掘形が大きくなり過ぎたため，掘形の規模を調整し，補強する目的で設置されたのではないかと考えられる。埋設土器の上端には２重に礫が据えられ，内側は拳大，外側は掌大のやや細長い礫が用いられている。石組部の掘形は，長径86cm，短径68cmの楕円形で，深さが28cmを測る。この掘形に一辺70cm程の方形になるよう拳大から人頭大の礫を敷き詰めている。土器埋設部側には大型で扁平な礫を立て掛けて設置している。石組部底面には小礫と共に内面を上にした深鉢の体部破片（図44－３）や，底面を上にした底部破片（図44－４）も敷かれている。前庭部は南西壁際に接する。床面からの深さは15～22cmを測り，底面が北から南に向かって緩やかに傾斜している。前庭部底面に踏み締まりは認められなかった。前庭部南端には，前庭部底面からの深さが26cmを測るＰ５が存在する。土器埋設部と石組部の礫は殆どが火熱を受けて赤く変色したり，風化して脆くなったりしている。埋設土器周囲の土は焼土化していて，その範囲は埋設土器上端から幅最大１cm，深さ最大22cmに及ぶ。

炉内堆積土は５層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を含む暗褐色土で，炉全体を覆う。ℓ２は黄褐色土粒を含む黒褐色土で，前庭部中央付近に堆積している。ℓ３は黄褐色土粒を含むにぶい黄褐色土で，Ｐ５内堆積土である。ℓ４は炭化物を多く含む黒褐色土で，埋設土器内に上端から深さ最大15cmまで堆積している。ℓ５は黄褐色土粒を含む暗褐色土で，炉掘形埋土である。炉の機能時に堆積していたと考えられるのはℓ３～５で，ℓ１・２は本遺構の廃棄後に自然に流入した土と推測される。

地床炉は調査区外に及ぶため全容は不明であるが，焼土化した部分は厚さ最大１cmに及ぶ。

遺　　物（図44，写真217・229）

遺物は縄文土器片145点，石器２点が出土した。図44－１は炉埋設土器の深鉢で，胎土に長石・雲母・金雲母・酸化鉄粒・海綿骨針を含む。底部付近で一度くびれた後，緩やかに内湾しながら立ち上がる器形である。体部にＬＲ縄文を斜位に回転した後，口縁部に沈線を施している。口縁部と内面にはナデが施されている。２は炉の土器埋設部掘形内から出土した深鉢で，胎土に長石・石英・金雲母・酸化鉄粒・海綿骨針を含む。体部下半に最大径を持ち，体部上半は緩やかに外湾しながら立ち上がる。稜線区画の無文帯で「Ｓ」字状の文様を横位に展開するように施している。無文帯と器面内面にはナデが施されている。３は炉石組部の底面に敷いてあった深鉢の体部破片で，胎土に長石・石英・金雲母・酸化鉄粒・海綿骨針を含む。体部下半が緩やかに内湾しながら立ち上がり，

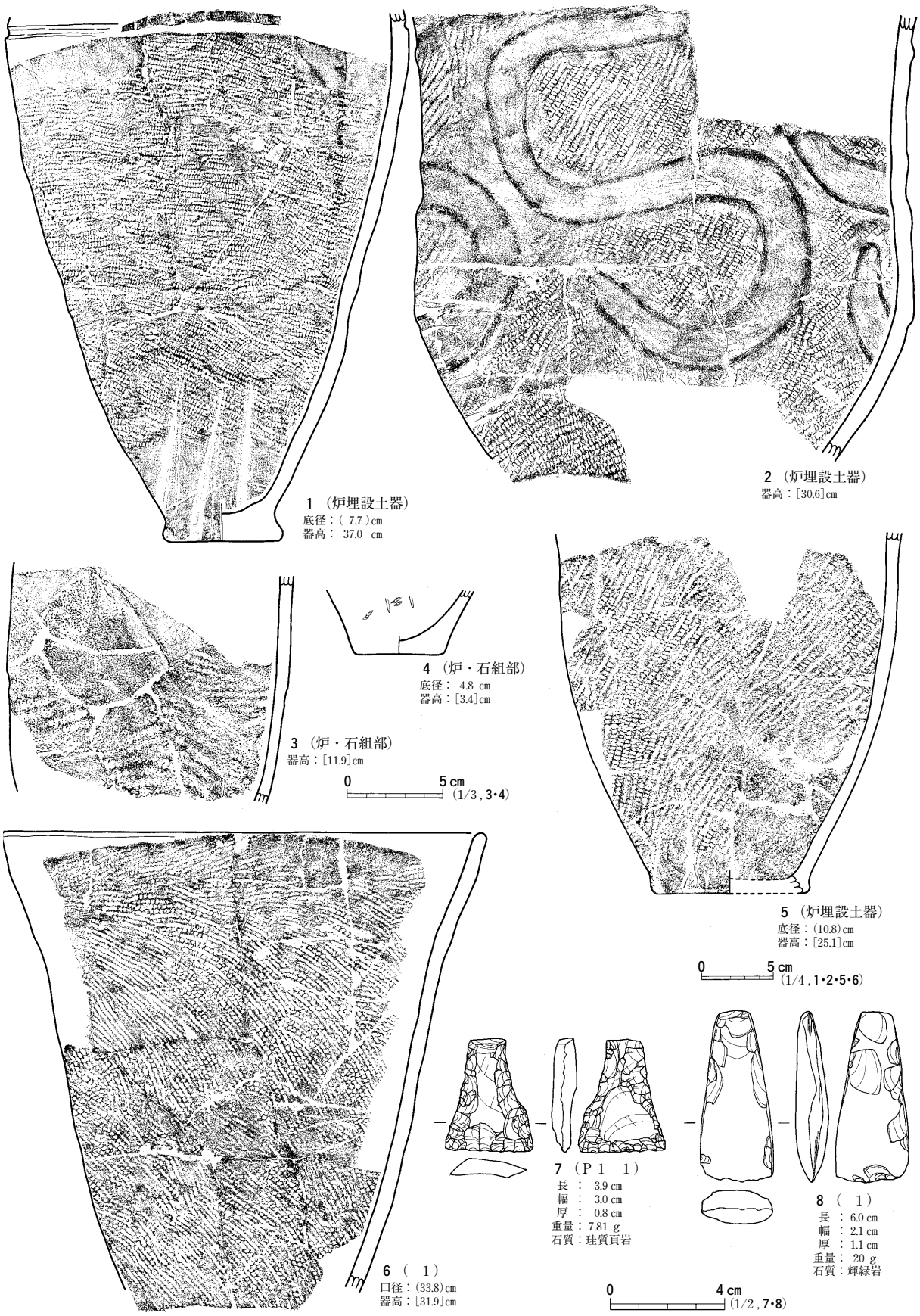


図44　40号住居跡出土遺物

体部上半はほぼ直立する。体部には沈線で区画された「U」字状の文様が施されている。内面は火熱を受けて器面が荒れ，外面は赤く変色している。４も同じく炉石組部の底面に敷いてあった小型深鉢の底部破片で，胎土に長石・石英・金雲母を含む。残存部位が少ないため文様の全容は不明であるが，体部に沈線で区画された垂下文が施されている。底部付近の体部は無文で，ミガキが施されている。内面も磨かれている。５は炉の土器埋設部掘形から出土した深鉢で，胎土に長石・雲母・金雲母を含む。体部にＲＬ縄文を縦位に回転させ，内面にはナデを施している。器面外面は熱で赤く変色し，体部下半外面にはタール状の付着物が認められた。６はℓ１から出土した深鉢で，胎土に長石・石英・金雲母・海綿骨針を含む。体部はほぼ直線的に立ち上がり，体部上位でくびれて口縁部がかるく外反する。口縁部から体部にかけてＬＲ縄文を縦位と斜位に回転している。器面内面にはナデが施され，口縁部付近は磨かれている。２は縄文時代中期末葉の大木10式土器，５は大木９～10式土器，１・４は中期末葉から後期前葉の土器と推測される。

７はＰ１のℓ１から出土した珪質頁岩製の石篦で，基部を欠損する。縦長剝片を素材とし，両面共に丁寧に調整されている。８はℓ１から出土した輝緑岩製の定角式磨製石斧である。両面に荒い剝離を施した後，研磨を行っている。

ま　と　め

本遺構は北東部が調査区外のため全容は不明であるが，4.2×4.7m程の隅丸台形の竪穴住居跡である。複式炉を持ち，４本主柱あるいは５本主柱と考えられる。時期は出土土器より縄文時代中期末葉と推測される。（坂　田）

41号住居跡　ＳＩ41

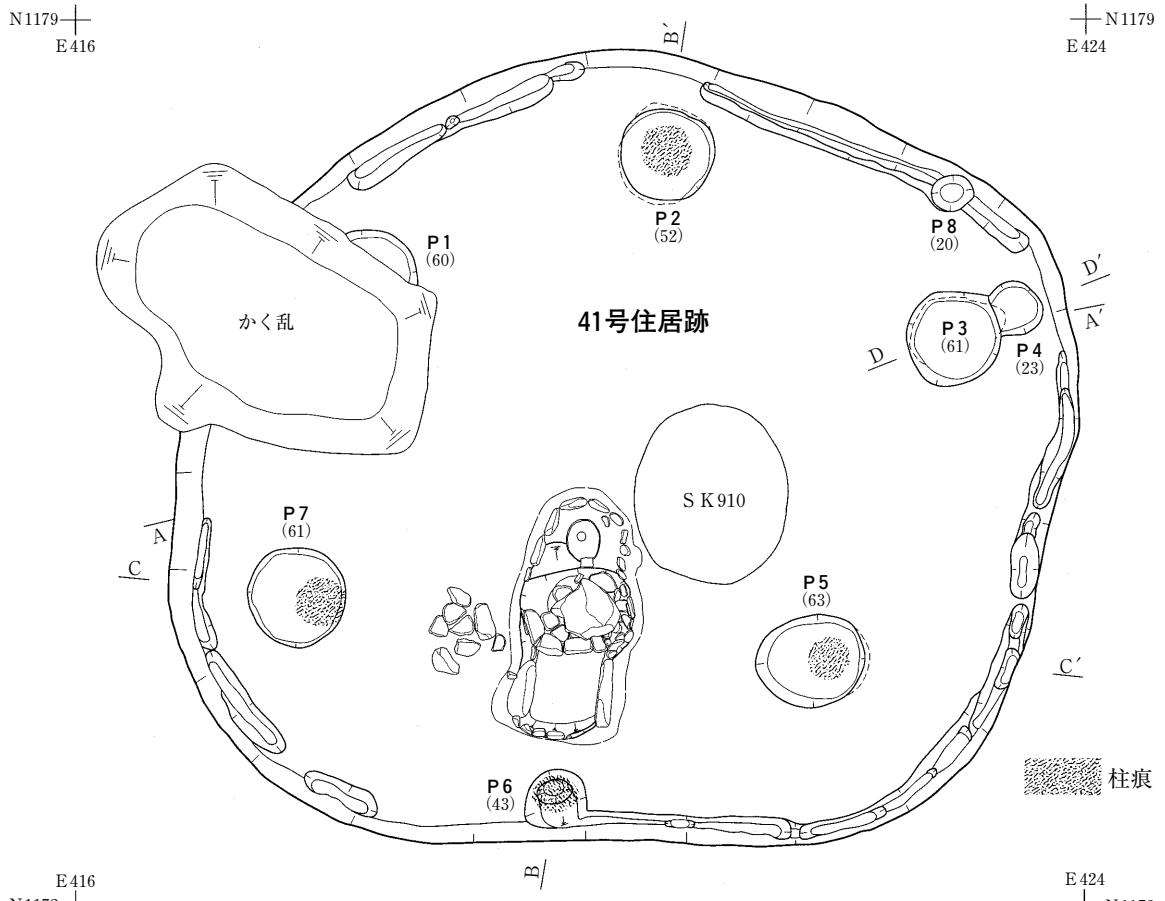
遺　　構（図45・46，写真７・８・47・48・51）

本遺構は南区の北西隅に位置し，Ｘ45・46，Ｙ45・46の４グリッドにまたがって位置する。本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において暗褐色土の楕円形状の広がりとして確認された。他の遺構との重複関係は底面中央部を精査中に土坑１基（ＳＫ910）を確認したのみであった。本遺構の北西隅は，重機による掘削で既に壊されていた。

本遺構の調査は楕円形の広がりのほぼ中央部から，東西南北に向かって十字形の土層観察用の帯を残し，掘り下げを開始した。その結果，本遺構の平面形は確認面での形状と異なり，東西長約７m，南北長約6.2mの丸味を帯びた五角形状と捉えられた。

周壁は底面から急な角度で立ち上がり，残存した壁の高さは，西側で最も高く底面から約40㎝を，最も低い東側で底面から約20㎝を計測する。底面はＬⅣ層を概ね平らに削り整え，その表面には非常に硬く締まった部位が所々見られた。

本遺構内の堆積土は９層に分かれる。上層のℓ１は炭化物を多量に含んだ黒褐色で，下層にある堆積土に比べ土色を異にしていた。この土中からは，大小さまざまな縄文土器片が丸い乾燥ザルにして10数個分出土した。ℓ１よりも下層では，土色以外に，出土する土器片の量も激減するといっ

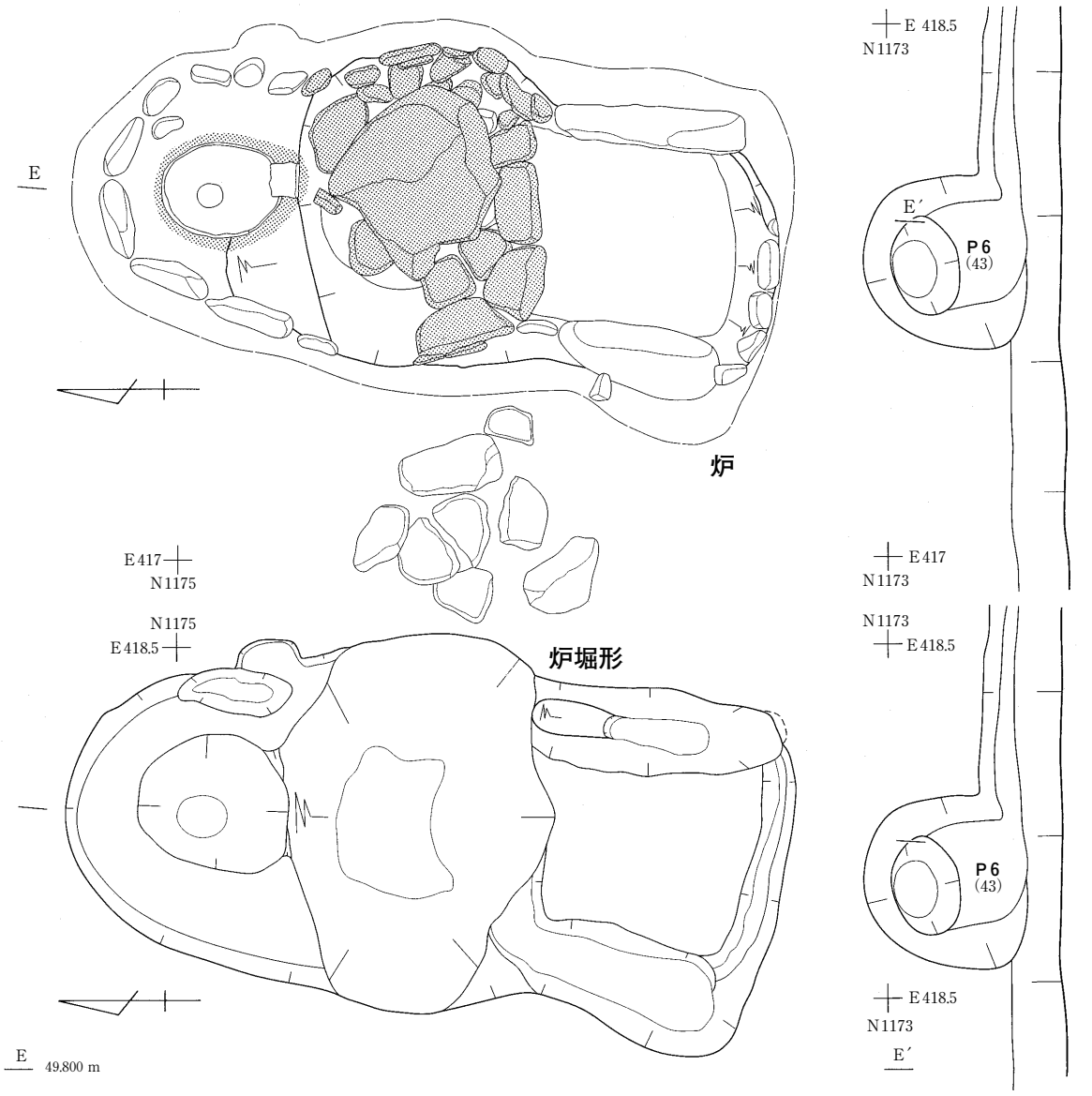


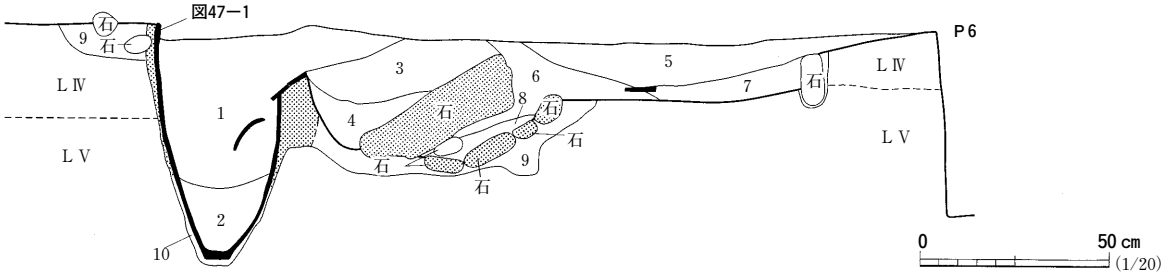
41号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2（炭化物粒多量含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
5　褐色土　7.5ＹＲ4/6（黒褐色土塊含む）
6　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量含む）
7　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
8　褐色土　7.5ＹＲ4/4
9　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4

Ｐ２～７堆積土（ＢＢ′・ＣＣ′・ＤＤ′）
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4（炭化物粒含む）
2　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
3　褐色土　7.5ＹＲ4/3
4　極暗褐色土　7.5ＹＲ2/3
5　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒・塊少量含む）
6　にぶい橙色土　7.5ＹＲ6/4（ＬⅣ粒多量含む）
7　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ粒・ＬＶ粒少量含む）
8　褐色土　7.5ＹＲ4/4

0　2 m
(1/60)

図45　41号住居跡（１）





炉堆積土

1　褐色土　7.5ＹＲ4/3（炭化物粒含む）
2　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2（炭化物粒少量含む）
3　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ塊少量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/6
5　褐色土　7.5ＹＲ5/4
6　褐色土　7.5ＹＲ4/6
7　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ砂粒少量含む）
8　極暗褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒多量含む）
9　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅤ粒多量含む　掘形埋土）
10　極暗褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒少量含む　掘形埋土）

図46　41号住居跡（２）

た違いも認められた。ℓ１下位の堆積土は周囲から流れ込んだ土により，自然に埋没していったものと考えられる。

底面上を移植鏝で丁寧に削り進めると，丸いピットの他に，壁際に沿って断続的に延びる溝跡，そして南壁中央部付近において南北に長い楕円形状の広がりも確認できた。長楕円形状の広がりのすぐ西側の底面上からは20㎝前後の花崗岩の円礫や板石が８個ほどまとまって出土した。

底面の調査は，長楕円形状の広がりに，南北方向の土層観察帯を残し，西半分の掘り下げから実施し始めた。しばらく掘り下げると，長楕円形の広がりの北端からは，大振りの土器が１個体埋め込まれていた。その土器の口縁部が顔を出している周囲の土は熱により赤く変色していた。埋設された土器に南接する個所は一段低くなり，その底からは長さ45㎝ぐらいの大きな花崗岩の板石が出土した。さらに，くぼみは同じ深さで南へと続いていた。

以上のことから，底面で確認された長楕円形状の広がりは炉跡である可能性が高くなった。この時点で，本遺構は住居跡，底面は床面として再認識できた。

炉跡は完全な形の土器１個体を埋め込んだ複式炉で，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっている。炉跡の平面形は南北に長い楕円形をなし，規模は土器埋設部先端から前庭部末端まで約190㎝を測る。その長軸方向はほぼ真北を指し示している。炉跡内の堆積土は10層に分けられ，この内ℓ９・10の２層は掘形埋土で，埋設土器の周囲のℓ９は土器上半部から床面までの範囲は土器内側からの熱により焼土化していた。

炉跡を各部位別にみてみる。土器埋設部には，ほぼ完全な形の深鉢形土器を土中に埋め込んでいた。埋設土器の周囲は拳大の石で半円形状に並べ縁取られている。床面から埋設土器の底までの深さは60㎝ほどであった。土器埋設部を断ち割り，土層を観察したところ埋設土器の上半部から床面にかけての周囲の土は，土器内側からの加熱により赤く変色していた。

石組部の遺存状況は良好とはいえ無かった。石材には20㎝前後の花崗岩の板石と円礫を主に用い法面から底面にかけて敷き詰められていた。北側の法面には，土器埋設部との境に固定されているはずの大振りの花崗岩の板石がはずされ，底面の円礫上に横倒しになっていた。

炉跡の西側には，石組部の石材と思われる８個の花崗岩が一まとめになっていた。この事象は，炉跡廃棄時に，石組部から意図的に石が抜き取られ，その石を脇に置いたものと推測される。

前庭部は石組部南端から70㎝の長さで連結している。前庭部の壁際をみると，まず東・西壁に沿って底面から10～15㎝ほどの深さの溝状に掘り込み，その中に長さ約55㎝，幅30㎝ほどの板石を立てて固定している。南縁には石の幅に合わせて掘った溝の中に15㎝大の小振りの偏平な石を５個程度固定し縁取りがされている。

床面からは炉跡の他に，８基のピットと壁溝も確認されている。

確認された８基のピットは，北西側にあるＰ１から順に時計回りでＰ８まで番号を付けた。

ピットの平面形は円形および楕円形をしている。それらの規模は大小２種類に大別された。まず，Ｐ１～３・５・７の５基では，平面規模は直径（長径）70～85㎝，床面からの深さは52～63㎝を測

る。残りのＰ４・６・８の平面規模は，直径（長径）34～50cm，床面からの深さは20～43cmを測る。これらの断面形状は確認面直径に比して底面直径の方が小さくなる箱形状を基調としている。

床面上のピットの配置を観察すると，炉跡を中心にして６基のピットが六角形状に配されていることに気付く。また，炉跡の軸線の延長線上にはＰ２とＰ６が存在することも分かった。

以上のようにピットの規模と配置を検討すると，炉跡を中心に六角形状に配置されたＰ１～３・５～７は，本住居跡の上屋を支えた柱穴であったと考えられる。確認できた柱穴の大半は掘形のみであった。土層断面および柱穴の上面にて柱の痕跡が確認できたピットは，Ｐ２・５～７の４基だけであった。柱痕跡はいずれも炭化物粒をわずかに含んだ褐色土として確認され，それらの最大直径はＰ２で約40cm，Ｐ５で約35cm，Ｐ６で約25cm，Ｐ７では約40cmを計測する。

各主柱穴間の距離をみてみると，Ｐ１北東縁～Ｐ２南西縁，Ｐ５南西縁～Ｐ６北東縁までの間隔は約1.6m，Ｐ２南東縁～Ｐ３北西縁，Ｐ３南縁～Ｐ５北縁，Ｐ６北西縁～Ｐ７南東縁での間隔はいずれも約２ｍを測る。Ｐ１～Ｐ７の距離は，間にかく乱が入っているため計測しなかった。

壁溝は，ほぼまんべんなく壁際に沿って断続的に設けられていた。壁溝の幅はいずれも20cmほどであった。その長さは，長いもので弓なり状に約300cm，短いもので約50cmほどであった。壁溝の深さは所々で異なり，浅いところでは床面から15cmほどで，特に西壁沿いの溝が深く床面から約40cmを計測した。

床面上精査の結果，床中央部からは１基の土坑（ＳＫ904）が確認されている。この土坑は，床面の精査時に初めてその存在を確認できた。土坑内の堆積土の上層は，踏み締められたため，かなり硬くなっていた。以上の事実から，床面から確認された土坑は，本住居跡よりも古く，土坑の上部構造は本住居跡を掘りくぼめた時点で失われてしまったと推察する。

遺　　物（図47，写真217・227）

出土した遺物の大多数は縄文土器片で，その他に磨石，石鏃，剝片などが数点ずつ確認されている。出土した縄文土器片の大半は住居跡内堆積土最上層，炭化物粒を多量に含んで黒褐色のℓ１中から採取されている。縄文土器片の多くは深鉢形土器の胴部片（破片数にして約350点）で，出土した口縁部及び底部の破片数は胴部片の１割程度であった。出土した破片も完全な形まで接合できるものは皆無で，大きくても両手を合わせた程度の破片にしか接合できなかった。

特にℓ１から出土した縄文土器片の外面の文様は，その多くが全面に縄を転がしたものばかりで，内部に縄文を加えた区画文様を描く大木９・10式段階の土器片も極わずかであった。確認できた口縁部片の特徴は端部の直下に幅１cmほどの太めの沈線を一条巡らし，その下の全面には縄目を施文している。

出土遺物の内，炉跡に埋設された土器，床面から出土した遺物から，形状の判明するもの計９点を図47に示した。

１は炉に埋設されていた深鉢形土器で，ほぼ完全な状態で出土した。土器は高さ59.9㎜を計測し，馬場前遺跡内で出土した縄文土器の中で１番，２番を争うほどの大きさを誇る。また，土器の底径

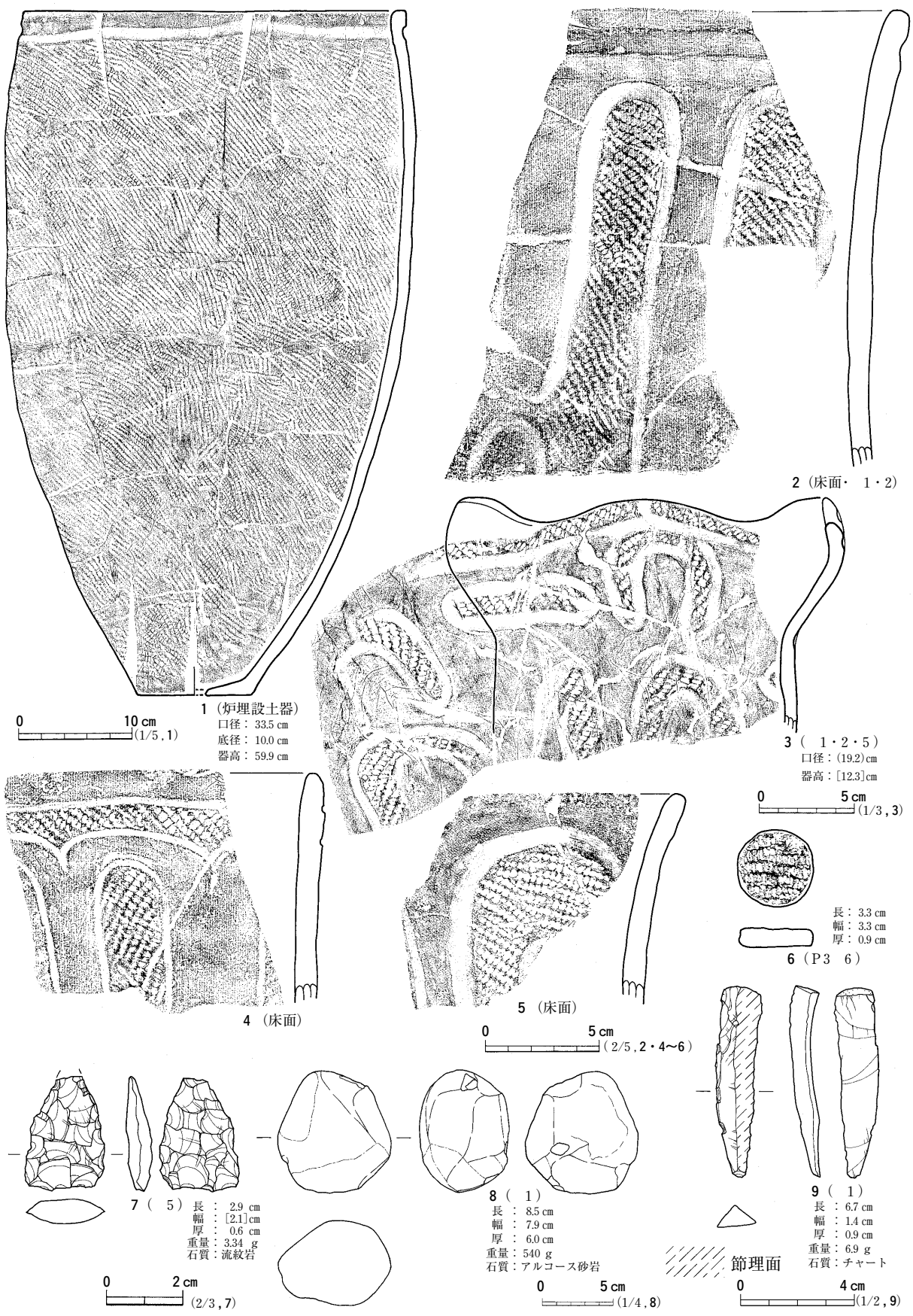


図47　41号住居跡出土遺物

は口径の３分の１ほどであるため，中に重しを入れず底を下にしたままの状態では非常に安定が悪く，平らなところに置くことが出来なかった。まさに，土中に埋め込むことを予め想定して作られた土器のような印象を受ける。器形をみると，直径10㎝程の小さな底面から，胴部が緩く外傾し，胴部上方にてわずかに内傾し始め口縁部に至る。胴部の最大直径は胴部上半にて確認できた。底面は焼成後に直径２㎝ほどに丸く刳り貫かれていた。くすんだ乳白色に発色した土器の胎土には１㎜ほどの礫を多量に含んでいる。土器の外面は口縁部直下に幅１㎝ほどの太い沈線を一条巡らし，その下の胴部全面にＲＬの縄を転がしている。底部付近では縄文を転がした後，再びケズリのような調整で縄目を消している。

２～５は，外面に描かれた図柄の中に縄文を加えた深鉢形土器の破片である。

２は口縁部直下に太い水平な沈線を引き，その下に「Ｈ」字状の図柄を描いている。この土器片は大木９式段階のものと思われる。

３はキャリパー形で，その口縁部は波打つように形作られている。３の外面文様を見ると，まず口縁部端には口の形状に合わせ波打つ沈線を引き，その上部には縄文を加えている。その直下の胴部には上下二段に「ｎ」字状を，その合間を埋めるように「ー」や「Ｉ」字状の図柄が描かれている。区画された図柄の内部には縄文を加えている。

４は口縁部直下に水平な沈線と２㎝ほど間を空けて波状の沈線を描いている。２種類の沈線間には縄文を加えている。さらに，その文様下には，内部に縄文を加えた縦長の曲線を描いている。

５は口縁部直下に二重になる縦長の曲線を描き，その中には縄文を加えている。３～５の３点は大木10式段階と思われる。

６は縄文土器片を材料に作られた土製円盤である。その側面は滑らかに仕上げられている。

７～９は住居跡覆土内から出土した石器である。７は，先端及び基部をわずかに欠いた流紋岩製の石鏃である。その基部は中央部でわずかにくぼんでいる。８は砂岩製の磨石で，多少ザラつく磨り面が各面に認められる。９はチャートの原石から剝がした縦長の剝片である。その上部には自然面，長辺の一側面には節理面が残っていた。

ま　と　め

本遺構は丸味を帯びた五角形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。

41号住居跡は，１基の複式炉，６基の柱穴（Ｐ１～３・５～７）そして断続的に巡る壁溝を備えている。本住居跡は既にあった１基の土坑（ＳＫ910）を壊して掘り込まれている。

複式炉は，土器埋設部，石組部そして前庭部の三部から構成され，土器埋設部および前庭部の周囲には大小さまざまな花崗岩を並べ縁取りされている。

本住居跡内の堆積土に注目してみると，本住居跡内の堆積土最上層には，土器片と炭化物粒を多量に含んだ黒褐色土（ℓ１）が薄いレンズ状に堆積していた。このような事例は，馬場前遺跡南区のＳＩ31・44・96でも見られる。

本住居跡がその役目を終え廃絶した後，屋内に周囲から土が流れ込み，廃絶後の本住居跡は一見

してクレーター状のくぼみと化していたことが想像される。このくぼみは，当時周囲で生活を営んでいた縄文時代の人々が「ゴミ捨て場」として使用していたものと想定される。その結果，くぼみの上層には土器片と共に，有機質を多く含む黒褐色土が堆積したものと想定される。

本住居跡の機能時期は，炉跡に埋設された深鉢形土器，床面付近から出土した縄文土器片の文様の特徴などから，大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

42号住居跡　ＳＩ42

遺　　構（図48・49，写真７・８・49・50・52）

本遺構は南区の北西隅に位置し，W46・47，Y46・47の４グリッドにまたがって位置する。本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において円形状の広がりとして確認された。他の遺構との重複関係は無かったものの，北西隅は重機による掘削で既に壊されていた。

本遺構の調査は円形の広がりのほぼ中央部から，北東から南西に向かって一本の土層観察用の帯を残し，掘り下げを開始した。その結果，本遺構は直径5.2ｍの円形として捉えられた。

周壁は底面から急な角度で立ち上がり，残存した壁の高さは，東側で高く底面から約12㎝を計測する。底面はＬⅣ層を概ね平らに削り整え，その表面は非常に硬く締まった部位が所々見られた。本遺構内の堆積土は，厚くないものの３つに分層される。

底面上を移植鏝で丁寧に削り進めると，丸いピットの他に，壁際に沿って断続的に延びる溝跡，そして南壁中央部付近において南北に長い楕円形状の広がりが確認できた。

底面の調査は，長楕円形状の広がりに，長軸方向の土層観察帯を残し，西半分の掘り下げから実施し始めた。しばらく掘り下げると，長楕円形の広がりの北東端に土器が１個体埋め込まれていることが分かった。土器周囲の土は熱により赤く変色していた。埋設された土器に南接する個所は一段低くなり，その底からは長さ20㎝前後の花崗岩の円礫や板石が出土している。さらに，くぼみは同じ深さで南へと続いていた。

以上のことから，底面で確認された長楕円形状の広がりは炉跡である可能性が高くなった。この時点で，本遺構は住居跡，底面は床面として再認識できた。

炉跡は完全な形の土器を埋め込んだ複式炉で，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっている。炉跡の平面形は南北に長い楕円形をしている。規模は土器埋設部先端から前庭部末端まで約185㎝を計測し，その長軸方向は真北に対し約35度東に傾いている。炉跡のすぐ西側は，近年の掘削によりわずかに削り取られていた。炉跡内の堆積土は５層に分けられ，この内ℓ５は掘形埋土であった。

炉跡を各部位別に見てみると，土器埋設部の外周には半円形状に石を配している。埋設土器は，当初完形の深鉢形土器を１個体埋め込んでいるものと思われた。土器埋設部を断ち割り，土層を観察したところ，最初に確認した埋設土器は，底の抜けた大振りの土器の内側に納まっていることが分かった。土器埋設部の土を見ると，内側の土器の胴部から外側の土器の上半部にかけての埋土が，

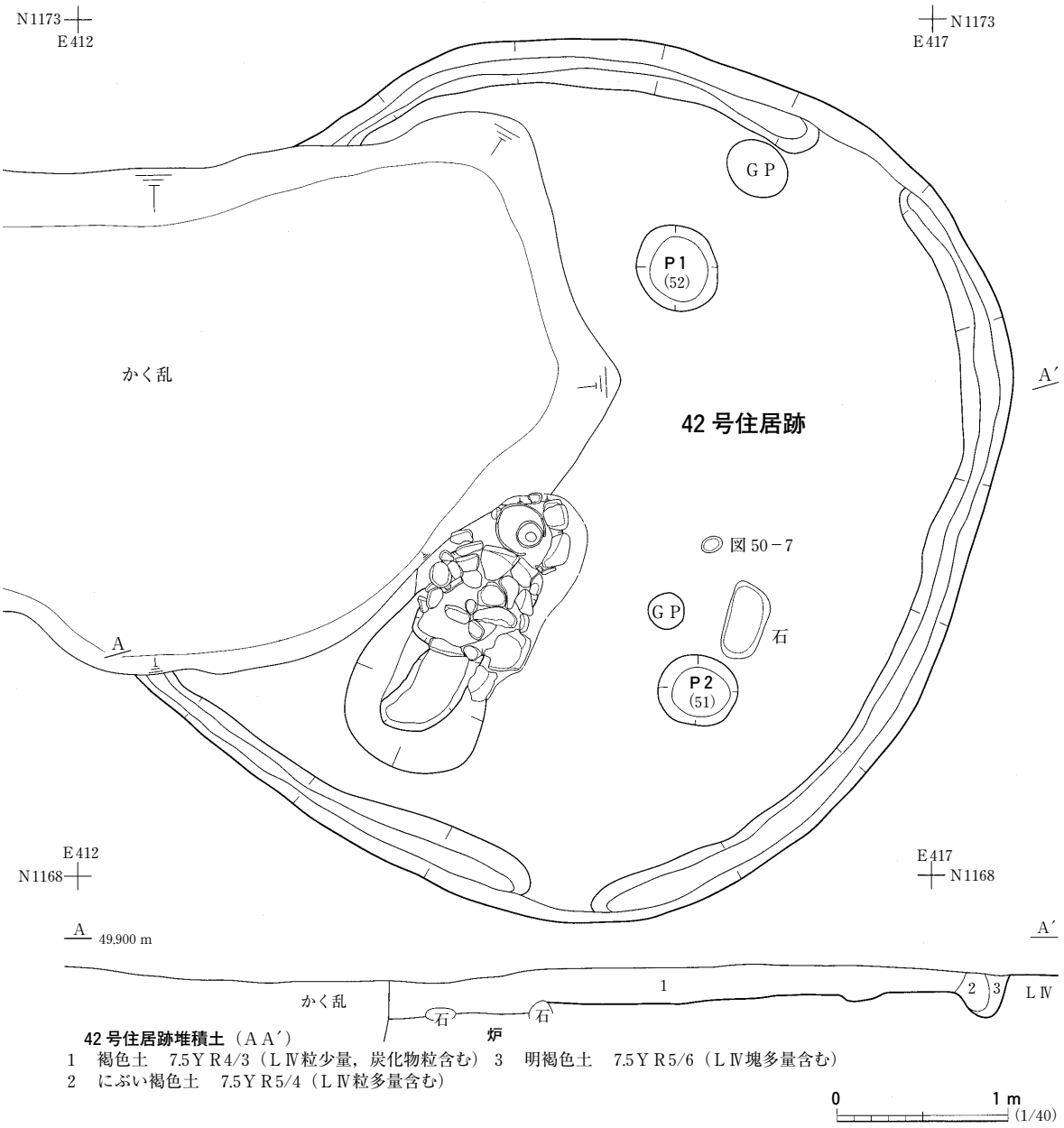


図48　42号住居跡（１）

内側の土器内部からの熱により赤く変色していた。

石組部の遺存状況は南端部分の石が数個ほど無いものの，比較的良好であった。石材には20cm前後の花崗岩の板石と円礫を主に用い，法面から底面にかけて敷き詰めている。石の表面は熱を受け薄らと赤く変色していた。

前庭部は石組部南端から75cmの長さで連結していた。前庭部の底面はわずかに一段低くなっている。

床面上の精査の結果，炉跡の他に，２基のピットと壁溝も確認されている。

床面上から確認された２基のピットは，北西に位置するＰ１，南東に位置するＰ２である。ピットの平面形は円形ないし楕円形をしている。Ｐ１・２では直径（長径）47～50cm，床面からの深さ

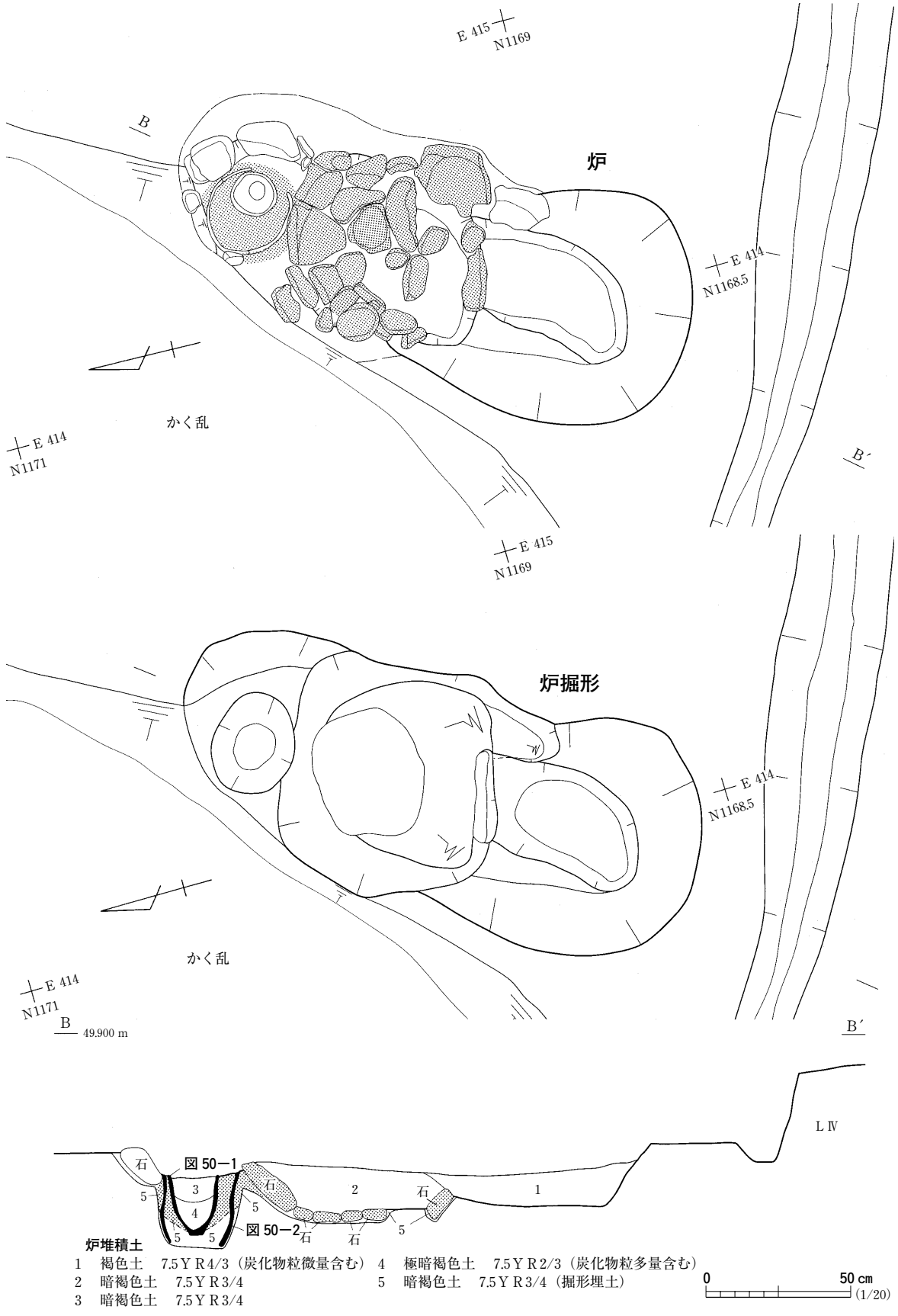

E 415
N1169
B
炉
E 414
N1168.5
かく乱
E 414
N1171
B′
E 415
N1169
炉掘形
E 414
N1168.5
かく乱
E 414
N1171
B
49.900 m
B′
L Ⅳ
石
図 50－1
3
4
5
5
5
5
石
2
石
1
図 50－2
石
石
5
炉堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/3（炭化物粒微量含む）
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
3　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
4　極暗褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒多量含む）
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（掘形埋土）
0
50 cm
(1/20)

図49　42号住居跡（２）

は51cm前後を測る。確認できた柱穴内からは柱痕跡は見られず，すべて掘形のみであった。床面上のピットの配置を観察すると，炉跡を中心にして２基のピット，Ｐ１・２が配置されていることに気付く。Ｐ１・２はその規模と配置から，本住居跡の上屋を支えた柱穴と考えられる。確認された２基の柱穴の配置をよく見ると，炉跡の西側がかく乱により壊される以前では，炉跡を中心に３基の柱穴が三角形状に配置されていたと思われる。２基の柱穴間の距離をみてみると，Ｐ１南東縁～Ｐ２北西縁までの間隔は約２ｍを測る。

壁溝は，北東および南東側の２ヶ所で途切れるのみで，ほぼまんべんなく壁際に沿って設けられていた。壁溝の幅はいずれも25cmほどで，深さは所々で異なり，最も深いところでも床面から約15cmを計測した。

遺　　物（図50，写真218・227・232～234）

出土した遺物の大多数は縄文土器で，その他に土製円盤，石斧，磨石，剝片が極わずか出土している。遺物の出土した層位は土器埋設部，床面そして本住居跡内堆積土ℓ１中から出土している。その内，８点を図50に示した。全体の形状の分かる土器は，土器埋設部に入れ子状に埋設されていた２個体の深鉢形土器のみであった。

１は，入れ子状になった埋設土器部の内側に埋め込まれた深鉢形土器である。土器は底面の一部と口縁部を欠損していた。器形は底面から外傾し，胴部中程に至って若干くびれ，徐々に外反してゆく。残っていた土器の高さは約27.5cm，その最大直径は胴部上半部にあり約21cmを計測する。土器の内外面は共に被熱により斑点状に薄ら赤味を帯びた乳白色をしている。土器の外面文様をみると，胴部中程に描かれた一条の波状沈線を境に，上下で文様が異なっていた。波状沈線の上半分では丸味を帯びた「N」字状の図柄を描いた後，その内部に縄を転がしている。波状沈線の下位では，全面に縦方向から縄を転がし，底面付近ではあらためてナデ状の調整で縄目を消している。１は外面の文様の特徴から，大木10式段階の土器と思われる。

２は，１の外側に埋め込まれていた深鉢形土器である。土器の口縁部及び底部は既に欠損していた。赤褐色の土器の胎土中には１㎜前後の礫が多く含まれていた。残存する器形は，胴部中程にて軽く括れるように形作られている。胴部の最大直径は１の土器よりも10cmほど大きく，胴部中程にて約30cmを計測する。外面の文様は胴部の括れを境に上下で異なっている。上下の文様の間には波状沈線などは施文されていなかった。残存する胴部上半部には「C」字状と思われる図柄を描き，その内部に縄文を加えている。また，胴部下半にあたる部位には，「C」字状の図柄の内に施文した縄よりも，若干細めの縄を全面に転がしている。２は文様の特徴から大木10式段階の土器と思われる。

３は，住居跡内の堆積土ℓ１から出土した深鉢形土器の口縁部片である。口縁部直下には端部に平行して一条の低い隆線が巡っている。さらに，その下には２本の対をなす隆線で曲線を描き，その内部に縄を転がしている。３の土器片は，大木10式段階のものと思われる。

４は縄文土器片を材料に作られた土製円盤である。その側面は滑らかに仕上げられていた。

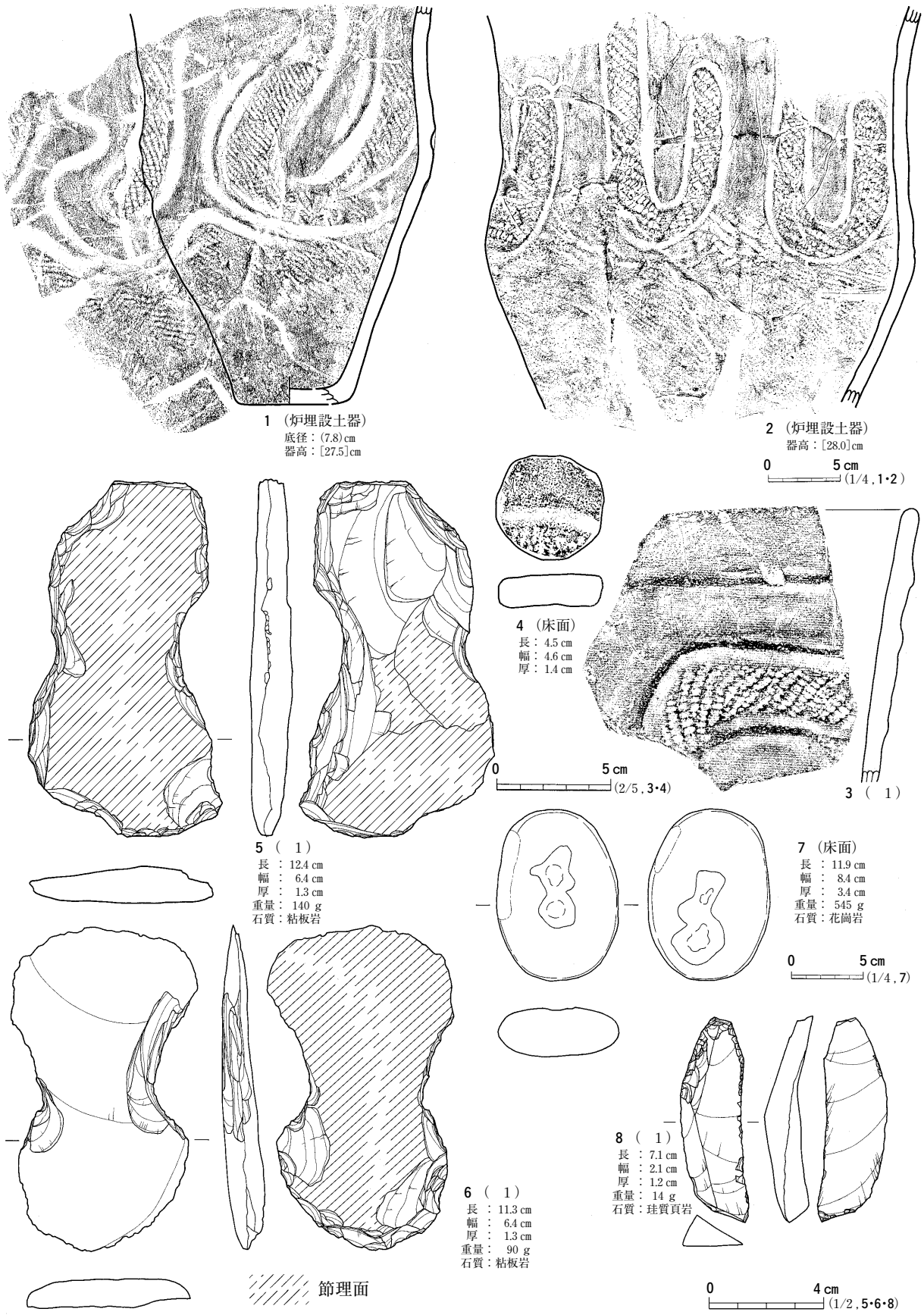


図50　42号住居跡出土遺物

５～８の内，７以外は住居跡内堆積土のℓ１中から出土した石器である。５・６は，共に粘板岩製の打製石斧である。両者ともほぼ同じ大きさ，同じ厚みの分銅形に作られており，表・裏側ないし片側には節理面が見られる。

７は床面上から出土したくぼみ石である。石の表裏には，わずかな深さのくぼみを持ち，側面には一ヶ所だけザラつく磨り面が観察できる。

８は欠損の無い珪質頁岩製の掻器と思われる。この石器は住居跡の覆土中から出土したものの，旧石器時代の石器であることから，42号住居跡内部の精査終了後に，本住居跡外縁にある基盤層の掘り下げを実施した。基盤層であるＬⅣ層の掘り下げは，本住居跡の位置するW46・47，X46・47の５ｍ四方の４グリッドを１ｍおきに再度区切り，１ｍ四方の区切りを千鳥状に選択し，移植鏝で確認面から10～15㎝ほどの深さになるまで２度に分けて実施した。ちなみに，本住居跡の付近の基盤層の層位をみると，ＬⅣ層の上面から50㎝ほど下げた時点で，花崗岩の風化した細かな礫が主体となるＬＶ層に達する。掘り下げを試みた結果，土中より出土したのは数㎝ほどの花崗岩質の礫がわずかに確認できた程度で，旧石器時代の遺物と思われる石片などは確認できなかった。

ま　と　め

本遺構は円形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡であった。

42号住居跡は１基の複式炉，２基の柱穴そして断続的に巡る壁溝を備えている。現状で確認された柱穴は２基であるが，当初は炉跡を中心に３基の柱穴が配置されていたと思われる。

複式炉は長楕円形状の平面形をもち，南壁寄りに設けられている。炉跡は北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっており，土器埋設部および前庭部の周囲には大小さまざまな石を立てるように並べ縁取られている。土器埋設部には大きさの異なる２個体の深鉢形土器を入れ子にして埋め込まれていた。このように，土器埋設部に大小２つの土器を入れ子にしている事例は，馬場前遺跡南区ではＳＩ46でも認められた。

本住居跡の機能時期は，複式炉に埋設された２個体の深鉢形土器の特徴から大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

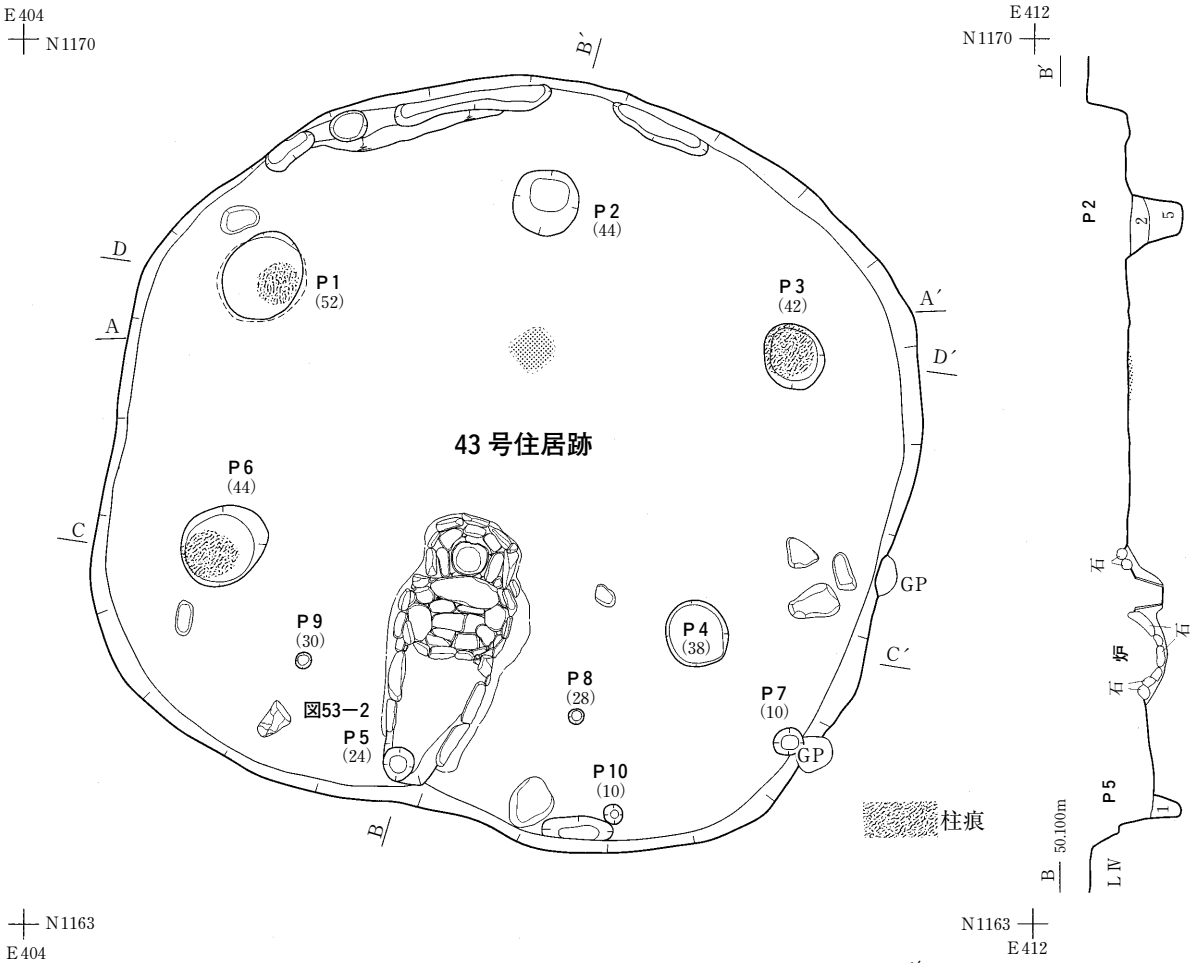
43号住居跡　ＳＩ43

遺　　構（図51・52，写真７・９・53・54・57）

本遺構は南区の北西隅に位置し，Ｖ47・48，W47・48の４グリッドにまたがって位置する。本遺構は，基盤層であるＬⅣ層上面において暗褐色土の楕円形状の広がりとして確認された。

本遺構は数基のグリッドピットによって壁面の一部を壊されていた。さらに，南西壁側では１基の土坑（ＳＫ292）を確認し，土層断面観察の結果，この土坑の方が本遺構よりも古く，本遺構が土坑の東側壁の一部を壊していることも判明した。

本遺構の調査は楕円形の広がりのほぼ中央部から，東西南北に向かって十字形の土層観察用の帯を残し，掘り下げを開始した。その結果，本遺構の平面形は確認面での形状と異なり，東西長約6.2



43 号住居跡堆積土（ＡＡ´）

1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
2　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
3　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
4　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
5　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
7　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
8　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ塊多量含む）
9　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒含む）

Ｐ１～６堆積土（ＢＢ´・ＣＣ´・ＤＤ´）

1　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ塊含む）
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（炭化物粒少量含む）
3　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ塊多量含む）
4　黒褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/2
5　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6

図51　43号住居跡（１）

m，南北長約６ｍの丸味を帯びた五角形状として捉えることができた。

周壁は底面から急な角度で立ち上がる。残存する壁の高さは，東側で最も高く底面から約35㎝，西側では比較的低く約15㎝ほど残っていた。

底面はＬⅣ層を概ね平らに削り整え，その表面は全体的に非常に硬く締まっていた。

本遺構内の堆積土は９層に分かれる。これらの堆積土は周囲からの流れ込み土により，自然に埋没していったものと考えられる。

底面を移植鏝で丁寧に削り進めると，５基のピットの他に，壁際に沿って巡る溝跡，そして南壁付近において，数個の石が土中から顔を出している長楕円形状の広がりも確認できた。

底面の調査は，長楕円形状の広がりの南北方向に，土層観察帯を残し，西半分の掘り下げから実施した。しばらく掘り下げると，長楕円形の広がりの北端には，石に縁取られた内部に土器が埋め込まれていた。土器の上部が顔を出した周囲の土は，熱により赤く変色していた。埋設された土器に南接した個所は浅い皿状にくぼみ，その法面及び底面には隙間無く板石と円礫が敷き詰められていた。さらに，石を敷き詰めた部分の南側にはＬⅣ層を半円形状に掘りくぼめた部分が続いている。

以上のことから，底面で確認された長楕円形状の広がりは，炉跡である可能性が高くなった。この時点で，本遺構は住居跡，底面は床面として再認識することができた。

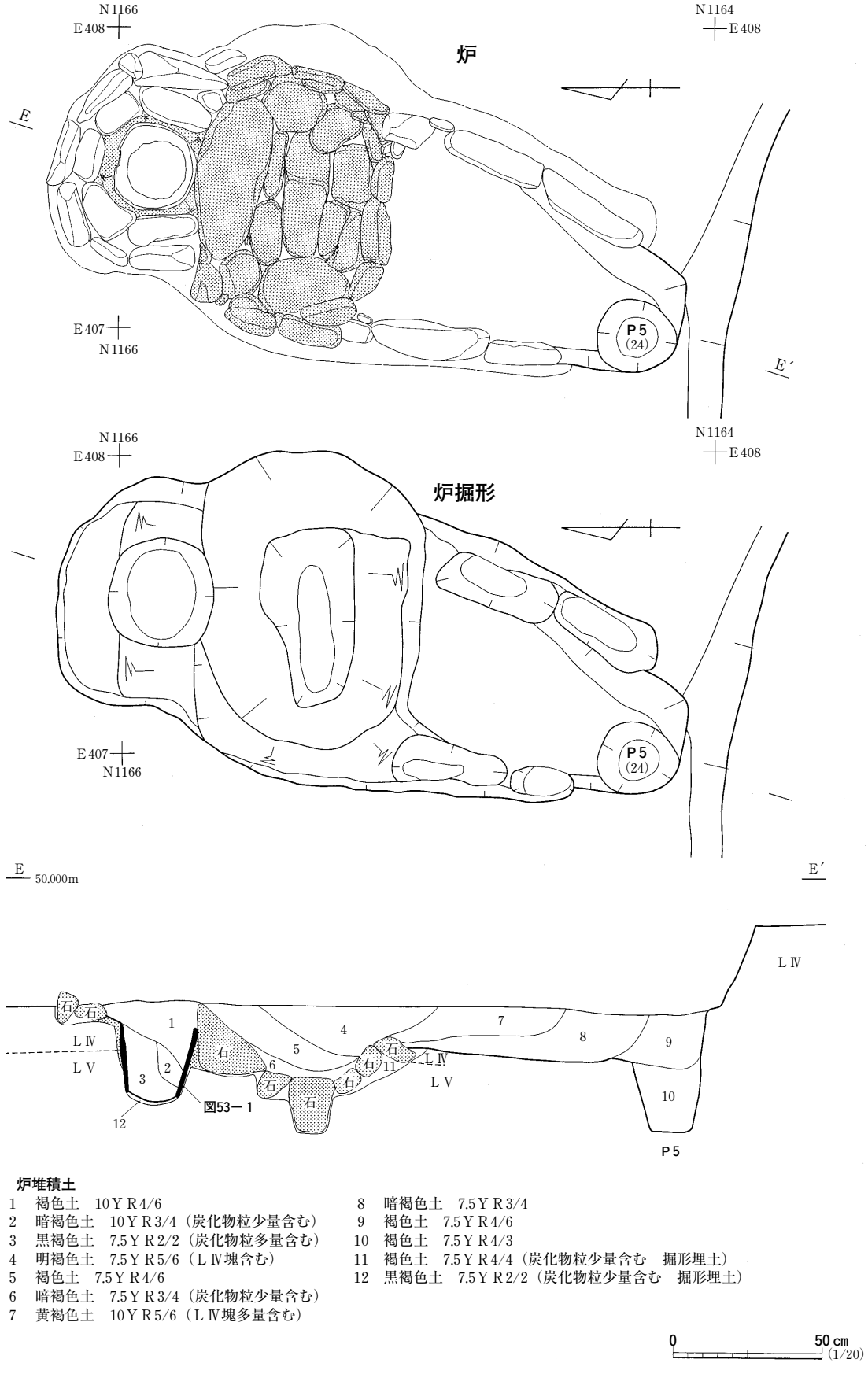
炉跡は土器を１個体埋め込んだ複式炉で，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっている。炉跡の平面形は南北に長い楕円形をしている。規模は土器埋設部先端から前庭部末端まで約220㎝を測る。その長軸方向は真北に対し約20度ほど東に傾いている。炉跡内の堆積土は12層に分けられ，この内ℓ11・12の２層は掘形埋土で，埋設土器の周囲のℓ11は土器上半部から上の範囲が土器内側からの熱により焼土化していた。また，ℓ10は前庭部底面上で確認されたピット内の堆積土だった。

本住居跡の東西壁の方向も，炉跡の長軸方向に合わせて，真北に対し東に傾いている。

炉跡を各部位別にみてみると，土器埋設部には底の抜けた深鉢形土器を１個体土中に埋め込み，その周囲には長さ20㎝前後の花崗岩の板石を使って半円形状に二重の縁取りがされている。板石を使っての縁取りは，まず埋設された土器の周囲に幅広の面を上に板石を並べ固定し，次にその外周には板石の長手を横にし幅の狭い面を上にし立てるように半円形状に石を配置している。床面から土器埋設部の底までの深さは35㎝ほどであった。土器埋設部を断ち割り，土層を観察したところ，埋設土器の上半部から上層にかけての埋土が，土器内側からの加熱により赤く変色していた。

石組部の遺存状況は良好で，石材には25㎝前後の花崗岩の板石と円礫を主に用い法面から底面にかけて隙間無く敷き詰められている。土器埋設部との境には長さ50㎝を越える大振りの花崗岩の板石が，さらに底面にも長さ約40㎝の花崗岩を東西方向に置いて固定されていた。石組部内の石のほとんどが熱を受けており，その表面が薄ら赤くなるものや，砂のように劣化しているものも見られた。

前庭部は石組部の南縁の石から１ｍほど延び連結している。前庭部の南端には直径約25㎝のピッ



炉堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/6
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量含む）
3　黒褐色土　7.5ＹＲ2/2（炭化物粒多量含む）
4　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊含む）
5　褐色土　7.5ＹＲ4/6
6　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒少量含む）
7　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
8　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
9　褐色土　7.5ＹＲ4/6
10　褐色土　7.5ＹＲ4/3
11　褐色土　7.5ＹＲ4/4（炭化物粒少量含む　掘形埋土）
12　黒褐色土　7.5ＹＲ2/2（炭化物粒少量含む　掘形埋土）

0　50 cm
(1/20)

図52　43号住居跡（２）

ト（Ｐ５）が掘り込まれている。前庭部の幅はこの南端のピットに向かってすぼまり，徐々に幅を狭くして行くのが分かる。南へと先細りのようになった前庭部の東西壁には，長さ40㎝前後の大きめの板石を壁に沿って２個ずつ直列に立てて並べ，南端のピット付近まで縁取っている。前庭部の南端は壁の立ち上がり部分とほとんど接することも分かった。

床面上の精査の結果炉跡の他に，10基のピットと壁溝そして焼土面も確認されている。

床面上から確認された10基のピットは北西側に位置したピットから順に時計回りでＰ１からＰ10まで番号を付けた。また，床面上には大きさの異なる偏平な花崗岩が７個ほど散在していた。

ピットの平面形は円形および楕円形をしている。それらの規模は大小２種類に大別された。まず，Ｐ１～４・６の５基は本住居跡内では比較的大きく，直径（長径）は50～70㎝，床面からの深さは38～52㎝を測る。残りのピットの規模は直径（長径）12～25㎝，床面または前庭部底面からの深さは10～30㎝と，前者に比して直径，深さ共に小振りなピットが散見された。大半のピットの断面形状は確認面での直径に比して底面径の方が小さくなる箱形状を基調としている。中にはＰ１のように，確認面の直径に比べ底面径の方が上回った袋状になっているものも存在する。

床面上のピットの配置を観察すると，炉跡を中心にしてＰ１～６の６基のピットが，六角形状に配されていることに気付く。また，炉跡の長軸線の延長上にはＰ２とＰ５が存在することも分かった。

以上のようにピットの規模と配置を考慮すると，炉跡を中心に六角形状に配置されたＰ１～６は，本住居跡の上屋を支えた柱穴であったと考えられる。確認できた柱穴の大半が掘形のみで，土層断面および柱穴の上面にて柱の痕跡が確認できたのはＰ１・３・６の３基だけであった。柱痕跡は，いずれも炭化物粒をわずかに含んだ褐色土として確認でき，それらの規模はＰ１・６で共に直径約26㎝，Ｐ３で約30㎝を計測する。

各柱穴の間隔をみてみると，Ｐ１南縁～Ｐ６北縁までの間隔は約1.5m，Ｐ１北東縁～Ｐ２南西縁，Ｐ２南西縁～Ｐ３北東縁，Ｐ３南縁～Ｐ４北縁，Ｐ５北西縁～Ｐ６南東縁まで1.7～1.8m，Ｐ４南西縁～Ｐ５北東縁までは約2.2mを計測する。

壁溝は，ほぼまんべんなく壁際に沿って巡るのでは無く，最長で２ｍほどのものが北と南壁沿いにのみ設けられていた。壁溝の幅はいずれも20㎝ほどで，深さは所々で異なり，最も深いところで床面から15㎝ほどであった。

土器埋設部先端から北西に1.2ｍほど離れた床面上には，長径20㎝ほどの小さな焼土面が確認できた。その個所は赤黒く変色し，中央を断ち割ってみたところ床面から数㎝ほど下まで変色していた。

遺　　物（図53，写真218・229・231）

出土した遺物の大多数は縄文土器片で，その他に磨石，石鏃などが数点ずつ確認されている。出土した縄文土器片の大半は，住居跡内堆積土のℓ１中から採取されている。縄文土器片の多くは深鉢形土器の胴部片（破片数にして約100点）で，出土した口縁部の破片数は胴部片の１割程度，底部

片はわずか２点であった。土器片のほとんどは，外面に縄文のみが見られるものばかりで，内部に状文を加えた区画文を描いた大木９・10式段階の土器片も少なからず確認できた。出土した破片の内，完全な形まで復元できたものは皆無で，大きくても両手程を合わせた程度の破片にしかならなかった。

出土した遺物の内，形状の分かるもの７点を図53に掲載した。

１は，炉に埋設されていた深鉢形土器である。底部及び口縁部付近は欠損し，残存した胴部の最大直径は，胴部上方にて約30㎝を測る。土器の内外面は，熱を受け赤褐色に発色している。器形は胴部下方から上方に向かって緩やかに外傾している。外面の文様を見ると，残っている胴部下半と上半で，施される文様が異なっていた。胴部上下の文様を明確に区分する沈線などは無かった。胴部上半の文様は，沈線で「Ｉ」字状，「Ｕ」ないし「Ｃ」または「Ｏ」字状の図柄を描き，それらの内部に縄を転がしている。胴部下半の全面にはＬＲの縄を縦方向から転がしている。１は外面の文様の特徴から，大木10式段階の土器と思われる。

２は炉跡の南西脇の床面上に横たわって出土した深鉢形土器である。黒ずんだ褐色の土器の胎土中には１㎜ほどの礫を多く含んでいる。器形をみると，底面から胴部中位にかけて外傾し，その後わずかに括れ，口縁部に向かってさらに外傾している。外面の文様は，胴部中位に描かれた波状の沈線を境に，上下で文様が異なっていた。波状沈線上方の文様は，口縁部端に平行する一条の沈線を巡らせ，その下には縦長の「Ｓ」字状の図柄を４つ描き，その隙間を埋めるように短い「Ｉ」字状の文様を２つ描いている。沈線で描かれた図柄の内部には縄文を加えていた。波状沈線下の器面全体には，縦方向に縄を転がしている。２は外面の文様の特徴から，大木10式段階の土器と思われる。

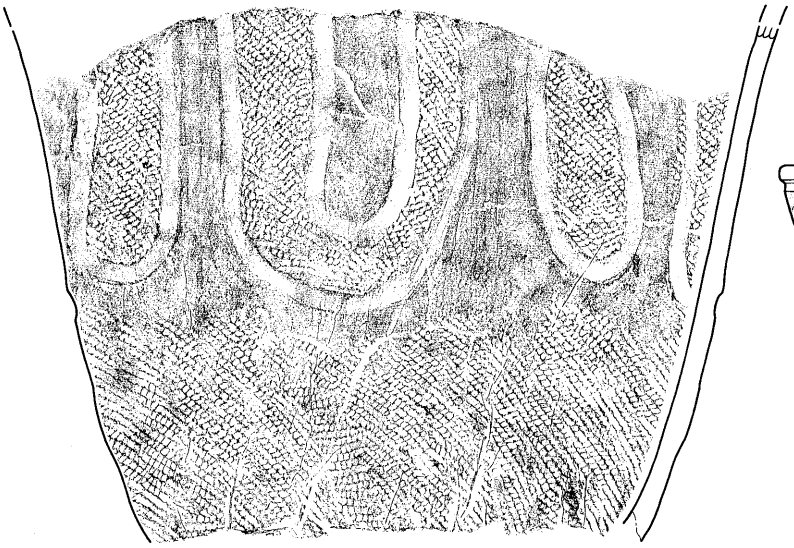
３・４は床面上から出土した深鉢形土器の口縁部片である。いずれも外面の文様の特徴から大木10式段階のものと思われる。

３はキャリパー形に作られ，その口縁部は波打つように形作られている。器形をみると，胴部と口縁部の境で大きく括れ，口縁部は内湾しながら端部に至る。外面文様を見ると，まず口縁部端に沿って沈線を一条引き，その上部に縄を転がしている。その直下には，内部に縄文を加えた「ｎ」字状と「Ｕ」字状の図柄を交互に描いている。

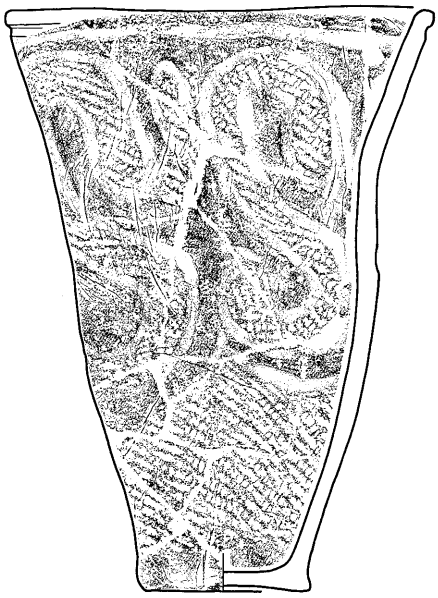
４は緩やかに外反する口縁部片である。口縁部直下には水平線を，さらに２㎝ほど間を空けて下方に波打つ沈線を描き，２本の沈線に挟まれた空間に縄文を加えている。さらに，その下には縦長の曲線を描き，同様に内部に縄文を加えている。この破片と同様の文様を施す口縁部片がＳＩ41の床面より出土している。

５～７は住居跡内の覆土中から出土した石鏃と磨石である。５・６はチャート及び流紋岩製の石鏃で，両者とも先端部を欠損している。両者の基部に注目すると，５はほぼ直線的に形作られるのに対し，６は内側に向かってわずかにくぼんでいる。

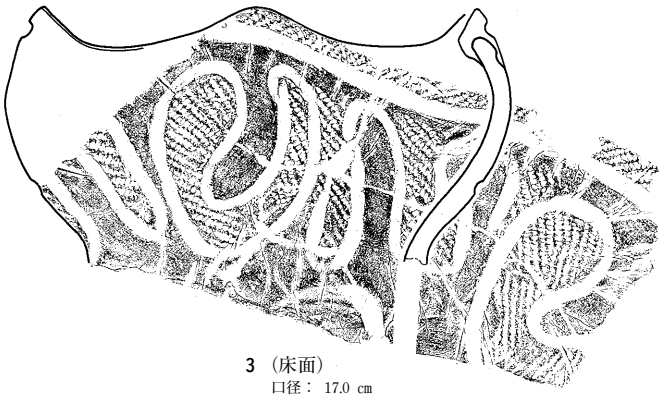
８は細粒花崗岩製の磨石である。滑らかな磨面をもった表裏には，それぞれ一ヶ所ずつ不整形な



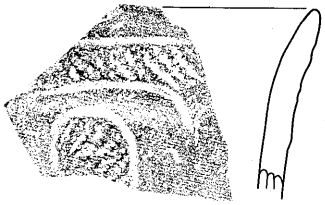
1 （炉埋設土器）
器高：[21.0]cm



2 （床面）
口径： 16.8 cm
底径： 6.6 cm
器高： 22.9 cm



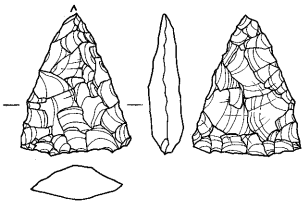
3 （床面）
口径： 17.0 cm
器高：[10.2]cm



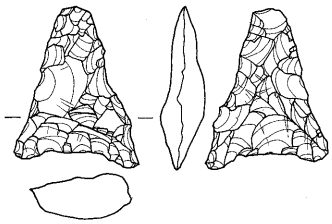
4 （床面）

0　5 cm
(1/3，1〜3)

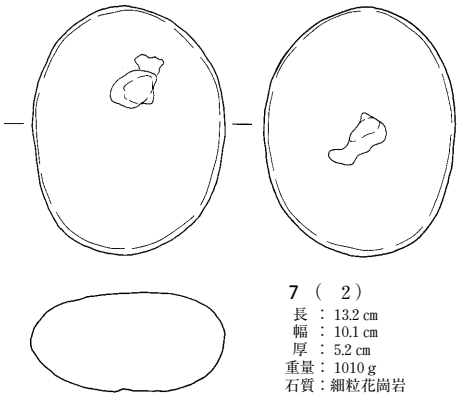
0　5 cm
(2/5，4)



5 （ 2）
長 ：[2.8]cm
幅 ：[2.2]cm
厚 ： 0.7 cm
重量：2.94 g
石質：チャート



6 （ 2）
長 ： 3.2 cm
幅 ： 2.5 cm
厚 ： 0.9 cm
重量：3.53 g
石質：流紋岩



7 （ 2）
長 ：13.2 cm
幅 ：10.1 cm
厚 ： 5.2 cm
重量：1010 g
石質：細粒花崗岩

0　2 cm
(2/3，5･6)

0　5 cm
(1/4，7)

図53　43号住居跡出土遺物

くぼみがみられる。

ま　と　め

本遺構は丸味を帯びた五角形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。

43号住居跡は，１基の複式炉，６基の主柱穴（Ｐ１～６），断続的に巡る壁溝，そして床面中央部に焼土面を備えている。本住居跡は先に掘り込まれた１基の土坑（ＳＫ292）を壊し構築されていた。

複式炉は，長楕円形状の平面形をもち，南壁に接するように設けられている。炉跡は北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっている。土器埋設部から前庭部の周囲は，大小さまざまな石を並べ縁取りされていた。このように，土器埋設部から前庭部にかけて石で縁取られた複式炉の例は，馬場前遺跡南区ではＳＩ41・44，北区ではＳＩ17でも確認される。

本住居跡の機能時期は，土器埋設部に埋め込まれた土器，床面から出土した土器の文様の特徴から大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

44号住居跡　ＳＩ44

遺　　構（図54・55，写真７・９・10・55・56・58）

本遺構は南区の北西寄り，Ｕ49～51，Ｖ49～51，Ｗ49～51の９グリッドにまたがって位置する。本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において円形の広がりとして確認された。本遺構の一部は数基のグリッドピットにより壊されているものの，遺構の遺存状況は良好であった。他に，本遺構の底面上から１基の埋甕（ＳＭ03）が確認されている。

本遺構の調査は円形の広がりのほぼ中央部から，東西南北に向かって十字形の土層観察用の帯を残し，掘り下げを開始した。その結果，確認作業時での平面形状とわずかに異なり，東西長7.2m，南北長6.8mの楕円形状として捉えられた。周壁は垂直に近い角度で底面から立ち上がり，残存した壁の高さは底面から約40～45cmを計測する。底面はＬⅣ層を概ね平らに削り整え形成されている。

遺構内の堆積土は31層に分かれ，大半が周囲からの流入土と判断されるため，本遺構は自然に埋没していったものと考えている。上層のℓ２は，下位の堆積土に比べ土色，出土土器数など様相を異にしていた。ℓ２は炭化物粒を多量に含んだ黒褐色で，その土中からは大小さまざまな縄文土器片が，丸い乾燥ザルにして10数個分出土している。ℓ２よりも下層では炭化物をほとんど含まなくなり，下層に比して土器片の出土量も激減するといった違いが認められる。

底面上を移植鏝で丁寧に削り進めると，15基のピットの他に，壁際に沿って巡る溝跡，そして南壁付近において，数個の石が土中から顔を覗かせる長楕円形状の広がりも確認できた。

底面の調査は，長楕円形状の広がりの南北方向に土層観察帯を残し，東半分を掘り下げることから開始した。しばらく掘り下げると，長楕円形の広がりの北端には，石に縁取られた内部に土器が１個体埋め込まれていた。土器の上部が顔を出した周囲の土は，土器内面からの熱により赤く変色していた。埋設された土器に南接した個所はくぼみ，その法面および底面には隙間無く板石と円礫

が敷き詰められていた。さらに，石で敷き詰められた部分の南側には，半円形状に掘りくぼめた部分が接続している。

以上のことから，底面で確認された長楕円形状の広がりが炉跡であると判断された。この時点で，本遺構は住居跡，底面は床面として再認識することができた。

炉跡は完全な形の土器を１個体埋め込んだ複式炉であった。複式炉は，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっている。炉跡の平面形は南北に長い楕円形を呈し，規模は土器埋設部先端から前庭部末端まで約210㎝を測る。炉跡の長軸方向は，真北に対し10度ほど東に傾いている。

炉跡内の堆積土は７層に分けられる。この内，ℓ７は掘形埋土で，埋設土器の胴部上半部から上層にかけての埋土は，土器内面からの熱により赤黒く変色していた。

炉跡を各部位別にみてみる。石で縁取りされた土器埋設部は，東西長75㎝，南北長50㎝を測り，ほぼ完全な形の深鉢形土器を１個体土中に埋め込んでいる。床面から埋設土器の底までの深さは，52㎝ほどであった。

石組部は比較的遺存状況が良く，石材として主に花崗岩の板石，円礫を多用している。ほとんどの石が熱を受け表面が薄ら赤く変色していた。石組部の規模は東西長90㎝，南北長65㎝ほどであった。土器埋設部との境には長さ50㎝ほどの大きな板石を斜めに固定していた。

前庭部は石組部から南へ95㎝の長さで連結している。前庭部の壁際をみると，壁裾に沿って溝状の掘り込みや，低い段差がみられる。この溝状の掘り込みや低い段差は，元々壁際に沿って立てて縁取りしていた石を，炉跡の廃絶時に掘り起こしてしまった結果と生じたものと推測される。その際に掘り起こされたと思われる大きな花崗岩が，西側床面上から数個確認されている。また，前庭部底面の中央部は硬く締まっている状況も確認できた。前庭部底面の南端には，直径20㎝ほどのピット（Ｐ11）が１基掘り込まれていたが，前庭部底面付近まで一気に埋め戻されている。

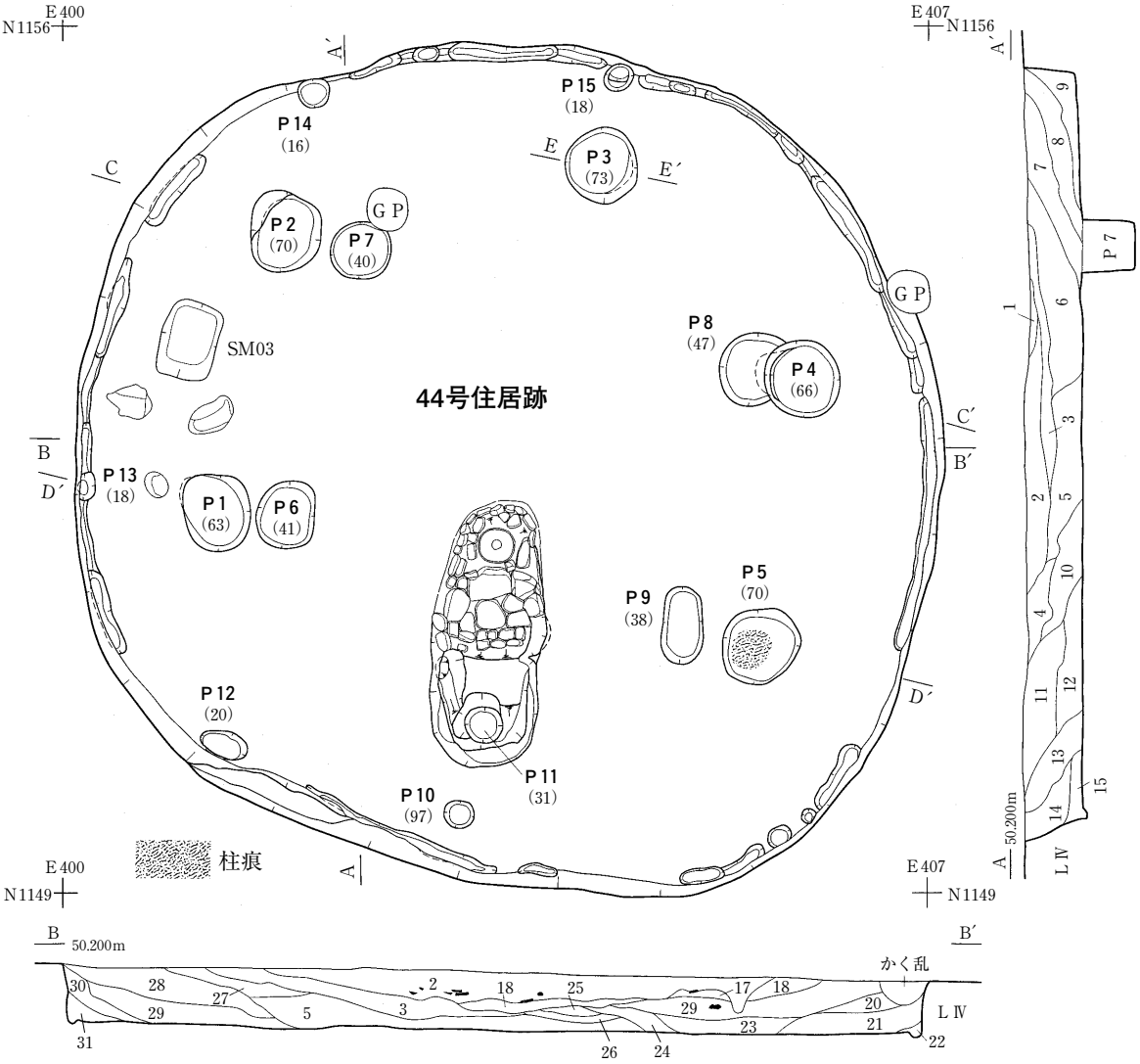
床面上には炉跡の他に，大小さまざまな15基のピット（Ｐ１～15），壁溝，さらに床面西側には埋甕が１基存在する。

15基のピットの平面形は，円形ないし楕円形をしている。それらの規模は直径（長径）20～60㎝，床面からの深さは16～97㎝を計測する。15基の内，Ｐ１～８は大きさ，深さ共に他を上回っていた。ピットの断面形状は，床面規模に比して底面径の方が小さくなる箱形を基調としている。中にはＰ３のように，確認面の直径に比べ底面径の方が上回った袋状になっているものも存在する。

15基のピットの配置を観察すると，炉跡を中心としてＰ１～５・10が六角形になるように配置されていることに気付く。これらの６基のピット群内側には，前庭部内で確認されたＰ11を含め，Ｐ３・６～９の６基がもう一つ六角形状をなすように配されていることも分かった。

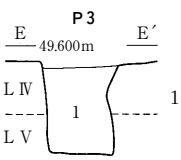
２つのピット群の規模や位置関係から考慮すると，外側の６基のピット群（Ｐ１～５・10），内側のピット群（Ｐ３・６～９）は，それぞれ住居建て替え前と，建て替え後の柱穴と考えられる。

内外２つのピット群の新旧関係は，Ｐ４とＰ８の土層断面（図55　ＣＣ′），そして炉の前庭部底



44 号住居跡堆積土（ＡＡ′・ＢＢ′）

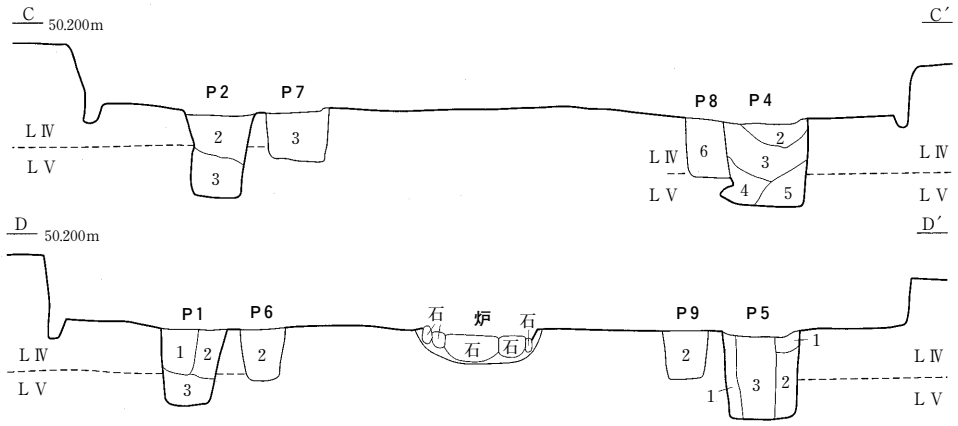
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
2　黒色土　7.5ＹＲ1.7/1（炭化物粒多量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
4　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ粒少量含む）
5　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
6　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ塊少量含む）
7　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ塊少量含む）
8　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
9　褐色土　7.5ＹＲ4/3
10　褐色土　7.5ＹＲ4/6
11　明褐色土　7.5ＹＲ5/8（ＬⅣ粒多量含む）
12　褐色土　7.5ＹＲ4/6
13　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量含む）
14　褐色土　7.5ＹＲ4/6
15　褐色土　7.5ＹＲ4/3
16　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒少量含む）
17　褐色土　7.5ＹＲ4/3
18　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
19　褐色土　7.5ＹＲ4/6
20　褐色土　7.5ＹＲ4/4
21　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2
22　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
23　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量，ＬＶ粒含む）
24　褐色土　7.5ＹＲ4/4
25　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
26　褐色土　7.5ＹＲ4/3
27　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
28　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量含む）
29　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/3
30　褐色土　7.5ＹＲ4/3
31　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4



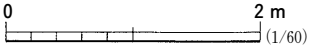
Ｐ３堆積土（ＥＥ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬＶ粒少量，炭化物粒含む）

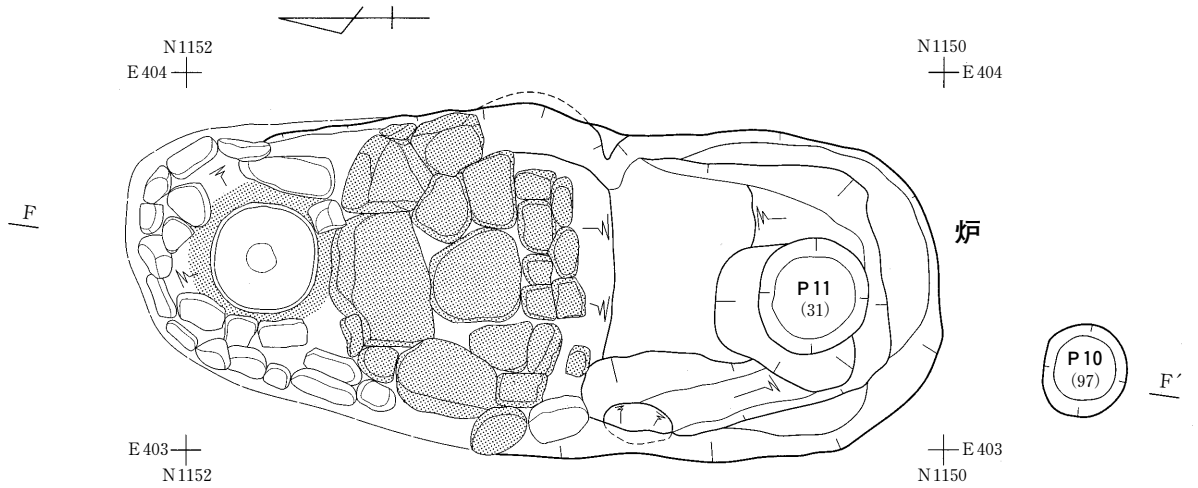
0　2 m
(1/60)

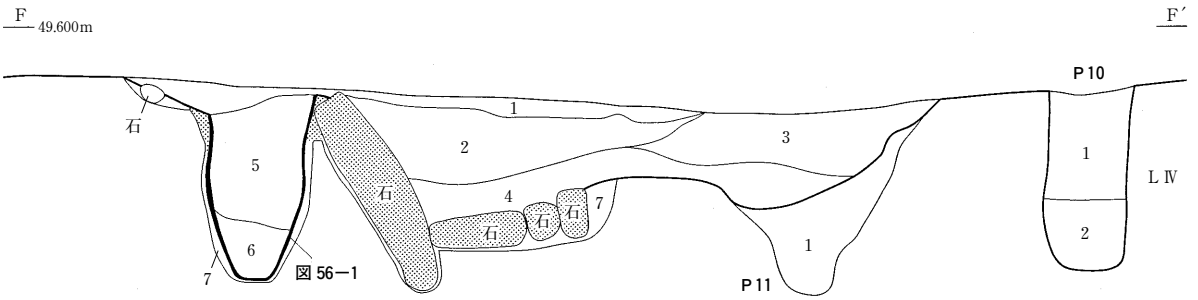
図54　44号住居跡（１）

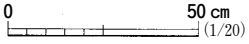


Ｐ１・２，Ｐ４～９堆積土（ＣＣ′・ＤＤ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊・暗褐色土粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/5（ＬⅤ粒少量含む）
5　黒褐色土　10ＹＲ2/3
6　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅤ粒多量含む）









炉堆積土（ＦＦ′）
1　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ塊多量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊多量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ塊少量含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
6　黒色土　10ＹＲ1.7/1
7　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒含む　掘形埋土）

Ｐ10堆積土（ＦＦ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅤ粒多量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量含む）

Ｐ11堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒含む）

図55　44号住居跡（２）

面から確認されたＰ11の在り方などを検討すると，外側に配された６基の柱穴群（Ｐ１～５・10）が，内側のＰ３・６～９・11よりも新しく掘り込まれたことが分かる。

柱穴の大半は掘形のみであった。土層断面および柱穴の上面にて柱の痕跡を確認できたピットは，唯一Ｐ５のみで，その柱痕跡の直径は20㎝ほどであった。

各柱穴間の距離をみると，建て替え後，つまり外側にある柱穴群（Ｐ１～５・10）では，Ｐ１北縁～Ｐ２南縁，Ｐ２北東縁～Ｐ３南西縁，Ｐ３南東縁～Ｐ４北西縁，Ｐ４南縁～Ｐ５北縁では1.6～1.8ｍを測る。Ｐ５南西縁～Ｐ10北東縁，Ｐ10北西縁～Ｐ１南東縁までの間は2.4～2.7ｍを計測する。

本住居跡の建て替え前，つまり内側にある柱穴群（Ｐ３・６～９・11）では，Ｐ６北縁～Ｐ７南縁，Ｐ７北東縁～Ｐ３南西縁，Ｐ３南東縁～Ｐ８北西縁，Ｐ８南縁～Ｐ９北縁そしてＰ９南西縁～Ｐ11北東縁の間において1.5～1.8ｍを測る。Ｐ11北西縁～Ｐ６南東縁まで2.7ｍを計測する。

壁溝は，建て替え後の壁際に沿って断続的に設けられている。壁溝の幅，深さは共に15㎝ほどで，その長さは長いもので弓なり状に約200㎝，短いものでも約20㎝ほどであった。建て替え前の壁溝は確認できなかった。

西壁寄りの床面上からは，長方形状をなす掘形内に１個体の深鉢形土器を納めている埋甕を１基確認した。詳細は第６節で後述するが，掘形内には，同じ土器から打ち欠いた大きな口縁部片で，下に納められた深鉢形土器の欠損部を覆い隠すような造作が見られた。

遺　　物（図56・57，写真218・229・234）

出土した遺物の大多数は縄文土器片で，その他に石鏃，磨石，石斧，剝片などが数点ずつ確認されている。出土した縄文土器片の大半は住居跡内堆積土の上層，ℓ１と炭化物粒を多量に含んで黒褐色のℓ２中から採取されている。縄文土器片の多くは深鉢形土器の胴部片（２つの層中からの出土数は破片数にして約720点）で，外面に縄文のみを施文しているものがほとんどである。出土した口縁部及び底部の破片数は，胴部片に比しての１割強ほどであった。出土した破片の内，完全な形まで復元できたものが１個体存在したものの，その他は大きくても両手に乗る程度の破片にしか接合できなかった。

遺物の内，埋設土器，床面から出土したものから，形状の判明するものを図56・57中に各６・８点ずつ，計14点を示した。

１は炉に埋設された深鉢形土器で，口縁部を欠損している。土器は内側からの加熱で器面が明るい赤褐色に発色し，胴部上半部の内面は所々火はぜした個所が認められる。器形をみると，胴部は直径9.5㎝ほどの底面から緩やかに外傾し，胴部中位にて軽く胴部が括れ，上方に向かって徐々に外傾してゆく。外面の文様を見ると，胴部中位の括れる部分に施された波状沈線を境にして，胴部上下で文様が異なっている。波状沈線の上方には，渦巻き状の図柄と，縦長の「Ｓ」字状の図柄を交互に描いている。渦巻き状の図柄の内部と「Ｓ」字状の図柄の上下端の内部には，縄文を加えている。１は文様の特徴から，大木10式段階の土器と考えられる。

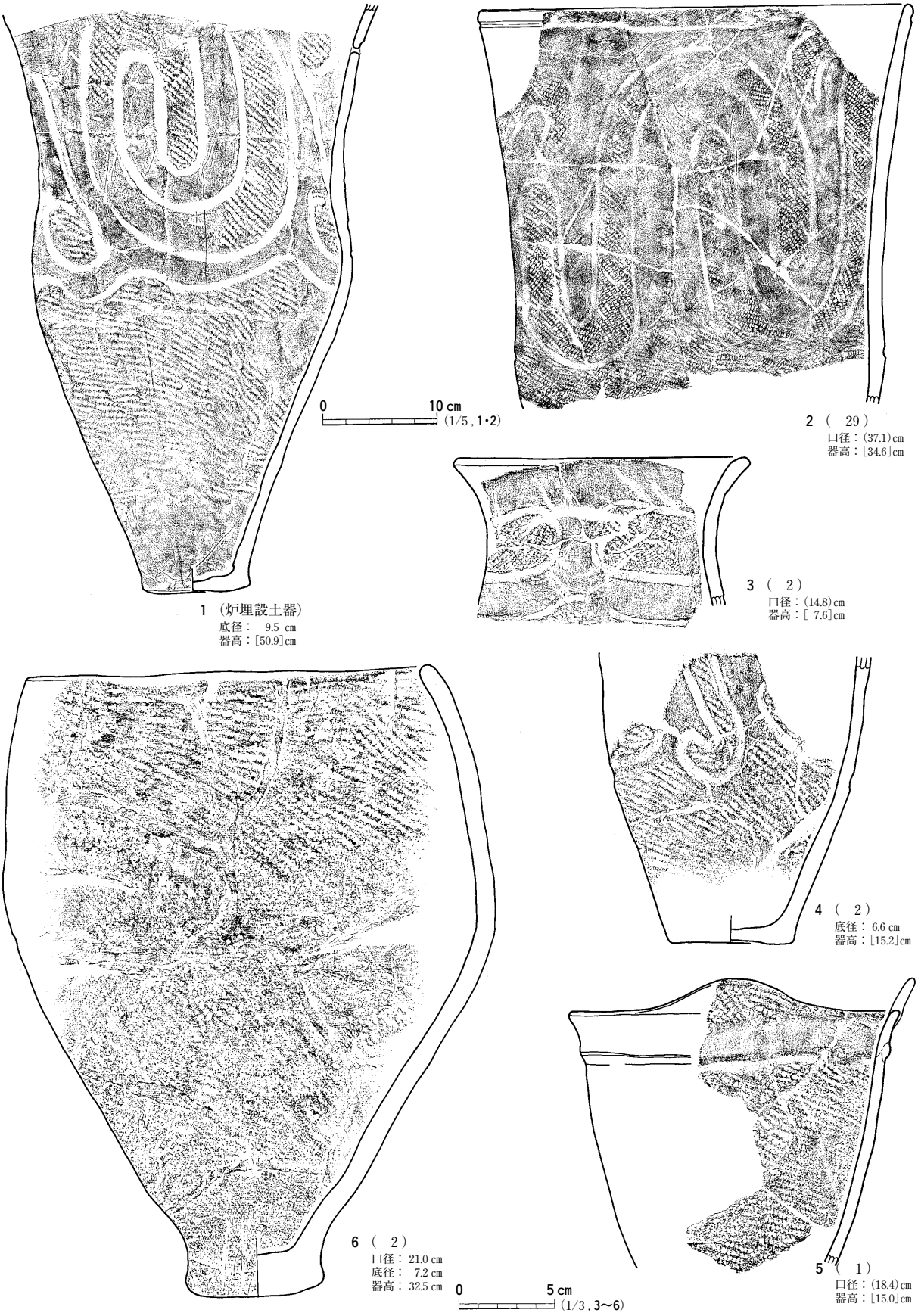
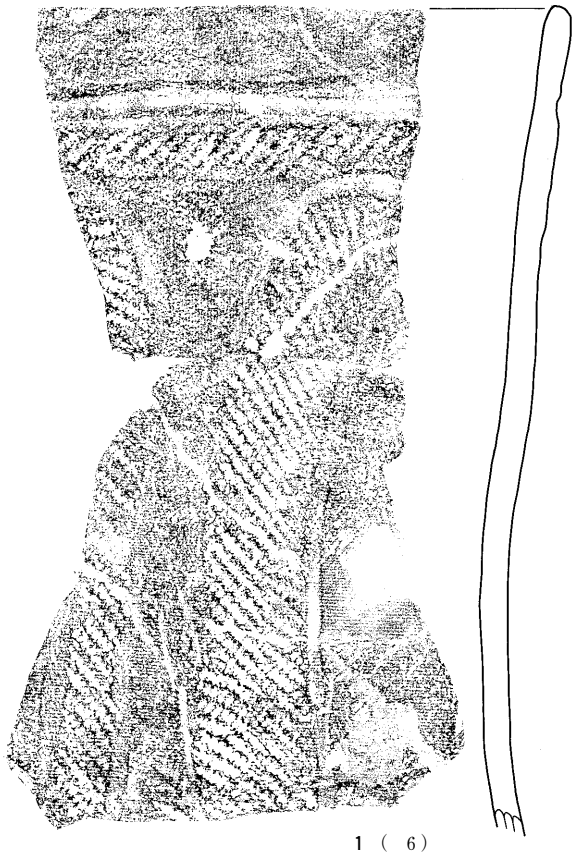
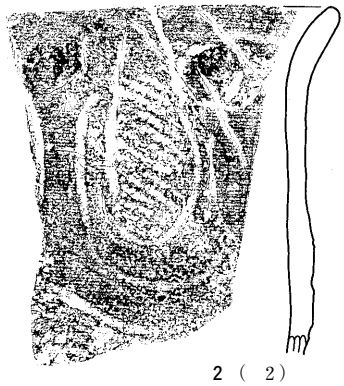


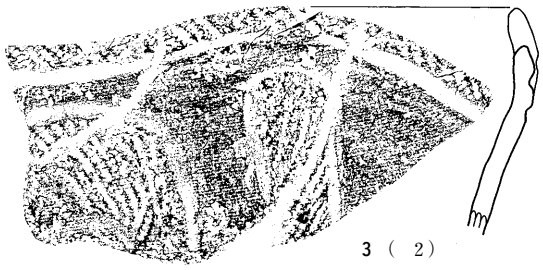
図56　44号住居跡出土遺物（１）



1 （ 6）

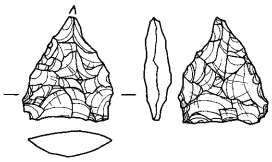


2 （ 2）

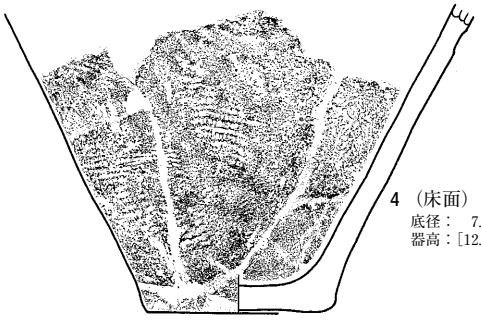


3 （ 2）

0　5 cm
(2/5, 1〜3)

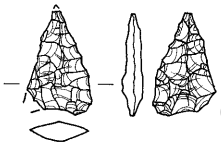


5 （ 1）
長 ： 2.1 cm
幅 ： 1.8 cm
厚 ： 0.5 cm
重量： 1.56 g
石質：鉄石英

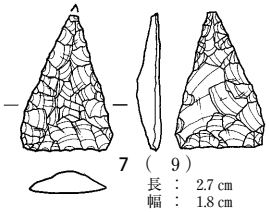


4 （床面）
底径： 7.4 cm
器高：[12.1]cm

0　5 cm
(1/3, 4)

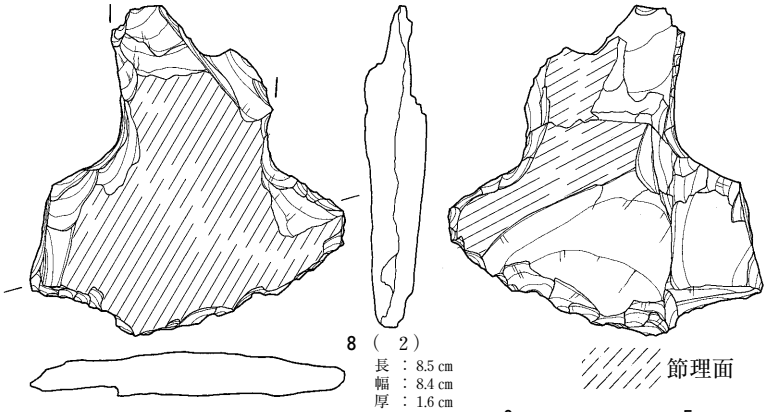


6 （ 2）
長 ：[2.0]cm
幅 ：[1.3]cm
厚 ：[0.4]cm
重量： 0.7 g
石質：チャート



7 （ 9）
長 ： 2.7 cm
幅 ： 1.8 cm
厚 ： 0.5 cm
重量： 1.57 g
石質：チャート

0　2 cm
(2/3, 5〜7)



8 （ 2）
長 ： 8.5 cm
幅 ： 8.4 cm
厚 ： 1.6 cm
重量： 80 g
石質：チャート

0　5 cm
(1/2, 8)

図57　44号住居跡出土遺物（２）

図56－２～６，図57－１～３の土器片は，本住居跡の覆土中から出土した。この内，図56－２～４，図57－１～３の計６点の外面には，内部に縄文を加えた沈線文様が見られる。中でも，図56－２・４，図57－１～３は，深鉢形土器の外面にアルファベットに酷似した文様を描いている。これらの深鉢形土器の破片は，外面の文様の特徴から大木10式段階と考えられる。

図56－２は床面から５㎝ほど浮き，外面を上にした状態で出土した比較的大きな破片である。口縁部直下には，端部に平行する幅狭の沈線が一条巡っている。外面の所々に黒斑のある土器の表面には，横倒しになった「Ｓ」字状の図柄と，「Ｊ」字状の図柄を交互に描き組み合わせている。図56－４は胴部下半から底部にかけての破片である。外面には縦に長い「Ｓ」字状と思われる図柄と，その両隣に横方向に延びる曲線で図柄を構成している。区画された文様帯の直下には，全面に縄を転がしている。図56－３は大きく外反する口縁部片である。口縁部下には内部に縄文を加えた「ー」字状の図柄を描き，その下位には波状の沈線を一条引いている。

図57－１は口縁部直下に一条の沈線を巡らせた口縁部片である。口縁部端に平行する沈線下位には横方向に縄を転がしている。横位の縄文の下には，内部に縄文を加えた細長い「Ｃ」または「Ｏ」字状の図柄が描かれている。図57－２は口縁部から胴部中程までの破片である。外反する口縁部から胴部中程までの表面には，「Ｕ」字状の沈線文様を二重に描き，最も内側の部分に縄文を加えている。胴部下半は波状の沈線を一条巡らし，その下位全体には縄を転がしている。図57－３は端部が波打つように形作られた口縁部片である。口縁部端に施した横位の縄文下には，内部に縄文を加えた「Ｉ」字状と，楕円形状の沈線文様が描かれていた。

図56－５～６は器面全体に縄文のみを施した深鉢形土器と，その破片である。５は口縁部から胴部下半にかけての破片である。胴部から連続して軽く外反する口縁部は，端部に平行して一条の低い隆線がナデ付けられていた。隆線の下位には全面にＲＬの縄を転がしている。また，口縁部端は一ヶ所だけ半円形状に低く突出した部位が見られる。６は，前述した炭化物粒及び遺物を多量に包含した住居跡内堆積土ℓ２から破片となって出土し，唯一ほぼ完全な状態まで復元できた深鉢形土器である。土器の底面は凸面となっているため，底を下にした状態では安定しないことに気付く。口縁部は胴部中位から緩やかに内傾することから，胴部の最大直径は胴部中位にて約25.8㎝を測る。

図57－５～８は住居跡内堆積土ℓ１・２・９中から出土した石器である。この内，５は鉄石英，６・７はチャート製の石鏃で，いずれもどこか一部を欠損している。その基部をみると，内側に湾曲するもの，内側にわずかにくぼむもの，平らに形成されているものの３種類が存在する。

８は約半分を欠損した分銅形の打製石斧である。粘板岩製の石斧の表裏には節理面が認められる。

ま　と　め

本遺構は楕円形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。

44号住居跡は一度大きく建て替えられ，確認できた壁面は建て替え後のものであった。屋内には１基の複式炉，断続的に巡る壁溝，１基の埋甕，そして建て替え前後の２つの柱穴群を備えていた。

建て替え後には，炉跡とＰ３を残し，６基一組の柱穴群にて上屋を支えていた。長楕円形状の平

面形をもつ複式炉は，南壁寄りに設けられ，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部から構成される。炉の前底部は，建て替え前にあったＰ11を埋め戻し長くなるよう作り直している。

また，床面西隅からは１基の埋甕（ＳＭ03）が確認されている。この埋甕は，本住居跡が大きく建て替え，機能している間に西壁の側に掘り込まれたものと考えている。本住居跡内の埋甕（ＳＭ03）と同様，床面から確認された埋甕の事例は，馬場前遺跡南区にあるＳＩ56ｂの床面南西隅から１基（ＳＭ08），ＳＩ77では複式炉の南端に接するように１基（ＳＭ04）確認している。

本住居跡内の堆積土に注目してみると，本住居跡内の堆積土最上層には，土器片と炭化物粒を多量に含んだ黒色土（ℓ２）が薄いレンズ状に堆積していた。このような事例は，南区のＳＩ31・41・96でも見られる。ＳＩ41でも述べたように，この黒色土は，廃絶後クレーター状のくぼみと化していた中に，当時の縄文時代の人々が「ゴミ捨て場」として使用していた結果と想定される。

本住居跡の機能時期は，炉跡に埋設された深鉢形土器の文様の特徴から，大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

45号住居跡　ＳＩ45

遺　　構（図58・59，写真７～９・59・60）

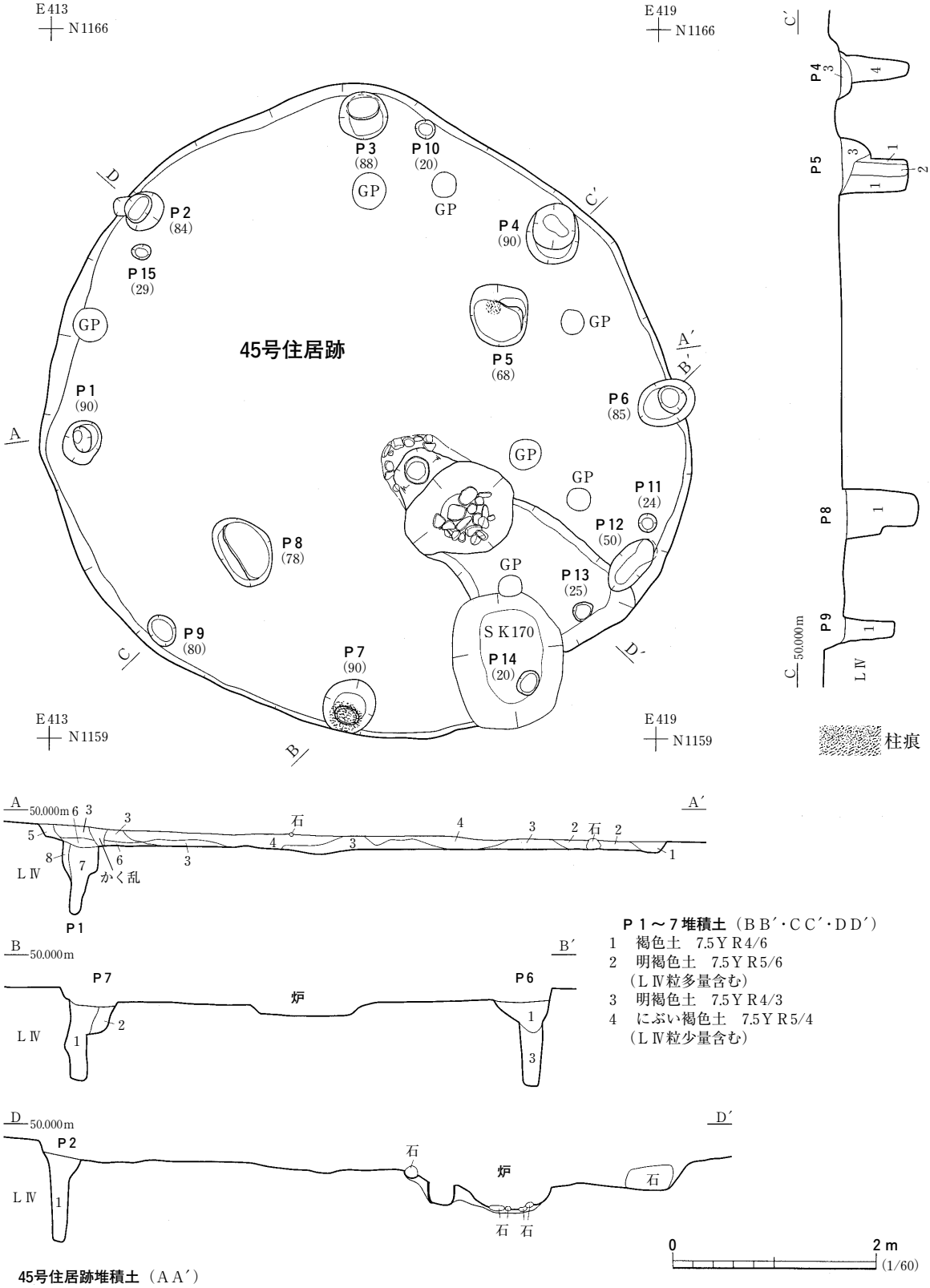
本遺構は南区の西寄り，Ｗ47～49，Ｘ47～49の６グリッドにまたがっている。本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において円形の広がりとして確認された。本遺構の一部は，７基のグリッドピットの他，１基の土坑（ＳＫ170）によって壊されている。

本遺構の調査は円形の広がりのほぼ中央部から，東西に向かって一本の土層観察用の帯を残し，掘り下げを開始した。その結果，確認面から10㎝ほど掘り下げたところから底面がみつかり，長径6.4ｍ，短径６ｍの楕円形状として捉えられた。周壁は垂直に近い角度で底面から立ち上がり，残存した壁の高さは底面から15～18㎝を計測する。底面は基盤層であるＬⅣ層を概ね平らに削り整え形成されている。遺構内の堆積土は８層に分かれ，それらの大半は周囲から流れ込んだ土と判断され，本遺構は自然に埋没していったものと考える。

底面上を移植鏝で丁寧に削り進めると，15基のピットの他に，赤黒く被熱変色した面，西壁付近からは薄く堆積した白色粘土の層，そして南壁付近において数個の石が土中から顔を覗かせているタケノコ形の広がりも確認できた。

底面の調査は，タケノコ形の広がりの長軸方向に土層観察帯を残し，北東半分の掘り下げから実施した。しばらく掘り下げると，長楕円形の広がりの北端から，石に縁取られた内部に土器が１個体埋め込まれているのを確認した。土器の上部が顔を出している周囲の土は熱により赤く変色していた。埋設された土器の南側に接した箇所はくぼみ，その底面には直径20㎝前後の花崗岩の円礫が敷き詰められていた。さらに南側には，底面から10㎝ほど掘り下げられた部分が接続している。

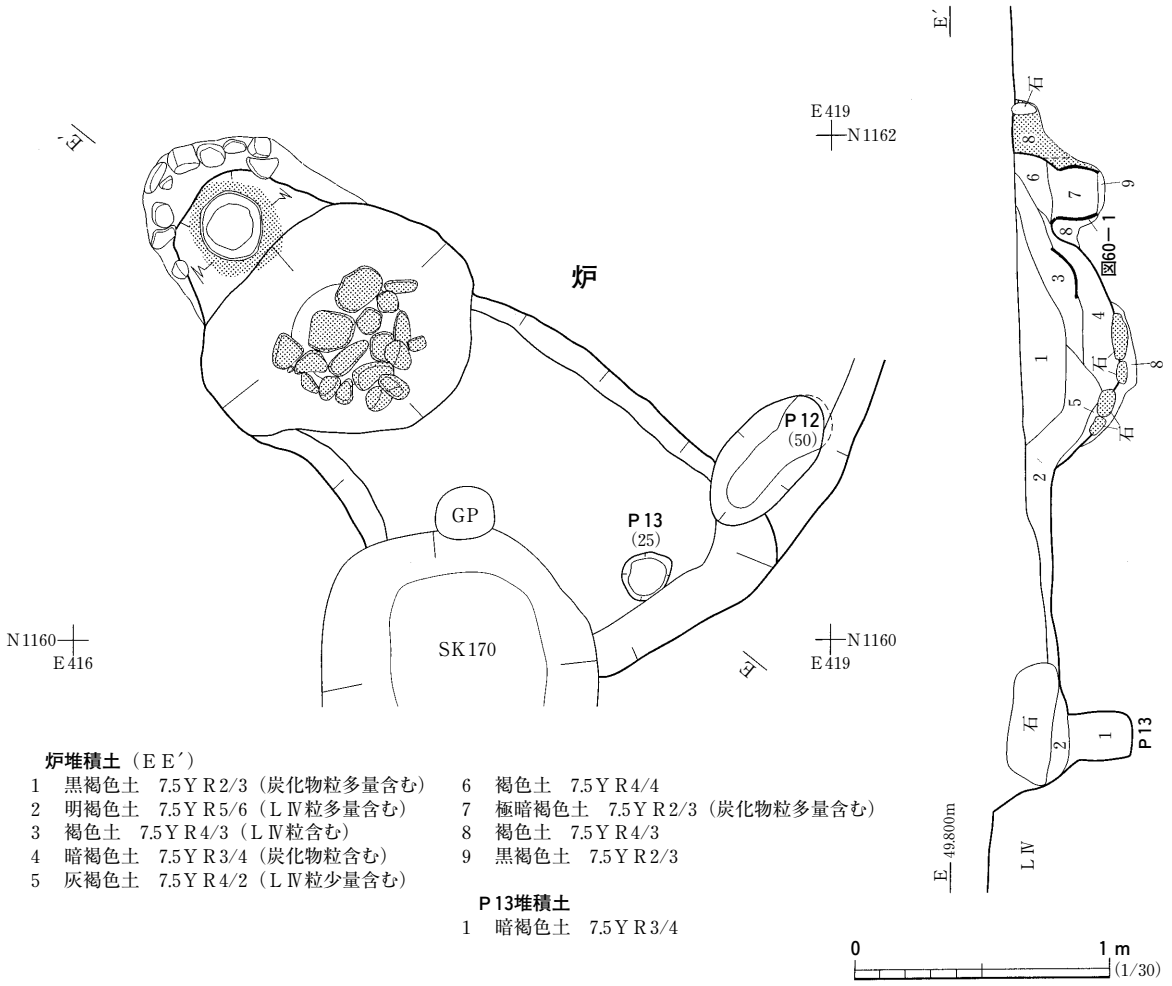
以上のことから，底面で確認された長楕円形状の広がりは炉跡である可能性が高くなった。この時点で，本遺構は住居跡，底面は床面として再認識できた。



P１～７堆積土（ＢＢ′・ＣＣ′・ＤＤ′）
1　褐色土　7.5ＹＲ4/6
2　明褐色土　7.5ＹＲ5/6
（ＬⅣ粒多量含む）
3　明褐色土　7.5ＹＲ4/3
4　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
（ＬⅣ粒少量含む）

45号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
2　暗褐色土　7.5ＹＲ4/3
3　暗褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
5　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
6　にぶい橙褐色土　7.5ＹＲ7/4（粘土塊多量含む）
7　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
8　褐色土　7.5ＹＲ4/4（炭化物粒含む）

図58　45号住居跡（１）



炉堆積土（ＥＥ´）
1　黒褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒多量含む）
2　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
5　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2（ＬⅣ粒少量含む）
6　褐色土　7.5ＹＲ4/4
7　極暗褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒多量含む）
8　褐色土　7.5ＹＲ4/3
9　黒褐色土　7.5ＹＲ2/3

Ｐ13堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4

図59　45号住居跡（２）

炉跡は底の抜けた深鉢形土器を１個体埋め込んだ複式炉で，北西側から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっている。炉の平面形態は，土器埋設部から前庭部に向かって炉の幅を広げてゆく様から，一見すると角の丸くなった二等辺三角形状とも捉えられる。炉の規模は，土器埋設部先端から前庭部末端の南東壁まで約220cm，最大幅は石組部において約110cmを測る。炉跡の長軸方向は真北に対し西へ約45度ほど傾いている。炉跡内の堆積土は９層に分けられ，この内ℓ８・９の２層は掘形埋土である。埋設された土器上半部から上層の土は，土器内面からの熱により赤く変色していた。

炉跡を各部位別にみてみる。外縁を拳大の花崗岩の円礫で縁取りされた土器埋設部には，底の抜けた土器が埋め込まれていた。その規模は先端から石組部との境まで56cmを測る。埋設土器の周囲の土は赤黒く被熱変色している。

石組部の法面にあるはずの石は，炉跡の廃絶時に抜き取られたため全く残っていなかった。唯一石組部の底面には，拳大～人頭大ほどの偏平な花崗岩の円礫があった。確認できた石組部の規模は土器埋設部との境から前庭部との境界まで91cmほど，床面から石組部底面の石上面までの深さは約25cmを測る。

前庭部は石組部から末広がりに南東壁面へ延びている。前庭部の深さは石組部と比べ浅く，床面から10cmほど下がったところで底面が確認できた。前底部の底面はＬⅣ層を平らに削り整え，その上面は硬く締まり，移植鏝も容易には歯が立たなかった。前庭部の末端には直径20cm，深さ25cmほどのＰ13が１基掘り込まれ，このピット上面には石組部の材料と思われる長さ40cmを越える大きな花崗岩の板石が覆い被さっていた。前庭部の南端部分はＳＫ170により壊されている。

床面からは炉跡以外に，15基のピット，そして床面上からは焼土面と薄い粘土の層を確認した。

15基のピットは北西隅のＰ１から順に時計回りでＰ15まで番号を付けた。

各ピットの平面形は，不整円形または楕円形状に形作られている。それらの規模はＰ３～８・12において長径50～70cm，その他では長径20～45cmを計測する。床面からの深さは，Ｐ10・11・13・15では約20～29cmで，それ以外の壁際に配されたピットや，床面中央にある２基のピットでは床面から69～90cmと比較的深かった。また，Ｐ12・14は炉の前庭部を挟んで南北に位置し，その内のＰ14の上部構造は，後から掘り込まれた土坑（ＳＫ170）によって壊され浅くなっていた。Ｐ12・14の深さおよび形状は，本住居跡の機能時には共に同形状のものであったと考えられる。

床面および前庭部底面にて確認できた柱穴の大半が掘形のみであった。ピットの土層断面および確認面にて柱の痕跡が確認できたのはＰ５とＰ７の２基のみであった。柱痕跡はいずれも炭化物粒をわずかに含んだ褐色土として確認でき，それらの規模はＰ５・７で共に直径15cmほどであった。

15基のピットの規模や位置関係を検討すると，壁沿いに配置されたＰ１～４・６・７・９・12～14の10基と，炉跡を挟んで対峙する２基の楕円形状ピット（Ｐ５・８）の計12基のピットは，炉跡の長軸線の延長を境として，左右にほぼ相似形となるように配置されていることが分かる。以上のことから12基のピットは本住居跡の上屋を支えた柱穴と考えられる。

床面の西壁付近から炉の北側までの約2.5ｍの範囲には，赤黒く被熱変色した面が確認された。その部分を東西方向に断ち割ってみると，最大で床面から数cmの深さまで変色が及んでいた。

さらに，西壁沿いにはＰ１の上面を覆い隠すかのように，白色粘土を含んだ層（図58　ＡＡ′ℓ６）も薄く堆積していた。

遺　　物（図60，写真219・231）

出土した遺物の大多数は縄文土器片で，その他に磨石が数点確認されている。出土した遺物は炉埋設土器以外に，住居跡内の堆積土ℓ１中から出土したものが多かった。縄文土器片の多くは深鉢形土器の胴部片で，出土した口縁部及び底部の破片は数片程度と極端に少なかった。出土した破片も完全な形まで復元できるものは皆無であった。

本住居跡内の堆積土，特にℓ１から出土した縄文土器片の外面には，全面に縄文のみを施文したものが多数を占め，沈線または低い隆線で図柄を描いた大木10式の土器片も少なからず散見される。

図60中には，炉に埋設された土器，床面上，住居跡内覆土中から出土した遺物の内，形状の判明するもの計７点を示した。

１は炉に埋設された深鉢形土器で，口縁部及び底部付近が欠損している。土器は内側からの加熱

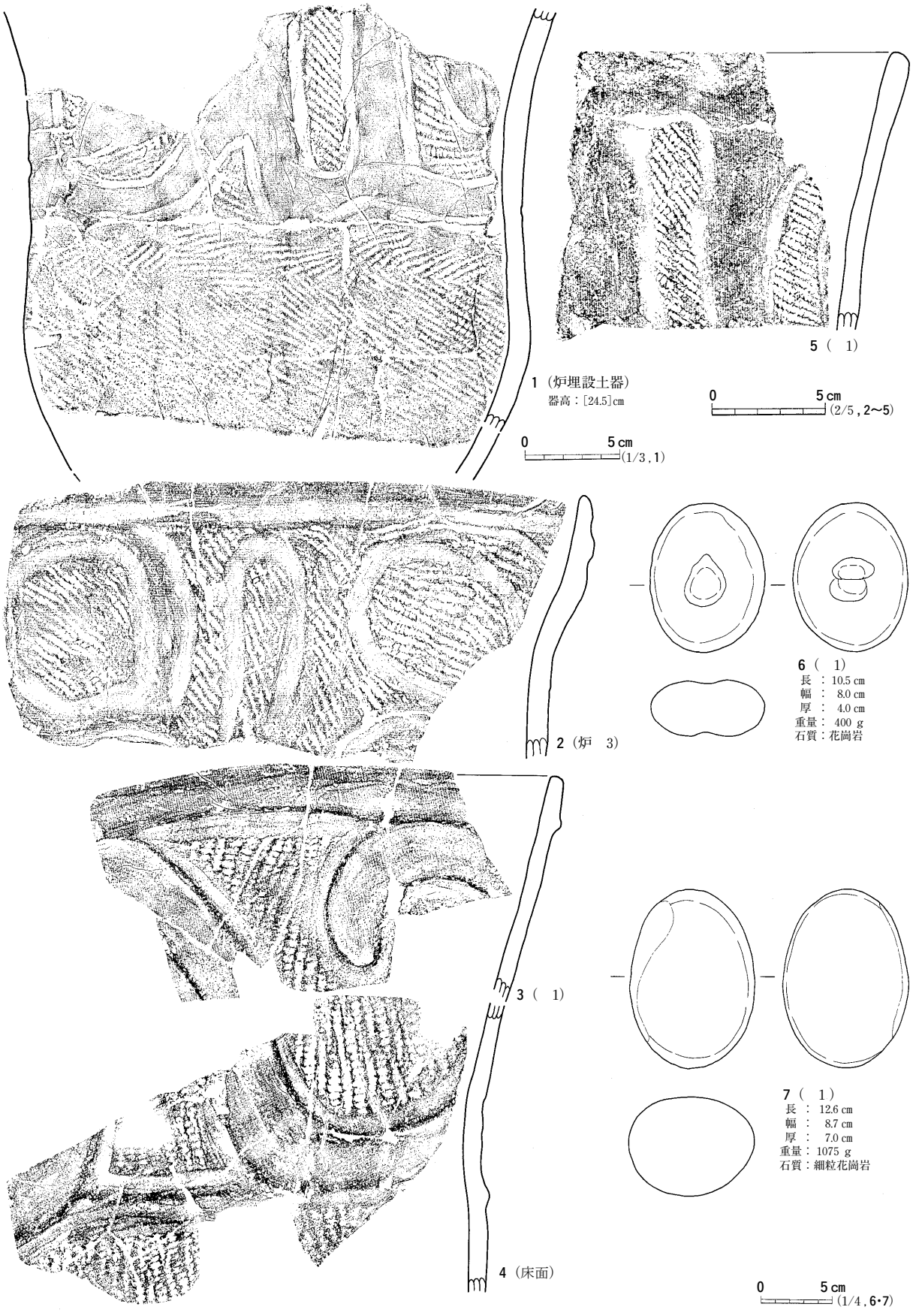


図60　45号住居跡出土遺物

で内外の器面が赤褐色に発色し，胴部上半部の内面には所々火はぜした個所が認められる。器形をみると，胴部が中程にてわずかに括れ，上方に向かって徐々に外反してゆく。最大胴部径は残存した胴部上半部末端にて約29㎝を計測する。外面の文様を見ると，胴部中位の括れる部分に引かれた一条の波状沈線を境に，胴部の上下で文様が異なっている。波状沈線の上方の文様は，横倒しになった「Ｓ」字状の図柄，もしくは「Ｉ」と「Ｏ」字状の図柄を交互に描いたものと考える。沈線で区画された図柄の内部には縄文を加えている。１は文様の特徴から大木10式段階の土器と考えられる。

２～５は，炉跡内及び住居跡内の堆積土，そして床面上から出土した深鉢形土器の口縁部片である。これら４片の土器は，外面の文様の特徴から大木10式段階のものと考えられる。

この内，３・４は胴部中程から口縁部にかけての破片と思われる。３・４の破片同士の接合面は無いものの，土器の色調，文様の特徴から同一個体の破片であると判断した。口縁部直下には低い隆線が端部に平行して走り，胴部中程にもそれと平行する同様の隆線が貼り付けられている。外面の文様は胴部中程にある隆線を境にして，上下で異なっている。胴部上方の文様は，低い隆線で横倒しになった「Ｓ」字状の図柄が描かれ，その内部は丁寧にナデられ，図柄周囲の隙間には縄文を加えている。胴部中程の隆線の下方には，ＲＬの縄を全面に転がしている。

２は上部に向かって緩やかに外反した口縁部片である。口縁部端の直下には幅広の沈線を水平に巡らし，その下には縦長の楕円形，円形の図柄を描き，図柄内外の隙間を埋めるように縄文を加えている。

５は外面に縦長の楕円形状の図柄が描かれた口縁部片で，図柄の内部にのみ縄文を加えている。

６，７は，共に本住居跡内堆積土ℓ１中から出土した花崗岩製のくぼみ石と磨石である。６は表裏面の中央部に不整形な浅いくぼみを持つくぼみ石である。７の磨石は，幅広の表裏面に比して滑らかな磨り面が側面にみられる。

ま　と　め

本遺構は円形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。

45号住居跡内部には１基の複式炉と，12基の柱穴を備える。複式炉は土器埋設部，石組部そして前庭部の三部から構成される。土器埋設部や石組部の法面にあった石材は既に抜き取られ，前庭部南端に残っていた大振りの板石はその残骸と考えられる。

主柱穴は炉跡の長軸線を境にして，10基の柱穴が左右に相似形になるよう配置されている。このような柱穴の配置の仕方は，馬場前遺跡南区のＳＩ74ａでも同様であったと思われる。

本住居跡の機能時期は，炉跡に埋設された土器の特徴から大木10式段階，縄文時代中期末葉頃のものと考えられる。　（阿　部）

46号住居跡　ＳＩ46

遺　　構（図61・62，写真７～９・61・62）

本遺構は南区の西寄り，Ｗ49・50，Ｘ49・50の４グリッドにまたがって位置する。本遺構は基盤

層であるＬⅣ層上面において楕円形状の広がりとして確認された。本遺構の一部は数基のグリッドピットにより壊されている。

掘り下げを進めると，本遺構の平面形は楕円形というよりも，南北長4.6m，東西長3.9mの丸味を帯びた五角形状として捉えることができた。周壁の遺存状況は良好ではなく，残存した壁の高さは確認面から底面まで10～15cmを計測する。底面はＬⅣ層を概ね平らに削り整えている。

遺構内堆積土は６層に分かれ，そのほとんどが周囲から流れ込んだ土と判断されるため，本遺構は自然に埋没していったものと考えられる。

底面上を移植鏝で丁寧に削ると，９基のピットの他に，壁際に断続的に巡る溝跡，南壁付近において細長い楕円形の広がりが確認できた。

底面の調査は，細長い楕円形の広がりの長軸方向に土層観察帯を残し，西半分の掘り下げから実施した。しばらく掘り下げると，その北端から石で縁取られた内側から土器が１個体埋め込まれているのを確認した。土器の周囲の土は熱により赤く変色していた。埋設された土器に南接する個所はくぼみ，底面及び法面には直径20cm前後の偏平な花崗岩の板石が固定されていた。さらに，南側には細長い半円形状のくぼみが壁面まで延びている。

以上のことから，底面の細長い楕円形状の広がりは炉跡である可能性が高くなった。この時点で，本遺構は住居跡，底面は床面として再認識できた。

炉跡は入れ子状態になった２個体の深鉢形土器を埋め込んだ複式炉であった。炉跡は北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっている。炉全体の平面形態は細長い楕円形状となっている。炉跡の規模は土器埋設部の先端から前庭部末端まで約200cmを測り，長軸方向は真北に対し約20度ほど東に傾いている。炉跡の長軸方向に合わせて，本住居跡の東・西壁もやや東に傾いていることに気付く。

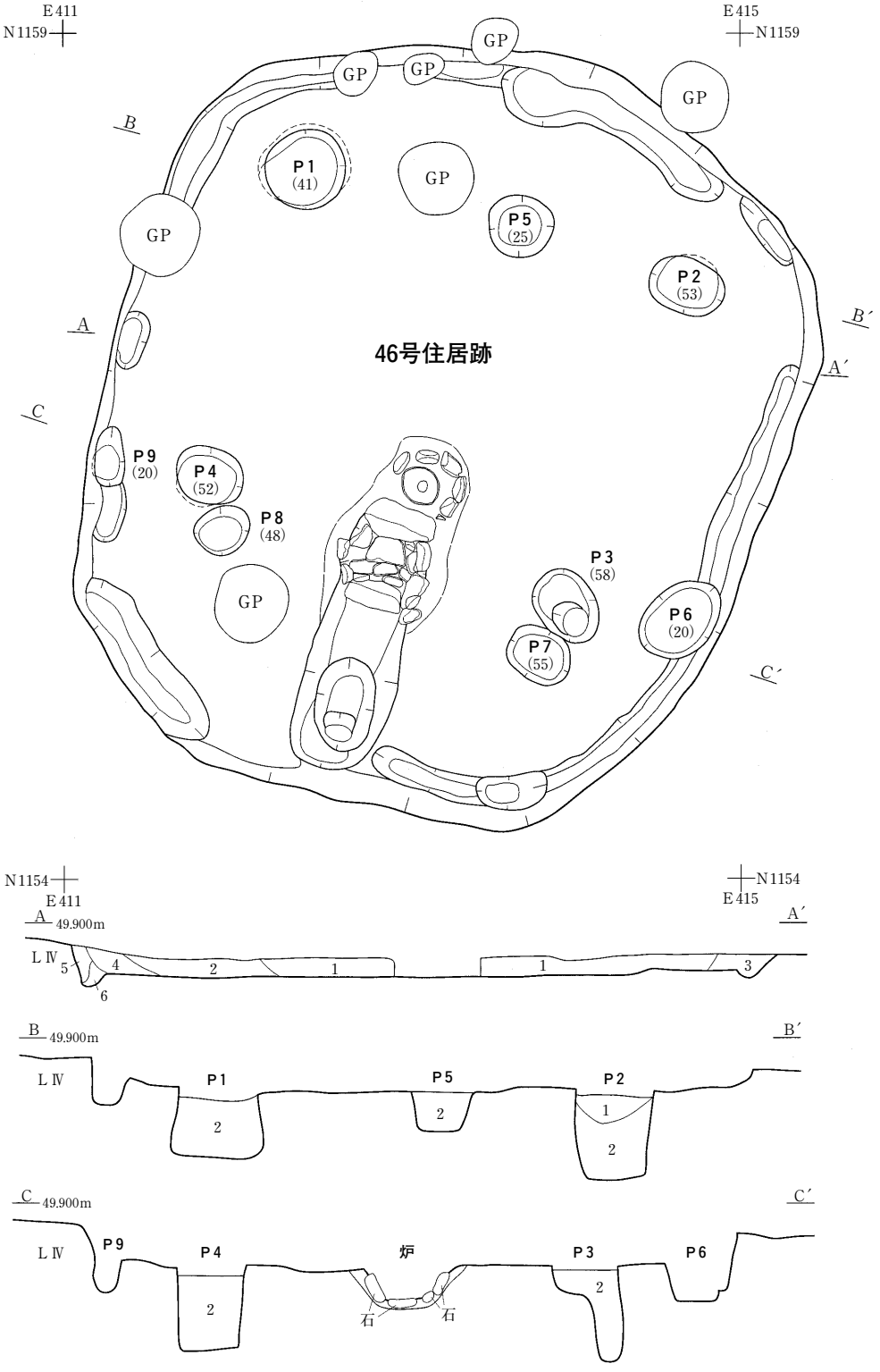
炉跡内堆積土は８層に分けられ，このうちℓ８は掘形埋土で，埋設土器の周囲では最大５cmほどの厚さで焼土化していた。

炉跡を各部位別にみてみると，20cm前後の花崗岩で縁取られた土器埋設部は先端の石から石組部との境まで40cmを測る。土器埋設部を断ち割ると，内側に底の抜けた細身の土器（図63－１）を納め，その外側には胴部下半～底部にかけて残存する丸味を帯びた土器（図63－２）を埋め，両者が上下に密着するように重ねていたことが分かる。埋設土器の周囲に埋め戻された土は，土器内側から熱を受け朱色に変色していた。

次に石組部をみてみる。石組部と土器埋設部そして石組部と前庭部との境には，大振りの花崗岩をそれぞれ１個ずつ固定し，隙間を埋めるように長さ20cm前後の偏平な花崗岩を用い，法面及び底面に敷き詰めている。石組部の規模は南北長，東西長共に60cmを測る。

前庭部は石組部から真っ直ぐに南壁に向かって延びている。前庭部底面は平らではなく，南寄りにおいて楕円形状に１段低くなっている。前庭部の規模は石組部の末端から約100cmほどを測る。

床面からは炉跡以外に，９基のピットと壁溝が確認された。

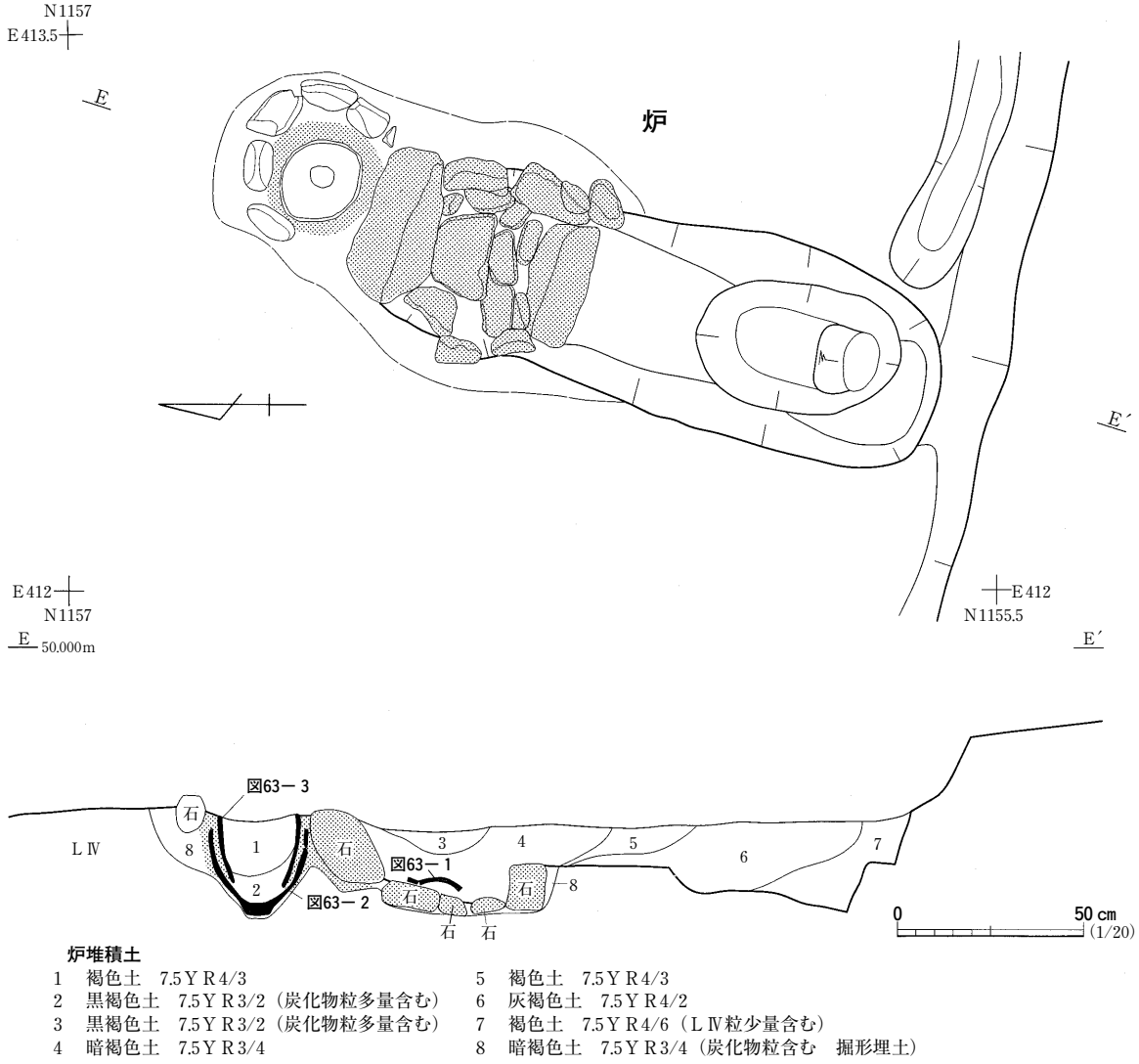


46号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3
3　暗褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ4/3
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
6　褐色土　7.5ＹＲ4/4

Ｐ１～４堆積土（ＢＢ′・ＣＣ′）
1　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
2　明褐色土　7.5ＹＲ4/3（炭化物粒含む）

0　1 m　(1/40)

図61　46号住居跡（１）



炉堆積土

1　褐色土　7.5ＹＲ4/3
2　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2（炭化物粒多量含む）
3　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2（炭化物粒多量含む）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
5　褐色土　7.5ＹＲ4/3
6　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2
7　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
8　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒含む　掘形埋土）

図62　46号住居跡（２）

大きさの異なる９基のピットは楕円形を基調としている。それらの規模は長径36～54cm，短径18～38cm，床面からの深さは20～58cmを計測する。

この内，７基のピットが炉跡を中心に多角形状に配置されている。これらの規模と配置を検討すると，７基のピットは本住居跡の上屋を支えた柱穴と考えられる。７基の柱穴はいずれも掘形のみで，柱痕跡が確認できたものは皆無であった。

７基の柱穴の配置をみると，炉跡を中心として五角形状の柱穴の配列が見えてくる。さらに，５基の柱配列の中でも，２度柱穴の据え替えが実施されたことも分かる。まず一つの主柱穴の配列はＰ１～５の５基，もう一つはＰ１・２・５・７・８さらにＰ１・２・５・６・９という配置が想定できる。各柱穴の間隔を隣り合う柱穴の間隔でまとめてみてみると，３種類の５本柱配列間では，比較的間隔の狭いＰ１－Ｐ５，Ｐ２－Ｐ５間では0.6～0.9m，その他の柱穴間では1.5～1.8mを計測する。

壁溝は周囲の壁に沿って断続的に巡っている。その規模は幅10～30cm，床面からの深さは15cm前

後であった。

遺　　物（図63，写真219・227・229）

出土した遺物の大多数は縄文土器片で，その他に土製品，石鏃などが数点確認されている。出土した遺物は炉埋設土器以外に，本住居跡内の堆積土ℓ１中から採取されたものが多い。ℓ１中から出土した縄文土器片の多くは深鉢形土器の胴部片で，出土した口縁部及び底部の破片は数片程度と極端に少なかった。また，ℓ１から出土した破片は完全な形まで復元できるものは皆無であった。本住居跡内の堆積土，特にℓ１から出土した縄文土器片の外面には，全面に縄文のみを施文したものが多数を占め，沈線または低い隆線で区画された図柄の中に縄文を加えた大木10式段階の土器片も少なからず散見される。

図63中には，炉に埋設された土器，床面上，住居跡内覆土中から出土した遺物の内，形状の判明するもの計７点を示した。

２・３は炉跡に埋設されていた深鉢形土器である。底の抜けた３が，２の内側にきちんと納まっていた。

内外面が黒ずんだ乳白色の２は，胴部上半から口縁部にかけて欠損していた。器形をみると，底面から外傾する胴部が，上方にてやや内湾気味に立ち上がってゆく。胴部の最大径は残っていた胴部上方において約27㎝を測る。土器の胎土中には微細な砂を多く含んでいた。土器外面には，胴部の上下で施文方向を変えながら，ＬＲの縄を転がしている。

口縁部及び底部を欠損した３は，くすんだ黄褐色に発色している。土器の内側から２次的な加熱を受けたにもかかわらず，器面の劣化はそれほど目立たなかった。胴部外面には，２本の低い隆線で区画された幅３㎝ほどの無文の帯により，横長の幾何学的な図柄が描き出されている。無文の帯によって囲まれた範囲の中や，それ以外の部位にはすべてＬＲの縄を転がしている。３は外面の文様の特徴から，大木10式段階の土器と考えられる。

１は底部を欠損した深鉢形土器である。この土器は，おおよそ半分に打ち割られ，口縁部を土器埋設部側に向け，さらに外面を上にして，石組部底面の礫を覆い隠すかのような状態で出土した。器形をみると，底面の方から外傾してきた胴部は，中程に至りほぼ垂直気味に立ち上がり，さらに口縁部で軽く外反している。暗褐色の土器の胎土には１㎜ほどの礫が多く含まれていた。外面の文様は胴部の上・下半分で様相を異にしていた。胴部上半は丁寧にナデられ，内部に縄文を加えた「Ｃ」字状の図柄を３つ描いている。上半部の図柄の下から底部付近に至るまでの範囲には，ＬＲの縄を縦方向に転がしている。胴部上半と下半の文様の境には，波状の沈線などは施されていなかった。１は外面文様の特徴から大木10式段階の土器と考えられる。

４は深鉢形土器の口縁部片である。その外面の文様は，３同様，２本の低い隆線で区画された幅３㎝ほどの無文の帯により，縦方向に曲線が展開している。無文の帯以外の部位には，漏れなくＲＬの縄を転がしている。４も３と同じ土器型式のものと考える。

５は縄文土器片を材料に作られた土製円板である。その側面は打ち欠いたままであった。

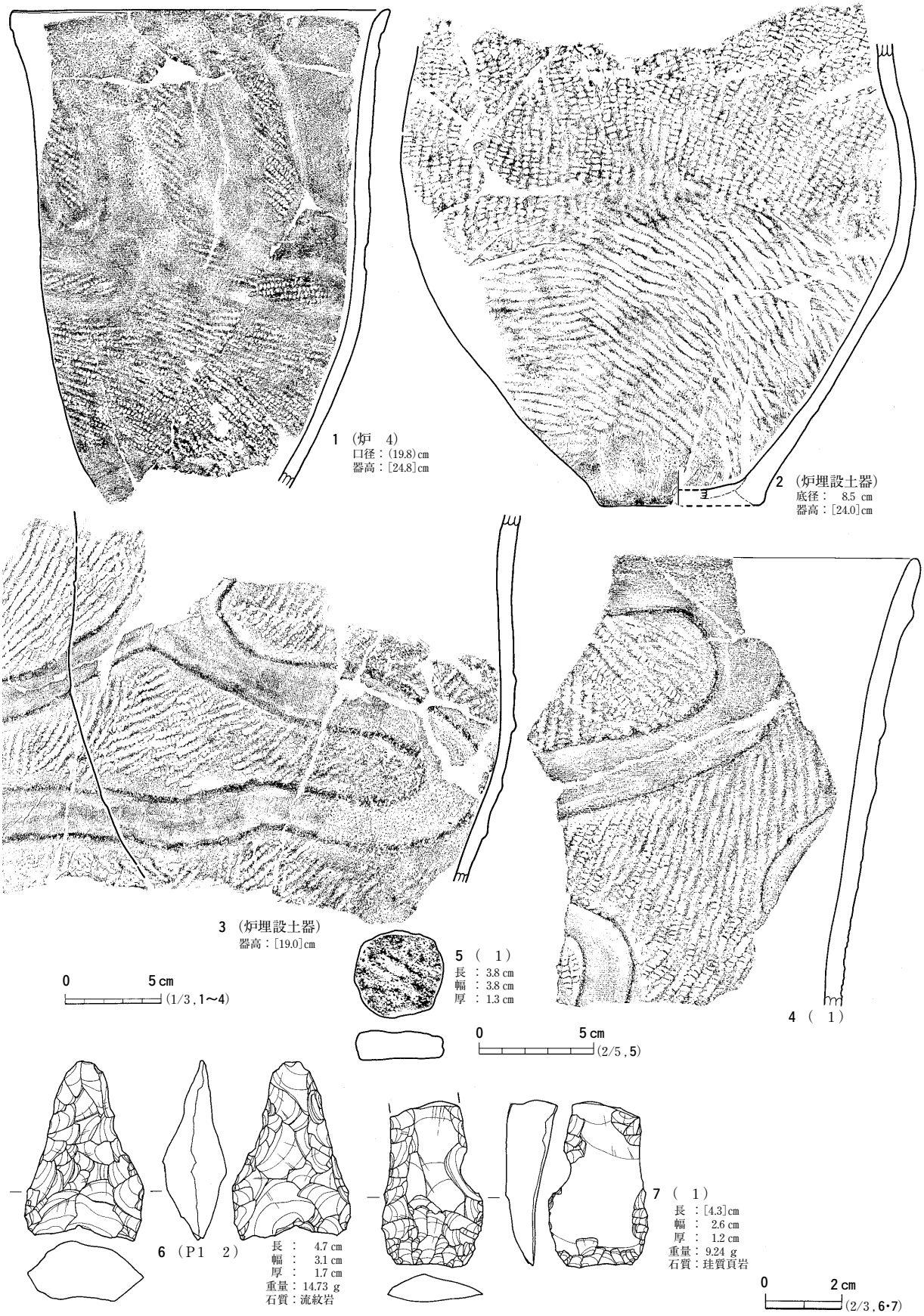


図63　46号住居跡出土遺物

６・７は本住居跡及びＰ１の覆土内から出土した石器である。６は流紋岩製の石鏃で，比較的厚みがある。その先端部分はすでに欠損し，基部は内側に若干くぼむよう形作られていた。７は珪質頁岩製の石器で，片方の長縁には１回の剝離で抉れ部分が作り出されていた。石器の約半分は既に失われていた。

ま　と　め

本遺構は丸味を帯びた五角形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。

46号住居跡は，１基の複式炉，５基の主柱穴そして断続的に巡る壁溝を備えていた。

残りの良好な複式炉は，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部で構成されていた。土器埋設部には，２個体の深鉢形土器が入れ子状に重ねて埋め込まれていた。このように，２個体の土器を入れ子にして土器埋設部に埋め込む事例は，馬場前遺跡のＳＩ42の炉跡でも認められた。

柱穴は炉跡を中心に５基を１組として配置された。また，５基の柱穴は，Ｐ１・２・５の３基の柱穴をそのままに，２度据え替えられたことも分かる。柱の据え替えの前後関係は不明だが，炉跡の近くにある２基の柱穴，Ｐ３・４とＰ７・８そしてＰ６・９を据え替えたことが分かる。

本住居跡の機能時期は，炉跡の埋設されていた土器，そして石組部内から出土した土器の文様の特徴から，大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

47号住居跡　ＳＩ47

遺　　構（図64，写真７・９・10・11・63・64）

本遺構は南区西寄り，W50・51，X50・51の４グリッドにまたがって位置する。

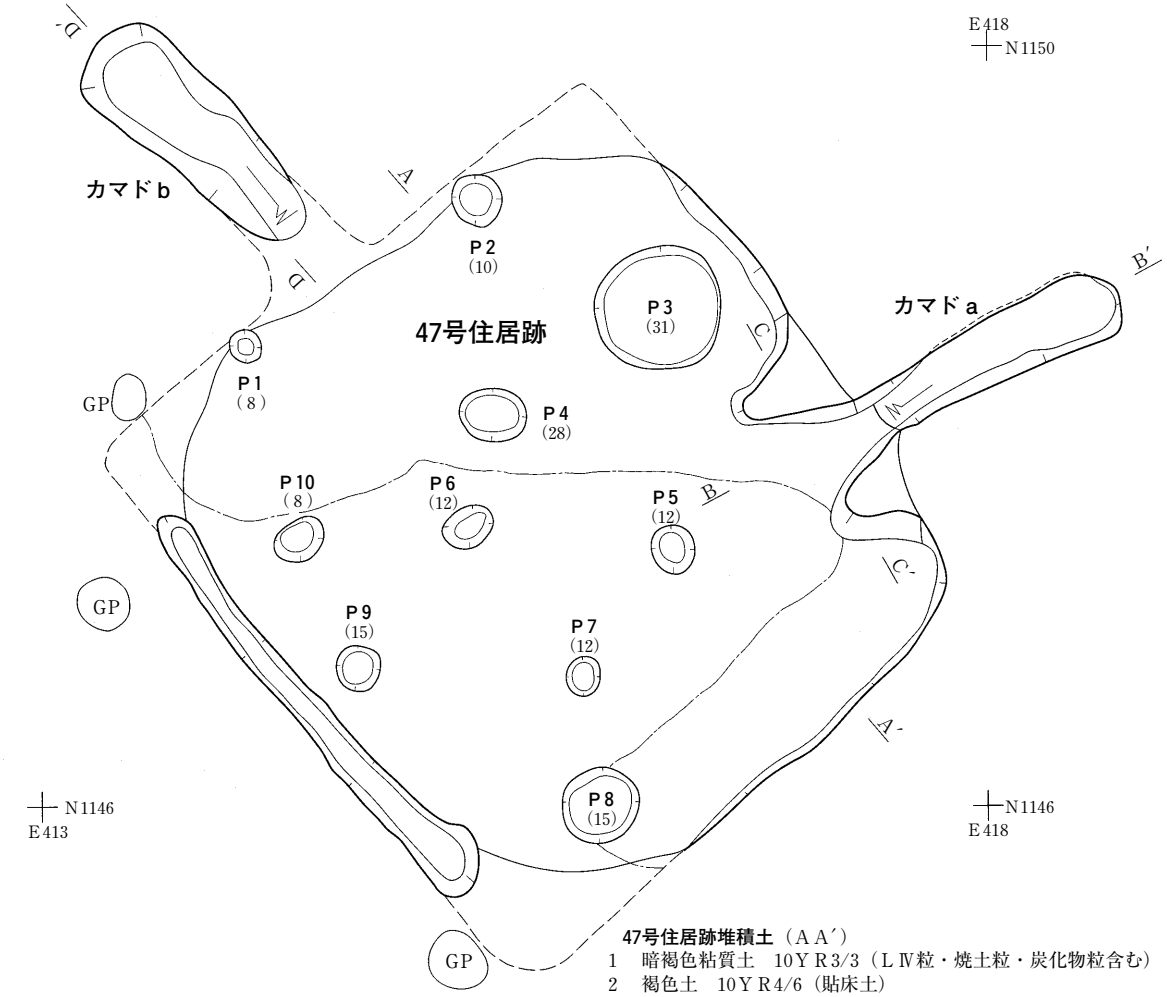
本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において不整方形の広がりとして確認された。本遺構の大半は重機による表土はぎの時点で既に失われていた。そのため，本遺構内の堆積土がわずかに残っていた東側に，南北方向の土層観察用の帯を一条残し調査を実施した。

底面と思われる不整方形状の部位の北東及び北西側には，長楕円形状の張り出しが各１個所ずつ存在した。本遺構は他の遺構との切り合いは無いものの，数基のグリッドピットによって壊されていた。周壁はほとんど残っておらず，東・南壁側において，底面から確認面までの高さはわずかに数cmほどであった。本遺構内の堆積土は，２つに分層することができた。その内，下位のℓ２は貼土と認識した。

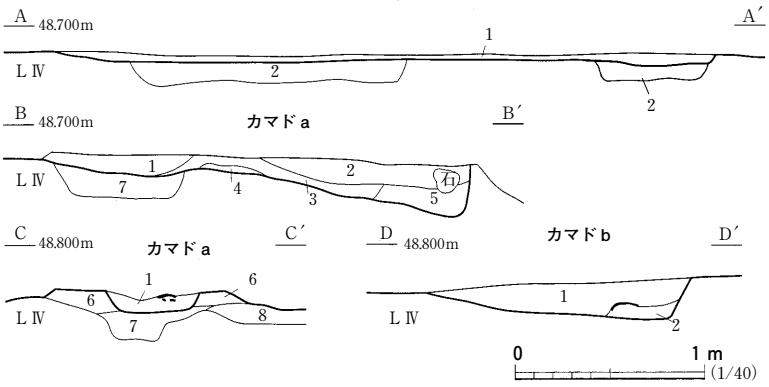
底面の調査は，まず北東及び北西側に各１ヶ所ずつ存在する長楕円形状の張出し部分の精査から開始した。北西側の張出し部では，長軸方向で半分に分割し，一方の掘り下げを実施した。北東側の張出し部では長軸方向と，それに直行する方向にも土層観察用の細い帯を残し，掘り下げた。

その結果，北東側の張出し部の付け根部分を８cmほど掘ったところで底面を確認し，さらに付け根部分を挟んで南・北側には，西に向って舌状に延びる低い段状に盛土された箇所が１つずつ存在することを確認した。

この事実から，北東側で見つかった長楕円形状の張出しはカマド煙道の可能性が高くなった。そ

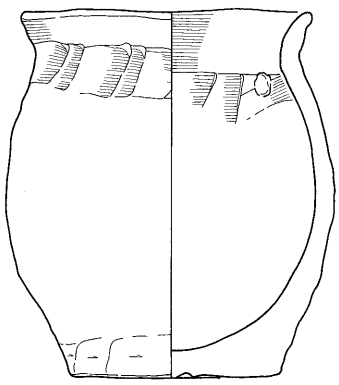


47号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　暗褐色粘質土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・焼土粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（貼床土）



カマドａ堆積土（ＢＢ′・ＣＣ′）
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4（焼土粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粘土塊，ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・焼土粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・焼土粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・焼土粒含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/3（カマド袖）
7　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒多量含む　貼床土）
8　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊少量含む　貼床土）

カマドｂ堆積土（ＤＤ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，焼土粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/3（焼土粒・炭化物粒含む）



1（カマドｂ　2）
口径：(11.5)cm
底径：(8.5)cm
器高： 14.4 cm
0　5cm
(1/3)

図64　47号住居跡・出土遺物

の結果，本遺構は住居跡として，底面は床面，北西・北東部から確認された長楕円形状の張出し部分はカマド煙道部，そして貼土は貼床として再認識できた。

本住居跡の床面は，概ね平らに削り整えていたと思われる。しかし，既に床面の西側半分は削平され，純粋なＬⅣ層が露出していた。図64中の平面図には，床面と推定される範囲を短い破線として表現した。床面と思われた範囲の規模は，北西壁から南東壁まで約3.4m，北東壁～南西側の壁跡外縁までは約3.2mを計測する。本遺構の軸線方向を東壁のラインでみると，真北に対し約45度ほど西へ傾いていた。

床面は北壁から南壁沿いに「コ」字状に貼床されていることが分かった。貼床土の厚さは，確認面から最も厚いところで約24cmを計測する。

屋内からは，カマド２基，10基のピット，そして部分的に掘りくぼめられた壁溝を確認した。

カマドは，北東壁南寄りの位置に１基，さらに北西壁のほぼ中央部にもう１基が設けられていた。ここでは２基のカマドの内，北東壁にある方をカマドａ，北西壁にある方をカマドｂと呼称する

北東側のカマドａは煙道部の他，燃焼部には客土を用い構築された２つの袖がわずかに残っていた。カマドａは，カマドｂに比べて，いくらかカマドの全体形が確認できた。

一方，北西側のカマドｂは煙道部のみ残存していた。煙道部内の堆積土下層から土師器の甕が１個体出土している。

いずれのカマドも，燃焼部底面と思われる個所に被熱変色した部位は見つけられなかった。カマドａ・ｂの土層断面（ＢＢ′，ＤＤ′）をみると，いずれの煙道の底面は壁面と接した付け根部分から煙道先端に向かって緩やかに下ってゆく。

カマドの規模は，カマドａにおいて煙道部先端から，残存した燃焼部袖の先端まで約200cm，煙道部の長さは先端から北東壁との接点まで約150cm，燃焼部の奥行きは残存する袖の先端から北東壁まで約50cmを計測する。カマドｂでは，わずかに残っていた煙道部長は約147cm，最大幅53cmを測る。

本住居跡に伴うピットは大小10基を確認した。ピットのほとんどの平面形は，円形もしくは楕円形をなしている。ピットの規模は直径（長径）約８～28cm，床面ないし確認面からの深さは10～70cmを計測する。10基のピットの内，カマドａに向かって左隅にあるＰ３は，本遺構内の他ピットに比べ平面規模，深さともに最大であった。

それぞれのピット位置及び深さを考慮すると，屋内にあった柱穴は想定できなかった。この内，Ｐ３は位置，そして大きさからカマドａに伴う貯蔵穴の可能性が示唆される。

壁溝は，南西側に沿って真北に対し西に45度ほど傾き，長さ約2.5mほど残存していた。壁溝の幅は最大で33cm，確認面からの深さは10cm前後であった。

遺　　物（図64，写真219）

遺物は主に住居内堆積土ℓ１から細かな土師器片のみが出土している。それらの大部分が杯の細片であった。杯の破片をみると，回転台を用いずに外面の調整を施しているものばかりであった。

図64には唯一全体形状が分かった土師器の甕を１点図示した。この小型の土師器甕はカマドｂの

煙道部堆積土より出土した。器形を見ると，胴部は底面から外傾気味に立ち上がり，胴部中程にて徐々に内傾し始め，口縁部に至り大きく外反している。内・外面の調整にはロクロを使わず，内外面共に丁寧なナデ調整が施され，底面付近には横方向にヘラケズリをしている。底面には木の葉の痕跡が残っていた。

ま　と　め

本遺構は方形に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。本住居跡の周壁及び床面の一部は既に消失していた。

47号住居跡には，２基のカマドの他，１基のピットそして壁溝を伴っている。床面には部分的に貼床を施していた。

北東及び北西壁に各１基ずつ構築されていたカマドの前後関係は分からなかったが，比較的遺存の良好であったのは北東側のカマドａであった。

本住居跡の機能時期は，カマドｂより出土した土師器甕，そして住居跡内から出土した土師器杯の細片に見られる特徴から，国分寺下層式段階，奈良時代頃と考えられる。　（阿　部）

48号住居跡　ＳＩ48

遺　　構（図65，写真８・65・66）

本遺構は南区北寄り，Ｙ46・47，Ｚ46・47，ＡＡ46・47の６グリッドにまたがっている。

本遺構は，基盤層であるＬⅣ層上面においてほぼ正方形状の広がりとして確認された。本遺構は１基の住居跡（ＳＩ78）と，３基の土坑（ＳＫ904・1107・1108）を壊して掘り込まれていた。重複した３基の土坑は，底面の貼土をはがした後に確認された。本遺構の北西隅は，重機によって掘削され，既に失われていた。

本遺構の調査は，正方形の広がりの中央部から，東西南北に向かって十字形の土層観察用の帯を残し掘り下げを実施した。その結果，遺構の平面形は四隅の丸い正方形状に掘り込まれていることが分かった。各辺の長さは東西長約5.8m，南北長約5.4mを計測する。本遺構の軸線方向は東壁のラインでほぼ真北を指し示す。本遺構内の堆積土（図65　ＡＡ′，ＢＢ′）は９つに分層され，その内，ℓ６・７は貼土と認識した。貼土の厚さは最大で約20㎝を計測する。

周囲の壁面は底面から約70度の角度で立ち上がる。壁の高さは確認面から底面まで15～30㎝を測り，南壁で比較的浅くなっていた。

底面の中央部には，ＬⅣ層を平らに削り残し，その表面は非常に硬く締まっていた。土層観察帯に沿って底面に断ち割りを実施した際，非常に硬く締まった部位では，移植鏝でも容易に掘り込むことができなかった。また，底面は壁際に沿って「Ｕ」字状に貼土が施されている。貼土の表面もほぼ平坦に整えられ，底面中央部に削り残された部位との比ではないが，比較的硬く締まっていた。

底面を移植鏝で丁寧に精査すると，底面から４基のピットと，北壁中央部付近から南へと延びる低い張出し部分が２ヶ所存在するのを確認した。南へ延びる２ヶ所の張出し部を発見した北壁中央

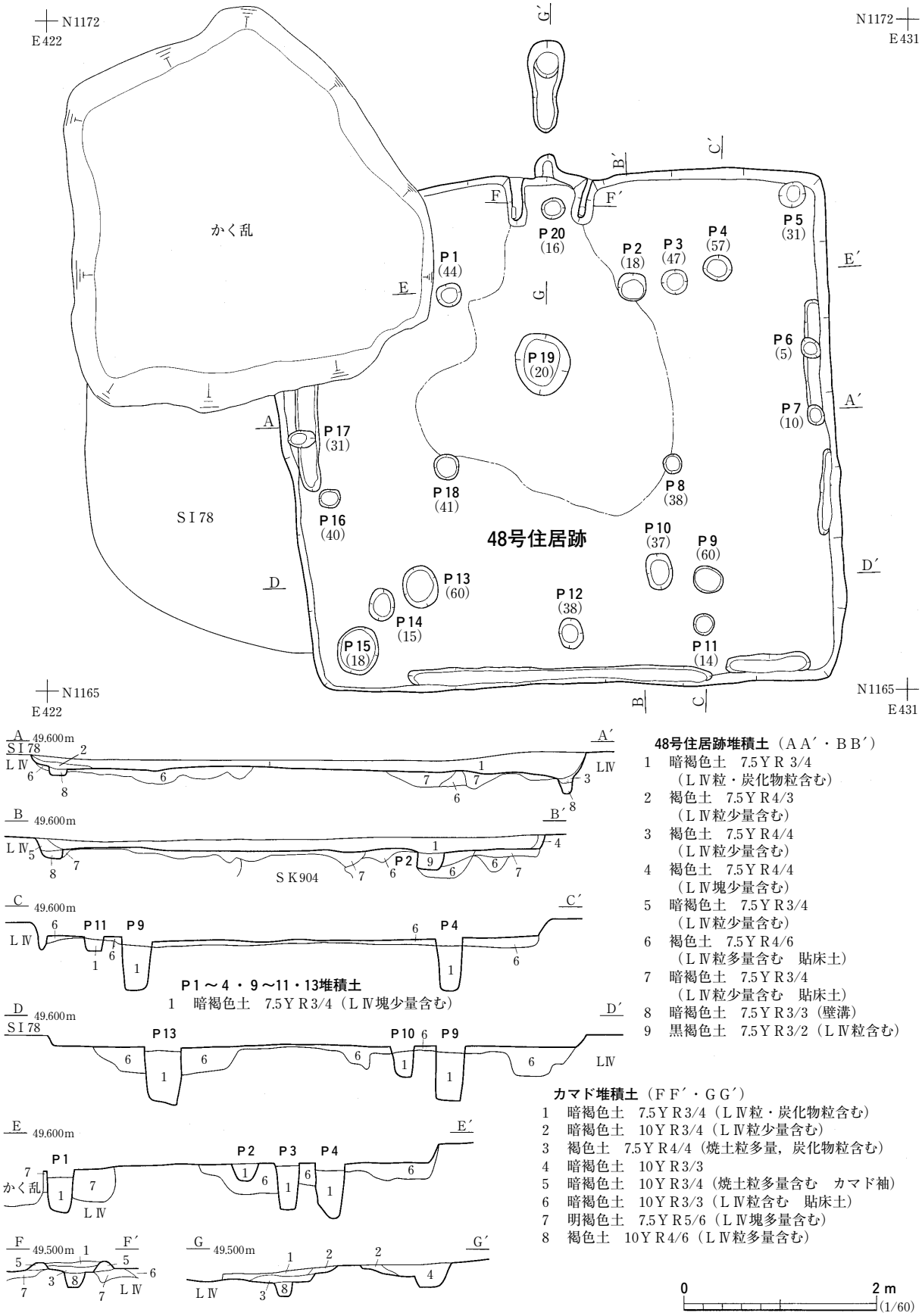

N1172
E422
N1172
E431
N1165
E422
N1165
E431
かく乱
SI78
48号住居跡
P1 (44)
P2 (18)
P3 (47)
P4 (57)
P5 (31)
P6 (5)
P7 (10)
P8 (38)
P9 (60)
P10 (37)
P11 (14)
P12 (38)
P13 (60)
P14 (15)
P15 (18)
P16 (40)
P17 (31)
P18 (41)
P19 (20)
P20 (16)
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
SK904
LⅣ
49.600m
49.500m
P1～4・9～11・13堆積土
1　暗褐色土　7.5YR3/4（LⅣ塊少量含む）
48号住居跡堆積土（AA′・BB′）
1　暗褐色土　7.5YR 3/4
（LⅣ粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　7.5YR4/3
（LⅣ粒少量含む）
3　褐色土　7.5YR4/4
（LⅣ粒少量含む）
4　褐色土　7.5YR4/4
（LⅣ塊少量含む）
5　暗褐色土　7.5YR3/4
（LⅣ粒少量含む）
6　褐色土　7.5YR4/6
（LⅣ粒多量含む　貼床土）
7　暗褐色土　7.5YR3/4
（LⅣ粒少量含む　貼床土）
8　暗褐色土　7.5YR3/3（壁溝）
9　黒褐色土　7.5YR3/2（LⅣ粒含む）
カマド堆積土（FF′・GG′）
1　暗褐色土　7.5YR3/4（LⅣ粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒少量含む）
3　褐色土　7.5YR4/4（焼土粒多量，炭化物粒含む）
4　暗褐色土　10YR3/3
5　暗褐色土　10YR3/4（焼土粒多量含む　カマド袖）
6　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒含む　貼床土）
7　明褐色土　7.5YR5/6（LⅣ塊多量含む）
8　褐色土　10YR4/6（LⅣ粒多量含む）
0
2 m
(1/60)

図65　48号住居跡（１）

部の外縁を削ってみたところ，北壁から北に向かって延びている長楕円形状の広がりがあることも分かった。

以上の事実から，北壁中央部にはカマド設置されている可能性が高くなった。この時点で，本遺構は住居跡，底面は床面そして貼土は貼床土として再認識することができた。

本住居跡内からは，カマド１基，22基のピットそして壁溝を確認した。また，床面は部分的に貼床を施し，さらに床面には所々踏み締まり硬化した部位もあった。

カマドは北壁のほぼ中央部に位置し，燃焼部，煙道部を確認した。燃焼部には東西にカマド袖のみが残存していた。残っていたカマド燃焼部の規模は幅約45㎝，奥行き約50㎝ほどであった。燃焼部底面には，熱を受け赤色変化した部分は見られなかったものの，その中央部には直径15㎝，深さ10㎝ほどの小さなピット（Ｐ20）が１基掘り込まれていた。

Ｐ20は燃焼底面の中央部に位置し，ピットの規模も併せて考慮すると，燃焼部内に据え付けられた支脚を固定する穴の可能性が考えられる。

カマドの断ち割りの結果（図65　ＦＦ′），東西の袖は貼床土を施した後に，褐色土を用いて構築している。煙道部の長さは北壁から約1.4ｍで，その底面は先端に向かって下ってゆく。煙道部は先端において最も深くなり，確認面からの深さは約25㎝を計測する。

22基のピットは，主に床面上の精査時に確認されたものだけで計20基を数える。さらに，貼床土除去後に２基のピットが確認された。ピットの平面形は円形もしくは楕円形をなす。ピットの規模は直径（長径）18～66㎝，床面ないし貼床除去後の確認面からの深さは14～60㎝を計測する。

床面上のピットの配置を観察すると，Ｐ１・２・９・12・13の５基が，カマド正面に五角形状に配置されている。また，床面中央部にはＰ８・18の２基が南北壁に平行するように並び，計７基のピットが意図的に配置されていることに気付く。以上の７基のピットは，その規模と配置から判断して，本住居跡の上屋を支えたピットの可能性が考えられる。

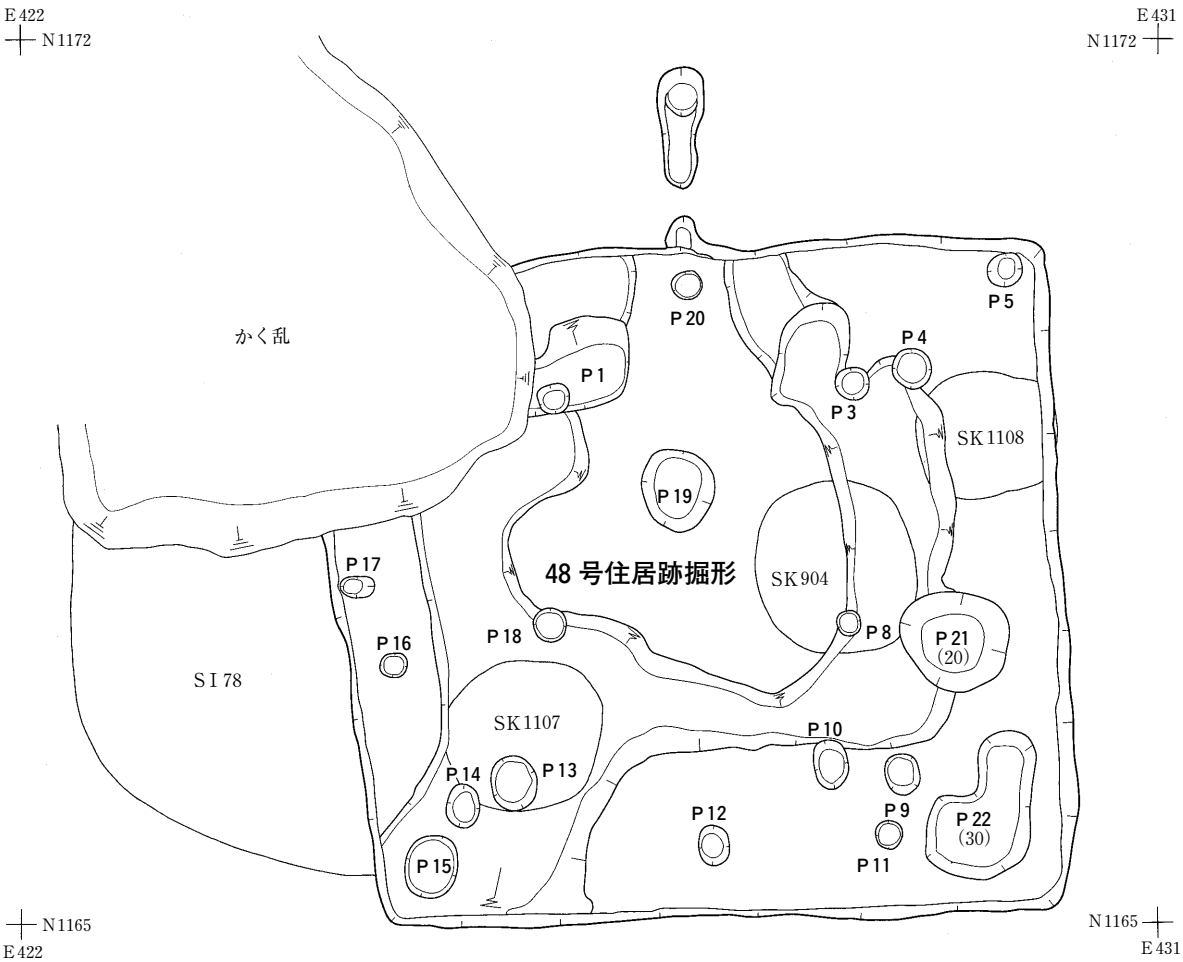
壁溝は，北壁を除いた３つの壁沿いに断続的に設けられている。壁溝の幅は20㎝前後，確認面からの深さは10㎝前後であった。

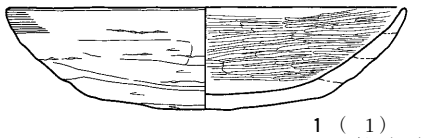
遺　　物（図66，写真219・229）

遺物は，主に本住居跡内の堆積土ℓ１から土師器杯細片が多量に出土している。また，須恵器小片も極わずかに出土している。また，本住居跡は縄文時代の住居跡（ＳＩ78）を壊して掘り込まれているため，貼床土の中には縄文土器の細片も出土している。

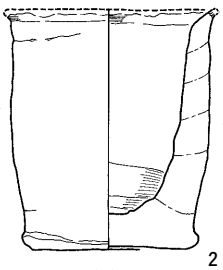
ℓ１から出土した土師器杯の破片をみると，ほとんどがロクロを用いずに外面の調整を施すものであった。この内，形状の分かる土師器及びその破片を図66中に２点掲載した。また，住居跡内の堆積土から出土し，形状の判明した２点の石器を併せて掲載した。

１は底の丸い土師器杯の破片である。１は粘土紐を輪積みにし成形し，外面をナデた後に横位のケズリ調整を施している。内面は丁寧なナデを施した後，口縁部に平行してヘラミガキを施している。内面にあるはずの黒色処理は２次的に火を受けたためか消失したものと思われる。胎土には微

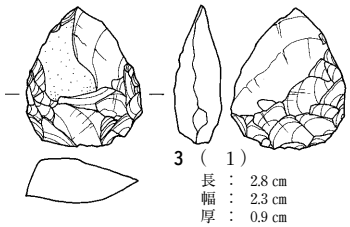




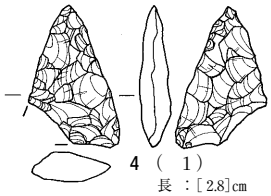
1　（　1）
口径：(15.7)cm
器高：　4.0 cm



2　（　1）
口径：(8.2)cm
底径：　6.2 cm
器高：　9.4 cm



3　（　1）
長　：　2.8 cm
幅　：　2.3 cm
厚　：　0.9 cm
重量：5.43 g
石質：石英



4　（　1）
長　：[2.8]cm
幅　：[1.7]cm
厚　：[0.6]cm
重量：1.85 g
石質：流紋岩

0　5cm　(1/3，1・2)

0　2cm　(2/3，3・4)

図66　48号住居跡（２）・出土遺物

細な砂礫を多く含んでいる。１の杯は，その器形の特徴から国分寺下層式の土器と考えられる。

２は土師器甕を模倣した土器で，底面には木葉痕が残っていた。その口縁部端は既に欠損している。器面全体は丁寧なナデで調整されるものの，外面にはわずかに粘土積みの痕跡もみられた。

３・４は本住居跡内の堆積土から出土した２点の石鏃である。４は流紋岩で作られており，その一部を欠損していた。

３は石英を材料に製作され，一部に自然面が残っていた。その基部は丸く下方に突出している。

ま　と　め

本遺構は方形に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。

48号住居跡内には１基のカマド，７基の主柱穴そして壁溝を伴っている。床面には，北壁を除く三方の壁際に沿って貼床の処置が施されていた。

本住居跡の機能時期は，住居跡内堆積土ℓ１から出土した土師器杯片の特徴から，国分寺下層式段階，奈良時代頃と考えられる。（阿　部）

49号住居跡　ＳＩ49

遺　　構（図67，写真67・68）

本遺構は南区北寄りの，Ｖ45・46，Ｗ45・46の４グリッドにまたがって位置する。本遺構の東隣のグリッドには縄文時代の住居跡（ＳＩ50）が存在する。本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において細長い楕円形状に暗褐色土の広がりと，その周囲に数基のグリッドピットと，溝跡を確認した。

本遺構の精査は，確認された細長い楕円形状の広がりに，南北方向の土層観察帯を残し，その西半分の掘り下げから実施した。その北端には，１個体の土器が埋め込まれ，その土器の外縁の土は被熱により赤く変色していた。埋設される土器の南側に接したくぼみ内には，大振りの花崗岩が丸くなるよう配置されていた。

以上の事実から，確認された細長い楕円形状の広がりは炉跡と判断された。これにより，本遺構は住居跡として再認識した。

炉跡は土器を１個体埋め込んだ複式炉で，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部で構成されている。炉跡の平面形は南北に長いしゃもじ状の形をなしている。炉の規模は土器埋設部先端から前庭部末端まで約131㎝を測り，長軸方向は真北に対し約30度ほど東に傾いている。炉跡内の堆積土は５層に分けられ，この内ℓ５は掘形埋土である。埋設土器の掘形埋土の上半分は被熱により焼土化していた。

炉跡の各部位別にみてみると，土器埋設部には土器を１個体埋設し，土器の上半部を石組部のある南側に傾け，斜めにして土中に埋め込んでいた。確認面から埋設土器の底までの深さは20㎝ほどであった。土器埋設部を断ち割り，土層を観察したところ，埋設土器の胴部中位から上層にかけての埋土が，被熱により赤く変色していた。

石組部の遺存状況は悪く，法面にのみ石が残り，隙間の空いた部分が多く認められた。石材は花

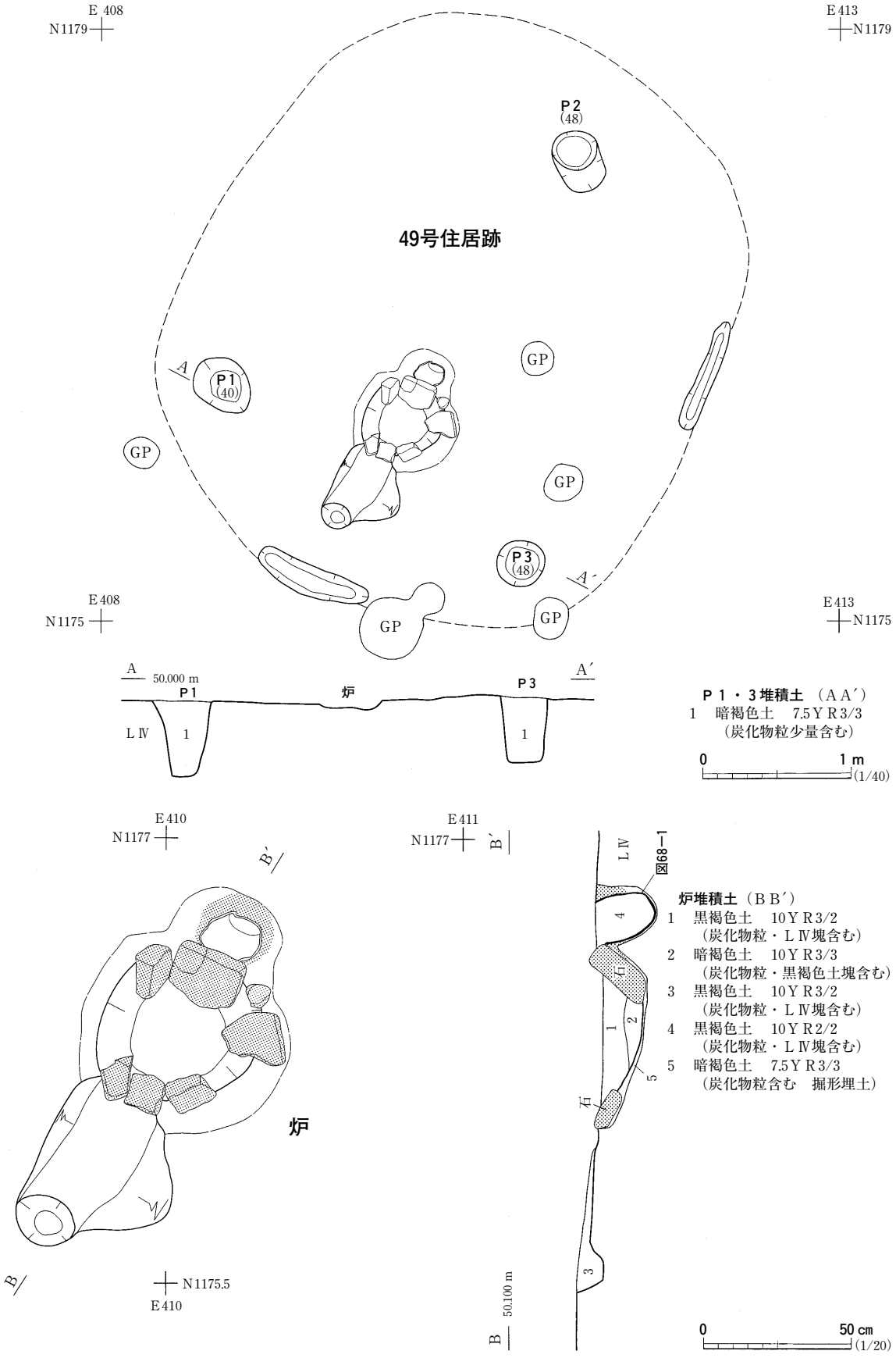

E 408
N1179
E413
N1179
P2
(48)
49号住居跡
A
P1
(40)
GP
GP
GP
P3
(48)
A´
GP
GP
E408
N1175
E413
N1175
A
50.000 m
P1
炉
P3
A´
LⅣ
1
1
P１・３堆積土（ＡＡ´）
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3
（炭化物粒少量含む）
0
1 m
(1/40)
E410
N1177
B´
炉
B
N1175.5
E410
E411
N1177
B´
LⅣ
図68−1
4
石
1
2
5
石
3
B
50.100 m
炉堆積土（ＢＢ´）
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2
（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（炭化物粒・黒褐色土塊含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2
（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ2/2
（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3
（炭化物粒含む　掘形埋土）
0
50 cm
(1/20)

図67　49号住居跡

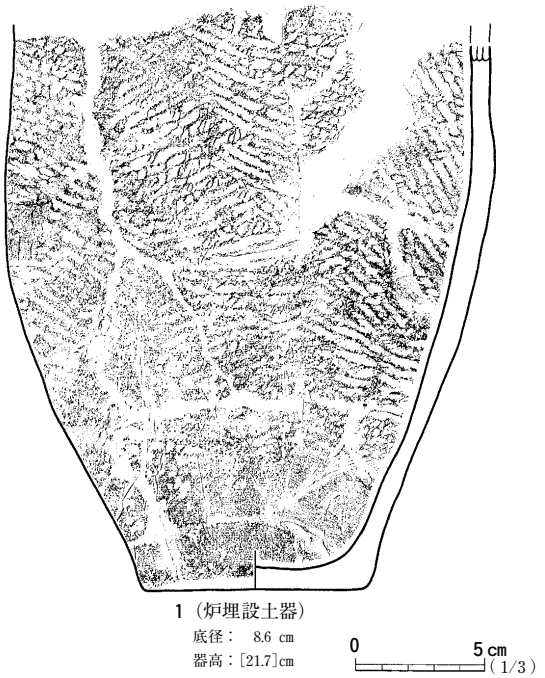


図68　49号住居跡出土遺物

崗岩の板石を用い，残っていた石の表面は熱で薄ら赤く変色していた。石組部の規模は東西長63cm×南北長60cmほどであった。土器埋設部との境には長さ25cmほどの板石が斜めに固定されていた。細長い前庭部は，石組部から南へ1.1mの長さで連結している。前庭部の南端は楕円形状（長径24cm，短径17cm）に浅く窪んでいた。前庭部底面の南端は硬く踏み締まっていた。

確認されたグリッドピットの配置を観察すると，炉跡を中心に３基のピットが三角形の頂点を成すように配置されていることが分かる。３基のピットには，西から時計回りにＰ１～３と番号を付けた。３基のピットの規模は，直径（長径）30～42cm，確認面からの深さは40～48cmを計測する。Ｐ１～３のピットは，その規模と配置から本住居跡の上屋を支えた柱穴と考えられる。

３基の柱穴の間隔をみると，Ｐ１北端～Ｐ２南西端までの最短距離は約2.5m，同じくＰ２南東端～Ｐ３北端までは約2.4mそしてＰ３西端～Ｐ１東端までは約２ｍを測る。

床面上からは，断続的に２条の壁溝が巡ることも確認された。壁溝は３基の柱穴の外側に位置し，確認できた溝跡は炉跡の南及び東側に存在した。壁溝の幅，深さは共に10cm前後で，その長さは約70cmほどであった。

柱穴と壁溝の位置を検討に入れ，本住居跡の床面の範囲を想定してみると，図67中に示した短い破線のようになる。想定された床面規模は南北4.2m，東西約3.6mほどと思われる。

遺　　物（図68，写真219）

遺物は主に炉跡の埋設土器の他に，わずかながら炉跡内の堆積土中からも縄文土器細片が出土している。その内，形の分かった１点の炉埋設土器を図68に示した。

１は胴部上半から口縁部にかけて欠損した深鉢形土器である。器面は土器内面からの２次的な加熱により所々劣化している。外面には全体にＬＲの縄を転がし，底部付近ではケズリのような調整で縄文を消している。

ま　と　め

本遺構は，１基の複式炉と３基の主柱穴，そして壁溝を備えた竪穴住居跡である。

49号住居跡の周壁及び床面は，後世の開墾等により既に失われ確認できなかった。複式炉は土器埋設部，石組部そして前庭部の三部で構成され，本住居跡の南端中央に設けられた。

本住居跡の機能時期は，炉として複式炉を伴う事実や埋設された土器の特徴から，大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。　（阿　部）

50号住居跡　ＳＩ50

遺　　構（図69，写真69・70）

本遺構は南区北端の，W44・45，X44・45の４グリッドにまたがって位置する。本遺構の東隣のグリッドには複式炉を伴う縄文時代の住居跡（ＳＩ49）が存在する。

本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において，細長い楕円形状の広がりを中心に，数基のグリッドピット，さらに断続的に細い溝跡の存在を確認した。本遺構の精査は，まず確認された細長い楕円形状の広がりの掘り下げから開始した。

細長い楕円形状の広がりの南端は，東西に走る溝跡（ＳＤ06）により一部を壊されていた。まず，細長い広がりには，南北方向に土層観察帯を残し，西半分の掘り下げから実施した。楕円形状の北端には土器が１個体埋め込まれ，その土器の外縁は被熱により赤く変色していた。埋設される土器に南接して大きさの異なる花崗岩を並べていることが分かった。このことから，細長い楕円形状の広がりは炉跡である可能性が高くなり，本遺構を住居跡として再認識した。

炉跡はほぼ完全な形の土器を１個体埋め込んだ複式炉で，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっていた。炉跡の平面形は南北に長い楕円形をなしている。その規模は土器埋設部先端から前庭部末端まで約190cmを測り，長軸方向はほぼ真北を指し示す。炉跡内の堆積土は８層に分けられ，この内ℓ８は掘形埋土である。埋設土器の上半分の掘形埋土は被熱により焼土化していた。

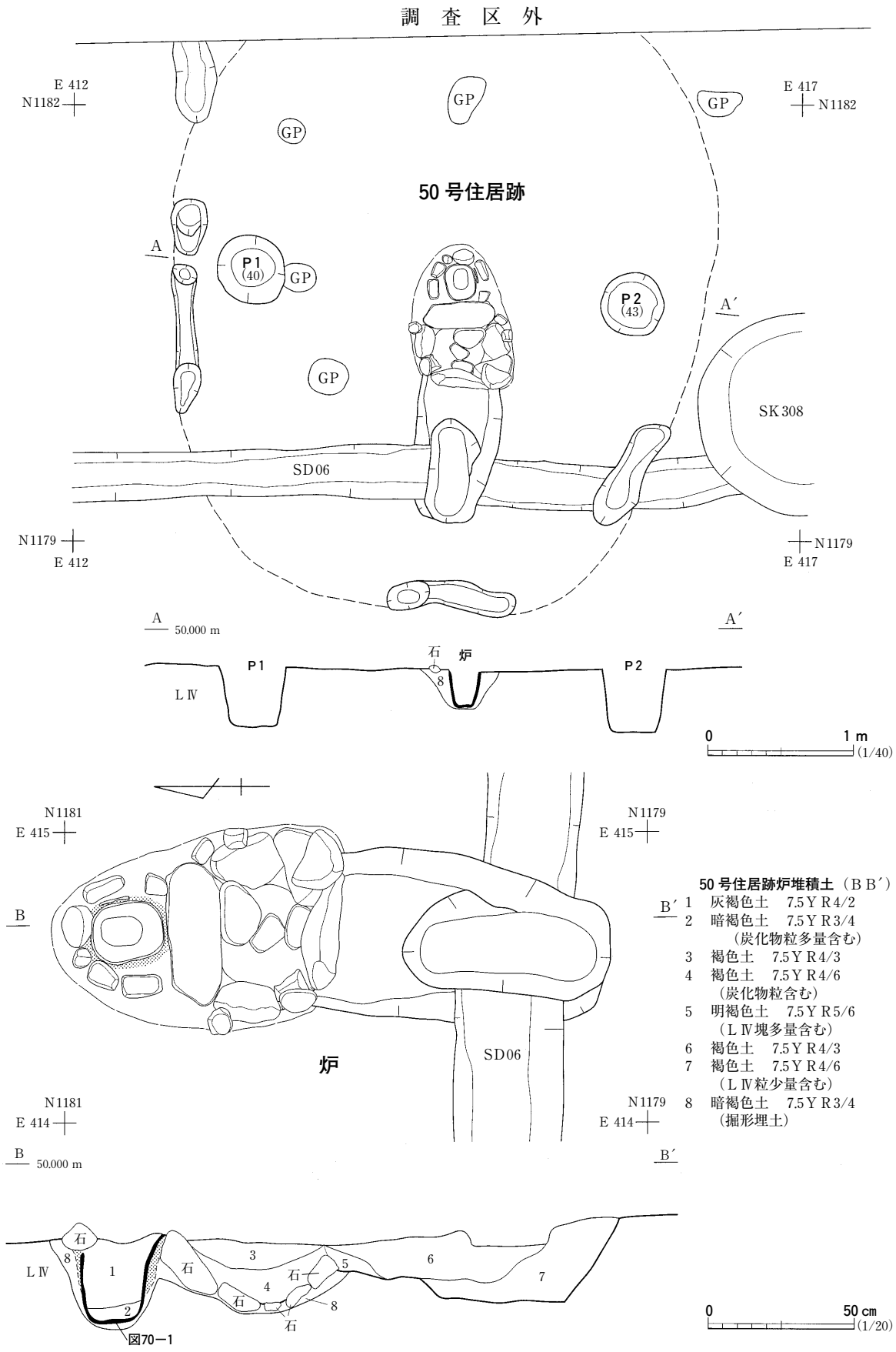
炉跡を各部位別にみてみると，土器埋設部には，ほぼ完形の土器を１個体埋め込み，土器の口縁部の外側には拳大の河原石を半円形状に並べている。確認面から埋設土器の底までの深さは30cmほどであった。土器の口縁部の周囲は約２cmほどの幅でリング状に被熱変色している。さらに，土器埋設部を断ち割り，土層を観察したところ，埋設土器の胴部中位から上層にかけての土も被熱により赤黒く変色していた。

石組部の遺存状況は比較的良好で，石組部の法面及び底面に大振りの偏平な石が残っていた。石材には主に平たい花崗岩を多用し，石の表面は熱を受け薄ら赤く変色していた。石組部の規模は東西長63cm×南北長60cmほどであった。土器埋設部及び前庭部との境には，長さ50cm前後の板石を斜めに固定されている。

細長い前庭部は，石組部から南へ1.8cmの長さで連結している。前庭部の南半分は楕円形状（長径72cm×短径28cm）に浅く窪み，段を形成している。

確認されたグリッドピットの配置を観察すると，２基のピット（Ｐ１・２）が炉を中心に等間隔で対を成すように配されている。２基のピットの規模は直径44～46cm，確認面からの深さは40cmないし43cmを計測する。２基のピット間隔をみると，Ｐ１東縁～Ｐ２西縁まで約2.2mを測る。

以上の２基のピット（Ｐ１・２）は，その配置と規模から，本住居跡の柱穴と考えられる。それ以外のグリッドピットは，深さ10cm前後と２基のピットに比して浅いことから，柱穴として判断し



50 号住居跡炉堆積土（ＢＢ′）

1　灰褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/2
2　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
（炭化物粒多量含む）
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
4　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
（炭化物粒含む）
5　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6
（ＬⅣ塊多量含む）
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
7　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
（ＬⅣ粒少量含む）
8　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
（掘形埋土）

図69　50号住居跡

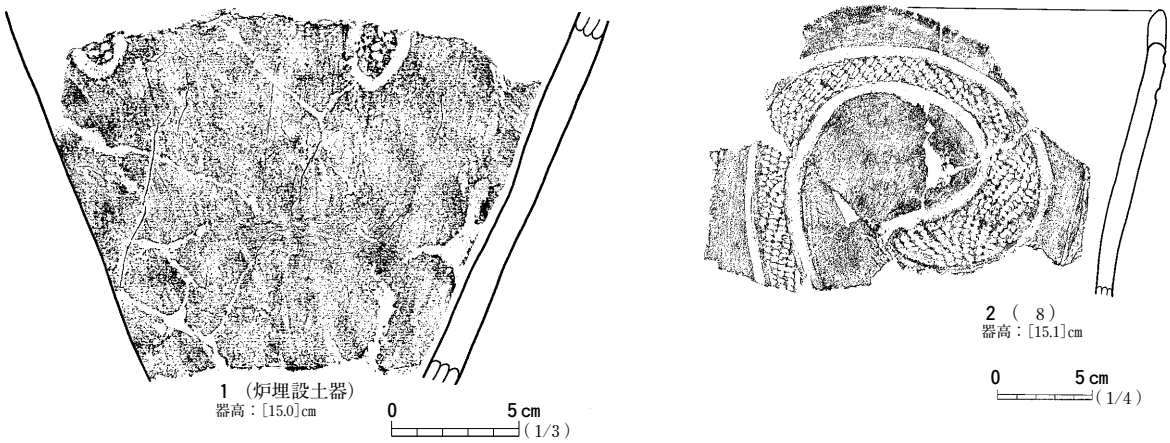


図70　50号住居跡出土遺物

なかった。

確認面には４条の溝跡が本遺構の南半分に断続的に巡っている。溝跡はすべて，２基の柱穴と炉跡の外側に位置していた。溝跡の規模は，幅，深さは共に20cm前後で，その長さは40～100cmほどであった。

柱穴や炉跡の位置を考慮に入れ溝跡の配置をみると，４条の溝跡が本住居跡の壁溝である可能性を想定できる。壁溝の位置を検討に入れ推測される本住居跡の床面範囲の規模は，その北側が調査区外となっているものの，東西長で約3.7ｍを測る。

遺　　物（図70）

本住居跡からの出土遺物は，土器埋設部内から出土した土器だけであった。出土した２点の土器は図70に示した。

１は炉跡に埋設された深鉢形土器の胴部片で，底部及び胴部上半部から口縁部にかけて欠損している。内外面は丁寧にナデられている。残っていた胴部上方の外面には，沈線で縦長の曲線を描き，その内部に縄文を加えた図柄が見られる。

２は，１の埋設土器外側の土，掘形埋土中から出土した口縁部片である。口縁部端は波打つように形作られていたものと思われる。外面には，内部に縄文を加えた渦巻き状の図柄が描かれている。

１・２は共に外面の文様の特徴から，大木10式段階の土器と考えられる。

ま　と　め

本遺構は１基の複式炉と２基の主柱穴，そして壁溝を備えた竪穴住居跡である。

50号住居跡の周壁及び床面は後世の開墾等により失われ確認できなかった。複式炉は土器埋設部，石組部そして前庭部の三部で構成され，本住居跡の南端中央に設けられていた。

本住居跡の機能時期は，炉跡に埋設された土器の特徴から，大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

51号住居跡　ＳＩ51

遺　　構（図71）

本遺構は南区の北西端，Ｔ47・48，Ｕ47・48の４グリッドにまたがって位置する。本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において楕円形状の広がりと，その周囲には数基のグリッドピットが散在するのみであった。

本遺構の精査は，確認された楕円形状の広がりに，南北方向の土層観察帯を残し，西半分の掘り下げから実施した。楕円形状の暗褐色土の北端には土器の底部が１個体埋め込まれていた。埋設される土器の南側はさらに一段浅く下がっていた。炉跡内の堆積土は３層に分けられる。

以上のことから，この楕円形状の広がりは炉跡の残骸である可能性が高まった。この時点で，本遺構が住居跡であることを再認識した。

炉跡は，その遺存状況から北側に土器を埋め込んだ土器埋設部，その南側には楕円形状の浅いくぼみが連結していた。楕円形状の浅いくぼみを観察すると，その底面にはわずかに熱で赤く変色した部位が確認できる。このことから，土器埋設部に連結した浅いくぼみは，石材を抜き取った後の石組部の掘形であろうと想定した。

複式炉が機能していた当時の姿は，土器埋設部と石組部の二部構成であったか，それともそれらに前庭部を伴う三部構成であったかどうかは，現状ではうかがい知れない。

確認できた炉跡の平面形状は南北に長い楕円形をなしている。炉跡の規模は土器埋設部先端から石組部と思われるくぼみの末端まで約84cmを測る。その長軸方向は真北に対し約15度ほど東に傾いている。

散在するグリッドピットの配置を観察すると，炉跡を中心に３基のピットが配置されることに気付く。３基のピットは，北から時計回りにＰ１～３と番号を付けた。まず，３基のピット内の２基（Ｐ１・３）は，炉跡の長軸線の延長線上に存在する。さらに，炉跡の東側にもピットがもう１基（Ｐ２）確認された。

３基のピットの規模は直径32～40cm，確認面からの深さはＰ３が最も浅く10cm，Ｐ１・２では31cmと48cmを計測した。３基のピット間隔をみると，Ｐ１南東縁～Ｐ２南西縁まで約2.3m，同じくＰ２南西縁～Ｐ３東縁までは約１ｍを測る。

３基のピットの配置と規模を検討すると，３基はすべて本住居跡の柱穴であったと考えられる。炉跡の西側は，調査区の外になっているが，炉跡を挟んで西側に，Ｐ２から炉跡までの距離と同じ間隔を空けて，もう１つの柱穴があったことは十分考えられる。したがって，本住居跡が機能している当時は，計４本の柱で主に上屋を支えたものと推察する。

柱穴の位置を考慮に入れ，本住居跡の想定された床面の範囲は，図71に短い破線で示した。床面の範囲の規模は，南北長で約4.2mほどであった。

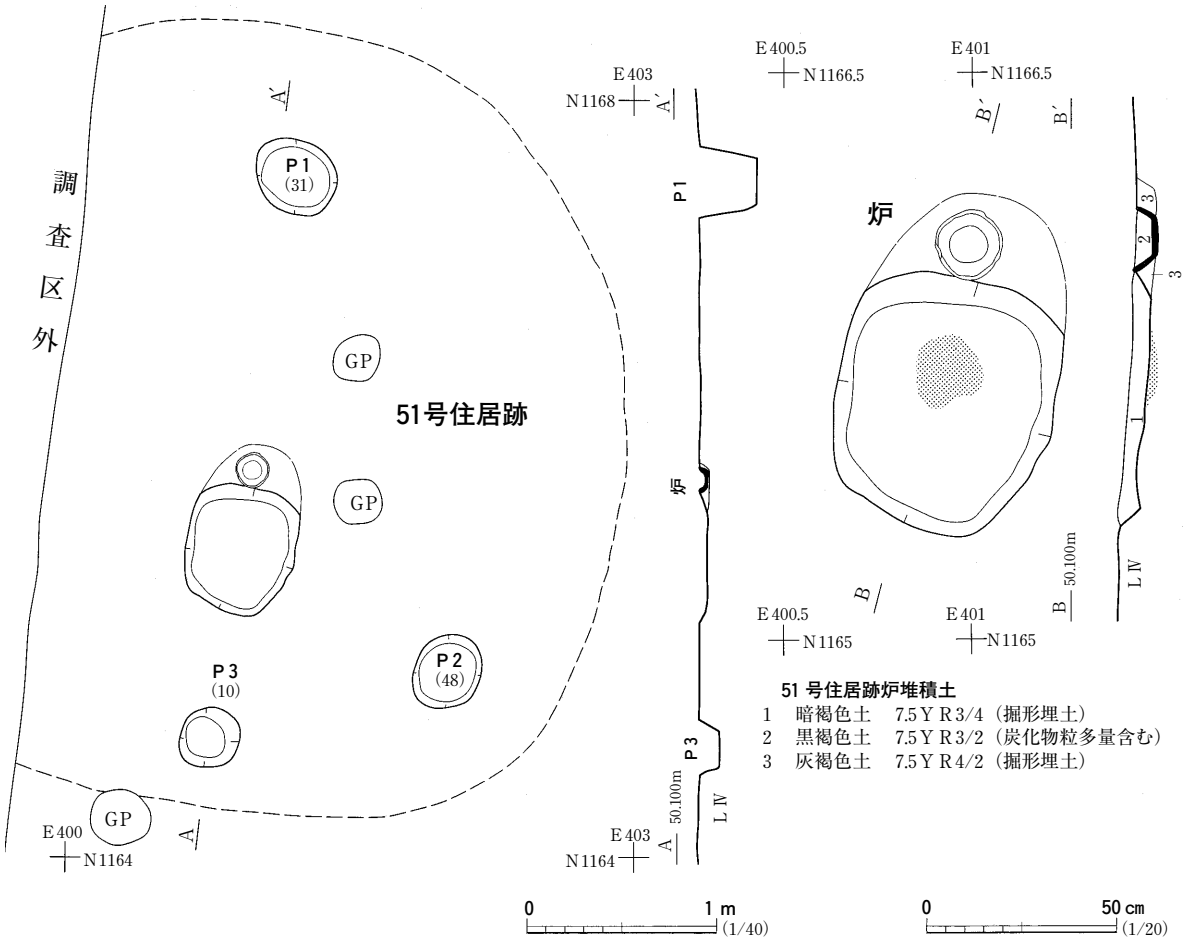


図71　51号住居跡

遺　　物（図72）

遺物は，炉跡から出土した埋設土器のみで，他には全く無かった。

１は底部付近のみが残っていた深鉢形土器である。その外面には，２本１組となった縦位の沈線を繰り返し器面に描き，沈線の間の隙間を埋めるようにＲＬの縄を転がしている。２は外面の文様の特徴から，大木９式段階の土器と考えられる。

ま　と　め

本遺構は１基の複式炉と，４基の柱穴（現状で確認できた数は３基）を備えた竪穴住居跡である。

51号住居跡の周壁及び床面，そして炉跡の上部構造は後世の開墾等により既に失われ確認できなかった。確認できた複式炉は北から土器埋設部，そして石組部の二部で構成されていた。

本住居跡の機能時期は，炉埋設土器の文様の特徴から，大木９式段階，縄文時代中期後葉頃と考えられる。　（阿　部）

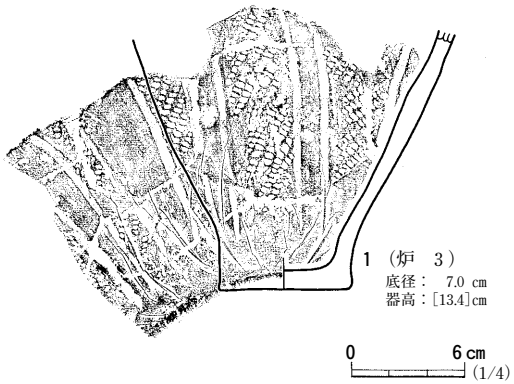


図72　51号住居跡出土遺物

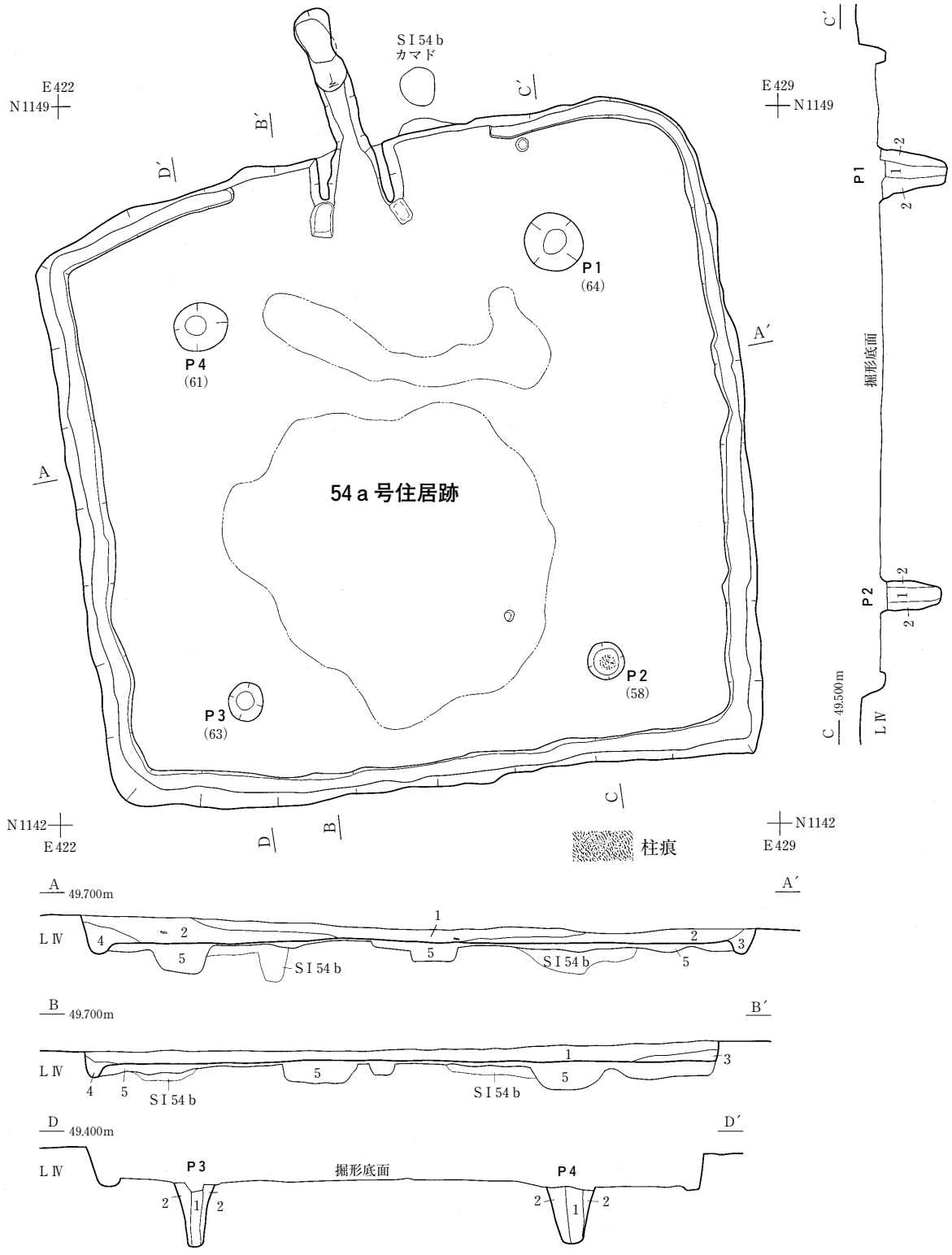
54ａ号住居跡　ＳＩ54ａ

遺　　構（図73・74，写真７・11・73・74）

本遺構は南区北西部の平坦地に存在し，Ｙ51～52・Ｚ51～52・ＡＡ51～52グリッドに位置する。本遺構の西に47号住居跡，北東に70・74号住居跡，南に61～63号住居跡が近接する。55号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。黄褐色土（ＬⅣ）上面で隅丸方形の落ち込みを検出し，それに合わせて土層観察用のベルトを南北方向と東西方向に設置した。当初１軒の住居跡として調査したが，貼床を剝がした段階で一回り小さい住居跡の掘形を検出した。そこで新しい住居跡を54ａ号住居跡，古い住居跡を54ｂ号住居跡とした。遺構内堆積土は５層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒と黄褐色土粒を含む暗褐色土で，遺構の中央部に堆積している。ℓ２は黄褐色土粒と炭化物を含む黒褐色土，ℓ３は黄褐色土を含む暗褐色土，ℓ４はℓ３より暗い色調の暗褐色土で，黄褐色土粒を含む。ℓ２は東壁沿いに，ℓ３は北壁から東壁沿いに，ℓ４は西壁沿いに流れ込むように堆積している。堆積状況よりℓ１～４は自然に流入した土と考えられる。ℓ５は黄褐色土粒・黒褐色土粒・焼土粒を含む暗褐色土で，貼床土である。

平面形は一辺6.5ｍ程の隅丸方形である。東西壁方向を主軸方位とすると，真北から西側に20°程傾く。壁高は11～32㎝で，周壁は70°程度の角度で直線的に立ち上がる。床面は黄褐色土を凹凸に掘り込み，暗褐色土をほぼ平坦に貼床している。床面の南側中央部，北西部，カマド燃焼部南側に踏み締まりが確認された。住居跡内施設としてカマド１基，壁溝，主柱穴17基，ピット12基を検出した。この内，床面で検出できたのはカマド，壁溝，柱痕で，貼床土を剝がした後検出したのは柱穴と中央部にある床下土坑である。そのため柱を据えた後，貼床したことがわかる。カマドは北壁の中央に設けられ，カマド煙道の長軸方位と住居跡の主軸方位は一致する。壁溝はカマド周辺を除き周壁際を全周する。床面中央には「人」の字状の床下土坑が検出された。幅は22～41㎝，確認面からの深さは５～10㎝を測り，ℓ５に相当する暗褐色土で埋め戻されている。

床面で柱痕を確認できたのはＰ１～４で，住居の四隅にそれぞれ位置する。Ｐ１～４を結ぶと住居の平面形にほぼ対応し，Ｐ１－２は420㎝，Ｐ２～３は357㎝，Ｐ３～４は375㎝，Ｐ１～４は363㎝を測る。Ｐ１～４の平面形は長径36～52㎝の円形または楕円形で，検出面からの深さは58～64㎝を測る。断面の観察より，直径12～15㎝の柱を，黄褐色土粒と黒褐色土粒と焼土粒を含む褐色土を充填して固定した後，貼床していることがわかる。Ｐ12・13・15・17・20・21・29・30は直径16～25㎝の円形で，深さは29～47㎝を測る。Ｐ12・13・15・17・20・21・29・30も位置と規模から主柱穴と推測され，Ｐ12・15・20・30，Ｐ13・17・21・29の組み合わせが考えられる。また，Ｐ14・22・23・28もその位置関係と規模から柱穴と考えられる。Ｐ12～15・17・20～23・28～30内には黄褐



54a号住居跡堆積土（ＡＡ′・ＢＢ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量，黒褐色土粒・焼土粒少量含む）

Ｐ１～４堆積土（ＣＣ′・ＤＤ′）
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（柱痕）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒・焼土粒・黒褐色土粒少量含む）

0　2 m
(1/60)

図73　54 a 号住居跡（１）

色土粒，黒褐色土粒，焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ５・６・16・18・24・25は平面形が長径30～54cm，短径25～45cmの楕円形で，深さが８～35cmを測る。中央部の溝端部に対応する位置に，Ｐ５とＰ６，Ｐ16とＰ18，Ｐ24とＰ25がそれぞれ隣接して存在するので，これらはこの溝に伴うピットと考えられる。規模と位置関係から，Ｐ５・18・25，Ｐ６・16・24の組み合わせが考えられる。ほぼ対応する位置に隣接し，柱の据え替えが想定されるが，重複しないため新旧関係は不明である。Ｐ５・25内には黄褐色土粒・焼土粒・炭化物粒を含むにぶい黄褐色土，Ｐ24内には黄褐色土粒と黒褐色土粒を含む褐色土，Ｐ６・16・18内には黄褐色土粒・黒褐色土粒・焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ９～11とＰ26・27・31はそれぞれ床面北東部のＰ１と北西部のＰ４に近接する位置にあり，平面形が長径56～70cm，短径50～67cmの楕円形で，検出面からの深さは13～31cmを測る。位置関係と深さから組み合わせを考えると，Ｐ９と31，Ｐ10と27，Ｐ11と26の組み合わせが想定される。重複しないので同時存在なのか，新旧関係があるのかは不明である。Ｐ９～11・26・27・31内には，黄褐色土粒・黒褐色土粒・焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ19は南壁際の中央よりやや西側に位置し，平面形は直径18cmの円形で，検出面からの深さは29cmを測る。その規模と位置関係から壁柱穴の可能性が考えられるが，北壁の対応する位置に柱穴は検出されず，機能は不明である。Ｐ19内には黄褐色土粒と黒褐色土粒を含むにぶい黄褐色土が堆積している。以上のことから考えると，本遺構は柱の据え替えが少なくとも２回行われたと推測される。

壁溝はカマド周辺を除き，周壁際をほぼ全周する。幅は14～36cm，深さは６～14cmを測る。北西側の壁溝内にはℓ４に相当する暗褐色土，南壁から東壁の壁溝内にはℓ２に相当する黒褐色土がそれぞれ壁沿いに流れ込むように堆積しているので，廃棄時には壁溝は掘り開けられた状況であったと考えられる。

カマドは両袖と煙道，燃焼部が遺存する。煙道と袖の上部を一部かく乱で壊されているが，遺存状態は良い。燃焼部の奥行きは55cm，幅は51cmを測る。袖は断面から，掘形基底部に暗褐色土と褐色土を積上げ袖を造り出した後、貼床したことがわかる。袖の長さは80cm程度で，袖先にレンガ状のシルト岩塊を埋め込み，焚口部天井の支えとしている。東側のシルト岩塊は調査時に掘りすぎてしまい下部のみ残存するが，廃絶時には西側と同程度遺存していた。燃焼部の中央には長径65cm，短径61cmの楕円状の焼土化範囲が認められ，厚さは最大で３cmに及ぶ。焼土化範囲は両袖と煙道の一部に及ぶ。煙道は北に向かって溝状にのび，底面が北に向かって緩やかに傾斜して煙出しピットに連結する。煙道の長さは140cm，幅は32～34cm，検出面からの深さは最大で39cmを測る。煙道の天井部は一部遺存していて，黄褐色土粒，黒褐色土粒，焼土粒を含む褐色土で構築されている。煙道の側壁は熱を受け焼土化し，硬化している。カマド内堆積土は６層に分けられる。ℓ１は遺構内堆積土ℓ１に相当する暗褐色土，ℓ２は焼土粒を多く含む褐色土で，共に燃焼部に堆積している。ℓ３は焼土粒を含む褐色土で、煙道の中央部に堆積する。ℓ４は黄褐色土塊と炭化物粒と焼土粒を含む暗褐色土，ℓ５は黄褐色土粒・黄褐色土塊・焼土粒を含む暗褐色土で，共に煙道北部に堆積している。ℓ６は黄褐色土塊と焼土粒を含む暗褐色土で，煙出しピットに南側から流れ込むように堆

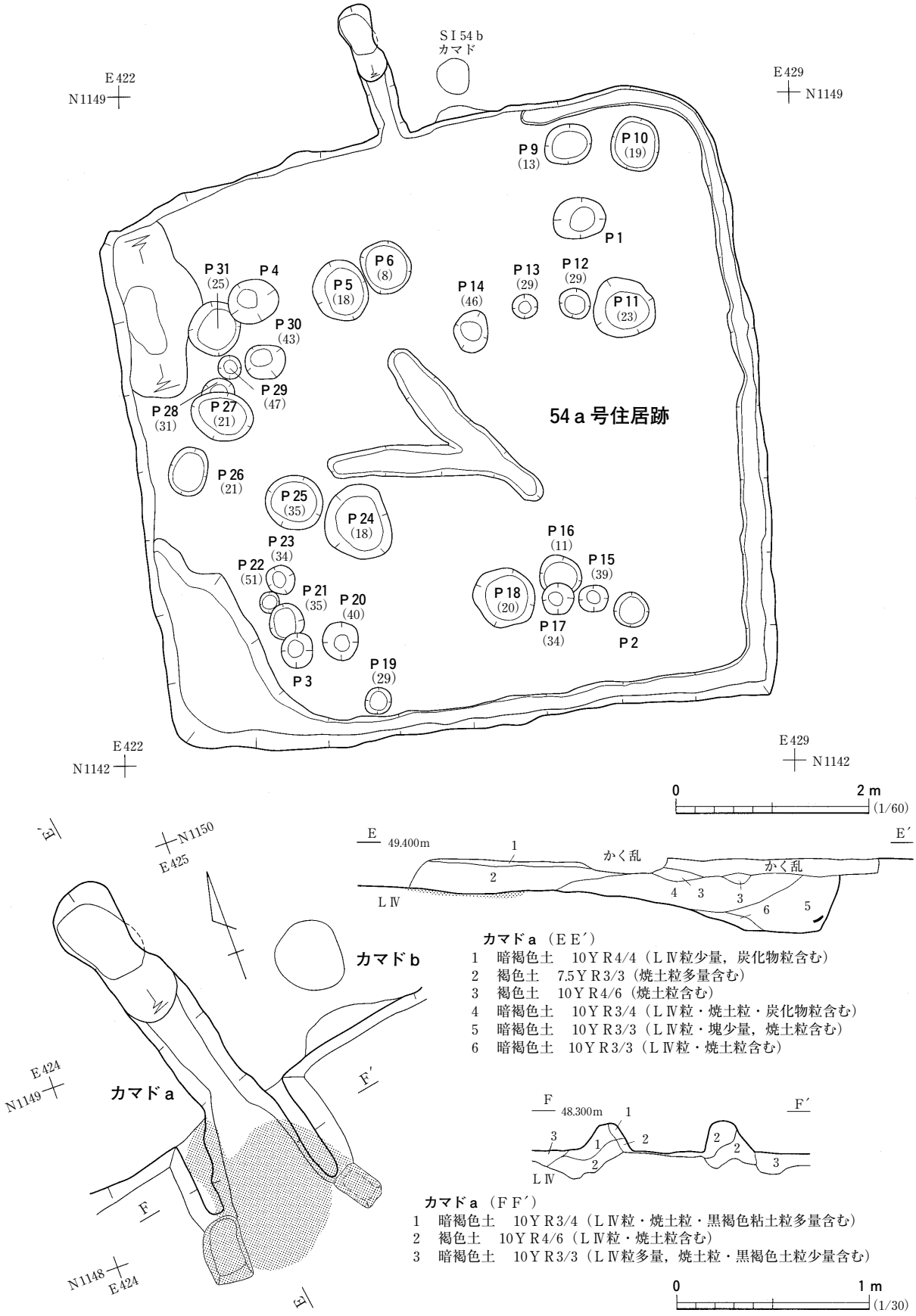


図74　54 a 号住居跡（２）

積している。ℓ１・５・６は自然堆積土，ℓ２～４は人為堆積土と考えられる。

遺　　物（図75・76，写真200・230・233）

遺物は，土師器769点，須恵器７点，縄文土器412点，石器類54点が出土した。出土した土師器は，図75−６以外ロクロを用いずに整形され，器種に杯・小型鉢・甕が見られる。図75－１はＰ５のℓ１から出土した丸底の土師器杯である。口唇部が軽く外反する器形で，胎土に長石・石英・雲母・海綿骨針を含む。外面にはヨコナデとヘラケズリを施しているが，体部外面にはあまり調整を加えていないので積上げ痕が明瞭に認められる。内面には黒色処理とヘラミガキが施される。２はℓ１から出土した丸底の土師器杯である。胎土に長石・石英・雲母・金雲母・酸化鉄粒を含み，器面は両面共に摩滅して調整があまり明瞭に観察できない。外面にはヘラケズリ，内面にはヘラナデが施される。３はℓ２から出土した丸底の土師器杯である。胎土に長石・石英・雲母・海綿骨針を含み，外面にはヨコナデとヘラケズリを施しているがあまり調整されておらず，体部に粘土紐の積上げ痕が認められ，器の座りも悪い。内面にはヨコナデとヘラミガキが施されている。内面の黒色処理は施されなかったのか，被熱により消滅したのかは不明である。４はℓ１・６から出土した丸底の土師器杯である。外面にはナデとヘラケズリが施されるが，調整はあまり丁寧ではなく，幅４～15㎜程の粘土紐の積上げ痕が明瞭に見られる。内面にはヘラミガキが施されるが，器面が摩滅して単位と方向は不明である。また内面には黒色処理が施されていたが，被熱により消滅したと思われる。５はℓ６から出土した丸底の土師器杯で，胎土に長石・石英・酸化鉄粒・海綿骨針を含む。底部から口縁部にかけて内彎しながら立ち上がる器形で，器高が６㎝と他に出土した杯より高い。外面は口縁部にヨコナデが施され，体部は摩滅して調整を判別できなかった。内面にはヘラミガキが施され，黒色処理は二次加熱により一部を除き消滅している。６はℓ２より出土した平底の土師器小型杯で，長石・石英・金雲母・酸化鉄粒を含む。ロクロを使って整形され，体部は外傾し，口縁部は口唇部に向かってつまみ上げられている。体部下半外面に積上げ痕が認められる。内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。底部は回転ヘラ切りされている。７はℓ３から出土した丸底の土師器杯で，胎土に石英や長石と径３～５㎜の砂粒を多量に含む。外面にはヨコナデとヘラケズリが施され，体部に積上げ痕が認められる。内面は黒色処理が施された後，ヘラミガキされている。８はℓ１・６から出土した平底の土師器杯で，胎土に細砂粒と雲母を含む。器面は両面共に磨耗していて，調整は不明である。９はℓ１・２から出土した土師器甕で，胎土に長石・石英・金雲母・酸化鉄粒・海綿骨針を含む。体部は外傾しながら立ち上がり，口縁部が強く外反する器形である。外面は口縁部にヨコナデが施され，体部は器面が摩滅して調整は不明である。内面は口縁部にヨコナデ，体部にヘラナデを施している。10はℓ３・５から出土した土師器甕で，胎土に長石・石英・酸化鉄粒・海綿骨針を含む。体部上位に最大径を持ち，口縁部が強く外反する。外面は口縁部にヨコナデ後，体部にヘラナデが施される。内面は口縁部から体部上位にかけてヨコナデが施される。11は，ℓ１・２から出土したほぼ完形の土師器甕で，胎土に海綿骨針と，径２～３㎜の長石・石英等の砂粒を多く含む。体部下半は緩やかに内湾しながら立ち上がり，体部中位に最大径を持つ。体部

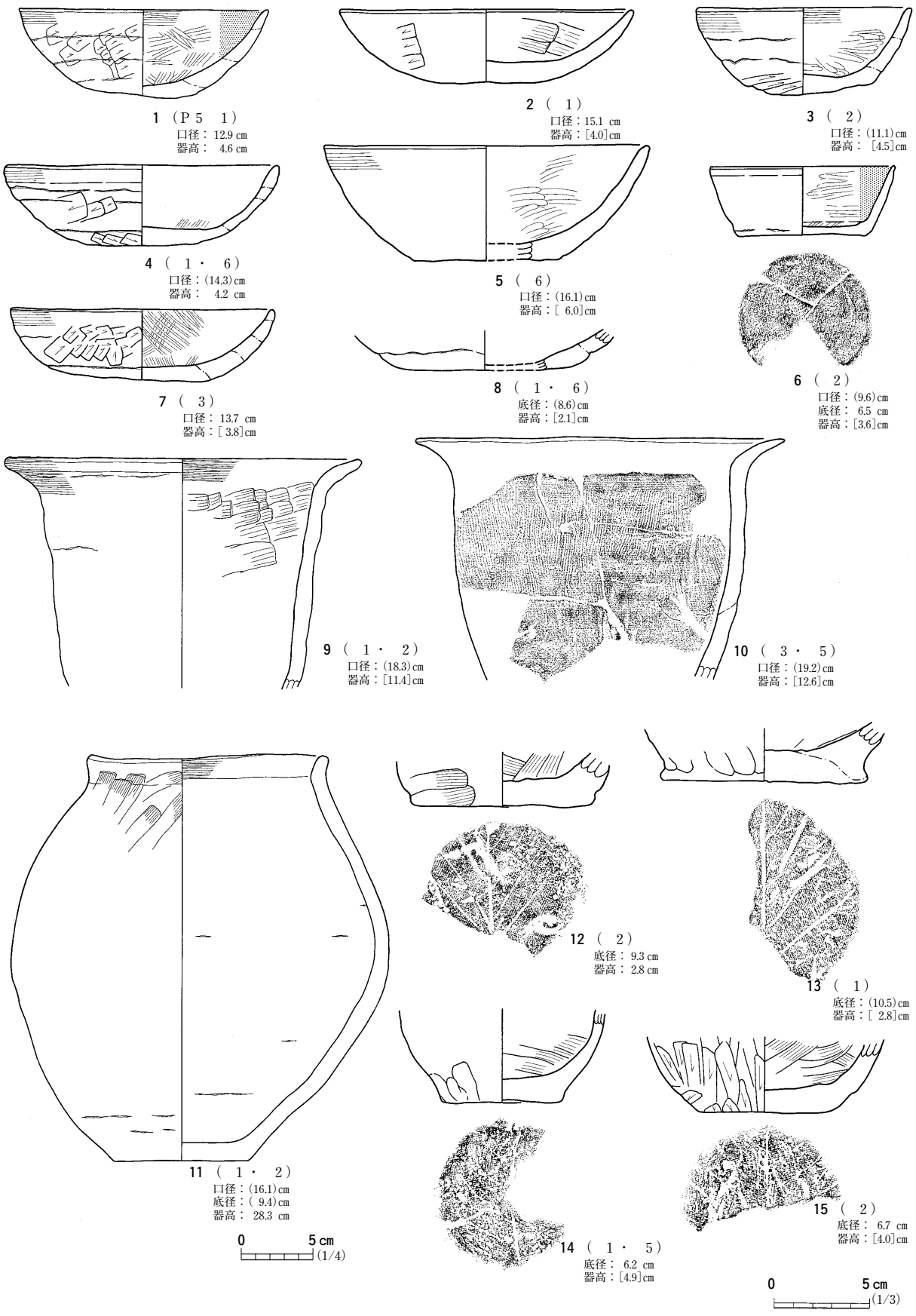


図75　54 a 号住居跡出土遺物（１）

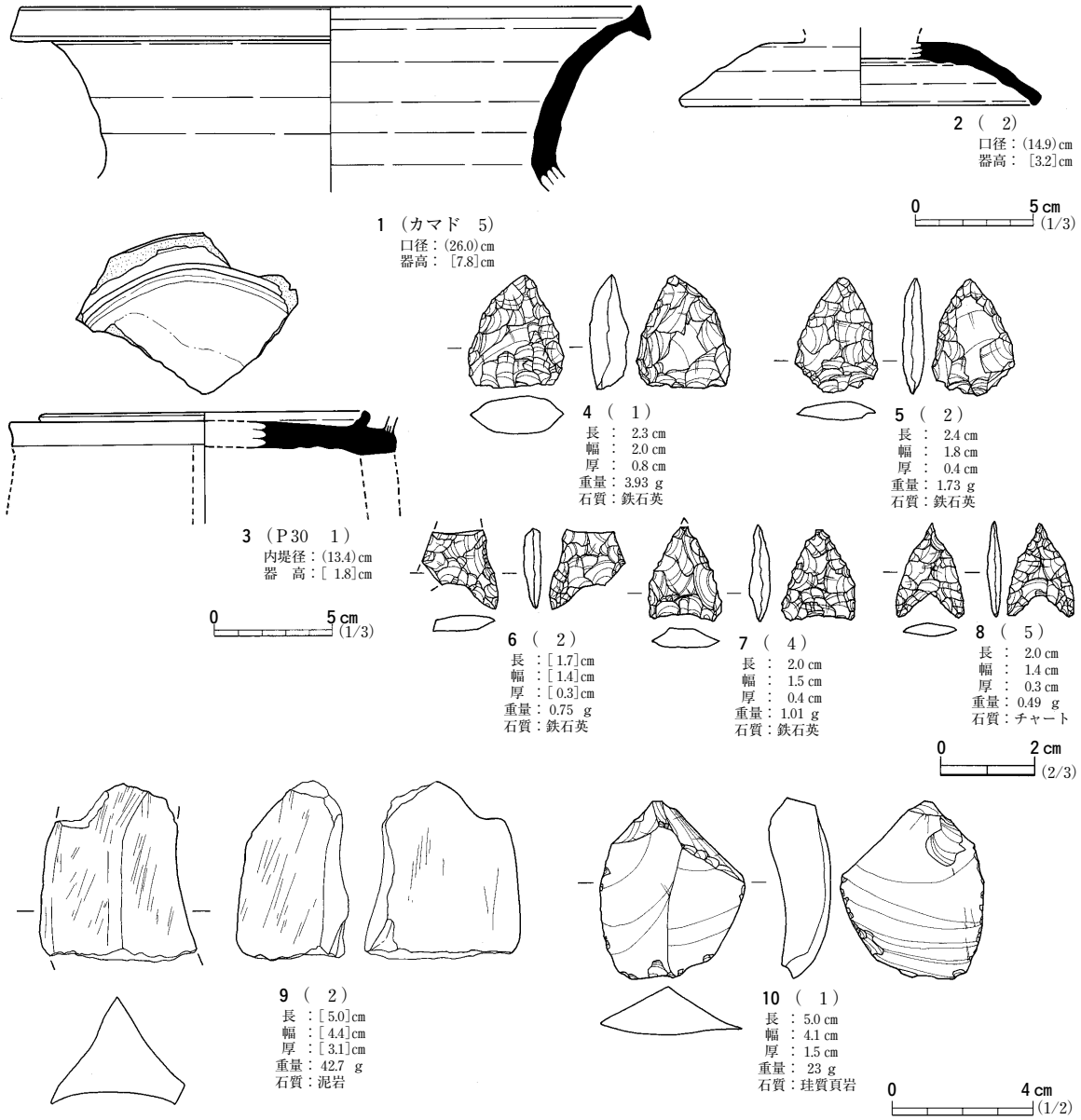


図76　54ａ号住居跡出土遺物（２）

上半は内傾し，口縁部はかるく外反する。外面は口縁部から体部にかけてヘラナデ，内面は口縁部にヨコナデが施される。体部内外面は器面が磨耗して調整が不明で，粘土紐の積上げ痕のみ確認した。12～15は土師器甕の底部破片で，いずれも底面に木葉痕が認められる。12・15はℓ２から，13はℓ１から，14はℓ１・５から出土している。12は胎土に長石・石英・酸化鉄粒を含み，体部内外面にヘラナデが施されている。13は胎土に長石・石英を含み，体部外面に指頭圧痕が認められる。内面にはヘラナデが施されている。14は胎土に長石・石英を含み，体部外面と底面にヘラケズリ，内面にヘラナデが施される。15は胎土に長石・石英・金雲母・酸化鉄粒・海綿骨針を含み，底部付近の体部下半外面には指頭痕が認められる。内面にはヘラナデが施されている。

図76－１は，カマド内堆積土ℓ５から出土した須恵器甕で，胎土に長石・石英・海綿骨針を含む。口縁部は外彎しながら外反し，口唇部は逆三角形状に肥大する。内外面共にロクロを使って整形さ

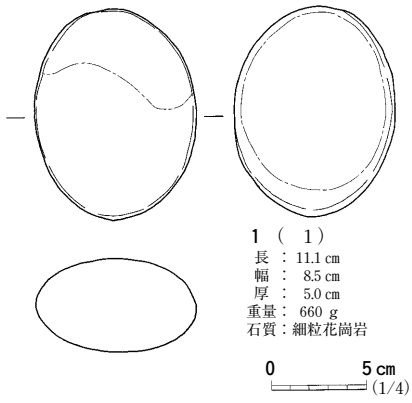


図77　54ａ号住居跡出土遺物（３）

れている。２はℓ２から出土した須恵器蓋で，胎土に砂粒を多く含む。つまみを欠損するが，直径4.7cmを測る接合部の痕跡は認められる。口径は14.9cmを測り，設置面は口唇部外端である。器面内外面にはロクロナデが施され，天井部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ調整が認められる。

３はＰ30のℓ１から出土した須恵器の円面硯で，脚部は欠損する。胎土に石英・雲母を含み，内堤径は直径13.4cm，外堤は上端を欠損し不明である。器面は内外面共にロクロナデが施される。陸部に墨痕は残っていないが，表面に擦痕が認められる。

４～８は鉄石英製の石鏃で，両面共に丁寧に調整されている。４はℓ１，５・６はℓ２，７はℓ４，８はℓ５から出土している。４は無茎石鏃，５は無茎凸基石鏃，両面は丁寧に調整されている。６・７・８は無茎凹基石鏃である。６は先端部と基部が欠損し，７は先端部がやや抉れている。９はℓ２から出土した泥岩製の砥石である。撥形で，携帯用の砥石と考えられる。欠損部以外の各面に研磨が認められる。10はℓ１から出土した珪質頁岩製の不定形石器である。縦長剝片を素材とし，両側縁に背面から調整が施される。図77－１はℓ１から出土した細粒花崗岩製の磨石で，両面が磨耗している。

ま　と　め

本遺構は一辺6.5m程の隅丸方形の竪穴住居跡で，調査区内では大型である。４本主柱で，北壁中央にカマドを持ち，柱の据え替えを少なくとも２回行っていると推測される。時期は出土遺物から国分寺下層式期，奈良時代と考えられる。（坂　田）

54ｂ号住居跡　ＳＩ54ｂ

遺　　構（図78，写真７・75・76）

本遺構は南区北西部の平坦面に存在し，Ｙ51～52・Ｚ51～52グリッドに位置する。54ａ号住居跡の掘形基底部に隅丸方形の落ち込みを検出した。重複する54ａ号住居跡とほぼ主軸を同じくするので，54ａ号住居跡と同じ位置に土層観察用のベルトを設置した。周壁と床面を54ａ号住居跡の掘形により失っているが，掘形の立ち上がりは南西隅を除いて確認できた。掘形から，本遺構の平面形は一辺4.9m程の隅丸方形と推測される。東西壁方向を主軸方位とすると、真北から５°程東側に傾く。遺構内堆積土は黄褐色土粒・黄褐色土塊・黒褐色土粒・焼土粒を含むにぶい黄褐色土１層で，本住居跡の貼床土と考えられる。掘形は黄褐色土を中央部がやや高くなるように２～５cm堀り込み，さらに西側が開く「コ」字の帯状に３～７cm程深く掘り込まれている。

住居内施設としてカマド１基，主柱穴４基，ピット８基を検出した。カマドは北壁中央からやや東寄りに設けられ，カマド煙道の長軸方向は住居の主軸方位と一致する。

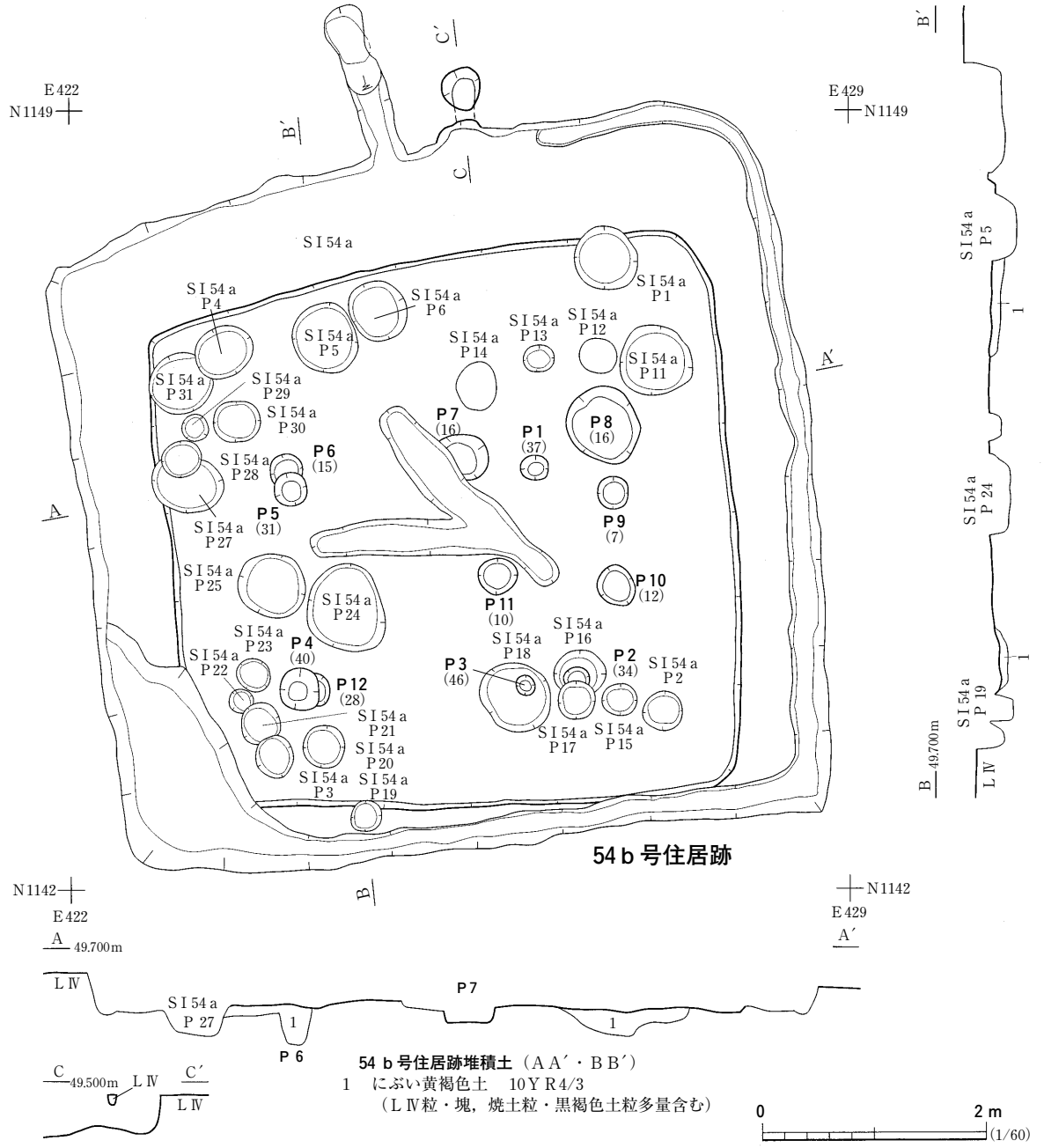


図78　54ｂ号住居跡

本住居跡の主柱穴と考えられるのはＰ１・２・４・５で，これらの柱穴は床面中央部の四隅に位置し，平面形は長径24～30cm，短径14～29cmの楕円形で，検出面からの深さは31～40cmを測る。各柱穴間の距離はＰ１－２が194cm，Ｐ２－４が204cm，Ｐ４－５間が180cm，Ｐ１－５が224cmを測り，各柱穴を結んだ平面形と本遺構の平面形はほぼ対応する。Ｐ１・２・４・５内には黄褐色土粒，黒褐色土粒，焼土粒を含む暗褐色土が堆積し，柱痕が認められないため柱穴掘形と考えられる。Ｐ３はＰ２の西に近接し，Ｐ４とP12，Ｐ５とＰ６は重複する。Ｐ３・６・12も規模と位置から柱の建て替えが推測されるが，Ｐ１に対応する柱穴が認められないため不明である。Ｐ３・６・12内には黄褐色土粒，黒褐色土粒，焼土粒，炭化物粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ７・11は床面中央

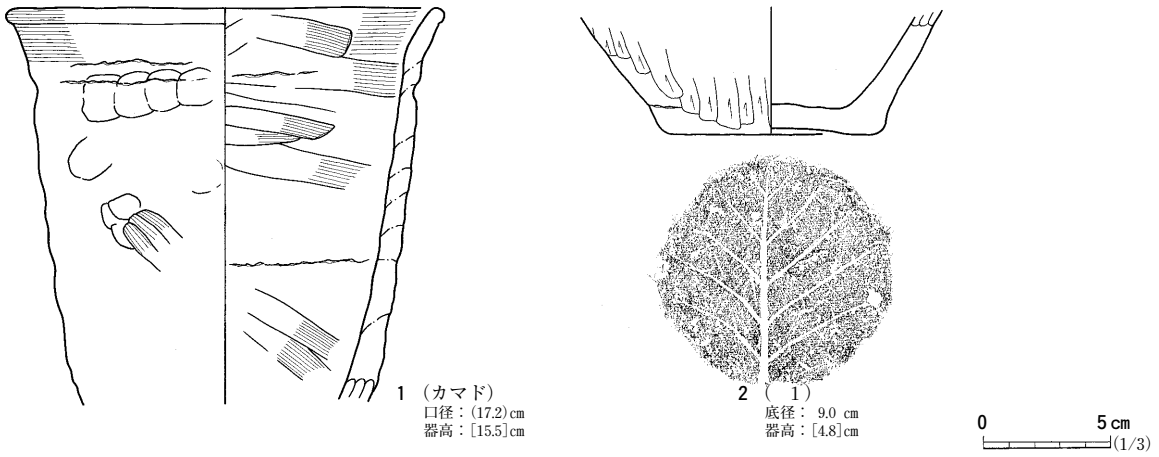


図79　54ｂ号住居跡出土遺物

部，Ｐ８～10は東部に位置する。Ｐ９～11は直径22～24cmの円形で，検出面からの深さは７～12cm，Ｐ７は長径約36cm，短径28cmの楕円形で，検出面からの深さは16cm，Ｐ８は長径46cm，短径41cmの楕円形で，検出面からの深さは16cmを測る。Ｐ７内には黄褐色土粒と焼土粒を含むにぶい黄褐色土，Ｐ８～10内には黄褐色土粒，黒褐色土塊，焼土粒を含む暗褐色土，Ｐ11内には黄褐色土粒，焼土粒，炭化物粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ７～11の機能は不明である。

カマドは煙道北半のみ遺存し，煙道には天井部が一部遺存していた。煙道は北側に溝状に掘り込まれ，黄褐色土粒と暗褐色土粒を含む褐色土で天井が構築されている。煙道は直径36cm，深さ35cmの煙出ピットに連結し，煙道底面は北側に向かって緩やかに傾斜している。煙道内には黄褐色土粒と黒褐色土粒を含む黒褐色土が堆積しており，本住居跡を壊して54ａ号住居跡を構築する際に人為的に埋め戻されたと推測される。

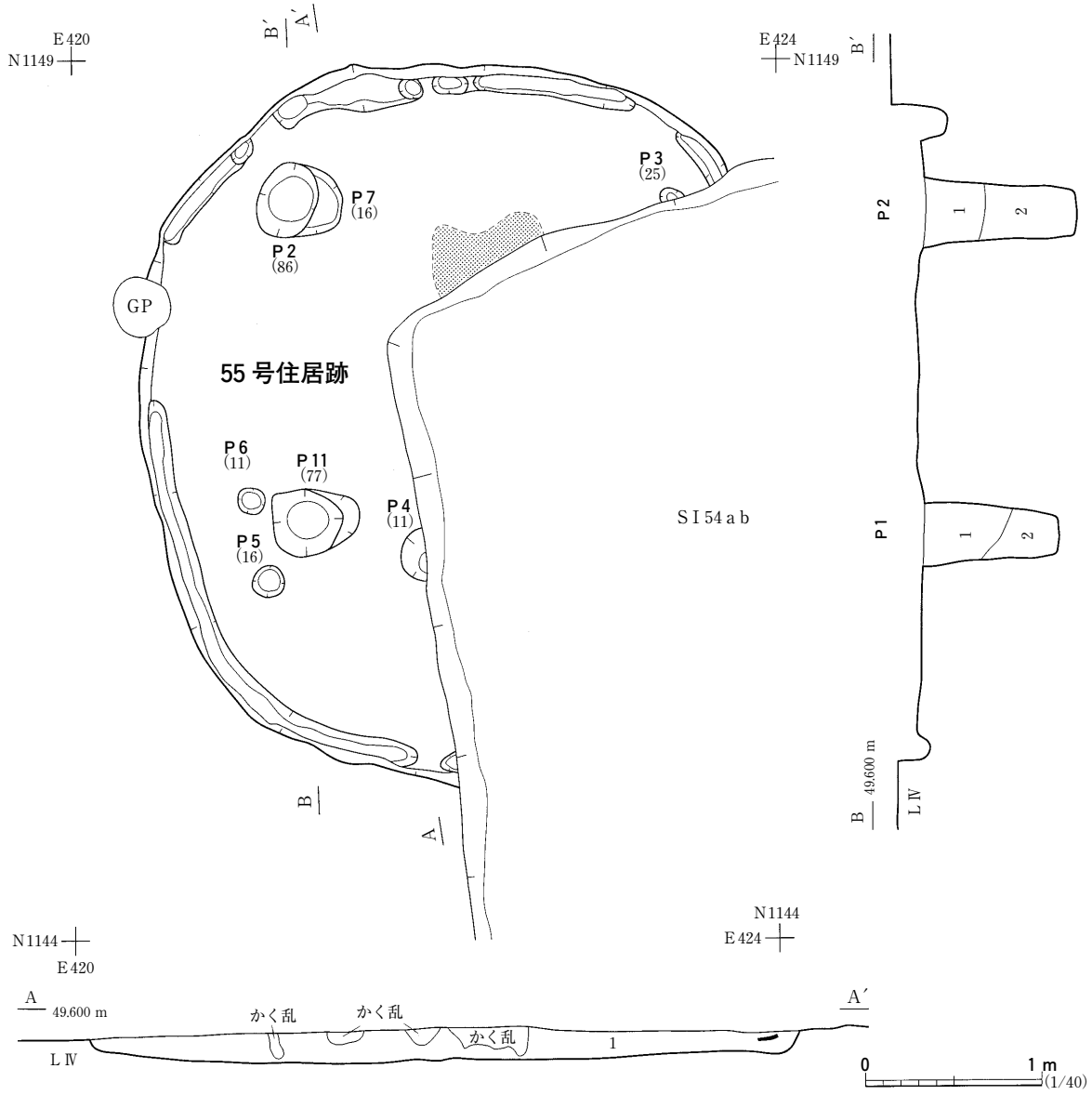
遺　　物（図79）

遺物は，土師器41点，縄文土器35点が出土した。出土した土師器は全てロクロを使わずに器面を整形され，器種には甕・杯が見られる。図79－１はカマドから出土した土師器甕で，胎土に砂粒・長石・石英を含む。体部は外傾しながら立ち上がり，口縁部が軽く外反する器形である。幅0.8～2.5cmの粘土紐を積上げた後，体部外面にさらに粘土を貼り付けている。外面は口縁部にヨコナデ，体部に指ナデ，ヘラナデが施される。体部上位には指オサエ痕が認められる。内面は口縁部をヨコナデ後，全面にヘラナデが施される。

図79－２は，ℓ１から出土した土師器甕の底部破片で，胎土に長石・石英・金雲母・雲母・酸化鉄粒・海綿骨針を含む。外面は体部下半にヘラケズリが施され，内面は器面が磨耗していて調整は不明である。

ま　と　め

本遺構は一辺4.9m程の方形の竪穴住居跡である。４本主柱で，北壁にカマドを持つ。重複する54ａ号住居跡と構造が近似するため，本住居跡を一回り大きく改築したのが54ａ号住居跡と推測される。時期は出土遺物から国分寺下層式期，奈良時代と考えられる。　　（坂　田）



55号住居跡堆積土（ＡＡ´）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）

Ｐ１・２堆積土（ＢＢ´）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）

図80　55号住居跡

55号住居跡　ＳＩ55

遺　　構（図80，写真77・78）

本遺構は南区北西部の平坦地に存在し，Ｙ51～52グリッドに位置する。北西に46号住居跡，北東に56号住居跡が近接する。黄褐色土（ＬⅣ）上面で54ａ号住居跡に切られる円形の落ち込みを検出し，南北方向に土層観察用のベルトを設定した。遺構内堆積土は黄褐色土粒を含む暗褐色土で自然堆積土と考えられる。重複する54ａ号住居跡により南東部を３分の２程度失うが，遺構の平面形は直径約４ｍのほぼ円形と推測される。壁高は９～19㎝を測り，周壁は70°程の角度で立ち上がる。

黄褐色土を掘り込んで床面を形成し，ほぼ平坦に造り出している。床面には周壁付近を除いて踏み締まりが認められる。

住居内施設は炉１基，壁溝，主柱穴２基，ピット５基が検出された。炉は地床炉で，床面中央部の北に位置する。壁溝は床面の遺存する範囲では，西側コーナーを除いて途切れながらも周壁際をほぼ全周している。Ｐ１・３～５は床面北東部，Ｐ２は北西部，Ｐ６は北東部に位置する。

検出されたピットの内，主柱穴と考えられるのはＰ１・２である。Ｐ１・２は長径40～42cm，短径37～40cmの楕円形で，深さは77～86cmを測る。Ｐ１・２内堆積土は２層に分けられ，ℓ１は黄褐色土粒を含む暗褐色土，ℓ２は褐色土である。柱痕は認められず，共に柱穴掘形と考えられる。また，54ａ号住居跡から検出された柱穴の内，Ｐ４がその位置と規模から本遺構の主柱穴の可能性が推測される。Ｐ５・６はＰ１の西に位置し，直径15～18cmの円形で，深さは11～16cmを測る。Ｐ３・４は54ａ号住居跡によりその半分を失い，平面形は不明である。Ｐ６は南北長31cm，深さ11cmを測り，Ｐ３は東西長14cm，深さ25cmを測る。Ｐ３～６内には黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積している。

炉は54ａ号住居跡に壊されて全容は不明であるが，東西長が64cmを測る不整形で，焼土化範囲は厚さ最大２cmに及ぶ。壁溝は幅12～28cm，深さ５～16cmを測る。壁溝内には黄褐色土粒を含むにぶい黄褐色土が堆積しており，廃棄時には壁溝は埋められた状態であったと考えられる。

遺　　物

遺物はℓ１から縄文土器片が15点，石器類が１点出土しているが，小破片のみで掲載しなかった。

ま　と　め

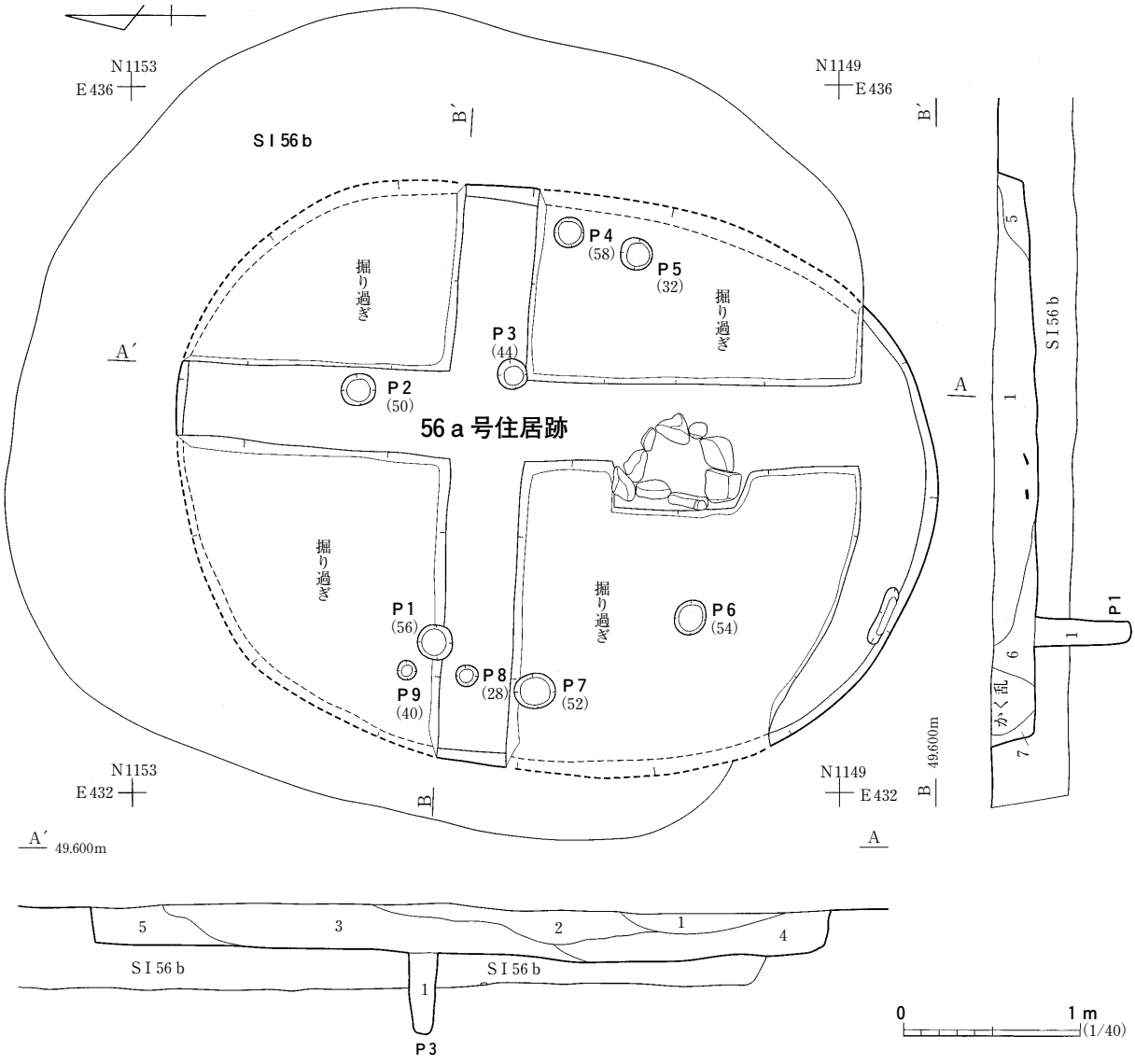
本遺構は直径４ｍ程の小型の竪穴住居跡で，地床炉を持つ。54ａ号住居跡により床面を半分近く失っていて推測であるが，おそらく３本主柱か４本主柱の住居跡と思われる。出土土器より，時期は縄文時代中期後葉から末葉と考えられる。（坂　田）

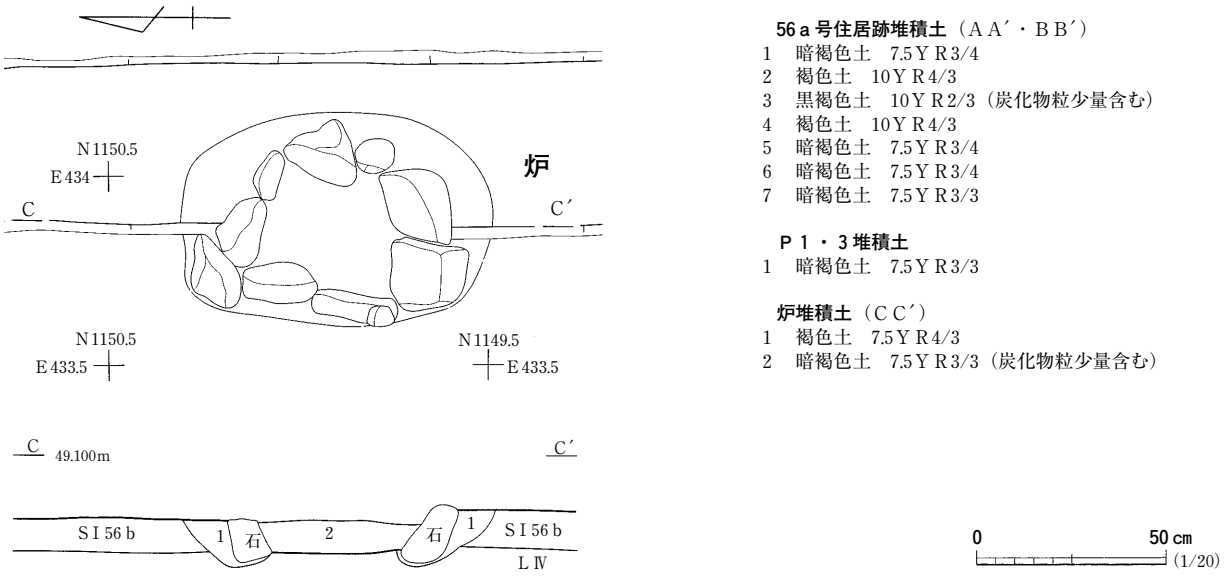
56ａ号住居跡　ＳＩ56ａ

遺　　構（図81，写真７・11・12・79・80）

本遺構は南区の北寄り中央，ＡＡ50・51，ＡＢ50・51の４グリッドにまたがって位置する。本遺構の確認作業時の当初は，基盤層であるＬⅣ層上面において１基の楕円形状の広がりとして確認した。

本遺構の精査は，楕円形状の広がりの東西・南北方向に土層観察用の帯を十字状に設定し，計４ヶ所の区画の掘り下げから開始した。４区画の掘り下げは楕円形状の広がりの縁から約30cmほど内側から実施し，底面を確認した上で，壁面を探すよう外側に向って広げるよう各区画とも掘り下げを実施した。まず先に，北東・北西区画において確認面から40cmほど掘り下げたところから，基盤層であるＬⅣ層を平らに削り整えた底面を確認した。このことから，北側の区画に比してやや掘り下げの遅れていた南東・南西区画においても同様の深さまでの掘り下げを指示し，底面の確認を試





56a号住居跡堆積土（ＡＡ´・ＢＢ´）
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
2　褐色土　10ＹＲ4/3
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒少量含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/3
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
6　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
7　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3

Ｐ１・３堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3

炉堆積土（ＣＣ´）
1　褐色土　7.5ＹＲ4/3
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（炭化物粒少量含む）

図81　56ａ号住居跡

みた。

しかしながら，南西区画では，南北方向に残しておいた帯に20㎝前後の花崗岩が５個ほぼ一列に並ぶように出土した。さらに，南西区の南端では底面からの高さ約20㎝，幅約30㎝ほどの段が形成され，ＬⅣ層を削り残していることも確認された。この時点ではじめて，本遺構は土砂で埋まった遺構を掘り返しその上部にあらためて小さめの遺構に作り直したか，あるいは逆に大きく作り替えが行われた可能性があるものと予想された。

本遺構内に掘り残した土層断面を再度良く観察したところ，遺構の南端で確認された段の平坦な部分が三日月状に南に突き出していることが分かった。さらに，南に張り出した平坦面とほぼ同程度の深さで平坦な面が北へと延びていることがみて取れた。このことから，本遺構内堆積土の中層には新たな底面が形成され，確認面での規模よりも一回り小さい別の遺構が，掘り込まれていることを再確認した。

新たに掘り込まれた遺構の立ち上がり部分をみると，南側では三日月状の平坦な部分面に引き続きＬⅣ層が垂直に近い角度で立ち上がり，北側では土層断面を見る限り不鮮明であるものの暗褐色土が底面から確認面に向って比較的急な角度で傾斜してゆくのを確認した。本遺構内の堆積土は６つに分層でき，その堆積状況から周囲から流れ込んだ土で自然に埋没した可能性が考えられる。

土層断面の中層及び三日月状の張出し部の堆積土を除去すると，南側の土層観察帯によって残った底面上からは，９個の花崗岩で小さく囲まれた部分が確認された。この部位は，南西区画を掘り下げる途中で，５個の石が一列に並んでいるのを既に確認していた。本遺構の底面を観察すると，９個の石は一回り大きな楕円形状の掘形を作った後，比較的偏平な20㎝前後の石を斜めに固定し，わずかに石の頭が底面上に出るようにしている。９個の石は，熱を受けたためか，石のほとんどが劣化し部分的に砂と化していた。

以上の事実から，石で囲まれた部位は石囲炉跡の可能性が高くなった。この時点で，新たに掘り込まれた本遺構は住居跡として，わずかに残ったその底面は床面として認識することができた。その結果，本遺構の呼称も56ａ号住居跡とした。

後述するが本住居跡の下からは，さらにもう１基住居跡を確認できた。したがって，ここでは上層で確認された本住居跡を56ａ号住居跡（ＳＩ56ａ），下層にあって先に機能していた住居跡をＳＩ56ｂとして呼び名を区別している。

あらためて，56ａ号住居跡について細かく見てゆくことにする。

本住居跡の平面形状は南北に長い楕円形に掘りくぼめられている。規模は南北長約4.3m，東西長3.3m，確認面から床面までの深さは最深部で25㎝ほどであった。

石囲炉跡は本住居跡南寄りに設けられていた。使用された花崗岩は，長方形状に並べられていた。その規模は，配置された石の外縁で計測すると，南北長約67㎝，東西長約50㎝，そして床面から炉跡底面までの深さは８㎝ほどであった。石囲炉跡の外周には，南北80㎝×東西60㎝ほどの一回り大きい楕円形状の掘形が伴っていた。

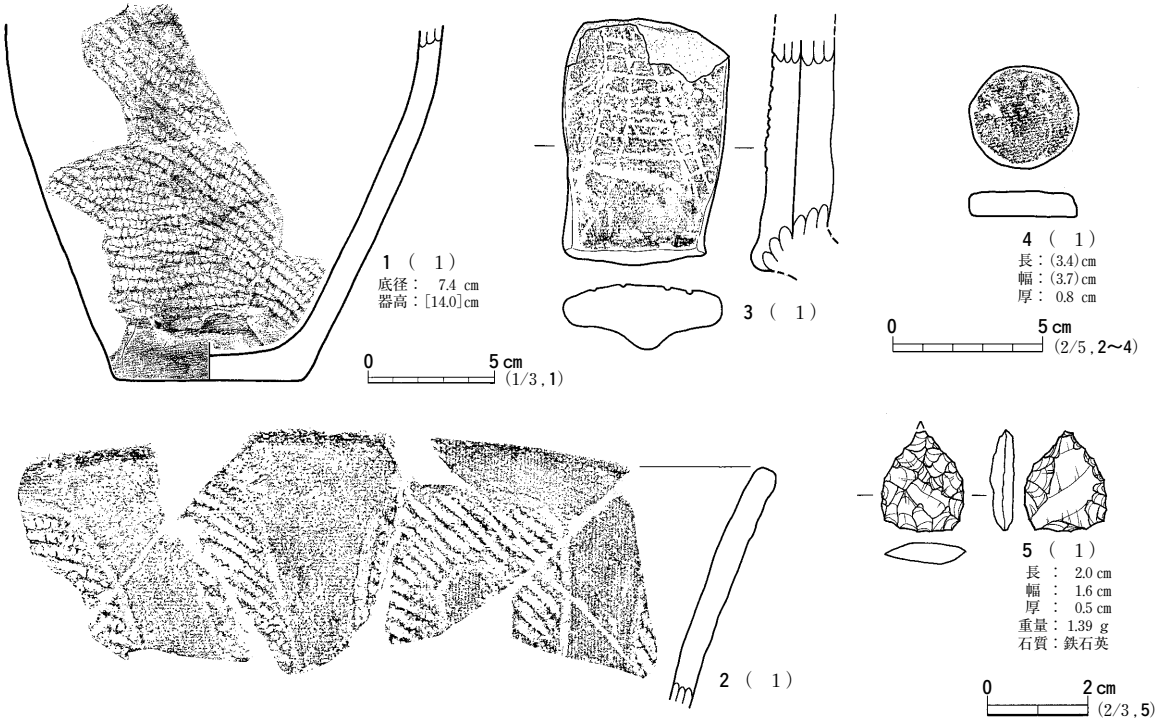


図82　56ａ号住居跡出土遺物

本住居跡に伴うピットは，十字形に残した土層観察帯の断面に偶然かかり確認できたもの以外は，すべて下層のＳＩ56ｂの床面精査時に確認できた。本住居跡に伴うと考えられるピットは計９基を数える。９基のピットの形状は，直径10～24cmの円形であった。ピットの大半は下層にあるＳＩ56ｂの床面上にて確認できたものばかりで，上部を失っている。掘り過ぎた分も含めて本住居跡に伴ったピットの深さを検討すると，本住居跡の床面から28～56cmを測る。図81の平面図中に示したピットの深さは，すべて掘り過ぎた分も加算して算出した数値である。

９基のピットの内，規模および配置から，Ｐ２以外の計８基のピットは上屋を支えた柱穴と想定される。

床面の南西隅には長さ34cm，幅８cmそして床面からの深さ10cm前後の壁溝が１条掘り込まれているのを確認した。

遺　　物（図82，写真226・227・230）

出土した遺物の大多数は縄文土器片で，その他に土製円盤，磨石，石鏃，剝片などが数点ずつ確認されている。出土した縄文土器片の大半は住居跡内堆積土のℓ１中から採取されている。縄文土器片の多くは深鉢形土器の胴部片（破片数にして約300点）で，出土した口縁部と底部の破片数を合わせても胴部片の１割程度であった。出土した破片も完全な形まで接合できるものは無く，すべて小破片ばかりであった。

出土遺物の内，ℓ１から出土した遺物から，形状の判明するもの計５点を図82に示した。

１～３は住居跡の覆土中から出土した深鉢形土器の破片である。

１は胴部下半から底部にかけての破片である。外面には全面にＲＬの縄を転がしている。２は口

縁部片である。丁寧にナデられた外面には，内部に縄文を加えた「Ｉ」,「Ｏ」または「Ｃ」字状の図柄が描かれている。３は把手部分の破片と思われ，外面には縦方向にハシゴ状の文様が線刻書きされている。

４は縄文土器片を材料に作られた土製円板である。その側面は滑らかに仕上げられていた。

５は住居跡覆土内から出土した石鏃である。その基部をわずかに欠いた鉄石英製の石鏃である。その基部は中央部でわずかに窪んでいる。

ま　と　め

本遺構は楕円形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。

56ａ号住居跡には，１基の石囲炉と８基の柱穴，そして壁溝を備えている。本住居跡の床面は，調査段階でその存在に気付くのが遅れ，その大半を掘り抜いてしまった。

本住居跡は土層断面の観察結果から，先の住居跡が廃絶し流入土に埋没した後，その埋没過程で出来たくぼみを利用して，先の住居跡の上層に改めて家を作っていたことが判明した。柱穴は炉跡の周囲に８基配置され，石囲炉跡は本住居跡の比較的南寄りに設けられていた。

本住居跡の機能時期は，堆積土中から出土した縄文土器小破片の特徴や，大木10式段階の埋設土器を使った複式炉を持つ住居跡（ＳＩ56ｂ）の上層に，改めて本住居跡が建てられている事実から，ＳＩ56ｂの廃絶以降，縄文時代中期末葉頃を下限としておきたい。また，本住居跡の機能時期の上限は，住居跡堆積土ℓ１内より出土した資料から，縄文時代後期前葉ごろとしておきたい。

（阿　部）

56ｂ号住居跡　ＳＩ56ｂ

遺　　構（図83・84，写真81・82）

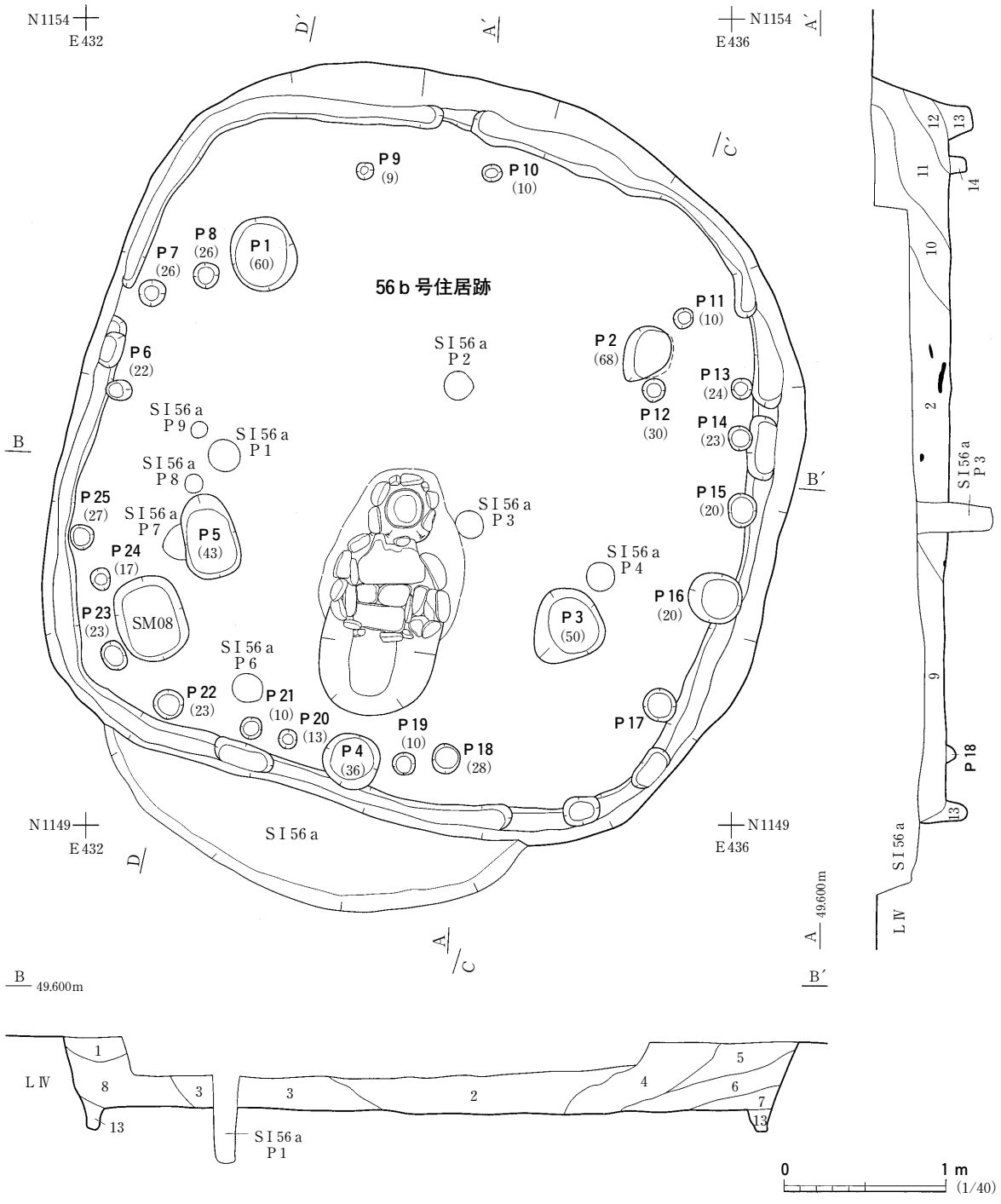
本遺構は南区の北寄り中央，ＡＡ50・51，ＡＢ50・51の４グリッドにまたがって位置し，前述のＳＩ56ａの下層から確認された。

本遺構の調査は，ＳＩ56ａの調査を通して残しておいた土層観察帯をもとに，まず底面および周囲の壁面の確認から始まった。

本遺構の底面は，既にＳＩ56ａの調査時に確認されており，底面は基盤層であるＬⅣ層を平らに削り整えている。周囲の壁面はＬⅣ層を削り込み，底面から確認面に向ってほぼ垂直に立ち上がる。

本遺構内の堆積土は14層に分けられ，周囲から流れ込んだ土で自然に埋没していったものと推測される。この堆積土を除去し，底面を丁寧に精査してみたところ，底面上からはピット以外に壁際に沿って断続的に弧を描く溝跡と，底面南寄りから南北に長い楕円形状に暗褐色土が広がっているのを確認した。

次に，底面の精査を開始した。手始めに楕円形状の広がりの南北方向に土層観察用の帯を残し，西側半分の掘り下げを実施した。その結果，暗褐色土を本遺構の底面より10㎝ほど掘り下げたところで，その北端には底の抜けた土器が１個体分埋め込まれていた。その土器の外縁の土は熱を受け



56ｂ号住居跡堆積土（ＡＡ′・ＢＢ′）

1　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
3　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ粒少量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
5　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
6　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
7　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
8　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
9　褐色土　7.5ＹＲ4/6
10　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ粒少量含む）
11　褐色土　7.5ＹＲ4/6
12　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
13　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
14　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3

図83　56ｂ号住居跡（１）

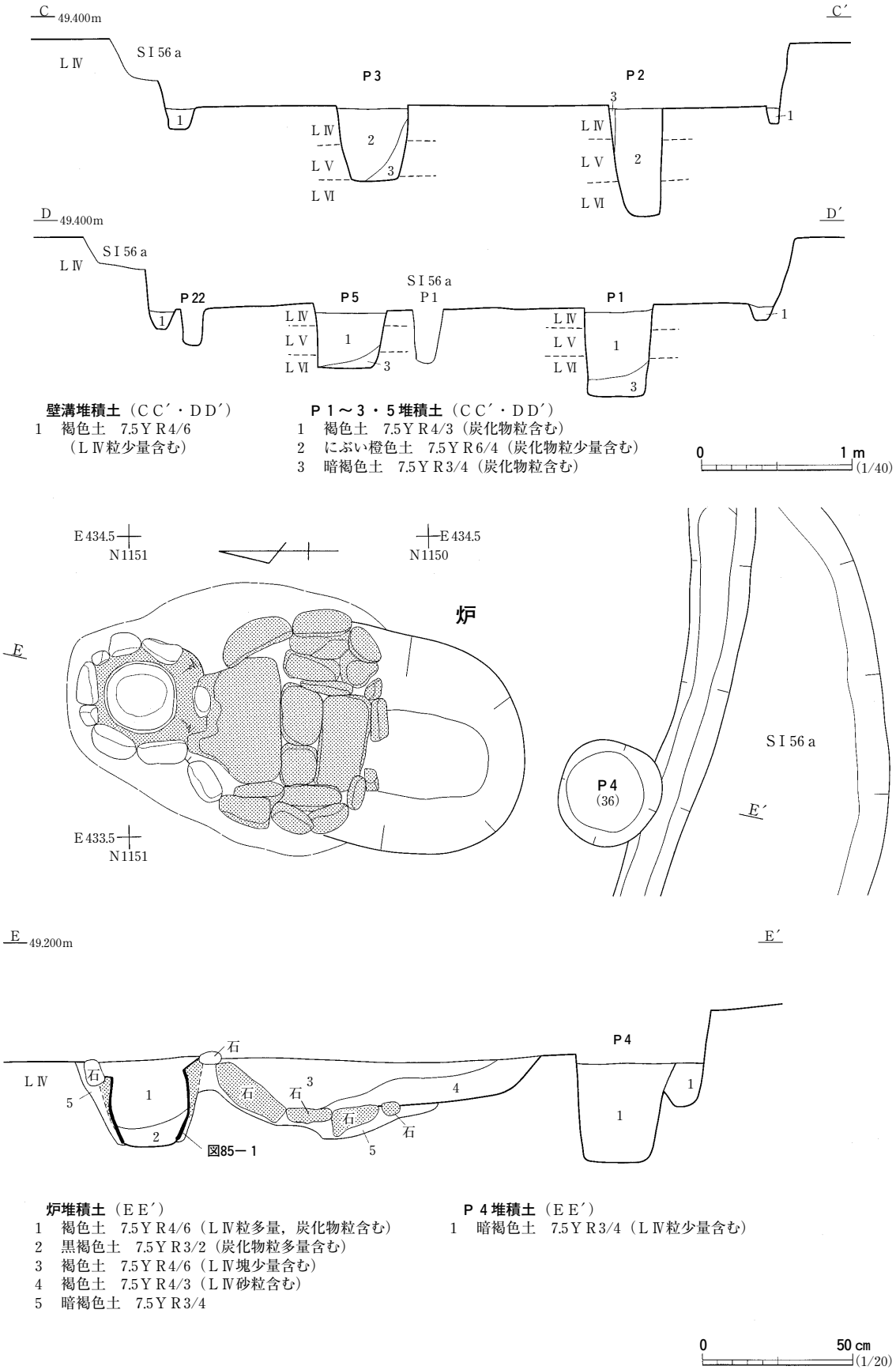


図84　56ｂ号住居跡（２）

たためか赤く変色していた。土器の埋設された部分の南側には皿状にくぼみ，その法面，底面には大振りの花崗岩の板石および円礫を並べ固定していた。さらに南側に連続して，ＬⅣ層を掘り込んだ半円形状の張出し部分が続いていた。

このことから，底面南側で見つかった楕円形状の広がりは炉跡であることが分かった。それと同時に，本遺構は住居跡（56ｂ号住居跡），そして底面は床面として再確認できた。

56ｂ号住居跡の平面形は，角がかなり丸くなった正方形状に形作られていた。その規模は南北長および東西長共に約4.6ｍを計測する。西側の壁面の延長方向をみると，真北に対して10°ほど東に傾いている。本住居跡は，上層のＳＩ56ａと比べ床面規模が大きく，平面形状も異なっていたことが判明した。さらに，２基の住居跡の重複状況は，上下に完全に重なっていた訳ではなく，ＳＩ56ａの方がやや南側にズレていることも分かった。

炉跡は底の抜けた土器を１個体埋め込んだ複式炉で，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっていた。炉の平面形は南北に長いヒョウタン形をなしている。炉跡の規模は，土器埋設部先端から前庭部末端まで約152cmを測り，長軸方向は東西壁面の傾きに合わせ，真北に対して東に10度ほど傾いていた。炉跡内の堆積土は５層に分けられる。この内ℓ５は掘形埋土で，埋設土器上半部分と接する埋土は，土器内側からの熱を受け赤黒く焼土化していた。

炉跡の各部位別にみると，土器埋設部には底の抜けた深鉢形土器を１個体分埋め込んでいる。埋設土器の上部の外縁は，拳大の河原石で半円形状に縁取るように並べられていた。確認面から土器埋設部の底面までの深さは30cmほどであった。土器埋設部を断ち割ってみたところ，埋設土器上半部～上層にかけての埋土が，特に被熱変色していた。

石組部の遺存状況は比較的良好で，法面と底面に大振りの平石が残っていた。石材には主に平たい花崗岩を多用し，石の表面は熱を受け薄ら赤く変色していた。石組部の規模は東西長63cm，南北長60cmほどであった。土器埋設部及び前庭部の境には，長さ50cm前後の板石を斜めに固定していた。

細長い前庭部は石組部から南へ約1.9cmの長さで連結している。前庭部の南半分は楕円形状（長径72cm，短径28cm）に浅く窪み，段を形成している。

床面上からは炉跡以外に大小さまざまなピットと，ほぼ連続して壁際に沿って掘り込まれる壁溝，そして１基の埋甕を確認した。

56ｂ号住居跡に伴うと考えられたピットは計25基を数える。これらのピットは北西側から順に時計回りにＰ１～５と呼称し，それ以外のピットは順にＰ25まで番号を付けた。それらの配置を観察すると，炉跡を中心に東西２基ずつ対となるように並ぶ４基のピット（Ｐ１～３・５）配置に気が付く。さらに，炉跡の長軸方向の延長線上にもピットが１基（Ｐ４）存在することが分かる。前述の５基以外の20基のピットの大半が壁際に沿って並んでいる。

25基のピットの平面形状は円または楕円形状をなし，それらの規模は直径（長径）10～52cm，確認面からの深さは９～68cmを計測する。特に，壁際に配されるピットの規模は直径10～20cm，深さ10～30cmと，本住居跡内では比較的小規模であった。

25基のピットの内Ｐ１～５の５基は，その配置と規模から本住居跡の主柱穴と考えられる。５基の柱穴は炉跡を中心に五角形状に配置される。確認できた主柱穴の間隔をみると，Ｐ１南端～Ｐ５北端までと，Ｐ２南端～Ｐ３北端，Ｐ３南西縁～Ｐ４北東縁，Ｐ４北西縁～Ｐ５南東縁までは1.1～1.3m程の間隔を空けている。Ｐ１東端～Ｐ２西端，Ｐ５東縁～Ｐ３西縁までは約2.1mを測る。

壁溝の近くには直径10～20cmの小規模なピット（Ｐ６・７・13～25）が，壁溝よりも若干内側，または壁溝の内法を壊して掘り込まれていた。これらの内のほとんどは，壁の傍に掘り込まれた柱穴の可能性が考えられる。

壁溝は，西壁中央部にて20cmほど途切れるだけで，壁裾に沿って連続して巡っていることが分かる。その規模は幅約15～20cm，床面からの深さは最も深いところで約15cmを測る。壁溝の底面は一定の深さで掘り整えられているのでなく，所々で深くなったり，浅くなったりを繰り返す。

床面の精査中に，南西隅のあたりから楕円形状の掘形を１基確認した。これについては第６節で後述するが，当初屋内のピットと判断し，長軸方向に土層観察帯を残し東半分の掘り下げを実施していたものが，実はほぼ完全な形の深鉢形土器を斜めに埋め込んだ埋甕（ＳM08）であることが分かった。この土中に納められた土器は，床面上の精査時点では全く気付かなかった。他のピットとの重複関係にも眼を向けると，埋甕の掘形の南西縁はＳＩ56ａＰ７によって壊されていることが分かる。このことから，埋甕（ＳM08）は本住居跡が機能する内に設置された遺構の可能性が高まった。

遺　　物（図85，写真220）

出土した遺物の大半は縄文土器片で，その他に磨石，石鏃などが数点ずつ確認されている。出土した縄文土器片の多くは，炉跡から出土している。出土した破片も形状の分かるまでに復元できたものは炉埋設土器（１）の他に，床面から破片となって出土した土器（２）の２個体であった。

１は炉に埋設されていた深鉢形土器である。底部及び口縁部は欠損し，残存した胴部の最大直径は，胴部上方にて約27cmを測る。土器の内外面は，熱を受け赤褐色に発色している。器形は胴部下方でわずかに括れ，上方に向って緩やかに外傾してゆく。外面の文様を見ると，胴部中程に描かれた大きく波打つ沈線を境に，胴部の上下で施される文様が異なっていた。胴部上半の文様は，渦巻き状の図柄を４つ描き，それらの内部には縄文を加えている。胴部下半の全面にはＬＲの縄を縦方向から転がしている。１は外面の文様の特徴から，大木10式段階の土器と思われる。

２は口縁部から胴部下半にかけて遺存する深鉢形土器である。白っぽい灰色をした器形を見ると，胴部が中程にて軽く括れた後垂直気味に立ち上がり，口縁部で緩く外傾する。外面には，口縁部直下に端部に平行する一条の沈線を巡らし，その下位全面に縦方向から縄を転がしている。

３・４は住居跡内の覆土中から出土した石鏃と磨石である。３はチャート製の石鏃で，全体の３分の１ほどを欠損している。４は表裏に滑らかな磨り面をもつ磨石で，片面の中央部にはわずかなくぼみが確認できる。

ま　と　め

本遺構は四隅のかなり丸くなった正方形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。

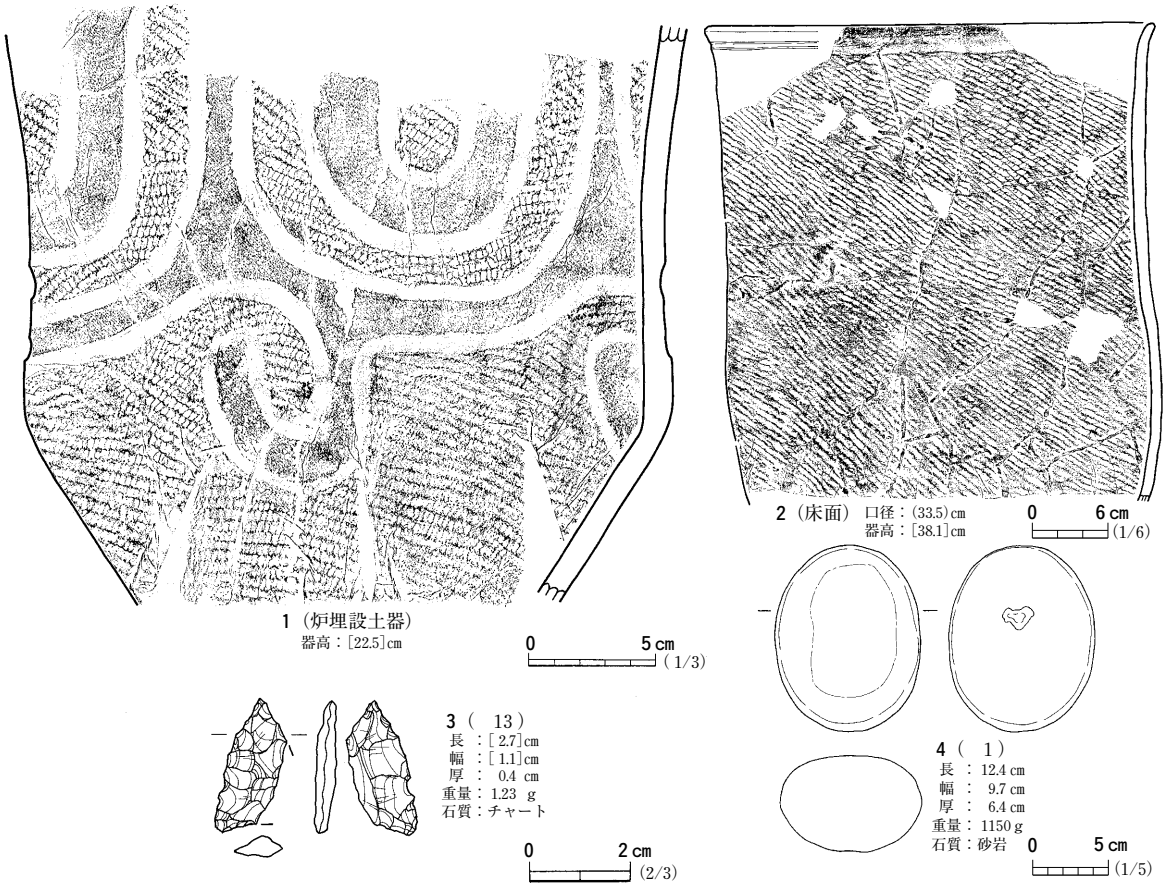


図85　56ｂ号住居跡出土遺物

56ｂ号住居跡は，上層がＳＩ56ａと重複するため，その南壁の上部はＳＩ56ａによって壊されていた。本住居跡内には，１基の複式炉と，５基の主柱穴，壁溝，そして１基の埋甕を備えている。複式炉は，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部で構成されていた。

本住居跡の機能時期は，炉に埋設された深鉢形土器の特徴から，大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。　（阿　部）

57号住居跡　ＳＩ57

遺　　構（図86・87，写真83～86）

本遺構は南区北寄り，ＡＣ52・53，ＡＤ52・53グリッドにまたがっている。

本遺構は，基盤層であるＬⅣ層上面において，ほぼ正方形状の広がりとして確認された。

本遺構の調査は，正方形の広がりの中央部から，東西南北に向って十字形の土層観察用の帯を残し掘り下げを実施した。その結果，遺構の平面形は四隅の丸い正方形状に掘り込まれていることが分かった。各辺の長さは東西長約5.8m，南北長約5.4mを計測する。本遺構の軸線方向は東壁のラインでほぼ真北を指し示す。本遺構内の堆積土（図86　ＡＡ’）は９つに分層され，その内，ℓ４は貼土と認識した。貼土の厚さは最大で約20cmを計測する。

周囲の壁面は，底面から垂直に近い角度で立ち上がる。壁の高さは底面から確認面まで40cm前後

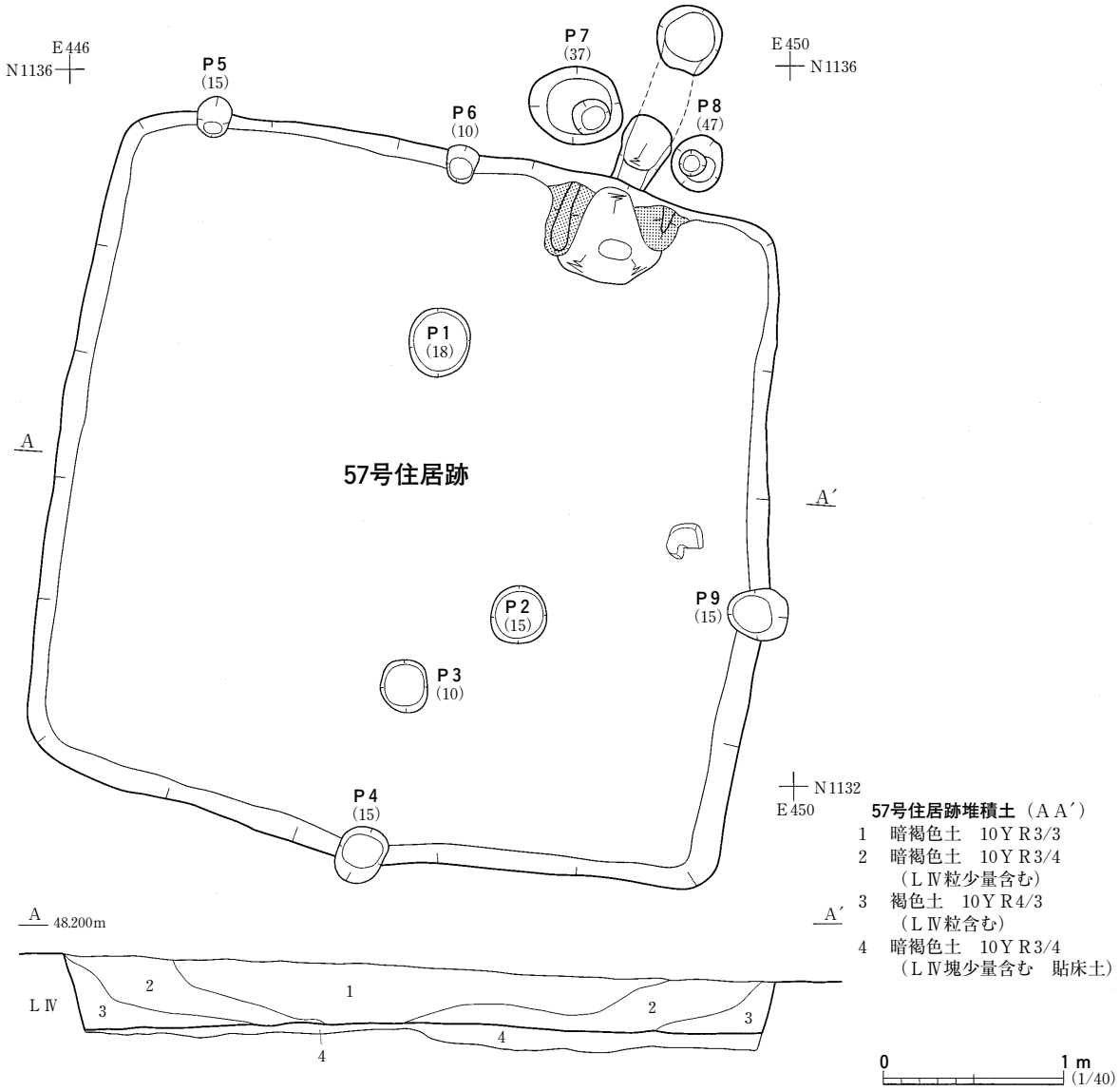


図86　57号住居跡（１）

を測る。底面は全体に貼土が施され，厚いところで掘形底面から15㎝前後を計測する。また，貼土された表面は，ほぼ平坦に整えられ，所々硬く締まっていた。

底面を移植鏝で丁寧に精査すると，底面から３基のピット，壁に沿って４基のピット，そして北壁東寄りから南へと延びる短い張出し部分が２ヶ所存在した。南へ延びる２ヶ所の張出し部の位置する北壁の外縁を削ってみたところ，壁面から北に向って延びる長楕円形状に張出し，その周囲から３基のピットを確認した。

底面の調査はまず，北壁東寄りから屋内へ延びる２ヶ所の張出し部分の調査から開始した。

屋内の２本張出し部に東西方向に１条の土層観察帯を残し，その南側の掘り下げを実施した。その結果，張出し部分に挟まれた部分は，皿状にわずかにくぼむのを確認した。

また，壁面から北に向って延びる長楕円形状の張出しには，南北方向に土層観察帯を残し，東半分を掘り下げた。確認面から26㎝ほど掘り下げたところで底面が確認され，底面はさらに北側へと

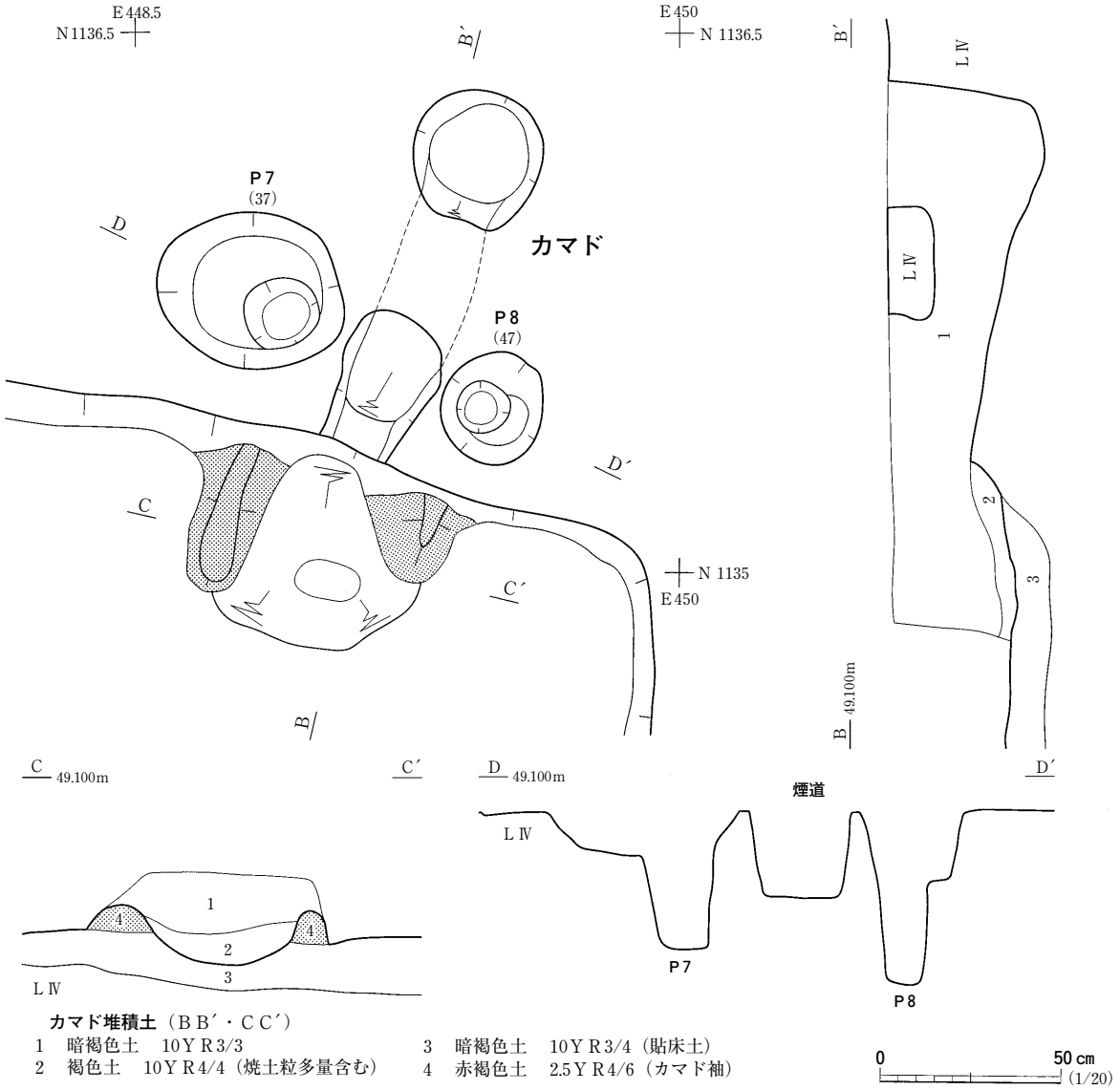


図87　57号住居跡（２）

徐々に下ってゆくことが分かった。そのことから，南北の土層観察用帯の延長上に存在するピットの東半分を掘り下げると，確認面から40cmほど下から底面が確認された。さらに，ピットの底面は南に向って緩やかに立ち上がり，北側のピットから南に向ってトンネル状に掘り込まれていることも分かった。

その結果，北壁東寄りに１基のカマドが据え付けてあることが分かった。この時点で初めて，本遺構は住居跡，底面は床面，そして貼土は貼床土として再認識することができた。

北壁東寄りで確認された施設は，壁から北へと延びる長楕円形状の張出し部はカマド煙道部，そして壁面から南へと延びる低い２本の張出し部はカマドの袖として捉えられ，屋内には浅くくぼんだ底面をもつ燃焼部がわずかに残存していた。燃焼部の底面及び，２本のカマド袖には被熱変色した部位は見られなかった。

カマドの規模を見てみると，まずカマド燃焼部では，残存した燃焼部の奥行きは，浅くくぼんだ

底面の南縁から北壁までとして計測すると約55cm，２本のカマド袖に挟まれる燃焼部の最大幅は約50cmを計る。煙道部の規模を見ると，北壁から煙出北縁まで約105cm，煙出での最も深いところで確認面から約42cmを計る。

本住居跡内からは，カマドの他に，９基のピットが確認されている。９基のピットは，床面中央にあるＰ１から順にＰ９まで番号を付けた。その内，Ｐ１～３の３基のピットは床面中央部に，Ｐ４～６・９の４基のピットは壁面に，そしてＰ７・８の２基のピットは屋外，つまりカマド煙道部を挟んで東西に１基ずつ配置されていた。

床面及び壁際に配置される７基のピットの深さは，10～18cmと比較的浅いものの，その配置から本住居跡に伴い上屋を支えた柱穴の可能性が考えられる。さらに，屋外に位置し，煙道部を挟んで東西に位置する２基の円形ピットも，その位置と規模から，屋外に存在した柱穴と考えられる。

遺　　物（図88，写真220・221）

遺物は，主に本住居跡内の堆積土ℓ１・２から土師器杯・甕の細片が多量に出土している。また，須恵器細片もわずかに出土した。ℓ１から出土した土師器片をみると，ほとんどが回転台を用いずに，外面の調整を施すものであった。

この内，形状の分かる土器及びその破片を，図88中に８点掲載した。また，住居跡内の堆積土から出土した石器を併せて掲載した。

１は底の平らな土師器杯の破片である。１は粘土紐を輪積みにし成形し，外面をナデた後に，横位または斜位にケズリ調整を施している。内面は丁寧なナデを施した後，体部には口縁部に平行してヘラミガキを施し，底面には井桁状にミガキを加えている。さらに，内面は全面に黒色処理されていた。胎土には微細な礫を多く含んでいる。

２・３は，住居跡内の覆土から出土した土師器椀及びその破片と思われる。２・３の内外面の調整は，ほぼ同じであるものの，その器形及び大きさは若干異なっていた。

２は，ほぼ完全な形まで復元することができた。２の破片は，本住居跡内堆積土ℓ２下位，及び床面から出土している。器形をみると，体部は底径cmと大きな底面から，口縁部に向って直線的に外傾する。外面は所々剝離している箇所も見られたが，器面全体をナデ，底面付近では横方向のケズリ調整を施している。内面は丁寧なナデを施した後，体部には口縁部に平行してヘラミガキを施し，底面には井桁状にミガキを加えている。さらに，内面は全面に黒色処理されていた。胎土には礫を多く含んでいる。

３は底面及び体部のほとんどを欠損した土師器椀の破片である。そのため，各部位の数値は推定の域を出ない。器形を見ると，体部は底面から口縁部に向って，やや丸味を帯びながら立ち上がってゆく。３は粘土紐を輪積みにし成形し，外面をナデている。内面は丁寧なナデを施した後，体部には底面から放射状に展開する密なヘラミガキを施していた。さらに，内面は全面に黒色処理されていた。

４～６は土師器甕及び甑の破片である。

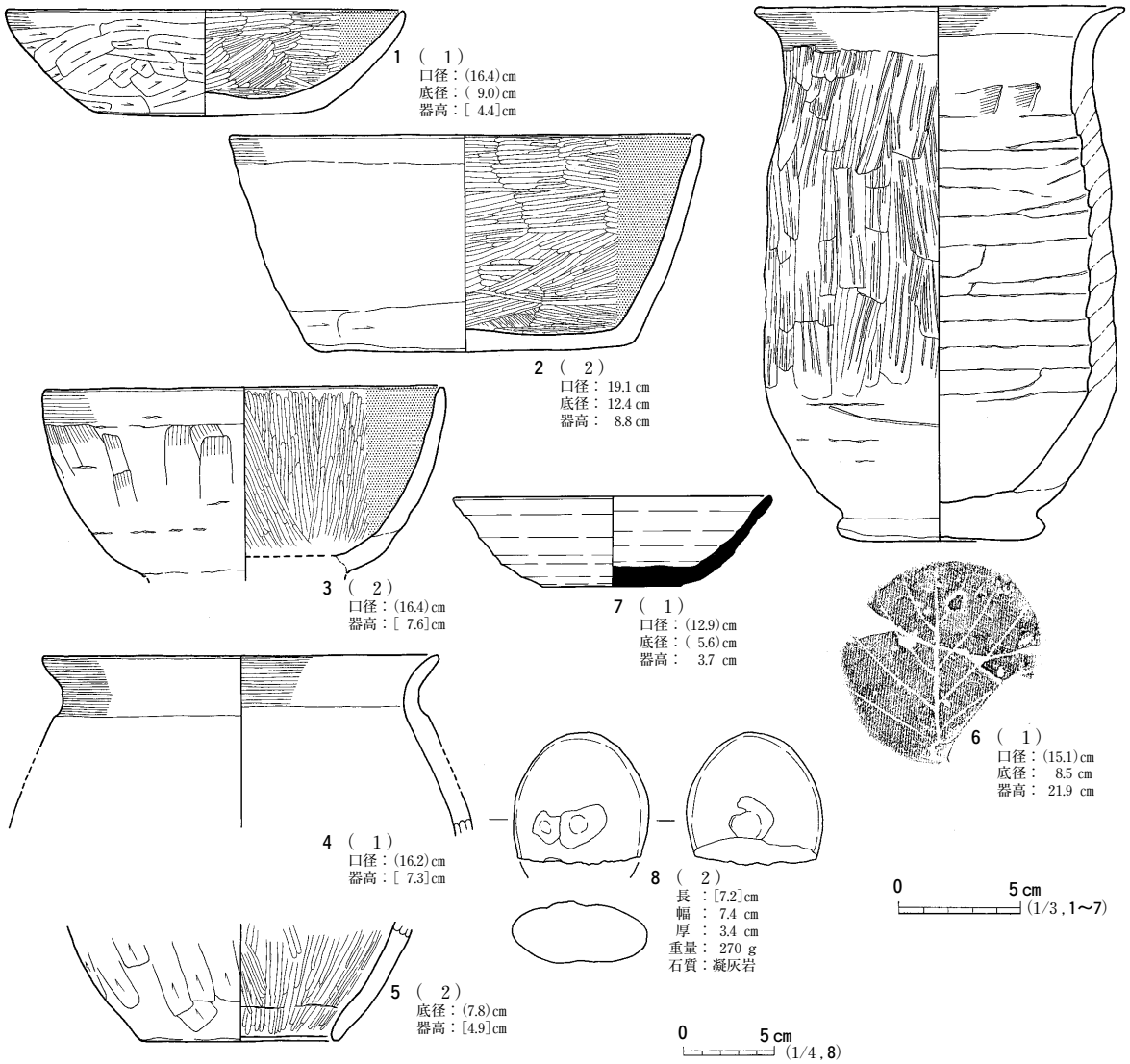


図88　57号住居跡出土遺物

4 は土師器甕の口縁部片である。口縁部は，内傾する胴部から一転して，大きく外反する。

6 は全体に黄褐色をした，胴の長い土師器甕である。胴部から口縁部にかけて一部欠損していた。器形を見ると，胴部は底部から丸味を持って外傾した後，わずかに内傾しながら立ち上がり，口縁部に至り大きく外反している。6 は粘土紐を輪積みにし成形し，外面はナデた後，胴部上半部では縦方向にハケ調整を施している。内面は粘土積みの痕跡を明瞭に残し，部分的にヘラナデが加えられている。丁寧なナデを施した後，体部には底面から放射状に展開する密なヘラミガキを施していた。

5 は甑の底部小片である。そのため，底に空いた孔の直径は推定の域を出ない。外面にはナデ調整を施した後，縦方向にケズリを加えている。内面にはナデ後に密なミガキを加えている。

1 ～ 6 の土師器及びその破片は，国分寺下層式段階の土器と思われる。

7 は本住居跡内覆土中から出土した須恵器杯の破片である。そのため，各部位の測定値は推定の域を出ない。内外面は，回転台を使って丁寧にナデられていた。底面をみると，回転する台から切

り離した際に付いた痕跡は，ケズリ調整で丁寧に消されていた。胎土に微細な砂礫を多く含んでいた。

８は住居跡内から出土したくぼみ石で，その３分の１を欠損している。表裏の滑らかな磨り面の中央部には，浅い不整形くぼみが各１ヶ所ずつ残っていた。

ま　と　め

本遺構は方形に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。

57号住居跡には，１基のカマド，屋内外に９基の柱穴を伴っている。床面全体には，貼床の処置が施され，所々硬く締まっている部位も認められた。

本住居跡の機能時期は，住居跡内堆積土ℓ２，床面から出土した土師器の特徴から，国分寺下層式段階，奈良時代頃と考えられる。（阿　部）

58号住居跡　ＳＩ58

遺　　構（図89～91，写真87～90）

本遺構はＡＤ52・53・ＡＥ53グリッドに位置する。東壁にカマドを伴う竪穴住居跡である。ＬⅣ上面において明確な黒褐色土の遺構の輪郭を確認した。周辺の地形は平坦である。本遺構の重複関係は59号住居跡より新しく，17号溝跡より古い。

住居内堆積土は７層に分けられる。ℓ１～５は中央が窪む堆積を見せ，壁際からの流れ込みが観察されたことから，自然堆積と考える。ℓ６は貼床土で堅く締まった黄褐色土である。ℓ７は壁際に沿って見られた掘形の整地土である。

平面形は整った方形を呈し，南北の軸線はほぼ真北を示す。規模は南北長4.30m，東西長4.24mを測る。周壁は全周にわたり，80～90°とほぼ垂直に立ち上がる。床面からの壁高は，最も遺存の良い西壁で0.31mを測る。貼床土は住居内中央部に認められ，やや南側に張り出していた。このことから住居の出入口が南側にあった可能性がある。床面は全面的に細かな凹凸が認められた。

カマドは東壁のほぼ中央に位置している。天井部は失われ，両袖部の床面に近い部分のみが残っていた。東壁から北袖は約0.6m，南袖は約0.4m張り出している。両袖の残存高はともに10㎝程である。南袖の延長線上，北袖端部に対応する箇所から，土師器杯（図92－１）が内面を上にした状況で出土している。推定される燃焼部の範囲は，0.68×0.56mである。燃焼部中央は住居の床面より６㎝程低く，約40°の角度で奥壁へと立ち上がる。燃焼部は硬化した焼け面が失われており，焼土粒が堆積していた（ℓ10）。煙道部は全長1.14m，幅は煙出部で0.40mを測る。底面は煙出部に向かって傾斜し，その角度は20°，高低差は0.3mである。

カマド内堆積土は16層に分けられる。ℓ１～４は煙道部の堆積土でℓ１は住居内堆積土ℓ２と類似していることから，住居廃絶後に自然堆積したと考えている。ℓ３・４は炭化物・焼土粒・ＬⅣ塊を多く含むことから，煙道天井部の崩落土と考えている。ℓ３よりℓ４の方がＬⅣ塊を多く含んでいる。また煙道部，ℓ３上面では比較的大きな土師器甕の破片が出土しており，煙出部に関わる

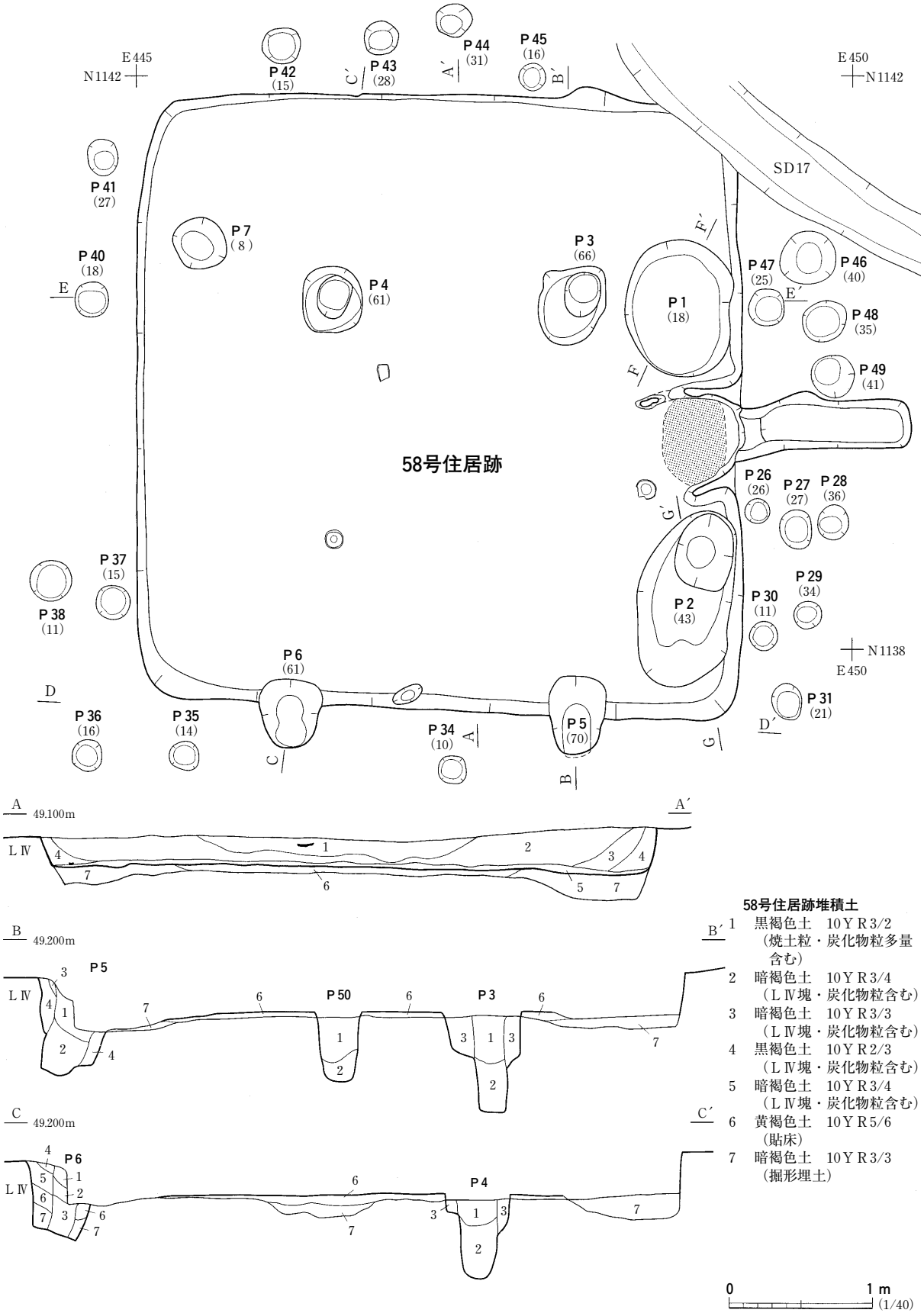

E445
N1142
E450
N1142
N1138
E450
SD17
58号住居跡
P1 (18)
P2 (43)
P3 (66)
P4 (61)
P5 (70)
P6 (61)
P7 (8)
P26 (26)
P27 (27)
P28 (36)
P29 (34)
P30 (11)
P31 (21)
P34 (10)
P35 (14)
P36 (16)
P37 (15)
P38 (11)
P40 (18)
P41 (27)
P42 (15)
P43 (28)
P44 (31)
P45 (16)
P46 (40)
P47 (25)
P48 (35)
P49 (41)
A 49.100m
A′
B 49.200m
B′
C 49.200m
C′
LⅣ
P50
58号住居跡堆積土
1 黒褐色土　10YR3/2（焼土粒・炭化物粒多量含む）
2 暗褐色土　10YR3/4（LⅣ塊・炭化物粒含む）
3 暗褐色土　10YR3/3（LⅣ塊・炭化物粒含む）
4 黒褐色土　10YR2/3（LⅣ塊・炭化物粒含む）
5 暗褐色土　10YR3/4（LⅣ塊・炭化物粒含む）
6 黄褐色土　10YR5/6（貼床）
7 暗褐色土　10YR3/3（掘形埋土）
0
1 m
(1/40)

図89　58号住居跡（１）

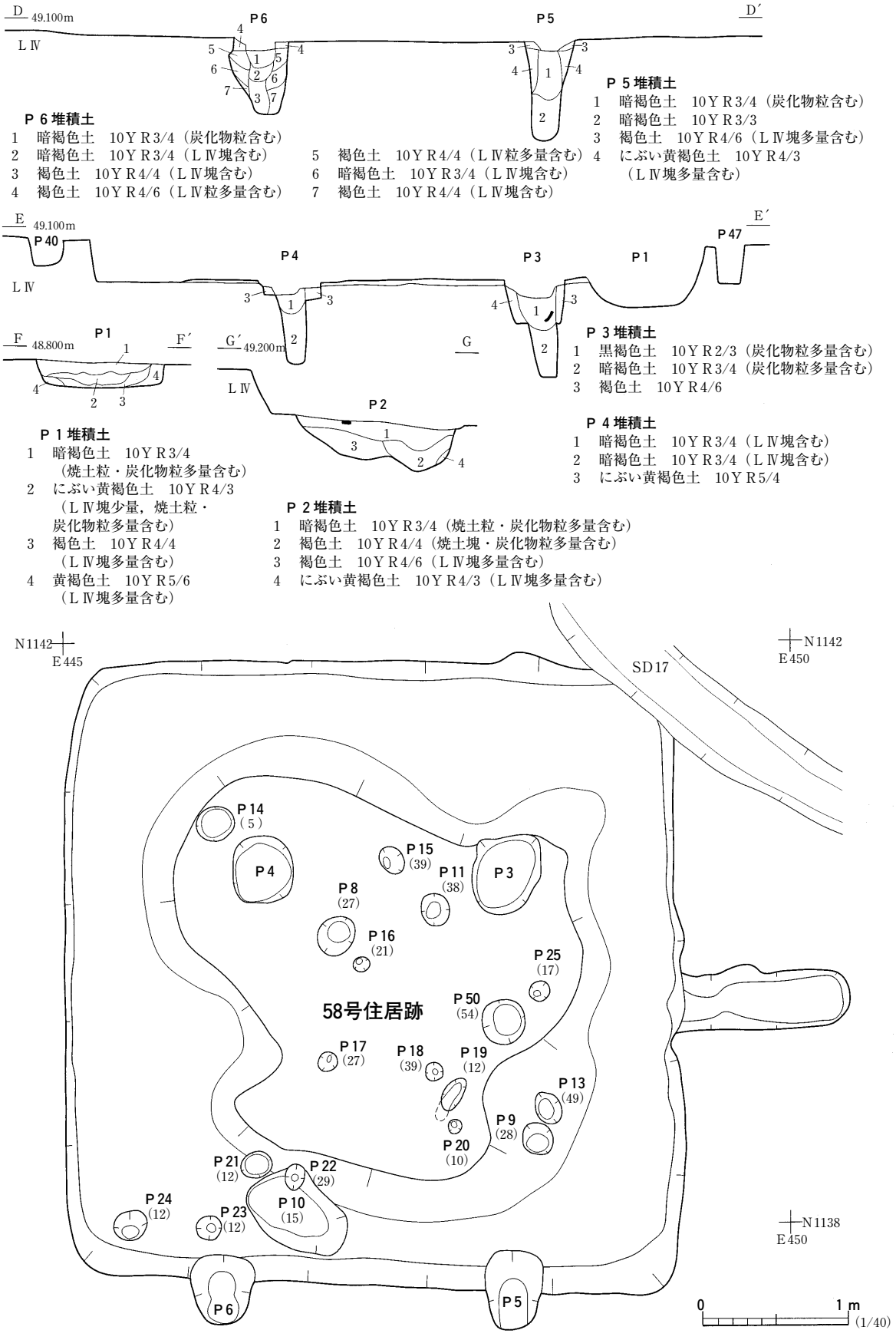

D
49.100m
L Ⅳ
P6
P5
D′
P 6 堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（Ｌ Ⅳ塊含む）
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ塊含む）
4　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
5　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
6　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（Ｌ Ⅳ塊含む）
7　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ塊含む）
P 5 堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ塊多量含む）
4　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/3
（Ｌ Ⅳ塊多量含む）
E
49.100m
P40
P4
P3
P1
P47
E′
L Ⅳ
F
48.800m
P1
F′
G′
49.200m
G
P2
P 3 堆積土
1　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/3（炭化物粒多量含む）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒多量含む）
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6
P 4 堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（Ｌ Ⅳ塊含む）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（Ｌ Ⅳ塊含む）
3　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ5/4
P 1 堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4
（焼土粒・炭化物粒多量含む）
2　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/3
（Ｌ Ⅳ塊少量，焼土粒・
炭化物粒多量含む）
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4
（Ｌ Ⅳ塊多量含む）
4　黄褐色土　10Ｙ Ｒ5/6
（Ｌ Ⅳ塊多量含む）
P 2 堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（焼土粒・炭化物粒多量含む）
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4（焼土塊・炭化物粒多量含む）
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ塊多量含む）
4　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/3（Ｌ Ⅳ塊多量含む）
N1142
E445
N1142
E450
SD17
P14
(5)
P4
P15
(39)
P11
(38)
P3
P8
(27)
P16
(21)
P25
(17)
58号住居跡
P50
(54)
P17
(27)
P18
(39)
P19
(12)
P13
(49)
P9
(28)
P20
(10)
P21
(12)
P22
(29)
P24
(12)
P23
(12)
P10
(15)
N1138
E450
P6
P5
0
1 m
(1/40)

図90　58号住居跡（２）

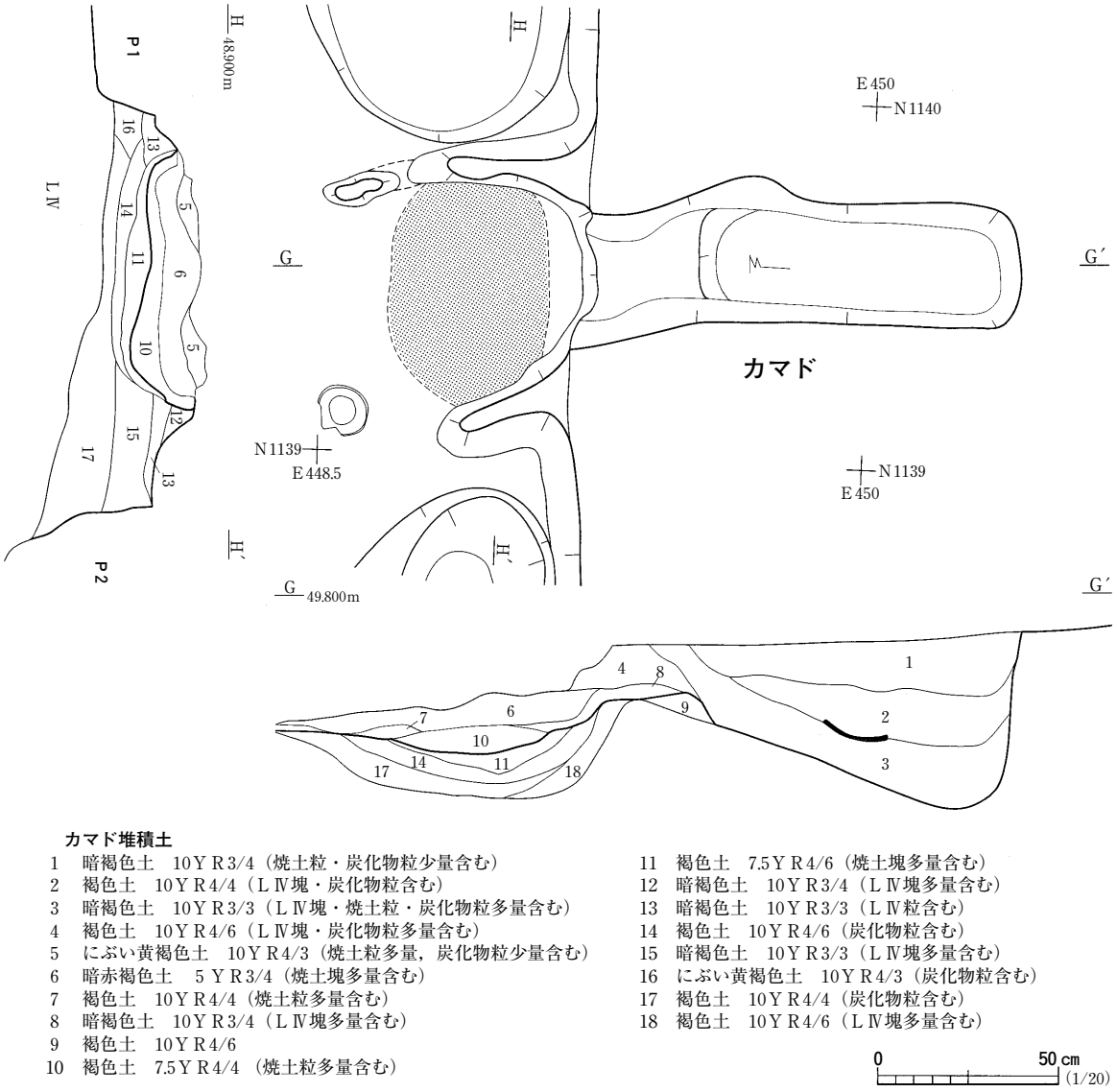


図91　58号住居跡（３）

可能性が考えられる。ℓ５～ℓ10は，天井部・袖部の崩落土と見られ，焼土粒・炭化物を多く含んでいた。ℓ11・ℓ14～18はカマド掘形の堆積土で，炭化物・ＬⅣ塊を含んでいる。床面から掘形底面までの深さは0.18mである。カマド掘形は，南北両側をＰ１・２によって壊されている。ℓ12・13はカマド袖で，掘形埋土の上に設置している。

ピットは床面から７基，床下から18基を検出した。Ｐ１・２はカマドの南北両側に位置する長楕円形の土坑である。その規模はＰ１で長軸長0.96m，短軸長0.76m，深さ0.18m，Ｐ２で長軸長1.26m，短軸長0.33m，深さは北側が最深で0.32mを測る。Ｐ１・２の堆積土はともに４層に分けられる。Ｐ１・２のℓ１は住居内堆積土ℓ２に相当するものである。それより下層は壁際からの流れ込みにより堆積したとみられる。Ｐ１・２はその位置や規模から貯蔵穴と推察され，カマド掘形よりも新しく構築されたものと判断される。

Ｐ３～６はいずれも柱痕が確認でき，位置や規模から本遺構の主柱穴と考えられる。それぞれの

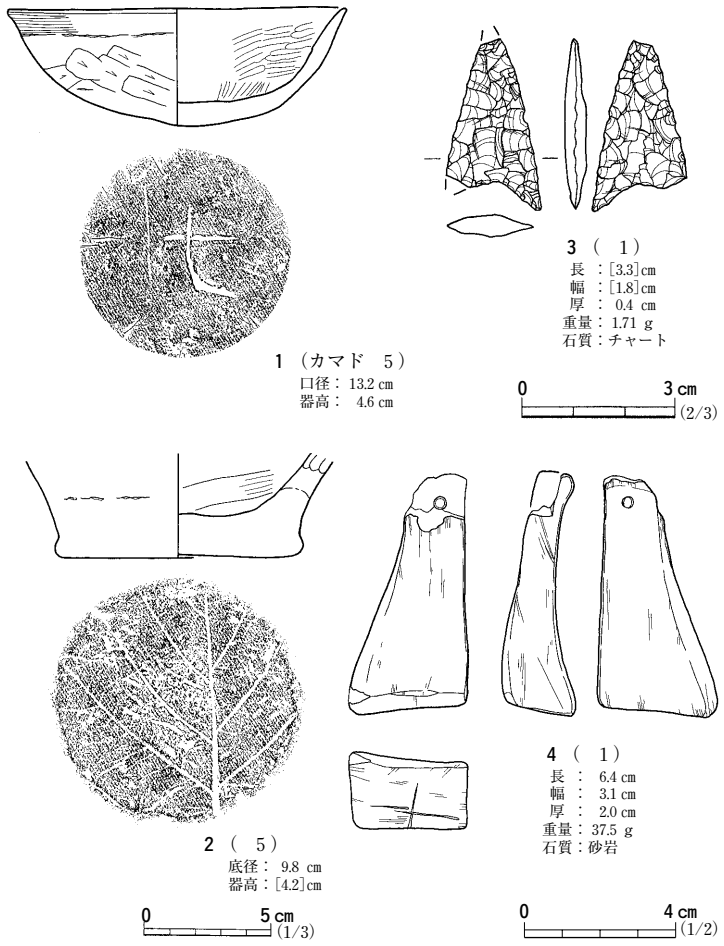


図92　58号住居跡出土遺物

柱痕には締まりのない暗褐色土が堆積していたが，わずかな色調や包含物の違いから細分している。しかしこれは，二次的な堆積作用によるものと考えている。柱痕はすべて円形で，その直径は0.20m前後である。Ｐ５・６は南壁から外側に張り出し，掘形および柱痕がＰ５で20°，Ｐ６で15°内傾する。Ｐ３～Ｐ６の掘形の平面形は隅丸方形を呈し，その規模は0.46～0.56mを測る。Ｐ３～６の床面から底面までの深さはＰ３で0.72m，Ｐ４で0.58m，Ｐ５で0.40m，Ｐ６で0.28mである。各ピットの芯々間距離はＰ３－Ｐ４間で1.74m，Ｐ５－Ｐ６間で2.04m，Ｐ３－Ｐ５間で2.90m，Ｐ４－Ｐ６間で2.88mを測る。Ｐ26～49は，住居跡の周囲に周壁に沿って見られたピットである。これらのピットの堆積土は，住居内堆積土ℓ２と類似していたことから，58号住居跡に伴う可能性がある。

住居跡掘形は壁際が深く掘り込まれ，掘形中央は高く掘り残されている。掘形底面からは，Ｐ８～Ｐ25を検出した。これらのピットの深さは，概算で0.2～0.5mである。これらの堆積土はＬⅣ粒を含む暗褐色土で，ほぼ同時期に埋めもどされたと考えられる。

遺　　物（図92，写真221・233）

本遺構からは，土師器片111点，須恵器片２点，縄文土器431点，石器類６点が出土した。出土遺物のうち，４点を図化した。

１は土師器杯である。外面体部中程から下端にかけてヘラケズリ再調整の跡が見られる。底部は丸底で，「七」の線刻が見られる。２は土師器甕の底部片である。底部には木葉痕が見られる。

３はチャート製の凹基式石鏃である。４は砂岩製の砥石で，上端部に穿孔が認められる。

ま　と　め

本遺構は，隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。主柱穴のうち南側の２本が周壁より突出して配置されている。カマドは東壁中央にあり，その南北に貯蔵穴を伴なう。本住居跡の所属時期は，出土土器の年代観から，８世紀後半頃と考えている。　（門　脇）

59号住居跡　ＳＩ59

遺　　構（図93・94，写真91～93）

本遺構はＡＣ53・ＡＤ53グリッドに位置する。床面中央南側に複式炉を伴う竪穴住居跡である。遺構の平面形はＬⅣ上面で把握した。周辺の地形は平坦である。本遺構は，1450号土坑より新しく，57・58号住居跡や188・1277号土坑より古い。

住居の平面形は隅丸方形を呈すると考えるが，東側は57号住居跡により壊されている。複式炉を通る南北の中央軸線はＮ27°Ｅを示す。規模は南北長4.65m，東西長5.10mを測る。

周壁はほぼ全周にわたって約80～90°とほぼ垂直に立ち上がる。床面から検出面までの壁高は，最も遺存の良い南壁で0.23mを測る。床面はほぼ平坦である。

住居内堆積土は５層に分けられる。ℓ１～５は中央が窪む堆積を見せ，壁際からの流れ込みが観察されたことから，自然堆積と考える。

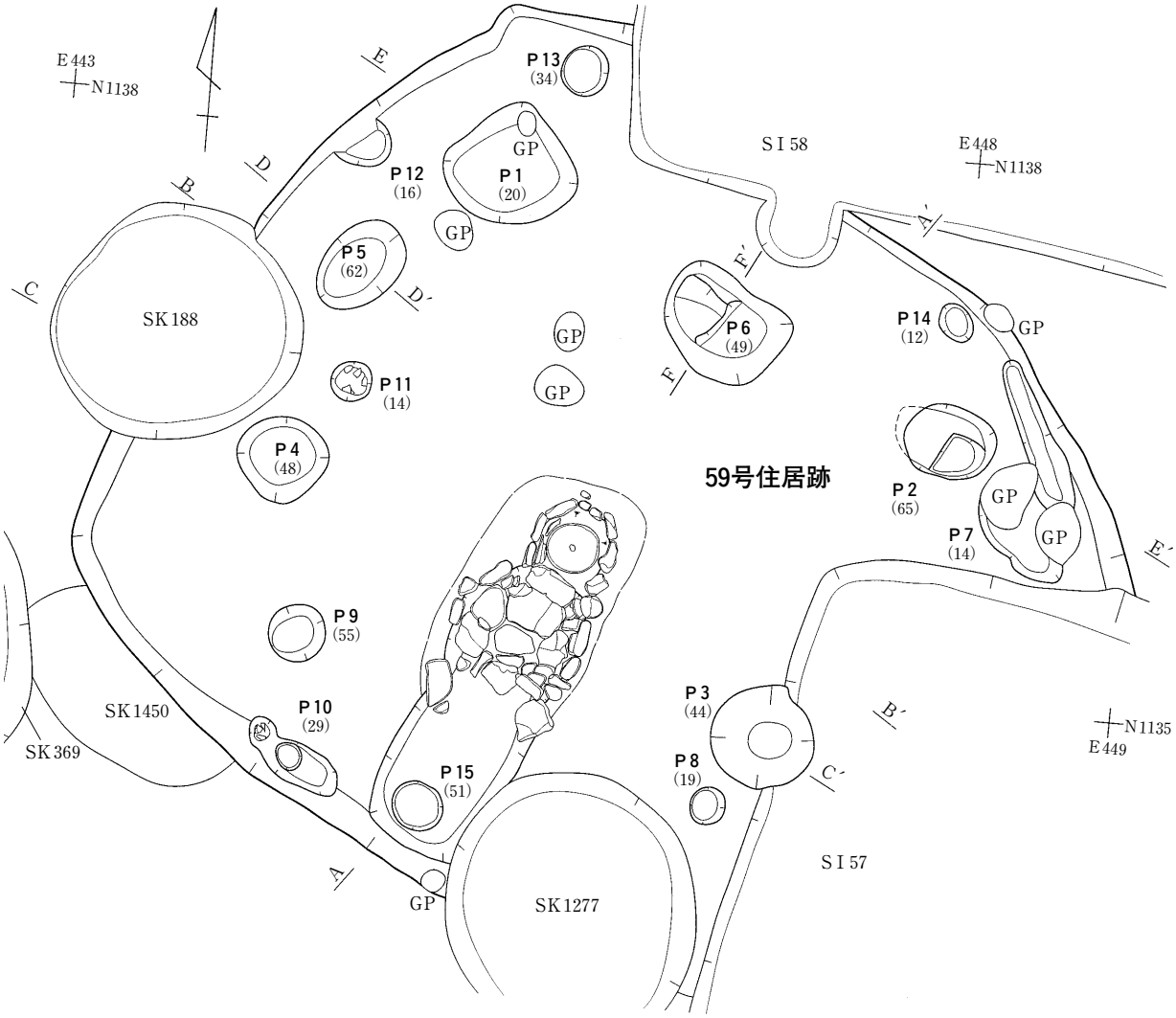
複式炉は床面南側のほぼ中央に位置している。炉の長軸線は，住居の中軸線と一致し，南壁に直交している。炉の前庭部末端は南壁に接している。全長は2.28m，最大幅は石組部の中央で0.78mを測る。土器埋設部は径0.29mの深鉢形土器が埋設され，土器の底部を穿孔している。土器の周囲に，板状の河原礫の縁石が巡る。石組部は板状礫や亜角礫を組み上げ，前底部と石組部が接する箇所には幅の広い亜角礫を据えている。石組部の奥壁・側壁とも比較的緩やかに立ち上がる。底面には扁平礫が敷かれていた。前庭部の平面形は，隅丸長方形をなす。前庭部の底面南端は，径28cm，深さ48cmのＰ15が掘り込まれている。

炉内堆積土は18層に分けられる。ℓ１～７は石組部と前庭部，ℓ８～10は土器埋設部，ℓ11・12はＰ15の堆積土である。ℓ13～18は炉掘形の堆積土である。ℓ１～４・８～12は自然堆積，ℓ５～７・13～18は人為堆積である。炉掘形は，土器埋設部・石組部の周囲を長方形に掘り窪められていた。床面から掘形底面までの深さは0.43mである。

ピットは床面から15基を検出した。Ｐ３・４・６は位置や規模から本遺構の主柱穴と考えられる。その掘形の平面形は不整円形を呈し，その規模は0.48～0.72mを測る。Ｐ３・４・６の床面から底面までの深さは，Ｐ３で0.44m，Ｐ４で0.48m，Ｐ６で0.49mである。各ピットの芯々間距離はＰ３－Ｐ４間で3.15m，Ｐ４－Ｐ６間で2.6m，Ｐ３－Ｐ６間で2.3mを測る。それぞれの柱穴には径0.2m程の柱痕が認められた。またＰ10からは６点，Ｐ11からは13点のチャート製の剝片がまとまって出土した。

遺　　物（図95，写真221）

本遺構からは，縄文土器片268点・石器類16点・土師器片３点が出土した。出土遺物のうち２点を図化した。１は，埋設土器である。胴部上半を欠損する深鉢形土器で底部には径3.8cmの孔があけられている。胴部中程から上位には凹線によって懸垂文が描かれ，下端がＵ字状に閉じられている。区画内に単節斜縄文を充填させている。胎土には石英砂粒を含んでいる。大木９式の新しい段階か



59号住居跡堆積土

1　黒褐色土　10ＹＲ3/2
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（炭化物粒少量含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊・炭化物粒含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/6

0　1 m
(1/40)

図93　59号住居跡（１）

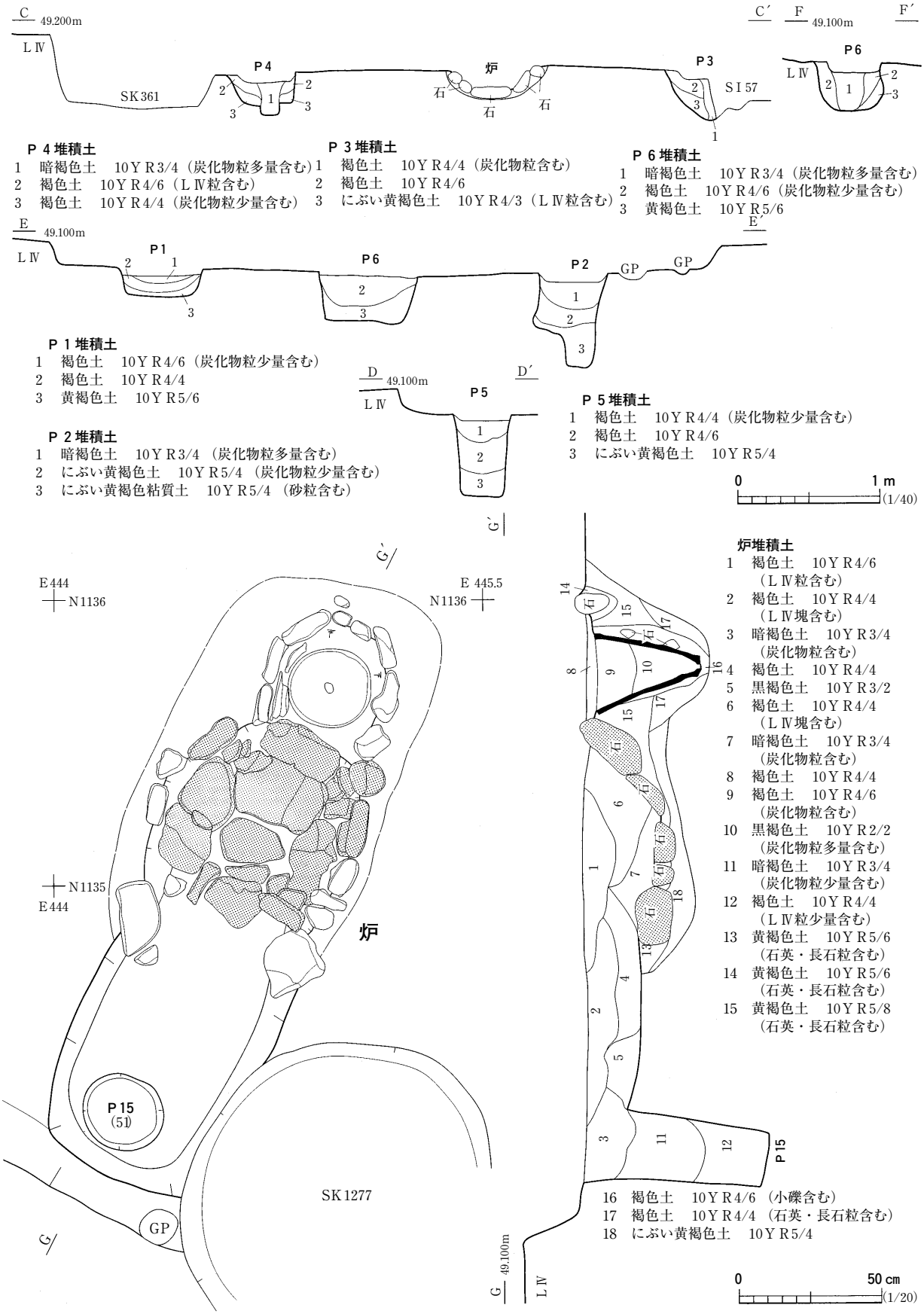

C 49.200m
C′
F 49.100m
F′
LⅣ
SK361
P4
炉
P3
SI57
P6
石
石
石
P４堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒多量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒少量含む）
P３堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
P６堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒多量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒少量含む）
3　黄褐色土　10ＹＲ5/6
E 49.100m
E′
P1
P6
P2
GP
GP
P１堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4
3　黄褐色土　10ＹＲ5/6
P２堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒多量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（炭化物粒少量含む）
3　にぶい黄褐色粘質土　10ＹＲ5/4（砂粒含む）
D 49.100m
D′
P5
P５堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4
0　1 m
(1/40)
G′
G
E444
N1136
E 445.5
N1136
N1135
E444
炉
P15
(51)
SK1277
GP
炉堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4
5　黒褐色土　10ＹＲ3/2
6　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊含む）
7　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
8　褐色土　10ＹＲ4/4
9　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒含む）
10　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物粒多量含む）
11　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量含む）
12　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
13　黄褐色土　10ＹＲ5/6（石英・長石粒含む）
14　黄褐色土　10ＹＲ5/6（石英・長石粒含む）
15　黄褐色土　10ＹＲ5/8（石英・長石粒含む）
P15
16　褐色土　10ＹＲ4/6（小礫含む）
17　褐色土　10ＹＲ4/4（石英・長石粒含む）
18　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4
G 49.100m
LⅣ
0　50 cm
(1/20)

図94　59号住居跡（２）

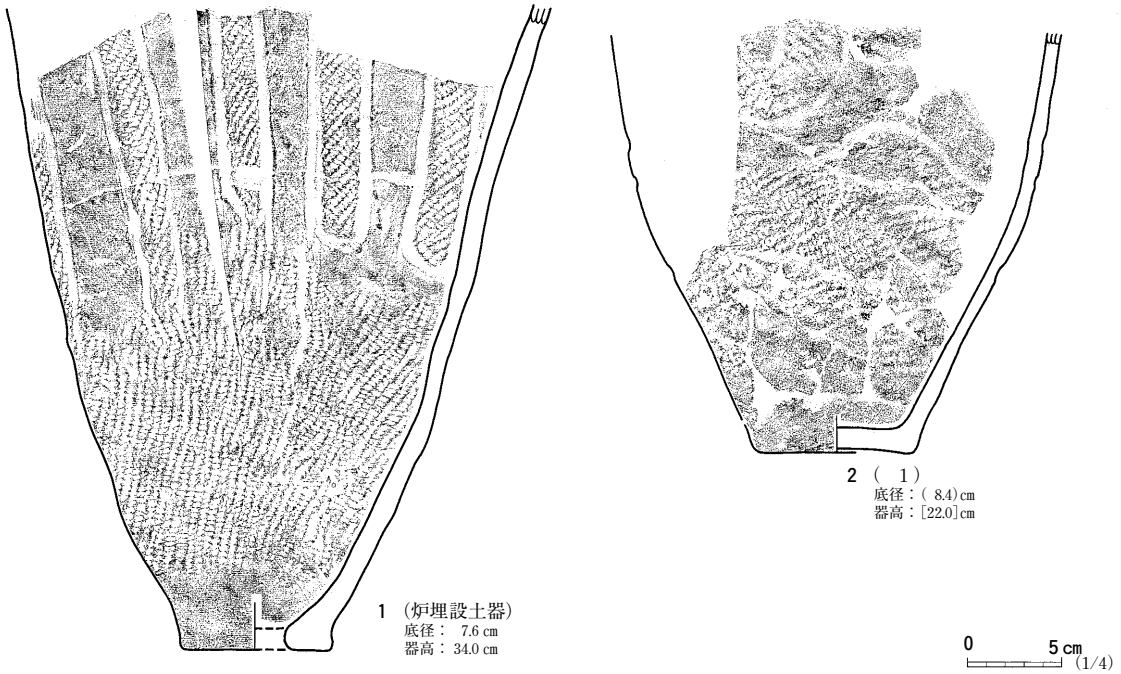


図95　59号住居跡出土遺物

ら大木10式の古い段階に比定されるものであろう。２は胴部上半を欠損する深鉢形土器である。胴部中程に沈線区画の無文帯によって曲線を描いている。大木10式に属するものであろう。

ま と め

本遺構は，複式炉を有する竪穴住居跡である。上屋構造は３本主柱により支えられていたものと推察される。床面に掘り窪められた２箇所のピットには，チャート製の剝片がまとまって出土していた。本遺構の所属時期は炉跡埋設土器から大木９～10式土器期に比定される。　（門　脇）

60号住居跡　ＳＩ60

遺　　構（図96，写真95・96）

本遺構は南区の北端，W50・51，X50・51の４グリッドにまたがって位置する。本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において確認され，遺構の周囲には南北に走る数条の畝跡と，数基のグリッドピットが散在する。

本遺構の調査は，ＬⅣ層を平らに削る確認作業から開始した。まず，畝跡の掘り下げから開始していたところ，畝跡の堆積土内から土器の割れ口が丸く巡っているのを確認した。出土した土器の南側には，熱を受け朱色に変色した粘土塊を確認でき，その周囲はわずかにくぼんでいることも分かった。

以上のことから，畝跡の中から確認された土器と粘土塊の出土した部分は，炉跡の可能性が高くなった。この時点で，本遺構を住居跡として再認識し，周囲のグリッドピットの中に柱穴があるものとして精査を続けた。

畝跡から確認できた遺構は，南北方向に土層観察用の帯を残し西半分の掘り下げを実施した。そ

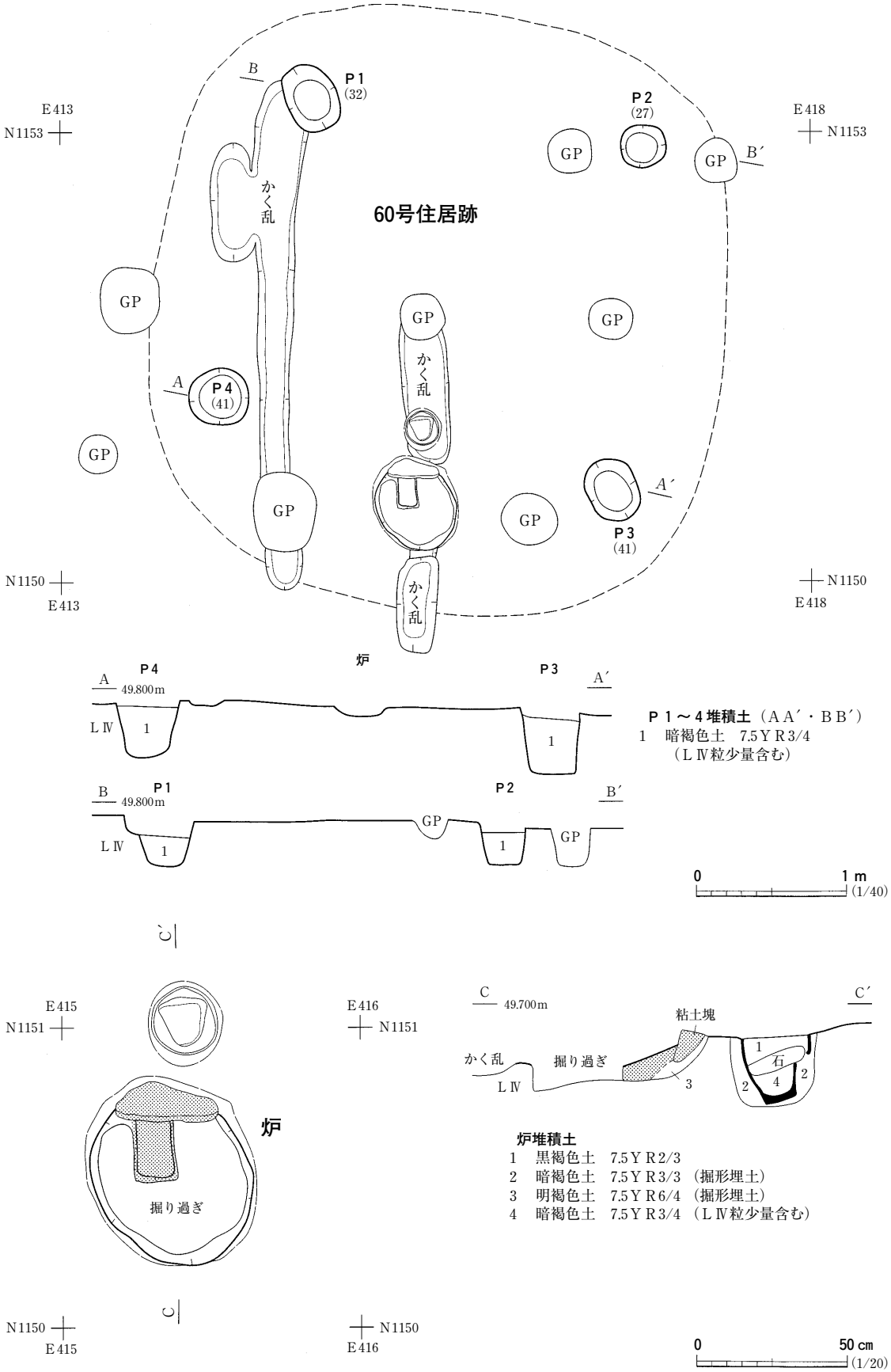

60号住居跡
P1
(32)
P2
(27)
P3
(41)
P4
(41)
かく乱
GP
炉
掘り過ぎ
粘土塊
E413
N1153
E418
N1153
N1150
E413
N1150
E418
E415
N1151
E416
N1151
N1150
E415
N1150
E416
A
A′
B
B′
C
C′
49.800m
49.700m
LⅣ
かく乱
掘り過ぎ
石
P１～４堆積土（ＡＡ′・ＢＢ′）
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒少量含む）
炉堆積土
1　黒褐色土　7.5ＹＲ2/3
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（掘形埋土）
3　明褐色土　7.5ＹＲ6/4（掘形埋土）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
0　1 m
(1/40)
0　50 cm
(1/20)

図96　60号住居跡

の北側には，土器を１個体埋め込んでいた。土器の中には，長さ20㎝ほどの偏平な石が１個，土器の内部にしっかりと食い込んでいた。土器を埋設した部分を断ち割ってみると，埋設された土器は胴部中位から底部まで残存していることが分かった。

土器を埋設した部分の南側には，長径62㎝，短径58㎝ほどの楕円形状の浅いくぼみが接していた。しかしながら，この部分の堆積土は畝跡のそれと同色であったため，部分的にかなり掘り過ぎてしまった。楕円形状のくぼみの北端には，長さ27㎝ほどの１個の粘土塊が，長辺を東西方向にして固定されていた。粘土塊は被熱により薄らと赤く変色していた。

以上の事実から，畝跡の堆積土中から確認できた遺構は，北に土器埋設部，そして楕円形状にくぼんだ石組部が連続する複式炉であると判断された。

炉跡の規模は，土器埋設部の北端から石組部の南端まで約93㎝を測る。炉跡の軸線方向はほぼ真北を指している。炉跡内の堆積土は４層に分けられ，この内ℓ２・３は掘形埋土である。しかしながら，この炉跡に前庭部が伴っていたかどうかは，畝跡で掘削されてしまった現状では確かめることは出来なかった。

周囲に散在するグリッドピットの配置を観察すると，４基のピットが炉跡を中心に四角く配置されていることに気付く。４基のピットは北西隅から時計回りにＰ１～４と番号を付けた。４基のピットの規模は，直径（長径）30～46㎝，確認面からの深さは27～41㎝であった。４基のピット間隔をみると，Ｐ１東端～Ｐ２西端までの最短距離は約1.9m，同じくＰ２南端～Ｐ３北端までは約２m，Ｐ３西端からＰ４東端までは約2.3m，そしてＰ４北端からＰ１南端までは約1.7mを測る。

４基のピットは，その配置と規模から検討して，いずれも本住居跡の柱穴と考えられる。炉跡を挟んで計４本の柱が，本住居跡の上屋を主に支えていたと推察する。

柱穴の位置を考慮に入れ，本住居跡の床面の範囲を短い破線で図96中に示してみた。想定された床面規模は南北約４m，東西約3.8mを測る。

遺　　物

出土した遺物は炉跡の埋設土器のみであった。しかしながら，出土した炉埋設土器は２次的な熱を内部から受けたためか，土器の劣化が著しく，脆くなっていた。そのため，取り上げ後，洗浄を経た土器は，炉断面図にあるような元の形状に復元できなかった。そのため，埋設土器は図として示すことが出来なかった。埋設土器の取り上げ時点で，観察された土器外面の特徴は，残っていた胴部全面に縄目が確認できた。

ま　と　め

本遺構は周囲の壁および床面が既に失われてしまっていた竪穴住居跡である。

60号住居跡は，１基の複式炉と４基の柱穴を備えている。炉跡の上部構造は，後世の開墾等により失われ確認できなかった。炉跡は土器埋設部と石組部からなる複式炉で，屋内の南端中央に設けられていた。

本住居跡の機能時期は，炉埋設土器の特徴がうかがい知れないことから，土器で時期を想定する

のは困難である。そこで，複式炉を伴うという事実から機能時期をあえて想定しておくと，本住居跡は，大木９・10式段階，縄文時代中期後・末葉頃の所産と考えられる。　（阿　部）

61号住居跡　ＳＩ61

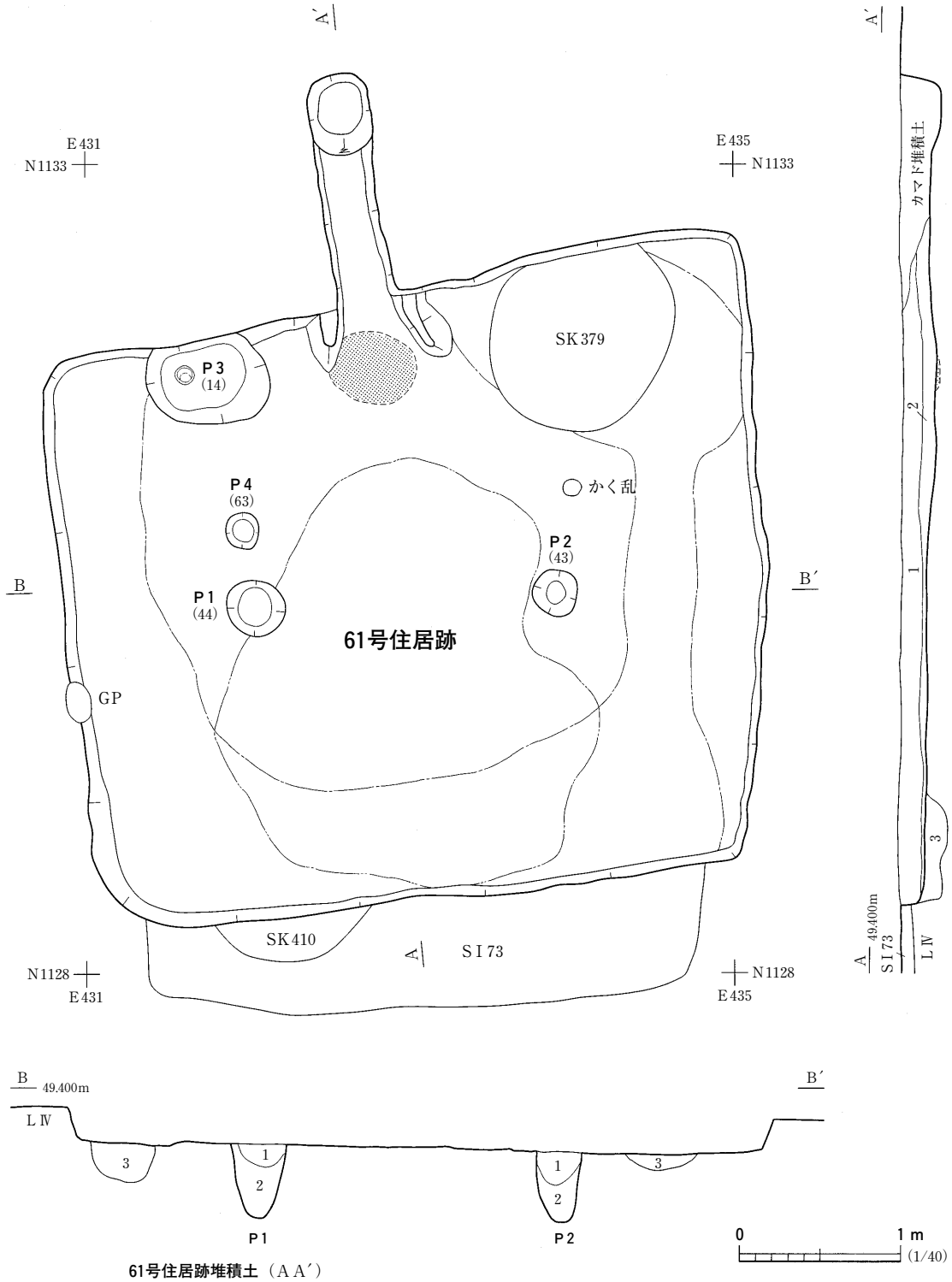
遺　　構（図97・98，写真94・97・98・100）

本遺構は南区中央部の平坦面に存在し，ＡＡ54～55・ＡＢ54～55グリッドに位置する。本遺構の西に62・63号住居跡が隣接する。ＳＩ73・ＳＫ379・410と重複し，本遺構の方が新しい。黄褐色土（ＬⅣ）上面で隅丸方形の落ち込みを検出し，これに合わせて土層観察用ベルトを南北方向に設置した。遺構内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒・焼土粒・炭化物粒を含むにぶい黄褐色土，ℓ２は黄褐色土粒と炭化物粒を多く含むにぶい黄褐色土で，共に人為堆積土と考えられる。ℓ３は黄褐色土粒と焼土粒を含む暗褐色土で，貼床土である。

平面形は一辺3.5～4.3ｍの隅丸方形で，東西壁方向を主軸方位とすると，真北から10°程西側に傾く。壁高は10～25cmで，周壁は70°程の角度で立ち上がる。黄褐色土を掘り込んでほぼ平坦な床面を造り出している。床面はさらに東壁・南壁・西壁に沿って，深さ５～12cmの北側が開く「コ」字の帯状に掘りこまれ，ほぼ平坦に貼床されている。床面には中央部から南壁付近まで踏み締まりが認められた。

住居内施設として，カマド１基，主柱穴２基，貯蔵穴１基，ピット１基を検出した。カマドは北壁の中央部に設けられ，主軸方位は住居跡の主軸方位と一致する。Ｐ１・２は床面のほぼ中央でカマドの主軸線を挟んで東西に対峙する。Ｐ１とＰ２を結ぶ線とカマドの主軸線は直交し，Ｐ１・２が本住居跡の主柱穴と考えられる。直径約30cmの円形で，床面からの深さは43～44cmを測る。Ｐ１・２内堆積土は３層に分けられ，ℓ１はにぶい黄褐色土，ℓ２・３は暗褐色土である。柱痕は認められず，共に柱穴掘形と考えられる。Ｐ３はカマドの西側の北壁際にあり，貯蔵穴と推測される。平面形は長径76cm，短径51cmの楕円形で，深さは14cmを測り，堆積土から土師器杯（図99－１）が出土している。Ｐ３内には遺構内堆積土ℓ２に相当するにぶい黄褐色土が堆積している。Ｐ４はＰ１の北側に近接し，規模は直径22cmの円形で，深さ63cmを測る。Ｐ４内堆積土は２層に分けられ，ℓ１はにぶい黄褐色土，ℓ２は暗褐色土である。Ｐ４もその規模から本住居の柱穴の可能性も考えられるが，機能は不明である。

カマドは北壁の中央部に設けられ，カマド両袖と煙道，燃焼部が遺存する。燃焼部の奥行きは40cm，幅は35cmを測る。燃焼部中央には長径55cm，短形44cmの楕円形の焼土化範囲が認められ，その厚さは最大で２cmを測る。袖の長さは西側で37cm，東側で45cmを測る。断面の観察より，黄褐色土を掘り下げてほぼ平坦な床面を形成した後，黄褐色土粒・黒褐色土粒・焼土粒を含む褐色土を積み重ねて袖を構築しているのがわかる。両袖には焼土化した範囲が認められ、厚さは最大４cmに及ぶ。煙道は北壁に溝状に掘り込まれ，煙出ピットに連結する。煙道の長さは141cm，幅は33～38cm，検出面からの深さは16cmを測る。煙出ピットは長径50cm，短径38cmの楕円形で，確認面からの深さは



61号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・焼土粒・炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・炭化物粒多量，焼土粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・焼土粒少量含む　貼床土）

Ｐ１・Ｐ２堆積土（ＢＢ′）
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・焼土粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量含む）

図97　61号住居跡（１）

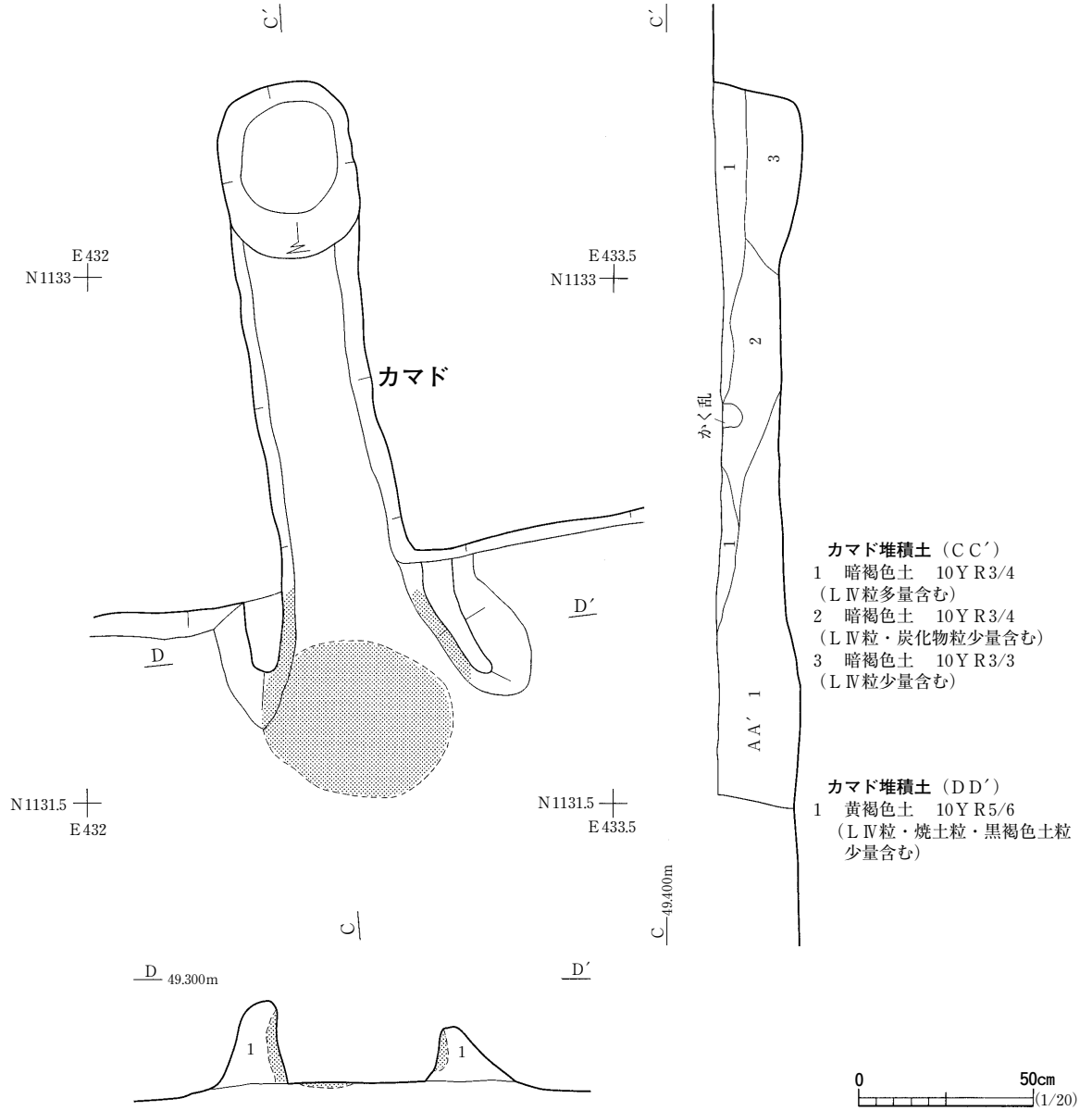


図98　61号住居跡（２）

25㎝を測る。カマド内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を多く含む暗褐色土で，煙道のほぼ全体に堆積している。ℓ２は黄褐色土粒と炭化物粒を含む暗褐色土，ℓ３は黄褐色土粒を含む暗褐色土である。ℓ２は煙道南側から，ℓ３は煙道北側から流れ込むように堆積している。ℓ１～３はその堆積状況より，自然流入土と推測される。

遺　　物（図99，写真221）

遺物は，縄文土器19点，土師器123点，須恵器１点，鉄滓１点が出土した。出土した土師器は全てロクロを用いないで整形され，器種には甕・杯が見られる。図99－１は，Ｐ３のℓ１から出土した丸底の土師器杯で，胎土に石英と海綿骨針を含む。外面にはヨコナデとヘラケズリが施され，体部は器面が摩滅して調整が明瞭ではない。体部外面には積上げ痕が認められ，内面は黒色処理されている。２はℓ１から出土した丸底の土師器杯で，胎土に石英・雲母・海綿骨針を含む。外面には

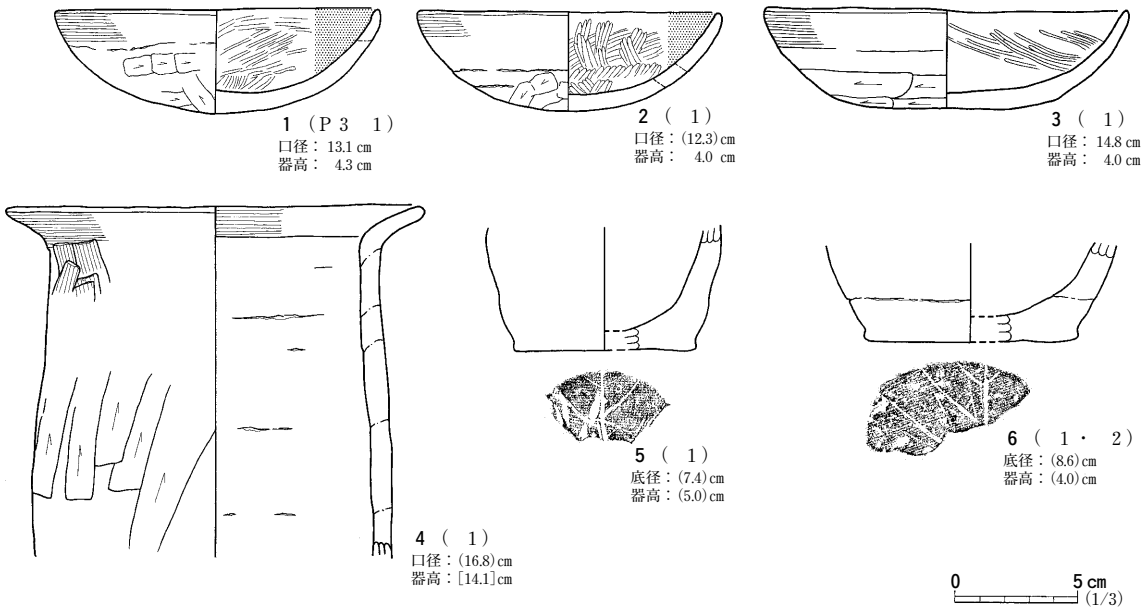


図99　61号住居跡出土遺物

ヨコナデとヘラケズリが施される。体部下半には幅１㎝程の粘土紐の積上げ痕が見られ，あまり調整を加えていないようである。内面は黒色処理とヘラミガキが施されている。３はℓ１から出土した丸底の土師器杯で，胎土に長石・石英・酸化鉄粒・海綿骨針を含む。外面にはヨコナデを施した後，体部下半から底部にかけてヘラケズリを施している。内面にはナデ後ヘラミガキを施す。器面内外面は磨耗が目立ち調整が不明瞭である。４はℓ１から出土した土師器甕で，胎土に雲母・長石・酸化鉄柱・海綿骨針を含む。体部はわずかに内彎しながら立ち上がり，口縁部が強く外反する。外面は口縁部をヨコナデ後，体部上位にヘラナデを施している。体部下半外面にはヘラケズリが施されている。体部外面には器面が剝離している箇所が認められ，付け足した粘土が剝がれた痕跡と考えられる。内面は口縁部にヨコナデを施している。体部内面は器面が摩滅して調整が不明であるが，幅13～35㎝程を測る粘土紐の積上げ痕が認められる。５・６は土師器甕の底部破片で，底面に木葉痕が認められる。５はℓ１から出土し，胎土に石英と長石と海綿骨針を含む。器面が摩滅して内外面共に調整が明瞭ではないが，外面にヘラケズリの痕跡が認められる。６はℓ１・２から出土し，胎土に石英と海綿骨針を含む。器面が内外面共に摩滅しているため調整が不明であるが，粘土紐を積んだ積上げ痕が認められる。

ま　と　め

本遺構は，一辺約４ｍ前後の隅丸方形の竪穴住居跡である。２本主柱で，北壁中央部にカマドが設けられている。時期は出土土器より国分寺下層式期，奈良時代と考えられる。　（坂　田）

62号住居跡　ＳＩ62

遺　　構（図100，写真94・99・100）

本遺構は南区中央部の平坦地に存在し，Ｚ54～55グリッドに位置する。本遺構の東に61号住居跡，

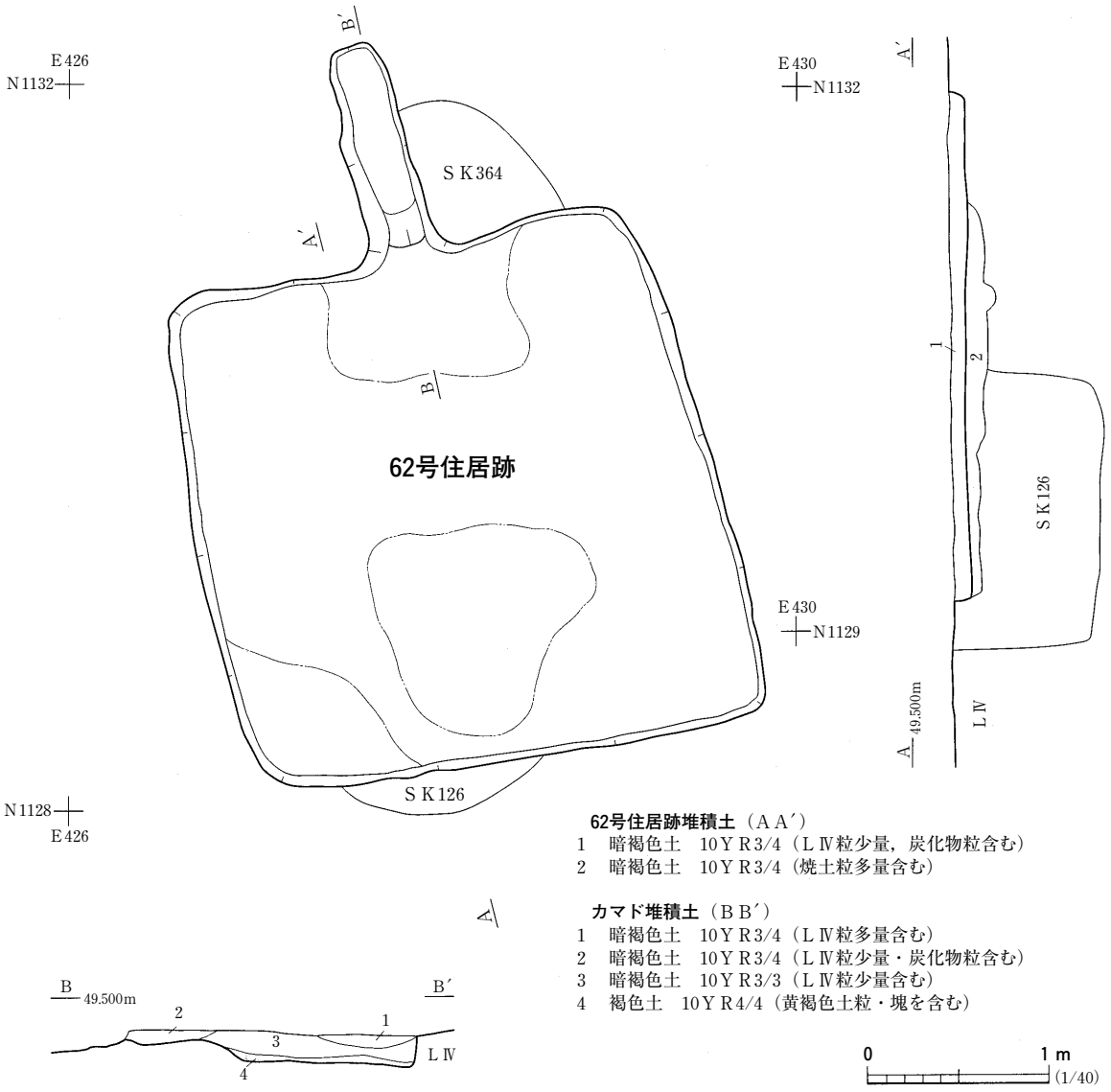


図100　62号住居跡

西に63号住居跡が隣接する。ＳＫ126・364と重複し，本遺構の方が新しい。黄褐色土（ＬⅣ）上面で隅丸方形の落ち込みを検出し，この落ち込みに合わせて南北方向に土層観察用のベルトを設置した。遺構内堆積土は２層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒と炭化物粒を含む暗褐土で，自然堆積と考えられる。ℓ２は焼土粒を含む暗褐色土で，貼床土である。

平面形は一辺2.5～2.9ｍの隅丸方形で，東西壁方向を主軸方位とすると，真北から西側に15°傾く。壁高は５～11㎝で，周壁は70°程の角度で直線的に立ち上がる。黄褐色土を凹凸に掘り込んで暗褐色土を貼り，ほぼ平坦な床面を造り出している。貼床土の厚さは12～18㎝で，貼床の範囲はカマド周辺を除いてほぼ全面に及ぶ。床面には中央部から南壁付近に踏み締まりが認められた。住居内施設はカマド１基を検出した。

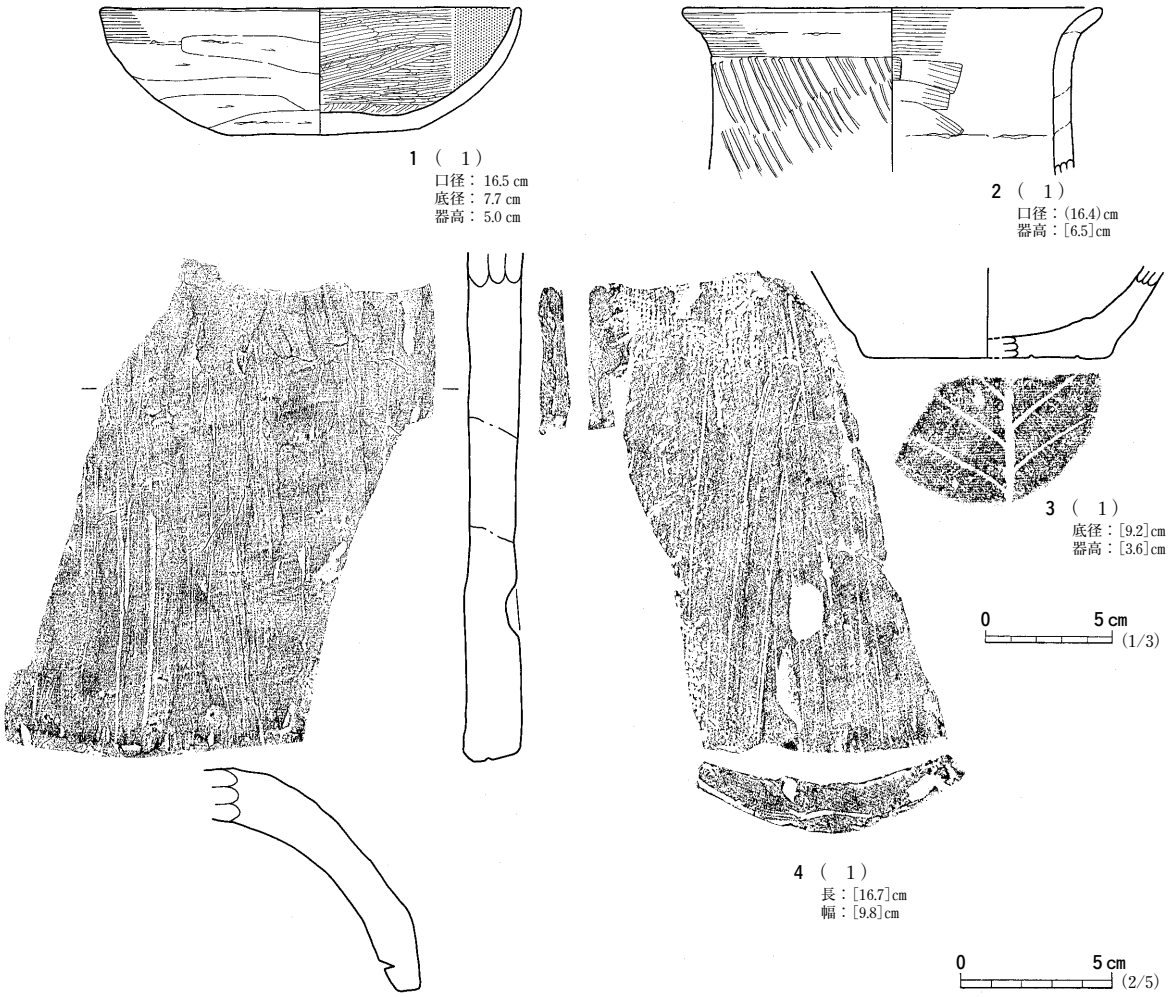


図101　62号住居跡出土遺物

カマドは北壁中央部に設けられ、主軸方位は住居跡の主軸方位と一致する。煙道のみ遺存し，長さは120cm，幅は31～36cm，確認面からの深さは16～21cmを測る。煙出ピットは無く，底面は南から北に向かって緩やかに傾斜し，煙道先端部で最も深くなる。カマド内堆積土は４層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を含む暗褐色土で，煙道先端部に堆積している。ℓ２は黄褐色土粒と炭化物粒を含む暗褐色土で，燃焼部に堆積している。ℓ３は黄褐色土粒を含む暗褐色土で，煙道全体に堆積している。ℓ４は黄褐色土粒と黄褐色土塊を含む褐色土で，煙道の底面全体に２～４cmの厚さでほぼ均一に堆積している。堆積状況より，ℓ１・２は自然堆積土，ℓ３・４は人為堆積土と推測される。

遺　　物（図101，写真221・228）

出土遺物は縄文土器片５点，土師器片34点，瓦１点，剝片１点である。遺物の多くはℓ１から出土している。出土した土師器は全てロクロを用いないで整形されており，器種には甕，杯が見られる。図101－１はℓ１から出土した平底の土師器杯で，胎土に長石・酸化鉄粒，海綿骨針を含む。外面は口縁部にヨコナデを施した後，体部にヘラケズリを施している。内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。２はℓ１から出土した土師器甕で，胎土に石英・雲母を含む。体部上半は内傾しながら立ち上がり，口縁部が強く外反する。外面には体部上半に幅広のハケメで調整した後，

口縁部にヨコナデを施している。内面には口縁部にヨコナデ，体部上半にヘラナデを施している。口縁部外面と体部内面に粘土紐の積上げ痕が認められる。３はℓ１から出土した土師器甕で，胎土に長石・石英・海綿骨針・雲母を含む。器面が摩滅し単位が分からないが，内外面共にナデが施されているようである。底面に木葉痕，底部内面にタール状の付着物が認められる。４はℓ１上層から出土した丸瓦の破片で，胎土に雲母・長石を含む。粘土紐造りで，色調は凹凸面共に橙色である。凸面はタタキ目をヘラケズリで磨り消している。凹面は布目痕をヘラケズリで磨り消している。凹面には指頭痕が認められる。

ま　と　め

本遺構は，一辺2.5～2.9ｍの隅丸方形の竪穴住居跡である。北壁中央部にカマドを設け，柱穴は確認できなかった。時期は，出土土器より奈良時代と考えられる。　（坂　田）

63号住居跡　ＳＩ63

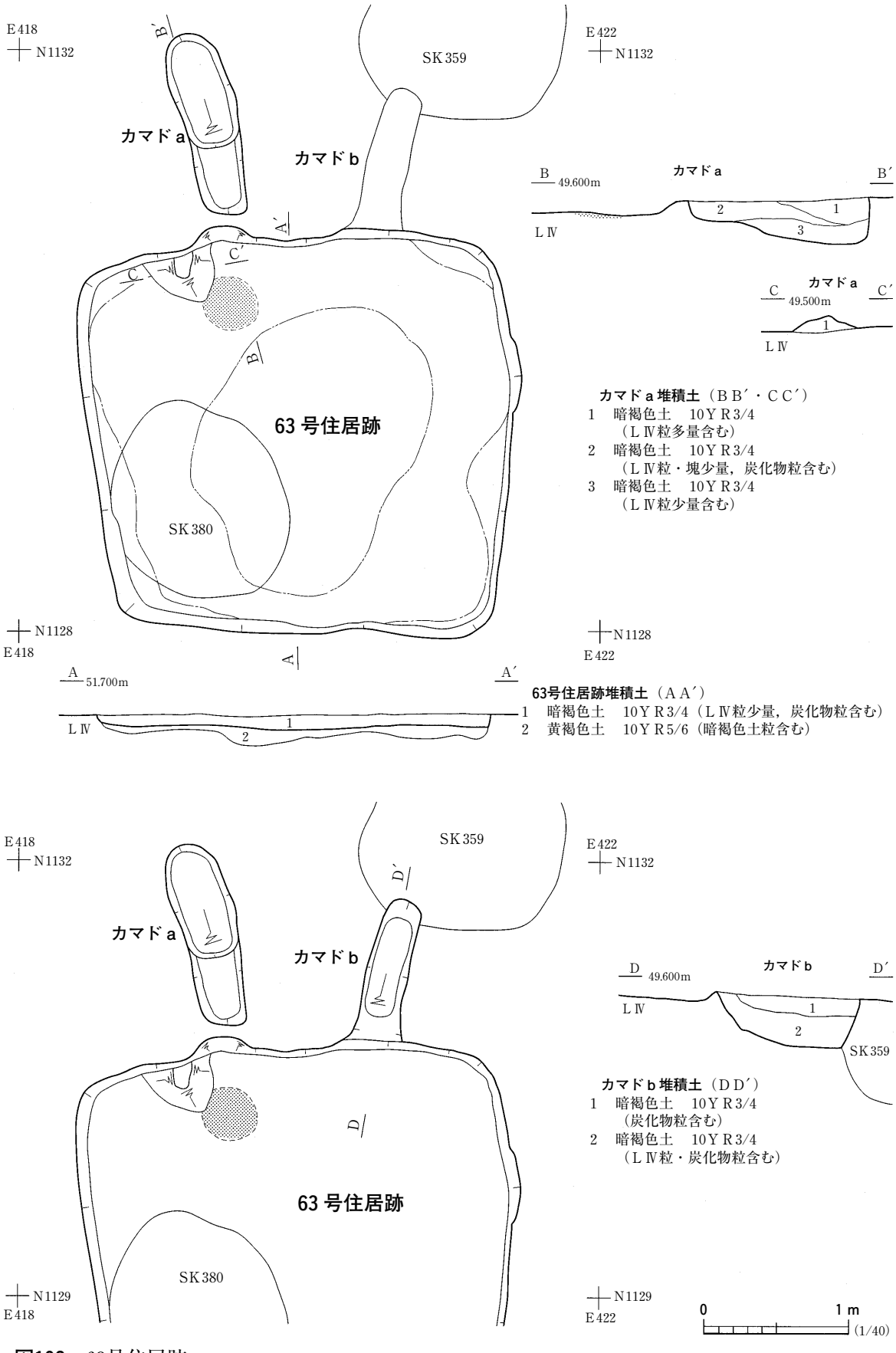
遺　　構（図102，写真94・101・102）

本遺構は南区中央部の平坦地に存在し，Ｘ54～55・Ｙ54～55グリッドに位置する。本遺構の東に61・62号住居跡が隣接する。ＳＫ359・380と重複し，本遺構の方が新しい。黄褐色土（ＬⅣ）上面で隅丸台形の落ち込みを検出し，この落ち込みに合わせて土層観察用のベルトを南北方向に設置した。遺構内堆積土は２層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒と炭化物粒を含む暗褐色土で，自然堆積と考えられる。ℓ２は暗褐色土粒を含む黄褐色土で，貼床土である。

平面形は北辺が長い隅丸台形で，長辺1.5ｍ，短辺1.2ｍを測る。南北壁方向を主軸とすると，主軸方位はほぼ東西方向である。壁高は６～10㎝を測り，周壁は70°程の角度で直線的に立ち上がる。黄褐色土層を凹凸に掘り込み，暗褐色土を張って平坦な床面を造り出している。貼床は床面のほぼ全面に及び，厚さは３～12㎝を測る。床面の中央部には踏み締まりが認められる。

住居内施設としてカマド２基を検出した。カマドは北壁の東側と西側に設けられ，新旧関係が認められる。西側のカマド（カマドａ）には袖と焼面が認められ，東側のカマド（カマドｂ）には煙道のみ遺存するので，カマドｂが古く，カマドａが新しいと考えた。カマドａの主軸方位は東壁方向と大体一致する。またカマドｂの主軸方位も西壁方向とほぼ一致する。

カマドａは西側の片袖と煙道，燃焼部が遺存する。燃焼部には長径39㎝，短径36㎝の楕円形の焼土化範囲が認められ，その厚さは最大で１㎝に及ぶ。燃焼部の奥行きは52㎝で，長さ35㎝の袖が北壁から張り出している。断面の観察より，袖は貼床後，黒褐色土粒や炭化物を含む褐色土を積み上げて造り出したことがわかる。煙道は長さ188㎝，幅31～40㎝，検出面からの深さが13㎝を測り，煙出ピットに連結する。煙出ピットは長径81㎝，短径41㎝の楕円形で，検出面からの深さは31㎝を測る。カマド内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を含む暗褐色土で，ℓ２は黄褐色土粒，黄褐色土塊，炭化物粒を含む暗褐色土である。ℓ１・２は共に煙道の南側から流れ込むように堆積している。ℓ３は黄褐色土粒を含む暗褐色土で，煙出ピット底面に厚さ12㎝程堆積している。



カマドａ堆積土（ＢＢ´・ＣＣ´）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒多量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒・塊少量，炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒少量含む）

63号住居跡堆積土（ＡＡ´）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　黄褐色土　10ＹＲ5/6（暗褐色土粒含む）

カマドｂ堆積土（ＤＤ´）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）

図102　63号住居跡

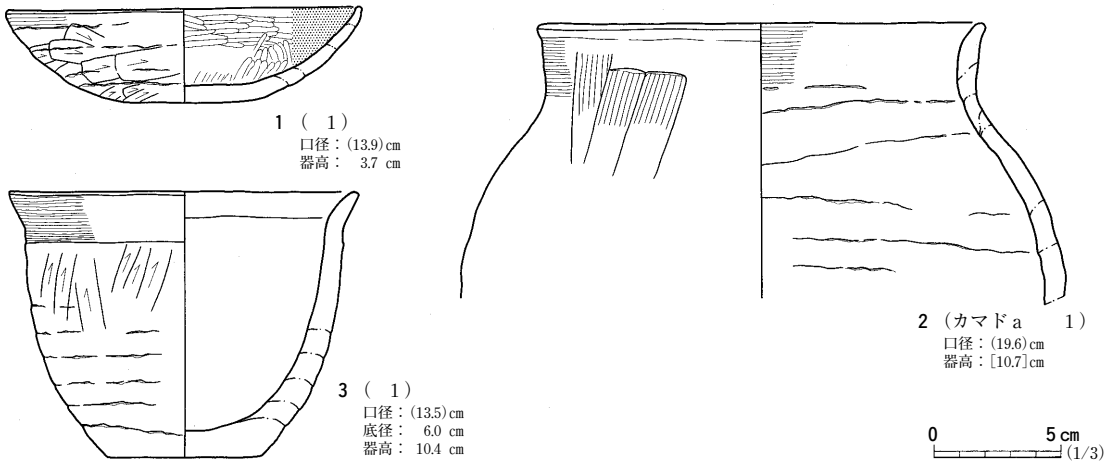


図103　63号住居跡出土遺物

堆積状況よりℓ１～３は自然堆積と考えられる。

カマドｂは煙道のみ遺存する。煙道は長さ98cm，幅29～42cm，検出面からの深さ34cmを測り，煙出ピットは認められない。煙道底面は南から北に向かってわずかに傾斜する。カマド内堆積土は２層に分けられる。ℓ１は炭化物粒を含む暗褐色土で，煙道北側に南側から流れ込むように堆積している。ℓ２は黄褐色土粒と炭化物粒を含む暗褐色土で，遺構内堆積土ℓ１に相当する。煙道の南側から流れ込むように堆積し，煙道の底面全体を覆う。ℓ１・２は共に南側から流れ込んで堆積したと推測される。そのためカマドｂは廃棄された後，燃焼部が壊され土が取り除かれた状態で，本遺構が廃棄されるまで放置されていたと考えられる。床面や掘形からピットは検出されていない。

遺　　物（図103，写真221）

遺物はℓ１から出土し，その内訳は縄文土器片９点，土師器片が42点，剝片１点である。土師器は全てロクロを用いないで整形され，器種には甕・杯が見られる。図103－１はℓ１から出土した丸底の土師器杯で，胎土に酸化鉄粒と海綿骨針を含む。外面には口縁部にヨコナデ，体部にヘラケズリが施される。体部外面には積上げ痕が認められ，その幅は５～10cmを測る。内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。２はカマドａ内堆積土ℓ１から出土した土師器甕で，胎土に石英・雲母・海綿骨針を含む。体部上位に最大径を持ち，口縁部が直立する器形である。外面は，口縁部から体部上半に向かってヘラナデが施される。内面は器面が摩滅しているため調整は不明である。積上げ痕が体部内面に認められる。３はℓ１から出土した土師器鉢で，胎土に雲母と海綿骨針を含む。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，体部上位でくびれ口縁部が外反する。外面は体部上半にヘラケズリ後，口縁部から体部上位にかけてヨコナデが施される。体部下半外面には積上げ痕が認められる。内面は器面が磨耗して調整は不明である。

ま　と　め

本遺構は1.2×1.5ｍの隅丸台形の竪穴住居跡である。柱穴はなく，カマドの作り替えが１回認められる。

時期は出土土器より国分寺下層式期，奈良時代と考えられる。　（坂　田）

64号住居跡　ＳＩ64

遺　　構（図104，写真94・103・104）

本遺構は南区の西寄りに位置し，Ｙ56・57，Ｚ56の３グリッドにまたがって位置する。本遺構は，基盤層であるＬⅣ層上面において円形状の広がりとして確認できた。本遺構は数基のグリッドピットにより壁面の一部を壊されていた。

本遺構の調査は円形の広がりのほぼ中央部から，東西方向に向って一条の土層観察用の帯を残し，掘り下げを開始した。その結果，本遺構の平面形は確認面での形状と異なり，東西長及び南北長共に4.7ｍほどの，丸味を帯びた四角形状として捉えられた。

周壁は底面から急な角度で立ち上がり，残存した壁の高さは，東側で底面から確認面まで約10㎝，西側でも22㎝ほどと比較的浅かった。底面はＬⅣ層を概ね平らに削り整え，その表面には非常に硬く締まった部位が散見された。

本遺構内の堆積土は３層に分かれ，いずれの堆積土も周囲からの流れ込み土により自然に埋没していったものと考えられる。

底面上を移植鏝で丁寧に削り進めると，15基の大小さまざまなピットの他に，壁際に沿って巡る溝跡，そして南壁中央部付近において10数個の石が土中から顔を出している長楕円形状の広がりも確認できた。

底面の調査は，長楕円形状の広がりの南北方向に土層観察帯を残し，その西半分の掘り下げから実施した。しばらく掘り下げると，長楕円形の広がりの北端からは，石に縁取られた内部に土器が１個体埋め込まれているのが確認できた。埋め込まれた土器の周囲の土は，熱により赤く変色していた。埋設された土器の南側に接した個所は掘りくぼめられていた。そのくぼみの南側法面には，長さ30㎝を越える板石が１つ固定されていた。さらに，くぼみの南側は半円形状に浅く平らに掘りくぼめられていた。

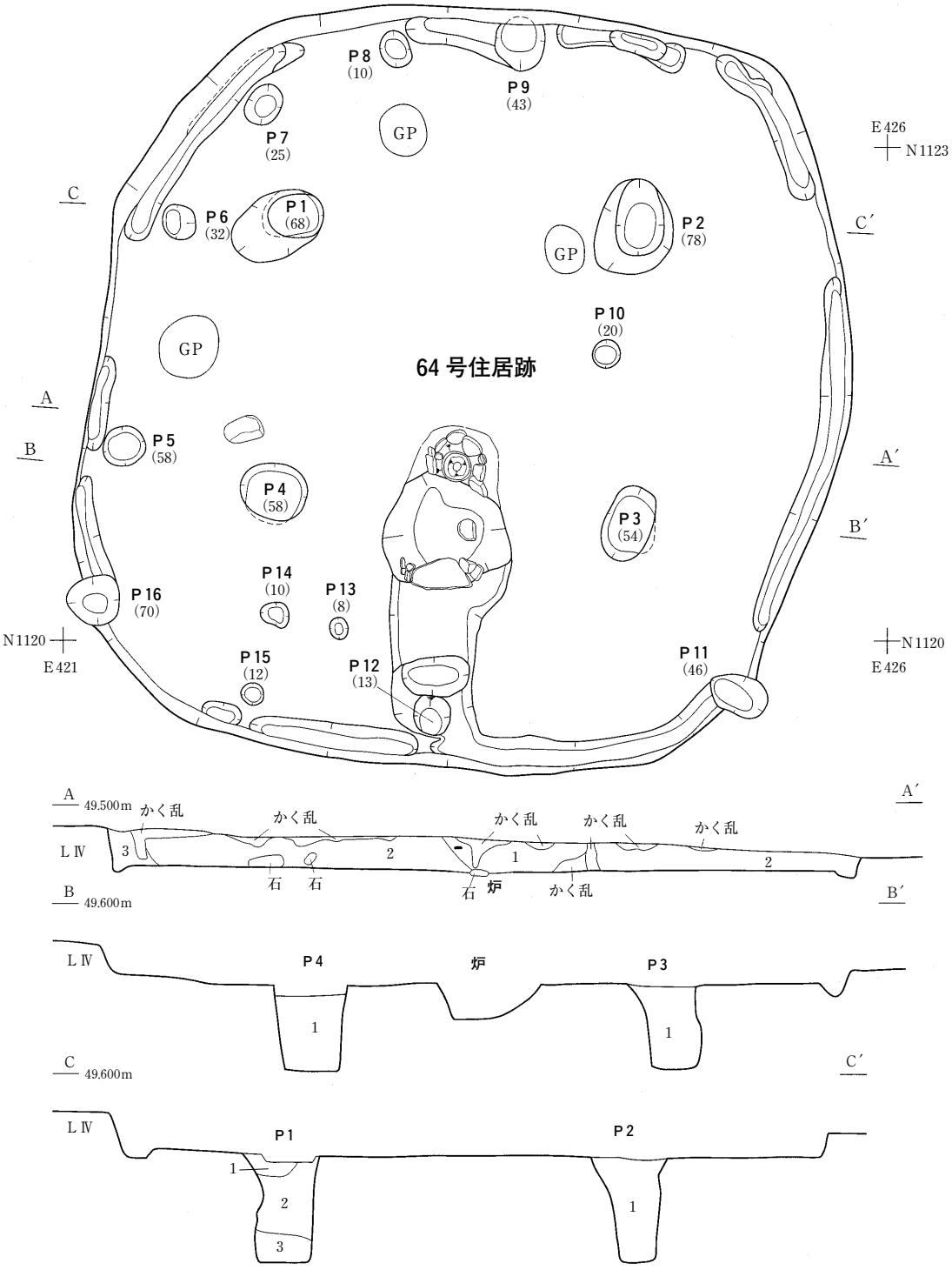
以上のことから，底面の長楕円形状の広がりは，炉跡である可能性が高くなった。この時点で，本遺構は住居跡，底面は床面として再認識した。

炉跡は底の抜けた土器を１個体埋め込んだ複式炉である。炉跡は北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部で構成されている。炉跡の平面形は南北に長い楕円形をなし，規模は土器埋設部先端から前庭部末端まで約188㎝を測る。その長軸方向は，ほぼ真北方向を指し示す。

炉跡内の堆積土は５層に分けられ，この内ℓ５は掘形埋土である。

炉跡を各部位別に見てみると，土器埋設部には，底の抜けた深鉢形土器を土中に埋め込み，その周囲に長さ20㎝前後の花崗岩の円礫を使って，半円形状の縁取りがされていた。床面から土器埋設部の底までの深さは24㎝ほどであった。土器埋設部を断ち割り，土層を観察したところ，埋設土器上半部から上層にかけての埋土は，土器内側からの２次的な加熱により焼土化していた。

石組部の遺存状況は悪く，石材が残っていたのは，南側の法面部分だけであった。南側に残って



64 号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）

Ｐ１堆積土（ＢＢ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒多量含む）

Ｐ２～４堆積土（ＢＢ′・ＣＣ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）

図104　64号住居跡（１）

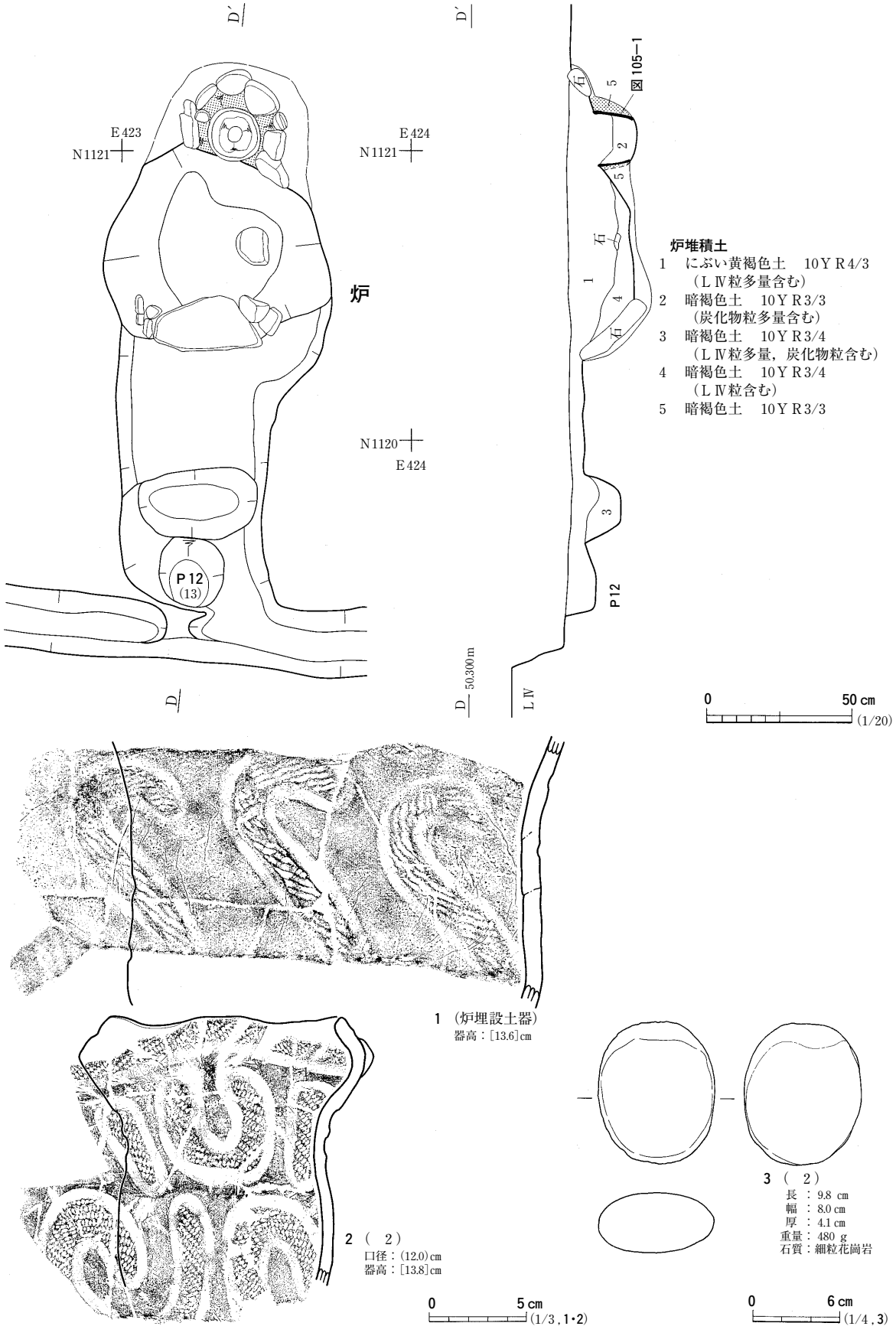


図105　64号住居跡（２）・出土遺物

いた石は長さ30cmを越える花崗岩の板石と，その周囲には10cm前後の板石が並べられていた。

前庭部は石組部の南縁に固定された板石から90cmほど延び連結している。前庭部の南端には楕円形状の浅いピット（Ｐ12）が掘り込まれている。前庭部の南縁は壁溝と接していた。

床面上からは炉跡の他に，16基のピットと，断続的に巡る壁溝が確認されている。

床面上から確認された16基のピットは，北西側に位置するピットから順に時計回りで，Ｐ１からＰ15まで番号を付けた。ピットの平面形は円形または楕円形をしている。それらの規模は大小２種類に大別された。まず，Ｐ１～４・11の５基は本住居跡内では比較的大きく，確認面での規模で直径（長径）が40～60cm，床面からの深さは43～78cmを測る。残りのピットの規模は，直径（長径）13～32cm，床面（前庭部底面）からの深さは８～30cmと，前者に比して直径，深さ共に小振りであった。

ピットの断面形状は，ほとんどのものが床面での直径に比して，底面直径が小さくなる箱形を基調としている。中にはＰ１・３のように床面での直径に比べ，底面直径の方が上回り袋状になっているものも存在する。

床面上のピットの配置を観察すると，炉跡を中心にして８基のピットが配置されている。床面中央部にあるＰ１～４の４基と，壁際に配置されるＰ９・11・16の３基，そして前庭部南端にあるＰ12，計８基のピットが炉跡の長軸線を境として東西に等しい相似形状に配置されることに気付く。また，Ｐ５～８・15の規模の小さいピットが，壁に沿うように並んでいる。

以上のピットの規模と配置を検討すると，炉跡を中心に床面中央部及び壁際に配置された８基のピット（Ｐ１～４・９・11・12・16）は，本住居跡の上屋を支えた柱穴であったと考えられる。

また，壁際に並んだ小さなピットは，柱材は細かったと思われるが，屋内で何らかの役目を果たした材が据えられていたと推測する。

確認できた柱穴の大半が掘形のみで，土層断面および柱穴の上面にて，柱痕跡が確認できたものは１基も無かった。

８基の柱穴間の距離をみてみると，Ｐ１北東縁～Ｐ９南西縁，Ｐ９南東縁～Ｐ２北西縁，Ｐ２南縁～Ｐ３北縁，Ｐ３南東縁～Ｐ11北東縁，Ｐ15北東縁～Ｐ６南西縁，Ｐ４北縁～Ｐ１南縁までの間隔は約0.9～1.4m，Ｐ１東縁～Ｐ２西縁，Ｐ３西縁～Ｐ４東縁，Ｐ11西縁～Ｐ12東縁，Ｐ12西縁～Ｐ16東縁までは約1.6～1.8m，Ｐ16西縁～Ｐ11東縁までは約3.6mを計測する。

壁溝は，ほぼまんべんなく壁際に沿って巡るのでは無く，最長で2.2mほどの溝跡が断続的に巡っていた。壁溝の幅はいずれも15cmほどで，深さは所々で異なり，最も深いところで床面から５cmほどであった。

遺　　物（図105，写真222・231）

出土した遺物の大多数は縄文土器片で，その他に磨石，鉄滓などが数点ずつ確認されている。出土した縄文土器片の大半は，住居跡内堆積土のℓ１・２中から採取されている。炉埋設土器以外の縄文土器片の多くは，深鉢形土器の胴部片（破片数にして約40点）であった。

出土した遺物の内，形状の分かるもの３点を図105に掲載した。

１は，炉に埋設されていた深鉢形土器である。胴部下半から底部にかけて，さらに口縁部は欠損していた。残存する胴部の最大直径は，胴部上方にて約23.4㎝を測る。黄褐色の土器の内外面は，熱を受け劣化し，所々剝離も目立っている。器形は垂直気味に立ち上がる胴部が上方にて緩やかに外反してゆく。１は外面の文様の特徴から，大木10式段階の土器と思われる。

２はＰ１上層及び床面から出土した深鉢形土器である。器形はキャリパー形に作られ，その底部付近は欠損している。口縁部は，小さく波打つように形作られている。外面文様を見ると，まず口縁部端に沿って沈線を一条引き，その上部に縄を転がしている。口縁部の一条の沈線下には，内部に縄文を加えた「Ｕ」，「Ｉ」，「ｎ」字状の図柄と，「Ｃ」字状の図柄を上下左右に描き連ねている。２は外面文様の特徴から，大木10式段階の土器と思われる。

３は住居跡内の覆土中から出土した花崗岩製の磨石である。石の表裏には滑らかな磨面が認められる。

ま　と　め

本遺構は丸味を帯びた四角形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡であった。

64号住居跡は１基の複式炉，８基の柱穴（Ｐ１～４・９・11・12・16），断続的に巡る壁溝を備えている。複式炉は，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となる。土器埋設部の周囲には円礫を半円形状に並べ縁取りがされている。

本住居跡の機能時期は，土器埋設部に埋め込まれた深鉢形土器の特徴から，大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

65号住居跡　ＳＩ65

遺　　構（図106・107，写真94・105～108）

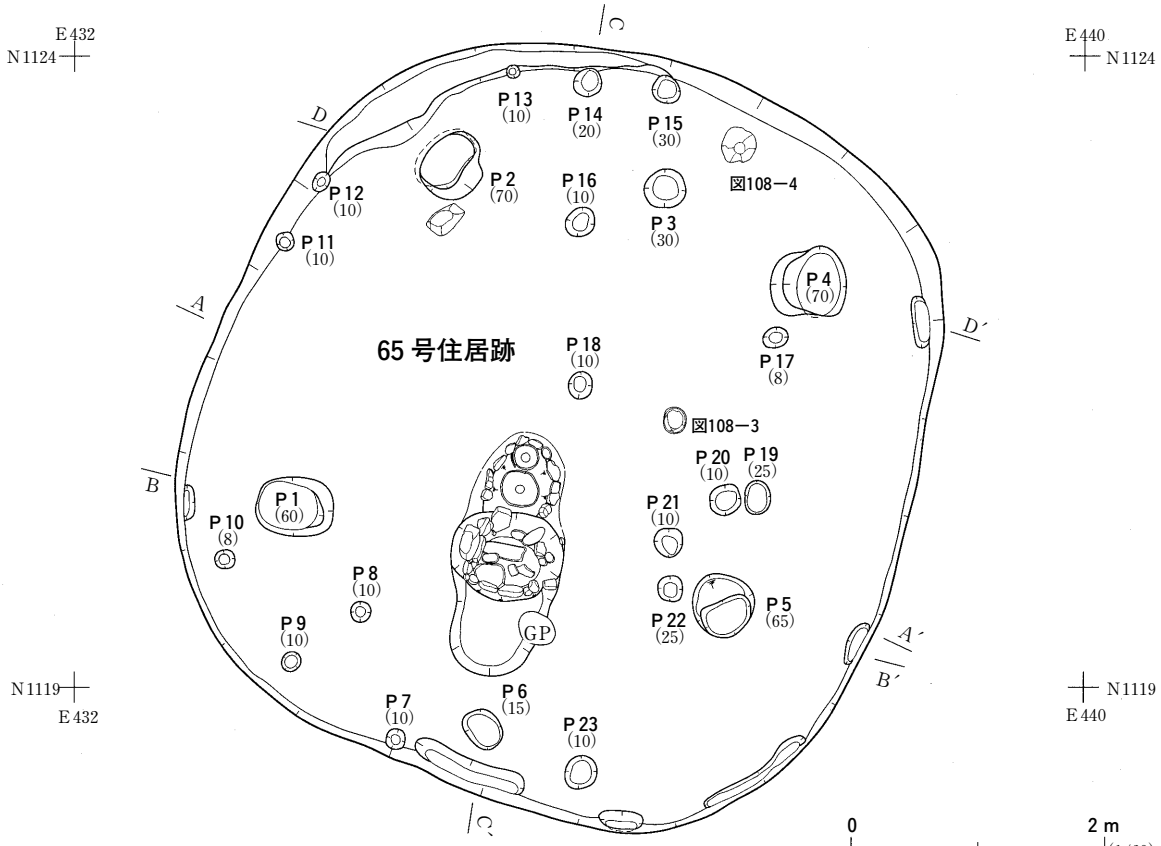
本遺構は南区の西寄りに位置し，ＡＡ56・57，ＡＢ56・57の４グリッドにまたがって位置する。本遺構から西へ１グリッド分進むと，ＳＩ64がある。本遺構は，基盤層であるＬⅣ層上面において暗褐色土の円形状の広がりとして確認された。

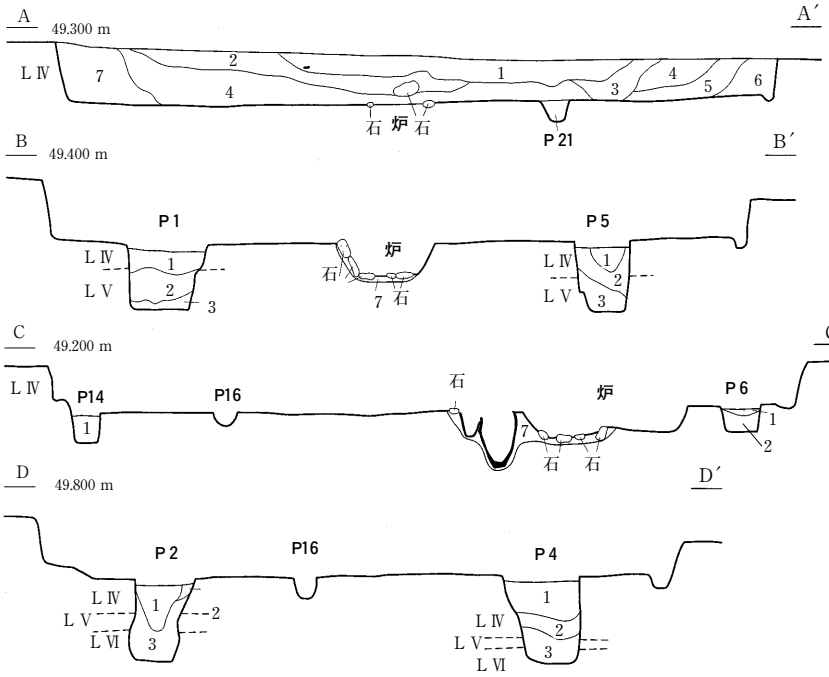
本遺構の調査は円形の広がりのほぼ中央部から，東西方向に向って一本の土層観察用の帯を残し掘り下げを開始した。その結果，本遺構の平面形は確認面での形状と異なり，長径６ｍ，短径5.7ｍほどの丸味を帯びた四角形状として捉えられた。

周壁は底面から垂直に近い角度で立ち上がり，残存した壁の高さは30～48㎝程度残っていた。底面はＬⅣ層を概ね平らに削り整えられ，北西隅において10㎝程度の低い段が形成されていた。底面は所々非常に硬く締まってもいる。

本遺構内の堆積土は７層に分かれ，いずれの堆積土も周囲からの流れ込み土により自然に埋没していったものと考えられる。

底面上を移植鏝で丁寧に削り進めると，23基の大小さまざまなピットの他に，壁際に沿って点在





65号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2
（ＬⅣ粒多量，ＬⅥ粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒少量，ＬⅥ粒・炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4
（ＬⅣ粒少量，ＬⅥ粒含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
（ＬⅣ粒少量含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒少量，ＬⅥ粒・炭化物粒含む）
7　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）

Ｐ１堆積土（ＢＢ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4
（ＬⅣ粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3

Ｐ５堆積土（ＢＢ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
（ＬⅣ粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒少量含む）

Ｐ２堆積土（ＤＤ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
（ＬⅣ粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒少量含む）

Ｐ４堆積土（ＤＤ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3

Ｐ６・14堆積土（ＣＣ′）
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　7.5ＹＲ4/4
（ＬⅣ粒少量含む）

図106　65号住居跡（１）

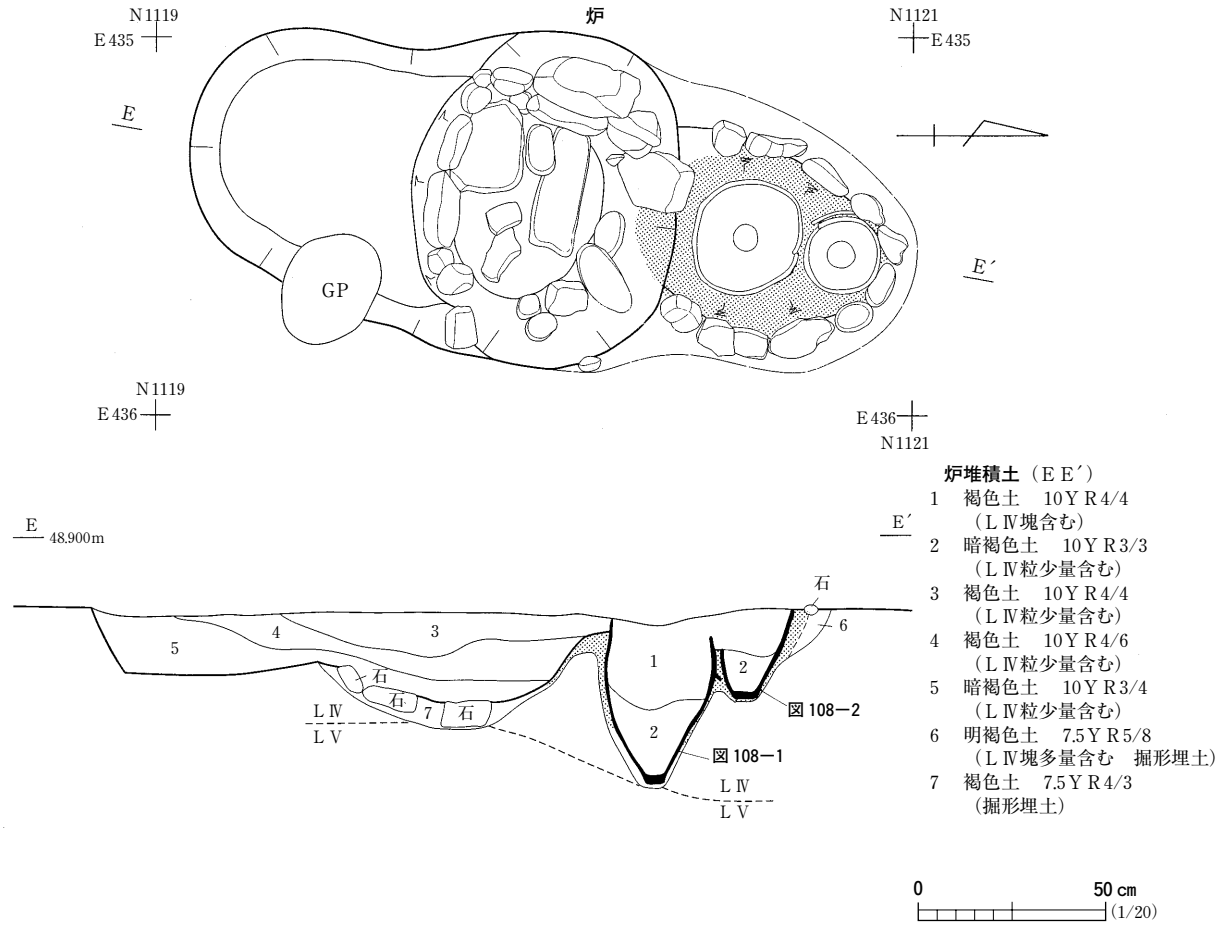


図107　65号住居跡（２）

する溝跡そして南壁中央部付近において数個の石が土中から顔を出している長楕円形状の広がりも確認できた。

底面の調査は，確認された長楕円形状の広がりの南北方向に土層観察帯を残し，東半分の掘り下げから実施した。しばらく掘り下げると，長楕円形の広がりの北端からは，石に縁取られた内部に大小２個体の土器が埋め込まれていた。土器の上部が顔を出している周囲の土は熱により赤く変色していた。埋設された土器の南側に接した個所は底の丸い皿状にくぼみ，その法面及び底面には長さ20cm前後の板石や円礫が固定されていた。さらに，南側には底面から15cmほどの深さで半円形状に掘りくぼめられた部分が接続している。

以上のことから，底面で確認された長楕円形状の広がりは炉跡である可能性が高くなった。この時点で，本遺構は住居跡，底面を床面として再認識できた。

炉跡は大きさの異なる２個体の土器を埋め込んだ複式炉で，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっていた。炉跡の平面形は南北に長い楕円形をなし，規模は土器埋設部先端から前庭部末端まで約190cmを測る。その長軸方向は真北に対し約10度ほど東に傾いている。本住居跡の東西壁の方向も炉跡の長軸方向に合わせて，真北に対し東に傾いていることにも気付く。

炉跡内の堆積土は７層に分けられ，この内ℓ６・７の２層は掘形埋土で，南側の埋設土器の周囲

の土は土器上半部から上層にかけて土器内側からの熱により赤く変色していた。

炉跡を各部位別にみてみる。土器埋設部は，大小２個体の深鉢形土器を南北に一列に並べ土中に埋め込んでいる。その周囲は長さ15cm前後の花崗岩の円礫を使って半円形状に縁取りもなされている。床面から土器埋設部の底までの深さは，北端に埋められている土器では約22cmほどで，そのすぐ南側に埋め込まれた土器は約43cmと深かった。南側に埋設された土器は，すぐ北側にある土器よりも大振りで，ほぼ完全な形のまま正置した状態で埋め込まれている。土器埋設部の断ち割り土層を観察したところ，南側の埋設土器の胴部上半から上層にかけての埋土が土器内側からの加熱により変色していた。

石組部の遺存状況は良好とは言えず，特に東側法面にあるはずの石材は所々抜けているのが分かる。用いられている石材は長さ30cmを越える花崗岩の板石や，20cm前後の円礫である。

半円形状の前庭部は，石組部の南縁に固定された石から南へ64cmほど延びている。前庭部の南端と南壁との間には80cmほどの間隔が空いていた。また，前庭部の底面は非常に硬く締まっていた。

床面からは炉跡の他に，大きさの異なった23基のピットと，壁際に点々と存在する壁溝が確認された。

床面上から確認された23基のピットは，南西側に位置するピットから順に時計回りでＰ１からＰ23まで番号を付けた。ピットの平面形は円形および楕円形をしている。それらの規模は大小２種類に大別された。まず，Ｐ１・２・４・５の４基は本住居跡内では比較的大きく，確認面での規模で長径が52～60cm，床面からの深さは65～90cmを測る。残りのピットの規模は長径16～35cm，床面からの深さは10～30cmと，前の４基に比して径，深さ共に小振りであった。

ピットの断面形状は，大半のもので確認面での直径に比して底径の方が小さくなる逆台形状を基調としている。なかにはＰ２のように，確認面の径に比べ底面径の方が上回った袋状になっているものも存在する。

ピットの配置を観察すると，床面中央部に配されたＰ１～６の６基のピットは炉跡を中心にして六角形状に配置される。Ｐ16～22以外の小ぶりなピットは壁に沿って並んでいることも分かる。

以上のようにピットの規模と配置を考慮すると，炉跡を中心に床面中央部に配置された６基のピットは，本住居跡の上屋を支えた柱穴であったと考えられる。確認できた柱穴の大半が掘形のみで，土層断面および柱穴の上面にて柱痕跡が確認できたものは一基も無かった。

７基の柱穴間の距離をみてみると，Ｐ２北東縁～Ｐ３南西縁，Ｐ３南東縁～Ｐ４北西縁までは0.9～1.3m，Ｐ５南西縁～Ｐ６北東縁，Ｐ６北西縁～Ｐ１南東縁までは1.8～1.9m，Ｐ１北縁～Ｐ２南縁，Ｐ４南縁～Ｐ５北縁までは2.1～2.5mを計測する。

壁溝は，まんべんなく壁際に沿って巡るわけでは無く，最長で約１mほどの溝が散在していた。壁溝の幅はいずれも20cmほどで，深さは最も深いところでも床面から５cmほどであった。

遺　　物（図108，写真222）

出土した遺物の大多数は縄文土器片で，その他に磨石，剝片など数点確認されている。出土した

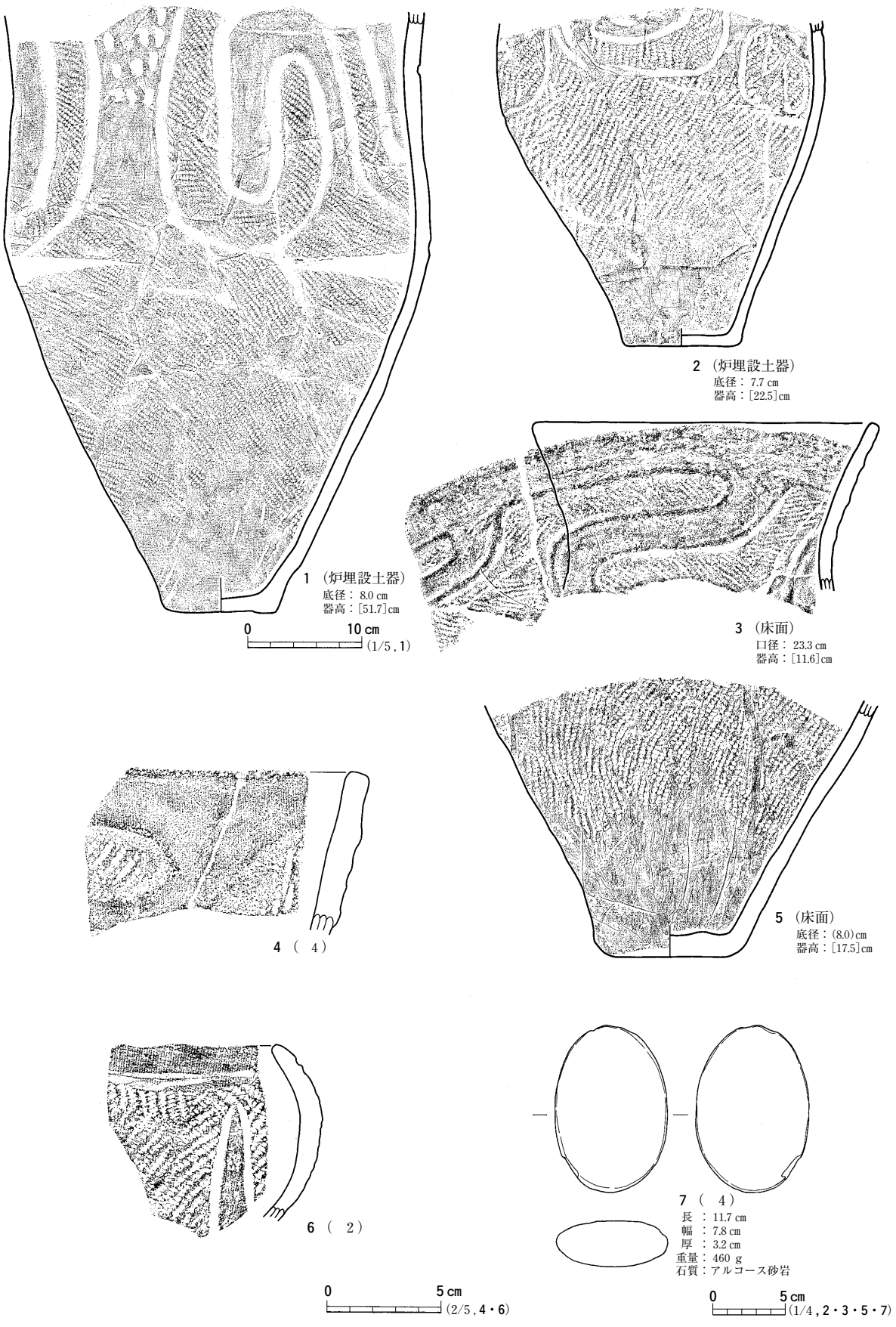


図108　65号住居跡出土遺物

遺物は，炉埋設土器以外に，床面上そして本住居跡内の堆積土ℓ１～４中から採取されている。住居跡内堆積土ℓ１～４の中でも，特に上層のℓ１中からの出土量が比較的多かった。住居跡内の覆土中から出土した縄文土器片のほとんどは深鉢形土器の胴部片（破片数にして約310点）で，それに対し口縁部及び底部片を合わせた数量は，胴部片の１割程度と少なかった。住居跡内の覆土中から出土した破片は，完全な形にまで復元できたものは無かった。

出土した縄文土器片の外面には，全面に縄文のみを施文したものが多数を占め，沈線または低い隆線で図柄を描いた大木10式段階の土器片も少なからず散見される。

図108中には，炉に埋設された土器，床面上，住居跡内覆土中から出土した遺物の内，形状の判明するものを計７点を示した。

１・２は土器埋設部に埋め込まれた２個体の土器である。１・２は共に文様の特徴から，大木10式段階の土器と考えられる。

１は土器埋設部の南側に埋め込まれた深鉢形土器である。その口縁部は既に欠損している。土器は内側からの加熱で内外の器面が赤褐色に発色し，胴部上半部の内面には所々火はぜした個所が認められる。器形をみると，胴部は底面から外傾し，胴部中程にてわずかに括れ，上方に向って内傾斜気味に立ち上がってゆく。最大胴部径は胴部中位にて約30㎝を計測する。外面の文様を見ると，胴部中位の括れを境にして，胴部の上下で文様が異なっている。波状沈線の上方の文様は，横倒れになった「Ｓ」字状の図柄を２つ描き，図柄内部には縄文を加えている。「Ｓ」字状の図柄間の隙間を埋めるように刺突文が施される。胴部上下の文様を明確に区分する沈線などは見られ無かった。

２は，１の埋設土器の北側に埋め込まれた深鉢形土器である。土器の胴部上半部から口縁部にかけて欠損し，１に比べ小振りであった。器形をみると，胴部は底面から外傾し，胴部中程にてわずかに内湾気味に立ち上がってゆく。外面の文様は，残存した胴部上方には内部に縄を転がした「ｎ」字状の図柄と，曲線を描く図柄が交互に描かれている。その図柄直下には，全面にＬＲの縄を転がしている。底部付近の縄文はケズリのような調整で消されている。

３・５は床面上から出土した深鉢形土器である。この内，３は外面の文様から，大木10式段階の土器と考えられる。

３は口縁部端を下にした状態で，床面中央部付近から出土している。３は全周した口縁部付近の土器である。外面には低い２本の隆線に挟まれた幅広の無文帯が蛇行している。無文帯の以外の隙間に縄文を加えている。

５は底面を上にして床面北隅から出土し，胴部下半から底面にかけて遺存する。残っていた胴部外面にはＲＬの縄を転がしている。

４・６は，本住居跡内覆土から出土した深鉢形土器の口縁部小破片である。５は外傾する口縁部片である。外面を見ると，口縁部直下に沈線で横長の楕円形を描き，内部に縄文を加えている。

６は内湾する口縁部片である。口縁部端に平行する細い沈線を一条描いた後，その下に縦方向に延びる２本の沈線を引いている。２本沈線の周囲全面には縄を転がしている。

７は本住居跡内の覆土中から出土した磨石である。アルコース砂岩製の石の表裏は，非常に滑らかで，光沢も見られる。

ま　と　め

本遺構は丸味を帯びた四角形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡であった。

65号住居跡は１基の複式炉と，６基の柱穴（Ｐ１～６）そして断続的に巡る壁溝を備えている。複式炉は，長楕円形状の平面形をもち，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっている。土器埋設部に２個体の深鉢形土器が埋め込まれた。２個体の埋設土器を伴った複式炉の事例は，ＳＩ110の炉跡でも認められた。

本住居跡の機能時期は，土器埋設部に埋め込まれた土器や床面上から出土した土器に見られた文様の特徴から，大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

67号住居跡　ＳＩ67

遺　　構（図109，写真109・110）

本遺構は南区南西寄り，Ｚ62・63グリッドにまたがっている。

本遺構は，基盤層であるＬⅣ層上面においてほぼ正方形の暗褐色土の広がりとして確認された。

本遺構の調査は，正方形の広がりの中央部から，東西南北に向って十字形の土層観察用の帯を残し掘り下げを実施した。その結果，本遺構の平面形は，四隅の丸い正方形状に掘り込まれていることが分かった。各辺の長さは東西長約5.8m，南北長約5.4mを計測する。本遺構の軸線方向を東壁のラインでほぼ真北を指し示す。

本遺構内の堆積土は４つに分層され，その内，３・４は貼土と認識した。貼土の厚さは最大で約15cmを計測する。貼土の施される範囲は，床面のほぼ全体に渡り，周壁の裾部が最も厚く貼土されていた。貼土の表面は，ほぼ平坦に整えられ，部分的に硬く締まったところも認められた。周囲の壁面は底面から緩やかな角度で立ち上がる。壁の高さは底面から確認面まで10cm前後と低かった。

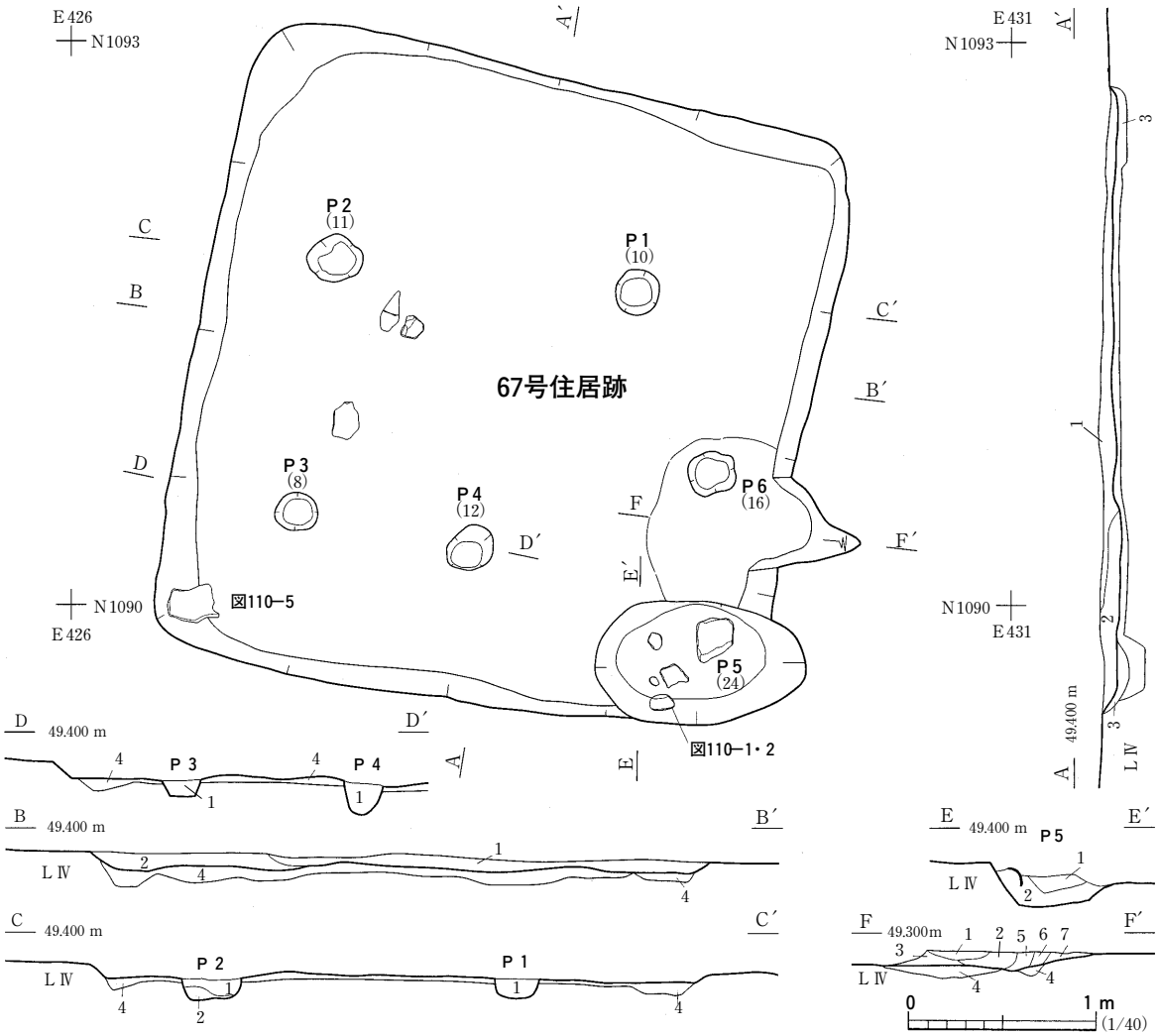
底面を移植鏝で丁寧に精査すると，底面から６基のピットと，東壁南側付近から東へと延びる低い張出し部分が１ヶ所存在するのを確認した。

以上の事実から，東壁南側にはカマドを設置されている可能性が高くなった。この時点で，本遺構は住居跡，底面は床面，そして貼土は貼床土として再認識することができた。

本住居跡内からは，カマド１基，６基のピットを確認した。

カマドは東壁のほぼ南寄りに位置している。カマドの調査は，東へ延びる張出し部の東西方向に，土層観察用の帯を残し，その南半分の掘り下げを実施した。その結果，燃焼部にはカマド袖も既になく，燃焼部底面と煙道部の一部のみであった。

燃焼部は，東壁裾から半円形状に約30cmほど張り出している。燃焼部底面は，床面から深さ10cmほどの浅い皿状の掘形を伴っていた。その北縁には，深さ16cmほどの小さなピット（Ｐ６）が１基掘り込まれている。また，煙道部は三角形状に張り出す燃焼部に連続して，煙道部の付け根部分が



67号住居跡堆積土（ＡＡ′・ＢＢ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（3～4㎝のＬⅣ塊含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ塊含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（3～10㎝のＬⅣ塊多量含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む　貼床土）

Ｐ１・２堆積土（ＣＣ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
2　黄褐色粘質土　10ＹＲ5/8

Ｐ３・４堆積土（ＤＤ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）

Ｐ５堆積土（ＥＥ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/6（焼土粒少量，炭化物粒含む）
2　褐色粘質土　7.5ＹＲ4/6（焼土粒・炭化物粒少量含む）

カマド堆積土（ＦＦ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（焼土粒・炭化物粒・3～4㎝のＬⅣ塊含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（焼土粒・炭化物粒多量含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（焼土粒・炭化物粒多量含む）
4　黄褐色土　10ＹＲ5/8（焼土粒・炭化物粒含む　掘形埋土）
5　褐色土　7.5ＹＲ4/6（焼土粒・炭化物粒多量含む）
6　黄褐色土　10ＹＲ5/8（焼土粒・炭化物粒含む）
7　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（焼土粒・炭化物粒含む）

図109　67号住居跡

東壁より約20㎝ほど連続している。

床面上を精査すると，カマドの他に，６基のピットを確認した。ピットの平面形は不整円形もしくは楕円形をなす。Ｐ５以外のピットの規模は長径20㎝前後，床面からの深さは８～16㎝を計測する。Ｐ５は南東隅に位置する楕円形のピットである。Ｐ５の規模は東西長115㎝，最大南北長65㎝，床面からの深さは24㎝を測る。

床面上のピットの配置を観察すると，Ｐ１～４の４基は，カマド燃焼部正面に台形状に配置されている。Ｐ１～４は，その規模と配置から判断して，本住居跡の上屋を支えた柱穴の可能性も考え

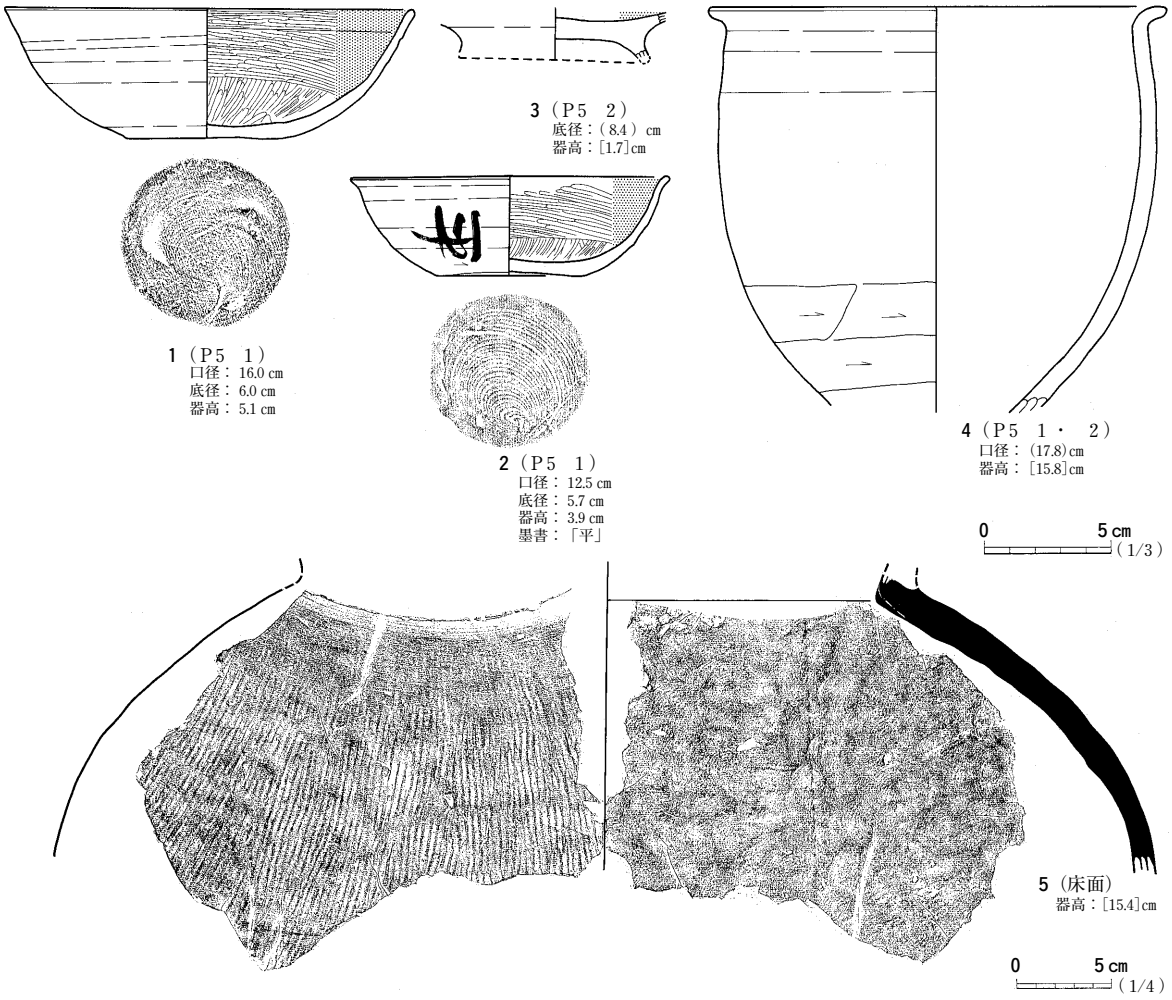


図110　67号住居跡出土遺物

られる。Ｐ５は，カマドに向かって右脇，住居跡の南東隅に位置し，堆積土中から少なからず土師器及び破片を出土することから，屋内に設けられた貯蔵穴と考えられる。また，カマド掘形の上面に位置するＰ６の役目は良く分からなかった。

遺　　物（図110，写真223）

遺物は，本住居跡内の堆積土ℓ１，床面及びＰ５内から，土師器，須恵器の破片が主に出土している。出土する土師器杯及び甕のほとんどは，回転台を用いて外面の調整が施されていた。出土遺物の内，形状の分かる土器及びその破片を図110中に５点掲載した。

１～４の土師器及び破片は，Ｐ５内堆積土より出土している。

１・２の２点の土師器杯は，２つの土器が直径の小さい杯２を内側にして重なり，Ｐ５南側の法面上方から滑り落ちたような状態で出土した。２つの土師器杯は，大きさと口縁部端の形状は異なるものの，内外面の調整はほぼ同じであった。

１・２の外面の調整は回転台を用いて施され，全面に横方向のナデを施した後，底部付近に回転ヘラケズリを施している。底面には，糸を使って回転台から切り離した際の痕跡がくっきりと残っている。また，２の杯の体部には「平」の字が墨で横書きされているのが確認できる。内面の調整

を見ると，１・２の杯共に全面に黒色処理が施され，さらに密にヘラミガキ調整も行なっている。両者の内面に施されたヘラミガキの手法は同じで，底面付近には放射状にミガキをした後，体部から口縁部端にかけて断続的に横方向のミガキを加えている。

３は高台付杯の底部片である。杯部はすべて失われ，高台の脚部端も削れていた。内面には黒色処理及び放射状のヘラミガキが施されている。

４は比較的小型の土師器甕の破片を図上で復元したものである。破片は口縁部から底部付近まで残っているものの，各部位の計測値は推定の域を出ない。器形をみると，胴部は下半から垂直気味に立ち上がり，口縁部は短く外反している。外面の調整は回転台を用い施され，口縁部から胴部上半まではナデを，胴部下半にはナデの後，ヘラケズリを行なっている。

床面からは，４・５片ほど同一個体と思われる須恵器大甕の破片が出土している。その内の１片，大甕の頸部から胴部上半にかけての破片を，図110－５として図示した。器面は内外とも青味がかった灰色に発色している。口縁部は，粘土で胴部と貼り付けられた部位からきれいに剝がれていた。調整を見ると，外面には頸部から胴部下半に向って平行にタタキ目を残し，内面には当て具表面の細い年輪がくっきりと器面に写し取られていた。

ま　と　め

本遺構は方形に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。

67号住居跡内には，１基のカマド，４基の柱穴そして１基の貯蔵穴を伴っていた。床は全面に貼床の処置が施されていた。

本住居跡の機能時期は，Ｐ５内から出土した土師器杯の特徴から，９世紀頃，平安時代の所産と考えられる。（阿　部）

68号住居跡　ＳＩ68

遺　　構（図111，写真111・112）

本遺構は南区南西端，Ｙ63・64，Ｚ63・34グリッドにまたがって位置する。

本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において，北側に張り出しを伴う三角形状の広がりとして確認された。本遺構の大半は重機による表土剝ぎの時点で既に失われていた。

本遺構の調査は，堆積土がわずかに残っていた北側に，土層観察用の帯を一条残し，さらに北側の張り出し部分の長軸方向にも土層観察帯を残しつつ掘り下げを実施した。

本遺構の大半は，西側の調査区の外へと続いていた。周壁はほとんど残っておらず，北壁側において，底面からわずかに数㎝ほどの高さを確認できる程度であった。

本遺構内の堆積土は１層である。本遺構の底面は，凹凸の無い貼土の範囲として確認することができた。

張り出し部は北壁の東寄りに設けられ，壁から張り出し部先端まで最長で約125㎝を計る。張り出した部分の調査は，長軸方向で半分に分割し掘り下げを実施した。その結果，北東側の張り出し部

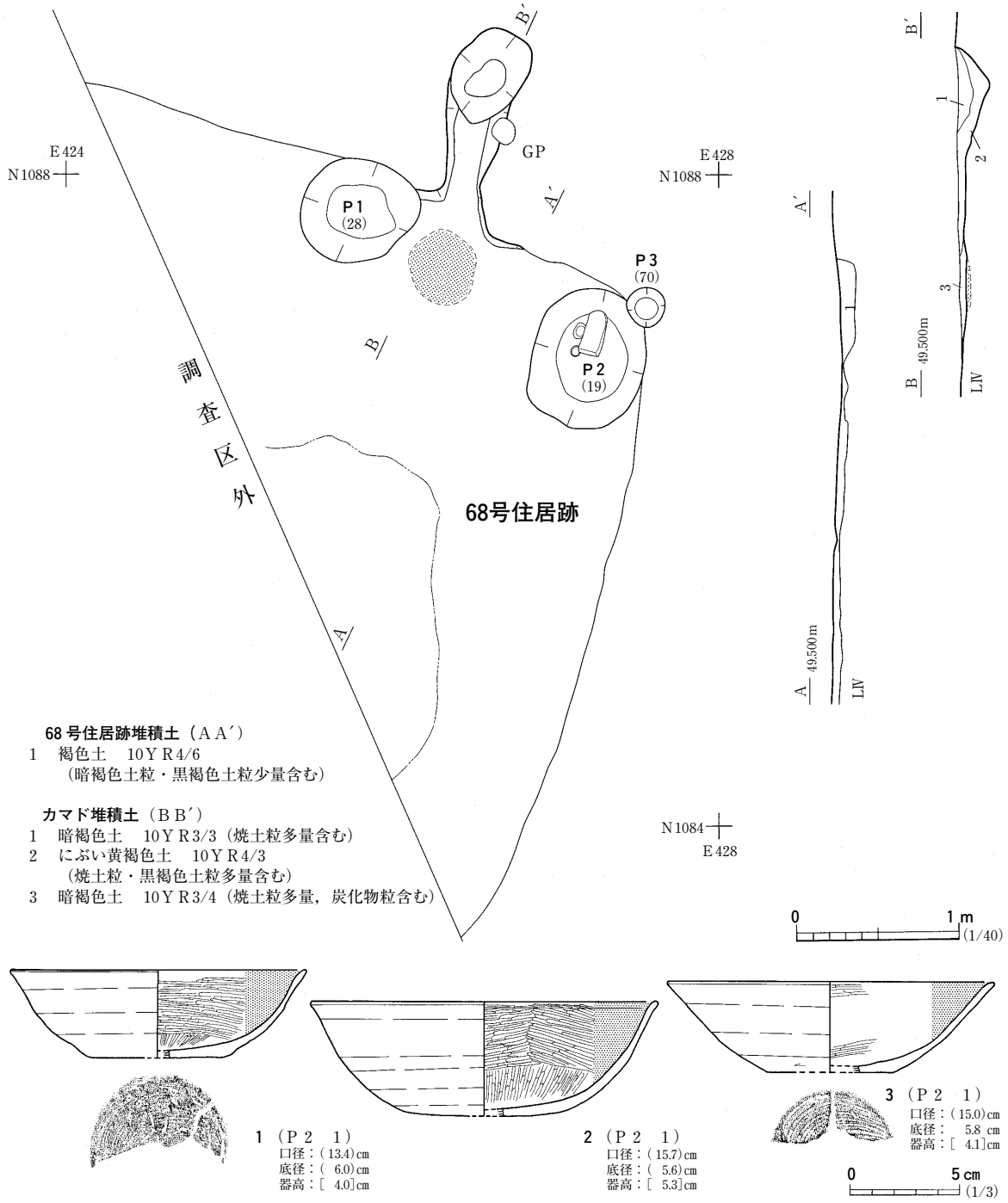


図111　68号住居跡・出土遺物

の付け根部分を10cmほど掘ったところで底面を確認し，底面上からは赤く焼土化した範囲を確認した。

この事実から，北側で見つかった張出し部がカマド煙道である可能性が高くなった。この時点で，本遺構は住居跡として，底面は床面，張出し部分はカマド煙道部，そして貼土は貼床として再認識できた。

本住居跡の床面は，ＬⅣを掘りくぼめ全体的に貼床を施した後，上面を平らに整えたものと思われる。図111中の平面図には，床面と推定される範囲を細い実線として表現した。床面と思われた範

囲の規模は，東側で約5.2ｍを計測する。

本遺構の軸線方向を東側に残存する貼床の延長としてみると，真北に対しわずかに東へ傾いていた。

貼床土の厚さは，確認面から最も深いところで約15㎝を計測する。

屋内からは，北壁に沿ってカマド１基，そして３基のピットを確認した。

カマドは，北壁東寄りに位置していた。確認できたカマドの施設は煙道部のみで，燃焼部は袖も天井も既に失われていた。燃焼部底面と思われる個所からは，被熱変色した部位が認められた。

煙道の底面は，壁面と接した付け根部分から先端に向ってほぼ水平に続き，先端にて楕円形状に一段深くなっている。

ピットはＰ１～３の大小３基を確認した。ピットの平面形は楕円形を基調としている。ピットの規模は長径約25～88㎝，床面ないし確認面からの深さは19～70㎝を計測する。３基のピットは，カマド煙道を挟んで左右に位置している。

この内，最も深いピットは，確認面での規模が最も小さいＰ３だった。また，カマドに向って右脇，住居跡の北東隅に位置するＰ２内からは，土師器片，カマド構築材と思われる赤く被熱変色した粘土塊を１つ確認した。

３基のピットの位置及び深さを考慮すると，カマド正面の床面に位置する柱穴は想定できなかった。この内，Ｐ２はその位置そして大きさから，カマドに伴う貯蔵穴の可能性が示唆される。

遺　　物（図111）

出土遺物は，主にＰ２内堆積土から３個体分の土師器杯片のみを採取している。

杯の破片をみると，回転台を用い外面の調整を施すものばかりであった。３個体とも，大きさの異なる杯の破片で，図化を試みたものの各部位の計測値は推定の域を出ない。

図111－１～３の器形を見ると，１・２は底部からやや丸味を持たせながら口縁部まで外傾するのに対し，３は底面から口縁部まで直線的に外傾している。外面調整をみると，３だけロクロを使ったナデ調整をした後，底面付近に回転ヘラケズリ調整を加えている。１・３の底面には，回転台から切り離した際の糸切り痕が明瞭に残っていた。３個体の土器内面は，黒色処理され真っ黒になっているのに対し，外面の色は３つとも所々赤身を帯びた乳白色をしていた。

ま　と　め

本遺構は方形に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。本住居跡の周壁及び床面の一部は既に消失し，住居跡の大半は西側の調査区の外へと続いていた。

47号住居跡内には，１基のカマドの他，２基のピット，１基の貯蔵穴を伴っていた。床面には貼床を施していた。

本住居跡の機能時期は，Ｐ２より出土した土師器杯の破片に見られる特徴から，９世紀頃，平安時代と考えられる。　　（阿　部）

69号住居跡　ＳＩ69

遺　　構（図112，写真113・114）

本遺構は南区の北西端，Ｘ・Ｙ46の２グリッドにまたがって位置する。本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において半円形状の暗褐色土の広がりとして確認された。本遺構の周囲には，数基のグリッドピットの他，東西に走る１条の溝跡（ＳＤ06）が南接している。

本遺構の精査は，確認された半円形状の広がりの中央部に，南北方向の土層観察帯を１条残し，帯の東西側の掘り下げから実施した。半円形の掘りくぼめられた規模は，北端の直径にして約5.2mを計測する。底面は，確認面より20cmほど掘り下げたところで確認され，ＬⅣ層を平らに削り整えていた。周壁の高さは，西側で底面から約28cm，東及び南側では10cm前後と比較的浅かった。

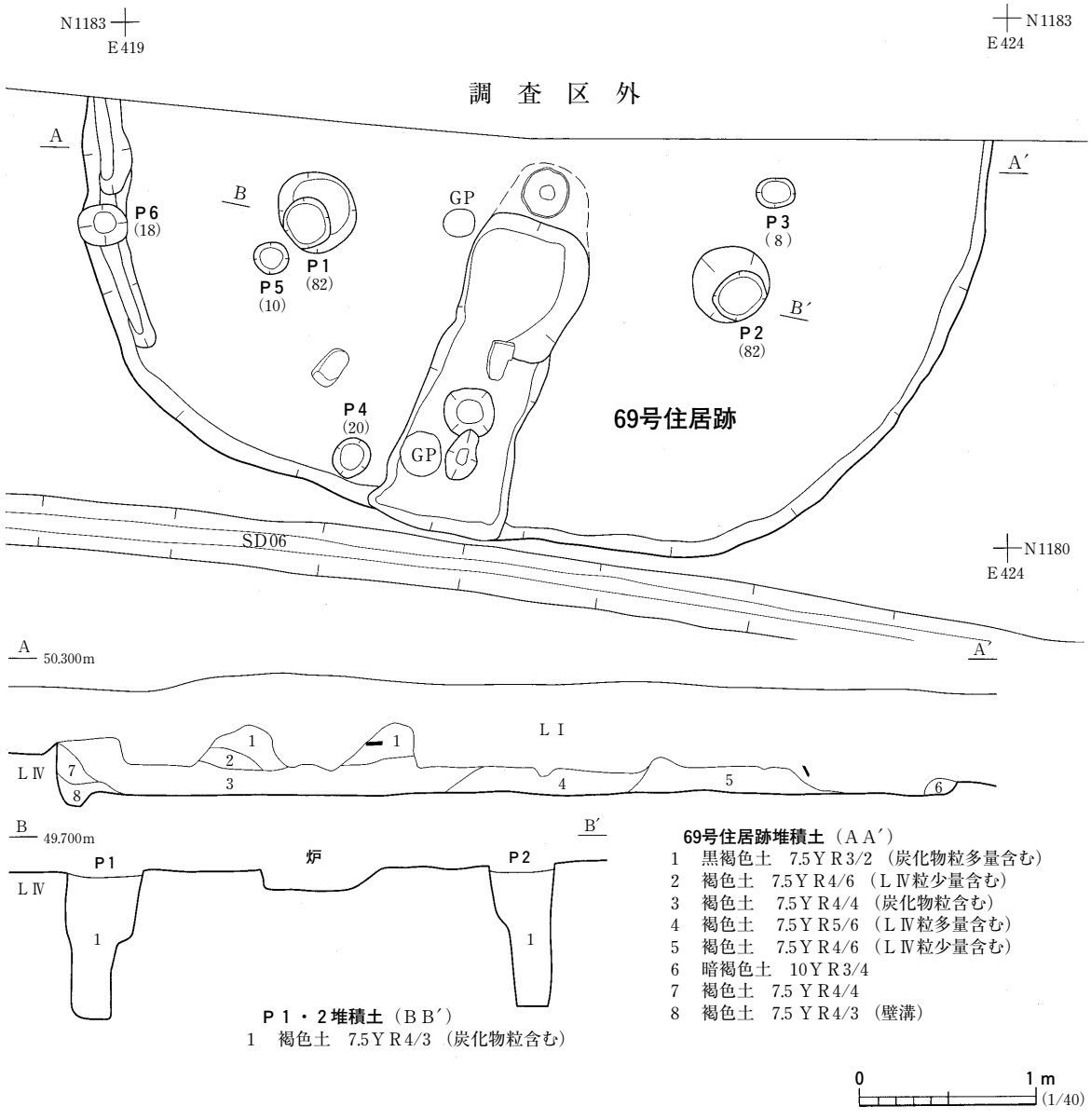
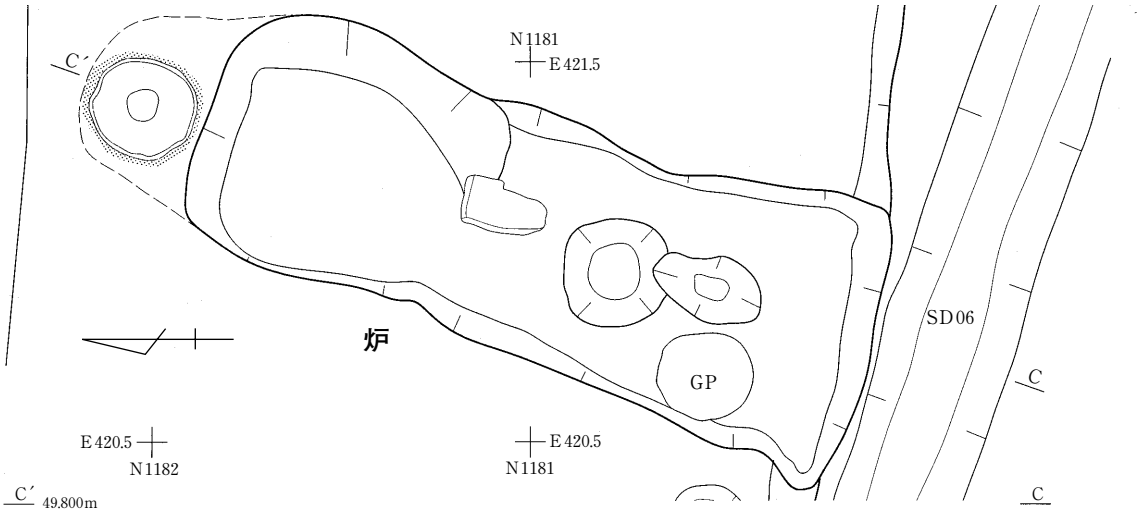
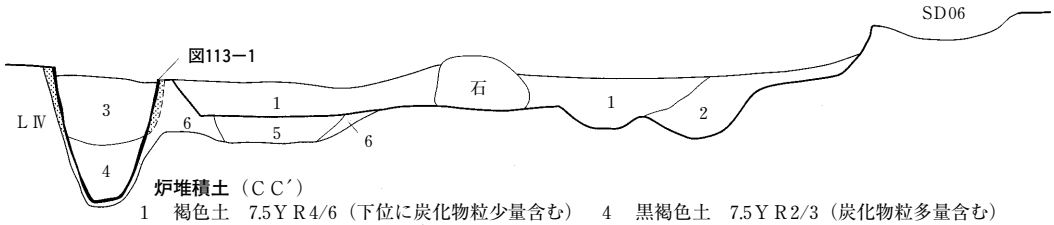


図112　69号住居跡（１）





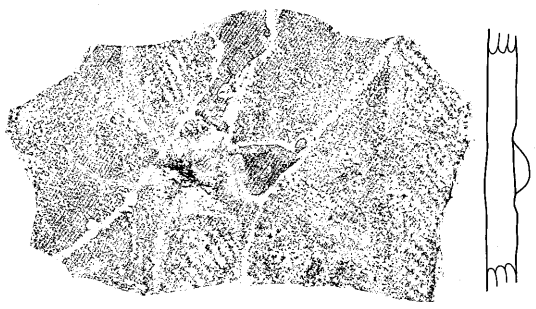
炉堆積土（ＣＣ´）

1　褐色土　7.5ＹＲ4/6（下位に炭化物粒少量含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3（炭化物粒含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4
4　黒褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒多量含む）
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（炭化物粒少量含む　掘形埋土）
6　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む　掘形埋土）

0　50 cm (1/20)

1　（炉埋設土器）
口径：（29.6）cm
底径：　7.2　cm
器高：　39.7　cm

0　10 cm (1/4)



2　（床面）

0　5 cm (2/5)

図113　69号住居跡（２）・出土遺物

底面上からは数基のピットの他，断続的に巡る溝跡，底面中央部では南北に長い楕円形状の広がりを１ヶ所確認した。また，底面の南端寄りからは１基の土坑（ＳＫ900）も確認された。

底面上の精査は，楕円形状の広がりに南北方向の土層観察帯を残し，その西半分を掘り下げることから開始した。しばらく掘り下げると，北端から大振りの土器が，底を下にして１個体埋め込まれていた。底面上にわずかに露出した土器の周囲の土は，熱により赤く変色していた。土器の埋設された部分に接する南側はさらに一段浅く下がっていた。くぼみ南側の法面には長さ25cmほどの板石が残っていた。くぼみの底面付近には微細な炭化物粒が薄く堆積していたのを確認している。浅いくぼみの南側に連結して，台形状の張り出しが南側壁まで延びていた。

以上のことから，底面上の楕円形状の広がりは，その遺存状況から北側に土器１個体を埋め込んだ複式炉と推測された。同時に，本遺構は住居跡，底面は床面として再認識することができた。

炉跡は北から土器埋設部，石組部，そして前庭部の三部構成であったと判断される。確認できた石組部内の石は，既に抜き取られていた。炉跡の規模は土器埋設部先端から前庭部末端と思われる南壁まで約215cmを測り，長軸方向は真北に対し約20°東に傾いていた。炉跡内の堆積土は６層に分けられ，この内ℓ５・６は掘形埋土であった。

確認された６基のピットは，西側からＰ１からＰ６まで番号を振った。６基のピットの平面形は円形ないし楕円形で，規模は長径22～45cm，確認面からの深さは８～82cmを計測し，中でもＰ１・２が最も深かった。

炉跡の周囲に散在する６基のピットの配置を観察すると，炉跡を挟んでほぼ同一距離に，同規模の２基のピット（Ｐ１・２）が配置されていることに気付く。Ｐ１・２は，その配置と規模から判断して，本住居跡の主柱穴と考えられる。本住居跡の北半分は，本年度の調査区の外に延び不明ではあるが，おそらく北側にもＰ１・２と共に上屋を支えた柱穴が１基以上存在するものと考える。炉跡を挟んで東西に対峙したＰ１・２の間隔をみると，Ｐ１東端～Ｐ２西端まで約１ｍを測る。

床面西側には断続的ではあるが壁溝が巡っていることを確認した。壁溝の規模は幅18cm，床面からの深さは約８cmを計測する。

遺　　物（図113）

遺物は，炉の土器埋設部内，床面上から出土している。出土点数は他の住居跡と比べて極端に少なかった。全体の形状が分かる土器は，炉埋設土器の１点だけであった。出土遺物の内，２点を図113に示した。

１は，炉に埋設されていた深鉢形土器である。ほぼ完全な形で残っていたものの，土器の内外面は，熱を受け赤褐色に発色している。器形を見ると，胴部は底面から上方に向って外傾し，胴部中程で軽く括れた後，口縁部に向って緩やかに外傾してゆく。外面の文様を見ると，胴部中程に巡る一条の波状沈線を境に，胴部下半と上半で施される文様が異なっていた。胴部上半の文様は，横倒しになった「Ｓ」字状の図柄を２つ描き，その内部に縄を転がしている。胴部下半の全面にはＲＬの縄を転がしている。１は外面の文様の特徴から，大木10式段階の土器と思われる。

２は床面上から出土した深鉢形土器の胴部片である。破片の中央部には丸い瘤状の突起を貼り付けている。さらに，外面には沈線で縦長の曲線を描き，内部に縄文を加えている。

ま　と　め

本遺構は円形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。本住居跡の北半分は本年度調査区の外へと延びていることから，現状では半円形として捉えられた。

69号住居跡内には，１基の複式炉と，２基の柱穴（確認できた数が２基）を備えている。複式炉は本住居跡の南端中央に設けられ，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部から構成される。

本住居跡の機能時期は，炉跡に埋設された土器の特徴から，大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

70号住居跡　ＳＩ70

遺　　構（図114，写真115・116）

本遺構は南区北側の平坦地に存在し，ＡＡ47～48・ＡＡ47～48グリッドに位置する。本遺構の北西に48号住居跡が隣接する。77号住居跡・ＳＫ781と重複し，本遺構の方が新しい。黄褐色土（ＬⅣ）上面で方形の落ち込みを検出し，その落ち込みに合わせて土層観察用のベルトを東西方向に設置した。遺構の西部と北東部はかく乱で大きく失われている。遺構内堆積土は５層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を含む暗褐色土で，遺構の中央部に広く堆積している。ℓ２は炭化物粒を含む黒褐色土で，東壁から流れ込むように堆積している。ℓ３は暗褐色土で，床面の殆どを直接覆う。ℓ４は黄褐色土粒と炭化物粒を含む極暗褐色土で，東壁際に断面三角形状に流れ込むように堆積している。ℓ５は黄褐色土粒と黒褐色土粒を含むにぶい黄褐色土で，貼床土である。ℓ５を除き，人為的に埋め戻された痕跡が認められないので，ℓ１～４は自然に流れ込んだ土と推測される。

本遺構の平面形は方形あるいは長方形と推定され，南北長は約4.5ｍを測る。東壁方向を住居跡の主軸方位とすると，真北から10°程東側に傾く。壁高は15～49㎝を測り，周壁は70°程度の角度で直線的に立ち上がる。床面は黄褐色土を掘り込んで形成される。床面中央付近とカマド付近を残して凹凸に深く掘られ，暗褐色土（ℓ５）を貼ってほぼ平らに造り出している。床面の中央部に踏み締まりが認められた。

住居内施設はカマド１基と壁溝が検出された。カマドは北壁に設けられ，カマドと住居跡の主軸方位は一致する。このカマドは，床面検出時には燃焼部に黄褐色土粒・焼土粒・黒褐色土粒を含む褐色土で貼床されていた。そのため本遺構が最期に機能した時期には，このカマドは壊され埋められていたと推測される。壁溝は東壁際にのみ検出した。幅は24～40㎝，深さは８～14㎝を測る。壁溝内には黄褐色土を含む暗褐色土が堆積しており，廃棄時には壁溝は埋められた状態であったと推測される。ピットは床面から４基，床下から２基を検出したが，位置関係と規模から確実に本住居跡に伴うと考えられるピットが無かったため，重複する77号住居跡に伴うピットと考えた。

カマドは煙道と燃焼部の中心と考えられる焼土化範囲が遺存する。燃焼部の奥行きは14㎝を測り，

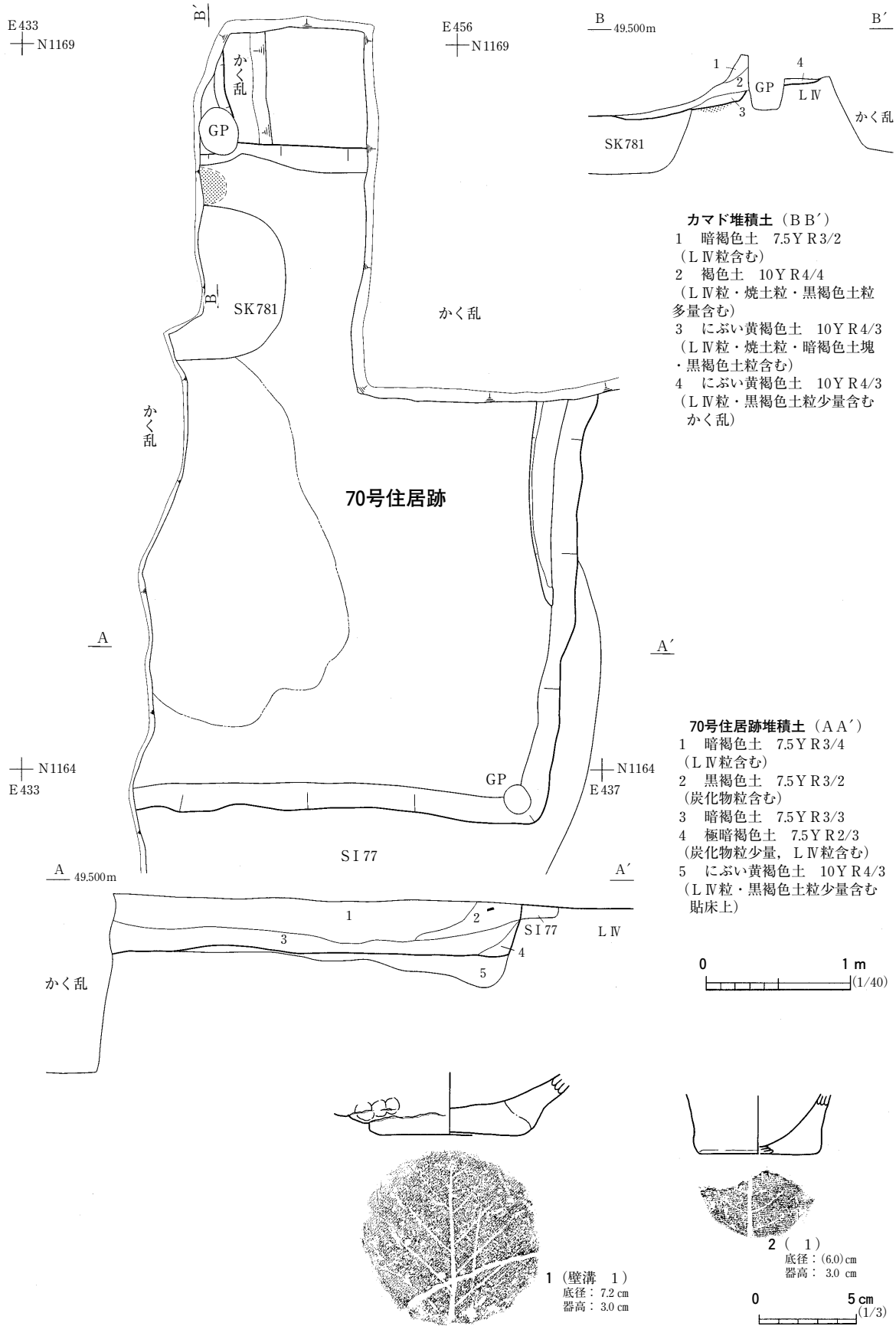


図114　70号住居跡・出土遺物

焼土化範囲の平面形は直径21cmの円形で，厚さは最大２cmに及ぶ。煙道はその殆どをグリッドピットとかく乱で失っており，煙道の底面が一部確認できるのみである。煙道には天井崩落土と推測されるにぶい黄褐色土が堆積している。

遺　　物（図114）

遺物は土師器片69点，縄文土器片64点，須恵器片２点，石器類１点が出土した。土師器は全てロクロを使わずに調整されていて，器種には甕と杯と甑が見られる。図114－１はℓ１と壁溝内から出土した土師器甕の底部破片で，胎土に長石・雲母・海綿骨針を含む。器面は内外面共に磨耗して調整は不明である。体部下半外面に積上げ痕と指オサエの痕跡が認められる。底面には木葉痕がある。２はℓ１から出土した小型の土師器甕の底部破片で，胎土に長石・石英・酸化鉄粒を含む。器面は内外面共に摩滅していて調整は不明である。底面には木葉痕が認められる。本住居跡から出土した縄文土器は，重複する77号住居跡を壊して構築する際に混入したと考えられる。

ま　と　め

本遺構はかく乱により西半部を大きく失っているため全容は不明であるが，一辺約4.5mの方形あるいは長方形の竪穴住居跡と推測される。カマドの作り替えが認められ，古いカマドは作り替えの際に壊され，貼床されている。時期は出土土器から国分寺下層式期，奈良時代と考えられる。

（坂　田）

71号住居跡　ＳＩ71

遺　　構（図115・116，写真５・117・118）

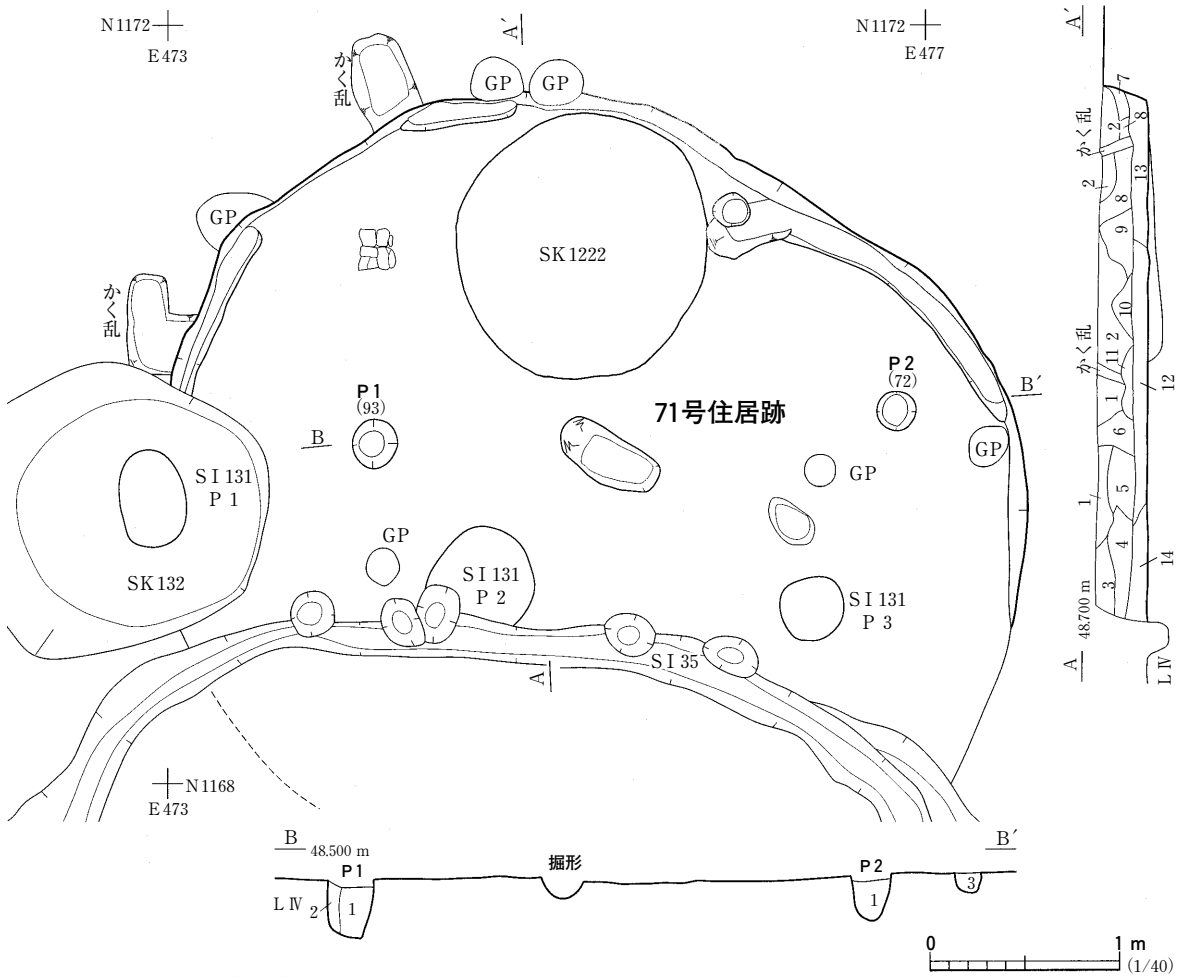
調査区北東部のＡＪ46・47グリッドに位置する竪穴住居跡で，検出層位はＬⅣである。周辺には31～35・38・39・131号住居跡が，近接または重複していた。本住居跡の場所は，調査区のなかでも住居跡が重複しているところである。

住居跡の検出は，２軒の住居跡が重複していることを確認したことによる。住居跡の新旧関係は，同じような土色なため平面形の段階では把握ができなかった。そのために，２軒の住居跡を同時に５cmほど掘り下げたところ，ようやく住居跡の平面形を把握することができた。その結果，２軒の住居跡のうち新しい方を35号住居跡とし，古い方を71号住居跡とした。本住居跡は南半部を35号住居跡によって掘り込まれ欠損していた。北半分しか残っていない平面形から復元すると，隅丸方形であったのだろう。

他に重複する遺構は131号住居跡と132・1222号土坑である。これらの新旧関係は，本住居跡の床面から1222号土坑を検出したので土坑が古い。132号土坑は，本住居跡の平面形を確認したところで，土坑の平面形を把握できたので土坑が新しいと判断した。

住居跡の規模は，南北が現状で2.9m，東西が4.6mであった。周壁は北壁の遺存状態が良く，最も高いところで22cmであった。

堆積土は14層に区分した。各層の堆積状況をみると，ℓ１～11とℓ12～14では異なっていること



71号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒，炭化物粒多量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅣ粒含む）
4　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅣ塊含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
6　灰黄褐色土　10ＹＲ5/2（ＬⅣ粒含む）
7　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ塊含む）
8　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
9　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
10　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物粒多量含む）
11　褐色土　10ＹＲ4/4（焼土粒多量含む）
12　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（焼土塊，炭化物粒多量含む）
13　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
14　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）

Ｐ１堆積土（ＢＢ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）

Ｐ２堆積土（ＢＢ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）

図115　71号住居跡（１）

が観察できた。ℓ１～11はブロック状に区分できたことから，人為的に埋め戻されたのだろう。ℓ12～14は炭化物を多く含み，上面が平坦に整えられているようである。

住居施設は炉，主柱穴が２基，壁溝などである。主柱穴を検出したのが２基しかないが，本来は３・４基あったと考えている。主柱穴からは，いずれも柱痕を確認していない。各主柱穴の平面形は円形で，径は22～26cm，深さが72～83cmである。

炉は住居跡の北側から検出した。掘形の状態で検出したため，当時使用された状態では残っていなかった。掘形の平面形は隅丸方形で，側壁の大半は熱を受け赤色に変化していた。規模は長軸が57cm，深さ15cmである。

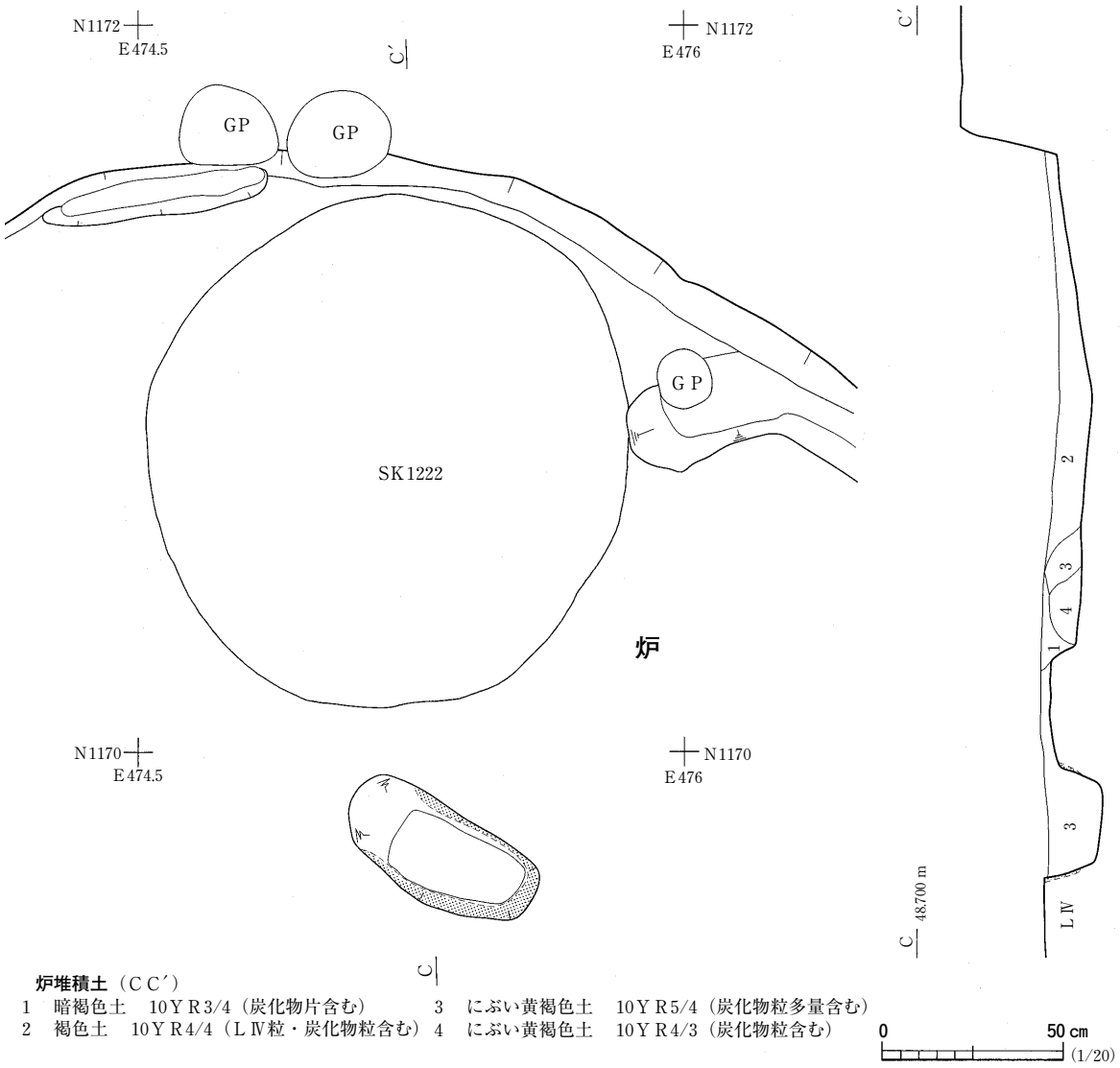


図116　71号住居跡（２）

遺　　物（図117，写真223）

住居跡からは縄文土器片が199点出土した。図117－１は深鉢の口縁部で，口唇部の外面に斜縄文が施され，沈線で区画されたなかに斜縄文を充填している。図117－２はミニチュア土器で，両耳の壺を模したものであろう。

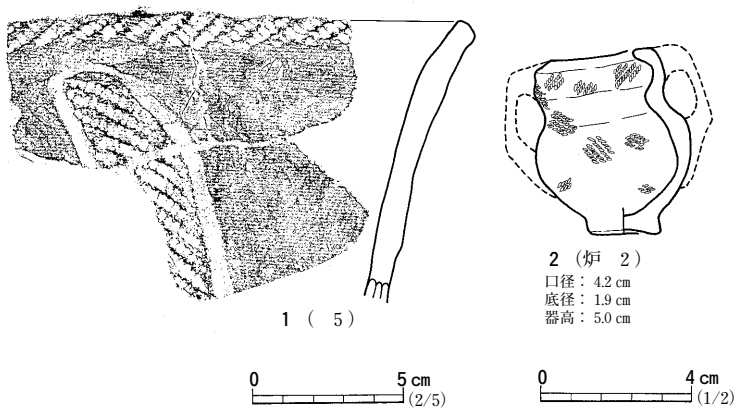


図117　71号住居跡出土遺物

ま　と　め

本住居跡は35号住居跡によって掘り込まれているため，平面形は不詳である。また，炉は掘形のみの検出であるため，炉の構造も未詳である。時期は出土遺物からは明確に判断することができないが，縄文時代中期後葉から末葉にあた

るものと考えている。　（吉　野）

73号住居跡　ＳＩ73

遺　　構（図118・119，写真119・120）

本遺構は南区中央部の平坦地に存在し，ＡＡ54～55グリッドに位置する。北東に62・63号住居跡が隣接する。61号住居跡・ＳＫ379・410と重複し，61号住居跡の方が新しく，ＳＫ379・410の方が古い。黄褐色土（ＬⅣ）上面で長方形の落ち込みを検出し，これにあわせて南北方向に土層観察用

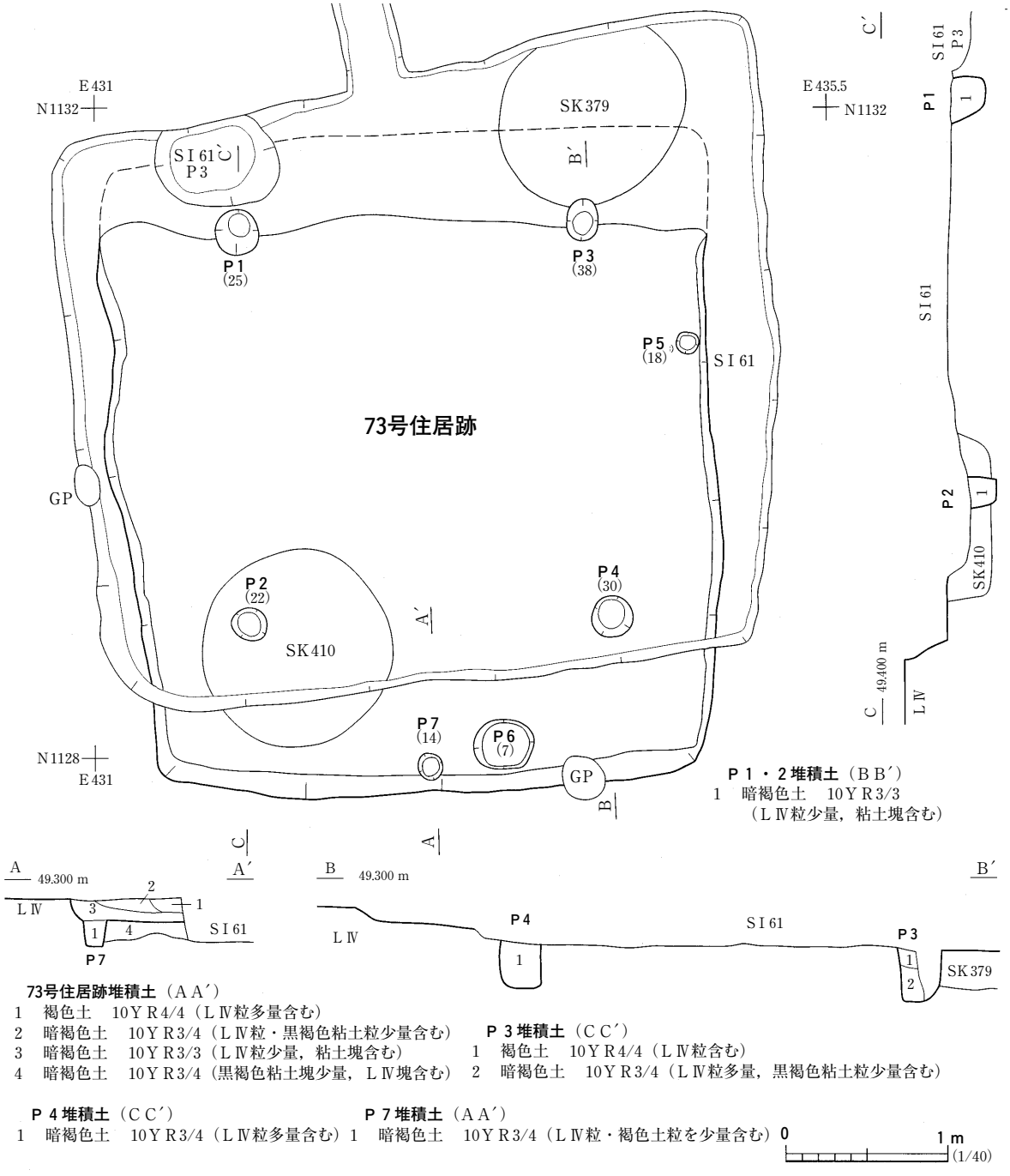


図118　73号住居跡（１）

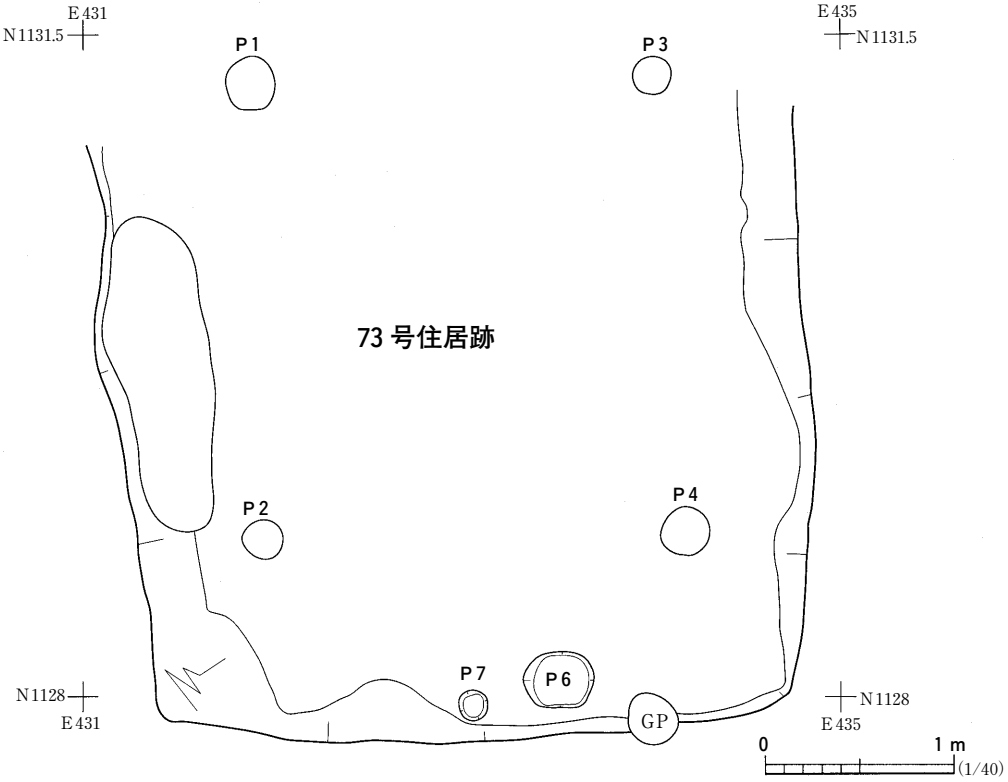


図119　73号住居跡（２）

のベルトを設置した。遺構内堆積土は４層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を含む褐色土，ℓ２は黄褐色土粒と黒褐色粘土粒を含む暗褐色土で，共に南壁沿いに流れ込むように堆積している。ℓ３は黄褐色土粒とにぶい黄橙色粘土塊を含む暗褐色土で，人為堆積と考えられる。ℓ４は黄褐色土塊と黒褐色粘土塊を含む暗褐色土で，貼床土である。堆積状況より，ℓ３は本住居跡を壊して61号住居跡を構築する際に埋め戻した土，ℓ１・２は自然流入土と推測される。

61号住居跡により周壁と床面のほとんどを壊されているが，61号住居跡の掘形基底部に本住居跡の東西壁の掘形を確認することができた。そこから推測される本住居跡の平面形は長辺４ｍ，短辺3.7ｍの隅丸長方形で，主軸方位はほぼ真北である。確認面からの深さは16～28㎝を測る。黄褐色土を凹凸に掘り込んで暗褐色土を貼り，ほぼ平坦な床面を造り出している。貼床土の厚さは６～12㎝を測る。南壁付近に遺存する床面に踏み締まりは認められなかった。

住居内施設は主柱穴４基，ピットを３基検出した。Ｐ１～５は61号住居跡の掘形基底部より検出し，Ｐ１～４は住居跡の四隅に，Ｐ５は東壁際中央部に位置する。Ｐ６・７は床下ピットで，南壁際に位置する。なお，Ｐ１～５の深さは，遺存する床面から推定される床面からの深さである。

本住居跡の主柱穴と考えられるのはＰ１～４で，これらを結んだ平面形は住居跡の平面形にほぼ対応する。Ｐ１とＰ２，Ｐ３とＰ４は2.45m，Ｐ１とＰ３，Ｐ２とＰ４は2.1～2.2ｍを測る。Ｐ１～４は直径22～28㎝の円形あるいは楕円形で，遺存する床面から推定される深さは22～38㎝を測る。Ｐ１・２内には黄褐色土粒を含む暗褐色土，Ｐ４内には黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ３内堆積土は２層に分けられ，ℓ１は黄褐色土粒を含む褐色土，ℓ２は黄褐色土粒と黒褐色粘土

粒を含む暗褐色土である。Ｐ５は検出面での平面形が直径14cmの円形で，深さは18cmを測る。その位置から壁柱穴の可能性が考えられるが，西壁際の対応する位置からピットは検出されず，機能は不明である。Ｐ５内には黄褐色土を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ６は直径16cmの円形で，深さは14cm，Ｐ７は長径37cm，短径30cmの楕円形で，深さは７cmを測る。Ｐ６内には黄褐色土粒，黒褐色土粒，焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ７内には黄褐色土粒，褐色土粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ６・７の機能は不明である。

遺　　物

遺物はℓ１・４より縄文土器片３点，土師器片９点が出土したが，小破片のため掲載しなかった。土師器は全てロクロを使わずに整形している。ℓ１からは甕と杯，ℓ４からは内面黒色処理された杯が出土している。

ま　と　め

本遺構は４×3.7ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡である。４本主柱で，時期は出土土器より国分寺下層式期，奈良時代と考えられる。（坂　田）

74ａ号住居跡　ＳＩ74ａ

遺　　構（図120・121，写真７・11・121・122）

本遺構は南区の北寄り中央，ＡＡ・ＡＢ49の２グリッドにまたがって位置する。本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において暗褐色土の半円形状の広がりとして確認された。半円形状の北側部分は重機による掘り込みで既に失われていた。

本遺構の調査は，半円形状の広がりの掘り込みから開始した。半円形の広がりの東西方向に，土層観察用の帯を１条残し，南半分の掘り下げを実施した。遺構内堆積土は当初６つの層に分けられるものと理解した。確認できた半円形状の広がりの規模は東西約5.2ｍを計測した。

確認面から20cm程掘り下げたところから，ＬⅣ層が平らに削り整えられた底面を確認した。底面上を丁寧に精査してみると，確認面では分からなかったピットが散在する他，南北に長い楕円形状の広がりを確認した。さらに，底面中央部の長楕円形状の広がりを中心にして，半円形状に２条の溝が巡っているのを確認した。

底面の精査は，楕円形状の広がりが炉跡であるかどうかを検証するため，南北方向に土層観察帯を１条残し，帯の西半分の掘り下げから実施した。その結果，北端を掘り進めたところ，堆積土中から底部から胴部上半部まで残る１個体の土器が，底を下にして南にやや傾いた状態で埋め込まれていた。土器周囲の土は熱を受け赤く変色していた。土器を埋め込んだ部分の南側には，法面に大きさの異なった石を固定された楕円形状のくぼみが連結していた。この個所の上面において，既に河原石の頭がわずかに顔を出しているのが分かっていた。楕円形状のくぼみの底面には石が全く確認されなかった。さらに，南側には半円形状の張り出しが連結している。

以上のことから，底面から確認された長楕円形の広がりは，北側に土器を１個体埋め込んだ複式

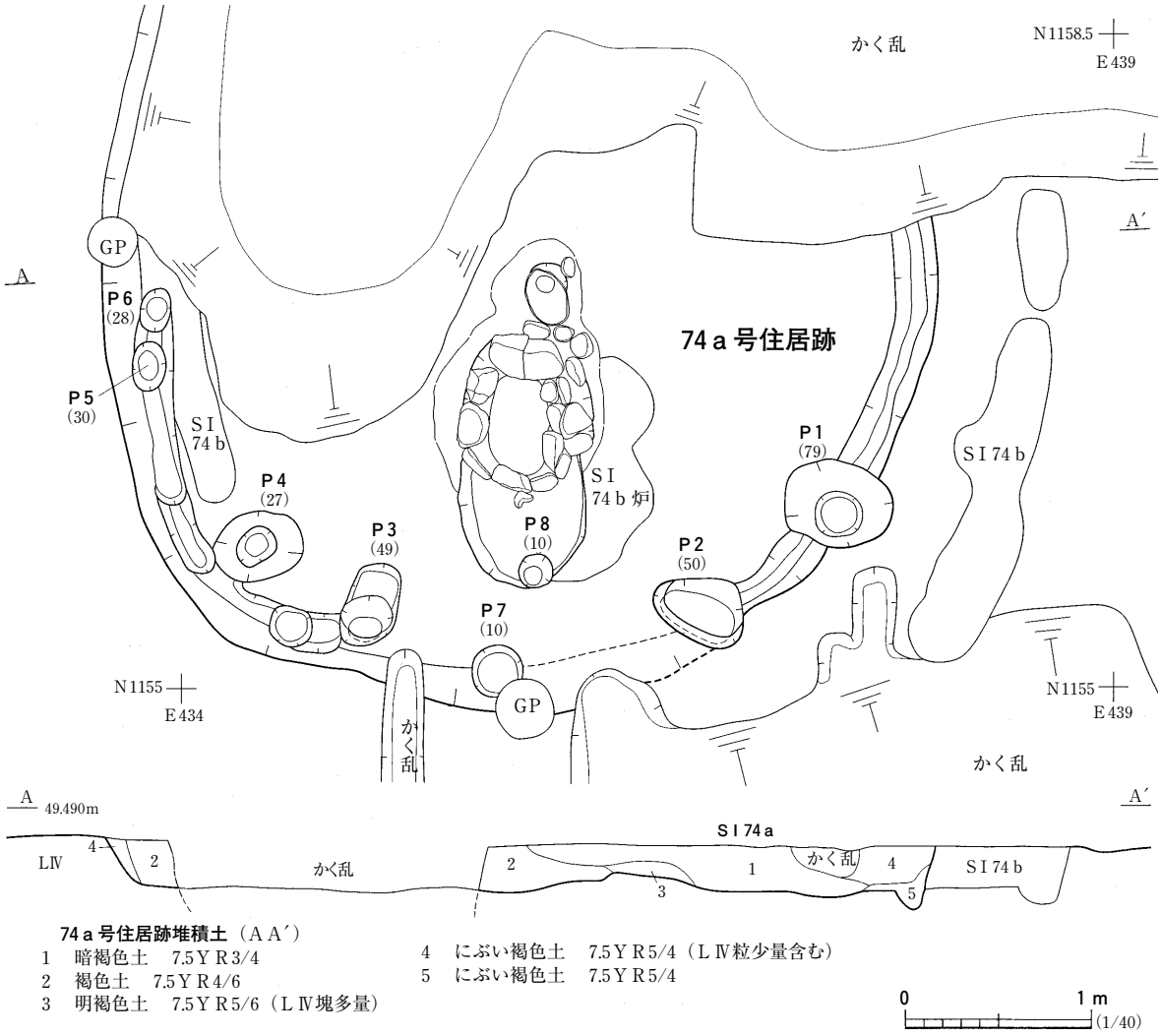


図120　74ａ号住居跡（１）

炉であると判断された。同時に本遺構は住居跡，底面を床面として再認識できた。

また，床面の外縁を東西に２条ずつ巡る溝跡と，残しておいた土層断面を再度観察してみたところ，東側の２条の溝跡の内，内周する溝跡と，土層断面の接する個所を観察したところ，溝跡の外側の法面が確認面に向って急な角度で立ち上がることを追認した。さらに，炉跡から溝跡までの距離をみると，東側を内周する溝跡と，西側を外周する溝跡までの距離がほぼ同じであった。

このことから，東西に２条ずつ巡る溝跡は，本住居跡の壁溝と判断された。同時に，本住居跡は一度建て替えられていることも分かった。本住居跡の呼称は74ａ号住居跡（ＳＩ74ａ）とし，建て替え前のものをＳＩ74ｂとして区別をつけた。

ここで，あらためて建て替えられた後の住居跡，74ａ号住居跡について詳しく見てみる。

本住居跡内の堆積土は５つに分層された。確認面から床面までの深さは，約20㎝ほどと比較的浅かった。本住居跡の床面規模は，壁溝の北側の東西径（壁溝外縁間の距離）で約4.3ｍを計測する。

炉跡は北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成からなる複式炉であった。炉跡の規模は土器埋設部先端から前庭部末端まで約170㎝を測り，その長軸方向はほぼ真北を指し示す。炉跡内

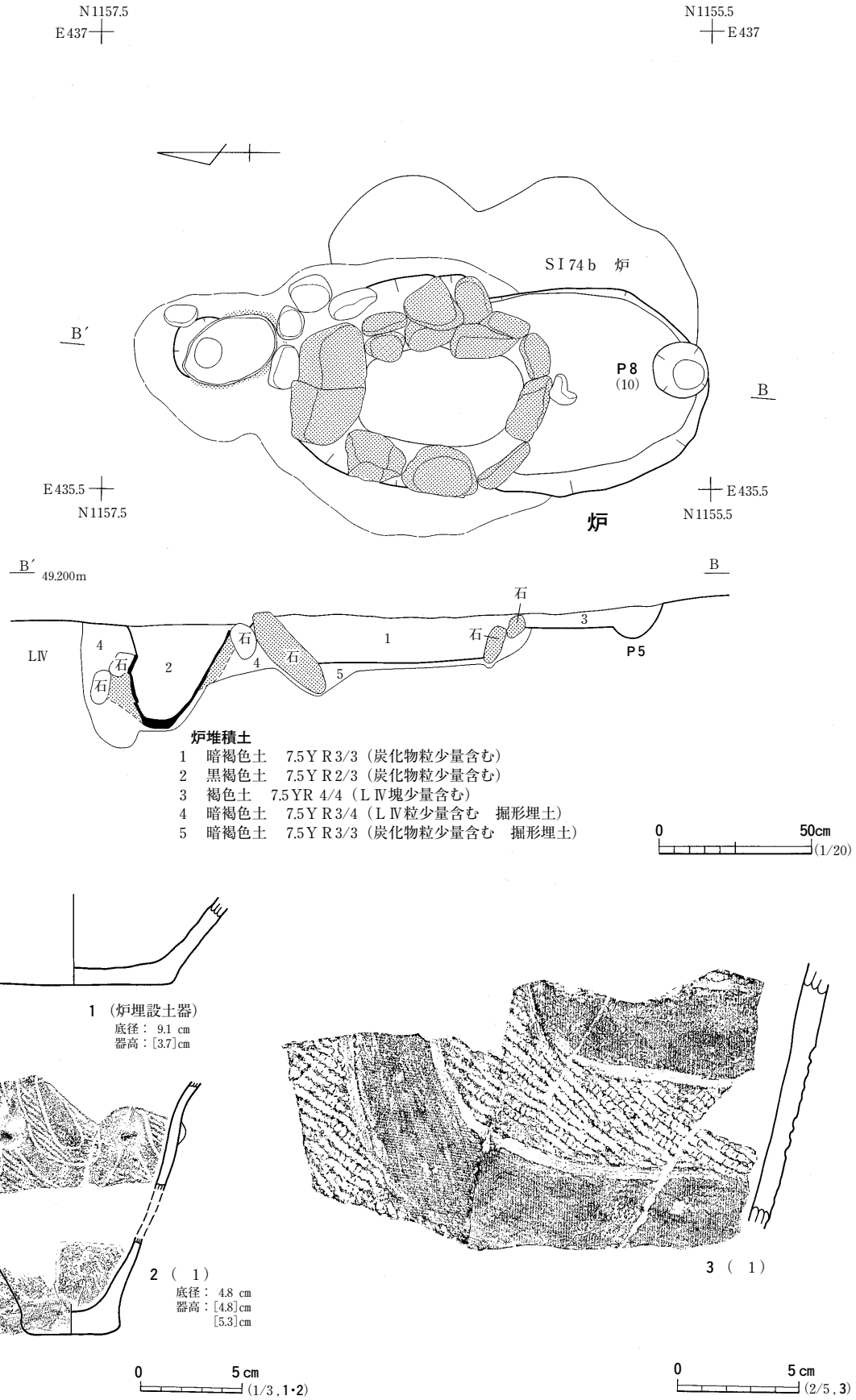


図121　74ａ号住居跡（２）・出土遺物

の堆積土は５層に分けられ，この内ℓ４・５は掘形埋土と判断される。

炉跡を各部位別にみてみると，土器埋設部には１個体の土器を埋め込んでいる。埋設土器は全体的に細かくひび割れていた。脆くなった埋設土器は，土中から取り上げた時点で底部片を残して，すべて数cmほどの細片と化した。土器埋設部を断ち割ったところ，埋設土器上半部から上層にかけての埋土は，熱を受け真っ赤に変色していた。また，埋設土器の胴部下半にあたる埋土内には，土器のすぐ裏側を固定するかのように，拳大の石を10個前後埋め込んでいた。石組部の石材には花崗岩の円礫を主に用いていた。前庭部は半円形状に南へと張出している。

８基のピットは南東隅から西へ時計回りにＰ１～Ｐ８まで番号を付けた。８基のピットの平面形状は円または楕円形状をなし，それらの規模は長径18～52cm，確認面からの深さは10～79cmを計測する。確認された８基のピットの配置と規模を観察すると，内４基のピット（Ｐ１～４）が壁溝に沿って，または壁溝を掘り込んで，炉跡を中心に東西２基ずつ対となるよう並んでいる。

このことから，Ｐ１～４は本住居跡の主柱穴と考えられる。炉跡付近の床面では柱穴と思われるピットは確認できなかった。Ｐ１～４の柱穴は南側の壁溝に沿って配置されるものの，近年の掘削で失われた北半分にも壁ないし壁溝に沿って柱穴が存在したものと推察する。

確認できた柱穴の間隔をみると，Ｐ１南西縁～Ｐ２北東縁，Ｐ３北西縁～Ｐ４南東縁までの間隔は40cm前後離れていた。Ｐ４東縁～Ｐ１西縁までの間隔は約2.6m，Ｐ２西縁～Ｐ３東縁までは約1.3mを測る。

壁溝の規模は幅約20cm，床面からの深さは約10cmほどであった。

遺　　物（図121）

遺物は主に土器埋設部にあった埋設土器の他に，わずかながら本住居跡内の堆積土のℓ１中からも出土している。その大部分の深鉢形土器の胴部片で，外面に縄文のみが見られるものと，内部に縄文を加えた図柄を描いた破片も散見された。

唯一全体の形状が伺えると思われた埋設土器は，被熱による劣化で，土中に埋もれていた時の姿を留めないほどに細かく砕け，確認当時の形に復元することができなかった。図121にはわずかながら残った底部片のみを図化した。その他，本住居跡内の覆土中から出土した破片を一緒に示した。

１の深鉢形土器の底部片は，埋設土器の底部片で，前述したように胴部は劣化により細片となってしまい，全体の形状および文様をうかがい知ることができなかった。

２・３は本住居跡内の覆土から出土した深鉢形土器の破片である。いずれも，外面の文様の特徴から大木10式段階の土器と思われる。

２の破片は，両者に接合点は無いものの，暗褐色の色調，土器の厚さから判断して同一個体のものと思われる。土器は小振りな深鉢形土器で，口縁部～胴部上半を欠損している。胴部上半部には，丸いコブ状の突起が貼り付けられ，その間を沈線で描いた図柄で埋めている。描かれた図柄は，沈線で三重の「U」字形または「O」字形状の文様を書き，内側に縄文を加えている。

３は比較的大きな深鉢形土器の胴部片である。外面には渦巻き状の図柄を描き，内部に縄を転が

している。

ま　と　め

本遺構は円形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。本住居跡の北半分は，近年の掘削により深く抉り取られていた。土層断面の観察から，本住居跡は建て替えられた後のものであることが分かった。

74ａ号住居跡内には，１基の複式炉，４基の柱穴（現状で確認できた柱穴）そして壁溝を備える。

柱穴は，炉跡の長軸方向を中心に東・西側の壁溝に沿って配置されている。同じような柱配置は，ＳＩ45においても認められた。

本住居跡の機能時期は，炉跡に埋設された土器の特徴からうかがい知ることが出来なかったことと，複式炉を伴うことそして堆積土（ℓ１下位）から出土した縄文土器片の特徴から，概ね大木10式段階ごろ，縄文時代中期末葉ごろと想定しておきたい。　（阿　部）

74ｂ号住居跡　ＳＩ74ｂ

遺　　構（図122・123，写真７・11）

本遺構は南区の北寄り中央，ＡＡ・ＡＢ49の２グリッドにまたがって位置し，前述のＳＩ74ａと重複している。

本遺構を74ｂ号住居跡として判断した根拠は，ＳＩ74ａの説明の中で前述した通りである。本住居跡の堆積土は，ＳＩ74ａの東側に幅約80㎝ほどの三日月状に残存した。しかしながら，74ｂ号住居跡は確認面では見つけることができず，堆積土のほとんどは，ＳＩ74ａ内の覆土と共に掘り下げてしまっていた。本住居跡の床面は，建て替え後のＳＩ74ａのものと比べ，確認面からの深さもそのままに，平らのまま東へと延びていた。

本遺構内の堆積土は３層に分けられた。

本住居跡の調査は，当初周囲を巡る壁溝の調査から開始した。本住居跡の壁溝は，東側ではＳＩ74ａの壁溝外側の，西側では内側にある壁溝が，建て替え以前のものであることが分かった。壁溝の規模は最大幅約35㎝，床面からの深さは約10㎝ほどで断続的に巡っていた。

その後，ＳＩ74ａの炉跡の東側に暗褐色土の広がりが存在することに気付いた。このことから，本住居跡を建て替える時点で，炉跡も一緒に作り替えたのではないかとの疑問が生じた。この視点からＳＩ74ａの炉跡の東に接する暗褐色部の掘り下げも実施した。その結果，床面から10㎝ほど掘り下げたところで，熱を受け劣化した円礫が数個出土した。円礫のあったすぐ北側の部分は，丸く掘りくぼめられ，土中から縄文土器の底部片が正置の状態で出土した。この事実から，ＳＩ74ａの炉跡から東に延びた暗褐色土の広がりは，建て替え前の炉跡，つまり本住居跡の炉跡であることが明らかとなった。

本住居跡の炉跡は，土器埋設部と石組部のみが現状で確認できた。石組部内の石の大半は既に除去され，底面には拳大の被熱劣化した６個の円礫が残っていた。残存する炉跡の規模は，土器埋設

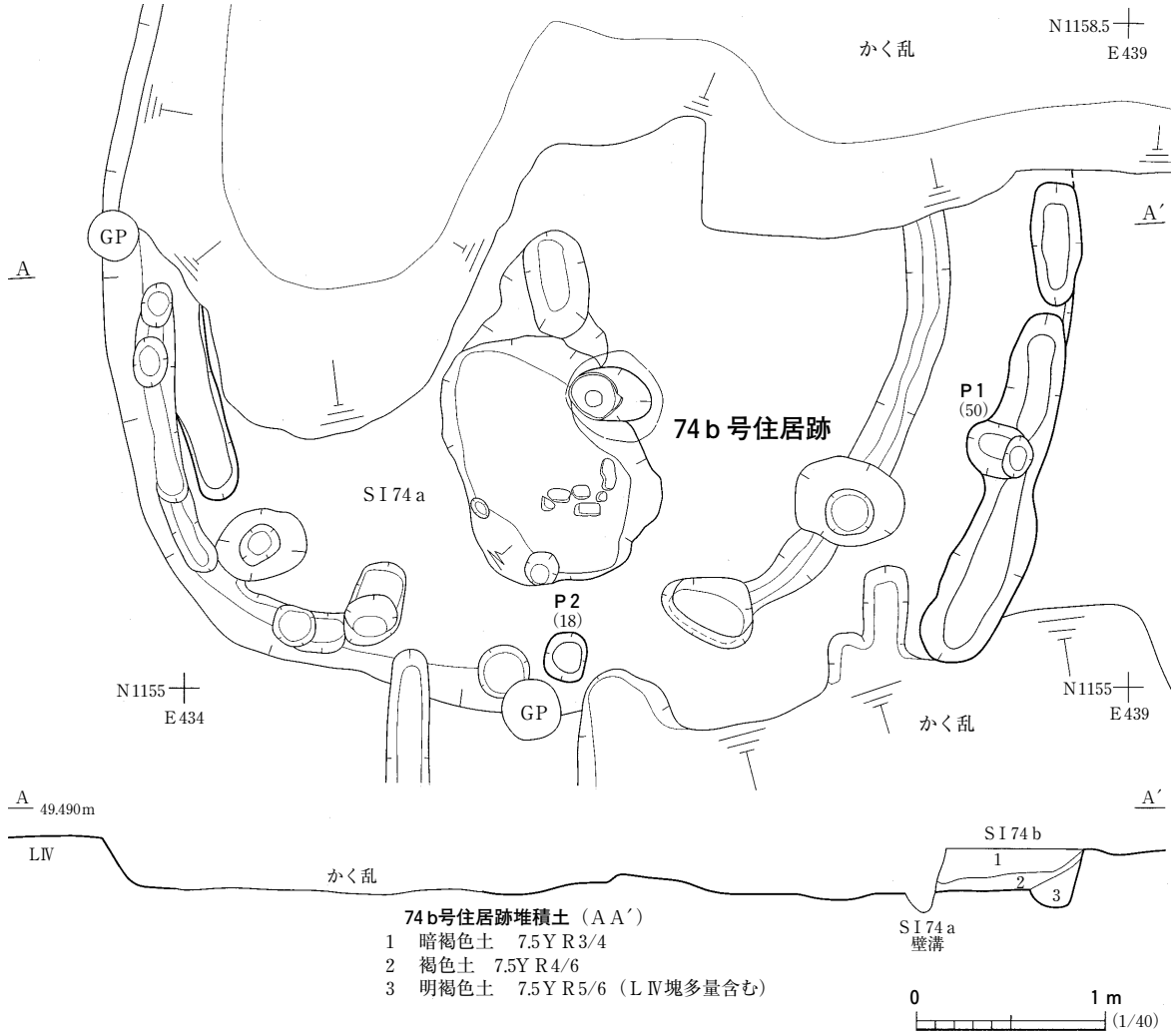


図122　74ｂ号住居跡（１）

部の先端から石組部の末端まで最大長で約118cmを測る。長軸方向はＳＩ74ａの炉跡のそれよりもやや東に傾いている。

本住居跡に伴うピットは２基のみで，東から順にＰ１，Ｐ２と番号を付けた。２基のピットの平面形状はＰ１が楕円形状，Ｐ２は円形だった。Ｐ１は東側の壁溝を掘り込んでいた。それらの規模は，Ｐ１で長径38cm，Ｐ２で直径20cmを測る。２基のピットの深さはＰ１で床面から約50cm，Ｐ２で約18cmを測る。確認面からの深さは10～79cmを計測する。

２基ピットの内，Ｐ１はその規模から，壁際に設けられた柱穴と考える。現状ではＰ１と同様の規模を持つ柱穴は本住居跡からは確認できなかったが，Ｐ１の他にも壁溝に沿って柱穴が存在した可能性は十分考えられる。

遺　　物（図124）

遺物は炉跡の土器埋設部にあった縄文土器と，床面より出土した土器片のみとわずかであった。その内，接合により形の分かった埋設土器を図124に示した。

１は炉跡に埋設された深鉢形土器の胴部下半から底部にかけての破片である。土器の外面には縄

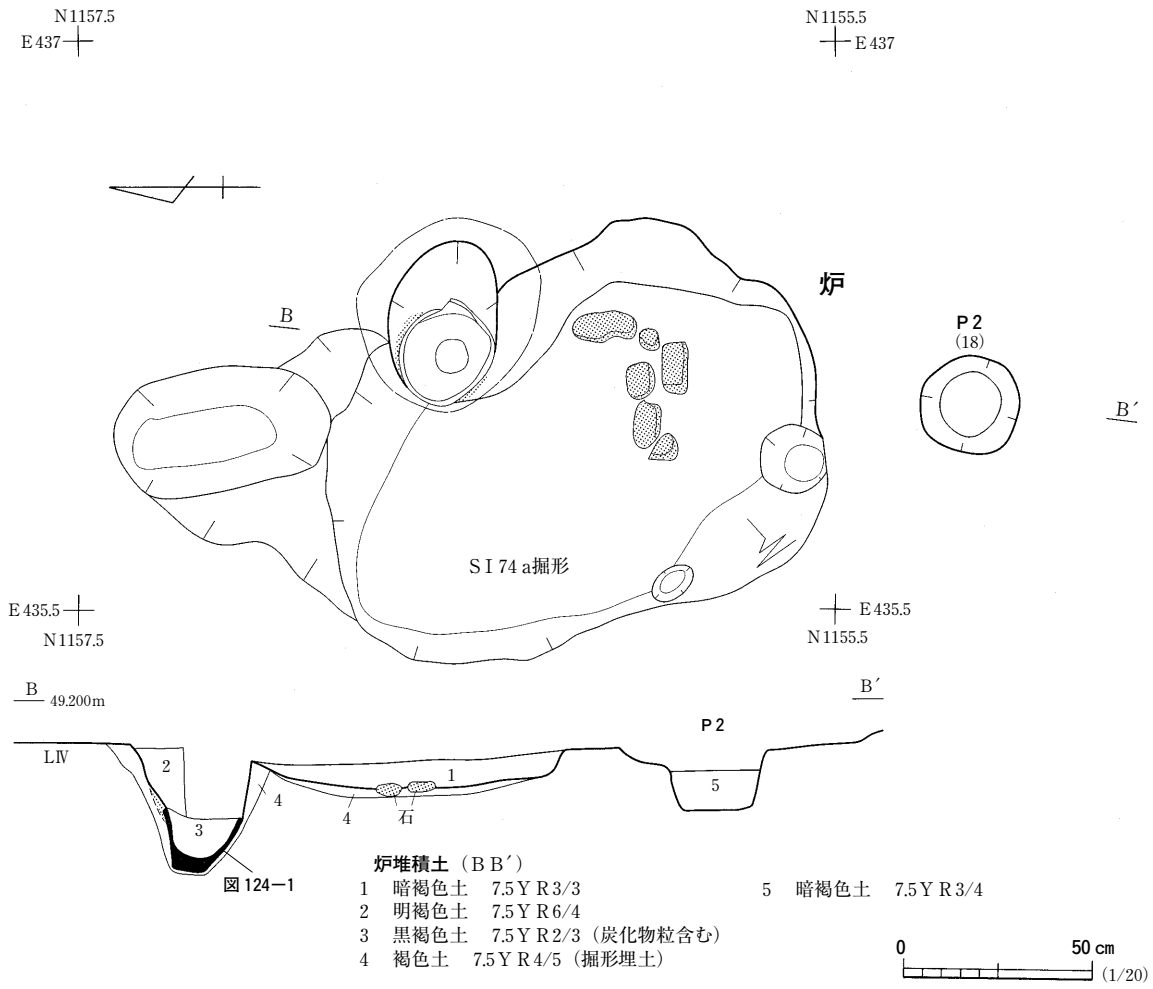


図123　74ｂ号住居跡（２）

文を転がしている。

ま　と　め

本遺構は円形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。本住居跡の北半分は近年の掘削により深く抉り取られ失われていた。

土層断面の観察から，本住居跡は一度建て替えが実施されたことが分かった。本住居跡は建て替え以前のものであることも判明した。

74ｂ号住居跡は，１基の複式炉と１基の柱穴（現状で確認できた柱穴）そして壁溝を備えている。柱穴は壁溝に沿って配置されたものと思われる。

複式炉は本住居跡の南寄りに設けられ，建て替え時には壊し，新しく作り直したことも分かった。

本住居跡の機能時期は，炉跡に埋設された土器や出土した土器片の特徴からは十分に捉えきれなかった。このことから，複式炉を伴うことや，ＳＩ74ａよりも前に営まれた住居跡という事実から，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

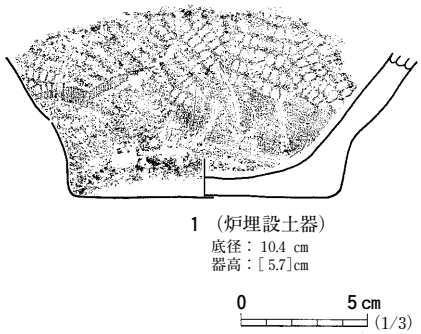


図124　74ｂ号住居跡出土遺物

75号住居跡　ＳＩ75

遺　　構（図125，写真123・124）

本遺構は南区北西端の，Ｔ・Ｕ47の２グリッドにまたがって位置する。

本遺構の調査は，基盤層であるＬⅣ層を平らに削る確認作業から開始した。本遺構からは暗褐色土のヒョウタン形の広がり，その周囲に散在するグリッドピット，そして近接する１基の土坑（ＳＫ331）が存在した。

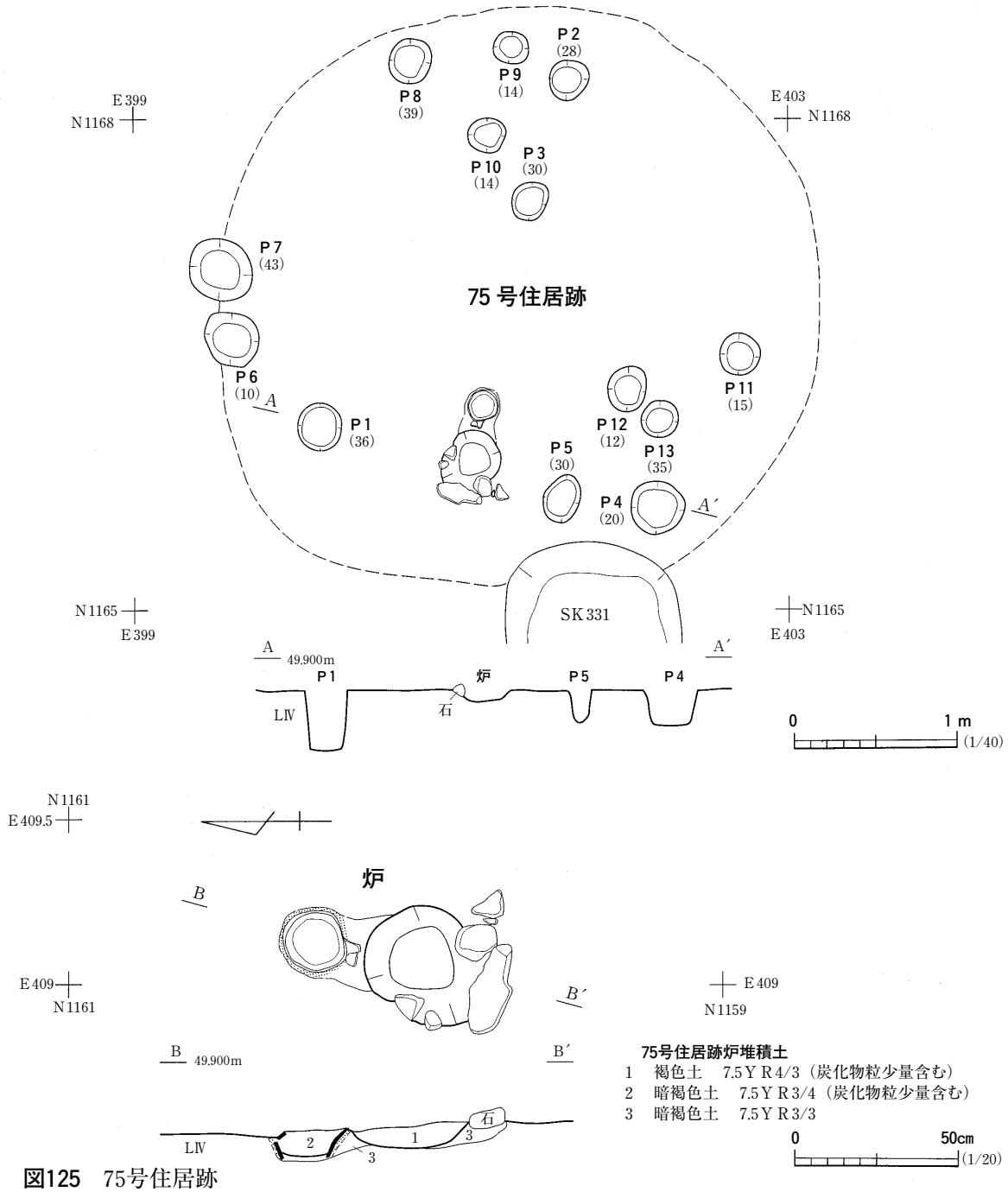


図125　75号住居跡

次に，ヒョウタン形の広がりの精査を開始した。その精査は，南北方向に土層観察用の帯を残し，西半分の掘り下げを実施した。その結果，ヒョウタン形の北側から土器の割れ口が丸く巡るのを確認した。その南側には周囲の法面に石を並べた浅いくぼみも確認した。このことから，このヒョウタン形の広がりは炉跡と判断された。この時点で，本遺構は住居跡として初めて認識することができた。

炉跡は現状では北から土器埋設部，石組部の二部構成であった。確認できた石組部内部の石は，ほとんど抜き取られていた。炉跡の規模は土器埋設部先端から石組部と思われる末端まで約73㎝を測る。その長軸方向は，真北に対し15度ほど東に傾いていた。炉跡内の堆積土は３層に分けられ，この内ℓ３は掘形埋土である。

確認面上からは，炉跡以外に，13基のピットも見つかった。ピットは南西隅から時計回りにＰ１順にＰ13まで番号を振った。それらのピットの配置を観察すると，内４基のピットが炉跡を中心にして，大きさの異なる２種類の三角形状に配置されていることが分かる。13基のピットの規模は直径（長径）20～40㎝，確認面からの深さは10～43㎝を計測する。

13基のピットの内Ｐ１～４は，その配置と規模から本住居跡の柱穴と考えられる。Ｐ１～４の柱穴は炉跡を中心として，まずＰ１・２・４で大きな三角形状の配置，そしてＰ１・３・４で構成された小さな三角形状配置の２種類が想定される。

まず，大きな三角形状配置，Ｐ１・２・４間のピット間の距離をみると，Ｐ１北東縁～Ｐ２南西縁までは約2.3m，Ｐ２南東縁～Ｐ４北西縁まで約2.4m，Ｐ４西縁～Ｐ１東縁まで約1.8mを測る。

次に，Ｐ１・３・４の小さな三角形状配置でのピット間の距離は，Ｐ１北東縁～Ｐ３南西縁までは1.6m，Ｐ３南東縁～Ｐ４北西縁まで約1.8mを計測する。

以上の２種類の配置に関わるピットは，いずれもその配置と規模から本住居跡の柱穴と考えられ，炉跡を挟んで計３本の柱で上屋を主に支えていたと推察する。２種類の配置が存在する事実は，一度柱穴の据え替え，ないしは炉跡の場所を変えずに住居跡の建て替えが実施された可能性が考えられる。

本住居跡の床面範囲は図125中で短い破線として示した。想定された床面規模は，大きな三角形状の柱配置で推測すると，直径3.7mほどであった。

ま　と　め

本遺構は，１基の複式炉と３基の主柱穴を備えた竪穴住居跡である。柱穴の配列には２種類みられ，一度柱穴の据え替え，または，住居の建て替えが行われた可能性が考えられる。

本住居跡の炉跡は南寄りに設けられていた複式炉で，前庭部がなく，石組部の石もほとんど抜き取られていた。

本住居跡の機能時期は，炉跡に埋設された土器の特徴から，大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

77号住居跡　ＳＩ77

遺　　構（図126・127，写真125・126）

本遺構は南区北端の平坦地に存在し，ＡＡ47～48・ＡＢ47～48グリッドに位置する。本遺構の南に74号住居跡，東に97号住居跡がある。70号住居跡・４号埋設土器と重複し，本遺構の方が古い。黄褐色土（ＬⅣ）上面で円形の落ち込みを検出し，東西方向に土層観察用のベルトを設置した。遺構内堆積土は黄褐色土粒を含む暗褐色土の１層で自然堆積土と考えられる。遺構の北側と西側を70号住居跡とかく乱で大きく失っているが，平面形は円形あるいは隅丸方形と推定される。確認面からの深さは８～10cmを測り，周壁は70°程の角度で立ち上がる。床面は黄褐色土を掘り込んでほぼ平坦に造り出されている。床面には，周壁付近を除いて踏み締まりが確認された。

住居内施設は炉１基，壁溝，主柱穴４基，ピット５基を検出した。炉は複式炉で，床面南側に位置する。土器埋設部・石組部・前庭部より成り，炉の主軸方位は真北から20°程東側に傾く。遺存する床面からＰ４・８・９を検出した。Ｐ４は炉の主軸線から1.6m東に，Ｐ８・９は炉前庭部東側に位置する。Ｐ１～３・５～７は70号住居跡の床面と床下から検出し，70号住居跡のピットとして掘り下げたが，位置関係や規模から70号住居跡に確実に伴うと考えられるピットが無かったため，77号住居跡に伴うピットとした。なお，図に示したＰ１～３・５～７の深さは，遺存する床面から推定した深さである。

Ｐ２～４は長径37～54cmの楕円形で，深さは50～70cmを測る。ほぼ同規模で同一線上に並ぶので，本遺構の主柱穴と考えられる。Ｐ２内堆積土は３層に分けられ，ℓ１・２は黄褐色土粒を含む暗褐色土，ℓ３は黄褐色土粒を含む褐色土である。Ｐ３内には黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ２・３には柱痕が認められなかったので，柱穴掘形と考えられる。Ｐ４には柱痕が認められる。断面の観察より，直径16cm程の柱をにぶい黄褐色土を充填して固定しており，本遺構の廃棄後に上部に暗褐色土が堆積したことがわかる。Ｐ１は長径約60cm，短径32cmの楕円形で，深さは49cmを測る。炉の主軸より西側にややずれた位置にあるが，Ｐ２と同規模であることよりＰ１も主柱穴と考えられよう。Ｐ１内堆積土は３層に分けられ，ℓ１は黄褐色土粒を含む暗褐色土，ℓ２は黄褐色土粒を含む褐色土，ℓ３は褐色土である。Ｐ５・６・８・９は直径18～24cmの円形，Ｐ７は直径32cmの円形で，深さはＰ５が36cm，Ｐ６・７が56～71cm，Ｐ８・９が７～12cmを測る。Ｐ５・７～９内には黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積している。Ｐ６内堆積土は３層に分けられ，ℓ１は炭化物粒を含む暗褐色土，ℓ２・３は色調の異なる暗褐色土である。

壁溝は一部途切れながらも，遺存する周壁際をほぼ全周している。幅は14～30cm，深さは２～７cmを測る。壁溝内には黄褐色土粒を含む暗い色調の暗褐色土が堆積しており，本遺構の廃棄時には壁溝は埋められていたと考えられる。

炉の長径は推定約190cmで，重複する遺構とかく乱で壊されているため遺存状態は悪い。土器埋設部は70号住居跡に上部を壊され，底面付近のみ遺存する。埋設土器には下半を切り取った深鉢が用

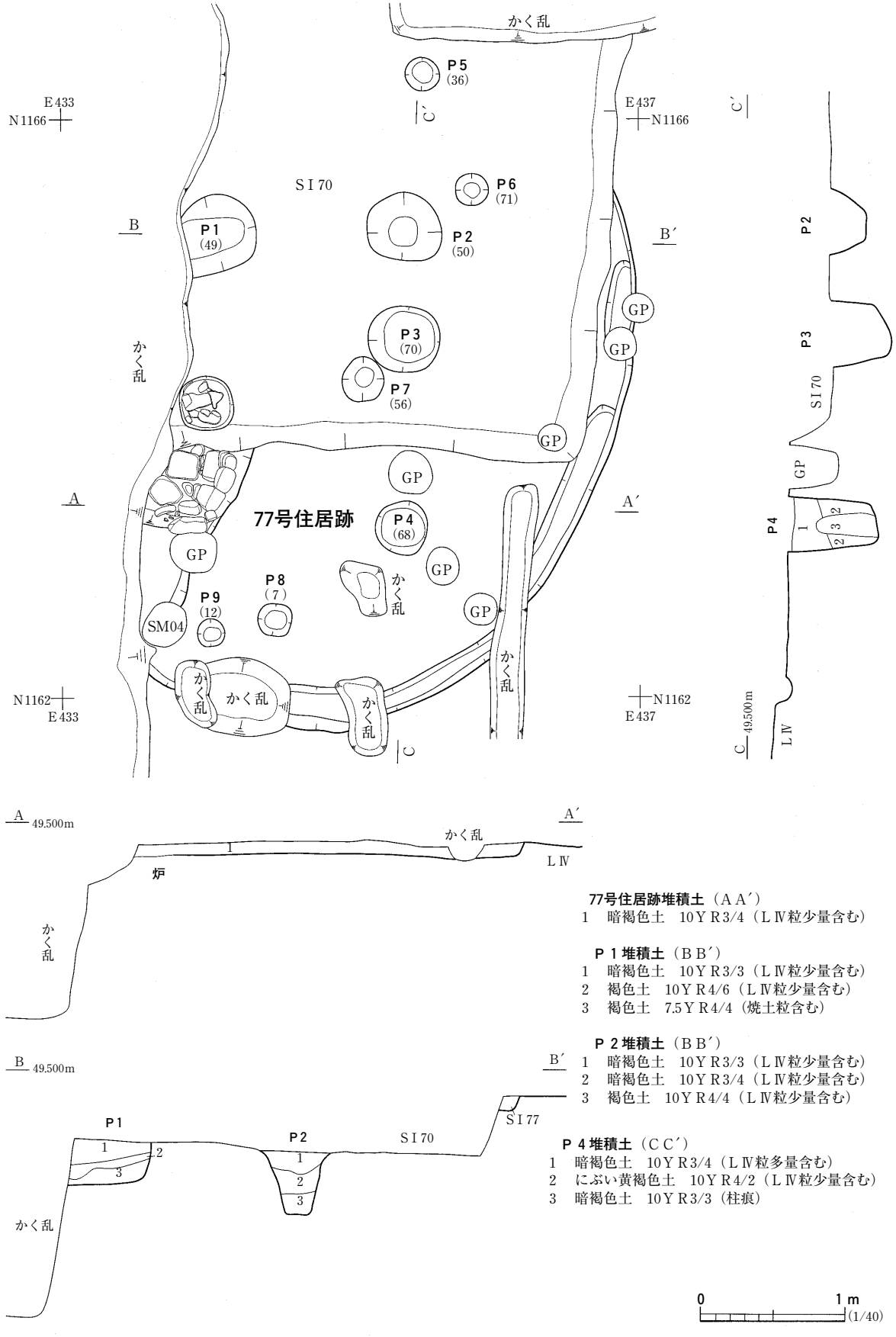


図126　77号住居跡（１）

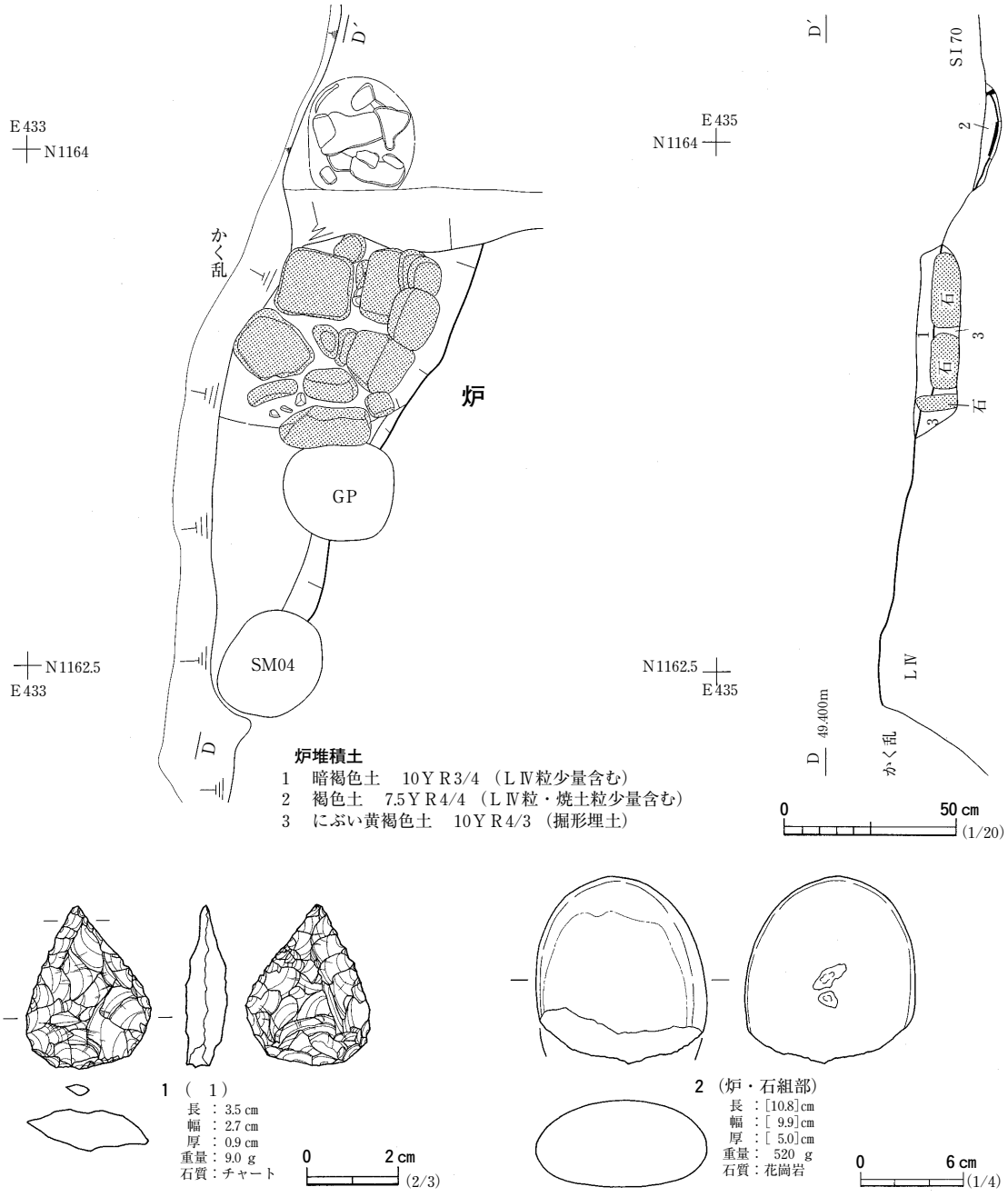


図127　77号住居跡（２）・出土遺物

いられる。埋設土器より一回り大きな円形の掘形に土器を据えた後，深鉢の体部破片を底面に内面を上にして敷いている。石組部はかく乱で西半分を失っている。石組部は深さ最大24cmの楕円形の掘形に，拳大から人頭大の礫を平らな面が内側を向くように敷いている。前庭部は４号埋設土器・グリッドピット・かく乱でその殆どを失っている。床面からの深さは最大６cmを測り，周壁は緩やかに立ち上がる。前庭部底面は南から北に向かって緩やかに傾斜する。石組部の礫のほとんどは火熱を受けて赤色変化したり，風化して脆くなっている。炉内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を含む暗褐色土で，遺構内堆積土ℓ１に相当する。ℓ２は黄褐色土粒と焼土粒を含む褐色土で，70号住居跡の堆積土（ℓ５）が混入したと推測される。ℓ３はにぶい黄褐色土で，炉掘形埋

土である。

遺　　物（図127）

遺物は，縄文土器片５点，石器２点が出土している。土器片は全て小破片のため掲載しなかった。図127－１はℓ１から出土したチャート製の石錐である。両面共に丁寧に調整されている。２は炉の石組部から出土した花崗岩製の磨石・凹石である。円礫を利用しており，片面は磨耗し，片面に窪みが認められる。縄文土器は沈線区画のアルファベット状の文様が施された体部破片が炉の石組部から，口縁部が無文で体部に縄文の施された破片などがℓ１から出土している。

ま　と　め

本遺構は円形あるいは隅丸方形の竪穴住居跡で，複式炉を持つ。時期は出土土器より，縄文時代中期後葉から中期末葉と推測される。（坂　田）

78号住居跡　ＳＩ78

遺　　構（図128・129，写真127・128）

本遺構は南区の北端，Ｙ・Ｚ47の２グリッドにまたがって位置する。本遺構は奈良時代の住居跡（ＳＩ48）によって東半分を，近年の掘削によって北半分を既に壊されていた。

本遺構の調査は，奈良時代の住居跡（ＳＩ48）の貼床調査終了後に，基盤層であるＬⅣ層を平らに削る確認作業から開始した。その結果，ＳＩ48の西壁寄りから南北に長いヒョウタン形の広がりと，数基のグリッドピットそして１条の溝の痕跡を確認した。

ヒョウタン形広がりの東半分は，既に奈良時代の住居跡によって上部が削られていた。さらに，その北端には土器の割れ口が丸く巡り，その外縁は丸く被熱変色していた。このことから，ヒョウタン形の広がりは炉跡と判断され，その結果，本遺構が住居跡である可能性が高まった。

炉跡の精査は，ヒョウタン形の広がりが奈良時代の住居跡に半分壊された部位に沿って，南北方向の土層観察帯を１条残し，東側の掘り下げから実施した。その結果，確認された炉跡は，北側から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成の複式炉と判断された。炉跡の規模は土器埋設部先端から前庭部末端まで約155cmを測る。炉跡の長軸方向はほぼ真北を向いている。炉跡内の堆積土は５層に分けられ，この内ℓ４・５は掘形埋土と判断される。

炉跡を部位別にみてみると，土器埋設部には底の抜けた土器が１個体埋め込まれていた。土器が埋め込まれた個所を断ち割ってみたところ，土器の中位から上層にかけて被熱変色していた。

石組部は，東西に長い楕円形状に一段下がっている。その法面には大小さまざまな石が10個ほど固定されていた。石の無かった石組部底面は，赤く被熱変色していた。さらに石組部に連結して，半円形状に張り出す前庭部が南側に55cmほど延びている。

炉跡の周囲に散在する５基のグリッドピットの配置を観察する。ピットの番号は炉跡を挟んだ東西１対のピットを西からＰ１・２と呼称し，順にＰ５まで番号を振った。

５基のピットの平面形は円形で，規模は直径（長径）15～40cm，確認面からの深さは５～42cmを

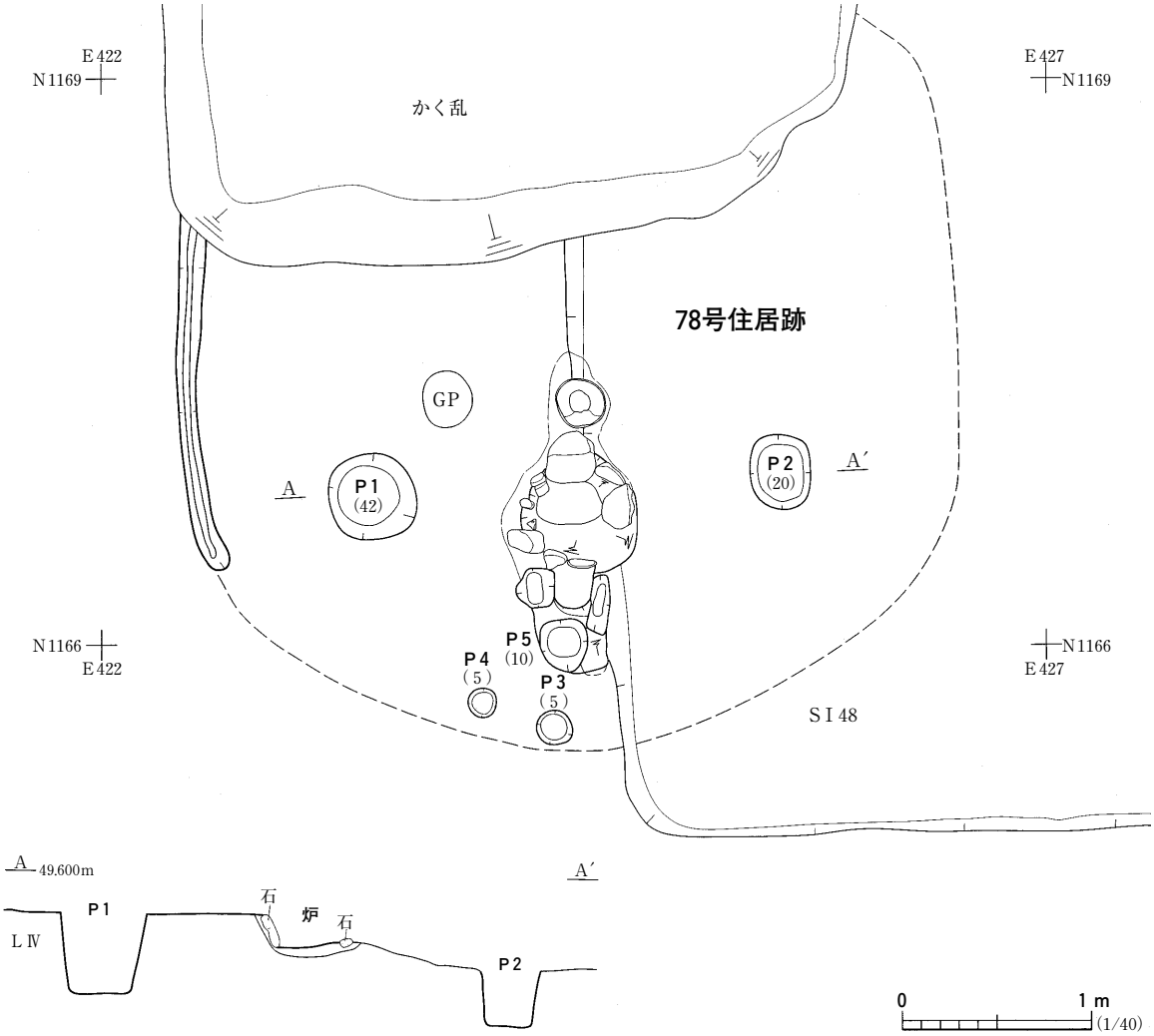


図128　78号住居跡（１）

測り，Ｐ１が最も深かった。５基のピットの内Ｐ１・２は，その配置と規模から本住居跡の柱穴と考えられる。本住居跡の北半分は，かく乱により壊されているが，その北側にもＰ１・２と共に上屋を支えた柱穴が少なくとも１基以上存在したはずである。炉跡を挟んで東西に対峙するＰ１・２の間隔をみると，Ｐ１東端～Ｐ２西端まで約1.8mを測る。

床面西側には南北方向に延び，やや東側に僅かに曲線を描くように壁溝が巡ることを確認した。壁溝の規模は幅18cm，床面からの深さは約８cmを計測する。

遺　　物（図130）

遺物は主に炉跡の埋設土器以外には無かった。

１の底の抜けた深鉢形土器は口縁部及び底部を欠損している。器面は被熱による劣化が著しく，外面の文様は内部に縄文を転がした「U」字状の図柄が確認できた。埋設土器は概ね大木10式段階のものと思われる。

ま　と　め

本遺構は円形状に掘り込まれた竪穴住居跡である。本住居跡の大部分は奈良時代の住居跡（ＳＩ

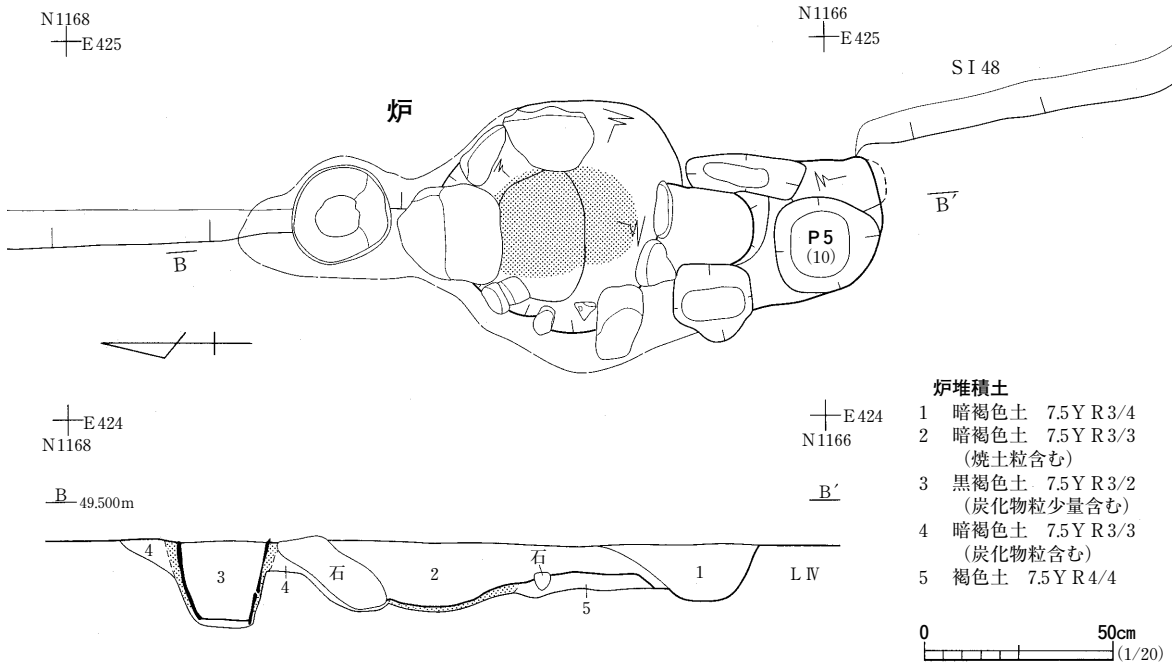


図129　78号住居跡（２）

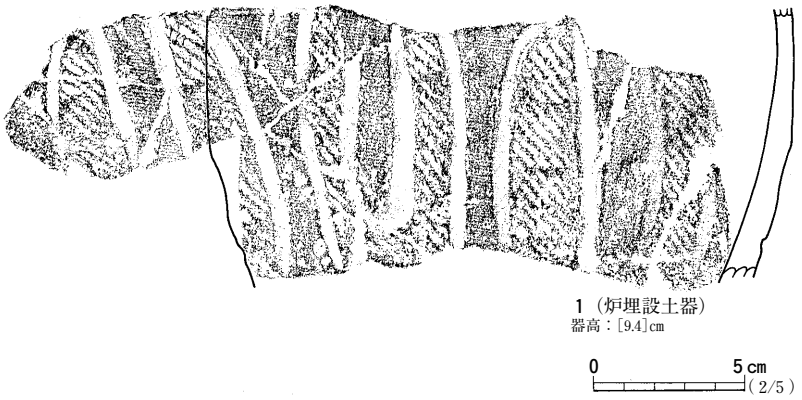


図130　78号住居跡出土遺物

48）と，かく乱により壊されていた。

78号住居跡は１基の複式炉と，２基の主柱穴（現状で確認できた数は２基）を備えている。

本住居跡の機能時期は，炉跡に埋設された縄文土器の特徴から，概ね大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。

（阿　部）

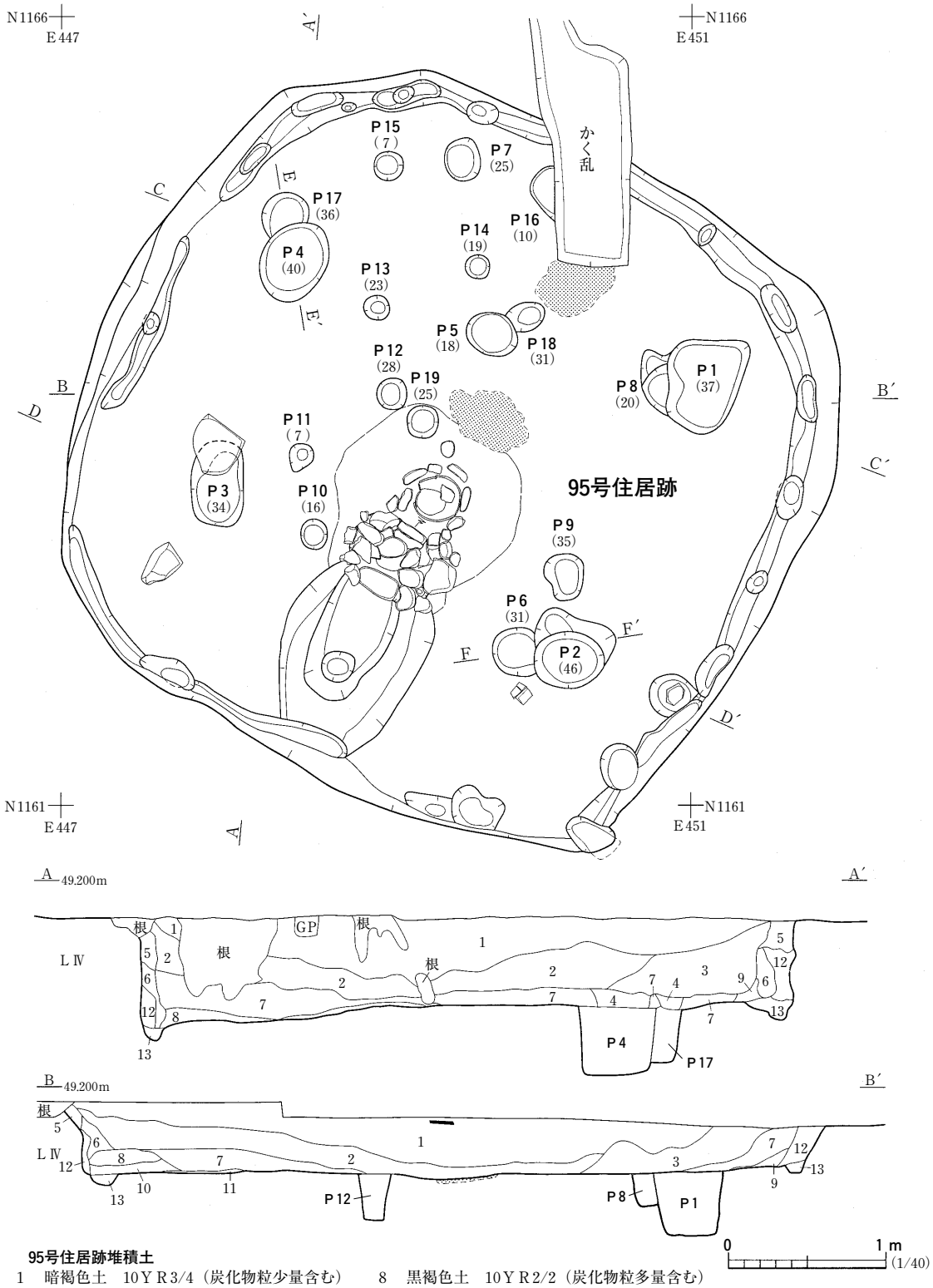
95号住居跡　ＳＩ95

遺　　構（図131～133，写真129～132）

本遺構はＡＤ47・48・ＡＥ47・48グリッドに位置する。床面中央南側に複式炉を伴う竪穴住居跡である。周辺は桑の根などにより撹乱が著しく，遺構の平面形はＬⅣ上面から約５～10㎝程掘り進めた段階で把握した。周辺の地形は平坦である。本遺構の重複関係はないが，南東側に935号土坑がある。

住居の平面形は隅丸方形を呈し，西壁がやや外側に張り出している。複式炉を通る南北の中央軸線はＮ30°Ｅを示す。規模は南北長4.38m，東西長4.60mを測る。

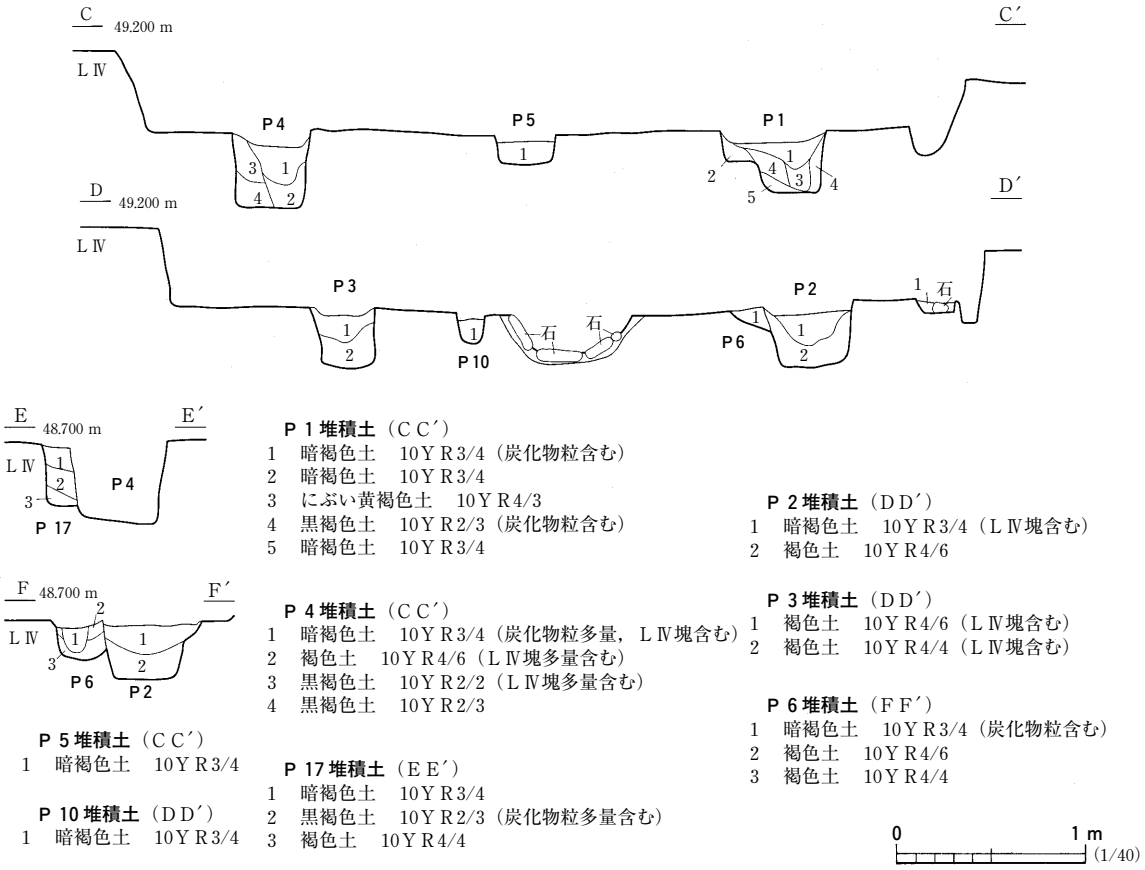
周壁はほぼ全周にわたって約80～90°とほぼ垂直に立ち上がるが，北東隅と西壁中央付近では約



95号住居跡堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊多量含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物粒含む）
5　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
7　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊多量含む）
8　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物粒多量含む）
9　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
10　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊多量含む）
11　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ塊多量含む）
12　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊多量含む）
13　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ塊多量含む　壁溝）

図131　95号住居跡（１）



Ｐ１堆積土（ＣＣ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
4　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4

Ｐ２堆積土（ＤＤ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6

Ｐ３堆積土（ＤＤ′）
1　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ塊含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊含む）

Ｐ４堆積土（ＣＣ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒多量，ＬⅣ塊含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ塊多量含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2（ＬⅣ塊多量含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ2/3

Ｐ５堆積土（ＣＣ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4

Ｐ６堆積土（ＦＦ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6
3　褐色土　10ＹＲ4/4

Ｐ10堆積土（ＤＤ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4

Ｐ17堆積土（ＥＥ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒多量含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4

図132　95号住居跡（２）

40～60°とやや緩やかである。床面からの壁高は，最も遺存の良い南壁で0.57ｍを測る。周壁の下端の内側には，壁溝がめぐっている。溝の幅は10～15㎝，深さは10～20㎝を測る。壁溝は，住居の南壁の東側部分と西壁中央南寄り部分では途切れている。また，壁溝底面からは，約0.6ｍ間隔に並んだ壁柱穴が認められた。壁柱穴の平面形は，長楕円形もしくは円形を呈する。各壁柱穴の規模は，長軸長で約0.3ｍを測る。壁柱穴も西壁中央南寄り部分では途切れている。以上のことから住居の出入口が西壁中央南寄り部分にあった可能性がある。床面はほぼ平坦である。

住居内堆積土は13層に分けられる。ℓ１～３は中央が窪む堆積を見せ，壁際からの流れ込みが観察されたことから，自然堆積層と考える。ℓ４は，Ｐ４・Ｐ18の直上に見られた堆積層である。柱痕と判断したＰ４ℓ１・Ｐ18ℓ１と同様の土が堆積していたことから，柱材が住居廃絶後もある程度残存していた可能性を示している。ℓ５・６・12は，ＬⅣ塊を多く含む黄褐色土で，周壁の崩落土と見られる。ℓ７はＬⅣ塊を含む暗褐色土である。床面を一様に覆う堆積層で，ほぼ水平に堆積している。ＬⅣ塊が攪拌した状況で観察されることから，人為堆積の可能性が高い。また，ℓ７が堆積した段階では，ℓ４に柱材が残置していたと考えられる。ℓ８～ℓ11は床面直上に見られた堆積層である。特にℓ８は炭化物粒を多く含み，床面の南西側に薄く堆積していた。ℓ11はやや締まりがある褐色土で，複式炉の周囲にのみ見られた。ℓ13は壁溝内の堆積層で，ＬⅣ粒が流入した状況で観察されることから，自然堆積と考える。

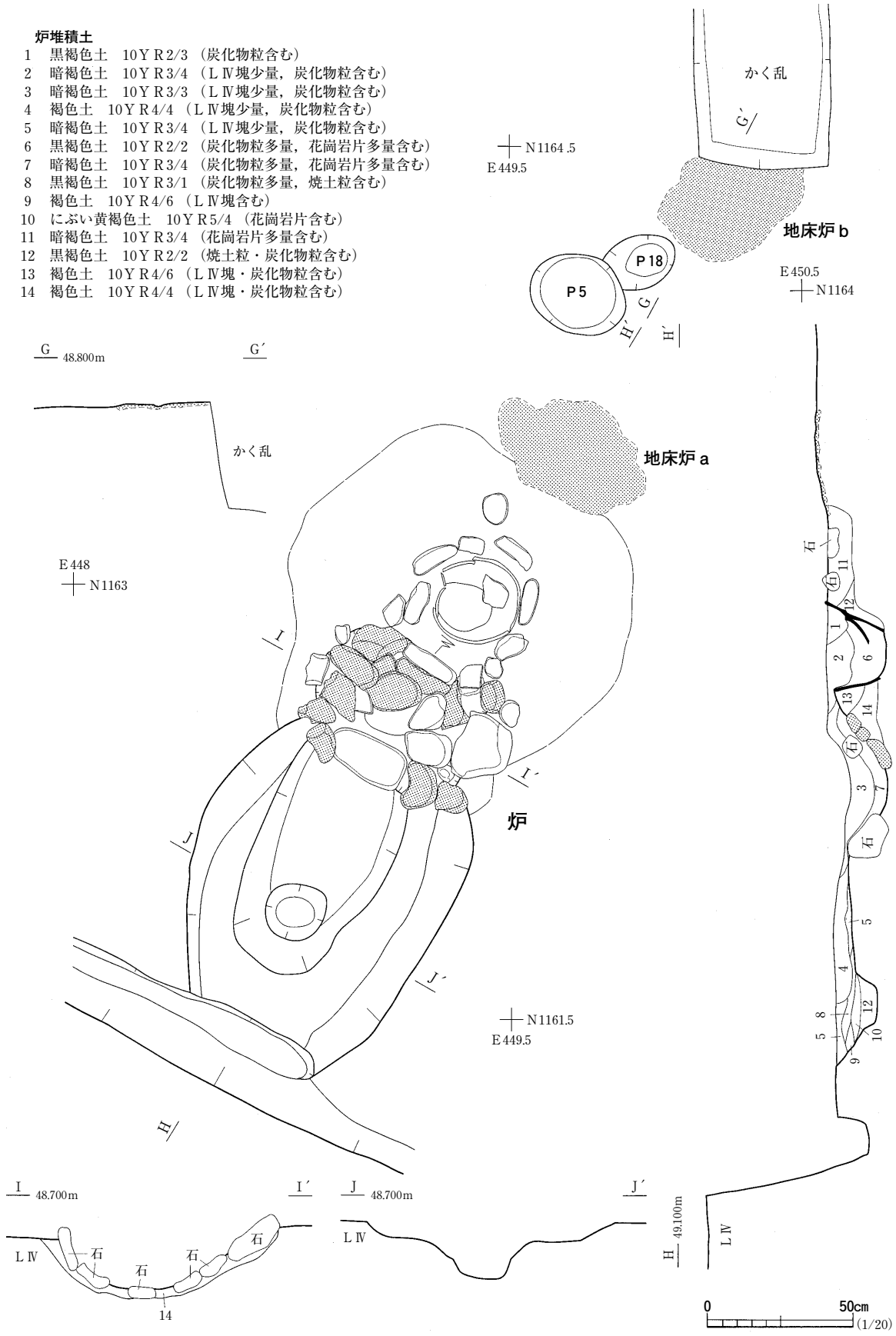


図133　95号住居跡（３）

複式炉は床面南側のほぼ中央に位置している。炉の長軸線は，住居の中軸線と一致し，南壁に直交している。炉の前庭部末端は南壁の壁溝に接している。全長は1.87m，最大幅は前庭部の中央で0.90mを測る。土器埋設部は深鉢形土器が埋設され，土器の周囲に，板状の河原礫の縁石が巡る。石組部は板状礫や亜角礫を組み上げ，前底部と石組部が接する箇所には幅の広い亜角礫を据えている。石組部の奥壁・側壁とも比較的緩やかに立ち上がる。底面には扁平礫が敷かれていたが，底面中央は礫が認められず，地山（ＬⅣ）が露出している。前庭部の上端での平面形は，楕円形を呈している。中段を有する構造で，それより抉れた部分の平面形は隅丸長方形をなす。断面形は床面から中段までの壁面は緩やかな傾斜であるが，中段から底面まではやや急斜に掘り込まれている。前庭部の底面下端は，径20cm，深さ５cmの小ピット状に掘り込まれている。

炉内堆積土は14層に分けられる。ℓ１・２・６は土器埋設部，ℓ３・７は石組部，ℓ４・５・８～10は前庭部，ℓ11～14は炉掘形の堆積土である。ℓ１～５は住居内堆積土ℓ７と類似していることから，住居廃絶後に自然堆積したと考えている。ℓ６・８には炭化物が多く認められた。

炉掘形は，土器埋設部を中心とした径1.15mの円形状に掘り窪められていた。床面から掘形底面までの深さは0.21mである。

床面には２カ所の地床炉が認められた。地床炉ａは，床面のほぼ中央，複式炉の北端に接する箇所に認められた。その規模は，長軸長0.57m，短軸長0.35mを測る。炉床は鈍い赤褐色を呈し，特に中央が被熱を受けたとみられ，硬化面が認められた。断割を行った結果，炉床の厚さは１cmで，複式炉の掘形よりも地床炉ａが新しいことがわかった。地床炉ｂは，住居の北東部，複式炉の長軸線上に位置している。その規模は，長軸長0.51mで，北側を撹乱により壊されている。炉床は鈍い赤褐色を呈し，周囲が被熱を受けたとみられ，硬化面が認められた。断割を行った結果，炉床の厚さは１cmであった。

ピットは床面から19基を検出した。Ｐ１～Ｐ４は位置や規模から本遺構の主柱穴と考えられる。その掘形の平面形は不整円形を呈し，その規模は0.43～0.58mを測る。これらのピット（主柱穴）の床面から底面までの深さは，Ｐ１で0.3m，Ｐ２で0.33m，Ｐ３で0.35m，Ｐ４で0.4mである。各ピットの芯々間距離はＰ１－Ｐ２間で2.03m，Ｐ２－Ｐ３間で2.40m，Ｐ３－Ｐ４間で1.68m，Ｐ１－Ｐ４間で2.68mを測る。Ｐ１・Ｐ４のℓ１・２には柱痕と思われる締まりのない暗褐色土・褐色土が堆積していた。

遺　　物（図134）

本遺構からは，縄文土器片392点，石器類９点が出土した。出土遺物のうち９点を図化した。

１は胴部に，多方向から縄文が施文され，胴部下半から底部にかけては，ミガキによる調整がなされた深鉢形土器である。

２～４・６は，凹線で縁取られた縄文帯により文様が構成された深鉢形土器の破片である。凹線枠の縄文施文は，縦方向回転である。２・３の凹線は，一度引いた後をなぞるようにミガキやナデの調整を施している。４は口縁部の下端に径2.1cmの孔があけられている。５は，口縁部無文帯の下

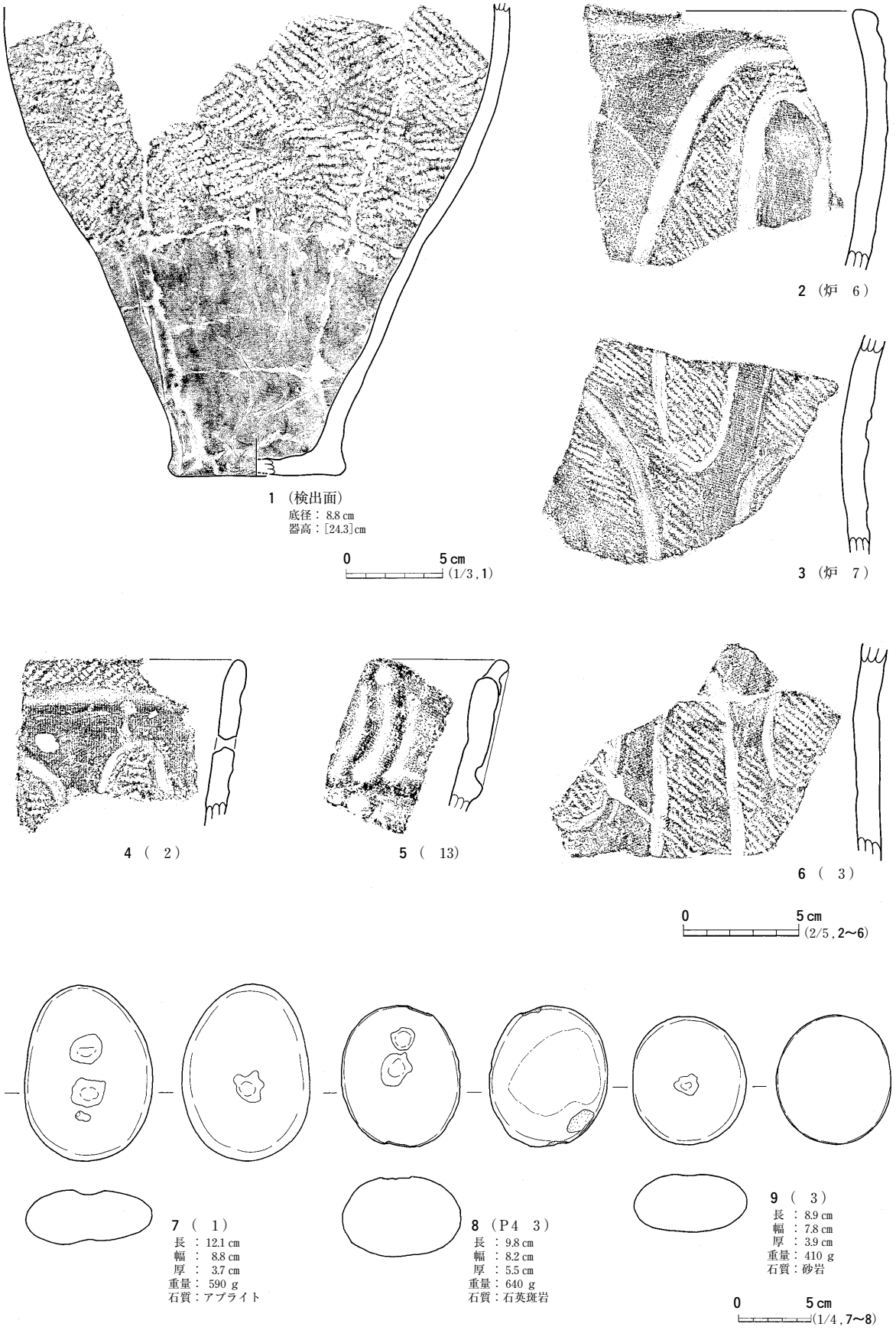


図134　95号住居跡出土遺物

位に隆帯が巡る。口縁部の垂下隆帯は「ノ」字状を呈し，隆帯中央には沈溝がある。６は単節斜縄文を地文とし，沈線で縁取られた内部を磨り消している。２～４・６は大木10式，５は綱取Ⅰ式に比定されるものであろう。

７～９は凹石である。器面中央に凹部が認められ，縁辺部は全周にわたって潰れている。８の裏面中央には磨り面が認められる。

ま　と　め

本遺構は，複式炉を有する竪穴住居跡である。複式炉の他に２箇所の地床炉が認められた。上屋構造は４本主柱により支えられていたものと推察される。所属時期は炉内出土土器から大木10式期に比定される。（門　脇）

96号住居跡　ＳＩ96

遺　　構（図135～138，写真12・133～138）

本遺構は南区の北西寄り，ＡＣ51・52，ＡＤ51・52の４グリッドにまたがって位置する。本遺構は基盤層であるＬⅣ層上面において円形状の広がりとして確認された。本遺構の遺存状況は比較的良好であった。

本遺構の調査は円形の広がりのほぼ中央部から，東西南北に向かって十字形の土層観察用の帯を残し掘り下げを開始した。その結果，本遺構の平面形は確認面での形状と異なり，南北長約5.5m×東西長約5.1mの丸味を帯びた四角形状として捉えることができた。

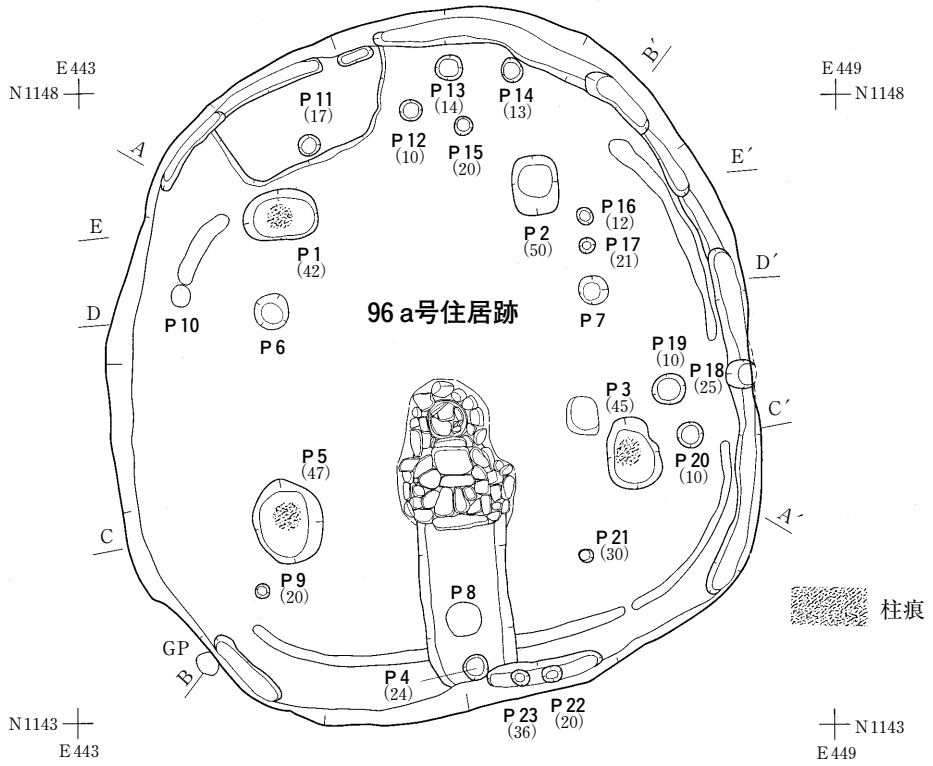
周壁は垂直に近い角度で底面から立ち上がり，残存した壁の高さは西側で最も低く底面から約22cm，東側では42cmほど残存していた。底面はＬⅣ層を概ね平らに削り整え形成している。

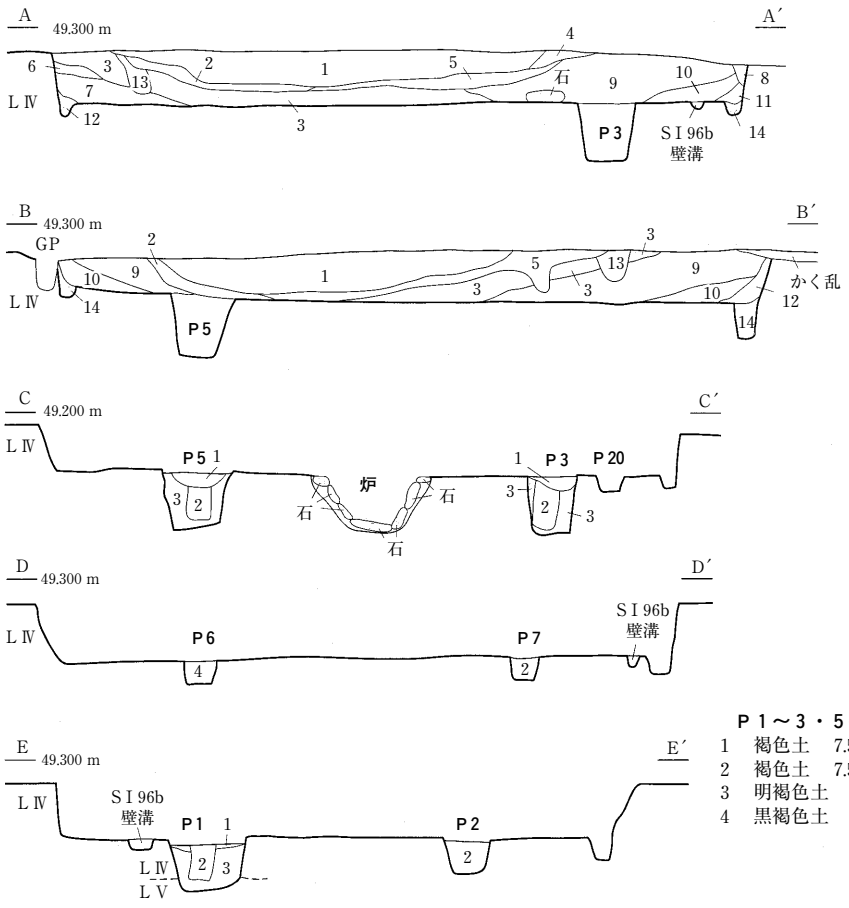
本遺構内の堆積土は14層に分かれる。その内，上層のℓ１は炭化物を多量に含み黒褐色をし，その土中からは大小さまざまな縄文土器片が丸い乾燥ザルにして10数個分出土している。ℓ１の下層では炭化物粒をほとんど含まなくなることから土色も異なり，土器片の出土量も激減するという違いが認められた。

底面上を移植鏝で丁寧に削り進めると，23基のピットの他に，壁際に沿って内外二重に存在する溝跡，そして南壁付近において数個の石が土中から顔を覗かしている長楕円形状の広がりも確認できた。

底面の調査は，長楕円形状の広がりの南北方向に土層観察帯を残し，西半分の掘り下げから実施し始めた。しばらく掘り下げると，北端から石に縁取られた内部から土器が，１個体埋め込まれているのを確認した。土器の上部が土中より顔を出す周囲の土は，熱により赤く変色していた。埋設された土器に南接する個所は底の丸い皿状にくぼみ，その法面及び底面には長さ15cm以上の板石や円礫が固定されていた。さらに，南側には底面から10cmほどの深さで細長く掘りくぼめられた部分が壁面に向かって接続している。

以上のことから，底面で確認された長楕円形状の広がりは炉跡である可能性が高くなった。この





96号住居跡堆積土（ＡＡ′・ＢＢ′）
1　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2（炭化物粒多量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒少量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/3
4　褐色土　7.5ＹＲ4/3
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
6　褐色土　7.5ＹＲ4/4
7　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒多量含む）
8　明褐色土　7.5ＹＲ6/4（ＬⅣ塊含む）
9　褐色土　7.5ＹＲ4/4（３㎝大のＬⅣ塊少量含む）
10　褐色土　7.5ＹＲ4/3
11　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（黒褐色土粒含む）
12　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（黒褐色土粒含む）
13　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2（炭化物粒含む）
14　褐色土　7.5ＹＲ4/3（壁溝）

Ｐ１～３・５～７堆積土（ＣＣ′・ＤＤ′・ＥＥ′）
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3
3　明褐色土　7.5ＹＲ6/4（ＬⅣ粒少量含む）
4　黒褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒多量含む）

0　2 m (1/60)

図135　96号住居跡（１）

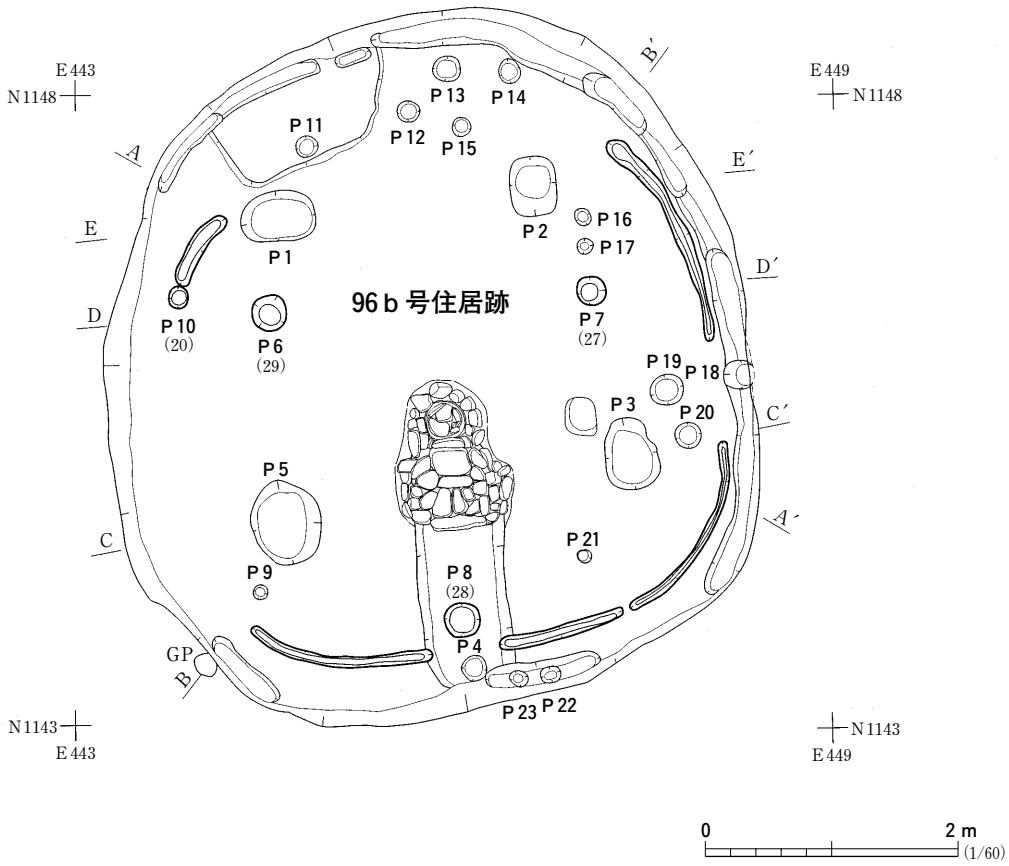


図136　96号住居跡（２）

時点で，本遺構は住居跡，底面は床面として再認識した。

炉跡は土器を１個体埋め込んだ複式炉で，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっている。炉跡の平面形は南北に細長いキノコのような形にもみえる。炉跡の規模は土器埋設部先端から壁付近にあるピットの南縁まで約236cmを計測する。炉跡の長軸方向は，真北に対しわずかに西へ傾いている。

炉跡内の堆積土は11層に分けられ，この内ℓ11は掘形埋土で，埋設土器の上半部から上層の土は土器内面からの熱により赤く変色していた。また，ℓ８・９・10は前庭部の底面から確認された２基のピット内の堆積土である。

炉跡を各部位別にみてみる。石で半円形状に縁取りされた土器埋設部は，底の抜けた深鉢形土器を１個体土中に埋め込み，その底面には大きさの異なる７個の偏平な石が敷かれていた。床面から埋設土器の底にある板石上面までの深さは28cmほどであった。

石組部の遺存状況は比較的良好で，石材として主に花崗岩の板石，円礫を多用している。ほとんどの石は熱を受け表面が薄ら赤く変色していた。石組部の規模は南北長75cm，東西長は90cmで炉跡の最大幅であった。土器埋設部との境には長さ55cmほどの大きな板石を斜めに固定していた。

前庭部は石組部の南縁から南へ120cmの長さで連結している。前庭部底面の中央部は硬く締まっている状況を確認した。前庭部底面の南寄りには直径20cmと25cmほどの２基のピット（Ｐ４・８）が

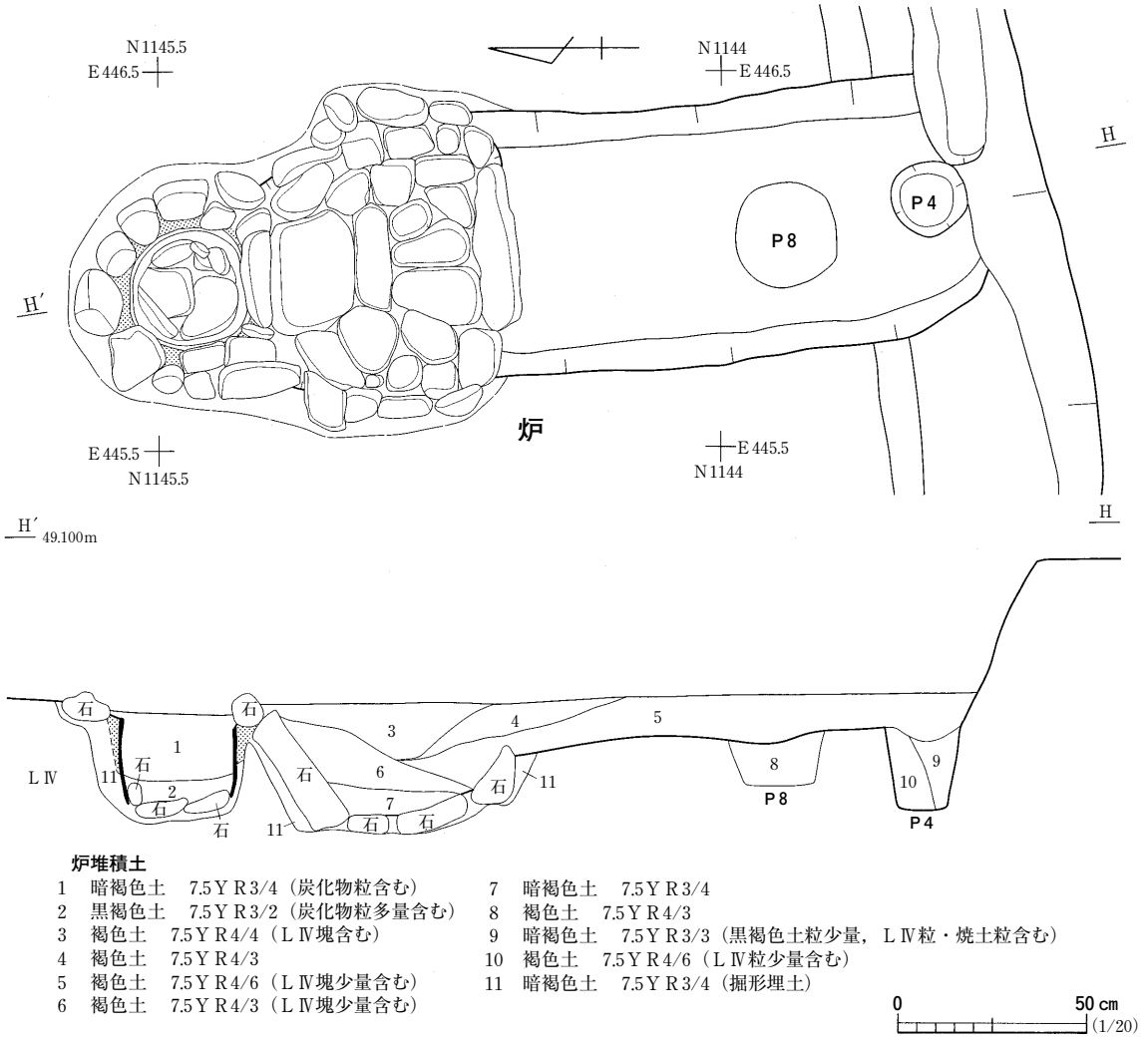


図137　96号住居跡（３）

南北に並んで掘り込まれていた。北側にあるピット（Ｐ８）は褐色土で一気に埋め戻されている。

床面上からは炉跡の他に，大小さまざまな23基のピット（Ｐ１～23），そして内外に２条巡る壁溝そして低い張り出し部を確認した。

床面からは23基のピットを確認した。平面形は円形ないし楕円形をしている。それらの規模は大小２種類に大別される。まず，Ｐ１～３・５の４基では，床面での規模は長径50～68cm，床面からの深さは42～50cmを測る。残りのピットの規模は長径10～30cm，床面からの深さは10～30cmを測る。これらの断面形状は確認面直径に比して底面直径の方が小さくなる箱形状を基調としている。柱の痕跡はＰ１・３・５から確認され，いずれも直径は20cm前後ほどであった。

内外に２条巡る壁溝は，両者とも断続的に設けられていた。内外の壁溝の幅は10～20cm，床面からの深さは８～28cmを測り，外側の溝跡の北側部分が最も深かった。

２条の壁溝と炉跡そしてＰ１～23のピットの配置を観察すると，本住居跡内で一度建て替えが実施されたことが分かる。結論から先に述べると，建て替え後の住居跡（図135　ＳＩ96ａ）に伴う施設は，まず外側の壁溝，炉跡，北西隅の張出し部，そして23基のピットの内，Ｐ１～５の５基の

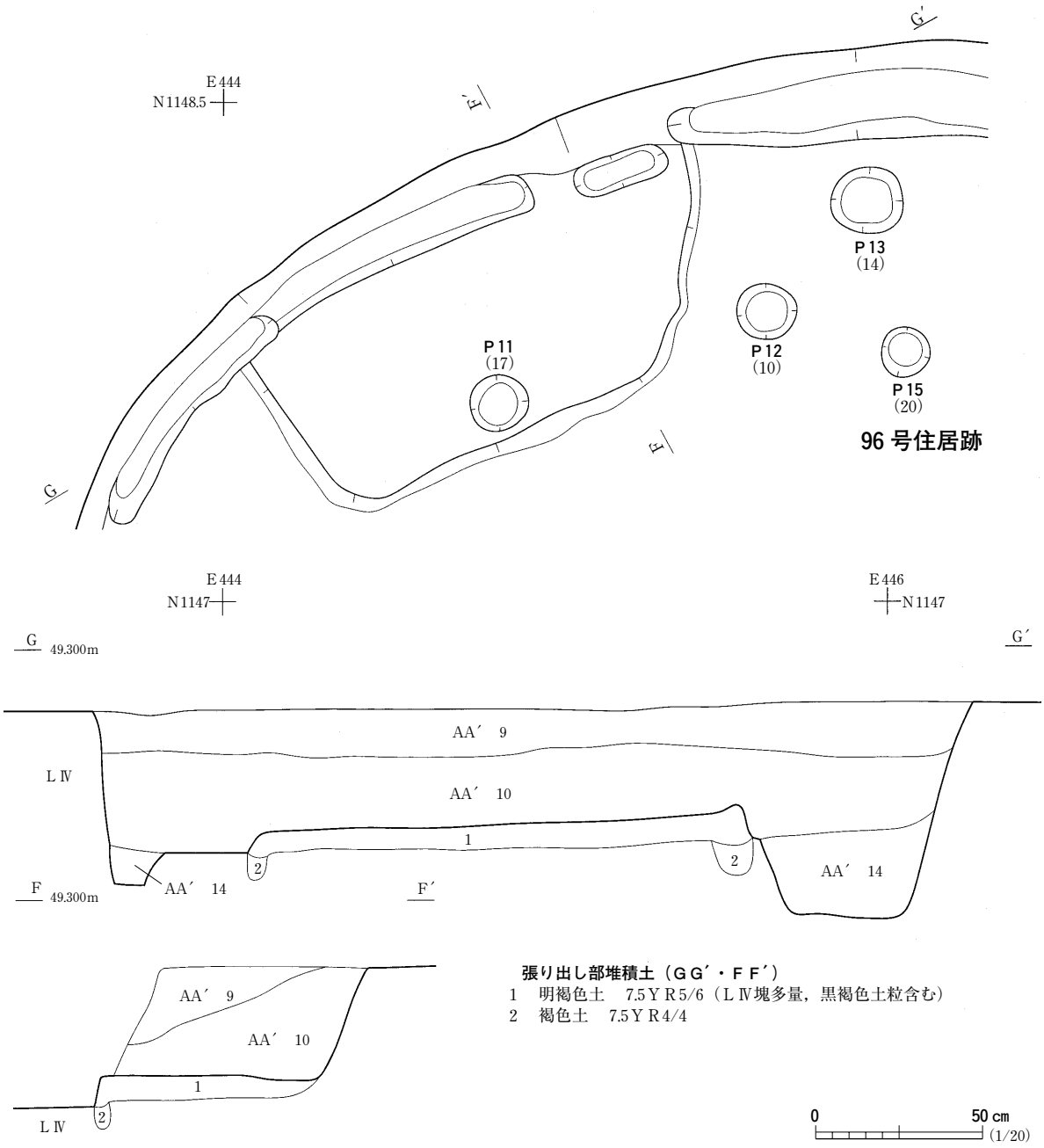


図138　96号住居跡（４）

ピットが確実に存在していた。

５基のピットは，炉跡を中心としてＰ１～５が五角形状に配置され，その規模と配置からこれらのピットは，建て替え後の柱穴と考えられる。炉の前庭部は建て替え時に，南へと延長され，その時点で前庭部底面にあった柱穴（Ｐ８）は埋め戻され，新しく（Ｐ４）の位置に据え返されたと考えられる（図137）。

建て替え後ＳＩ96ａのＰ１～５の柱穴間の距離をみてみると，Ｐ１東縁～Ｐ２西縁，Ｐ２南縁～Ｐ３北縁，Ｐ３南西縁～Ｐ４北東縁，Ｐ４北西縁～Ｐ５南東縁，Ｐ５北縁～Ｐ１南縁まで1.5～1.9ｍ，Ｐ３西縁からＰ５東縁までは約2.3ｍを測る。

建て替え後，屋内の北西隅に設けられた張り出し部についてみてみる。張り出し部は，壁面から床面中央部に向かってその幅を徐々に狭めて行く角の丸くなった台形状に作られている。床面からの高さは高いところで10㎝程度の低い段差を持っている。その張り出し部を断ち割った結果，段差は褐色土を積んで形成されている（図138　ＦＦ′）。さらに，張り出し部を形成する土を除去したところ，張り出し部裾に沿って浅い溝跡が存在する。張り出し部の裾は，溝跡の外縁まで達していた。溝跡の規模は幅６～12㎝，床面からの深さは４～６㎝を計測する。この細い溝跡の堆積土中からは，２個の磨石が突き刺さった状態で確認されている。

この段差のある張り出し部は，入口の階段とするには高低差が無さ過ぎることから，その機能には多少の疑問が残る。また，周囲を囲む溝跡の役目は，客土で形成されている張り出し部の法面の遺存状況が比較的良好だったことを考慮すると，この溝跡に薄い板状のものを立てていた可能性が指摘できる。

建て替え前の住居跡に伴った施設は，内側の壁溝，そしてＰ６～８の３基の柱穴があったと考えられる。この時，炉跡の位置はそのままに建て替えが行われたと思われる。建て替え前の柱穴は上記の３本柱穴以外に，Ｐ３・５の位置にも同規模の柱穴が存在した可能性が考えられる。

遺　　物（図139・140，写真223・230・233）

出土した遺物の大多数は縄文土器片で，その他に磨石，石斧，石鏃，剝片などもわずかながら確認されている。出土した縄文土器片の大半は住居跡内堆積土最上層，炭化物粒を多量に含んで黒褐色のℓ１中から採取されている。縄文土器片の多くは深鉢形土器の胴部片（破片数にして約900点）で，出土した口縁部及び底部の破片数は胴部片の１割程度であった。出土した破片も完全な形まで接合できるものは皆無で，大きくても両手を合わせた程度の破片にしか接合できなかった。

特に，ℓ１から出土した縄文土器片の外面の文様は，全面に縄文が転がしてあるものが多いものの，内部に縄文を加えた沈線文の見られる，大木10式・称名寺式段階の破片も少なくなかった。確認できた口縁部片の特徴は，端部の直下に幅１㎝ほどの太めの沈線を一条巡らし，その下位全面に縄目を施文するものも見られる。頸部から「く」字状に外傾する口縁部外面には，内部に縄文を転がした沈線文を描いている。

出土遺物の内，炉跡に埋設された土器，床面から出土した遺物から，形状の判明するもの計26点を図139・140に示した。

１は炉跡に埋設されていた深鉢形土器で，口縁部，底部を欠損している。外面全体には縦方向に縄文を施している。黒ずんだ灰褐色の土器の胎土には２㎜ほどの礫を少量含んでいる。

２は床面北西隅から，口を下にして出土した小型の深鉢形土器である。暗褐色の土器の形状をみると，胴部は底面から外傾し，口縁部付近にてわずかに外反している。

３～10の８片は住居跡内の堆積土ℓ１及びℓ３より出土している。

３・５・７は，外面に内部に縄を転がした曲線で図柄を構成されている。これら３つの破片は大木10式段階の深鉢形土器と考えられる。

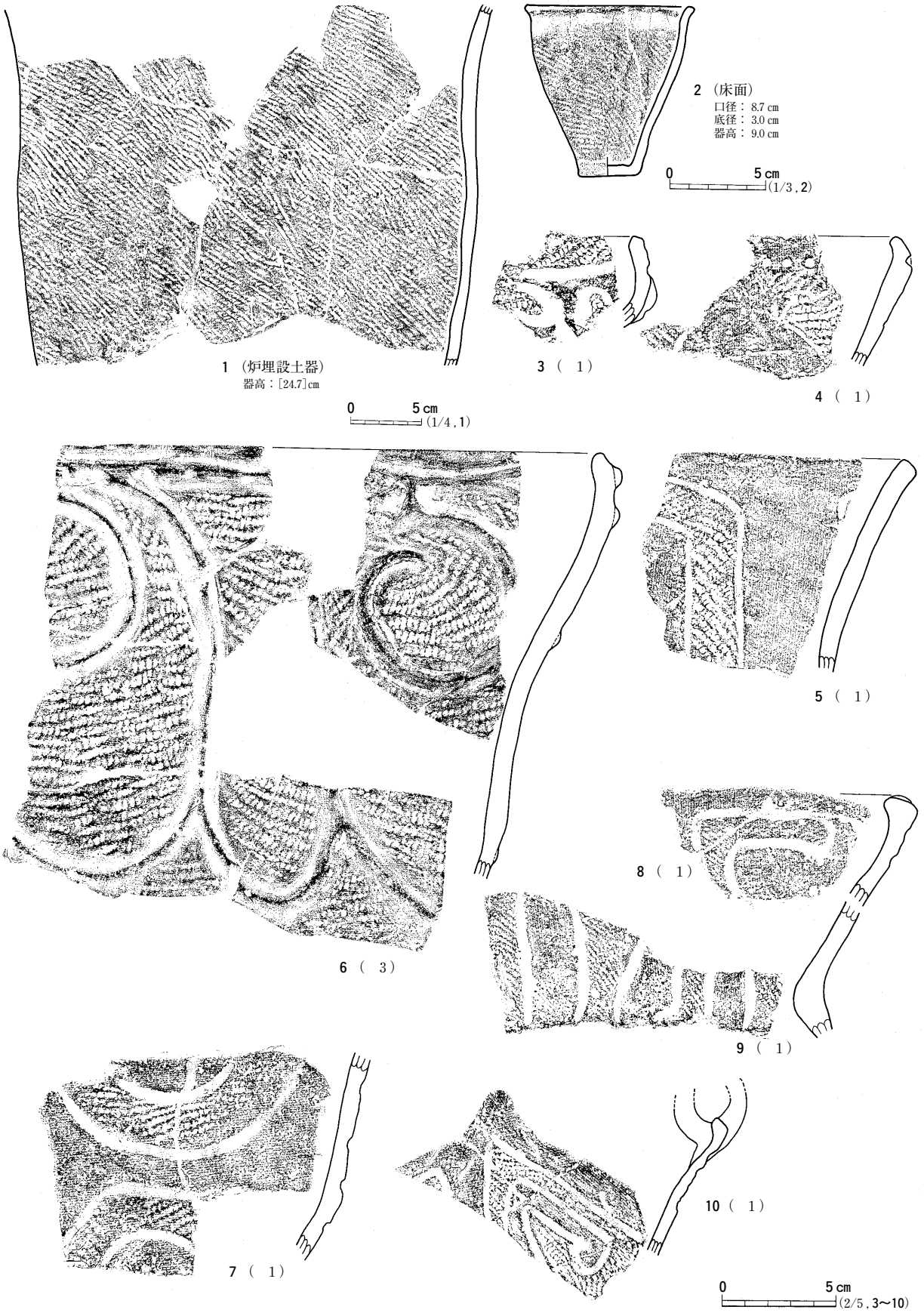


図139　96号住居跡出土遺物（１）

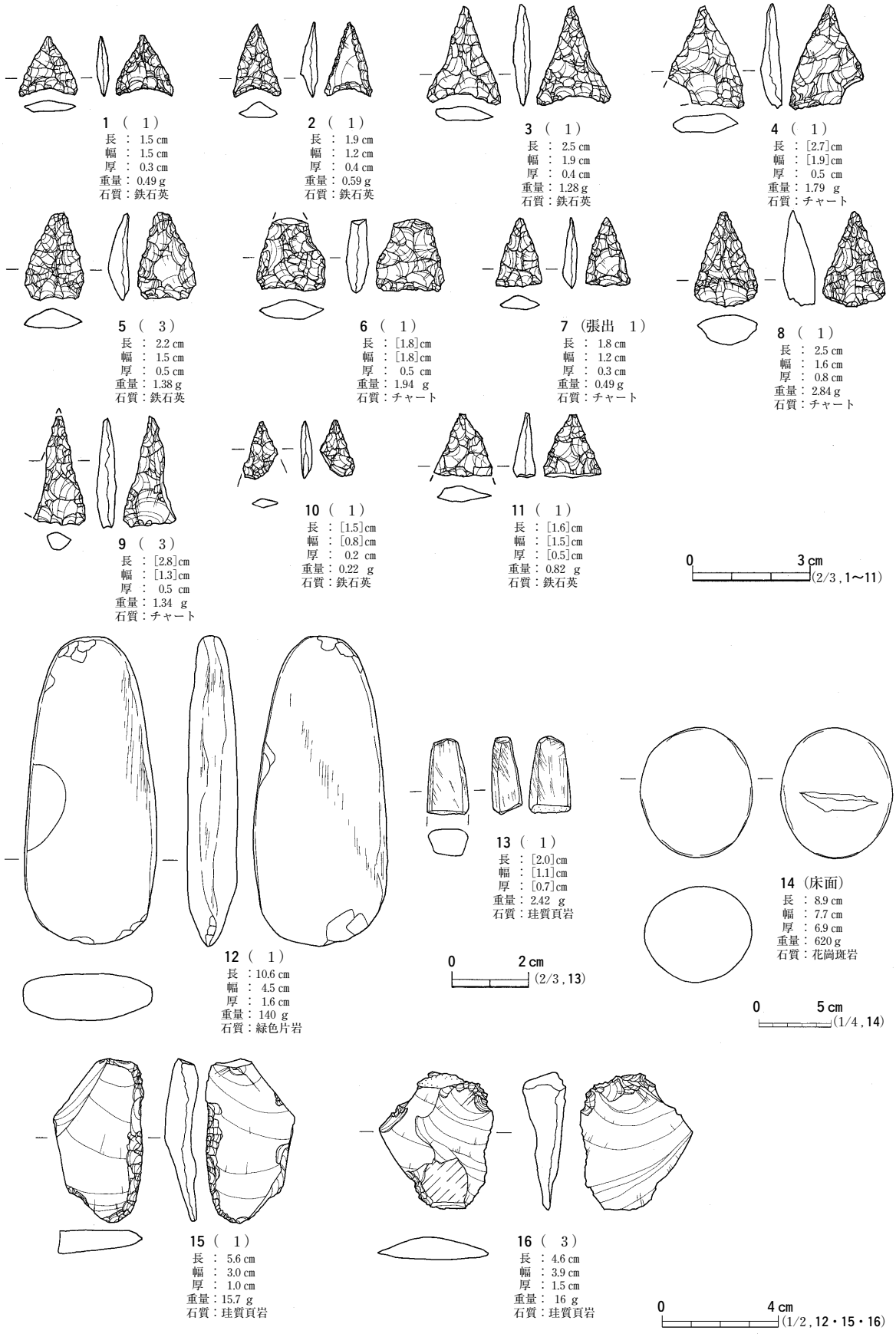


図140　96号住居跡出土遺物（２）

６は，加曽利ＥⅣ式系統の深鉢形土器の破片である。外面の文様をみると，口縁部端と水平にして低い隆線を貼り付ける。口縁部端下にも低い隆線で渦巻き模様を描き，そして隙間を埋めるようにＬＲの縄を転がしている。

４・８～10の４片は，称名寺式段階の深鉢形土器の口縁部である。その内，８・９は接合個所は無いが，色調，胎土から同一個体のものと思われる。４つの破片はいずれも外面に内部に縄を転がした曲線で図柄を構成されている。

図140－１～11は住居跡内の堆積土ℓ１中より出土した石鏃である。10～12のように欠損が著しいもの以外の石鏃は，その基部形状によって，４種類に大別される。まず１～４では，その基部が内側に湾曲している。５・６の基部は内側にわずかに湾曲する。７・８の基部はほぼ平らに形成される。最後に９は，外側へわずかに突出する。

12・13の２点は，石材と大きさの異なる磨製石斧である。13は刃部は欠損するものの，各面が光沢が出るほど丁寧に磨き仕上げられていた。

14は滑らかな磨り面をほぼ全面に見られる丸い磨石である。

15・16は片方の長縁部，または部分的に２次的な剝離が施される剝片である。

ま　と　め

本遺構は角の丸くなった方形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。

96号住居跡内には，１基の複式炉と，５基の主柱穴，断続的に巡る壁溝そして低い張り出し部を備えている。本住居跡は，炉跡の位置を変えずに，床面規模を大きくするように一度建て替えが行われていた。複式炉は，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっている。土器埋設部には底の抜けた１個体の深鉢形土器を埋め込み，その底には偏平な石を使って敷いている。

また，床面の北西隅には，その役目は不明な，屋内に張り出した低い壇上の施設を確認できた。

本住居跡内の堆積土に注目してみると，堆積土最上層には，土器片と炭化物粒を多量に含んだ黒褐色土（ℓ１）がレンズ状に堆積していた。このような事例は，31・41・44号住居跡でも見られた。

本住居跡がその役目を終え廃絶した後，屋内に周囲から土が流れ込み，廃絶後の本住居跡は一時期，クレーター状のくぼみと化していたことが想像される。このくぼみは，当時周囲で生活を営んでいた縄文時代の人々が「ゴミ捨て場」として使用していたものと想定される。その結果，くぼみの上層には土器片や石鏃片と共に，有機質を多く含む黒褐色土が堆積したものと想定される。

このℓ１中から出土した石鏃の大半は，住居跡内の堆積土ℓ１中より採取されている。また，同じ層中から出土した縄文土器片をみると，大木10式段階の土器片と共に，称名寺式段階，縄文時代後期前葉頃の土器片も少なからず散見された。

本住居跡の機能時期は，外面に縄文のみを施した炉埋設土器の特徴から時期を特定するのは困難であり，複式炉を伴うことから類推するに，大木９ないし10式段階，縄文時代中期後・末葉頃と考えられる。

（阿　部）

97号住居跡　ＳＩ97

遺　　構（図141・142，写真139～142）

本住居跡は調査区北西部にあたるＡＢ47グリッドに位置し，検出層位はＬⅣである。本住居跡の周辺にある縄文時代の住居跡は74・77・95号住居跡である。特に，95号住居跡とは並行した位置にあることと，住居の規模もほぼ同じであることが見受けられる。このことから，有機的な関係が窺われる。

住居跡の北壁はかく乱により欠損し，全体の平面形は不明であるが，平面形は隅丸方形であったと思われる。規模は南北が現状でほぼ4.8m，東西が５ｍである。周壁の残りは悪く，壁高が最も高いところで28㎝程度であった。周壁の立ち上がりは概ね緩やかに外傾する。

堆積土は６層に区分した。ℓ１～４には住居が掘り込んでいるＬⅣ，もしくは炭化物が含まれている。さらに，ℓ５・６は住居を掘り込んでいるＬⅣと近似した土質である。このことから，本住居跡は人為的に埋められたものと考えている。床面は概ね平坦であった。

住居施設は炉，主柱穴が４基，ピットが31基，壁溝などを確認した。壁溝はわずかに西壁の一部を掘り込んでいるのみであった。壁溝の規模は幅が18～40㎝，深さが５～25㎝である。

主柱穴はＰ１～４である。そのなかのＰ２のみから柱痕を確認した。Ｐ１とＰ２の中点とＰ３とＰ４の中点を結ぶ線が住居跡の主軸であり，真北に対して28°ほど東に傾いている。主柱穴の平面形は隅丸方形あるいは不整形で，長軸は45～70㎝，深さが35～55㎝である。主柱穴のうちＰ１～３にはピットが重複していた。ピットは数多く掘り込まれていた。特に，住居跡の南東部が著しい。ピットの規模は，長軸が20～55㎝，深さは13～52㎝であった。そのなかでもＰ９・16・26・33やＰ８・16・18・27などは，位置関係から建て替えされた主柱穴とも考えている。

炉は住居跡の南半部から検出した複式炉で，土器埋設部・石囲部・前庭部によって構成されていた。炉の主軸は住居跡のものと一致する。

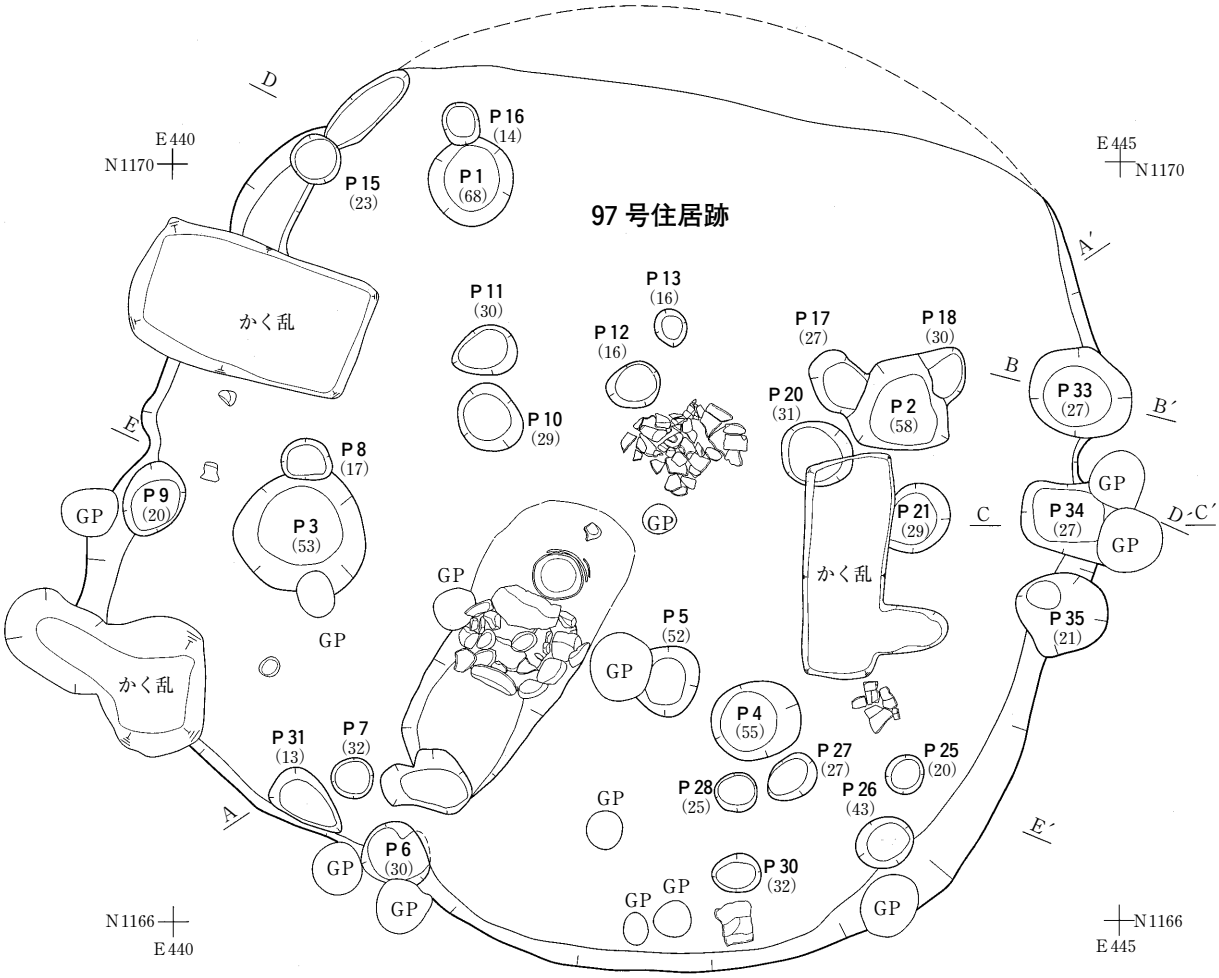
炉の規模は，埋設土器の上端から前庭部の端にあるピットまでの長さが160㎝。幅は石組部の中程で64㎝である。前庭部の末端は南壁の近くにある。土器埋設部には１個の深鉢が埋設され，さらに北側にも深鉢の破片を２片埋設していた。

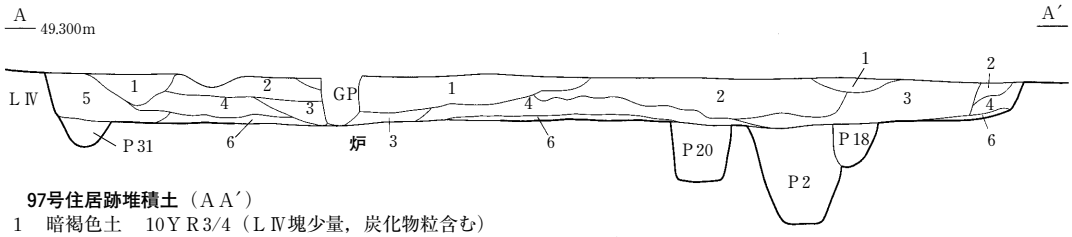
石組部は奥壁には幅の広い板状礫を１個配し，緩やかに立ち上がる。側壁は板状礫と円礫を積み上げ，急角度で立ち上がる。底面には３個の幅の広い板状礫が３個敷かれ，隙間に小円礫を詰めていた。

前庭部は隅丸方形をなし，床面からの掘り込みは７㎝ほどで浅い。さらに，前庭部末端には不整形の掘り込みがなされていた。土器埋設部を断ち割ったところ，埋設土器内の炭化物層は８～10㎝であった。炉の掘形は全長が190㎝，幅は70㎝であった。

遺　　物（図143・144，写真223・224・230）

住居跡からは縄文土器片が327点出土した。





97号住居跡堆積土（ＡＡ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊少量，炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒少量含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒少量含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ塊含む）
6　黄褐色土　10ＹＲ5/6

Ｐ 33堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒多量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6
3　黄褐色土　10ＹＲ5/6

Ｐ34堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒多量含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4

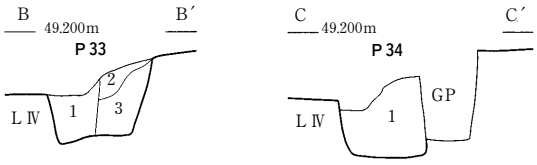
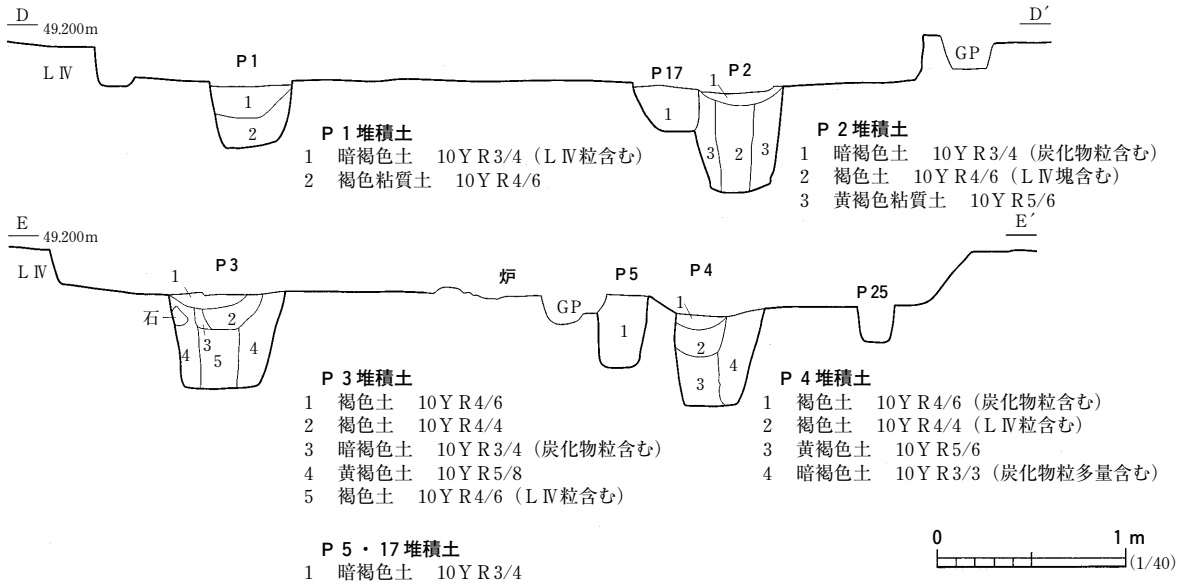


図141　97号住居跡（１）



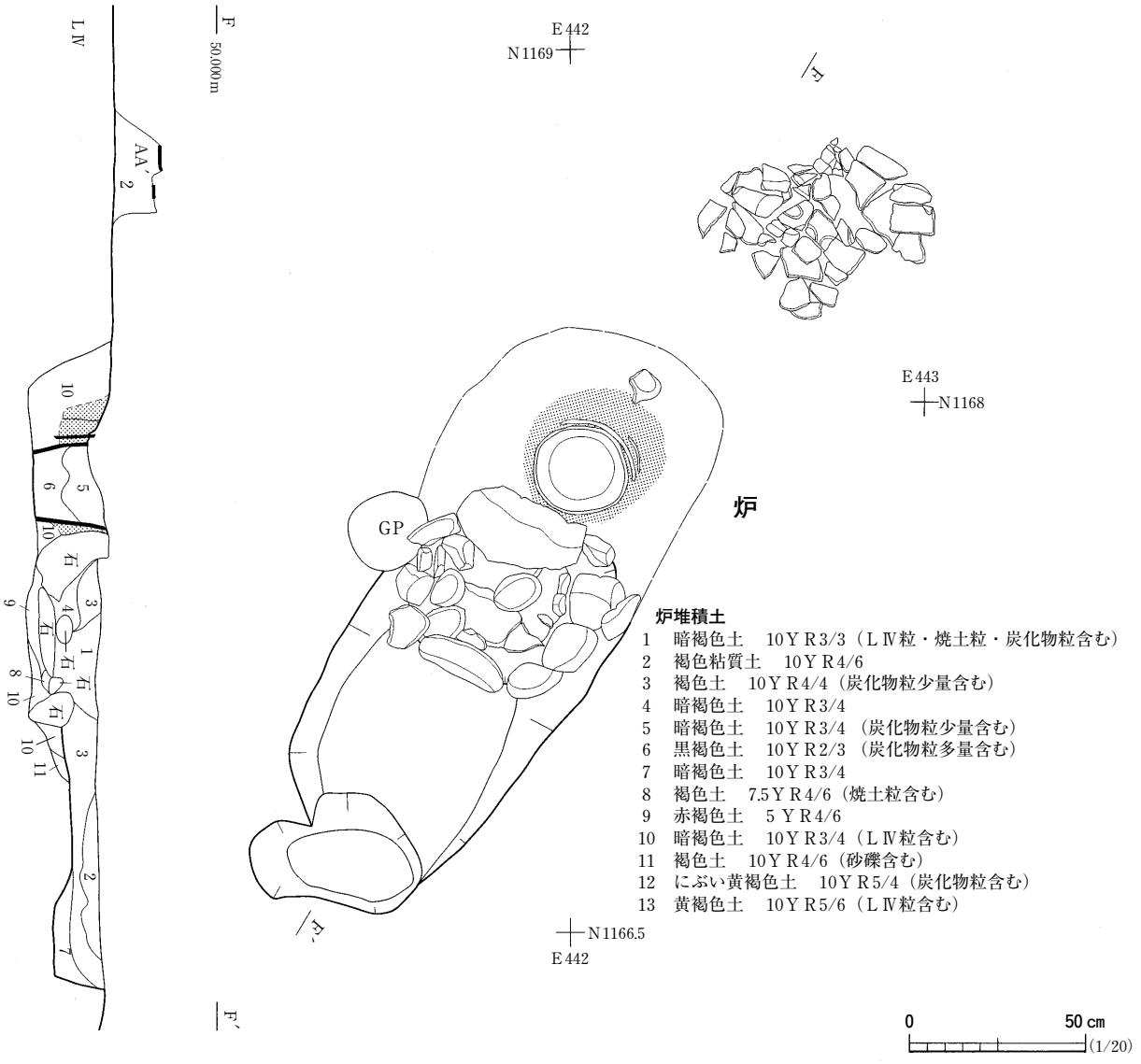


図142　97号住居跡（２）

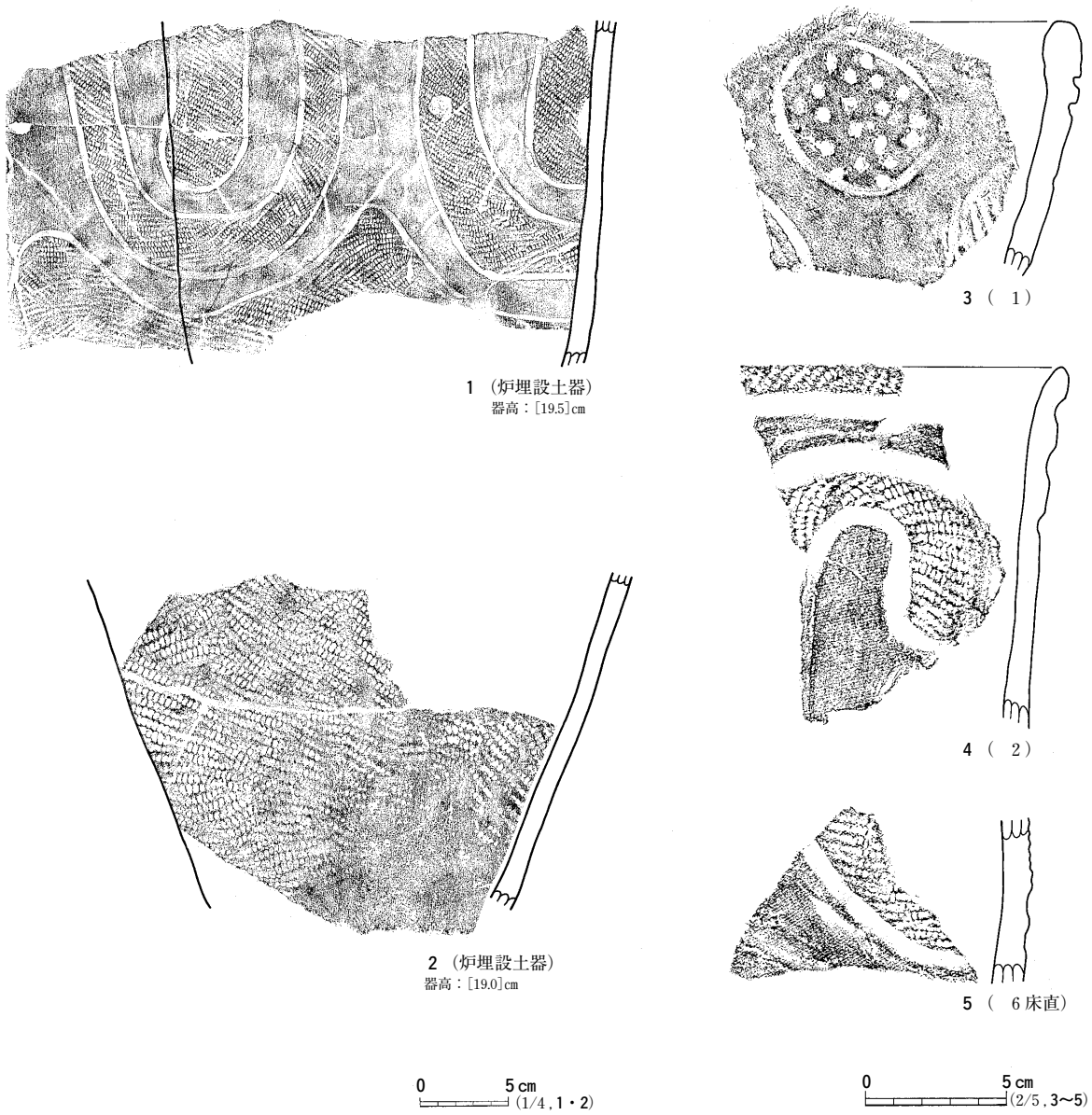


図143　97号住居跡出土遺物（１）

図143－１は炉埋設土器の北側に埋設されていた深鉢の破片である。口縁部と胴部下半底部を欠損し，約50%の遺存度である。文様は胴部上半に沈線を区画したなかに縄文を充填して「U」字状のものを描き，胴部中程には沈線で波状文を描いている。内面の器面はよく整えられている。内面の一部に器面が剝離した状況がみえるが，これは火を受けた痕跡であろう。文様の特徴から大木10式を考えている。

図143－２は炉埋設土器である。胴部上半と底部を欠損する。文様は地文の単節斜縄文のみである。図143－３は土器埋設部の近くから出土したもので，深鉢の口縁部の破片である。文様は沈線により楕円形が描かれ，その中には刺突文がなされている。図143－４・５，図144－１・２は住居跡中央部のℓ２から破片の状態でまとまって出土した。図143－４は口縁部の部分で，沈線が区画されたなかに縄文を充填して文様を描いている。５も同様である。図144－１は，胴部下半から底部が欠損す

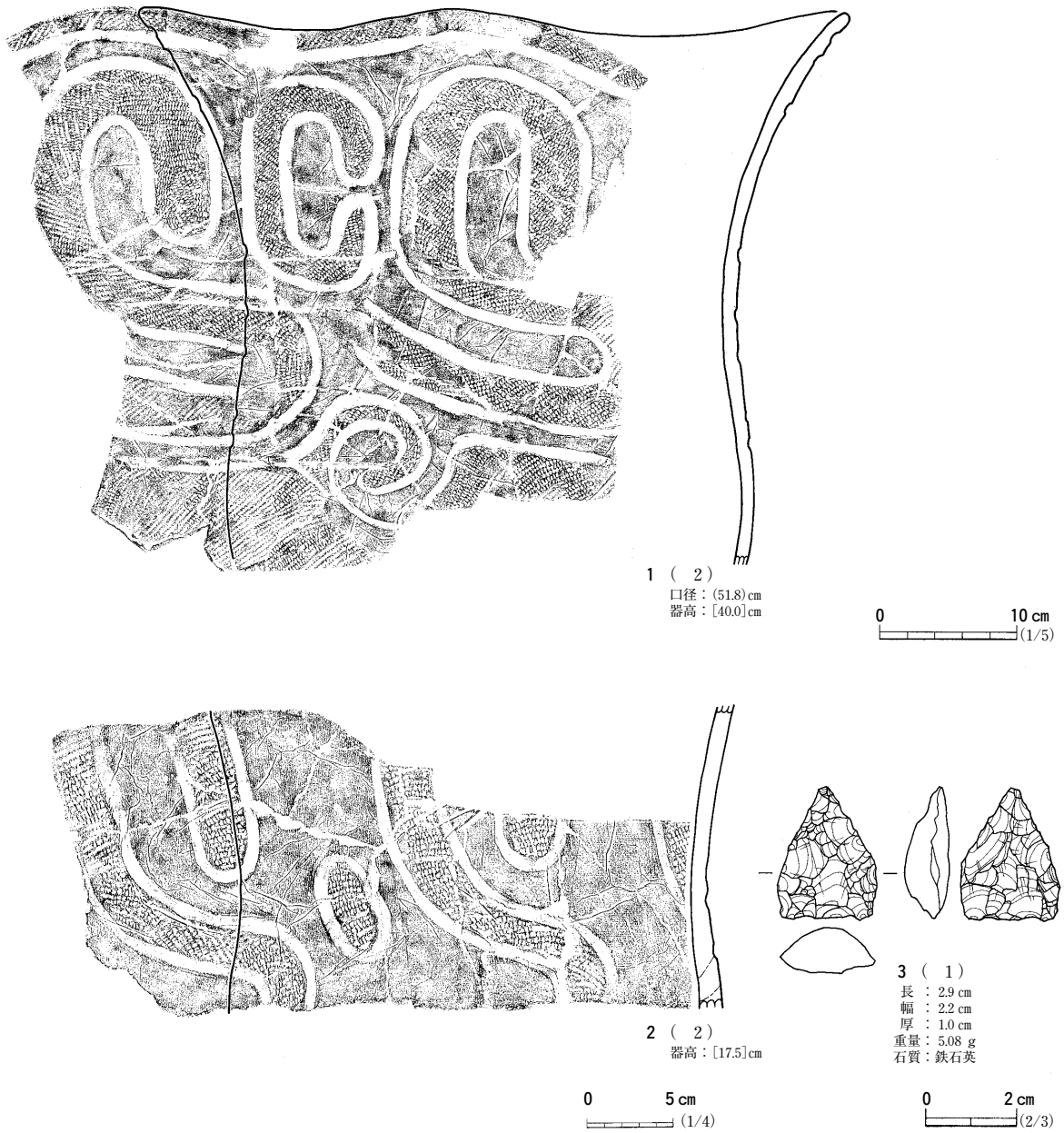


図144　97号住居跡出土遺物（２）

る。口縁部は波状をなし，一条の沈線が巡っている。文様は沈線で「Ｓ」・「Ｃ」字状文が描かれ，その中には縄文が充填されている。胴部の中程には沈線で一条の沈線と連結した渦巻文がなされていた。図144－２は図144－１と同じ「Ｓ」字状文がなされているが，その間には楕円文がなされている。

図143－３は石鏃で無茎式のものである。

ま　と　め

本住居跡は複式炉を有するもので，埋設土器の時期は大木10式に属し縄文時代中期末葉にあたる。主柱穴は４本で構成されていた。さらに，堆積土からはまとまった状態で大木10式期の土器が出土していた。

（吉　野）

98号住居跡　ＳＩ98

遺　　構（図145・146，写真12・143・144）

本遺構は，調査区北側のほぼ中央部にあたるＡＥ51・ＡＦ51グリッドに位置する竪穴住居跡で，検出層位はＬⅣである。本住居跡の周辺にある縄文時代の住居跡は96・102号住居跡である。調査区内での住居跡分布からみると，北西部の住居跡群から続く半円状の分布域を本住居跡も構成しているようである。

住居跡は検出した段階で，すでに床面が露出している状態であった。東・西壁の一部は欠損するものの，平面形は隅丸方形と思われる。住居跡の主軸は真北に対して40°ほど東に傾いている。規模は南北が4.4m，東西が4.2mであった。周壁の残りは極めて悪く，壁高が最も高いところでも10

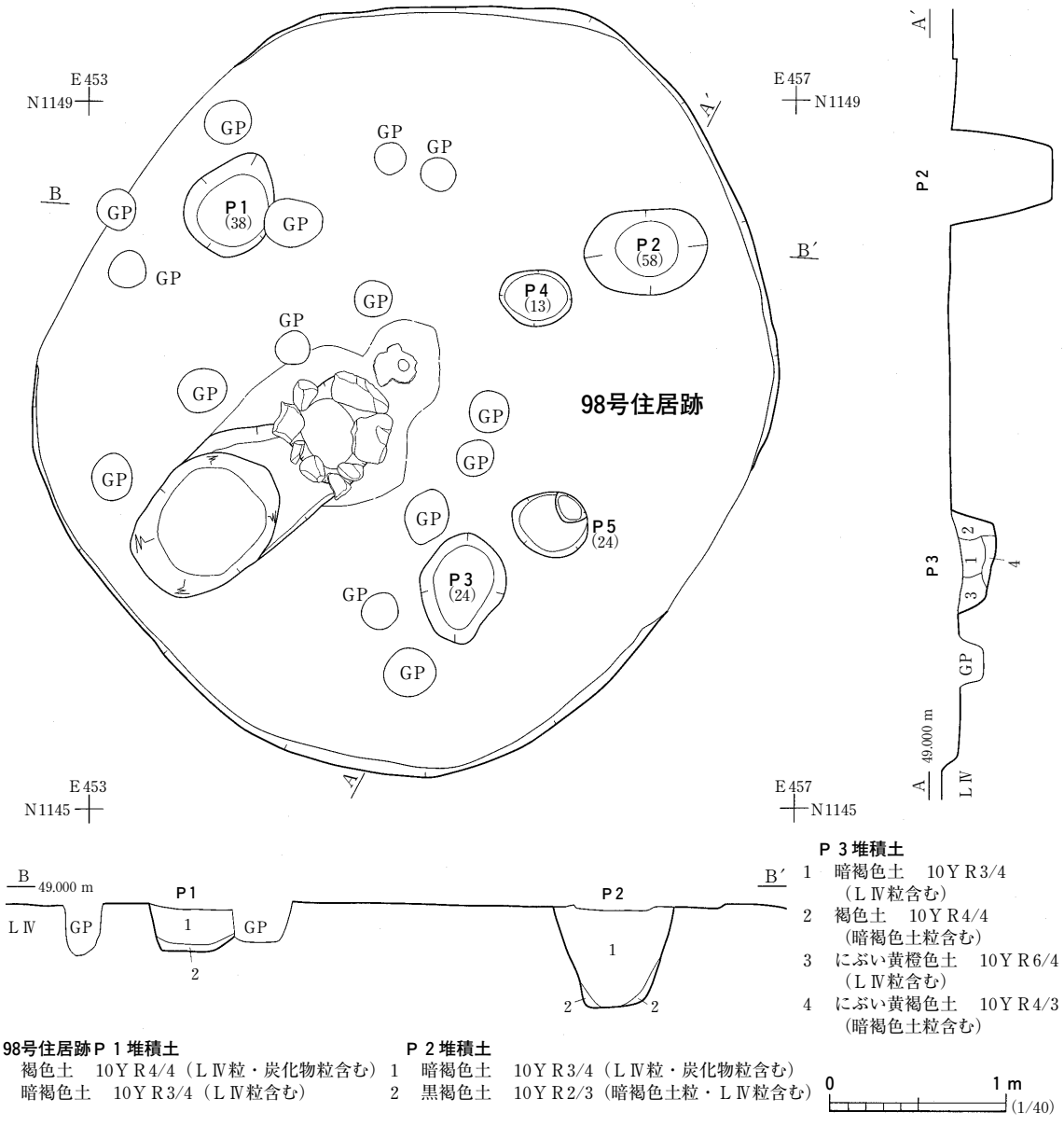
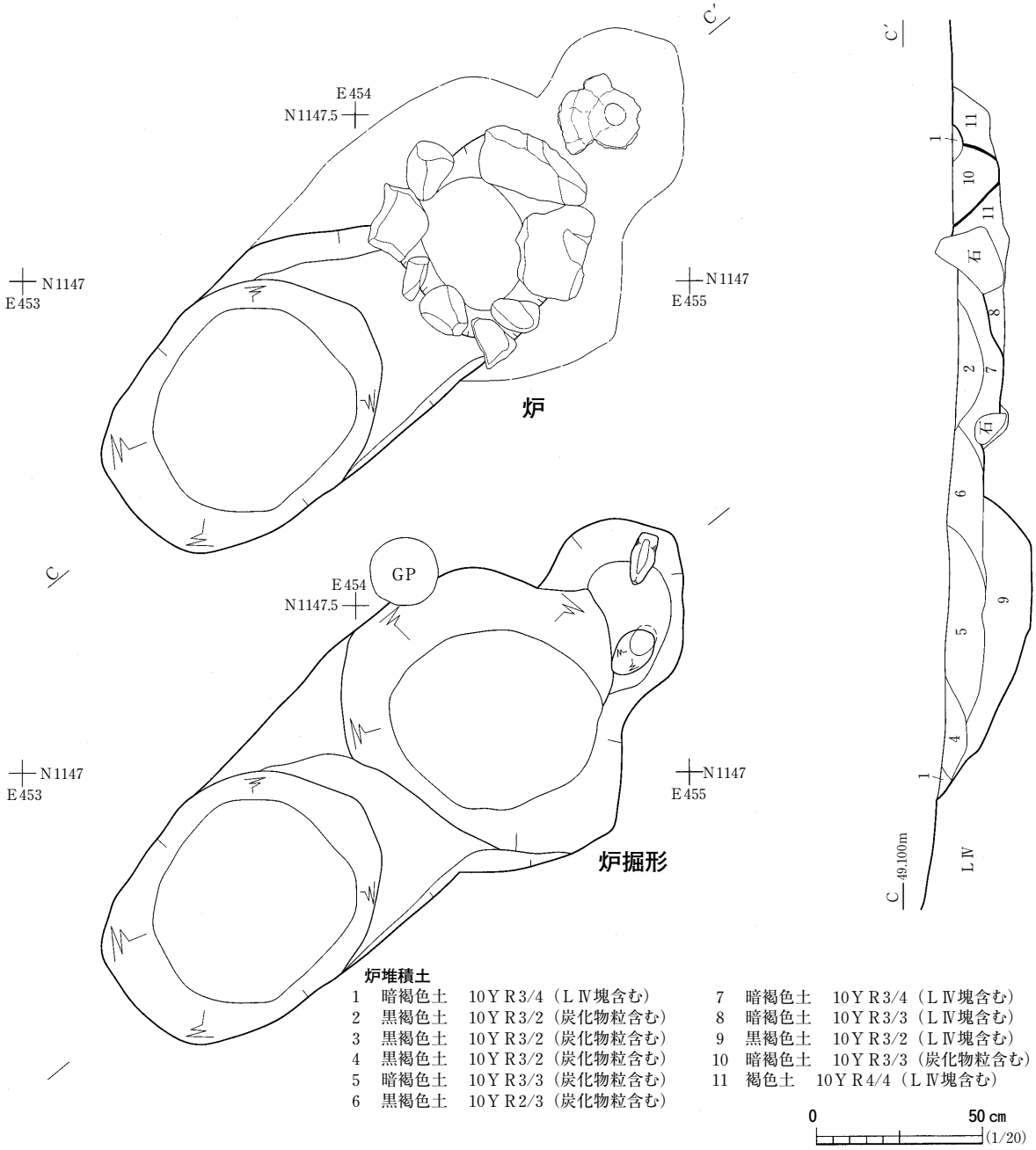


図145　98号住居跡（１）



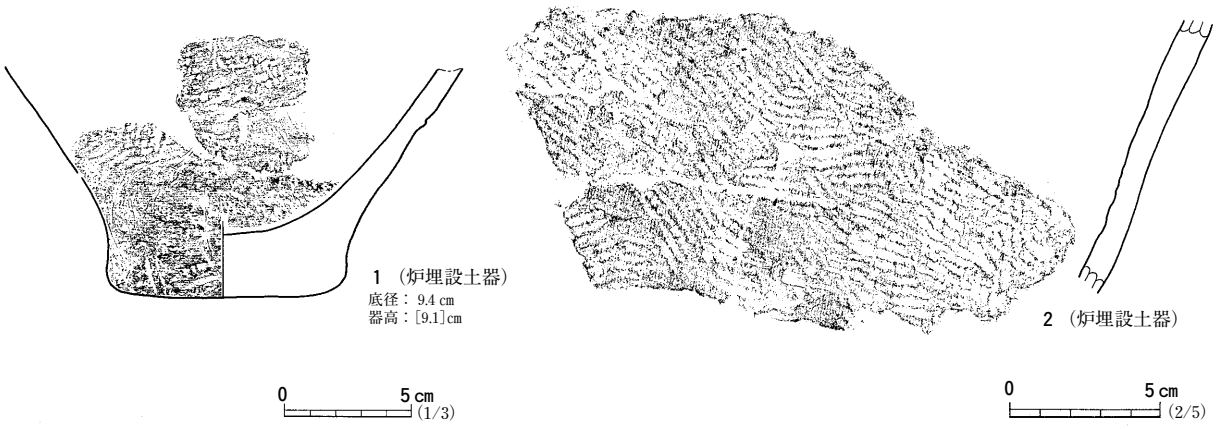


図146　98号住居跡（２）・出土遺物

cmに満たなかった。

住居施設は炉，主柱穴が３基，ピットが２基で，壁溝は作られていなかった。

主柱穴のＰ１～３からは，いずれも柱痕を確認していない。Ｐ１とＰ３の中点とＰ２を結ぶ線は，住居跡の主軸とは一致せず，やや東側に傾いている。各主柱穴の平面形は不整形で，長軸は65～70cm，深さが22～62cmである。主柱穴の他に２基のピットを確認している。ピットの規模は，長軸がほぼ42cm，深さは13～58cmであった。ピットのなかでＰ３の北東側にあるＰ５は，Ｐ１との対応関係から主柱穴の建て替えとも考えている。

炉は住居跡の中央部から南壁際にかけて検出した複式炉で，土器埋設部・石組部・前庭部から構成される。炉の主軸は住居跡と一致する。全長が195cm，幅は石組部で65cm，前庭部が68cmである。土器埋設部には不整形の掘形のなかに，１個の深鉢が埋設されていた。埋設土器は上端部が部分的にしか残っていなかった。掘形と埋設土器との間には褐色土を埋めていた。石組部は幅95cmの不整形をなしている掘形のなかに，礫を方形状に配していた。石組部には土器埋設部との境に，幅の広い板状礫を１個配していた。側壁は１個の板状礫を貼り付けていたが，底面には礫が敷かれていなかった。前庭部の末端は南壁の近くにあり，形状は隅丸方形である。床面からの深さは14cmほどであった。土器埋設部を断ち割ったところ，埋設土器内には炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。炉の掘形は各部に相当する部分に掘り込みがなされていた。規模は全長が215cm，幅は95cmである。

遺　　物（図146）

住居跡からは縄文土器片が28点出土した。

図146－１・２は炉埋設土器であり，同一個体である。遺存状態はあまりよくはない。１は胴部下端から底部にかけてのもので，２は胴部である。

ま　と　め

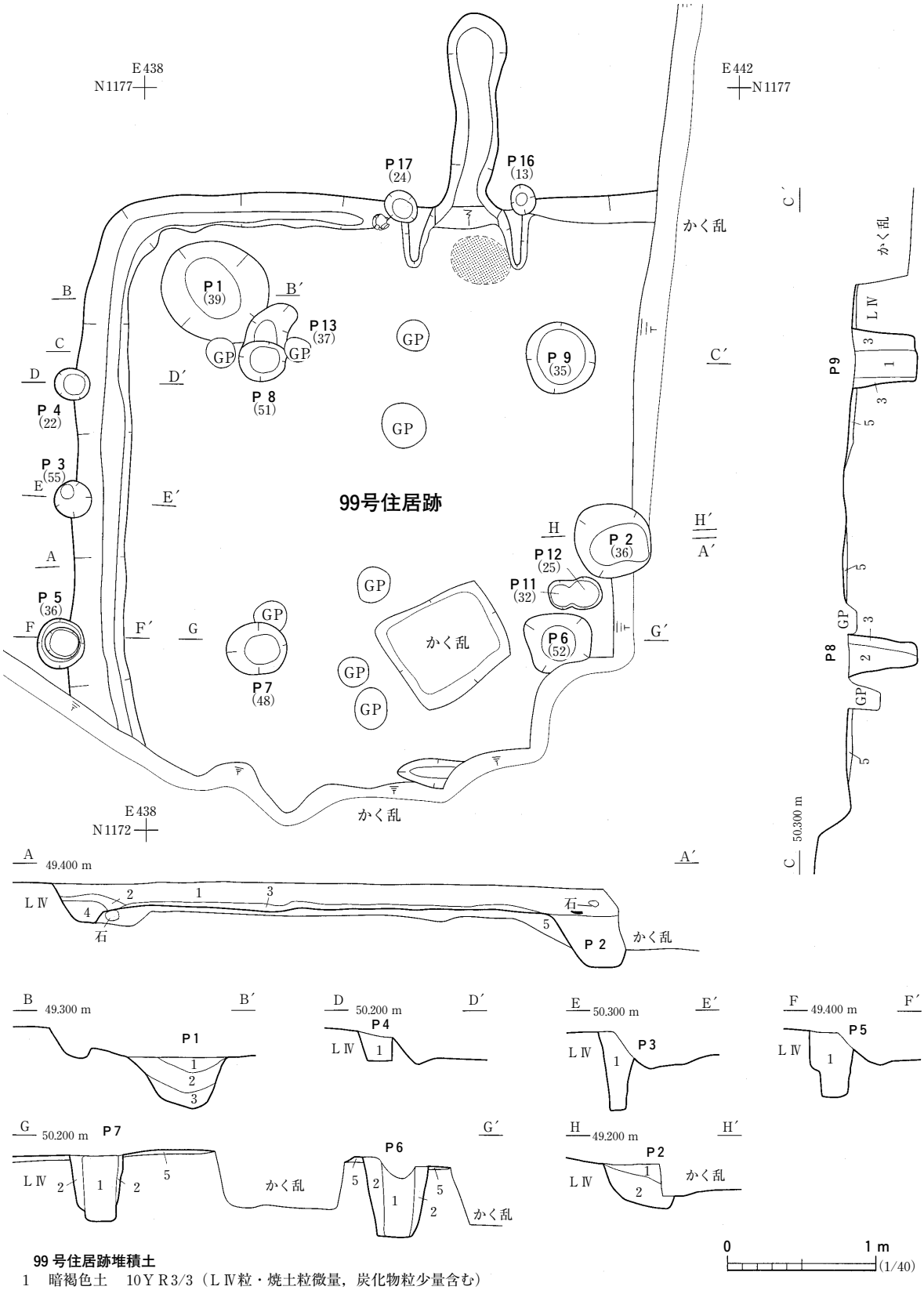
本住居跡は複式炉を有するもので，時期は出土遺物からは明確に判断することができないが，調査区から検出した複式炉を持つ住居跡の時期を参考にすると，縄文時代中期後葉から末葉にあたるものと考えている。主柱穴は３本で構成されていた。（吉　野）

99号住居跡　ＳＩ99

遺　　構（図147～149，写真145・146）

本遺構は調査区中央部のＡＢ45・46，ＡＣ45・46グリッドに位置している。検出面はＬⅣ上面で，周辺の地形は緩やかに西に傾斜しているもののほぼ平坦である。本遺構は東壁と南西壁及び南壁が後世の耕作に伴う削平またはかく乱を受けて失われている。本遺構は1276号土坑と重複して検出され，本遺構の北壁が1276号土坑の輪郭を明確に切っており本遺構が新しいことを確認した。本遺構は同時期の遺構が集中する調査区北部からは少し離れたところに位置する。付近には主軸方向が一致する97号住居跡が位置している。

本遺構の検出時の状況は，住居跡の北壁とその中央に取り付く煙道部，及び西壁の輪郭が確認で



99 号住居跡堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・焼土粒微量，炭化物粒少量含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ塊・炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒・焼土粒含む）

Ｐ１～９堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）

図147　99号住居跡（１）

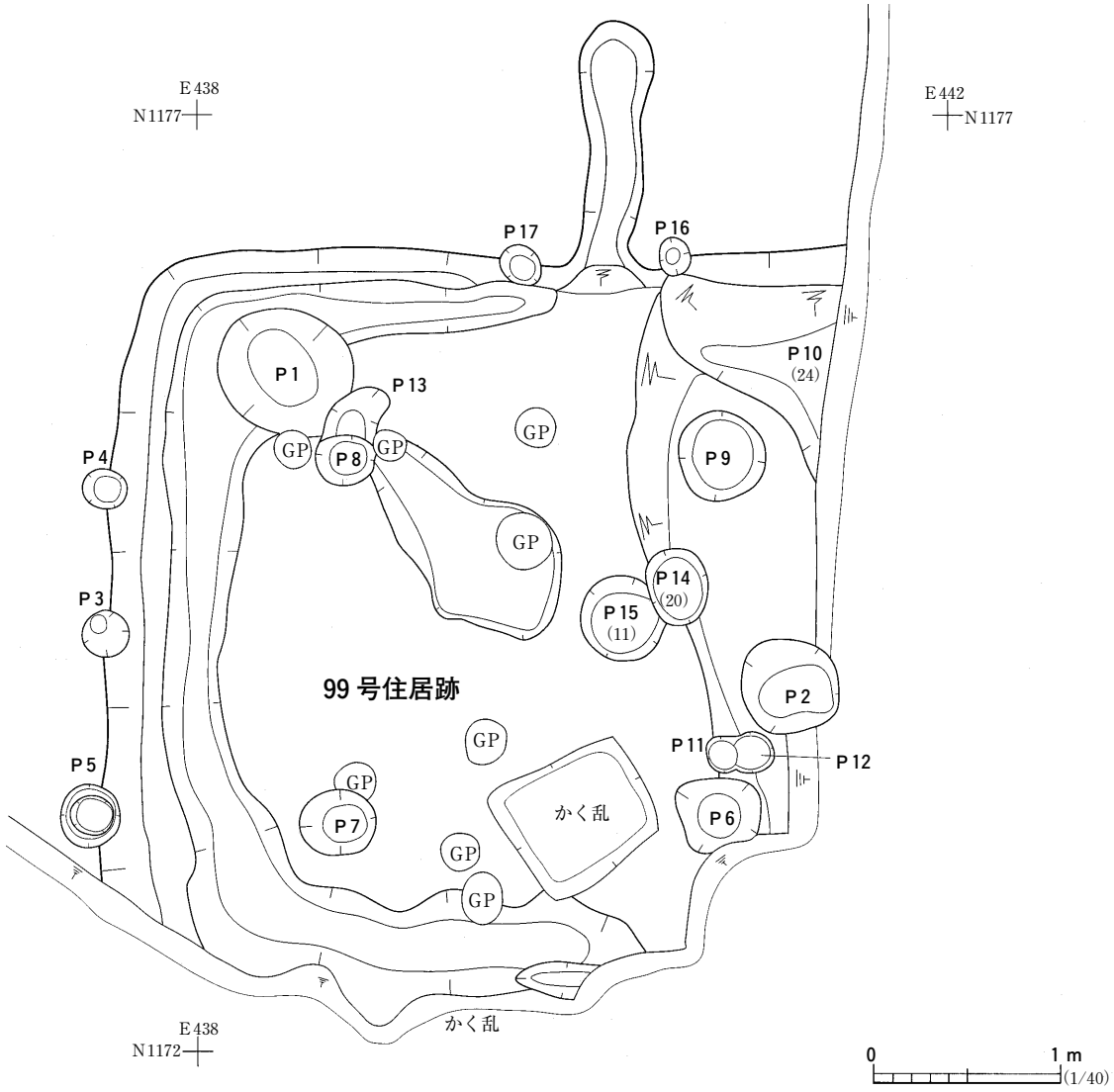
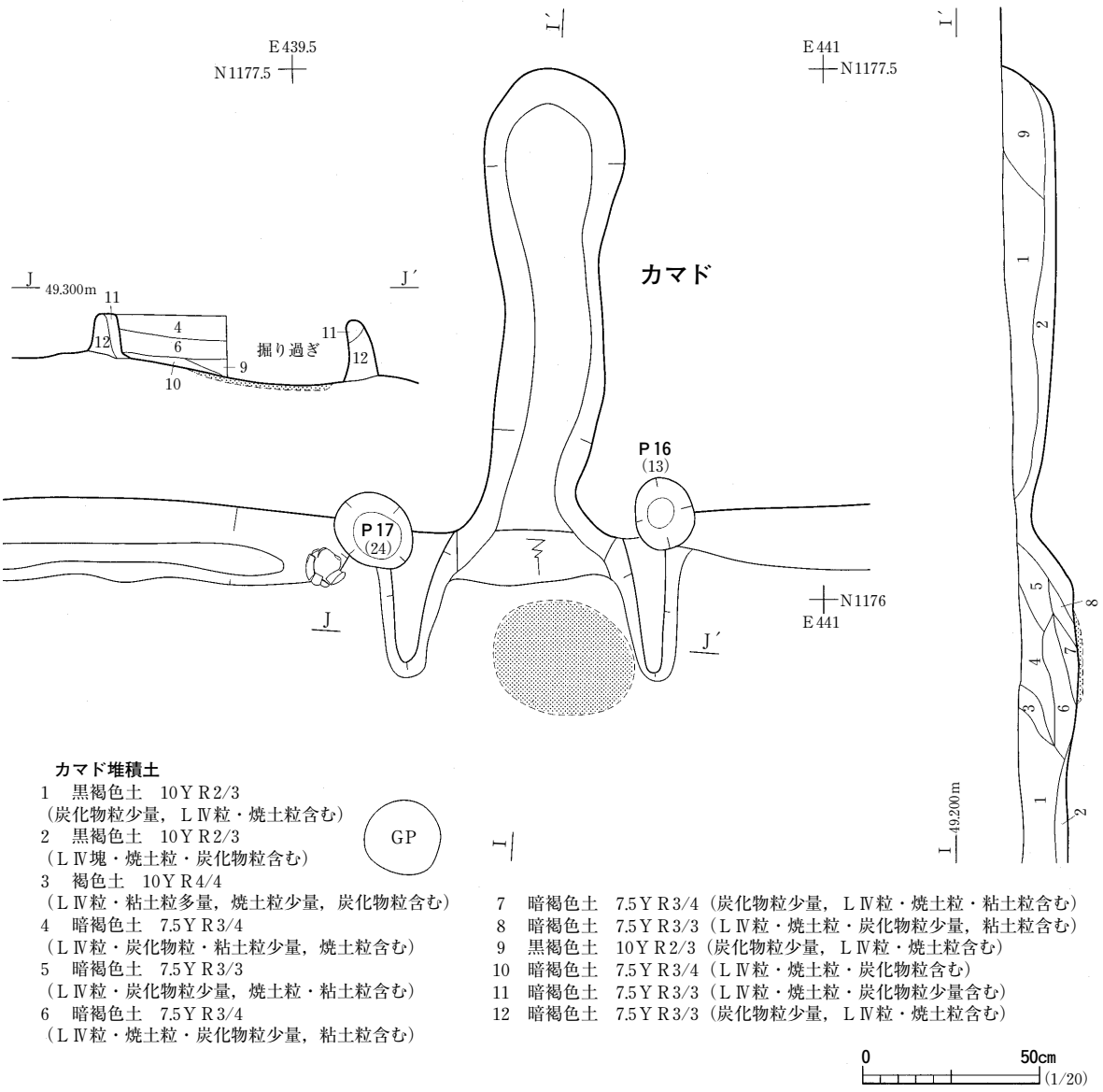


図148　99号住居跡（２）

きた。南壁はかく乱を受けていることもあって確認できなかった。西壁と平行する軸の方向及びそれに交差する方向に２本の土層観察用ベルトを設定し掘り込みを開始した。

住居内堆積土はℓ１～５の５層に分けられる。ℓ１は表土化した暗褐色土で堆積土の多くを占める。また面的にも住居内を広く覆っている。ℓ２・４は住居内の溝や窪みに流入した堆積土で住居西壁付近にのみ存在する。いずれも人為的な堆積土の痕跡が認められないので自然堆積と考えられる。ℓ３はℓ１と同じ暗褐色土主体であるが，床面との間にＬⅣ塊を少量含むので分層して区別した。しかし，床面を掘りすぎた可能性は否定できない。ℓ３はＬⅣと類似した粘土質の貼床土でほぼ均一にうすく貼ってつき堅めてある。掘形の直上にあるℓ５は炭化物・焼土粒・ＬⅣ粒をまだらに含む暗褐色土主体の締まりの弱い人為的な掘形内埋土である。

本遺構は東側・南側・南西側の四分の一程度がかく乱を受け失われており，本来の平面形は遺存しないが，床面から検出された主柱穴Ｐ８が西壁から約120㎝，北壁から約110㎝であること，また主柱穴Ｐ６・７・８・９を結ぶ線が方形を呈していることから推測すると主軸方向が約４ｍのほぼ



カマド堆積土

1　黒褐色土　10ＹＲ2/3
（炭化物粒少量，ＬⅣ粒・焼土粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3
（ＬⅣ塊・焼土粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4
（ＬⅣ粒・粘土粒多量，焼土粒少量，炭化物粒含む）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒・炭化物粒・粘土粒少量，焼土粒含む）
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒・炭化物粒少量，焼土粒・粘土粒含む）
6　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒・焼土粒・炭化物粒少量，粘土粒含む）
7　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒少量，ＬⅣ粒・焼土粒・粘土粒含む）
8　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・焼土粒・炭化物粒少量，粘土粒含む）
9　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒・焼土粒含む）
10　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・焼土粒・炭化物粒含む）
11　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・焼土粒・炭化物粒少量含む）
12　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒・焼土粒含む）

図149　99号住居跡（３）

方形を呈するものと考えられる。主軸方向を西壁で計るとＮ４°Ｅでほぼ北を示す。検出面から床面までの深さは壁が最も遺存するところで20㎝前後である。周壁の立ち上がりは比較的急で機能当時の状態を遺存していると思われる。床面は住居の中央部を中心に踏み締まりが確認できる。中央部が高く東西周壁方向に降りていく。若干の凹凸があるもののほぼ平坦である。踏み締まり範囲は中央部とカマド周辺の南北方向に約3.3m，東西方向に約3.4mに施されているが，壁に沿うような形で暗褐色土の掘形内埋土が部分的に露出している。

壁溝はカマド周辺を除いた北側と西側に巡り，かく乱を受けている南側にも一部遺存している。本来は全周していたものと思われるが明らかではない。検出時には壁溝内に暗褐色土の堆積土があったが，機能当時の壁溝の様子は明らかにできなかった。幅は北側で最大12㎝，西側で最大16㎝，深さは４～６㎝である。

住居内施設はカマド１基とピット17基を検出した。床面から検出されたピットはＰ１～９，16・

17で，貼床を除いた段階で検出されたピットがＰ10～15である。

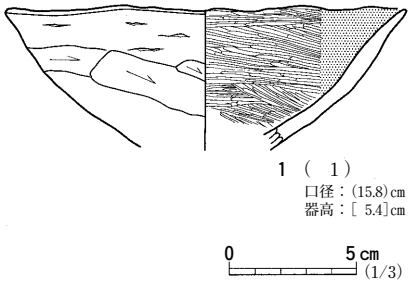


図150　99号住居跡出土遺物

カマドは全体の位置関係からすると北壁中央に配されていたものと思われる。検出時カマドは明確な輪郭を残していなかったので，つぶれていることを想定して掘りこんだ。堆積の状況を確認できるように断面を残した。カマド内堆積土はℓ５～14の10層に分けられる。カマド内堆積土のℓ５～10・12は燃焼部の堆積土である。ℓ５は炭化物・焼土粒を含む褐色土主体，ℓ６～10・12は炭化物・焼土粒を含む暗褐色土主体である。いずれも褐色の粘質土を含み重なるように堆積している。ℓ11は煙出しから流入したと思われる黒褐色土，ℓ13・14は袖部の構築土とも考えられるが，炭化物や焼土粒をまだらに含む暗褐色土主体で締まりが弱いことから，袖部の基底部の構築土が崩れたもの，または天井の崩落土が起源となっているものと推される。カマド内の堆積状況から，住居廃棄の際袖部または天井は人為的に壊されたものと推察する。燃焼部の規模は奥行き約52cm，幅約50cm，燃焼部中央が若干窪んでいる。焼面範囲は長径約40cm，短径約32cmで，底面下１～２cmまで被熱による赤色変化が確認された。焼面から煙道部へ約35°の傾斜で立ち上がっている。煙道は長大で，長さ約130cm，幅約28cm，検出面からの深さは煙道中央部で約14cmである。煙道部の床面は主軸方向に向かって中央が窪む形で比高差は７cmであるが，ほぼ平坦である。

床面から検出されたピットのうち住居上屋にかかわると考えられる主柱穴はＰ６・７・８・９の４基である。床面上では柱痕のみが確認されただけで，貼床を除いてからの精査となった。Ｐ６～９は主軸方向に平行するように方形に配置されている。いずれも径34～45cmの隅丸方形で深さは39～52cmである。それぞれのピットの間隔はＰ６・７とＰ８・９の東西間はともに約200cm，Ｐ６・９とＰ７・８の南北間はともに約195cmである。柱穴の掘形は４基とも掘形底面まで達している。掘形埋土はいずれもＬⅣ粒を含む暗褐色土である。Ｐ１は径74cmの円形で深さが37cm，Ｐ２は遺存する部分で長径72cmの楕円形で深さ36cm，どちらも形状や位置的に見て貯蔵用のピットであると考えられる。カマド脇に位置するＰ16・17は北壁から少し張り出すように設置され，径16～22cmの円形で検出面からの深さは13～24cmである。位置からしてカマド上屋を支えていたものと推する。遺構の西壁から少し張り出すように配置しているＰ３・４・５は径18～26cmの円形で深さ22～55cm，いずれも堆積土は類似した暗褐色土である。上屋にかかわるものと考えられるが，住居内における支柱穴の配置を考えると東壁がかく乱を受け失われているために明らかにできなかった。

貼床を除いた段階で検出されたピットはＰ10・11・12・13・14・15である。カマド右側に位置するＰ10は，遺存する部分で南北方向106cmの不整形で深さ25cm，住居中心の北東部から検出されたＰ14・15は径42～45cmの円形で深さ17～20cm，いずれも貯蔵用のピットと推測される。Ｐ10・14・15はいずれも炭化物や焼土粒・ＬⅣ塊をまだらに含む堆積土で，床面構築前に埋めもどされたものと推する。Ｐ13は主柱穴と推するＰ８と切り合っている。径約30cmの不整円形で深さ約30cm，堆積土は

ＬⅣ塊を含む暗褐色土である。Ｐ13の方が古いと思われるが，堆積土がＰ８の掘形埋土に極似しており，Ｐ８の掘形埋土の可能性もある。住居南側で検出されたＰ11・12は，径18～22㎝の円形で深さ22～30㎝であり，形状から柱穴と考えられるものの，住居にともなうものかは明確にできなかった。

遺　　物（図150）

遺物は土師器片88点，須恵器片２点，縄文土器片164点，石器９点が出土した。大部分が小片であり，その中から図示できたのは土師器片１点である。

図150－１は非ロクロ整形されている土師器杯の破片である。カマド付近の床面から出土した。体部から口縁部にかけて緩やかに内湾して立ち上がり，口縁部はやや外反している。外面は粘土紐積み上げ痕が観察され，体部上半から口唇部には手持ちヘラケズリ調整が施されている。内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。口縁部は粗雑で歪んでいる。

ま　と　め

本遺構は，北壁中央にカマドを有する竪穴住居跡である。規模は遺跡内では平均的な大きさである。カマドは廃絶時に人為的に破壊されたと推測され，本遺跡や近隣する遺跡の同時期の住居跡と同様の特徴を有する。上屋にかかわる主柱穴は４基確認した。西壁に張り出した３基の柱穴についてはその用途を明らかにすることができなかった。本遺構は東側・南側・南西側がかく乱を受けて失われているため，全容をうかがい知ることはできなかった。機能時期はカマド付近から検出された土師器及び住居跡の特徴から推測して，８～９世紀初頭に属すると考えられる。　　（小　野）

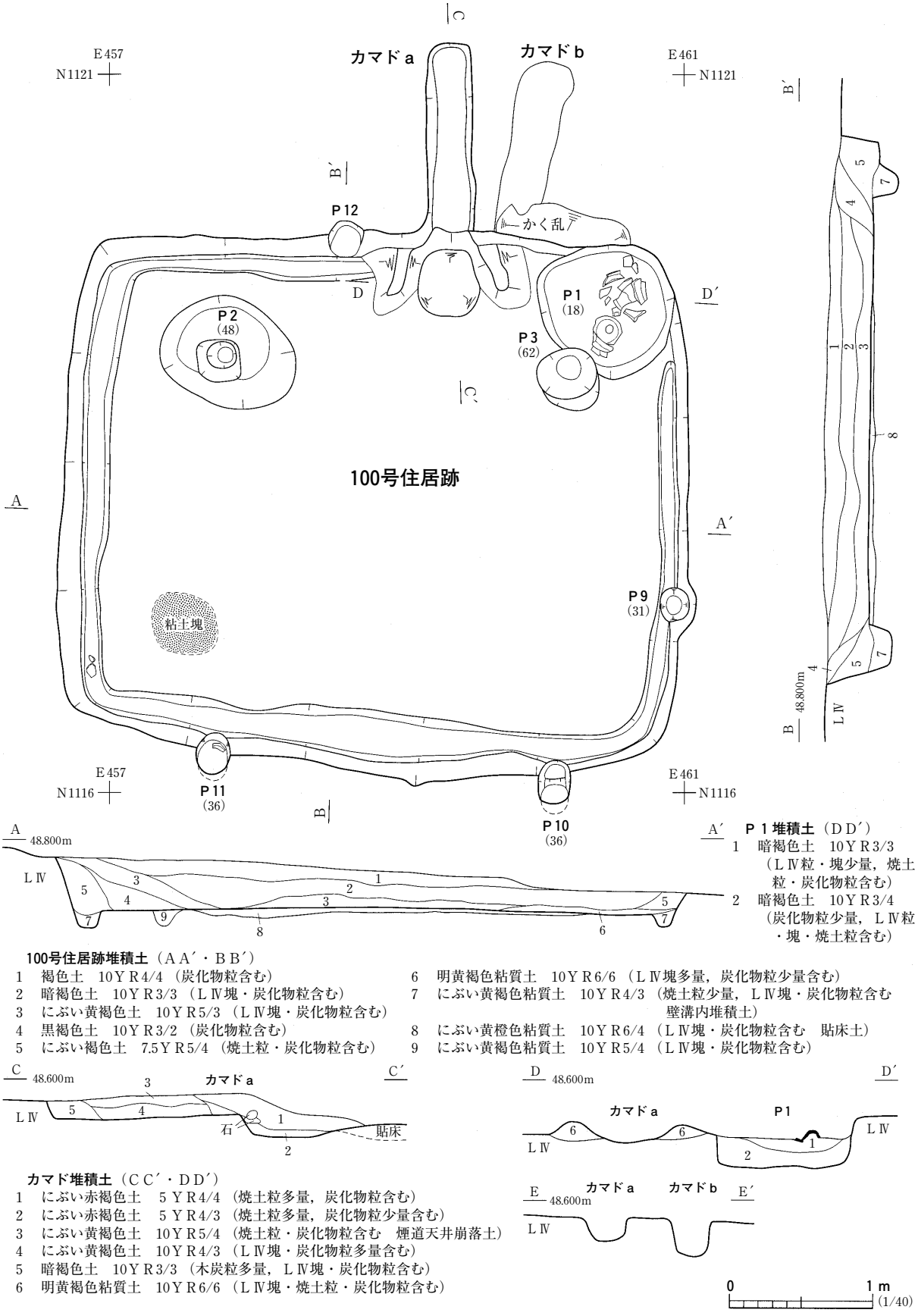
100号住居跡　ＳＩ100

遺　　構（図151・152，写真147～150）

２次調査区南側のほぼ中央部，ＡＦ・ＡＧ－56・57グリッドに位置する。本遺構が検出された周辺は平坦な立地を呈し，近接して101号・103号住居跡の他，中世～近世の小穴群，縄文時代中期末～後期初頭の住居跡群や土坑群が密集している。本住居跡と重複する遺構はないが，土層の堆積状況やカマド設置状況，壁溝やピット配置などの付随施設などから，ほぼ同位置での建て替えが行われたものと判断した。検出面は，ＬⅣ上面である。

遺構内堆積土は，９層に分層される。ほとんどが炭化物を含む褐色土を主体とし，下層のℓ６には黄褐色粘土ブロックが多く混入している。土層の堆積状況は，周壁側から流れ込んだ自然堆積の様相を呈し，中央部分では水平堆積が観察される（図151　ＡＡ′・ＢＢ′）。ℓ７～ℓ９は上層と比して粘性が強く，ℓ８は貼床土，ℓ７・９は壁溝内埋土である。ℓ９は貼床土であるℓ８撤去後に検出しているため，旧住居跡西側壁溝と判断できる。

住居跡の規模は，東西約4.3m，南北約3.8ｍを測り，平面形はほぼ方形に近い形状である。南北軸はほとんど真北を示し，建て替えの際に西側部分を拡張した以外はほぼ旧住居跡に沿うように構築している。周壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は遺存状態の良い西側部分で約40㎝を測る。床



100号住居跡堆積土（ＡＡ´・ＢＢ´）
1　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ塊・炭化物粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3（ＬⅣ塊・炭化物粒含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物粒含む）
5　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（焼土粒・炭化物粒含む）
6　明黄褐色粘質土　10ＹＲ6/6（ＬⅣ塊多量，炭化物粒少量含む）
7　にぶい黄褐色粘質土　10ＹＲ4/3（焼土粒少量，ＬⅣ塊・炭化物粒含む　壁溝内堆積土）
8　にぶい黄橙色粘質土　10ＹＲ6/4（ＬⅣ塊・炭化物粒含む　貼床土）
9　にぶい黄褐色粘質土　10ＹＲ5/4（ＬⅣ塊・炭化物粒含む）

Ｐ１堆積土（ＤＤ´）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・塊少量，焼土粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量，ＬⅣ粒・塊・焼土粒含む）

カマド堆積土（ＣＣ´・ＤＤ´）
1　にぶい赤褐色土　５ＹＲ4/4（焼土粒多量，炭化物粒含む）
2　にぶい赤褐色土　５ＹＲ4/3（焼土粒多量，炭化物粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（焼土粒・炭化物粒含む　煙道天井崩落土）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ塊・炭化物粒多量含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（木炭粒多量，ＬⅣ塊・炭化物粒含む）
6　明黄褐色粘質土　10ＹＲ6/6（ＬⅣ塊・焼土粒・炭化物粒含む）

図151　100号住居跡（１）

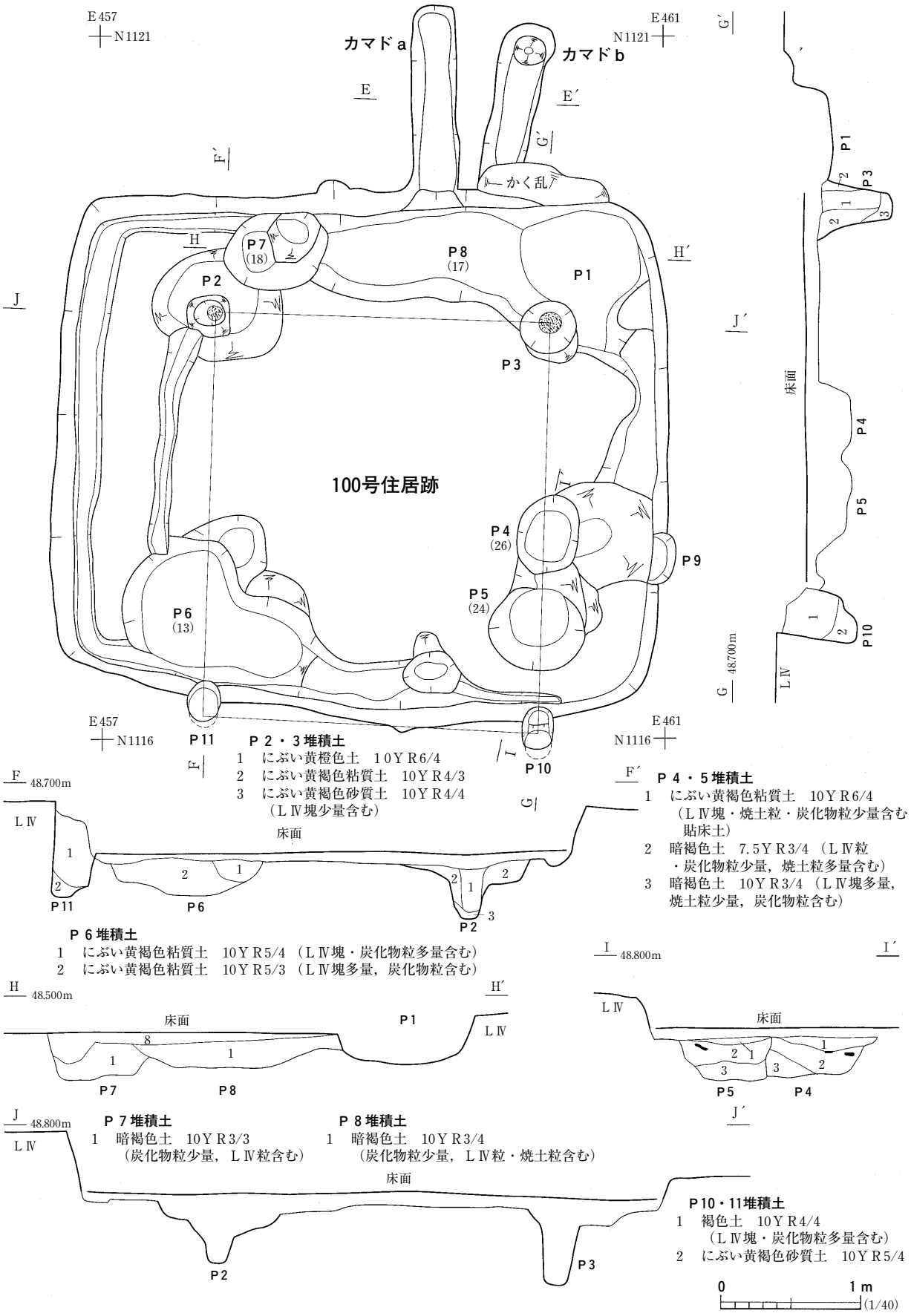


図152　100号住居跡（２）

面は，住居跡掘形から床面までの約10㎝を貼床土（ℓ８）によって充填し，ほぼ平坦に構築している。

カマドは北壁のやや東寄りに付設され，カマド袖の一部と煙道部が遺存していた。旧カマド（ｂ）煙道部は，近接して東側で確認されているが，カマド構築材や袖石等は床面や土層から検出されなかった。カマド内から煙道部にかけての土層は，５層に分層される。ℓ１・２は焼成室内，ℓ３～５は煙道部に堆積した土層である。にぶい赤褐色を呈するℓ１・２は，住居跡内堆積土ℓ３及びℓ５に近似するが，焼土粒・炭化物を多く含む点で異なる。煙道部ℓ３下位には，焼土粒や炭化物が多く認められ，煙道天井部分に使用された粘質土と判断される。従って，本住居跡のカマド煙道部は，半地下式構造であった可能性が高いと判断している。ℓ６はカマド袖部分の構築土で，ℓ３及び貼床土（ℓ８）とほぼ同層である。

カマド焼成室の規模は，遺存する両袖や焼土範囲から判断して，奥行き65㎝，最大幅50㎝を測るものと思われる。底面は中央付近がやや窪んでいる。燃焼室奥壁はほぼ垂直に立ち上がり，煙出し部分に向かって緩く傾斜している（図151　ＣＣ′）。煙道部は，北壁から長さ約1.2m，幅0.3mを測り，断面形は「Ｕ」字状（図151　ＥＥ′）を呈する。煙道部の周壁には，一部焼土化した部分が認められた。旧カマド煙道部とほぼ同じ規模であるが，旧煙道の方が深く掘り込まれている。

床面及び壁際からは，小穴が12基検出された。住居跡北東隅から検出されたＰ１の規模は，径約90㎝の楕円形を呈し，深さは最深部で22㎝を測る。土層中からは，遺物が多く出土している（図153－２・４）。Ｐ２・３・９～12は柱穴で，掘形径が22～28㎝，深さ30～62㎝を測る。Ｐ２・３の掘形・深さは大きく，径12㎝程の柱痕の痕跡も確認できた。また，Ｐ10・11の掘形は，やや住居内側へ緩く傾いている。Ｐ４～８は床下土坑で，形態・規模・深さが異なるが，堆積する土層はほぼ類似している。比較的Ｐ４・５・７は近似し，Ｐ４からは遺物が多く出土している。配置関係や掘形状況，土層の堆積状況から判断して，北東隅から検出されたＰ１は貯蔵穴，Ｐ２－Ｐ３－Ｐ10－Ｐ11は主柱穴と判断した。なお，壁柱穴及び床下土坑であるＰ４～９・12は，明確に本住居跡に伴うものか，旧住居跡に伴うものかは判断できなかった。

壁溝は，北東側に付設されたカマド及びＰ１付近で検出できなかったが，ほぼ途切れることなく認められた。幅は18～30㎝，床面からの深さは深く掘り込まれていた西側部分で平均して約20㎝，比較的浅い東側部分では10㎝程である。西側のＰ２－Ｐ６間で検出された溝跡は，幅約12㎝，深さ８～12㎝を測り，小規模である。貼床（ℓ８）撤去後に検出されているため，旧住居跡に伴う西側壁溝と判断した。

遺　　物（図153，写真224）

出土した遺物は，土師器片128点，縄文土器片60点，石器５点それに時期が不明な破片５点の計198点である。住居内堆積のℓ２（32点）及びカマド近辺（33点）とＰ１（33点）からの出土量が比較的多い。本住居跡に伴う可能性が高く，遺存状態の良い土師器４点について掲載した。図153－１・２は非ロクロ整形の土師器杯，同図３・４は非ロクロ甕形土器である。２は内湾気味に立ち

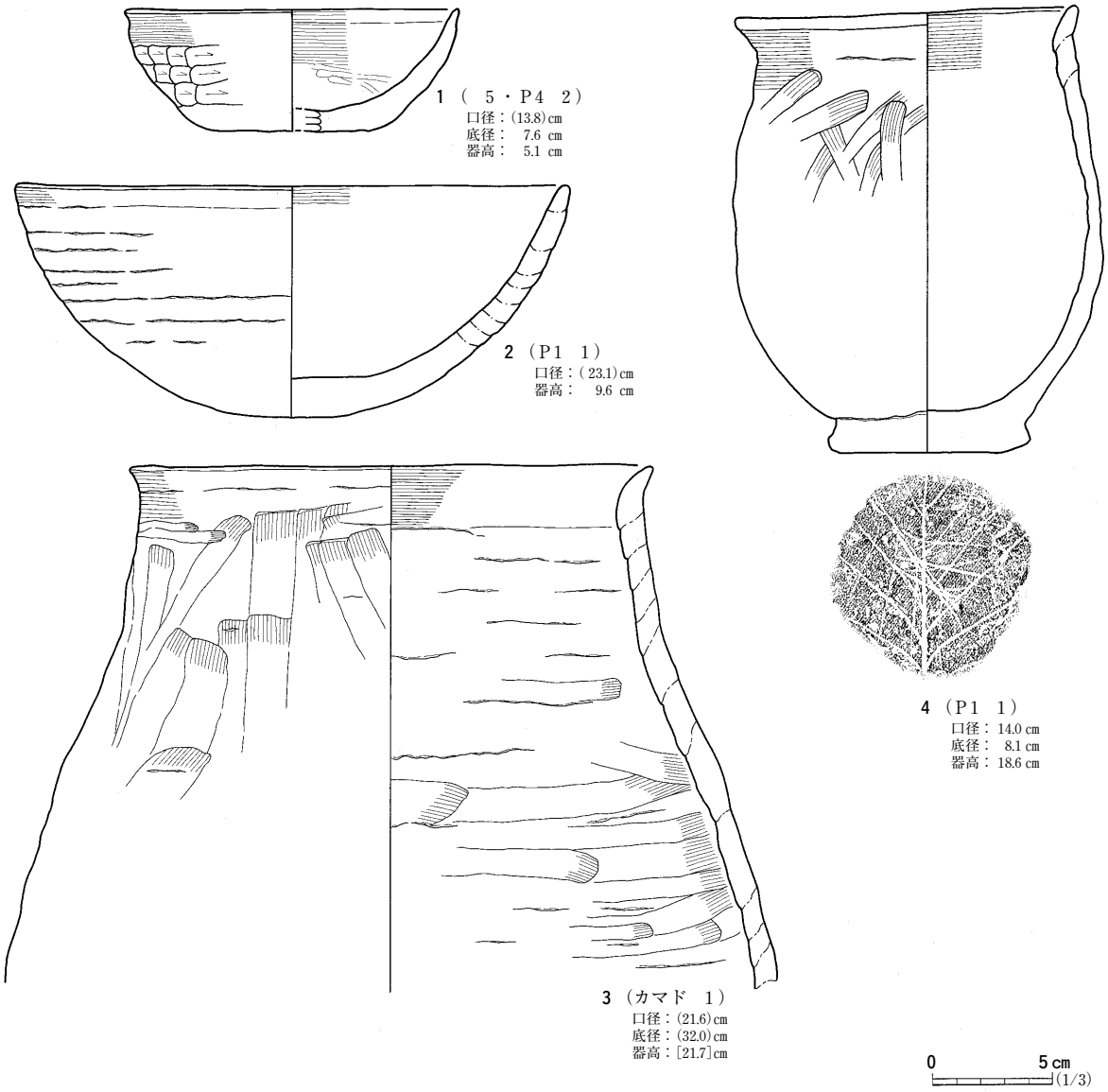


図153　100号住居跡出土遺物

上がるやや大振りの器形である。丸底を呈し，内面底部はやや平坦である。外面には粘土紐積上げ痕，内面口縁部付近には横位のナデ調整が観察される。器厚は１～1.2cmを測り，厚い。１は平底の土師器杯で，２と比して小振りである。外面の口縁部から体部上半には横位のナデ調整が観察され，体部下半にはヘラケズリ調整が施されている。内面には横位のミガキ調整が加えられているが，黒色処理の有無は摩滅しているため詳細は不明である。

３は胴部に最大径を有し，やや内傾する器形を呈する。口縁部には内外面ともに横位のナデ調整が認められ，胴部には縦位のヘラケズリ及びナデ調整が観察される。内面には横位方向へのヘラケズリ調整が観察され，粘土紐積上げ痕が顕著である。４はやや小型の甕形土器で，胴部下半部に最大径を有する。口縁部から頸部にかけては，内外面ともに横位へのヘラケズリ及びナデ調整が施され，外面胴部上半にはナデ調整が縦位及び斜位方向へ加えられている。底部には木葉痕が観察される。

ま　と　め

本遺構は，北向きカマドを有する４本主柱穴の竪穴住居跡である。ほぼ方形基調を呈し，同一箇所での建て替えが行われている。旧西壁位置からやや規模が大きくなる傾向が認められる。所属時期は，Ｐ１及びカマド内土層などの出土遺物から判断して，８世紀後半頃と考えている。また，本遺跡及び同丘陵上の南側に位置する鍛冶屋遺跡検出の該期住居跡群の中では，最も北方側に位置する住居跡である。（井）

101号住居跡　ＳＩ101

遺　　構（図154，写真151・152）

調査区南側のＡＦ－55・56グリッドに位置する竪穴住居跡で，基盤層である黄褐色土のＬⅣ上面で検出した。遺存状態が悪く，住居跡東側部分とカマド及び煙道部はほとんど検出できなかった。本住居跡と重複する遺構はないが，近接して100号住居跡の他，中世～近世の小穴群，縄文時代中期末～後期初頭の住居跡群や土坑群が密集している。

遺構内堆積土は，２層に分層される。炭化物を含む褐色土を主体とし，壁側に堆積するℓ２には黄褐色粘土ブロックが多く混入している。土層の堆積状況は，西側の周壁側から流れ込んだ自然堆積の様相を呈する（図154　ＡＡ′）。ℓ３は粘性が強く，床下土坑内堆積土と判断される。

住居跡の遺存規模は，東西約3.8m，南北約3.6mを測り，平面形はほぼ方形に近い形状である。南北軸はほとんど真北を示し，隣接する100号住居跡と直線的に類似する。遺存する周壁は，西壁でほぼ垂直に立ち上がり，約16cmを測る。床面は，住居跡掘形から床面までの約５cmを貼床土（ℓ３）によって充填し，ほぼ平坦に構築している。

カマドは北壁のやや東寄りに付設され，カマド焼成室内の底面の焼土化した範囲のみが確認できた。焼土範囲は，奥行き60cm，幅50cmを測り，３cm程の厚さが認められた。カマド袖や煙道部は検出できなかったが，北カマドを呈するものと判断される。

床面下位の西半部からは，床下土坑が５基検出できた。形態・規模・深さ等は異なるが，堆積する土層は黄褐色粘質土でほぼ酷似している。明確に本住居跡に伴う主柱穴や壁溝は検出できなかった。

遺　　物

住居跡内からは土師器５点，縄文土器３点の計８点が出土した。全て小破片で摩滅が著しいため図示できなかったが，土師器では非ロクロの杯が出土している。

ま　と　め

本遺構は北向きカマドを有する竪穴住居跡である。遺存状態が悪かったが，規模的には南側で隣接する100号住居跡と類似し，本来は東西長がやや長い竪穴住居跡であった可能性が高い。

北向きカマドを有する住居跡としては，本遺跡及び同丘陵上に位置する馬場前遺跡から検出した住居跡群の中では，最も北側に位置する住居跡である。所属時期は，出土遺物が少数で細片のため

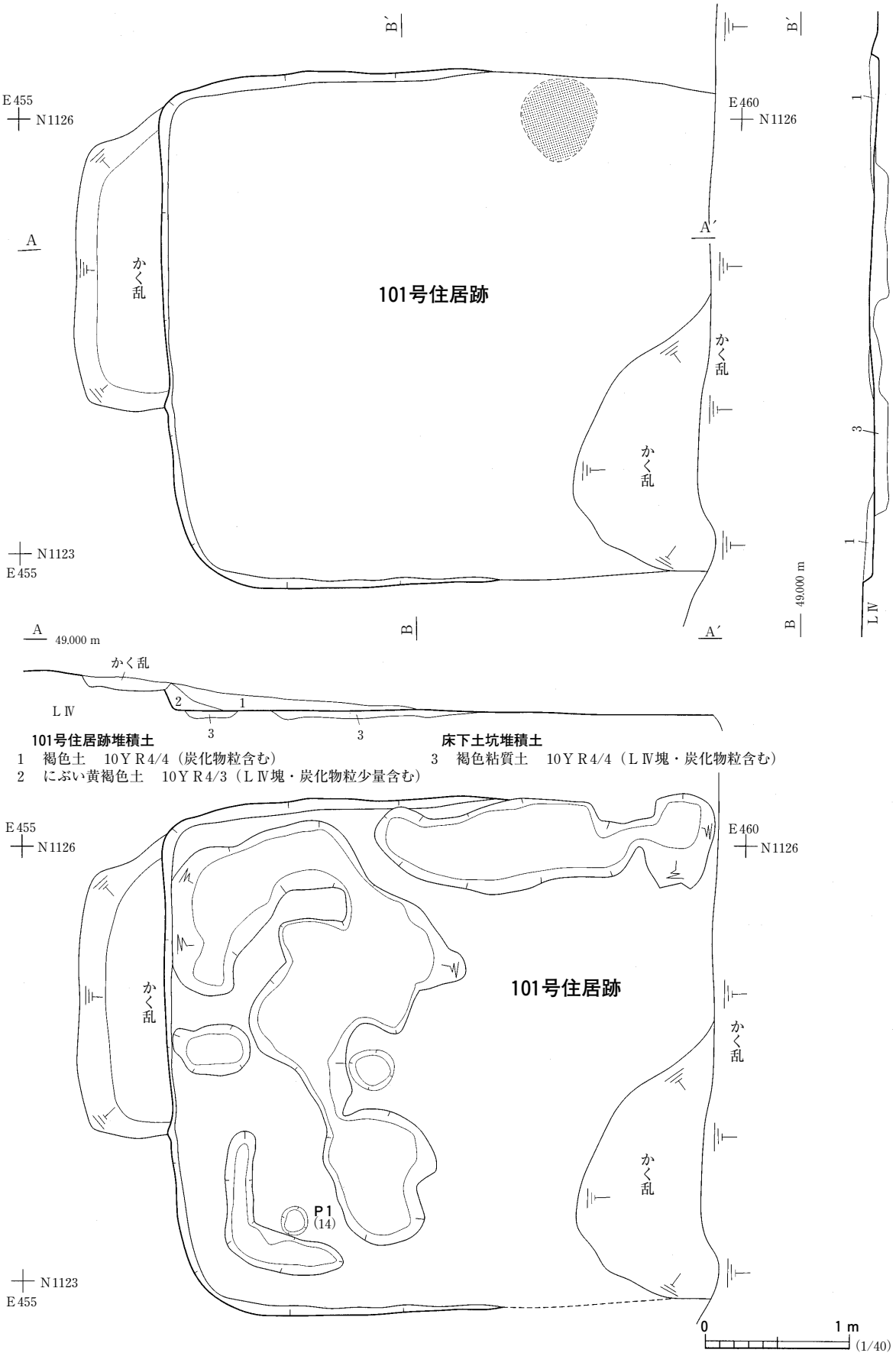


図154　101号住居跡

明確には判断できないが，住居跡形態やカマド配置等を考慮すると，８世紀後半頃の所産の可能性が高いと考えている。（井）

102号住居跡　ＳＩ102

遺　　構（図155～158，写真153・154）

本遺構はＡＦ52・53・ＡＧ52・53グリッドに位置する。北壁にカマドを伴う竪穴住居跡である。ＬⅣ上面において明確な黒褐色土の遺構の輪郭を確認した。ただし本遺構の東半分は耕作等により壁高にして検出面下約15㎝は削平されている。

周辺の地形は平坦である。本遺構に重複する遺構はなく，西側に58号住居跡，北側に23号住居跡などがある。

住居内堆積土は４層に分けられる。ℓ１・２は中央が窪む堆積を見せ，壁際からの流れ込みが観察されたことから，自然堆積層と考える。ℓ３は貼床土で堅く締まった褐色土である。この貼床土の分布範囲はＰ１～Ｐ４に囲まれた中央部に認められ，やや西壁中央南寄りに張り出していた。このことから住居の出入口が西側にあった可能性を示唆している。また床面はほぼ平坦であるが，全面的に細かな凹凸が認められた。ℓ４は掘形の整地土である。

平面形は整った方形を呈し，南北の軸線はほぼ真北を示す。規模は南北長4.35m，東西長4.25ｍを測る。周壁は全周にわたり，80～90°とほぼ垂直に立ち上がる。床面からの壁高は，最も遺存の良い西壁で0.3ｍを測る。

北壁のほぼ中央には，２基のカマドが確認された。遺存状況からカマドａがカマドｂより新しい。カマドａは天井部が失われ，両袖部の床面に近い部分のみを残していた。北壁から西袖は20㎝，東袖は15㎝張り出している。両袖の残存高はともに10㎝程である。燃焼部の範囲は，50×53㎝である。燃焼部から奥壁へは約50°の角度で立ち上がる。燃焼部の硬化面は失われていたが，焼土粒が堆積していた（ℓ11）。煙道部は全長1.0ｍ，幅は煙出部で0.27ｍを測る。遺存状況は悪く，わずかに底面から５㎝程の立ち上がりが認められる程度である。底面は煙出部に向かってわずかに傾斜し，煙出部は小ピット状に掘り窪められている。

カマドａの堆積土は17層に分けられる。ℓ１は炭化物・焼土粒さらにはＬⅣ塊を多く含むことから，天井部の崩落土と考えている。ℓ２～９は，天井部・袖部の崩落土と見られ，焼土粒・炭化物を多く含んでいた。ℓ16・17はカマド袖で，掘形埋土の上に設置している。ℓ10・11は燃焼部の堆積物で，焼土粒を多く含む赤褐色土である。ℓ12～15はカマド掘形の堆積土で，炭化物・ＬⅣ塊を含んでいる。床面から掘形底面までの深さは0.17ｍである。

カマドｂは，煙道部のみが遺存していた。カマドａ同様，遺存状況は良くない。カマドｂの煙道部は，全長0.9ｍ，幅は煙出部で0.35ｍを測る。底面は煙出部に向かってわずかに傾斜している。堆積土はℓ１の１層のみである。

ピットは床面から６基，床下から６基を検出した。Ｐ１～４はいずれも柱痕が確認でき，位置や

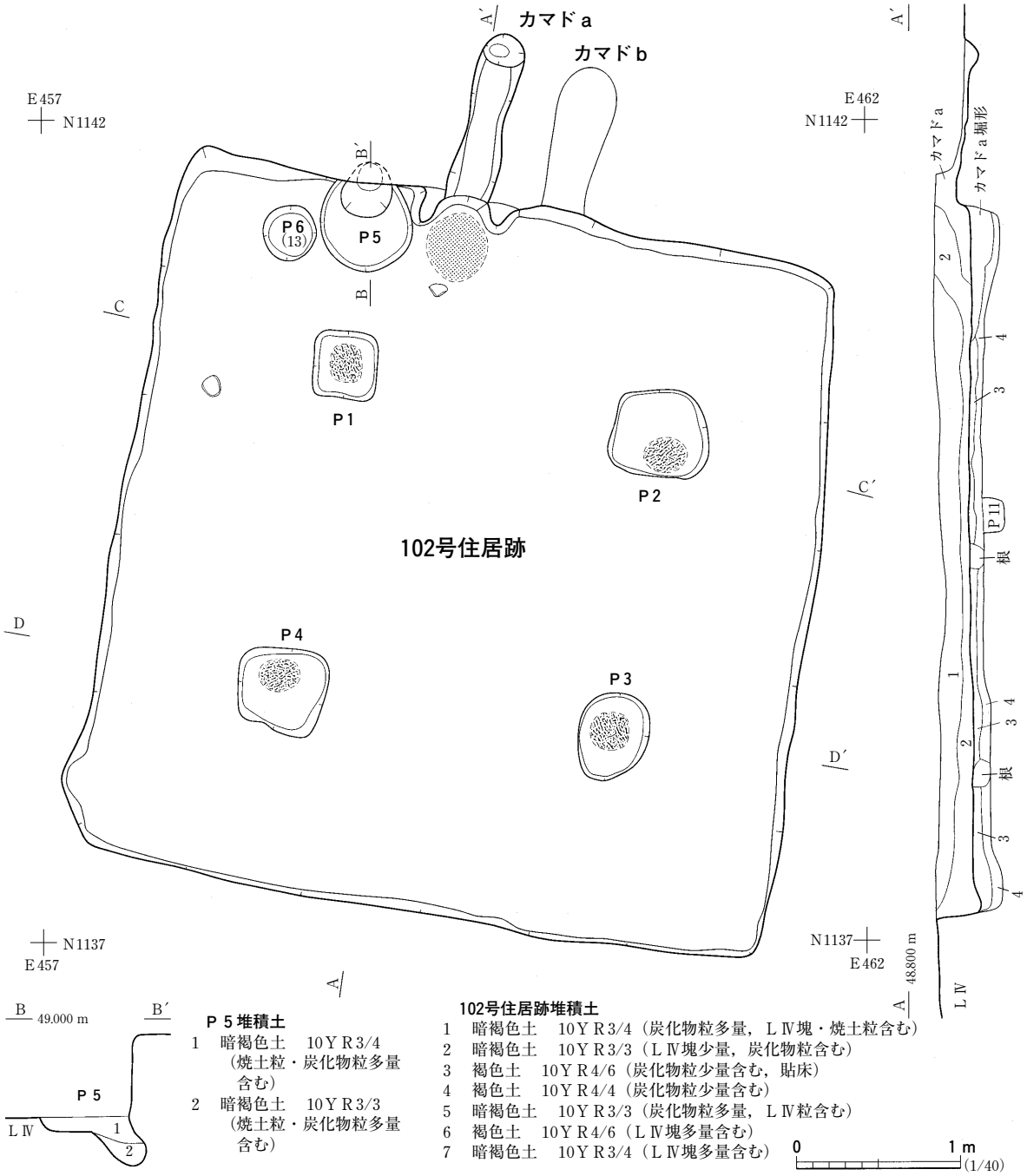
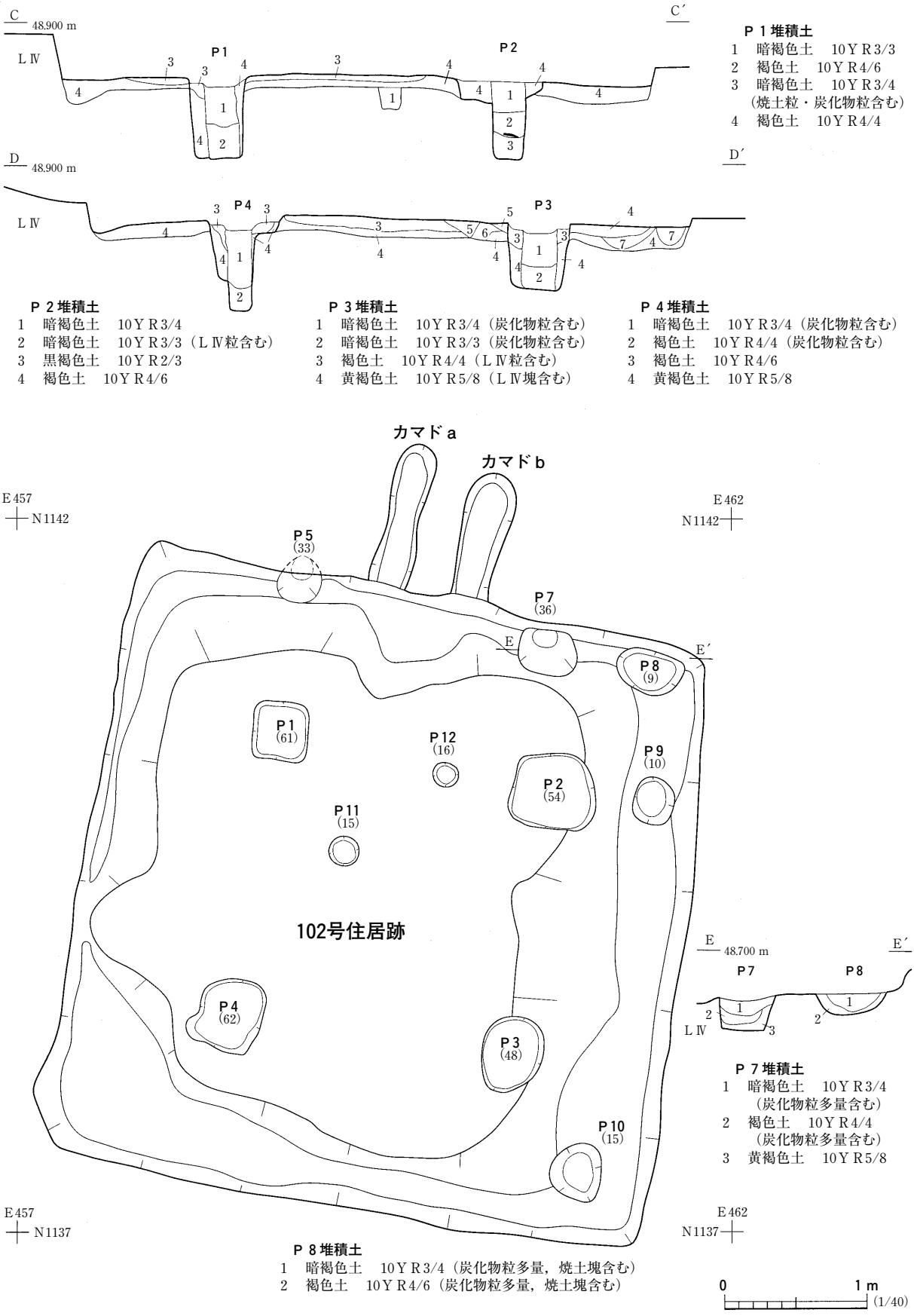


図155　102号住居跡（１）

規模から本遺構の主柱穴と考えられる。それぞれの柱痕には締まりのない暗褐色土が堆積していたが，わずかな色調や包含物の違いから細分している。しかしこれは，二次的な堆積作用によるものと考えている。柱痕はすべて円形で，その直径は0.18～0.24mである。Ｐ１・２の柱穴の掘形平面形は隅丸方形を呈し，その規模は0.40～0.61mを測る。Ｐ３・４の柱穴の掘形平面形は不整方形を呈し，その規模は0.52～0.54mを測る。床面から底面までの深さは，Ｐ１で0.57m，Ｐ２で0.55m，Ｐ３で0.48m，Ｐ４で0.65mである。各ピットの芯々間距離はＰ１－Ｐ２間で2.03m，Ｐ３－Ｐ４間で2.05m，Ｐ１－Ｐ４間で1.92m，Ｐ２－Ｐ３間で1.75mを測る。



Ｐ１堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
2　褐色土　10ＹＲ4/6
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（焼土粒・炭化物粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4

Ｐ２堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3
4　褐色土　10ＹＲ4/6

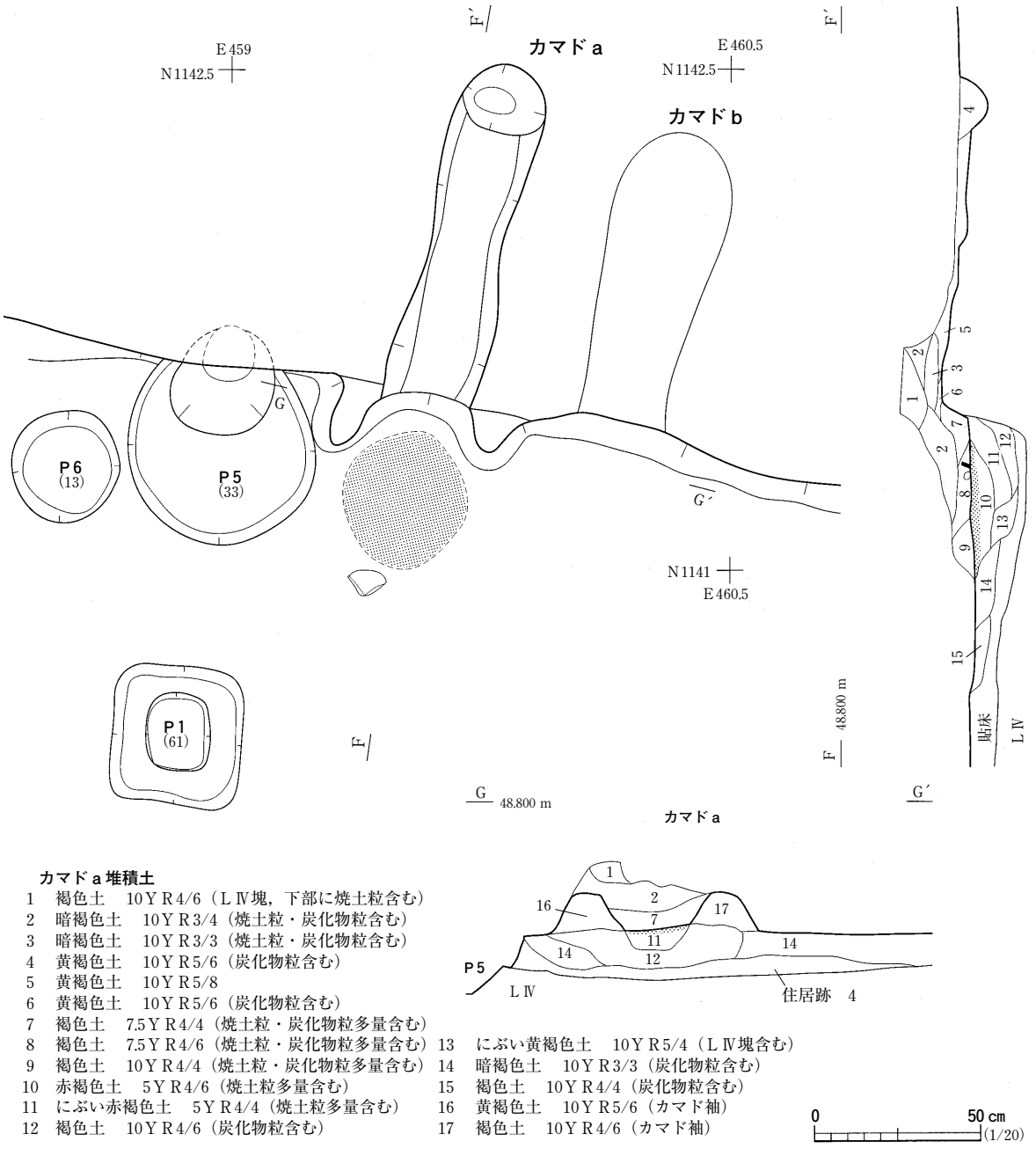
Ｐ３堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）
4　黄褐色土　10ＹＲ5/8（ＬⅣ塊含む）

Ｐ４堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6
4　黄褐色土　10ＹＲ5/8

Ｐ７堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒多量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒多量含む）
3　黄褐色土　10ＹＲ5/8

Ｐ８堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒多量，焼土塊含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒多量，焼土塊含む）

図156　102号住居跡（２）



カマドａ堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ塊，下部に焼土粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（焼土粒・炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（焼土粒・炭化物粒含む）
4　黄褐色土　10ＹＲ5/6（炭化物粒含む）
5　黄褐色土　10ＹＲ5/8
6　黄褐色土　10ＹＲ5/6（炭化物粒含む）
7　褐色土　7.5ＹＲ4/4（焼土粒・炭化物粒多量含む）
8　褐色土　7.5ＹＲ4/6（焼土粒・炭化物粒多量含む）
9　褐色土　10ＹＲ4/4（焼土粒・炭化物粒多量含む）
10　赤褐色土　5ＹＲ4/6（焼土粒多量含む）
11　にぶい赤褐色土　5ＹＲ4/4（焼土粒多量含む）
12　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒含む）
13　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅣ塊含む）
14　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒含む）
15　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒含む）
16　黄褐色土　10ＹＲ5/6（カマド袖）
17　褐色土　10ＹＲ4/6（カマド袖）

図157　102号住居跡（３）

Ｐ５はカマドの西側に位置する円形の土坑である。その規模は直径0.6ｍを測る。底面の北壁際は，さらに円形に一段掘り窪められた形をしている。深さは床面から中段までが９㎝，底面までは30㎝を測る。北側は住居跡の北壁に接し，底面が10㎝程外側に抉り出ている。Ｐ５ℓ１は住居内堆積土ℓ２に相当すると判断された。それより下位も壁際からの流れ込みにより堆積したとみられる。Ｐ５はその位置や規模から貯蔵穴と判断される。Ｐ６はＰ５の脇で検出された直径32㎝程の円形のピットである。床面から底面までの深さ10㎝で，堆積土は暗褐色土である。

住居跡掘形は壁際が深く掘り込まれ，掘形中央は高く掘り残されている。掘形底面からは，Ｐ７～12を検出した。これらのピットの深さは，概算で0.15～0.20ｍである。これらの堆積土はＬⅣ粒

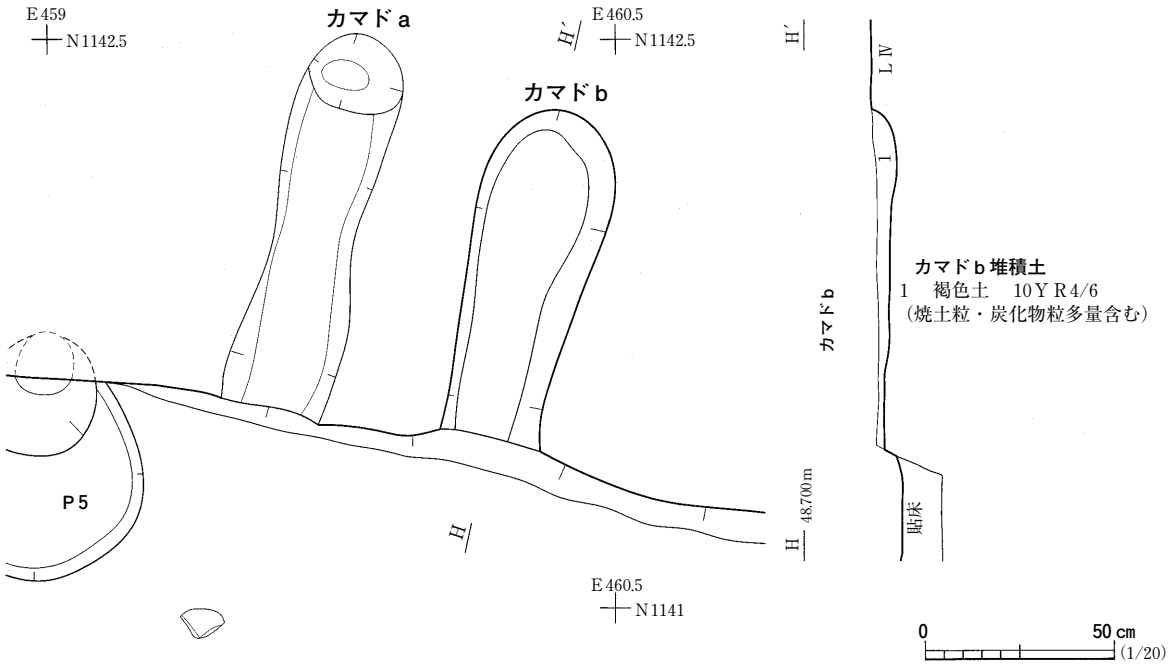


図158　102号住居跡（４）

を含む暗褐色土で，ほぼ同時期に形成されたと考えられる。

遺　　物（図159，写真224・228・235）

本遺構からは，土師器片108点，須恵器片３点，縄文土器片191点，石器類３点，瓦片１点，鉄製品１点が出土した。出土遺物のうち，10点を図化した。図159－１～７は非ロクロ整形の土師器である。１～４は杯で，１の底部は静止糸切りののち，断続的な手持ちヘラケズリにより平底に仕上げている。底部中央には直径９㎜程の不整形な孔が認められる。内面はヘラケズリののち，黒色処理されている。２は，平底を呈し，外面底部中央には「×」のヘラ記号が認められる。外面体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリによる調整がなされる。内面は丁寧なヘラミガキが施されるが，黒色処理はされていない。３の内面は黒色処理されている。外面の手持ちヘラケズリ調整は体部上半部におよんでいる。４の内面はヘラミガキの後，黒色処理されている。底部は丸底風に仕上げている。

５・７は土師器甕である。５の外面は縦方向のハケメのち，ヨコナデを施している。内面は丁寧なナデにより仕上げられている。７の底部には木葉痕が見られる。６は甑の体部下半の破片である。外面はナデののちヘラケズリによる調整痕が認められる。内面は丁寧なヘラミガキののち体部下端にヘラケズリが施される。

８は須恵器甕の胴部片である。外面に平行タタキ，内面にアテ具の痕跡をとどめる。９は丸瓦片である。外面はタタキ目を，内面は布目痕をヘラケズリですり消している。10は，鉄製の曲刃鎌である。

ま　と　め

本遺構は，隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。カマドは北壁中央に位置し，カマドｂからカマ

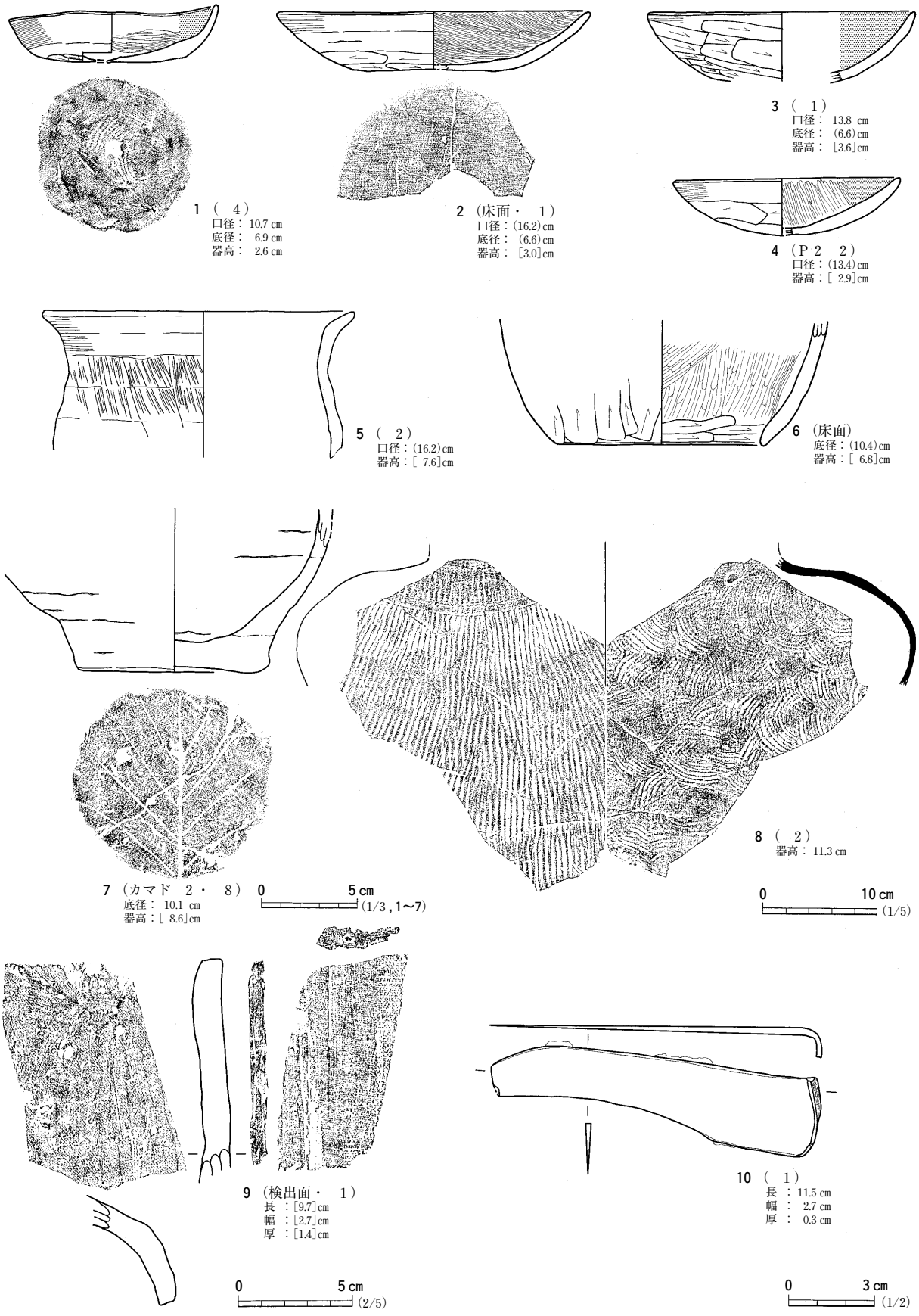


図159　102号住居跡出土遺物

ドａへと造り替えていることがわかった。本住居跡の所属時期は，出土土器の年代観から，８世紀後半頃と考えている。（門　脇）

103号住居跡　ＳＩ103

遺　　構（図160・161，写真155～157）

２次調査区南側のほぼ中央，ＡＦ－61グリッドに位置する。本遺構が検出された周辺は平坦な立地を呈し，近接して100号・101号住居跡の他，中世～近世の小穴群，縄文時代中期末～後期初頭の住居跡群や土坑群が密集している。1187号土坑と重複し，本遺構の方が新しい。また，東向きカマドから西向きカマドへの造り変えが認められた。検出面は，ＬⅣ上面である。

遺構内堆積土は，８層に分層される。ほとんどが炭化物を含む褐色土を主体とし，下層及び壁側のℓ５・６には黄褐色粘土ブロックが多く混入している。土層の堆積状況は，周壁側から流れ込んだ自然堆積の様相を呈し，中央部分では水平堆積が観察される（図160　ＡＡ′・ＢＢ′）。ℓ７・８は上層と比して粘性が強く，床下土坑内堆積土である。

住居跡の規模は，東西約3.2m，南北約3.4mを測り，平面形はほぼ方形に近い形状である。南北軸はやや北北西を向いている。周壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は遺存状態の良い北西側部分で約30cmを測る。床面は，床下土坑部分については貼床が施され，ほぼ平坦に構築している。

カマドは西壁と東壁のやや南寄りに付設されていた。西側の新カマドは，カマド袖の一部と煙道部が，東側の旧カマドは煙道部のみが遺存していた。カマド構築材や袖石等は床面や土層から検出されなかった。新カマド内から煙道部にかけての土層は，５層に分層された。ℓ５は焼成室内，ℓ１～３は煙道部に堆積した土層で，ℓ４はカマド天井部の崩落土である。煙道部ℓ１・２は粘性が強く，境には焼土粒や炭化物が多く認められ，半地下式構造であった可能性が高いと判断している。ℓ３は煙出し部分に堆積した土層で，図162－１・３が出土している。

カマド焼成室の規模は，遺存する両袖や焼土範囲から判断して，奥行き約60cm，最大幅50cmを測るものと思われる。底面中央付近はやや窪んでおり，８cm程の焼土化した範囲が認められた。燃焼室奥壁はほぼ垂直に立ち上がり，一段窪む煙出し部分に向かって緩傾斜している。煙道部は，西壁から長さ約1.1m，幅0.3mを測り，断面形は「Ｕ」字状を呈する。煙道部の周壁には，一部焼土化した部分が認められた。旧カマドは，やや焼成室が突出する形態を呈し，新カマドの造りだしとは異なる。

床面及び壁際からは，ピット１基と床下土坑３基が検出された。住居跡南東隅から検出されたＰ１は，径約25cmの円形を呈し，深さは25cmを測る。Ｐ２～Ｐ４は不整形の床下土坑で，形態・規模・深さが異なるが，堆積する土層はほぼ類似している。貯蔵穴や壁溝，明確な主柱穴は確認できなかった。

遺　　物（図162）

出土した遺物は，土師器片38点，縄文土器片56点，陶器２点，剝片１，不明２点の計99点である。

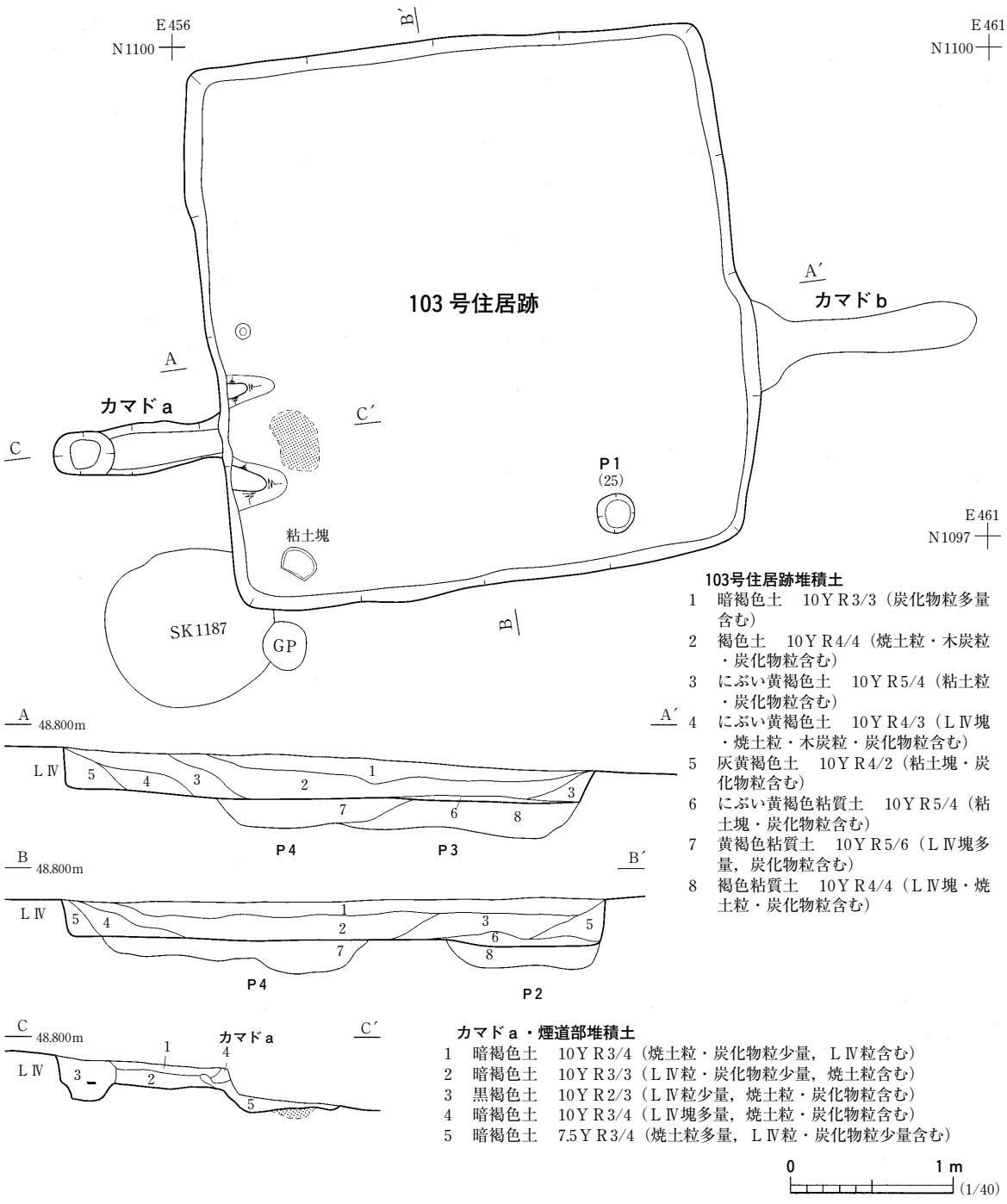


図160　103号住居跡（１）

このうち，土師器片はℓ１からの出土量が26点と多く，遺存状態の良い３点について図162に掲載した。

図162－１～３は非ロクロ整形の甕形土器である。１・３は煙道部煙出しから，２はカマド脇の床面から倒位状態で出土したものである。１は緩く外反する口縁部資料で，内外面には横位のナデ調整が認められる。３はやや胴部が丸みを帯びた資料で，外面胴部には縦位，内面には斜位方向へのナデ及びヘラケズリ調整が観察される。２は小型の甕形あるいは鉢形土器と思われる胴部下半の資料である。外面にはヘラケズリ調整が施され，内面には黒色処理が加えられている。

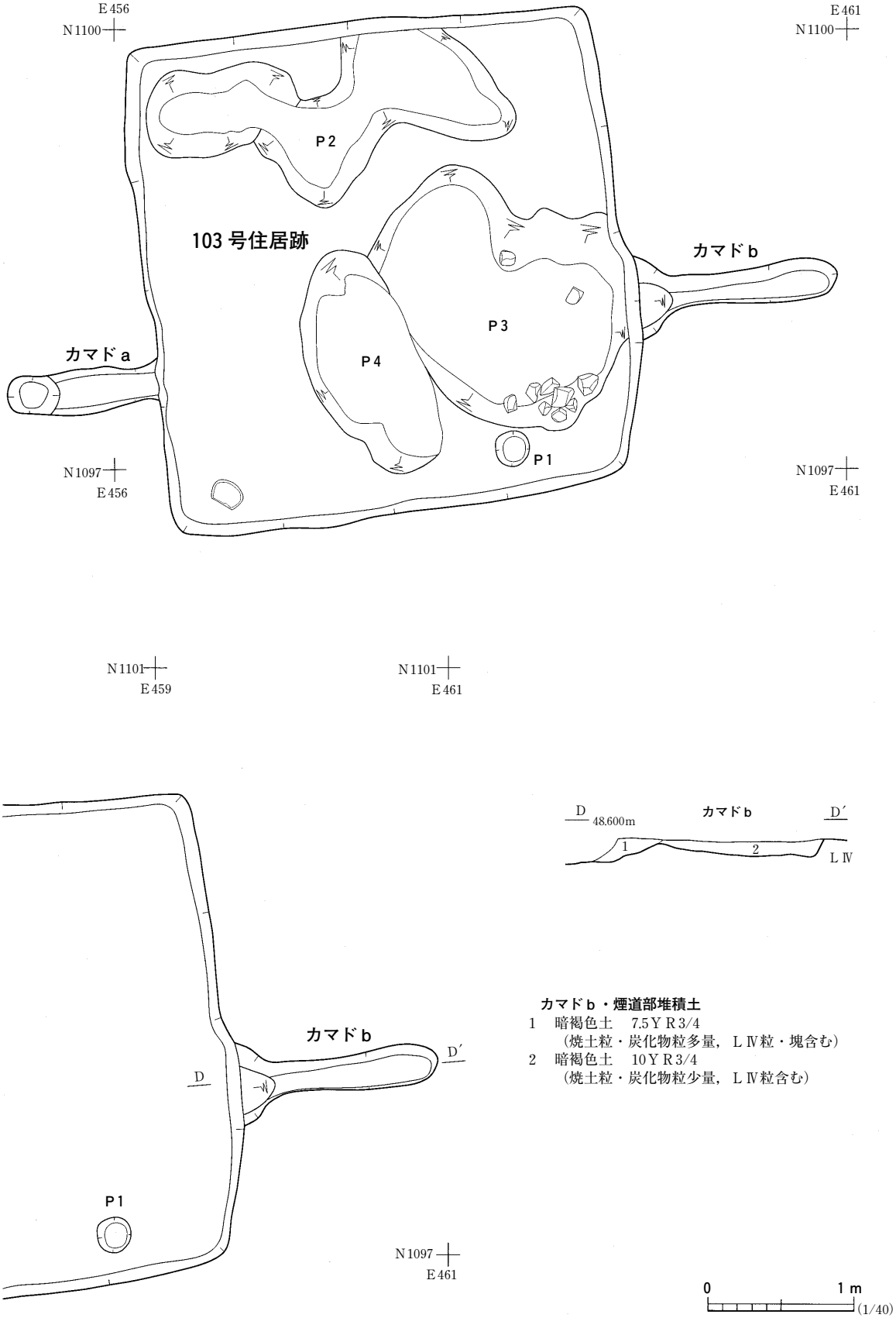


図161　103号住居跡（２）

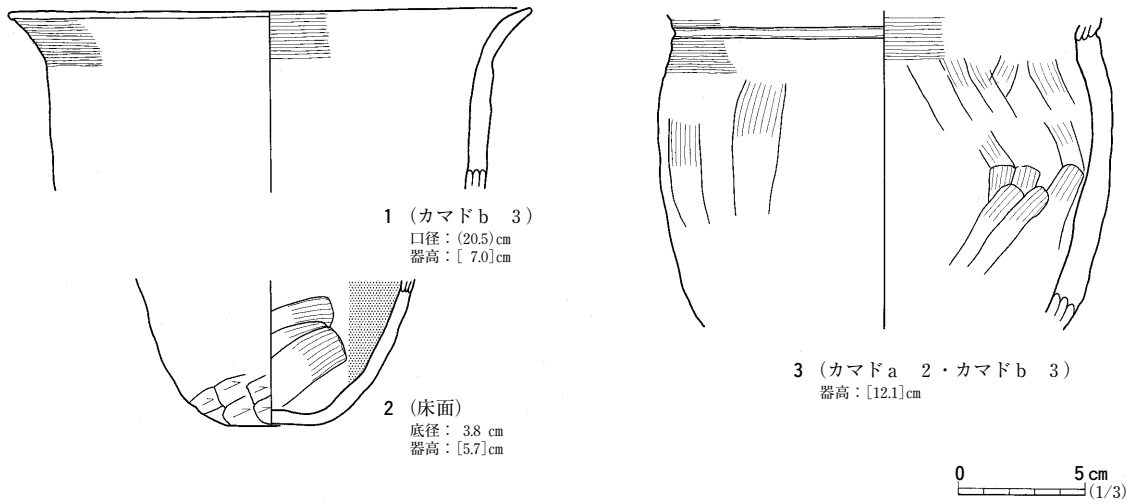


図162　103号住居跡出土遺物

ま　と　め

本住居跡は，ほぼ方形基調を呈し，東向きカマドから西向きカマドへの造り替えが認められた。このようなカマドの変遷は，同丘陵南側に隣接する鍛冶屋遺跡（３号住居跡）で僅かに認められている。所属時期は，出土資料が乏しいため明確には判断できないが，９世紀前半頃と考えている。

（井）

110号住居跡　ＳＩ110

遺　　構（図163・164，写真７・10・159・160）

本遺構は南区の西寄りに位置し，Ｕ51・52，Ｖ51・52の４グリッドにまたがって位置する。本遺構から２グリッド北には，縄文時代中期末葉頃の住居跡（ＳＩ44）が存在する。

本遺構は，基盤層であるＬⅣ層上面において円形状の広がりとして確認され，その東半分では既に底面が一部露出していた。本遺構は，８基のグリッドピットと１基の土坑（ＳＫ310）により底面の一部分が壊されていた。

本遺構の調査は円形状の広がりの範囲を捉えるため，ほぼ中央部から東西方向に向って一本の土層観察用の帯を残し掘り下げを開始した。堆積土が残っていたのは，主に西側で，確認面から数cmほど下げた時点で東側と同様，西側でも底面を確認することができた。底面はＬⅣ層を概ね平らに削り整えられ，その表面では特に硬く締まっているという個所は見つけられなかった。

本遺構の確認面で規模は，南北長4.9m，東西長4.7mほどの丸味を帯びた多角形状に形作られていることが分かる。

周壁はほとんど残っておらず，西側でわずかに底面から５cmほどの高さで立ち上がっている部位を確認した。本遺構内の堆積土は，唯一暗褐色土が薄く堆積していた。

底面上を移植鏝で丁寧に削り進めると，13基のピットの他に，壁際に沿って断続的に巡る溝跡そして南側中央部付近から長楕円形状の広がりも確認できた。

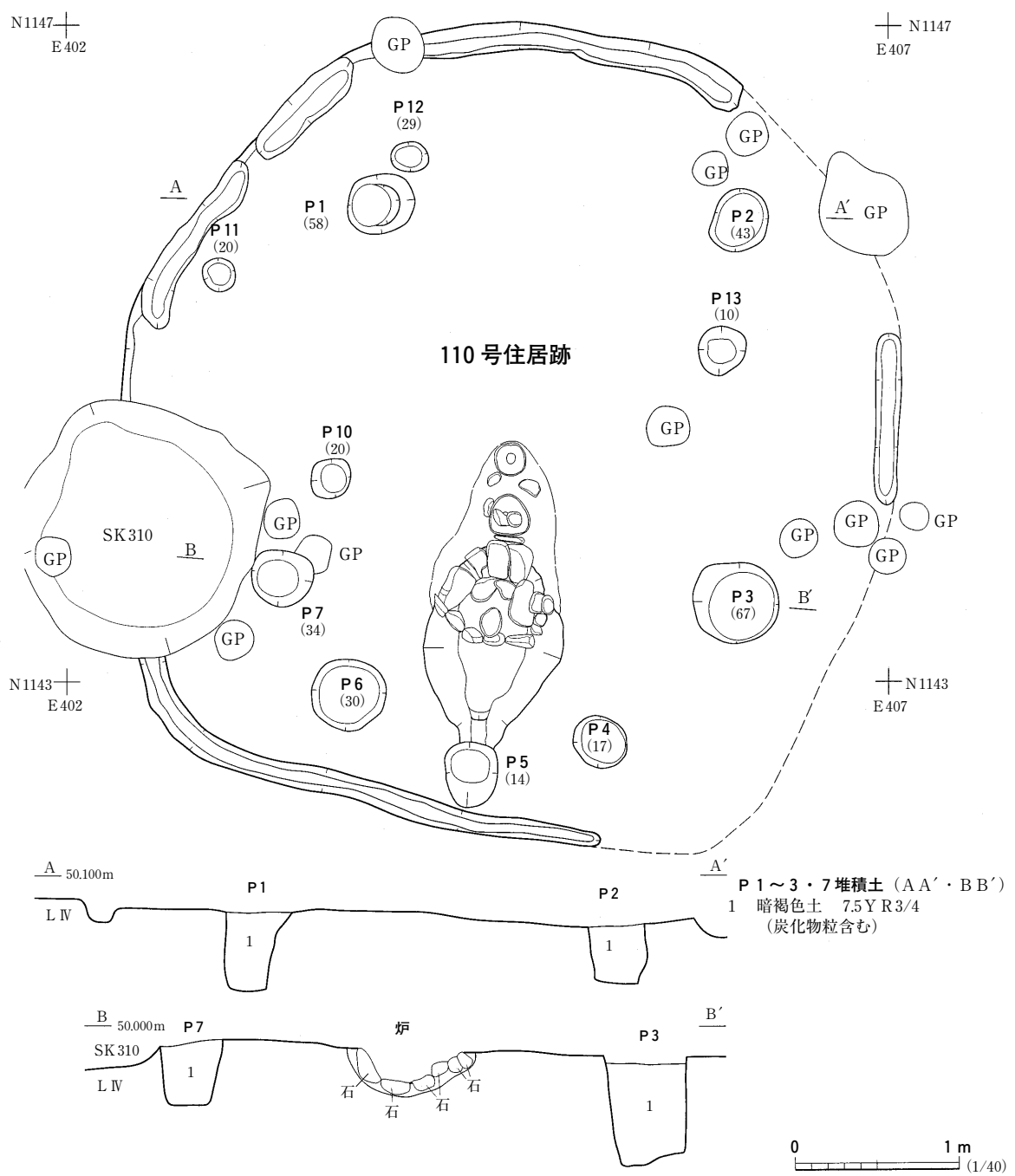


図163　110号住居跡（１）

底面の調査は，長楕円形状の広がりの南北方向に土層観察帯を残し，東半分の掘り下げから実施した。しばらく掘り下げると，その北端からは大小２個体の土器が埋め込まれていることが分かった。南側の土器が地表に顔を出した周囲の土は，熱により赤く変色していた。南側に埋設された土器に接する個所は，底の丸くなった皿状にくぼんでいた。くぼみの法面及び底面には，長さ20cm以上の板石や円礫が固定されていた。さらに，南側には底面から15cmほどの深さで半円形状に掘りくぼめられた部分が続いている。

以上のことから，底面で確認された長楕円形状の広がりは炉跡である可能性が高くなった。この

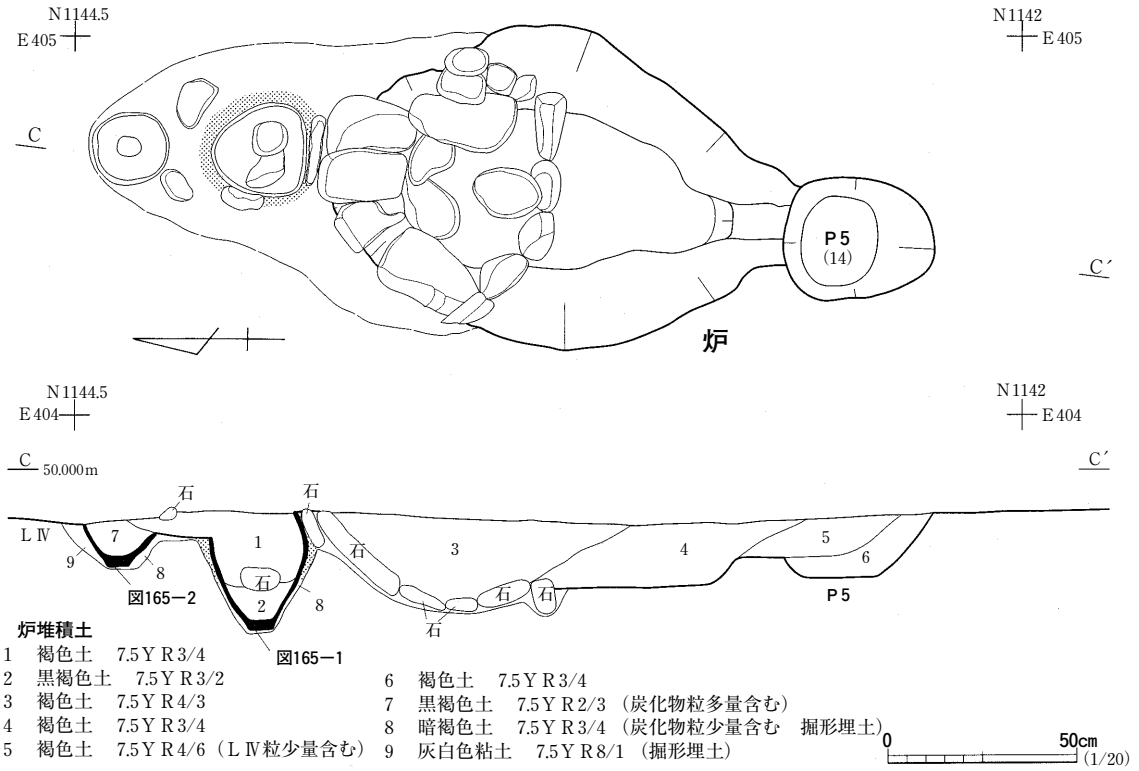


図164　110号住居跡（２）

時点で，本遺構は住居跡，底面は床面として再認識することができた。

炉跡には，大きさの異なる２個体の土器を埋め込んだ複式炉で，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっていた。炉跡の平面形は南北に長い楕円形をなし，規模は土器埋設部先端から前庭部末端のピット北縁まで約184cmを測る。その長軸方向は真北に対し東に約10度ほど傾いている。炉跡内の堆積土は９層に分けられ，この内ℓ８・９の２層は掘形埋土であった。

炉跡を各部位別にみてみる。土器埋設部は，大小２個体の深鉢形土器を南北に一列に並べ土中に埋め込んでいる。南側の土器の外縁には長さ10cm前後の花崗岩の円礫を使って縁取りがされている。床面から土器埋設部の底までの深さは，北端に埋められる土器では約10cmほどで，すぐ南側に埋め込まれた土器は約38cmと北側に比べ深かった。南側に埋設された土器は，すぐ北側の土器よりも大振りのものを埋め込んでいる。土器埋設部の断ち割り土層を観察したところ，南側の埋設土器の胴部上半から上層にかけての土が，土器内側からの加熱を受け変色していた。

石組部底面の石材は所々抜けている。用いた石材は大きいもので長さ30cmを越える花崗岩の板石，小さいもので長さ10cm前後の円礫であった。

前庭部は，石組部の南縁に固定された石から60cmほど南へ延びている。前庭部の幅は石組部との連結部分から南に向って幅を狭め，南端にあるピットの縁にぶつかる。

床面からは炉跡の他に，11基のピットと，壁際に断続的に巡る壁溝が確認された。

11基のピットは，南西側に位置するピットから順に時計回りでＰ１からＰ11まで番号を付けた。ピットの平面形は円形および楕円形をしている。それらの規模は大小２種類に大別される。まず，

Ｐ１～７の７基は本住居跡内では比較的大きく，確認面での規模で直径（長径）が35～60cm，床面からの深さは14～58cmを測る。残りのピットの規模は直径（長径）20cm前後，床面からの深さは10～30cmと，前の７基に比して直径，深さ共に小振りなことが分かる。ピットの断面形状は，大半のもので確認面での直径に比して，底面直径が小さくなる箱形状を基調としている。

ピットの配置を観察すると，床面中央部に配されたＰ１～７の７基のピットは炉跡を中心にして七角形状に配置される。Ｐ16～22以外の小ぶりなピットは壁に沿って並んでいることも分かる。

以上のように，ピットの規模と配置を考慮すると，炉跡を中心に床面中央部に配置された７基のピットは，本住居跡の上屋を支えた柱穴と考えられる。確認できた柱穴の大半が掘形のみで，土層断面および柱穴の上面にて，柱痕跡が確認できたものは一基も無かった。

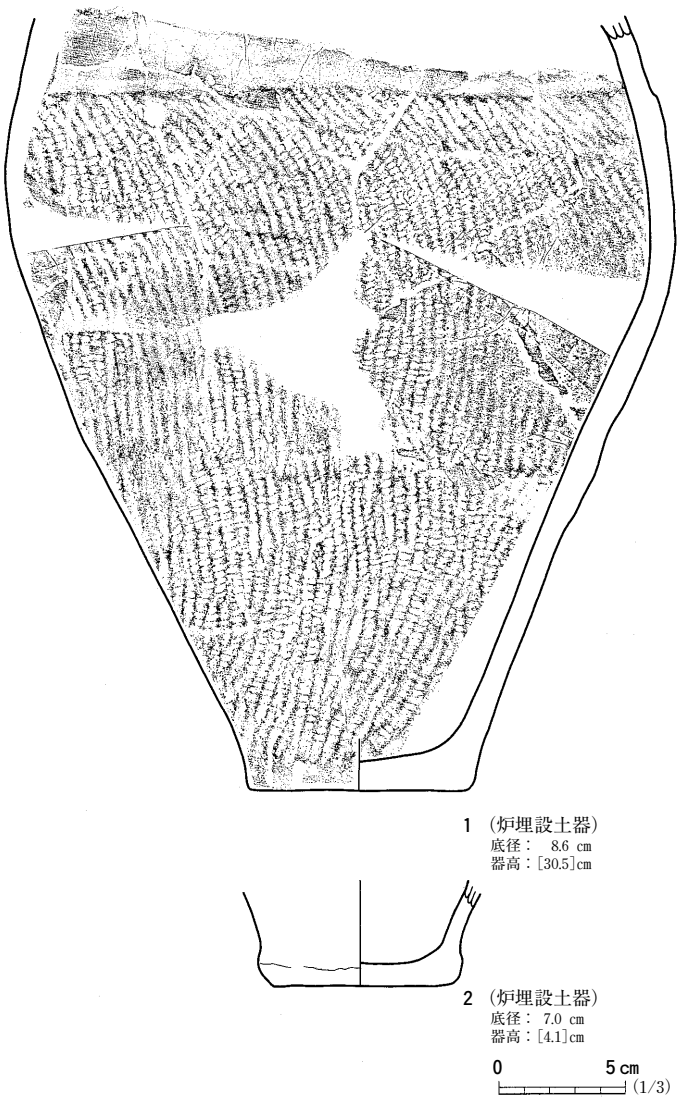


図165　110号住居跡出土遺物

７基の柱穴間の距離をみてみると，Ｐ１東縁～Ｐ２西縁，Ｐ２南縁～Ｐ３北縁，Ｐ７北縁～Ｐ１南縁までは1.8～２ｍ，Ｐ３南西縁～Ｐ４北東縁，Ｐ４南西縁～Ｐ５北東縁，Ｐ５北西縁～Ｐ６南東縁，Ｐ６北西縁～Ｐ７南東縁までは0.4～0.9ｍを計測する。

壁溝は，主として西半分において断続的に巡ることが確認されている。壁溝の幅はいずれも20cmほどで，深さは最も深いところでも床面から５cmほどであった。

遺　　物（図165，写真224）

出土した遺物は，炉跡に埋設された２個体の土器しか確認されていない。２個体の埋設土器の内，北側の土器（図165－２）は底部しか残っていなかった。

１は土器埋設部の南側に埋設された深鉢形土器である。土器は胴部上半部から口縁部にかけて欠損している。内外とも朱色に発色する土器の胎土中に砂礫を比較的多く含んでいる。器形を見ると，底面から外傾する胴部が，胴部中程にて徐々に内傾していっている。外面には残っている胴部上方

にて，水平に無文帯が施されている部分を境にして，その下は全面にＬＲの縄を転がしている。

ま　と　め

本遺構は角の丸くなった多角形状に掘りくぼめられた竪穴住居跡である。その周壁は，既に失われていた。110号住居跡は１基の複式炉と，７基の柱穴（Ｐ１～７），断続的に巡る壁溝を備えている。複式炉は，北から土器埋設部，石組部そして前庭部の三部構成となっている。土器埋設部には２個体の深鉢形土器が埋め込まれている。このように２個体の土器を埋め込んだ複式炉は，ＳＩ65の炉跡でも認められる。

本住居跡の機能時期は，土器埋設部に埋め込まれた深鉢形土器の特徴から，大木10式段階，縄文時代中期末葉頃と考えられる。（阿　部）

131号住居跡　ＳＩ131

遺　　構（図166，写真158）

本住居跡は調査区北東部のＡＩ46・47，ＡＪ46・47グリッドに位置し，検出層位はＬⅣである。周辺には31～35・39・38・141号住居跡が，近接または重複していた。本住居跡が造られた場所は，調査区のなかでも住居跡が重複しているところである。

本住居跡は35号住居跡の床面から検出した。住居跡の検出状況は，35号住居跡の床面を精査中に主柱穴の１基として掘り下げたところ礫が出土した。このことから，炉の一部と考え，住居跡があることが分かった。

本住居跡と重複する遺構は35・71号住居跡と132号土坑である。新旧関係は，35・71号住居跡の床面から検出したため，本住居跡の方が古い。

本住居跡は周壁などが35・71号住居跡によって掘り込まれすべて欠損していた。住居跡の規模は，住居跡内の堆積土や周壁がまったく残っていないために，規模は明らかにできなかった。

住居施設は炉，主柱穴が３基などである。主柱穴は３基を検出したが，これは南側の柱列で本来の主柱穴は５基あったと考えている。主柱穴からは，いずれも柱痕を確認していない。各主柱穴の平面形は不整形や惰円形で，径は28～56㎝，深さが11～64㎝である。

炉はおそらく住居跡の南側にあったものであろう。炉の形は複式炉で土器埋設部と石組部から成り立ち，前庭部は設けられていなかった。炉の全長は135㎝で，幅は石組部で50㎝となり，掘形では78㎝である。土器埋設部は石組部の位置からすると，東側に寄りすぎているようである。埋設土器は僅かな破片でしか残っていなかった。石組部に設置された礫は，すべて熱を受けて赤く変色していた。

遺　　物

住居跡からは縄文土器片が57点，石器１点が出土した。

ま　と　め

本住居跡は35・71号住居跡によって掘り込まれ住居跡の形状は失われていた。また，炉は掘形の

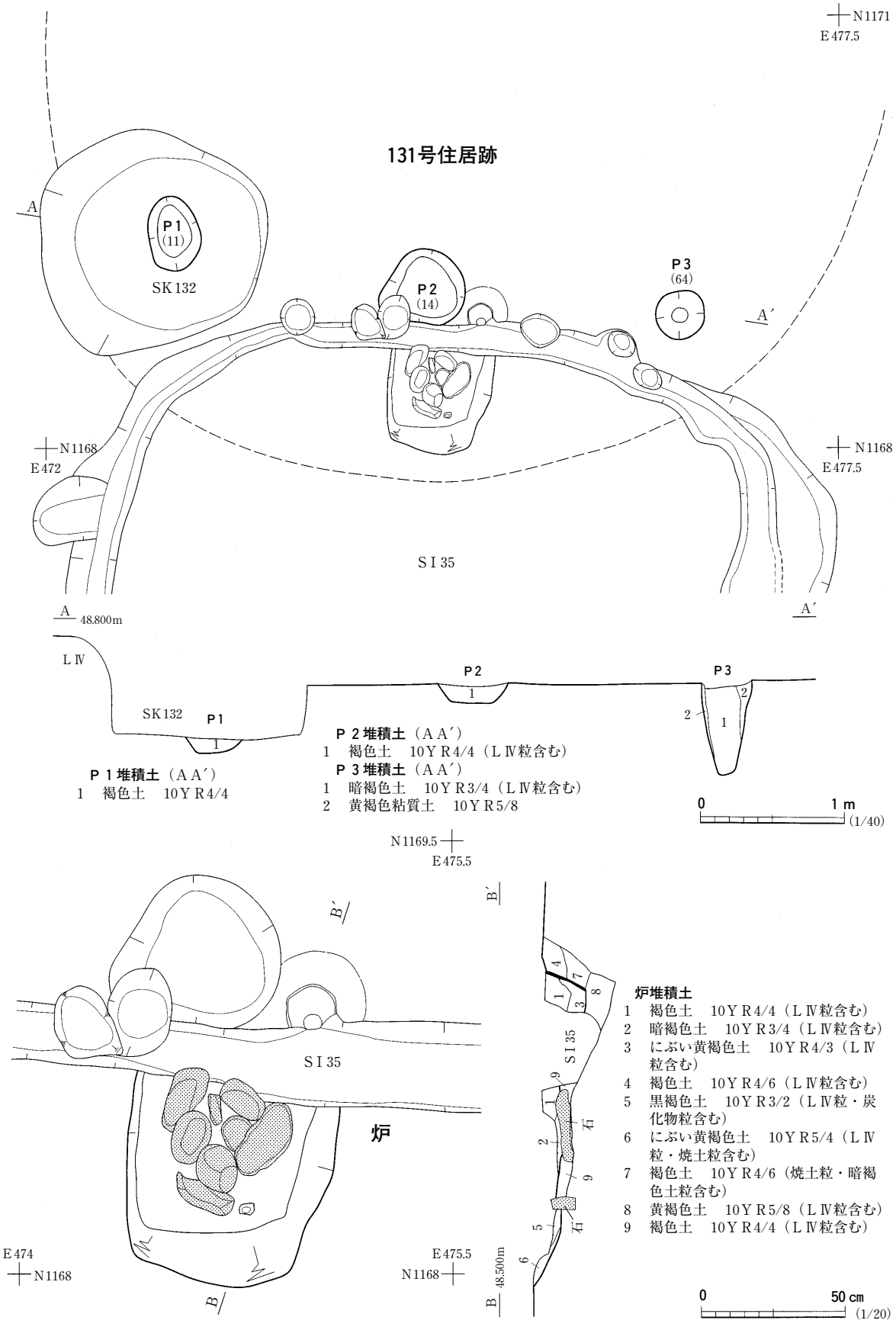


図166　131号住居跡

みの検出であるため，炉の構造も未詳である。時期は埋設土器から判断すると，縄文時代中期後葉から末葉にあたるものと考えている。　（吉　野）

141号住居跡　ＳＩ141

遺　　構（図167，写真141）

本住居跡は調査区北東部のＡＨ48・ＡＩ48グリッドに位置し，検出層位はＬⅣである。周辺には31・32・34・35・39・38・141号住居跡など７軒の住居跡が近接し，33号住居跡と重複していた。

本住居跡は，33号住居跡を掘り下げている途中で検出したものである。その検出状況は，33号住居跡の堆積土が残っている段階で，床面を検出したことから，他に住居跡があることが分かった。

本住居跡はその大半が33号住居跡によって掘り込まれ，北壁がかろうじて残っていた。住居跡の規模は明らかにできなかった。

堆積土は３層に区分した。ℓ１・２はＬⅣよりもくすんだ色をしている。住居施設はピットを２基検出した。そのうち，Ｐ１は隅丸方形をなし，一見複式炉の前庭部のようにもみえる。

ま　と　め

本住居跡は35・71号住居跡によって掘り込まれ住居跡の形状は失われていた。また，炉は掘形のみの検出であるため，炉の構造も未詳である。

時期は住居跡との重複から判断すると，縄文時代中期後葉から末葉にあたるものと考えている。

（吉　野）

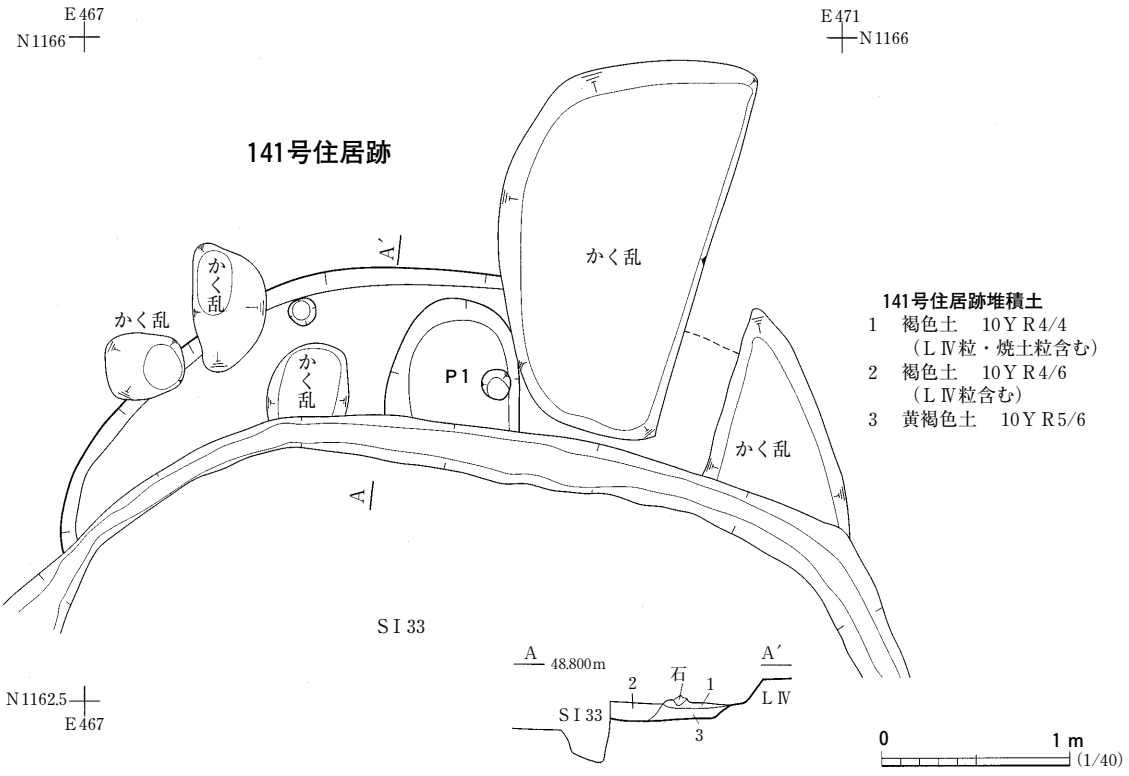


図167　141号住居跡

第３節　掘立柱建物跡

南区からは計６基の建物跡を確認している。その内，１間×２間が２棟，１間×３間が２棟，２間×２間が１棟，２間×３間のものは１棟を数える。建物跡として捉えられたものの大半は調査区の南寄り，鍛冶屋遺跡に近い付近において確認されている。調査区の南側では建物跡と柱列跡が近接した形で確認されている。

２号建物跡　ＳＢ02

遺　　構（図168，写真161）

本遺構は南区北西寄り，W49・50，Y49・50の４グリッドにまたがって位置する。本遺構はＬⅣ

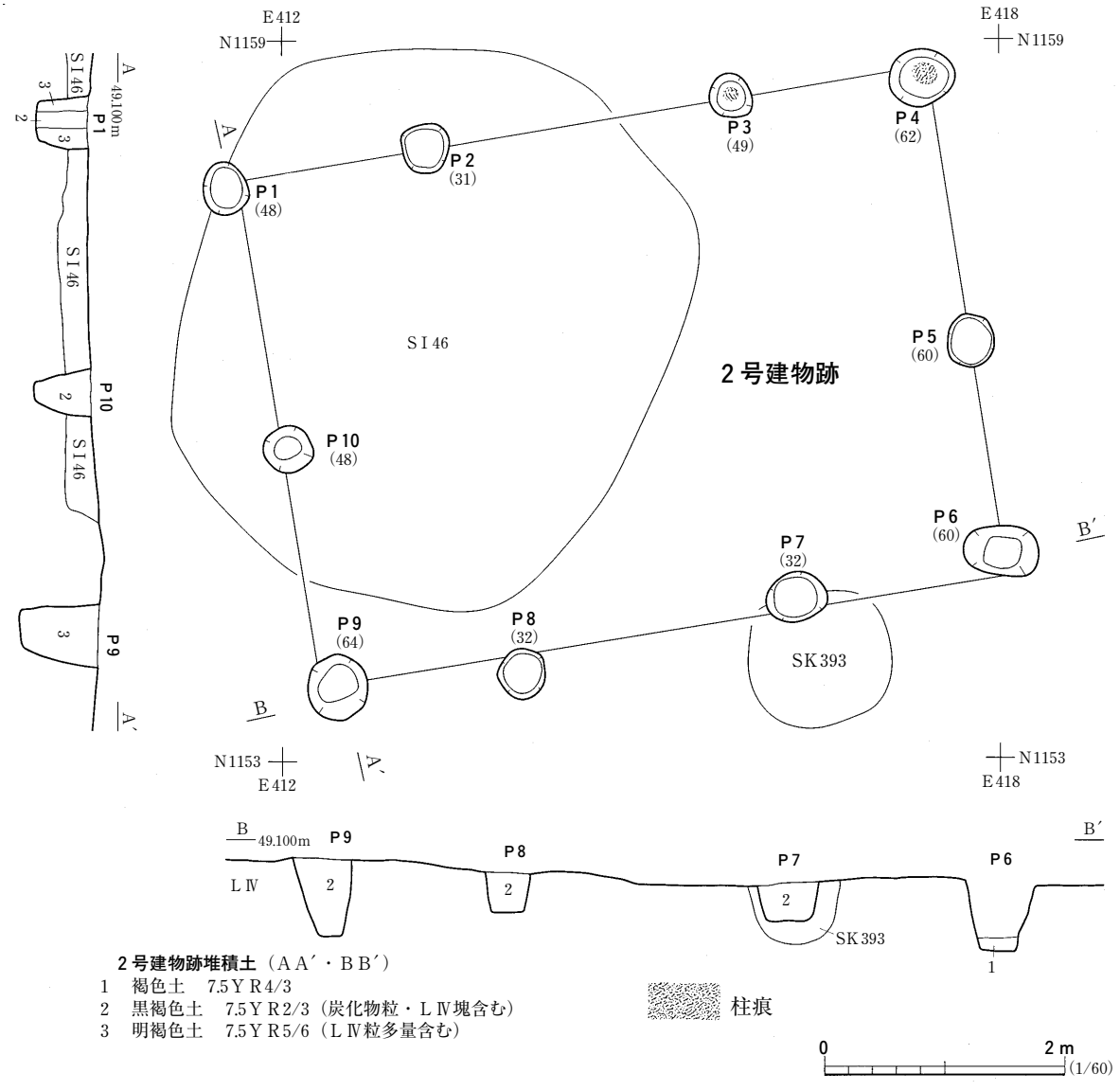


図168　２号建物跡

上面で確認され，ＳＩ46の一部を壊して掘り込まれている。本遺構の近くでは他の建物跡や柱列跡を確認することはできなかった。

本遺構は10基の柱穴からなる南北２間，東西３間の建物跡である。柱穴は北西隅から時計回りにＰ１～10を数える。柱穴の平面形状は円形ないし楕円形をなす。柱穴の規模は直径（長径）約35～64cm，確認面からの深さは浅いもので31cm，深いもので64cmを測る。

各柱穴の中心を結んだ東西２間分の長さはＰ１－Ｐ９間で4.3m，Ｐ４－Ｐ６間で約４ｍを測り，東・西辺における１間分の長さは約1.7～2.2mであった。同様に南北３間分の長さはＰ１－Ｐ４間で5.9m，Ｐ６－Ｐ９間で5.7mを測る。南・北辺での１間分の長さはＰ１－Ｐ２，Ｐ３－Ｐ４，Ｐ６－Ｐ７，Ｐ８－Ｐ９間では1.6～1.8m，Ｐ２－Ｐ３，Ｐ７－Ｐ８間では2.4～2.6mと，一間分の長さに長，短の２種類が見られた。

本建物跡の東西辺の傾きは，真北に対し約10°西に傾いている。

遺　　物

出土遺物は皆無であった。

ま　と　め

10基の柱穴中には黒褐色土と明褐色土が堆積するものの，土中からの出土遺物は皆無であった。そのため，本遺構の機能時期は判然としない。　（吉　田）

40号建物跡　ＳＢ40

遺　　構（図169）

本遺構は調査区南東部のＡＬ56・57，ＡＭ56・57グリッドに位置する掘立柱建物跡である。検出層位はＬⅣである。周辺にはピットが近接または重複していた。

建物跡は，遺構の再確認をするためＬⅣを５cmほど掘り下げたところで検出した。その検出状況は，すでに検出したピットと新たに検出したピットとが，各々対応関係にあることから，建物を構成する柱穴と判断した。

建物跡は１間×３間の東西棟である。北側柱列の長さは5.8mで，各柱穴の芯々距離は1.9～2.1ｍである。南側柱列の長さは5.9mで，各柱穴の芯々距離は1.8～２ｍであった。西側柱列の長さは4.65mで，東側柱列の長さは５ｍであった。柱穴のいずれからも柱痕を確認していない。各柱穴の平面形は惰円形で，Ｐ８のみが隅丸方形である。各柱穴の規模は長軸が20～30cm，深さが16～30cmである。

遺　　物

出土遺物はなかった。

ま　と　め

本建物跡は，出土遺物がないため時期の特定が困難ではあるが，中・近世のものと考えている。

（吉　野）

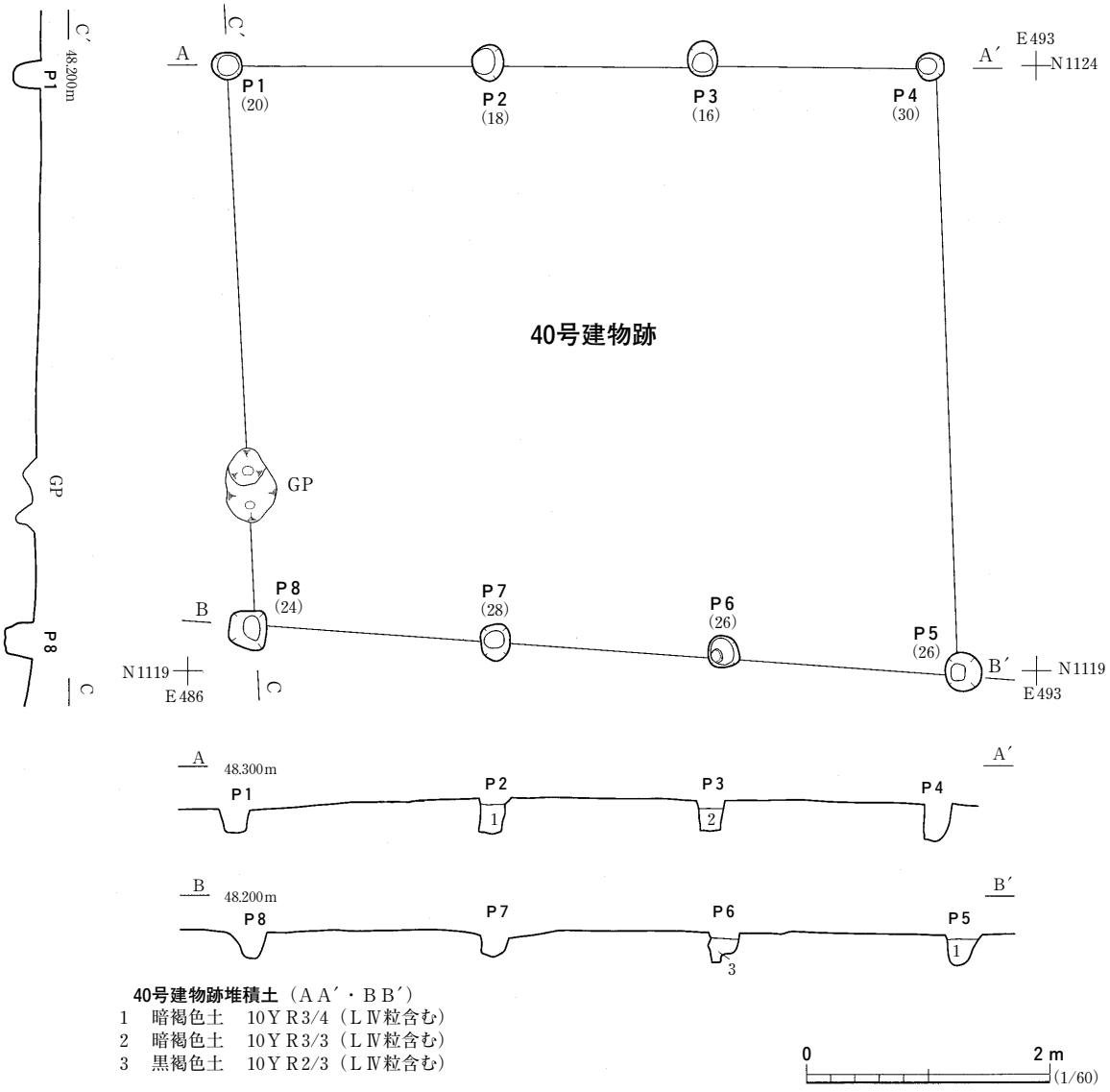


図169　40号建物跡

87号建物跡　ＳＢ87

遺　　構（図170，写真162）

本遺構は調査区南端のＡＮ68・69，ＡＯ68・69グリッドに位置する。ＬⅣ上面を精査中に他の遺構とともに検出し，Ｐ３～５の並びを確認したため，全体を把握するよう努めた。半截する際は柱穴が小さいことから，一方向の断面のみの観察を行なった。そのため，断面図に埋土の記載がないものがある。また，Ｐ２は検出の初期の段階では確認できなかったものである。Ｐ４がＳＫ1143と，Ｐ８がＳＫ1193と重複し，検出した際Ｐ４・８の堆積土はＳＫ1143・1193の堆積土に比べ黒色が強く，明瞭に全体の輪郭を捉えることができたため，本遺構の方がＳＫ1143・1193よりも新しいと判断した。柱穴と土坑の両方にかかるようにそれぞれ断面を設定し，断面でも新旧の確認を行なった。また，平面的にはＳＢ88・ＳＥ09および他の柱穴と重複するものの，柱穴が直接切り合っていないため，

新旧は不明である。周辺には柱列跡や土坑が散在しているが，そのうちＳＡ42は本遺構の北・南側柱列と同じ軸線方向を示している。

本遺構は８個の柱穴からなる，東西１間，南北３間の掘立柱建物跡で，平面形は長方形を呈している。西側柱列の軸線方向はＮ５°Ｅを示す。柱穴の中心点を結んで計測した規模は，北・南側柱列で2.8m，東側柱列で4.6m，西側柱列で4.7mを測る。柱穴の間隔は，北・南側柱列の柱穴間隔が2.8mであるのに比べ，東・西柱列の間隔は1.4～1.6mと約半分の間隔である。

柱穴の平面形は円形を基調としているが，Ｐ１・６・７のように下端が方形を呈するものもある。断面形は多様であるが，Ｐ４・５のように直立に立ち上がるものが多い。底面については，Ｐ６はやや皿状を呈するものの，他の柱穴は平坦である。底面の標高はほぼ同じで，47.6m前後である。

規模は長径が30～40cm，Ｐ２のみ20cmを測る。検出面から底面までの深さは34～53cm，Ｐ２は14cmと浅い。柱穴内に柱痕が認められたのはＰ３・６・８で，柱痕の直径は約15cmを測る。また，Ｐ８の底面中央には直径約13cmの礫が平坦面を上に向けた状態で出土し，断面の観察から，礫の上に柱が据えられたことがわかる。北西隅のＰ２は２個の柱穴と切り合っており，また，規模・堆積土・深さにおいて，他の柱穴と異なっているため，作り替えているか，あるいは本遺構の柱穴でない可能性もある。掘形内堆積土はいずれも，褐色土と黒褐色土がブロック状に混じる土で，Ｐ２は褐色土の占める割合が多い。

遺　　物

遺物は出土しなかった。

ま　と　め

本遺構は南北３間×東西２間の掘立柱建物跡である。時期について，出土遺物はなかったが，他の遺構との重複や堆積土から中世以降と考えている。（伊　藤）

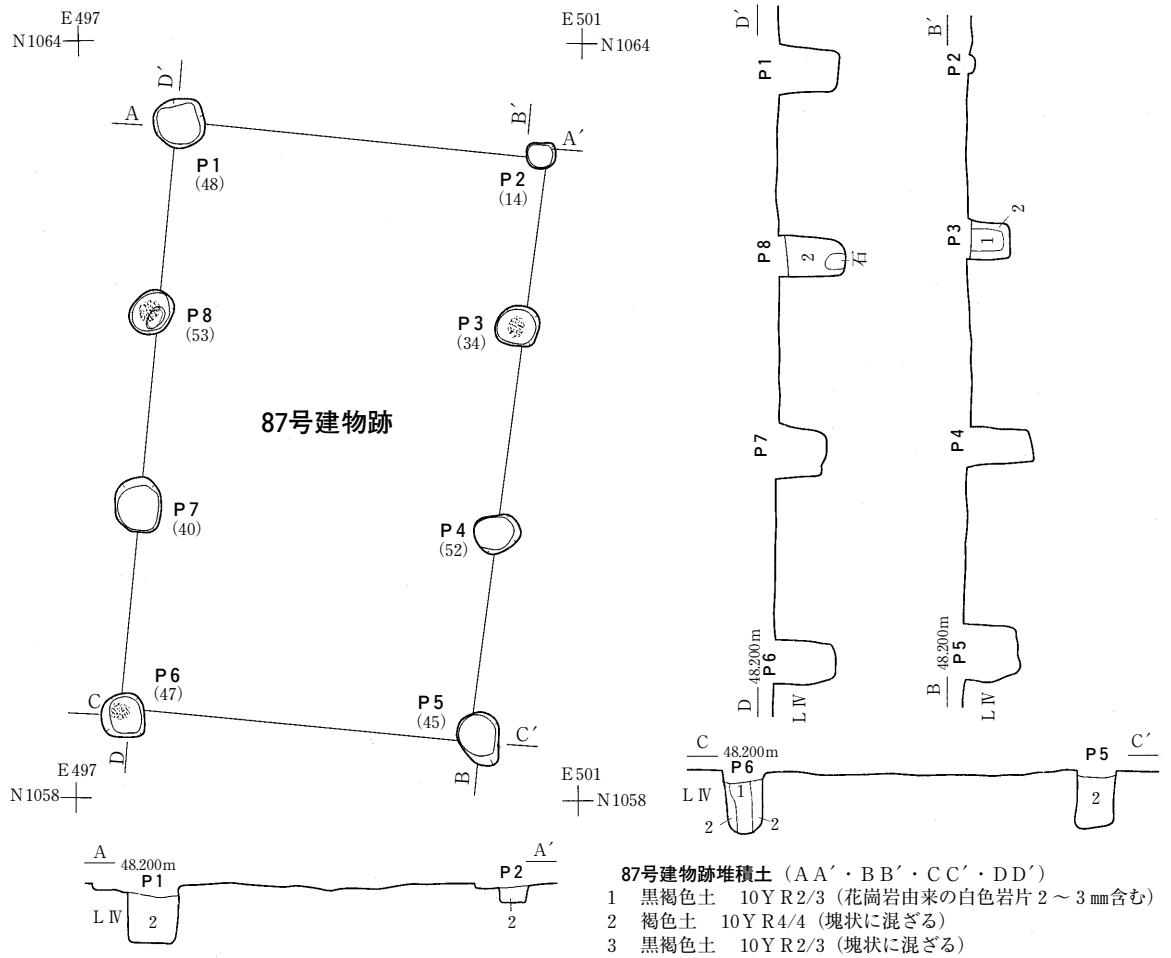
88号建物跡　ＳＢ88

遺　　構（図170，写真162）

本遺構は調査区南端のＡＮ69グリッドに位置する。ＬⅣ上面を精査している際に，Ｐ２・４が柱痕を持つため，まずＰ２～４の柱穴の並びを確認した。平面的にはＳＢ87と重複するが，柱穴どうしが直接切り合っていないので新旧は不明である。周辺には柱列跡や土坑が検出されているが，遺構の密度は低い。すぐ西側に位置するＳＡ43は本遺構の北・南側柱列と同じ軸線方向を示している。

本遺構は６個の柱穴からなる，東西１間，南北２間の掘立柱建物跡で，平面形は長方形を呈している。西側柱列の軸線方向はＮ10°Ｅを指す。柱穴の中心点を結んで計測した規模は，北・南側柱列で2.1m，東側柱列で3.8m，西側柱列で3.9mを測る。各柱穴の間隔は，北・南側柱列の柱穴間隔は2.1m，東・西柱列の柱穴間隔は1.75～2.05mである。

柱穴の平面形は円形を呈し，規模は長径が30～40cmと画一的である。断面形は底面が平坦で，直立に立ち上がるものが多い。検出面から底面までの深さは30～65cmである。柱穴内に柱痕が認めら



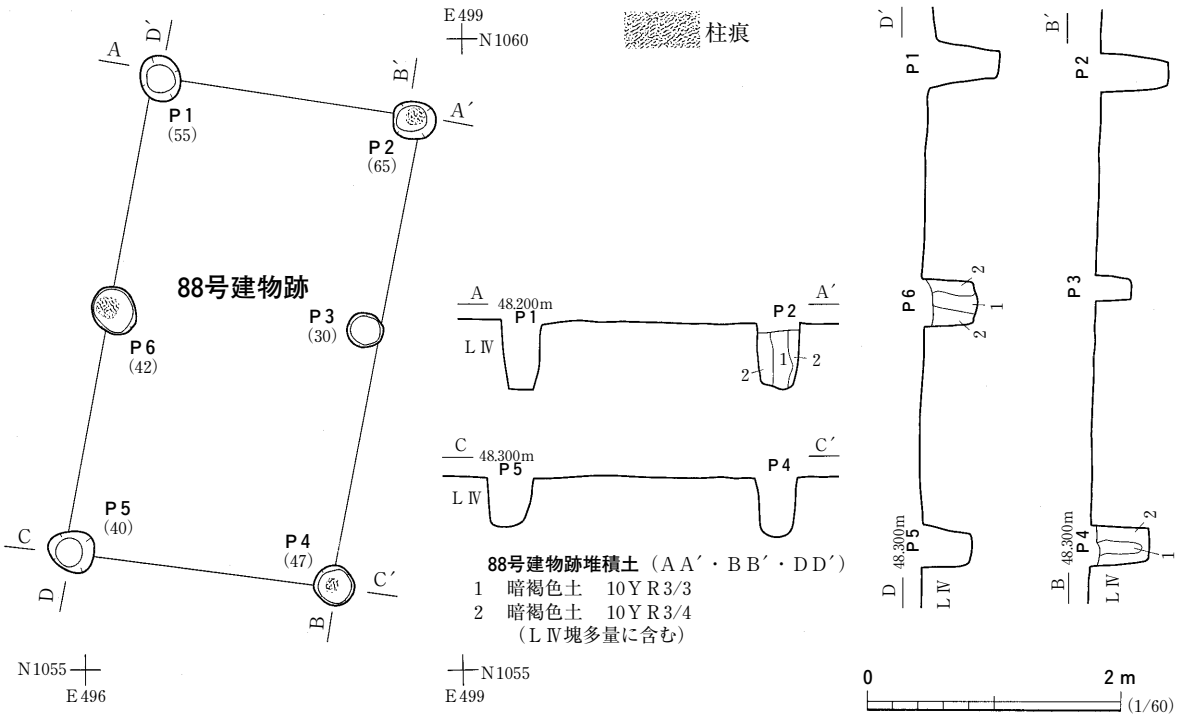


図170　87・88号建物跡

れたのはＰ２・４・６で，柱痕の平面形は円形で，直径は９～18㎝を測る。Ｐ４の柱痕は底面に達しておらず，掘形底面より５㎝程度上にある。柱穴に柱を立てる際，底面に少し土を入れて，柱の長さを調節したものと考えられる。掘形内埋土はＬⅣ塊を多量に含む暗褐色土である。

遺　　物

遺物は出土しなかった。

ま　と　め

本遺構は南北２間×東西１間の掘立柱建物跡である。時期について，出土遺物はなかったが，他の遺構との重複や埋土から中世以降と考えている。　（伊　藤）

89号建物跡　ＳＢ89

遺　　構（図171，写真163～165）

本遺構は，調査区南側ほぼ中央の，ＡＢ61～62グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面で，平坦な場所に立地する。重複する遺構は認められないが，48号柱列跡と主軸方位を揃えて配置的に重複する。また，北東約３ｍには主軸方位を揃えて90号建物跡が立地し，49号柱列跡も近接して存在する。周辺には，多くの柱穴が存在するが，各々の柱穴は重複する場合が少なく，建物跡や柱列との関連は不明である。

本遺構は８基の柱穴からなる。南北２間×東西２間の規模で，ほぼ正方形の平面形をもつ掘立柱建物跡である。主軸方位は，西側の柱列を基準とした場合，Ｎ10°－Ｗを示す。北西隅の柱穴から，時計回りにＰ１～Ｐ８と番号を付した。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３の柱列と，Ｐ７・Ｐ６・Ｐ５の柱列が南北で平行に対応し，Ｐ４はＰ３・Ｐ５，Ｐ８はＰ１・Ｐ７のそれぞれ中間に位置する。

四隅の柱穴の芯間距離でみた建物の規模は，Ｐ１－Ｐ３が3.73m，Ｐ３－Ｐ５が3.7m，Ｐ５－Ｐ７が3.68m，Ｐ７－Ｐ１が3.7m，四隅の柱穴で囲まれた内側の面積は，13.7㎡である。各柱穴の芯間距離は，Ｐ１－Ｐ２が1.97m，Ｐ２－Ｐ３が1.74m，Ｐ３－Ｐ４が1.86m，Ｐ４－Ｐ５が1.83m，Ｐ５－Ｐ６が1.72m，Ｐ６－Ｐ７が1.96m，Ｐ７－Ｐ８が1.8m，Ｐ８－Ｐ１が1.9mである。

各掘形の平面形は円形または楕円形で，その径は28～48㎝である。総じて四隅の柱穴が大きい傾向がある。検出面から底面までの深さは12～46㎝，掘形底面の標高は48.48m～48.9mと42㎝の高低差がある。

遺　　物

本遺構からの出土遺物はない。

ま　と　め

本遺構は南北２間×東西２間の掘立柱建物跡である。48号柱列跡と重複する位置関係にあるが，それぞれの柱穴が直接重複していないため，新旧関係は不明である。出土遺物がないため所属時期は特定できない。　（高　橋）

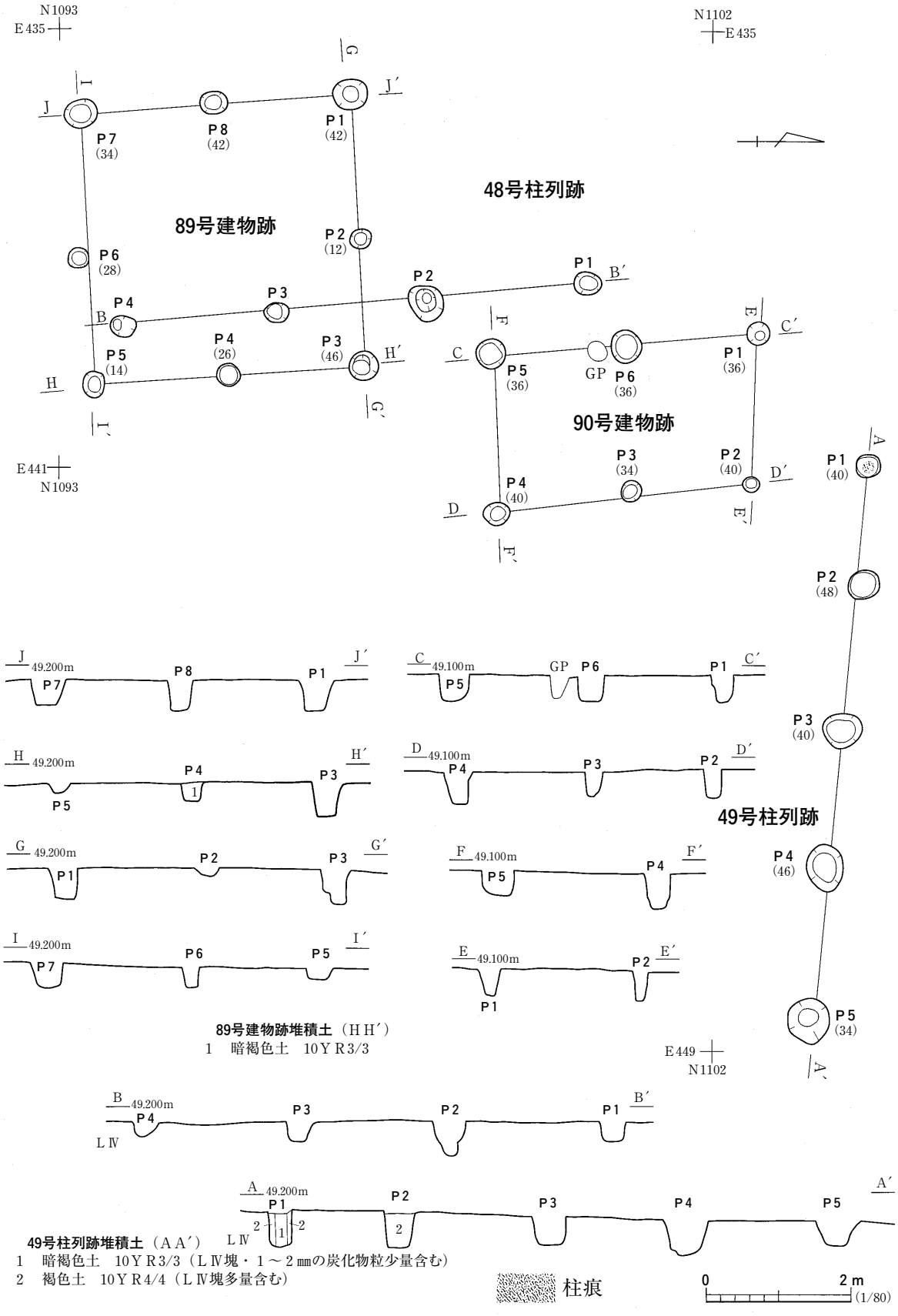


図171　89・90号建物跡，48・49柱列跡

90号建物跡　ＳＢ90

遺　　構（図171，写真163～165）

本遺構は，調査区南側ほぼ中央の，ＡＢ～ＡＣ・60～61グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面で，平坦な場所に立地する。重複する遺構は認められない。南西約３ｍには89号建物跡，48号柱列跡が主軸を揃えて立地し，また，北東約1.5ｍには49号柱列跡が存在する。周辺には，多くの柱穴が存在するが，各々の柱穴は重複する場合が少なく，建物跡や柱列との関連は不明である。

本遺構は６基の柱穴からなる。南北２間×東西１間の規模で，長方形の平面形をもつ掘立柱建物跡である。主軸方位は，西側の柱列を基準とした場合，Ｎ10°－Ｗを示す。北西隅の柱穴から，時計回りにＰ１～Ｐ６と番号を付した。Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４の柱列と，Ｐ１・Ｐ６・Ｐ５の柱列が東西で対応する。四隅の柱穴の芯間距離でみた建物の規模は，Ｐ１－Ｐ２が2.06m，Ｐ２－Ｐ４が3.58m，Ｐ４－Ｐ５が2.2m，Ｐ５－Ｐ１が3.63m，四隅の柱穴で囲まれた内側の面積は，7.68㎡である。各柱穴の芯間距離は，Ｐ２－Ｐ３が1.75m，Ｐ３－Ｐ４が1.82m，Ｐ５－Ｐ６が1.86m，Ｐ６－Ｐ１が1.78mである。各掘形の平面形は円形または楕円形で，その径は22～46㎝である。

検出面から底面までの深さは34～40㎝で，掘形底面の標高は48.43～48.6mと17㎝の高低差がある。掘形底面のレベルは，Ｐ４を除けばほぼ同レベルを示す。

遺　　物

各柱穴から遺物は出土していない。

ま　と　め

本遺構は，南北方向に桁行きをもつ南北２間×東西１間の掘立柱建物跡である。重複する遺構は認められない。出土遺物がないため所属時期は特定できない。（高　橋）

第４節　柱　列　跡

南区から計７基の柱列跡を確認した。調査区の南側で確認されたＳＡ43・48・49は建物跡に近接する形で確認されている。

31号柱列跡　ＳＡ31（図172）

本遺構は南区北西隅に位置し，Ｑ45・46の２グリッドにまたがっている，他の遺構との重複は無くＬⅣ上面にて確認された。

本遺構はほぼ南北方向に並ぶ３基のピットからなる柱列跡と考えられる。柱穴は北からＰ１～３を数える。柱穴の平面形状は円形ないし楕円形をなす。柱穴の規模は直径（長径）約40～60㎝，確認面からの深さは浅いもので22㎝，深いもので54㎝を測る。各柱穴の中心を結んだ距離はＰ１－Ｐ２，Ｐ２－Ｐ３間で共に約1.2mを測る。Ｐ１－Ｐ３を結んだ列の方向は真北に対し約20°西に傾い

ている。

３基の柱穴中にはすべて暗褐色土が堆積しているものの，土中からの出土遺物は皆無であった。そのため，本遺構の機能時期は判然としない。（吉　田）

42号柱列跡　ＳＡ42（図172，写真166）

本遺構は，調査区南端のＡＯ・ＡＰ70グリッドに位置する。ＬⅣ上面を精査中に本遺構の柱穴の並びを確認した。他の遺構との重複はない。周辺では，密度は低いが，柱列跡や土坑・柱穴が検出されている。南側２ｍに位置するＳＡ46は本遺構とほぼ平行している。また，本遺構と軸線方向を同じくするものに，北西４ｍのところにあるＳＢ87が挙げられる。

本遺構は４個の柱穴からなる，東西３間の柱列跡である。柱列の軸線方向はＥ５°Ｓを示す。各柱穴の中心間の距離は1.7m，1.9m，2.6mと一定しない。柱穴の平面形は円形を基調とするものの，Ｐ１はやや方形に近い。各柱穴の規模は長径35～40㎝，検出面から底面までの深さは40～48㎝である。柱痕は確認できなかった。遺構内埋土は１層認められ，ＬⅣ塊を多量に含む暗褐色である。

本遺構から遺物は鉄滓が１点出土している。

本遺構は軸線方向や埋土から，ＳＢ87に関連する塀と考えられる。また，時期については，周辺の遺構や埋土などから，ＳＢ87と同時期で中世以降の可能性が高い。（伊　藤）

43号柱列跡　ＳＡ43（図172，写真166）

本遺構は，調査区南端のＡＭ69グリッドに位置し，検出面はＬⅣ上面である。周囲には同様の柱穴が認められたが，配置から本遺構の柱穴の並びを確認した。他の遺構との重複はない。周辺には建物跡や土坑，柱穴が散在しており，北側にはＳＫ184，西側にはＳＫ258が位置している。ＳＡ46は本遺構と軸線方向をほぼ同じくする。

本遺構は３個の柱穴からなる，東西２間の柱列跡である。柱列の軸線方向はＥ３°Ｓを示す。各柱穴の中心間の距離は2.1m，2.0mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，断面形は底面がほぼ平坦で，垂直に立ち上がる形である。各柱穴の規模は長径35～40㎝とまとまっている。検出面から底面までの深さは16㎝・23㎝・30㎝で，Ｐ１のみが浅い。柱痕は確認できなかった。遺構内埋土はＬⅣ塊を多量に含む暗褐色土である。本遺構からの出土遺物はなかった。

本遺構は軸線方向や配置から，ＳＢ87に関連する施設と考えられる。時期については中世以降と考えている。（伊　藤）

46号柱列跡　ＳＡ46（図173，写真166）

本遺構は，調査区南端のＡＯ・ＡＰ70グリッドに位置する。ＬⅣ上面を精査中に，本遺構の柱穴の並びを確認した。周囲には同様の規模・埋土を持つ柱穴が認められたが，他に組み合う柱穴がなかったため，本遺構を柱列跡と判断した。他の遺構との重複はない。周辺の密度は低いものの，柱

列跡や土坑，柱穴が検出されている。北側２ｍには本遺構と軸線方向を同じくするＳＡ42が位置している。

本遺構は５個の柱穴からなる，東西４間の柱列跡である。柱列の軸線方向はＥ５°Ｓを指す。各柱穴の中心間の距離は1.65～1.8ｍを測る。柱穴の平面形は円形で，各柱穴の大きさは長径22～28㎝と比較的均一である，検出面から底面までの深さはＰ３のみ27㎝で，他の柱穴は43～54㎝である。柱痕は認められなかった。遺構内埋土はＬⅣ塊を多量に含む暗褐色土である。

本遺構は軸線方向や埋土から，ＳＢ87・ＳＡ42に関連する施設と考えられる。時期については出

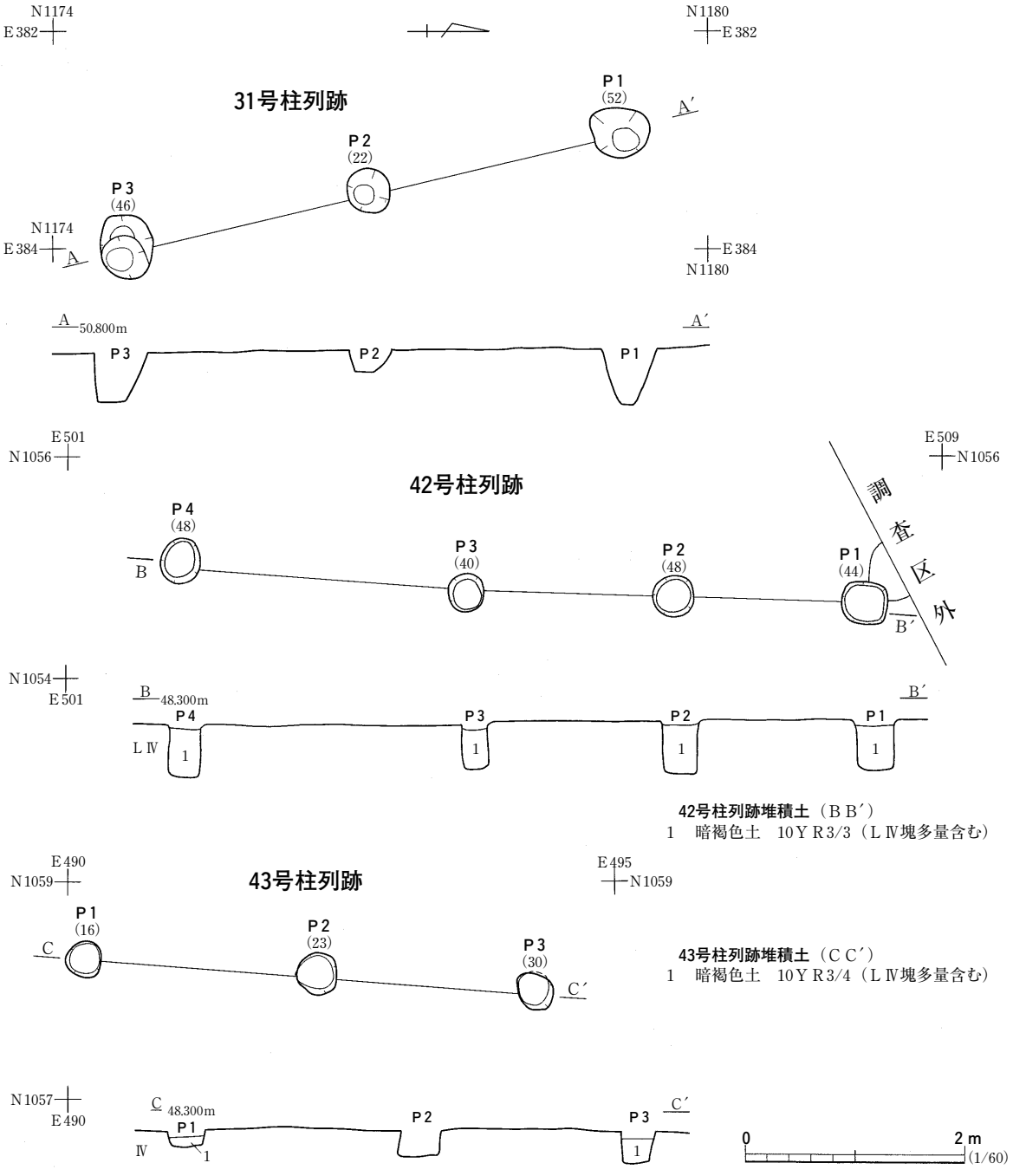


図172　柱列跡（１）

土遺物はないが中世以降と考えている。　（伊　藤）

47号柱列跡　ＳＡ47（図173，写真166）

本遺構は，調査区南端のＡＫ・ＡＬ71グリッドに位置する。ＬⅣ上面を精査中に本遺構の柱穴の並びを確認した。他の遺構との重複は確認されなかったが，Ｐ３は他の柱穴を切っている。周囲に他の遺構はない。本遺構は北東側に位置するＳＢ87・ＳＡ42・ＳＡ43・ＳＡ46と軸線方向が同じである。

本遺構は５個の柱穴からなる，東西４間の柱列跡である。柱列の軸線方向はＥ５°Ｓを指す。各柱穴の中心間の距離は1.6～1.8ｍを測る。柱穴の平面形は円形を基調とするが，Ｐ１・３はやや不整形である。断面形は底面がほぼ平坦で直立に立ち上がる形が多く，Ｐ３のみ中段を持つ形である。各柱穴の大きさは長径27～50㎝，検出面から底面までの深さは，Ｐ３の75㎝を除くと，24～38㎝で

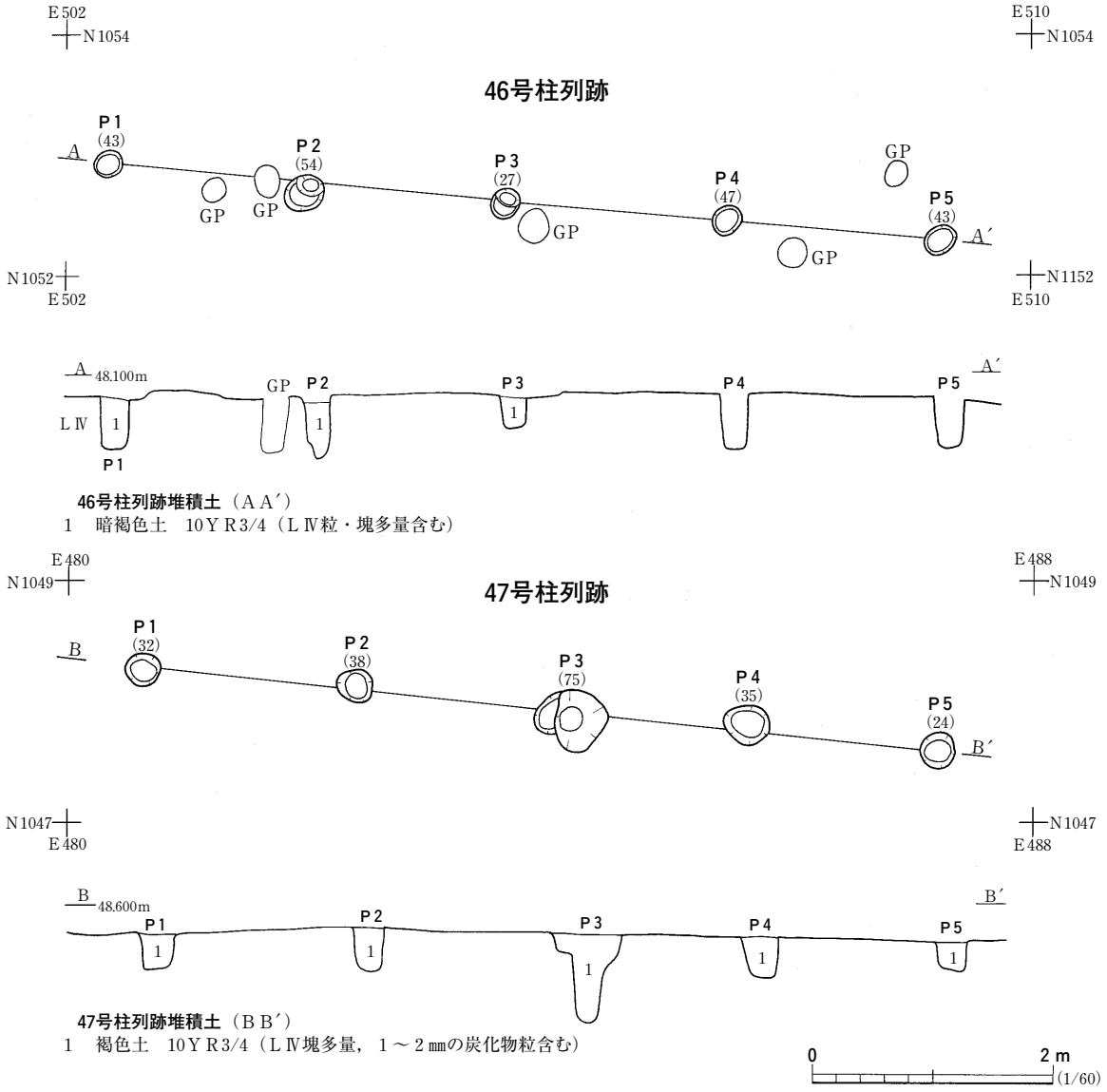


図173　柱列跡（２）

ある。柱痕は認められなかった。遺構内埋土はＬⅣ塊を多量に含む暗褐色土である。本遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構は軸線方向や埋土から，ＳＢ87・ＳＡ42・ＳＡ43・ＳＡ46との関連が予想される。時期については中世以降と考えている。（伊　藤）

48号柱列跡　ＳＡ48（図171，写真163）

本遺構は，調査区南側ほぼ中央の，ＡＢ・60～62グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面で，平坦な場所に立地する。

重複する遺構は認められないが，ＳＢ89と主軸方位を揃えて配置的に重複する。また，東約１ｍには，主軸方位を揃えてＳＢ90が立地し，ＳＡ49も近接して存在する。

周辺には，多くの柱穴が存在するが，各々の柱穴は重複する場合が少なく，建物跡や柱列との関連は不明である。

本遺構は，南北に４基の柱穴が並ぶ柱列跡である。主軸方位はＮ10°－Ｗを示し，ＳＢ89・90の主軸方位と一致している。両端に位置するＰ１－Ｐ４の距離は6.42m，各柱穴の芯間距離は，Ｐ１－Ｐ２が2.1m，Ｐ２－Ｐ３が2.05m，Ｐ３－Ｐ４が2.3mである。

各柱穴の平面形は，円形または楕円形で，長軸は38～55cm，短軸は25～44cmである。検出面から底面までの深さは20～49cm，掘形底面の標高は48.52～48.8mと28cmの高低差がある。Ｐ３は，他の柱穴よりも平面形が大きく，掘形が浅い。

本遺構からは出土遺物がないため，所属時期は特定できない。（高　橋）

49号柱列跡　ＳＡ49（図171，写真163）

本遺構は，調査区南側ほぼ中央の，ＡＣ60・ＡＤ60グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面で，平坦な場所に立地する。重複する遺構は認められない。本遺構の南西約1.5mには，ＳＢ90が立地し，ＳＢ89，ＳＡ48が近接して存在する。

本遺構は，東西に５基の柱穴が並ぶ柱列跡である。主軸方位はＮ80°－Ｗを示し，ＳＢ89・90，ＳＡ48の主軸方位とは，直行するような位置にある。両端に位置するＰ１－Ｐ５の距離は7.62m，各柱穴の芯間距離は，Ｐ１－Ｐ２が1.61m，Ｐ２－Ｐ３が2.02m，Ｐ３－Ｐ４が1.91m，Ｐ４－Ｐ５が2.05mである。

各柱穴の平面形は，円形または楕円形で，長軸は33～65cm，短軸は30～58cmである。Ｐ３・４・５の規模が大きい。検出面から底面までの深さは34～48cm，掘形底面の標高は48.36～48.52mと16cmの高低差がある。Ｐ４の底面が一番低く，他は同レベルを示す。柱穴の堆積土は暗褐色土を主体とし，基本土層のＬⅣに相当する褐色土塊が混入している。柱痕はＰ１で確認できた。

本遺構からは縄文土器片９点が出土した。所属する時期は，明確ではないが中・近世頃と考えられる。（高　橋）

第５節　土　坑

２次調査の南区から検出した土坑は352基である。１次調査の南区で検出した66基と合わせると，南区の土坑は413基となる。ここでは土坑１基ごとの報告はせずに形状・分布・堆積土・遺物など概観することにした。

土坑の年代は，その根拠となる出土遺物が堆積土からのものが大半を占めている。このため，他の年代の遺物の流入も考えることができるので，年代の特定ができたものは少ない。そのなかで，年代の特定できたものには縄文中期中葉から後期前葉と，近世のものがある。

土坑の分布は密度の割合が異なるものの調査区全域にわたっていた。調査区の地形はほぼ平坦であることから，地形の制約を受けることなく必要とした場所に，土坑を掘ったのであろう。そのなかでも密度が高いのは調査区の北半分である。逆に，密度が低いのは南半分で調査区南端にゆくほど密度が低くなってゆく。さらに加えて，縄文時代の竪穴住居跡が調査区の北半分しか分布していないことを考え合わせると，土坑との有機的な関係を窺うことができよう。

次に土坑のまとまりを抽出してみると，調査区東側中央部のＸ55グリッド周辺・調査区中央部のＡＦ62グリッド周辺・調査区北西部のＺ49グリッド周辺・調査区南東部のＡＭ69周辺などである。ほかに，調査区北東部を縦走する標高48.2ｍの等高線に沿って土坑が分布している例などもある（付図１を参照）。

各土坑の位置・形態・規模・重複関係などについては，表３にまとめて示した。以下，表の内容に沿って説明を加えておく。

確認面の計測値は，現状での土坑の上端を示している。土坑の上端としなかったのは，第１に後世の耕作によって当時掘り込まれた上端が失われていること，第２に壁面の崩落などにより上端の規模が本来のものと異なっているためである。確認面の大きさは100～200㎝の範囲に大半のものが含まれ，特に150㎝前後のものが多い。

平面形の形態は円形・楕円形・不整楕円形・不整円形・隅丸方形・隅丸長方形などに細分した。そのなかで，大半を占めているのは楕円形である。次いで不整楕円形のものが多い。不整楕円形は本来楕円形であったものが，壁面が崩れてしまった結果，不整楕円形になったものであろう。なお，平面形のうち少数なものは隅丸方形である。

断面形は皿形・箱形・筒形・袋形・ロート形などに分類した。次に，各断面形の基準を示す。

皿形は深さが30㎝未満で，底面から壁の立ち上がりが135～170°の範囲となり，壁の立ち上がりがわずかなもの。

箱形は深さが30㎝以上で，底面から壁の立ち上がりが100～134°の範囲となり，壁の立ち上がりが緩やかなもの。

筒形は底面から壁の立ち上がりが90～100°の範囲で，壁の立ち上がりが直立気味なもの。

袋形はフラスコ状とも称されているもので，底面から壁の立ち上がりが90°未満で，壁の立ち上がりが内傾するもの。

ロート形は上部が皿形で，下部が箱形なもの。

断面形で袋形と分類しているものは，上端にゆくほど逆ハの字状となっている。それは，袋形の壁が内側に傾いているため崩落し易く，本来の形状を留めているものが少ないためである。そのため，一部でも上端に対して下端が内側に入っているものも袋形に含めている。断面形のなかで多かったものは箱形で，少ないものはロート形である。以上，調査区から検出した土坑のなかで多い形態は平面形が楕円形で，断面形が箱形のものである。

堆積土の欄のうち分類に記した自然と人為は，堆積土の状況から判断したものである。その基準は，自然としたものは，堆積土が黒色もしくは黒褐色・暗褐色のものが堆積土の下部にまで堆積しているものである。黒褐色・暗褐色土はＬⅠ・Ⅱの流入であることから，自然堆積の可能性が高いものと判断した。

人為としたものは，堆積土のうち褐色系のものが主体を占めているものである。これはＬⅣ・Ⅴの崩落・流入であることから，人為堆積の可能性が高いと判断した。しかし，自然の状態で壁面の崩落やＬⅣの流入なども予想できるので，すべてが人為堆積であるとはいいきれない。

次に，ある程度機能を特定できるような特徴を有しているものについて項目を分けて記述を進めてゆく。

フラスコ状土坑

土坑の機能が推定できたもののうち，いわゆるフラスコ状土坑と呼ばれているものに該当するのは79基（表3を参照）である。土坑の総数からみた割合は，22%である。分布の状況は住居跡の近辺に点在している。さらに，土坑のまとまりとして挙げたうちＡＦ62・Ｘ55グリッド周辺はフラスコ状土坑のまとまりであることが分かった。

平面形は円形もしくは楕円形を基調とし，断面形は袋形で一部筒形・箱形と分類したものも含めている。規模は確認面の長軸が97～212cm，底面の長軸で100～210cm，深さが41～115cmである。確認面の平面形は円形もしくは楕円形を基調とするものである。

このなかで遺存状態が良好なものは，174・227・246・327号土坑である。壁は70～80°の角度で内傾している。次にこれらをモデルとして開口部の径を復元してみよう。確認面から地表面までの高さはほぼ50cmであることから，断面形を上方に50cmほど延長してみた。その結果は径が60～70cmであった。

フラスコ状土坑から，堆積土及び底面から礫が出土しているものが19基であった。それらを列挙すると138ａ・138ｂ・142・156・159・217・304・312・318・323・327・336・345・363・368・380・1165・1186・1191号土坑である。

礫の出土点数は1～9点で，礫の大きさは8～25cmであった。礫の出土状態は中央部に集積して

いるもの・壁際に集積しているもの・特に集積することなく散乱しているものなど３種類に分けられる。礫が中央部に集積していたのは1165号土坑だけである。礫の出土位置からみると，土坑の開口部から投棄されたようである。壁際に集積していたのは304・363号土坑である。開口部から壁際に投棄するのは，壁が内傾していることから困難であろう。そのため，穴のなかに入って投棄したことを考えている。そのほかのものは，礫は集積することなく散乱状態で出土していた。貯蔵穴から出土した礫は，住居跡の複式炉で用いられていた礫と大きさがほぼ同じである。それを裏付けるように，複式炉のなかでは石組部や土器埋設部の縁石などが抜き取られているものがあった。

このことから，他に移住する際に住居を廃棄する際，炉の礫を抜き取って廃棄した土坑に投棄したものもあったのだろう。

138ａ・ｂ号土坑（図178）は，廃棄した土坑を再利用している例である。138ａ号土坑は138ｂ号土坑を黒褐色土で30㎝程度まで埋め戻して，再利用していた。その他に，246号土坑の底面からは灰褐色粘土が集積していた例もある。これは，土器を作るための粘土を備蓄していたのだろうか。

フラスコ状土坑のなかで年代が特定できるのは225・246号土坑の２基のみで，これらに関してはいずれも縄文中期末葉とすることができる。この時期は，調査区北側にある住居跡群とほぼ同じ時期であることから，相互に有機的な関係があることが分かる。この土坑の機能は，特徴的な形状から貯蔵穴と考えている。

遺　　物（図241・243～252，写真225・226・231）

ここではフラスコ状土坑から出土した遺物について述べておく。126号土坑から出土した図241－２・３は深鉢の口縁部である。２は隆起線で区画されたなかに縄文を充填している。２・３はともに縄文中期末葉のものである。

138号土坑からは図241－５～７・図250－１・図251－８などが出土した。図241－５～７は沈線によって区画されたなかに縄文を充填し，文様を描いている。図250－１は土器片の周囲を研磨して作られた円盤である。図251－８は礫石器の凹石で，底面から礫とともに出土した。図241－５～７の年代は縄文後期初頭である。

156号土坑の堆積土下部から出土した図243－４は，完形のミニチュア土器で深鉢を模したものである。波状口縁の一端には不整形の貫通穴がみられる。文様は沈線で区画されたなかに縄文を充填しＪ字状のものを描いている。縄文後期初頭のものであろう。なお，この土器と同じ層位からは焼けた粘土塊も出土していた。

179号土坑から出土したもののうち図示したのは，図244－２～６，図245－１である。図244－１はミニチュア土器で，蓋を模したものであろうか。ツマミは中央部が円形に窪み左右の端には円形の貫通孔が穿たれていた。図244－３～６，図245－１は深鉢の口縁部から胴部上方にかけてのものである。図244－３は口縁部が内傾し文様が施されず，胴部は縄文が施されている。図244－４～６は波状口縁をなすものである。頸部になされた横位の沈線により口縁部は無文で，胴部は縄文と区分されている。沈線の幅は図244－４・５が広く，６が狭くなっている。図245－１は波状口縁をな

し，横位の隆起線により口縁部の無文帯と胴部の縄文とを区画している。縄文後期初頭であろう。

189号土坑からは図251－1の石鏃が出土した。基部形態は凹基である。190号土坑から出土した図245－3は，深鉢の口縁部である。文様は隆起線による横位渦巻文と横位楕円文がなされ，さらに横位楕円文のなかに充填縄文がなされている。年代は縄文中期後葉であろう。

225号土坑の底面直上から出土した図245－5は深鉢である。頸部には横位の沈線がなされ，口縁部の無文帯と胴部の縄文とを区画している。年代は縄文中期末葉であろう。

246号土坑から出土したのは図246－1・2である。1は注口土器で，隆起線によって文様が描かれている。2は深鉢の下半部で，立った状態で底面から出土したものである。年代は縄文中期末葉であろう。

255号土坑からは図245－10の磨石が出土した。312号土坑から出土した図246－7と図247－1は深鉢である。図246－7は波状口縁をなし，横位沈線によって無文帯と縄文とに区分されている。さらに，刻目を施した隆帯により縦位に区画されている。図247－1は底面近くから出土したもので，波状口縁となっている。図246－7と図247－1の年代は，縄文後期初頭であろう。

327号土坑からは図246－6・図247－2・3が出土した。図246－6は底面近くの堆積土から出土したミニチュア土器で，深鉢を模倣したものである。図247－2・3は深鉢で，2の頸部には横位の隆起線により，口縁部の無文帯と胴部の縄文が区画されている。なお，胴部には円形の貫通孔が穿たれている。3は沈線のなかに縄文が充填され文様が描かれている。図246－6・図247－2・3の年代は，縄文中期末葉にかけてのものであろう。

368号土坑の底面からは図248－6のミニチュア土器が出土した。深鉢を模倣したもので，胴部は無文である。年代は縄文中期後葉～後期初頭であろうか。

380号土坑からは図252－1の磨石が出土した。1164号土坑からは図249－2が出土した。これは把手付の深鉢である。頸部には隆起線が巡り，口縁部の無文帯と胴部の縄文とを区画している。

落し穴

ここでは従来，落し穴と呼ばれている土坑に類似するものに該当するものを挙げてみた。それらを列挙すると130・350・903・1189・1196・1307号土坑である。いずれも底面からピットを検出していない。確認面での平面形は，楕円形・長楕円形・隅丸長方形などである。断面形はロート形・箱形で，ロート形のものが多い。規模は確認面での長軸は135～240㎝，深さは78～176㎝である。

これらの土坑を落し穴としたのは，平面形と断面形からいわゆる落し穴に類することからである。遺物は堆積土からの出土であり住居跡との重複がないため，年代の特定は困難である。

機能の特定ができなかったもの

上記した以外の土坑267基については，機能の特定はできていない。土坑の総数からの割合は76％である。それ以外にも，

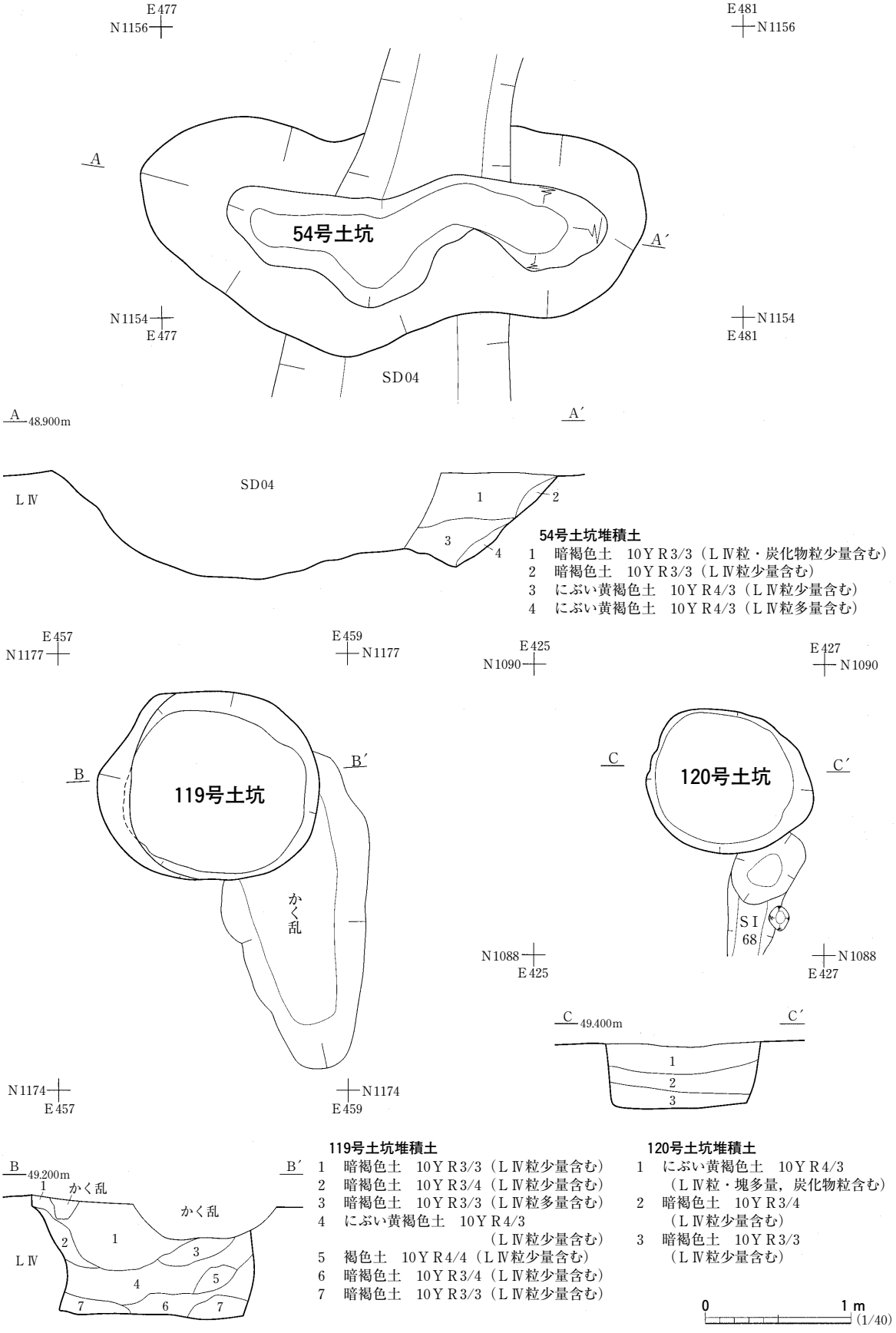
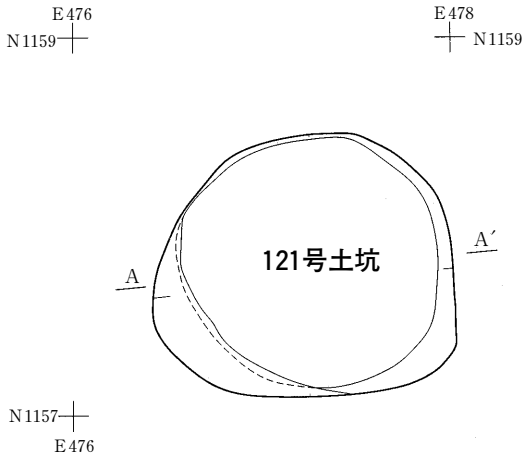
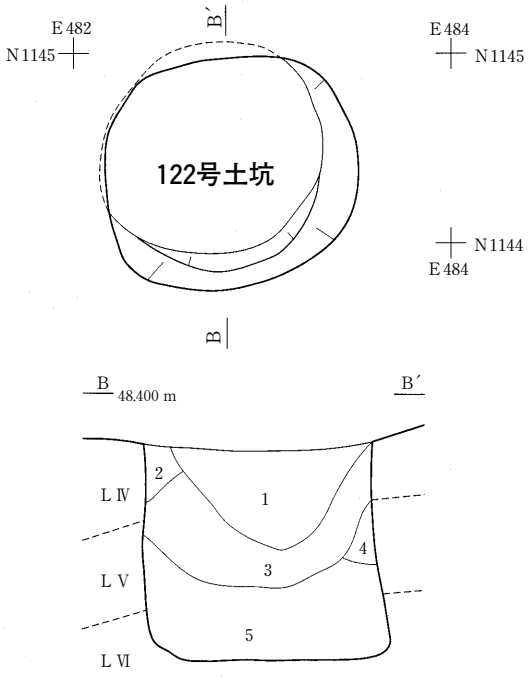

E477
N1156
E481
N1156
A
54号土坑
A′
N1154
E477
N1154
E481
SD04
A
48.900m
A′
SD04
LⅣ
1
2
3
4
54号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒多量含む）
E457
N1177
E459
N1177
B
119号土坑
B′
かく乱
N1174
E457
N1174
E459
B
49.200m
B′
1
かく乱
かく乱
2
1
3
LⅣ
4
5
7
6
7
119号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量含む）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
（ＬⅣ粒少量含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
7　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量含む）
E425
N1090
E427
N1090
C
120号土坑
C′
SＩ
68
N1088
E425
N1088
E427
C
49.400m
C′
1
2
3
120号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
（ＬⅣ粒・塊多量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒少量含む）
0
1 m
(1/40)

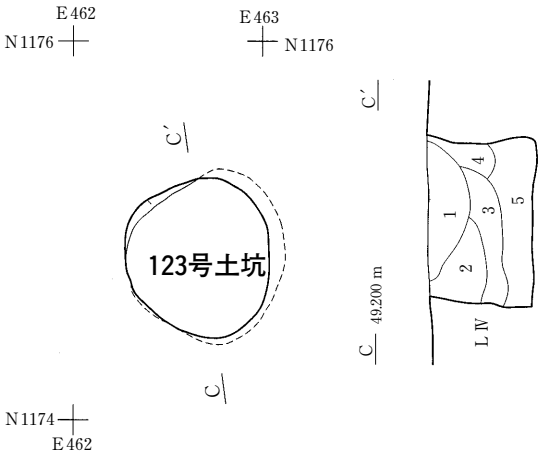
図174　土坑（１）



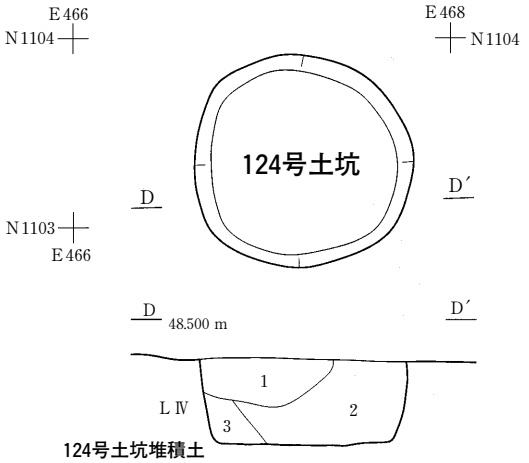
121号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・黒褐色粘土粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量含む）
6　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）



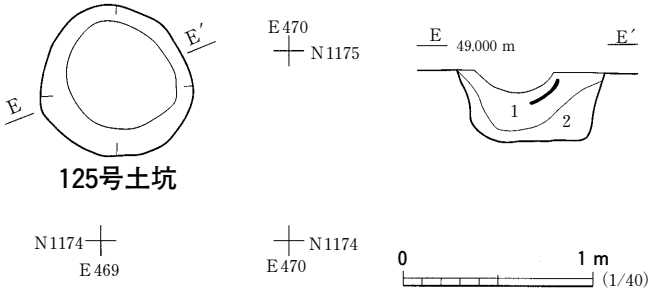
122号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅥ粒含む）
2　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ粒含む）
3　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅥ粒少量含む）
4　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ粒含む）
5　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅥ粒含む）



123号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（暗褐色土粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
5　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）

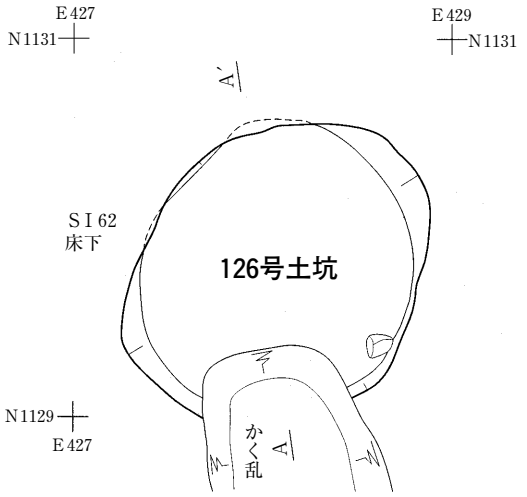


124号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒多量，黒色土粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒・黒色土粒含む）

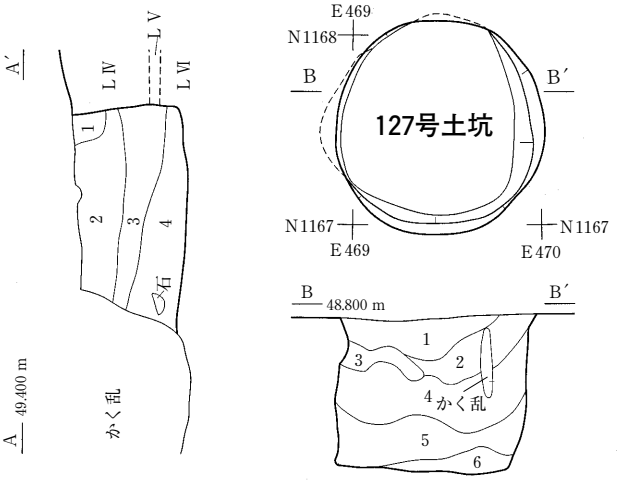


125号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）

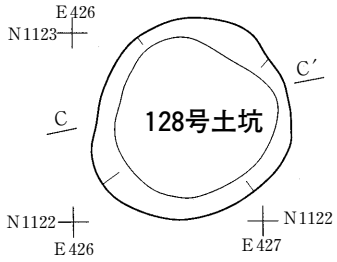
図175　土坑（2）

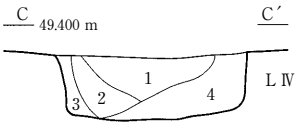


126号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒・暗褐色土粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒少量・炭化物粒含む）

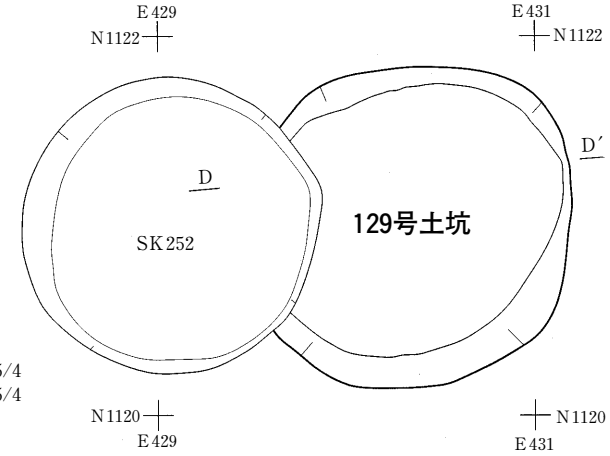


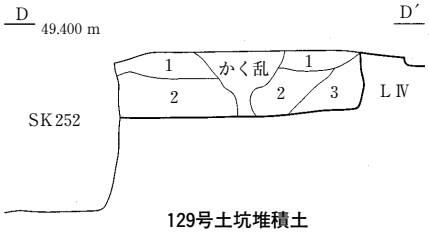
127号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒，ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物少量，ＬⅣ粒含む）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（炭化物粒多量，ＬⅣ粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量，黒褐色土粒含む）
6　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）



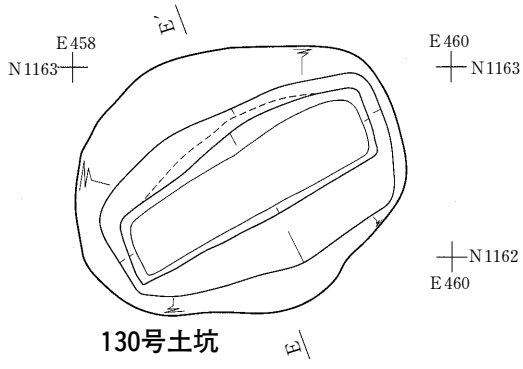


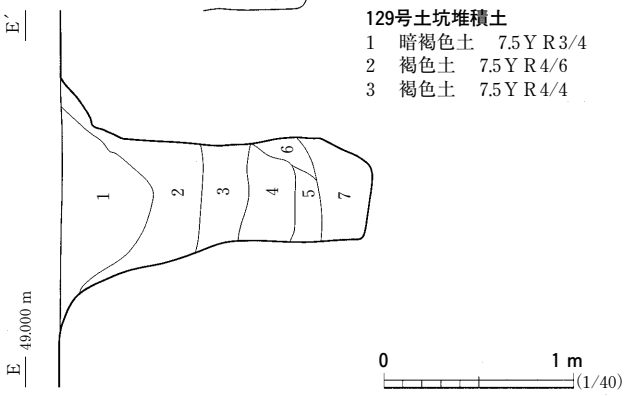
128号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/3
2　褐色土　7.5ＹＲ4/4
3　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
4　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4





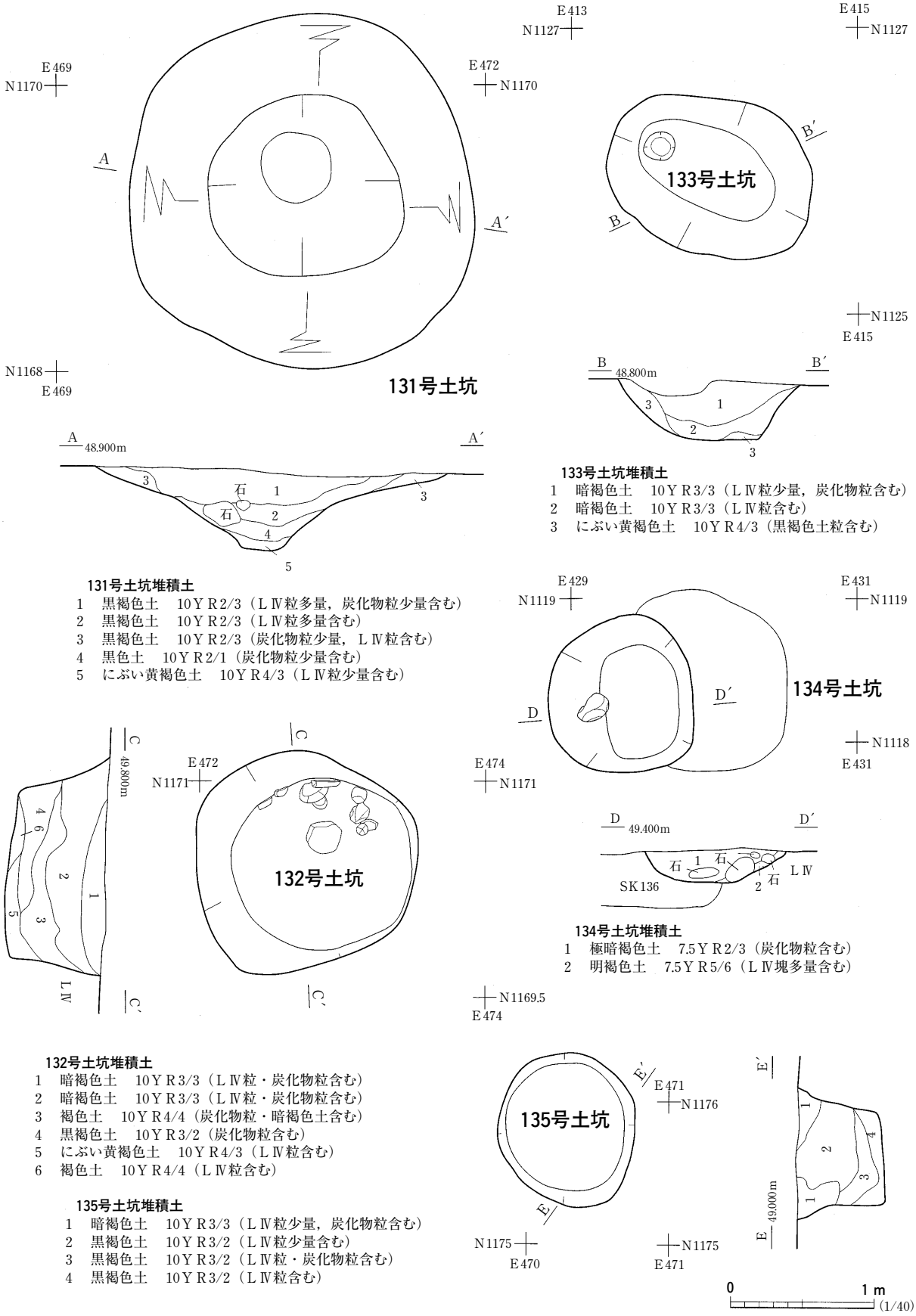
129号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
2　褐色土　7.5ＹＲ4/6
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4





130号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
5　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅣ粒含む）
6　黄褐色土　10ＹＲ5/6
7　黒褐色土　10ＹＲ2/2（ＬⅣ粒含む）

図176　土坑（３）



131号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒多量含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
4　黒色土　10ＹＲ2/1（炭化物粒少量含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）

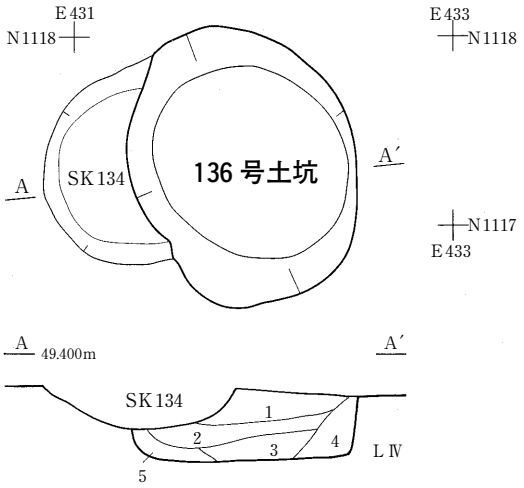
133号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（黒褐色土粒含む）

134号土坑堆積土
1　極暗褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒含む）
2　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）

132号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒・暗褐色土含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物粒含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）

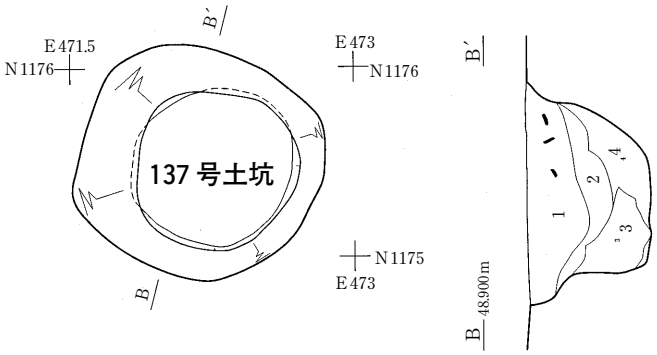
135号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅣ粒少量含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅣ粒含む）

図177　土坑（４）



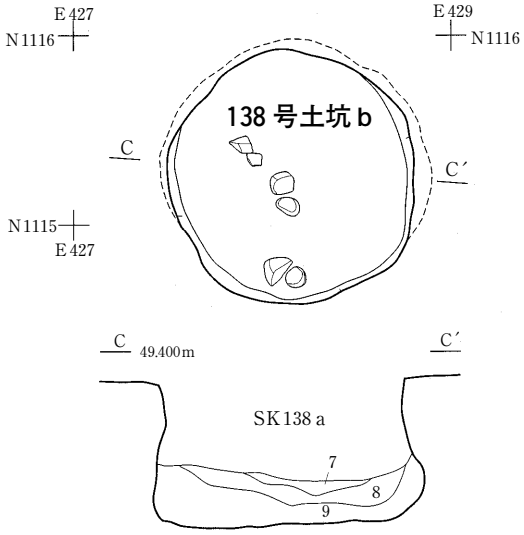
136 号土坑堆積土

1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3（ＬⅣ粒少量含む）
3　灰褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/2（ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
5　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4



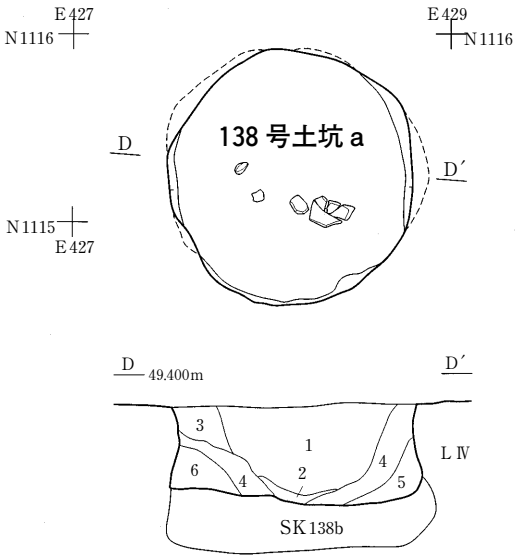
137 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
3　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）



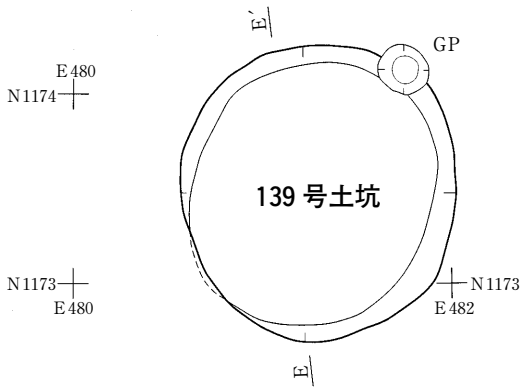
138ｂ号土坑堆積土

7　黒褐色粘質土　10Ｙ Ｒ3/2（炭化物粒・ＬⅣ粒少量含む）
8　黒色土　10Ｙ Ｒ1.7/1（焼土粒・ＬⅣ粒少量含む）
9　黒褐色粘質土　10Ｙ Ｒ5/6（黒色土塊少量含む）



138ａ号土坑堆積土

1　黒褐色粘質土　7.5Ｙ Ｒ3/2（炭化物粒・焼土粒・小石少量含む）
2　極暗褐色粘質土　7.5Ｙ Ｒ3/3（炭化物粒・焼土粒少量含む）
3　にぶい黄褐色粘質土　10Ｙ Ｒ4/3（炭化物粒少量含む）
4　黒褐色粘質土　10Ｙ Ｒ2/3（炭化物粒・焼土粒・ＬⅣ粒少量含む）
5　にぶい黄褐色粘質土　10Ｙ Ｒ4/3
（炭化物粒・焼土粒少量，暗褐色土粒多量含む）
6　褐色粘質土　10Ｙ Ｒ4/4

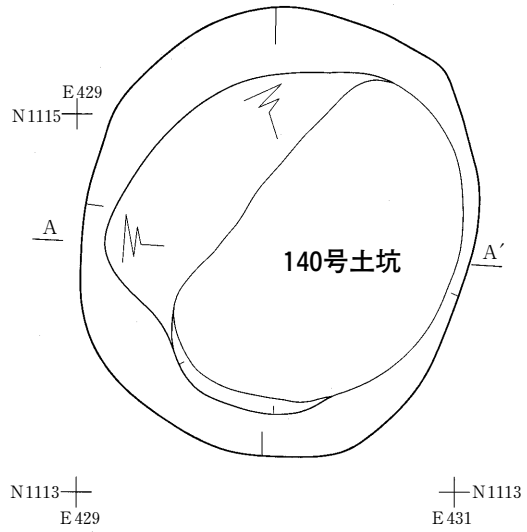


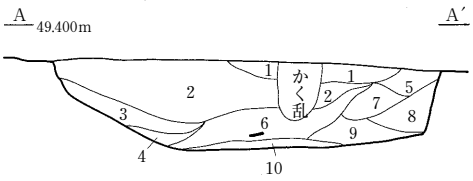
139 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（ＬⅣ粒多量含む）
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6（ＬⅣとの混土）

0　1 m
(1/40)

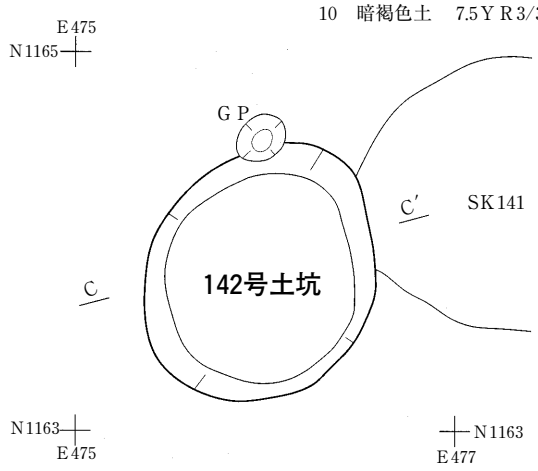
図178　土坑（５）

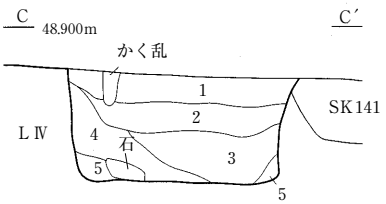




140 号土坑堆積土

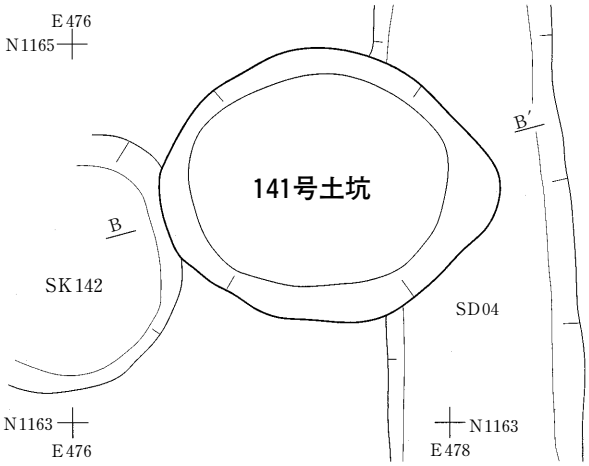
1　褐色土　7.5Ｙ R4/3
2　褐色土　7.5Ｙ R4/4
3　暗褐色土　7.5Ｙ R3/4
4　明褐色土　7.5Ｙ R5/6（ＬⅣ粒多量含む）
5　褐色土　7.5Ｙ R4/6
6　褐色土　7.5Ｙ R4/6
7　褐色土　7.5Ｙ R4/3
8　暗褐色土　7.5Ｙ R3/4
9　灰褐色土　7.5Ｙ R4/2
10　暗褐色土　7.5Ｙ R3/3

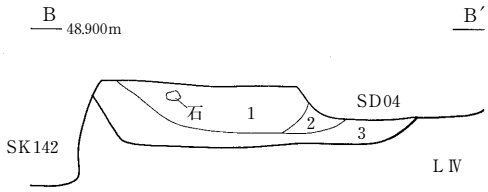




142 号土坑堆積土

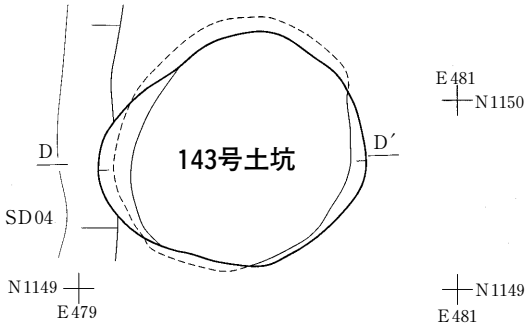
1　暗褐色土　10Ｙ R3/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10Ｙ R3/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
3　褐色土　10Ｙ R4/4（暗褐色土粒含む）
4　にぶい黄褐色土　10Ｙ R4/3（ＬⅣ粒含む）
5　暗褐色土　10Ｙ R3/3（ＬⅣ粒少量含む）

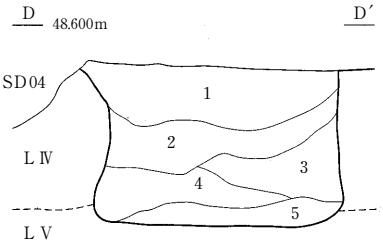




141 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10Ｙ R3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10Ｙ R4/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10Ｙ R3/4（ＬⅣ粒含む）





143 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10Ｙ R3/3（ＬⅣ粒少量含む）
2　暗褐色土　10Ｙ R3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　10Ｙ R4/6（暗褐色土粒含む）
4　暗褐色土　10Ｙ R3/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
5　にぶい黄褐色土　10Ｙ R4/3（ＬⅣ粒少量含む）

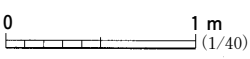
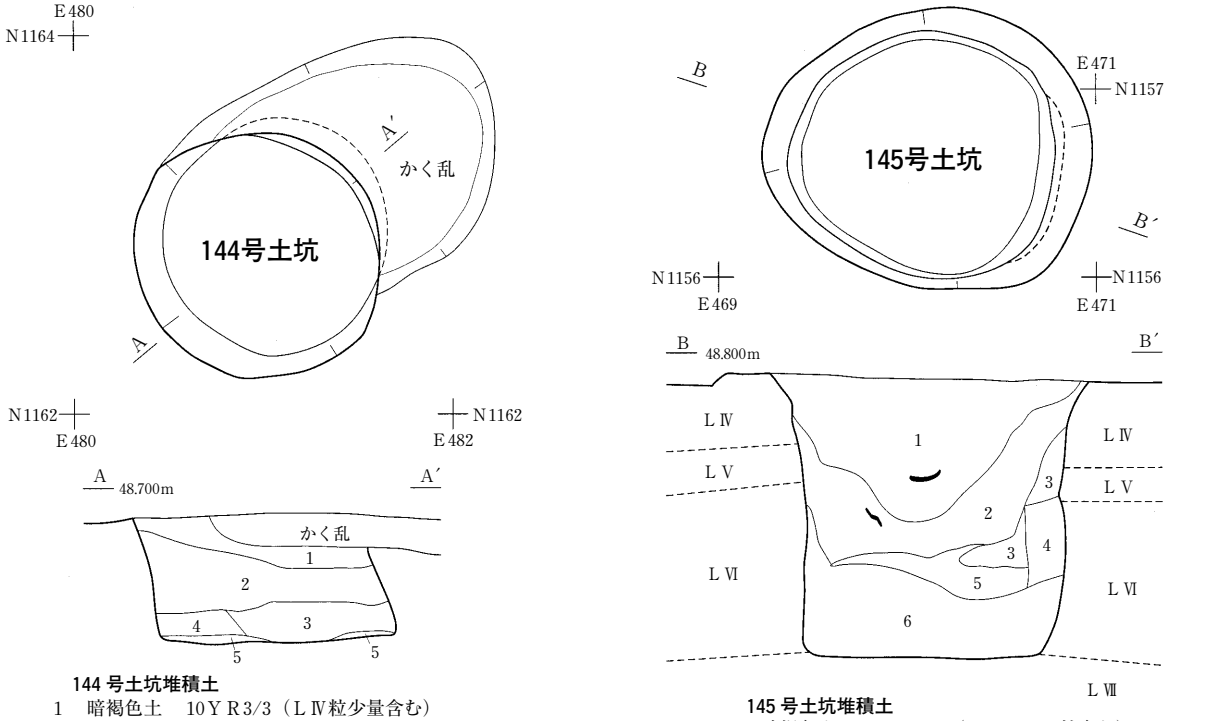


図179　土坑（６）

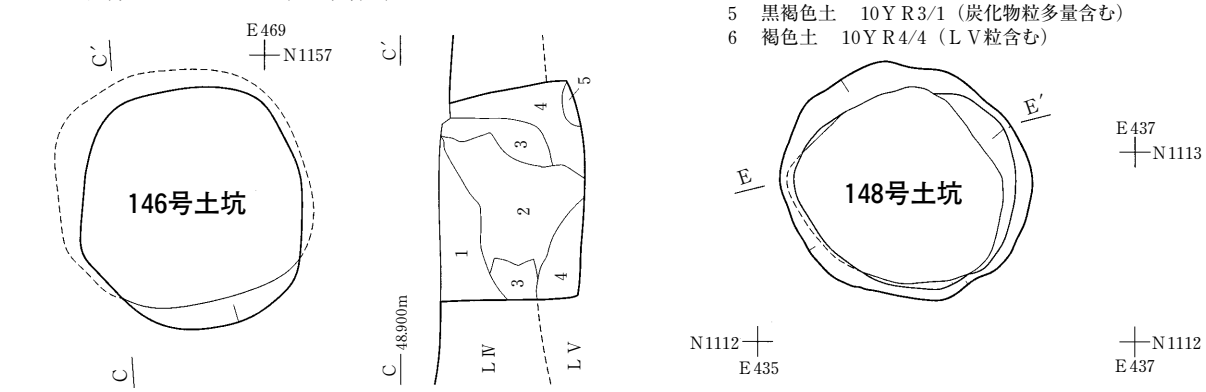


144 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量含む）
2　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅣ塊含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ塊多量含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（黒褐色土粒含む）
5　黒褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅣ粒含む）

145 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ・ＬⅤ粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒多量含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅣ粒多量含む）
4　灰黄褐色土　10ＹＲ5/2（ＬⅣ粒多量含む）
5　黒褐色土　10ＹＲ3/1（炭化物粒多量含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅤ粒含む）

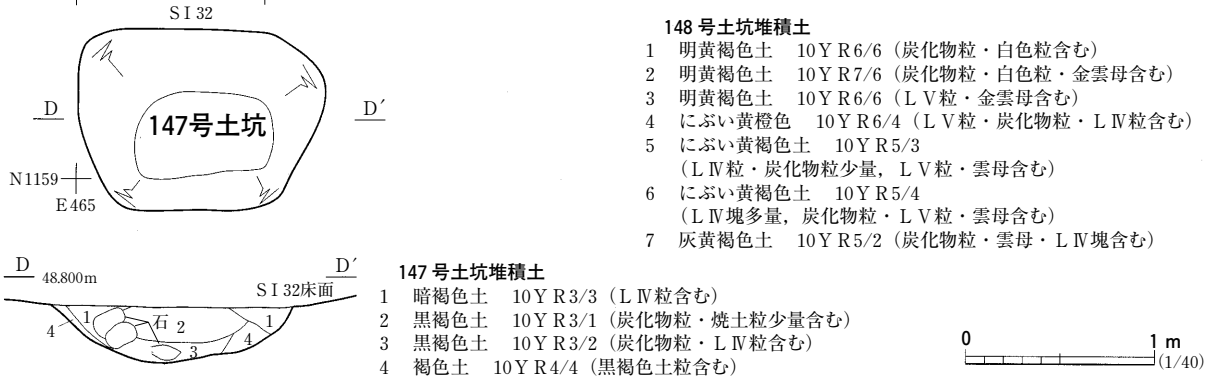


146 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
2　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅣ塊含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊含む）
4　黄褐色粘質土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ粒含む）
5　黒褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅣ粒含む）

148 号土坑堆積土

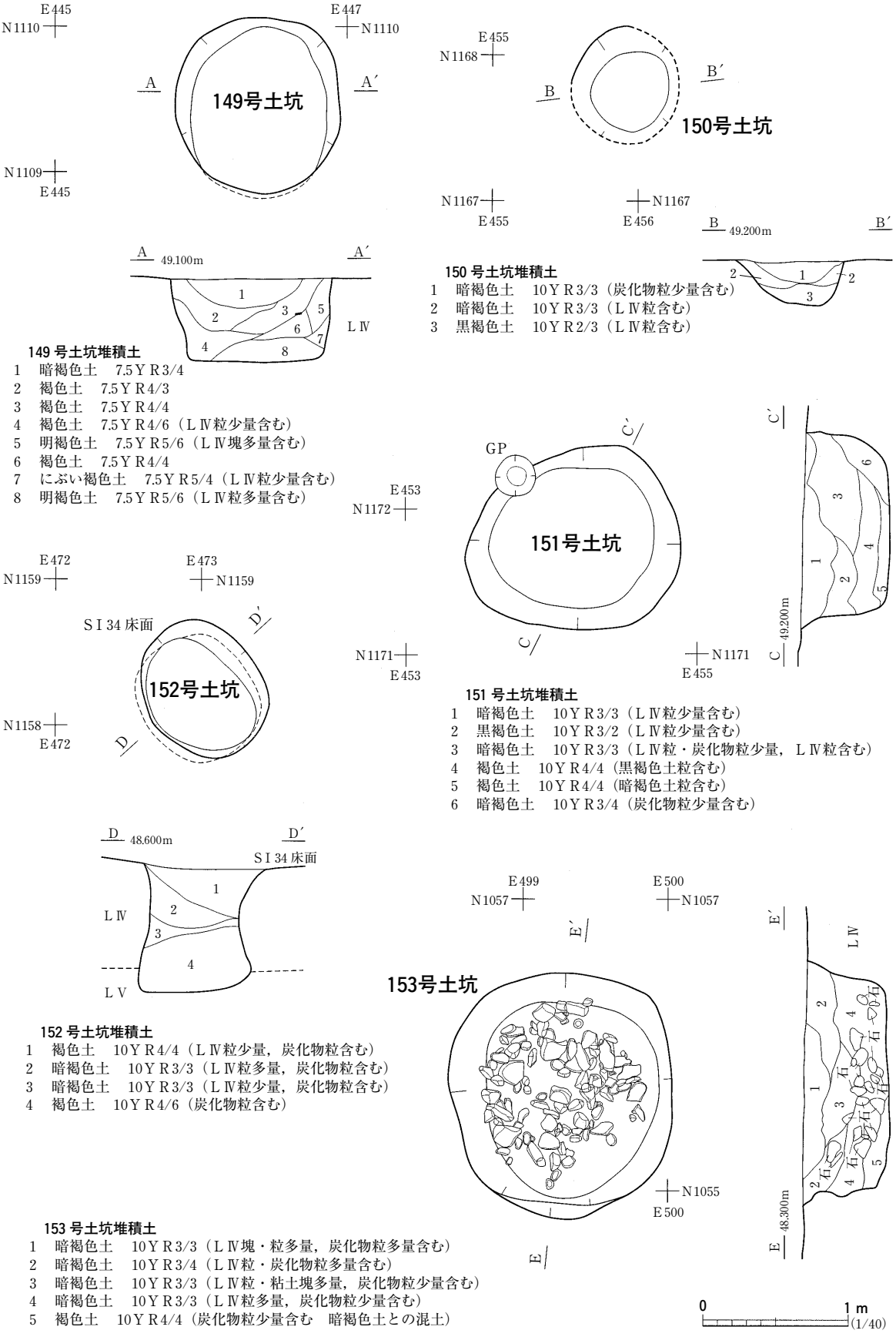
1　明黄褐色土　10ＹＲ6/6（炭化物粒・白色粒含む）
2　明黄褐色土　10ＹＲ7/6（炭化物粒・白色粒・金雲母含む）
3　明黄褐色土　10ＹＲ6/6（ＬⅤ粒・金雲母含む）
4　にぶい黄橙色　10ＹＲ6/4（ＬⅤ粒・炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3
（ＬⅣ粒・炭化物粒少量，ＬⅤ粒・雲母含む）
6　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4
（ＬⅣ塊多量，炭化物粒・ＬⅤ粒・雲母含む）
7　灰黄褐色土　10ＹＲ5/2（炭化物粒・雲母・ＬⅣ塊含む）



147 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ3/1（炭化物粒・焼土粒少量含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（黒褐色土粒含む）

図180　土坑（７）



149 号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
4　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
5　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ塊多量含む）
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
7　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
8　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）

150 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（Ｌ Ⅳ粒含む）
3　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/3（Ｌ Ⅳ粒含む）

151 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
2　黒褐色土　10Ｙ Ｒ3/2（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
3　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（Ｌ Ⅳ粒・炭化物粒少量，Ｌ Ⅳ粒含む）
4　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4（黒褐色土粒含む）
5　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4（暗褐色土粒含む）
6　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒少量含む）

152 号土坑堆積土
1　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（Ｌ Ⅳ粒多量，炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（Ｌ Ⅳ粒少量，炭化物粒含む）
4　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6（炭化物粒含む）

153 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（Ｌ Ⅳ塊・粒多量，炭化物粒多量含む）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（Ｌ Ⅳ粒・炭化物粒多量含む）
3　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（Ｌ Ⅳ粒・粘土塊多量，炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（Ｌ Ⅳ粒多量，炭化物粒少量含む）
5　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4（炭化物粒少量含む　暗褐色土との混土）

図181　土坑（8）

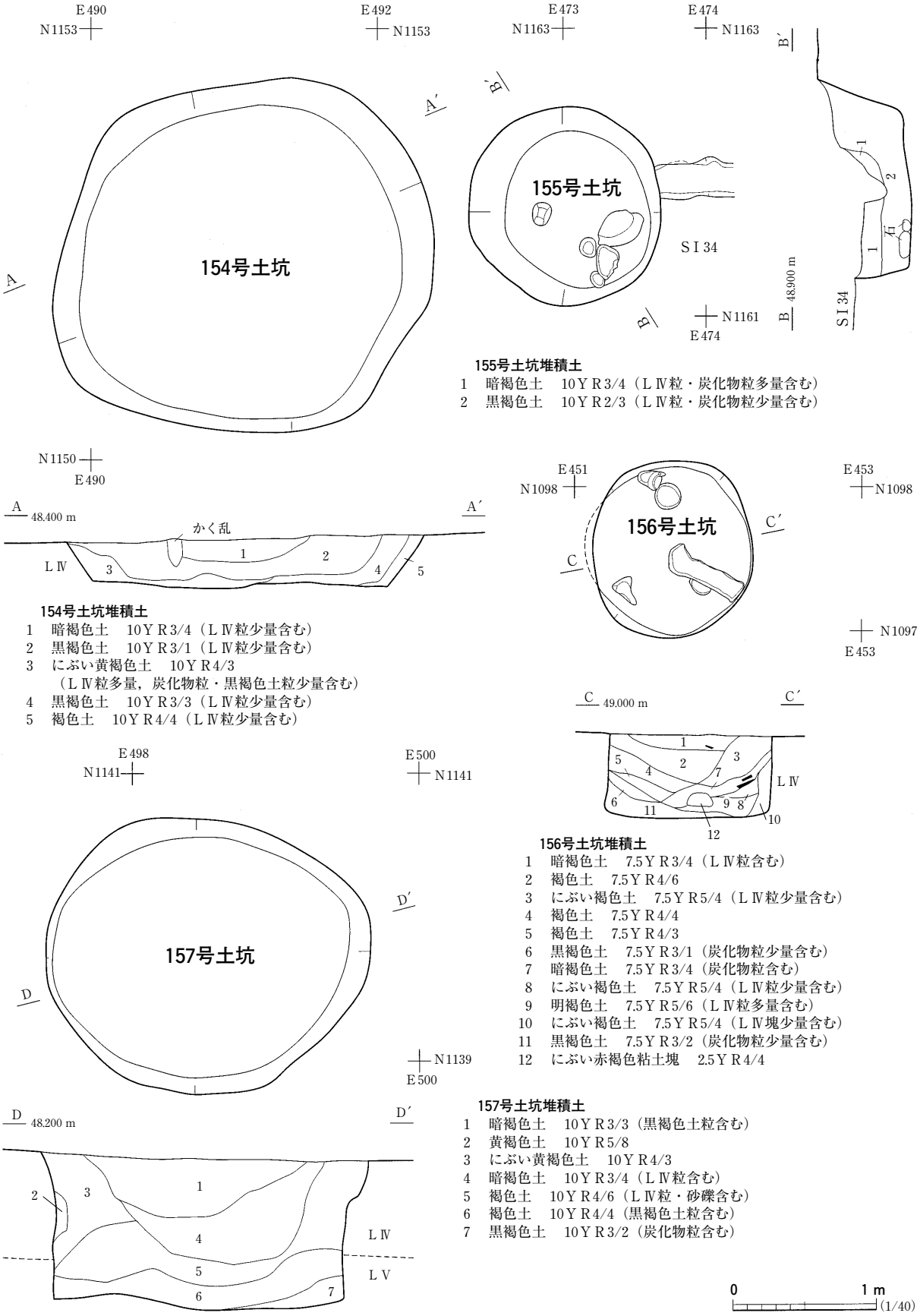
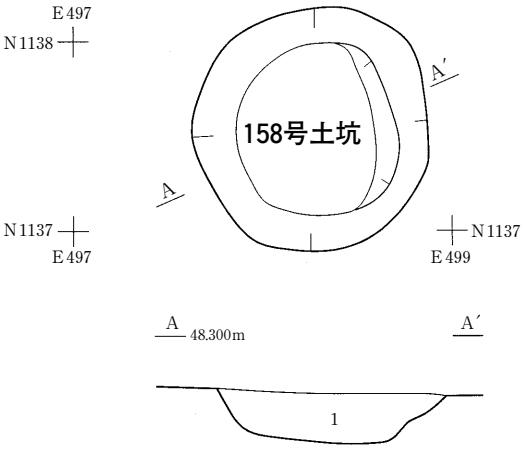
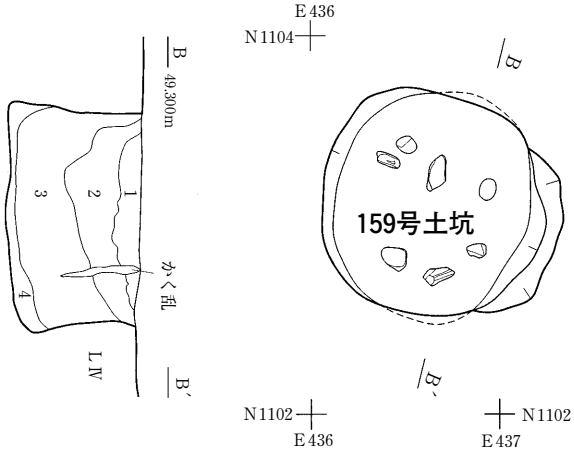

E490
N1153
E492
N1153
E473
N1163
E474
N1163
154号土坑
155号土坑
SI34
N1161
E474
B
48.900 m
SI34
155号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒・炭化物粒多量含む）
2　黒褐色土　10YR2/3（LⅣ粒・炭化物粒少量含む）
N1150
E490
A
48.400 m
かく乱
LⅣ
154号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒少量含む）
2　黒褐色土　10YR3/1（LⅣ粒少量含む）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（LⅣ粒多量，炭化物粒・黒褐色土粒少量含む）
4　黒褐色土　10YR3/3（LⅣ粒少量含む）
5　褐色土　10YR4/4（LⅣ粒少量含む）
E451
N1098
E453
N1098
156号土坑
N1097
E453
C
49.000 m
LⅣ
156号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5YR3/4（LⅣ粒含む）
2　褐色土　7.5YR4/6
3　にぶい褐色土　7.5YR5/4（LⅣ粒少量含む）
4　褐色土　7.5YR4/4
5　褐色土　7.5YR4/3
6　黒褐色土　7.5YR3/1（炭化物粒少量含む）
7　暗褐色土　7.5YR3/4（炭化物粒含む）
8　にぶい褐色土　7.5YR5/4（LⅣ粒少量含む）
9　明褐色土　7.5YR5/6（LⅣ粒多量含む）
10　にぶい褐色土　7.5YR5/4（LⅣ塊少量含む）
11　黒褐色土　7.5YR3/2（炭化物粒少量含む）
12　にぶい赤褐色粘土塊　2.5YR4/4
E498
N1141
E500
N1141
157号土坑
N1139
E500
D
48.200 m
LⅣ
LV
157号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（黒褐色土粒含む）
2　黄褐色土　10YR5/8
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3
4　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒含む）
5　褐色土　10YR4/6（LⅣ粒・砂礫含む）
6　褐色土　10YR4/4（黒褐色土粒含む）
7　黒褐色土　10YR3/2（炭化物粒含む）
0　1m
(1/40)

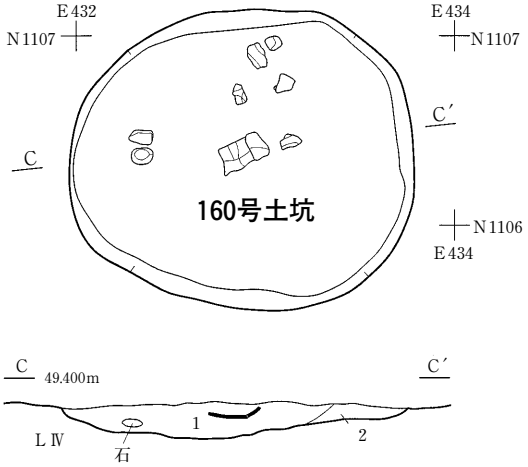
図182　土坑（９）



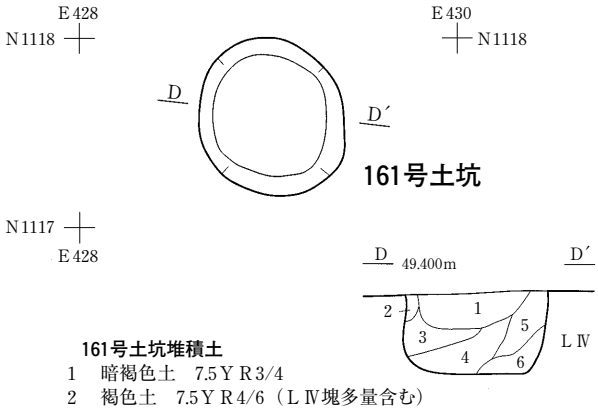
158号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）



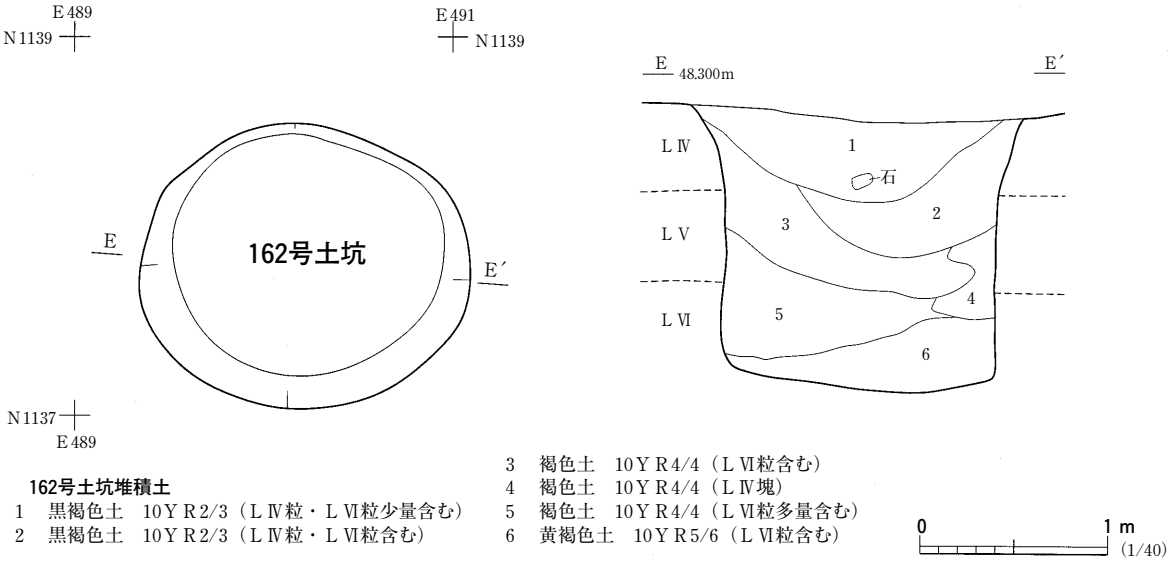
159号土坑堆積土
1　黒褐色砂質土　7.5ＹＲ3/1（炭化物粒含む）
2　にぶい橙色粘質土　7.5ＹＲ6/4（黒褐色土粒多量含む）
3　橙色粘質土　7.5ＹＲ6/6
4　黒褐色粘質土　7.5ＹＲ3/2（炭化物塊含む）



160号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・暗褐色土粒を含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4



161号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
2　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ塊多量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/3
4　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
5　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）
6　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量含む）



162号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒少量含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅥ粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊）
5　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅥ粒多量含む）
6　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅥ粒含む）

図183　土坑（10）

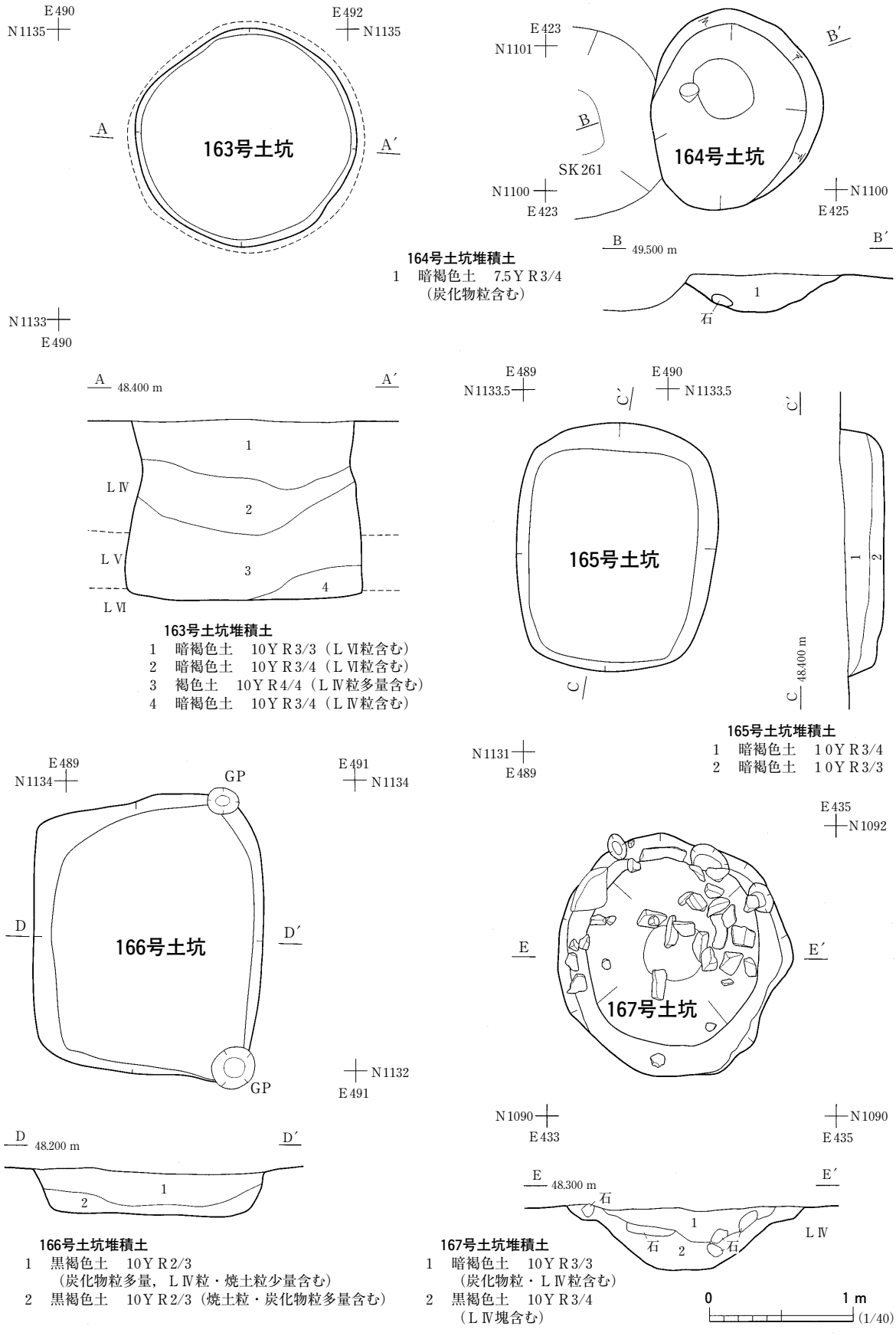
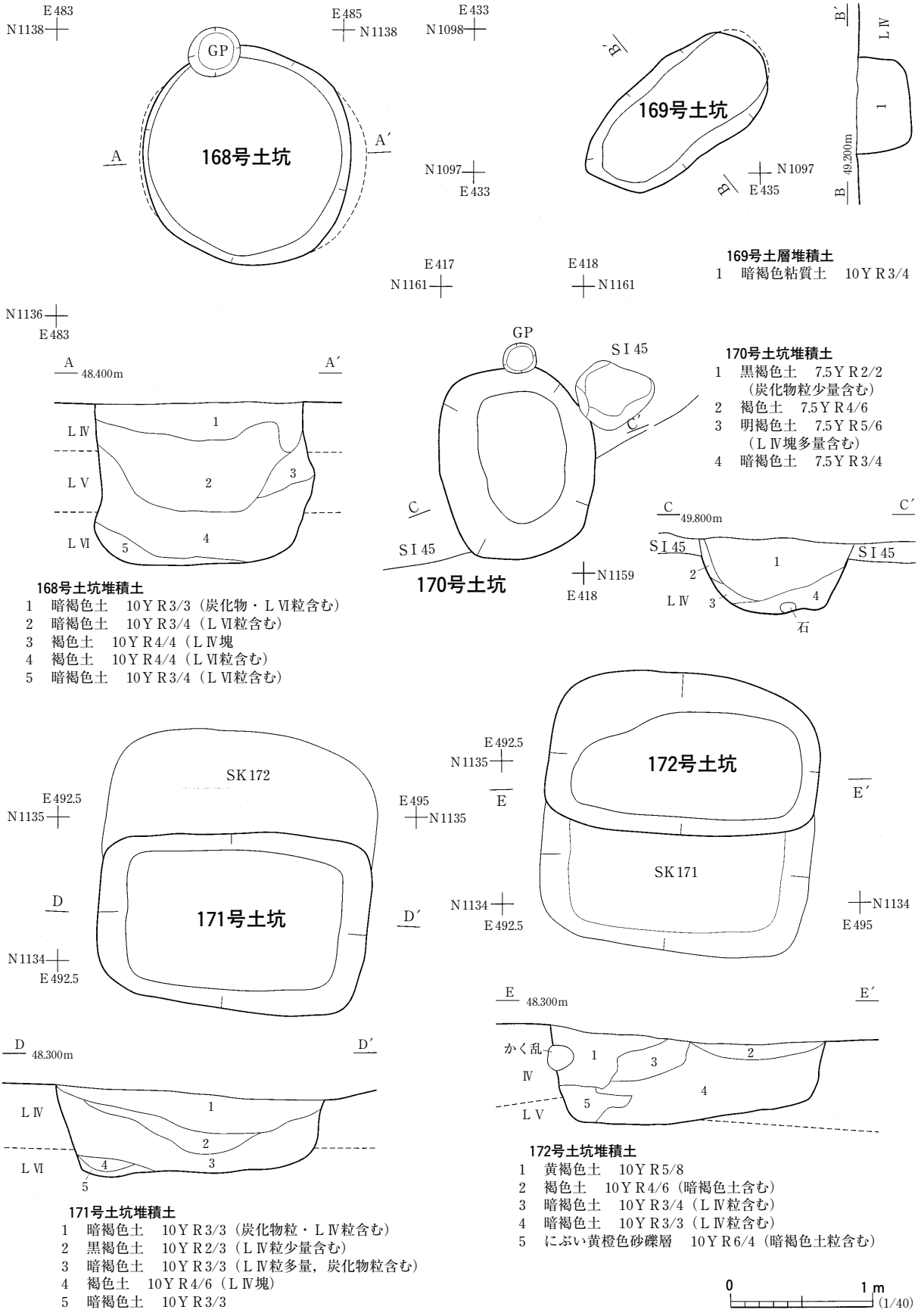

E490
N1135
E492
N1135
A
A′
163号土坑
N1133
E490
A
48.400 m
A′
1
LⅣ
2
LⅤ
3
4
LⅥ
163号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅥ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅥ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒多量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
E423
N1101
B
B′
SK261
164号土坑
N1100
E423
N1100
E425
164号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
（炭化物粒含む）
B
49.500 m
B′
1
石
E489
N1133.5
E490
N1133.5
C
C′
165号土坑
C
48.400 m
C′
1
2
165号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3
E489
N1134
GP
E491
N1134
D
D′
166号土坑
GP
N1132
E491
D
48.200 m
D′
1
2
166号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3
（炭化物粒多量，ＬⅣ粒・焼土粒少量含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（焼土粒・炭化物粒多量含む）
N1131
E489
E435
N1092
E
E′
167号土坑
N1090
E433
N1090
E435
E
48.300 m
E′
石
1
石
2
石
LⅣ
167号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ塊含む）
0
1 m
(1/40)

図184　土坑（11）



169号土層堆積土
1　暗褐色粘質土　10ＹＲ3/4

170号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5ＹＲ2/2
（炭化物粒少量含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/6
3　明褐色土　7.5ＹＲ5/6
（ＬⅣ塊多量含む）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4

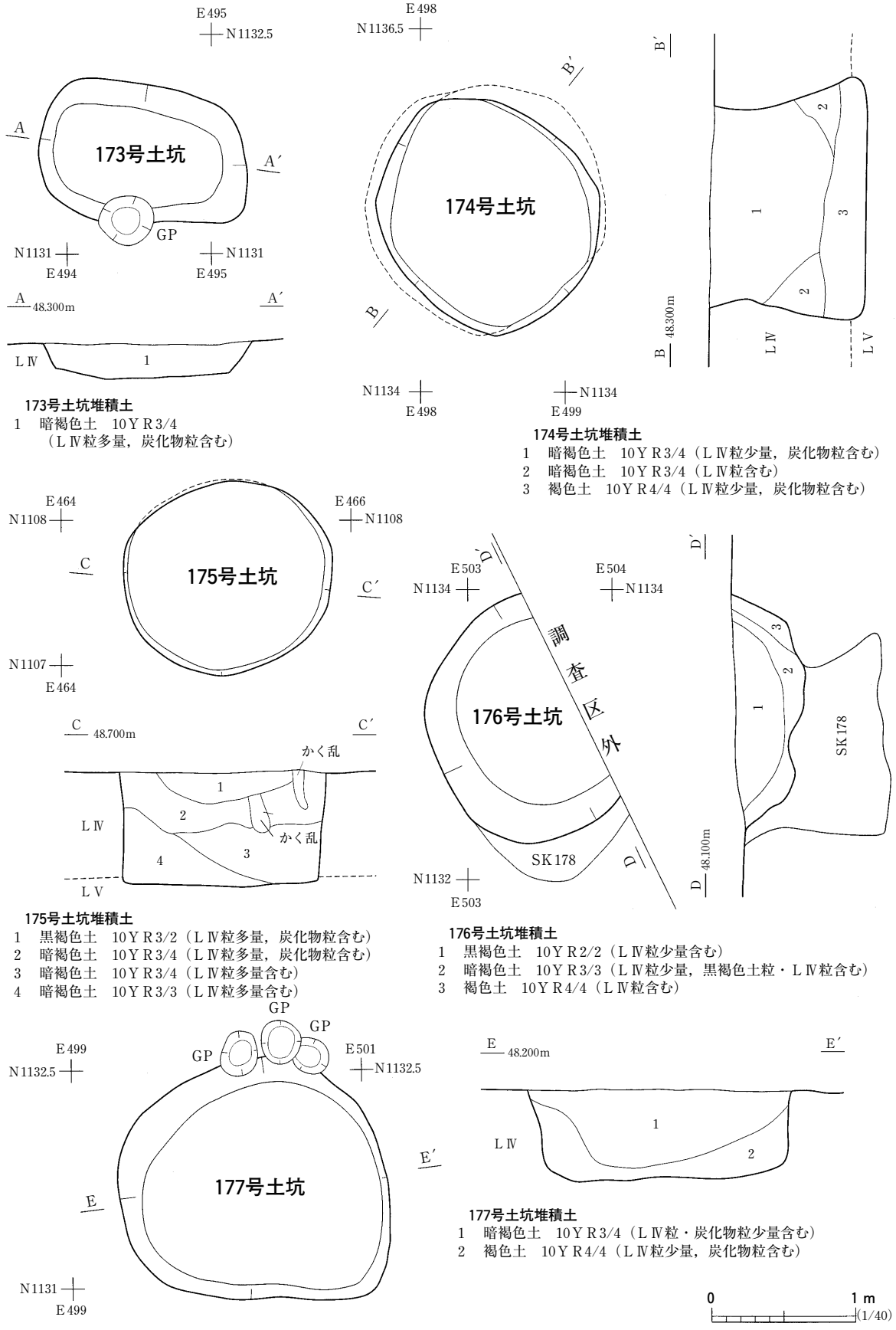
168号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物・ＬⅥ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅥ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅥ粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅥ粒含む）

171号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ塊）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3

172号土坑堆積土
1　黄褐色土　10ＹＲ5/8
2　褐色土　10ＹＲ4/6（暗褐色土含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
5　にぶい黄橙色砂礫層　10ＹＲ6/4（暗褐色土粒含む）

0　1 m
(1/40)

図185　土坑（12）



173号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）

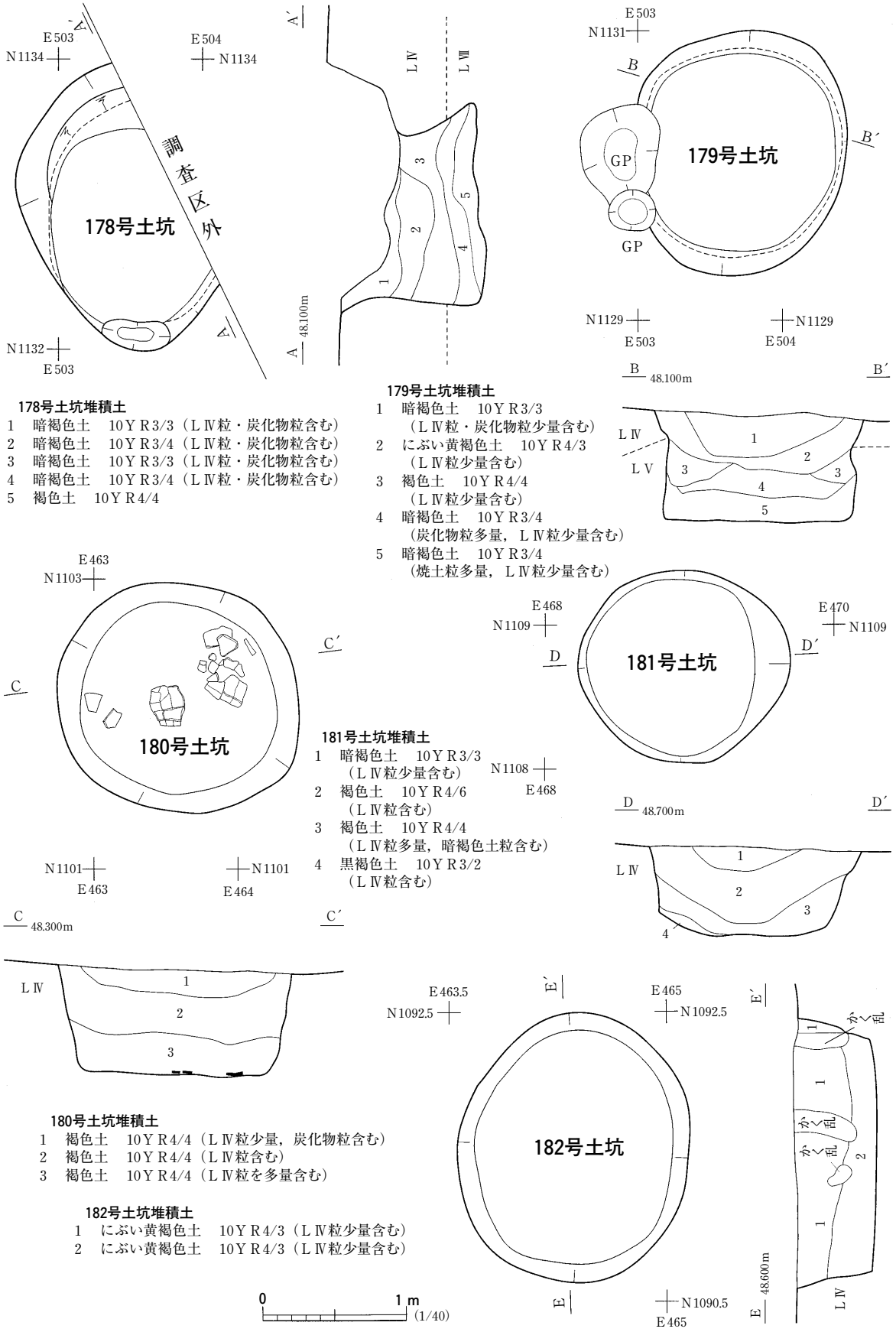
174号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）

175号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量含む）

176号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（ＬⅣ粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，黒褐色土粒・ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）

177号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）

図186　土坑（13）



178号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/4

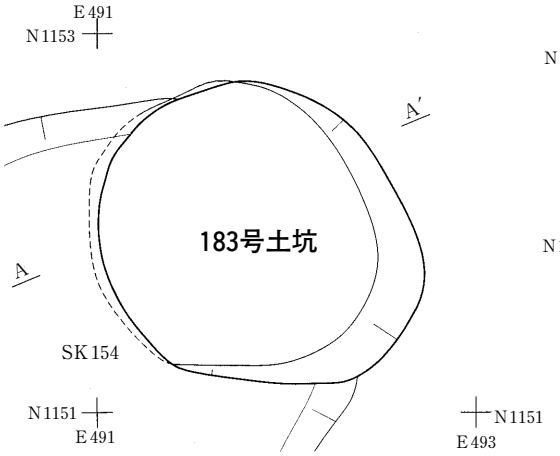
179号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
（ＬⅣ粒少量含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4
（ＬⅣ粒少量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（炭化物粒多量，ＬⅣ粒少量含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（焼土粒多量，ＬⅣ粒少量含む）

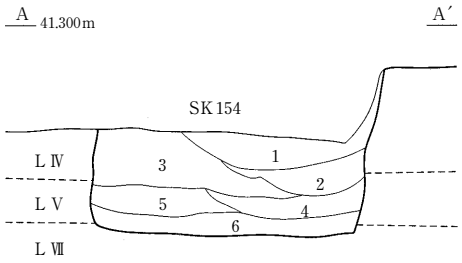
181号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6
（ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4
（ＬⅣ粒多量，暗褐色土粒含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ3/2
（ＬⅣ粒含む）

180号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒を多量含む）

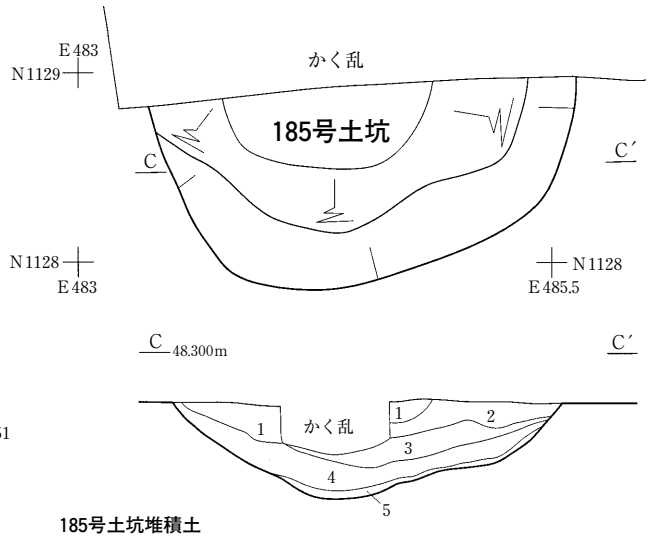
182号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）

図187　土坑（14）

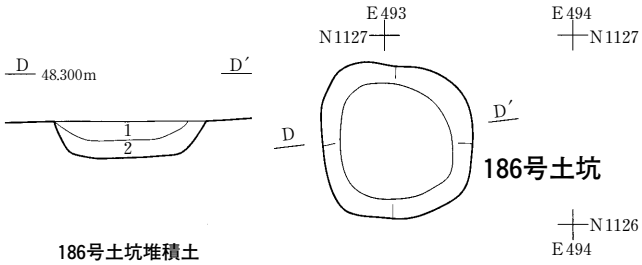




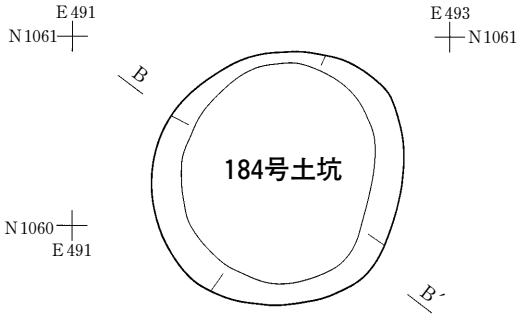
183号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒多量，ＬⅤ粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅦ粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒多量含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
6　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）

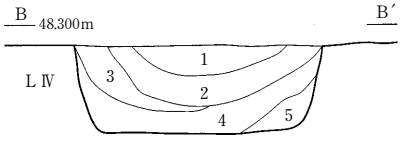


185号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（暗褐色土粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/4（黒褐色土粒含む）

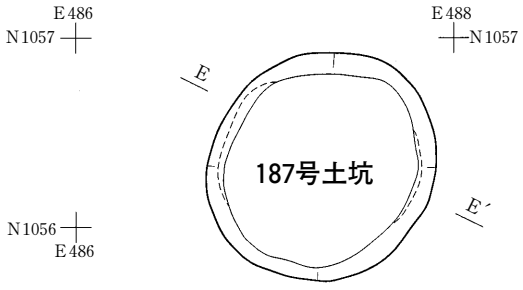


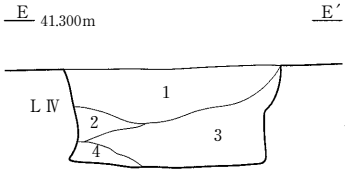
186号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）





184号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒多量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒多量含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊少量含む）





187号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量，黒褐色土含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・塊・黒褐色土粒少量含む）

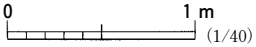
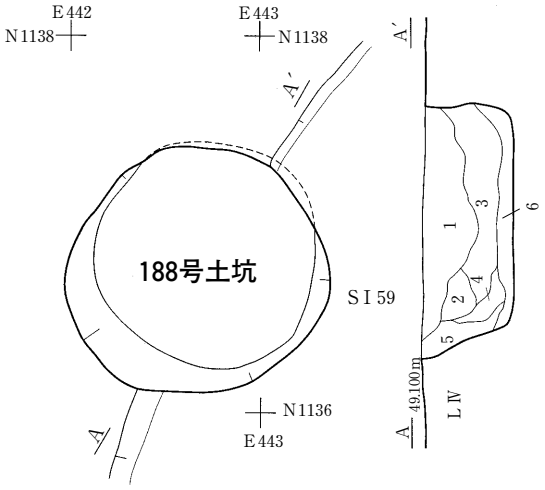
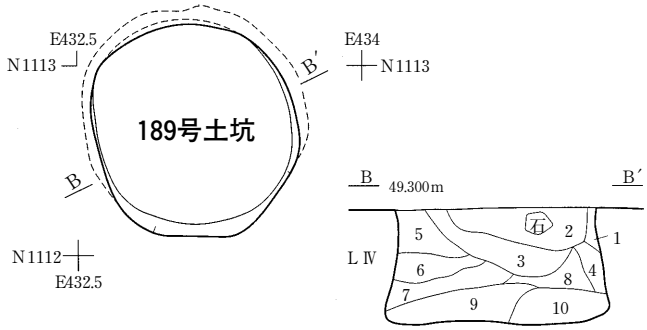


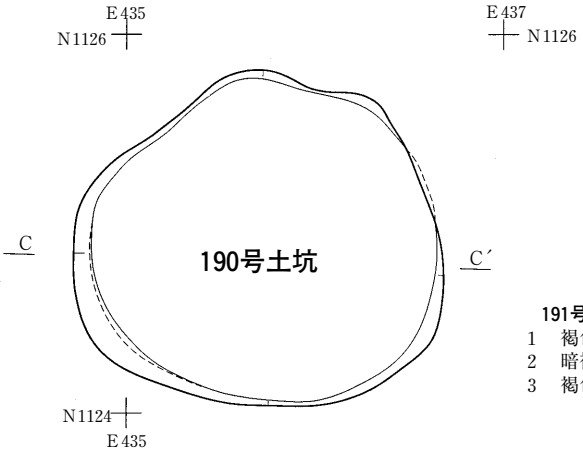
図188　土坑（15）

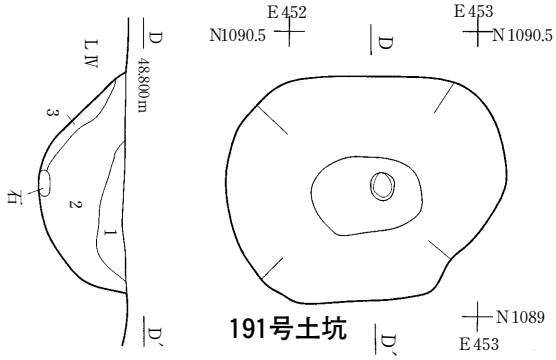


188号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/6（LⅣ粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ塊含む）
3　褐色土　10YR4/4（炭化物粒含む）
4　暗褐色土　10YR3/4（炭化物粒多量含む）
5　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒多量，LⅣ粒含む）
6　褐色土　10YR4/6（LⅣ粒含む）

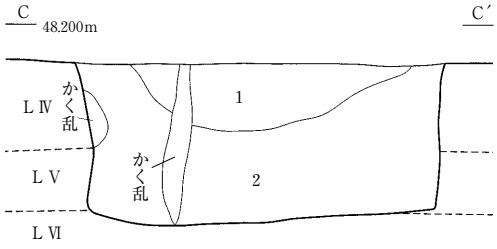


189号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/6（LⅣ粒多量含む）
2　灰褐色土　7.5YR4/2（炭化物粒含む）
3　にぶい褐色土　7.5YR4/4（LⅣ粒少量含む）
4　褐色土　7.5YR5/4（LⅣ粒少量含む）
5　褐色土　7.5YR4/3
6　褐色土　7.5YR4/4（炭化物粒含む）
7　灰褐色土　7.5YR4/2
8　褐色土　7.5RY4/3
9　にぶい褐色土　7.5YR5/4（LⅣ粒・塊少量含む）
10　明褐色土　7.5YR5/6（LⅣ粒・塊多量含む）

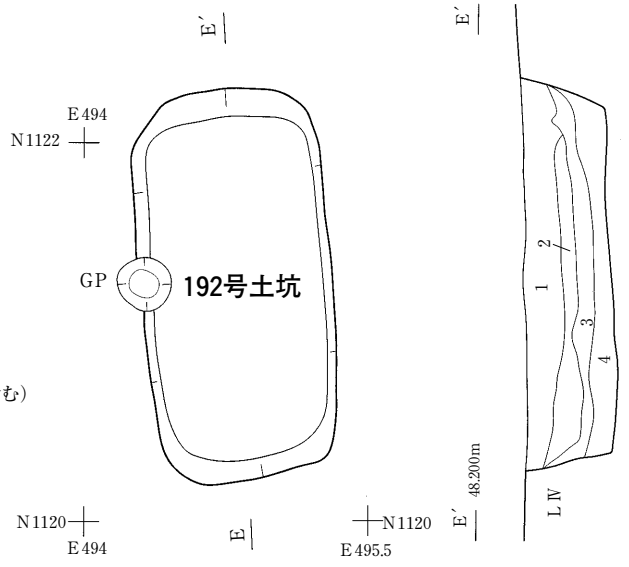




191号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/4（LⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　7.5YR3/4（炭化物粒含む）
3　褐色土　7.5YR4/3（LⅣ塊少量含む）



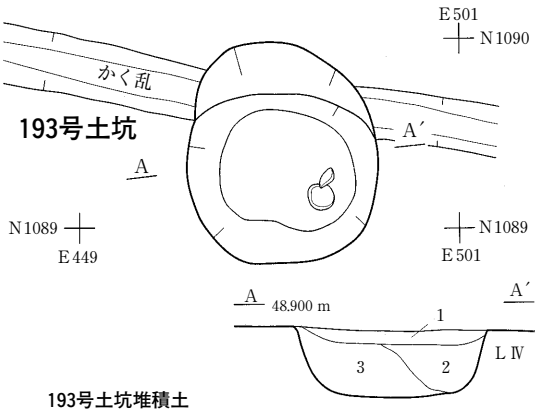
190号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（LⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　褐色土　10YR4/4（LⅥ粒少量，黒褐色土・炭化物粒含む）



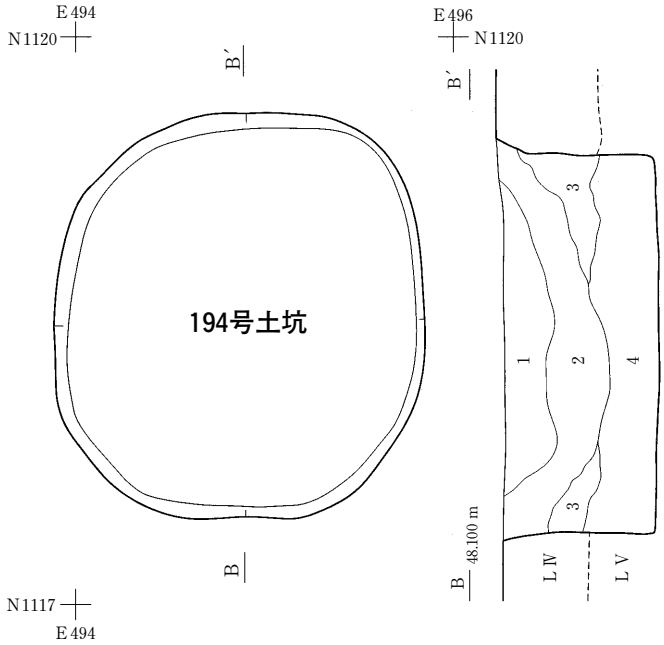
192号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（LⅥ粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（LⅥ粒含む）
3　黒褐色土　10YR3/2（焼土塊・炭化物粒多量含む）
4　褐色土　10YR4/4（砂礫多量含む）

0　1m
(1/40)

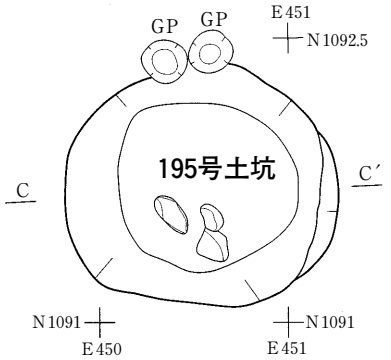
図189　土坑（16）

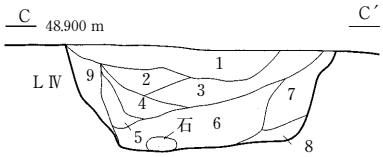


193号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ塊・炭化物粒少量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ塊多量・炭化物粒少量含む）

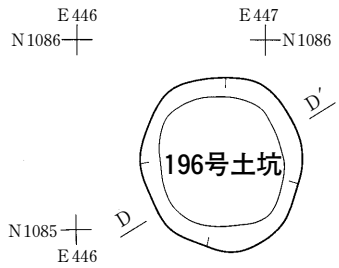


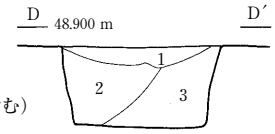
194号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅥ粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅥ粒含む）
4　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅥ粒・黒褐色土・炭化物粒含む）



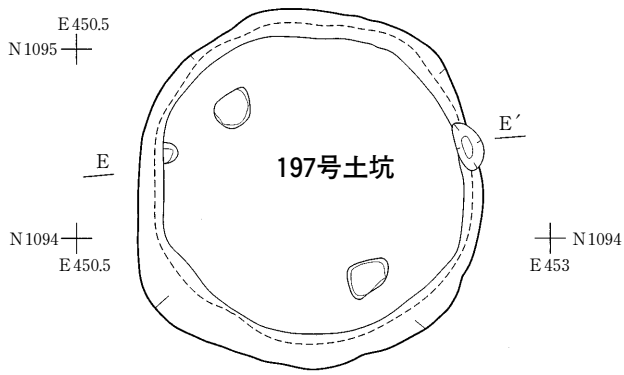


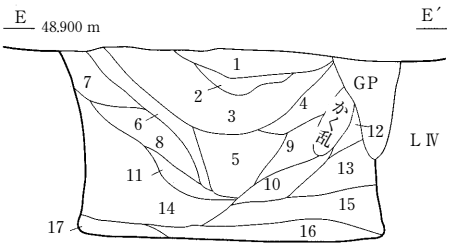
195号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ粒多量含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4
4　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
5　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ塊少量含む）
6　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（炭化物粒含む）
7　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
8　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
9　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）





196号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ7Ｒ4/6
2　明褐色土　7.5ＹＲ5/6
　（ＬⅣ粒・塊多量，炭化物粒含む）
3　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/3





197号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
2　褐色土　7.5ＹＲ4/6
3　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/4
5　褐色土　7.5ＹＲ4/3
6　褐色土　7.5ＹＲ4/4
7　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
8　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊少量含む）
9　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
10　褐色土　7.5ＹＲ4/6
11　褐色土　7.5ＹＲ4/4
12　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ塊多量含む）
13　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量含む）
14　褐色土　7.5ＹＲ4/4
15　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
16　褐色土　7.5ＹＲ4/3
17　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒含む）

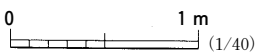
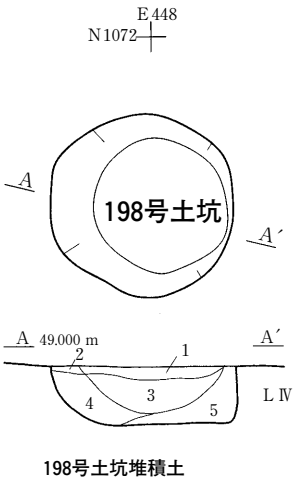
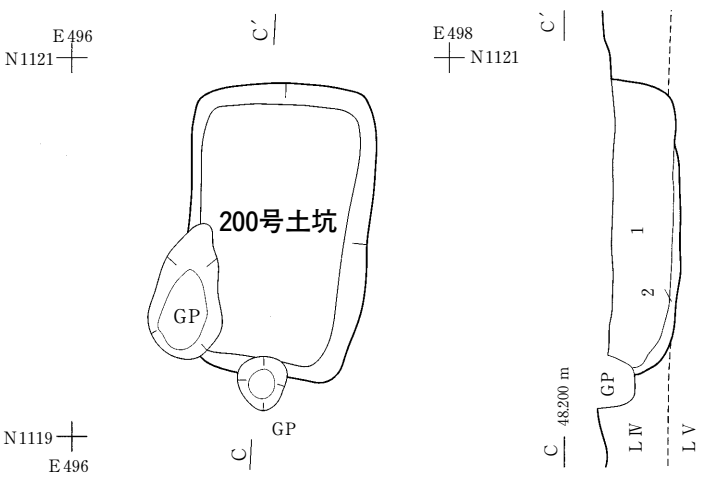


図190　土坑（17）



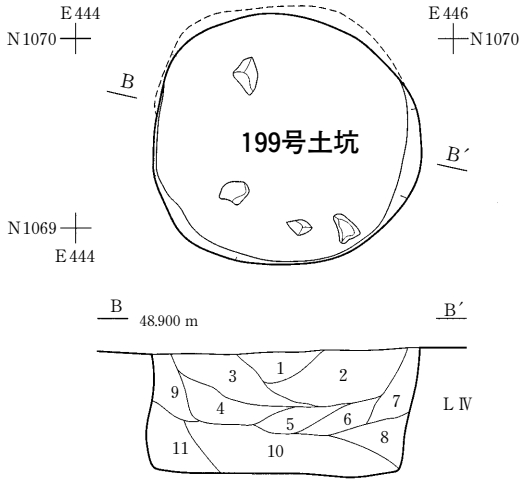
198号土坑堆積土

1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
2　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
3　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2（炭化物粒含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ塊含む）
5　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）



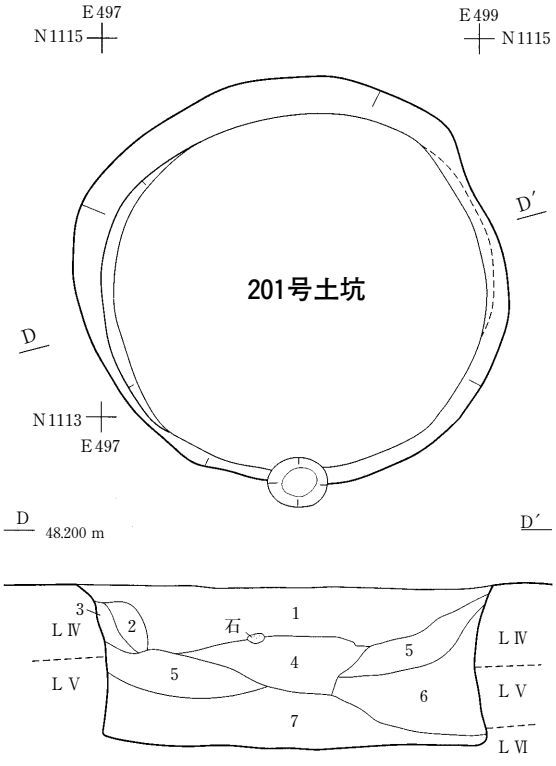
200号土坑堆積土

1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量含む）



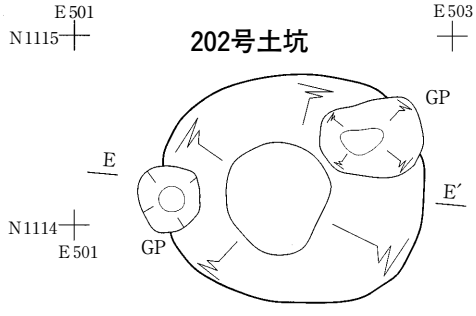
199号土坑堆積土

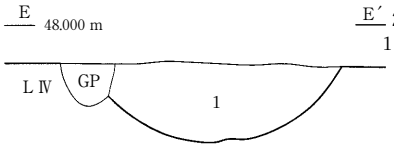
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3
3　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/3
5　褐色土　7.5ＹＲ4/4
6　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
7　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量）
8　褐色土　7.5ＹＲ4/4
9　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
10　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量，炭化物粒少量含む）
11　褐色土　7.5ＹＲ4/6



201号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ・Ⅴ粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（暗褐色土含む）
3　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ粒含む）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅤ粒含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅤ粒含む）
6　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅤ粒多量含む）
7　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅣ・Ⅴ粒含む）

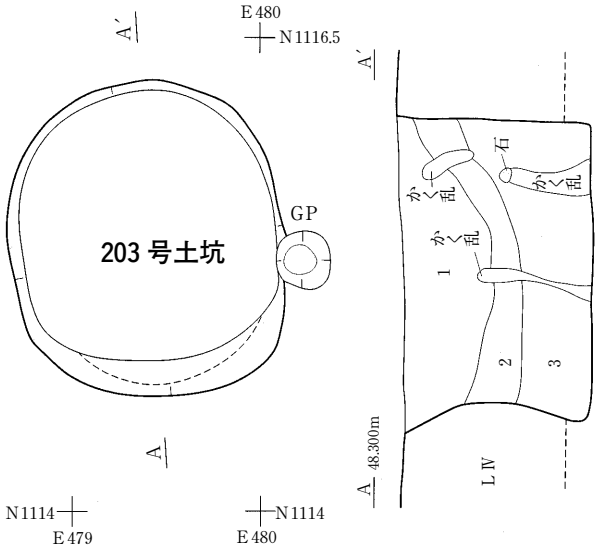




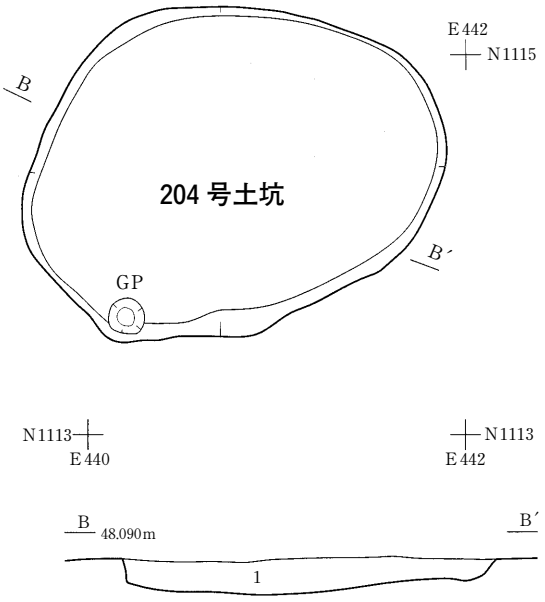
E′ **202号土坑堆積土**

1　黒褐色土　10ＹＲ2/2
（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）

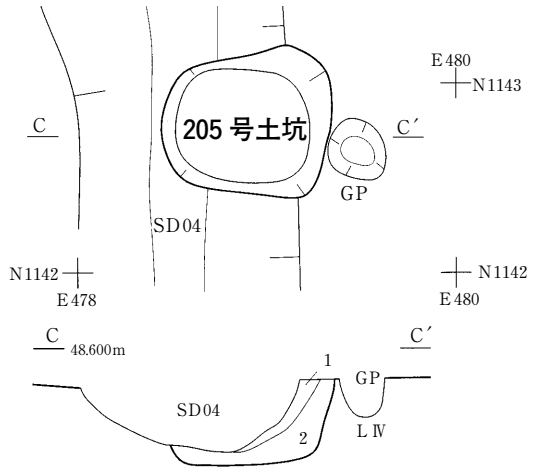
図191　土坑（18）



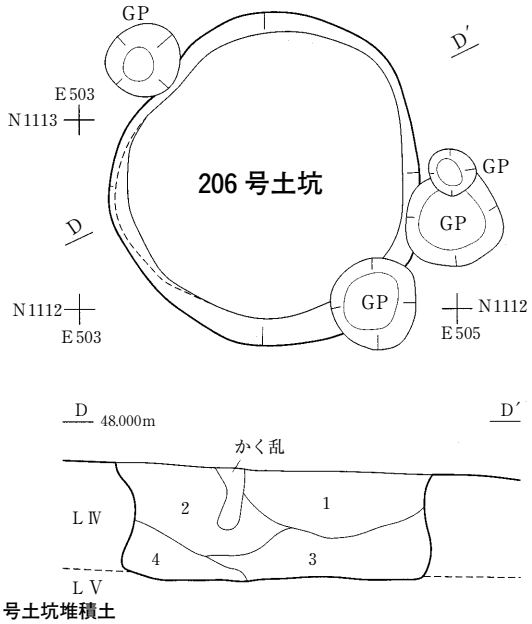
203 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Y R3/3（L Ⅳ粒多量，炭化物粒含む）
2　褐色土　10Y R4/4（L Ⅳ粒含む）
3　褐色土　10Y R4/6（L Ⅴ粒含む）



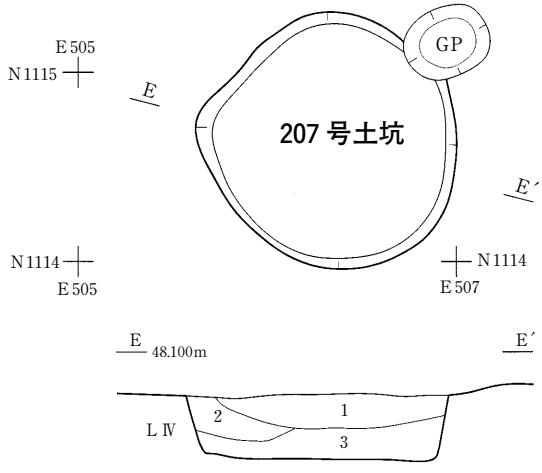
204 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Y R3/4（L Ⅳ粒多量含む）



205 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Y R3/4（L Ⅳ粒・炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10Y R4/3（L Ⅳ塊含む）



206 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Y R3/4（L Ⅳ・Ⅴ粒少量，炭化物粒含む）
2　褐色土　10Y R4/4（L Ⅴ粒含む）
3　暗褐色土　10Y R3/4（L Ⅳ・Ⅴ粒少量含む）
4　暗褐色土　10Y R3/3（L Ⅳ・Ⅴ粒含む）



207 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Y R3/3（黒褐色土粒・L Ⅳ粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　10Y R4/4（L Ⅳ粒・暗褐色土含む）
3　暗褐色土　10Y R3/4（L Ⅳ粒・炭化物粒含む）

0　1 m
(1/40)

図192　土坑（19）

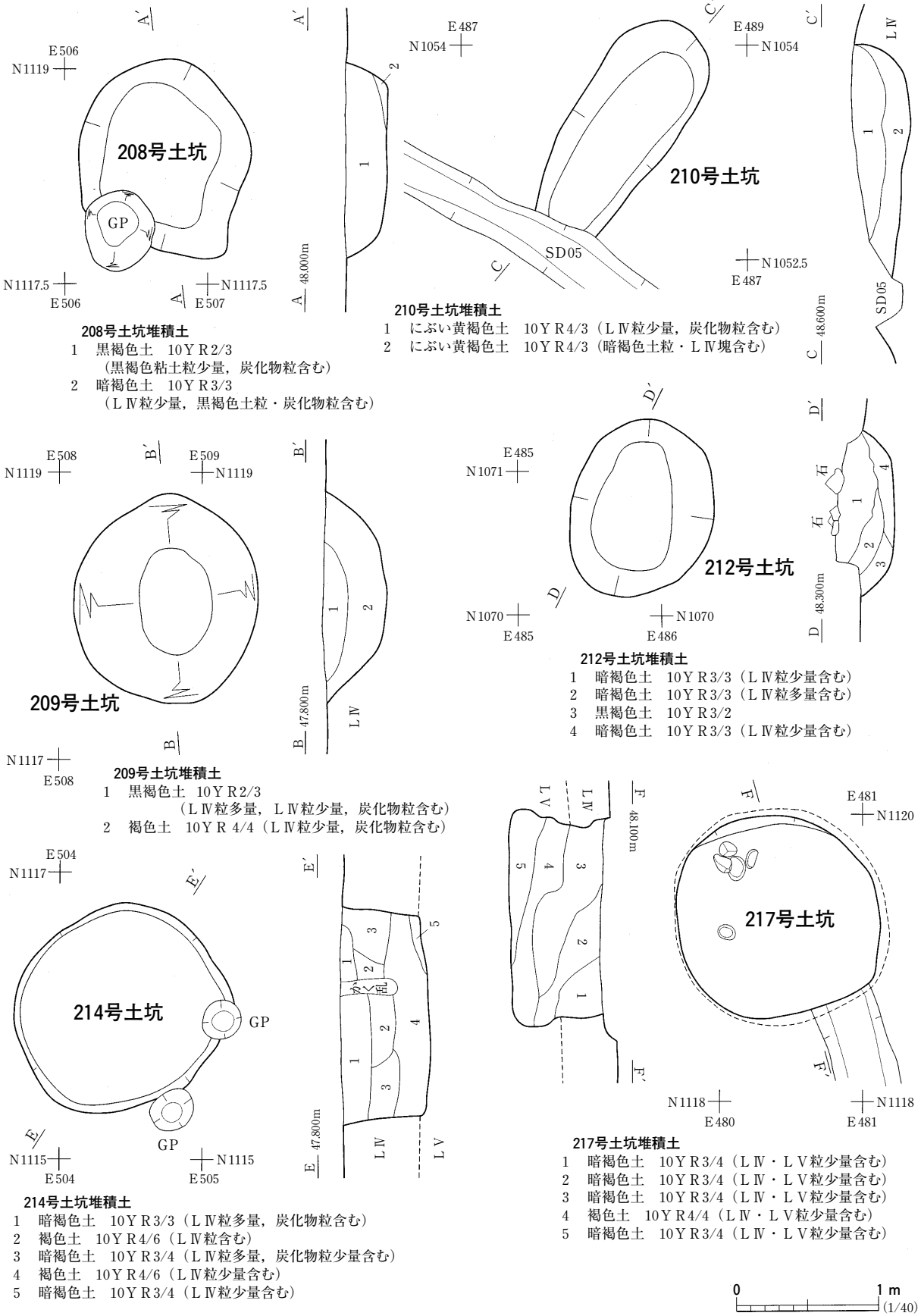

208号土坑
GP
E506
N1119
N1117.5
E506
N1117.5
E507
A
A´
48.000m
1
2
208号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3
（黒褐色粘土粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10YR3/3
（LⅣ粒少量，黒褐色土粒・炭化物粒含む）
210号土坑
SD05
E487
N1054
N1052.5
E487
E489
N1054
C
C´
48.600m
LⅣ
SD05
210号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（暗褐色土粒・LⅣ塊含む）
209号土坑
E508
N1119
E509
N1119
N1117
E508
B
B´
47.800m
LⅣ
209号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3
（LⅣ粒多量，LⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　褐色土　10YR 4/4（LⅣ粒少量，炭化物粒含む）
212号土坑
E485
N1071
N1070
E485
N1070
E486
D
D´
48.300m
212号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒多量含む）
3　黒褐色土　10YR3/2
4　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒少量含む）
214号土坑
GP
GP
E504
N1117
E504
N1115
E505
N1115
E
E´
47.800m
LⅣ
LⅤ
214号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　褐色土　10YR4/6（LⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
4　褐色土　10YR4/6（LⅣ粒少量含む）
5　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒少量含む）
217号土坑
E481
N1120
N1118
E480
N1118
E481
F
F´
48.100m
LⅣ
LⅤ
217号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ・LⅤ粒少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ・LⅤ粒少量含む）
3　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ・LⅤ粒少量含む）
4　褐色土　10YR4/4（LⅣ・LⅤ粒少量含む）
5　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ・LⅤ粒少量含む）
0
1 m
(1/40)

図193　土坑（20）

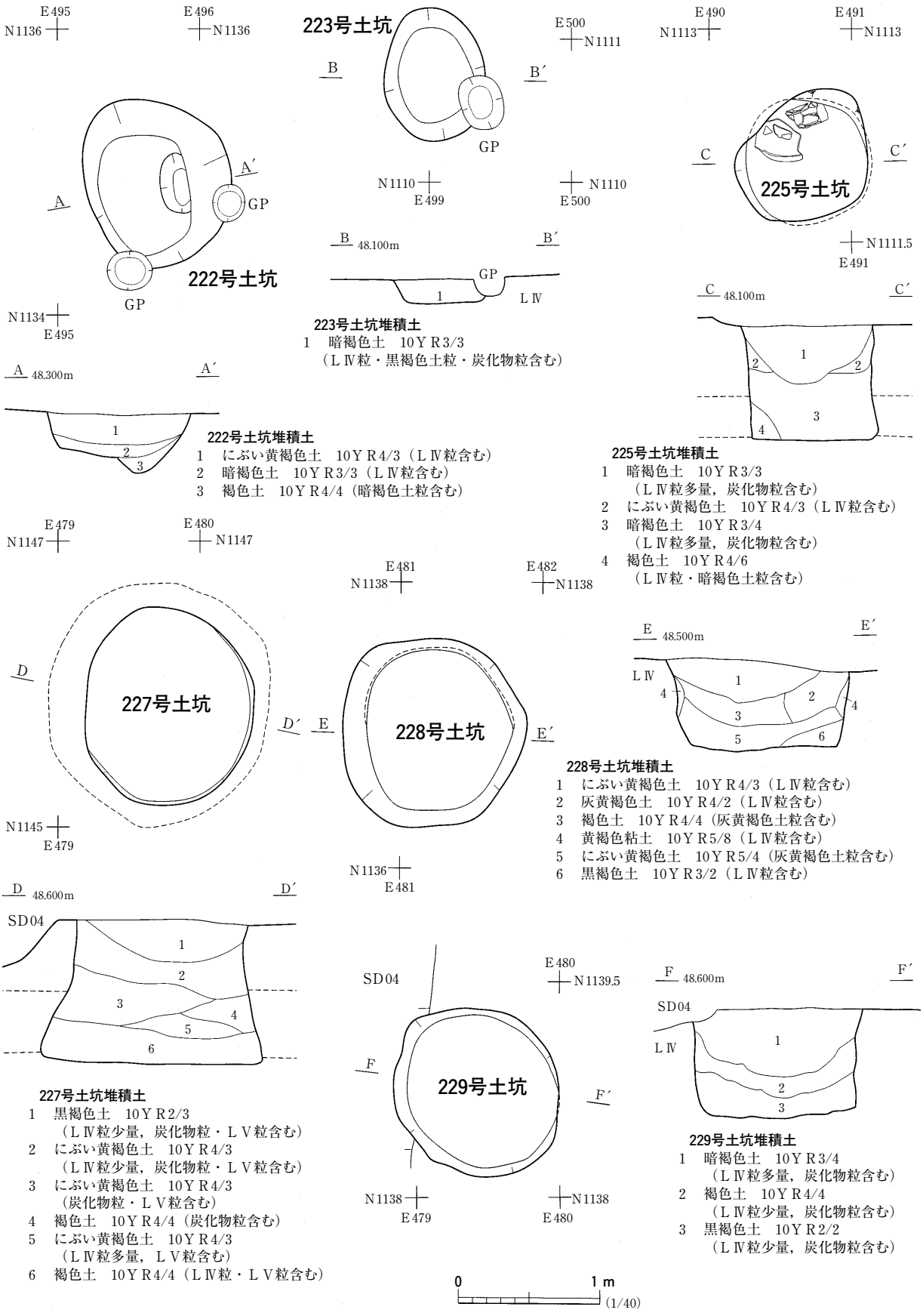
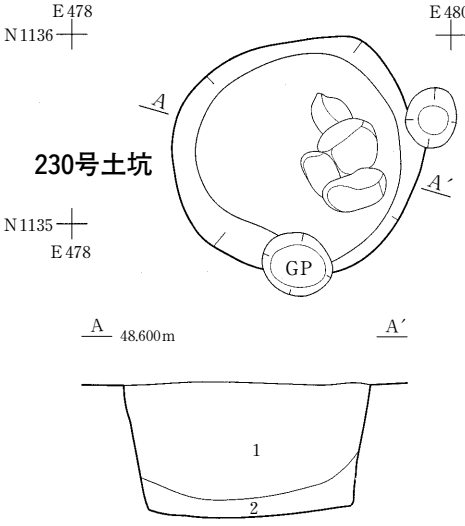
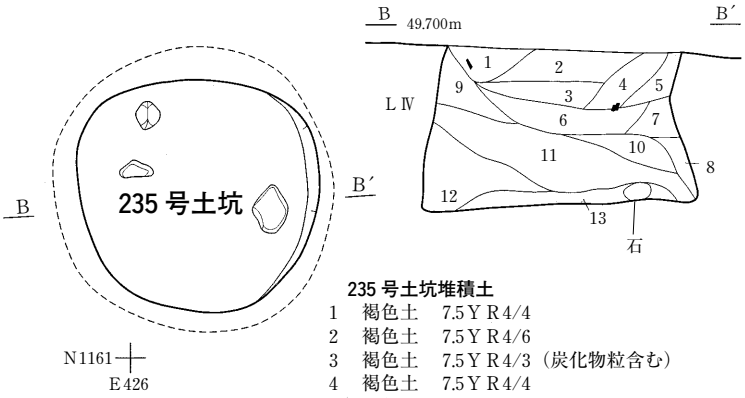

E495
N1136
E496
N1136
222号土坑
A
A′
GP
N1134
E495
A 48.300m
A′
1
2
3
222号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（暗褐色土粒含む）
223号土坑
E500
N1111
B
B′
GP
N1110
E499
N1110
E500
B 48.100m
B′
GP
1
ＬⅣ
223号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒・黒褐色土粒・炭化物粒含む）
E490
N1113
E491
N1113
C
C′
225号土坑
N1111.5
E491
C 48.100m
C′
1
2
2
3
4
225号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/6
（ＬⅣ粒・暗褐色土粒含む）
E479
N1147
E480
N1147
227号土坑
D
D′
N1145
E479
E481
N1138
E482
N1138
228号土坑
E
E′
N1136
E481
E 48.500m
E′
ＬⅣ
1
2
3
4
4
5
6
228号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
2　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（灰黄褐色土粒含む）
4　黄褐色粘土　10ＹＲ5/8（ＬⅣ粒含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（灰黄褐色土粒含む）
6　黒褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅣ粒含む）
D 48.600m
D′
SD04
1
2
3
4
5
6
227号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3
（ＬⅣ粒少量，炭化物粒・ＬＶ粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
（ＬⅣ粒少量，炭化物粒・ＬＶ粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
（炭化物粒・ＬＶ粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
（ＬⅣ粒多量，ＬＶ粒含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・ＬＶ粒含む）
SD04
E480
N1139.5
229号土坑
F
F′
N1138
E479
N1138
E480
F 48.600m
F′
SD04
ＬⅣ
1
2
3
229号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4
（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2
（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
0
1 m
(1/40)

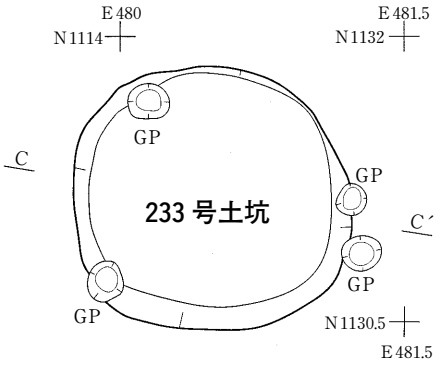
図194　土坑（21）



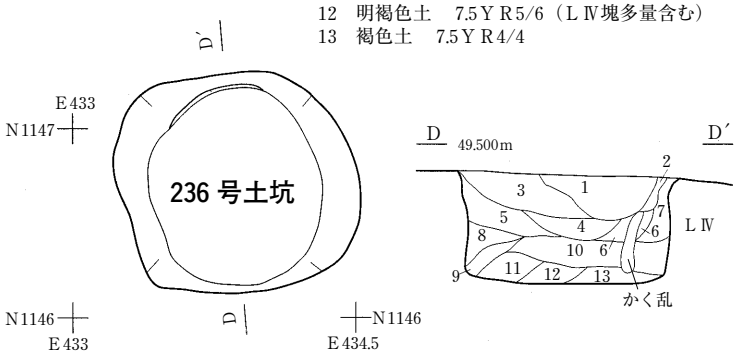
230 号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量含む）



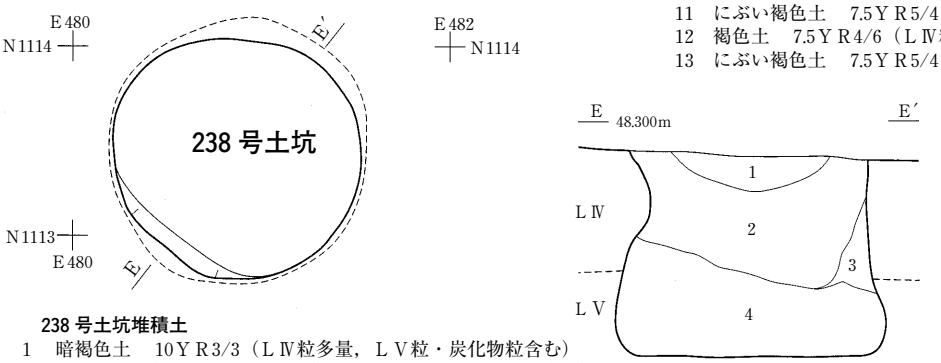
235 号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
2　褐色土　7.5ＹＲ4/6
3　褐色土　7.5ＹＲ4/3（炭化物粒含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/4
5　褐色土　7.5ＹＲ4/6
6　褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物多量含む）
7　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2
8　褐色土　7.5ＹＲ4/4
9　褐色土　7.5ＹＲ4/4
10　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
11　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒多量含む）
12　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
13　褐色土　7.5ＹＲ4/4



233 号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）



236 号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
3　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒多量含む）
5　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ粒多量含む）
6　褐色土　7.5ＹＲ4/3
7　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
8　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2
9　褐色土　7.5ＹＲ4/3
10　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
11　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ粒・塊多量含む）
12　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒・塊多量含む）
13　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ粒・塊多量含む）



238 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量，ＬＶ粒・炭化物粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・ＬＶ粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量，ＬＶ粒・炭化物粒含む）

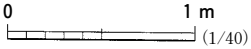


図195　土坑（22）

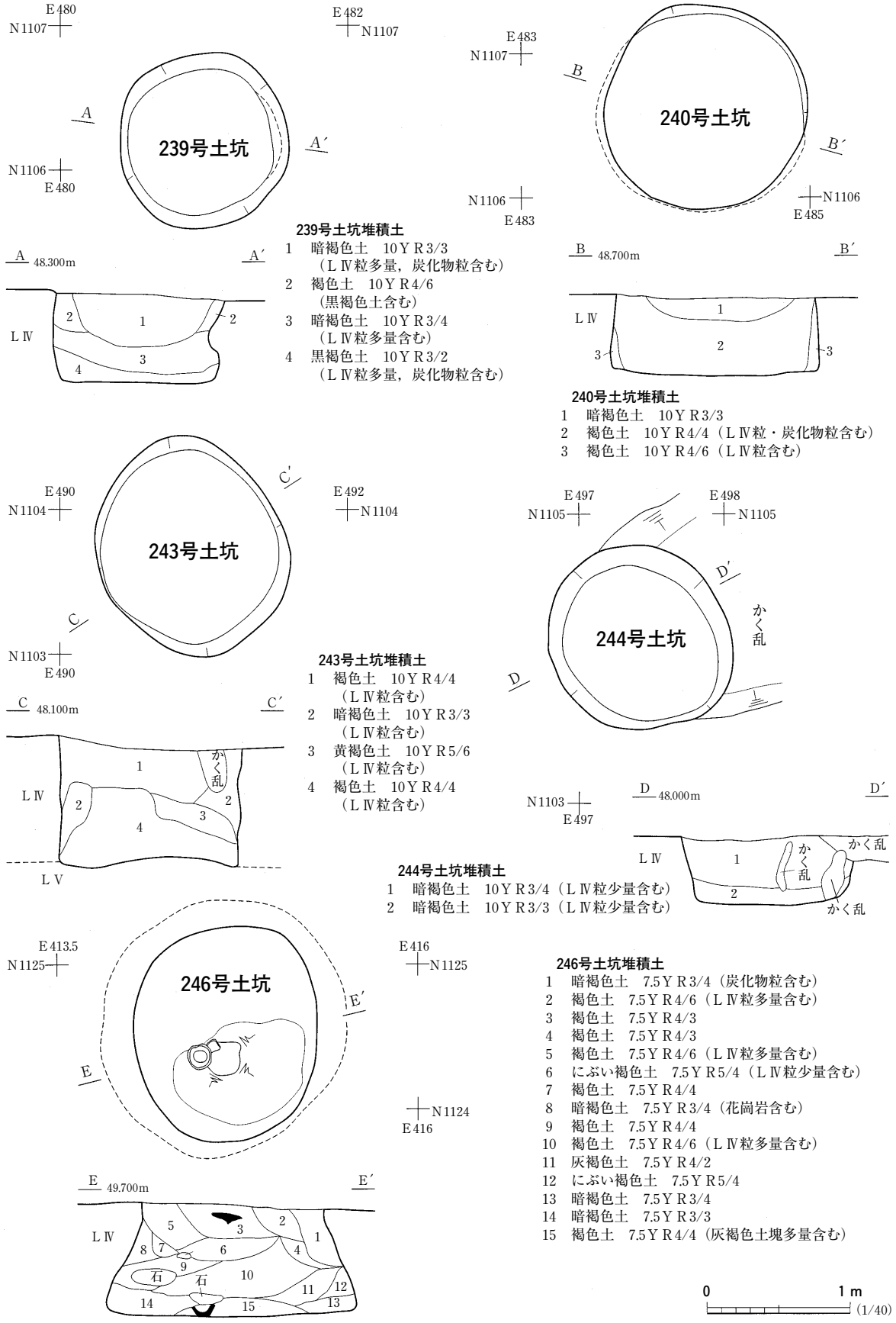
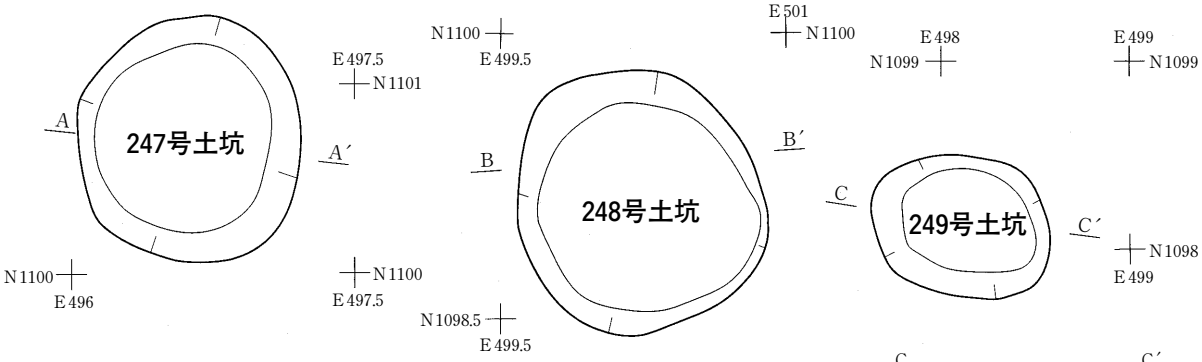
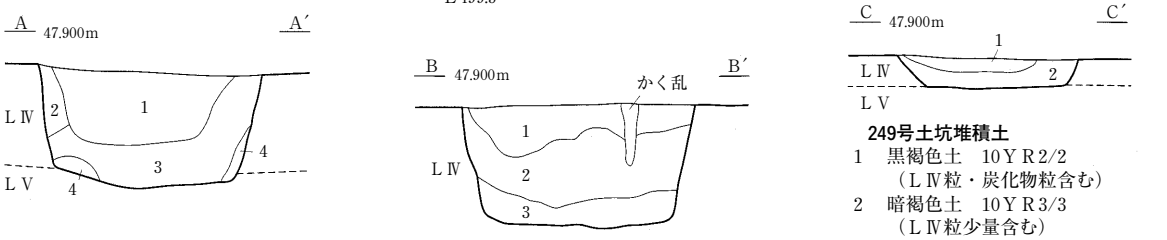

E480
N1107
E482
N1107
239号土坑
A
A′
N1106
E480
239号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6
（黒褐色土含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒多量含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ3/2
（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
A　48.300m
A′
LⅣ
E483
N1107
240号土坑
B
B′
N1106
E483
N1106
E485
B　48.700m
B′
LⅣ
240号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
E490
N1104
E492
N1104
243号土坑
C′
C
N1103
E490
243号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4
（ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒含む）
3　黄褐色土　10ＹＲ5/6
（ＬⅣ粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4
（ＬⅣ粒含む）
C　48.100m
C′
LⅣ
LＶ
かく乱
E497
N1105
E498
N1105
244号土坑
D′
D
かく乱
N1103
E497
D　48.000m
D′
LⅣ
かく乱
かく乱
かく乱
244号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量含む）
E413.5
N1125
246号土坑
E′
E
E416
N1125
N1124
E416
246号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒多量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/3
4　褐色土　7.5ＹＲ4/3
5　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒多量含む）
6　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ粒少量含む）
7　褐色土　7.5ＹＲ4/4
8　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（花崗岩含む）
9　褐色土　7.5ＹＲ4/4
10　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒多量含む）
11　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2
12　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
13　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
14　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3
15　褐色土　7.5ＹＲ4/4（灰褐色土塊多量含む）
E　49.700m
E′
LⅣ
石
石
0
1 m
(1/40)

図196　土坑（23）

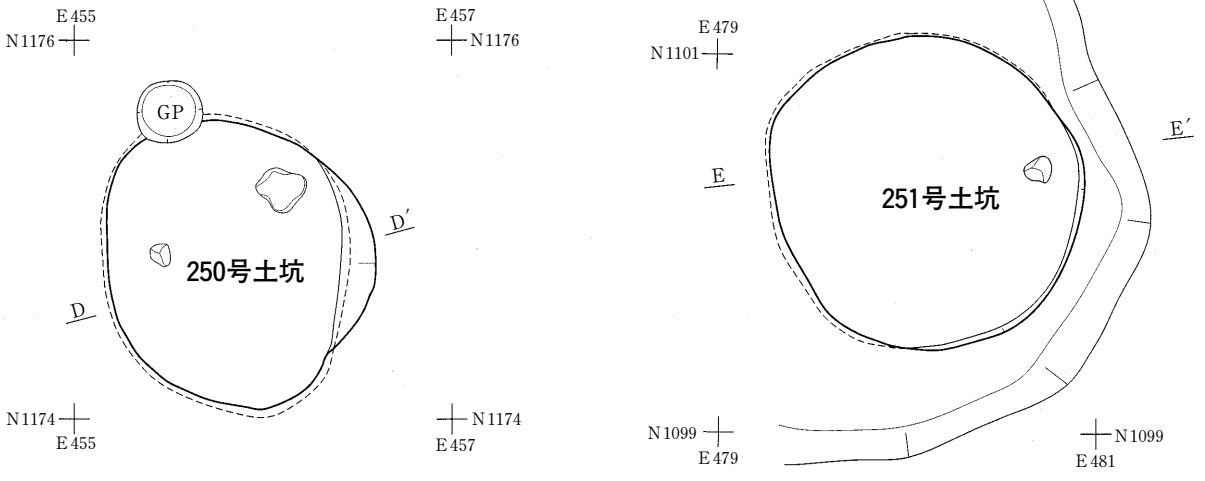


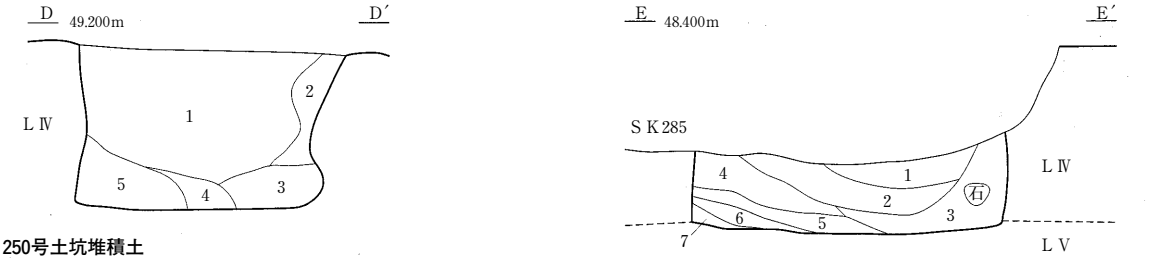


247号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒含む）
2　褐色土　10YR4/4（暗褐色土粒含む）
3　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒・炭化物粒含む）
4　黒褐色土　10YR3/2（暗褐色土粒含む）

248号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒多量，黒褐色土粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　10YR4/4（暗褐色土粒・黒褐色土粒・LⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒多量，黒褐色土粒含む）

249号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2
（LⅣ粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10YR3/3
（LⅣ粒少量含む）





250号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（黒褐色土粒・LⅣ粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ粒含む）
3　黒褐色土　10YR3/2（LⅣ粒含む）
4　灰黄褐色土　10YR4/2（炭化物粒少量含む）
5　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒少量含む）

251号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR 3/4（LⅣ粒少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
3　褐色土　10YR4/4
4　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒少量含む）
5　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒含む）
6　褐色土　10YR4/4（LⅣ・LⅤ粒少量含む）
7　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ・LⅤ粒少量含む）

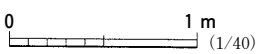
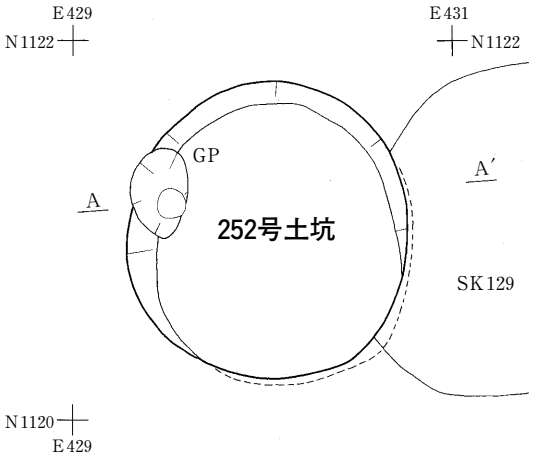
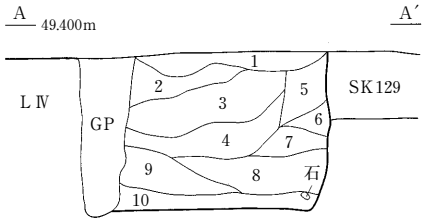


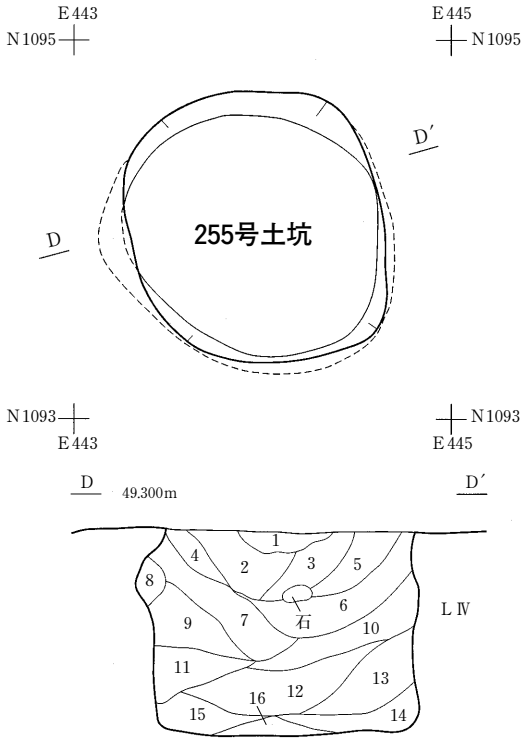
図197　土坑（24）

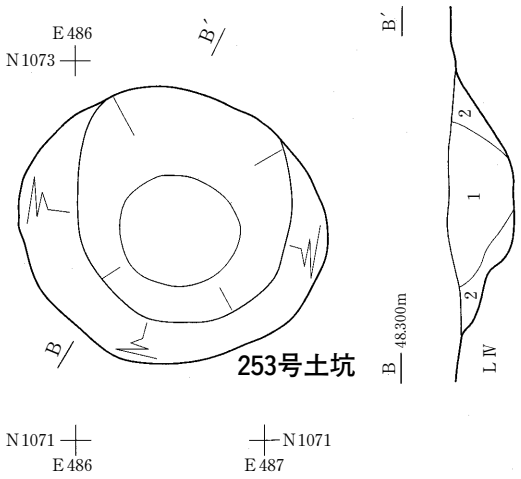




252号土坑堆積土

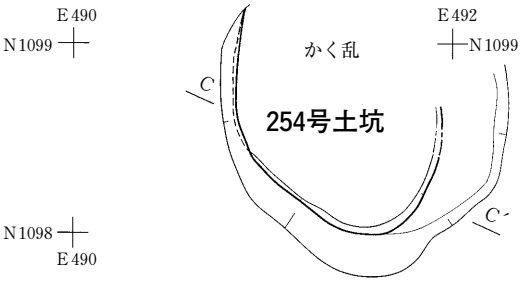
1　にぶい黄褐色土　10YR5/3
2　橙色土　7.5YR6/6（LⅣ塊多量含む）
3　明黄褐色土　10YR6/6（LⅣ塊・粒多量含む）
4　褐色土　7.5YR4/4（炭化物粒少量含む）
5　にぶい褐色土　7.5YR5/4（LⅣ粒少量含む）
6　明黄褐色土　10YR6/6（LⅣ塊含む）
7　褐色土　7.5YR4/6
8　明褐色土　7.5YR5/6（LⅣ粒多量含む）
9　にぶい褐色土　7.5YR5/4（LⅣ粒少量含む）
10　褐色土　7.5YR4/6

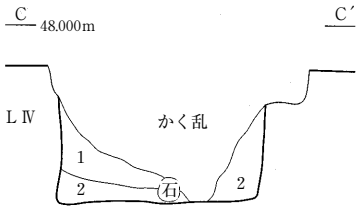




253号土坑堆積土

1　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒塊少量含む）





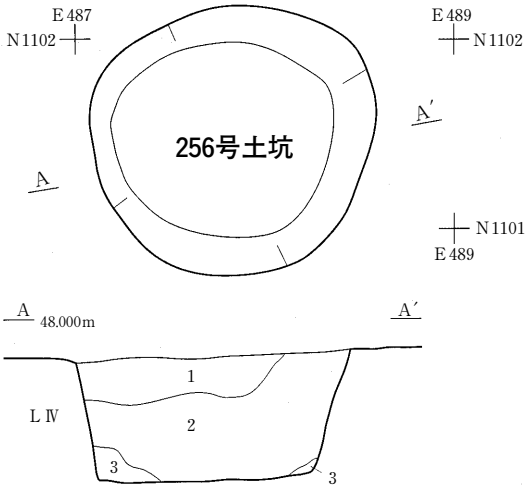
254号土坑堆積土

1　褐色土　10YR4/4（LⅣ粒・暗褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒少量含む）

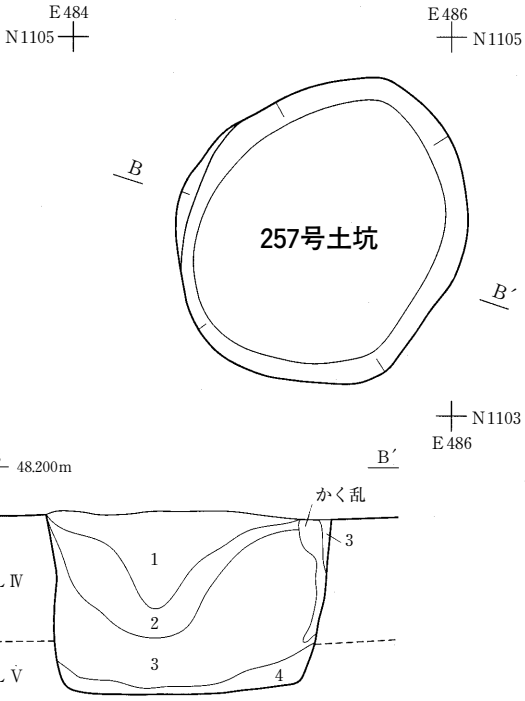
255号土坑堆積土

1　黒褐色土　7.5YR2/3（炭化物粒含む）
2　暗褐色土　7.5YR3/4
3　褐色土　7.5YR4/3
4　褐色土　7.5YR4/3
5　褐色土　7.5YR4/4
6　褐色土　7.5YR4/6
7　褐色土　7.5YR4/3
8　褐色土　7.5YR4/6（LⅣ粒少量含む）
9　にぶい褐色土　7.5YR5/4
10　明褐色土　7.5YR5/6（LⅣ粒多量含む）
11　褐色土　7.5YR4/6
12　褐色土　7.5YR4/3
13　褐色土　7.5YR4/4
14　褐色土　7.5YR4/3
15　灰褐色土　7.5YR4/2
16　暗褐色土　7.5YR3/4

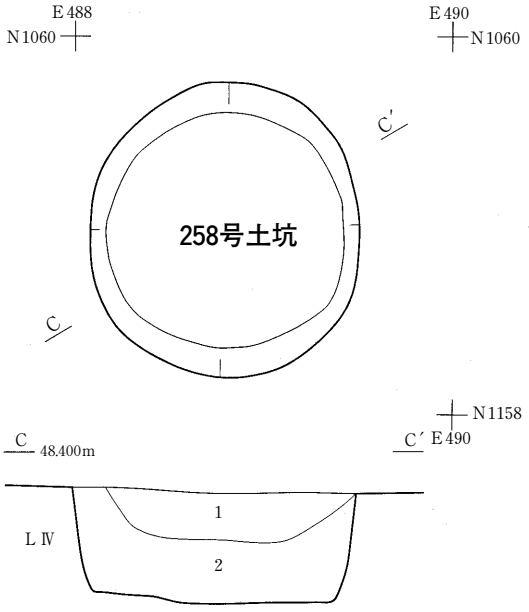
図198　土坑（25）



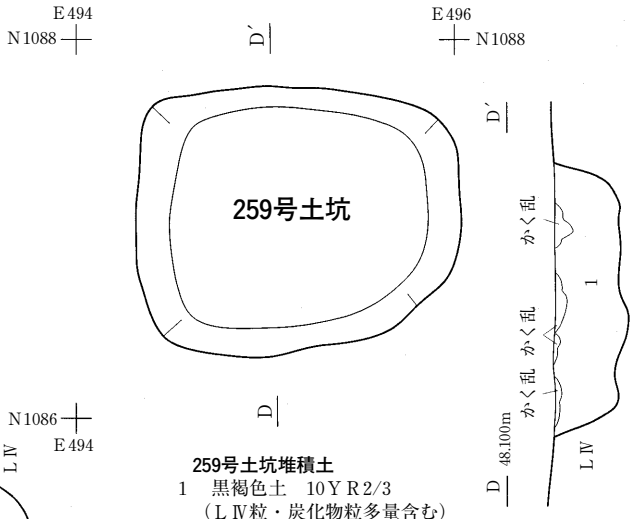
256号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4
　（LⅣ粒多量，黒褐色土粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　10YR4/6（LⅣ粒少量・炭化物粒含む）
3　黒褐色土　10YR3/2（LⅣ粒・炭化物粒含む）



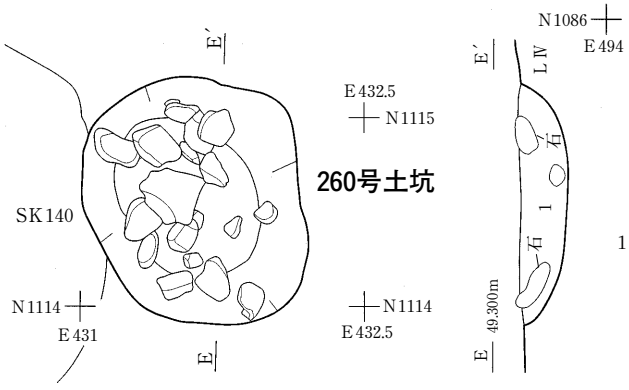
257号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3
　（黒褐色粘土粒少量，LⅣ・Ⅴ粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　10YR4/6
　（LⅣ粒多量，黒褐色粘土粒・黒褐色土粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　10YR4/6（LⅣ粒多量，炭化物粒含む）
4　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒多量，炭化物粒含む）



258号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（炭化物粒含む）

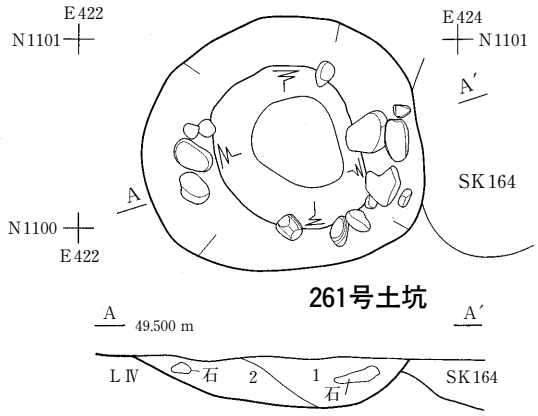


259号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3
　（LⅣ粒・炭化物粒多量含む）

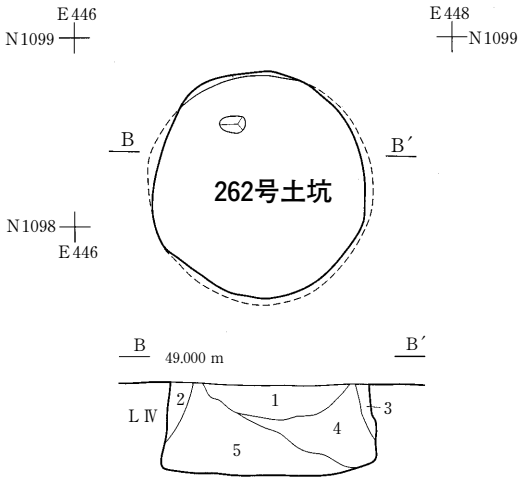


260号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5YR2/3

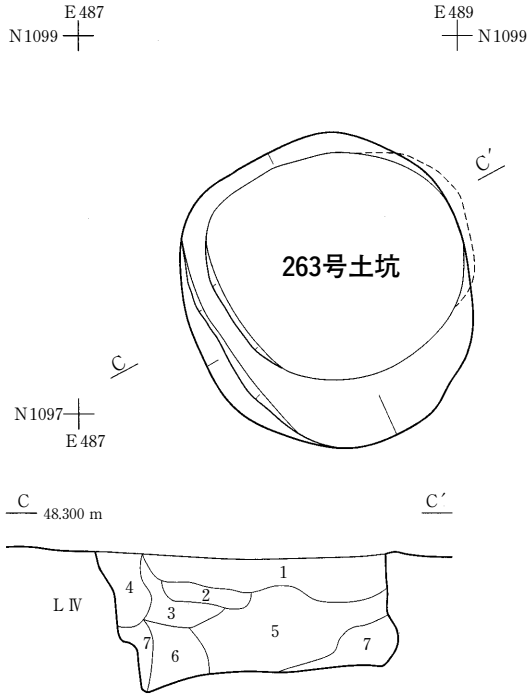
図199　土坑（26）



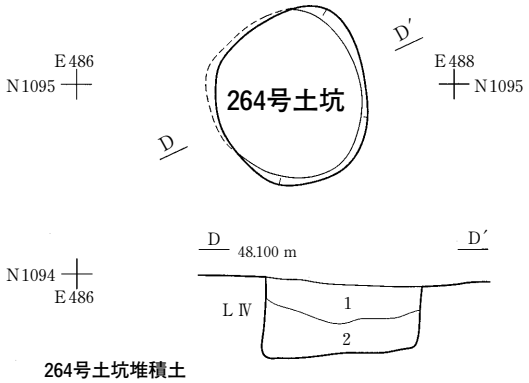
261号土坑堆積土
1　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/5



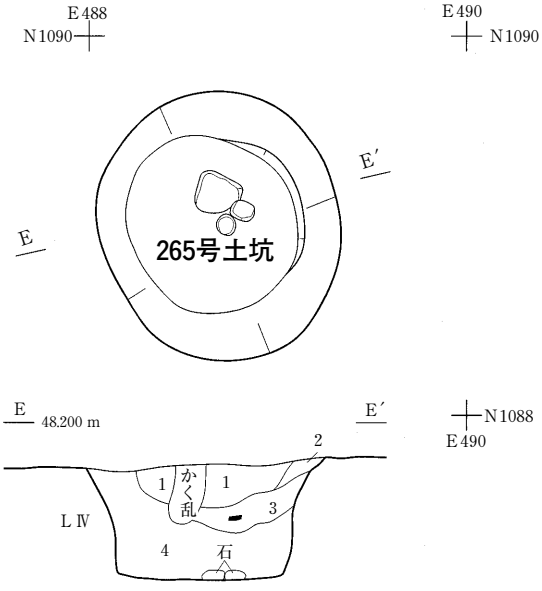
262号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
2　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
3　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
5　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）



263号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・砂礫含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（暗褐色土粒・ＬⅣ粒含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）
7　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅣ塊含む）



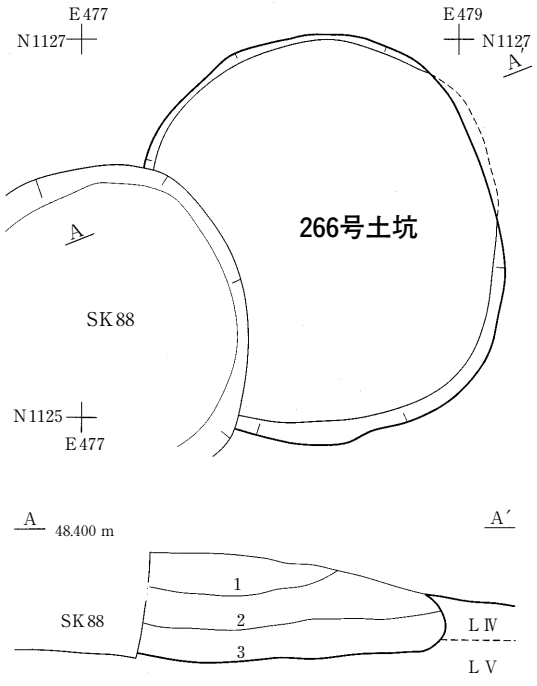
264号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・黒褐色土粒含む）



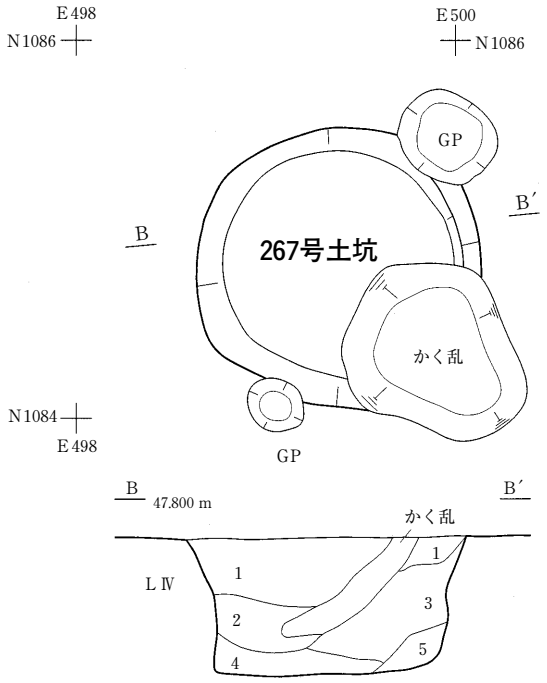
265号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（黒褐色土粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）

0　1 m
(1/40)

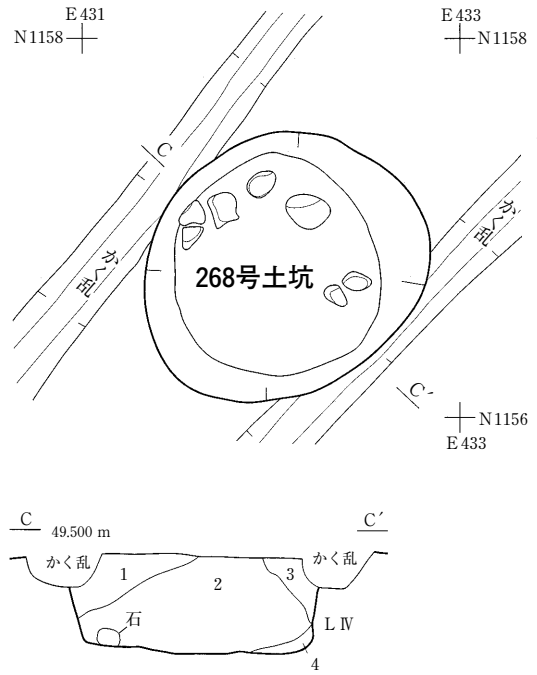
図200　土坑（27）



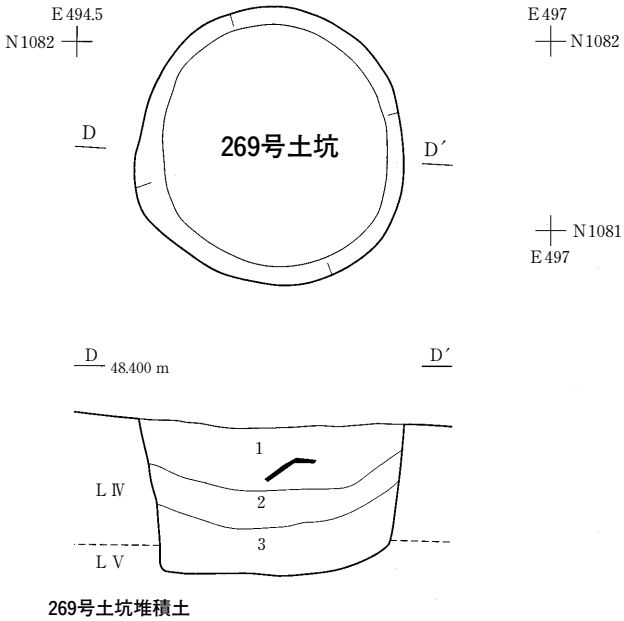
266号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ塊少量，LⅥ粒含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（LⅥ粒含む）
3　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ・LⅥ粒含む）



267号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（LⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　黒褐色土　10YR3/2（LⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒少量含む）
5　黒褐色土　10YR2/2



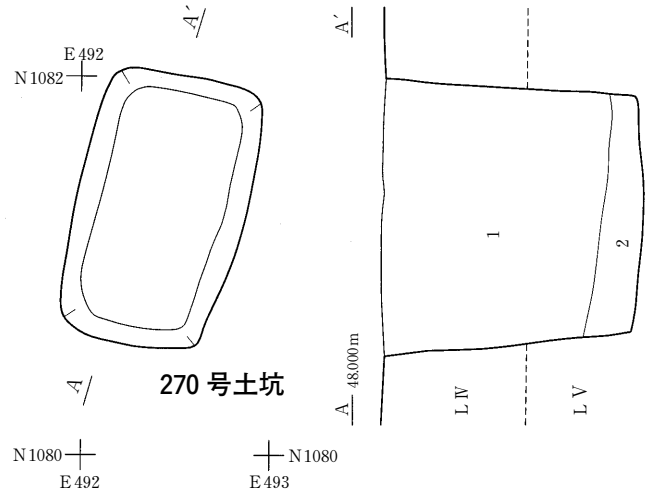
268号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/6（LⅣ粒少量含む）
2　暗褐色土　7.5YR3/4（炭化物粒含む）
3　褐色土　7.5YR4/6（LⅣ粒少量含む）
4　明褐色土　7.5YR6/5（LⅣ粒多量含む）



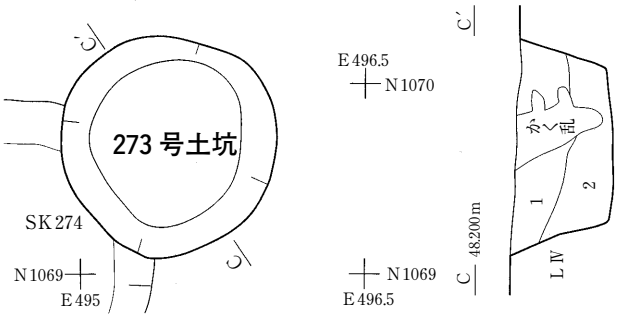
269号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR3/4（LⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10YR4/4（LⅣ粒・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）

0　1 m
(1/40)

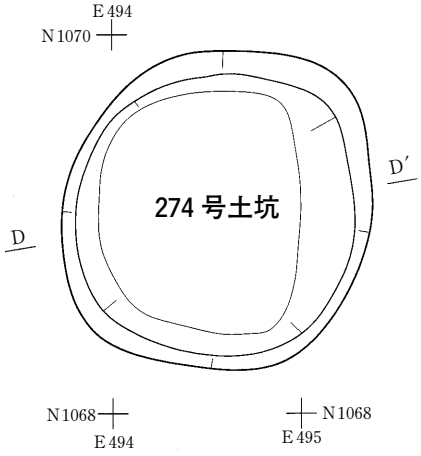
図201　土坑（28）

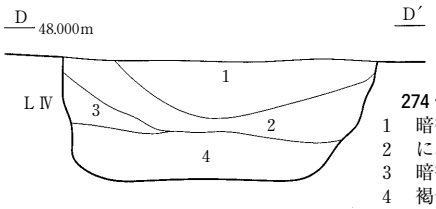


270 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒多量，ＬⅣ粒・塊・ＬⅤ粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅥ粒・暗褐色土粒含む）

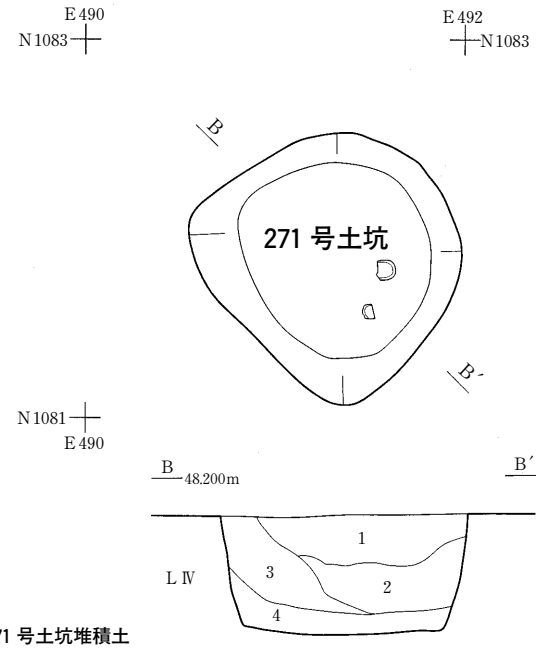


273 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）

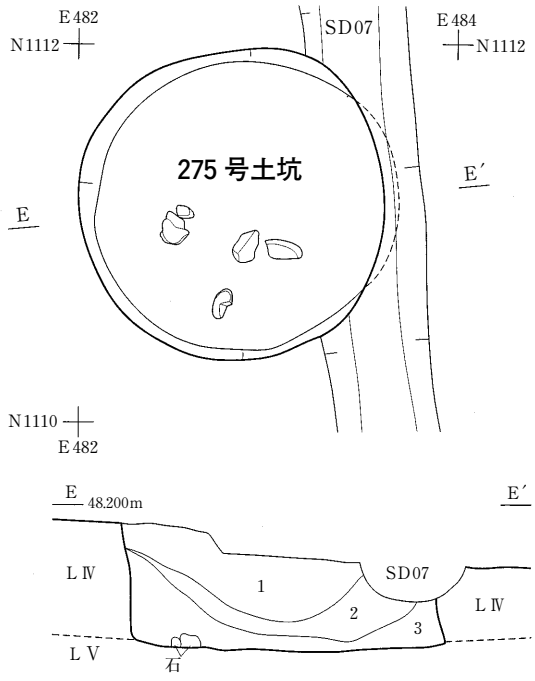




274 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・暗褐色土粒・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
4　褐色粘質土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒・黒褐色土粒少量含む）



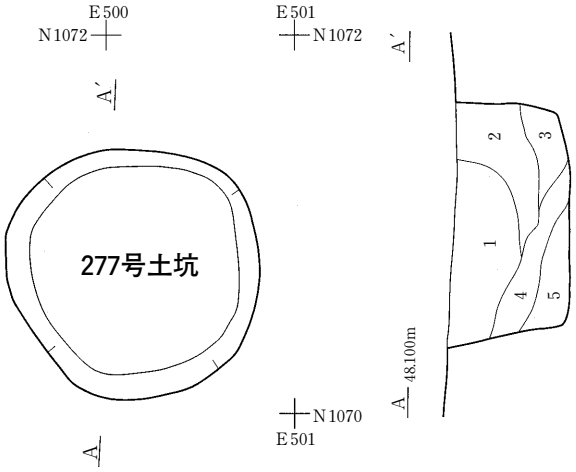
271 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅣ粒・炭化物粒多量，黒褐色土粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）



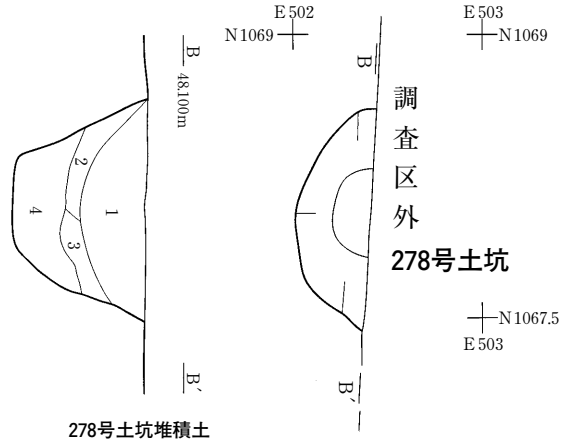
275 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ・Ⅴ粒・炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ・Ⅴ粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4

0　1 m
(1/40)

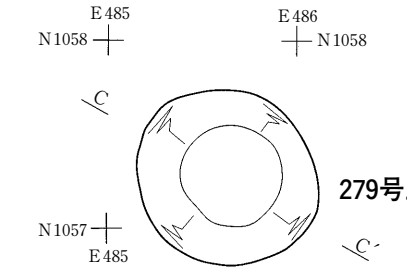
図202　土坑（29）



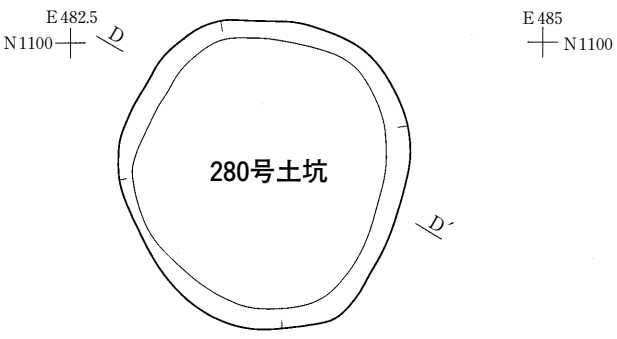
277号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）



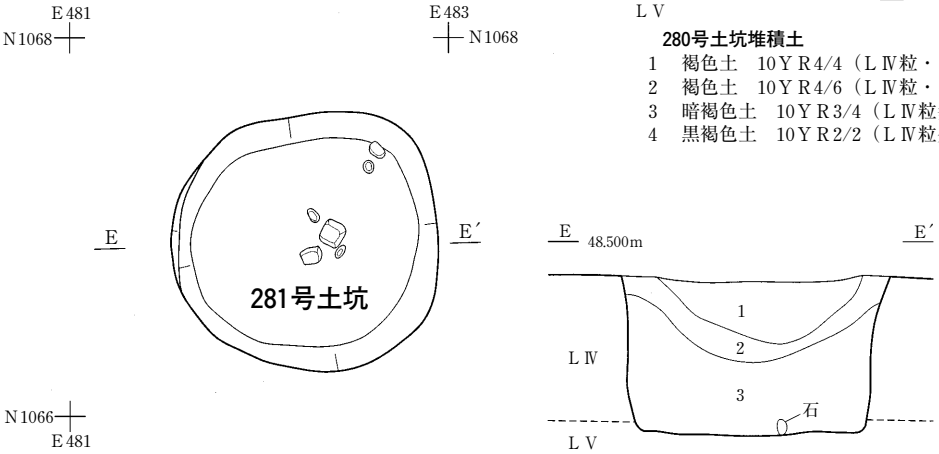
278号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量含む）



279号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭多量含む）



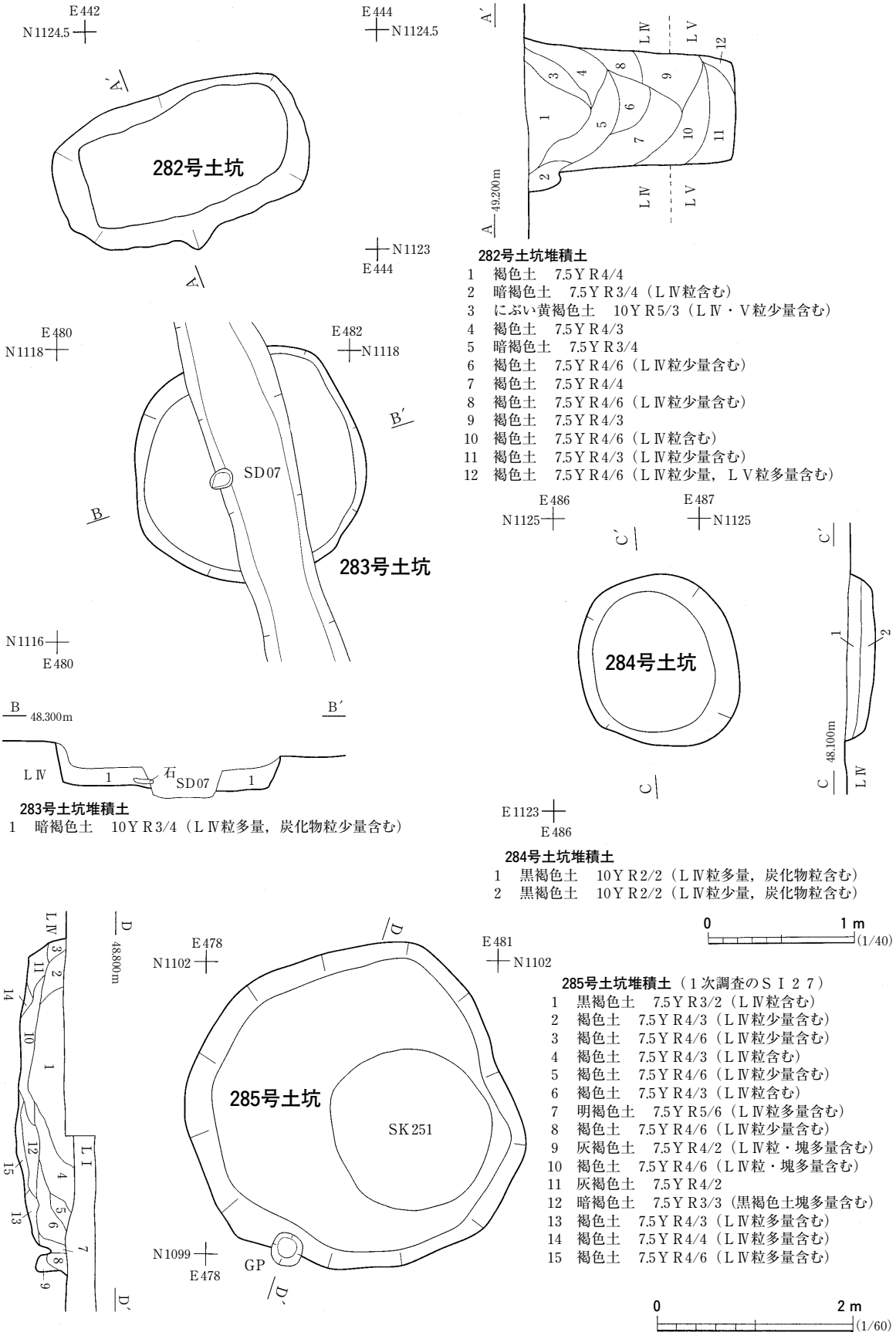
280号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・ＬⅤ粒・黒褐色土粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒・ＬⅤ粒・黒褐色土粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量・炭化物粒少量含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ2/2（ＬⅣ粒少量含む）



281号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒多量，ＬⅤ粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ・ＬⅤ粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ・ＬⅤ粒・黒褐色土粒少量含む）

0　1 m
(1/40)

図203　土坑（30）



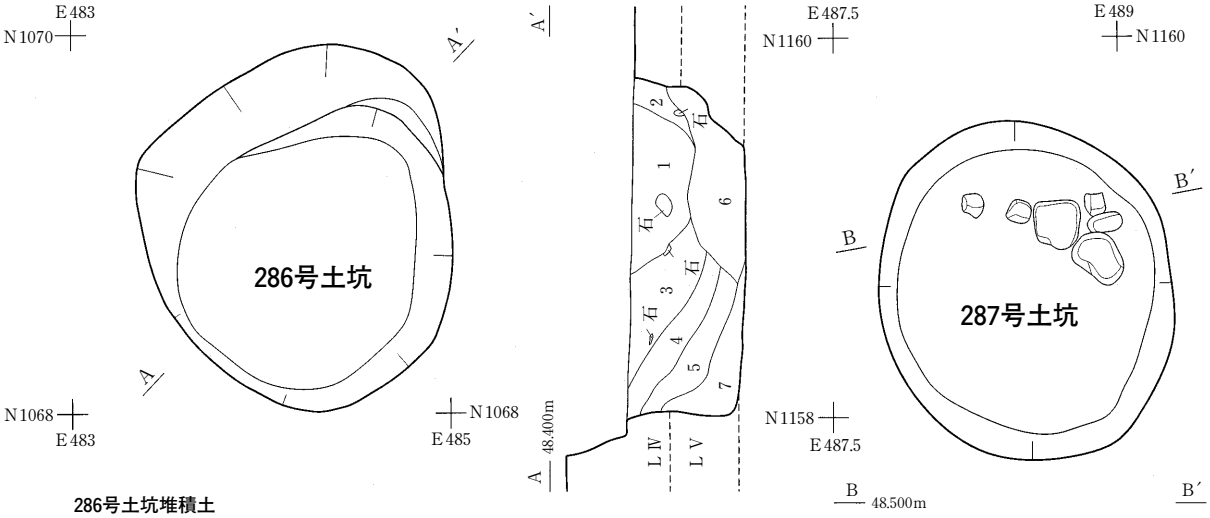
282号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3（ＬⅣ・Ⅴ粒少量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/3
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
6　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
7　褐色土　7.5ＹＲ4/4
8　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
9　褐色土　7.5ＹＲ4/3
10　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
11　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）
12　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量，ＬⅤ粒多量含む）

283号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）

284号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/2（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）

285号土坑堆積土（１次調査のＳＩ２７）
1　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
5　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
6　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
7　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量含む）
8　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
9　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2（ＬⅣ粒・塊多量含む）
10　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒・塊多量含む）
11　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2
12　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（黒褐色土塊多量含む）
13　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒多量含む）
14　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ粒多量含む）
15　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒多量含む）

図204　土坑（31）

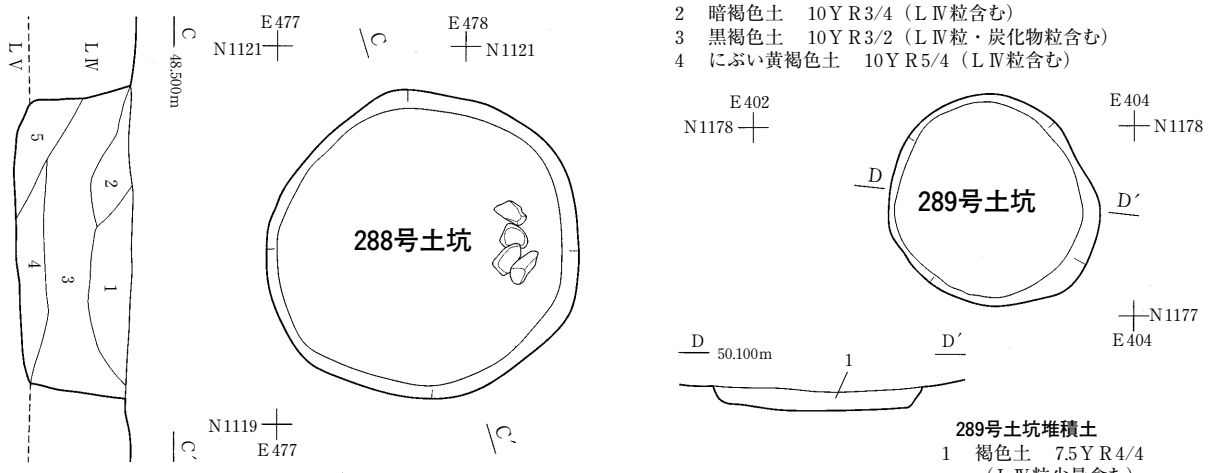


286号土坑堆積土

1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（ＬⅤ粒・暗褐色土粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（暗褐色土粒・ＬⅤ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・ＬⅤ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅤ粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅤ粒含む）
6　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅤ粒含む）
7　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅤ粒含む）

287号土坑堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/6
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅣ粒含む）

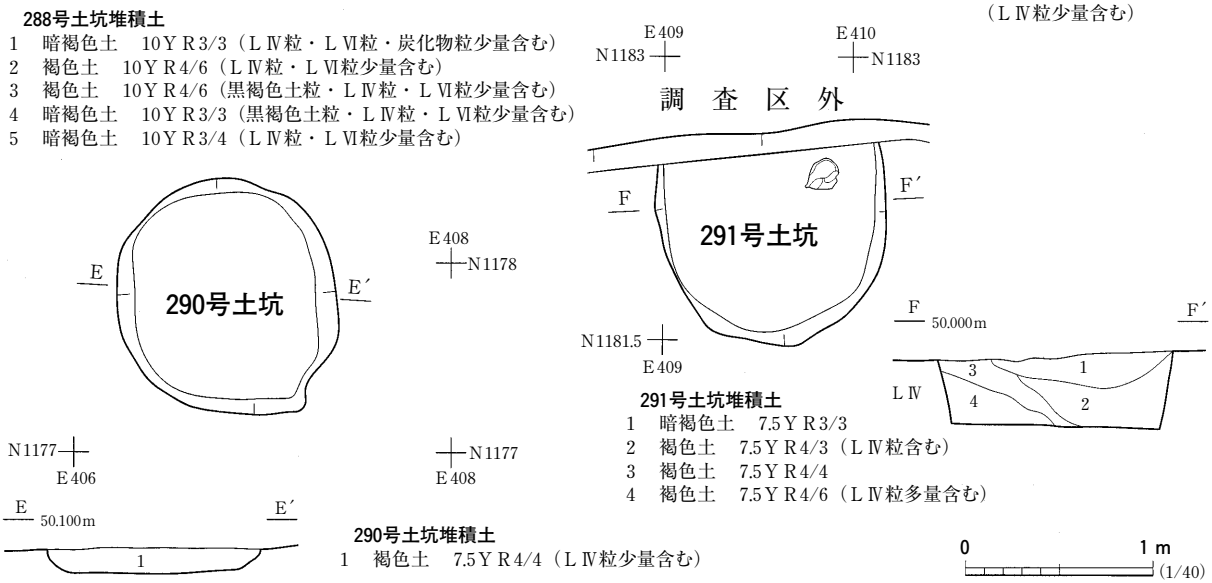


288号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒・炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒少量含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（黒褐色土粒・ＬⅣ粒・ＬⅥ粒少量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（黒褐色土粒・ＬⅣ粒・ＬⅥ粒少量含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒少量含む）

289号土坑堆積土

1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
（ＬⅣ粒少量含む）



291号土坑堆積土

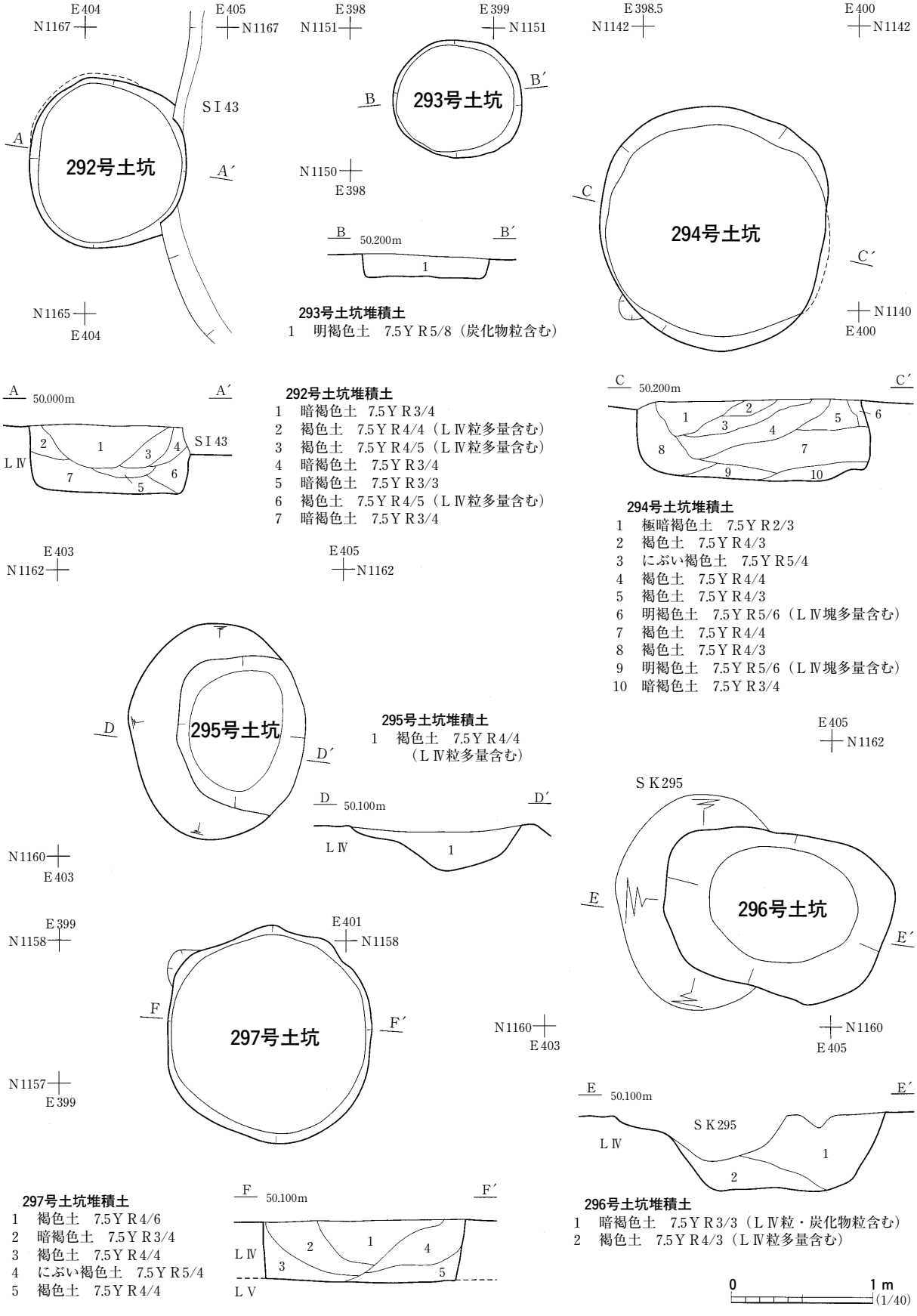
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4
4　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒多量含む）

290号土坑堆積土

1　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）

0　1 m
(1/40)

図205　土坑（32）



293号土坑堆積土
1　明褐色土　7.5ＹＲ5/8（炭化物粒含む）

292号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
2　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ粒多量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/5（ＬⅣ粒多量含む）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3
6　褐色土　7.5ＹＲ4/5（ＬⅣ粒多量含む）
7　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4

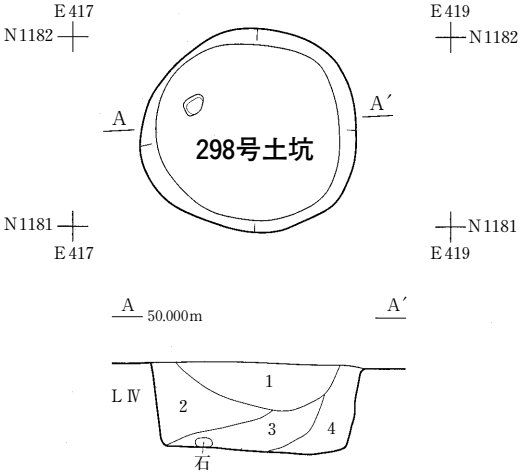
294号土坑堆積土
1　極暗褐色土　7.5ＹＲ2/3
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3
3　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
4　褐色土　7.5ＹＲ4/4
5　褐色土　7.5ＹＲ4/3
6　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
7　褐色土　7.5ＹＲ4/4
8　褐色土　7.5ＹＲ4/3
9　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
10　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4

295号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
（ＬⅣ粒多量含む）

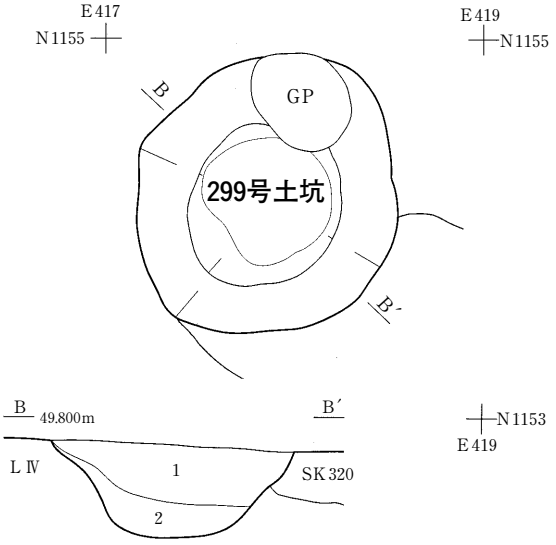
297号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/6
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4
4　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
5　褐色土　7.5ＹＲ4/4

296号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ粒多量含む）

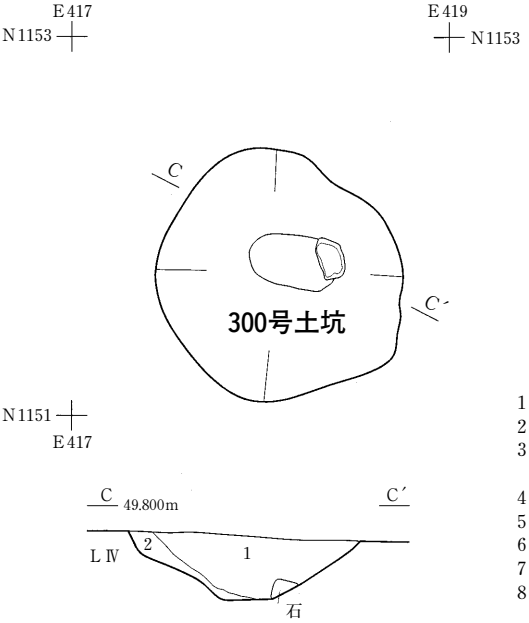
図206　土坑（33）



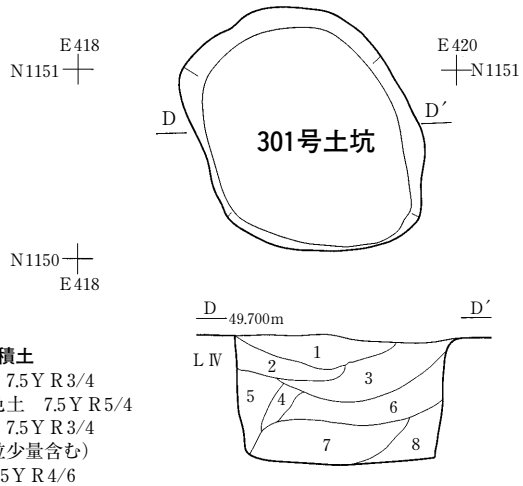
298号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/4
2　暗褐色土　7.5Y R3/4
3　にぶい黄褐色土　7.5Y R5/4
4　褐色土　7.5Y R4/3



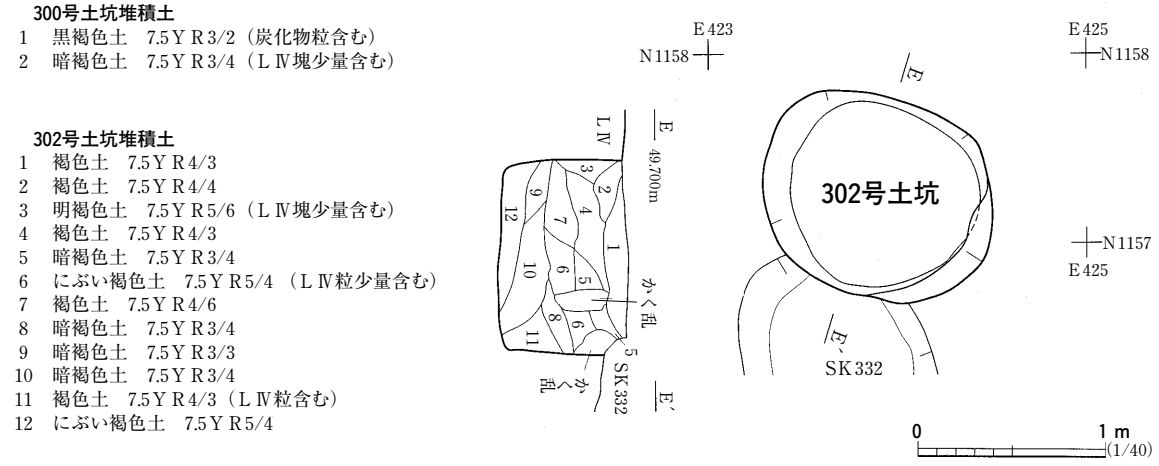
299号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5Y R3/2（石多数含む）
2　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒多量含む）



300号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5Y R3/2（炭化物粒含む）
2　暗褐色土　7.5Y R3/4（LⅣ塊少量含む）

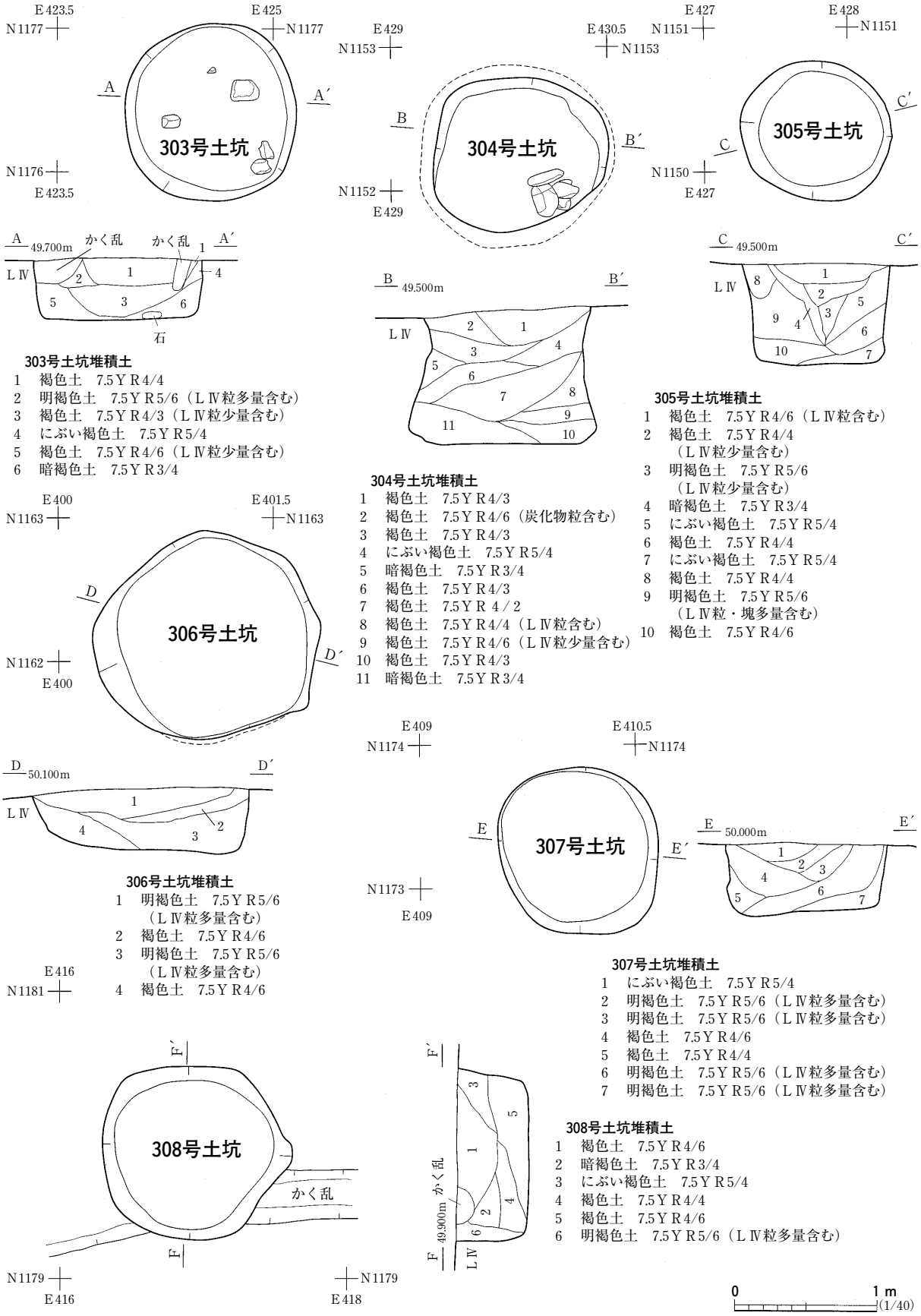


301号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5Y R3/4
2　にぶい褐色土　7.5Y R5/4
3　暗褐色土　7.5Y R3/4
　（炭化物粒少量含む）
4　褐色土　7.5Y R4/6
5　褐色土　7.5Y R4/4
6　明褐色土　7.5Y R5/6
7　にぶい褐色土　7.5Y R5/4（LⅤ粒少量含む）
8　にぶい褐色土　7.5Y R5/3（LⅤ粒含む）



302号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/3
2　褐色土　7.5Y R4/4
3　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ塊少量含む）
4　褐色土　7.5Y R4/3
5　暗褐色土　7.5Y R3/4
6　にぶい褐色土　7.5Y R5/4（LⅣ粒少量含む）
7　褐色土　7.5Y R4/6
8　暗褐色土　7.5Y R3/4
9　暗褐色土　7.5Y R3/3
10　暗褐色土　7.5Y R3/4
11　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ粒含む）
12　にぶい褐色土　7.5Y R5/4

図207　土坑（34）



303号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
2　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
4　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
5　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
6　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4

304号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（炭化物粒含む）
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
4　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
5　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
7　褐色土　7.5Ｙ Ｒ 4 / 2
8　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ粒含む）
9　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
10　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
11　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4

305号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ粒含む）
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
3　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6
（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
4　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
5　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
7　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
8　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
9　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6
（Ｌ Ⅳ粒・塊多量含む）
10　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6

306号土坑堆積土
1　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6
（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
3　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6
（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
4　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6

307号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
2　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
3　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
4　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
5　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
6　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
7　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）

308号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
2　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
3　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
4　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
5　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
6　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）

図208　土坑（35）

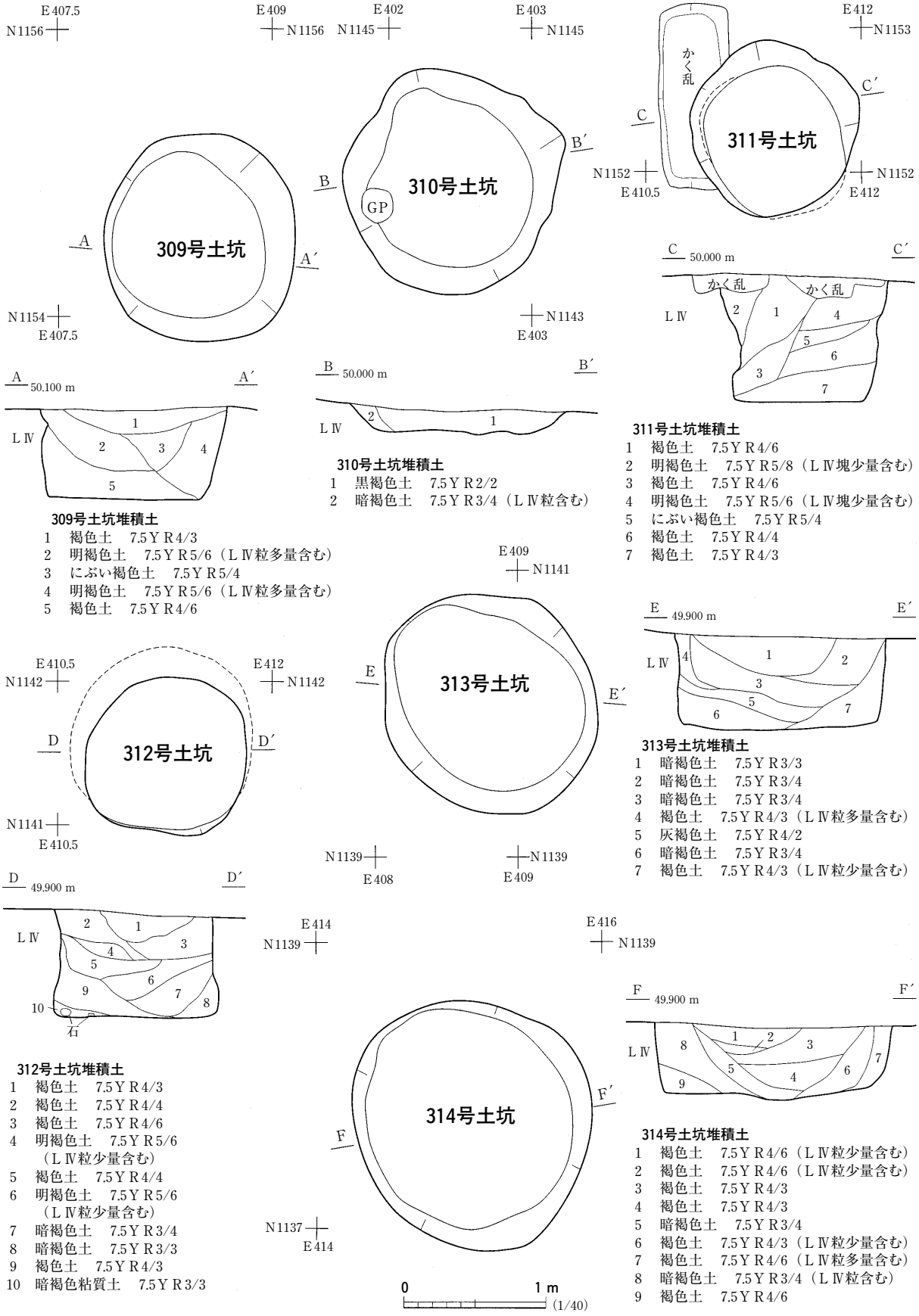
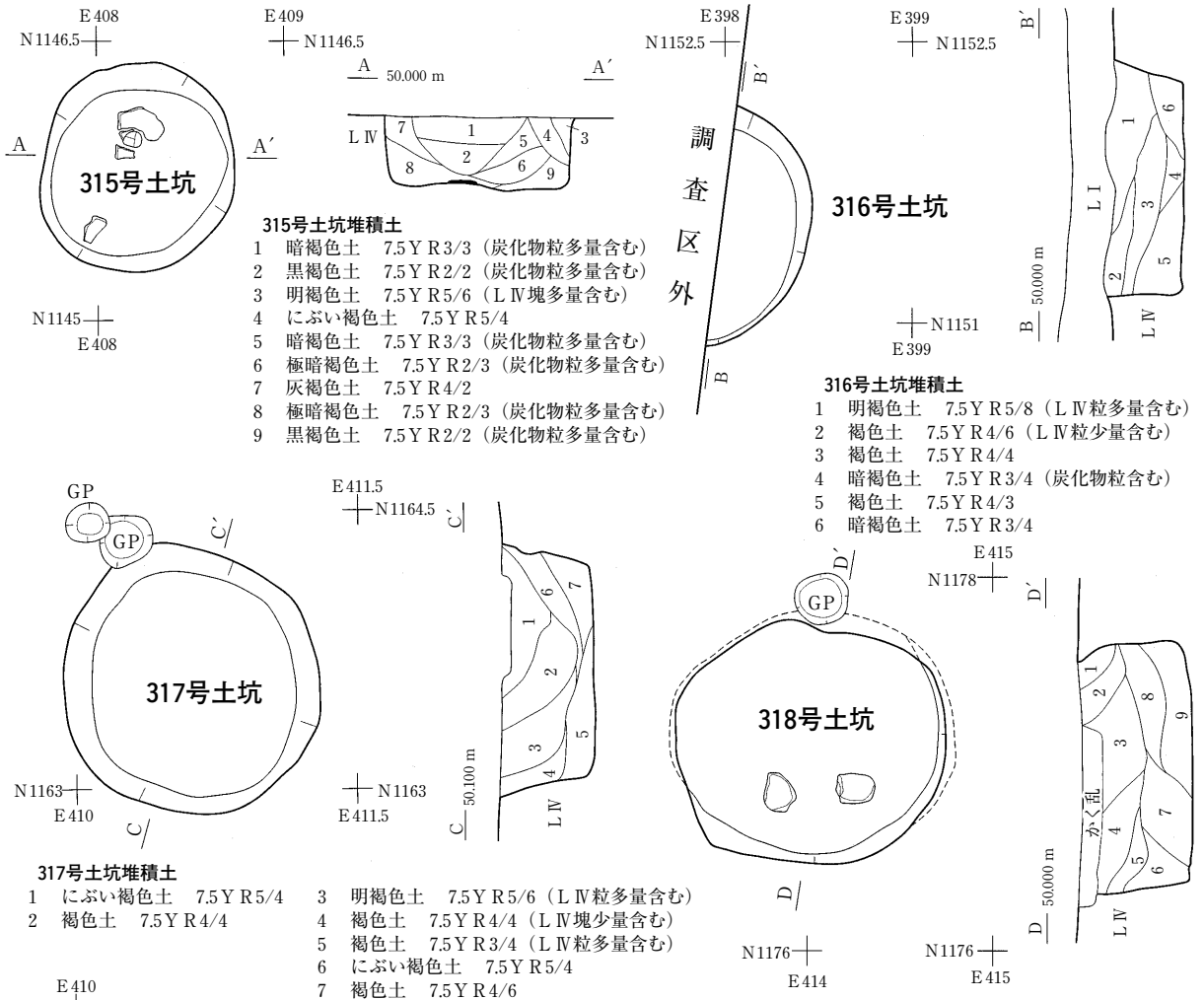

E407.5
N1156
E409
N1156
E402
N1145
E403
N1145
E412
N1153
309号土坑
310号土坑
311号土坑
かく乱
GP
N1154
E407.5
N1143
E403
N1152
E410.5
N1152
E412
A
A′
B
B′
C
C′
A 50.100 m
B 50.000 m
C 50.000 m
LⅣ
309号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/3
2　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒多量含む）
3　にぶい褐色土　7.5Y R5/4
4　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒多量含む）
5　褐色土　7.5Y R4/6
310号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5Y R2/2
2　暗褐色土　7.5Y R3/4（LⅣ粒含む）
311号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/6
2　明褐色土　7.5Y R5/8（LⅣ塊少量含む）
3　褐色土　7.5Y R4/6
4　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ塊少量含む）
5　にぶい褐色土　7.5Y R5/4
6　褐色土　7.5Y R4/4
7　褐色土　7.5Y R4/3
E409
N1141
E410.5
N1142
E412
N1142
312号土坑
313号土坑
D
D′
N1141
E410.5
N1139
E408
N1139
E409
E
E′
E 49.900 m
D 49.900 m
313号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5Y R3/3
2　暗褐色土　7.5Y R3/4
3　暗褐色土　7.5Y R3/4
4　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ粒多量含む）
5　灰褐色土　7.5Y R4/2
6　暗褐色土　7.5Y R3/4
7　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ粒少量含む）
E414
N1139
E416
N1139
314号土坑
F
F′
N1137
E414
F 49.900 m
0
1 m
(1/40)
312号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/3
2　褐色土　7.5Y R4/4
3　褐色土　7.5Y R4/6
4　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒少量含む）
5　褐色土　7.5Y R4/4
6　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒少量含む）
7　暗褐色土　7.5Y R3/4
8　暗褐色土　7.5Y R3/3
9　褐色土　7.5Y R4/3
10　暗褐色粘質土　7.5Y R3/3
314号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/6（LⅣ粒少量含む）
2　褐色土　7.5Y R4/6（LⅣ粒少量含む）
3　褐色土　7.5Y R4/3
4　褐色土　7.5Y R4/3
5　暗褐色土　7.5Y R3/4
6　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ粒少量含む）
7　褐色土　7.5Y R4/6（LⅣ粒多量含む）
8　暗褐色土　7.5Y R3/4（LⅣ粒含む）
9　褐色土　7.5Y R4/6

図209　土坑（36）



315号土坑堆積土

1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（炭化物粒多量含む）
2　黒褐色土　7.5ＹＲ2/2（炭化物粒多量含む）
3　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊多量含む）
4　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（炭化物粒多量含む）
6　極暗褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒多量含む）
7　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2
8　極暗褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒多量含む）
9　黒褐色土　7.5ＹＲ2/2（炭化物粒多量含む）

316号土坑堆積土

1　明褐色土　7.5ＹＲ5/8（ＬⅣ粒多量含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
5　褐色土　7.5ＹＲ4/3
6　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4

317号土坑堆積土

1　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
2　褐色土　7.5ＹＲ4/4
3　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ塊少量含む）
5　褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量含む）
6　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
7　褐色土　7.5ＹＲ4/6

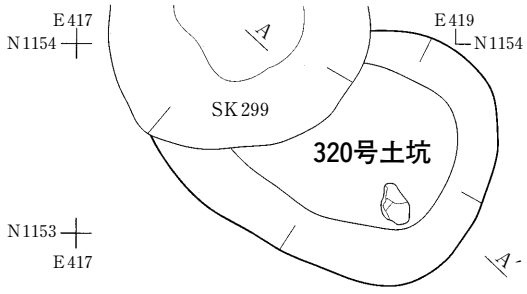
318号土坑堆積土

1　明褐色土　7.5ＹＲ5/8（ＬⅣ粒多量含む）
2　明褐色土　7.5ＹＲ5/8（ＬⅣ粒多量含む）
3　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
4　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒少量含む）
5　褐色土　7.5ＹＲ4/4
6　褐色土　7.5ＹＲ4/6
7　褐色土　7.5ＹＲ4/6
8　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4
9　褐色土　7.5ＹＲ4/6

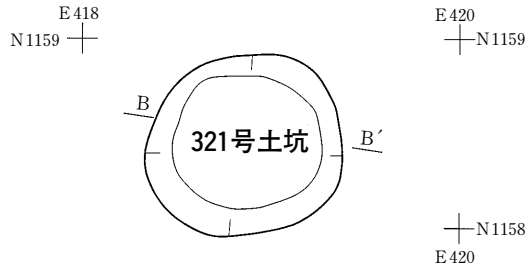
319号土坑堆積土

1　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・塊少量含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3
3　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
4　褐色土　7.5ＹＲ4/3
5　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
6　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ塊含む）
7　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
8　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2
9　橙色土　7.5ＹＲ6/8（ＬⅣ塊多量含む）
10　橙色土　7.5ＹＲ6/8（ＬⅣ粒多量含む）
11　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2
12　橙色土　7.5ＹＲ6/8（ＬⅣ塊多量含む）
13　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2
14　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
15　橙色土　7.5ＹＲ6/8（ＬⅣ塊多量含む）
16　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ塊少量含む）
17　橙色土　7.5ＹＲ6/8（ＬⅣ塊多量，ＬⅤ塊少量含む）
18　橙色土　7.5ＹＲ6/8（ＬⅣ塊多量，ＬⅤ塊少量含む）
19　橙色土　7.5ＹＲ6/8（ＬⅣ塊多量，ＬⅤ塊少量含む）
20　橙色土　7.5ＹＲ6/8（ＬⅣ塊多量，ＬⅤ塊少量含む）
21　橙色土　7.5ＹＲ6/8（ＬⅣ塊多量，ＬⅤ塊少量含む）
22　橙色土　7.5ＹＲ6/8（ＬⅣ塊多量，ＬⅤ塊少量含む）

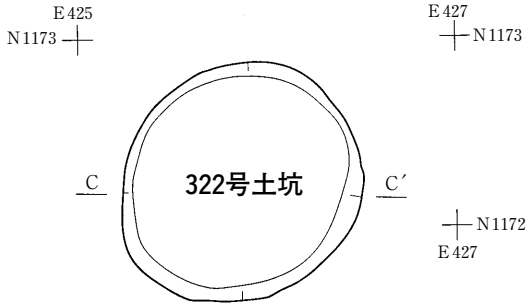
図210　土坑（37）



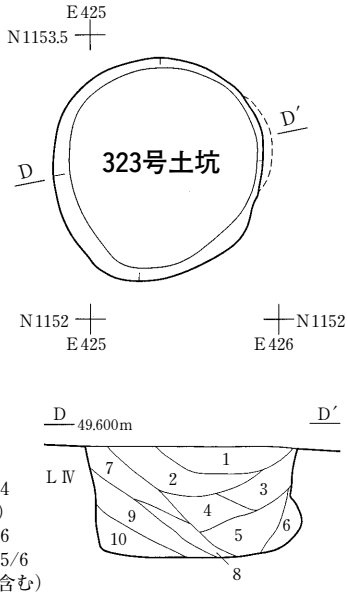
320号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5YR3/2（LⅣ粒少量含む）
2　褐色土　7.5YR4/3（LⅣ塊少量含む）



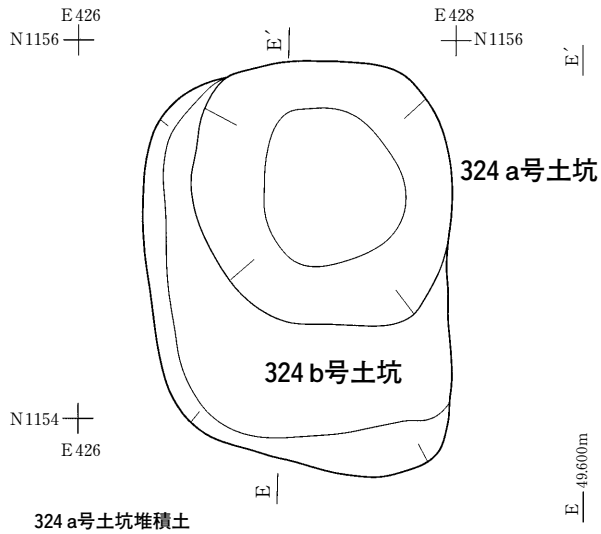
321号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/6
（LⅣ粒少量含む）
2　明褐色土　7.5YR5/6
（LⅣ粒多量含む）



322号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/4
（LⅣ粒少量含む）
2　褐色土　7.5YR4/6
3　明褐色土　7.5YR5/6
（LⅣ粒・塊多量含む）

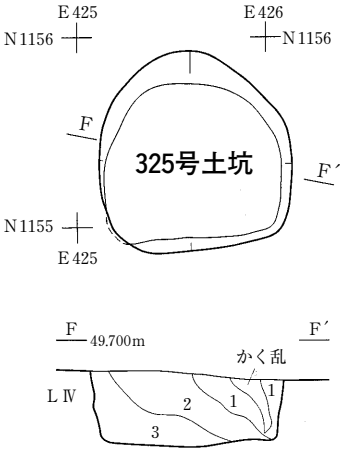


323号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/4
2　明褐色土　7.5YR5/6
（LⅣ粒多量含む）
3　褐色土　7.5YR4/6
4　にぶい褐色土　7.5YR5/4
（LⅣ粒・塊少量含む）
5　にぶい褐色土　7.5YR5/3
（LⅣ粒・塊少量含む）
6　褐色土　7.5YR4/6
7　明褐色土　7.5YR5/6
（LⅣ塊多量含む）
8　にぶい褐色土　7.5YR5/4
（LⅣ粒少量含む）
9　褐色土　7.5YR4/6
10　褐色土　7.5YR4/3



324 a号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/3
2　褐色土　7.5YR4/6（LⅣ粒含む）
3　褐色土　7.5YR4/3
4　にぶい褐色土　7.5YR5/4（LⅣ粒少量含む）
5　暗褐色土　7.5YR3/4

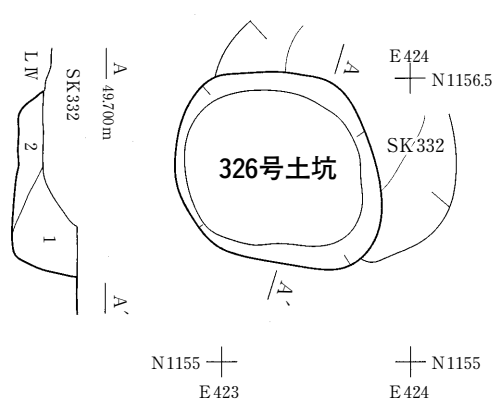
324 b号土坑堆積土
1　明褐色土　7.5YR5/6
（LⅣ粒多量含む）



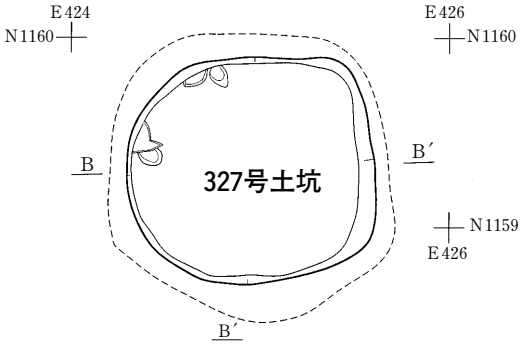
325号土坑堆積土
1　明褐色土　7.5YR5/6（LⅣ粒多量含む）
2　褐色土　7.5YR4/6
3　褐色土　7.5YR4/3（LⅣ粒・炭化物粒含む）

0　1 m
(1/40)

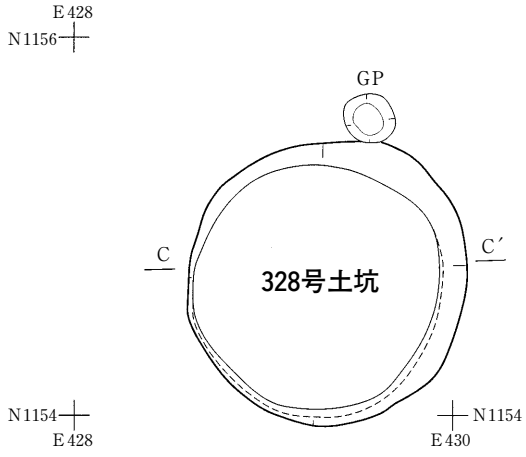
図211　土坑（38）

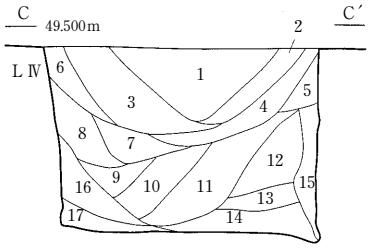


326号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/6
2　明褐色土　7.5YR5/6（LⅣ粒少量含む）

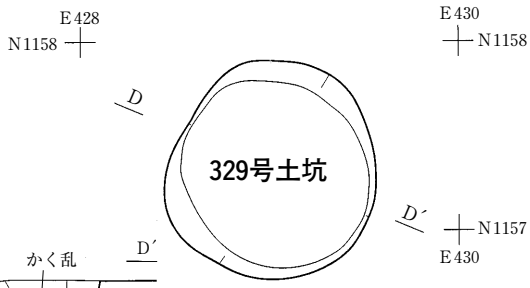


327号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/3
2　褐色土　7.5YR4/4
3　褐色土　7.5YR4/6
4　褐色土　7.5YR4/6
5　橙色土　7.5YR6/6
（LⅣ塊多量含む）
6　明褐色土　7.5YR5/6
（LⅣ塊多量含む）
7　明褐色土　7.5YR5/6（LⅣ粒・塊多量含む）
8　明褐色土　7.5YR5/8（LⅣ粒・塊多量含む）
9　にぶい褐色土　7.5YR5/4
10　黒褐色土　7.5YR3/1（炭化物粒多量含む）
11　褐色土　7.5YR4/6
12　暗褐色土　7.5YR3/4
13　にぶい褐色土　7.5YR5/4

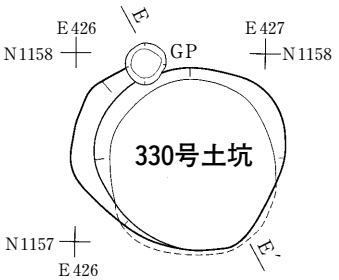


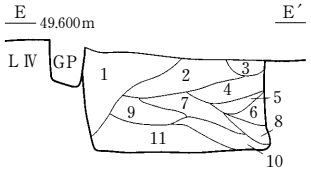


328号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5YR3/4（炭化物粒含む）
2　褐色土　7.5YR4/3
3　褐色土　7.5YR4/4
4　暗褐色土　7.5YR3/4（炭化物粒含む）
5　明褐色土　7.5YR5/6
6　褐色土　7.5YR4/6
7　にぶい褐色土　7.5YR5/4（LⅣ粒多量含む）
8　明褐色土　7.5YR5/6（LⅣ粒多量含む）
9　にぶい褐色土　7.5YR5/4（LⅣ粒多量含む）
10　褐色土　7.5YR4/6
11　にぶい褐色土　7.5YR5/4
12　褐色土　7.5YR4/6
13　明褐色土　7.5YR5/6（LⅣ粒多量含む）
14　褐色土　7.5YR4/6
15　暗褐色土　7.5YR3/4
16　明褐色土　7.5YR5/6
17　褐色土　7.5YR4/3



329号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5YR5/4
（LⅣ粒少量含む）
2　褐色土　7.5YR4/6
3　褐色土　7.5YR4/6
4　褐色土　7.5YR4/4
5　にぶい褐色土　7.5YR5/4
（LⅣ粒少量含む）
6　褐色土　7.5YR4/6
7　褐色土　7.5YR4/4
8　褐色土　7.5YR4/3

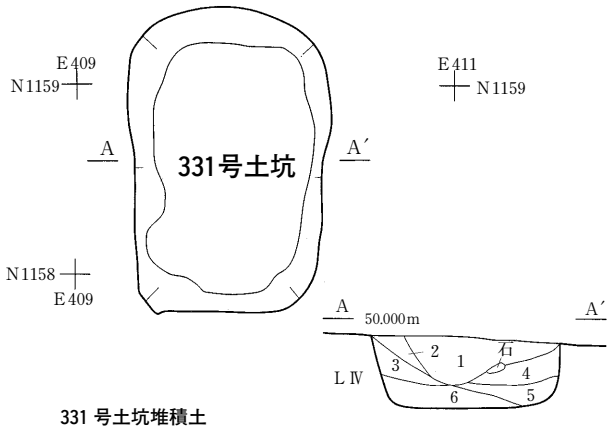




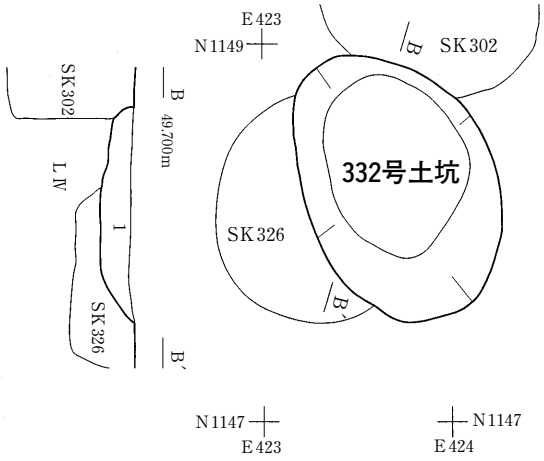
330号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/3
2　褐色土　7.5YR4/4
3　褐色土　7.5YR4/3
4　褐色土　7.5YR4/6
5　褐色土　7.5YR4/4
6　褐色土　7.5YR4/3
7　暗褐色土　7.5YR3/4
8　暗褐色土　7.5YR3/4
9　にぶい褐色土　7.5YR5/4
10　明褐色土　7.5YR5/6
11　暗褐色土　7.5YR3/4

0　1 m
(1/40)

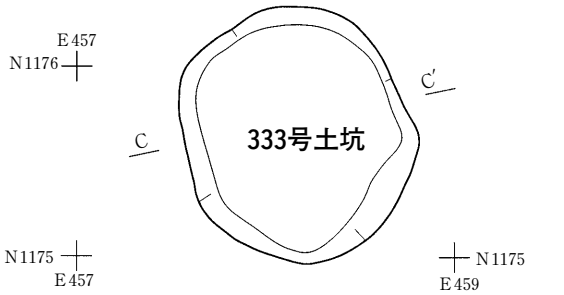
図212　土坑（39）



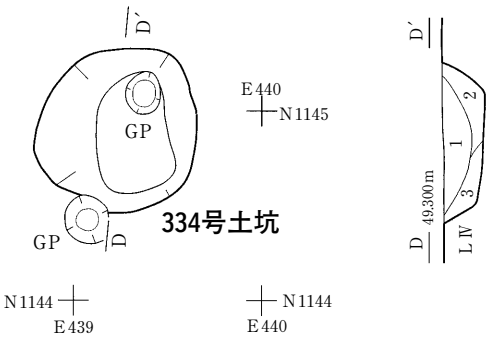
331 号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/6（LⅣ粒少量含む）
2　橙色土　7.5Y R6/6（LⅣ塊多量含む）
3　暗褐色土　7.5Y R3/4（炭化物粒含む）
4　暗褐色土　7.5Y R3/4（炭化物粒含む）
5　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒多量含む）
6　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒多量含む）



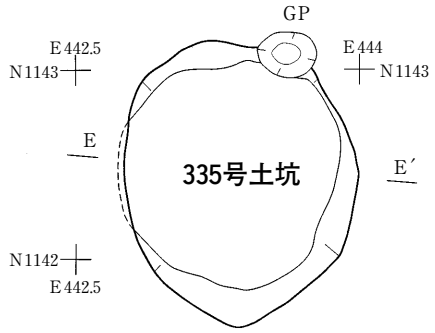
332 号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5Y R2/2



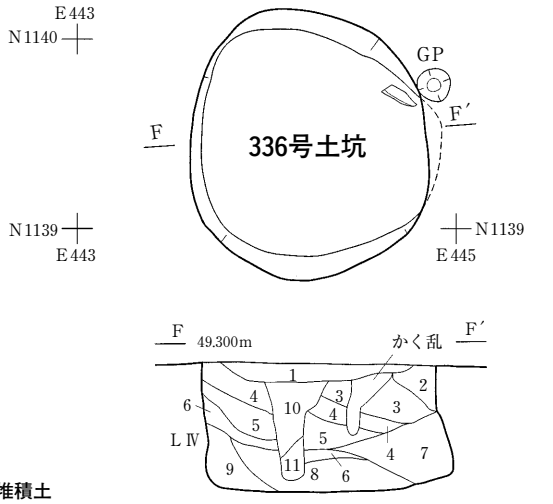
333 号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/3
2　褐色土　7.5Y R4/3
3　褐色土　7.5Y R4/4
4　暗褐色土　7.5Y R3/4（LⅣ粒・炭化物粒少量含む）



334 号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/3
2　褐色土　7.5Y R4/6（LⅣ塊少量含む）
3　暗褐色土　7.5Y R3/4



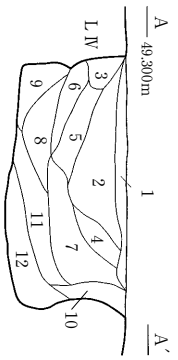
335 号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/3
2　暗褐色土　7.5Y R3/4（LⅣ粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　7.5Y R4/4



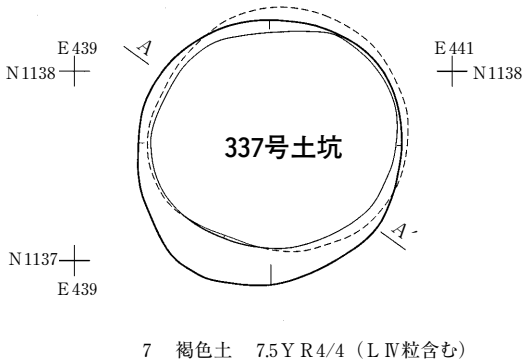
336 号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/3
2　にぶい褐色土　7.5Y R5/4
3　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒多量含む）
4　にぶい褐色土　7.5Y R5/4
5　褐色土　7.5Y R4/4
6　灰褐色土　7.5Y R4/2（炭化物粒少量含む）
7　褐色土　7.5Y R4/6
8　褐色土　7.5Y R4/6
9　褐色土　7.5Y R4/3
10　灰褐色土　7.5Y R4/2
11　暗褐色土　7.5Y R3/4

0　1 m
(1/40)

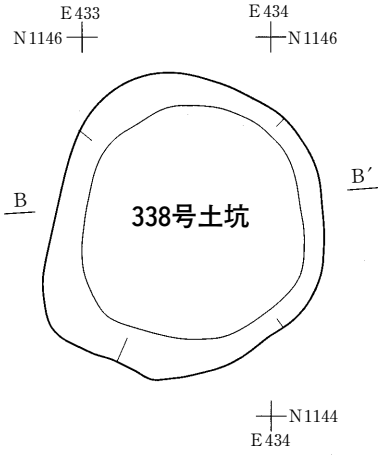
図213　土坑（40）

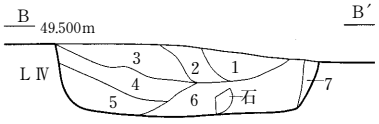


337号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ粒含む）
3　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
4　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
5　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ粒含む）
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3

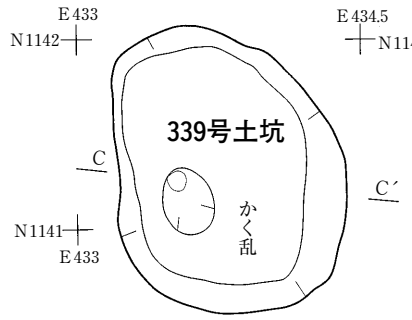


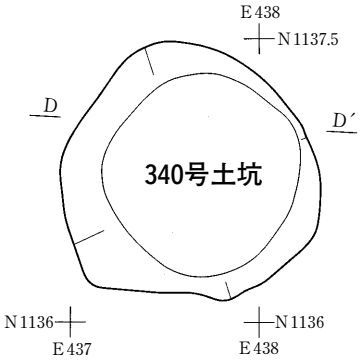
7　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ粒含む）
8　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
9　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
10　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
11　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
12　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4

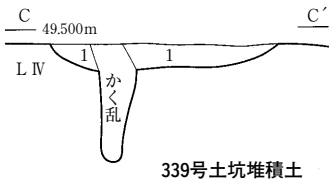




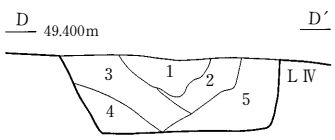
338号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
4　灰褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/2
5　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
7　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6



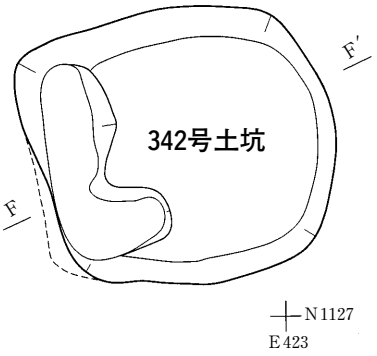


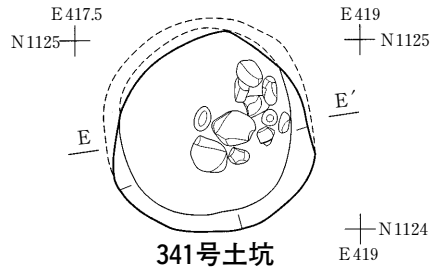


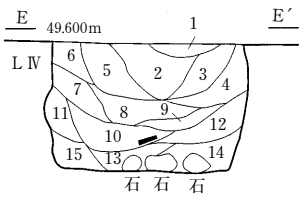
339号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4

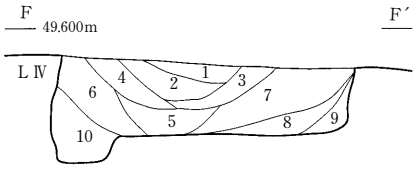


340号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3（炭化物粒含む）
4　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
5　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3









341号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/3（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
2　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3（Ｌ Ⅳ粒・炭化物粒含む）
4　灰褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/2（Ｌ Ⅳ粒含む）
5　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4（Ｌ Ⅳ粒含む）
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
7　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
8　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒含む）
9　黒褐色土　7.5Ｙ Ｒ2/2（炭化物粒多量含む）
10　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
11　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ粒少量含む）

12　灰褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/2
13　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
14　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
15　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
（炭化物粒含む）

342号土坑堆積土
1　灰褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/2
2　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒含む）
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ粒含む）
4　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
5　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ粒・塊少量含む）
7　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
8　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（炭化物粒含む）
9　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
10　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4

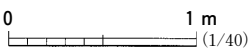
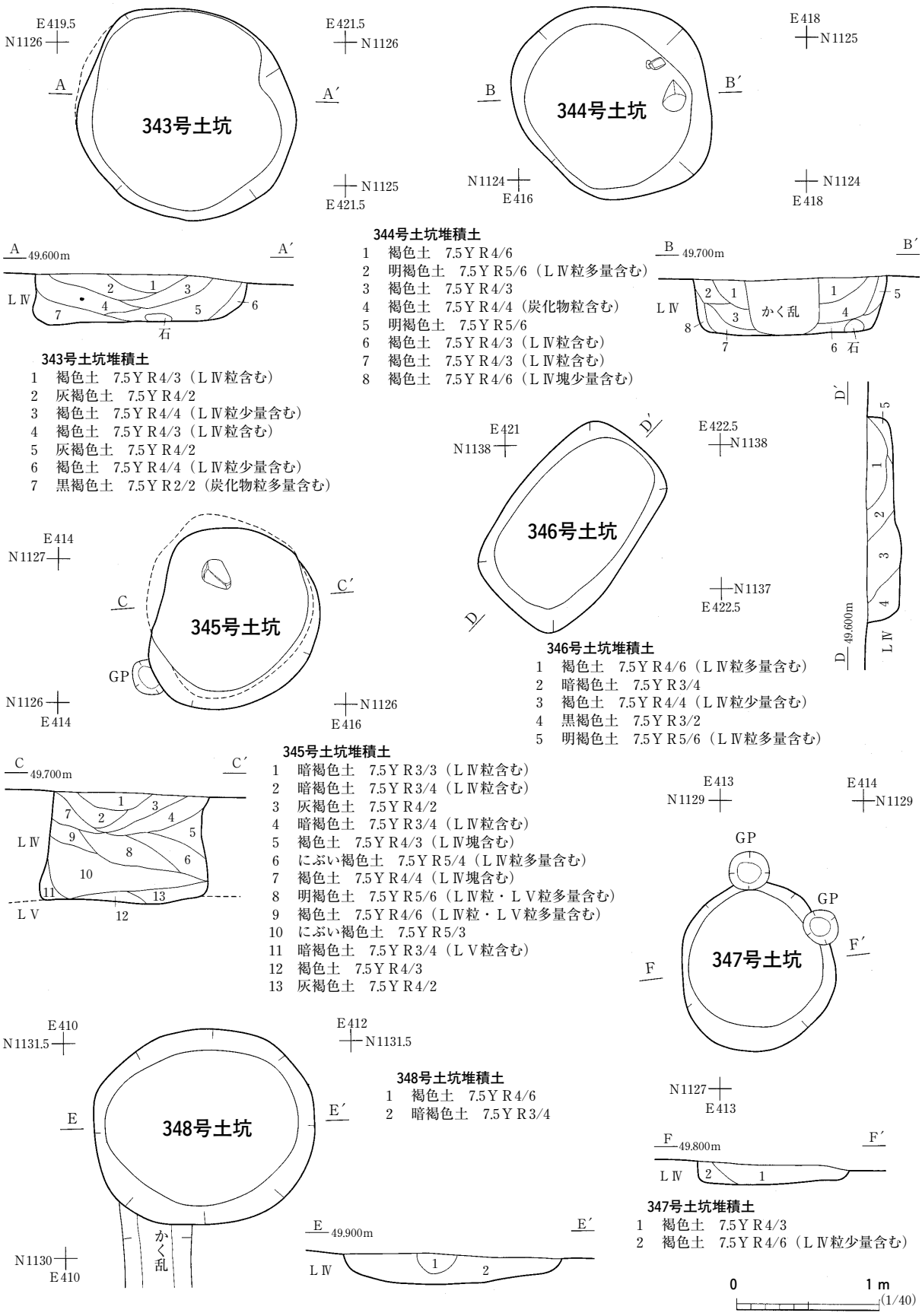


図214　土坑（41）



343号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ粒含む）
2　灰褐色土　7.5Y R4/2
3　褐色土　7.5Y R4/4（LⅣ粒少量含む）
4　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ粒含む）
5　灰褐色土　7.5Y R4/2
6　褐色土　7.5Y R4/4（LⅣ粒少量含む）
7　黒褐色土　7.5Y R2/2（炭化物粒多量含む）

344号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/6
2　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒多量含む）
3　褐色土　7.5Y R4/3
4　褐色土　7.5Y R4/4（炭化物粒含む）
5　明褐色土　7.5Y R5/6
6　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ粒含む）
7　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ粒含む）
8　褐色土　7.5Y R4/6（LⅣ塊少量含む）

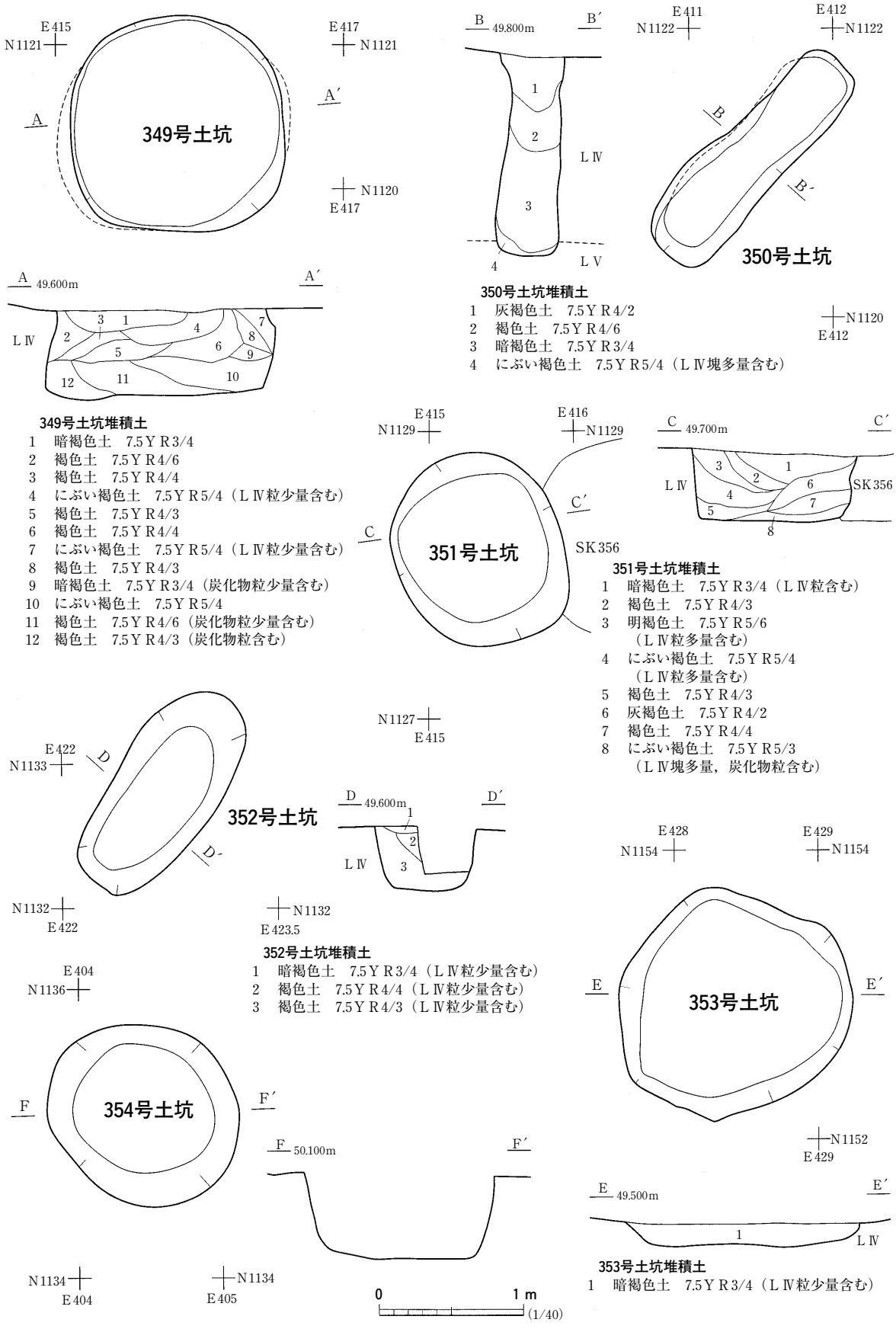
345号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5Y R3/3（LⅣ粒含む）
2　暗褐色土　7.5Y R3/4（LⅣ粒含む）
3　灰褐色土　7.5Y R4/2
4　暗褐色土　7.5Y R3/4（LⅣ粒含む）
5　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ塊含む）
6　にぶい褐色土　7.5Y R5/4（LⅣ粒多量含む）
7　褐色土　7.5Y R4/4（LⅣ塊含む）
8　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒・LⅤ粒多量含む）
9　褐色土　7.5Y R4/6（LⅣ粒・LⅤ粒多量含む）
10　にぶい褐色土　7.5Y R5/3
11　暗褐色土　7.5Y R3/4（LⅤ粒含む）
12　褐色土　7.5Y R4/3
13　灰褐色土　7.5Y R4/2

346号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/6（LⅣ粒多量含む）
2　暗褐色土　7.5Y R3/4
3　褐色土　7.5Y R4/4（LⅣ粒少量含む）
4　黒褐色土　7.5Y R3/2
5　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒多量含む）

348号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/6
2　暗褐色土　7.5Y R3/4

347号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/3
2　褐色土　7.5Y R4/6（LⅣ粒少量含む）

図215　土坑（42）



349号土坑堆積土

1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
4　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4（ＬⅣ粒少量含む）
5　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
7　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4（ＬⅣ粒少量含む）
8　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
9　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒少量含む）
10　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
11　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（炭化物粒少量含む）
12　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3（炭化物粒含む）

350号土坑堆積土

1　灰褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/2
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
3　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
4　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4（ＬⅣ塊多量含む）

351号土坑堆積土

1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
3　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6
（ＬⅣ粒多量含む）
4　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
（ＬⅣ粒多量含む）
5　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
6　灰褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/2
7　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
8　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/3
（ＬⅣ塊多量，炭化物粒含む）

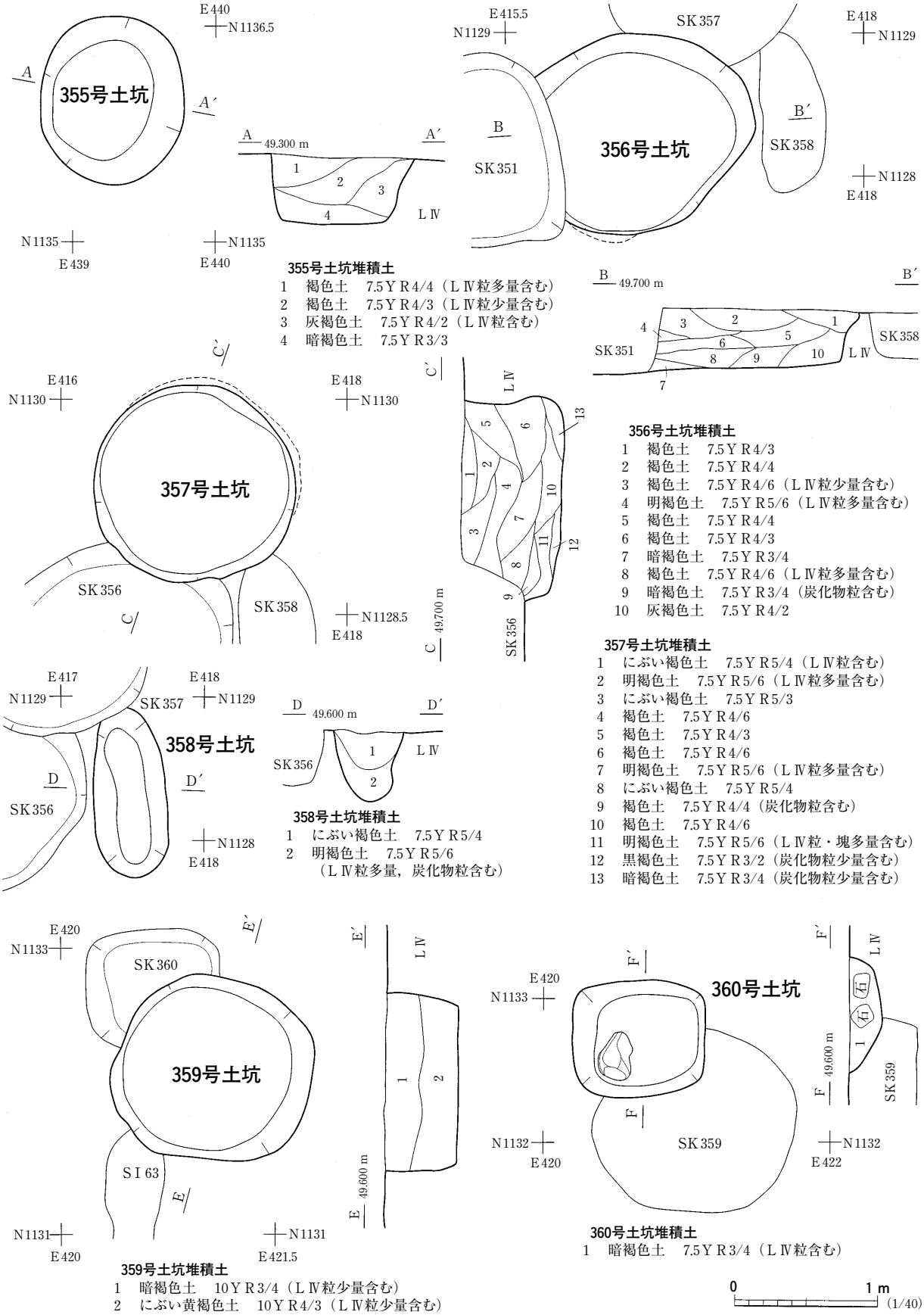
352号土坑堆積土

1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3（ＬⅣ粒少量含む）

353号土坑堆積土

1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（ＬⅣ粒少量含む）

図216　土坑（43）



355号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
3　灰褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/2（Ｌ Ⅳ粒含む）
4　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3

356号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
4　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
5　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
7　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
8　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
9　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒含む）
10　灰褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/2

357号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4（Ｌ Ⅳ粒含む）
2　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
3　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/3
4　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
5　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
7　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒多量含む）
8　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
9　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（炭化物粒含む）
10　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
11　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6（Ｌ Ⅳ粒・塊多量含む）
12　黒褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/2（炭化物粒少量含む）
13　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒少量含む）

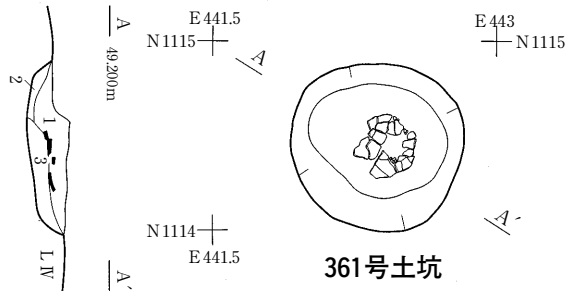
358号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/4
2　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6
（Ｌ Ⅳ粒多量，炭化物粒含む）

359号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（Ｌ Ⅳ粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/3（Ｌ Ⅳ粒少量含む）

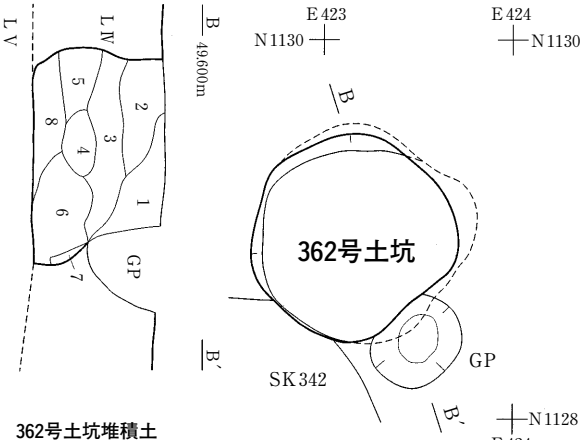
360号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（Ｌ Ⅳ粒含む）

0　1 m　(1/40)

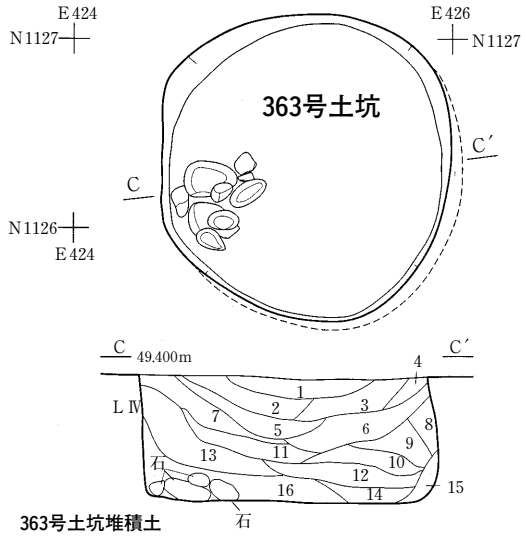
図217　土坑（44）



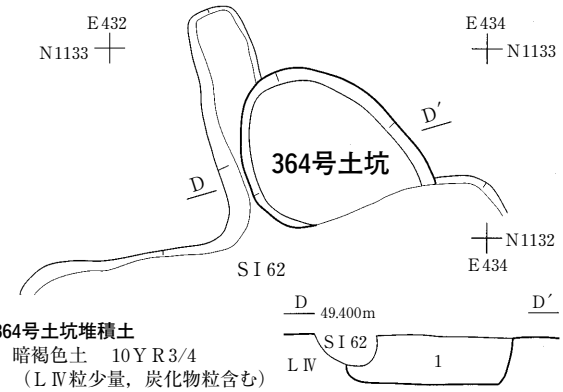
361号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）



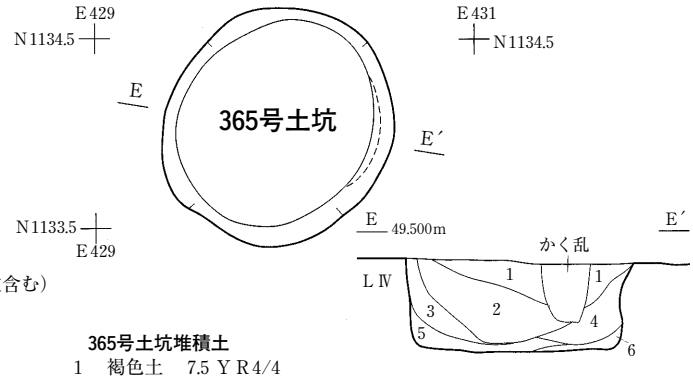
362号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒多量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
7　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
8　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）



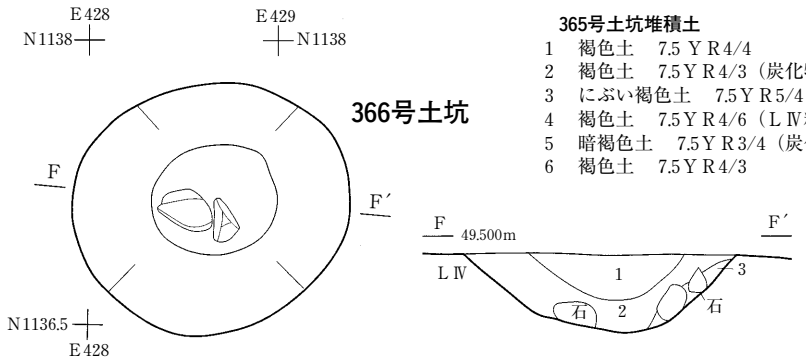
363号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
2　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/6
4　褐色土　7.5ＹＲ4/4
5　褐色土　7.5ＹＲ4/3
6　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ粒少量含む）
7　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量含む）
8　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（ＬⅣ塊含む）
9　褐色土　7.5ＹＲ4/4
10　褐色土　7.5ＹＲ4/6
11　褐色土　7.5ＹＲ4/4
12　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒多量含む）
13　褐色土　7.5ＹＲ4/6
14　褐色土　7.5ＹＲ4/4
15　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
16　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）



364号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）



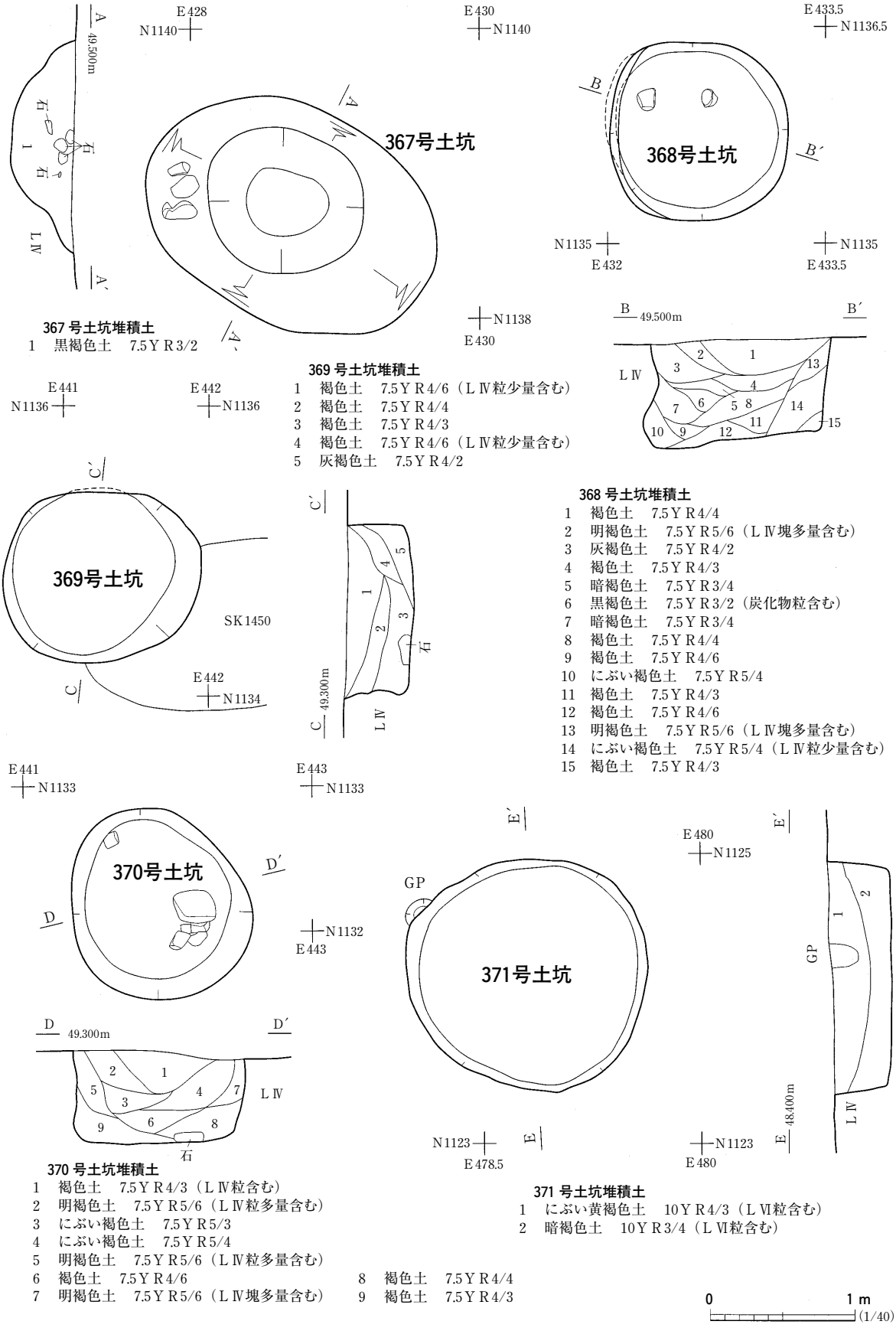
365号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3（炭化物粒含む）
3　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4（ＬⅣ塊・粒少量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒少量含む）
6　褐色土　7.5ＹＲ4/3



366号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2
2　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2
3　明褐色土　7.5ＹＲ5/6
（ＬⅣ塊多量含む）

0　1 m
(1/40)

図218　土坑（45）



367 号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5Y R3/2

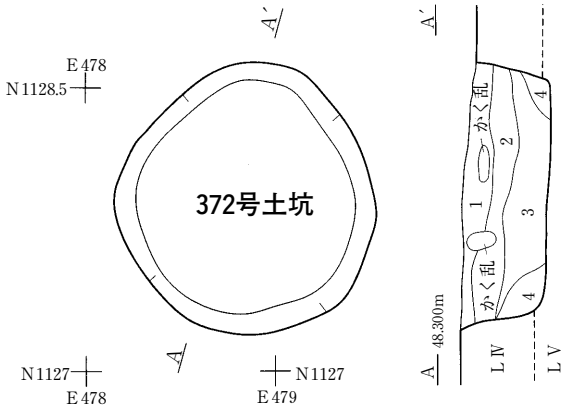
369 号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/6（LⅣ粒少量含む）
2　褐色土　7.5Y R4/4
3　褐色土　7.5Y R4/3
4　褐色土　7.5Y R4/6（LⅣ粒少量含む）
5　灰褐色土　7.5Y R4/2

368 号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/4
2　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ塊多量含む）
3　灰褐色土　7.5Y R4/2
4　褐色土　7.5Y R4/3
5　暗褐色土　7.5Y R3/4
6　黒褐色土　7.5Y R3/2（炭化物粒含む）
7　暗褐色土　7.5Y R3/4
8　褐色土　7.5Y R4/4
9　褐色土　7.5Y R4/6
10　にぶい褐色土　7.5Y R5/4
11　褐色土　7.5Y R4/3
12　褐色土　7.5Y R4/6
13　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ塊多量含む）
14　にぶい褐色土　7.5Y R5/4（LⅣ粒少量含む）
15　褐色土　7.5Y R4/3

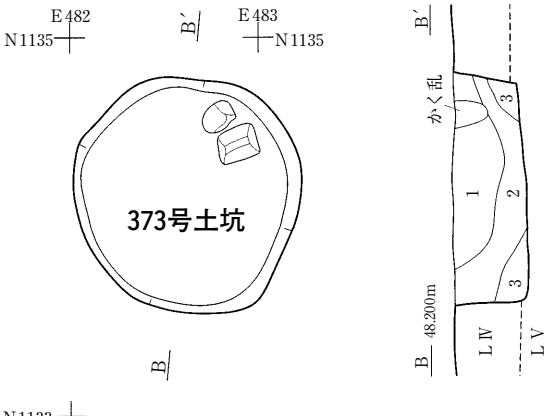
370 号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ粒含む）
2　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒多量含む）
3　にぶい褐色土　7.5Y R5/3
4　にぶい褐色土　7.5Y R5/4
5　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ粒多量含む）
6　褐色土　7.5Y R4/6
7　明褐色土　7.5Y R5/6（LⅣ塊多量含む）
8　褐色土　7.5Y R4/4
9　褐色土　7.5Y R4/3

371 号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10Y R4/3（LⅥ粒含む）
2　暗褐色土　10Y R3/4（LⅥ粒含む）

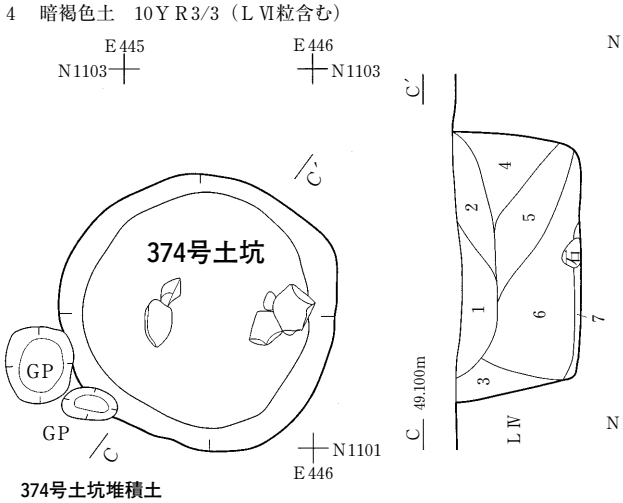
図219　土坑（46）



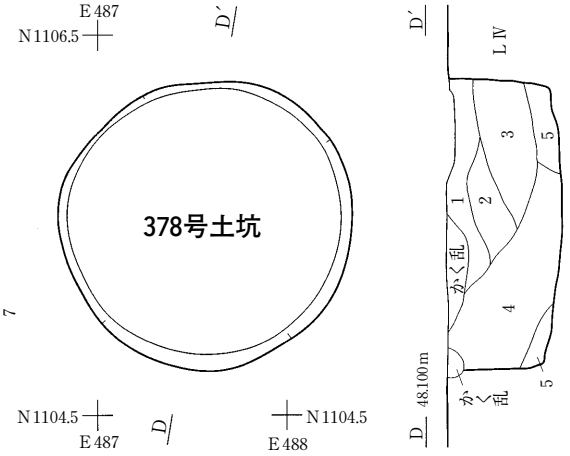
372号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒少量，炭化物粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅥ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅥ粒含む）



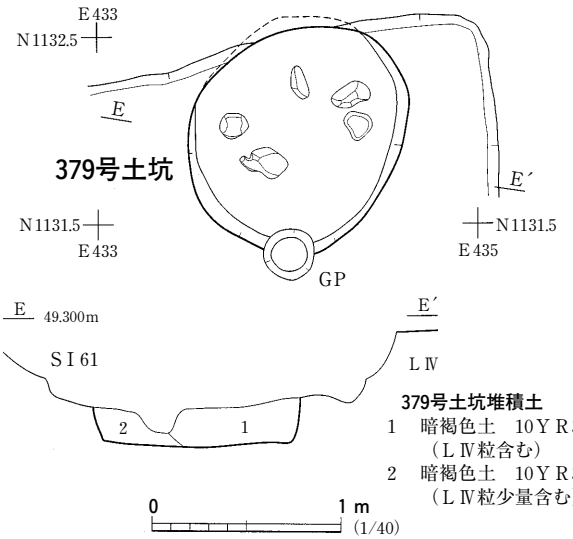
373号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3



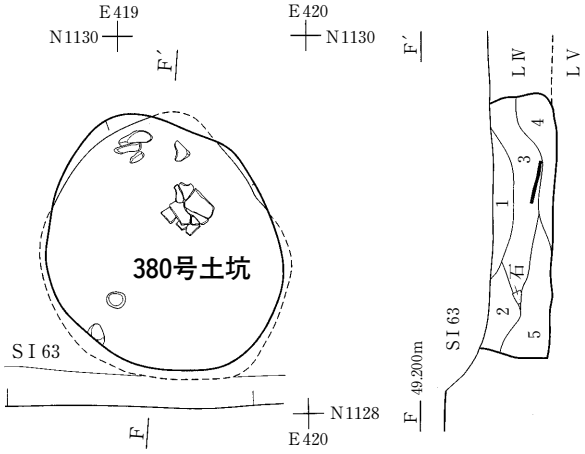
374号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
2　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ塊少量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/3
5　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2
6　褐色土　7.5ＹＲ4/4
7　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4



378号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
5　黒褐色土　10ＹＲ2/2（ＬⅣ粒少量含む）



379号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量含む）



380号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）

図220　土坑（47）

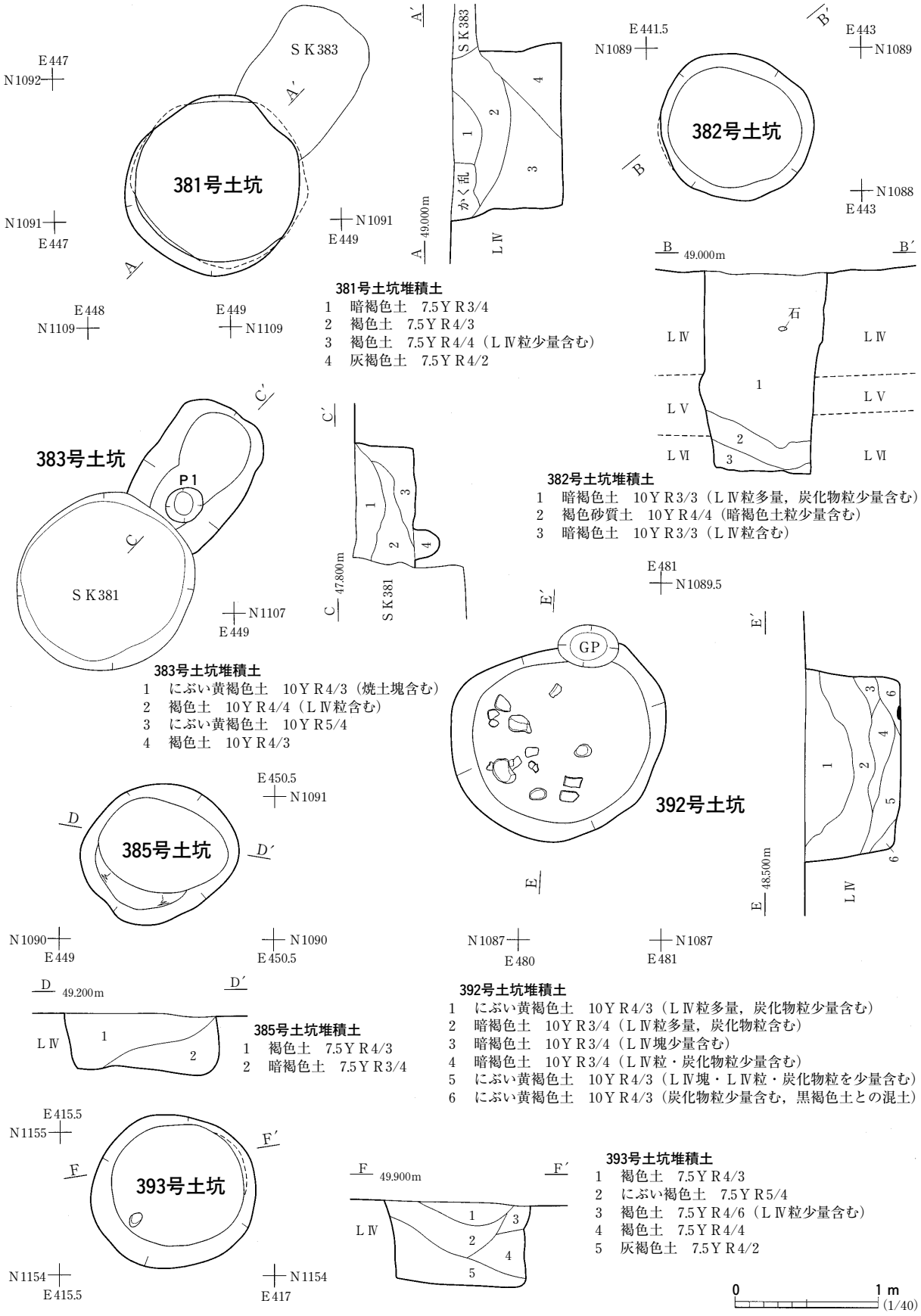
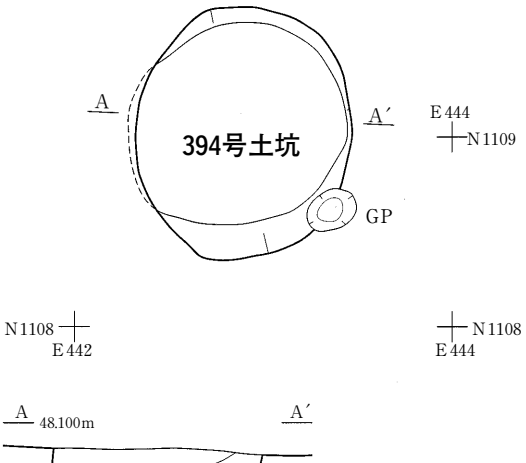
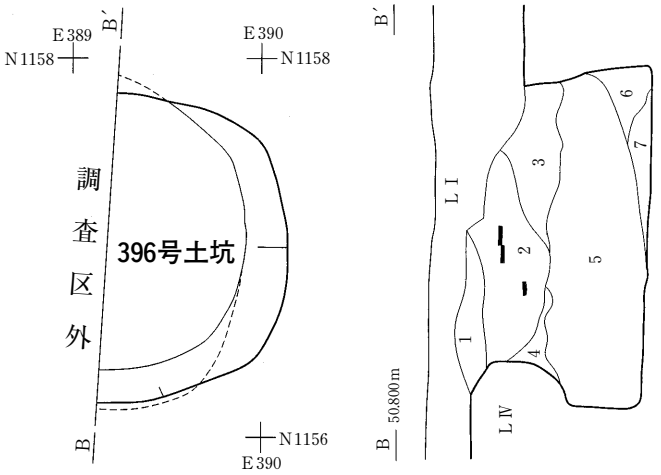

381号土坑
SK383
A
A′
E447
N1092
N1091
E447
N1091
E449
E448
N1109
E449
N1109
A
A′
SK383
かく乱
LⅣ
49.000m
1
2
3
4
381号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5YR3/4
2　褐色土　7.5YR4/3
3　褐色土　7.5YR4/4（LⅣ粒少量含む）
4　灰褐色土　7.5YR4/2
382号土坑
B
B′
E441.5
N1089
E443
N1089
N1088
E443
B
B′
49.000m
LⅣ
LⅤ
LⅥ
石
1
2
3
382号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
2　褐色砂質土　10YR4/4（暗褐色土粒少量含む）
3　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒含む）
383号土坑
P1
C
C′
SK381
N1107
E449
C
C′
47.800m
SK381
1
2
3
4
383号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（焼土塊含む）
2　褐色土　10YR4/4（LⅣ粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10YR5/4
4　褐色土　10YR4/3
E481
N1089.5
E′
GP
392号土坑
E
E′
48.500m
LⅣ
1
2
3
4
5
6
N1087
E480
N1087
E481
392号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒多量，炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ塊少量含む）
4　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒・炭化物粒少量含む）
5　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ塊・LⅣ粒・炭化物粒を少量含む）
6　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物粒少量含む，黒褐色土との混土）
E450.5
N1091
385号土坑
D
D′
N1090
E449
N1090
E450.5
D
D′
49.200m
LⅣ
1
2
385号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/3
2　暗褐色土　7.5YR3/4
E415.5
N1155
393号土坑
F
F′
N1154
E415.5
N1154
E417
F
F′
49.900m
LⅣ
1
2
3
4
5
393号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/3
2　にぶい褐色土　7.5YR5/4
3　褐色土　7.5YR4/6（LⅣ粒少量含む）
4　褐色土　7.5YR4/4
5　灰褐色土　7.5YR4/2
0
1 m
(1/40)

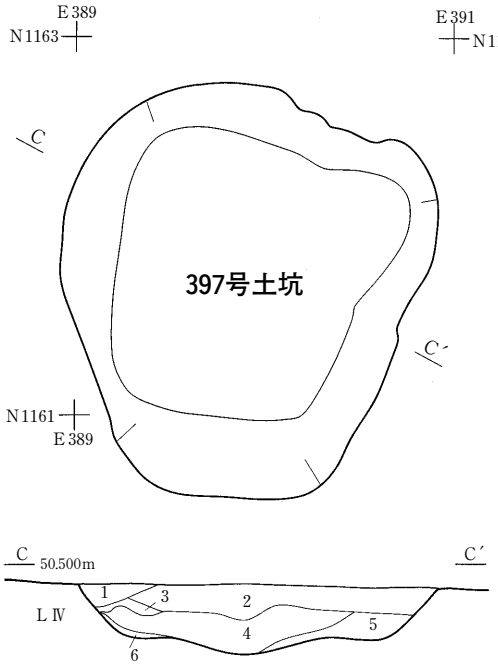
図221　土坑（48）



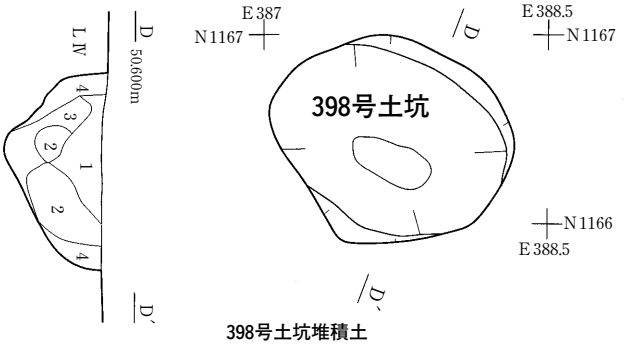
394号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
4　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3



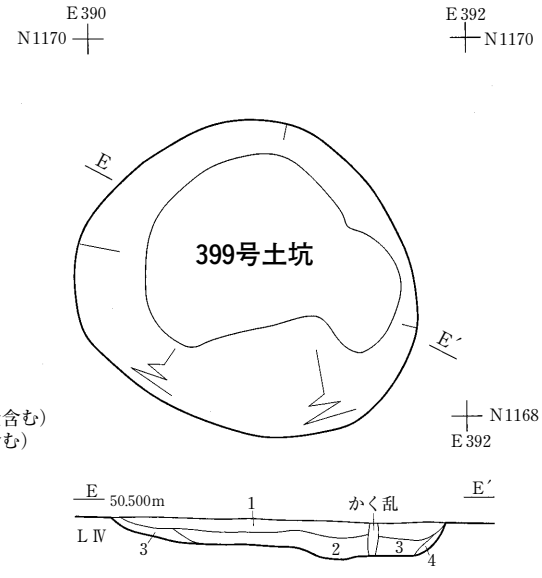
396号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3（ＬⅣ塊・炭化物粒少量含む）
2　黒褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/2（炭化物粒・焼土粒少量，ＬⅣ粒含む）
3　黒褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（ＬⅣ塊少量，ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3（ＬⅣ塊多量含む）
5　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（黒色土粒・ＬＶ粒少量含む）
6　褐色粘質土　7.5Ｙ Ｒ4/3
7　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（黒褐色土塊少量含む）



397号土坑堆積土
1　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（橙色土粒多量含む）
4　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒・黒褐色土粒少量，ＬⅣ粒含む）
5　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4
6　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4



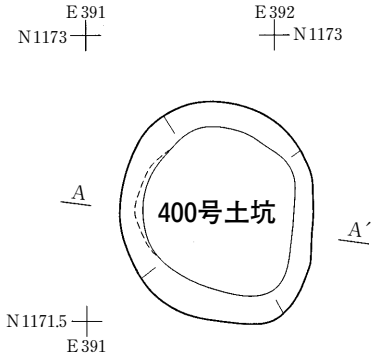
398号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3（ＬⅣ粒を含む）
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（黒褐色土粒含む）
3　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3（ＬⅣ粒含む）
4　褐色粘質土　7.5Ｙ Ｒ4/4

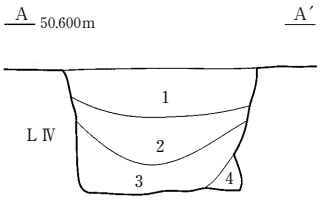


399号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（炭化粒・橙色土粒多量含む）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（ＬⅣ・黒褐色土少量含む）
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6
4　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6

0　1 m
(1/40)

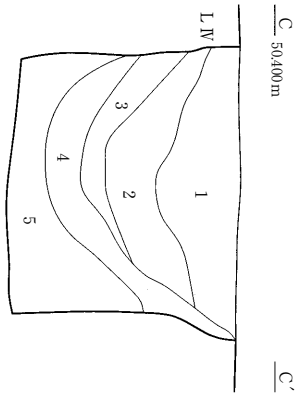
図222　土坑（49）

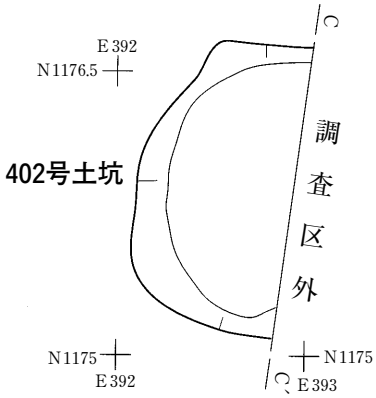




400号土坑堆積土

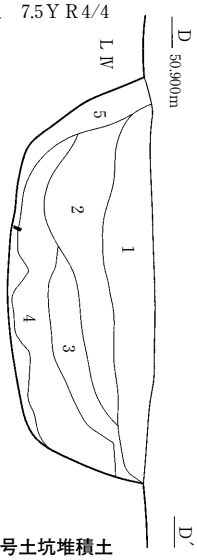
1　暗褐色土　7.5Y R3/3（黒褐色土塊少量，LⅣ粒含む）
2　暗褐色土　7.5Y R3/3（LⅣ粒含む）
3　黒褐色土　7.5Y R3/2（LⅣ粒含む）
4　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ塊多量含む）

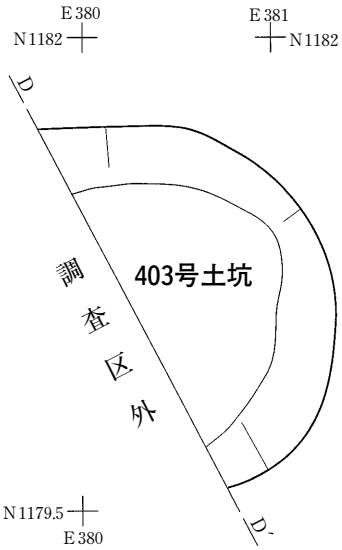




402号土坑堆積土

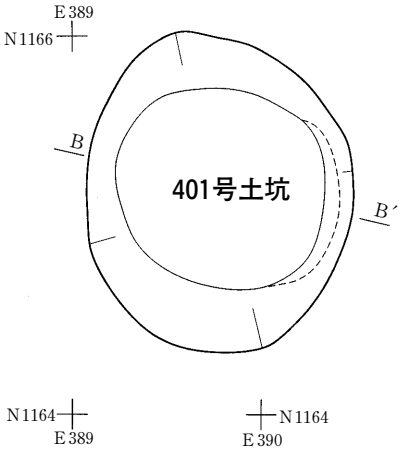
1　暗褐色土　7.5Y R3/3（炭化物粒・LⅤ粒多量，明褐色土粒含む）
2　黒褐色土　7.5Y R3/2（LⅤ粒少量，明褐色土粒含む）
3　褐色土　7.5Y R4/4（黒褐色土塊多量含む）
4　褐色土　7.5Y R4/4（黒褐色土塊少量含む）
5　褐色粘質土　7.5Y R4/4

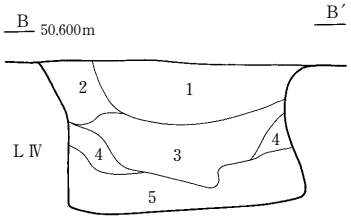




403号土坑堆積土

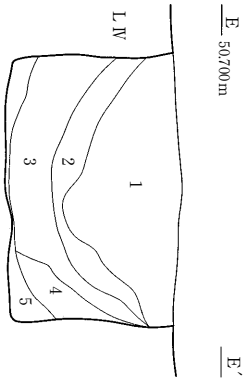
1　暗褐色土　7.5Y R3/3（炭化物粒少量，LⅣ粒含む）
2　黒褐色土　7.5Y R3/2（焼土粒・炭化物粒少量，LⅣ粒含む）
3　黒褐色土　7.5Y R3/2（LⅣ塊・炭化物粒少量含む）
4　暗褐色土　7.5Y R3/3（炭化物粒・焼土粒少量，LⅣ塊含む）
5　褐色粘質土　7.5Y R4/6（黒褐色土塊含む）

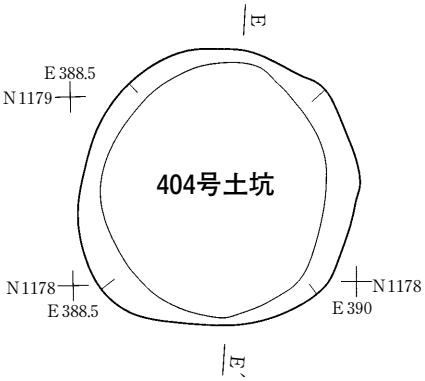




401号土坑堆積土

1　暗褐色土　7.5Y R3/3（LⅣ塊・粒含む）
2　褐色土　7.5Y R4/3（黒褐色土塊含む）
3　褐色土　7.5Y R4/4（LⅣ塊・粒含む）
4　黒褐色土　7.5Y R2/2（LⅣ粒含む）
5　黒褐色土　7.5Y R3/2（LⅣ粒含む）

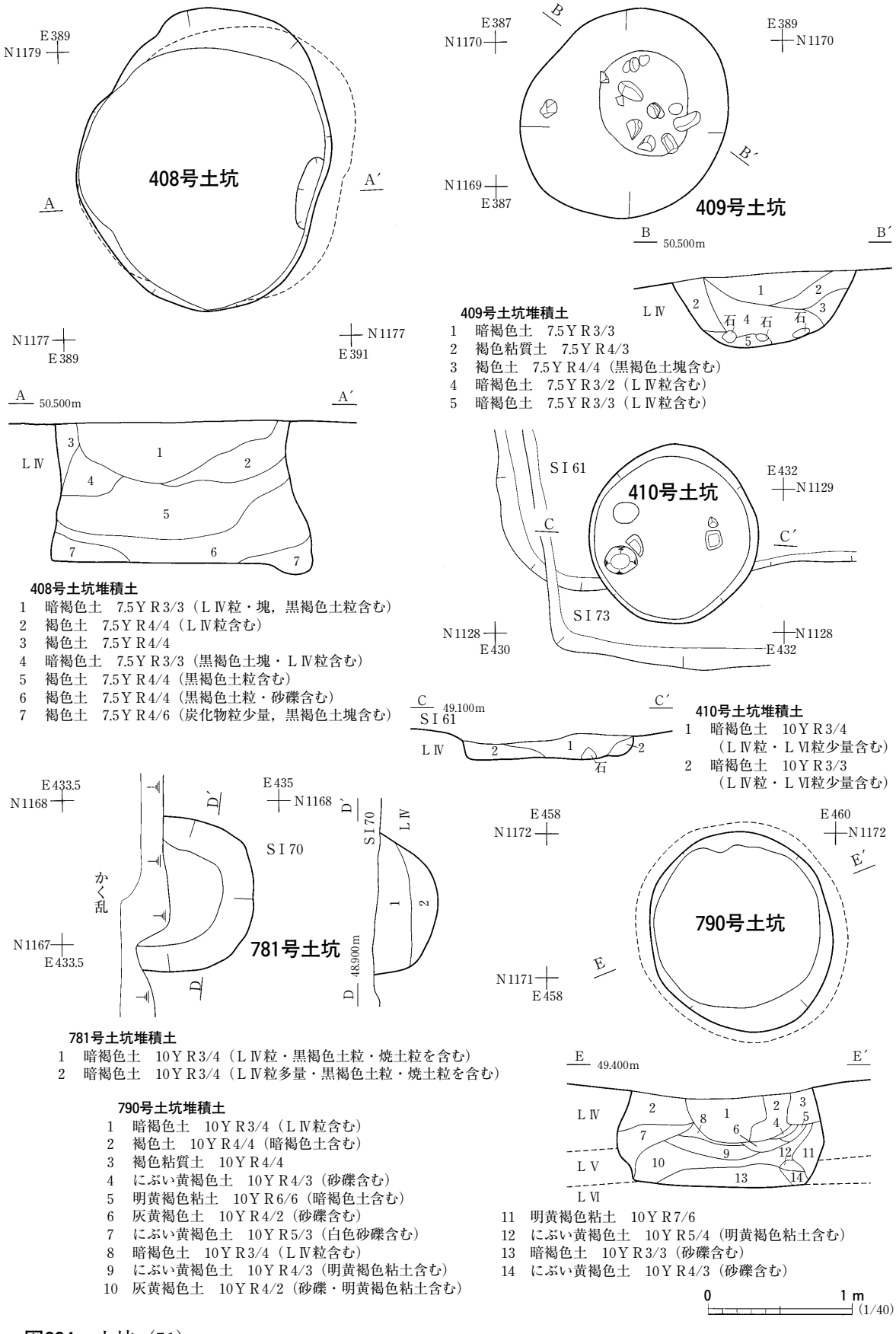




404号土坑堆積土

1　暗褐色土　7.5Y R3/3（黒褐色土塊少量，LⅣ粒含む）
2　暗褐色土　7.5Y R3/3（LⅣ塊多量，黒褐色土塊少量，LⅣ粒含む）
3　褐色土　7.5Y R4/3（LⅣ粒含む）
4　褐色土　7.5Y R4/3（黒褐色土塊・LⅣ粒含む）
5　黒褐色土　7.5Y R3/2（LⅣ粒・塊含む）

図223　土坑（50）



408号土坑堆積土

1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3（ＬⅣ粒・塊，黒褐色土粒含む）
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
4　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3（黒褐色土塊・ＬⅣ粒含む）
5　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（黒褐色土粒含む）
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（黒褐色土粒・砂礫含む）
7　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（炭化物粒少量，黒褐色土塊含む）

409号土坑堆積土

1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3
2　褐色粘質土　7.5Ｙ Ｒ4/3
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（黒褐色土塊含む）
4　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/2（ＬⅣ粒含む）
5　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3（ＬⅣ粒含む）

410号土坑堆積土

1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4
（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒少量含む）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3
（ＬⅣ粒・ＬⅥ粒少量含む）

781号土坑堆積土

1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（ＬⅣ粒・黒褐色土粒・焼土粒を含む）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（ＬⅣ粒多量・黒褐色土粒・焼土粒を含む）

790号土坑堆積土

1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4（暗褐色土含む）
3　褐色粘質土　10Ｙ Ｒ4/4
4　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/3（砂礫含む）
5　明黄褐色粘土　10Ｙ Ｒ6/6（暗褐色土含む）
6　灰黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/2（砂礫含む）
7　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ5/3（白色砂礫含む）
8　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（ＬⅣ粒含む）
9　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/3（明黄褐色粘土含む）
10　灰黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/2（砂礫・明黄褐色粘土含む）
11　明黄褐色粘土　10Ｙ Ｒ7/6
12　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ5/4（明黄褐色粘土含む）
13　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（砂礫含む）
14　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/3（砂礫含む）

0　1 m　(1/40)

図224　土坑（51）

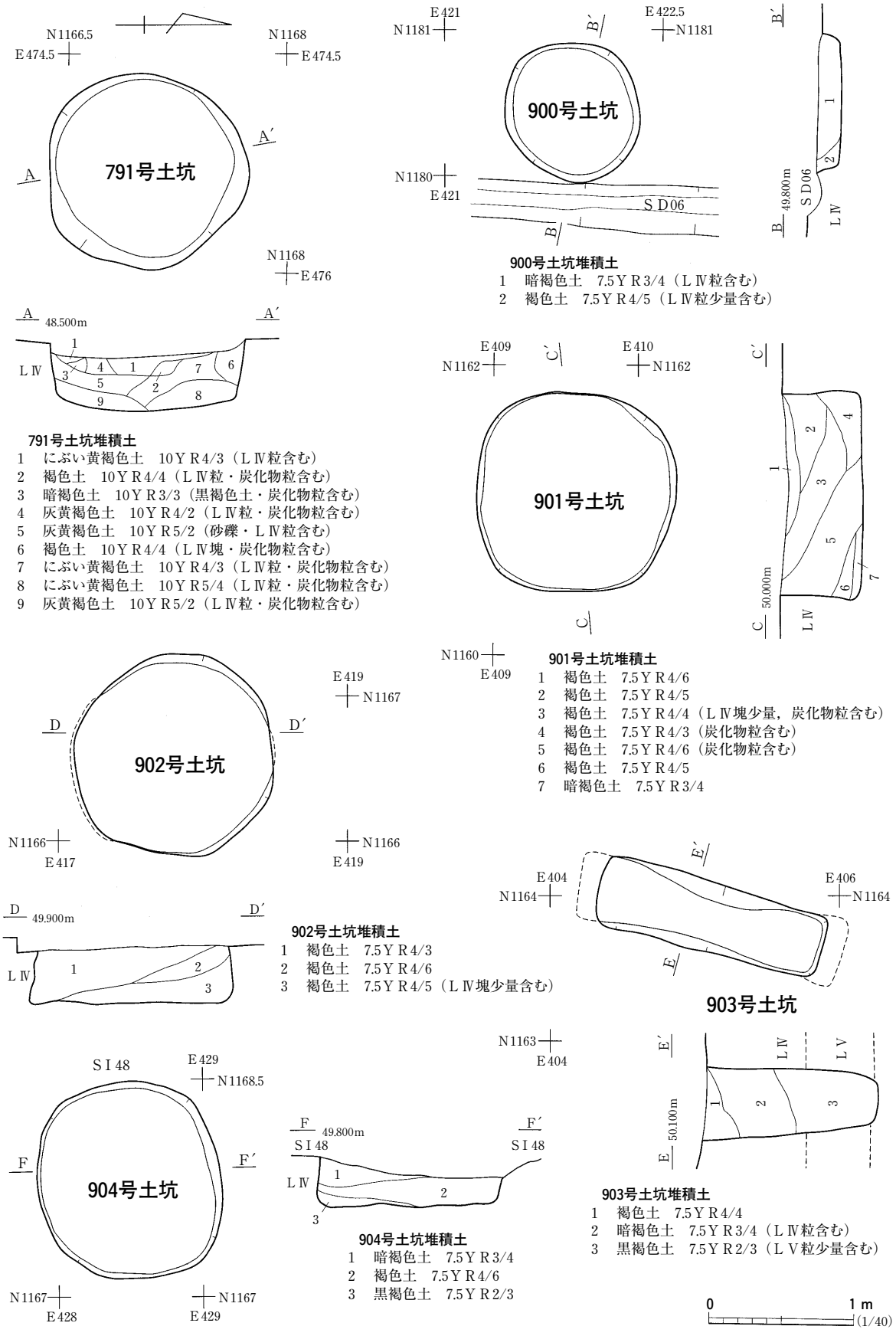
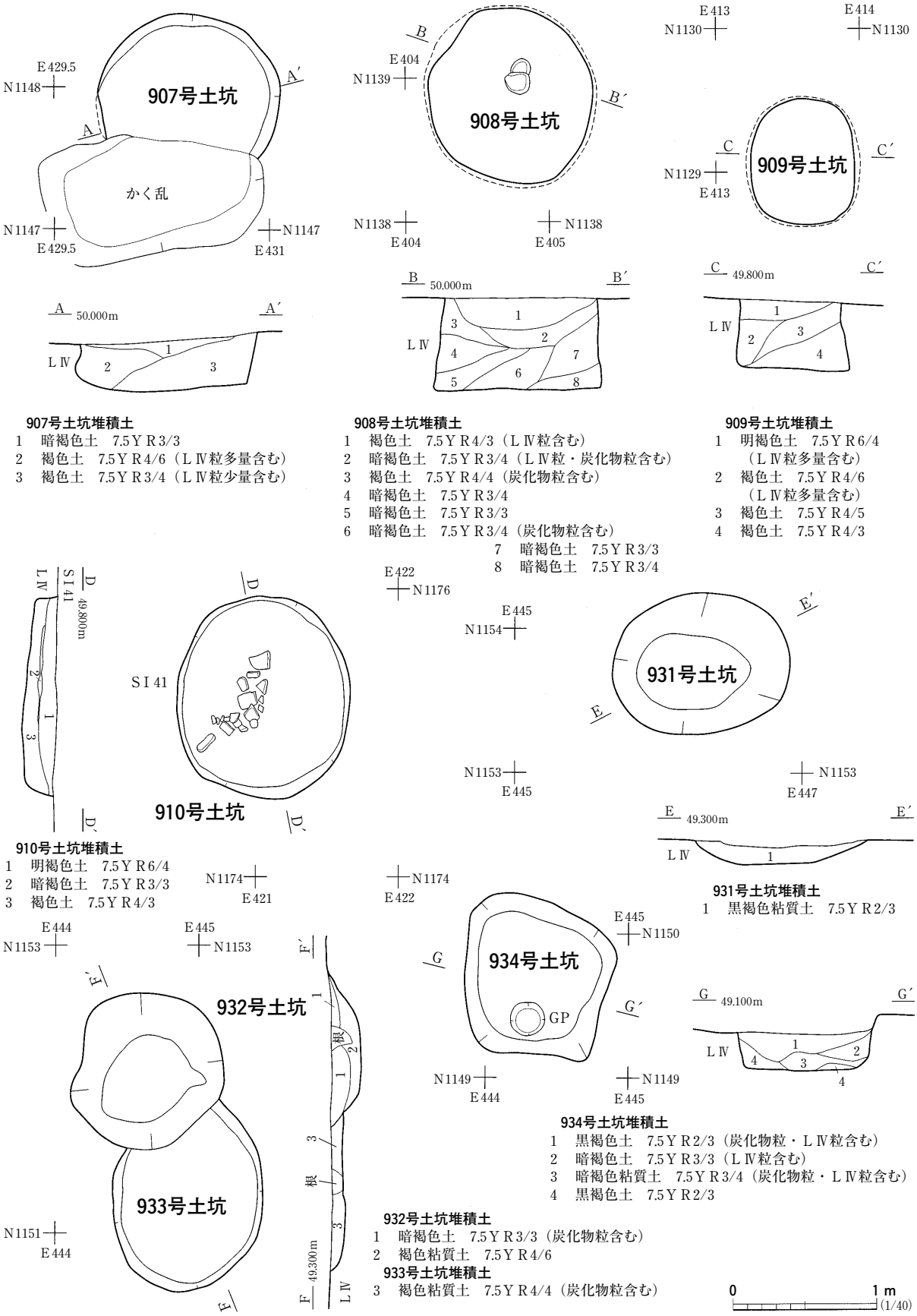

N1166.5
E474.5
N1168
E474.5
791号土坑
A
A′
N1168
E476
A
48.500m
A′
LⅣ
791号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ粒含む）
2　褐色土　10YR4/4（LⅣ粒・炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10YR3/3（黒褐色土・炭化物粒含む）
4　灰黄褐色土　10YR4/2（LⅣ粒・炭化物粒含む）
5　灰黄褐色土　10YR5/2（砂礫・LⅣ粒含む）
6　褐色土　10YR4/4（LⅣ塊・炭化物粒含む）
7　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ粒・炭化物粒含む）
8　にぶい黄褐色土　10YR5/4（LⅣ粒・炭化物粒含む）
9　灰黄褐色土　10YR5/2（LⅣ粒・炭化物粒含む）
E421
N1181
B′
E422.5
N1181
900号土坑
N1180
E421
SD06
B
B′
49.800m
SD06
LⅣ
900号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5YR3/4（LⅣ粒含む）
2　褐色土　7.5YR4/5（LⅣ粒少量含む）
E409
N1162
C′
E410
N1162
901号土坑
C
C′
50.000m
C
LⅣ
N1160
E409
901号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/6
2　褐色土　7.5YR4/5
3　褐色土　7.5YR4/4（LⅣ塊少量，炭化物粒含む）
4　褐色土　7.5YR4/3（炭化物粒含む）
5　褐色土　7.5YR4/6（炭化物粒含む）
6　褐色土　7.5YR4/5
7　暗褐色土　7.5YR3/4
E419
N1167
D
D′
902号土坑
N1166
E417
N1166
E419
D
49.900m
D′
LⅣ
902号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/3
2　褐色土　7.5YR4/6
3　褐色土　7.5YR4/5（LⅣ塊少量含む）
E404
N1164
E′
E406
N1164
E
903号土坑
SI48
E429
N1168.5
F
F′
904号土坑
N1167
E428
N1167
E429
F
49.800m
F′
SI48
SI48
LⅣ
904号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5YR3/4
2　褐色土　7.5YR4/6
3　黒褐色土　7.5YR2/3
N1163
E404
E′
LⅣ
LⅤ
E
50.100m
903号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/4
2　暗褐色土　7.5YR3/4（LⅣ粒含む）
3　黒褐色土　7.5YR2/3（LⅤ粒少量含む）
0
1 m
(1/40)

図225　土坑（52）



907号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6（ＬⅣ粒多量含む）
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（ＬⅣ粒少量含む）

908号土坑堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3（ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4（炭化物粒含む）
4　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
5　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3
6　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒含む）
7　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3
8　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4

909号土坑堆積土
1　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ6/4
（ＬⅣ粒多量含む）
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
（ＬⅣ粒多量含む）
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/5
4　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3

910号土坑堆積土
1　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ6/4
2　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3
3　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3

931号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　7.5Ｙ Ｒ2/3

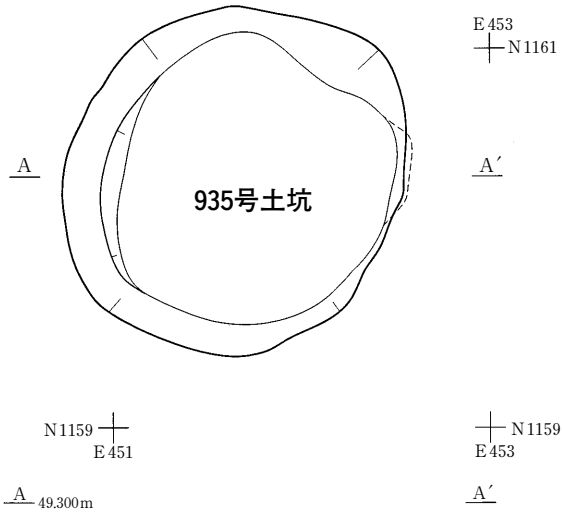
934号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5Ｙ Ｒ2/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3（ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色粘質土　7.5Ｙ Ｒ3/4（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
4　黒褐色土　7.5Ｙ Ｒ2/3

932号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/3（炭化物粒含む）
2　褐色粘質土　7.5Ｙ Ｒ4/6

933号土坑堆積土
3　褐色粘質土　7.5Ｙ Ｒ4/4（炭化物粒含む）

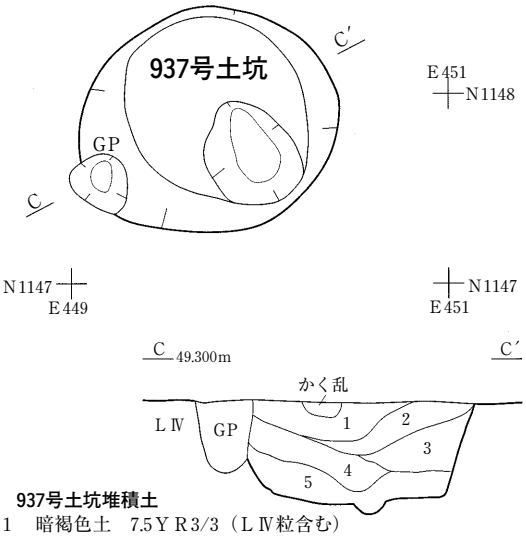
0　1 m
(1/40)

図226　土坑（53）



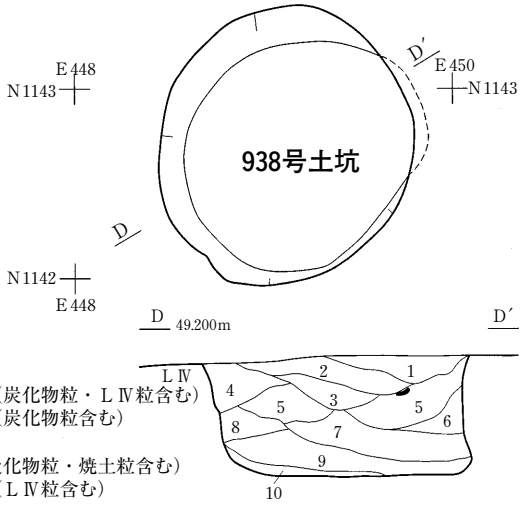
935号土坑堆積土

1　黒褐色土　7.5YR2/3（炭化物粒・焼土粒・LⅣ粒含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/2（LⅣ塊含む）
3　暗褐色粘質土　7.5YR3/4
4　褐色土　7.5YR4/6
5　褐色土　7.5YR4/4（炭化物粒含む）
6　褐色土　7.5YR4/6



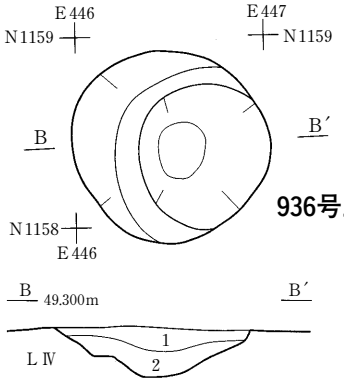
937号土坑堆積土

1　暗褐色土　7.5YR3/3（LⅣ粒含む）
2　暗褐色土　7.5YR3/4（炭化物粒含む）
3　褐色土　7.5YR4/4（LⅣ塊含む）
4　暗褐色粘質土　7.5YR3/4（LⅣ塊含む）
5　黒褐色土　7.5YR3/2（炭化物粒含む）



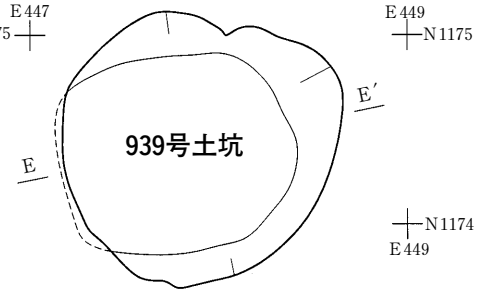
938号土坑堆積土

1　暗褐色土　7.5YR3/4（炭化物粒・LⅣ粒含む）
2　暗褐色土　7.5YR3/3（炭化物粒含む）
3　暗褐色土　7.5YR3/4
4　褐色土　7.5YR4/4（炭化物粒・焼土粒含む）
5　暗褐色土　7.5YR3/4（LⅣ粒含む）
6　黒褐色土　7.5YR3/2
7　暗褐色土　7.5YR3/4（炭化物粒含む）
8　暗褐色土　7.5YR3/3
9　褐色土　7.5YR4/4
10　褐色粘質土　7.5YR4/6



936号土坑堆積土

1　黒褐色粘質土　7.5YR2/3（炭化物粒・焼土粒含む）
2　黒褐色土　7.5YR2/2（LⅣ粒含む）



939号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR2/3（炭化物少量，LⅣ粒含む）
2　黒褐色土　10YR2/3（炭化物粒・LⅣ粒少量含む）
3　褐色土　10YR3/4（LⅣ塊多量含む）
4　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒少量，炭化物粒含む）
5　褐色土　10YR4/6（LⅣ塊多量含む）
6　黒褐色土　10YR2/3（炭化物少量，LⅣ粒含む）
7　褐色土　10YR3/4（炭化物・LⅣ塊含む）
8　黒褐色土　10YR2/3（LⅣ粒少量，炭化物粒含む）
9　暗褐色土　10YR3/3（炭化物・LⅣ塊含む）
10　黒褐色土　10YR2/3（炭化物少量，LⅣ粒含む）
11　黒褐色土　10YR2/3（炭化物・LⅣ粒少量含む）
12　褐色土　10YR4/6（LⅣ塊多量，炭化物粒含む）
13　黒褐色土　10YR2/3（炭化物少量，LⅣ粒含む）

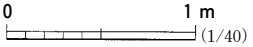
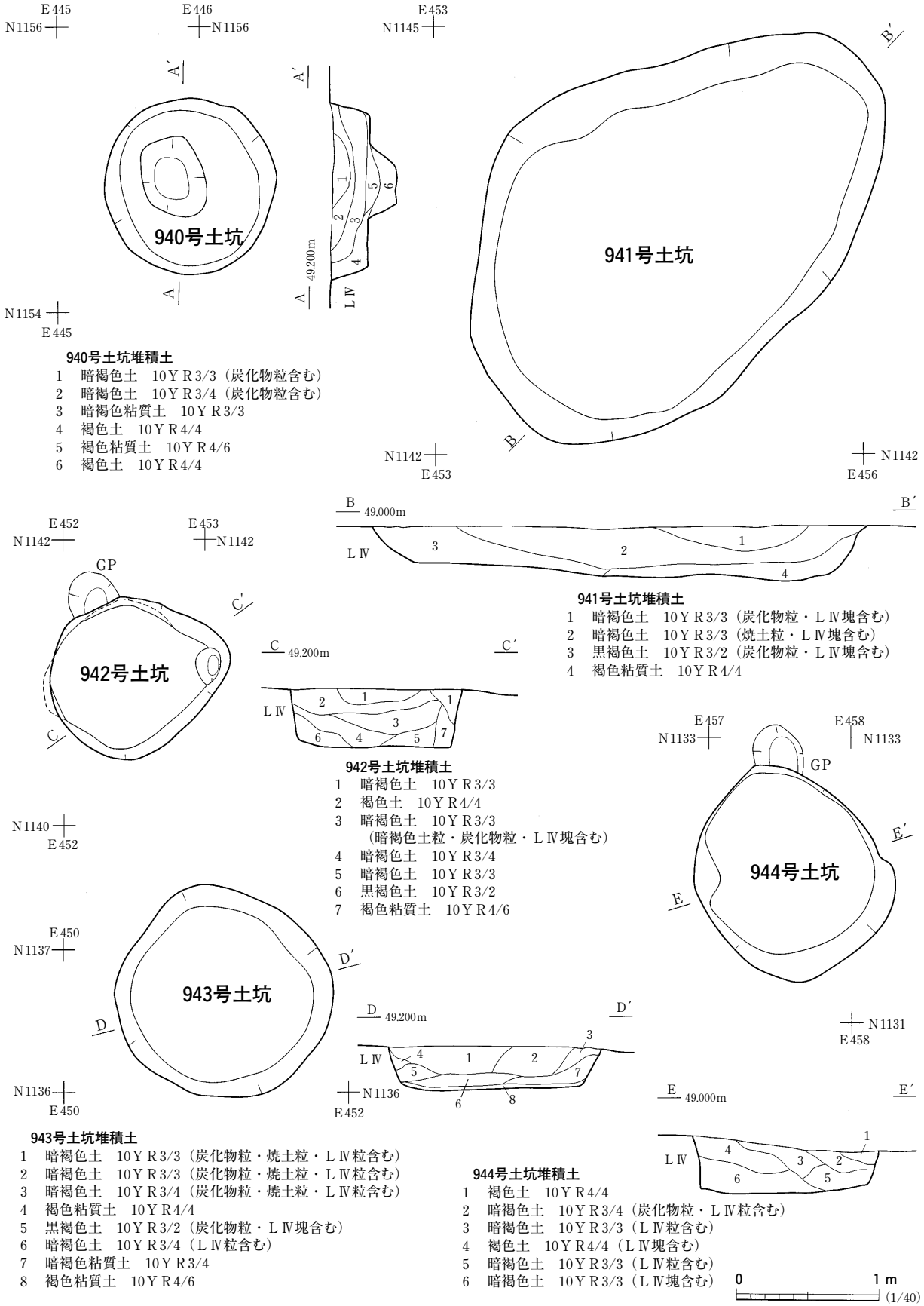


図227　土坑（54）



940号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
3　暗褐色粘質土　10ＹＲ3/3
4　褐色土　10ＹＲ4/4
5　褐色粘質土　10ＹＲ4/6
6　褐色土　10ＹＲ4/4

941号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（焼土粒・ＬⅣ塊含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
4　褐色粘質土　10ＹＲ4/4

942号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
2　褐色土　10ＹＲ4/4
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3
　（暗褐色土粒・炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3
6　黒褐色土　10ＹＲ3/2
7　褐色粘質土　10ＹＲ4/6

943号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・焼土粒・ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・焼土粒・ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・焼土粒・ＬⅣ粒含む）
4　褐色粘質土　10ＹＲ4/4
5　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
7　暗褐色粘質土　10ＹＲ3/4
8　褐色粘質土　10ＹＲ4/6

944号土坑堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/4
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ塊含む）

0　1 m
(1/40)

図228　土坑（55）

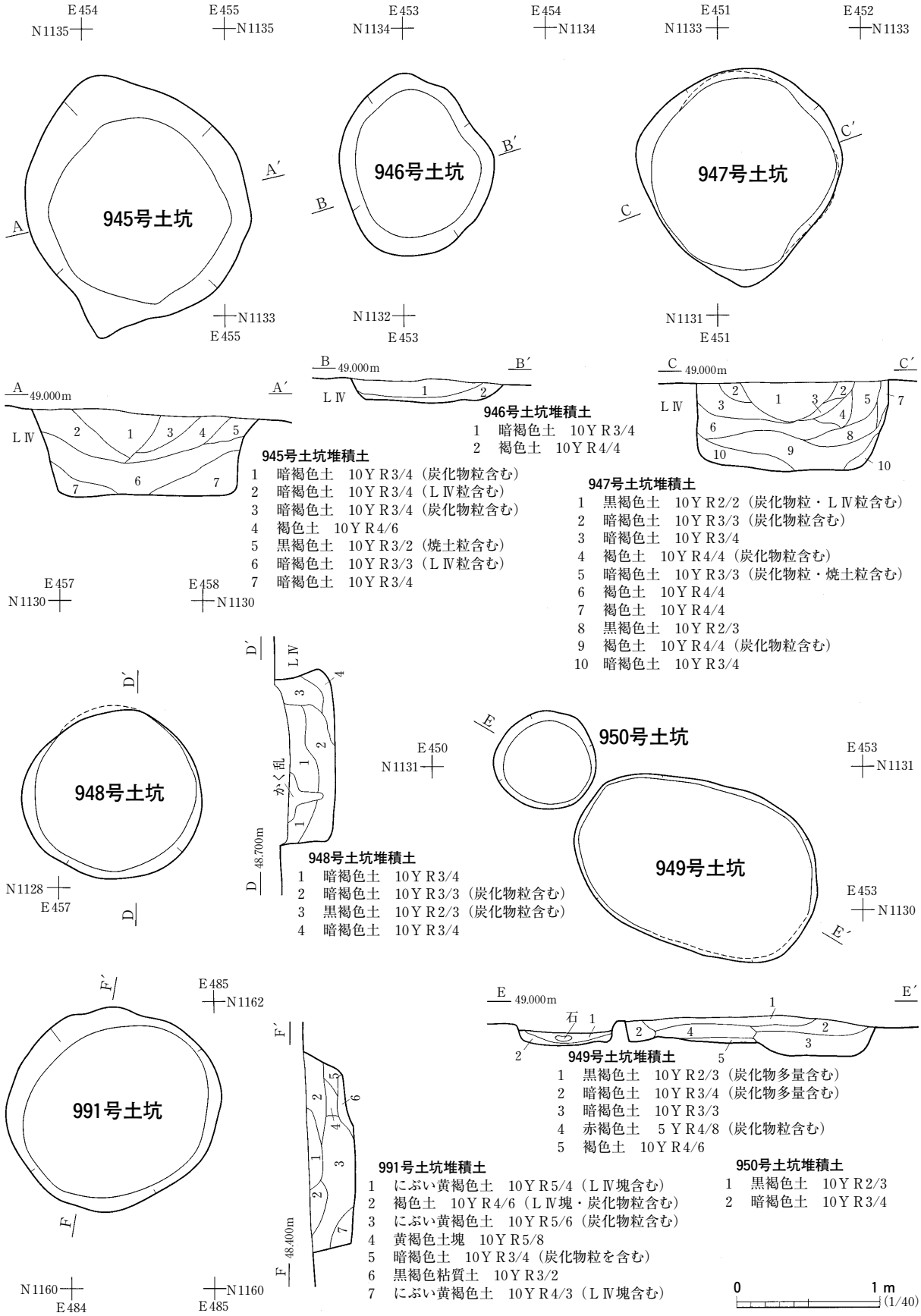
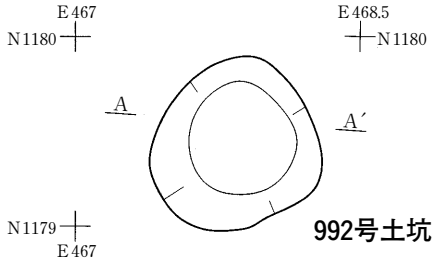
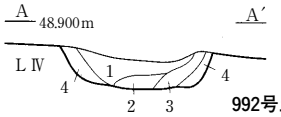
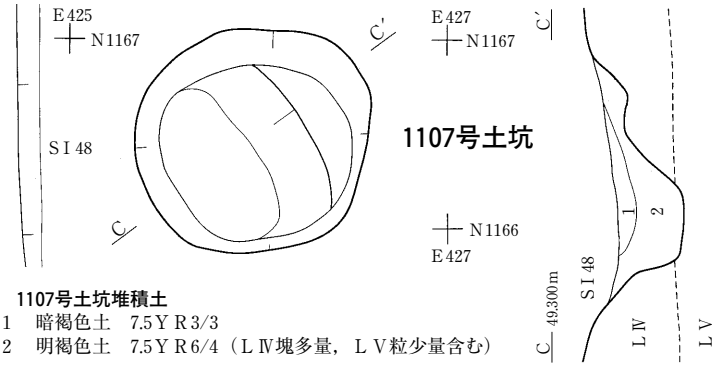

945号土坑
946号土坑
947号土坑
948号土坑
949号土坑
950号土坑
991号土坑
945号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10YR3/4（炭化物粒含む）
4　褐色土　10YR4/6
5　黒褐色土　10YR3/2（焼土粒含む）
6　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒含む）
7　暗褐色土　10YR3/4
946号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
2　褐色土　10YR4/4
947号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物粒・LⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10YR3/4
4　褐色土　10YR4/4（炭化物粒含む）
5　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒・焼土粒含む）
6　褐色土　10YR4/4
7　褐色土　10YR4/4
8　黒褐色土　10YR2/3
9　褐色土　10YR4/4（炭化物粒含む）
10　暗褐色土　10YR3/4
948号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
2　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒含む）
3　黒褐色土　10YR2/3（炭化物粒含む）
4　暗褐色土　10YR3/4
949号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（炭化物多量含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（炭化物多量含む）
3　暗褐色土　10YR3/3
4　赤褐色土　5YR4/8（炭化物粒含む）
5　褐色土　10YR4/6
950号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3
2　暗褐色土　10YR3/4
991号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR5/4（LⅣ塊含む）
2　褐色土　10YR4/6（LⅣ塊・炭化物粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10YR5/6（炭化物粒含む）
4　黄褐色土塊　10YR5/8
5　暗褐色土　10YR3/4（炭化物粒を含む）
6　黒褐色粘質土　10YR3/2
7　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ塊含む）
0　1m　(1/40)

図229　土坑（56）

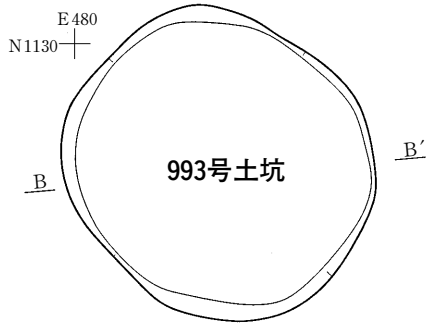


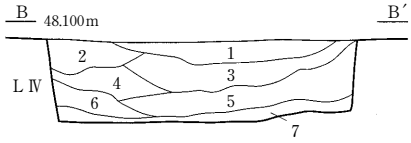


992号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒含む）
3　黄褐色土　10ＹＲ5/6
4　黄褐色土　10ＹＲ5/8

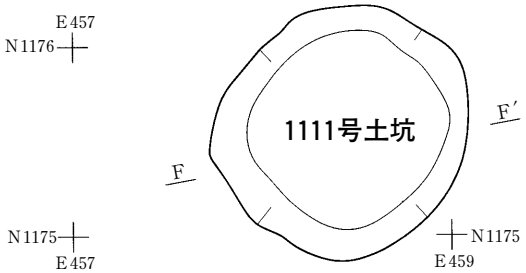


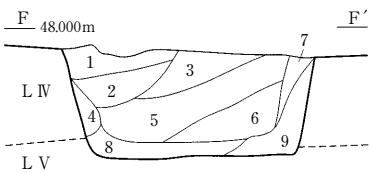
1107号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3
2　明褐色土　7.5ＹＲ6/4（ＬⅣ塊多量，ＬⅤ粒少量含む）

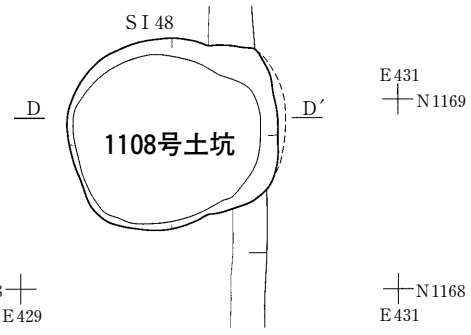




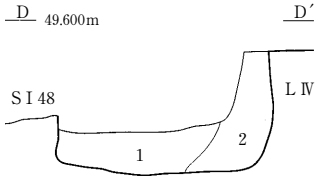
993号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3（ＬⅣ塊含む）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4
5　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅣ粒含む）
6　灰黄褐色土　10ＹＲ5/2（ＬⅣ塊含む）
7　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊多量含む）

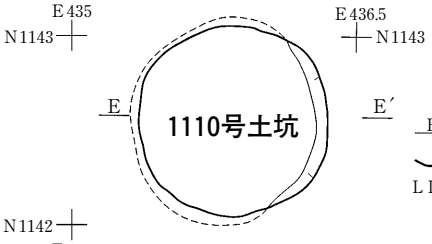


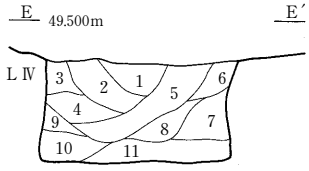




1108号土坑堆積土
1　明褐色土　7.5ＹＲ6/4
（ＬⅣ塊多量含む）
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4





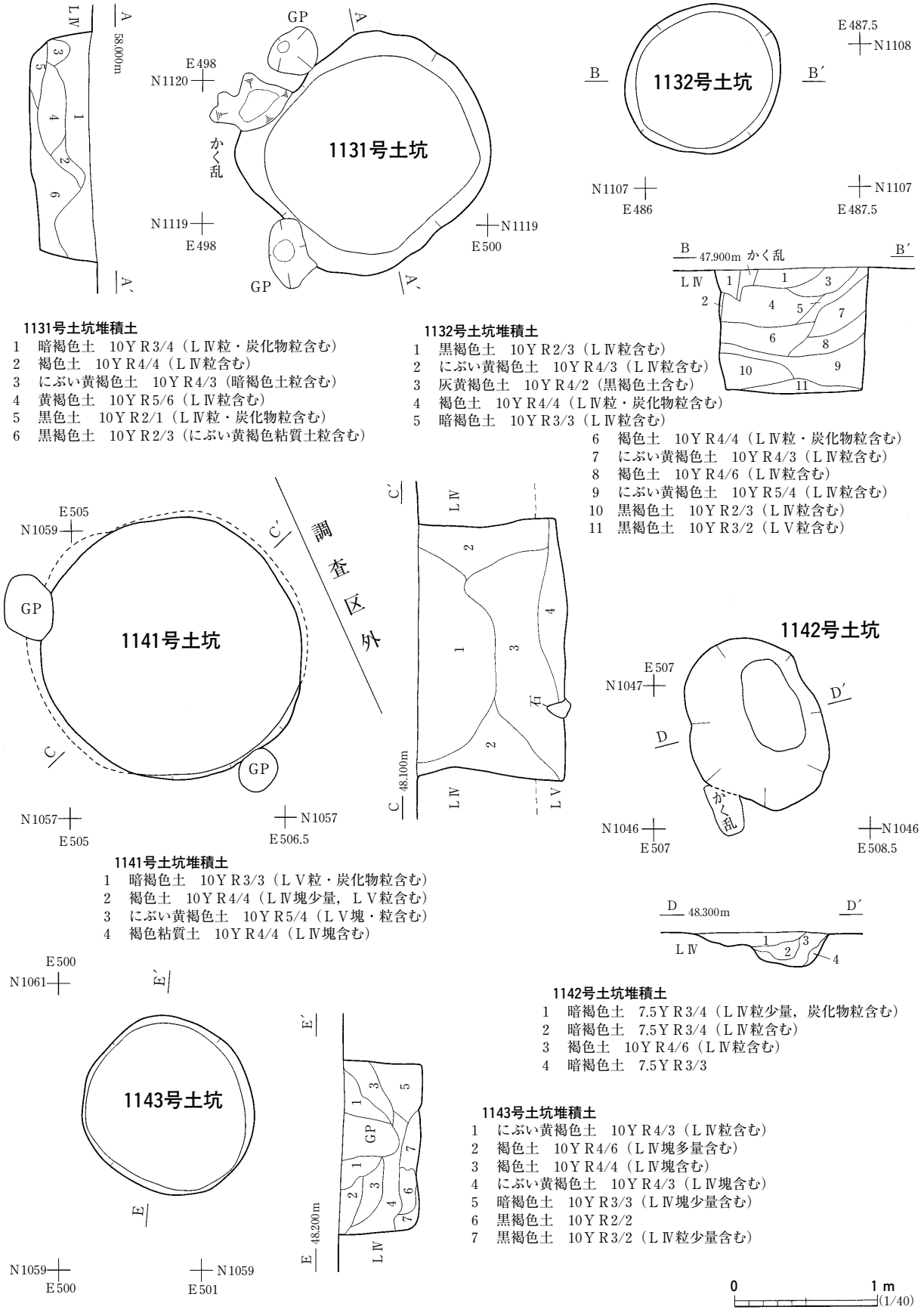


1110号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/3
2　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/3
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
5　黒褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒多量含む）
6　褐色土　7.5ＹＲ4/3
7　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
8　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
9　褐色土　7.5ＹＲ4/3
10　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
11　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3

1111号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・ＬⅤ粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（暗褐色土粒・ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（暗褐色土粒・ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅤ含む）
6　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅤ粒含む）
7　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅣ粒含む）
8　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅤ粒含む）
9　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・ＬⅤ粒含む）

0　1 m
(1/40)

図230　土坑（57）



1131号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（暗褐色土粒含む）
4　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ粒含む）
5　黒色土　10ＹＲ2/1（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
6　黒褐色土　10ＹＲ2/3（にぶい黄褐色粘質土粒含む）

1132号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
3　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（黒褐色土含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
7　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
8　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
9　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅣ粒含む）
10　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒含む）
11　黒褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅤ粒含む）

1141号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅤ粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊少量，ＬⅤ粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅤ塊・粒含む）
4　褐色粘質土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊含む）

1142号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3

1143号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ塊多量含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊含む）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ塊含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ塊少量含む）
6　黒褐色土　10ＹＲ2/2
7　黒褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅣ粒少量含む）

0　1 m
(1/40)

図231　土坑（58）

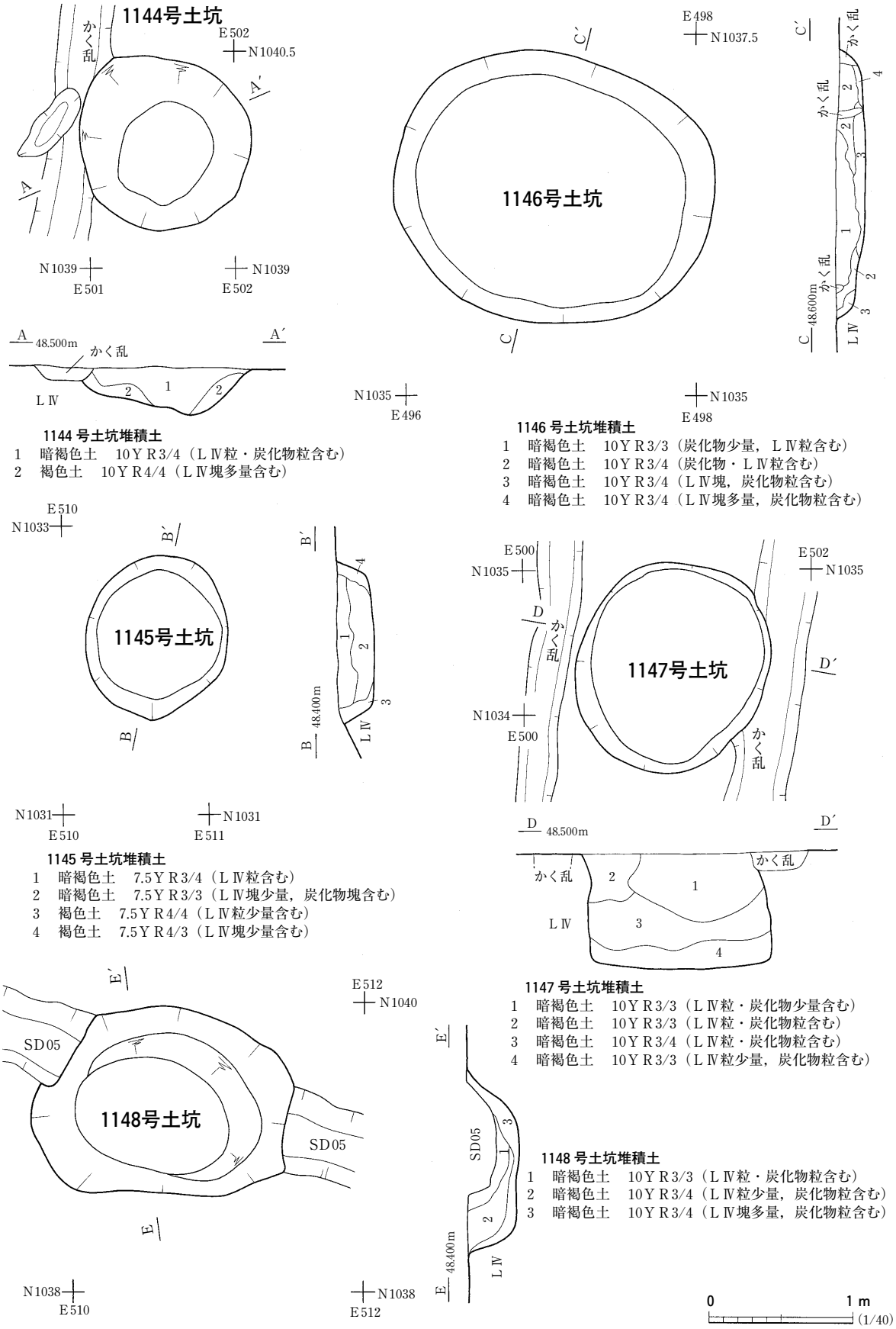
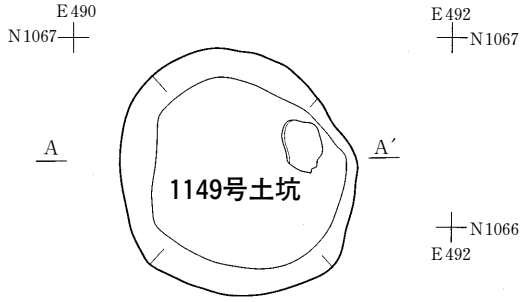
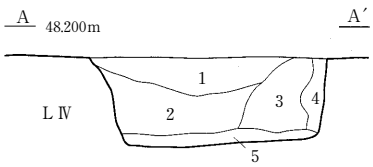

1144号土坑
かく乱
E502
N1040.5
A
A′
N1039
E501
N1039
E502
A 48.500m
かく乱
A′
LⅣ
1144 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊多量含む）
E498
N1037.5
C′
1146号土坑
C
N1035
E496
N1035
E498
C′
かく乱
かく乱
かく乱
48.600m
C
LⅣ
1146 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物少量，ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物・ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊，炭化物粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊多量，炭化物粒含む）
E510
N1033
B′
1145号土坑
B
B′
48.400m
B
LⅣ
N1031
E510
N1031
E511
1145 号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（ＬⅣ塊少量，炭化物塊含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ塊少量含む）
E500
N1035
E502
N1035
D
かく乱
1147号土坑
D′
N1034
E500
かく乱
D 48.500m
D′
かく乱
かく乱
LⅣ
1147 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
E′
E512
N1040
SD05
1148号土坑
SD05
E
N1038
E510
N1038
E512
E′
SD05
48.400m
E
LⅣ
1148 号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊多量，炭化物粒含む）
0
1 m
(1/40)

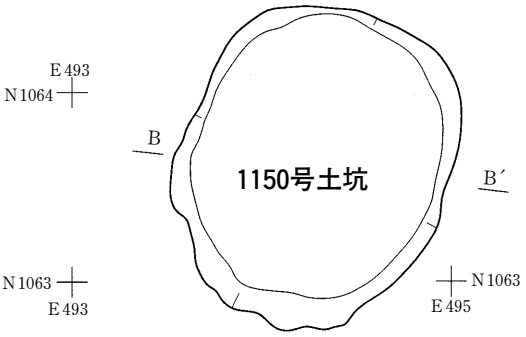
図232　土坑（59）





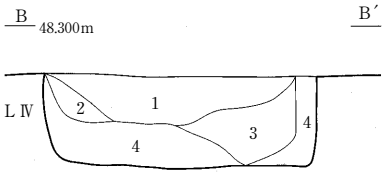
1149 号土坑堆積土

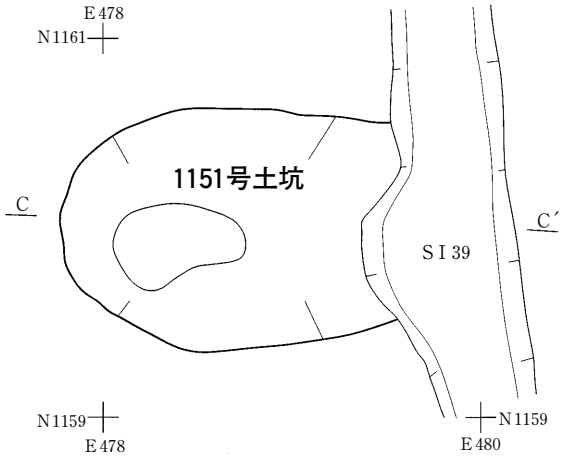
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊少量，炭化物粒含む）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ塊含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）

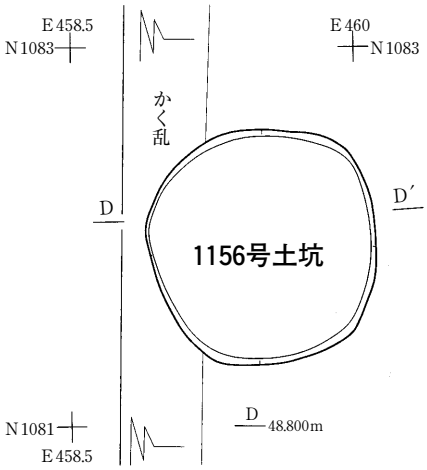


1150 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊多量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・塊少量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・塊含む）

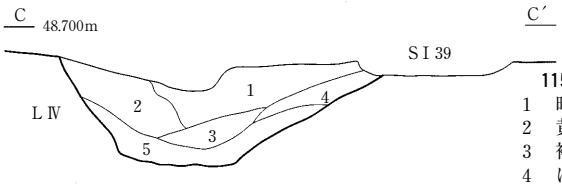






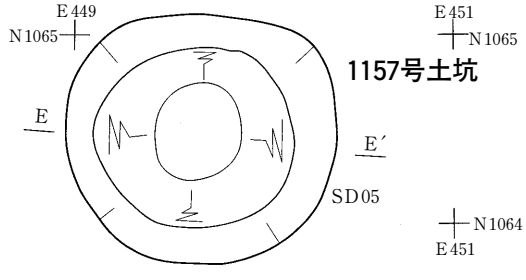
1156 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）



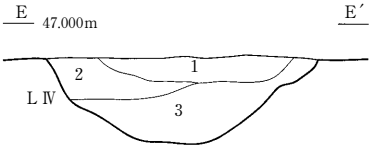
1151 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
2　黄褐色土　10ＹＲ5/8（暗褐色土粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒含む）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
5　黄褐色土　10ＹＲ5/8（ＬⅣ粒含む）



1157 号土坑堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/6（暗褐色土塊少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（暗褐色土塊多量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（焼土粒・炭化物粒・ＬⅣ塊含む）



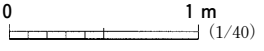
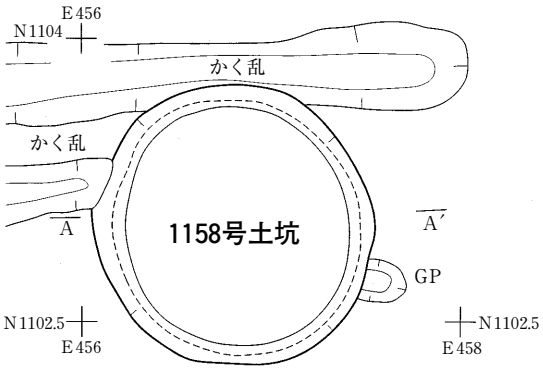
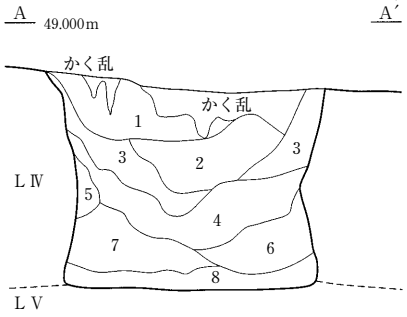


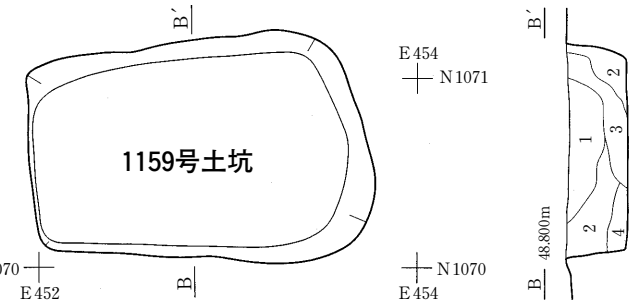
図233　土坑（60）





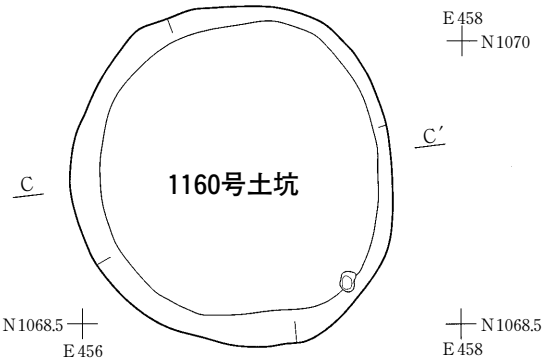
1158号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・ＬⅣ粒・白砂含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ粒・黒褐色土塊含む）
3　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/6（暗褐色土塊含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/6（暗褐色土塊多量含む）
7　褐色土　10ＹＲ4/6（暗褐色土塊多量，炭化物粒少量含む）
8　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）



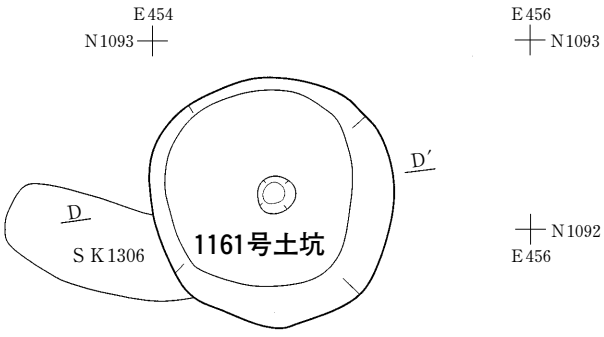
1159号土坑堆積土

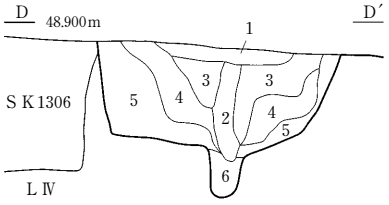
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・黒褐色土塊多量，炭化物粒少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ塊含む）



1160号土坑堆積土

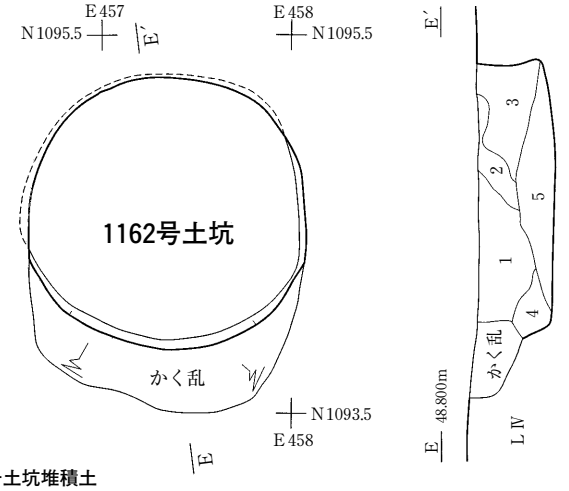
1　褐色土　10ＹＲ4/4
　　（ＬⅣ粒多量，暗褐色土塊・炭化物粒少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物粒少量含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（暗褐色土塊少量含む）





1161号土坑堆積土

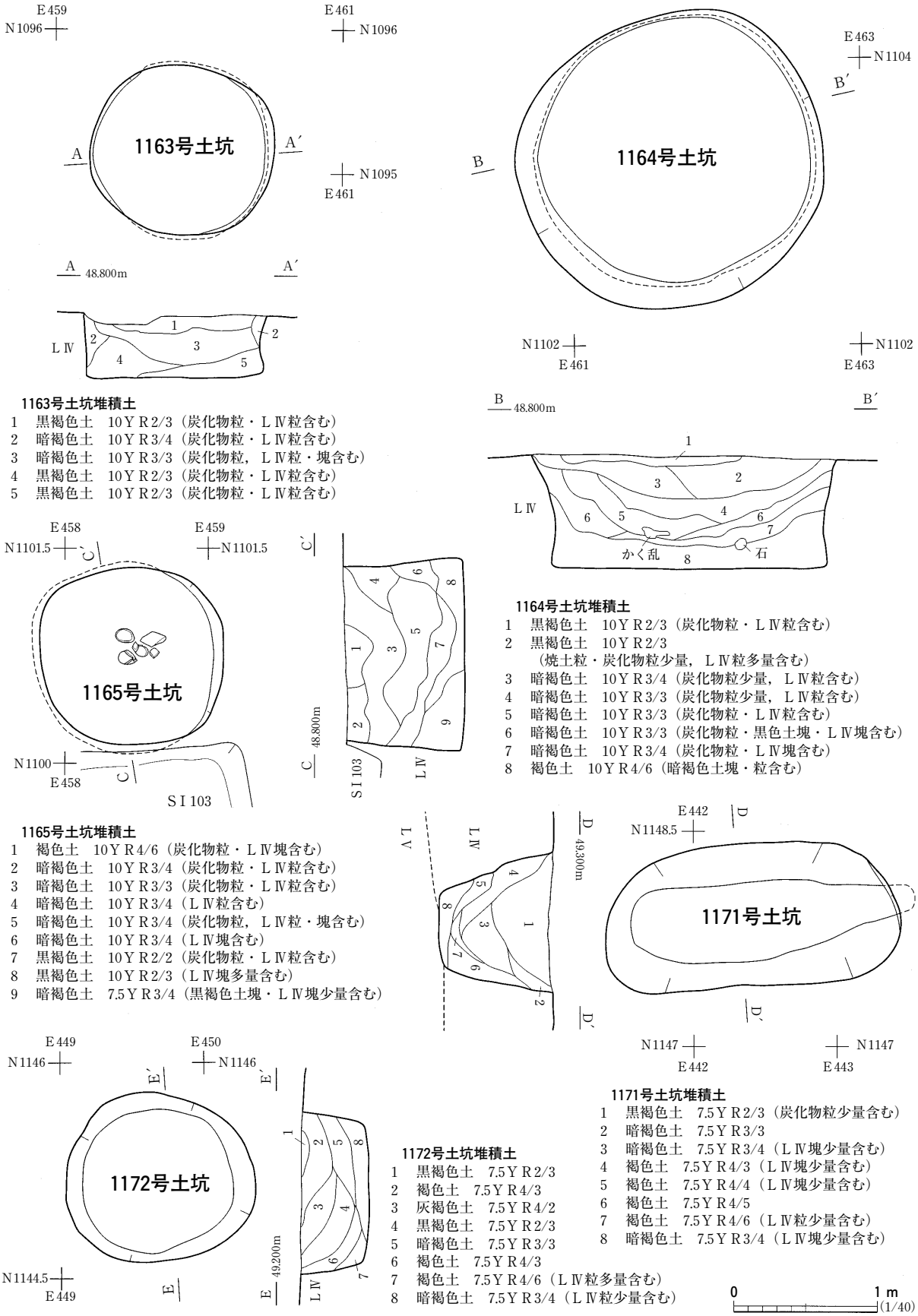
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・黒色土粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
6　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（炭化物粒含む）



1162号土坑堆積土

1　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2（焼土粒・炭化物粒・ＬⅣ粒少量含む）
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（焼土粒・炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒少量，暗褐色土塊・明黄褐色土塊含む）
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3（炭化物粒少量・ＬⅣ塊含む）
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（炭化物粒少量，ＬⅣ塊含む）

図234　土坑（61）



1163号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒，ＬⅣ粒・塊含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
5　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）

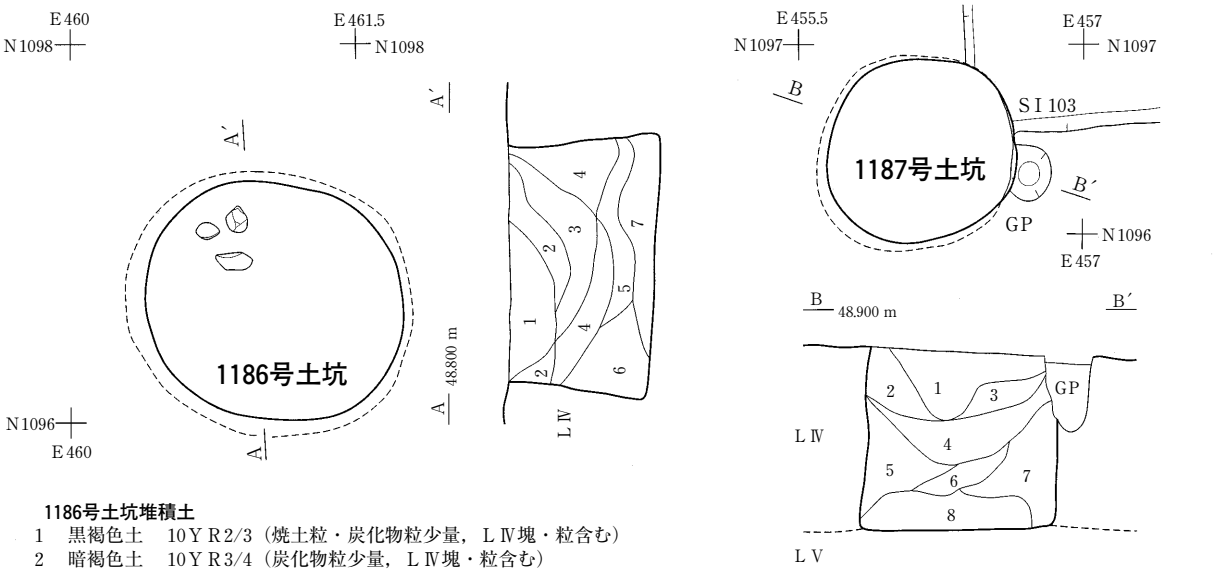
1164号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3
　（焼土粒・炭化物粒少量，ＬⅣ粒多量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・黒色土塊・ＬⅣ塊含む）
7　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
8　褐色土　10ＹＲ4/6（暗褐色土塊・粒含む）

1165号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒，ＬⅣ粒・塊含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊含む）
7　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
8　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ塊多量含む）
9　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（黒褐色土塊・ＬⅣ塊少量含む）

1171号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5ＹＲ2/3（炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3
3　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ塊少量含む）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/3（ＬⅣ塊少量含む）
5　褐色土　7.5ＹＲ4/4（ＬⅣ塊少量含む）
6　褐色土　7.5ＹＲ4/5
7　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
8　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ塊少量含む）

1172号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5ＹＲ2/3
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3
3　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2
4　黒褐色土　7.5ＹＲ2/3
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3
6　褐色土　7.5ＹＲ4/3
7　褐色土　7.5ＹＲ4/6（ＬⅣ粒多量含む）
8　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）

図235　土坑（62）

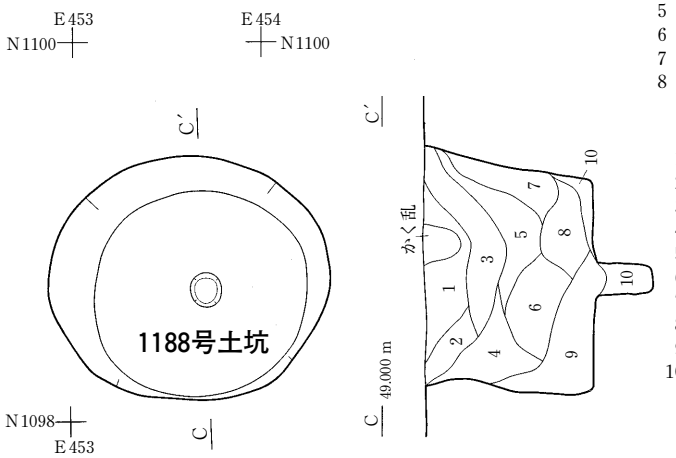


1186号土坑堆積土

1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（焼土粒・炭化物粒少量，ＬⅣ塊・粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量，ＬⅣ塊・粒含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/6（炭化物粒少量，暗褐色土塊含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・黒褐色土塊含む）
7　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊少量，炭化物粒含む）

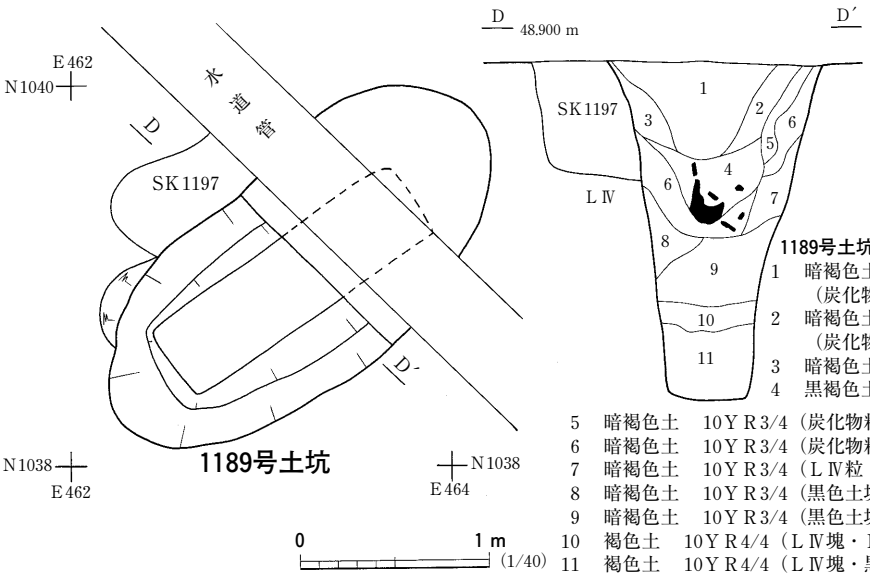
1187号土坑堆積土

1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒，ＬⅣ塊・粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒，ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・黒褐色土塊・ＬⅣ粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒，ＬⅣ塊・粒含む）
6　暗褐色粘質土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
7　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黒色土塊，ＬⅣ塊・粒含む）
8　褐色粘質土　10ＹＲ4/4（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）



1188号土坑堆積土

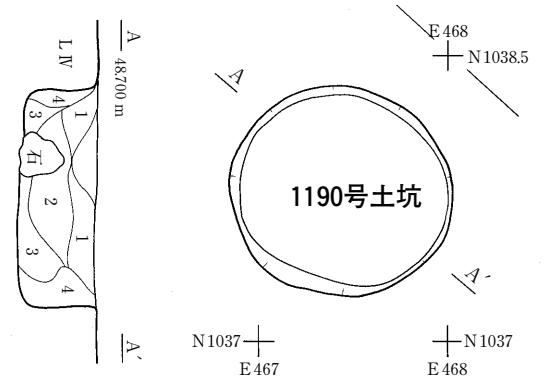
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（粘土塊・炭化物少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3（炭化物粒含む）
3　にぶい黄褐色粘質土　10ＹＲ5/4（炭化物粒含む）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（炭化物・ＬⅣ塊少量含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒少量含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物・ＬⅣ塊含む）
7　黄褐色粘質土　10ＹＲ5/6
8　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物・ＬⅣ塊含む）
9　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3
10　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（炭化物多量含む）



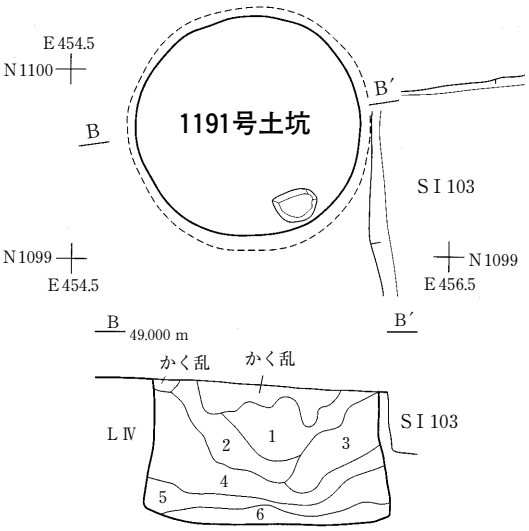
1189号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（炭化物粒・ＬⅣ粒塊・ＬⅤ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（炭化物粒・ＬⅣ粒・黒色土塊・ＬⅤ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
7　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・塊含む）
8　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黒色土塊・ＬⅣ塊・炭化物粒含む）
9　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黒色土塊・ＬⅣ塊多量，炭化物粒含む）
10　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊・ＬⅣ塊含む）
11　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊・黒褐色土塊含む）

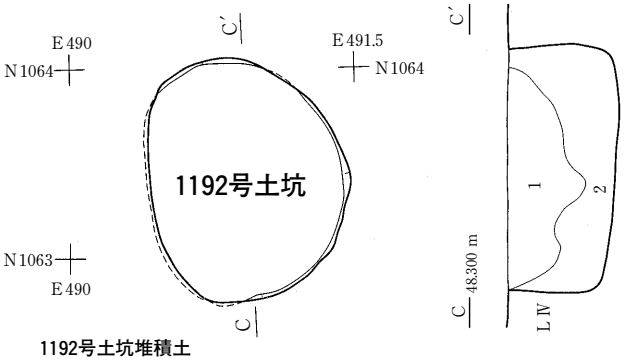
図236　土坑（63）



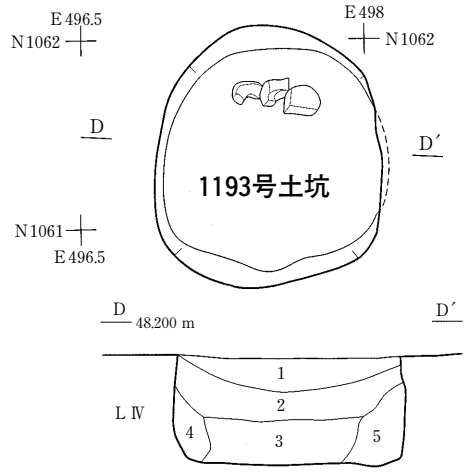
1190号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒少量含む）
4　黄褐色粘質土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ塊含む）



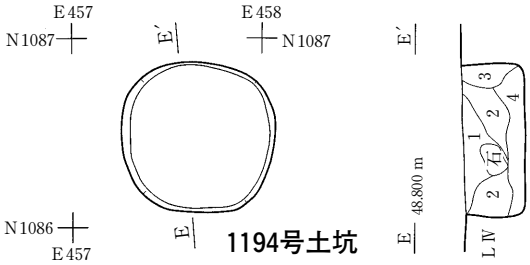
1191号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（炭化物粒少量，黒褐色土塊・ＬⅣ塊・粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4
（炭化物粒・暗褐色土塊・ＬⅣ粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒・暗褐色土塊含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/6（暗褐色土塊少量含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒含む）



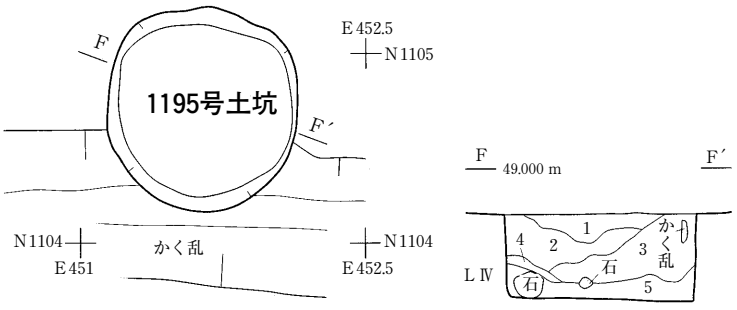
1192号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）



1193号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物少量，ＬⅣ粒含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒・炭化物少量含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）



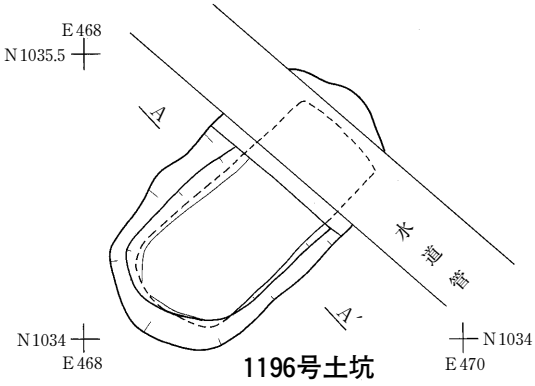
1194号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒少量，ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊・粒含む）



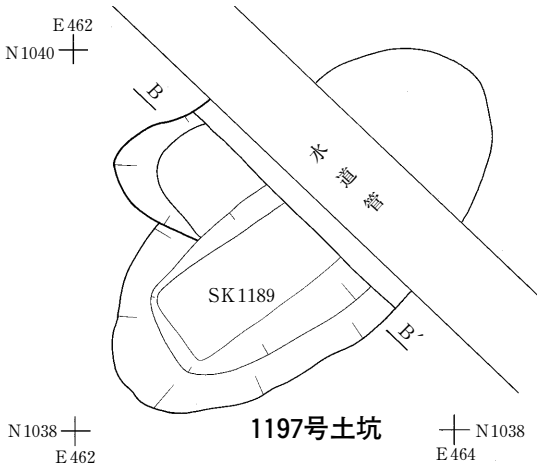
1195号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（炭化物粒少量，ＬⅣ塊含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（炭化物粒少量，ＬⅣ塊・粒多量含む）
3　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
（炭化物粒・ＬⅣ粒含む）
4　明褐色土　7.5ＹＲ5/6
（暗褐色土塊含む）
5　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3
（炭化物粒少量，ＬⅣ塊含む）

0　1 m
(1/40)

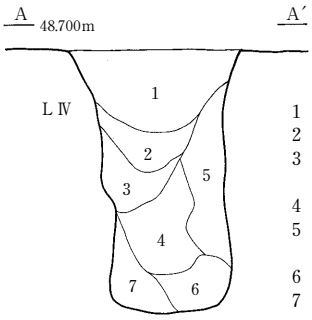
図237　土坑（64）



1196号土坑

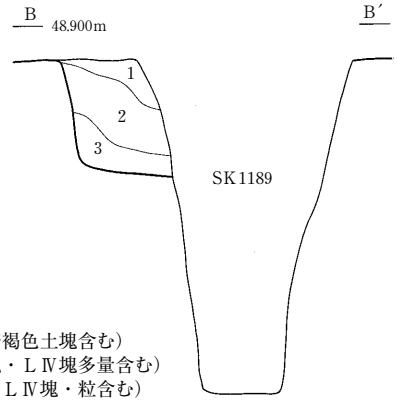


1197号土坑



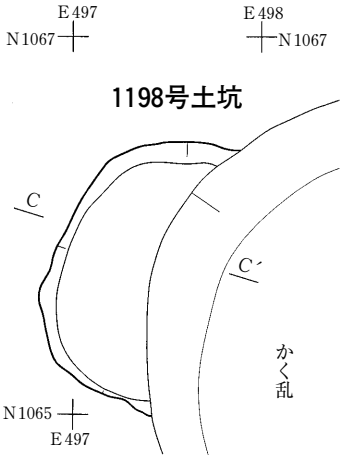
1196号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（炭化物多量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（炭化物粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3
　（炭化物少量，ＬⅣ塊含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物多量含む）
5　明黄褐色土　10ＹＲ6/6
　（炭化物少量，ＬⅣ塊多量含む）
6　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ5/4
7　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（炭化物粒含む）

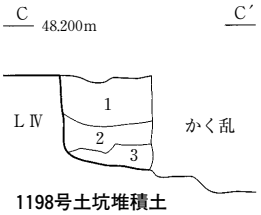


1197号土坑堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒・暗褐色土塊含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黒褐色土塊・ＬⅣ塊多量含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物粒，ＬⅣ塊・粒含む）

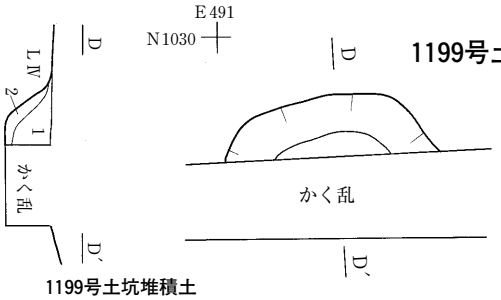


1198号土坑



1198号土坑堆積土

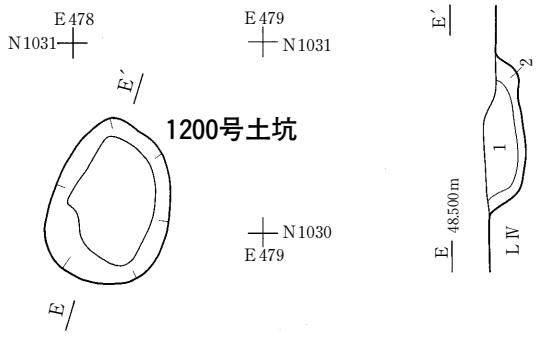
1　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊多量少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3



1199号土坑

1199号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊多量，炭化物粒含む）

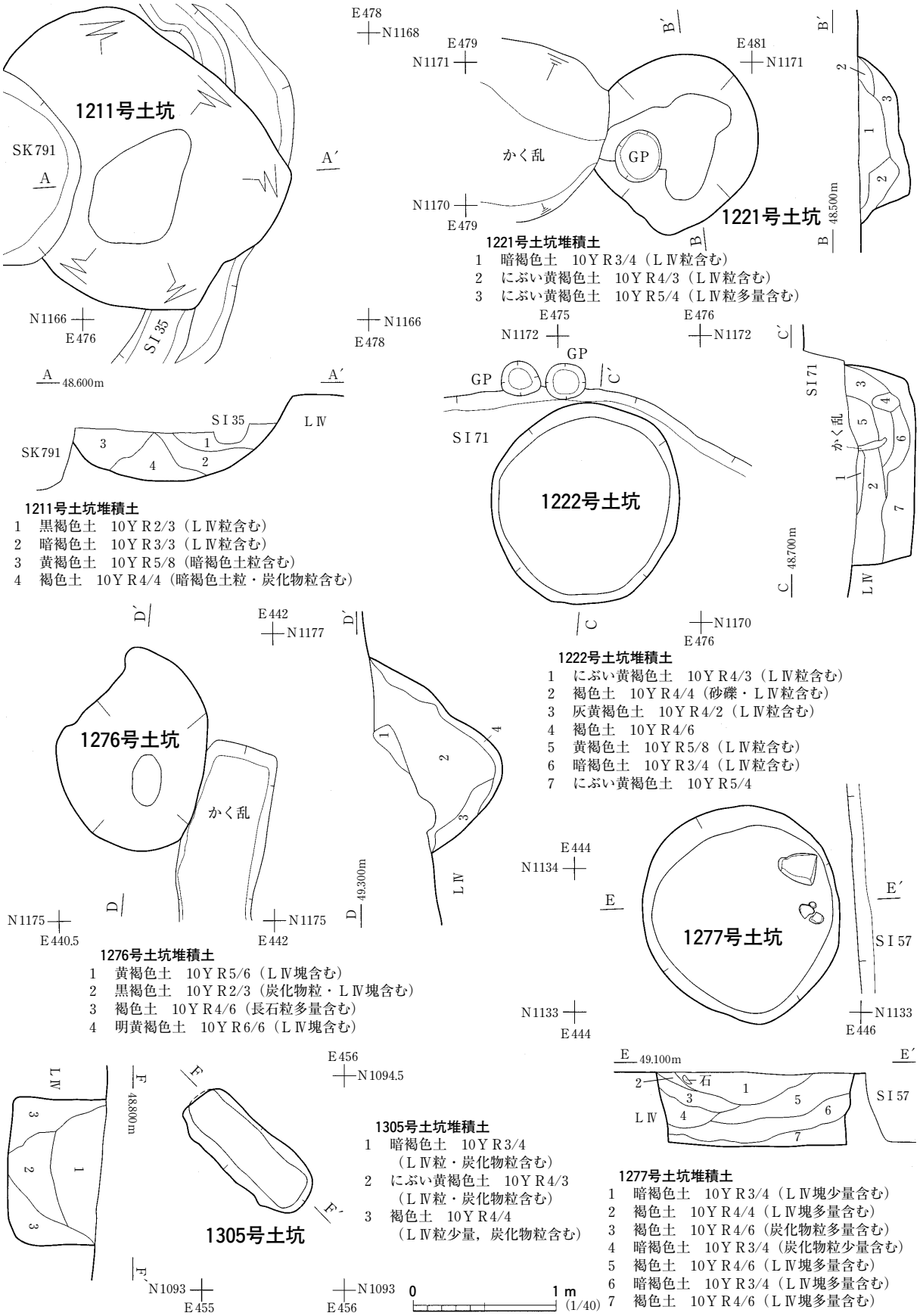


1200 号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊多量含む）

0　1 m
(1/40)

図238　土坑（65）



1211号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（ＬⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
3　黄褐色土　10ＹＲ5/8（暗褐色土粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（暗褐色土粒・炭化物粒含む）

1221号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（ＬⅣ粒多量含む）

1222号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（砂礫・ＬⅣ粒含む）
3　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（ＬⅣ粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/6
5　黄褐色土　10ＹＲ5/8（ＬⅣ粒含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
7　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4

1276号土坑堆積土
1　黄褐色土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ塊含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒・ＬⅣ塊含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（長石粒多量含む）
4　明黄褐色土　10ＹＲ6/6（ＬⅣ塊含む）

1277号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊少量含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ塊多量含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒多量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒少量含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ塊多量含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊多量含む）
7　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ塊多量含む）

1305号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
　（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
　（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4
　（ＬⅣ粒少量，炭化物粒含む）

図239　土坑（66）

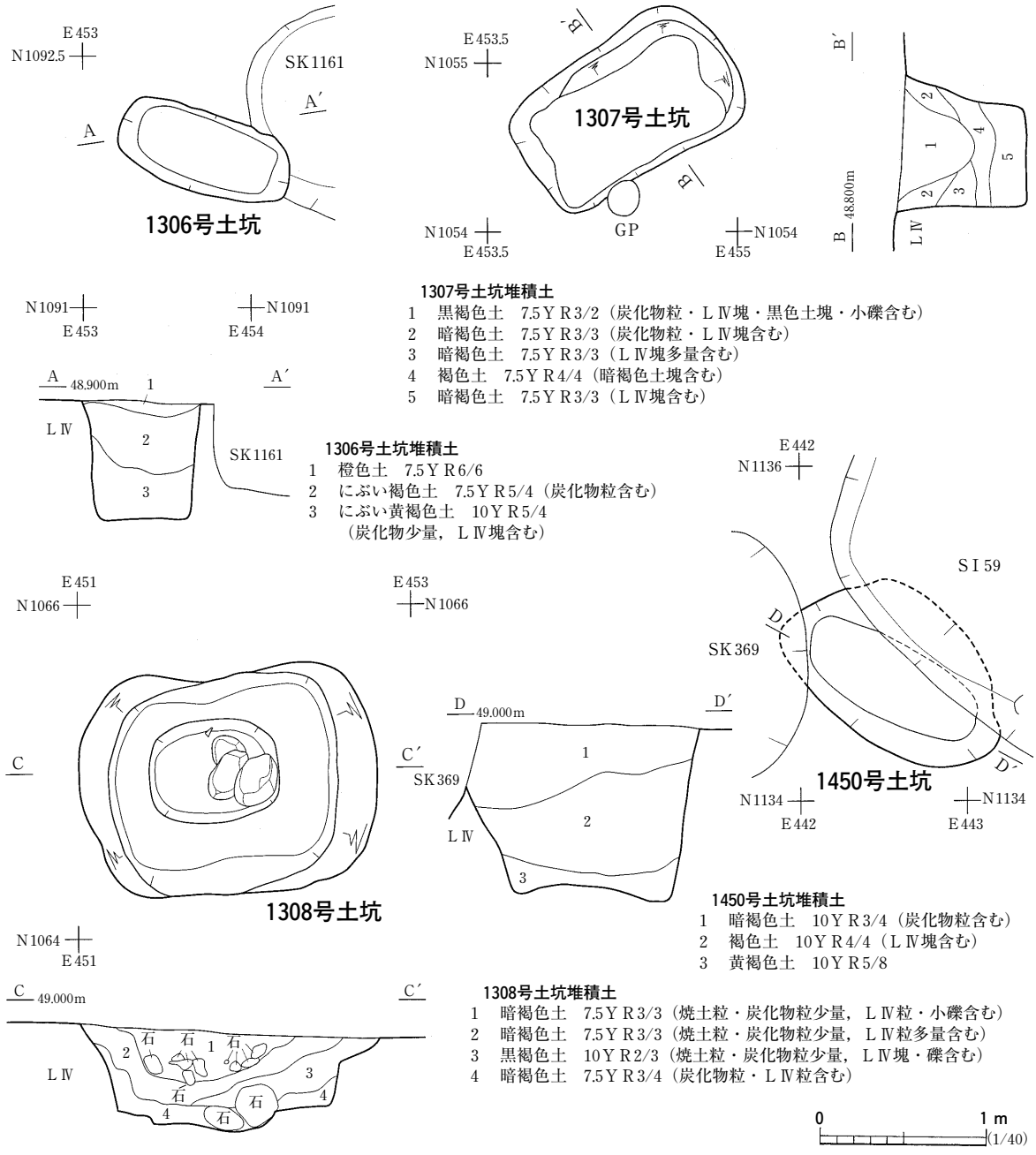


図240　土坑（67）

①　貯蔵穴と同様に底面および底面近くから礫が出土したもの。

②　断面形が皿形で堆積土および底面から礫が出土したもの。

③　底面にピットのあるもの。

これらの土坑についても，機能を特定できるような特徴を有しているため検討をしておきたい。

なお，土坑のなかで確認面での長さが１ｍ以下のものがあるが，屋外柱穴の可能性としても考えておきたい。

①　貯蔵穴と同様に底面および底面近くから礫が出土したもの

①には貯蔵穴と断面形が異なるもので22基ある。これらの確認面での平面形は不整円形・円形・

楕円形・不整楕円形・不整形であり，断面形は箱形・筒形である。規模は確認面での長軸が105～160cm，深さは35～70cmであった。

土坑から出土した礫の大きさは8～30cmである。礫の出土状況から分類してみると，集積しているものと散乱している状態のものとに分かれる。そのうち，集積しているものは8基であり，これらは壁際寄りに集積していた。左記のものを列挙すると，193・230・287・288・341・370・373・1193号土坑となる。これらの礫の出土状況は，フラスコ状土坑のものと特に区別をつけることはできない。つまり，フラスコ状土坑と同様の機能を有していたと考えておきたい。

遺　　物（図248・252，写真226）

①の特徴を有する土坑から出土した遺物の記述をおこなう。341号土坑から出土した図248－1は深鉢である。出土した層位からみると，底面から出土した礫が埋没したのち投棄されたものと考えている。沈線でe字状のものを90°上方に傾けたような文様を配している。土器の年代は，縄文中期末葉であろう。1193号土坑からは，図248－5の不定形石器もしくは石鏃の未製品とみられるものが出土している。

②　断面形が皿形で堆積土および底面から礫が出土したもの

②に該当する土坑は12基であった。ここで該当する土坑を列挙しておくと，153・160・164・167・191・260・261・300・360・366・367・409号土坑である。なお，153号土坑の断面形は箱形であるが，礫の出土状況が167号土坑と似ていることから，ここに含めておいた。確認面での平面形は楕円形・円形・隅丸方形である。規模は確認面での長軸が90～210cm，深さが20～80cmであった。

土坑から出土した礫の大きさは8～30cmである。礫の出土点数をみてみると1～3点と，多数が出土したものとに分かれる。礫の出土状況からみると，堆積土中と底面からのものとに分かれる。

②に該当する土坑の年代についてみてみよう。これらの出土例も堆積土中からのものであるが，周囲の状況からみて遺物が流入する可能性は少ないと考えている。このことから，160号土坑に関しては縄文時代後期初頭であろう。153号土坑は江戸時代で，167・300号土坑については室町～江戸時代にかけてのものであろう。銭貨が出土した153・167・300号土坑の機能は，墓である可能性が高い。

遺　　物（図243・252，写真235）

②に属する土坑から出土した遺物のうち，図示したものについて記述をおこなう。153号土坑からは図252－3～5が出土した。3は石皿，4は石臼であるが茶臼で，5は銭貨で寛永通宝である。

160号土坑からは図243－7・8の深鉢が出土していた。7は口縁が波状で，ボタン状の浮文が貼り付いている。文様は沈線によって区画され，そのなかに縄文が充填されている。8の頸部には横位の隆起線が巡り，そこには舌状の突起も設けられていた。口縁部の無文帯と胴部の縄文は，頸部の隆起線によって区分されている。年代は縄文中期末葉から後期初頭であろう。

167号土坑からは図251－6・図252－6が出土した。図252－6は銭貨で，宣徳通宝である。1433年の初鋳である。図251－6は不定形石器である。300号土坑からは図252－7の銭貨が出土している

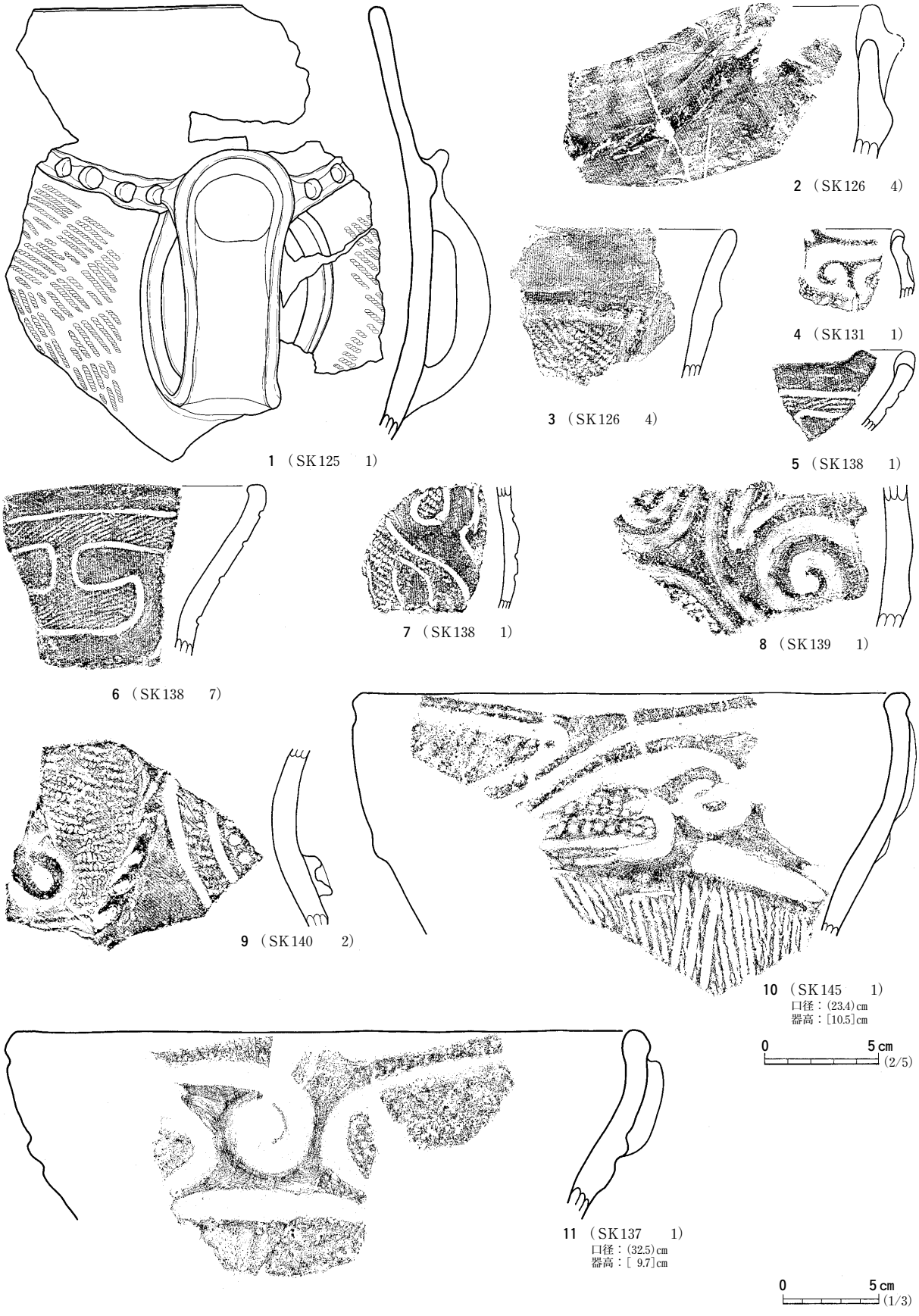


図241　土坑出土遺物（１）

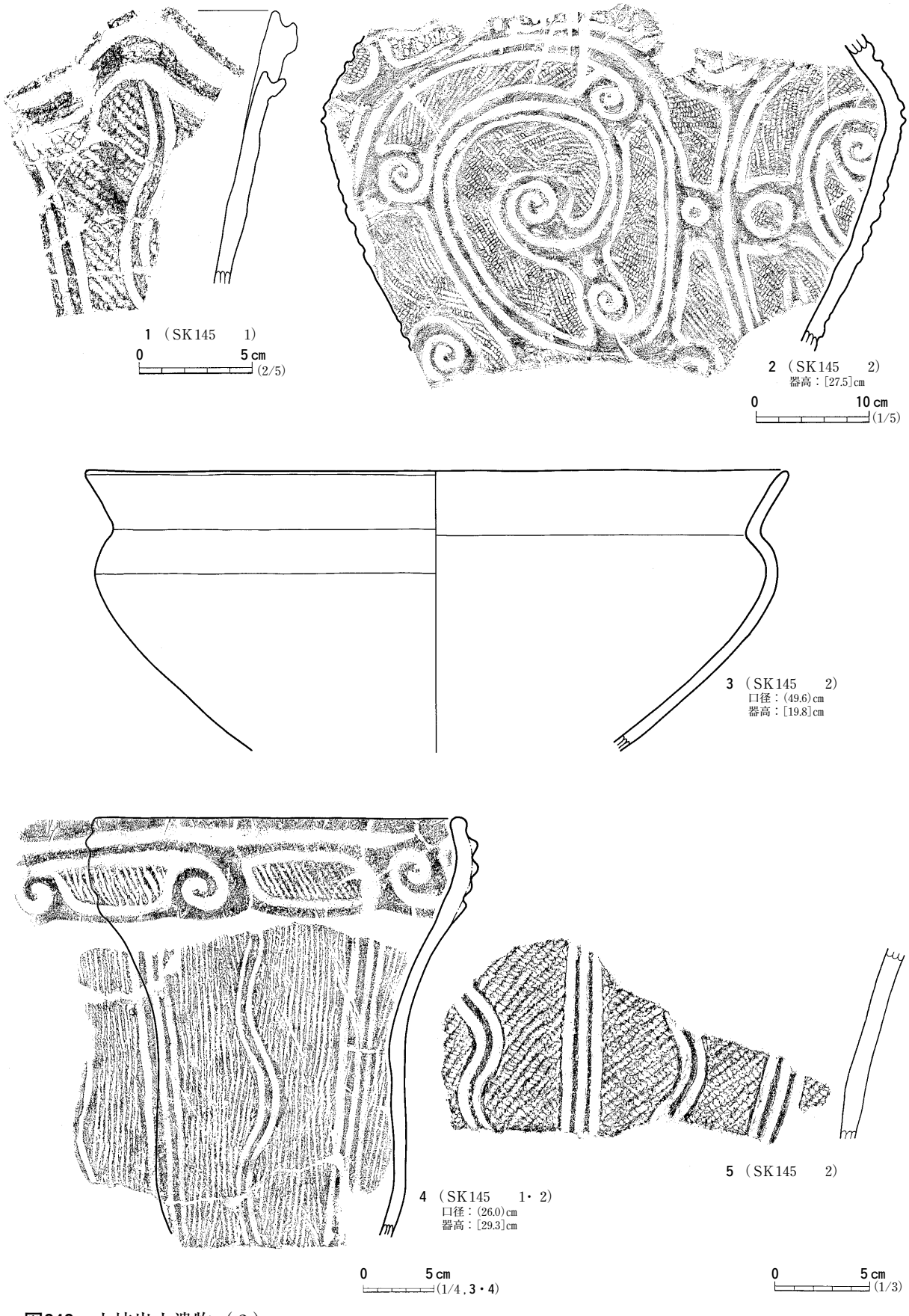


図242　土坑出土遺物（2）

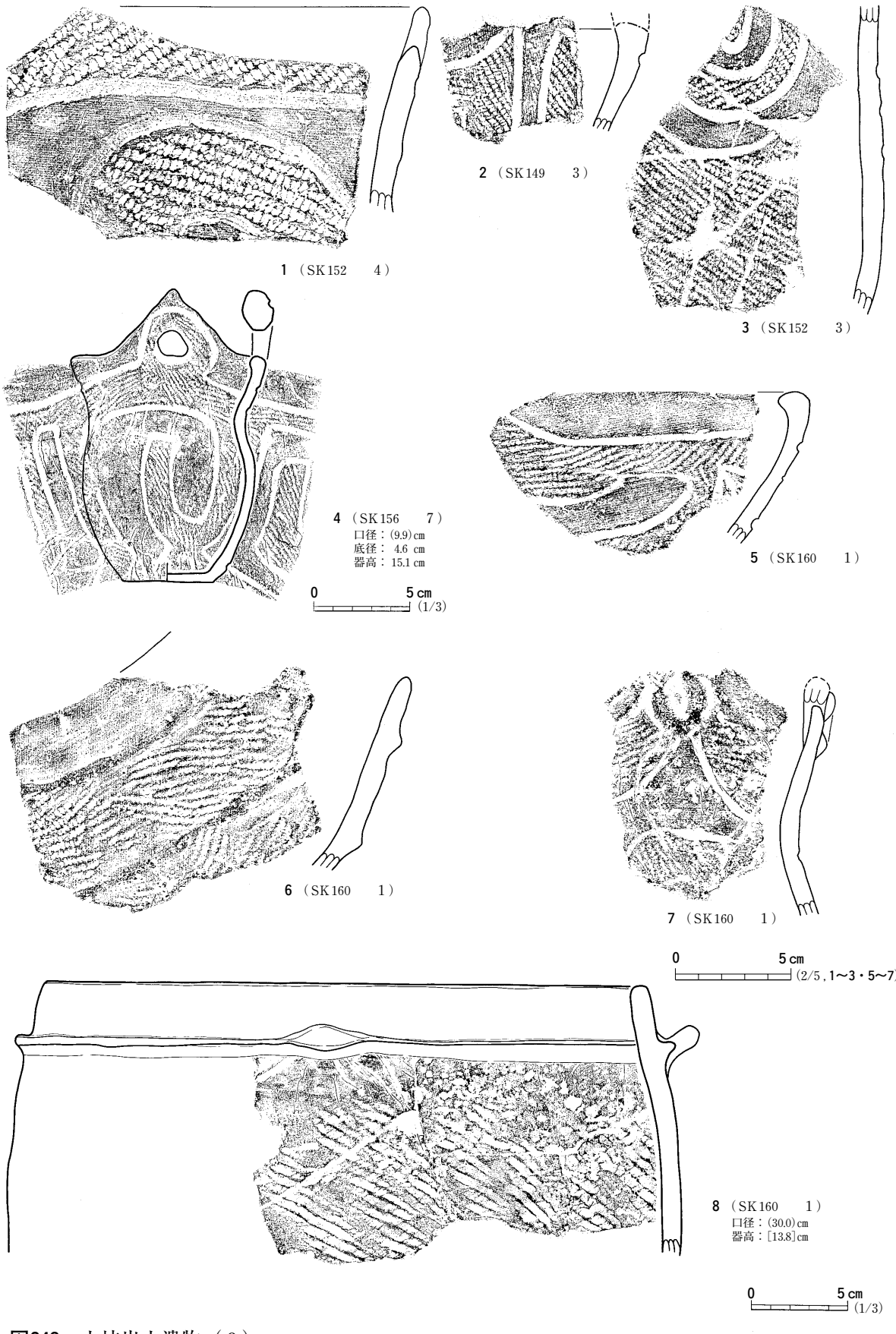


図243　土坑出土遺物（３）

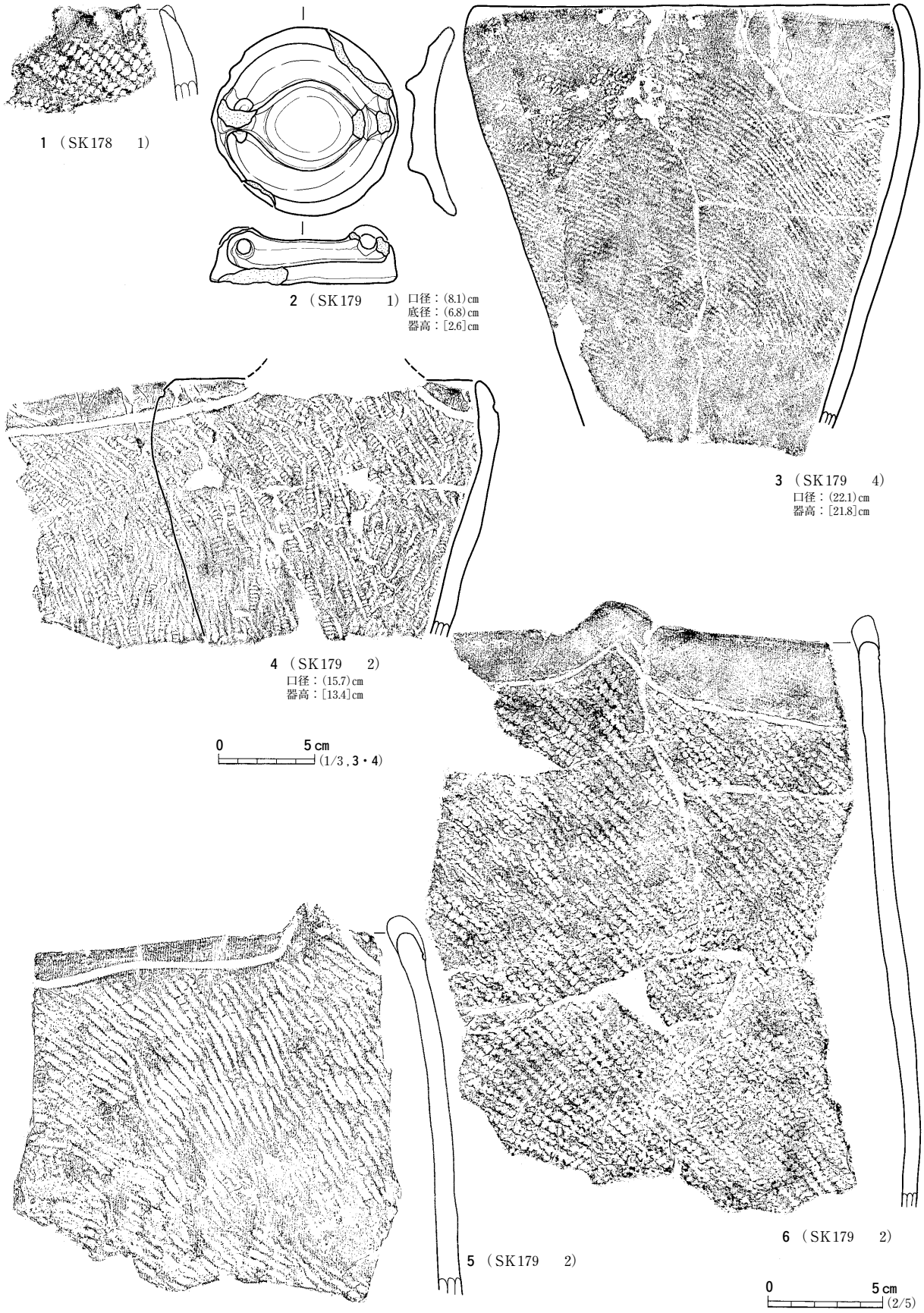


図244　土坑出土遺物（4）

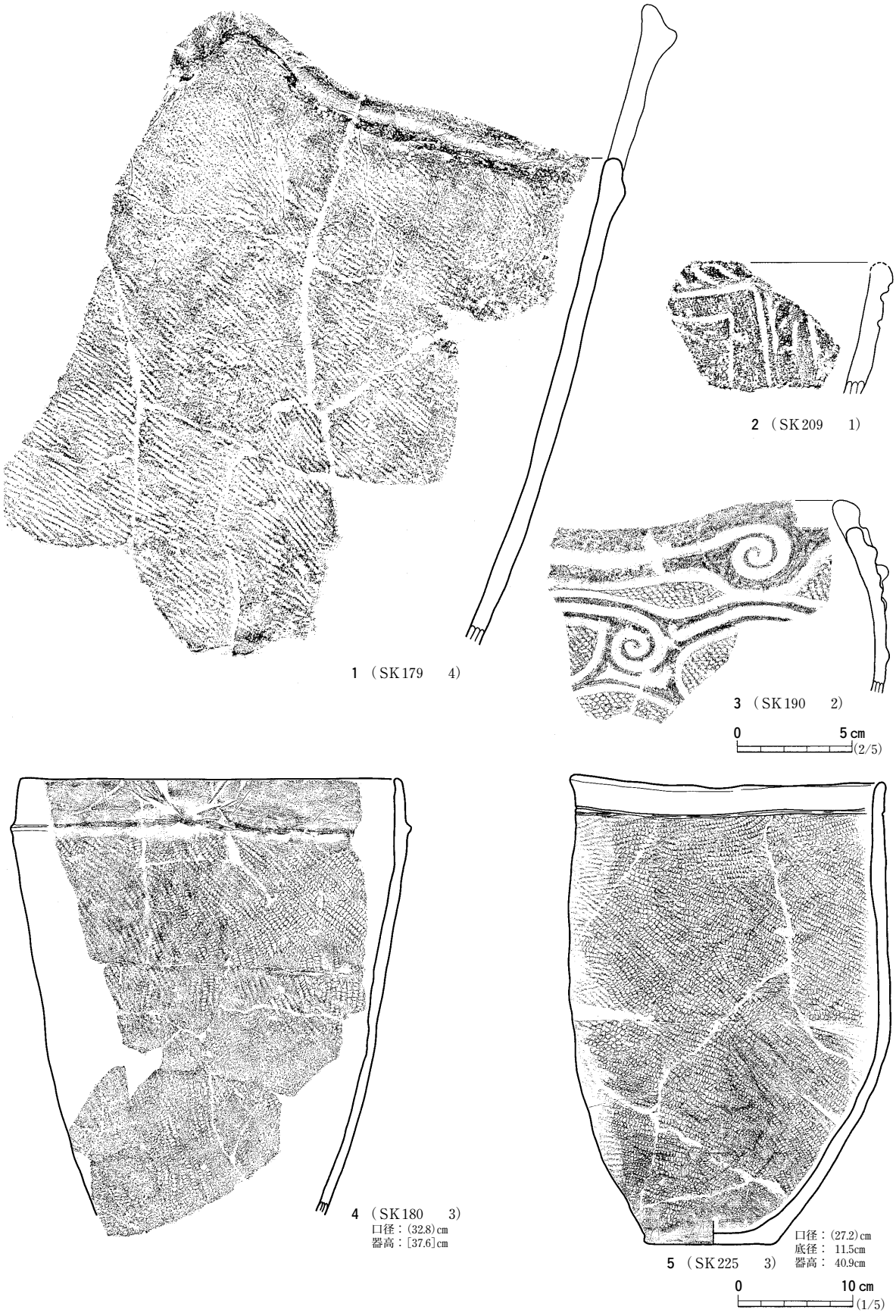
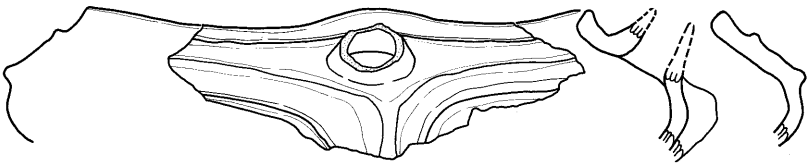
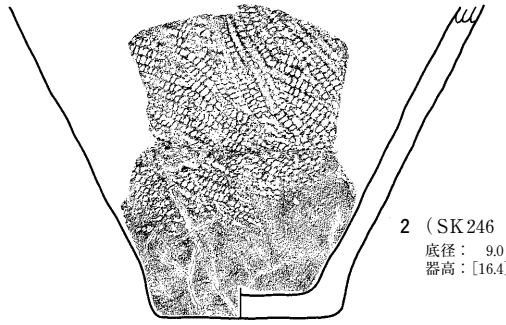


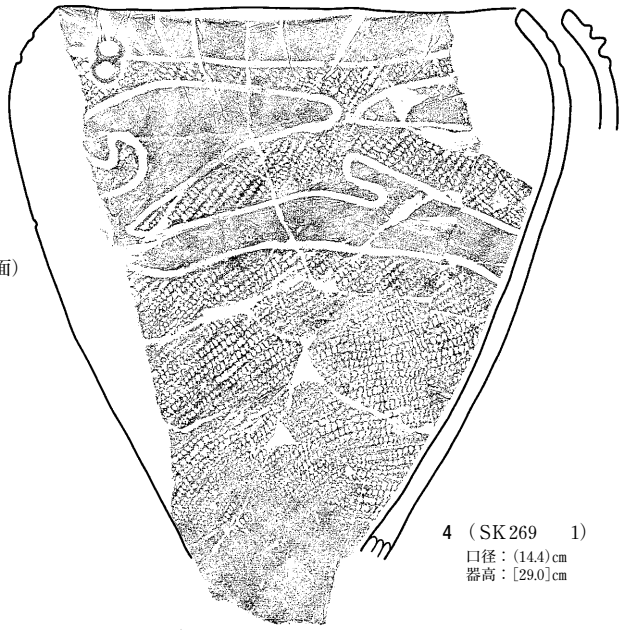
図245　土坑出土遺物（５）



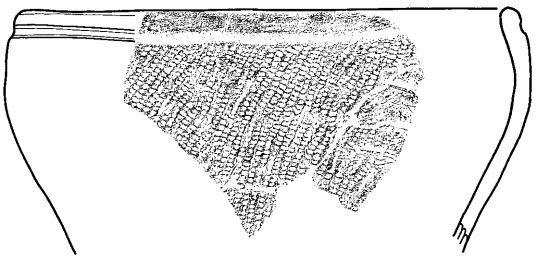
1（SK246　1）
口径：(26.6)cm
器高：[7.8]cm



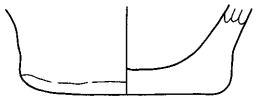
2（SK246　底面）
底径：　9.0 cm
器高：[16.4]cm



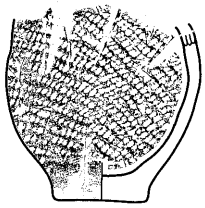
4（SK269　1）
口径：(14.4)cm
器高：[29.0]cm



3（SK315　8）
口径：(25.8)cm
器高：[12.7]cm

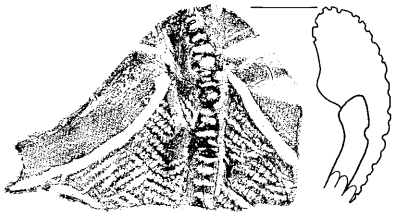


5（SK315　8）
底径：　8.3 cm
器高：[3.5]cm

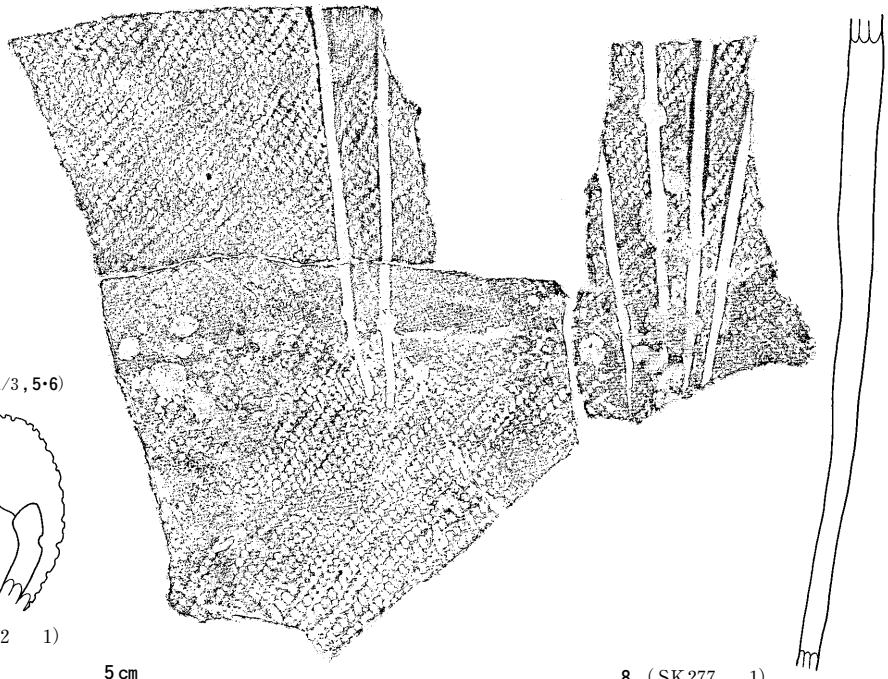


6（SK327　13）
底径：　3.6 cm
器高：[7.0]cm

0　5cm
(1/3，5･6)



7（SK312　1）



8（SK277　1）

0　5cm
(2/5，7･8)

0　5cm
(1/4)

図246　土坑出土遺物（6）

図247　土坑出土遺物（７）

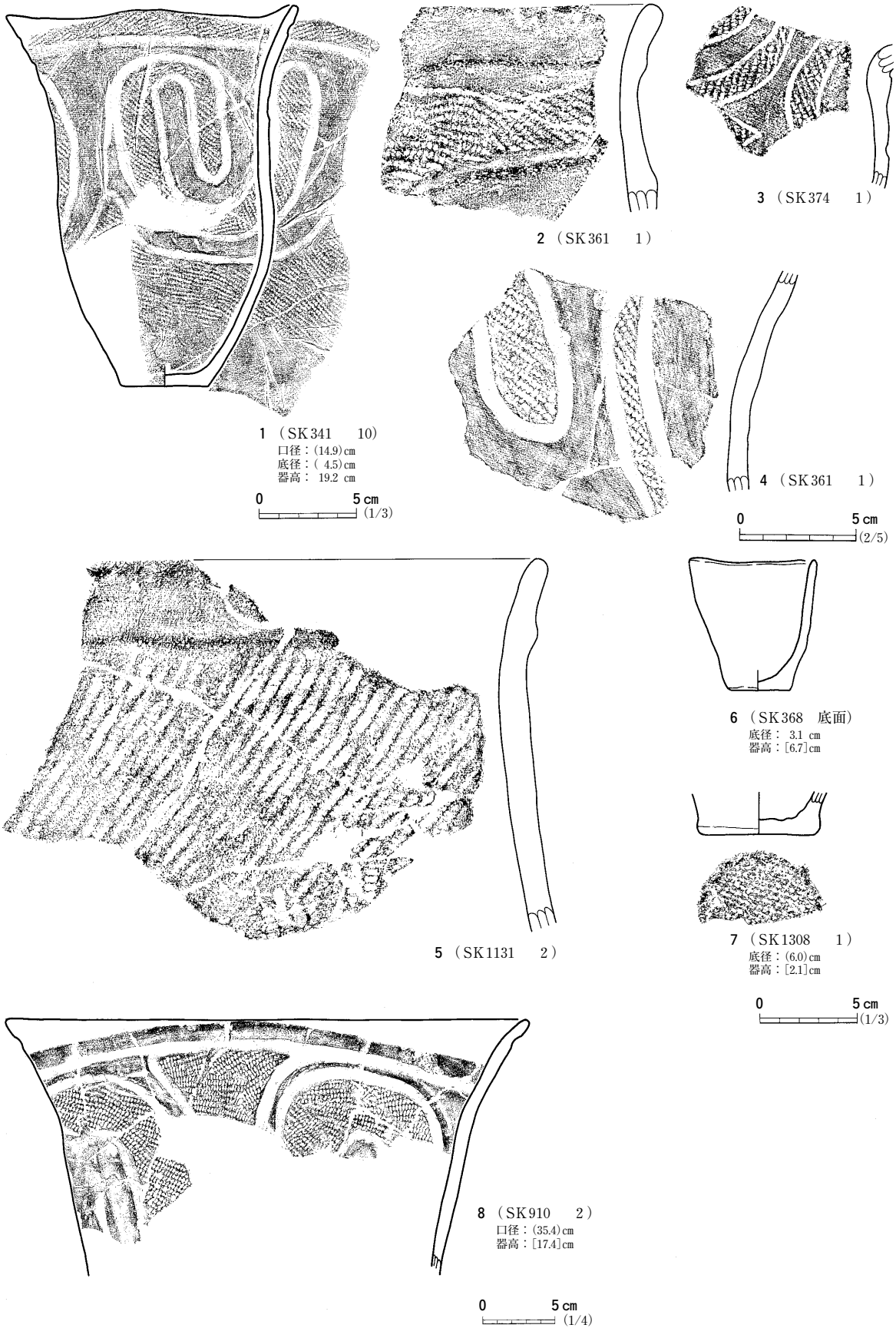


図248　土坑出土遺物（8）

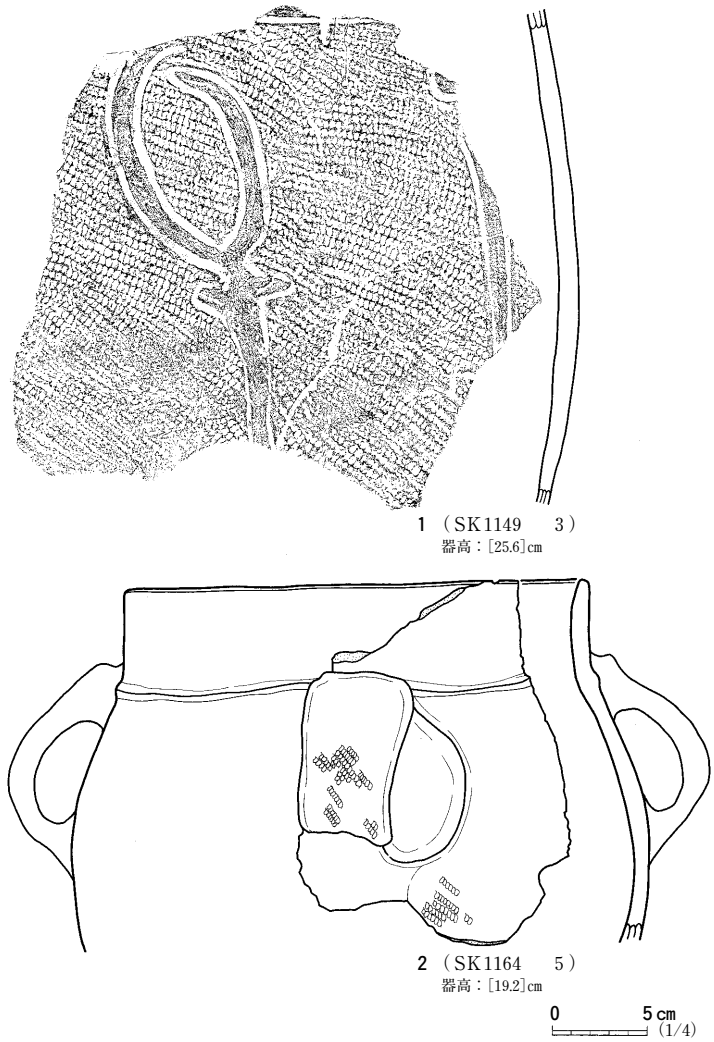


図249　土坑出土遺物（９）

が，表面が摩耗して文字が不鮮明である。

③　底面にピットのあるもの

③に該当する土坑は７基で，それらを列挙すると133・383・937・940・1161・1188・1308号土坑となる。確認面での平面形は楕円形・隅丸長方形・楕円形・円形などで，断面形は箱形のみである。確認面での長軸は90～150cm，深さ40～90cmである。

ピットの平面形をみると不整楕円形・不整方形・方形円形などがあり，円形のものと円形以外の平面形とに分かれる。規模は長軸が18～80cmで，深さが18～28cmである。ピットの底面での位置は，中央部や壁際などである。

なお，1161・1188号土坑などは形状・規模などに共通点がみられ，お互いの距離も５ｍしか離れていない。これらの土坑の機能については明確になしえないが，底面のピットを積極的に評価すると落し穴と考えられるのであろうが，土坑自体の形状は貯蔵穴のようにも考えられる。よって，貯蔵穴の一種であろうか。

遺　　物（図250，写真227）

③に該当する1308号土坑から出土した図250－６は，土器片を研磨して作られた土製円盤である。

①～③以外の土坑から出土した遺物

遺　　物（図241，写真223・225・227・228）

125号土坑から出土したのは，図241－１は把手付の深鉢である。頸部には円形の刻目がなされた隆帯が巡る。140号土坑から出土した図241－９は，ボタン状の浮文と刻目がなされた縦位隆帯が貼り付く。年代はともに縄文後期初頭であろう。

131号土坑から出土した図241－４と，139号土坑から出土した図241－８は隆起線によって渦巻文が描かれている。年代はともに縄文中期後葉であろう。

137号土坑からは図241－11が出土した。キャリパー状の口縁部をなす深鉢である。口縁部には太くて厚みのある隆帯により渦巻文と横位楕円文が描かれる。横位楕円文内に縄文が充填される。

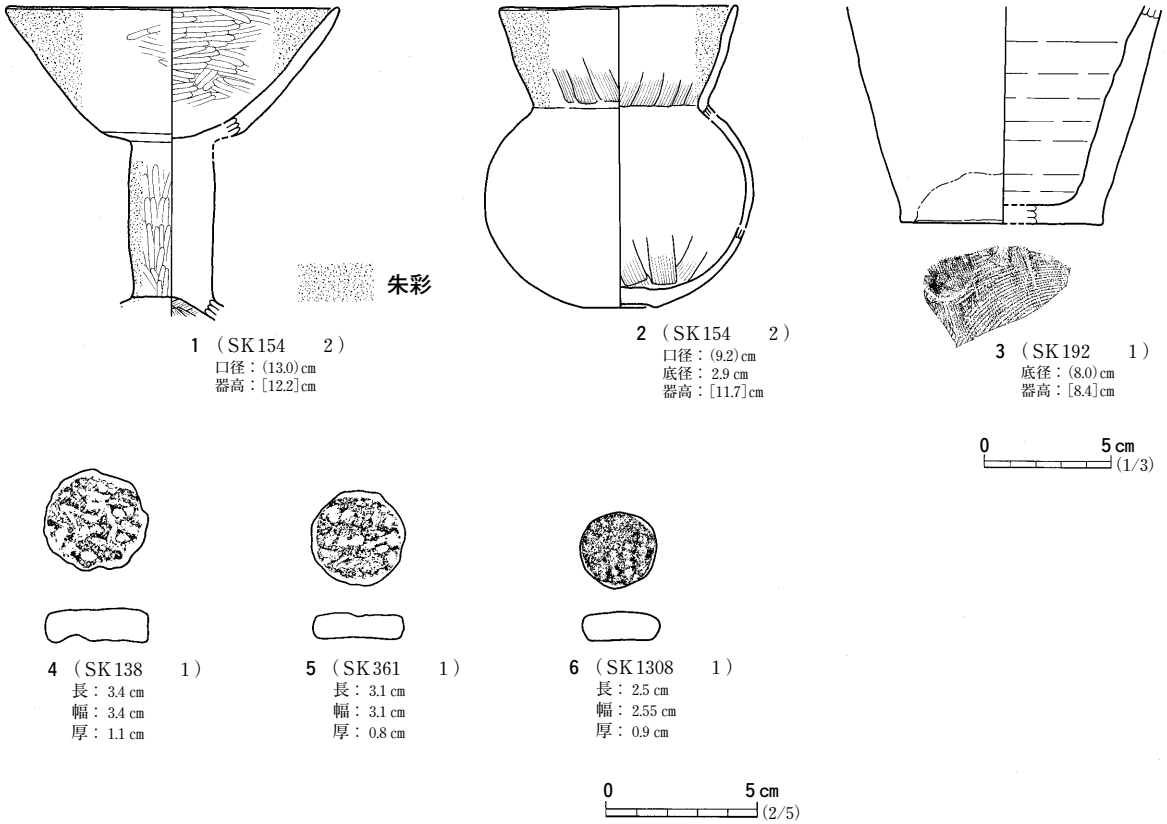


図250　土坑出土遺物（10）

145号土坑からは図241－10・図242などが出土した。図241－10と図242－4はともにキャリパー状の口縁部をなし，口縁部には隆帯によって渦巻文と横位楕円文が描かれていた。図242－4の横位楕円文のなかには撚糸文が充填されていた。胴部には撚糸文を地文とし，縦位の3条沈線による直線文と2条沈線による波状線文がなされていた。それに対して図242－5は縄文を地文としていた。図242－1は波状口縁をなすもので，口縁部に沿って隆帯が巡り，胴部は縦位の2条沈線による直線文と波状線文がなされている。図242－2は胴部の破片で，深鉢のなかでも大型のものである。文様は3条沈線によって描かれている。曲線文とその先端は渦巻文となり，曲線文との間には円文がなされる。地文は縄文で沈線によって磨り消されている。図242－3は無文の浅鉢で頸部がくの字状に屈曲している。図251－3・4は石鏃である。以上の特徴からみて，137・145号土坑から出土した土器の年代は縄文中期中葉と考えている。

149・152号土坑から出土した図243－2・図243－1・3などは，文様は沈線内に縄文が充填されている。これらの年代は縄文中期末葉である。

182号土坑からは図251－7の小型の磨製石斧が出土した。209・338・1149号土坑からは，図245－2・図247－4・図249－1が出土した。図245－2には，沈線間に刺突文がなされていた。図247－4には，比較的幅の広い沈線によって文様が描かれている。口唇部には円形の窪みを表現している。図249－1には縄文を地文として沈線によって文様が描かれている。年代は縄文後期初頭であろう。

269号土坑から出土した図246－4には，沈線で描かれた雲形文様が横方向に展開し，そのなかに

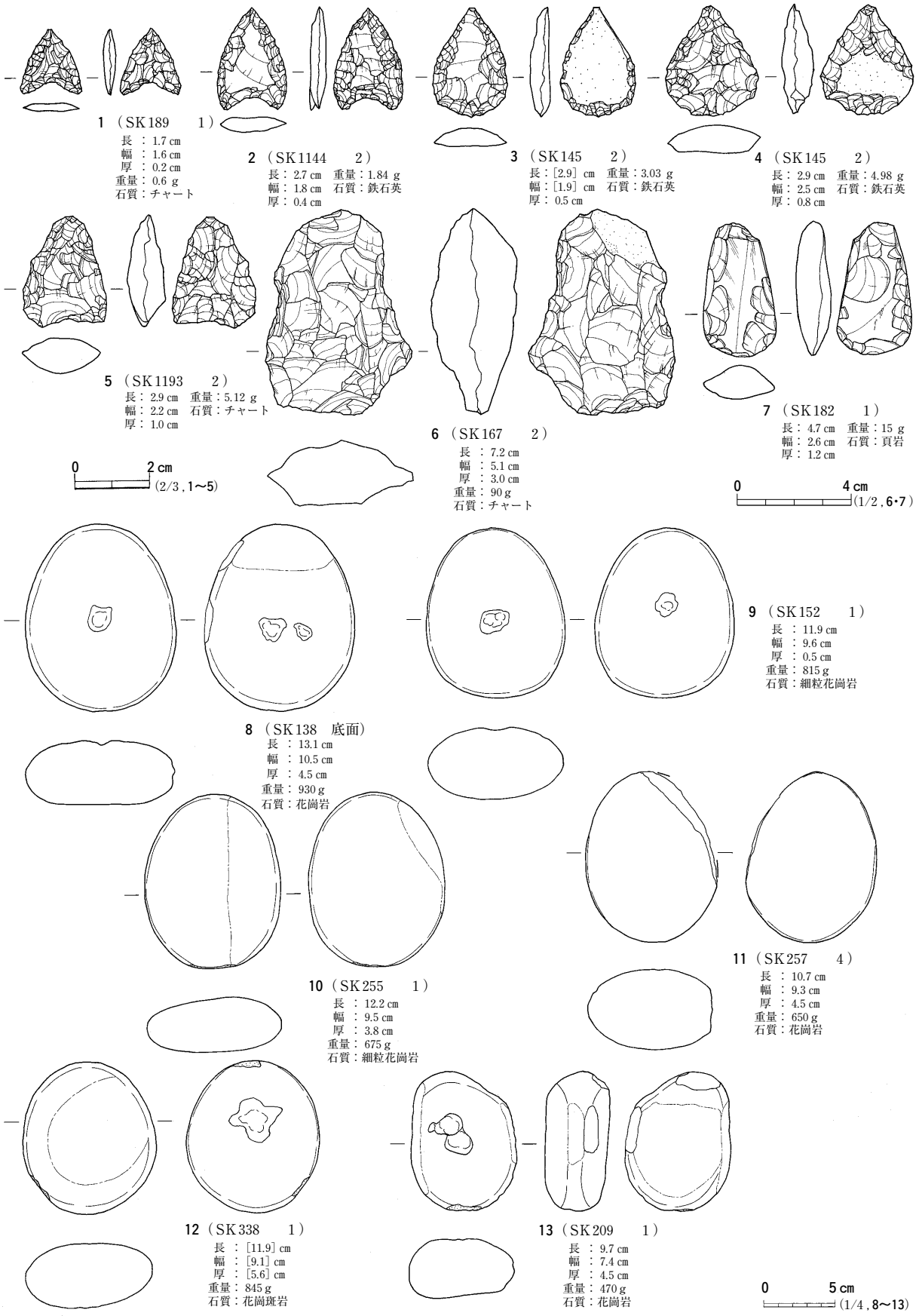


図251　土坑出土遺物（11）

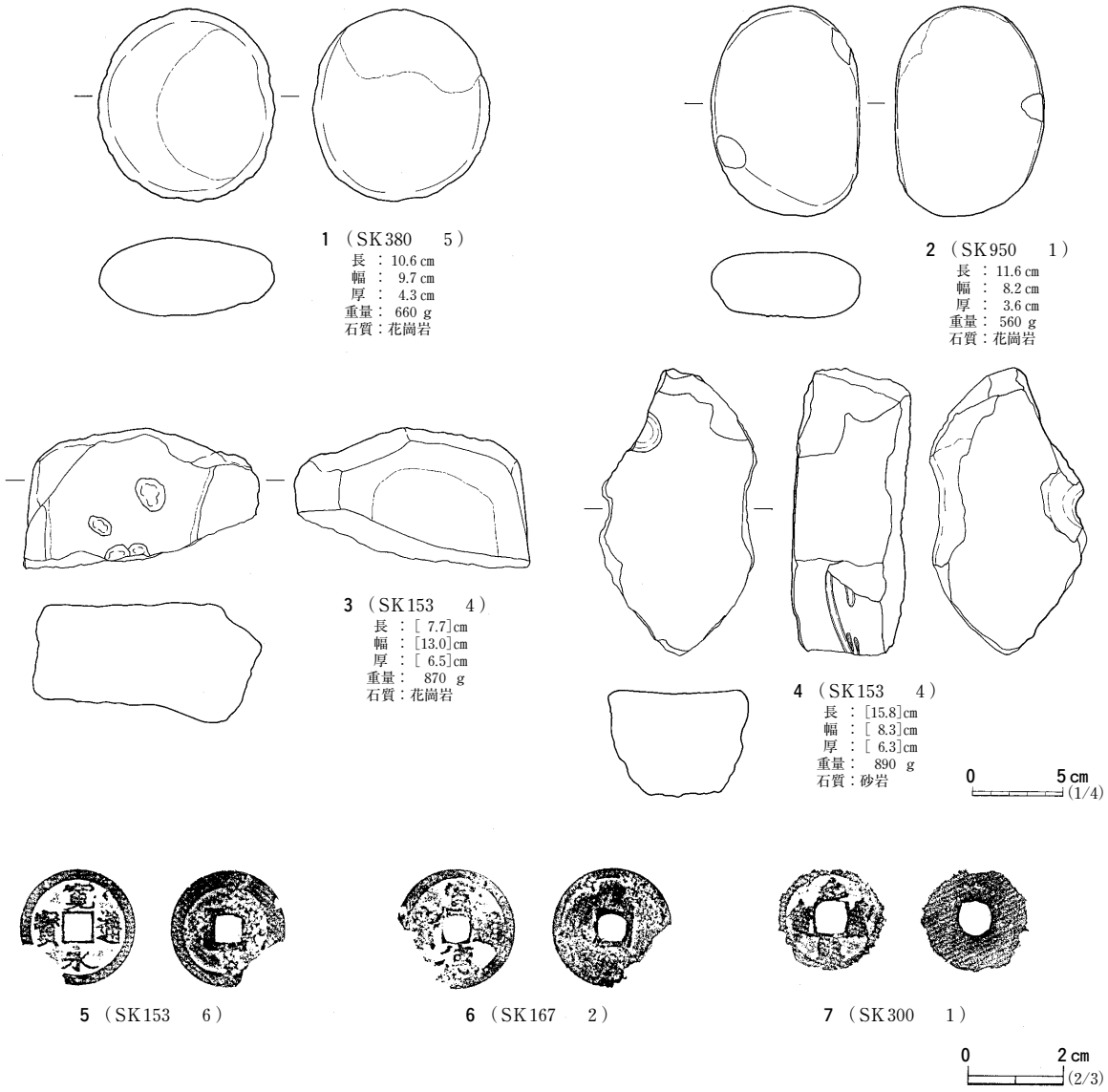


図252　土坑出土遺物（12）

縄文が充填されていた。さらに8の字状貼付文も施されていた。年代は縄文後期前葉であろう。

301号土坑から出土した図246－3には，頸部に横位沈線が巡る。年代は縄文中期末葉である。

361・374・910・1131号土坑からは，図248－2～4・8と図250－5が出土した。2は隆起線で，3・4・8は沈線で文様を描き，そのなかに縄文を充填している。5は頸部に横位の隆帯を巡らし，口縁部の無文帯と胴部の縄文とを区分している。図250－5は土器片から作られた土製円盤である。いずれも年代は縄文中期末葉のものであろう。

154号土坑からは縄文土器に混じって土師器が出土し，そのなかから図250－1・2を図示した。1は高杯で内外面にミガキと朱彩が施されている。杯部は逆ハの字状に開き，脚部は円柱状である。

2は坩で口縁部の内外面に朱彩が施されている。これらの特徴から年代は，古墳時代前期から中期のものとすることができる。

192号土坑からは図250－3の古瀬戸の梅瓶が出土している。　（吉　野）

表３　土坑一覧表（１）

遺構番号	所在（グリッド番号）	平面形		規模			断面形	重複関係 古→新	堆積土		出土遺物種類	時期・機能	備考	遺構挿図番号	遺物挿図番号	写真番号
		確認面	底面	確認面(cm)	底面(cm)	深さ(cm)			層数	状況						
54	ＡＪ－49・50	不	不	340×150	220×40	65	箱	ＳＤ04→ＳＫ54	4	不明				図174		写167
119	ＡＦ－45	楕	不楕	160×130	125×110	54	袋		7	人為		縄文・貯蔵穴		図174		写167
120	Ｚ－63	楕	楕	115×100	95×85	45	箱	ＳＫ120→ＳＩ68	3	自然				図174		写167
121	ＡＪ－49	不楕	円	165×140	140×140	100	袋	ＳＫ121→ＳＤ04	6	自然	縄　1	縄文・貯蔵穴	南西方向フラスコ状に抉れる。	図175		写167
122	ＡＫ－52	円	楕	135×135	135×120	110	袋		5	人為		縄文・貯蔵穴	北西方面フラスコ状に若干抉れる。	図175		写167
123	ＡＧ－45・46	不円	不円	80×80	85×85	60	袋		5	人為			北西方向を除いて抉れる。	図175		写167
124	ＡＨ－60	円	円	115×115	95×95	45	箱		3	自然				図175		写167
125	ＡＨ－46	円	円	80×80	60×60	70	箱		2	自然	縄　47			図175	図241	写167・168
126	Ｚ－54・55	不楕	楕	180×145	150×140	60	袋		4	自然	縄　27　土　3　石　1	縄文・貯蔵穴	北西部が二箇所で抉れる。	図176	図241	写168
127	ＡＨ－47	円	不楕	110×110	120×105	80	袋		6	自然		縄文・貯蔵穴	北部及び西部で若干抉れる。	図176		写168
128	Ｚ－56	円	不円	110×110	90×85	32	箱		4	自然				図176		写168
129	Ｚ・ＡＡ－56	円	楕円	170×170	160×140	25	箱	ＳＫ129→ＳＫ252	3	自然	縄　2	縄文・貯蔵穴		図176		写168
130	ＡＦ・ＡＧ－48	楕	長	180×145	145×40	160	ロ		7	自然	縄　11	縄文・落し穴		図176		写168
131	ＡＨ・ＡＩ－46・47	円	円	240×240	50×50	55	皿		5	自然	縄　7		中位に段あり。	図177	図241	写168
132	ＡＩ－46・47	不円	円	160×150	120×120	70	箱		6	自然	縄　8　石　1		底面北部に礫群あり。	図177		写169
133	ＡＨ－45	楕	楕	150×115	105×55	80	箱		3	自然	縄　1			図177		写169
134	ＡＡ－57	楕	楕	110×100	75×50	30	皿	ＳＫ136→ＳＫ134	2	自然	縄　1　滓　1		底面及び堆積土中に礫あり。	図177		写169
135	ＡＨ・ＡＩ－45	楕	不円	110×95	80×80	60	箱		4	自然	石　1			図177		写169
136	ＡＡ－57	楕	楕	150×120	105×95	38	箱	ＳＫ136→ＳＫ134	5	自然				図178		写169
137	ＡＩ－45・46	不楕	円	130×120	90×90	56	箱		4	自然	縄　22		中位に段あり。北東部と西部で抉れる。	図178	図241	写169
138 a	Ｚ－57・58	円	円	130×130	140×140	54	袋	ＳＫ138ｂ→ＳＫ138ａ	6	自然	縄　125　石　6 他（取っ手２）	縄文・貯蔵穴	炭化物・焼土混入。底面に礫あり。元来はフラスコ状であったことが考えられる。	図178	図241・250・251	写169・227・231
138 b	Ｚ－57・58	円	円	130×130	140×140	84	袋	ＳＫ138ｂ→ＳＫ138ａ	3	自然	縄　18　石（石３，磨石２）	縄文・貯蔵穴	木炭集積層を含む。底面に礫あり。元来はフラスコ状であったことが考えられる。	図178	図241・250・251	写169・227・231
139	ＡＫ－46	不円	楕	150×150	140×120	55	箱		2	人為	縄　5			図178	図241	写170
140	Ｚ・ＡＡ－57・58	楕	楕	240×200	190×115	45	皿	ＳＫ140→ＳＫ260	10	自然	縄　36			図179	図241	写170
141	ＡＪ－48	不楕	楕	180×145	140×110	30	皿	ＳＫ141→ＳＫ142・ＳＤ04	3	自然				図179		写170
142	ＡＪ－48	楕	楕	145×120	110×100	60	箱	ＳＫ141→ＳＫ142	5	自然	縄　3	縄文・貯蔵穴	堆積土中に礫あり。	図179		写170
143	ＡＪ・ＡＫ－50・51	不円	楕	120×120	140×120	80	袋	ＳＫ143→ＳＤ04	5	自然		縄文・貯蔵穴		図179		写170
144	ＡＫ－48	円	円	130×130	120×120	70	袋		5	自然	縄　14　石（石１，石器１）	縄文・貯蔵穴		図180		写170
145	ＡＨ・ＡＩ－49	不楕	不楕	175×150	130×120	145	筒		6	自然	縄　111　土１		北東部が抉れる。	図180	図241・242・251	写170・224・225・233

表3　土坑一覧表（2）

遺構番号	所在（グリッド番号）	平面形		規模			断面形	重複関係 古→新	堆積土		出土遺物種類	時期・機能	備考	遺構挿図番号	遺物挿図番号	写真番号
		確認面	底面	確認面(cm)	底面(cm)	深さ(cm)			層数	状況						
146	ＡＩ－49	不楕	不円	130×120	130×130	65	袋		5	人為		縄文・貯蔵穴	南部を除き，他の全方向で抉れる。	図180		写171
147	ＡＨ－49	不	不楕	130×95	75×45	30	皿		4	自然	石（磨石１）		堆積土中に礫あり。	図180		写171
148	ＡＢ－58	楕	楕	130×120	110×100	54	袋		7	人為	縄　11		西側が抉れる。	図180		写171
149	ＡＤ－58・59	楕	楕	210×110	115×90	56	箱		8	自然	縄　14		南側が抉れる。	図181	図243	写171
150	ＡＦ－47	不円	不円	80×75	50×50	30	箱		3	自然				図181		写171
151	ＡＥ－46	不楕	楕	150×130	115×100	60	箱		6	自然	縄　26			図181		写171
152	ＡＩ－49	楕	楕	95×80	85×65	85	袋		4	自然	縄　34　石（磨石２）			図181	図243・251	写171
153	ＡＮ－69・70	不楕	不楕	170×150	140×120	60	箱		5	人為	滓　4　陶　1　石（石７，磨石５，石臼１）		底面全体に礫群あり。	図181	図252	写172・225
154	ＡＬ・ＡＭ－50	不楕	不楕	320×260	270×220	35	皿		5	自然	縄　59　土　87　石　1			図182	図250	写171
155	ＡＩ－48	円	楕	130×130	110×100	45	箱	ＳＫ155→ＳＩ34	2	自然	石（石器１）		底面に礫あり。	図182		写172
156	ＡＥ－61	楕	円	123×110	115×115	58	袋		12	人為	縄　42	縄文・貯蔵穴	15cmほどの完形ミニチュア土器出土。西側が抉れる。底面に礫あり。	図182	図243	写172・225
157	ＡＮ－52・53	楕	楕	230×190	210×170	105	箱		7	自然				図182		写172
158	ＡＮ－53	不円	不円	130×125	90×90	25	皿		1	自然				図183		写172
159	ＡＢ－60	楕	円	130×115	125×105	72	袋		4	人為	縄　11　石（磨石２）	縄文・貯蔵穴	南・北２方向で若干抉れる。底面に礫あり。	図183		写172
160	ＡＡ－59	楕	楕	185×160	170×135	20	皿		2	自然	縄　25　石（石器１，磨石１）		底面に土器片。礫出土。	図183	図243	写173
161	Ｚ－57	楕	楕	85×78	68×62	45	箱		6	自然	縄　1			図183		写173
162	ＡＬ・ＡＭ－53	楕	楕	175×150	140×125	140	筒		6	自然				図183		写173
163	ＡＭ－54	不円	不円	150×150	140×140	120	袋		4	自然	縄　4	縄文・貯蔵穴	全ての方向で抉れる。	図184		写173
164	Ｙ－60・61	楕	円	135×120	40×40	25	皿	ＳＫ164→ＳＫ261	1	自然				図184		写173
165	ＡＬ・ＡＭ－54	隅長	隅長	175×140	145×115	30	皿		2	人為				図184		写173
166	ＡＭ－54・55	隅長	隅長	190×160	180×140	30	皿		2	人為				図184		写173
167	ＡＡ－62	円	円	165×165	40×40	44	皿		2	人為	土　2　滓　2　石（石１，打斧１）他（古銭１）		堆積土中に礫群あり。	図184	図251・252	写173・235
168	ＡＫ－53	円	円	150×150	135×135	110	袋		5	自然	縄　1	縄文・貯蔵穴		図185		写174
169	ＡＡ・ＡＢ－61	楕	楕	140×70	140×50	38	箱		1	自然			北東部が抉れる。	図185		
170	Ｘ－48・49	楕	楕	126×110	85×75	50	箱	ＳＫ170→ＳＩ45	5	自然	縄　5　土　1　須　1　滓　1		ＳＩ45東南隅。	図185		写174
171	ＡＭ－54	隅長	隅長	190×120	150×95	60	箱	ＳＫ172→ＳＫ171	5	人為	縄　4　須　2			図185		写174
172	ＡＭ－54	隅長	不	190×110	160×70	60	箱	ＳＫ172→ＳＫ171	5	人為				図185		
173	ＡＭ・ＡＮ－54	不楕	不楕	145×90	120×65	25	皿		1	人為	縄　3			図186		写174
174	ＡＮ－53・54	不楕	不円	170×160	170×170	110	袋		3	自然		縄文・貯蔵穴	南東方面を除いてほぼ全方向が抉れる。	図186		写174
175	ＡＧ・ＡＨ－59	楕	不円	145×130	135×135	80	筒		4	自然	縄　7	縄文・貯蔵穴	北西部が抉れる。	図186		写174
176	ＡＯ－54	楕	楕	170×(110)	130×(90)	50	皿	ＳＫ178→ＳＫ176	3	自然	縄　1		北東部の一部が調査区外のため未調査。	図186		写175
177	ＡＮ・ＡＯ－54	不楕	不楕	190×160	170×140	60	箱		2	人為	縄　1			図186		写174
178	ＡＯ－54	不楕	不楕	155×(110)	150×(110)	100	袋	ＳＫ178→ＳＫ176	5	人為	縄　6　石　1	縄文・貯蔵穴	北東部の一部が調査区外のため未調査。ほぼ全方向が抉れる。	図187	図244	写175
179	ＡＯ－54・55	楕	楕	170×150	145×130	70	筒		5	人為	縄　98	縄文・貯蔵穴	中位に段あり。全方向に若干抉れる。	図187	図244・245	写174・255
180	ＡＧ－60	楕	楕	175×160	140×125	70	箱		3	自然	縄　50	縄文・貯蔵穴	底面から土器出土。縄文中期末葉～後期初め。	図187	図245	写175
181	ＡＨ－59	楕	不円	145×130	120×120	60	箱		4	自然				図187		写175

表３　土坑一覧表（３）

遺構番号	所在（グリッド番号）	平面形		規模			断面形	重複関係 古→新	堆積土		出土遺物種類	時期・機能	備考	遺構挿図番号	遺物挿図番号	写真番号
		確認面	底面	確認面(cm)	底面(cm)	深さ(cm)			層数	状況						
182	ＡＧ－62	楕	楕	190×160	160×135	55	箱		2	人為	縄　1　石（石器１）			図187	図251	写175
183	ＡＭ－51	不楕	不楕	180×160	160×150	80	筒	ＳＫ183→ＳＫ154	6	自然				図188		写175
184	ＡＭ－69	不円	楕	140×140	115×100	50	箱		5	自然				図188		写175
185	ＡＫ・ＡＬ－55	円	円	230×(120)	110×(60)	50	箱		5	人為			北側半分が撹乱により消失。	図188		写175
186	ＡＭ－55	隅方	隅方	80×80	60×60	20	皿		2	自然				図188		写176
187	ＡＬ－69	楕	楕	130×115	110×95	50	袋		4	自然		縄文・貯蔵穴		図188		写176
188	ＡＣ－53	楕	楕	140×130	130×120	50	袋		6	人為	縄　1　須　1　滓　4 陶　3　石　1		北東部が抉れる。	図189		写176
189	ＡＡ－58	楕	円	115×105	110×110	60	袋		10	自然	縄　28　石（石２，石鏃１）	縄文・貯蔵穴		図189	図251	写233
190	ＡＭ・ＡＮ－55・56	不楕	不楕	200×170	180×165	85	筒		2	人為	縄　7	縄文・貯蔵穴	北東部及び南西部の２箇所が抉れる。底面に１個の礫あり。	図189	図245	写176
191	ＡＥ－62・63	楕	楕	150×120	60×40	45	皿		3	人為				図189		写176
192	ＡＭ・ＡＮ－56	隅長	隅長	205×100	180×90	45	箱		4	人為	陶　1			図189	図250	写176・228
193	ＡＤ・ＡＥ－63	楕	楕	120×100	70×60	35	箱		3	自然			中位に段あり。底面に礫あり。	図190		写176
194	ＡＭ・ＡＮ－54	楕	楕	215×200	200×180	80	筒		4	自然				図190		写176
195	ＡＤ・ＡＥ－62	楕	楕	145×130	100×90	55	箱		9	自然			底面に礫あり。	図190		写177
196	ＡＤ－63・64	楕	隅方	95×85	65×65	45	箱		3	自然				図190		写177
197	ＡＥ－61・62	楕	円	190×185	160×160	100	袋		17	人為	縄　11　土　1　石　1	縄文・貯蔵穴	底面に礫あり。	図190		写177
198	ＡＤ－66	楕	円	100×90	70×70	30	箱		5	自然				図191		写177
199	ＡＣ・ＡＤ－66・67	楕	円	140×130	135×135	66	袋		11	人為	縄　10	縄文・貯蔵穴	底面に礫あり。	図191		写177
200	ＡＮ－56・57	隅長	隅長	155×95	130×80	35	箱		2	自然	縄　1　須　1			図191		写177
201	ＡＮ－58	不円	不円	220×220	200×200	85	袋		7	自然		縄文・貯蔵穴		図191		写177
202	ＡＯ－58	楕	不円	140×120	55×55	40	皿		1	自然				図191		写177
203	ＡＪ－57・58	楕	楕	180×145	165×130	100	袋		3	自然	縄　5	縄文・貯蔵穴		図192		写178
204	ＡＢ・ＡＣ－57・58	不楕	不楕	230×180	220×160	20	皿		1	自然	縄　7			図192		写178
205	ＡＪ－52	楕	楕	100×75	70×55	40	箱	ＳＫ205→ＳＤ04	2	自然				図192		写178
206	ＡＯ－58	不楕	不円	175×160	150×150	60	袋		4	自然		縄文・貯蔵穴		図192		写178
207	ＡＰ－57・58	不円	不円	135×135	120×120	35	箱		3	自然	縄　68　石　3			図192		写178
208	ＡＰ－57	不	不	130×120	90×75	30	皿		2	自然	縄　1			図193		写178
209	ＡＰ－57	楕	楕	145×130	75×50	45	皿		2	自然	縄　2　石　2			図193	図245・251	写178
210	ＡＬ－50	長楕	長楕	160×70	140×45	40	皿	ＳＫ210→ＳＤ05	2	自然				図193		写179
212	ＡＬ－66	楕	不	125×100	90×55	40	箱		4	自然			検出面に礫あり。	図193		
214	ＡＯ－58	楕	楕	150×135	140×125	60	箱		4	自然	縄　6			図193		写179
217	ＡＪ・ＡＫ－57	円	円	140×140	150×150	65	袋		5	自然	縄　17　石　1	縄文・貯蔵穴	すべての方向が抉れる。底面に礫あり。	図193		写179
222	ＡＮ－53・54	円	円	120×120	85×85	40	箱		3	自然				図194		写179
223	ＡＮ－58	楕	楕	95×70	65×50	15	皿		1	自然				図194		写179
225	ＡＭ－58	円	円	85×85	90×90	80	袋		4	自然	縄　19	縄文・貯蔵穴	すべての方向が抉れる。底面から土器出土。縄文中期後葉～末葉。	図194	図245	写179・225

表3　土坑一覧表（4）

遺構番号	所在（グリッド番号）	平面形		規模			断面形	重複関係 古→新	堆積土		出土遺物種類	時期・機能	備考	遺構挿図番号	遺物挿図番号	写真番号
		確認面	底面	確認面(cm)	底面(cm)	深さ(cm)			層数	状況						
227	ＡＪ・ＡＫ－51	楕	円	140×120	160×160	100	袋		6	人為	縄　7	縄文・貯蔵穴	すべての方向がフラスコ状に抉れる。	図194		写179
228	ＡＫ－53	不円	不楕	130×130	110×100	65	箱		6	人為	縄　9		北方向約半分が軽く抉れる。	図194		写179
229	ＡＪ－53	楕	楕	130×115	115×100	75	筒		3	自然	縄　3　石（磨石１）			図194		写180
230	ＡＪ－53・54	円	不円	130×130	100×100	70	箱		2	自然	石　1		底面に礫あり。	図195		写180
233	ＡＫ－54	楕	楕	150×140	130×120	30	皿		1	自然	縄　12			図195		写180
235	Ｚ－48	円	円	120×120	150×150	85	袋		13	人為	縄　21	縄文・貯蔵穴	すべての方向がフラスコ状に抉れる。底面に礫あり。	図195		写180
236	ＡＡ－51	楕	楕	140×130	105×90	60	箱		13	人為	縄　14			図195		写180
238	ＡＫ－58	円	円	130×130	140×140	110	袋		4	自然	縄　3	縄文・貯蔵穴	すべての方向が抉れる。	図195		写180
239	ＡＫ－59	不円	不円	120×120	100×100	60	箱		4	自然		縄文・貯蔵穴		図196		写180
240	ＡＫ－59	不円	不円	140×140	140×140	50	筒		3	自然	縄　3	縄文・貯蔵穴	南西方向の約半分が抉れる。	図196		写180
243	ＡＭ－60	楕	楕	150×130	135×120	90	筒		4	自然				図196		写181
244	ＡＮ－60	楕	楕	135×120	120×95	45	箱		2	自然				図196		写181
246	Ｗ・Ｘ－55・56	楕	楕	150×130	180×170	78	袋		15	自然	縄　27　他（粘土）	縄文・貯蔵穴	すべての方向が抉れる。底面から土器出土。縄文中期後葉。堆積土に礫あり。	図196	図246	写181
247	ＡＮ－60	楕	楕	130×115	100×90	60	箱		4	自然				図197	図246	写181
248	ＡＮ・ＡＯ－61	不円	不円	140×140	110×110	65	箱		3	自然				図197		写181
249	ＡＮ－61	楕	楕	100×75	75×55	15	皿		2	自然				図197		写181
250	ＡＦ－45・46	不楕	不楕	155×140	165×125	85	袋		5	自然		縄文・貯蔵穴	底面に礫あり。	図197		写181
251	ＡＪ・ＡＫ－61	円	円	165×165	165×165	45	筒	ＳＫ251→ＳＫ285	7	自然	縄　1	縄文・貯蔵穴	南東方向を除いて軽く抉れる。	図197		写182
252	Ｚ・ＡＡ－56	楕	楕	160×150	150×130	85	筒	ＳＫ129→ＳＫ252	11	人為		縄文・貯蔵穴	南東方向が抉れる。	図198		写181
253	ＡＬ－66	楕	楕	165×145	65×55	35	皿		2	自然			中位に段あり。	図198		写182
254	ＡＭ－61	楕	楕	120×(55)	115×(50)	75	筒		2	自然			北側約半分が撹乱により消失。堆積土中に礫あり。	図198		写182
255	ＡＣ－62	楕	楕	160×140	140×120	110	筒		16	人為	縄　9　石　1	縄文・貯蔵穴	北側１／４を除いて抉れる。堆積土中に礫あり。	図198	図251	写182
256	ＡＬ－60	不円	楕	150×140	115×100	65	箱		3	自然				図199		写182
257	ＡＫ・ＡＬ－60	不楕	不楕	170×145	145×120	100	箱		4	自然	石　1			図199	図251	写182
258	ＡＬ－69	楕	円	155×140	125×125	60	箱		2	自然				図199		写182
259	ＡＭ・ＡＮ－63	不	不	170×140	135×115	35	箱		1	自然				図199		写183
260	ＡＡ－57・58	楕	楕	140×120	90×65	25	皿	ＳＫ140→ＳＫ260	1	人為			堆積土中に礫あり。	図199		写183
261	Ｙ－60・61	楕	楕	145×135	55×40	25	皿	ＳＫ164→ＳＫ261	2	人為	縄　3　土　1　滓　1		中位に段あり。堆積土中に礫あり。	図200		写183
262	ＡＤ－61	楕	円	120×110	120×120	47	袋		5	自然	縄　1　土　1	縄文・貯蔵穴	北側の一部を除いて抉れる。底面に礫１点あり。	図200		写183
263	ＡＬ－61	楕	不円	160×140	120×120	70	袋		7	人為		縄文・貯蔵穴		図200		写183
264	ＡＬ－62	不楕	不楕	95×80	90×80	40	筒		2	自然				図200		写183
265	ＡＬ－63	楕	楕	140×125	100×85	60	箱		4	自然	縄　7　石　2		底面に礫あり。	図200		写183
266	ＡＪ－55	楕	楕	220×180	200×180	55	袋	ＳＫ266→ＳＫ88	3	自然		縄文・貯蔵穴	北東部のみ浅く抉れる。	図201		写184
267	ＡＮ・ＡＯ－64	不円	不円	150×150	120×120	70	箱		5	自然				図201		写184
268	ＡＡ－49	楕	円	160×130	110×110	50	箱		4	自然	縄　7		底面に礫あり。	図201		写184

表３　土坑一覧表（５）

遺構番号	所在（グリッド番号）	平面形		規模			断面形	重複関係 古→新	堆積土		出土遺物種類	時期・機能	備考	遺構挿図番号	遺物挿図番号	写真番号
		確認面	底面	確認面(cm)	底面(cm)	深さ(cm)			層数	状況						
269	ＡＭ・ＡＮ－64	楕	楕	150×140	130×115	75	箱		3	自然	縄　26		堆積土中から堀之内Ⅱ式。	図201	図246	写184
270	ＡＭ－64	隅長	隅長	145×90	125×60	135	筒		2	自然				図202		写184
271	ＡＭ－64	不	不	135×125	110×95	60	箱		4	自然	縄　1　石　1		底面に礫あり。	図202		写184
273	ＡＭ・ＡＮ－66・67	不円	不円	115×115	80×80	50	箱	ＳＫ274→ＳＫ273	2	自然				図202		写184
274	ＡＭ・ＡＮ－67	不円	不円	170×170	130×130	60	箱	ＳＫ274→ＳＫ273	4	自然	縄　2　陶　1			図202		写184
275	ＡＫ－58	円	円	165×165	150×150	65	袋	ＳＫ275→ＳＤ07	3	自然	縄　1	縄文・貯蔵穴	底面に礫あり。	図202		写185
277	ＡＮ・ＡＯ－66	不円	不円	135×135	110×110	60	箱		5	自然				図203	図246	写185
278	ＡＯ－67	楕	円	120×(40)	45×(20)	70	皿		4	自然			東側約半分が調査区外のため未調査。	図203		写185
279	ＡＫ－69	楕	円	100×90	50×50	12	皿		1	自然				図203		写185
280	ＡＫ－61	不楕	不円	170×150	140×140	70	箱		4	自然				図203		写185
281	ＡＫ－67	不円	不円	140×140	120×120	80	筒		3	自然			底面に礫あり。	図203		写185
282	ＡＣ－56	長楕	長楕	180×100	145×70	140	ロ		12	人為	縄　2			図204		写185
283	ＡＫ－57	不円	不円	160×160	140×140	15	皿	ＳＫ283→ＳＤ07	1	自然	縄　4		堆積土中に礫あり。	図204		写185
284	ＡＬ－56	不楕	楕	125×110	95×85	20	皿		2	自然				図204		写186
285	ＡＪ－60	不楕	不楕	235×215	200×185	54	皿		15	自然	縄　7		１次調査の３号竪穴状遺構から変更。	図204		写182
286	ＡＫ－67	不楕	不円	195×160	125×125	60	箱		7	自然	縄　6		堆積土中に礫あり。	図205		写186
287	ＡＬ－49	楕	楕	180×160	150×140	55	箱		4	人為	縄　5　土　3　石　2		堆積土中に礫あり。	図205		写186
288	ＡＪ－57	円	円	170×170	155×155	60	箱		5	自然			底面に礫あり。	図205		写186
289	Ｕ－45	円	円	110×110	100×100	10	皿		1	自然				図205		写186
290	Ｖ－45	円	隅方	120×120	110×95	13	皿		1	自然				図205		写186
291	Ｖ・Ｗ－44	楕	楕	(100)×120	(90)×110	40	箱		4	自然			北側の約１／３が調査区外のため未調査。底面に礫あり。	図205		写186
292	Ｕ－47	円	楕	120×120	110×100	48	箱	ＳＫ292→ＳＩ43	7	自然			北西部が抉れる。	図206		写186
293	Ｔ－50	楕	楕	90×80	85×57	15	皿		1	自然				図206		写187
294	Ｔ－52・53	円	円	170×170	160×160	55	袋		10	自然	縄　19　石　2　他（炭４）	縄文・貯蔵穴	東側が抉れる。	図206		写187
295	Ｕ－48	楕	楕	150×120	80×65	25	皿	ＳＫ296→ＳＫ295	1	自然				図206		写187
296	Ｕ・Ｖ－48	楕	楕	160×110	105×80	50	箱	ＳＫ296→ＳＫ295	2	自然	他（鉄製刀子１）			図206		写187
297	Ｔ・Ｕ－49	円	円	150×150	140×140	45	箱		5	自然				図206		写187
298	Ｘ－44	不円	楕	110×110	100×95	45	箱		4	自然	縄　1		底面に礫あり。	図207		写187
299	Ｘ－50	楕	楕	185×140	120×85	35	皿	ＳＫ299→ＳＫ320	2	自然				図207		写187
300	Ｘ－50	隅五	楕	140×120	45×30	35	皿		2	自然	縄　1　土　2　滓　1　他（銭１）		底面に礫あり。	図207	図252	写187・235
301	Ｘ－50	楕	楕	145×110	130×100	70	箱		8	自然				図207		写188
302	Ｙ－49	楕	楕	130×105	100×95	70	筒	ＳＫ302→ＳＫ332	12	人為	縄　8		東側が若干抉れる。	図207		写188
303	Ｙ・Ｚ－45	円	円	120×120	110×110	45	箱		6	自然	縄　2		底面に礫あり。	図208		写188
304	Ｚ・ＡＡ－50	楕	楕	120×105	135×125	95	袋		11	自然	縄　7	縄文・貯蔵穴	すべての方向が抉れる。底面に礫あり。	図208		写188
305	Ｚ－50・51	楕	楕	105×100	85×80	70	箱		10	人為	縄　7			図208		写188
306	Ｕ－48	楕	円	155×140	130×130	45	箱		4	人為			南側が抉れる。	図208		写188
307	Ｖ・Ｗ－46	楕	楕	125×110	110×100	50	袋		7	自然	縄　4	縄文・貯蔵穴		図208		写188
308	Ｘ－44・45	隅五	不円	130×120	110×105	50	箱	ＳＫ308→ＳＤ06	6	自然	縄　5			図208		写189
309	Ｖ－49・50	楕	不円	145×135	110×110	65	箱		5	自然				図209		写189
310	Ｕ－52	不円	不円	160×160	120×120	15	皿		2	自然				図209		写189
311	Ｗ－50	不円	楕	120×120	110×90	90	箱		7	自然	土　1	縄文・貯蔵穴	南東方向が抉れる。	図209		写189

表3　土坑一覧表（6）

遺構番号	所在（グリッド番号）	平面形		規模			断面形	重複関係 古→新	堆積土		出土遺物種類	時期・機能	備考	遺構挿図番号	遺物挿図番号	写真番号
		確認面	底面	確認面(cm)	底面(cm)	深さ(cm)			層数	状況						
312	W－52	不円	円	110×110	125×125	75	袋		10	自然	縄　21　石（石1，磨石1）	縄文・貯蔵穴	南側1mを除き，最大で20cmほど抉れる。堆積土中に礫あり。	図209	図246・247	写189
313	V－52・53	楕	楕	160×145	145×110	65	箱		7	自然	縄　12			図209		写189
314	W・X－53	不楕	楕	180×165	160×140	50	箱		9	自然				図209		写189
315	V－51	楕	楕	115×105	100×85	40	箱		9	自然		縄文・貯蔵穴	底面から土器出土。縄文中期後葉～末葉。	図210	図246	写190
316	T－50	楕	楕	130×(50)	115×(40)	40	箱		6	自然			西側半分以上が調査区外のため未調査。	図210		
317	V・W－48	楕	楕	150×135	125×115	50	箱		7	自然	縄　15			図210		写190
318	W－45	不楕	楕	150×135	145×135	60	袋		9	自然		縄文・貯蔵穴	南側の1／4程度を除き，抉れる。底面に礫あり。	図210		写190
319	W－50・51	楕	不楕	280×240	200×140	160	袋		22	人為	滓　1		全方向で提灯状に抉れる。堆積土中に礫あり。	図210		写190
320	X－50	楕	不円	160×140	65×65	50	皿	SK299→SK320	2	自然			中位に段あり。堆積土中に礫あり。	図211		写190
321	X－49	楕	楕	105×95	80×70	18	皿		2	自然				図211		写190
322	Z－46	楕	楕	135×120	120×105	23	皿		3	自然				図211		写190
323	Y・Z－50	不円	不円	115×115	100×100	60	袋		10	自然	縄　1	縄文・貯蔵穴	東側が抉れる。	図211		写190
324a	Z－49・50	楕	円	160×140	75×75	36	皿	SK324b→SK324a	5	自然				図211		写191
324b	Z－49・50	隅長	隅長	220×160	190×150	10	皿	SK324b→SK324a	1	自然				図211		写191
325	Z－49・50	不円	不楕	110×110	100×80	40	箱		3	自然			南西部で一箇所抉れる。	図211		写191
326	Y－49	楕	楕	120×100	100×80	34	箱	SK326→SK332	2	自然				図212		写191
327	Y・Z－49	不楕	不楕	130×120	120×110	95	袋		13	自然	縄　101	縄文・貯蔵穴	完形ミニチュア土器含む。全方向で深く抉れる。底面に礫あり。	図212	図246・247	写191・225
328	Z・AA－49・50	円	円	150×150	130×130	100	筒		17	自然	縄　15　石　2		南側半分が浅く抉れる。	図212		写191
329	Z－49	不円	楕	115×115	100×90	55	筒		8	自然	縄　6　石　3			図212		写191
330	Z－49	不楕	円	115×90	90×90	52	袋		11	人為	縄　6		南側の約1／3が抉れる。	図212		写191
331	V・W－49	隅長	不楕	160×110	135×85	40	箱		6	自然	縄　2　滓　1			図213		写191
332	Y－49	不楕	不楕	150×100	100×70	15	皿	SK302・SK326→SK332	1	自然				図213		写192
333	AC－51・52	楕	楕	140×115	120×100	30	箱		4	自然				図213		写192
334	AB－51・52	不円	不円	85×85	64×40	22	皿		3	自然				図213		写192
335	AC－52	楕	不円	150×120	110×110	30	袋		3	自然	縄　10			図213		写192
336	AC－52・53	楕	不円	145×125	130×130	68	袋		11	自然	縄　9	縄文・貯蔵穴	東側が一部抉れる。底面に礫あり。	図213		写192
337	AB・AC－53	不円	不円	140×140	130×130	65	袋		12	自然	石（磨石2）	縄文・貯蔵穴	ほぼすべての方向が抉れる。	図214		写192
338	AA－51・52	不楕	不円	160×140	120×120	35	箱		7	自然	縄　29　石（磨石2）			図214	図247・251	写192
339	AA－52	不楕	不楕	160×130	140×100	12	皿		1	自然	縄　4			図214		写192
340	AB－53	不	不円	150×130	105×105	40	箱		5	自然	縄　3			図214		写193
341	X－56	不円	楕	105×105	100×90	70	箱		15	人為	縄　28		底面に礫あり。	図214	図248	写193・226
342	Y－55	隅方	不	150×150	100×30	55	袋		10	自然			中位に広い平坦部あり，南西部が抉れる。	図214		写193
343	X・Y－55・56	楕	不円	160×145	140×140	35	皿		7	自然	縄　2　須　2　石　1	縄文・貯蔵穴	北西方向に抉れる。	図215		写193
344	X－55・56	不楕	楕	150×130	115×100	40	箱		8	自然	縄　9		底面に礫あり。	図215		写193

表３　土坑一覧表（７）

遺構番号	所在（グリッド番号）	平面形		規模			断面形	重複関係 古→新	堆積土		出土遺物種類	時期・機能	備考	遺構挿図番号	遺物挿図番号	写真番号
		確認面	底面	確認面(cm)	底面(cm)	深さ(cm)			層数	状況						
345	W・X－55	不楕	不円	130×120	120×120	75	袋		13	自然		縄文・貯蔵穴	すべての方向が抉れる。底面に礫あり。	図215		写193
346	Y－53	隅長	楕	140×90	130×70	25	皿		5	自然	縄　10			図215		写193
347	W－55	楕	円	120×105	95×95	15	皿		2	自然	縄　2			図215		写193
348	W－54	楕	楕	150×135	130×110	20	皿		2	自然	縄　2			図215		写194
349	X－56・57	不円	楕	150×150	155×140	60	袋		12	人為	縄　11	縄文・貯蔵穴	南西方面の１／４及び東側が抉れる。	図216		写194
350	W－56	長楕	長楕	180×55	160×40	140	ロ		4	自然		落し穴	北西方面が抉れる。	図216		写194
351	W・X－55	楕	不円	140×115	110×110	50	箱	ＳＫ356→ＳＫ351	8	自然	縄　1			図216		写194
352	Y－54	長楕	長楕	160×74	115×45	45	箱		3	自然				図216		写194
353	Z－50	不	不	170×150	150×130	15	皿		1	自然	縄　3			図216		写194
354	U・V－53・54	楕	楕	140×120	100×85	60	箱		－	自然				図216		写194
355	AB－53	楕	楕	120×100	85×70	46	箱		4	自然				図217		写194
356	X－55	不楕	不楕	50×140	135×120	45	箱	ＳＫ356→ＳＫ351	10	人為	縄　3		南側が抉れる。	図217		写195
357	X－54・55	円	円	140×140	130×130	70	袋	ＳＫ357→ＳＫ356	13	人為		縄文・貯蔵穴	南東から北西にかけて抉れる。	図217		
358	X－55	長楕	長楕	120×50	95×25	48	箱	ＳＫ358→ＳＫ357	2	自然				図217		写195
359	Y－54	楕	円	140×130	115×115	50	箱	ＳＫ359→ＳＫ360	2	自然				図217		写195
360	Y－54	隅方	隅方	90×80	70×60	22	皿	ＳＫ359→ＳＫ360	1	自然			堆積土中に礫あり。	図217		写195
361	AC－58	円	不楕	180×180	150×120	20	皿		3	自然	縄　110　土　1　石　1　他（土器片製円盤１）	縄文	堆積土中に土器片あり。縄文中期中葉。	図218	図248・250	写195・227
362	Y－55	不円	不円	105×100	120×100	70	袋		8	人為		縄文・貯蔵穴	南西方面を除いて抉れる。	図218		写195
363	Y・Z－55	楕	楕	165×150	155×140	66	袋		16	人為	縄　53	縄文・貯蔵穴	北東から南西にかけて抉れる。底面に礫あり。	図218		写195
364	AA－54	楕	楕	(70)×90	(60)×70	25	筒	ＳＫ364→ＳＩ62	1	自然				図218		
365	Z・AA－54	楕	楕	130×115	115×100	50	箱		6	自然	縄　4	縄文・貯蔵穴		図218		写196
366	Z－53	楕	楕	150×130	65×55	40	皿		3	自然	縄　2　他（釘６）	縄文・貯蔵穴	底面に礫あり。	図218		写196
367	Z－53	楕	楕	210×150	60×45	42	皿		1	人為	縄　8　石　1		中位に段あり。底面に礫あり。	図219		写196
368	AA－53	不円	不円	120×120	110×110	70	袋		15	人為	縄　5　石（磨石１）	縄文・貯蔵穴	底面に礫あり。	図219	図248	写196・226
369	AC－53・54	楕	楕	140×120	110×100	45	袋	ＳＫ1450→ＳＫ369	5	自然	縄　6		北側が若干抉れる。	図219		写196
370	AC－54	楕	楕	135×120	110×100	65	箱		9	自然			底面に礫あり。	図219		写196
371	AJ－56	円	円	170×170	150×150	40	箱		2	自然				図219		写196
372	AJ－55	不円	不円	140×140	115×115	45	箱		4	自然				図220		写196
373	AK－54	不円	不円	120×120	105×105	40	箱		3	自然	石（石器１）		底面に礫あり。	図220		写197
374	AC・AD－60	円	円	145×145	120×120	65	箱		7	自然	縄　9　土　1		底面に礫あり。	図220	図248	写197
378	AL－59・60	円	円	155×155	140×140	60	筒		5	自然	縄　4			図220		写197
379	AA－54	楕	楕	130×110	120×105	20	箱	ＳＫ379→ＳＩ61	2	自然			底面に礫あり。	図220		写197
380	X－55	楕	楕	145×120	140×120	30	袋		5	自然	縄　17　土　12　石（磨石１）	縄文・貯蔵穴	北西方面・一部北東部を除いて浅く抉れる。堆積土中に土器片あり。	図220	図252	写197
381	AD－62	不円	円	125×125	120×210	75	袋	ＳＫ383→ＳＫ381	4	自然	縄　6	縄文・貯蔵穴	北部・南西部各50cm程度を除いて浅く抉れる。	図221		写197
382	AC－63	楕	楕	110×100	95×80	140	筒		3	自然			西側が提灯状に浅く抉れる。	図221		写197
383	AD－62	隅長	不楕	90×70	85×45	40	箱	ＳＫ383→ＳＫ381	3	自然			底面に小穴あり。	図221		写197
385	AC・AD－62	不楕	不楕	110×95	90×65	40	箱		2	自然	縄　1			図221		写198
392	AJ・AK－63	不楕	不楕	155×130	125×115	65	箱		6	自然	縄　29　土　1		底面に礫あり。	図221		写198
393	X－49・50	円	円	115×115	90×90	58	袋		5	自然			北東部で浅く抉れる。	図221		写198

表3　土坑一覧表（8）

遺構番号	所在（グリッド番号）	平面形		規模			断面形	重複関係 古→新	堆積土		出土遺物種類	時期・機能	備考	遺構挿図番号	遺物挿図番号	写真番号
		確認面	底面	確認面(cm)	底面(cm)	深さ(cm)			層数	状況						
394	ＡＣ－59	楕	楕	130×115	115×105	56	袋		4	自然				図222		写198
396	Ｒ・Ｓ－49	円	円	170×170	150×150	115	筒		7	人為		縄文・貯蔵穴	西側約半分が調査区外のため未調査。	図222		写198
397	Ｒ・Ｓ－48	不	不	220×200	150×130	35	皿		6	自然				図222		写198
398	Ｒ－47	不楕	不円	130×110	45×30	50	箱		4	自然				図222		写198
399	Ｒ・Ｓ－47	不楕	不	180×160	130×115	20	皿		4	自然				図222		写198
400	Ｓ－46	楕	不楕	120×105	90×80	65	箱		4	自然				図223		写199
401	Ｒ・Ｓ－47・48	楕	楕	170×140	110×100	80	袋		5	自然		縄文・貯蔵穴	東側約１／４が抉れる。	図223		写199
402	Ｓ－45	不楕	不楕	155×85	130×70	120	筒		5	自然			東側が道路にかかっており未調査。	図223		
403	Ｐ・Ｑ－44・45	楕	楕	215×(105)	145×(80)	75	箱		5	自然			南西方向が調査区外のため未調査。	図223		写199
404	Ｒ－45	円	楕	150×150	135×120	90	筒		5	自然				図223		写199
408	Ｒ・Ｓ－45・46	不円	不楕	170×170	205×190	100	袋		7	自然	縄　2　土　1	縄文・貯蔵穴	すべての方向で抉れる。	図224		写199
409	Ｒ－46・47	楕	楕	155×130	75×60	50	皿		5	自然			底面に礫あり。	図224		写199
410	ＡＡ－55	円	円	120×120	110×110	20	皿		2	自然			底面に礫あり。	図224		写199
781	ＡＡ－47	楕	楕	105×(60)	70×(40)	40	皿		2	人為			西側の撹乱で半分ほど消失。	図224		写199
790	ＡＥ－46	楕	円	140×130	115×115	65	袋		14	人為		縄文・貯蔵穴		図224		写200
791	ＡＪ－47・48	円	円	135×135	120×120	40	箱		9	人為				図225		写200
900	Ｙ－44	円	円	100×90	90×80	15	皿	ＳＤ09→ＳＫ900	2	自然				図225		写200
901	Ｖ－48	不円	不円	140×140	135×130	50	袋		7	自然				図225		写200
902	Ｘ－47	円	円	140×135	140×130	40	袋		3	自然			西側が浅く抉れる。	図225		写200
903	Ｕ・Ｖ－48	長方	不	160×50	170×30	120	ロ		3	自然		落し穴	東西両端がフラスコ状に抉れる。	図225		写200
904	Ｚ－47	円	円	135×130	130×120	30	箱	ＳＫ904→ＳＩ48	3	自然				図225		写200
907	ＡＡ－51	円	円	120×90	110×80	35	袋		3	自然			西側が一部抉れる。南側の１／４が撹乱で消失。	図226		写200
908	Ｕ・Ｖ－53	円	円	210×110	125×210	60	袋		8	自然		縄文・貯蔵穴	全方向で浅く抉れる。	図226		写201
909	Ｗ－55	円	円	85×80	90×85	50	袋		4	自然			全方向で浅く抉れる。	図226		写201
910	Ｘ・Ｙ－45・46	楕	楕	140×120	130×110	25	皿	ＳＫ910→ＳＩ41	3	自然	縄　78	縄文	堆積土中に土器片あり。縄文中期末葉。	図226	図248	写201
931	ＡＤ－50	楕	楕	125×100	80×50	12	皿		1	自然				図226		写201
932	ＡＤ－50	不円	楕	110×110	70×50	20	皿	ＳＫ933→ＳＫ932	2	自然				図226		写201
933	ＡＤ－50	楕	楕	140×105	120×95	10	皿	ＳＫ933→ＳＫ932	1	自然				図226		写201
934	ＡＣ－50・51	不	不楕	130×115	95×90	25	皿		4	自然	縄　3			図226		写201
935	ＡＥ－48・49	楕	不円	200×170	160×150	70	袋		6	自然		縄文・貯蔵穴	東部のみ若干抉れる。	図227		写202
936	ＡＤ－49	円	円	105×105	80×80	25	皿		2	自然				図227		写202
937	ＡＤ・ＡＥ－51	楕	楕	145×120	110×90	60	箱		5	自然	縄　7			図227		写202
938	ＡＤ－52	楕	楕	150×135	130×110	65	袋		10	人為	縄　1	縄文・貯蔵穴	東部のみ若干抉れる。	図227		写202
939	ＡＤ－45・46	不円	楕	150×150	125×105	70	箱		13	自然			西側が抉れる。	図227		写202
940	ＡＤ－49・50	円	楕	125×125	110×90	45	箱		6	自然			中央やや北東寄りに60×45の窪みあり。	図228		写202
941	ＡＥ・ＡＦ－52	楕	楕	345×230	300×200	40	皿		4	自然	縄　105　土　7　石（石10，石器１）　他（剝片９）		底部に190×100の硬化面。Ｎ－50°－Ｅ	図228		写202
942	ＡＥ－52	楕	楕	135×115	130×100	40	箱		7	自然	縄　1		北側と西側の２箇所が抉れる。	図228		写202
943	ＡＥ－53	楕	楕	155×150	130×120	30	皿		8	自然	縄　32　石　2　他(剝片１)			図228		写203
944	ＡＦ－54	楕	楕	155×130	215×120	38	箱		6	自然				図228		写203

表３　土坑一覧表（９）

遺構番号	所在（グリッド番号）	平面形		規模			断面形	重複関係 古→新	堆積土		出土遺物種類	時期・機能	備考	遺構挿図番号	遺物挿図番号	写真番号
		確認面	底面	確認面(cm)	底面(cm)	深さ(cm)			層数	状況						
945	ＡＥ・ＡＦ－54	楕	円	175×150	120×120	60	箱		7	自然	縄　18　石（石器２） 他（剝片２）			図229		写203
946	ＡＥ－54	楕	楕	125×105	100×85	15	皿		2	自然				図229		写203
947	ＡＥ－54	楕	円	150×140	130×130	60	箱		10	自然	縄　3　石　3		東側と北側の２箇所が抉れる。	図229		写203
948	ＡＦ－55	楕	円	130×115	115×115	38	袋		4	自然			北側が若干抉れる。	図229		写203
949	ＡＥ－54・55	楕	楕	175×120	165×110	30	皿		5	自然	縄　50		床面に60×40程度の焼土塊あり。	図229		写203
950	ＡＥ－55	円	円	70×70	60×60	10	皿		2	自然	石　2		堆積土中に礫あり。	図229	図252	写203
991	ＡＫ－48	楕	楕	150×140	135×115	40	箱		7	自然				図229		写204
992	ＡＨ－45	不楕	円	95×80	55×55	20	箱		4	自然				図230		写204
993	ＡＪ・ＡＫ－54・55	楕	楕	165×145	150×140	45	箱		7	自然	縄　1　石（石器１）			図230		写204
1107	Ｚ－47	円	楕	120×120	100×95	35	皿	ＳＫ1107→ＳＩ48	2	自然				図230		写204
1108	Ｚ・ＡＡ－47	楕	楕	110×100	100×90	60	箱	ＳＫ1108→ＳＩ48	2	自然				図230		写204
1110	ＡＢ－52	円	円	100×100	110×100	55	袋		11	人為	縄　11　陶　1	縄文・貯蔵穴	東側を除いて２／３が抉れる。	図230		写204
1111	ＡＫ・ＡＬ－57・58	不円	不円	130×130	95×95	60	箱		7	自然				図230		写204
1131	ＡＮ－57・58	隅方	隅方	160×150	140×120	40	箱		6	人為	縄　22　石　1			図231	図248	写204
1132	ＡＫ－59	楕	楕	120×100	100×90	90	筒		11	人為				図231		写205
1141	ＡＯ・ＡＰ－69	円	円	185×177	189×187	103	袋		4	自然・人為	縄　10　石（石器１）	縄文・貯蔵穴		図231		写205
1142	ＡＰ－71	不楕	不楕	123×82	66×36	23	皿		4	自然		縄文		図231		写205
1143	ＡＯ－68・69	円	円	123×119	118×115	56	筒	ＳＫ1143→ＳＢ87	7	自然	縄　1	縄文		図231		写205
1144	ＡＯ－72・73	不円	不円	128×120	70×61	28	皿		2	自然	石（石鏃１）	不明		図232	図251	写205・233
1145	ＡＱ－74	不円	不円	112×97	88×85	25	皿		4	自然	縄　1	不明		図232		写205
1146	ＡＮ－72・73	楕	楕	220×185	186×156	18	皿		4	自然	縄　3			図232		写205
1147	ＡＯ－73・74	楕	楕	145×128	133×115	80	袋		4	自然	縄　2	縄文・貯蔵穴		図232		写205
1148	ＡＰ・ＡＱ－73	不楕	楕	158×128	108×76	40	箱	ＳＫ1148→ＳＤ05	3	自然				図232		写206
1149	ＡＭ－67	楕	不楕	135×126	106×99	47	箱		5	自然	縄　8	縄文	堆積土中に礫あり。	図233	図249	写206
1150	ＡＭ・ＡＮ－68	不楕	楕	174×141	137×125	49	箱		4	自然		縄文		図233		写206
1151	ＡＪ－48・49	長楕	不	170×130	70×45	50	皿	ＳＫ1151→ＳＩ39	5	不明				図233		
1156	ＡＦ・ＡＧ－64	円	円	124×120	116×116	25	皿		1	自然		縄文	土坑上部が削平され層数が少ない。	図233		写206
1157	ＡＤ・ＡＦ－67・68	円	円	(144)×144	105×96	45	皿		3	自然		中世以降？		図233		写206
1158	ＡＦ－60	円	円	(143)×142	135×128	115	袋		8	自然	縄　34	縄文・貯蔵穴	縄文後期初頭（称名寺式？）	図234		写206
1159	ＡＥ－66	隅方	隅方	180×115	166×99	33	箱		4	自然		中世以降？		図234		写206
1160	ＡＦ－66・67	円	円	180×170	153×157	38	箱		3	自然		縄文	底面に礫あり。	図234		写207
1161	ＡＥ・ＡＦ－62	円	円	133×120	105×98	53	箱	ＳＫ1306→ＳＫ1161	6	自然	縄　1	縄文	底部中央にピットあり。	図234		写207
1162	ＡＦ－61・62	円	円	146×144	146×140	41	袋		5	人為	縄　8　他（剝片２）	縄文・貯蔵穴		図234		写207
1163	ＡＦ・ＡＧ－61・62	円	円	129×118	122×119	46	袋		5	自然	縄　6	縄文・貯蔵穴		図235		写207
1164	ＡＧ－60・61	円	円	212×200	194×183	79	袋		8	自然	縄　50	縄文・貯蔵穴	縄文後期初頭（称名寺式）。堆積土中に礫あり。	図235	図249	写207
1165	ＡＦ－60	円	円	127×123	134×125	83	袋		9	自然	縄　1	縄文・貯蔵穴	底部中央に径５～10cmの礫６点あり。	図235		写207
1171	ＡＣ－51	楕	長楕	205×100	200×55	80	箱		8	不明	縄　3		長軸は東西方向。東端部のみ15cmほど抉れる。	図235		写207

表３　土坑一覧表（10）

遺構番号	所在（グリッド番号）	平面形		規模			断面形	重複関係 古→新	堆積土		出土遺物種類	時期・機能	備考	遺構挿図番号	遺物挿図番号	写真番号
		確認面	底面	確認面(cm)	底面(cm)	深さ(cm)			層数	状況						
1172	ＡＤ・ＡＥ－51・52	楕	楕	130×120	105×100	45	箱		8	不明	縄　14			図235		写207
1186	ＡＧ－61	円	円	138×124	153×138	81	袋		7	自然	縄　3　石（石器１）	縄文・貯蔵穴	底部北壁寄りに径10cmの石３個あり。	図236		写208
1187	ＡＦ－61	円	円	97×(97)	(107)×(102)	97	箱	ＳＫ1187→ＳＩ103	8	自然	縄　1	縄文		図236		写208
1188	ＡＥ－61	円	円	150×129	112×108	90	袋		10	自然	縄　3	縄文	底部中央にピットあり。	図236		写208
1189	ＡＧ－73	長楕	長	240×113	(89)×44	176	ロ	ＳＫ1197→ＳＫ1189	11	自然・人為	縄　13	縄文・落し穴		図236		写208
1190	ＡＨ－73	円	円	114×113	109×97	41	筒		4	自然	縄　8	縄文		図237		写208
1191	ＡＥ・ＡＦ－60・61	円	円	118×116	130×129	74	袋	ＳＫ1191→ＳＩ103	6	自然	縄　3	縄文・貯蔵穴	底面に礫あり。	図237		写208
1192	ＡＭ－68	不楕	楕	129×(106)	124×104	59	袋		2	自然		縄文		図237		写208
1193	ＡＮ－68	円	不円	136×120	117×115	57	袋	ＳＫ1193→ＳＢ87	5	自然	他（剝片１）	縄文	底部北側に径10～15cmの礫３点あり。	図237	図251	写208・233
1194	ＡＦ－63	円	円	80×80	74×74	33	箱		4	自然	縄　1	縄文	堆積土中に礫あり。	図237		写209
1195	ＡＥ－59・60	円	不円	109×100	92×92	46	筒		5	自然	縄　6　石（石器２）	縄文	堆積土中に礫あり。	図237		写209
1196	ＡＨ－73・74	長楕	長楕	167×90	90×(54)	138	ロ		7	自然		縄文・落し穴		図238		写209
1197	ＡＧ－73	楕	楕	(80)×(70)	(58)×(55)	60	箱	ＳＫ1197→ＳＫ1189	3	自然	縄　10	縄文		図238		写208
1198	ＡＮ－67	不楕	不楕	142×(110)	132×(105)	50	箱		3	人為		縄文	撹乱で東半分が失われている。	図238		写209
1199	ＡＭ－75	不円	不円	(112)×(34)	(62)×(13)	24	皿		2	自然		不明	撹乱で南半分が失われている。	図238		写209
1200	ＡＪ－74・75	不円	不円	85×62	60×55	20	皿		2	自然		不明	道路下のため上部削平。	図238		写209
1211	ＡＪ－47	不円	円	200×200	30×30	35	皿	ＳＫ1211→ＳＫ791・ＳＩ35	4	自然				図239		写209
1221	ＡＫ－46	不	不	130×105	80×70	35	箱		3	自然	縄　12　石　2 他（剝片１）			図239		写209
1222	ＡＩ・ＡＪ－46	楕	円	140×130	120×120	45	箱	ＳＫ1222→ＳＩ76	7	自然			ＳＩ76床面より検出。	図239		写210
1276	ＡＣ－45	楕	楕	140×105	35×20	75	箱		4	自然				図239		写210
1277	ＡＣ・ＡＤ－54	楕	楕	150×140	130×125	50	箱		7	自然	縄　10　石（石器６）		底面に礫あり。	図239		写210
1305	ＡＥ・ＡＦ－62	隅長	隅長	104×40	100×28	65	袋		3	自然	縄　18　石（石器２） 他（剝片１）	縄文	ＳＫ1306との類似土坑。	図239		写210
1306	ＡＥ－62	隅長	隅長	105×48	84×36	71	筒	ＳＫ1306→ＳＫ1161	3	自然		縄文	ＳＫ1305との類似土坑。	図240		
1307	ＡＥ・ＡＦ－69・70	隅長	隅長	135×70	104×56	78	箱		5	自然		縄文・落し穴		図240		写210
1308	ＡＥ－67・68	不楕	不楕	180×130	129×95	57	箱		4	人為	縄　10	中世以降	底面に礫あり。	図240	図248・250	写210・227
1450	ＡＣ－53・54	楕	楕	145×90	110×45	105	箱	ＳＫ1450→ＳＫ369・ＳＩ59	3	不明				図240		写210

凡例　縄文土器：縄，土師器：土，須恵器：須，鉄滓：滓，陶器：陶，石器：石，その他：他。
平面形は，円形：円，不整円形：不円，楕円形：楕，不整楕円形：不楕，長楕円形：長楕，
方形：方，隅丸方形：隅方，隅丸長方形：隅長，隅五：隅丸五角形，不整形：不。
断面形は，箱形：箱，筒形：筒，皿形：皿，袋形：袋，ロート形：ロ。
＊「出土遺物種類」の中の数値は，一つの破片を１点として数えたものである。
＊「規模」の中のカッコ書きの数値は，遺存値を表示している。
＊一覧表では，１次調査時の土坑は除外されている。

第６節　埋　　甕

調査区内の埋甕は計４基確認されている。その内３基は住居跡の覆土中から確認され，残りの１基は他の遺構と関わり無く単独で確認された。掘形内に納められた土器の埋設の仕方に目を向けると，正置の状態で出土するものと，掘形内に底部が斜め下になるよう傾けるものの二つが認められる。

３号埋甕　ＳＭ03

遺　　構（図253，写真211）

本遺構はＳＩ44の床面西端を精査中，暗褐色土の長方形状の広がりとして確認された。本遺構はＳＩ44の西壁より80㎝ほど内側にあり，長軸方向をＮ10°Ｅにもつ。

本遺構は長方形状をなす暗褐色土の上面の１～２㎝を平らに削るとすぐ，土器の割れ口が確認できた。その後，土層観察用帯を長軸方向に設定し，土器片を残しながら東半分の掘り下げを実施した。すると，上面で確認できた土器片は縄文土器の口縁部片であることが判明し，口縁部端が北側にあることも分かった。口縁部片の直下から胴部上位から口縁部にかけて欠損した大振りの縄文土器が底部を北にして横たわっていた。土器の出土状況を観察すると，上層から出土した大きめの口縁部片で，下にある縄文土器の欠損部を覆い隠すように被せていたような造作がみられる。

以上のことから，本遺構は方形の掘形内に土器を埋設した埋甕と判断した。

土器を納めた長方形状の掘形の規模は南北65㎝，東西50㎝，ＳＩ44の床面からの深さは約20㎝を測る。掘形の底面は北に向って緩く傾斜している。掘形内の堆積土は４つに分層され，土器内部の土は周囲の土に比して土色が黒く，土質も軟弱と性質を異にしている。

遺　　物（図254，写真226）

埋設された土器をみると，上層の口縁部片と下位の胴部は接合し，もとは一つの深鉢形土器であったことが分かった。しかしながら，口縁部は全周せず，口縁部の約半分を欠いている。器形をみると，胴部は底面から外傾し，中位からやや垂直に立ち上がった後，口縁部に向って大きく外反する。口縁部をみると，その端部は小さく波打つように形作られている。また，底面は焼成後に直径６㎝ほどの円形に刳り貫かれていた。土器の大きさは高さ63.6㎝，最大径は口縁部端にて約41.7㎝を計測する。土器の内外面は黒っぽい赤褐色に発色し，胎土には微細な砂粒を多く含んでいる。

外面の文様は，胴部中位に施された波状沈線を境に施文方法が異なっていることが分かる。波状沈線よりも下位の器面には，縦ないし斜め方向に縄文を転がした後，底面付近ではケズリのような調整で縄文が消されている。一方，胴部中位から口縁部にかけては沈線で「Ｓ」，「Ｕ」字状の大小さまざまな区画文を施した後，あらためて区画文の内部に縄文を転がしていることが分かる。

ま　と　め

本遺構の機能時期は，出土した土器の文様の特徴から大木10式段階と考えられる。また，本遺構が掘り込まれた床面の状態に合わせ，埋納された土器の先端が床上に突出することなく，上面を平らになるよう埋め戻しているという出土状況からも，ＳＩ44の機能している間に掘り込まれたことが考えられる。

本遺構の機能は，埋納された１個体の土器の口縁部片と胴部を意図的に分離し，その口縁部片を使って横倒しにした胴部の上方を覆い隠すといった土器の出土状況，そして土器の底面が焼成後に丸く刳り貫かれていた事実などから，本遺構と似た三春町西弓前遺跡での事例なども含めて検討すると，本遺構はＳＩ44内に設けられた墓壙と類推する。

しかしながら，埋設土器内部の堆積土（ℓ２）を採取し化学的な分析を実施した上での結論ではないため，断定はできない。　（阿　部）

４号埋甕　ＳＭ04

遺　　構（図253，写真211）

本遺構は調査区中央北側の平坦地に存在し，ＡＡ48グリッドに位置する。本遺構の南に74ａ・ｂ号住居跡，東に95号住居跡が近接する。黄褐色土（ＬⅣ）上面で正位に埋設された土器の上端を検出した。77号住居跡と重複し，本遺構の方が新しい。埋設土器は深鉢で，体部下半を欠損する。掘形は土器の形状に合わせて造られていて，掘形は上端で長径32㎝，短径27㎝の楕円形で，底面は直径20㎝の円形である。掘形内に黄褐色土粒を含むにぶい黄褐色土（ℓ３）を充填して土器を固定している。掘形の遺存高は24㎝である。埋甕内堆積土は２層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を含む暗褐色土，ℓ２はℓ１より暗い色調の暗褐色土で，黄褐色土粒・黄褐色土塊・黒褐色土塊を含む。

遺　　物（図254）

埋設されていた深鉢は，胎土に長石・石英・雲母・海綿骨針を含む。平坦口縁で，体部が内湾しながら立ち上がり，体部中位でややくびれたあと上方に開く。体部にＬＲ縄文を横位に回転した後，口縁部に沿って凹線を施している。土器は脆くなって磨耗しており，内面の調整は不明である。

ま　と　め

本遺構の時期は，埋設土器から縄文時代中期後葉から末葉と考えられる。　（坂　田）

５号埋甕　ＳＭ05

遺　　構（図253，写真211）

本遺構は調査区中央部の平坦地に存在し，ＡＣ58グリッドに位置する。本遺構の北西にＳＩ65，西にＳＫ361・204が隣接する。黄褐色土（ＬⅣ）上面で正位に埋設された土器の上端を検出した。ＳＥ８と重複し，本遺構の方が古い。埋設土器は深鉢で，口縁部を欠損している。掘形は土器の形状に合わせて造られていて，掘形上端は長径33㎝，短径29㎝の楕円形で，底面は直径10㎝の円形で

ある。掘形内に褐色土（ℓ４）を充填して土器を固定していた。掘形の遺存高は35㎝で，埋設土器は口縁部まで備わっていたのかは不明である。埋甕内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒を含む暗褐色土，ℓ２は黄褐色土粒と黄褐色土塊を含む明るい色調の暗褐色土，ℓ３は黄褐色土粒と炭化物粒を含む暗褐色土である。ℓ１～３は人為堆積土と考えられる。

遺　　物（図254）

埋設されていた深鉢は，体部が内湾しながら立ち上がり，体部中位でややくびれたあと上方に緩やかに開く器形である。胎土に長石・金雲母・酸化鉄粒を含む。体部にＲＬ縄文を斜位と横位に回転した後，波状の凹線を施している。凹線内は交互に縄文を磨り消し，ミガキを施している。内面はミガキが施されている。

ま　と　め

本遺構の時期は，埋設土器から縄文時代中期末葉と考えられる。　（坂　田）

８号埋甕　ＳＭ08

遺　　構（図253，写真212）

本遺構はＳＩ56ｂの床面南西端を精査中，褐色土の楕円形状の広がりとして確認した。本遺構はＳＩ44の南西壁より40㎝ほど内側にあり，その軸線方向を真北に対し約20度ほど西に傾いている。

本遺構は楕円形状をなす褐色土の上面１～２㎝を平らに削るとすぐ，北寄りの位置から土器の割れ口が確認できた。その後，土層観察用帯を長径方向に設定し，土器を残しながら東半分の掘り下げを実施した。しばらく掘り進めると，上面で確認できた土器の割れ口は縄文土器の胴部にあたることが判明し，さらに底部が北側にあることも分かった。確認面に近い部所では口縁部を発見することは出来なかったが，上層で確認できなかった口縁部の破片は土層中位に破片となって落ち込んでいることが分かった。さらに精査を進めた結果，大振りの深鉢形土器が底部を北側にして横たわっていた。以上のことから，本遺構は楕円形状の掘形内に土器を一個体埋設した埋甕と判断した。

土器を納めた楕円形状の掘形の規模は，確認面で長径64㎝，東西43㎝を計測する。ＳＩ56ｂの床面からの深さは南側で約25㎝，北側でやや深く32㎝を測る。土層断面を見ると，掘形の底面は北側に向って緩やかに傾斜している。また，掘形の長軸方向での断面形状をみると，北側の壁が確認面よりも奥へ７㎝ほど抉れている。土器は抉れ部分の奥にその底部を入れ，やや口縁部が掘形底面から離れるように土器を傾けて埋設していた。

掘形内の堆積土は２つに分層され，掘り返した土（ℓ２）で一気に埋め戻されたものと推察する。

遺　　物（図254，写真226）

埋設されていた土器は深鉢形で，胴部は底面から外傾し，中位から口縁部に向って緩やかに外反する。土器の大きさは高さ52.1㎝，最大径は胴部中位にて約34.6㎝を計測する。土器の内外面は所々黒斑が見られるものの，全体的に乳白色に発色する。胎土には微細な砂粒が多く含まれている。

外面の文様は，口縁部に丁寧な横ナデを施した後，ナデた部分の直下に幅５㎜ほどの細い沈線を

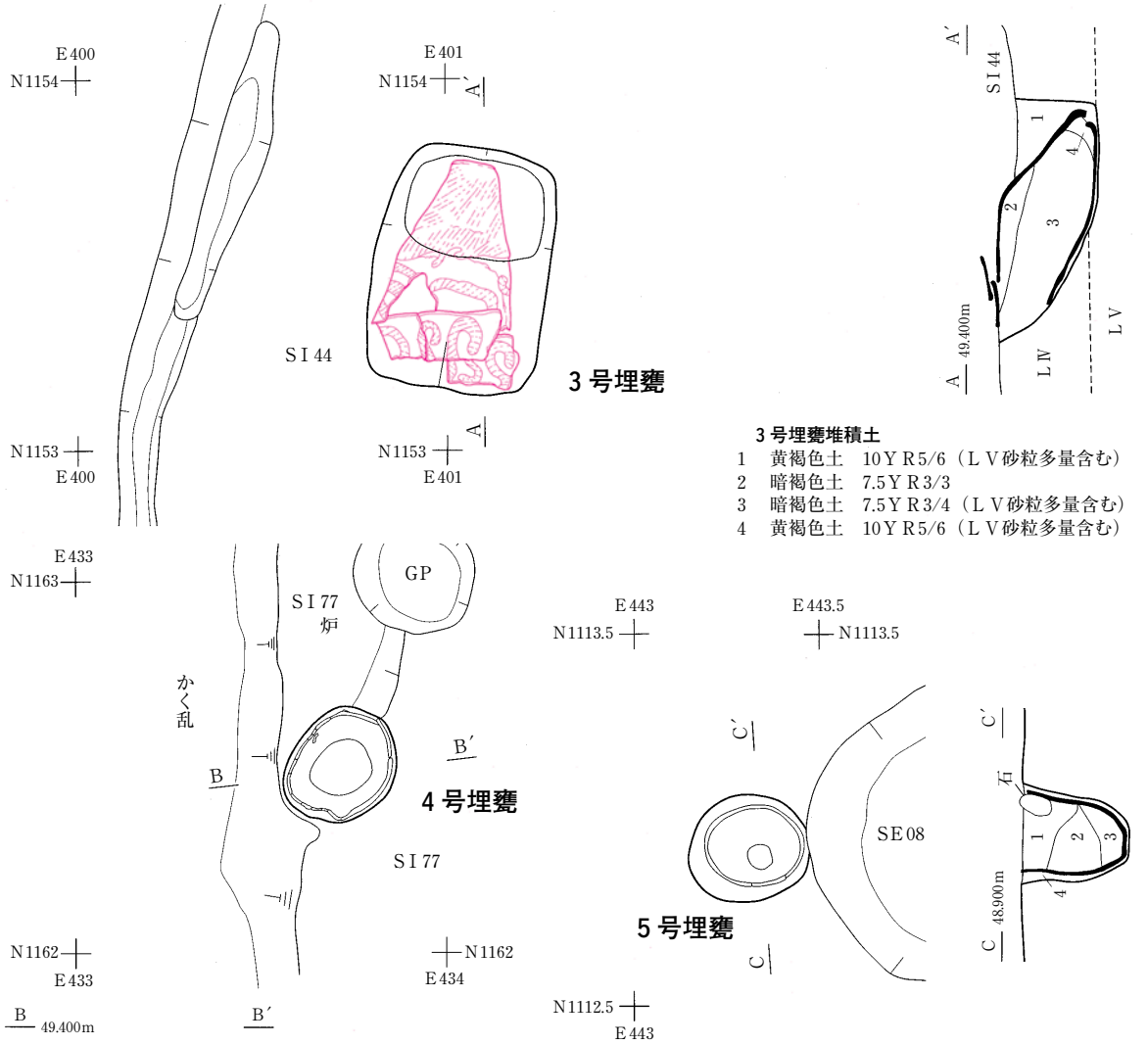

E400
N1154
E401
N1154
A
A′
SI 44
3 号埋甕
N1153
E400
N1153
E401
A
A′
SI 44
1
2
3
4
A 49.400m
LⅣ
LⅤ
3 号埋甕堆積土
1　黄褐色土　10YR5/6（LⅤ砂粒多量含む）
2　暗褐色土　7.5YR3/3
3　暗褐色土　7.5YR3/4（LⅤ砂粒多量含む）
4　黄褐色土　10YR5/6（LⅤ砂粒多量含む）
E433
N1163
GP
SI 77
炉
かく乱
B
B′
4 号埋甕
SI 77
N1162
E433
N1162
E434
B 49.400m
B′
E443
N1113.5
E443.5
N1113.5
C′
SE08
5 号埋甕
C
N1112.5
E443
C′
石
1
2
3
4
C 48.900m
4 号埋甕堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（LⅣ粒含む）
2　暗褐色土　10YR3/3
（LⅣ粒・塊・黒褐色土塊含む）
3　にぶい褐色土　10YR4/3
5 号埋甕堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒多量含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒・塊多量含む）
3　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒・炭化物粒多量含む）
4　褐色土　10YR4/4
SI 77
かく乱
1
2
3
3
E432
N1151
E433
N1151
D′
SI 56 b
8 号埋甕
D
N1150
E433
D′
SI 56 b
1
1
2
D 48.000m
LⅣ
LⅤ
8 号埋甕堆積土
1　褐色土　7.5YR4/3
2　褐色土　7.5YR4/6
（LⅤ砂粒少量含む）
0
50 cm
(1/20)

図253　3～5・8号埋甕

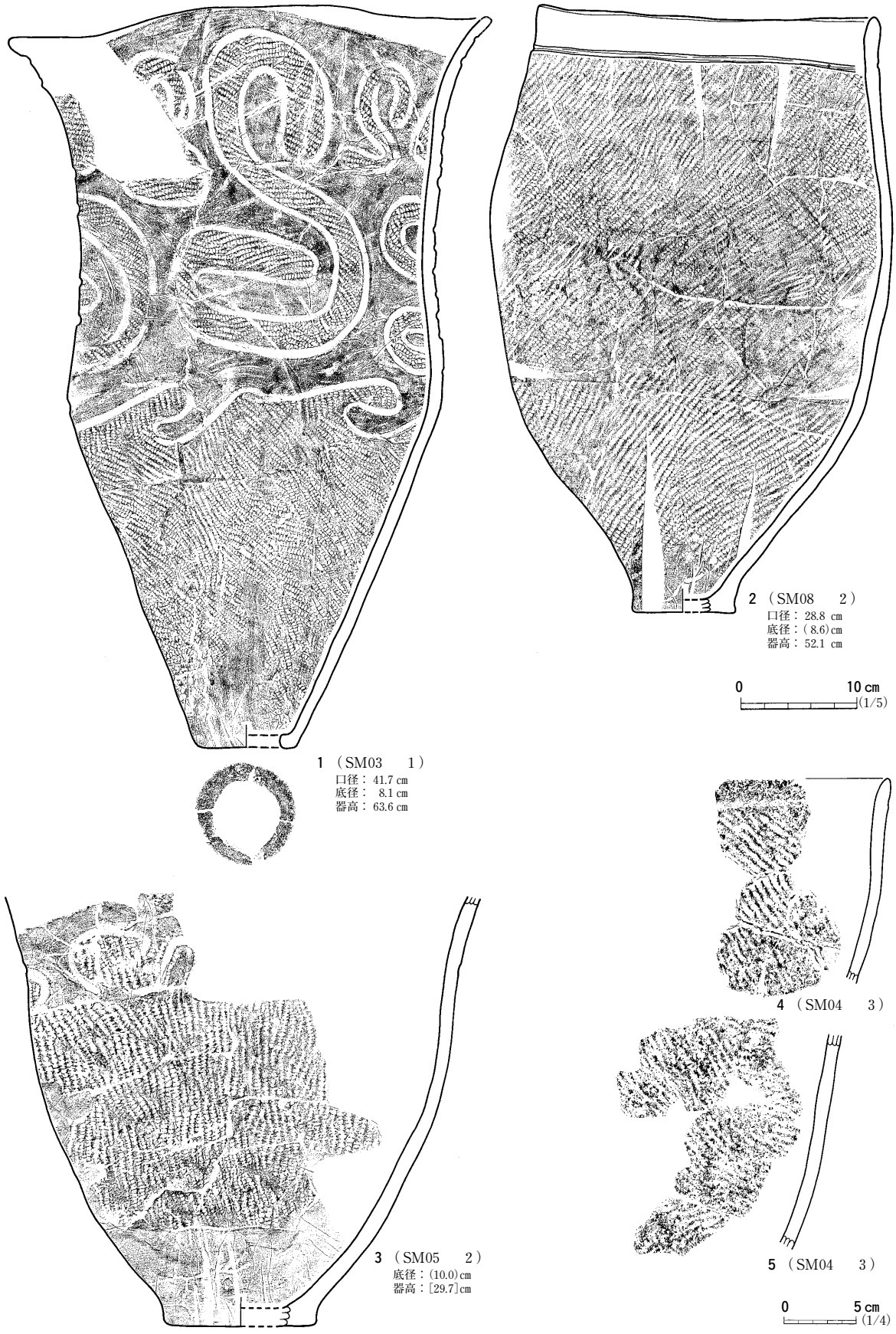


図254　３～５・８号埋甕出土遺物

一条巡らしている。その沈線を境にして，下の胴部全面には縦ないし斜め方向に縄文を転がしている。さらに，底面付近の外面にはケズリのような調整で縄文が消されている。

ま　と　め

本遺構の機能時期は，出土した土器の文様の特徴から大木10式段階と考えられる。また，本遺構が掘り込まれた床面の状態に合わせ，埋納した土器の先端が床上に突出することなく上面を平らになるよう埋め戻しているという出土状況からも，ＳＩ56ｂの機能している間に掘り込まれたことが想定される。

本遺構の機能は，掘形内に１個体の土器まるごとを横倒しにして埋設しているという出土状況と，これと似た事例などから，この埋甕はＳＩ56ｂ内に設けられた墓壙と類推する。しかしながら，埋設土器内部の堆積土（ℓ２）を採取し化学的な分析を実施した上での仮説ではないため，断定はできない。

（阿　部）

第７節　井　戸　跡

４号井戸跡　ＳＥ04（図255，写真212）

本遺構は調査区南西寄り，ＡＣ63グリッドの北東側に位置する。本遺構はＬⅣ上面にて円形状の黒褐色土の広がりとして確認された。本遺構は他の遺構の切り合いはなかった。

本遺構の調査は南半分の掘削を開始し，北側の掘り残した土壁にて土層観察を実施した。確認面からの深さが人の背を越えた時点で掘り下げを中断し，遺構上部の記録を作成した。その後，下部への掘削は重機を使って再開した。

本遺構の平面形状は直径1.2ｍほどの円形であった。断面形状をみると，確認面からほぼ垂直に1.8ｍほど掘り下げられた後，周壁が外側に40㎝ほど袋状に抉れはじめる。袋状に広がった遺構下半部での最大径は約1.8ｍを計測する。底面形状も直径1.8ｍほどの円形で，確認面から底までの深さは約3.5ｍを測る。

本遺構内の堆積土は大きく３つに分層され，下層にゆくにつれ花崗岩の風化した小礫であるＬＶ粒が多くなってくる。底面のすぐ上には水気のある黒褐色土（ℓ３）が10㎝ほどの厚さで堆積していた。土層断面の状況から，ℓ１・２の２層は一気に埋め戻されたものと判断する。

断面形状，確認面からの深さ，水気の残る堆積土が最下層から出土したことなどから，本遺構は井戸跡の可能性が考えられる。底面を精査した時期が12月で水位が下がっていたためか，底面付近から地下水が湧き出す状況は確認できなかった。同じ調査区内の他の井戸跡をみると，７・８月の時点で４ｍ前後掘り下げたところから水が湧き出してきた事を確認している。

本遺構内からの出土遺物は人頭大の河原石のほかに何も無く，本遺構の機能時期は判然としない。

（吉　田）

５号井戸跡　ＳＥ05（図255，写真212）

本遺構は調査区東側の平坦地に存在し，ＡＯ59グリッドに位置する。黄褐色土（ＬⅣ）上面で円形の落ち込みを検出した。本遺構と重複する遺構は無い。検出面での平面形は直径1.8m程の円形で，検出面から約75㎝の深さで直径1.3ｍの円形に窄まる。そして再びやや広く掘り込まれ，底面では直径1.4ｍの円形となる。検出面からの深さは約4.7ｍを測る。遺構内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は黄褐色土塊と炭化物粒と白色砂礫を含む暗褐色土，ℓ２は暗褐色土粒を含む褐色土，ℓ３は砂礫を含む暗褐色土である。堆積状況より，人為的に一気に埋め戻した土と推測される。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は円形の素堀り井戸である。遺物が出土していないため時期は不明であるが，17世紀後半に埋め戻されたと推測される６号井戸跡と同質の暗褐色土が堆積しているので，本遺構もほぼ同じ時期に埋め戻された可能性が高い。（坂　田）

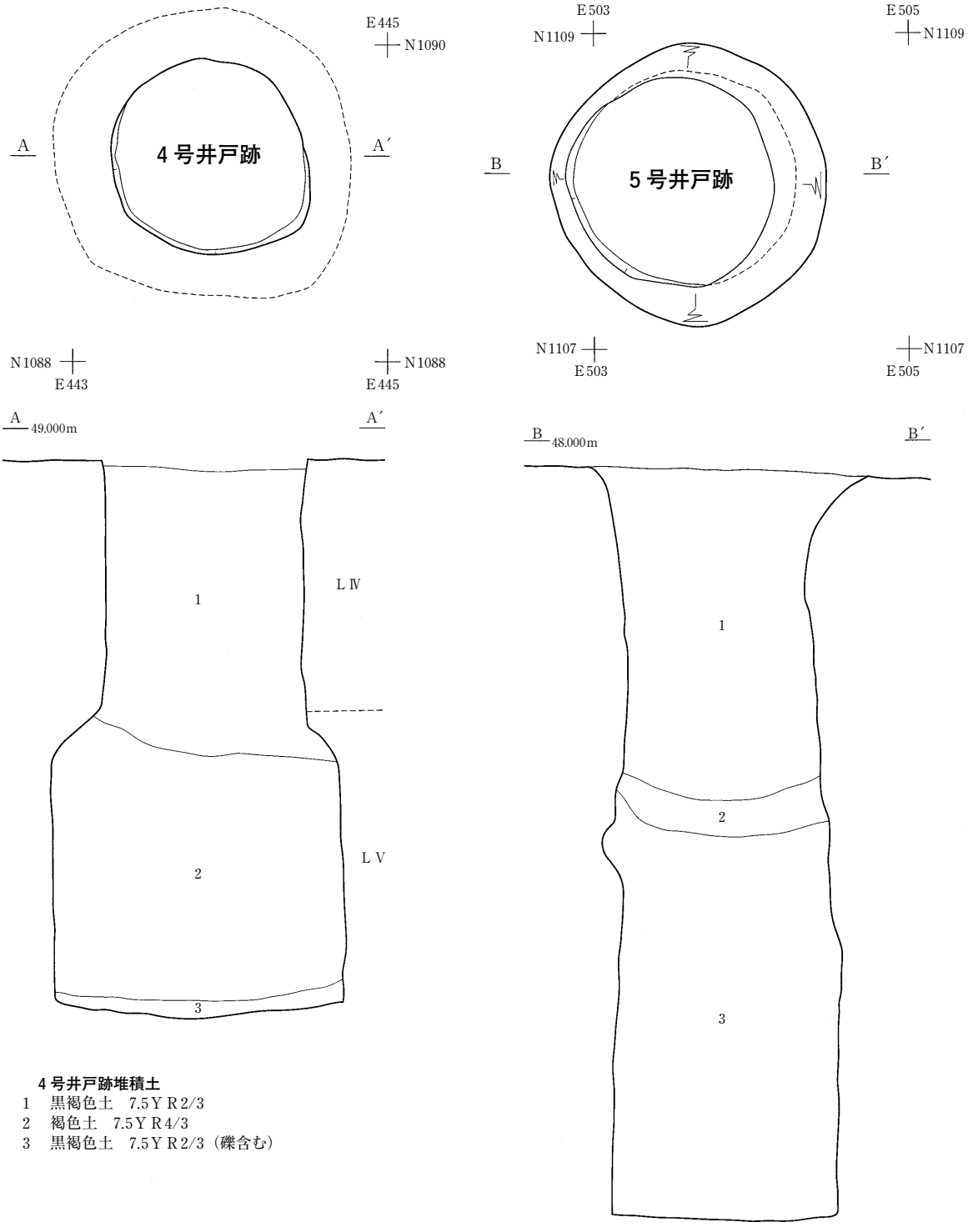
６号井戸跡　ＳＥ06（図256，写真213）

本遺構は調査区南東部の平坦地に存在し，ＡＮ71グリッドに位置する。黄褐色土（ＬⅣ）上面で円形の落ち込みを検出した。本遺構と重複する遺構は無い。検出面での平面形は直径１ｍ程の円形で，次第に狭くなり約４ｍ下位では直径約0.8mになる。検出面から約４ｍの深さに達した時点でまだ湧水点に及ばず，これ以上の人力による調査は困難として掘り込みを中断した。確認できた遺構内堆積土は５層に分けられる。ℓ１は炭化物粒と砂礫を含む暗褐色土，ℓ２は砂礫と黄褐色土粒を含む暗褐色土，ℓ３は黄褐色土塊と砂礫を含む暗褐色土，ℓ４は砂礫を含む暗褐色土，ℓ５は砂礫を含む黒褐色土である。ℓ１～３は黄褐色土塊を多く含み，一気に埋め戻された土と考えられる。遺物はℓ１から志野焼の椀の破片が２点出土している。

本遺構は円形の素堀り井戸である。作業の安全性を考慮して底面まで調査を行うことはできなかった。本遺構の機能時期は不明であるが，ℓ１より17世紀後半の志野焼が出土しており，この頃に埋め戻されたと推定される。（坂　田）

７号井戸跡　ＳＥ07（図256，写真213）

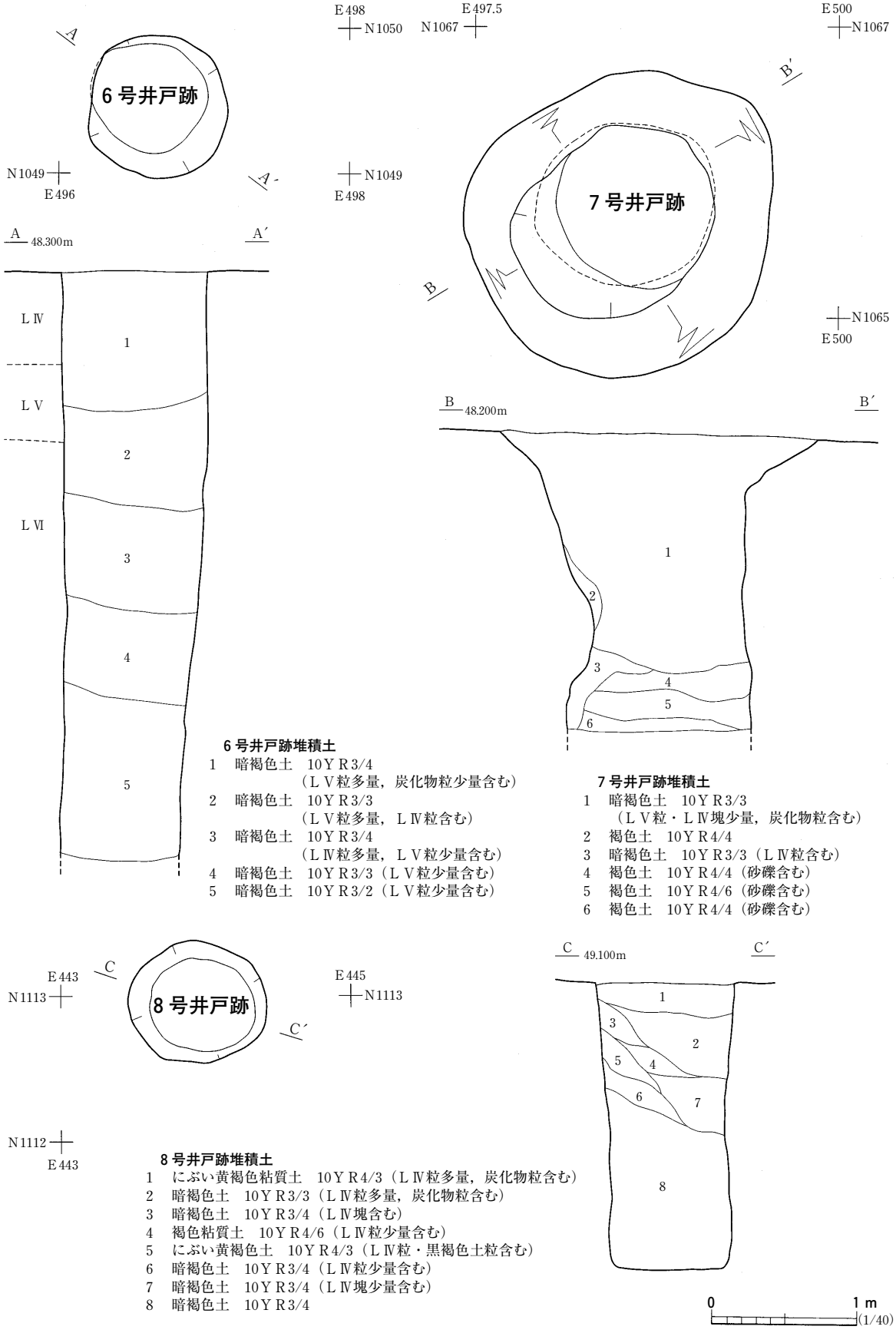
本遺構は調査区南東側の平坦地に存在し，ＡＮ67～68グリッドに位置する。黄褐色土（ＬⅣ）上面で楕円形の落ち込みを検出した。ＳＫ1198と重複し，本遺構の方が新しい。検出面での平面形は長径2.2m，短径２ｍの楕円形で，検出面からの深さが1.1ｍを測る付近から直径約１ｍの円筒形に掘り込まれている。検出面から約２ｍの深さでまだ湧水点に及ばず，これ以上の人力による調査は困難として掘り込みを中断した。確認できた遺構内堆積土は６層に分けられる。ℓ１は黄褐色土粒，黄褐色土塊，炭化物粒，砂礫を含む暗褐色土，ℓ２は黄褐色土塊と黄褐色土粒を含む暗褐色土，ℓ３は黄褐色土塊と砂礫を含む暗褐色土，ℓ４は砂礫を含む明るい色調の褐色土，ℓ５は砂礫を含む



4号井戸跡堆積土
1　黒褐色土　7.5YR2/3
2　褐色土　7.5YR4/3
3　黒褐色土　7.5YR2/3（礫含む）

5号井戸跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（LⅤ粒・炭化物粒少量，LⅣ塊含む）
2　褐色土　10YR4/4（暗褐色土粒を含む）
3　暗褐色土　10YR3/4（砂礫含む）

図255　井戸跡（1）



6 号井戸跡堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅤ粒多量，炭化物粒少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅤ粒多量，ＬⅣ粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅣ粒多量，ＬⅤ粒少量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅤ粒少量含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/2（ＬⅤ粒少量含む）

7 号井戸跡堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ＬⅤ粒・ＬⅣ塊少量，炭化物粒含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（砂礫含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/6（砂礫含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/4（砂礫含む）

8 号井戸跡堆積土

1　にぶい黄褐色粘質土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ粒多量，炭化物粒含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊含む）
4　褐色粘質土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・黒褐色土粒含む）
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒少量含む）
7　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊少量含む）
8　暗褐色土　10ＹＲ3/4

図256　井戸跡（２）

暗い色調の褐色土，ℓ６は砂礫を含む明るい色調の褐色土で，さらに下位にも堆積している。ℓ１～３は黄褐色土塊を多く含むことから，一気に埋め戻された土と推測される。ℓ４～６は壁の崩落土と考えられる。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は円形の素堀り井戸跡である。調査の安全を考慮して，底面まで掘り込みを行うことができなかった。本遺構の機能時期は出土遺物が無いため不明であるが，17世紀後半に埋め戻されたと推測される６号井戸跡と同質の暗褐色土で埋め戻されていることから，これとほぼ同時期に埋め戻された可能性が高い。　（坂　田）

８号井戸跡　ＳＥ08（図256，写真213）

本遺構は調査区南東部のＡＣ57グリッドに位置する井戸跡で，検出層位はＬⅣである。周辺には同時期と思われる遺構はないが，縄文時代に属する５号埋甕と204・361号土坑が位置している。

井戸跡を検出した当初は，平面形が円形であることから土坑と考えていた。しかし，堆積土を半截して１ｍほど掘り下げても，底面を確認できなかったことから井戸と判断した。井戸跡と判明してからの調査は，人力での１ｍ以上の掘り下げは土砂の崩落の危険から中止とした。そこで，掘り下げたところまでの土層記録と上端の平面図を作成した。以下の掘り下げは，特に井戸枠などが設けられていないことからバックホーを用いて，断ち割ることとした。

堆積土は概ね暗褐色土によって占められていた。堆積状況からみると，人為的に埋められた可能性が高い。壁面をみると特に崩れたような痕跡がみられなかった。そのことから，開口したままで放置はせずに使用後まもなく，埋め戻されたのであろう。

井戸跡の規模は径が98㎝，底面までの深さは198㎝で他の井戸跡よりは浅い。他の井戸跡よりも，浅いことを評価すると途中で掘り上げを中止してしまったのではないだろうか。

井戸跡は，出土遺物がないため時期の特定が困難ではあるが，中・近世のものと考えている。

（吉　野）

第８節　溝　　跡

調査区内の溝跡は計５条確認されている。その内，東西方向に延びる溝跡はＳＤ04・05・17の３条，残りの２条は南北方向に断続的に延びている。５条の溝跡の内，ＳＤ04・05の２条は１次調査の時点でも確認されており，その延長部分の継続調査を実施した。

４号溝跡　ＳＤ04（図257，写真214）

本遺構は調査区東側，ＡＪ44～58・ＡＫ44～58グリッドに位置する。黄褐色土（ＬⅣ）上面で検出された。本遺構の東に，７号溝跡がほぼ平行して延びている。ＳＩ20，ＳＫ54・143・205・229と重複し，本遺構の方が新しい。遺構はほぼ南北方向に延び，北端は確認できなかった。北区では

検出されていないので，本遺構の北端は町道の下にあると思われる。確認できた本遺構の南北長は約63m，幅は36～160cm，深さは８～40cmを測る。断面形は逆台形状である。ＡＪ51グリッド付近で幅・深さ共に最大となり，南に行くにつれ狭く，浅くなる。遺構内堆積土は黄褐色土粒を含む暗褐色土で自然堆積と考えられる。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は南北に延びる溝跡で，近接する７号溝跡と共に区画溝の可能性が考えられる。遺物が出土していないため時期は不明であるが，現在の調査区外の耕作地や道路とほぼ一致するので，近世から現代の可能性が高いと推測される。（坂　田）

５号溝跡　ＳＤ05（図258，写真214）

本遺構は調査区の南端を東西に走る町道の北側にあり，緩やかにクランクした道に概ね平行するように断続的に延びる溝跡である。本遺構はＬⅣ上面にて確認され，ＳＫ1148・1167の上層を壊して掘り込んでいる。

本遺構の規模は，幅約30cm，確認面からの深さは20cmを測り，確認できた全長は途中切れ，道に沿って屈折するところもあるが128mほどを確認した。

精査は堆積土状況を確認するために，溝跡と直行するような観察帯を数箇所残して実施した。遺構内堆積土は褐色土の１層のみで，断面形状は箱形を呈している。堆積土中からは縄文土器片２点が出土している。

本遺構の幅，深さは共に，南区の北端を東西に走るＳＤ06と同程度の規模で，現在舗装されている町道に平行し東西に延びている点も本遺構に共通している。このことから推察するに，本遺構は現在の町道が舗装整備される以前に機能した道跡で，本遺構はその北端を画した溝跡の可能性は考えられないだろうか。しかしながら，町道の下の調査も今回実施したところ，本遺構と対となるはずの溝跡は確認できず，前述の仮説も疑問が残る。

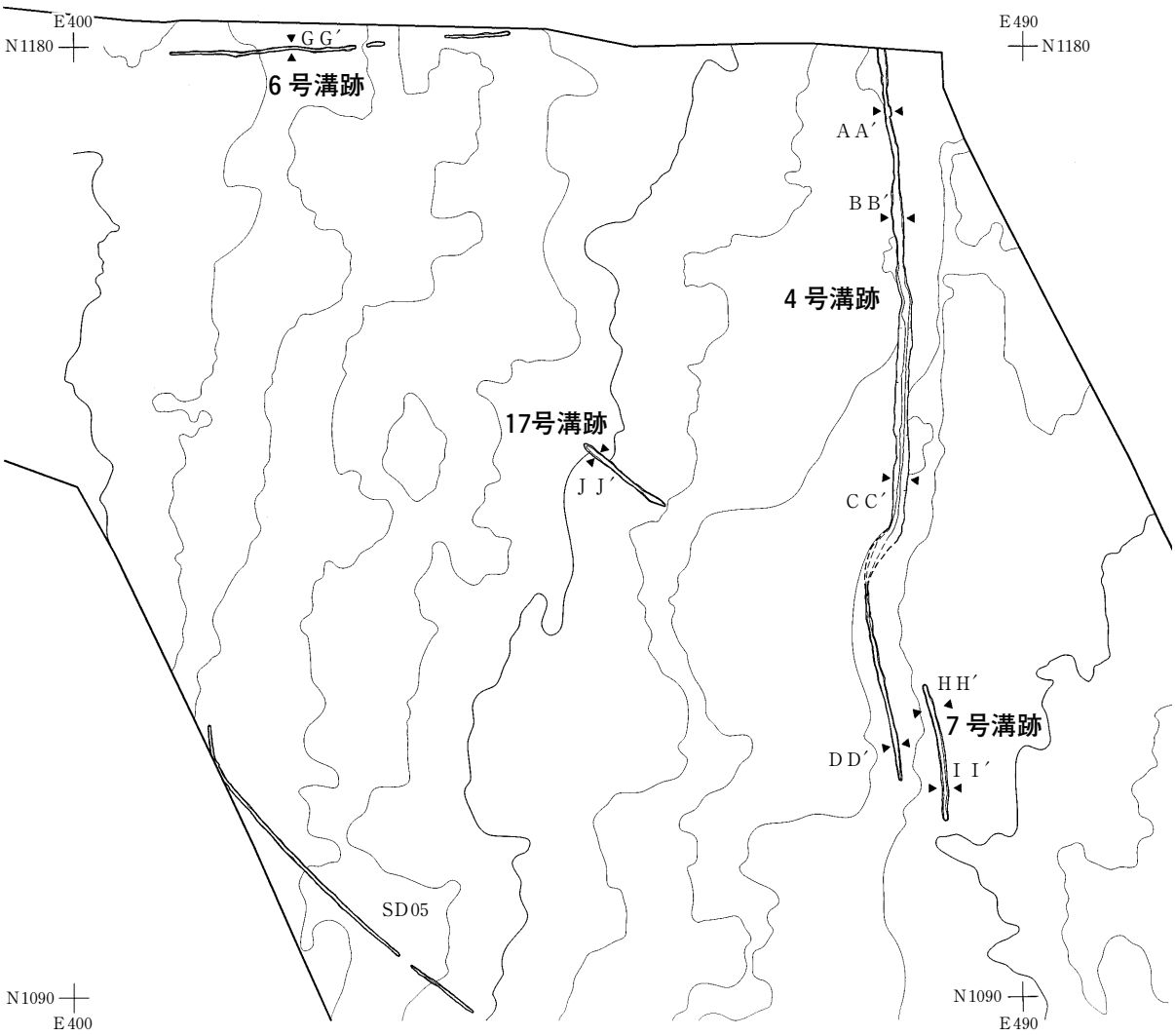
本遺構の機能した時期は出土遺物が少なく，重複する遺構との関わりから縄文時代中期以降としか言及しえない。（吉　田）

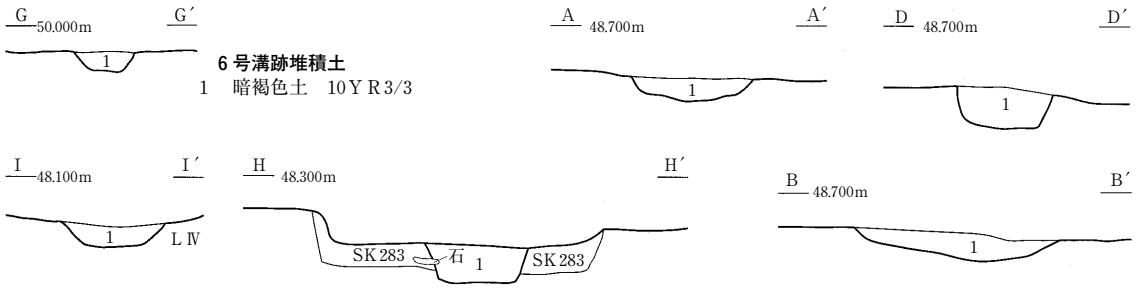
６号溝跡　ＳＤ06（図257，写真214）

本遺構は調査区の北端を東西に走る町道の南側にあり，道に概ね平行するように断続的に延びる溝跡である。本遺構はＶ45～ＡＣ45グリッドの計８グリッドにまたがっている。本遺構はＬⅣ上面にて確認され，ＳＩ69・308の一部を壊して掘り込まれる。

本遺構の規模は，幅約30cm，確認面からの深さは20cmを測り，確認できた全長は途中切れるところもあるが約32.4mを確認した。

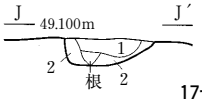
精査は堆積土状況を確認するために，溝跡と直行するような観察帯を数箇所残して実施した。遺構内堆積土は暗褐色土の１層のみで，断面形状は箱形を呈している。堆積土中からの出土遺物は縄文土器片11点，鉄器類１点がある。



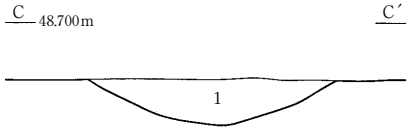


6号溝跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3

7号溝跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（LⅣ粒多量，炭化物粒少量含む）



17号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（黄褐色土粒含む）
2　黄褐色土　10YR5/8（LⅣよりやや暗い）



4号溝跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（LⅣ粒・炭化物粒少量含む）

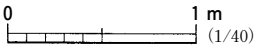


図257　溝跡（1）

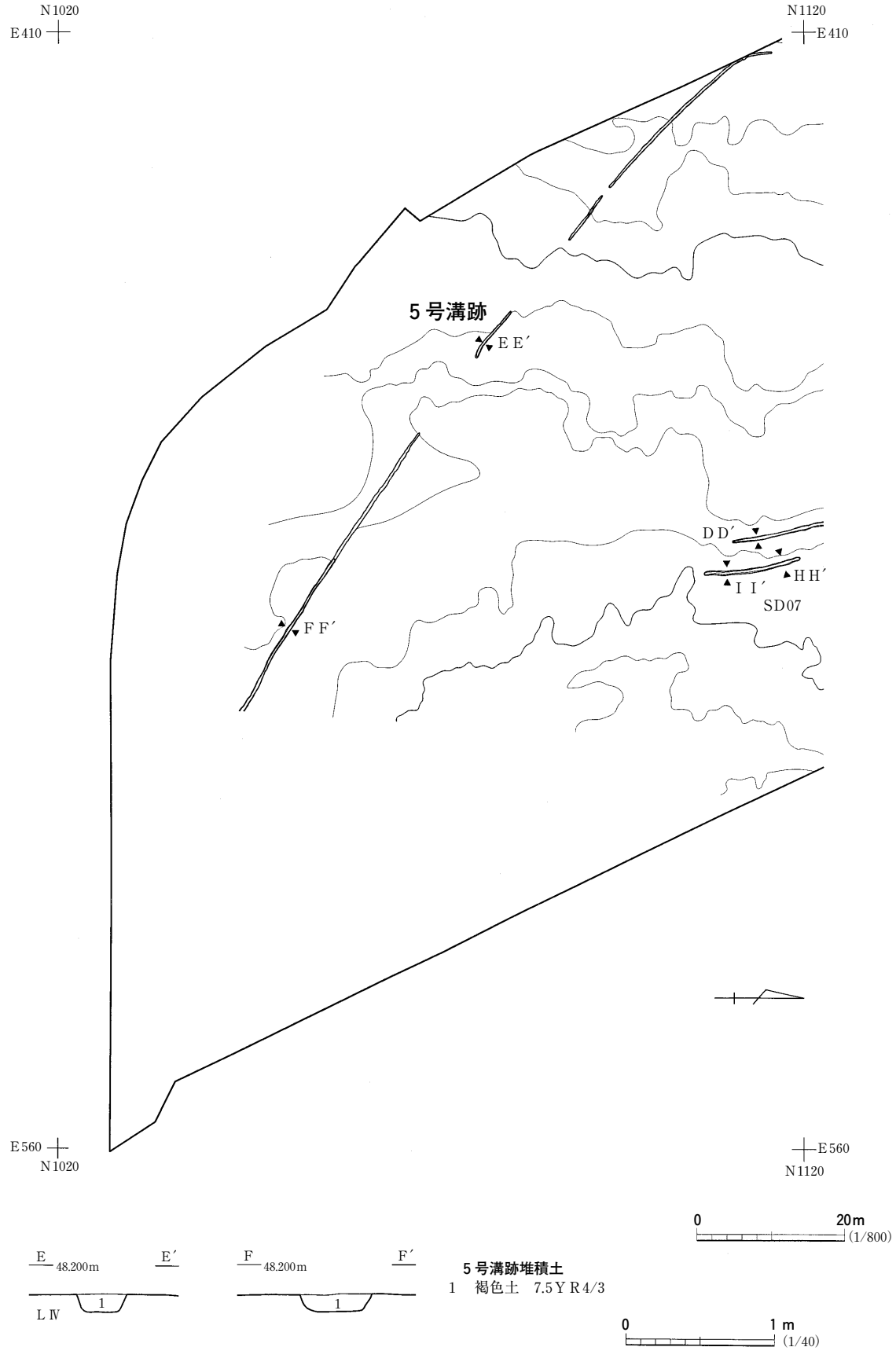

N1020
E410
N1120
E410
5号溝跡
E E′
D D′
H H′
I I′
SD07
F F′
E560
N1020
E560
N1120
0
20m
(1/800)
E
48.200m
E′
L Ⅳ
1
F
48.200m
F′
1
5号溝跡堆積土
1　褐色土　7.5Y R4/3
0
1 m
(1/40)

図258　溝跡（２）

本遺構の幅，深さは共に調査区の南端を東西に走るＳＤ05と同規模で，現在舗装されている町道にあたかも平行して東西に延びている点も，本遺構に共通している。このことから推察するに，本溝跡は現在の町道が舗装整備される以前に機能した道跡で，本遺構はその南端を画する溝跡の可能性は考えられないだろうか。この仮説の真偽は，来年度実施される北側の町道下の調査成果を待って結論としたい。

本溝跡が機能した時期は，堆積土中からの出土遺物があまり無く，重複する遺構との関わりから縄文時代中期以降と言及するに留めておく。（吉　田）

7号溝跡　ＳＤ07（図257，写真214）

本遺構は調査区東側，ＡＫ57～59グリッドに位置する。黄褐色土（ＬⅣ）上面で検出された。本遺構の西側には4号溝跡が存在し，ほぼ平行している。ＳＫ217・275・283と重複し，本遺構の方が新しい。本遺構はほぼ南北方向に延びている。全長は約13m，幅は50～62㎝，深さは6～20㎝を測る。断面形は浅い逆台形である。遺構内堆積土は黄褐色土粒を含む暗褐色土で自然堆積と考えられる。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は南北に延びる溝跡で，近接する4号溝跡と共に区画溝の可能性が考えられる。時期は出土遺物が無いため不明であるが，現在の耕作地の区画方向や道路とほぼ平行しているので，時期は近世から現代の可能性が高いと思われる。（坂　田）

17号溝跡　ＳＤ17（図257，写真214）

本遺構はＡＤ52・ＡＥ52・53・ＡＦ53グリッドに位置する。全長9.8m，幅0.3mの溝跡である。ＬⅣ上面で検出した。周辺の地形は平坦である。本遺構の重複関係は58号住居跡・938号土坑より新しい。

堆積土は2層に分けられる。これらは中央が窪む堆積を見せ，壁際からの流れ込みが観察されたことから，自然堆積層と考える。検出面からの深さは最大で0.18mと浅い。底面は北西隅から南東隅に向かって緩やかに傾斜している。

本遺構は，全長9.8mのほぼ直線的な溝跡である。検出面から底面までが比較的浅かったことから，掘り込み面はさらに上位に位置しているものと推察される。帰属時期は不明であるが，58号住居跡が8世紀代の住居跡だと考えれば，それ以降に構築されたものであるといえる。（門　脇）

第９節　その他の遺構と遺物

ここではその他の遺構と遺物として，２号性格不明遺構とピット群及び遺構外出土遺物について記述をおこなう。２号性格不明遺構は，住居跡の炉掘形とも考えたが確たる根拠が見出せなかったため，性格不明遺構とした。ピット群は建物跡や柱列跡にならなかったものである。

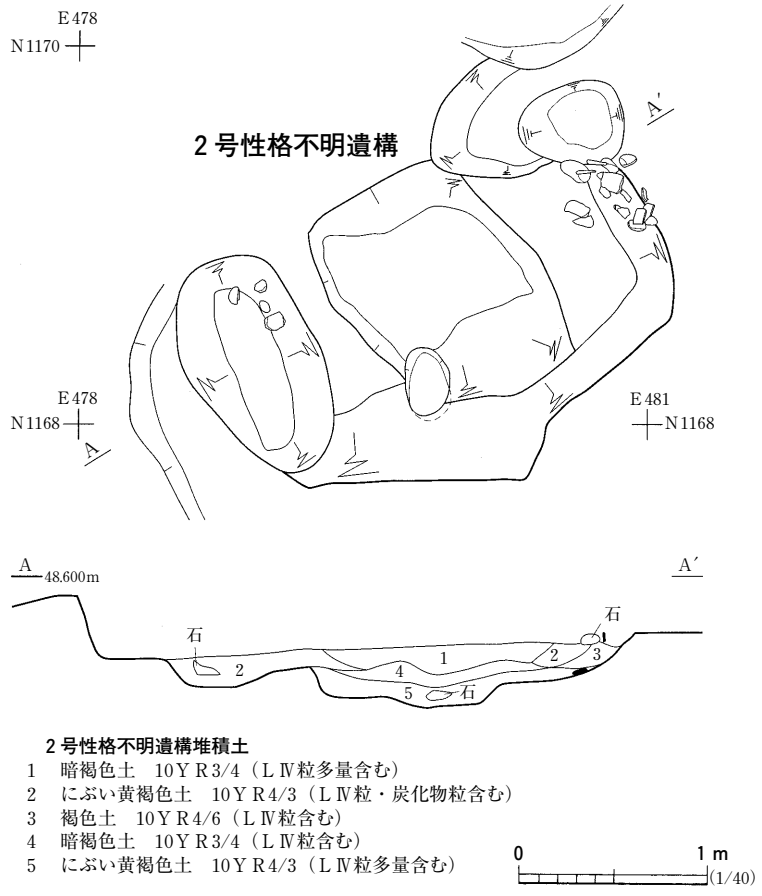
２号性格不明遺構　ＳＸ02

遺　　構（図259）

本住居跡は調査区北東部のＡＫ46グリッドに位置し，検出層位はＬⅣである。周辺には31～36・38・39・71・141号住居跡などが近接または重複していた。重複する遺構は38号住居跡である。

本遺構は38号住居跡の床面から検出したもので，平面形は不整形をなす暗褐色土の範囲であった。当初は住居跡と考えていたが，炉や柱穴などの住居内施設などがないことから，性格不明遺構とした。

本遺構は方形を基調とする不整形であり，底面には楕円形と不整形の小穴が掘り込まれていた。楕円形の小穴は長軸が60㎝で，不整形の小穴は長軸が67㎝である。



２号性格不明遺構堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒多量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒・炭化物粒含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒含む）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒多量含む）

図259　２号性格不明遺構

遺　　物（図260）

本遺構から出土した遺物は縄文土器片132点，須恵器１点，石器類４点の計137点出土した。遺物は主に東壁の壁面から，破片の状態で出土した。そのうち３点の縄文土器の深鉢を図260に示した。１は底部で，２は口縁部にあたり，文様は地文に横位の隆起線と縦位の沈線が施されている。３は胴部にあたり，地文に加え縦位の二重沈線が施されている。

ま　と　め

本遺構は38号住居跡によって掘り込まれ，本来の形状は失われていた。時期は遺物が堆積土中からしか出土していないため，

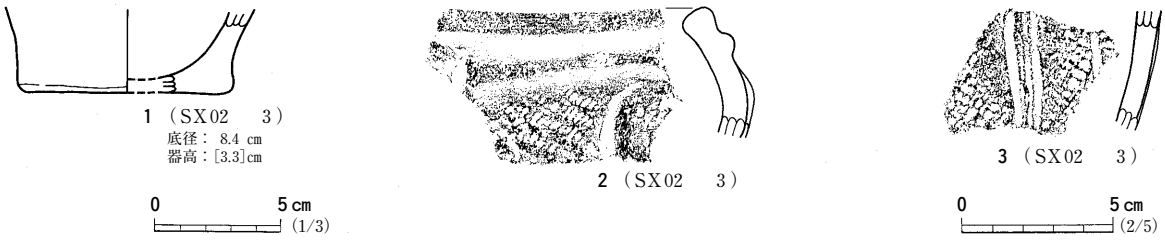


図260　２号性格不明遺構出土遺物

縄文時代中期後葉から末葉にあたるものと考えている。　（吉　野）

ピット群

遺　　構（付図２，表４）

ピットは南区からは2,150基を確認している。ピットは掘立柱建物跡や柱列跡を構成する柱穴であるが，現地の調査で把握できなかったものである。さらに，住居跡や土坑との重複が著しい場所では，ピットの把握が不十分で住居跡や土坑として掘り上げてしまったものもある。

ピットの表記方法は５×５ｍのグリッドごとに１から番号をつけた。その分布状況は付図２を参照していただきたい。各ピットの規模・堆積土・平面形・柱痕の有無などは，表にしてまとめて収録した。表中の堆積土については，アルファベットの大文字で表記した。それは，Ａが黒色土・Ｂは黒褐色土・Ｃは暗褐色土・Ｄは褐色土・Ｅは暗褐色土が主体で褐色土が混入するもの・Ｆは褐色土が主体で暗褐色土が混入するもの・Ｇは黒褐色土が主体で褐色土が混入するものである。

平面形は円形もしくは楕円形のものが，長軸は20～30㎝のものが多い。

ピットの集中する範囲がいくつかみられた。それは，ＡＣ57・ＡＥ53・ＡＨ62・ＡＮ57グリッドを中心とした範囲である。次にピットが確認できないか，もしくは希薄な範囲がみられる。それは南北列を表記するアルファベットのうち，Ｙ・ＺグリッドとＡＧ・ＡＨグリッドの間である。この範囲は一見して南北を縦走するような状況であることから，道があったことも窺わせる。

ピットは重複する住居跡・建物跡・柱列跡・溝跡・土坑などよりも新しい。ピットから出土した遺物は縄文土器・土師器・陶磁器などがあった。大半は縄文土器が占めていて，陶磁器はごく僅かであった。ピットの年代は明確ではないが，付近にある木戸八幡神社との関連から中近世としておきたい。　（吉　野）

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（１）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
W44	1	F	20		23	円		
	2	C	50		26	円		
	3	F	32		6	円		
	4	B	20		10	円		
AC44	1	B	20		21	円		
	2	B	20		28	円		
V45	1	F	20		18	円		
	2	C	28		16	円		
	3	F	20		5	円		
	4	F	44		8	円		
W45	1	F	52	36	55	不定		
	2	F	18		10	円		
	3	B	20		7	円		
	4	C	20	12	30	楕円		
	5	B	26		51	円		
	6	F	36		9	円		
	7	F	20		8	円		
	8	F	30		23	円		
	9	F	24	20	7	楕円		
	10	C	40		10	不整円		
Y45	1	C	20		17	円		
	2	C	22		29	円		
	3	C	32		67	円		
Z45	1	F	22			円		
	2	C	28		17	円		
	3	F	36		13	円		
	4	C	36	32	23	楕円		
AB45	1	C	40	26	36	楕円		
	2	C	24		26	円		
	3	C	14		21	円		
	4	B	24	18	26	楕円		
	5	B	36	20	32	長楕円		
	6	B	20		16	円		
	7	B	14		9	円		
	8	B	14		15	円		
AD45	1	B	40	36	49	楕円		
	2	B	26		22	円		
	3	C	34		23	円		
	4	C	26		16	円		
	5	B	26		23	円		
	6	B	34		30	円		
	7	B	22		10	円		
	8	B	22		17	円		
	9	B	24		17	円		
AE45	1	B	24		6	円		
	2	B	22		12	円		
	3	B	24		11	円		
AF45	1	B	36	32	36	楕円		
	2	B	32		14	円		
	3	B	32		43	円		
	4	B	36	30	24	楕円		
	5	B	40	32	43	楕円		
AG45	1	B	26	24	17	楕円		
	2	B	24		15	円		P３→P２
	3	B	28		12	円		P３→P２
	4	B	34	30	23	楕円		P５→P４
	5	C	44		10	円		P５→P４
	6	B	34	24	34	楕円		
	7	B	26		34	円		
	8	B	22		54	円		
AH45	1	B	46	40	29	楕円		
	2	B	24		32	円		
	3	C	28		31	円		
	4	C	32	22	19	楕円		
AI45	1	C	66	52	40	楕円		
	2	C	24		40	円		
	3	C	42	36	40	楕円		
	4	C	32	28	11	楕円		
	5	C	28		20	円		
	6	C	40	30	45	楕円		
	7	C	26	20	14	楕円		
	8	C	40	28	15	楕円		
	9	D	30		35	円		
	10	C	30	26	12	楕円		
	11	B	32	26	19	楕円		
AJ45	1	B	24		9	円		
	2	C	44		47	円		
	3	C	34		64	円		
	4	C	64	50	35	楕円		
AK45	1	C	34		40	円		
	2	C	30	26	24	楕円		P２→P３
	3	C	32	26	35	楕円		P２→P３
	4	C	24		40	円		
	5	C	26			円		
	6	C	26	22		楕円		
	7	C	28	24	37	楕円		
V46	1	C	24	22	26	不整楕円		
	2	B	20		8	円		
	3	F	20		9	円		
	4	C	32		16	円		
	5	F	28		6	円		
	6	B	16		11	円		
	7	F	28	26	35	楕円		
	8	B	36	32	12	楕円		
W46	1	F	36	30	20	楕円		
	2	F	30		6	円		
	3	F	52		4	不整円		
	4	C	40		7	円		
	5	F	28		30	円		
	6	C	28		10	円		
	7	F	36	32	18	楕円		
	8	C	42	28	48	楕円		
	9	C	20		24	円		
Y46	1	C	38		41	円		
	2	C	52	40	17	楕円		
	3	C	20		12	円		
	4	C	16		20	円		
Z46	1	C	24		22	円		
	2	F	24		10	円		
	3	C	20		23	円		
AB46	1	B	20		10.5	円		
	2	B	20		21	円		
	3	B	22		17	円		
	4	B	18	16	16	楕円		
AC46	1	B	22		14	円		
	2	B	20		15	円		
AD46	1	B	28		17	円		
	2	B	28		8	円		
	3	B	20		6	円		
	4	B	28		6	円		
	5	C	44	38	17	楕円		
	6	C	32		10	円		
	7	C	30		10	円		
	8	C	60		23	円		P８→P９
	9	C	76		49	偏円	あり	P８→P９
	10	C	46	42	13	楕円		
	11	C	60		20	円		AD47P５→P11
	12	B	32		5	円		
	13	C	36	16	8	楕円		
	14	C	64	52	19	楕円		
	15	B	20		9	円		
	16	B	22	18	9	楕円		
AF46	1	B	30	26	31	楕円		
	2	C	30	24	19	楕円		

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（２）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	3	C	26		20	円		
	4	C	40	34	32	楕円		
	5	B	34	28	35	楕円		
	6	B	28		15	円		
	7	C	42	30	28	楕円		
	8	B	32		32	円		
	9	B	30	24	26	楕円		
	10	B	40	34	10	楕円		
	11	B	22		67	円		
AG46	1	C	28		24	円		
	2	C	40		22	円		
	3	C	38	32	49	楕円		
	4	B	24		24	円		
	5	C	32	28	29	楕円		
	6	B	22		42	円		
	7	C	38	28	39	楕円		
AH46	1	C	50	42	10	楕円		
	2	C	34		37	円		
	3	C	38	30	13	楕円		
	4	C	20		12	円		
	5	B	48	32	22	楕円		
	6	C	30		13	円		
	7	C	28	20	14	楕円		
AI46	1	C	38	34	15	楕円		
	2	B	22		42	円		
AJ46	1	C	30			円		
	2	B	24		32	円		P３→P２
	3	B	26		33	円		P３→P２
AK46	1	C	28		17	円		
	2	C	54	48	35	楕円		
	3	G	26		53	円		
	4	E	24		25	円		
	5	E	30		21	円		
U47	1	C	28		39	円		
	2	F	24	18	11	楕円		
	3	F	20		11	円		
	4	C	24	20	20	楕円		
V47	1	C	32		27	円		
	2	C	24		12	円		
	3	C	32		25	円		
	4	C	24		20	円		
	5	F	48		29	円		
W47	1	C	36	32	31	楕円		
	2	B	36	32	15	楕円		P３→P２
	3	F	36	28	14	楕円		P３→P２
	4	C	32		7	円		
	5	C	26		13	円		
	6	C	28	22	28	楕円		
	7	F	24		10	円		
	8	B	52	44	20	楕円		
	9	C	28		24	円		
	10	F	28		14	円		
	11	F	28	24	9	楕円		
	12	F	24		30	円		
	13	F	20		22	円		
	14	F	20	16	14	楕円		
	15	C	30		26	円		
	16	C	24		19	円		
	17	C	32	24	10	楕円		
	18	B	44	36	17	楕円		
X47	1	C	38	32	18	楕円		
Y47	1	C	32	28	52	楕円		
	2	F	80	66	6	楕円		
Z47	1	C	44		29	円		
	2	C	32		28	円		
AA47	1	C	24		45	円		

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	2	C	28	24	56	楕円		
AB47	1	B	26	22	49	楕円		
	2	C	18	14	29	楕円		
	3	B	24		34	円		
	4	B	20		29	円		
	5	B	22		21	円		
	6	B	30		18	円		
	7	B	24		55	円		
	8	B	20		27	円		
AC47	1	C	14		13	円		
	2	C	16		21	円		
	3	B	20		23	円		西方向に若干 オーバーハング
	4	B	20		19	円		
	5	B	20		26	円		
	6	C	22	20	26	楕円		
	7	B	38	32	41	楕円	あり	
	8	B	18		17	円		
	9	B	25		35	円		
	10	B	22		11	円		
	11	B	36	28	30	楕円		
	12	B	22	20	23	楕円		
	13	B	22		22	円		
	14	B	22		22	円		
	15	B	30	26	31	楕円		
	16	B	18		28	円		
	17	B	30	28	18	楕円		
	18	B	28	22	26	楕円		
	19	B	18		18	円		
	20	B	40	28	27	楕円		
AD47	1	B	34	30	31	楕円		
	2	C	22		19	円		
	3	C	36		19	円		
	4	C	24		18	円		
	5	C	26	20	12	楕円		P５→AD46P11
	6	C	44	38	27	楕円		
	7	C	68	60	24	楕円		
	8	C	26		13	円		
	9	C	56	52	22	楕円		
	10	C	28		19	円		
	11	B	28		40	円		
	12	D	24		10	円		P13→P12
	13	D	26		21	円		P13→P12
	14	C	28	24	11	楕円		
	15	C	30		18	円		
	16	C	26	20	15	楕円		
AF47	1	G	30		39	円		
	2	G	26		33	円		
	3	G	28		38	円		
AG47	1	G	38		24	円		
	2	F	50	46	30	楕円		
	3	E	36	30	25	楕円		
	4	G	48	44	27	不整楕円		
	5	C	20	18	20	楕円		
	6	G	36	32	14	楕円		
AH47	1	E	30			円		
	2	E	20		30	円		
	3	G	22		26	円		
	4	E	38	30	28	楕円		
	5	E	32	28	13	楕円		
	6	E	20		11	円		
	7	G	26		20	円		
	8	G	20	16		楕円		
	9	G	30		30	円		
	10	F	22		10	円		
AI47	1	G	34	30	13	楕円		
AJ47	1	F	36	32	80	楕円		

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（３）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	2	G	50		30	円		
	3	E	18		10	円		
	4	G	60		45	円		
AK47	1	E	46	42	15	楕円		
	2	E	26		25	円		
	3	E	34	30	27	楕円		
	4	G	34		36	円		
AL47	1	G	32	28	33	楕円		
T48	1	B	32	20	12	楕円		
U48	1	C	32	24	33	楕円		
	2	F	20		25	円		
	3	F	16	12	13	楕円		
	4	B	22	18	15	楕円		
	5	C	30		27	円		
	6	C	32	28	34	楕円		
	7	F	28		15	円		
	8	F	92	36	6	楕円		
V48	1	B	32	24	23	楕円		
W48	1	B	28		37	円		
	2	B	28	24	15	楕円		P３→P２
	3	F	28	20	11	楕円		P３→P２
	4	F	20		8	円		
	5	B	32		17	円		
	6	C	36	24	40	楕円		
	7	C	20		19	円		
	8	B	40	36	40	楕円		
	9	F	20		17	円		
	10	F	28		23	円		
	11	F	30		11	円		
	12	B	44	40	13	楕円		
	13	B	18		12	円		
	14	C	14	10	13	楕円		
X48	1	C	22		20	円		
	2	C	22		19	円		
	3	B	28		14	円		
	4	B	20		15	円		
Y48	1	C	20		15	円		
	2	B	20		16	円		
	3	C	32		19	円		
Z48	1	F	24		12	円		
AA48	1	C	40	34	24	楕円		
	2	B	20		24	円		
AB48	1	C	40		50	円		
	2	C	28	20	58	楕円		
	3	B	40		12	円		
	4	C	30		35	円		
	5	B	30		23	円		
	6	C	26	20	51	楕円		
	7	C	28		49	円		
	8	C	30		31	円		
	9	F	30		16	円		
	10	C	28		45	円		
	11	B	32		30	円		
AC48	1	B	22		16	円		
	2	B	20		31	円		
	3	B	22	18	7	楕円		
	4	B	30	22	26	楕円		
	5	B	24	20	20	楕円		
	6	B	26	20	15	楕円		
AD48	1	B	34	28	17	楕円		
	2	B	30	26	18	楕円		
	3	B	30		20	円		
	4	B	26		19	円		
	5	B	20		18	円		
AF48	1	E	30		20	円		
	2	G	34		15	円		
	3	E	18		26	円		
	4	E	20	16	18	楕円		
	5	G	30	22	25	楕円		
AG48	1	G	30		22	円		
	2	G	34	30	25	楕円		
	3	G	24		32	円		
	4	G	20		20	円		
AH48	1	B	40		25	円		
	2	B	28		45	円		
AI48	1	E	24		23	円		
	2	G	36	28	28	不定		
	3	E	30	24	23	楕円		
	4	E	26		37	円		
	5	E	20	16		楕円		
	6	E	40	30	33	楕円		
	7	E	28	20	29	楕円		
	8	G	20		31	円		
	9	F	32	26	30	楕円		P９→P10
	10	F	28		20	円		P９→P10
	11	G	22		50	円		
	12	D	34		35	円		
AJ48	1		26	20	8	楕円		
	2	G	32		50	円		
	3	F	40	34	30	楕円		
	4	C	30	24	15	楕円		
	5		26		17	円		
	6	C	24		15	円		
	7	C	30	26	15	楕円		
AK48	1	B	26		55	円		
	2	G	32		35	円		
AL48	1	G	42		30	円		
	2	B	32	30	20	楕円		
W49	1	F	28		22	円		
	2	C	20		30	円		
	3	C	28		16	円		
	4	B	20		17	円		
	5	B	26		19	円		
	6	C	48	40	46	楕円		
	7	B	22		19	円		
	8	C	28		39	円		
	9	C	44		44	円		
	10	C	56	52	15	楕円		
	11	C	32		25	円		
	12	F	30		44	円		
	13	F	20		10	円		
	14	F	20		8	円		
	15	F	40		16	円		
	16	F	22		20	円		
	17	C	56	48	20	楕円		P17→W50P１
X49	1	C	20		23	円		
	2	F	32		7	円		
	3	C	36		51	円		
	4	B	56	48	51	楕円		
	5	F	20	16	11	楕円		
	6	B	24		9	円		
	7	C	44	40	30	楕円		
	8	C	24		13	円		
Y49	1	F	28		14	円		
	2	F	24		18	円		
	3	F	24		10	円		
	4	C	64	56	20	楕円		
	5	C	20		20	円		
	6	C	20		11	円		
	7	C	36	28	14	楕円		
	8	C	28		37	円		
	9	C	28		16	円		
Z49	1	C	36		13	円		

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（４）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
ＡＤ49	1	B	26		47	円		
	2	B	18		19	円		
	3	B	24	18	23	楕円		
	4	B	22		20	円		
	5	B	28		34	円		
	6	C	34	26	32	楕円		
	7	B	18		21	円		
	8	B	20		35	円		
	9	C	20		28	円		
	10	B	20		25	円		
	11	C	22		11	円		
ＡＥ49	1	C	28		12	円		
	2	B	20		21	円		
	3	B	22		14	円		
	4	B	26		14	円		
	5	B	30	18	19	楕円		
	6	B	20		26	円		
	7	B	30		28	円		
	8	B	26	22	6	楕円		
ＡＦ49	1	G	30	26	30	楕円		
ＡＧ49	1	G	28	22	13	楕円		
	2	G	22		18	円		
	3	G	26	22	30	楕円		
	4	G	30	24		楕円		
	5	E	32	26	20	楕円		
	6	G	22		29	円		
ＡＨ49	1	E	22		26	円		
	2	G	28	24	26	楕円		
	3	E	24	20	24	楕円		
ＡＩ49	1	E	24		28	円		
	2	E	40	34	28	楕円		
	3	C	24	20	30	楕円		
	4	E	20		27	円		
ＡＪ49	1	E	20	16	25	楕円		
	2	E	24		19	円		
ＡＫ49	1	E	20		19	円		
	2	E	26	20	21	楕円		
	3	G	30		36	円		
ＡＬ49	1	G	42	34	55	楕円		
	2	C	30	26	31	楕円		
	3	E	32		34	円		
Ｖ50	1	C	40	36	26	楕円		
	2	C	32		14	円		
	3	B	36		12	円		
	4	C	60	56	10	楕円		
Ｗ50	1	C	40		19	円		W49Ｐ17→Ｐ１
	2	C	52		60	不整円		
	3	C	28	24	35	楕円		
	4	F	24		15	円		
Ｘ50	1	B	48	40	58	不整楕円		
	2	C	60	56	13	不整楕円		
	3	C	34	32	31	楕円		
Ｙ50	1	C	32		18	円		
	2	C	32		12	円		
ＡＤ50	1	B	24		22	円		
	2	C	30	22	32	楕円		
	3	B	20		25	円		
	4	B	42	30	20	楕円		Ｐ４→Ｐ５
	5	B	50	40	60	隅丸長方形		Ｐ９→Ｐ５
	6	C	18		22	円		
	7	C	12		20	円		
	8	B	28		37	円		Ｐ９→Ｐ８
	9	B	42	30	31	不定形		Ｐ９→Ｐ８
	10	C	18	12	31	楕円		
	11	C	60	28	19	不整楕円		
	12	C	26	22	15	楕円		
	13	B	34	20	14	楕円		

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
ＡＤ50	1	B	20		28	円		
	2	B	22		30	円		
	3	C	24	20	31	楕円		
	4	C	20		28	円		
	5	B	22		18	円		
	6	B	18	16	11	楕円		
ＡＥ50	1	C	12		21	円		
	2	C	12		21	円		
	3	B	14		15	円		
	4	B	16		15	円		
	5	B	28	18	45	楕円		
	6	C	34	24	25	楕円		
	7	C	42	34	30	楕円		
	8	C	40	28	10	楕円		
	9	C	30	24	27	楕円		
	10	C	32	26	24	楕円		
	11	C	18		30	円		
	12	C	14		12	円		
	13	C	30		11	円		
	14	C	26		17	円		
	15	C	12		20	円		
	16	C	22	18	21	楕円		
	17	C	12		22	円		
	18	B	24	20	19	楕円		
	19	B	20		20	円		
	20	C	20		22	円		
	21	C	20		18	円		
	22	C	36		19	円		
ＡＨ50	1	C	26	24	16	楕円		
	2	C	30		48	円		
	3	C	28		14	円		
	4	C	48	36	39	楕円		
	5	C	40	36	43	楕円		
	6	C	34		37	円		
ＡＩ50	1	C	26		14	円		
	2	C	30		20	円		
	3	C	24		36	円		
	4	C	26		24	円		
	5	C	22		54	円		
	6	C	28	24	28	楕円		
	7	C	38	30	43	楕円		
	8	B	32		68	円		
ＡＪ50	1	C	22		15	円		
	2	C	24	20	30	楕円		
	3	C	22		29	円		
	4	B	26		73	円		
	5		34	30	73	楕円		
ＡＫ50	1	E	20		25	円		
	2	C	22		56	円		
	3	E	30	26	28	楕円		
	4	D	26		25	円		
	5	B	20	16	24	楕円		
	6	B	20	16	23	楕円		
	7	C	22		23	円		
Ｔ51	1	F	24		16	円		
	2	F	24	20	19	楕円		
Ｕ51	1	C	36	28		楕円		
	2	C	24		28	円		
	3	F	36	28	20	楕円		
	4	F	28		15	円		
	5	C	34		25	円		
	6	F	32		19	円		Ｐ７→Ｐ６
	7	F	24		18	円		Ｐ７→Ｐ６
	8	C	24		18	円		
	9	F	28		20	円		
	10	B	32	28	22	楕円		

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（５）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	11	F	28		33	円		
	12	F	44	40	13	楕円		
V51	1	C	24	20	17	楕円		
	2	B	36	30	12	楕円		
	3	C	32		14	円		
	4	C	28	20	12	楕円		
	5	C	36		21	円		
	6	C	24		24	円		
	7	F	28		14	円		
	8	B	36	32	42	楕円		
	9	F	44		11	円		
	10	C	28		16	円		
	11	C	20		8	円		
	12	C	22		25	円		
	13	C	24	20	29	楕円		
	14	C	24		14	円		
W51	1	C	32		32	円		
	2	C	20		30	円		Ｐ３→Ｐ２
	3	C	24		()	円		Ｐ３→Ｐ２
	4	F	36		8	円		
	5	C	24		19	円		
X51	1	C	28		40	円		
	2	F	24		11	円		
Y51	1	B	36	32	23	楕円		
AA51	1	F	36		32	円		
	2	F	40	32	46	楕円		
	3	C	28		34	円		
	4	C	32	28	44	楕円		
AB51	1	C	24		14	円		
	2	B	24		22	円		
	3	C	32		26	円		
	4	C	28		23	円		
	5	C	28		28	円		
	6	C	28		30	円		
	7	C	32	28	15	楕円		
	8	C	22		16	円		
AC51	1	F	24		32	円		
	2	C	20		23	円		
AD51	1	C	20		24	円		
	2	C	42	36	22	楕円		
AE51	1	B	18		11	円		
	2	C	34		24	円		
	3	C	22		60	円		
	4	C	20		22	円		
	5	C	20	16	28	楕円		
	6	C	42	20	28	楕円		
	7	B	34	20	31	楕円		
	8	B	30			円		Ｐ８～Ｐ18はＳＩ98内
	9	B	26	20		楕円		
	10	B	24			円		
	11	B	30			円		
	12	B	30	24		楕円		
	13	B	20			円		
	14	B	20			円		
	15	C	24	20		楕円		
	16	C	18			円		
	17	B	20			楕円		
	18	B	36	18		楕円		
AF51	1	B	20			円		Ｐ１～Ｐ５はＳＩ98内
	2	B	44	34		楕円		
	3	B	24	18		楕円		
	4	B	20			円		
	5	C	44	40		隅丸方形		
	6	B	18		39	円		
	7	B	28		30	円		
	8	C	18		11	円		
	9	C	34		16	円		
	10	C	18		17	円		
	11	C	22		12	円		
AH51	1	C	30	28	18	楕円		
	2	C	40	36	21	楕円		
	3	C	30		21	円		
	4	B	46	36	44	楕円		
	5	C	28		15	円		
AI51	1	C	26		43	円		
	2	C	28		22	円		
	3	C	20		11	円		
	4	C	28		20	円		
	5	C	28		40	円		
AJ51	1	C	30		37	円		
	2	B	20		20	円		
	3	C	20		17	円		
	4	C	34	30	44	楕円		
	5	B	28	24	40	楕円		
AK51	1		20		28	円		
	2	C	26	24	20	円		
	3	B	20		35	円		
	4	C	24		22	円		
	5	C	22		31	円		
	6	C	24		13	円		
AM51	1	B	26	22	32	楕円		
	2	C	30		29	円		
	3		44	32		楕円		
	4	D	22	18		楕円		
	5	C	34	30		楕円		
	6	C	28	24		楕円		
T52	1	F	28		31	円		
U52	1	F	32	28	13	不整楕円		
	2	F	28		18	円		
	3	F	28	22	27	楕円		
	4	F	44		25	円		
	5	F	16		13	円		
	6	C	24		22	円		
	7	C	24	16	30	楕円		
	8	B	28		17	円		
	9	C	24		22	円		
	10	B	22	16	13	楕円		
	11	C	24	20	30	楕円		
V52	1	C	60		66	円		
	2	C	36	32	24	楕円		
	3	C	28		26	円		
	4	C	20		49	円		
	5	F	48		30	円		
	6	C	24		35	円		
	7	C	28		13	円		
	8	C	68	60	18	楕円		
	9	F	28		12	円		
	10	C	32		33	円		
	11	C	20		32	円		
	12	C	24	22	33	楕円		
	13	C	24		40	円		
	14	C	32			円		
W52	1	C	24		35	円		
	2	C	26		22	円		
	3	B	24		36	円		
	4	F	36	32	25	楕円		
	5	C	24	20	14	楕円		
	6	F	28			円		
	7	C	28	24	26	楕円		
	8	F	28			円		
	9	F	36	30	35	楕円		
	10	F	28		37	円		
	11	C	24		36	円		
	12	C	28		26	円		

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（６）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	13	C	32	28	32	楕円		
	14	F	52		13	円		
X52	1	B	34	28	27	楕円		
Y52	1	B	28		11	円		
	2	B	24		20	円		
	3	B	28	24	14	楕円		
AA52	1	F	32		12	円		
	2	C	52	48	21	楕円		
	3	C	24		20	円		
	4	C	28		44	円		
	5	F	62	56	12	楕円		
	6	F	36		44	円		
	7	C	26		30	円		
	8	C	20		26	円		
	9	F	28			円		
	10	B	52	42	14	楕円		
AB52	1	C	28		26	円		
	2	B	20		16	円		
	3	C	24		44	円		P３→P４
	4	C	20		46	円		P３→P４
	5	C	24		41	円		
	6	B	26		13	円		
	7	C	28		27	円		
	8	C	24		12	円		
	9	C	24		40	円		
	10	C	22		32	円		
	11	C	24	18	37	楕円		
	12	C	28		25	円		
	13	C	26	24	55	楕円		
	14	C	24		57	円		
	15	C	20		23	円		
	16	C	26		45	円		
	17	C	24		23	円		
	18	C	28	24	43	楕円		
	19	C	32		26	円		
	20	C	44		21	円		
	21	C	22		28	円		
	22	B	36	32	15	楕円		
	23	C	24	22	45	楕円		
	24	C	24		21	円		
	25	C	30	28	5	円		
AC52	1	C	24		35	円		P１→P２
	2	C	28		50	円		P１→P２
	3	C	24		33	円		
	4	C	24		23	円		
	5	F	28	22	26	楕円		
	6	C	20		21	円		
	7	C	28		48	円		
	8	C	24		32	円		
	9	C	28		27	円		
	10	C	24		19	円		
	11	C	24		22	円		
AD52	1	C	26		28	円		
	2	C	32		37	円		
	3	C	32		31	円		
	4	C	28		45	円		
AE52	1	B	22		17	円		
	2	B	30	20	27	楕円		
	3	C	34	30	27	楕円		
	4	C	30		26	円		
	5	C	32		18	円		
	6	C	46	38	30	楕円		AE53P１→P６
	7	C	32	28	30	楕円		
	8	C	36	30	55	楕円		
	9	C	34	24	31	楕円		
	10	C	24		31	円		
AF52	1	B	24		10	円		
	2	B	24	20	14	楕円		
	3	B	20	18	18	楕円		
AH52	1	C	26		17	円		
	2	C	26		36	円		
	3	C	24		10	円		
	4	B	30		28	円		
	5	C	28		39	円		
AI52	1	B	26		29	円		
	2	C	18		43	円		
	3	C	22		29	円		
AJ52	1	B	34	30	44	楕円		
	2	B	20		28	円		
	3	B	44	40	55	楕円		
AK52	1	E	22		19	円		
	2	E	20		38	円		
	3	E	24	22	35	円		
	4	E	22		15	円		
	5	E	28	24	42	楕円		
	6	C	26		33	円		
AL52	1		30		33	円		
AM52	1	F	28		35	円		
U53	1	C	32	28	16	楕円		
	2	C	24		20	円		
V53	1	B	24		25	円		
	2	B	20		18	円		
	3	B	20		17	円		
	4	B	24	16	16	楕円		
W53	1	B	16		12	円		
	2	B	28		30	円		
	3	C	28		18	円		
	4	F	28		36	円		
AC53	1	B	24		30	円		
	2	F	24	22	27	楕円		
	3	C	28		28	円		
	4	B	36		15	円		
	5	B	24		65	円		
	6	C	26		14	円		
AD53	1	F	26		29	円		
AE53	1	C	38		33	円		P２→P１→AE52P６
	2	C	40	30	7	楕円		P２→P１
	3	C	34	24	40	楕円		
	4	C	24	20	31	楕円		
	5	B	62	56	47	楕円		
	6	C	32		40	円		
	7	B	34	26	31	楕円		
	8	B	26		35	円		
	9	B	18		19	円		
	10	C	36	30	31	楕円		
	11	B	48	28	32	楕円		
	12	B	70	40	21	楕円		
	13	C	40	36	22	楕円		
	14	C	24		30	円		
	15	B	34	24	31	楕円		
	16	B	60	44	41	楕円		
	17	C	30		30	円		
	18	B	24		30	円		
	19	C	20		19	円		
	20	C	30	20	11	楕円		
	21	B	14		10	円		
	22	B	22		39	円		
	23	C	12		20	円		
	24	C	20		29	円		
	25	B	20		30	円		
	26	B	60	44	30	楕円		
	27	C	34	22	21	楕円		
AF53	1	B	42	24	18	長楕円		
	2	B	24	20	45	不整楕円		P２→P３

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（７）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	3	B	30	24		楕円		Ｐ２→Ｐ３
	4	B	38	36	20	不整楕円		
	5	B	20		28	円		
	6	C	32	28	24	楕円		
	7	B	40	34	29	楕円		
	8	B	32	24	29	楕円		
	9	B	40	28	10	楕円		
	10	C	40	28	20	楕円		
	11		30			円		
	12	B	18		20	円		
	13	B	28	20	9	楕円		
	14	C	74	56	23	楕円		
	15	B	54	38	22	不整楕円		
	16	B	32		29	円		
	17	C	52	36	39	楕円	あり	
	18	B	36	30	21	楕円		
	19	C	34	26	30	楕円		
	20	C	38	24	30	楕円		
	21	B	52	48	30	円		
	22		16			円		
	23		26	22		楕円		
	24		24			円		
	25	C	24		43	円		
	26	B	46	38	47	楕円		
ＡＨ53	1	C	36		19	円		
	2	B	28		62	円		
ＡＩ53	1	C	44	32	81	楕円		
	2	C	34		18	円		
ＡＪ53	1		20		31	円		
	2	F	26	22	20	楕円		
ＡＫ53	1	E	26	22	25	楕円		
ＡＭ53	1	E	26	20	37	楕円		
	2	E	46	32	55	円		
ＡＮ53	1	B	22		33	円		
	2	E	36		32	円		
	3	E	34	30	31	楕円		
	4	E	28		16	円		
	5	E	34	28	13	楕円		
Ｕ54	1	B	20		24	円		
Ｖ54	1	B	28		29	円		
	2	B	24		29	円		
	3	B	32	28	16	楕円		
	4	B	28	24	15	楕円		
	5	B	24		31	円		
	6	B	28		21	円		
	7	B	32	28	19	楕円		
	8	B	24		11	円		
	9	B	20		31	円		
Ｗ54	1	B	36		49	円		
	2	F	24		8	円		
Ｘ54	1	C	48	44	16	楕円		
	2	F	36		17	円		
ＡＥ54	1	C	24		29	円		
	2	B	10		12	円		
	3	B	14		11	円		
	4	B	20	16	12	楕円		
	5	B	20		20	円		
	6	B	20		36	円		
	7	B	20		32	円		
	8	B	24	18	36	楕円		
	9	B	28	20	42	楕円		
	10	B	30	24	16	楕円		
	11	B	22		15	円		
	12	B	20		15	円		
	13	B	28		20	円		Ｐ13→Ｐ14
	14	B	32	24	35	楕円		Ｐ13→Ｐ14
	15	B	14		12	円		
	16	B	40	14	36	楕円		
	17	B	20		35	円		
	18	B	34		30	円		
	19	B	30	24	22	楕円		
	20	B	36		28	円		
	21	B	38		31	円		
ＡＦ54	1	C	30	24	20	楕円		
	2	C	48	40	25	楕円		
	3	B	24		30	円		
	4	B	30	28	41	楕円		Ｐ５→Ｐ４
	5	B	28	24	40	楕円		Ｐ５→Ｐ４
	6	B	34	28	40	楕円		
	7	B	58	50	40	不整楕円		
	8	C	54	48	20	楕円		
	9	B	(50)	40	54	楕円		Ｐ９→Ｐ10
	10	B	76	52	57	楕円		Ｐ９→Ｐ10
	11	B	36	32	53	楕円		
	12	C	28	24	20	楕円		
	13	C	30	26	30	楕円		
	14	B	20		22	円		
	15	B	40	24	30	楕円		Ｐ16→Ｐ15
	16	B	28	24	20	楕円		Ｐ16→Ｐ15
	17	C	76	30	38	長楕円	あり	←二段ピットの可能性あり
	18	B	24		33	円		
	19	B	68	28	52	長楕円		
	20	C	60	48	36	楕円		
	21	B	18		22	円		
	22	B	18		15	円		
	23	C	38	30	21	楕円		
	24	B	30		38	円		
	25	B	30		28	円		
	26	B	68	36	44	長楕円		
	27	B	20		29	円		
	28	C	30		24	円		
ＡＪ54	1	E	48	44	53	不整円		
	2	E	40		39	円		
ＡＫ54	1	E	28	24	58	楕円		
	2	E	24	20	53	楕円		
	3	G	20		20	円		
	4	E	20		20	円		
	5	E	20		17	円		
	6	E	20	16	25	楕円		
ＡＬ54	1	E	22		37	円		
ＡＭ54	1	G	24	20	23	楕円		
	2	G	26	22	30	楕円		
	3	E	28		20	円		
ＡＮ54	1	B	28		16	円		
	2	E	40	30	20	楕円		
	3	B	30	28	25	円		
	4	C	30	28	32	円		
	5	C	34	26	21	楕円		
	6	C	40	34	36	楕円		
	7	C	26		34	円		
	8	C	28		45	円		
	9	C	22		10	円		
ＡＯ54	1	C	34		27	円		
	2	C	32	26	15	楕円		
	3	C	32	28	34	楕円		
	4	C	30	26	18	楕円		
	5	C	38	30	26	楕円		
	6	C	34	28	19	楕円		
	7	C	34		33	円		
	8	B	26		20	円		
	9	C	32		23	円		
Ｖ55	1	C	58	52	14	楕円		
	2	C	60		11	円		

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（８）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	3	F	60	50	8	楕円		
	4	C	30		14	円		
	5	F	40		12	円		
	6	F	30	24	30	楕円		
W55	1	C	38	34	14	楕円		
	2	F	26		13	円		
	3	F	26		13	円		
	4	C	42	36	13	楕円		
	5	C	56	36	21	楕円		
	6	C	22		21	円		
	7	F	24		9	円		
X55	1	F	36	28	11	楕円		
	2	F	24	20	47	楕円		
AB55	1	F	26		26	円		
	2		23		11	円		
	3	G	24		19	円		
	4	E	18		10	円		
	5	E	16		11	円		
	6		26		12	円		
	7	G	21		21	円		
	8	G	32		40	円		
	9	G	21		43	円		
	10	G	23		37	円		
	11	E	28	21	10	楕円		
	12	G	18		18	円		
AC55	1	G	22		8	円		
	2	G	24		38	円	あり	
	3	G	22		34	円		
	4	G	26		6	円		
	5	E	20		14	円		
	6	G	32	26	22	楕円		
	7	E	22		12	円		
	8	E	18		42	円	あり	
	9	G	34	28	42	楕円		
	10	G	26		39	円		
	11	G	20		12	円		
	12	G	21		37	円		
AD55	1	E	30		25	円		
	2	E	25		25	円		
	3	F	43	35	14	楕円		
	4	E	38		33	円		
	5	G	26		35	円		
	6	G	32	26	33	楕円		
	7	G	20		12	円		
	8	E	52	38	34	楕円		
	9	E	28		31	円		
	10	E	22		30	円		
	11	G	35		33	円	あり	
	12	G	20		13	円		
	13	E	20		15	円		
	14	G	21		8	円		
	15	G	20		18	円		
AE55	1	G	20		24	円		
	2	E	24		25	円		
	3	G	70		16	円		
	4	G	30		19	円		
	5	G	32		17	円		
	6	G	32		16	円		
	7	G	18		10	円		
	8	G	22		12	円		
	9	G	25		16	円		
AF55	1	C	30	25	38	楕円		
	2	E	26		26	円		
	3	E	30	26	48	楕円	あり	
	4	E	25		33	円		
AJ55	1	E	24		25	円		
	2	E	24	20	39	楕円		

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
AK55	1	E	32	30	35	円		
	2	E	40	34	26	楕円		
	3	E	26		22	円		
AL55	1	D	20		30	円		
	2	E	22		20	円		
	3	E	24	20	25	楕円		
AM55	1	E	24		21	円		
	2	E	24	18	15	楕円		
	3	C	28		14	円		
	4	C	28	26	9	楕円		
	5	E	18		25	円		
	6	C	36		27	円		
	7	C	32	30	27	円		
	8	C	32	28	24	楕円		
	9	C	30		30	円		
	10	C	46	38	24	楕円		
	11	C	32		22	円		
	12	D	24		20	円		
	13	C	40	34	37	不整楕円		
	14	C	40	38	17	円		
AN55	1	C	34	32	41	円		
	2	C	34	28	41	楕円		P３→P２
	3	C	24	(18)	11	楕円		P３→P２
	4	C	26	(22)	16	楕円		P４→P５
	5	C	32		30	円		P４→P５
	6	C	24		37	円		
	7	C	38	36	45	円		
	8	C	32	28	34	楕円		
	9	C	26		38	円		
	10	C	28	24	43	楕円		
	11	C	26	20	44	楕円		
	12	C	30		44	円		
	13	C	28	24	23	楕円		
	14	C	28	26	15	円		
	15	G	46	36	28	楕円		
	16	C	40	30	18	楕円		
	17	C	46	42	49	不整円		
AO55	1		40		46	円		石あり
	2		42	32	43	楕円		
	3		26		24	円		
	4	C	26	20	18	楕円		
	5		26		50	円		
	6		30	24	44	楕円		
	7	C	30		14	円		
	8	D	40	30	28	楕円		
	9	F	28	26	25	円		
	10	C	26	22	24	楕円		
	11	C	24		21	円		
	12	C	32	26	31	楕円		AP55P４→P12
AP55	1	C	22		11	円		
	2	C	28		22	円		
	3	C	22		25	円		
	4	C	34	(20)	31	楕円		P４→AO55P12
V56	1	F	46	42	12	楕円		
W56	1	F	62	54	7	不整円		
	2	C	36		28	円		
	3	F	30		10	円		
X56	1	F	24		12	円		
	2	F	24		8	円		
	3	F	22	18	17	楕円		
	4	F	22	18	29	楕円		
	5	F	60		10	円		石あり
	6	F	70	66	28	不整円		石あり
	7	F	22	16	14	楕円		
	8	F	26	22	15	楕円		
AB56	1	G	29		24	円		
	2	E	24	19	45	楕円	あり	

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（９）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	3	G	22		12	円		
	4	E	28	22	13	楕円		
	5	G	30		17	円		
	6	G	20		27	円		
	7	G	20		28	円		
	8	G	18		36	円		
	9	G	24		26	円		
	10	G	28		27	円		
	11	G	34		38	円		
	12	G	37		21	円		
	13	G	18		44	円		
AC56	1	G	32	20	19	楕円		
	2	E	28		25	円		
	3	G	24		28	円		
	4	G	22		11	円		
	5	G	21		21	円		
	6	G	27		31	円		
	7	G	22		14	円		
	8	G	24		26	円		
	9	G	26		43	円		
	10	G	24		32	円		
	11	G	24	22	16	楕円		
	12	G	22		37	円		
	13	G	22		25	円		
	14	G	21		42	円		
	15	G	28		26	円		
	16	G	25		19	円		
	17	E	26		25	円		
	18	G	25		31	円		
	19	G	24		31	円		
	20	G	32	24	20	楕円		
	21	E	24		19	円		
	22	E	22		16	円		
	23	G	25		24	円		
	24	G	22		18	円		
AD56	1	G	19		8	円		
	2	G	22		34	円	あり	
	3	G	28		32	円		
	4	G	28		28	円		
	5	E	26		26	円		
	6	G	29	24	24	楕円	あり	
	7	E	17		9	円		
	8	G	14		17	円		
	9	E	28	24	29	楕円		
	10	G	21		50	円		
	11	G	24		32	円		
	12	G	62	54	17	楕円		
	13	F	22		28	円	あり	
	14	G	24		1	円		
	15	G	26		38	円		
	16	G	22		24	円		
	17	G	23		24	円		
	18	E	50	44	74	楕円		
	19	G	25		26	円	あり	
AE56	1	G	26		21	円		
	2	E	20		11	円		
	3	G	19		18	円		
	4	G	22		21	円		
	5	G	38	26	34	楕円		
AF56	1	E	22		18	円		
	2	E	30		12	円		
	3	G	27	24	19	楕円		
	4	E	24		12	円		
	5	E	30		15	円		
	6	F	18		11	円		
AJ56	1	C	26	20	16	楕円		
	2	C	30	26	25	楕円		
	3	B	26		53	円		
AL56	1	E	26		20	円		
AM56	1	C	26	22	11	楕円		
	2	E	30		30	円		
	3	C	28	26	19	円		
	4	C	30	24	22	楕円		
	5	C	18		9	円		
	6	B	30		41	円		
	7	C	40	32	29	楕円		
	8	C	18	16	16	楕円		
	9	B	24		38	円		
	10	C	30		29	円		
	11	E	28	24	15	楕円		
	12	B	20	16	28	楕円		
	13	E	30		20	円		
AN56	1	C	26		20	円		
	2	G	40	34	33	楕円		
	3	B	20		25	円		
	4	C	30	24	66	楕円		
	5	C	34	30	24	楕円		
	6	C	20			円		
	7	B	24		25	円		
	8	C	26		25	円		
	9	B	30		46	円		P10→P 9
	10	C	16		3	円		P10→P 9
	11	C	26		27	円		
	12	E	28	24	20	楕円		
	13	C	38	32	44	楕円		
	14	C	20		17	円		
	15	C	36	30	22	楕円		
	16	C	44	38	49	楕円		
	17	C	32	30	49	円		
	18	C	30		35	円		
	19	C	30	26	17	楕円		
	20	C	34	32	39	円		
	21	C	28	24	29	楕円		P21→P22
	22	C	38	30		楕円		P21→P22
AO56	1	E	30		39	円		
	2	B	34	26	25	楕円		
	3	B	30		25	円		
AP56	1	E	28	26	25	円		
	2	G	20		25	円		
W57	1	B	36		20	円		
	2	B	30		17	円		
	3	B	22		17	円		
	4	B	36		23	円		
	5	B	56	46	15	不定		瓢箪型凹部38cm
	6	B	40	32	17	楕円		
X57	1	B	26		16	円		
AB57	1	G	28		37	円		
	2	G	24		31	円		
	3	G	24		10	円		
	4	G	24		9	円		
	5	E	22		7	円		
	6	G	28	20	21	楕円		
	7	G	24		31	円		あり
	8	G	20		10	円		
	9	G	22		16	円		
	10	G	24		20	円		
AC57	1	E	18		8	円		
	2	E	28		19	円		
	3	G	34	29	35	楕円		あり
	4	G	24		15	円		
	5	E	22		12	円		
	6	G	26		19	円		
	7	G	18	15	11	楕円		あり
	8	G	30		30	円		あり

表 4　馬場前遺跡ピット一覧表（10）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	9	G	23		24	円		
	10	G	20		9	円		
	11	E	26		19	円		
	12	G	26		27	円		
	13	G	24		15	円		
	14	G	34		19	円		
	15	E	24	18	17	楕円		
	16	G	30		18	円		
	17	G	30	22	19	楕円		
	18	E	22		13	円		
	19	G	30		26	円		
	20	G	26	22	10	楕円		
	21	G	29		27	円		
	22	G	27		32	円		
	23	G	50	28	15	楕円		
	24	G	24		18	円		
	25	G	29		34	円		
AD57	1	G	40	28	50	不整楕円	あり	
	2	G	22		11	円		
	3	G	23	20	18	楕円		
	4	G	20	18	21	楕円		
	5	G	24	20	10	楕円		
	6	E	30		27	円		
	7	G	20		31	円		
	8	G	25		29	円		
	9	G	26		25	円		
	10	G	20		12	円		
	11	G	32		18	円		
	12	G	26		27	円		
	13	E	24		34	円		
	14	E	28		65	円		
	15	G	21		30	円		
	16	G	20		21	円		
	17	E	23		13	円		
	18	E	32		18	円		
	19	G	28		20	円		
	20	G	22		32	円		
AE57	1	G	22		16	円		
	2	E	26		35	円		
	3	G	21		21	円		
	4	E	24		10	円		
	5	E	24		29	円		
	6	G	26		38	円		
	7	E	28		16	円		
	8	G	12		11	円		
	9	E	22		12	円		
	10	G	26		31	円		
	11	G	26		35	円		
	12	G	30		54	円	あり	
	13	G	22		6	円		
AF57	1	F	18		6	円		
	2	G	22		61	円		
	3	E	21	18	23	楕円		
	4	E	22		32	円		
	5	G	8		19	円		
	6	E	27		20	円		
AJ57	1	C	24		29	円		
	2	C	22		24	円		
	3	C	20		28	円		
	4	C	74	52	47	楕円		
	5	C	32	28	24	楕円		
	6	C	24	20	23	楕円		
AK57	1	C	50	44	18	楕円		
	2	G	20		18	円		
	3	G	20		10	円		
	4	G	20		20	円		
	5	C	30	24	25	楕円		
	6	C	34	30	21	楕円		
	7	G	30		35	円		
	8	C	24		23	円		
AL57	1	D	24		15	円		
	2		32		23	円		
	3		26	20	15	楕円		
	4		32	24	19	楕円		
AM57	1	B	30		32	円		
	2	G	42	40	15	円		
	3	C	24		14	円		
	4	C	32	30	12	円		
	5	G	24		20	円		
	6	E	34	30	15	円		
	7	D	30		15	円		
	8	C	26	20	18	楕円		
	9	E	20		25	円		
	10	C	30	24	11	楕円		
	11	C	24	20	19	楕円		
AN57	1	B	24		32	円		
	2	C	40		25	円		
	3	C	26		13	円		
	4	B	60	32	38	楕円		
	5	C	22	20	17	円		
	6	C	30	22	17	楕円		
	7	B	26		38	円		
	8	C	30	26	17	楕円		
	9	C	28		59	円		
	10	B	34	24	20	楕円		
	11	C	30	24	14	楕円		
	12	C	28		16	円		
	13	C	22		25	円		
	14	C	40	28	39	楕円		
	15	C	26	22	18	楕円		
	16	E	26		35	円		
	17	D	20		30	円		
	18	F	24		32	円		
	19	F	22		25	円		
	20	B	30		60	円		
	21	B	24		42	円		
	22	B	40	34	70	楕円		
	23	C	40	20	16	楕円		
	24	B	34		50	円		
	25	C	28	24	22	楕円		
	26	C	28		22	円		
	27	B	30	28	47	円		
AO57	1	E	34	30	17	楕円		
	2	C	46	34	49	楕円		
	3	C	28	24	16	楕円		
	4	C	50	48	25	円		
	5	B	26		47	円		
	6	C	30		54	円		P 6→P 7
	7	C	26		10	円		P 6→P 7
	8	B	26		25	円		
	9	C	36		25	円		
	10	C	20		16	円		
	11	C	30	28	20	円		
	12	C	58	48	49	楕円		
	13	B	46	30	42	楕円		
	14	B	30		38	円		
	15	C	20		20	円		
	16	B	22		37	円		
	17	B	24		39	円		
	18	B	30	26	46	楕円		
	19	C	28	22	20	楕円		
AP57	1	B	30		43	円		
	2	B	26		27	円		
	3	C	30	24	24	楕円		

表4　馬場前遺跡ピット一覧表（11）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	4	C	30	24	21	楕円		
	5	C	26		13	円		
	6	B	40	34	46	楕円		
	7	C	30	24	17	楕円		
	8	C	24		28	円		
	9	C	18		30	円		
	10	B	26		44	円		
	11	B	46	40	70	楕円		
	12	C	30	22	17	楕円		
	13	C	26	24	26	円		
	14	C	30		31	円		
	15	C	38	36	25	円		
	16	B	28	24	36	楕円		
AQ57	1	C	20	16	34	楕円		
	2	B	30	24	62	楕円		
	3	B	32	28	25	楕円		
AC58	1	G	20	16	15	楕円	あり	
	2	E	30		10	円		
	3	G	28		25	円		遺物あり
AD58	1	E	25	18	17	楕円		
	2	E	29	25	39	楕円		
	3	E	22		31	円		
	4	E	28	24	37	楕円		
	5	E	26		14	円		
	6	G	20		17	円		
AE58	1	G	30		41	円		
	2	G	34	22	27	楕円		
	3	G	14		38	円		
	4	G	12		15	円		
	5	E	20		25	円		
	6	E	16		21	円		
	7	G	22		35	円		
	8	G	24		29	円		
	9	E	20		18	円		
AF58	1	G	26	23	62	楕円		
	2	E	23		25	円		
	3	F	22	17	11	楕円		
	4	E	18		19	円		
	5	F	28		11	円		
	6	G	23		23	円		
	7	E	18		20	円		
	8	G	42	36	37	楕円		
	9	G	20		20	円		
	10	F	24	19	15	楕円		
	11	G	42	28	22	楕円		
	12	G	18		9	円		
	13	G	24	14	18	楕円		
	14	G	24	18	28	楕円		
	15	E	24		15	円		
	16	G	20		22	円		
	17	F	20		15	円		
	18	F	28		10	円		
AG58	1	G	44	30	31	楕円		
	2	G	26		44	円		
	3	G	16		20	円		
	4	F	20		19	円		
	5	F	25		15	円		
AK58	1	C	42	40	23	円		
AL58	1	C	32		24	円		
	2	C	26		23	円		
	3	C	30		24	円		
AM58	1	C	30		27	円		
AN58	1	C	26		49	円		
	2	B	26		30	円		
	3	B	24		48	円		
	4	B	24		29	円		
	5	C	32		30	円		
	6	C	48	38	20	楕円		
	7	C	26	18	13	楕円		
	8	C	32		16	円		
	9	B	30		44	円		
	10	B	30	22	28	楕円		
AO58	1	B	24		34	円		
	2	C	26		19	円		
	3	C	38	34	22	楕円		
	4	B	30		43	円		
	5	B	28	24	35	楕円		
	6	B	40	30	37	楕円		
	7	B	22		27	円		
	8	B	38	30	37	楕円		
	9	B	34	24	31	楕円		
	10	B	40		37	円		
	11	C	30	28	13	円		
	12	C	32	26	21	楕円		
	13	B	30		32	円		
	14	B	24		30	円		
	15	B	34		33	円		
AP58	1	B	34	26	70	楕円		
	2	G	56	42	45	楕円		
	3	B	28	24	35	楕円		
	4	B	30	26	70	楕円		
	5	C	34	30	26	楕円		
	6	C	24		14	円		
	7	B	44	38	40	楕円		
	8	C	32	28	30	楕円		
	9	B	30		43	円		
	10	C	30	26	27	楕円		
	11	G	50		57	円		
	12	B	28		19	円		
	13	B	32		29	円		
	14	C	38	34	12	楕円		
	15	C	32		17	円		
	16	C	34	30	20	楕円		
	17	G	32		40	円		
AQ58	1	C	26		23	円		
	2	B	30	24	44	楕円		
	3	G	26		15	円		
	4	F	50		25	円		
	5		32		46	円		
	6	B	36		51	円		
AB59	1	F	8		158	円		
AC59	1	E	20		13	円		
	2	E	24		31	円		
	3	G	26		37	円		
	4	G	24		41	円		遺物あり
	5	G	27		21	円		
	6	E	36			円		遺物あり
	7	G	20		34	円		
	8	G	22		19	円		
AD59	1	G	28		34	円		
AE59	1	G	24		37	円		
	2	G	19		14	円		
	3	G	36	30	31	楕円		
	4	E	18		23	円		
	5	G	16		20	円		
AF59	1	E	18		32	円		
	2	G	32	26	30	楕円		
	3	G	20		20	円		
	4	E	22		30	円		
	5	E	26	22	16	楕円		
	6	E	32	26	55	楕円		
	7	G	20		19	円		
	8	E	8		10	円		
	9	E	26	21	26	楕円		

表4　馬場前遺跡ピット一覧表（12）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	10	F	20		26	円		
	11	G	20		31	円		
	12	G	20		29	円		
	13	G	16		28	円		
	14	F	34	29	40	楕円		
AG59	1	G	18	15	26	楕円		
	2	G	15		51	円		
	3	E	16	12	30	楕円		
	4	G	22	18	49	楕円		
	5	G	26		24	円		
	6	G	24		20	円		
	7	G	28		37	円		
	8	G	24	18	10	楕円		
	9	G	23		29	円		
	10	F	44	38	47	楕円		
	11	G	38		55	円		
	12	G	32		51	円		
	13	F	29		15	円		
	14	E	25		22	円		
	15	E	14		11	円		
	16	E	24		18	円		
	17	F	24	18	20	楕円		
	18	G	16		14	円		
	19	G	25	20	27	楕円		
	20	G	32	20	27	円		
	21	F	23	19	16	楕円		
AH59	1	G	38		26	円		
	2	G	26		43	円		
AI59	1	G	22		21	円		
	2	G	18		38	円		
AM59	1	G	24		24	円		
AN59	1	G	24	20		楕円		
	2	G	20		24	円		
	3	G	28		15	円		
AO59	1	G	30	32		円		
	2	G	28		29	円		
	3	G	24		28	円		
	4	G	34	28	48	楕円		
AP59	1	G	30		17	円		
AQ59	1	G	36		26	円		
AB60	1	E	27		41	円	あり	
	2	B	25		38	円		
	3	G	22		63	円		
	4	E	22		46	円		
AC60	1	G	40		15	円		
	2	G	32		24	円		
	3	G	35		31	円		
	4	G	32	28	12	楕円		
	5	G	22	20	37	楕円		
	6	G	30		29	円		
	7	G	34	30	11	楕円		
	8	G	38	32	15	楕円		
	9	G	28	20	42	楕円		
	10	G	38	32	32	楕円		
	11	G	30		24	円		
AD60	1	G	23		43	円		
	2	G	28	24	50	楕円		
	3	G	32	24	15	楕円		
	4	G	28		41	円		
	5	G	28		35	円		
	6	E	22		28	円		
	7	G	22		38	円		
	8	G	20		41	円		
	9	G	24		40	円		
AE60	1	G	22		47	円		
	2	G	26	22	22	楕円		

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
AF60	1	E	17	14	18	楕円		
	2	B	15		19	円		
	3	E	20		27	円		
	4	G	26		32	円		
	5	E	24		21	円		
	6	G	19		38	円		
	7	G	20		15	円		
	8	G	24	20	28	楕円		
	9	G	21		20	円		
	10	G	21		21	円		
	11	G	24		23	円		
AG60	1	G	35	28	32	楕円		
	2	F	17		12	円		
	3	F	30	23	38	楕円		
	4	F	20		30	円		
	5	F	28	24	25	楕円		
	6	F	22		16	円		
AI60	1	G	34		18	円		
	2	G	38		12	円		
	3	G	32		21	円		
	4	G	24		13	円		
	5	G	46	22	27	楕円		
	6	G	24		7	円		
	7	G	28		19	円		
	8	G	26		9	円		
	9	G	32		10	円		
	10	G	24		11	円		
AJ60	1	G	22		20	円		
	2	G	56		15	円		
	3	G	21		14	円		
	4	G	18		28	円		
	5	G	24	20	24	楕円		
AL60	1	G	30		33	円		
	2	G	22		19	円		
AM60	1	G	28		20	円		
AC61	1	G	26		30	円		
	2	G	28		10	円		
	3	B	18		20	円		
	4	G	56	50	5	楕円		
	5	G	25		21	円		
	6	G	29		28	円		
	7	G	32		43	円		
	8	G	22		30	円		
AD61	1	G	32	26	25	楕円		
	2	G	30	24	20	楕円		
	3	G	20		15	円		
	4	F	30		33	円		
	5	G	18		54	円		
	6	G	20		17	円		
	7	F	22		27	円		
	8	F	26		29	円		
AE61	1	E	18		18	円		
	2	B	12		25	円		
	3	G	22		21	円		
	4	G	24		49	円		
	5	G	46		33	円		
	6	G	22		28	円		
	7	G	20		14	円		
	8	G	20		33	円		
	9	G	22		30	円		
	10	F	20		24	円		
	11	B	16		40	円		
	12	G	43	28	37	楕円	あり	
AF61	1	G	29		20	円		
	2	G	22		14	円		
	3	C	28		36	円		
	4	B	22		12	円		

表4　馬場前遺跡ピット一覧表（13）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	5	G	18		22	円		
AH61	1	G	32		27	円		
	2	G	32		13	円		
	3	G	40		55	円		
	4	G	20		36	円		
	5	G	32	22	39	楕円		
	6	G	28		34	円		
	7	G	26		11	円		
AI61	1	G	28		26	円		
	2	G	24		28	円		
	3	G	18		31	円		
	4	G	28		40	円		
	5	G	22		5	円		
	6	G	20		16	円		
	7	G	26		45	円		
	8	G	28		33	円		
	9	G	24		10	円		
	10	G	22		26	円		
	11	G	44	30	41	楕円		
	12	G	18		7	円		
	13	G	30		31	円		
	14	G	30		13	円		
	15	G	32		46	円		
	16	G	36		24	円		
	17	G	30		36	円		
AJ61	1	G	30	26	31	楕円		
	2	G	28	24	12	楕円		
	3	G	32		29	円		
	4	G	38		38	円		
	5	G	32		11	円		
	6	G	40		38	円		
	7	G	48		44	円		
	8	G	26		38	円		
	9	G	28		18	円		
	10	G	26		9	円		
	11	G	22			円		
	12	G	20		10	円		
	13	G	28		23	円		
	14	G	40		27	円		
	15	G	22		44	円		
	16	G	32		32	円		
	17	G	50		12	円		
AK61	1	G	46		70	円		
	2	G	30		14	円		
AL61	1	G	38		27	円		
	2	G	24		14	円		
AM61	1	G	34		42	円		
AN61	1	G	30		16	円		
AC62	1	G	18		22	円		
AE62	1	B	20		39	円		
	2	G	21		25	円		
	3	B	18		26	円		
	4	E	28		33	円		
AF62	1	G	20		14	円		
	2	E	20		10	円		
	3	E	26		25	円		
AG62	1	E	57		34	円		
AH62	1	G	24		24	円		
	2	G	18		21	円		
	3	G	20		23	円		
	4	G	28	22	19	楕円		
	5	G	36	24	19	楕円		
	6	G	36		51	円		
	7	G	28		34	円		
	8	G	30		43	円		
	9	G	24			円		
	10	G	34	30		楕円		
	11	G	32	22		楕円		
	12	G	26	22		楕円		
	13	G	22			円		
AI62	1	E	40		60	円		
	2	G	28	24	32	楕円		
	3	G	34		18	円		
	4	G	28		7	円		
	5	G	20		7	円		
	6	F	64		28.5	円		
	7	G	26		44	円		
	8	G	30		46	円		
	9	E	36		40	円		
	10	G	30		15	円		
	11	G	34		26	円		
	12	G	22		9	円		
	13	E	42	36	27	楕円		
AJ62	1	G	22		33	円		
	2	E	34		39	円		
	3	G	26		42	円		
	4	G	28		39	円		
	5	G	22		20	円		
	6	G	28		42	円		
	7	F	50	44	20	楕円		
	8	F	62	54	13	楕円		
AK62	1	G	36		48	円		
	2	G	30		20	円		
	3	G	24		15	円		
AL62	1	G	28		18	円		
	2	G	32		55	円		
	3	G	34		27	円		
	4	G	28	24	26	楕円		
	5	G	38	26	26	楕円		
	6	G	30		20	円		
	7	G	28	24	27	楕円		
AN62	1	G	34		32	円		
AE63	1	G	15		15	円		
AF63	1	B	21		15	円		
	2	E	21		17	円		
	3	E	20		27	円		
	4	E	20		25	円		
	5	G	20		24	円		
AH63	1	G	26		39	円		
	2	G	30		35	円		
	3	G	22		8	円		
	4	G	40		20	円		
	5	G	28		21	円		
	6	G	34		47	円		
	7	E	20		22	円		
	8	G	40	26	33	楕円		
	9	G	24		15	円		
	10	E	20		26	円		
	11	G	18			円		
	12	G	26		35	円		
	13	G	22	18	20	楕円		
	14	G	22		25	円		
	15	G	32		25	円		
	16	G	22		17	円		
	17	G	22		16	円		
	18	G	20		22	円		
	19	G	30	24	28	楕円		
	20	F	40	34	44	楕円		
	21	G	26	20	20	楕円		
	22	G	24		26	円		
	23	G	30	26	13	楕円		
	24	G	20		25	円		
	25	G	24		23	円		
	26	E	30		41	円		

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（14）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	27	G	32		41	円		
	28	G	36	26	26	楕円		
	29	G	28		6	円		
ＡＩ63	1	G	30		30	円		
	2	E	50		36	円		
	3	G	36		26	円		
	4	F	70	60	55	楕円		
	5	G	28		12	円		
	6	G	30		20	円		
ＡＪ63	1	E	38		10	円		
	2	G	38		30	円		
	3	E	60	36	27	楕円		
	4	G	24			円		
ＡＫ63	1	G	28		22	円		
	2	G	26		21	円		
	3	G	34		22	円		
	4	G	32	26	26	楕円	あり	
ＡＬ63	1	G	38	24	33	楕円		
	2	G	48	40	27	楕円		
ＡＭ63	1	G	32	28	29	楕円		
	2	G	30	26	28	楕円		
	3	G	28		53	円		
	4	G	36		41	円		
ＡＮ63	1	G	26		40	円		
	2	G	28		18	円		
ＡＤ64	1	G	19		13	円		
	2	G	24		16	円		
ＡＥ64	1	G	24	21	32	楕円		
	2	G	22		29	円		
	3	G	23		31	円		
ＡＦ64	1	G	60	30	62	楕円		
ＡＨ64	1	G	28		15	円		
	2	E	34		20	円		
	3	G	24		11	円		
	4	G	20		33	円		
	5	G	28		35	円		
ＡＩ64	1	G	20			円		
	2	G	28	24	12	楕円		
	3	G	26	22	31	楕円		
	4	E	34	28	16	楕円		
	5	G	28	20	23	楕円		
	6	G	20		56	円		
ＡＪ64	1	G	36	32	12	楕円		
	2	G	40	36	11	楕円		
	3	G	34		12	円		
	4	E	52		14	円		
	5	G	24		28	円		Ｐ６→Ｐ５
	6	E	36	(30)	9	楕円		Ｐ６→Ｐ５
	7	G	20			円		
	8	G	22			円		
	9	G	28			円		
	10	G	28	24		楕円		
ＡＫ64	1	G	40		22	円		
ＡＬ64	1	G	34		27	円		
	2	G	28	22	16	楕円		
	3	G	42	30	35	楕円		北西へ オーバーハング
	4	E	28	22	23	楕円	あり	
ＡＭ64	1	G	34	28	36	楕円		
	2	E	34	30	32	楕円		
	3	G	28	20	42	楕円		
	4	G	30		23	円		
ＡＮ64	1	G	30		42	円		
	2	G	30		23	円		
	3	G	30		36	円		
	4	G	34	30	37	楕円		東へ オーバーハング

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
ＡＯ64	1	E	34	30	23	楕円		
	2	G	44	38	30	楕円		
	3	G	50	44	49	楕円		
	4	G	28	24	33	楕円		
	5	G	(34)	26	70	楕円		Ｐ６と重複 （新旧は不明）
	6	G	(36)	26		楕円		Ｐ５と重複 （新旧は不明）
	7	G	30	26	22	楕円		
	8	G	30		47	楕円		
	9	G	60	58	65	円		
	10	G	40		48	円		
	11	G	30	(20)	26	円		Ｐ11→Ｐ12
	12	G	32	26	34	楕円		Ｐ11→Ｐ12
ＡＣ65	1	E	26		16	円		
	2	G	48		27	円		
	3	E	16		16	円		
ＡＤ65	1	F	27		27	円		
	2	F	30		39	円		
	3	G	18		22	円		
	4	F	25	21	15	楕円		
	5	F	18		40	円		
	6	G	18		23	円		
	7	F	20		18	円		
	8	F	20		33	円		
	9	G	27		46	円		
	10	G	22		46	円		
	11	G	21		38	円		
	12	E	18		25	円		
	13	G	16		15	円		
	14	G	21		31	円		
	15	F	16		14	円		
ＡＥ65	1	G	24		28	円		
	2	E	21		19	円		
	3	E	22		39	円		
	4	F	22		17	円		
	5	G	20		47	円		
	6	G	20		33	円		
	7	G	24		17	円		
	8	G	18		20	円		
	9	G	30	20	24	楕円		
ＡＦ65	1	E	26	22	21	楕円		
	2	G	32	22	39	楕円		
	3	G	22		23	円		
	4	G	14		16	円		
	5	E	32		41	円		
ＡＨ65	1	G	28		27	円		
ＡＪ65	1	E	36		19	円		
ＡＫ65	1	E	44	38	14	楕円		
ＡＭ65	1	E	30		46	円		
	2	G	30	26	21	楕円		
	3	E	28		31	円		
	4	G	30		21	円		
ＡＮ65	1	G	24		51	円		
	2	G	30		52	円		
	3	G	28		28	円		
ＡＯ65	1	G	28		38	円		
	2	G	24		35	円		
	3	G	40		71	円		Ｐ４と重複 （新旧は不明）
	4		30	(24)	29	楕円		Ｐ３と重複 （新旧は不明）
	5	G	34		73	円		
	6	G	40		76	円		
	7	G	66	46	66	不整楕円		
	8	G	30		23	円		
	9	G	76	70	33	楕円		

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（15）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
ＡＣ66	1	B	17		25	円		
ＡＤ66	1	G	32		36	円		
	2	G	22		16	円		
	3	G	16		24	円		
	4	F	26		37	円		
	5	G	32		26	円		
ＡＥ66	1	B	28		40	円		
	2	G	20		19	円		
	3	B	42	26	25	楕円		
	4	G	22		23	円		
	5	G	22		21	円		
	6	G	22		35	円		
	7	E	25		20	円		
	8	E	16		15	円		
	9	G	26		32	円		
	10	E	26	22	20	楕円		
	11	G	20		18	円		
ＡＦ66	1	B	24		32	円		
	2	G	24		11	円		
	3	G	20		21	円		
ＡＧ66	1	G	30		32	円		
ＡＨ66	1	G	28		26	円		
	2	G	22		18	円		
	3	G	22		11	円		
	4	G	26		32	円		
	5	G	30		19	円		
	6	G	24		20	円		
ＡＩ66	1	G	20		19	円		
	2	G	26	22	31	楕円		
	3	E	36		50	円		
	4	G	30	26	14	楕円		
ＡＪ66	1	G	24	20	9	楕円		
	2	G	32		12	円		
	3	G	28		56	円		
	4	G	32		29	円		
	5	G	26		26	円		
	6	E	36		30	円		
	7	G	28		19	円		
	8	G	32	24	42	楕円		
ＡＫ66	1	G	36		43	円		
	2	E	42	34	33	楕円		
	3	E	28	24	31	楕円		
	4	E	30	24	27	楕円		
ＡＬ66	1	G	34	26	48	楕円		
ＡＭ66	1	G	44		50	円		
	2	G	28		17	円		
	3	G	44	34	43	楕円		
	4	G	22		19	円		
	5	G	28	24	35	楕円		
	6	G	24		17	円		
	7	G	32	28	41	楕円		Ｐ８→Ｐ７
	8	G	48	36	45	不整楕円		Ｐ８→Ｐ７
	9	G	30		24	円		
	10	G	34	30	41	楕円		
	11	G	46	40	68	不整楕円		
	12	G	54	30	42	楕円		
ＡＮ66	1	G	40	34	42	楕円		
	2	G	34		50	円		
	3	G	36		21	円		
	4	G	22		15	円		
ＡＯ66	1	G	28	24	20	楕円		
ＡＥ67	1	E	22		15	円		南東部 オーバーハング
	2	E	22	18	21	楕円		南西・南東へ オーバーハング
	3	F	20	18	27	楕円		
	4	G	12		17	円		
	5	G	16	14	27	楕円		南側が オーバーハング
	6	G	20		11	円		
	7	G	14	12	17	楕円		
	8	E	34	30	26	楕円		
	9	E	22		17	円		
	10	G	26	22	37	楕円		南西へ オーバーハング
	11		18		34	円		
ＡＦ67	1	G	26		30	円	あり	東側 オーバーハング
ＡＨ67	1	G	32	24	43	楕円		
	2	G	44	36	22	円		
	3	G	40		47	円		
ＡＩ67	1	G	40	32	20	楕円		
	2	G	24		25	円		
	3	E	52		28	円		
	4	G	36		29	円		
	5	G	28		19	円		
ＡＪ67	1	E	52		15	円		
	2	G	44		17	円		
	3	G	28		36	円		
	4	G	44	38	80	楕円		
	5	G	24		35	円		
	6	G	24		24	円		
	7	G	28		43	円		
	8	E	40	36	44	楕円		
ＡＫ67	1	E	26		19	円		
	2	G	20		20	円		
	3	G	26		25	円		
	4	G	24		20	円		
ＡＭ67	1	G	28		26	円		
	2	E	36	30	61	楕円		
	3	F	24		17	円		
	4	C	28	24	52	楕円	あり	北へ オーバーハング
	5	C	22		23	円		
ＡＮ67	1	G	30		41	円		
	2	E	38		30	円		
ＡＥ68	1	E	22	20	17	楕円		
	2	G	50	34	44	楕円	あり	中段あり．南東部 オーバーハング
	3	G	22	18	38	楕円	あり	中段あり
ＡＦ68	1	G	24	20	45	楕円		南東部 オーバーハング
	2	F	16		24	円		南西部 オーバーハング
ＡＫ68	1	G	28		27	円		
ＡＬ68	1	G	30		35	円		
	2	G	22		48	円		
	3	E	34		51	円		
	4	G	48	36	42	楕円		
ＡＭ68	1	C	40			円		
	2	F	26		26	円		
	3	E	30		32	円		
	4	E	36	32	55	楕円		
	5	E	28	24	22	楕円	あり	
	6	G	30		44	円		
	7	E	14		15	円		
	8	E	22		44	円		
ＡＮ68	1	E	24		36	円		
	2	E	40	(20)	13	円		Ｐ２→ＳＢ87 北西角柱穴
	3	E	56	42	37	楕円		
	4	E	40	34	36	楕円		土器片出土

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（16）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
	5	E	28		40	円		
	6	E	32	30	20	円		
	7	E	34		29	円		
	8	E	24		41	円		
	9	E	30		25	円		
ＡＯ68	1	E	26		36	円		
	2	E	24		24	円		
	3	E	30		21	円	あり	
	4	E	26		36	円		
ＡＥ69	1	E	20		18	円		
	2	G	28		24	円		
	3	G	24		33	円		
ＡＦ69	1	G	22	18	14	楕円		
	2	G	20		15	円		
	3	E	20	18	12	楕円		
ＡＫ69	1	G	20		21	円		
	2	E	22		35	円		
ＡＬ69	1	G	30	26	43	楕円		
	2	G	26	20	34	楕円		
	3	E	22		35	円		
	4	G	26		33	円		
	5	G	26		23	円		
	6	E	24		25	円		
	7	E	24		28	円		
	8	G	28		49	円		
ＡＭ69	1	F	36	30	17	楕円		
	2	E	20		16	円		
	3	G	26	20	33	楕円		
	4	G	26	22	48	楕円		
ＡＮ69	1	F	40	30	29	隅丸長方形		
	2	E	26	22	44	楕円		
	3	E	18		29	円		
	4	E	28	22	27	楕円		
ＡＯ69	1	G	20		27	円		
	2	E	34		51	円	あり	
	3	E	28		45	円		
	4	E	24		18	円		
	5	G	46	34	38	楕円		
	6	F	20	16	13	楕円		
	7	E	20		15	円		
	8	E	32	20	12	楕円		
	9	F	20		12	隅丸方形		
ＡＰ69	1	E	30	24	53	楕円		石２個
ＡＥ70	1	E	28		28	円		
	2	E	22	18	42	楕円		
ＡＦ70	1	G	30		15	円		Ｐ２と重複 （新旧は不明）
	2	G	30	24	19	楕円		Ｐ１と重複 （新旧は不明）
	3	G	18	14	14	楕円		
	4	G	26	20	37	楕円		
ＡＫ70	1	E	26	22	18	楕円		
	2	E	24	22	32	楕円		
	3	E	22		25	円		
	4	E	22		14	円		
	5	E	18		24	円		
ＡＬ70	1	E	(32)	26	25	楕円		Ｐ２と重複 （新旧は不明）
	2	E	(30)	26	26	楕円		Ｐ１と重複 （新旧は不明）
	3	G	26		16	円		
	4	G	30	26	19	楕円		
ＡＭ70	1	F	20		17	円		
	2	G	38		72	円	あり	中段あり
	3	G	30		48	円		
	4	G	28	24	40	楕円		底面中央と石
ＡＮ70	1	F	30	20	27	楕円		底面二ヶ所（二つのピット?）
	2	G	22		27	円		
	3	G	24		30	円		
	4	G	30		57	円		
	5	E	28	24	29	楕円		
	6	G	28		52	円		
ＡＯ70	1	E	34	28	24	楕円		
	2	E	18		24	円		
	3	E	22		25	円		
	4	E	18		16	円		
	5	E	30		47	円		
	6	E	20	18	22	楕円		
	7	G	24		32	円		
ＡＰ70	1	F	56	(24)	27	楕円		北東部半分 調査区外
	2	F	18		11	円		
	3	G	22		62	円		
	4	G	24		40	円		
	5	E	22	20	31	楕円		
	6	F	18		20	円		
	7	E	22		24	円		
	8	E	30		45	円		
	9	F	16		30	円		
	10	E	22	18	30	楕円		
	11	E	22	20	27	楕円		
	12	E	22		25	円		
	13	E	24	20	27	楕円		
ＡＱ70	1	E	16		13	円		
ＡＥ71	1	G	34		45	円		
	2	E	20		36	円		
ＡＦ71	1	G	32	24	28	楕円		
	2	G	24		31	円	あり	
ＡＬ71	1	E	18		13	円		
	2	E	24		27	円		
	3	E	30		25	円		
ＡＮ71	1	E	24	20	51	楕円		
	2	G	24		49	円		
	3	G	16	14	23	楕円		
ＡＯ71	1	G	24		12	円		Ｐ２と重複 （新旧は不明）
	2	G	22	18	14	楕円		Ｐ１と重複 （新旧は不明）
	3	G	28		52	円		
	4	E	20		19	円		
	5	G	22	20	49	楕円		
ＡＰ71	1	E	24		32	円		
	2	E	22	16	30	楕円		
	3	E	18		30	円		
	4	E	24	20	31	楕円		
	5	F	22		16	円		
	6		26	20	23	楕円		
	7		20		18	円		
	8	E	20		20	円		
	9	G	30		36	円		
	10	E	24	20	21	楕円		
ＡＱ71	1	E	20		24	円		
	2	E	22		31	円		
	3	E	22	18	21	楕円		
	4	E	16		14	円		
ＡＫ72	1	E	18	12	13	楕円		
	2	E	32	28	12	楕円		
	3	E	30		50	隅丸方形		西側 オーバーハング
ＡＬ72	1	E	20		51	円		
	2	E	16	14	11	楕円		
ＡＭ72	1	E	32	18	17	長楕円		

表４　馬場前遺跡ピット一覧表（17）

（長軸・短軸・深さ：cm）

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備考
ＡＮ72	1	G	18		42	円		
	2	G	24		44	円		
	3	E	18		21	円		
	4	E	30		17	円		
	5	E	20		40	円		
	6	E	(32)	32	61	楕円		Ｐ７と重複 （新旧は不明）
	7	E	26	(20)	37	楕円		Ｐ６と重複 （新旧は不明）
	8	E	18		44	円		
	9	E	20	18	46	楕円		
	10	F	22	20	34	楕円	あり	
	11	G	22		27	円		
	12	E	34	30	40	楕円		Ｐ13→Ｐ12
	13	E	26	(16)	16	隅丸方形		Ｐ13→Ｐ12
	14	E	24	22	15	楕円		
	15	E	24		10	円		
ＡＯ72	1	E	(26)	22	12	楕円		Ｐ１→Ｐ２
	2	E	32	28	15	楕円		Ｐ１→Ｐ２
	3	F	20		14	円		
	4	F	24		22	円		
ＡＰ72	1	E	22		23	円		
	2	F	30	22	21	楕円		
	3	E	22		23	円		
	4	E	26		21	円		
	5	F	24		14	円		
	6	E	22		30	円		
	7	E	22		36	円		
	8	F	16		13	円		
	9	E	28		53	円		南側が オーバーハング
	10	E	22		52	円		
	11	F	18		25	円		
ＡＱ72	1	E	28	24	28	楕円		
	2	E	24	20	29	楕円		
ＡＪ73	1	E	30	24	12	楕円		
ＡＫ73	1	E	16		19	円		
	2	E	14		7	円		Ｐ２→Ｐ３
	3	E	20		13	円		Ｐ２→Ｐ３
	4	E	18		15	円		
	5	E	22		23	円		
	6	E	24	20	10	楕円		
ＡＬ73	1	E	22	20	10	楕円		
ＡＭ73	1	E	(20)	18		楕円		Ｐ１→Ｐ２
	2	E	22	18		楕円		Ｐ１→Ｐ２
	3	F	36			円		
	4	E	36	26	35	楕円		中段あり，東部 オーバーハング
	5	F	32		54	円		南東部 オーバーハング
	6	E	20	16	17	楕円		
	7	F	34	30	29	楕円		
	8	E	34	26	34	楕円		
	9	E	26	24	31	楕円		
ＡＮ73	1	E	56		23	円		
	2	E	24	(18)	32	楕円		Ｐ３と重複 （新旧は不明）
	3	E	22	(18)	22	楕円		Ｐ２と重複 （新旧は不明）
	4	E	22		26	円		
	5	E	26		30	円		
	6	E	30	26	28	楕円		Ｐ７→Ｐ６
	7	E	24		24	円		Ｐ７→Ｐ６
	8	E	20		25	円		
	9	E	16		19	円		
	10	E	22		49	円		
ＡＯ73	1	F	18		44	円	あり	
	2	E	26	22	14	楕円		
	3	E	22		46	円		東側 オーバーハング
	4	G	48	42	16	楕円		
	5	E	22		26	円		
	6	E	18		13	円		
	7	F	28		18	円		
	8	F	24	20	30	楕円	あり	
ＡＰ73	1	F	20	18	16	楕円		Ｐ２と重複 （新旧は不明）
	2	F	18	16	17	楕円		Ｐ１と重複 （新旧は不明）
	3	F	26		39	円		
ＡＱ73	1	F	20	18	17	楕円		
	2	E	16		9	円		
	3	E	20		15	円		
	4	F	30		16	円		
	5	F	22	20	14	楕円		
ＡＫ74	1	E	16		11	円		
ＡＬ74	1	E	34	28	21	楕円		
	2	E	22		14	円		
	3	E	24	20	18	楕円		
	4	E	30		11	円		
ＡＮ74	1	E	30		26	円		
ＡＯ74	1	E	18		7	円		
	2	F	30	24	11	楕円		
ＡＫ75	1	E	30		45	円		
ＡＬ75	1	E	30	22	39	楕円		
	2	E	22	18	34	楕円		
	3	E	18		30	円		
ＡＭ75	1	E	28	20	48	楕円		
ＡＯ75	1	F	24		33	円		

凡例

土略号

- Ａ：黒色土
- Ｂ：黒褐色土
- Ｃ：暗褐色土
- Ｄ：褐色土
- Ｅ：暗褐色土が主体で褐色土が混入するもの
- Ｆ：褐色土が主体で暗褐色土が混入するもの
- Ｇ：黒褐色土が主体で褐色土が混入するもの

遺構外出土遺物（図261～263，写真226～228，233～235）

調査区の遺構以外から出土した遺物は，縄文土器2,915点，土師器156点，須恵器25点，陶磁器28点，鉄製品３点，鉄滓57点である。主体を占めるのは縄文土器である。

図261－１・２は深鉢の口縁部にあたるもので，１は隆起線と刺突文とで文様を構成している。人物の顔面を意匠としているようである。２は刺突文と沈線で文様を構成している。いずれの年代も縄文時代中期後葉から後期初頭のものであろう。

図261－４は深鉢で，底部付近が欠損する。遺存度は40%のものである。頸部にはリング状の突起が貼り付いていたと思われるが，いずれも欠損している。器形は，口縁部は頸部にかけて湾曲し，

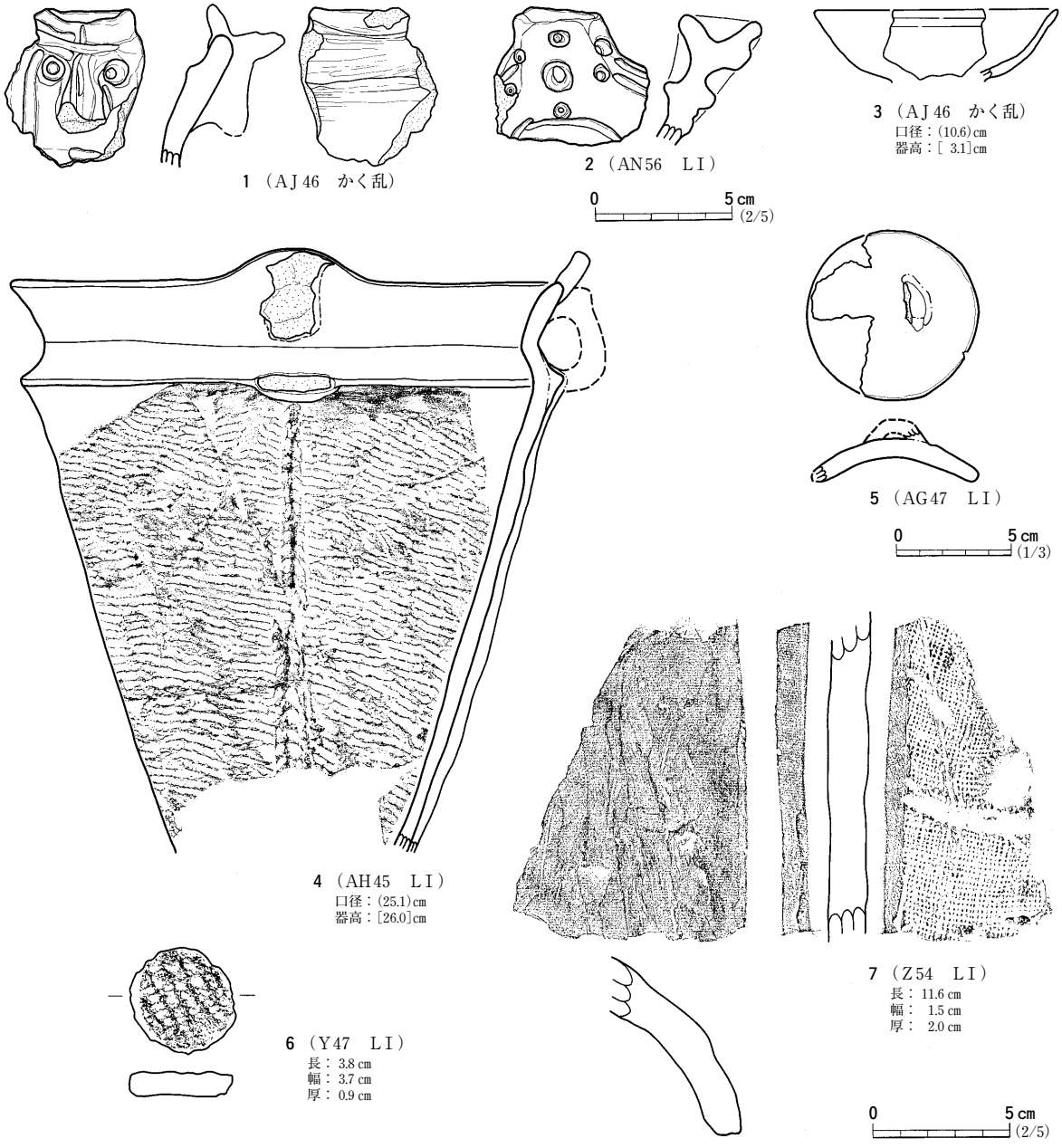


図261　遺構外出土遺物（１）

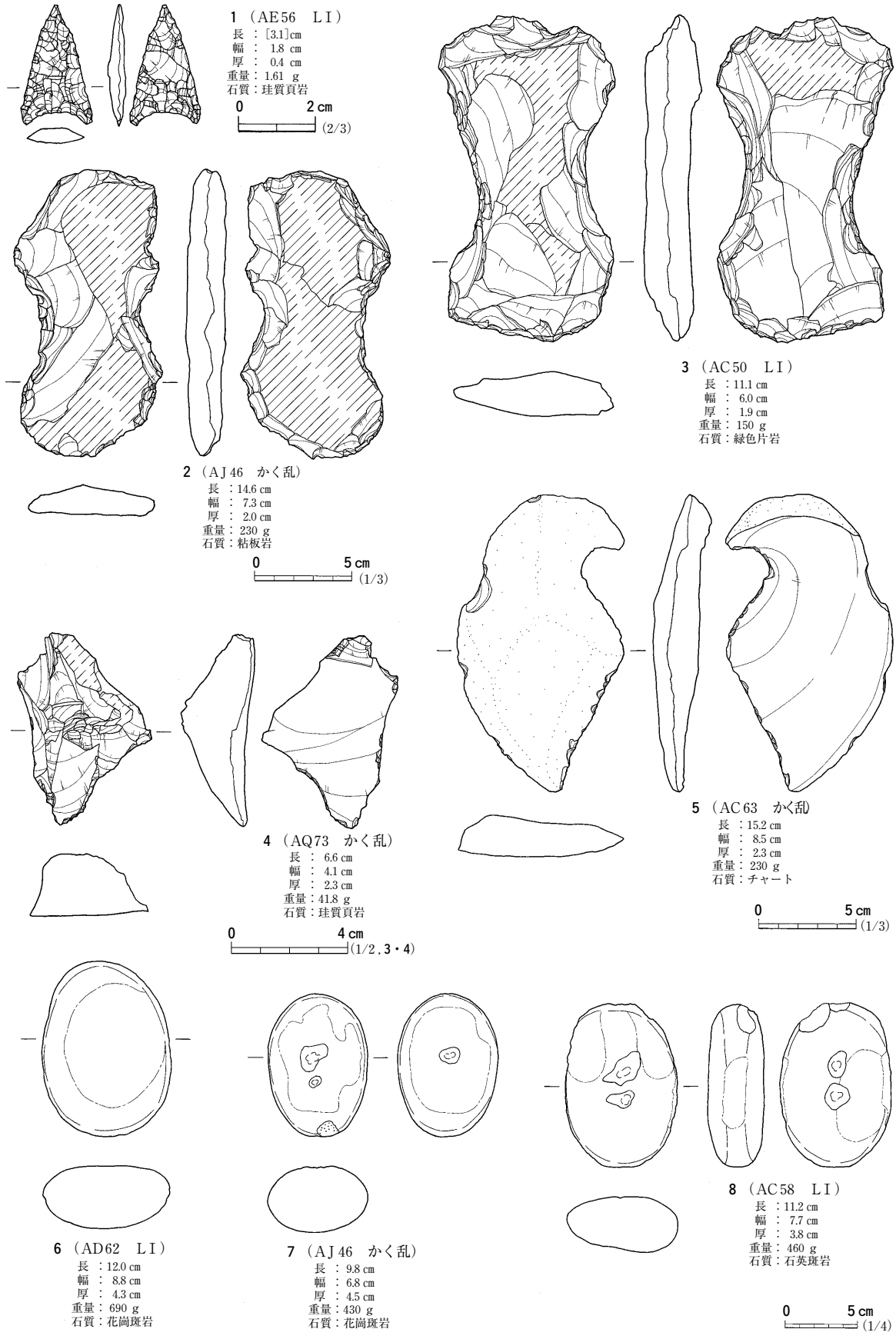


図262　遺構外出土遺物（２）

頸部では稜が形成されている。胴部の文様は縄文と左右に刻み目がなされた隆帯により縦方向に区画されている。この土器の年代は縄文時代後期初頭のものであろう。

図261－５・６は土製品で，５はミニチュア土器の蓋である。ツマミの部分が欠損している。文様は特に施されていない。６は土器片製の円盤である。土器片を打ち欠いて製作し，側面を面取りしている。いずれも年代は縄文時代の中期後葉から後期初頭にかけてのものであろう。

図261－７は瓦で丸瓦にあたる。側面はヘラ状工具で２面にわたって面取りがなされる。粘土紐を成形台に積み上げて作られている。凸面にはヘラケズリとナデがなされているが，凹面には布目痕のほかは特に調整が施されてはいない。年代は奈良から平安時代のものと考えている。

図261－３は青磁の椀で口縁部の破片である。火を受けたらしく色合いがくすんでいる。14世紀後半頃のものであろう。

図262－１は無茎式の石鏃である。図262－２・３は打製石斧である。ともに，両側面に抉りがなされ形状は分銅形をなしている。

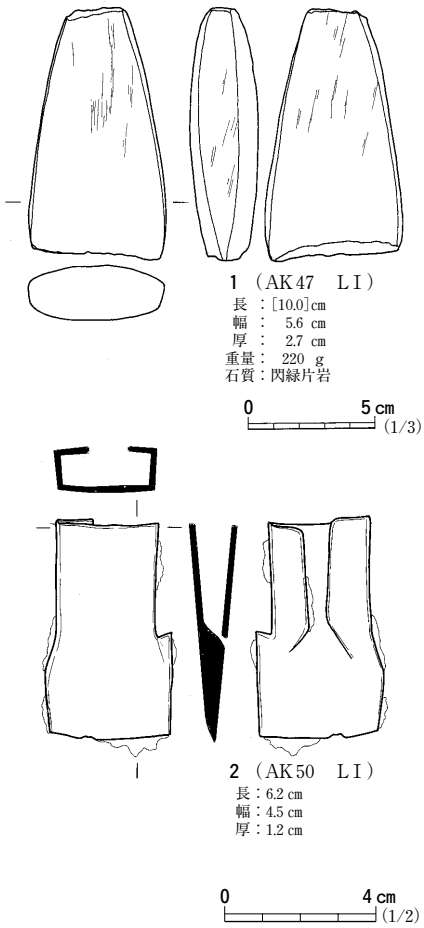


図263　遺構外出土遺物（３）

図262－２・５は剝片であるが，縁辺に細かい使用痕がみられるので何らかの用途で使用されたものであろう。

図262－１は磨製石斧で刃部と基部が欠損している。使用中の衝撃により欠損してしまったのであろうか。

図263－２は鉄製の斧である。基部には柄を差し込むためのソケットが鉄板を折り返して作られている。年代については未詳であるが，奈良～平安時代にかけてのものであろう。　（吉　野）

第3章　ま　と　め

ここでは各時代ごとに区分できた遺物と遺構についてまとめておく。

旧石器時代の遺物は，35・41・42号住居跡の堆積土から縦長の剝片（図29－３・図47－９）・掻器（図50－８）が出土しているが，ユニットやブロックなどは確認できなかった。

縄文時代の遺物は，前期末葉と中期中葉から後期前葉にかけてのものが出土している。そのなかで，主体を占めるのは大木10式土器である。

大木９式土器を炉の埋設土器としていたのは，31・33・36・51号住居跡である。住居跡の平面形は隅丸方形で，主柱穴は31号住居跡が３本で，33号住居跡が４本である。これらの炉は，31・33・51号住居跡が複式炉で，36号住居跡は石囲炉のなかに土器片を敷いているものである。

このなかで重複しているのは，32・33号住居跡と31・36号住居跡である。新旧関係は33号住居跡が新しく32号住居跡が古い。だが，32号住居跡の埋設土器は大木10式土器であることを併せて考えると，飯舘村上ノ台Ａ遺跡や天栄村深沢遺跡などで確認されているように，古い土器を埋設したのだろうか。

次に31・36号住居跡との新旧関係であるが，調査では明らかにできなかった。36号住居跡の炉を複式炉導入以前の炉として評価するならば，36号住居跡が古いことが考えられる。

この時期での住居跡の変遷は36→31・51・32→33号住居跡となろう。このうち31・51・32号住居跡の前後関係は未詳である。

大木10式土器を炉の埋設土器としていたのは，34ａ・34ｂ・35・37～46・49・50・56ｂ・59・64・65・69・74ａ・74ｂ・78・95～98・110号住居跡である。これらのうち，34ａ・ｂ，56ｂ，74ａ・ｂ号住居跡は同じ場所で建て替えをしている。それ以外の住居跡も，すべて同一時期に建っていたのではないとは思えるが，遺構の重複関係から伴出土器の変遷をたどれるのが，34ａ・ｂ号住居跡である。以下，それらの土器の特徴を述べておく。

① 34ａ号住居跡の炉は土器埋設石囲炉である。埋設土器は２個で入れ子状となっていた図23－１・２は，１が把手付で頸部に沈線が巡り胴部に縄文が施されるもの。２は頸部に沈線が波状に巡り，胴部に縄文がなされるものである。

② 34ａ号住居跡よりも古い34ｂ号住居跡の埋設土器（図26－１）は，胴部上半に隆線で区画されたなかに充填縄文や刺突文により，文様が展開しているものである。これらの重複関係から①→②の序列となる。なお，34号住居跡よりも古い152号土坑から，図243－１～３が出土しているが，堆積土からの資料のため，ここでは除外したい。

大木10式土器期の炉の土器埋設部で用いられた土器や床面から出土した土器についてまとめてみよう。文様があるものは胴部上半に限られ，胴部下半は縄文のみである。文様の種類は以下のとお

りである。

1　文様は沈線で区画され，そのなかに充填縄文がなされる。文様はＳ・Ｊ・Ｕ・Ｈ・Ｃ・ｅ字状のものなどがある。(41～46・50・56ｂ・59・64・65・69・78・97・110号住居跡，３号埋甕)。一部のものには，無文帯に刺突文がみられるものがある。(65号住居跡)。

2　隆起線により文様が描かれるもの（40・45・46号住居跡)。一部のものには，刺突文もなされているもの（34ｂ号住居跡)。

3　文様はなされず縄文のみのもの（35・37～40・46・49・65・95・96号住居跡)。頸部に横位沈線が巡るもの（41号住居跡・８号埋甕)。

器形では平口縁のものに占められ，一部のものが波状口縁で，器形はキャリパー形をなしている（43号住居跡)。

縄文時代の竪穴住居跡は調査区から45軒を検出した。これらは調査区の北半分において環状に分布している。各住居跡の年代は，埋設土器から大木９式土器期と大木10式土器期とに大別することができる。住居跡の炉が複式炉であるのは41軒である。それ以外は，石囲炉（36・56ａ号住居跡)・土器埋設石囲炉（34号住居跡)・炉の形態が未詳なもの（71号住居跡）などがある。

住居跡の平面形は隅丸方形・円形を基調としている。主柱穴は３・４・５・６本のものがあり，110号住居跡のように主柱穴が７本のものもあった。それに補助柱穴が組合わさるものや，補助柱穴がないものもあった。壁溝はほとんどのものから確認している。壁溝は壁際のすべてを巡っているものはなく，断続的に巡っている状況であった。

複式炉は土器埋設部・石組部・前庭部から基本的に構成されている。埋設土器の数は１個のものが多かった。なかには65・110号住居跡のように長軸に沿って２個並列となっているものや，40～42・46号住居跡のように２個の埋設土器が入れ子状になっているものなどもあった。石組部の平面形は方形のものが多く，円形・楕円形のものも一部あった。さらに，礫が抜き取られたものもあった。前庭部は34ｂ・35号住居跡のように欠落しているものもあった。前庭部の平面形は溝状・方形・円形・楕円形などがあり，そのなかで多かったのは溝状のもので，そのなかにピットが掘り込まれているものが多かった。このピットは主柱穴よりも径が一回り小さく，深さも浅いことから補助柱穴の意味合いが強い。

炉の主軸方向をみてみると，ほぼ真北もしくはそれに近いものが37・44・50・51・60・61・64・74ｂ・96号住居跡である。西側に傾くものが34ｂ・45号住居跡である。東側に傾くものが38～42・46・49・56ｂ・65・69・75・95・97・98・110号住居跡である。

その他，埋設土器の遺存状態が悪く，もしくは年代の特定ができなかったものに56ａ・60・71・75・77・131号住居跡などがある。そのうち56ａ号住居跡は石囲炉で，71号住居跡は炉の形態が未詳なものである。

土坑は調査区にくまなく分布していた。その平面形は円形もしくは楕円形で，断面形が円筒形，深さが約１ｍのものが多かった。そのほかにも，貯蔵穴と推定した断面形が袋形のものや，落し穴

なども検出している。

奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の竪穴住居跡は19軒を確認している。住居跡は縄文時代の住居跡よりも南側に分布しているが，南端部にはみられない。カマドの多くは北壁に付設されていた。

特異な例としては58号住居跡がある。東壁にカマドを付設し，主柱穴が南壁を掘り込んでいた。主柱穴以外にも，住居跡の周囲に径20㎝ほどのピットが21基巡っていた。

年代別にみてみると，8世紀前半のものが102号住居跡，8世紀後半のものが28・47・48・54ａ・ｂ，58・57・61～63・99・100号住居跡。9世紀前半のものが103号住居跡。9世紀後半のものが67・68号住居跡である。

以上のことから竪穴住居跡の主体を占めるのは，8世紀後半である。このあり方は，調査区の南端で隣接する鍛冶屋遺跡の主体となっている年代が9世紀となっていることから，年代によって住居が造られた場所が異なっていたことを示している。

出土遺物は土師器杯・高台付杯・鉢・甕，須恵器杯・蓋・甕・円面硯や，土製品は瓦・ミニチュア土器，鉄製品は鎌・斧，石製品は砥石などがある。このなかで土器組成が窺えるような，良好な出土例はなかった。そのなかでも62・102号住居跡からは丸瓦の破片が出土しているが，どこから持ち込まれたものかは不詳である。

中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構は掘立柱建物跡が6棟，柱列跡7列や土坑3基などがある。掘立柱建物跡・柱列跡はピット群のなかから抽出したものであるが，その大半は組み合わせが出来ていない。出土遺物は陶磁器・銭貨などである。そのなかで青磁皿・梅瓶などが出土しているが，建物跡に伴っているものではない。　（吉　野）

参　考　文　献

福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター編
「上ノ台遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅴ』1984年
「深沢Ａ遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告4』1989年
「上ノ台遺跡（第2次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅻ』1990年
「北向遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査7』1990年
「鍛冶屋遺跡（1次調査）」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告21』2000年
「鍛冶屋遺跡（2次調査）」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告24』2001年
「馬場前遺跡（1次調査）」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告25』2001年
丹羽　茂　「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島大学考古学研究会研究紀要』第1冊　1971年
丹羽　茂　「東北地方南部における中期縄文時代中・後期土器群研究の現段階」『福島考古』第12号　1971年
丹羽　茂　「福島県における縄文時代中期の住居集落跡研究の現状と問題点」『福島考古』第15号　1974年
丹羽　茂　「大木式土器」『縄文文化の研究』第4巻　1981年
押山　雄三　「福島県の複式炉」『郡山市文化財研究紀要』第5号　1990年

表５　住居跡一覧表（１）

番号	平面形 規模（cm×cm）	主柱穴	補助柱穴	周溝	主軸方位	炉・カマド	時期	備考
28	390×420			なし	Ｎ３°Ｗ	カマド２基（新旧）	８世紀後半	カマドの造り替えあり。
31	496×550	３基		断続的	Ｎ25°Ｅ	複式炉	中期後葉	３本柱。一部で柱の据え替え。
32	400×800	３基	１基	なし		複式炉	中期後葉	４本柱。
33	470×510	４基	17基	一部を除き全周	Ｎ10°Ｅ	複式炉	中期後葉	４本柱。一部で柱の据え替え。
34 a	360×450				Ｎ50°Ｅ	石囲炉	中期末葉？	
34 b	440×450	４基	７基	断続的	Ｎ40°Ｗ	複式炉	中期末葉	４本柱。
35	420×520	２基	17基	一部途切れる	ほぼ真北	複式炉	中期後葉	
36				なし		石囲炉	中期後葉	土器片敷石囲炉。
37	360×510	４基	３基	なし	Ｎ20°Ｅ	複式炉	中期末葉	４～５本柱？
38	420×450	２基	７基	部分的に残存		複式炉	中期末葉？	４本柱？撹乱により欠損？
39		２基	１基	部分的に残存		複式炉	中期末葉？	本柱？撹乱により欠損？
40	420×470	２基	４基	なし	Ｅ75°Ｎ	複式炉・地床炉	中期末葉	５～６本柱？
41	620×700	６基	２基	断続的		複式炉	中期末葉	
42		２基		断続的	Ｎ35°Ｅ	複式炉	中期末葉	３本柱？
43		６基	４基	断続的	Ｎ20°Ｅ	複式炉	中期末葉	５～６本柱？
44	680×720	６基	９基	断続的	Ｎ10°Ｅ	複式炉	中期末葉	住居の建て替えあり。６本柱→６本柱。
45	600×640	２基	10基	なし		複式炉	中期末葉	
46	390×460	５基	２基	断続的	Ｎ20°Ｅ	複式炉	中期末葉	住居の建て替えあり。５本柱→５本柱。 前後関係は不明。
47		３基	９基	部分的に残存	Ｎ45°Ｗ	カマド２基（新旧）	８世紀後半	
48	540×580	７基	14基	断続的	ほぼ真北	カマド（北壁中央）	８世紀後半	
49		３基		断続的	Ｎ30°Ｅ	複式炉	中期後葉～末葉	３本柱。
50		２基		断続的	ほぼ真北	複式炉	中期末葉	２本柱？
51		３基			Ｎ15°Ｅ	複式炉	中期後葉	４本柱？
54 a	650×650	４基		一部を除き全周	Ｎ20°Ｗ	カマド（北壁中央）	奈良	４本柱。住居の建て替え２回？
54 b	490×490	４基	２基	部分的に残存	Ｎ５°Ｅ	カマド（北壁）	奈良	４本柱。
55		２基	３基	断続的		地床炉	中期後葉～末葉	２本柱か３本柱？
56 a	330×430	８基	１基	部分的に残存		石囲炉	後期前葉	
56 b	460×460	５基	15基	一部を除き全周	Ｎ10°Ｅ	複式炉	中期末葉	
57	540×580	７基		なし	ほぼ真北	カマド（北壁東寄り）	８世紀後半	
58	424×430	４基		なし	ほぼ真北	カマド（東壁中央）	８世紀後半頃	カマドの南北に貯蔵穴。
59	465×510	３基	12基	なし	Ｎ27°Ｅ	複式炉	中期後葉	３本柱。他に隅柱あり。
60		４基		なし		複式炉	中期後葉～末葉	４本柱。
61	350×430	２基	１基	なし	Ｎ10°Ｗ	カマド（北壁中央）	８世紀後半	２本柱。

表5　住居跡一覧表（2）

番号	平面形 規模(cm×cm)	主柱穴	補助柱穴	周溝	主軸方位	炉・カマド	時期	備考
62	250×290	なし	なし	なし	N15°W	カマド（北壁中央）	8世紀後半	
63	120×150	なし	なし	なし		カマド2基（新旧）	8世紀後半	カマドの造り替え1回あり。
64	470×470	8基		断続的	ほぼ真北	複式炉	中期末葉	4本柱。他に3本・7本の隅柱を有する。
65	570×600	6基	17基	部分的に残存	N10°E	複式炉	中期末葉	6本柱。
67	540×580	4基		なし	ほぼ真北	カマド（東壁南寄り）	9世紀頃	
68				なし		カマド（北壁東寄り）	9世紀頃	
69		2基		断続的		複式炉	中期末葉	
70	450×450				N10°E	カマド（北壁）	8世紀後半	カマドの造り替えあり。
71	290×460	2基		部分的に残存			中期後葉～末葉	
73	370×400	4基		なし	ほぼ真北		8世紀後半	4本柱。
74a	520×520	4基		断続的	ほぼ真北	複式炉	中期末葉？	4本柱。
74b		1基	1基	断続的	ほぼ真北	複式炉	中期末葉頃	
75		4基		なし	N15°E	複式炉	中期末葉	住居の建て替えあり。3本柱→3本柱。前後関係は不明。
77				一部を除き全周		複式炉	中期後葉～末葉	主柱穴未詳。3～4本か？
78		2基		部分的に残存		複式炉	中期末葉	主柱穴現状で2本。
95	438×460	4基			N30°E	複式炉・地床炉	中期末葉	4本柱。
96	510×550	5基		断続的に2条		複式炉	中期末葉	住居の建て替えあり。3本柱→5本柱？張り出し部あり。
97	470×500	4基		部分的に残存	N28°E	複式炉	中期末葉	4本柱。
98	420×440	3基		なし		複式炉	中期後葉～末葉	3本柱。
99		4基		部分的に残存	N4°E	カマド（北壁中央）	8～9世紀初頭	廃絶時，人為的に破壊？
100	380×430	4基		一部を除き全周	ほぼ真北	カマド（北壁東寄り）	8世紀後半頃	4本柱。建て替えあり。
101	360×380			なし	ほぼ真北	カマド（北壁東寄り）	8世紀後半頃	床下土坑5基検出。
102	425×435	4基		なし	ほぼ真北	カマド2基（新旧）	8世紀後半頃	カマドの造り替えあり。
103		1基		なし		カマド2基（新旧）	9世紀前半頃	カマドの造り替えあり。
110	470×490	4基	5基	断続的		複式炉	中期末葉	
131		3基		なし		複式炉	中期後葉～末葉	
141				なし			中期後葉～末葉	

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちょうさほうこく
書名	常磐自動車道遺跡調査報告29
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第388集
編著者名	山内幹夫・福島雅儀・吉野滋夫・井　憲治・高橋幸司・吉田昌彦・小野忠広・阿部知己・伊藤典子・門脇秀典・坂田由紀子
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課 〒960－8116　福島県福島市春日町５－54　TEL 024－534－2733
発行機関	福島県教育委員会　〒960－8688　福島県福島市杉妻町２－16　TEL 024－521－1111
発行年月日	2002年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ばばまえ 馬場前 （２次）	ふくしまけんふたばぐん 福島県双葉郡 ならはまちおおあざかみ 楢葉町大字上 こばな 小塙	542	00024	37°15′56″ ～ 37°16′03″	47°59′17″ ～ 40°59′20″	2000年４月17日 ～ 2000年12月14日	18,740㎡	道路（常磐自動車道）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ばばまえ 馬場前 （２次）	集落跡	縄文 奈良 平安 中・近世	竪穴住居跡　(60) 掘立柱建物跡　(6) 柱列跡　(7) 土坑　(352) 埋甕　(4) 井戸跡　(5) 溝跡　(5)	須恵器・土師器 陶磁器・石器 鉄製品・土製品 鉄滓	縄文時代中期末葉を中心とする住居跡と貯蔵穴で構成される拠点的な集落。

福島県文化財調査報告書第388集

常磐自動車道遺跡調査報告29

平成14年２月28日発行

編　集　財団法人 福島県文化振興事業団（遺跡調査部遺跡調査課）
発　行　福島県教育委員会　（〒960－8688）福島市杉妻町２－16
財団法人 福島県文化振興事業団（〒960－8116）福島市春日町５－54
TEL 024－534－2733　FAX 024－536－3781
日本道路公団東北支社いわき工事事務所（〒973－8408）いわき市内郷高坂町八反田28－１
印　刷　株式会社 山川印刷所　（〒960－2153）福島市庄野字清水尻１－10

本報告書は中性紙を使用しています。